茨城県教育財団文化財調査報告XI

常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書III

昭和56年3月

財団法人　茨城県教育財団

「常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ」正誤表

東楢戸古墳，塚原古墳群，湿気遺跡，大塚新地遺跡，松原遺跡，南原古墳群

ページ・行	誤	正
67－27	堺は序大く	堺は広大く
67－28	麻は植えんには	麻を種えんには
131－25	溝状土構	溝状土壙
160－ 5	教 点	数 点
174－ 2	□ ほど	深さ10㎝ほど
190－27	墳	坏
191－24	多 土	焼 土
496－32	SAT	STA

序

茨城県の大動脈として大きな役割を果たすことが期待される常磐自動車道の建設は，日本道路公団により進められておりますが，その予定地内に存在する埋蔵文化財については，記録保存をするため，昭和53年度より財団法人茨城県教育財団が日本道路公団より委託をうけて発掘調査を実施しております。この調査により，多くの貴重な資料を発掘し，郷土の歴史の解明に大きな成果をあげることができました。

この報告書は，昭和53年度に実施した谷和原村の東楢戸古墳をはじめ，昭和54年度に実施した岩間町の塚原古墳群，内原町の湿気遺跡，水戸市の大塚新地遺跡・松原遺跡・南原古墳群等について本年度に整理・執筆したものであります。

この冊子が上梓されるまで種々御協力いただいた日本道路公団，谷和原村・岩間町・内原町・水戸市の各教育委員会，それぞれの地元関係者及び御指導いただいた茨城県教育庁文化課等の各位に対し，心から感謝を申し上げます。

おわりに，本書が学術研究の資料としてはもとより，教育資料としても広く活用されますことを希望してやみません。

昭和56年3月

財団法人　茨城県教育財団

理事長　竹内藤男

例　　言

1．本書は，日本道路公団による常磐自動車道建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は，日本道路公団より委託をうけた財団法人茨城県教育財団調査課が実施したもので，昭和53・54年度は調査第３班が，昭和55年度は企画管理班が担当した。東楢戸古墳他の調査に関する組織は次のとおりである。

理事長	竹内藤男（茨城県知事）
副理事長	大金新一（茨城県教育長/昭和52.4～54.6） 古橋靖（茨城県教育長/昭和54.6～　）
常務理事	川野辺四郎（昭和52.4～　）
事務局長	大内秀夫（昭和52.4～55.3） 小林義久（昭和55.4～　）
調査課長	川俣吉之助（昭和52.4～55.3） 大塚博（昭和55.4～　）
企画管理班長	圷秀雄（昭和54.4～　）
企画管理班	川崎嶂（昭和52.4～54.3） 鈴木三郎（昭和52.4～　） 栗田孝志（昭和53.4～　）
調査及び整理	高根信和（昭和53年度班長/東楢戸古墳調査）（昭和54年度班長/大塚新地遺跡調査）（昭和55年度班長/東楢戸・塚原古墳群整理・執筆） 山本静男（昭和53年度/東楢戸古墳調査）（昭和54年度/塚原古墳群調査） 佐藤正好（昭和54年度/塚原古墳群調査） 中村幸雄（昭和54年度/塚原古墳群調査） 加藤雅美（昭和54年度/湿気・大塚新地・松原遺跡調査）（昭和55年度/湿気遺跡整理・執筆） 小河邦男（昭和54年度/湿気・大塚新地・松原遺跡調査）（昭和55年度/湿気遺跡整理・執筆） 石井毅（昭和54年度/大塚新地・松原遺跡・南原古墳群調査）（昭和55年度/大塚新地・松原遺跡・南原古墳群の調査・整理・執筆） 渡辺俊夫（昭和55年度/大塚新地遺跡調査）
補助員	宮内良隆（昭和54年度/大塚新地遺跡調査） 仙波亨（昭和53年度/東楢戸古墳調査，昭和54年度/塚原古墳群・松原遺跡・南原古墳群調査）

3．本書における図面等については，次の略号を用いたものもある。

SB＝建築址　SD＝溝状遺構　SE＝井戸状遺構　SK＝土壙

ＳＩ＝住居址　P＝穴　SX＝その他の遺構　001＝第１号の意

4．発掘調査および本書の作成にあたっては，地元の方々をはじめ，下記の諸機関に多大の御協力，御指導，御助言を賜った。記して深甚なる謝意を表する次第である。日本道路公団土浦工事事務所，同石岡工事事務所，水戸工事事務所，茨城県教育庁文化課，谷和原村教育委員会，岩間町教育委員会，内原町教育委員会，水戸市教育委員会

目　　次

序

例　言

目　次

第１章　調査の経緯…… 1

第２章　東櫓戸古墳…… 3

　第１節　位置と環境…… 3

　第２節　調査経過…… 4

　第３節　墳丘…… 4

　第４節　埋葬施設…… 4

　第５節　出土遺物…… 5

　第６節　まとめ…… 6

第３章　塚原古墳群…… 15

　第１節　位置と環境…… 15

　第２節　調査経過…… 15

　第３節　１号墳及び周辺遺構…… 17

　　1　１号墳…… 17

　　2　２号住居址…… 18

　　3　土壙…… 19

　第４節　まとめ…… 20

　第５節　２号墳及び周辺遺構…… 20

　　1　２号墳…… 20

　　2　１号住居址…… 21

　　3　土壙…… 21

　第６節　まとめ…… 21

第４章　湿気遺跡…… 38

　第１節　遺跡の立地と環境…… 38

　　1　地理的環境…… 38

　　2　歴史的環境…… 38

　第２節　調査経過…… 38

　第３節　遺構・遺物…… 42

1　第1号竪穴住居址…… 42
2　地下式壙…… 46
3　経塚…… 49
4　溝…… 53
5　土壙…… 53
6　その他…… 53
第4節　まとめ…… 55
第5章　大塚新地遺跡…… 66
第1節　遺跡の立地と環境…… 66
1　地理的環境…… 67
2　歴史的環境…… 67
第2節　調査の経過…… 68
第3節　遺構・遺物…… 72
1　住居址…… 72
2　土壙……252
3　井戸状遺構……259
4　掘立柱建築址……264
5　方形周溝遺構……266
第4節　まとめ……357
第6章　松原遺跡……370
第1節　遺跡の立地と環境……370
1　地理的環境……370
2　歴史的環境……370
第2節　調査の経過……370
第3節　遺構・遺物……373
1　住居址……373
2　土壙……446
3　井戸状遺構……448
4　掘立柱建築址……448
5　円形周溝遺構…… 450
6　溝状遺構……453
第4節　まとめ……480

第７章　南原古墳群…… 496
第１節　遺跡の立地と環境…… 496
1　地理的環境…… 496
2　歴史的環境…… 496
第２節　調査の経過…… 496
第３節　遺構・遺物…… 499
1　塚…… 499
2　溝状遺構…… 500
3　住居址…… 502
第４節　まとめ…… 506

第1章　調査の経緯

常磐自動車道にかかる埋蔵文化財の発掘調査は昭和53年5月，筑波郡谷和原村東楯戸古墳から開始し，新治郡桜村，千代田村，石岡市，西茨城郡岩間町，東茨城郡内原町，水戸市へとルートにそって北上し調査をすすめ，今日に至っている。昭和54年度は千代田村内の遺跡の報告書を刊行しており，本年度は，前年度発掘調査の出土品の整理をすすめるために，調査員4名が埋蔵文化財整理センターに配属され，ぼう大な資料に取り組み，報告書の作成に従事した。以下，3ヶ年に調査・整理した遺跡は下記のとおりである。

整理No	遺跡名	遺跡略号	昭和53年度		昭和54年度		昭和55年度		報告書
			発掘	整理	発掘	整理	発掘	整理	
1	東楯戸古墳	JHN	○					○	常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ
2	下広岡遺跡	JSH	○		○			○	常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ
3	上稲吉西原古墳	JKN	○			○			常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ
4	上稲吉西原A	JKN—A	○			○			〃
5	上稲吉西原B	JKN—B	○			○			〃
6	上稲吉西原C	JKN—C	○			○			〃
7	中佐谷十百遺跡	JNT	○			○			〃
8	中佐谷殿内遺跡	JNTU					○		
9	中佐谷A遺跡	JNS—A	○			○			常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ
10	中佐谷B遺跡	JNS—B	○			○			〃
11	大塚1号古墳	JOT—1			○	○			〃
12	大塚2号古墳	JOT—2			○	○			〃
13	大塚3号古墳	JOT—3			○	○			〃
14	大塚4号古墳	JOT—4			○	○			〃
15	大塚5号古墳	JOT—5			○	○			〃
16	大塚6号古墳	JOT—6			○	○			〃
17	大塚7号古墳	JOT—7			○	○			〃
18	大塚8号古墳	JOT—8			○	○			〃
19	大塚9号古墳	JOT—9	○			○			〃
20	大塚10号古墳	JOT—10	○			○			〃

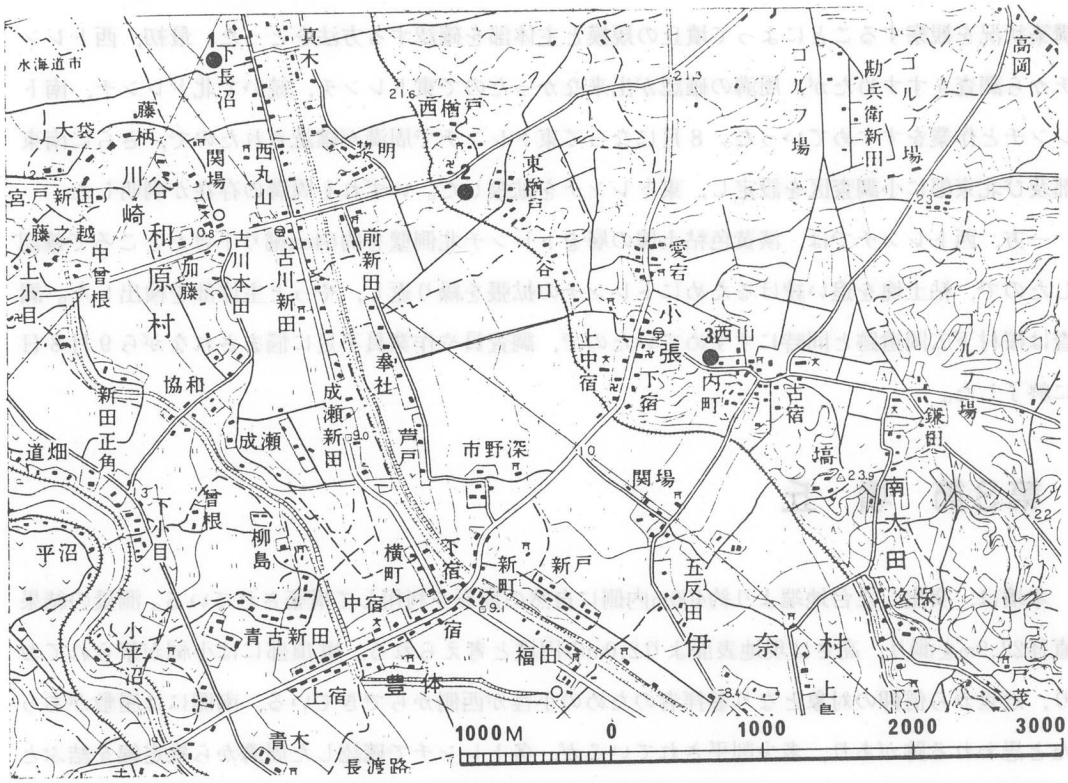
整理No	遺跡名	遺跡略号	昭和53年度		昭和54年度		昭和55年度		報告書
			発掘	整理	発掘	整理	発掘	整理	
21	大塚11号古墳	JOT−11			○	○			常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ
22	大塚12号古墳	JOT−12			○	○			〃
23	大塚13号古墳	JOT−13			○	○			〃
24	大塚14号古墳	JOT−14			○	○			〃
25	大塚15号古墳	JOT−15			○	○			〃
26	松延1号古墳	JMN−1			○	○			〃
27	松延2号古墳	JMN−2			○	○			〃
28	志筑遺跡	JSZ			○	○			〃
29	宮部遺跡	JMB			○				
30	鹿の子A遺跡	JKK−A			○				
31	鹿の子C遺跡	JKK−C			○		○		
32	塚原1号古墳	JTH−1			○			○	常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ
33	塚原2号古墳	JTH−2			○			○	〃
34	湿気遺跡	JSK			○			○	〃
35	大塚新地遺跡	JOA			○		○	○	〃
36	松原遺跡	JMH			○			○	〃
37	南原1号古墳	JNH−1			○			○	〃
38	南原2号古墳	JNH−2			○			○	〃

昭和55年4月から報告書作成にかかる計画をすすめ，図面等に重点をおき，整理作業を開始した。あわせて遺物の洗浄，注記，復元作業に入り，写真撮影を行なった。調査によって得た資料はぼう大であり，報告書の体裁として常磐自動車道にかかる遺跡の出土品の量により，下広岡遺跡と他の6遺跡（東楢戸・塚原・湿気・大塚新地・松原・南原）の2冊に編集するという形をとることにした。

挿図は，発掘調査で記録した実測図を遺構ごとに平面図・断面図（セクション）・出土遺物実測図を掲載した。写真は，遺構の挿図と合わせた形をとりたかったが，頁数の関係から選択して載せた。特に遺物については，実測図を中心にしたので相当少なく記載されている。

第2章　東楢戸古墳

第1節　位置と環境



第1図　東楢戸古墳・周辺遺跡位置図

小貝川は過去において何回も洪水をくりかえし，そのたびに上流から肥沃な土砂を運び，その流域は県下でも有数な穀倉地帯となっている。

東楢戸古墳は，この小貝川の氾濫原である水田を南西方に見おろす洪積台地の端，筑波郡谷和原村西楢戸字舟戸841・843番地に位置している。台地は標高20～21mで畑地がみられるが，近年ゴルフ場や工場の進出がめざましく，宅地化の波が筑波研究学園都市方面から押し寄せてきている。古墳の北側は県道（土浦―小絹線）が走り，小貝川を渡って国道294号線に接続している。村内には，下長沼貝塚（図1－1）をはじめ9ヶ所の遺跡（注1）が確認されており，昭和53年7月に洞坂畑遺跡（注2）の発掘調査が行なわれ，住居址群（縄文時代後・晩期）を検出している。

小貝川左岸流域には，宮後古墳（図1－3）(伊奈村)・東楢戸古墳（図1－2）・並木古墳・福岡南古墳群が点在しており，本墳はその中位を占め，付近の鹿島神社境内にある古墳を含めて小群を形成していたものと考えられる。

第2節　経　過

本墳の調査は昭和53年５月下旬，雑木の伐採や調査区の設定のための杭打ち作業から開始し，墳丘測量後墳頂部で直交する東西(Ｂ－Ｄ)・南北(Ｃ－Ａ)トレンチ２本を設定し，周溝の存在と構築状況を観察することによって墳丘の規模と主体部を確認する方法をとった。最初，西トレンチから調査をすすめたが，周溝の確認が出来なかったので東トレンチ，続いて北トレンチ，南トレンチと作業をすすめていった。８月になって東トレンチで周溝が確認されたので，さらに南東部及び北東部に小調査区を設定し，東トレンチを拡張した。いずれも周溝の存在が判明した。

一方，西トレンチでは，淡黄色粘土塊の層をトレンチ北側壁を約64cm掘り下げたところで確認したので，粘土塊を追い続けるためにトレンチの拡張を繰り返し，やっと主体部を検出した。調査は桜村下広岡遺跡と同時にすすめていたので，調査員や作業員不足に悩まされながら９月８日に終了した。

第3節　墳　丘

本墳は，突出した台地端より約400m内側に自然の地形を利用して構築されている。測量の結果直径22.9mを測り，高さは現地表面より2.0mの円墳と考えられる。墳頂部には小祠が祭られており，近世から信仰の対象となり参拝者のための小径が西側からできている。南側には屋敷があったと思われる跡があり，多少削平されているが，各トレンチで確認した周溝から推定線を結ぶと平面プランは東西に比して南北がやや長くなる不正円形を呈している。盛土は東西トレンチの北壁のセクションで観察すると，最下層のローム層の上層として旧表土層が平均約38cm堆積し，若干東側に流れるように傾斜していたが，おおむね水平に土層が積まれており，構築時においては比較的単純な構築がなされた事と考えられる。

東トレンチの周溝は幅4.5m，深さ0.5mで墳丘側で急激に落ち込むが，反対側では緩くなっており，溝底は平坦でその中から土師器を出土した。また，南(Ｃ－Ａ')・北(Ａ'－Ａ)トレンチにおいては，周溝が確認できなかった。これは後世において墳丘裾部の削平によるものであるか，あるいは構築当初から周溝を設置しなかったものなのかを判明することが困難である。なお，埴輪・茸石等の施設はなかった。

第4節　埋葬施設

埋葬施設は粘土槨が墳頂部下の墓壙内に築かれていた。墓壙は旧表土から掘り込まれて，その

規模は南北(長さ)約８m，東西(幅)約2.35mの長方形を呈し，深さは旧表土層下0.65mである。主軸はＮ－35°－Ｗを指している。

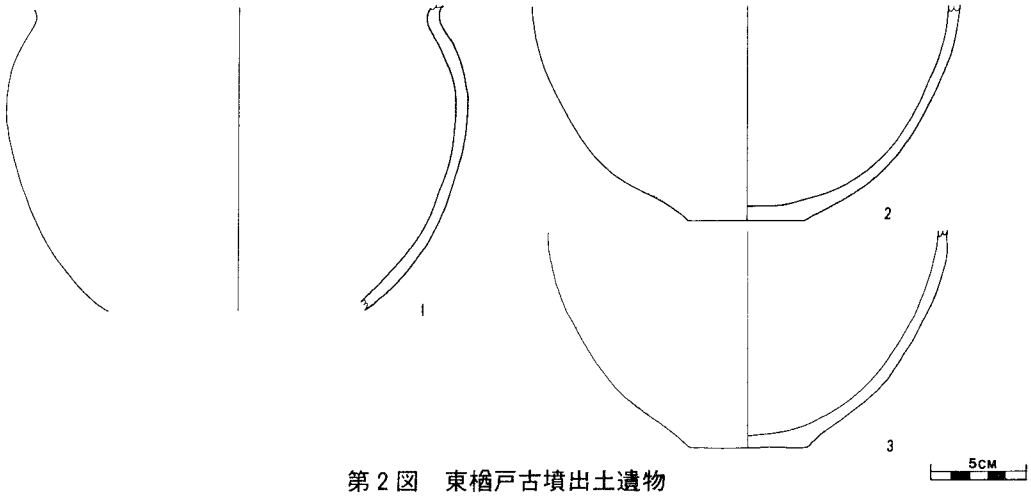
粘土槨は墓壙底面に淡黄色粘土が敷かれ，粘土塊が棺に沿って断続的に置かれた状態で出土した。全長約７m，幅1.13mである。調査中にトレンチによって多少削ってしまったのであるが，その断面の状態はU字形を呈しているところから割竹形木棺ではなかろうかと推定する。槨内からは遺物は発見されなかった。土層は単一で，黒褐色土が粘土塊と混って堆積されていた。

第５節　出土遺物

調査に際して発見された遺物は，古墳に直接伴うものとして粘土槨直上付近より出土の土師器及び東トレンチで確認された周溝底から出土した土師器と，古墳築造以前の遺物包含層を盛土に使用した際混入した縄文式土器及び墳丘再利用によって攪乱された土層より出土した遺物等である。第２図－１は，粘土槨の西壁南端部直上に頸部を上に10片の破片で出土した。おそらく槨との関係が深いのではないかと考え，付近を精査したが発見されず，これが唯一の出土遺物である。口縁部及び底部を欠き胴部破片のみである。復元すると，胴部径24.4cm，頸部21.3cmの壺形土器と思われる。胴部は球形を呈するが，胴部最大径は中位より上である。わずかに残る頸部より胴部にかけてヘラ撫している。器厚は0.4cmで，色調は暗褐色で黒ずんでいる。胎土は石英を含んでおり，焼成は普通である。

第２図－２は，東トレンチ周溝内底に横位の状態で出土した。底部径6.2cm，現存高11.4cmほどの底部から胴部にかけての破片で壺形土器と思われる。胴部はゆるやかなカーブをえがき，最大径が中位となる球形を呈している。底部は平底である。整形は胴部上方から底部にかけてヘラ削り，底部は粘土で貼りつけ，撫で接合し，ヘラ削りで仕上げている。器厚は胴部で0.7cm～0.8cm，底部で0.7cmである。胴部内面はヘラ削りを横位に施し，色調は明褐色，内面は淡黄褐色で胎土に砂礫を含み，焼成は良好である。

第２図－３は，ほぼ同じレベルの周溝内に破片で出土したものである。底部径６cm，現存高11cm，口縁部及び頸部を欠いている壺形土器と考えられる。整形は胴部の内外ともにヘラ削りが施されている。器面内外は赤色顔料によって彩色され，しかも土器破砕後破片の状態の時に朱がぬられており，それは断面にも彩色されていることから判断できる。器厚は0.5cm～0.6cm，色調は淡黄褐色で，胎土中に砂粒を含み，焼成は良好である。



第２図　東楯戸古墳出土遺物

第６節　まとめ

本古墳は小貝川左岸の台地端に築造された古墳である。墳丘規模は直径23ｍの円墳と考えられ，主体部は地山を掘り込んで墓壙をつくり，その上に木棺を置き，その周囲を粘土でおさえたものと推定される。副葬品は槨内より発見出来なかったが，槨直上に壺形土器が出土し，被葬者とそう遠くない年代を示唆している資料を得た。壺形土器は球形を呈し，和泉期まで下降するものではなく，五領期に比定するものである。又，周溝底から出土した壺形土器は破砕された土器の断面とも朱が塗られているところから，他所で破砕され古墳に供献された事実が明らかであり，埋葬後墓前祭を行なったものと考えられる。

茨城県内ですでに調査された前期古墳は，西茨城郡岩瀬町狐塚古墳（注３），稲敷郡桜川村原１号墳（注４），行方郡玉造町勅使塚古墳（注５），筑波郡筑波町山木古墳（注６），新治郡八郷町丸山古墳（注７），八郷町佐自塚古墳（注８），岩井市上出島２号墳（注９）の７例をあげることができるが，本墳もこれらのグループに位置づけられる可能性が強い。

（注１）茨城県教育委員会『茨城県遺跡地図』昭和52年

（注２）洞坂畑遺跡発掘調査会『洞坂畑遺跡』昭和54年

（注３）岩瀬町教育委員会『常陸狐塚』昭和44年

（注４）浮島研究会『常陸浮島古墳群』昭和51年

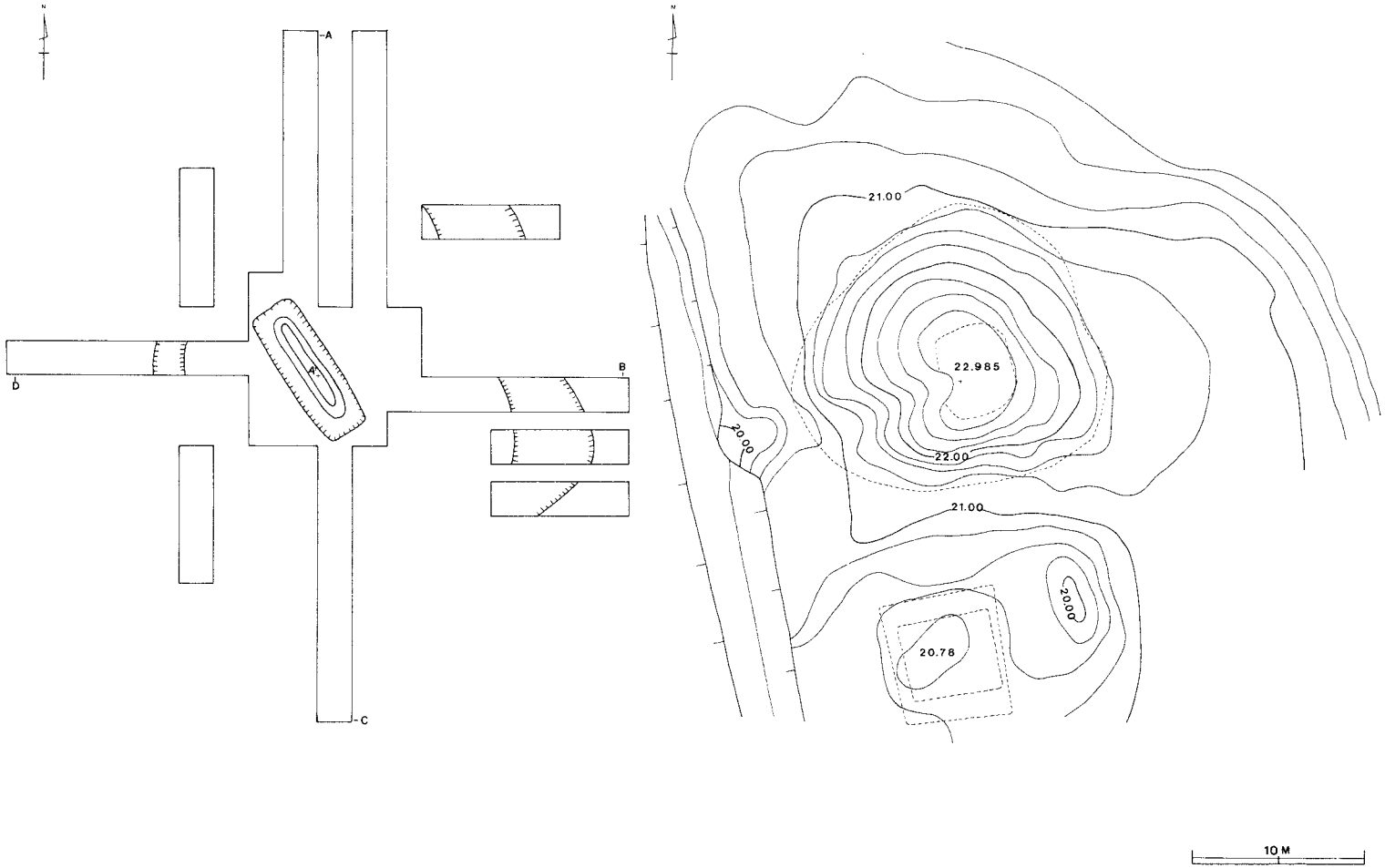
（注５）大塚初重・小林三郎「茨城県勅使塚古墳の研究」『考古学集刊』２－３　昭和39年

（注６）茨城考古学会『茨城県筑波町山木古墳』昭和47年

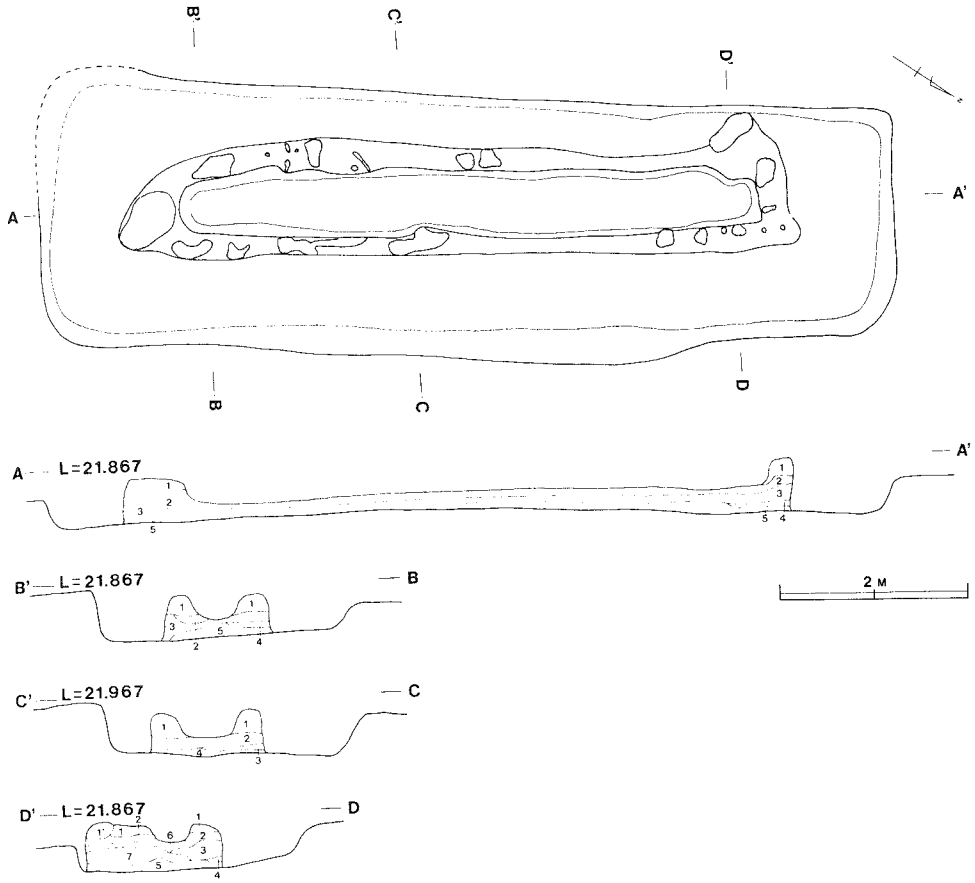
（注７）大塚初重「丸山古墳」『茨城県資料』考古資料編古墳時代　昭和49年

（注８）茨城県教育委員会『佐自塚古墳調査概要』昭和37年

（注９）岩井市教育委員会『上出島古墳群』昭和51年



第３図　東楢戸古墳全体測量・トレンチ配置図



東楢戸1号墳主体部土層解説
A－A′

1層．褐　色　ハードロームブロック及び粘土を含む非常に固い
2層．暗褐色　ハード，ソフト，黒色土の混ったもの
3層．暗褐色　土層より黒色土の割合が多い
4層．　ハードロームを主体とした層
5層．暗褐色　ソフトローム及び黒色土で若干粘性がある

東楢戸1号墳主体部土層解説
B－B′

1層．　ハードロームを含有する非常に固い層であり粘土を含む
2層．黒褐色　ハード，ソフト，黒色土の混った層である
3層．　ハードロームを主体とした層でブロブロしている
4層．暗褐色　ハードロームの小ブロック及び黒色土を含有する，しまり弱し
5層．黒褐色　粘性を帯びている、ソフトロームのブロックを含有する

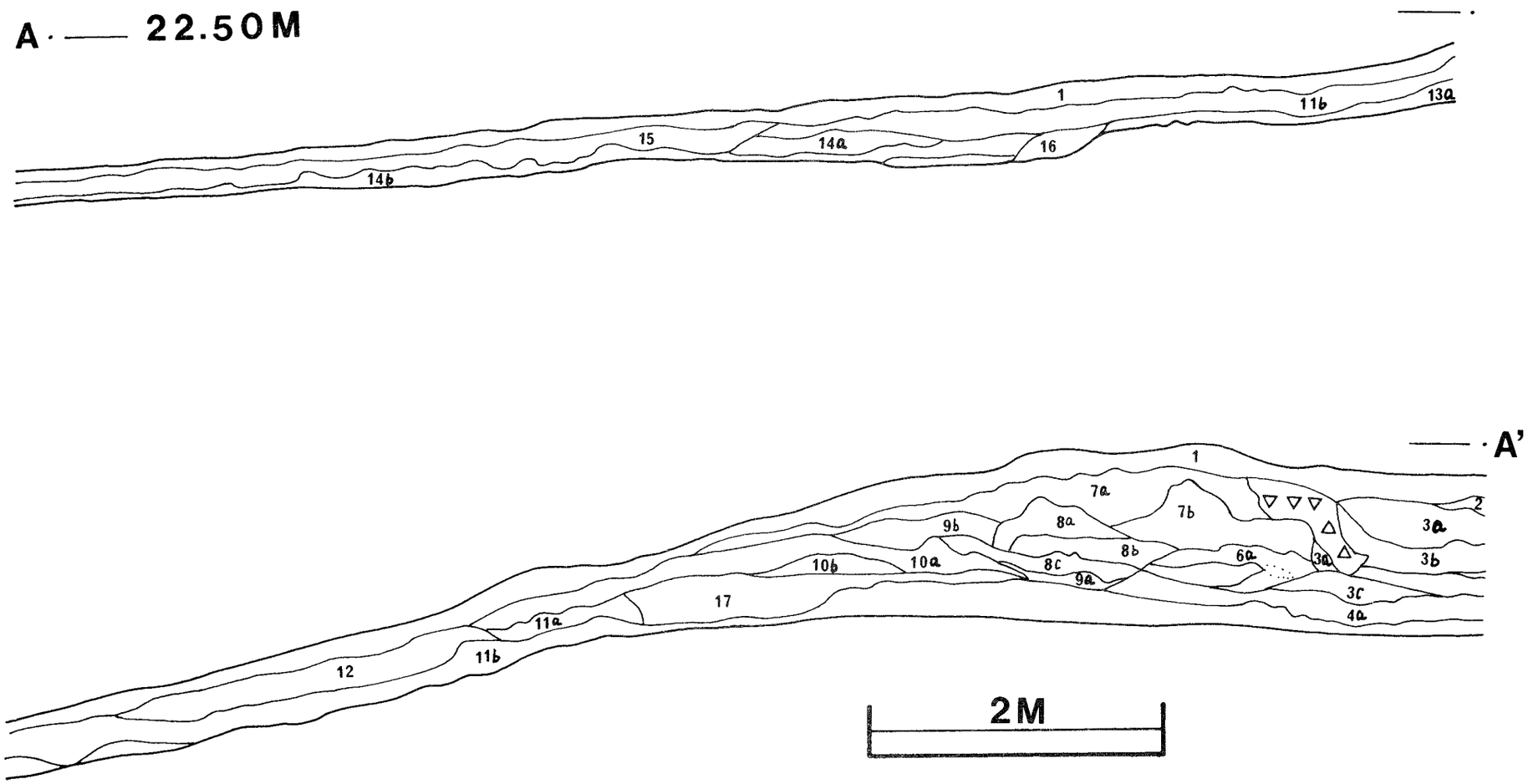
東楢戸1号墳主体部土層解説
C－C′

1層．茶褐色　ハードブロックのロームを含み非常に硬い
2層．暗褐色　ソフトロームの小粒子を含みさらっとしていてしまりはない
3層．暗褐色　ハードブロックのロームを含みしまりがある
4層．黒褐色　きめこまかな土層でやわらかい

東楢戸1号墳主体部土層解説
D－D′

1層．茶褐色　ハードブロックのロームを含み、非常に硬くしまりがある
1′層．　粘土ブロック
2層．茶暗褐色　ハードブロックのロームを含み、しまりがある
3層．暗褐色　ソフトロームの微粒子とハードロームの小粒子を含有し、しまりがある
4層．暗褐色　ハードロームのブロックを含み硬い
5層．黒褐色　きめこまかな土層でやわらかい
6層．茶褐色　ハードロームの小粒子とソフトロームを含みしまりがある
7層．暗褐色　ハードロームのブロックを含み非常に硬い

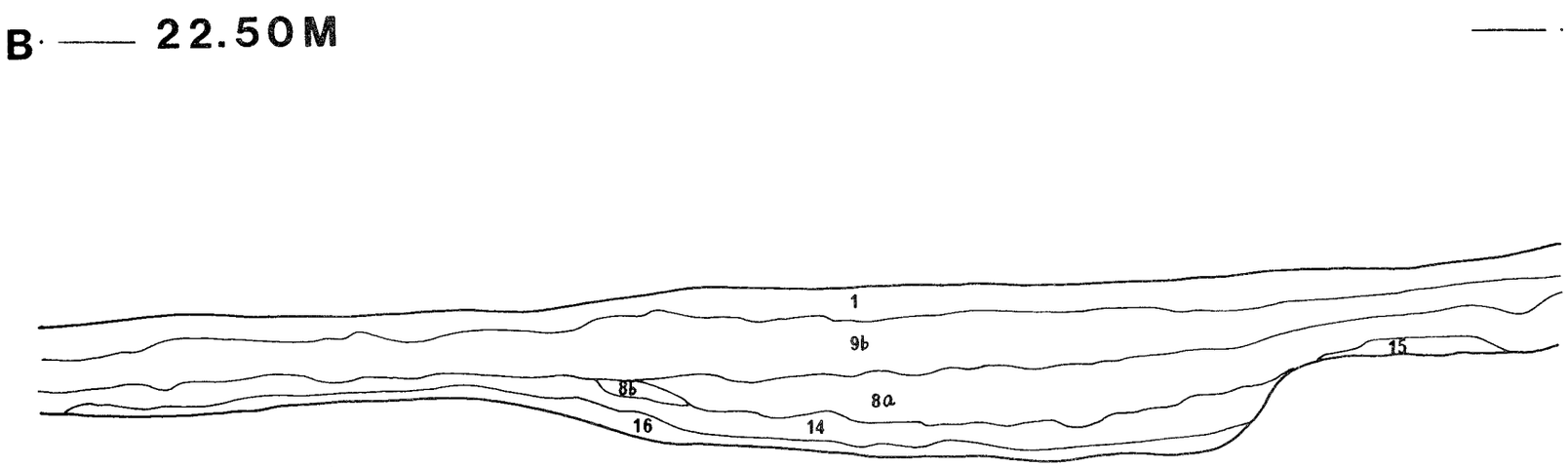
第4図　東楢戸古墳主体部



北トレンチ東壁土層解説

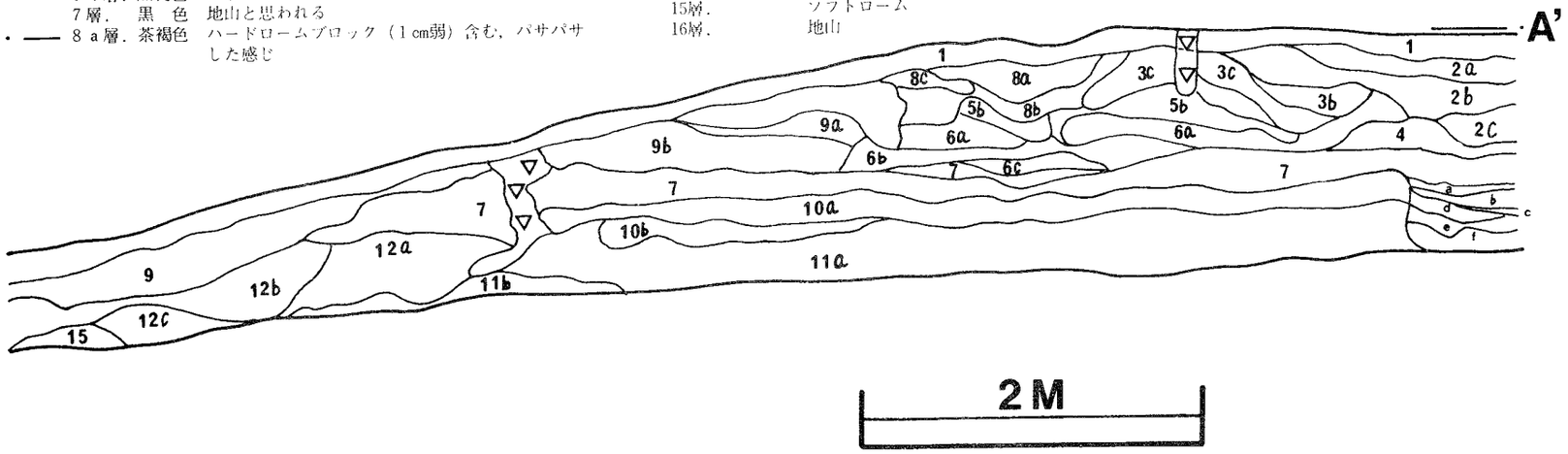
1層．　表土層，撹乱層である。
2層．　暗褐色　ハードロームの小ブロック含む，パサパサした感じ
3 a層．褐　色　ハードローム及びソフトロームブロック含む，ゴツゴツした感じ
3 b層．茶褐色　ハードローム及びソフトロームブロック含む，3 a層に比べるとボロボロしている
3 c層．暗褐色　ハードロームブロック及びソフトロームブロック含む，3 b層に比べて黒色土が混っているため，若干黒味がかり弱いながら締り有
4 a層．黄褐色　ハードロームブロックを多量に混入，固くつきかためられたように見受けられる
4 b層．暗褐色　ハードロームブロック，ソフトロームブロック及び黒色土の混在でありパサパサしている
5層．　黒褐色　ハードローム及びソフトロームの小粒子を含む，パサパサした感じ
6 a層．暗褐色　ハードローム及びソフトロームの微粒子を主体とした層，パサパサしている
6 b層．茶褐色　ハードロームブロック（1 cm強）及びソフトローム含む，締り弱くパサパサしている
6 c層．暗褐色　ハードローム粒子及びソフトロームの微粒子を含む，比較的締り有
7 a層．暗褐色　ハードロームブロック（5 mm前後）含む，締りなくパサパサしている
7 b層．茶褐色　ハードローム（2 cm弱）及びソフトロームブロック含む，パサパサしている
8 a層．暗褐色　ハードローム及びソフトロームの小粒子含む，締り弱い
8 b層．暗褐色　ハードロームブロック（1 cm弱）及びソフトローム含む，やわらかい
8 c層．黒褐色　ハードローム及びソフトロームの小粒子含む，やわらかい
9 a層．暗褐色　ハードロームブロック（粒子2 cm弱）及びソフトローム含む，締りなし
9 b層．暗褐色　ハードロームブロック少量含む，やわらかい
10 a層．黒褐色　比較的締り有，キメ細かい
10 b層．暗褐色　ソフトロームブロック含む，パサパサした感じ
11 a層．黒褐色　ソフトローム粒子含む，パサパサしている
11 b層．暗褐色　ソフトローム粒子含む，パサパサしている
12層．　暗褐色　締りなくパサパサしている
13 a層．褐　色　ソフトロームを主体とし，締り有り固い
13 b層．暗褐色　ソフトローム少量含む，やわらかい
14 a層．暗褐色　ソフトローム少量含む，パサパサした感じ
14 b層．暗褐色　ソフトローム少量含む，比較的締り有
15層．　茶褐色　キメ細かく若干締りを帯びている
16層．　明褐色　ハードロームブロック及びソフトロームを主体とした土層で弱いが締りを帯びている
17層．　黒色土

第5図　北　ト　レ　ン　チ

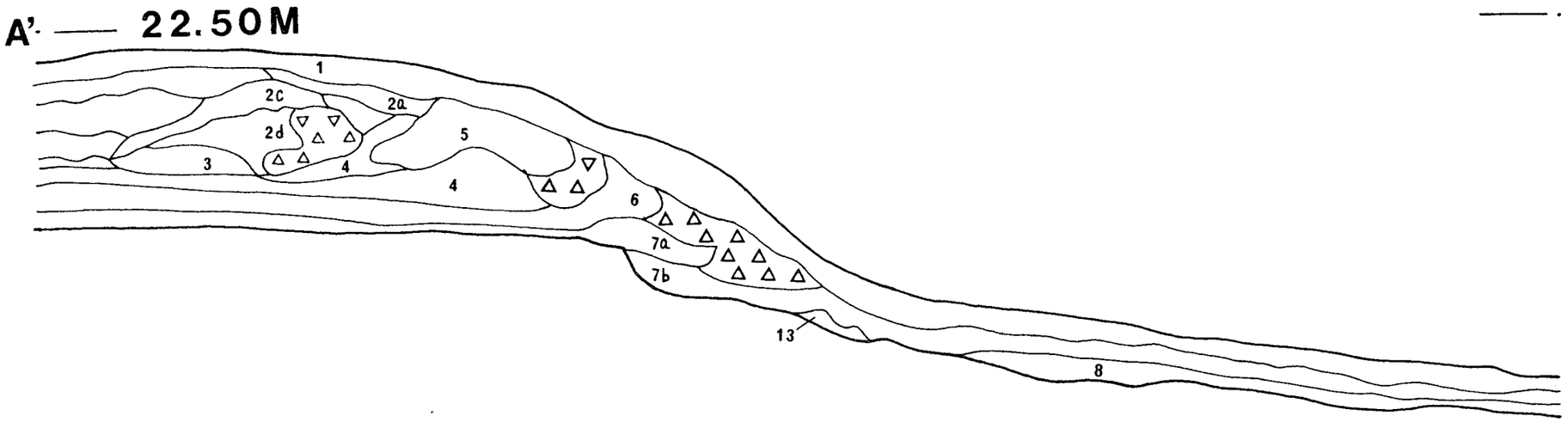


東トレンチ北壁土層解説

1層.		表土層である，攪乱層である
2 a 層.	茶褐色	ハードロームブロック少量含む，締りなくやわらかい
2 b 層.	茶褐色	ハードローム小微粒子含む，比較的締り有
2 c 層.	茶褐色	ハードロームブロック（1 cm弱）含む，締り弱い
3 a 層.	暗褐色	ハードロームの小粒子含む，比較的締り有
3 b 層.	暗褐色	ハードロームの小粒子含む，締り弱い
3 c 層.	暗褐色	ハードロームブロック（1 cm弱）少量含む，比較的締り有
3 d 層.	暗褐色	ハードローム含む，パサパサした感じ
4 層.	茶褐色	ハードロームブロックの大塊で成り立つ層，非常に固い
5 a 層.	黒褐色	比較的締り有
5 b 層.	黒褐色	ハードロームの小粒子含む，締り有
6 a 層.	黒褐色	ハードローム及びソフトロームの微粒子含む
6 b 層.	黒褐色	ハードローム及びソフトロームの小粒子含む，比較的締り有
6 c 層.	黒褐色	非常に締り有
7 層.	黒　色	地山と思われる
8 a 層.	茶褐色	ハードロームブロック（1 cm弱）含む，パサパサした感じ
8 b 層.	茶褐色	ハードロームブロック（1 cm弱）少量含む，パサパサした感じ
8 c 層.	茶褐色	ハードロームブロック（1 cm強）含む，非常に締り有，固い
9 a 層.	暗褐色	ハードロームブロック（1 cm弱）少量含む，パサパサした感じ
9 b 層.	暗褐色	ハードローム及びソフトロームブロック含む，パサパサした感じ
10 a 層.	黒　色	ソフトローム含む
11 a 層.	暗褐色	黒色土とソフトロームの混った層
11 b 層.	黒褐色	性質としては11 a 層と同じ
12 a 層.	暗褐色	ソフトロームブロック含む，パサパサした感じ
12 b 層.	暗褐色	パサパサした感じ
12 c 層.	茶褐色	ソフトロームを少量含む，キメ細かい土層
13 a 層.	黒　色	ソフトロームの粒子含む，締りなくサラサラしている
13 b 層.	暗褐色	サラサラした感じの土層
14層.	黒褐色	ソフトローム粒子含む，比較的締り有
15層.		ソフトローム
16層.		地山

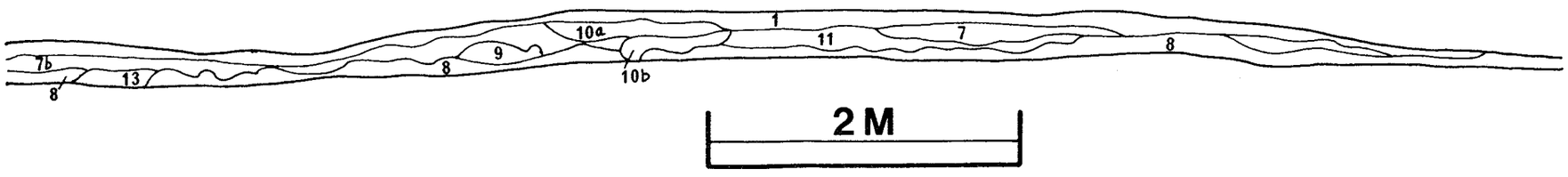


第6図　東　ト　レ　ン　チ

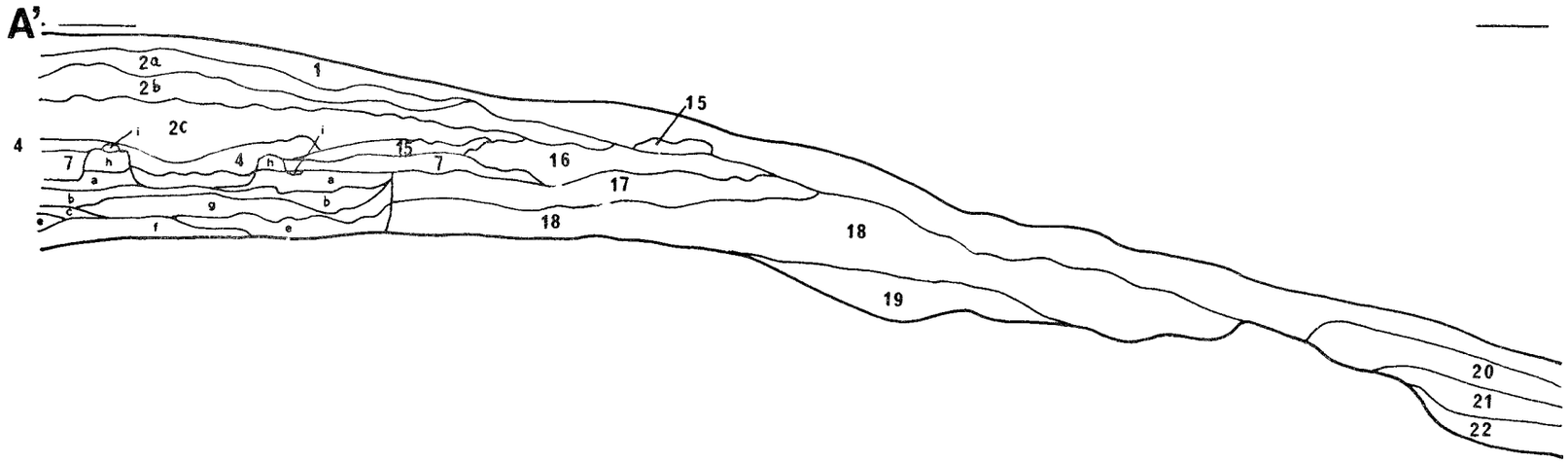


ＪＨＮ古墳南トレンチ西壁土層解説

1層．　表土層，撹乱層である
2ａ層．茶褐色　ハードロームの小粒子含む，パサパサした感じ
2ｂ層．茶褐色　ハードロームブロック（2cm弱）含む，比較的締り有
2ｃ層．茶褐色　ハードロームブロック（小粒子2cm強）含む，締り弱くパサパサしている
2ｄ層．茶褐色　ハードロームブロック（小粒子3cm強）含む，比較的締り有
3層．　茶褐色　ハードロームブロック（小粒子1cm弱）多量に含む，締り弱い
4層．　茶褐色　ハードロームブロック（小粒子2cm強）多量に含む，非常に締り有，部分的に粘土小粒子含む
5層．　茶褐色　ハードロームブロックの小粒子含む，締り弱くパサパサした感じ
6層．　暗褐色　ハードローム及びソフトロームの微粒子含む，締り弱くパサパサした感じ
7ａ層．暗褐色　ソフトロームの微粒子含む，キメ細かく比較的締り有
7ｂ層．暗褐色　ソフトロームの微粒子含む，キメ細かく比較的締り有
8層．　茶褐色　ハードローム及びソフトロームの小粒子含む，比較的締り有
9層．　茶褐色　非常に締り有，固い
10ａ層．茶褐色　焼土を部分的に含む，非常に固い
10ｂ層．茶褐色　ハードローム小粒子含む，非常に固い
11層．　褐　色　ハードローム小粒子含む，非常に固い
12層．　粘土を主体とした土層
13層．　ハードロームブロック



第7図　南　ト　レ　ン　チ

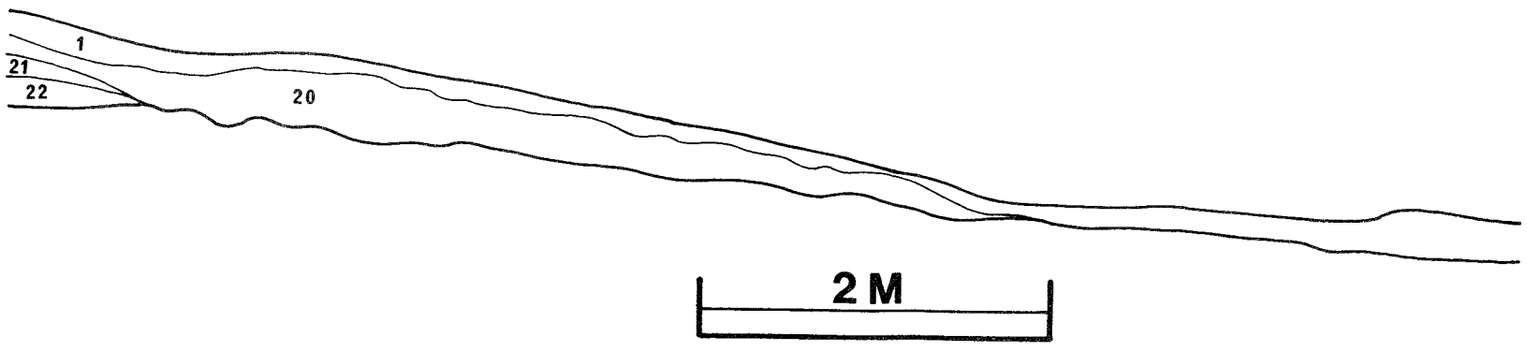


西トレンチ土層解説

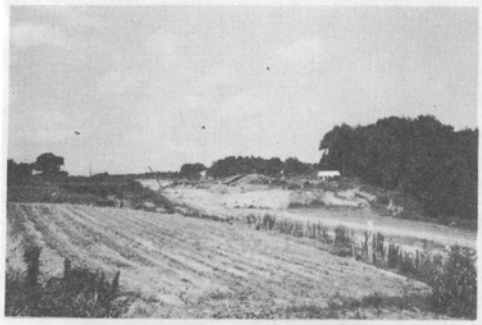
1層～7層は東トレンチ土層解説に同じ

15層．暗褐色　しまりは弱く，サラサラした感じである
16層．褐　色　ソフトロームのブロックを含有し，若干しまりを帯びる
17層．黒　色　所謂黒色土（旧表土）である
18層．褐　色　所謂褐色土（漸移層）である
19層．褐　色　所謂ローム層である
20層．暗褐色　しまりは弱く，やわらかい
21層．暗褐色　しまりは弱く，ローム粒を少量含有する
22層．暗褐色　ローム粒を含有し，しまりを帯びる

a層．褐　色　パンチクがなされており非常にかたい
b層．暗褐色　ハードローム小ブロックを含有ししまりを帯びる
c層．褐　色　ハードロームブロックを主体とする
d層．暗褐色　ハードロームブロック，及び黒色土混在
e層．黒　色　少量のロームブロックを含有する
f層．黒褐色　若干粘性を帯びる
g層．暗褐色　ハードロームブロックを含有し，しまりを帯びている
h層．褐　色　ハードローム及び粘土を含みしまりを帯びている
i層．　　粘土塊である

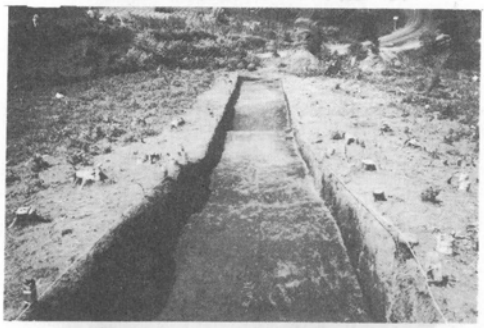


第8図　西　ト　レ　ン　チ

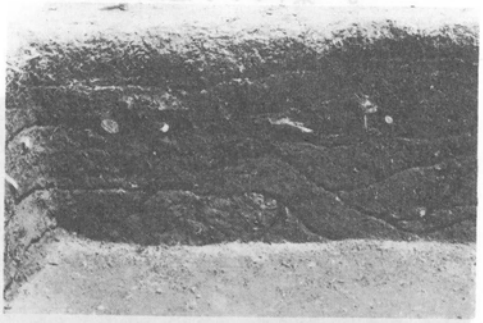


1　東楯戸古墳遠景

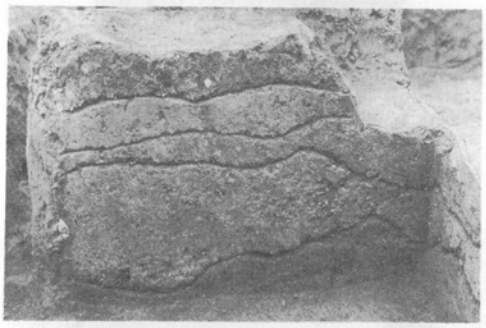
2　東楯戸古墳近景



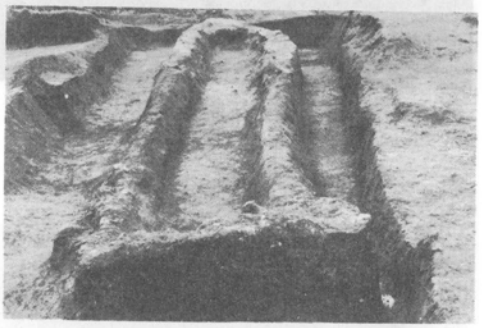
3　北トレンチ



4　東トレンチ土層断面(部分)

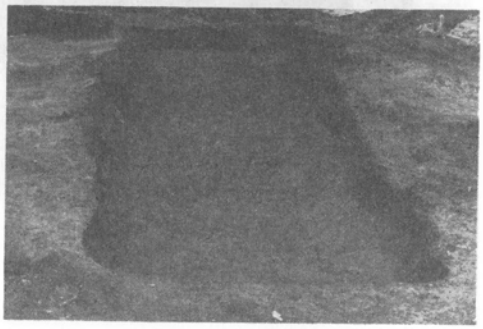


5　粘土槨断面(部分)



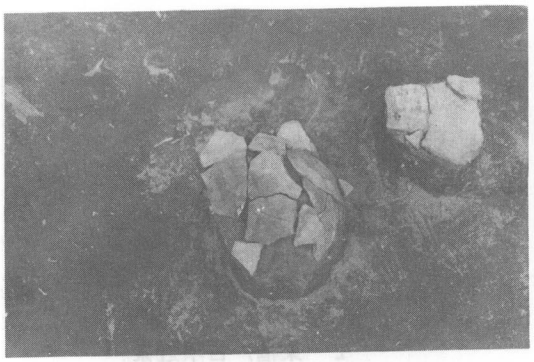
6　粘　土　槨

7　粘土槨南端部断面



8　墓壙(粘土槨除去後)

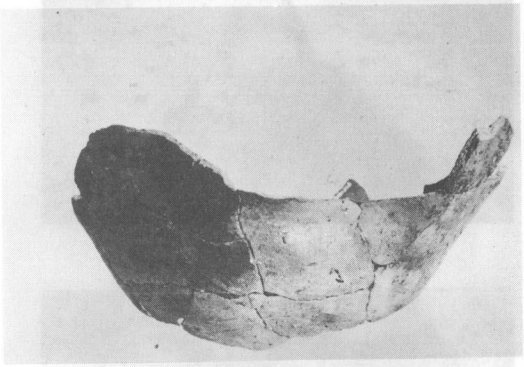
写1



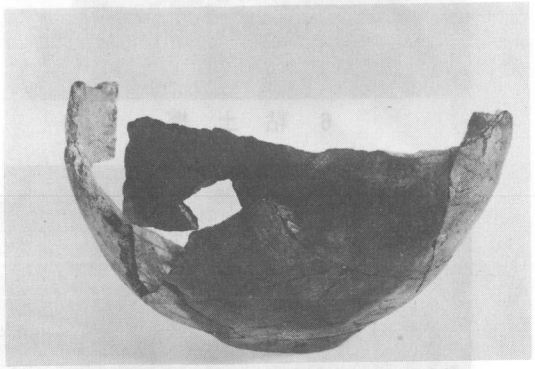
9　東トレンチ遺物出土状態

10　東トレンチ遺物出土状態

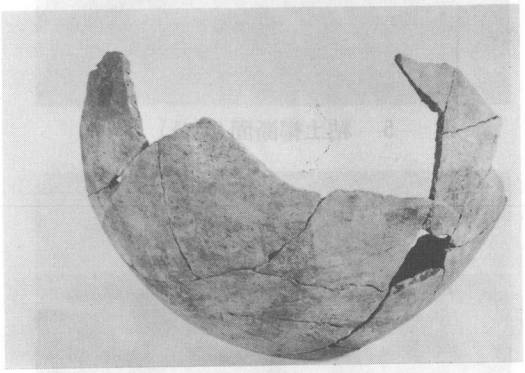
11　粘土槨附近遺物出土状態



12　出　土　遺　物



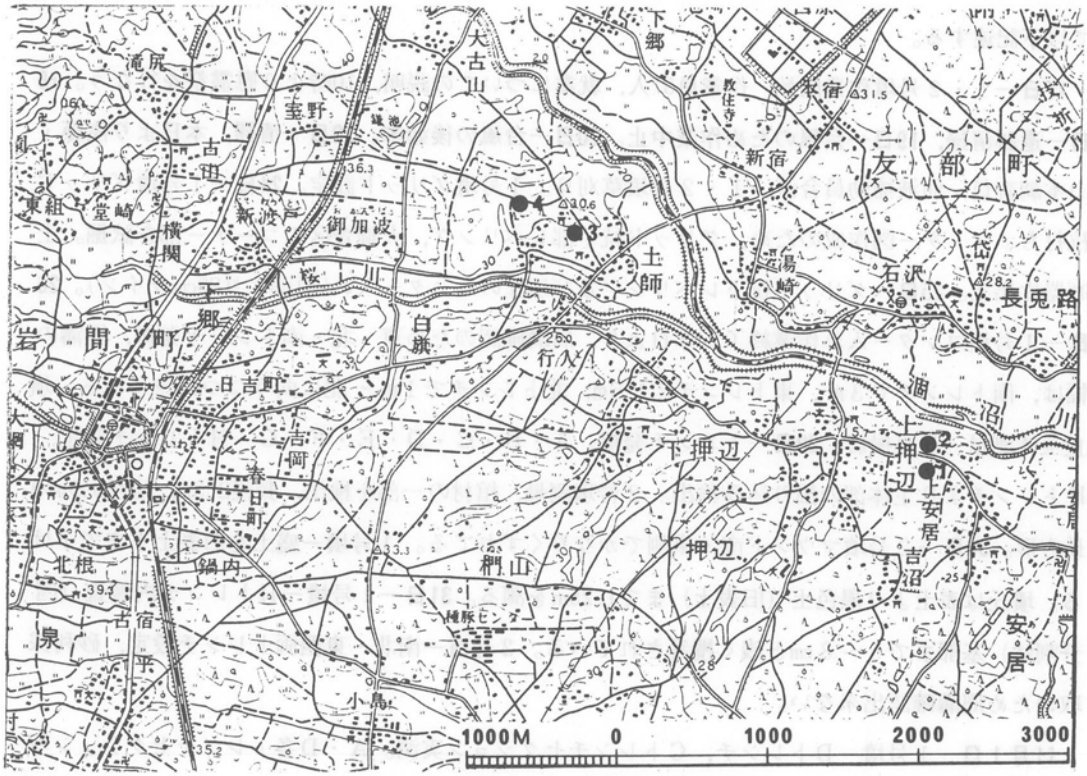
13



14

第3章　塚原古墳群

第1節　位置と環境



第1図　塚原古墳・周辺遺跡位置図

涸沼川は栃木県との境界鶏足山塊に，源を発し，笠間盆地を経て小規模な蛇行をくり返し，涸沼に注いでいる。塚原古墳群はこの中流部の右岸低地，西茨城郡岩間町大字安居1974番地外に所在している。これらの低地は涸沼川の氾濫原の微高地で集落と水田地帯となっている。

古墳群は以前は30基以上存在したといわれるが，現在は前方後円墳1，円墳5の計6基である。岩間町内には26遺跡（注1）が確認されているが，そのうち7遺跡が古墳群もしくは古墳であり，この河川に沿って，塚原古墳群（図1－1・2），十三塚古墳（図1－3），高靇（タカオ）神社古墳群（図1－4）が右岸沿いに点在している。塚原1号墳と2号墳の間は県道（岩間－奥ノ谷線）が走り，それと常磐自動車道が直交している。

第2節　経　過

本古墳群の発掘調査は，昭和54年10月17日，古墳前においての慰霊祭挙行から11月30日終了す

るまでの約32日間であった。

すでに常磐自動車道のルート内に１号墳は完全に入っていたが，２号墳の北側がルート外にのびており，古墳を二分してその内側を調査するという変則的な調査をせざるをえない状況下におかれていたが，幸い地主の協力により全掘することができた。各調査員の発掘調査日誌をまとめて以下記述する。

17日—１・２号墳作業開始，作業員37人，就業についての説明，10時より慰霊祭を行なう。**18日**—遺跡清掃，**19日**—台風のため作業中止。**20日**—台風の後始末。**22日**—清掃，本日より佐藤・山本調査員，仙波補助員合流。１・２号墳草刈り。１号墳グリッド設定。**24日**—１号墳グリッド杭打ち、コンター図作成のため，グリッド杭下部レベリング，大調査区のコーナー部を試掘。土師器片出土。**25日**—グリッド杭下レベリング及び墳丘のコンター入れ(頂部より80cmライン)。**26日**—１号墳コンター入れ作業終了。本日より，周溝確認のため東・北・南トレンチ発掘，周溝の幅は，南トレンチで３ｍ，東トレンチで1.5m，北トレンチで１ｍと北に向うにつれ狭くなる。墳丘全体測量・写真撮影。**29日**—トレンチ発掘，Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ・Ｆ・Ｇ・Ｈトレンチ設定，Ｈトレンチより主体部の掘り込み検出。２号墳測量，棺材の一部を検出，長径2.3m，短径0.9mの長方形。**30日**—２号墳マウンド南・東側でかなりくずれてる。１号墳—盛土を旧表土下まで下げる。墳丘は表土より黒色土（旧表土）まで1.25mを測る。**31日**—１号墳—Ｈトレンチ内調査（四分割法）基部まで５～８cmと浅く攪乱されている。２号墳—南北・東西両トレンチ設定，砂利採取のため周溝確認出来ない。

11月１日—１号墳—Ｄトレンチ，Ｃトレンチセクション実測。Ａ・Ｄ各トレンチセクション写真撮影，周溝確認グリッド拡張，　２号墳—墳頂部表土下５cmに石棺の一部が出土，周溝は東のみ残っている。**２日**—１号墳—ＡトレンチBトレンチセクション実測,周溝確認のためグリッド拡張，Ｅ—７グリッドにおいて高坏出土。２号墳々丘発掘。**５日**—１号墳—周溝発掘，墳丘拡張発掘。**６日**—１号墳周溝発掘。**７日**—１号墳—周溝の内側をもう１本の周溝がめぐっている。２号墳—東・南トレンチ調査。**８日**—２号墳—東側トレンチ（幅４m），南側トレンチを発掘したが周溝は確認出来ず，東側トレンチの北側に２m幅のトレンチ設定，東トレンチ東端に住居址，土壙検出，１号墳の東～北ベルト除去。　Ｅ・Ｆ・Ｇ・Ｈトレンチのセクションコメント入れ。　実測のため40m方眼のメッシュ組み。**９日**—１号墳40m方眼メッシュ組み作業終了。墳丘部旧表土除去，地山まで掘り下げたが主体部は発見されなかった。北西・西・南西部の周溝内のベルト除去。２号墳東西・南北の調査区を旧表土下まで掘り下げたが主体部を確認出来ず。東西トレンチの北西側に新調査区を設定したが，すでに盗掘穴がある。Ｅ・Ｆトレンチ東側に弥生時代住居址確認。**12日**—１号墳の主体部土壙セクション引き，実測後コメント入れをする。南西部周溝付近に土壙１基（１号）発見。２号墳トレンチ発掘。**13日**—１号墳主

体部セクションベルト除去。主体部は正方形を呈する。1号土壙は平面プラン及び遺物から土壙墓であることが判明。**14日**－1号墳－2号土壙調査終了する。2号土壙は1号墳Dトレンチに検出長楕円形で深さは50cm，遺物はない。1号墳付近に位置しているので古墳との何らかの関係をもつ可能性がある。2号墳－南北トレンチの西側トレンチ完掘，東トレンチセクション実測，写真撮影，東側トレンチセクション実測，コメント入れ，写真撮影等をする。**15日**－1号墳－平面実測。2号墳－東西・南北ベルトをはずし，新たに北側部分の1号住居址・1号土壙（円形）調査する。**16日**－1号墳主体部・土壙 エレベーション実測。　2号墳北側の調査。**19日**－1号墳－3・4号土壙セクション引き。5・6号土壙 セクション実測。　東側住居址（2号住)は数基の重複か。2号墳－東側トレンチ・南側トレンチ延長部セクション実測，コメント入れ。1号住居址の平面実測とエレベーション図作成。方形プランで土師器片を出土する。**20日**－1号墳－3・4号土壙実測，コメント入れ。5・6号土壙コメント入れ，2号住居址より須恵器を出土する。2号墳－エレベーション実測をする。**21日**－1号墳－2号住遺物をとりあげ，セクション実測，コメント入れ，ベルト除去。3・4号土壙全掘へ。2号墳－全景写真撮影。**22日**－1号墳－2号住居址の精査，周溝（地山部）清掃。3号土壙平面実測（午前中で終了)。雨。**26日**－雨で作業中止。**27日**－1号墳周辺土壙（3・4・5・6号）平面実測。全景写真撮影。2号住の調査。作業員解雇。**28日**－1号墳主体部実測，エレベーション図作成。**30日**－エレベーション図作成，AからFまで6本作図。

第3節　1号墳及び周辺遺構

1　1号墳　（図2）

墳丘　本墳は常磐自動車道のルート内のほぼ中央，センター杭（STA－149）より西方5mに位置する。近年まで農地として陸稲，梅林などに利用されていたが，開発が近ずくにつれ雑草がおい茂り，それを刈り取るとわずかに墳丘が残存し，長方形を呈する小丘となっていて，いも穴に利用されていた。測量の結果，墳丘の最高点は17.8m，裾部で16.3m，比高1.5mである。

わずかに残っていた墳丘に，東西・南北方向にトレンチを設定する。　発掘して観察すると，旧表土は耕作によって消えてしまっているが，ここから掘り込んで周溝をつくり，盛土したものと推定される。周溝をそれぞれのトレンチで確認し，それを結びあわせると，主体部付近にくびれ部があることが判明したので，前方後円墳の可能性がでてきた。墳丘の主軸方向はN－44°－Wを指す。後円部はやや正円形に近い形状で，くびれ部から前方部先端コーナー部にかけて開いており，くびれ部の幅の2倍が後円部の直径に相当するよう築造されている。周溝は，墳丘の周囲を一周し，前方部のくびれ部で幅が少し狭くなるが，ほぼ3mで，溝底は平坦である。

埋葬施設（図3） 埋葬施設は前方部の主軸線上に設置された箱式石棺であるが，ほとんど破壊され，わずかに土壙の範囲を示す棺材（粘板岩）の破片が散在しており，その破片を除去すると土壙の底部であることが判明した。長径2.3m，短径1.93mの規模で，石棺の板石が立っていたと思われる凹状の溝があり，それから推定すると，内法長辺1.7m，短辺0.6mの規模の石棺が存在したようである。

遺物 周溝部及び盛土内より，若干の土師器片が出土したのみで，本墳築造時期を決定する遺物は検出することが出来なかった。

2 2号住居址（図4）

遺構 本住居址は，1号墳の後円部Eトレンチと Fトレンチの拡張区において，周溝調査中に確認されたものである。主軸方向はN－118°－Eで，長辺約6.2m，短辺6mを測り，隅丸方形を呈する住居址である。全体的にみて，壁高が12cmと低いのは，古墳の調査で，削平されたためである。床は平坦で比較的硬く西壁側に焼土が検出され，炉と考えられるがきわめて小規模のものである。ピットは8個検出されP_1～P_4が主柱穴と考えられるが整然としていない。住居址内の覆土は，少量のロームブロックを含む暗褐色土層の下に少量の炭化物を含む比較的やわらかい褐色土の堆積がみられる。なお住居址内から炭化材が床面に検出されたことから焼失した可能性もある。

遺物（図10－1～3，5～10，図11－11～21） 住居址内から出土した遺物は遺構に伴う土師器と若干の須恵器，弥生式土器が覆土中より出土した。

塚原古墳群出土遺物一覧

番号	種類	法量(cm)（口径×器高×底径）	最大径	器形の特徴	整形法 外面	整形法 内面	色調	焼成	胎土	備考
1	甕	15.8×(8.5)×－		口－「く」の字形にほぼ直線的に外反	口－ヨコナデ 胴－ナデ	口－ヨコナデ 胴－ヘラケズリ	明赤褐	良好	1～2mmの石英・チャート粒を含む	**第10図** 成形－良 黒班有り
2	甕	15.6×(9)×－	肩部	口－外反角度は少なくほぼ直線的に外反 肩部に最大径あり，胴部は膨らまない。	口－ヨコナデ 胴－ヘラケズリ ヘラナデ		橙			口縁下一部を除き全面にススが付着
3	壺	－×(18)×53	胴中位	胴部はほぼ球形に近い	ヘラケズリ	ヘラナデ	浅黄橙	良好	砂粒を含む	成形－良
4	細頸壺	－×15×－	不明	頸部が細長く，口縁部へ向いゆるく外反する	単節撚糸文	ナデ	橙	良好	精緻	頸部に薄い隆帯貼りつけ。全面にススが付着。弥生式土器
5	坩	－×(8.7)×3.8	胴中位	小形坩形土器，口－ゆるく内彎しながら，「く」字形に立ち上がる。胴部球形	ヘラケズリ 頸部にハケ目状整形	粘土貼り付け痕 指頭圧痕	明赤褐	良好	1～2mmの石英・チャート粒等を含む	底部がわずかに上げ底へラケズリが荒く成形不良
6	坩	－×(7)×3.9	胴中位上	胴部最大径が中央より上半で楕円形胴部	ヘラケズリ後ヘラナデ	ナデ	赤褐	良好	1～2mmの石英・チャート粒等を含む	底部がわずかに上げ底。全体にていねいな成形

番号	種類	法量(cm) (口径×器高×底径)	最大径	器形の特徴	整形法 外面	整形法 内面	色調	焼成	胎土	備考
7	坩	15.8×17.6×－	口縁	胴部最大径は中央より下半で楕円形胴部 口－内彎しながら立ち上がる	口－ヨコナデ, ヘラミガキ 胴－ヘラナデ	口－ヨコナデ ヘラミガキ 胴－輪積み痕	橙	良好	精緻	偏平な丸底で，胴部に比べて口縁部が大きい。成形－良
8	坩	11.4×9.9×3	口縁	口－内彎しながら立ち上がり，端部近くでゆるく外反する。胴部最大径中央より上	口－ヨコナデ 胴－ヘラケズリ ヘラナデ	口－ヨコナデ 胴－輪積み痕	橙	良好	石英・長石の細砂粒を含む	頸部内側にヘラケズリ 成形－良
9	坩	12.1×11×3.5	口縁	口－内彎しながら立ちあがる。胴部に比べて口縁が大きく，胴部は偏楕円形	口－ヨコナデ ナデ 胴－ナデ	口－ヨコナデ 胴－ナデ	橙	良好	精緻	口縁と胴部のつなぎ目に棒状工具によるナデ
10	坩	8.5×8.9×2.7	胴中位	口－内彎しながら急角度で立ち上がる。 楕円形胴部	口－ヨコナデ ナデ 胴－ヘラケズリ ヘラナデ	口－ヨコナデ ナデ 胴－輪積み痕	にぶい黄橙	普通	1～2mm石英粒等を含む	口縁と胴部のつなぎ目に棒状工具によるナデ
11	高坏	19.8×14.5×14.5	口縁	口－外反する。口脣部は比較的厚い。 脚はほぼ棒状で裾部は大きく広がる。	口・裾－ヨコナデ，坏・脚・裾部－ヘラナデ，ヘラミガキ	口・裾－ヨコナデ 脚－しぼり痕	赤	良好	1～2mm石英粒等を含む	**第11図** 坏底近くに稜有 成形は荒い
12	高坏	19.9×－×－	口縁	口－直線的に外反する 坏底部との境に稜有	口－ヨコナデ 坏－ナデ	口－ヨコナデ	橙	不良	1～2mm石英粒等を含む	成形は整っているが器面が脆弱になっている。
13	高坏	17.5×－×－	口縁	口－大きく外彎しながら立ち上がる。 坏底部との境に稜有	ヨコナデ ナデ	ヘラミガキ	にぶい橙	良好	精緻	粘土紐の輪が内底に貼り付いている。
14	高坏	18.4×－×－	口縁	口－わずかに外彎 坏－ゆるやかに大きく外反する。	口－ヨコナデ 坏－ヘラミガキ	口－ヨコナデ 坏－ヘラミガキ	淡赤橙	良好	精緻	黒斑有 成形－良
15	高坏	20.9×－×－	口縁	直接的に大きく外反する。口脣部は比較的厚い。	口－ヨコナデ 坏－ヘラミガキ	口－ヨコナデ 坏－ヘラミガキ	赤	良好	精緻	黒斑有 成形－良
16	高坏	－×－×－		坏底部との境に稜有 脚部はエンタシス形			橙	不良	1～2mm砂粒を含む	剝落等器面の荒れが著しい。
17	高坏	－×(10)×－		裾部は内彎しながら広がり，平坦になる部分に稜有，脚部エンタシス形	脚－ヘラケズリ 裾－ヨコナデ， ヘラミガキ	脚－しぼり 裾－ヨコナデ ヘラケズリ	赤橙	良好	1～2mm砂粒を含む	成形－普通
18	高坏	－×(8.6)×12.1		脚部はほぼ直線的広がり。裾部は薄くゆるやかに広がる。	脚－ヘラケズリ 裾－ヘラケズリ ヨコナデ	脚－しぼり 裾－ヘラケズリ ヨコナデ	赤	良好	精緻	脚部は縦方向が整ったヘラケズリにより断面多角形
19	高坏			脚－エンタシス形，最大径中位下		脚－しぼり ヘラケズリ	にぶい橙	良好	精緻	成形－普通
20	高坏			脚－エンタシス形，最大径中位下		脚－しぼり ヘラケズリ	橙		精緻	径5 mm，円孔4ヶ所 器面剝落
21	高坏			脚－エンタシス形，最大径中位下	脚－ヘラミガキ	脚－しぼり ヘラケズリ	にぶい橙	良好	1～3mm砂粒を含む	径9 mm，円孔2ヶ所
22	管玉	文中に記載								

3 土壙（図5・図6・図7）

土壙はいずれも1号墳の後円部西側（1号）と前方部付近（2～6号）に集中して検出された。古墳に関係のある土壙と考えられ，1号土壙より管玉1個が出土した。1号土壙は1.95m×0.86mの長方形を呈し深さは0.53mであり，西壁寄りに出土した管玉（1個図11－22）は碧玉製で暗緑色を呈する。長さ2.5cm，径0.925cm，重量3.8g，形状は正円柱状で穿孔は片面より開孔部から終孔部に一方から穿っているが，最初に穿孔を試みた小穴が径0.156cm，深さ0.12cmほど穿かたれている。これは，最初の穿孔行為が中央をのがしたので改めて開口部を求めたものと考えられる。

No	形　状	規　模 長辺×短辺×深さ（m）	覆　土	備　考
1号土壙	長方形	1.95×0.86×0.53	自然堆積	管玉（図11－22）出土
2号土壙	長方形	2.07×1.05×0.50	〃	
3号土壙	長方形	2.22×1.05×0.50	〃	
4号土壙	長方形	2.57×1.33×0.56	〃	
5号土壙	長方形	1.76×0.81×0.47	〃	
6号土壙	長方形	2.40×1.03×0.50	〃	

第4節　まとめ

本墳の調査は残っていた墳丘と周溝を全掘するという調査方法をとった結果，帆立貝式の前方後円墳を検出することができた。主体部はすでに盗掘にあい，見る影もなかったが，主軸線上に設置された埋葬施設の石棺の痕跡を確認できた。当古墳群が箱式石棺を伴うことは，ルート外の民家の宅地にも確認できるが，霞ヶ浦沿岸にいちじるしく発達した箱式石棺が涸沼川流域にも存在することを確認した。又，新治郡千代田村大塚5号墳（JOT－5）（注2）にその形態が類似しており，石棺の方向が主軸に直交する以外まったく同じで，前方部くびれ部付近に位置することからして，埴輪が古墳に埋設された全盛期をすぎたいわゆる変則的な後期古墳と考えられる。又土壙は土壙墓群の性格が強く，古墳の副葬品と同じ管玉の出土により，当地方の墓制の一形態を示すものとして注目される。調査中，和泉期の住居址が墳丘裾部附近より検出し，5世期ごろからの当地方の繁栄がうかがわれる。

第5節　2号墳及び周辺遺構

1　2号墳（図8－1・図8－2）

墳丘　本墳は，1号墳の北約280mの地点に位置する古墳で，涸沼川の微高地に築造されている。

近年，砂利採取が河川敷より微高地まで拡張され，本墳の裾部まで開発がのび，採取後他所から土砂を運搬し土地を改良して耕地化されていた。墳丘の最高点は18.38mで，ほぼ中心にあたる。等高線は17.4mまでの5本までが円形を呈するが，以下は流れる。盛土の状況は，東西トレンチの北壁で観察するとローム土層の上に旧表土層が平均50cm堆積し，その上にロームブロックと砂利を含む褐色土層，つづいてしまり粘性がある褐色土層が盛られており，その上に明褐色土層が墳丘を構成している。墳頂部は，全体的にしまりがなく攪乱がみられる。発掘調査の結果，周溝は確認できなかったが，直径約24m，高さ約3mの円墳と推定される。

埋葬施設　主体部を検出するため各トレンチを設定し発掘したが検出することが出来なかった。

墳頂部下は近世の信仰の対象物となっている「つちのえ」の石碑が建立されており,これは棺材を利用しており　第３層（旧表土）あたりに石棺が存在したのではないかと推定される。

遺物　本墳に関係する遺物は墳頂部より石棺材を利用した石碑が発見されたのみである。

２　１号住居址（図９）

遺構　本住居址は，２号墳の東西トレンチをさらに周溝確認のため延長し調査している時に確認されたものである。主軸方向はＮ－23°－Ｗで１辺約4.5m前後の不整方形を呈している。壁高は約10cmで，削平されている。東・南壁は土壙により掘られており存在しない。焼土は東壁側の床面に小範囲に確認できるほどである。床は平坦であるが粘性があり，しまりがある。３個のピットは浅いが主柱穴であろう。住居址内の覆土は，部分的に炭化物を含む褐色土の堆積がみられる。

遺物　住居址内から出土した遺物は壺形の弥生式土器である。他に土師器片が極少量出土した。（図10－４）

３　土壙（図９）

土壙は１号住居址の西壁を切り込んだ状態で確認された。南北約3.2m，東西約3.5mの不定形状を呈する。壁面はほぼ垂直に切り込んでいる。床面はやや傾斜しており，土壙内は粘性のある黒褐色土の上に暗褐色土が自然堆積している。出土遺物は検出されず，時期，用途不明の遺構である。

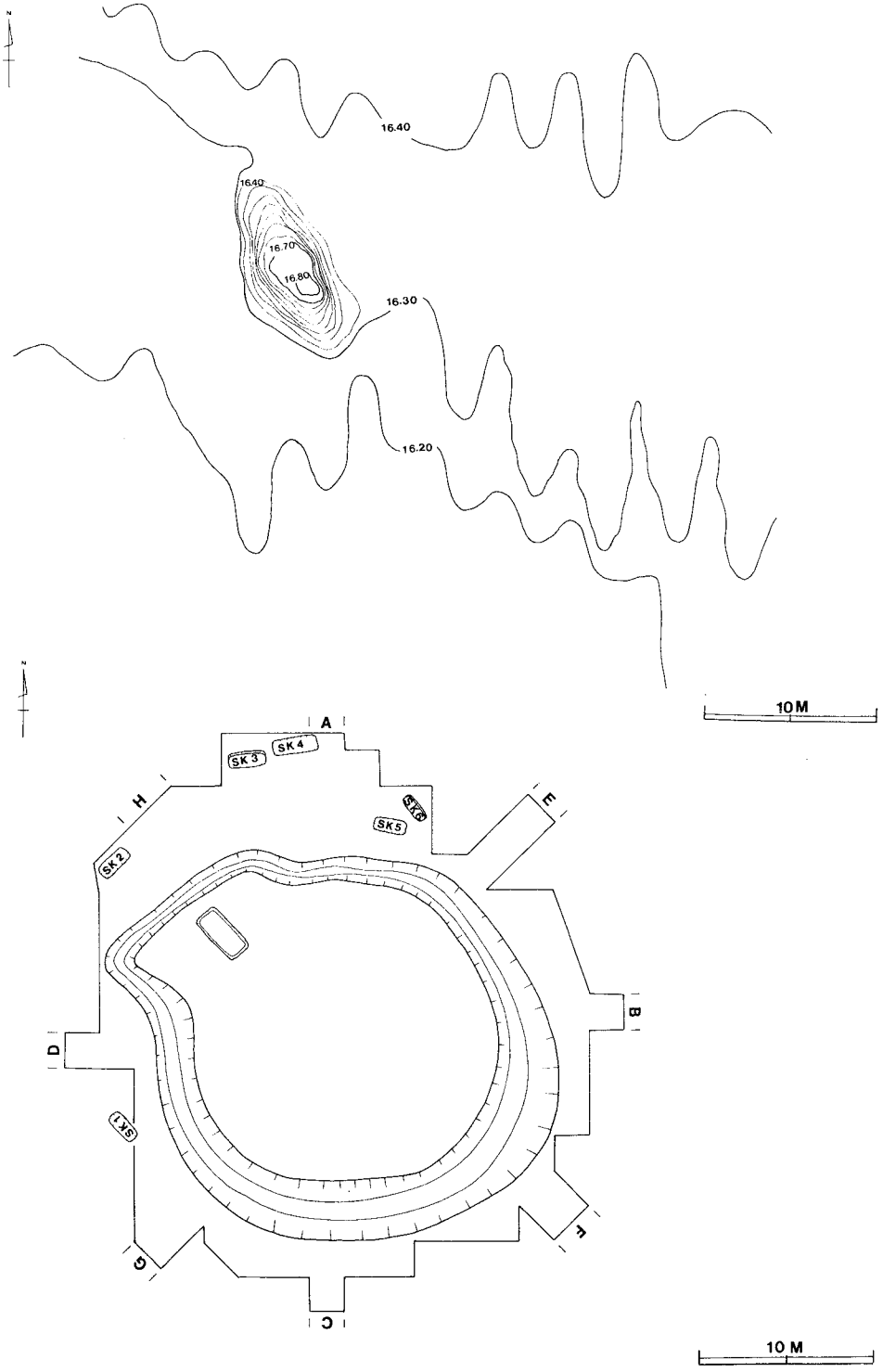
第６節　まとめ

今回の調査は常磐自動車道建設に伴い塚原古墳の一部（２基）が調査の対象になり，古墳とともに住居址，土壙を検出することができた。涸沼川流域においての調査は，わずかに左岸の内原町ドンドン塚古墳（注３）だけにすぎず，解明されない問題が多く，右岸の茨城町下土師・木部・飯沼と続く古墳群が，当塚原まで連続して古墳群を形成していることは，古墳時代後期，この流域の栄えたことを物語るものであり，今回の調査では箱式石棺埋葬形態の状況を把握することができた。

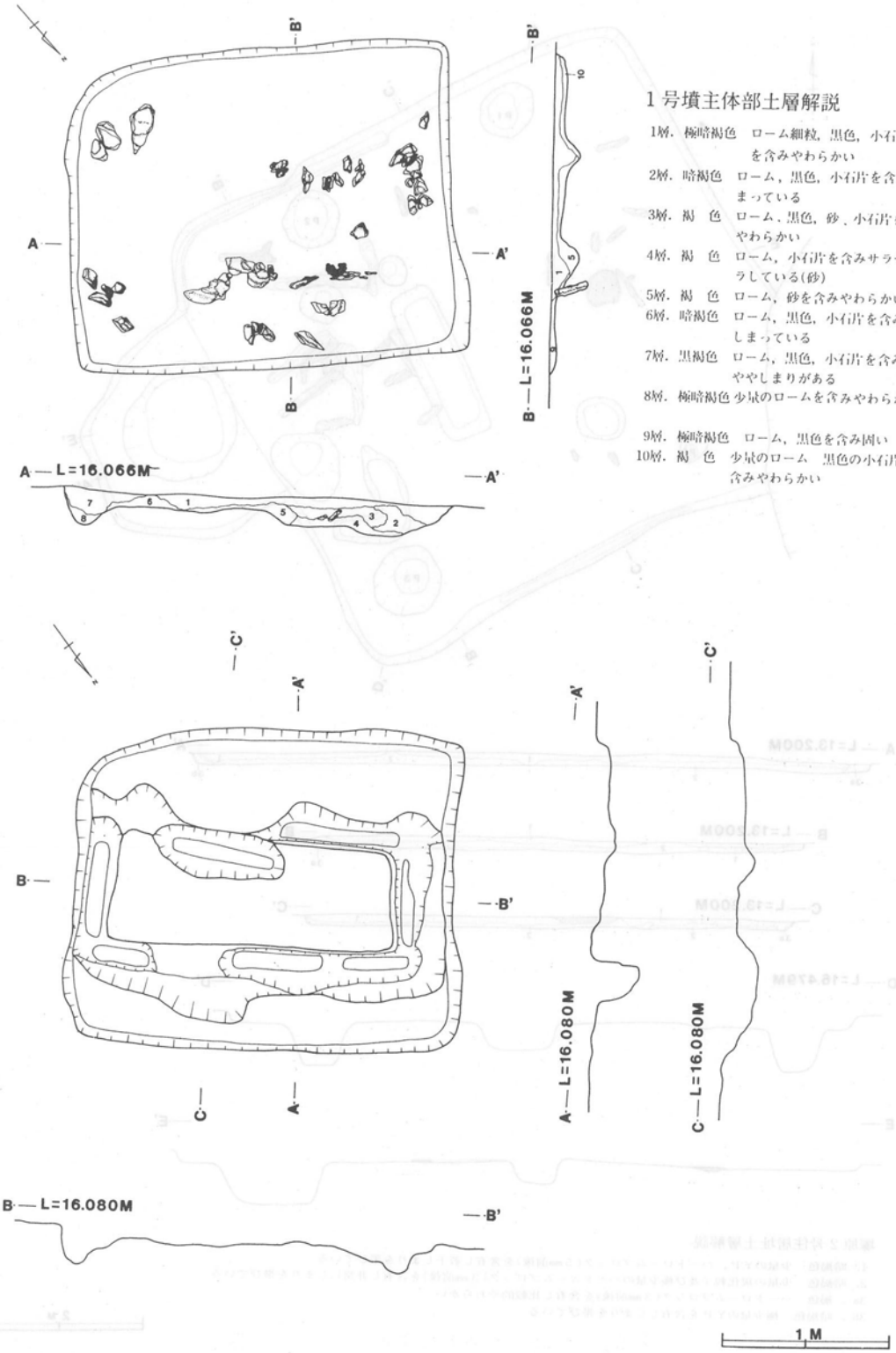
（注１）茨城県教育委員会『茨城県遺跡地図』昭和52年

（注２）茨城県教育財団『常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』昭和55年

（注３）大森信英他「茨城県東茨城郡茨城町ドンドン塚古墳発掘調査報告」『上代文化』37　昭和42年



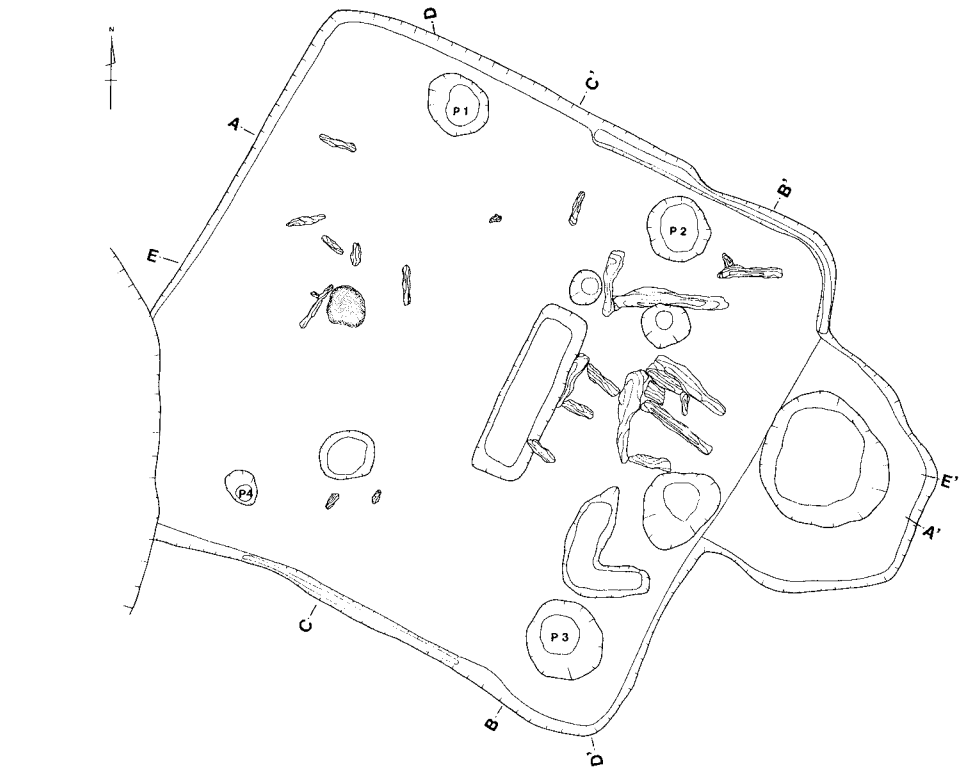
第 2図　塚原 1号墳全体測量・トレンチ配置図

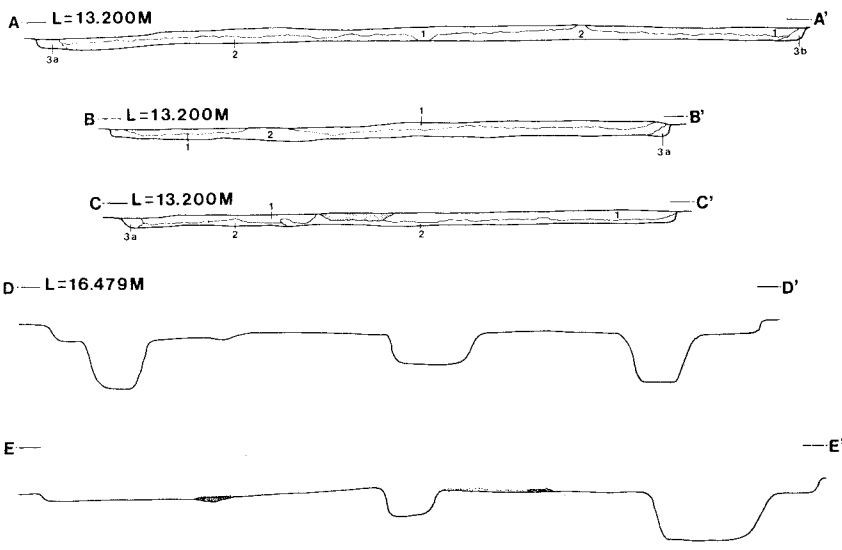


1号墳主体部土層解説

1層. 極暗褐色　ローム細粒，黒色，小石片を含みやわらかい
2層. 暗褐色　ローム，黒色，小石片を含みしまっている
3層. 褐　色　ローム，黒色，砂，小石片を含みやわらかい
4層. 褐　色　ローム，小石片を含みサラサラしている(砂)
5層. 褐　色　ローム，砂を含みやわらかい
6層. 暗褐色　ローム，黒色，小石片を含みしまっている
7層. 黒褐色　ローム，黒色，小石片を含みややしまりがある
8層. 極暗褐色 少量のロームを含みやわらかい
9層. 極暗褐色　ローム，黒色を含み固い
10層. 褐　色　少量のローム　黒色の小石片を含みやわらかい

第3図　1号墳主体部



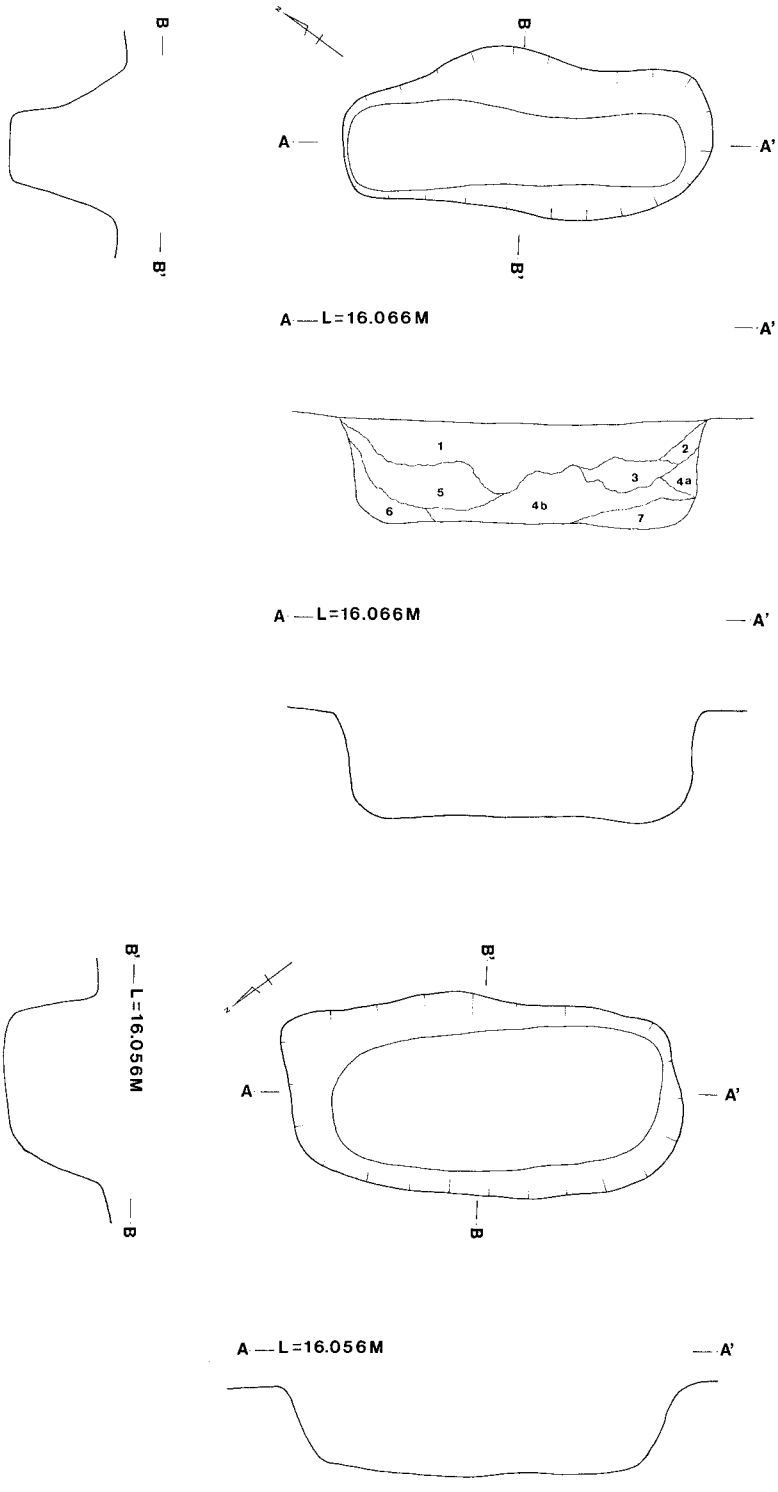


塚原２号住居址土層解説

1．暗褐色　少量のＹＰ、ハードローム・ブロック（５mm前後）を含有し若干しまりを帯びている
2．暗褐色　少量の炭化粒子及び極少量のハードローム・ブロック（３mm前後）を含有し非常にしまりを帯びている
3a．褐色　ハードローム・ブロック（３mm前後）を含有し比較的やわらかい
3b．暗褐色　極少量のＹＰを含有ししまりを帯びている

2 M

第４図　第２号住居址



1号土壙土層解説

1層. 黒　極少量のＹＰを含有し砂質を帯びしりを帯びている

2層. 黒　少量のローム・ブロック（5cm前後）を有し比較的やわらかい

3層. 黒　極少量のＹＰを含有し比較的やわらい

4a 層. 褐色　ローム粒を含有した砂質の土層ある

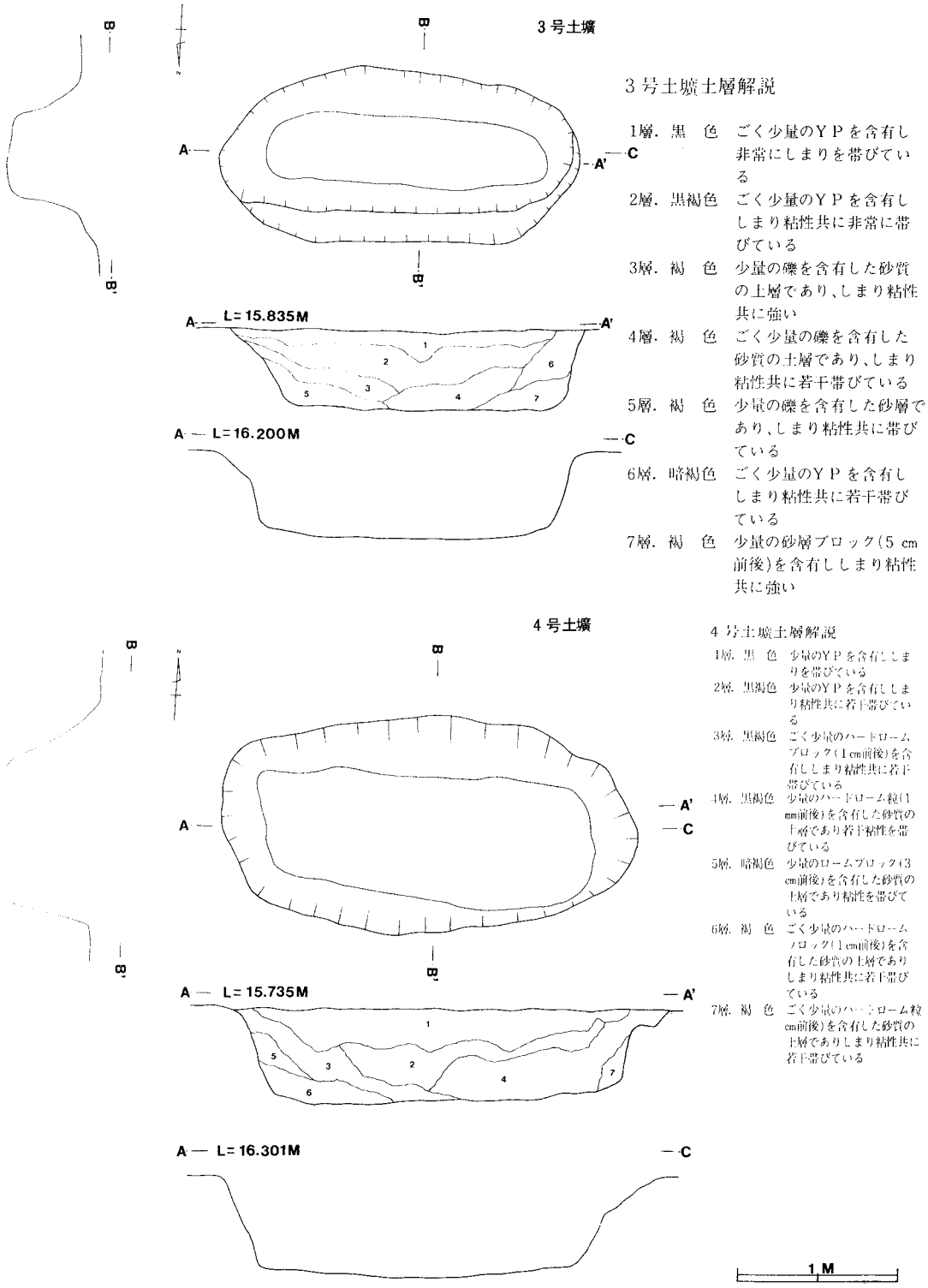
4b 層. 黒　少量のローム・ブロック（5mm～5cを含有した砂質の土層である

5層. 黒褐色　少量のＹＰローム粒（3mm前後）含有した砂質の土層である

6層. 褐色　少量のローム粒（1～3mm）を含有た砂質の土層である

7層. 暗褐色　極少量のローム粒（1～3mm）を有した砂質の土層である

第5図第1号土壙・第2号土壙



3号土壙土層解説

1層．黒　色　ごく少量のＹＰを含有し非常にしまりを帯びている

2層．黒褐色　ごく少量のＹＰを含有ししまり粘性共に非常に帯びている

3層．褐　色　少量の礫を含有した砂質の土層であり、しまり粘性共に強い

4層．褐　色　ごく少量の礫を含有した砂質の土層であり、しまり粘性共に若干帯びている

5層．褐　色　少量の礫を含有した砂層であり、しまり粘性共に帯びている

6層．暗褐色　ごく少量のＹＰを含有ししまり粘性共に若干帯びている

7層．褐　色　少量の砂層ブロック(5 cm前後)を含有ししまり粘性共に強い

4号土壙土層解説

1層．黒　色　少量のＹＰを含有ししまりを帯びている

2層．黒褐色　少量のＹＰを含有ししまり粘性共に若干帯びている

3層．黒褐色　ごく少量のハードローム・ブロック(1cm前後)を含有ししまり粘性共に若干帯びている

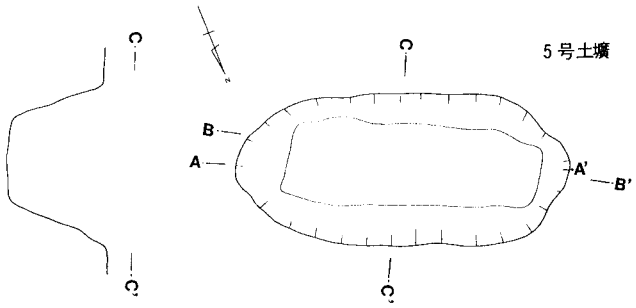
4層．黒褐色　少量のハードローム粒(1mm前後)を含有した砂質の土層であり若干粘性を帯びている

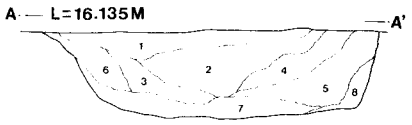
5層．暗褐色　少量のロームブロック(3cm前後)を含有した砂質の土層であり粘性を帯びている

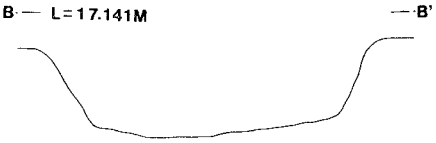
6層．褐　色　ごく少量のハードローム・ブロック(1cm前後)を含有した砂質の土層でありしまり粘性共に若干帯びている

7層．褐　色　ごく少量のハードローム粒cm前後)を含有した砂質の土層でありしまり粘性共に若干帯びている

第６図　第３号土壙・第４号土壙

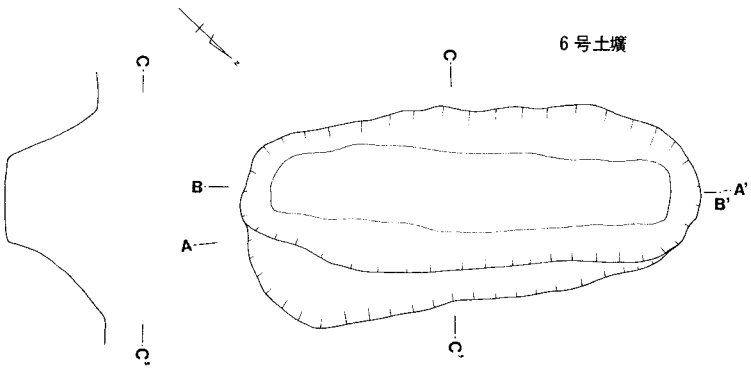


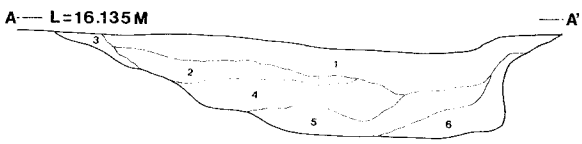


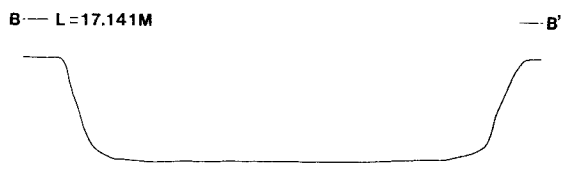


5号土壙土層解説

1層.	黒　色	少量のロームブロックを含有し若干しまりを帯びている
2層.	黒褐色	少量のＹＰを含有し，しまり粘性性共に帯びている
3層.	黒褐色	ごく少量のハードロームブロック（１cm前後）を含有し、しまり粘性に帯びている
4層.	黒褐色	少量のＹＰを含有し、しまり粘性共に若干帯びている
5層.	黒褐色	少量のハードローム粒（３cm前後）を含有し若干しまりを帯びている
6層.	暗褐色	少量のハードロームブロック（2cm前後）を含有し若干しまりを帯びている。
7層.	褐　色	比較的多量のハードロームブロック（２cm前後）を含有ししまり粘性共に非常に帯びている
8層.	暗褐色	少量のハードロームブロック（1cm前後）を含有し、比較的やわらかい

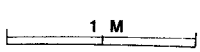




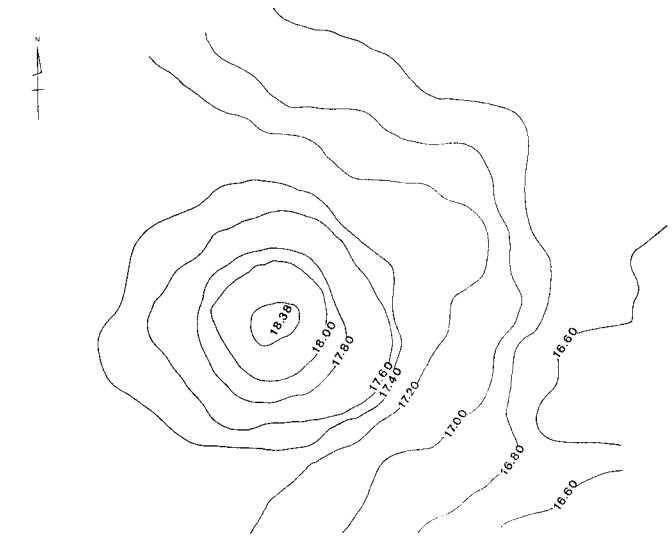


6号土壙土層解説

1層.	黒　色	少量のＹＰを含有し、しまりを帯びている
2層.	黒褐色	少量のＹＰ，ローム粒を含有ししまりを帯びている
3層.	褐　色	少量のローム粒を含有し若干しまりを帯びている
4層.	黒　色	ごく少量のＹＰを含有し、しまり粘性を帯びている
5層.	褐暗褐色	少量のローム粒，ＹＰを含有ししまりを帯びている
6層.	暗褐色	少量のロームブロックを含有ししまり粘性若干帯びている

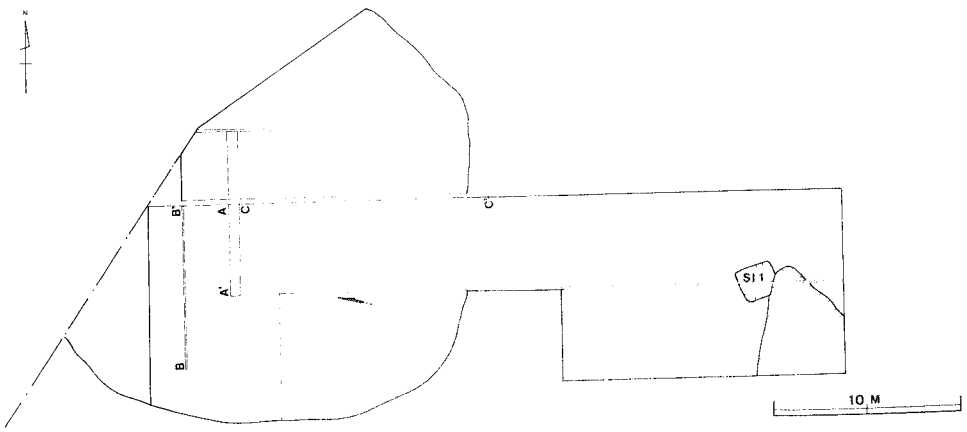


第７図　第５号壙・第６号壙



塚原古墳２号墳 Ｃ－Ｃ′トレンチ
北壁土層解説

1′層，2′層　黒　色　締りなく撹乱穴と
と思われる
2層．明褐色　砂，砂利が全体に含まれている
3層．黒褐色　締り粘性があり，ローム・ブロック茶褐色土のブロックが多量に含まれている
3′層．褐　色　締り粘性あり，微量の礫を含みローム・ブロック，ごく少少量の黒色土を含む
3″層．褐　色　締り粘性なし（表土層と思われる）
4層．暗褐色　締り粘性あり，ローム・ブロックが集中的にある
5層　褐　色　締り粘性あり，ローム・ブロック砂利を多量に含み２層と変化なし
6層．黒　色　締り粘性あり（旧表土）
7層．明褐色　ローム層であるが部分的に砂利が多量に含まれている



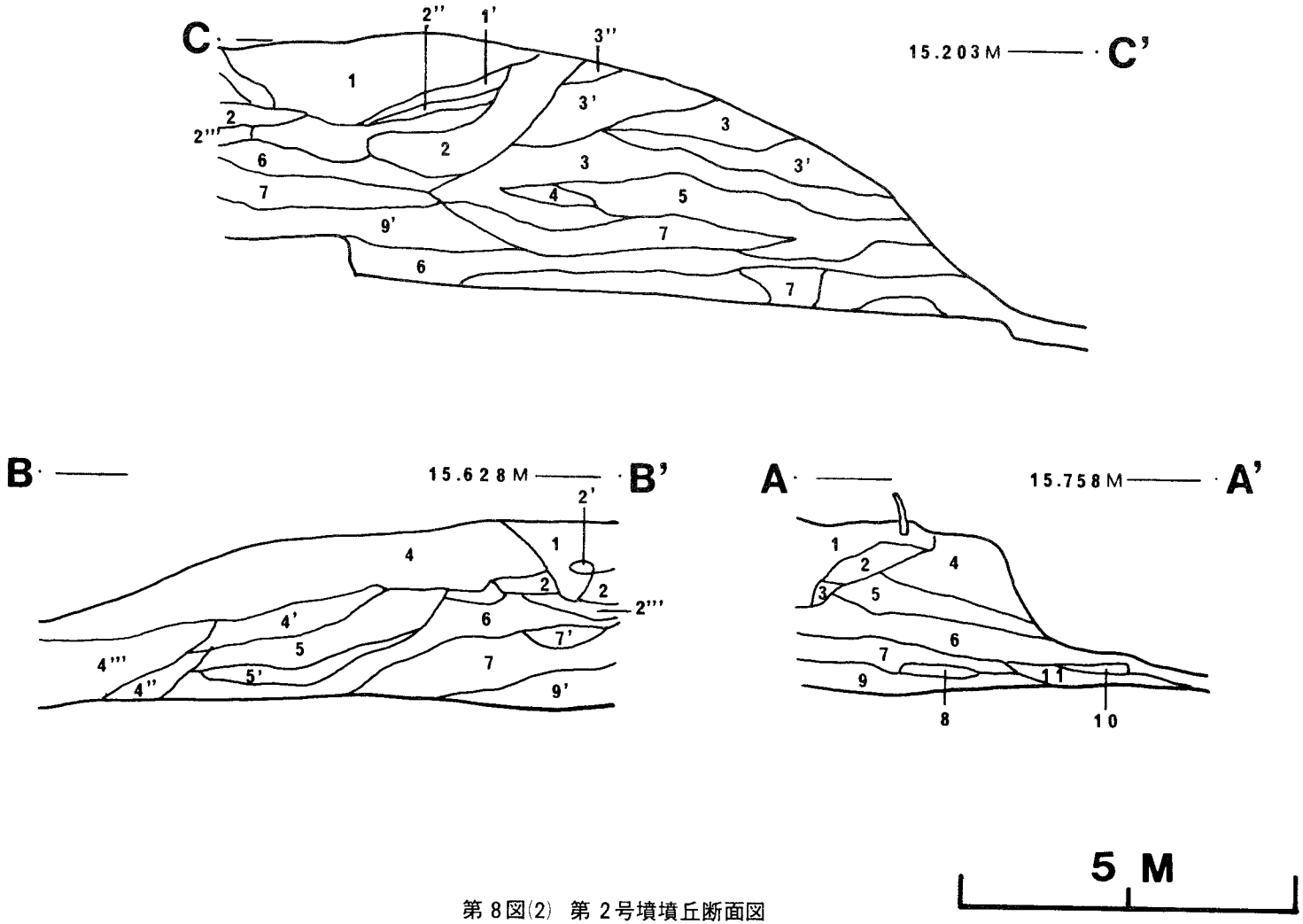
塚原２号墳Ａ－Ａ′トレンチ東壁土層解説

1層．暗褐色　（締り粘性あり）本墳主体部と思われる
2層．明褐色　砂，砂利が全体に含まれている
3層．褐　色　締り粘性あり，部分的に小ローム含む
4層．褐　色　締り粘性あり，部分的に砂利含む
5層．褐　色　締り粘性あり，全体的にローム・ブロック，黒色ブロック混り
6層．暗褐色　締り粘性あり，ローム・ブロック，黒色ブロックが多量に含まれている
7層．褐　色　締り粘性あり，ローム・ブロック，ローム粒子黒色土含む
8層．暗褐色　褐色土，砂ローム・ブロック含む
9層．極暗褐色　大きいローム・ブロック，黒色土多量に含む
10層．明褐色　２層と同様であるが砂利含まず
11層．褐　色　ローム粒子，ローム・ブロック含む

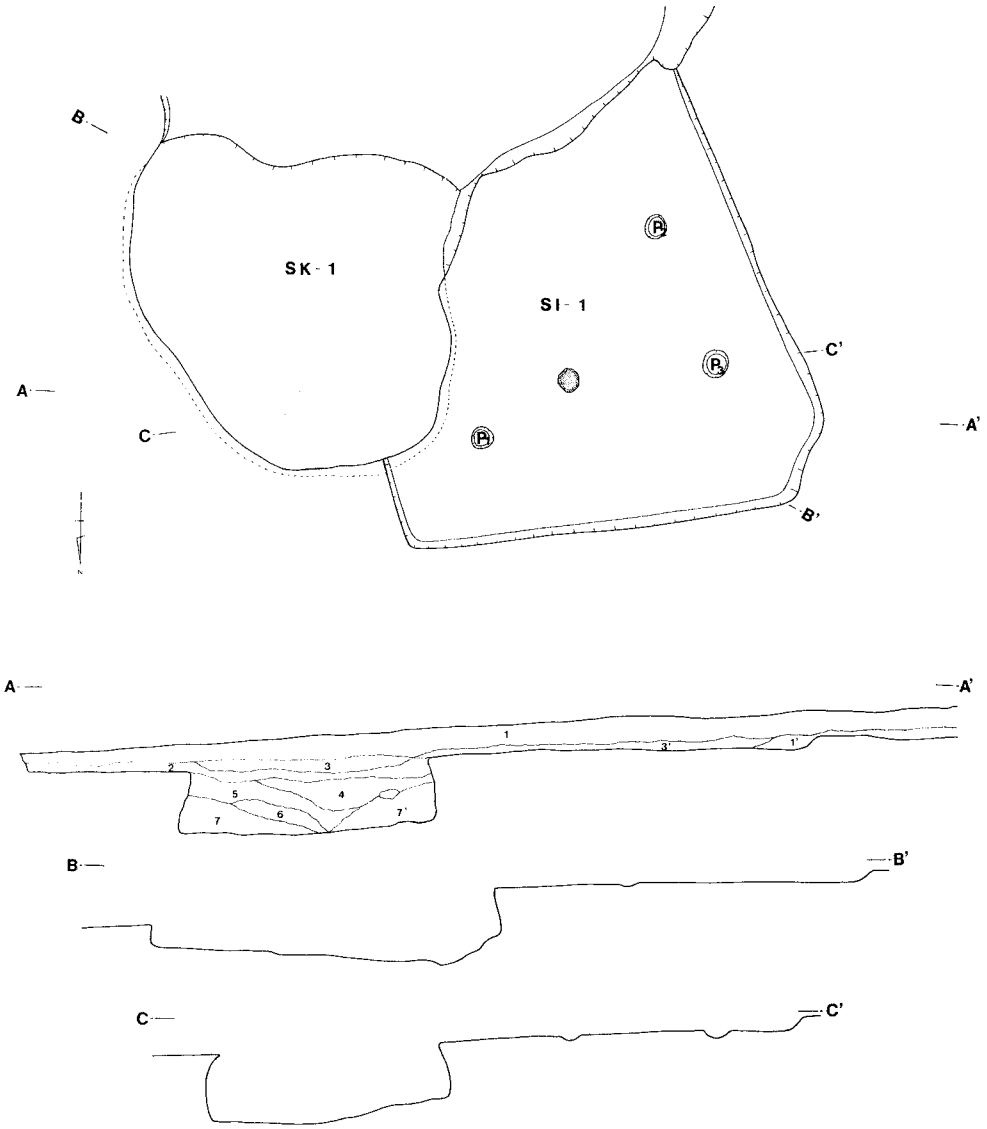
塚原２号墳Ｂ－Ｂ′トレンチ西壁土層解説

1層．　盗掘穴
2′層．褐　色　少量のローム・ブロック，砂利混り締り粘性あり
2″層．褐　色　砂混りのローム・ブロックあり，締り粘性あり
2‴層．暗褐色　少量の砂，砂利，小ローム・ブロック混り，締り粘性あり
4層．褐　色　締り粘性あり，部分的に砂利含む
4′層．極暗褐色　砂利，小ローム・ブロック混り締り粘性あり
4″層．暗褐色　4′と変化はないが砂利が少ない締り粘性あり
4‴層．褐　色　砂利，部分的に礫混り，粘性締りなし（全体的に砂利が多く部分的にローム・ブロック混り）
5層．褐　色　締り粘性あり，ローム・ブロック，砂利を多量に含み２層と変化なし
5′層．明褐色　砂，小ローム・ブロック混り（部分的に）締り粘性あり
6層．黒　色　締り粘性あり（旧表土）
7層．明褐色　ローム層であるが部分的に砂利が多量に含まれている
7′層．暗褐色　小ローム・ブロック，黒色ブロック混り，締り粘性あり
9′層褐　色　多量のローム・ブロック，黒色土混り，締り粘性あり

第８図(1)　塚原２号墳全体測量・トレンチ配置図



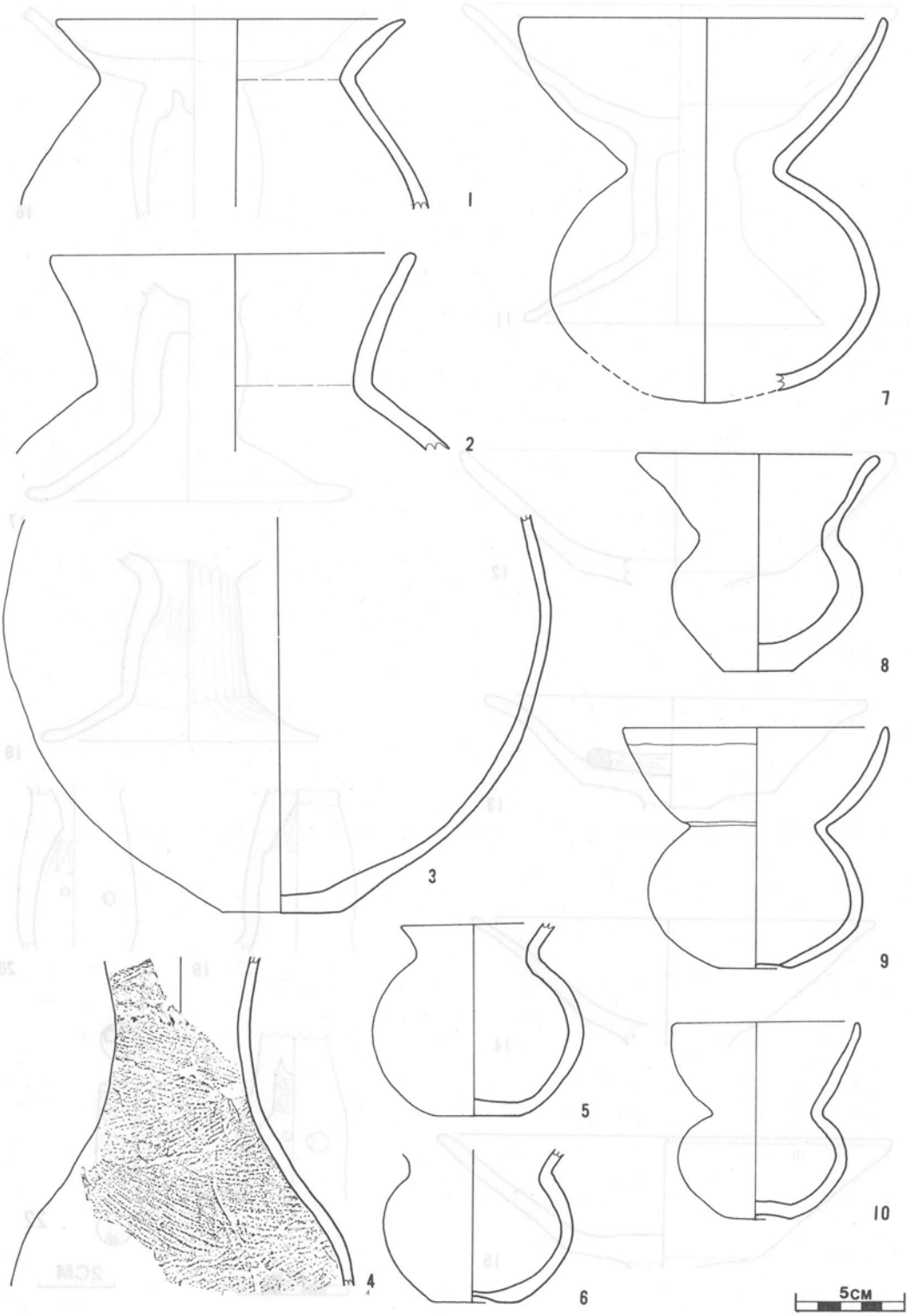
第 8図(2)　第 2号墳墳丘断面図



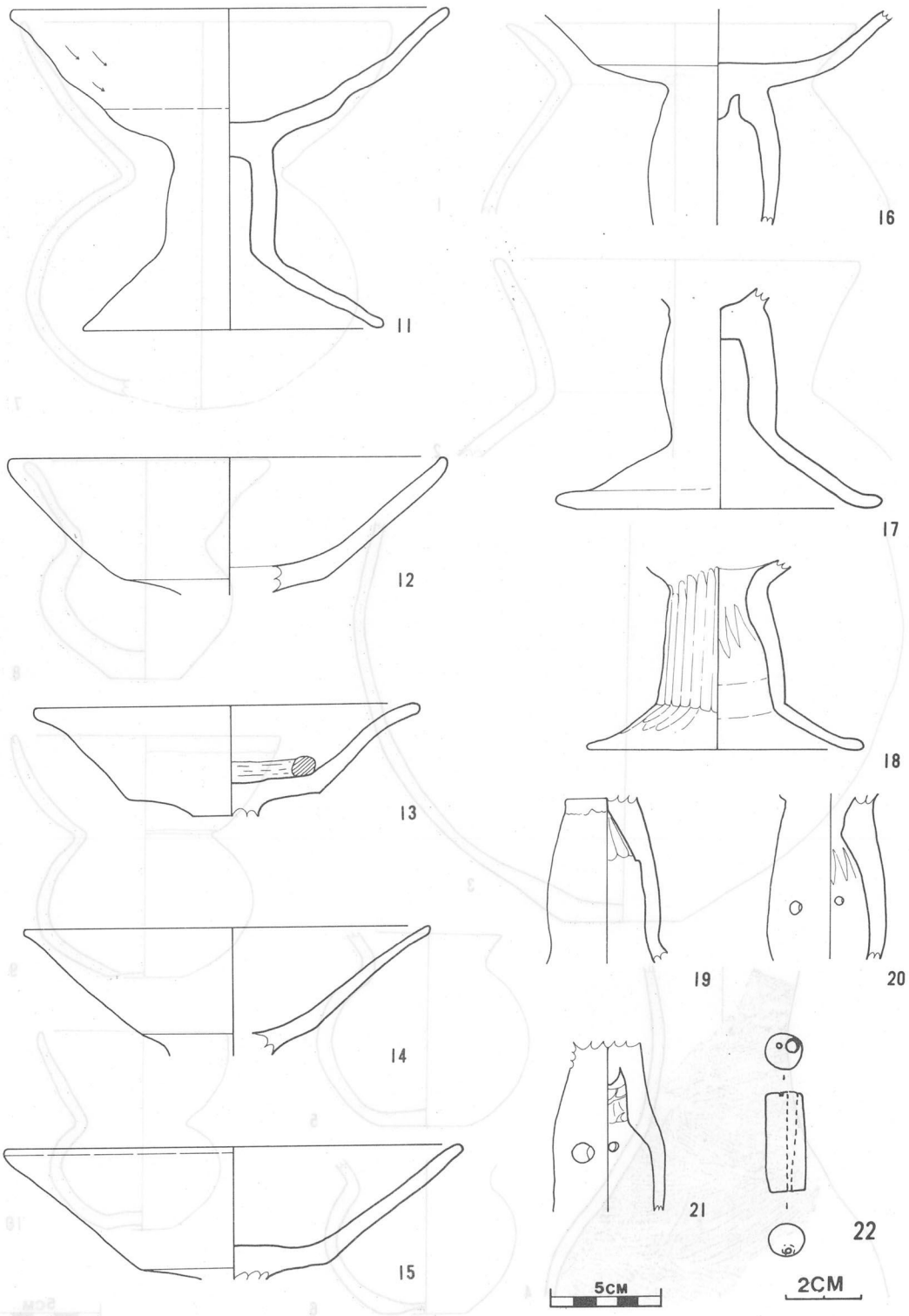
1号住居址・1号土壙土層解説

1. 極暗褐色　粘性，しまりあり，表土層
1' 褐　色　粘性，しまりあり，黒色ブロック混り
2. 砂利層　砂利，砂を含み褐色
3. 暗褐色　粘性，しまりあり，全体的にロームブロック含む
3' 極暗褐色 粘性，しまりあり，部分的に粒子(木炭)含む
4. 暗褐色　粘性，しまりあり，全体的にローム粒子含む
5. 暗褐色　粘性，しまりあり，部分的にローム粒子含む
6. 褐　色　粘性，しまりあり，少量の砂利含みローム粒子も見られる
7. 褐　色　粘性，しまりあり
7' 黒褐色　粘性，しまりあり　} ローム粒子含み、7は壁面にロームブロック混り

第9図　第1号住居址・第1号土壙



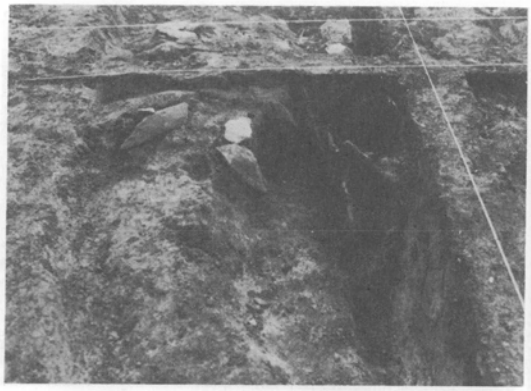
第10図　住居址・土壙内出土遺物実測図



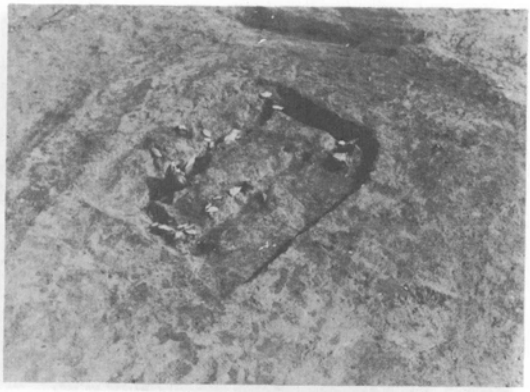
第11図　住居址・土壙内出土遺物実測図

1　塚原1号墳全景

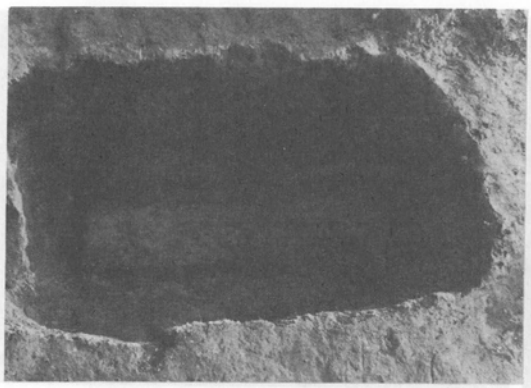
2　1号墳発掘風景



3　1号墳主体部



4　1号墳主体部



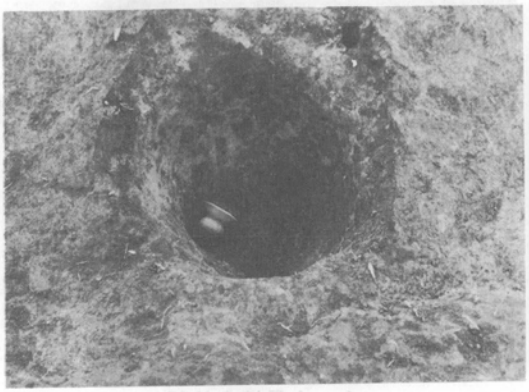
5　1号墳主体部墓壙

6　1号墳全景(調査後)

写1

1　塚原２号住居址

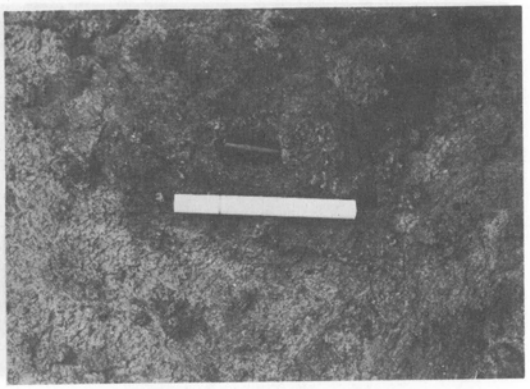
2　塚原１号墳・２号住居址関連状態



3　塚原１号土壙Ｐ

塚原１号土壙

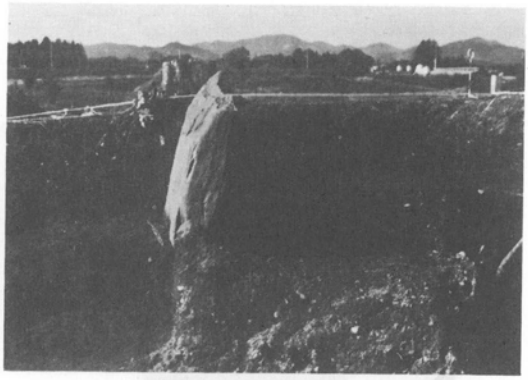
5　塚原１号土壙



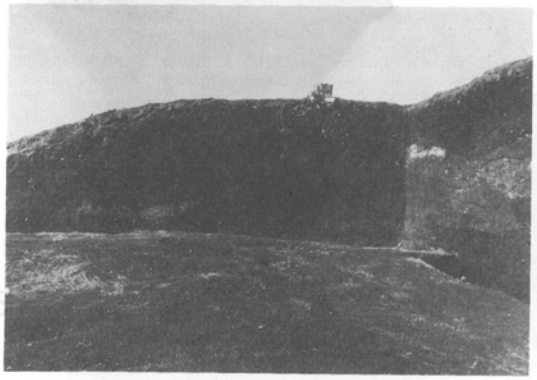
6　塚原１号土壙出土管玉

写２

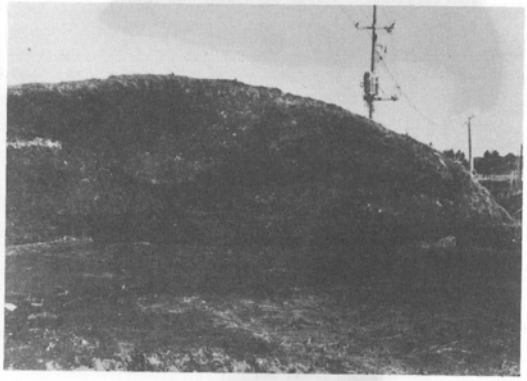
1　塚原２号墳



2　塚原２号墳墳頂部出土石碑

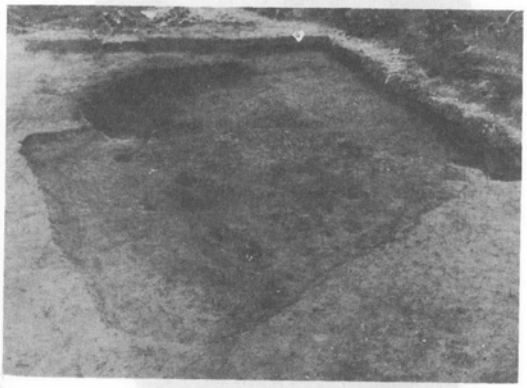


3　塚原２号墳墳丘土層断面
（A－A′）



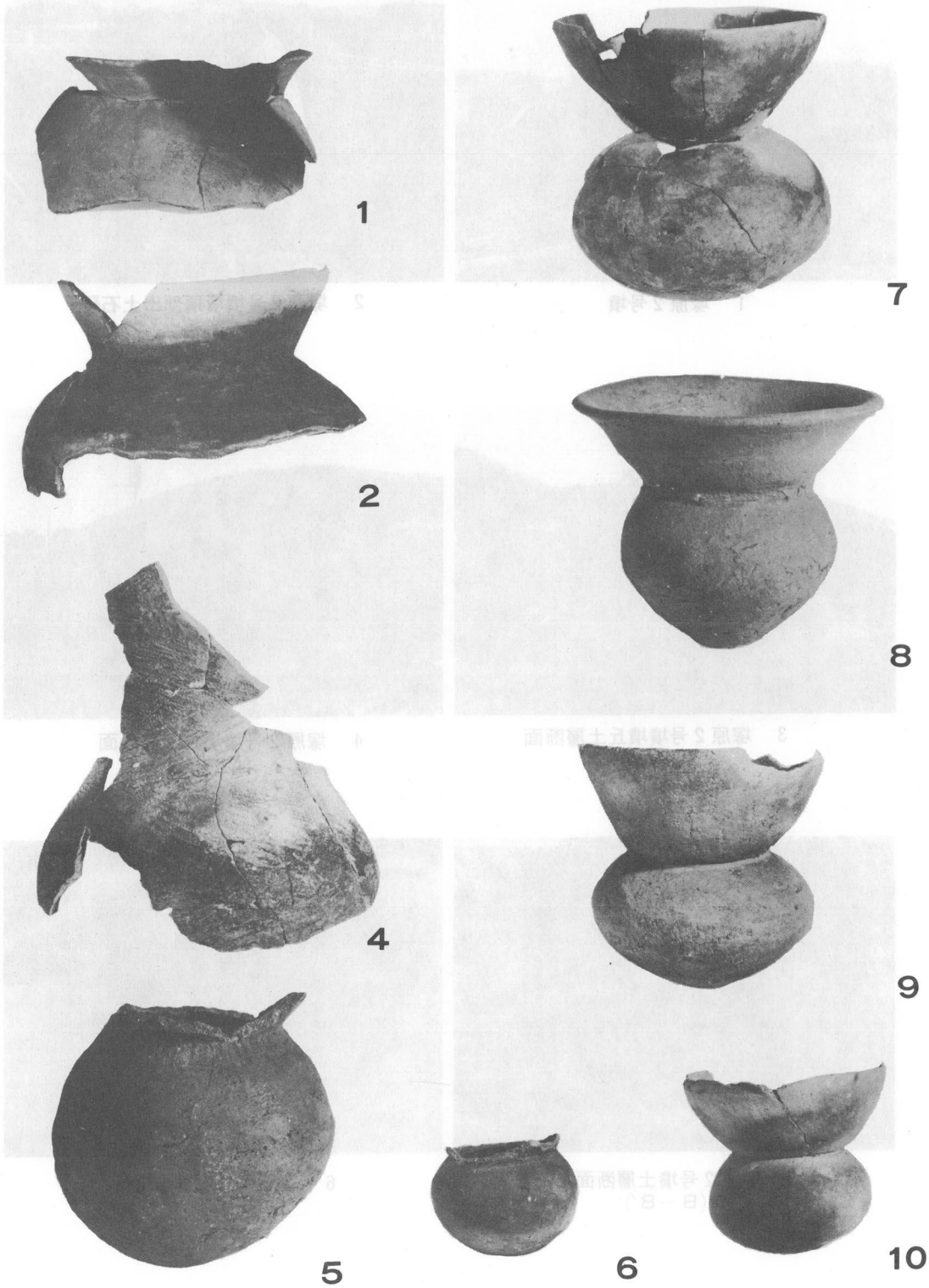
4　塚原２号墳墳丘土層断面
（C－C′）

5　塚原２号墳土層断面（部分）
（B－B′）



6　塚原１号住居址全景

写３

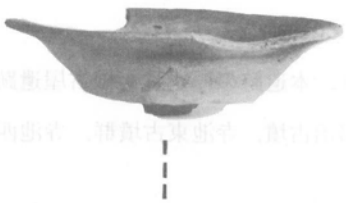


写 4　　塚原 2号住居址・土壙出土遺物

11

16

17



18

19

13

20

15

21

22

写 5　塚原 2号住居址・土壙出土遺物

第4章　湿　気　遺　跡

第1節　遺跡の立地と環境

1　地理的環境

湿気遺跡は，茨城県東茨城郡内原町大字鯉淵三ノ割2780番地ほかに所在し，調査対象面積は4,800㎡である。内原町の大部分は東茨城台地と呼ばれる標高約31～35mの平坦な洪積台地で，涸沼川支流の浸食により，樹枝状に沖積低地が形成されている。北部には，鶏足山塊からのびる丘陵がせまってきている。遺跡は，湿気川と涸沼前川にはさまれた台地の湿気川よりの縁辺部にあり，北東側に標高約28～33mのゆるやかな傾斜を示し，現況は畑地となっている。

2　歴史的環境

沖積低地に面する台地縁辺部には，古くから集落があり，本遺跡の周辺にも根古屋遺跡（縄文時代），滝淵遺跡（弥生時代），中台遺跡（古墳時代），平五郎治古墳，寺池東古墳群，寺池西古墳群，宿上の台古墳群など多くの遺跡が存在している。

本遺跡の南側には，中世の城館跡である鯉淵城跡があり，その一角に国指定重要文化財中崎家住宅がある。経塚の東を南北に通る道路は，古くからの街道で，鯉淵城大手門に通じていたという。現在の旧鯉淵村には寺院がないが，本遺跡の西方に「万蔵寺」という字が残っていて，寺院のあったことがうかがえる。また，江戸時代にはケガ観音で知られる正法山持福院観音寺（図1—12）があった。

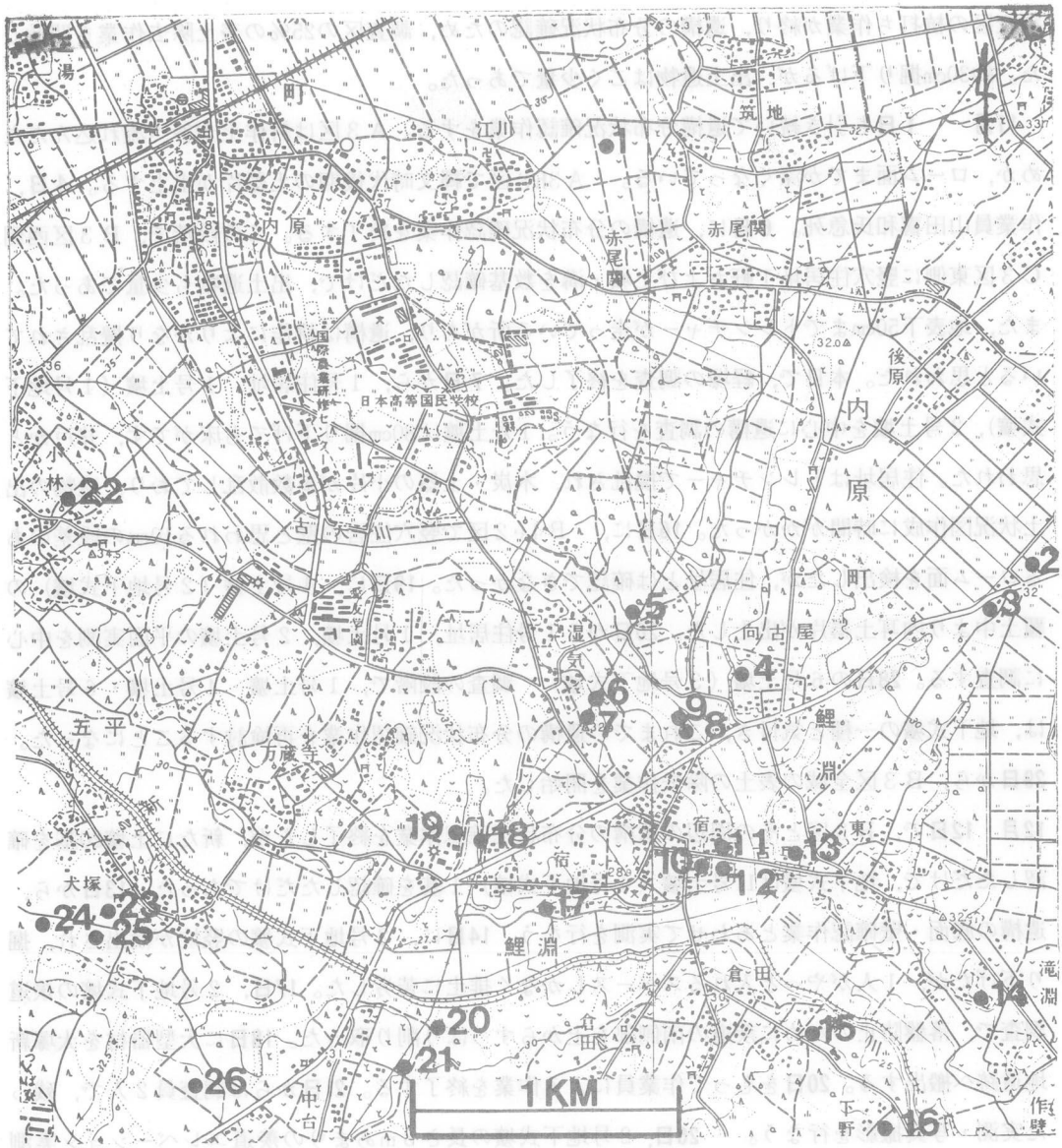
第2節　調査経過

昭和54年10月　**15日**に草刈り作業，器材の調達をする。**22日**に分布調査をする。縄文時代中期の土器片と須恵器の小片を表面採集した。経塚は最近バックホーを使った植木の抜根が行なわれ，経石が散乱していた。遺跡の全景写真を撮る。**23日**に，常磐自動車道センター杭（STA—230＋80）を基準杭として真北を座標軸にし，40m四方の大調査区を設定，調査区の杭打ち作業を開始する。調査中訪れた見学者から「子宝に恵まれない婦人が文字の書かれた石を持っているとご利益がある」とか「経塚は，子宝に恵まれなかった大家の婦人が作った」，「耕作でじゃまになった石を動かした」，「宝さがしのため穴を掘った」，「調査区域の東側の畑に陥没する所がある」などの情報を得た。**26日**から，経塚の石の出土状況の調査，桑の抜根作業を中心に行なう。**30日**に

調査区の杭打ち作業が終り，遺構の分布状況確認のため，調査区の25％の表土除去作業を開始した。約30cm掘り下げるが，出土遺物はごく少量であった。

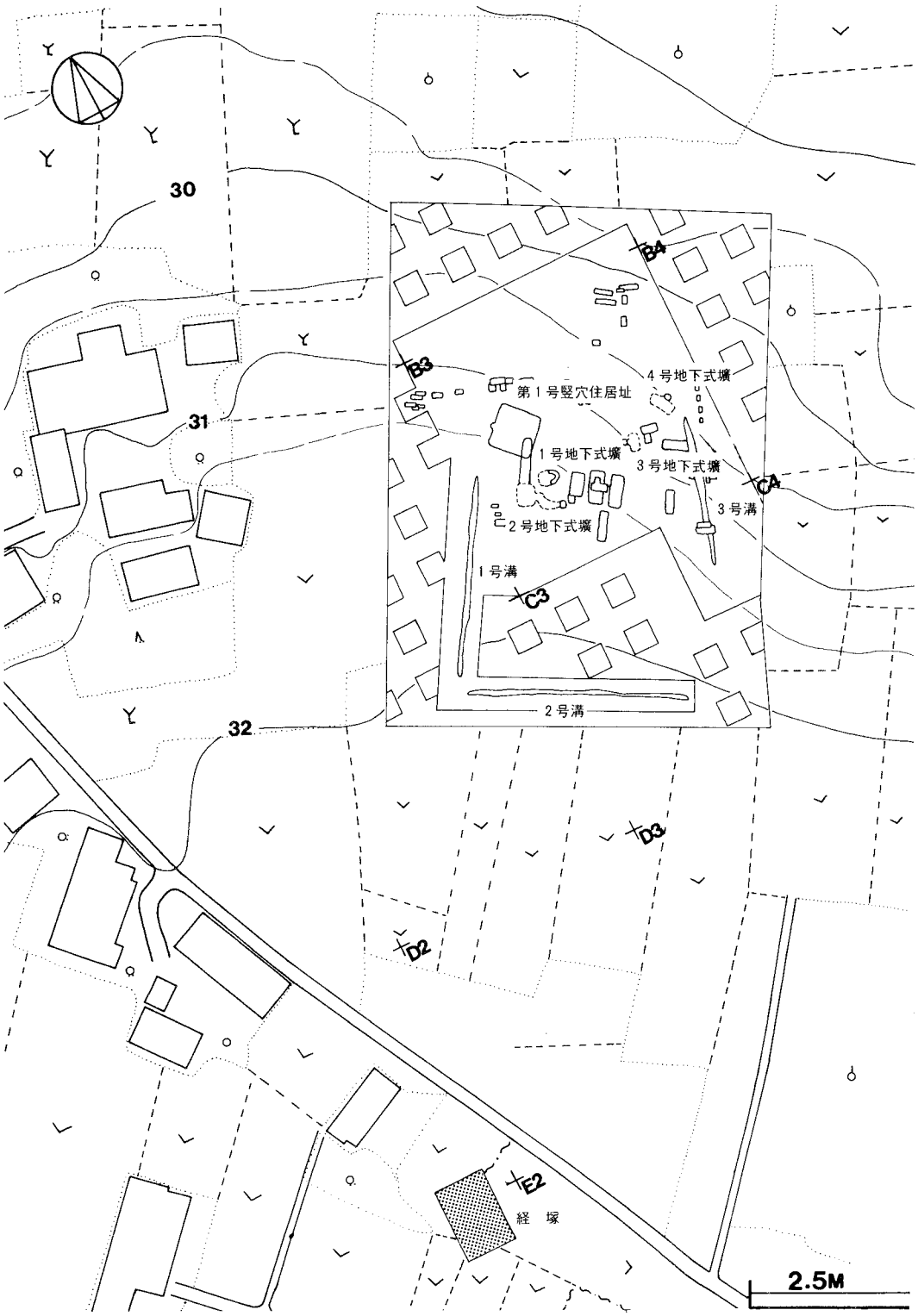
11月　1日も引き続いて遺構分布状況確認作業をする。Ａ３区は耕作土が谷へ流れ込んだためか，ローム面までが深くなっている。　Ａ3h８区で縄文時代後期の土器片が出土する。**4日**，作業員山田喜和氏急死。**6日**に，遺構の分布状況確認作業を終了する。この段階で，Ｂ３区西側，Ｃ３区東側に竪穴住居址１軒および土壙・溝を数基確認しただけで，出土遺物も少量であった。また，地表下50cmまでトレンチャーが走っている所があり，遺構は耕作によりかなり攪乱されていると思われた。本日で，経塚の調査を終了した。**7日**から，１号住居址，１号土壙（１号地下式壙），２号土壙を中心に遺構の調査を行なう。１号土壙は80cm掘り下げても床がでず，井戸かと思われた。住居址はトレンチャーで攪乱され，木炭・土器の小片が多数散乱しており，遺物の出土状況図作成に時間がかかった。**16日**に，　Ｂ４ｃ２区で竪穴住居の壁と思われる10cmの段差のあるローム面を検出したが，住居址とは確認できなかった。**19日**に，４号土壙（２号地下式壙）の覆土中より内耳土器片が出土した。**20日**から１号住居址，１号土壙，２号土壙の平面実測を中心に調査する。**28日**の６号土壙（３号地下式壙）　調査の段階で，１号土壙・４号土壙・６号土壙は，地下式壙の一種と気付き，これまでの遺構の分布状況確認作業を再検討することになった。**29日**から，Ｂ３区全域の表土の除去作業を開始した。

12月　12日で，Ｂ３区とその周辺の遺構の分布状況確認作業を終了したが，新たに土壙20基を確認しただけで，地下式壙は11号土壙（４号地下式壙）１基を確認しただけであった。**13日**から，遺構の底面・壁確認作業とあわせて実測を行なう。**14日**に，２号地下式壙の竪坑が検出され，掘り下げたが，１人がやっと入れるスペースしかなく排土に苦労した。**17日**，２号地下式壙の羨道調査で，落盤防止のために羨道の南側部を上からすっぽり削り取った。**18日**に大型器材を大塚新地遺跡へ搬出する。**20日**をもって作業員による作業を終了する。**21日**からは調査員２人で，残った実測・写真撮影を行なう。　**26日**，２号地下式壙の長さ３ｍあまりの羨道エレベーション実測は，中に水糸を張って行なわれた。作業長であった村上慈朗氏来訪，１日手伝ってもらう。**27日**に，２号地下式壙の底面平面実測のため，水糸で１辺50cmのメッシュを張った。底面がかなりかたく，くぎを打ち込むのに金ヅチを使う。本日をもって全作業を終了した。



番号	遺跡名	時期	備考	番号	遺跡名	時期	備考	番号	遺跡名	時期	備考
1	論田塚古墳群	古墳時代	円墳2	10	鯉淵城跡	中世	城館址	19	寺池西古墳群	古墳時代	
2	二の割遺跡	縄文時代	遺物包蔵地	11	根古屋遺跡	縄文時代	遺物包蔵地	20	くずれ橋遺跡	古墳～平安	遺物包蔵地
3	東北部古墳群	古墳時代		12	正法山持福院観音寺	江戸時代	廃寺	21	中台遺跡	古墳～平安	遺物包蔵地
4	物見塚古墳	古墳時代		13	息栖台古墳群	古墳時代		22	大塚古墳群	古墳時代	
5	平五郎治古墳	古墳時代		14	滝淵遺跡	弥生時代	遺物包蔵地	23	犬塚A庚申塚群	不明	
6	湿気遺跡		本遺跡	15	倉田遺跡	縄文・古墳	遺物包蔵地	24	犬塚B庚申塚群	不明	
7	経塚		本遺跡	16	下野遺跡	縄文時代	遺物包蔵地	25	犬塚古墳群	古墳時代	
8	中崎家住宅	江戸時代	国指定重要文化財	17	宿上の台古墳群	古墳時代		26	権現古墳群	古墳時代	
9	堀の内館跡	中世	城館址	18	寺池東古墳群	古墳時代					

第1図　湿気遺跡・周辺遺跡位置図および一覧表


30
31
32
B4
B3
C4
C3
D3
D2
E2
第1号竪穴住居址
4号地下式壙
1号地下式壙
3号地下式壙
2号地下式壙
3号溝
1号溝
2号溝
経塚
2.5M

第2図　湿気遺跡全体図

第3節　遺構・遺物

1　第1号竪穴住居址（図3・4，写2・7・9）

ピット番号	直径 (cm)	深さ (cm)
P 1	34	73
P 2	34	76
P 3	30	66
P 4	28	80

B 3区中央部から西へ寄った傾斜地に位置し，主軸方向はN－46°－Wで，平面の形は一辺約6.6mの隅丸正方形をしている。ほとんどの壁は外傾し，高さは12～24cmほどである。床はロームで西から東へわずかに傾斜している。円形のピットが4個検出され，ほぼ同間隔に位置しており，主柱穴と思われる。カマドは北西壁の中央部に付設され，壁から外に少し張り出た構造である。後世の土壙が南西壁と，南コーナー部から南東壁をそれぞれ攪乱していた。更にトレンチャーのあとが同方向に床面を抜いて走っており，遺構の保在状態はよくない。住居址内覆土は自然堆積の状態を示している。床面から覆土中にかけ，大きいもので長さ60cmほどの炭化物が一面に散乱しており，火災を受けたものと思われる。

出土遺物は，土師器片約300点，須恵器片5点，陶器片1点，砥石1個，小石約65個，炭化物多量であるが，土器のほとんどは小片で，一番保存が良かったのは上半分復元できた土師器の甕形土器（図4－3）1個である。土師器の器形には，甕形，坏形，椀形のものがあり，図9－6の甕だけは古墳時代五領期のものであるが，他は鬼高期末のものと思われる。

カマド内出土の砥石は，最大長19.8cm，最大幅8.6cm，最大厚6.7cm，重量1,480gで，石質は安山岩である。4面ともに使用痕があり，2面には幅5～10mmの使用によるへこみができている。

実測図に載せた土器については，次のような観点に立って一覧表で記述した。

○　番号は，実測図記載番号と共通である。

○　焼成については特に目立ったものを特徴の内面の欄で記述した。

○　口径は，口縁の外側を測り，実測図による復元値を( )内に記した。

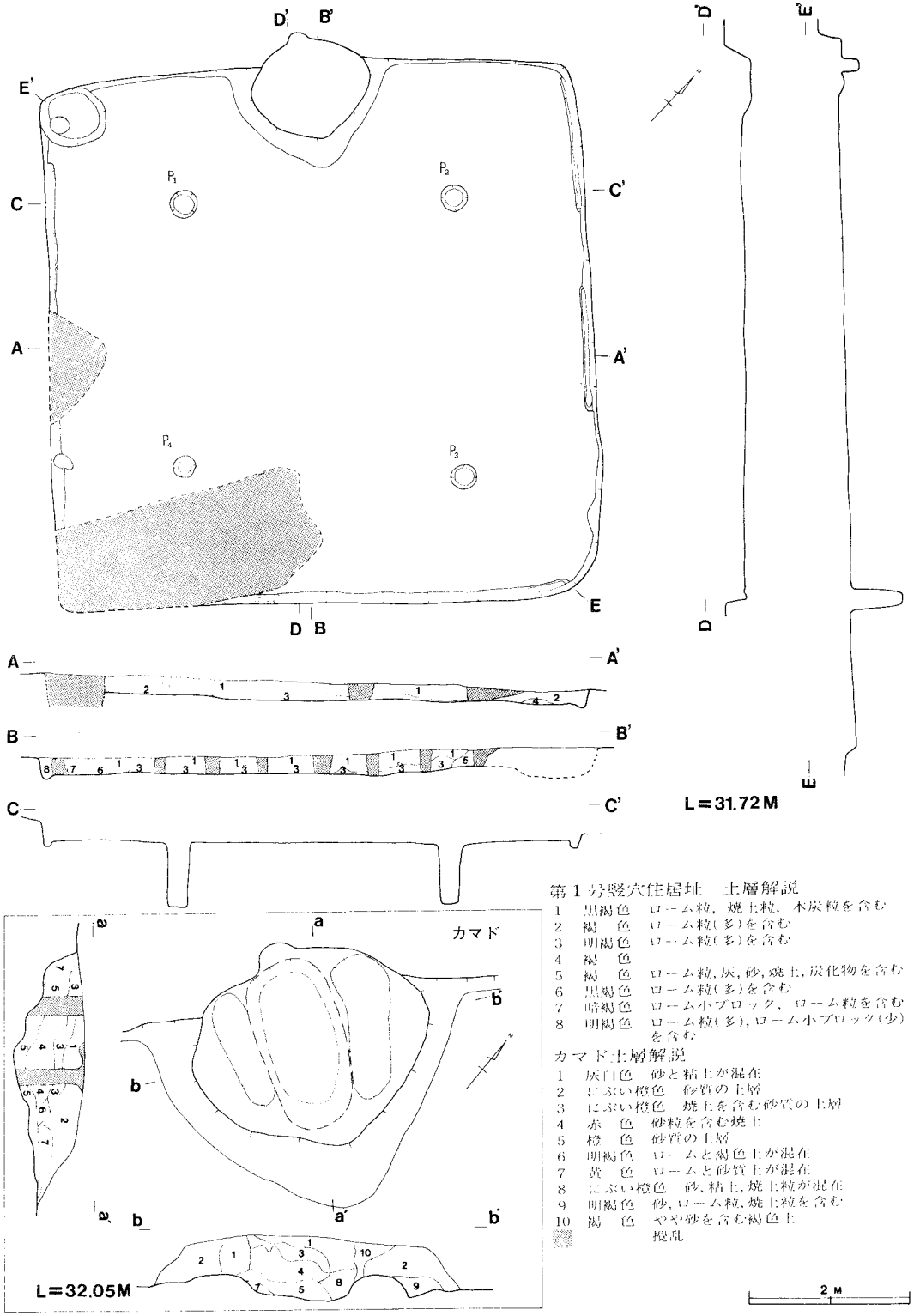
○　器高は，底部から最も高い部分までの値で，破損品の場合，現存高を( )内に記した。

○　色調は，土器外面で付着物のない所をえらんで，標準土色帳を参考にして記した。

○　胎土は，土のほかの混入物を記した。石英とその他白色の石との区別がはっきりしないので白色の石はすべて石英とした。

第1号竪穴住居址出土土器一覧表（図4）

番号	種類 器形	特徴 外面	特徴 内面	口径 器高 (cm)	色調 (外面)	胎土
1	土師器 甕形	口縁部付近1/3のみ現在。口縁部横ナデ。胴部ヘラ削り後ナデ。かなり摩滅している。	ナデ	(18.0) (10.5)	にぶい黄橙	石英(多)
2	土師器 甕形	口縁部付近1/4のみ現存。口縁部横ナデ。胴部はかなり摩滅している。	ナデ	(18.6) (9.5)	にぶい黄橙	砂礫(多)
3	土師器 甕形	胴部下半欠損。口縁部横ナデ。胴部ヘラナデ。	口縁部横ナデ。胴部ヘラナデ。焼成良	16.8 (12.0)	にぶい黄橙	砂礫 黒雲母
4	土師器 甕形	口縁部片。長甕。口縁部横ナデ。かなり摩滅している。	ナデ	(21.4) (8.2)	にぶい黄橙	石英(多) 黒雲母
5	土師器 甕形	底部のみ現存。底部ヘラナデ。二次焼成を受けかなり摩滅している。カマド内出土。	表面が剝離している	底径8.8 (10.0)	明褐	石英(多)
6	土師器 甕形	底部のみ現存。胴部ヘラナデ。底部ヘラケズリ。朱塗痕がある。	かなり摩滅している	底径8.9 (5.0)	赤褐	石英(多)
7	土師器 坏形	口縁部片。ミガキ。摩滅している。	ミガキ。焼成良	(15.2) (3.4)	にぶい橙	雲母(微)
8	土師器 坏形	口縁部片。口縁部と胴部の境に浅い沈線が一条まわっている。黒く磨かれている。	黒く磨かれている 焼成良	(15.0) (3.9)	にぶい橙	金雲母(微)
9	土師器 坏形	口縁部片。黒く磨かれている。	黒く磨かれている 焼成良	(15.4) (3.0)	黒	雲母(微)
10	土師器 坏形	口縁部片。横ナデ。	黒く磨かれている	(13.8) (3.4)	黒褐色	雲母(微)
11	土師器 坏形	口縁部片。口縁部横ナデ。胴部ヘラナデ。かなり摩滅している。	ナデ	(11.8) (2.7)	にぶい赤褐	雲母
12	土師器 坏形	口縁部片。ヘラナデ。	ミガキ	(17.0) (4.6)	浅黄橙	砂礫
13	土師器 椀形	口縁部片。口縁部横ナデ。かなり摩滅している。	口縁部横ナデ 胴部ナデ	(18.0) (4.0)	黒褐	砂粒(多)
14	土師器 椀形	口縁部片。口縁部横ナデ。胴部ナデ。かなり摩滅している。	口縁部横ナデ 胴部ナデ	(15.0) (5.5)	にぶい橙	石英(多)
15	土師器 坏形	口縁部片。口縁部横ナデ。黒く磨かれている。胎土も黒色である。	口縁部横ナデ 焼成良	(13.2) (4.0)	黒色	砂粒(微)



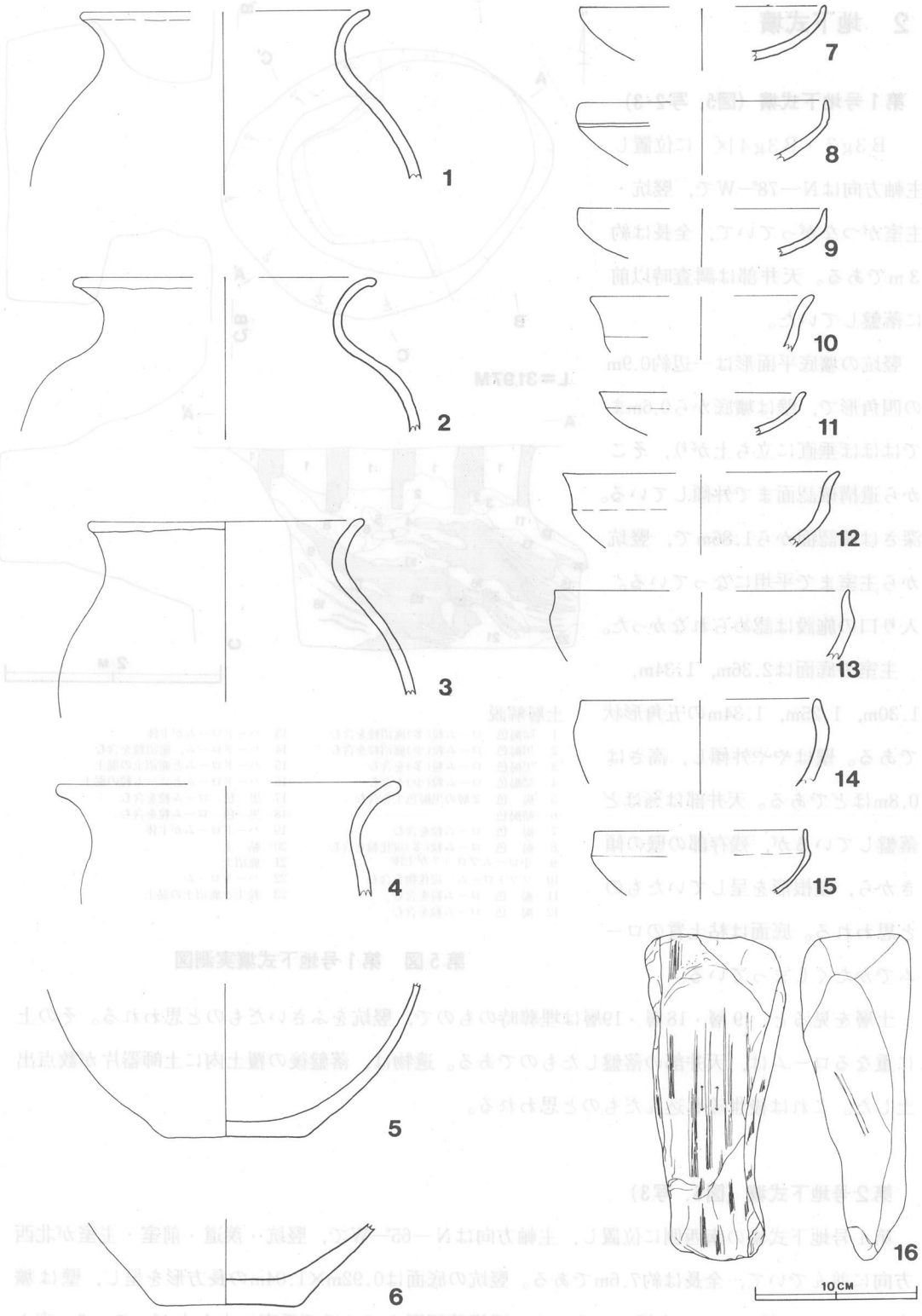
第1号竪穴住居址　土層解説

1　黒褐色　ローム粒，焼土粒，木炭粒を含む
2　褐　色　ローム粒(多)を含む
3　明褐色　ローム粒(多)を含む
4　褐　色
5　褐　色　ローム粒，灰，砂，焼土，炭化物を含む
6　黒褐色　ローム粒(多)を含む
7　暗褐色　ローム小ブロック，ローム粒を含む
8　明褐色　ローム粒(多)，ローム小ブロック(少)を含む

カマド土層解説

1　灰白色　砂と粘土が混在
2　にぶい橙色　砂質の土層
3　にぶい橙色　焼土を含む砂質の土層
4　赤　色　砂粒を含む焼土
5　橙　色　砂質の土層
6　明褐色　ローム土と褐色土が混在
7　黄　色　ローム土と砂質土が混在
8　にぶい橙色　砂，粘土，焼土粒が混在
9　明褐色　砂，ローム粒，焼土粒を含む
10　褐　色　やや砂を含む褐色土
　　撹乱

第3図　第1号住居址実測図



第4図　第1号住居址 出土遺物実測図

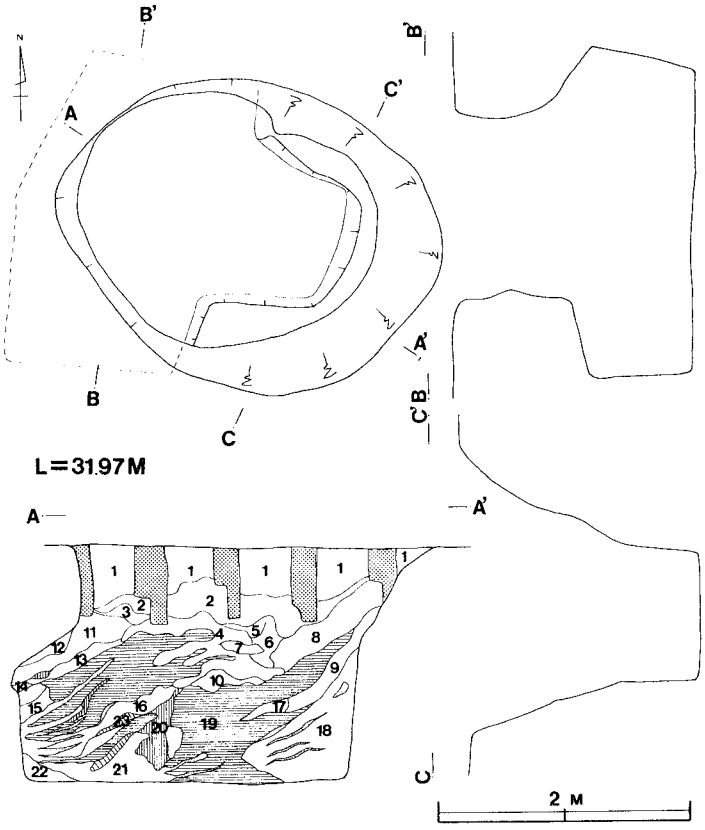
2　地下式壙

第1号地下式壙（図5，写2・3）

B3g3・B3g4区に位置し主軸方向はN－78°－Wで，竪坑・主室がつながっていて，全長は約3mである。天井部は調査時以前に落盤していた。

竪坑の壙底平面形は一辺約0.9mの四角形で，壁は壙底から0.6mまではほぼ垂直に立ち上がり，そこから遺構確認面まで外傾している。深さは確認面から1.86mで，竪坑から主室まで平坦になっている。入り口の施設は認められなかった。

主室の底面は2.36m，1.34m，1.30m，1.25m，1.34mの五角形状である。壁はやや外傾し，高さは0.8mほどである。天井部は⅔ほど落盤しているが，残存部の壁の傾きから，屋根形を呈していたものと思われる。底面は粘土質のロームでかたくしまっている。



土層解説

1　暗褐色　ローム粒(多)鹿沼粒を含む
2　黒褐色　ローム粒(少)鹿沼粒を含む
3　黒褐色　ローム粒(多)を含む
4　暗褐色　ローム粒(少)を含む
5　褐　色　2層の黒褐色土を含む
6　暗褐色
7　褐　色　ローム粒を含む
8　褐　色　ローム粒(多)炭化粒を含む
9　小ロームブロックが主体
10　ソフトローム　炭化物を含む
11　褐　色　ローム粒を含む
12　褐　色　ローム粒を含む
13　ハードロームが主体
14　ハードローム，鹿沼粒を含む
15　ハードロームと鹿沼土の混土
16　ハードロームとローム粒の混土
17　黒　色　ローム粒を含む
18　黒　色　ローム粒を含む
19　ハードロームが主体
20　粘　土
21　鹿沼土
22　ハードローム
23　粘土と鹿沼土の混土

第5図　第1号地下式壙実測図

土層を見ると，9層・18層・19層は埋葬時のもので，竪坑をふさいだものと思われる。その上に重なるロームは，天井部の落盤したものである。遺物は，落盤後の覆土内に土師器片が数点出土した。これは後世流れ込んだものと思われる。

第2号地下式壙（図6，写3）

第1号地下式壙の南西側に位置し，主軸方向はN－65°－Wで，竪坑・羨道・前室・主室が北西方向に並んでいて，全長は約7.6mである。竪坑の底面は0.92m×1.04mの長方形を呈し，壁は壙底から0.6mの所までやや内傾し，そこから遺構確認面まではほぼ垂直に立ち上がっている。高さは約1.64mである。ここの土層をみると，竪坑が埋葬時に埋めもどされたことを示している。

羨道は長さ3.5m，幅0.82～1.34m，高さ約0.7mで，断面形は長方形を呈し，ややカーブして前室につながっている。羨道の天井部には鋭利な刃物による削り痕が残っている。羨道は，壙底から半分ほどロームブロックが積まっている。天井部の落盤がないことから，これは埋葬時のもので羨道をふさいだものと思われる。前室の底面は0.64m，0.84m，0.76m，0.54mの四角形を呈し，主室の底面は3.2m×2.7mの四角形である。底面の状況は，粘土質のかたくしまったロームで，平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がり，天井部は，コーナー部を除きほとんど落盤していたが，壙底から約0.8mの所に天井部の痕跡が認められる。

遺物は，落盤した天井部をうめる土層中に内耳の土器片・土師器片が出土したのみである。

第3号地下式壙（図7，写3・4）

B3g7区に位置し，主軸方向はN－114°－Eで，竪坑・羨道・主室が南東方向に並んでいて，全長は約2.8mである。竪坑の底面は0.9m×0.6mのほぼ長方形を呈し，底面はほぼ平坦で粘土質のかたいロームである。土層をみると，竪坑は埋めもどされたと考えられる。壁は垂直に立ち上がり，高さは1.2mほどである。

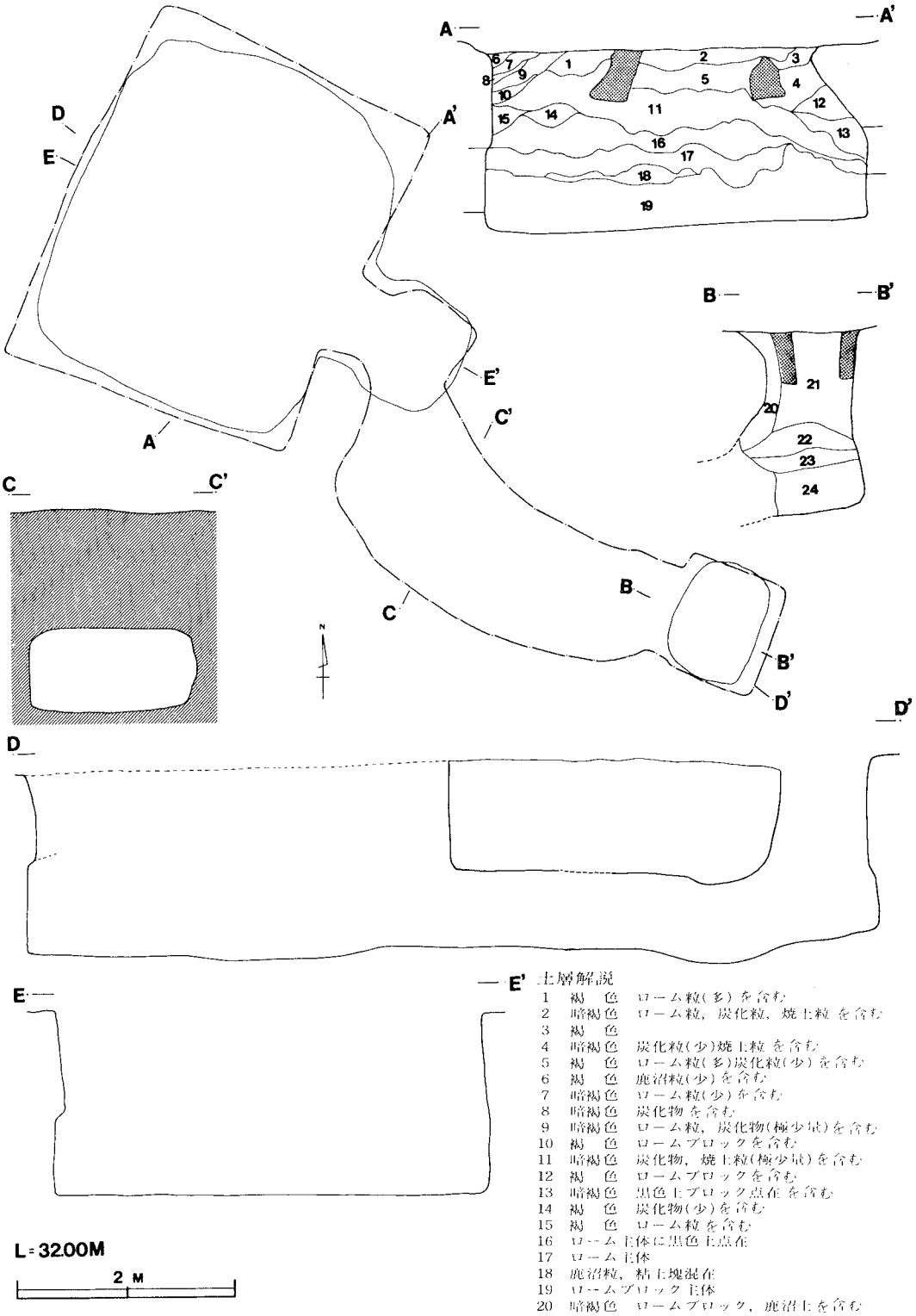
羨道は，竪坑口の幅が0.68m，主室口の幅が0.84mで，奥の方がやや広くなっている。高さは0.7mで，断面はカマボコ形をしている。天井部は完全に残っていて，鹿沼層とその下のローム層を掘り込んでいる。

主室の底面は長軸最大幅2.60m，短軸最大幅1.56mの扇形状をしている。壁はほぼ垂直に立ち上がり，底面から0.8mの所に天井部の痕跡が認められる。鹿沼層とその下のローム層を掘り抜いている。天井部は，コーナー部を除き落盤していた。出土遺物はなかった。

第4号地下式壙（図7，写4）

第3号地下式壙の北東側，B3f9区の傾斜地に位置し，主軸方向はN－119°－Wで竪坑・羨道・主室が南西方向に並んでいて，全長は約2.7mである。竪坑の底面の形は，長径0.98m，短径0.8mの卵形をしている。底面はかたくしまっていて，主室の底面よりやや高くなっている。壁は垂直に立ち上がり，高さは1mほどである。土層を見ると，掘り出した土を再び埋めもどしたものと考えられる。羨道は長さ約0.18mで，天井部は落盤していた。

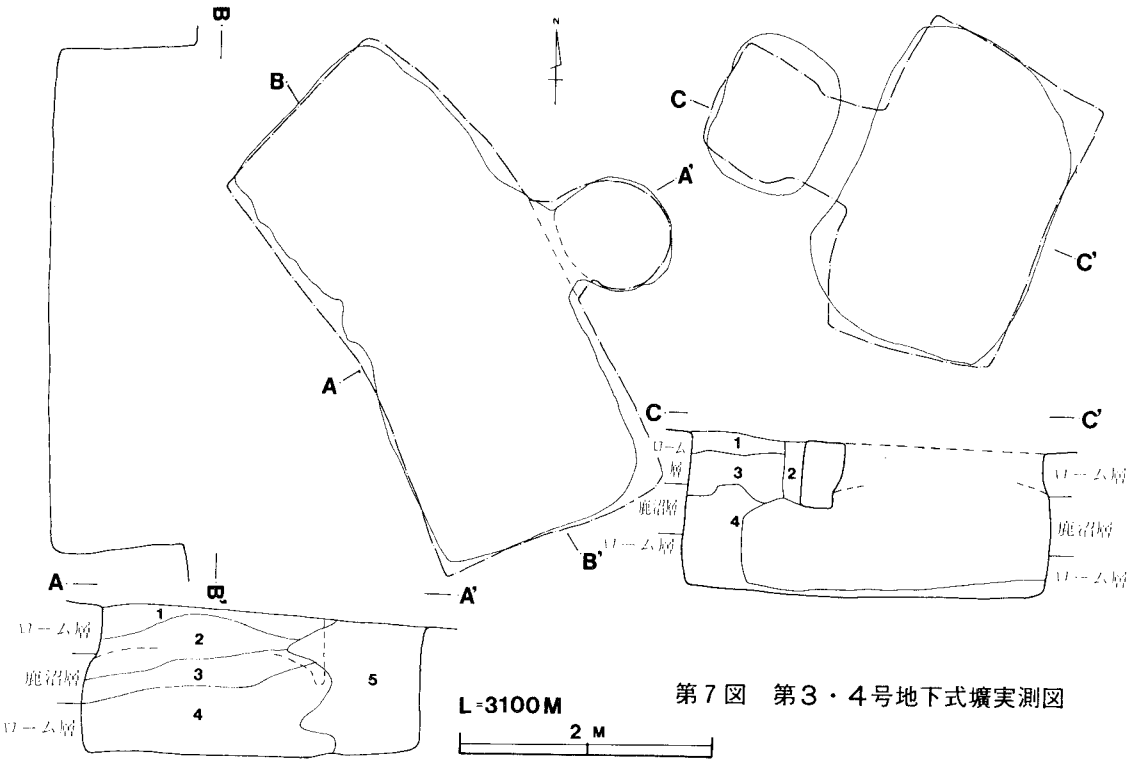
主室の底面は，最大長軸4.2m，最大幅2.0mの扇形状で，床面は粘土質のかたいロームで平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がり，底面から0.8mほどの所に天井部の痕跡が認められ，厚さ0.4mほどの鹿沼層とその下のローム層を掘り抜いている。天井部は落盤していたが，底面には薄く塗ったように黒色土がはさまっていた。出土遺物はなかった。



土層解説

1 褐 色 ローム粒(多)を含む
2 暗褐色 ローム粒，炭化粒，焼土粒を含む
3 褐 色
4 暗褐色 炭化粒(少)焼土粒を含む
5 褐 色 ローム粒(多)炭化粒(少)を含む
6 褐 色 鹿沼粒(少)を含む
7 暗褐色 ローム粒(少)を含む
8 暗褐色 炭化物を含む
9 暗褐色 ローム粒，炭化物(極少量)を含む
10 褐 色 ロームブロックを含む
11 暗褐色 炭化物，焼土粒(極少量)を含む
12 褐 色 ロームブロックを含む
13 暗褐色 黒色土ブロック点在を含む
14 褐 色 炭化物(少)を含む
15 褐 色 ローム粒を含む
16 ローム土体に黒色土点在
17 ローム土体
18 鹿沼粒，粘土塊混在
19 ロームブロック主体
20 暗褐色 ロームブロック，鹿沼土を含む
21 ロームブロック主体に鹿沼土混入
22 ロームブロック，黒色土，鹿沼土混在
23 黒色土主体にロームブロック，鹿沼土混入
24 ロームブロック，黒色土，鹿沼土混在

第6図 第2号地下式壙実測図



第７図　第３・４号地下式壙実測図

３号地下式壙土層解説

1. 黒褐色　ローム粒(多)を含む，しまり弱い
2. 暗褐色　しまり弱い
3. 暗褐色　ローム粒(多)を含む
4. 黒　色　ローム粒(少)を含む

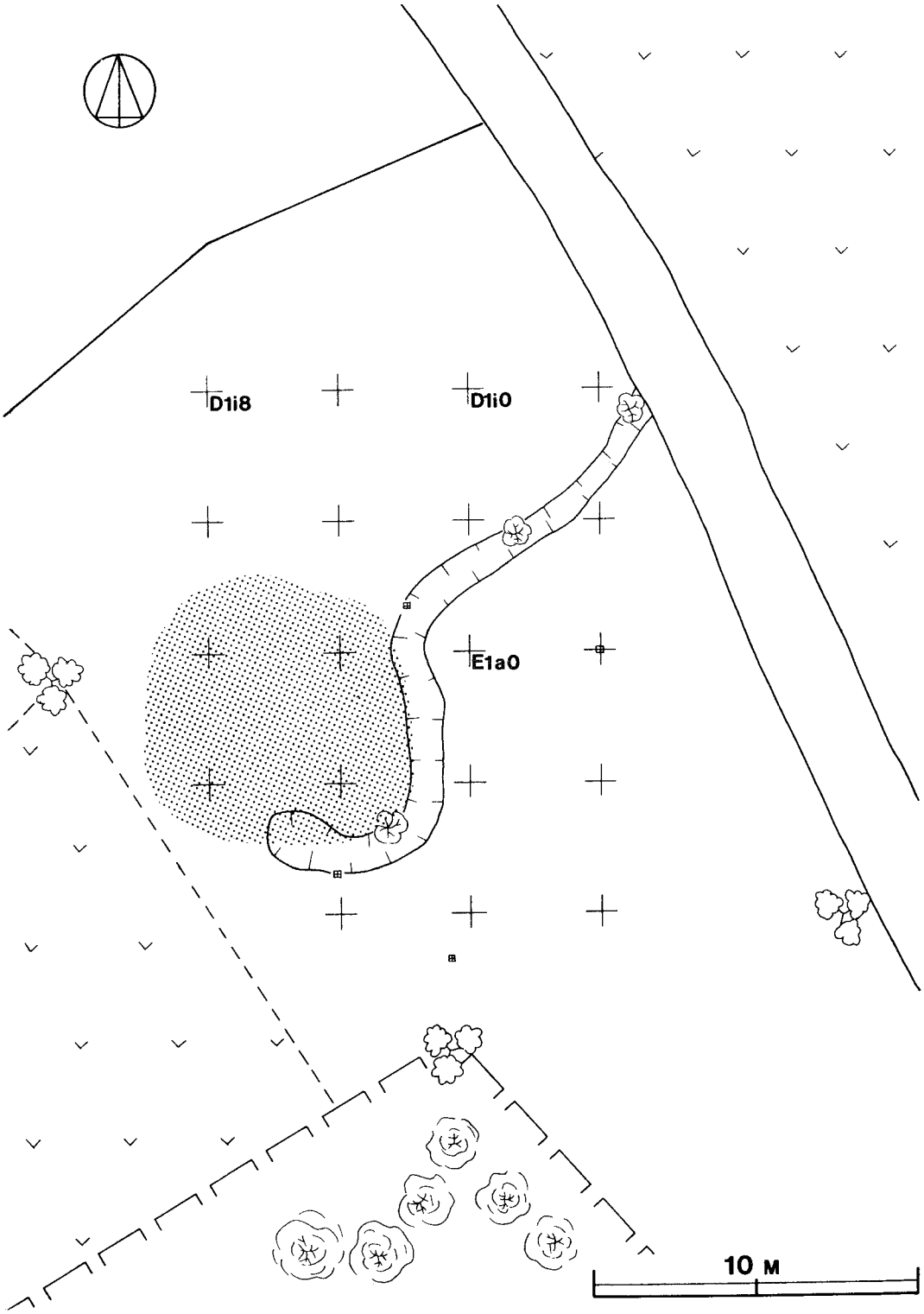
４号地下式壙土層解説

1. 黒褐色　しまり粘性弱い
2. 暗褐色　しまり粘性弱い
3. 明褐色　ロームが主体
4. ロームブロック
5. ロームブロック，鹿沼土，褐色土がまじりあって左下へ流れ込んでいる

３　経　塚（図8・9，写4・5・8）

現況は畑地で，　標高は32.8mを測る。経塚の北東13mほどの所を南東から北西へ通る幅2.5mの道路は，鯉淵城大手門へ通ずる昔からの道路であったという。調査前に，経塚のわきの土地境界にそって植えられていた茶の木が，機械で抜根され地表に経石が散乱していた。耕作土中の経石の分布を調査すると，Ｅ１ａ８区を中心に直径約８mの範囲に集中しており，このあたりに経塚があったことが推定できる。念のため地下施設の有無を調べるため，Ｅ１ａ８区・Ｅ１ｂ８区をローム面まで掘り下げた。土壙が６基検出されたが，いずれも覆土はしまりが弱くさらさらしており，一部にビニール袋なども見られ，経塚とは関係のない最近のものと思われる。また耕作土の下の層からは，経石が出土しなかった。

多数の石が出土したが，この中には経石を持ち去ってご利益のあった婦人が，お礼に河原石を返したという話もあるので，ふつうの河原石も含まれていると思われる。文字の書かれていたと思われる石は6,278個で，そのうち671個には文字の痕跡が見られた。経石の大きさは種々で，小



第8図　経　塚　現　況　図

さいもので長径2.4cm，大きいもので長径12cmのものがある。形や色も種々で，近くの川によく見られる河原石である。その河原石の比較的平らな面に一字墨書してある。少しくずした文字(図11)が多い。判読できたものは次の387字である。なお，同じ文字の石がある時は( )内にその数を記した。

阿 為(5) 因(2) 依 印 畏 以(2) 引 優 汚 縁(3) 衣 宛 応 於(3) 音(3) 億 悪(2)
王(3) 間(2) 介 我(6) 訶 芥 獲 漠 崖 学 加 願 界 閑 去 及(3) 義(2) 喜(2)
教(2) 幾 経(3) 近 記 行(2) 強 具(3) 求 苦 月(2) 虔(2) 兼 花(4) 結 気 偈 撿
敎 合(2) 此(3) 高 興(3) 丘 故(2) 根(2) 今 五(2) 御 後 言 挙(2) 谷 広 虚 金
叩 薩(5) 山 詐 散(2) 坐 作(2) 三(2) 歳 罪 細 在 主 而(2) 所(2) 受(4) 者 信
著 臣(2) 茨 尽 種(4) 灼 浄(2) 習 将 常 諸(4) 叉 舎(3) 捨 従 順 写 事 自(2)
震 死 之 娑 文 授 小(2) 四(2) 生(2) 処 至 使 志 師 聖 重 身 釈 豆
誰 水 積 前 是(5) 善(2) 全 千(2) 先 施(2) 設 世(10) 逝 奏 卒 存 束 但 丹
大(4) 提 宅 達 智 知(3) 注(2) 中 丁 伝 特(3) 貪(2) 得(3) 堂 徳 道(4) 同(4) 土
怨 毒 塔 東 読 謌 当(4) 内 南 女 如 任 若(2) 人(2) 二 認 念 然 納 能
坂 背 婆 梅 百 匹 仏(9) 福 平 不(5) 附 聞(3) 分 符 祓 粉 復 布(3) 便 別
訪 朋 本 放 菩(6) 梵(2) 法(3) 方 万 命(2) 未(2) 已(2) 妙(2) 名(2) 羊ママ 無 滅
木(2) 亦(3) 哉 也 有(5) 幽 誉 来(5) 戻 猟 利(5) 流 蓮(2) 或

経石のほか標識等の経塚に関連する遺物は出土しなかった。

第9図　経　石　実　測　図

4　溝（写5－4）

1号溝は，　C2d7区 から　B3f1区 へまっすぐ伸びている。長さ約31m，幅約1m，確認面からの深さ約0.25mで，断面はゆるやかな「U」字形である。溝の両端はなだらかに立ち上がっている。出土遺物はなかった。

2号溝は，1号溝と直交するような位置にあり，　C2e7区から　C3g4区へまっすぐのびている。長さ約34m，幅約1.5m，確認面からの深さ約0.28mで，断面はゆるやかな「U」字形である。溝の両端はなだらかに立ち上がっている。出土遺物はなかった。

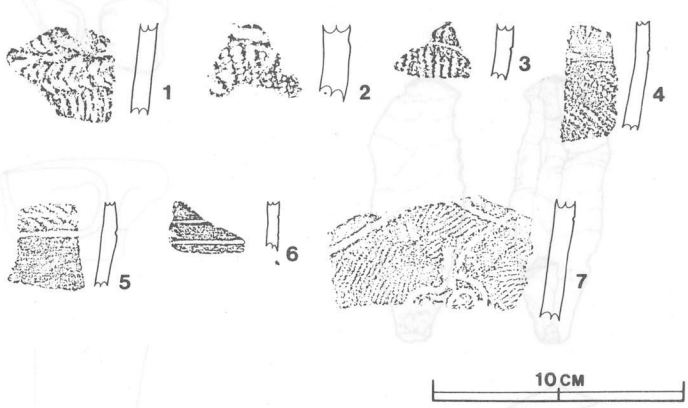
3号溝は，　C3c8区 から　B3g9区 へまっすぐのびている。長さ約23m，幅0.5～1.3m，確認面からの深さ約0.15mで，断面はゆるやかな「U」字形である。溝の両端はなだらかに立ち上がっている。出土遺物はなかった。

5　土壙（写6）

土壙は54基検出された。平面の形は長方形を呈し，小さいもので0.6m×0.6m，大きいもので1.4m×4.6mである。壁はほぼ垂直に立ち上がり，浅いもので，確認面からの深さ0.2m，深いもので1.1mである。覆土はローム混りのしまりのない単一層であった。遺構と関連のある遺物は出土しなかった。土地境界線にそって掘られているものが多かった。

6　その他（図10・11・12，写9・10）

遺構との関連は不明であるが，表土層から先土器時代のものと思われる縦長剝片（図11，写9）が1点出土した。また，縄文時代前期浮島式（図10－1），中期（図10－2），後期（図10－3～7）の土器片が7点出土した。少量であるが古墳時代の土器片，須恵器片も出土した。中世のものでは，陶器片（図12－3，写10－1），内耳土器片（図10－1・2），内面に傘文様の墨絵のある土師質土器片（図12－5），灯明皿（図12－4）などが出土した。縦長剝片（B3g8区出土）は，最大長7.0cm，最大幅2.6cm，最大厚0.7cm，重量10gで，石質は流紋岩である。打点が2ヶ所残っている。

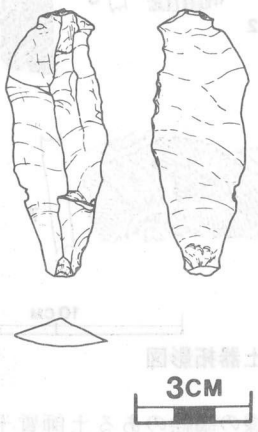


第10図　縄文式土器拓影図

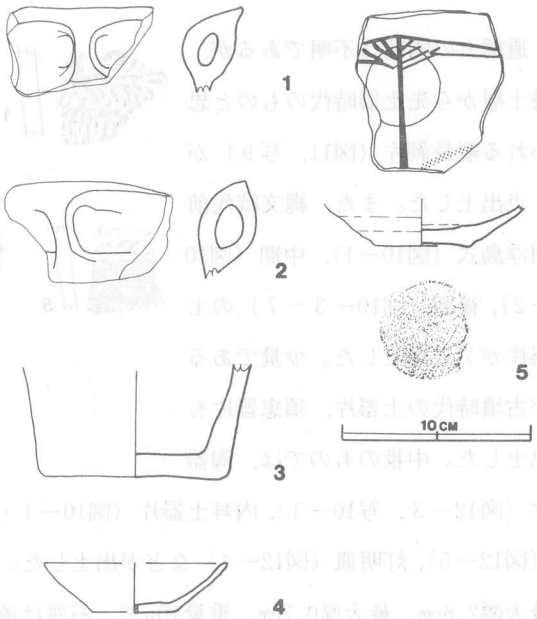
土器・陶器については次の一覧表に記述した。なお番号のない3点は写真（写10）で載せた。

内耳土器等一覧表（図12）

番号	出土遺構	種類	特徴 外面	特徴 内面	口径(cm) 器高	色調	胎土
1	2号地下式壙	内耳土器	口縁部片。耳の部分は外側にふくらんでいる。外面に煤付着。ナデ（写10－4）	ナデ	(4.7)	外面—褐 内面—明黄褐	砂粒
2	C 3e 2	内耳土器	口縁部片。耳の部分は外側にふくらみをもつ。ナデ		(5.2)	外面—黒 内面—にぶい黄橙	砂粒 黒雲母(微)
3	B 3h 9	陶器	底部片。胴部に緑釉がかかっていて，底部にも玉状に付着している。（写10－1）	輪積み後，ロクロ整形の痕跡がある。	底径 9.8 (6.8)	にぶい黄	
4	C3b8	土師質土器	縦⅙のみ現存。灯明皿。全面に煤が付着している。	全面に煤が付着している。	(9.6) 2.5	灰黄褐	砂粒
5	B3i0	土師質土器	皿。底部のみ現存。ロクロ整形痕。底部に回転糸切り痕がある。（写10－2）	傘の墨絵とわずかに帯状の朱塗痕がある。	底径 5.0 (2.0)	にぶい黄橙	砂礫
	C3j9	陶器	高台部のみ現存。底部回転ヘラ削り痕。（写10－1）		(1.3)	にぶい黄橙	石英(微)
	C3j9	陶器	底部片。緑釉が一部にかかっている。瘤状の高台がついている。底部に回転糸切り痕。(写10—1)	ロクロ整形痕がある。		にぶい黄橙	
	B4e3	外耳付土器	外耳部のみ現存。朱塗痕がある。（写10－3）	摩滅している。		にぶい黄橙	石英(微)



第11図　縦長剝片実測図



第12図　内耳土器等実測図

第4節　まとめ

本遺跡から，竪穴住居址１軒，地下式壙４基，経塚，溝３条，土壙54基を確認し，調査した。

竪穴住居址は，出土遺物の大部分は小片であるが，鬼高式土器がセットで出土しているので古墳時代末期のものと考えられる。

地下式壙は，近年，関東近県で多数発見され，本県でも鹿島町（注１），竜ヶ崎市（注2），谷和原村（注３）などでも発見，調査されてきた。しかし，多くの地下式壙に出土遺物がないこと，主室の天井部が落盤していること等から不明な点が多い。用途としては，墓壙説，地下倉庫説等があるが，人骨が出土する例があり，最近の研究では墓壙説の方が有力である。時期は，中世の内耳土器・陶器などが床面より出土していることがあり，また近くに中世の城館址があることが多いことから，中世のものとする考え方が有力である。

本遺跡の４基の地下式壙はともに床面に遺物がなく，天井部も落盤していた。１号地下式壙を除き，竪坑と羨道・主室の３つの部分から構成されていた。主室は，厚さ0.4mほどの鹿沼層とその下のローム層を掘り抜いて作られ，底面は平坦で，壁は，高さが0.8mで垂直にたいらに削られていた。竪坑・羨道は，ともに掘り出した土で埋め戻されていた。時期決定遺物は出ていないが周囲からは中世の内耳土器片・陶器片（写10）が出土していること，また中世城館跡鯉淵城跡が隣接していることから，中世の地下式壙と考えてよいであろう。

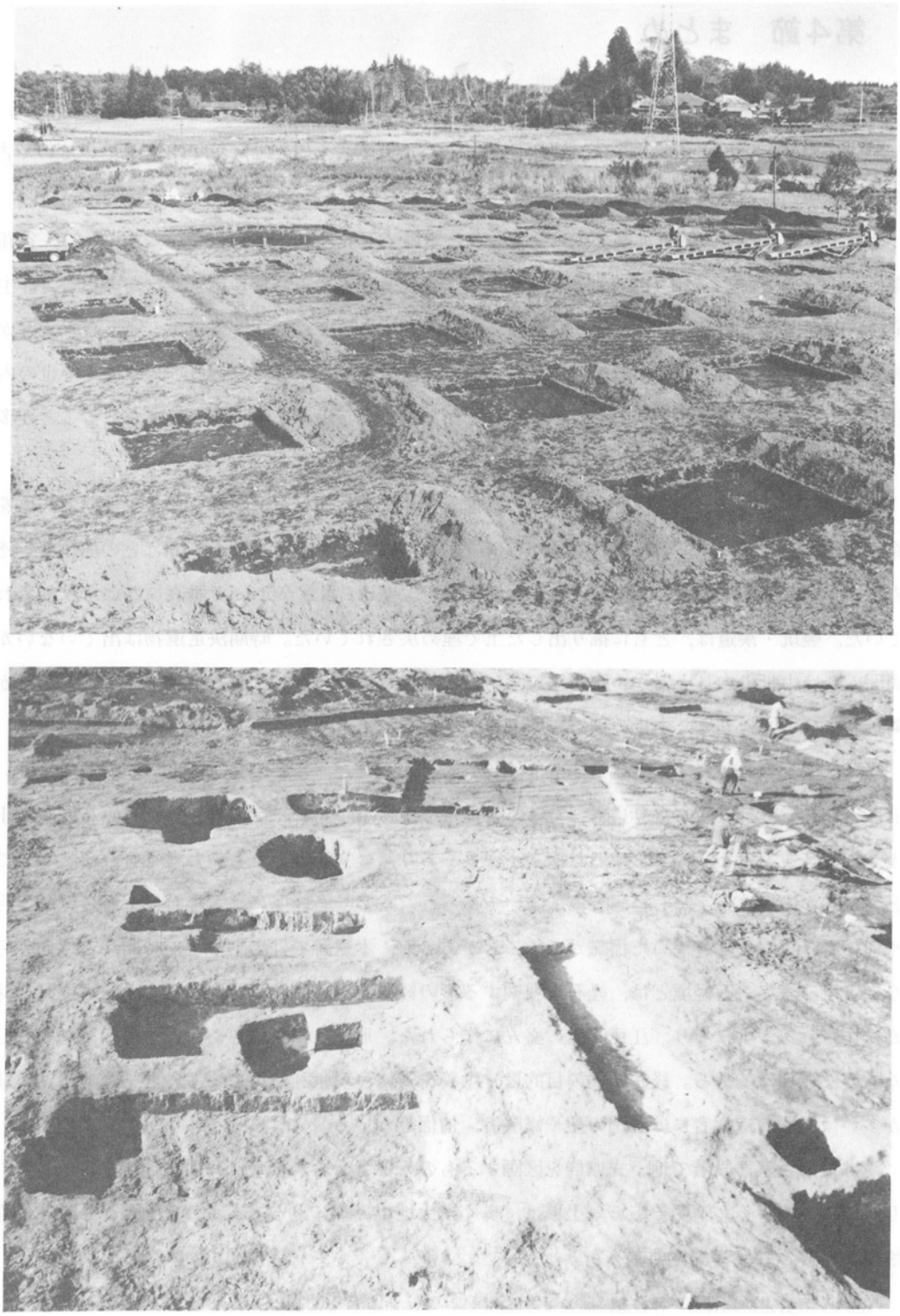
経塚は攪乱されていて，形態・構造は確認できなかったが，経石の分布や古道が前を通っていることから　Ｅ1a8区あたりにあったろうと推定できる。一石に一字墨書された河原石が多数出土し，文字をみると，経文に使われる文字が多くあり，経文を書いたものと考えられる。このことから，本遺構は一字一石経塚とみてよいであろう。一字一石経塚には，経石とともに埋納年月や埋納者，目的などを書いた標識がでることがあるが，本遺跡では出土せず，時期などはわからなかった。一字一石経塚とは，経石を埋納する形の経塚をいい，礫石経塚ともいう。平安時代末から作られるようになり，江戸時代に盛んに作られた。形態は塚を築いたものや横穴墓を利用したものなど種々である。経石埋納の目的は，供養や逆修，現世利益等である。埋納経典は法華経が多い。経塚の造営者には廻国の聖や修験者，僧侶等がいる。

溝は検出された段階で地下式壙群を区画するものかと考えられたが，底面の形状等にはっきりしないことが多く，不明である。土壙は，多くが土地境界線にそってあることなどから竿穴的な性格のものと考えてよいであろう。

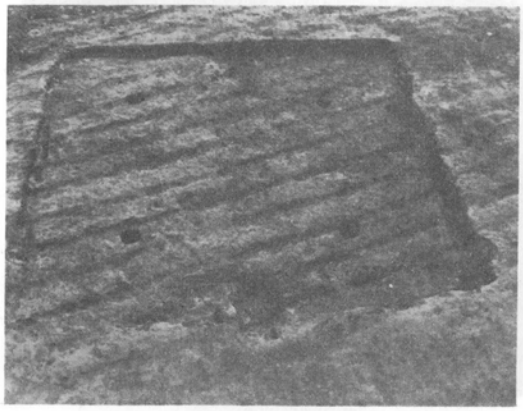
（注１）神野遺跡調査会『神野遺跡調査報告書』

（注２）茨城県教育財団『竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書２－外八代遺跡』

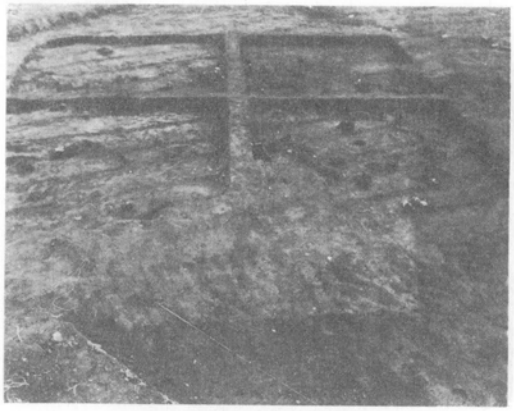
（注３）洞坂畑遺跡発掘調査会『洞坂畑遺跡発掘調査報告書』



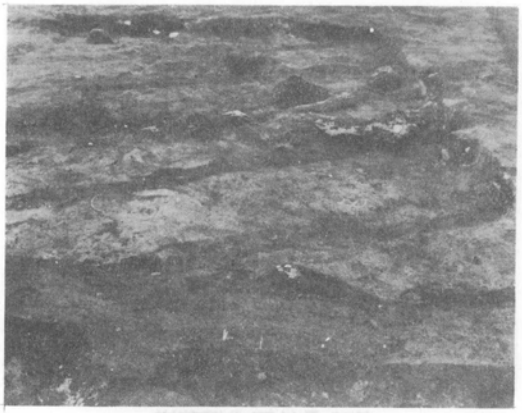
写1　　湿　気　遺　跡　全　景



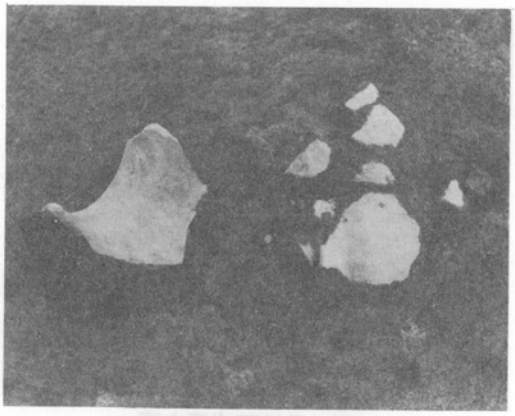
第１号竪穴住居址　1



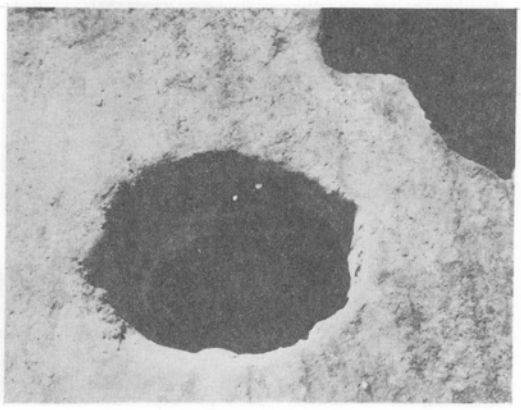
竪穴住居址遺物出土状況



竪穴住居址遺物出土状況　3



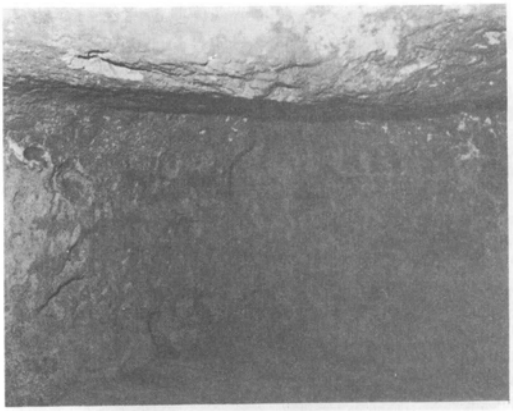
竪穴住居址遺物出土状況



第１号地下式壙　5

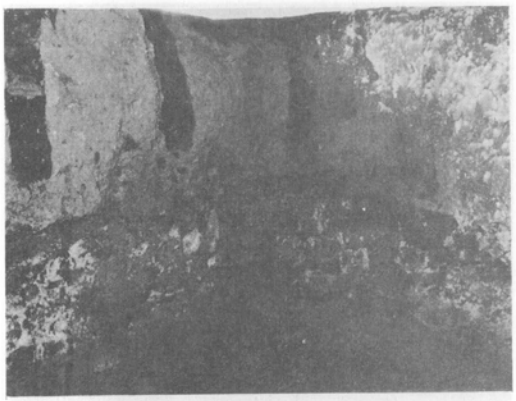
第１号地下式壙主室

写２　湿気遺跡　第１号住居址・第１号地下式壙

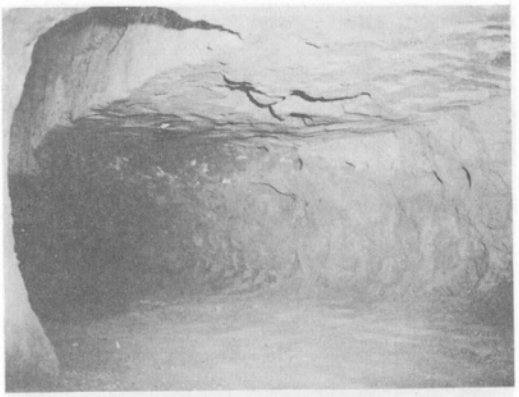


第1号地下式壙主室　1

第2号地下式壙　2

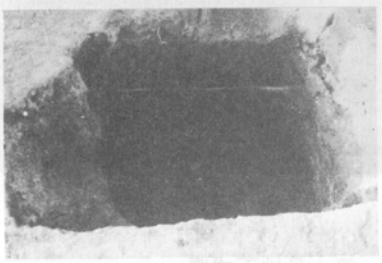


第2号地下式壙主室　3

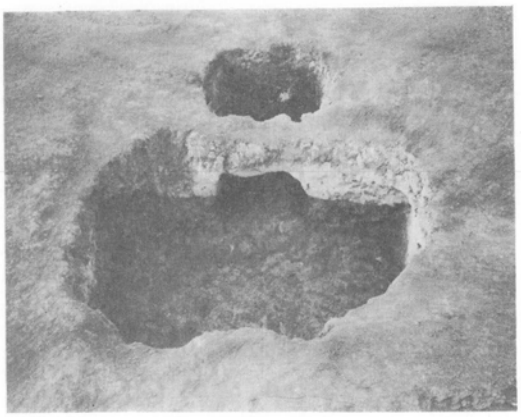


第2号地下式壙羨道　4

第3号地下式壙主室　5

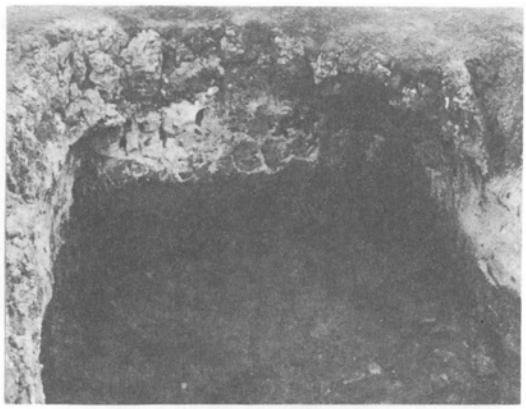


第2号地下式壙竪坑　6



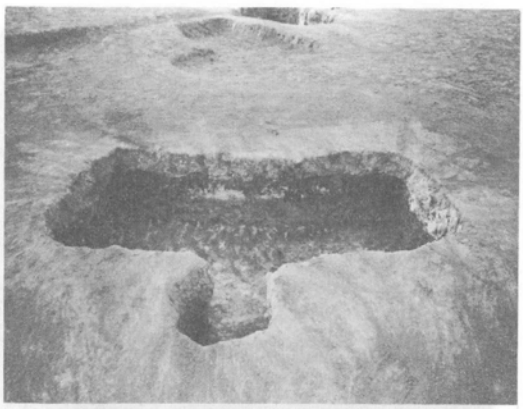
第3号地下式壙　7

写3　湿気遺跡　第1号・2号・3号地下式壙

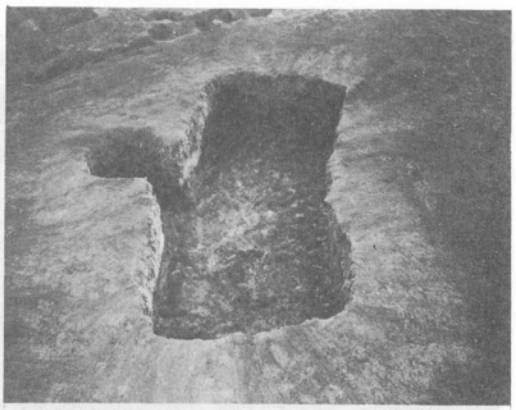


第3号地下式壙主室　1

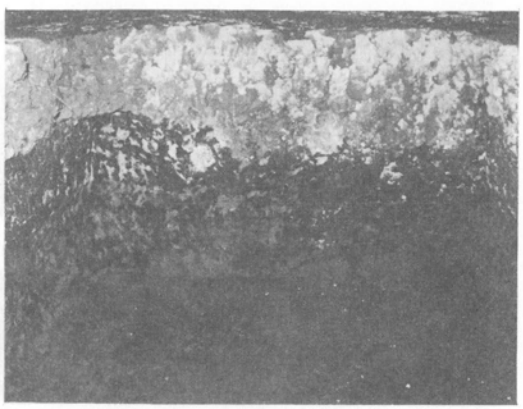
第3号地下式壙主室　2



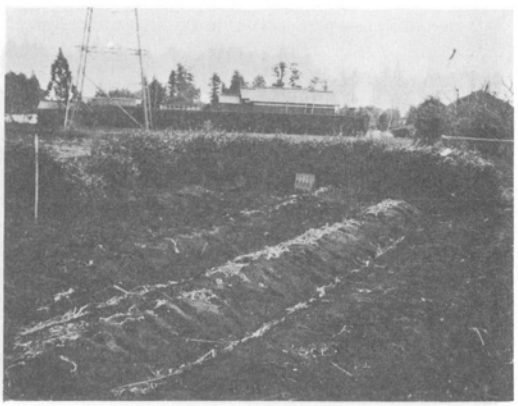
第4号地下式壙　3



第4号地下式壙　4



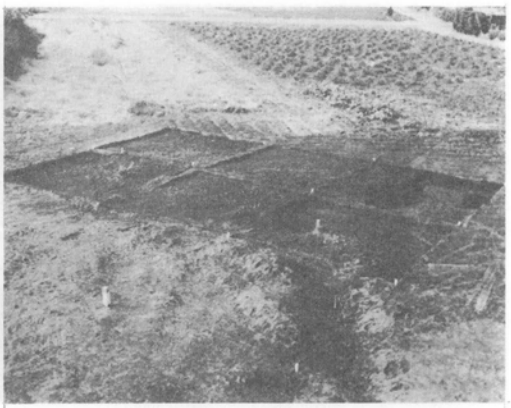
第4号地下式壙主室　5



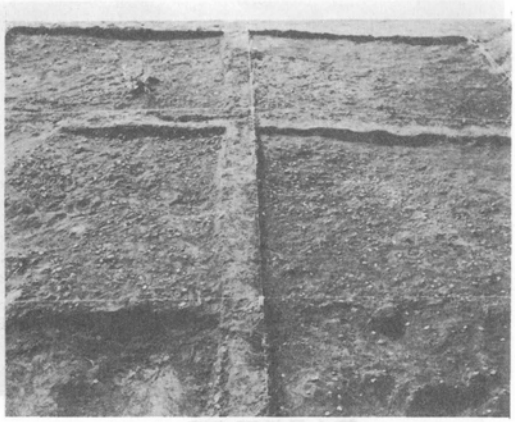
調査前の経塚　6

写4　湿気遺跡　第3号・4号地下式壙・経塚

経　塚　全　景　1



経塚遺物出土状況　2



経塚遺物出土状況　3

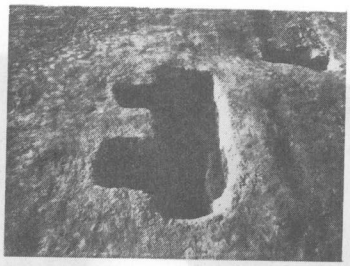
第２号溝　4

調　査　風　景　5

調　査　風　景　6

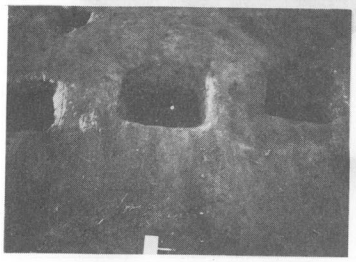
写５　　湿気遺跡　経塚・溝・調査風景

1

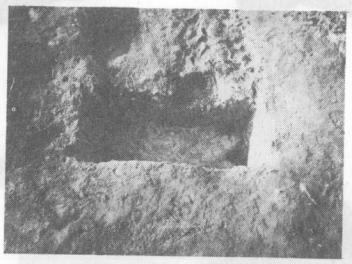


2

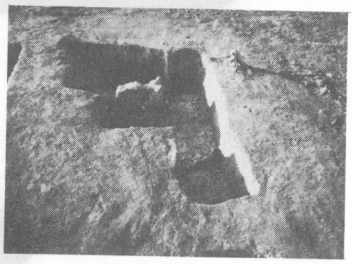
3



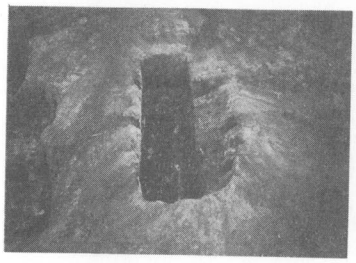
4



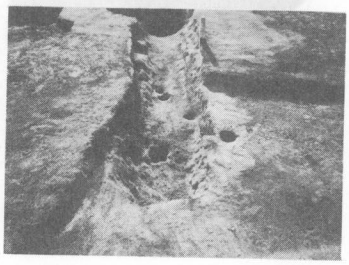
5



6

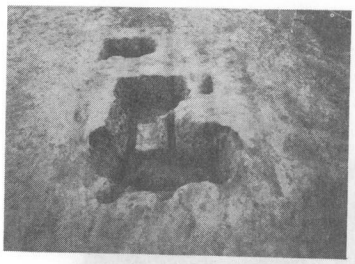


7

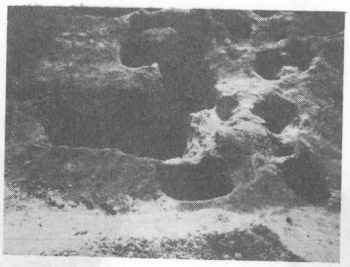


8

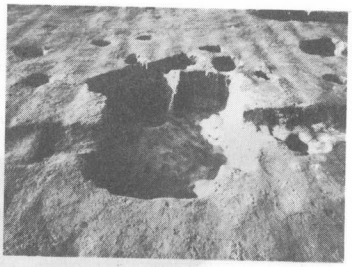
9



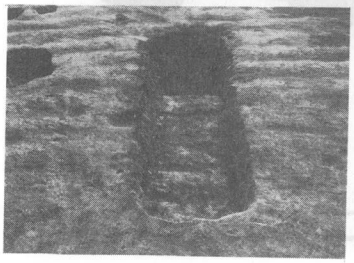
10



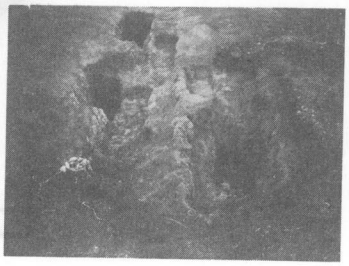
11



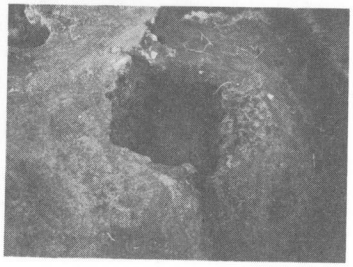
12



13

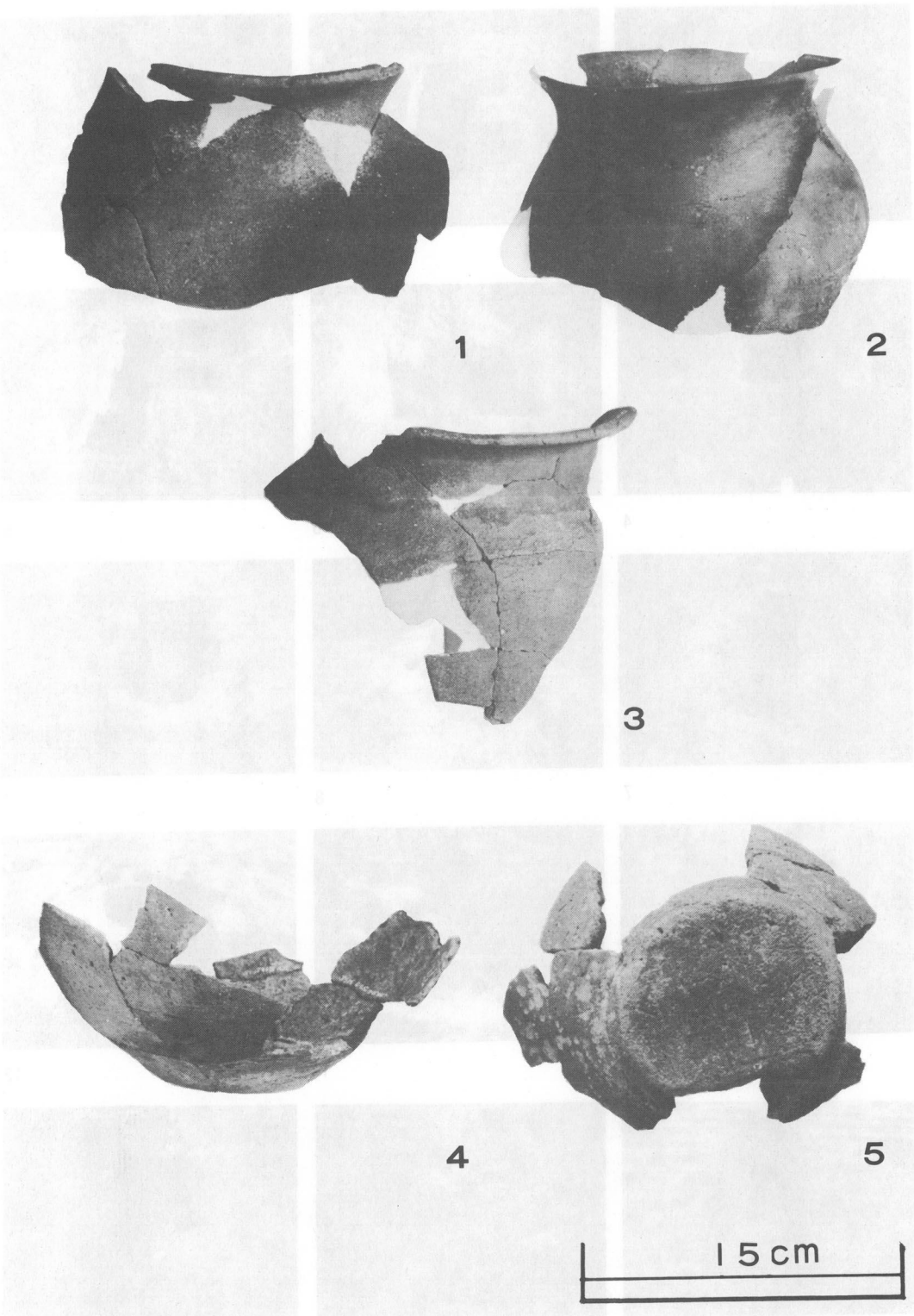


14



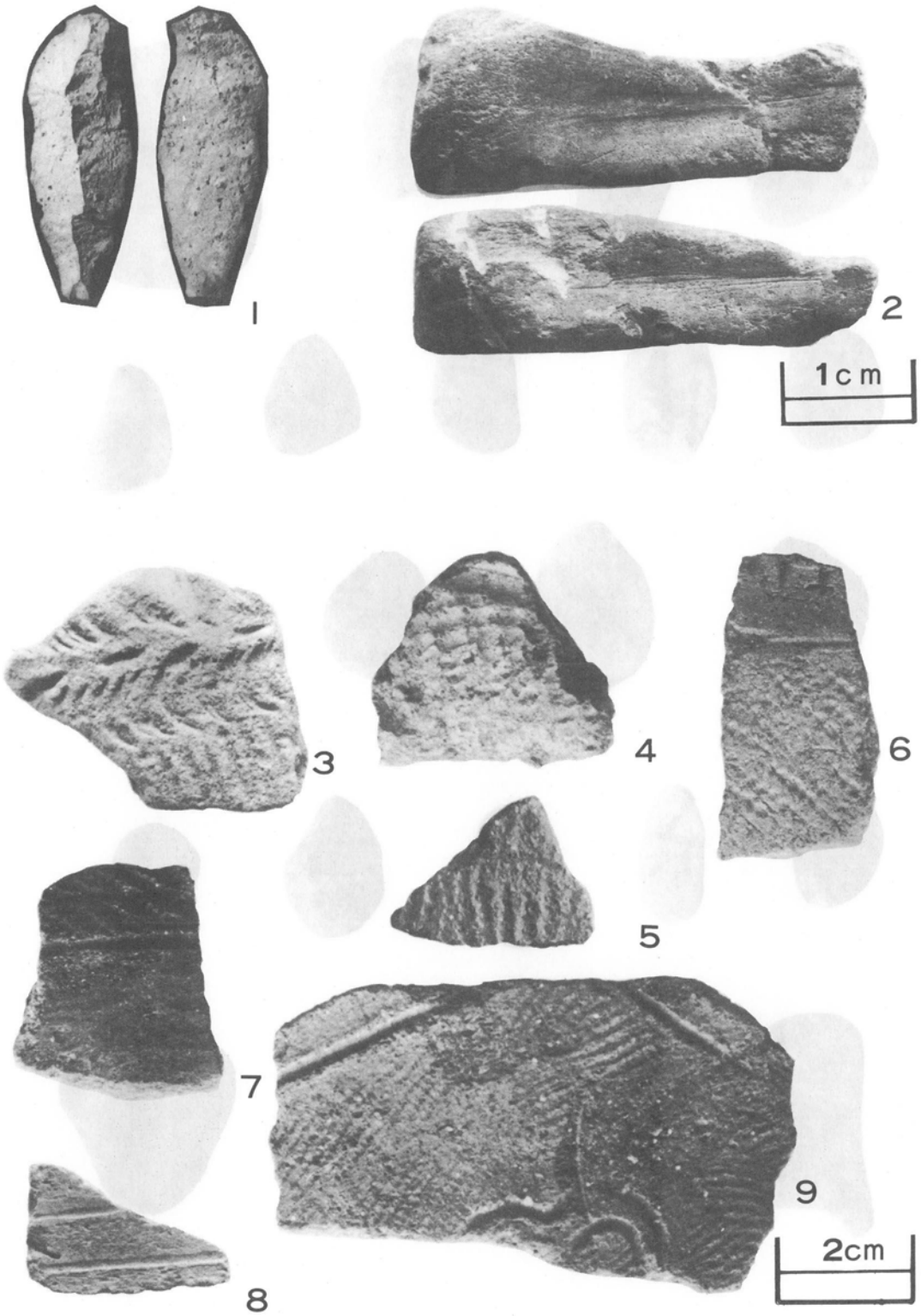
15

写6　湿気遺跡土壙

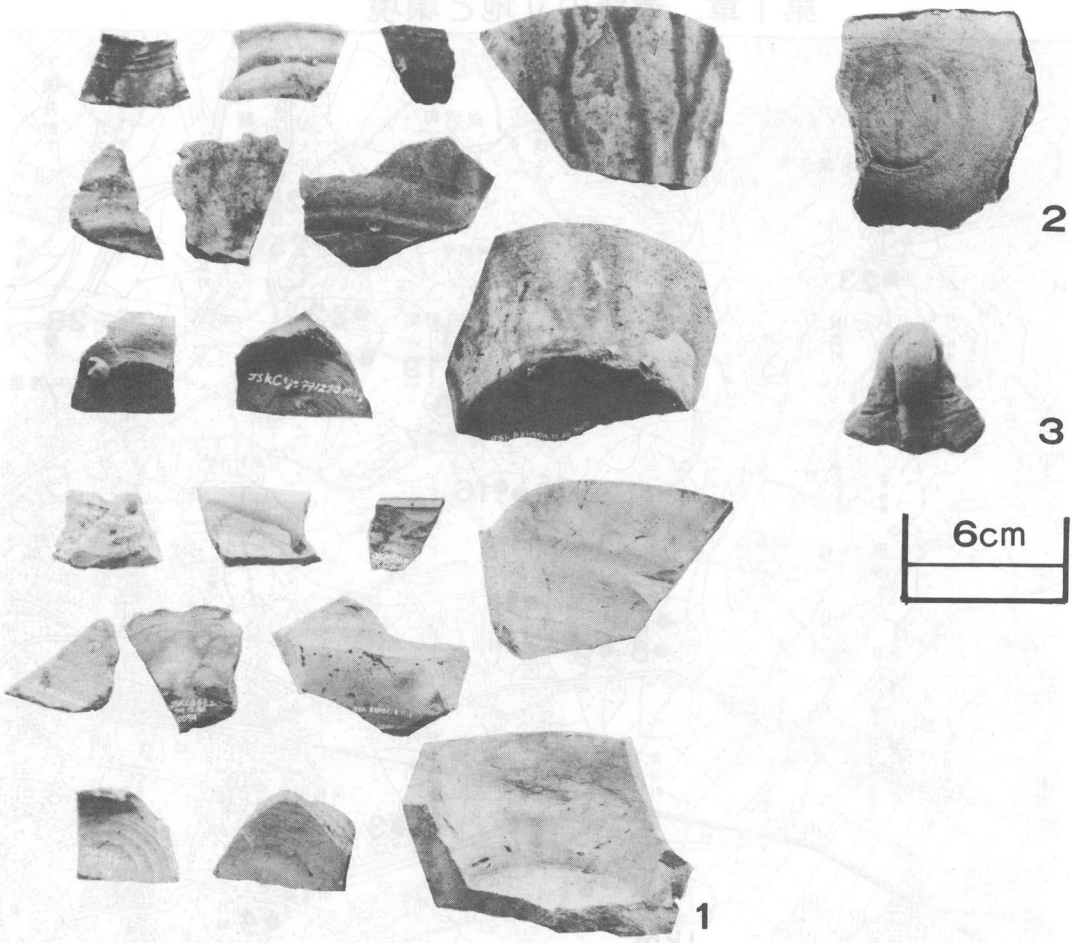


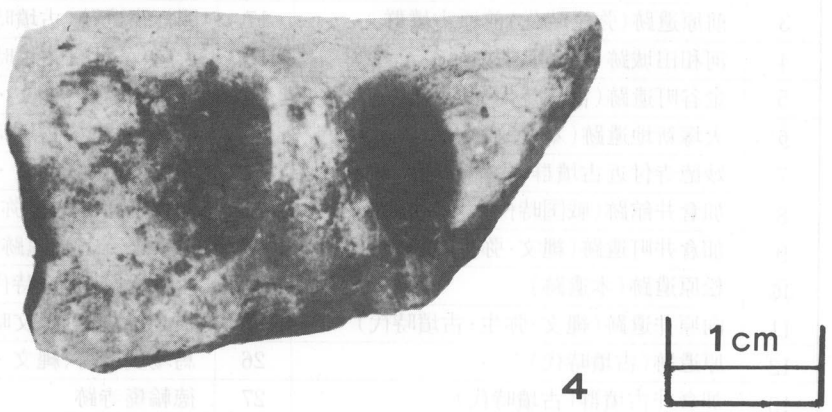
写7　　湿気遺跡　第1号住居址出土土師器

写 8　湿気遺跡　経　石



写 9　　湿気遺跡　縦長剝片・砥石・縄文式土器

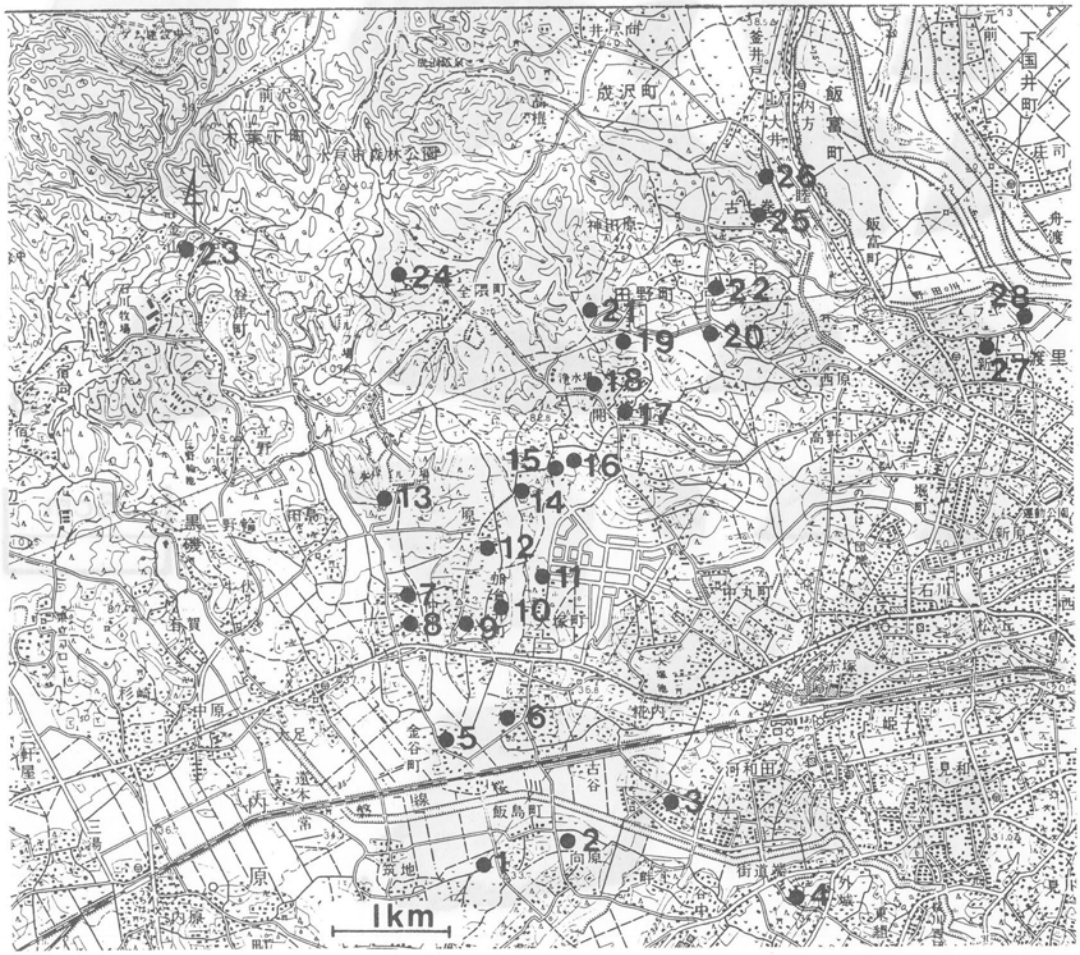




写10　　湿気遺跡　グリッド出土陶器・土師質土器・内耳土器

第5章　大塚新地遺跡

第1章　遺跡の立地と環境



番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	飯島町遺跡(弥生・古墳時代)	15	峯山古墳(古墳時代)
2	仙光台遺跡(弥生時代)	16	寺山遺跡(縄文・古墳時代)
3	前原遺跡(弥生時代)前原古墳群	17	開江宿遺跡(古墳時代)
4	河和田城跡(中世)	18	大久保遺跡(古墳時代)
5	金谷町遺跡(古墳時代)	19	前山田遺跡(縄文・古墳時代)
⑥	大塚新地遺跡(本遺跡)	⑳	南原古墳群(古墳時代〃)
7	妙徳寺付近古墳群(古墳時代)	21	後山田遺跡(縄文・古墳時代)
8	加倉井館跡(戦国時代)	22	仲根遺跡(縄文・弥生・古墳時代)
9	加倉井町遺跡(縄文・弥生・古墳時代)	23	木葉下三ケ野窯跡群(古墳時代)
⑩	松原遺跡(本遺跡)	24	小坂遺跡(縄文時代)
11	向原井遺跡(縄文・弥生・古墳時代)	25	古土巻遺跡(縄文時代)
12	原遺跡(古墳時代)	26	馬場尻遺跡(縄文・古墳時代)
13	加倉井古墳群(古墳時代)	27	徳輪廃寺跡
14	毛勝谷原遺跡(古墳時代)	28	長者山政庁跡

第1図　遺跡位置図及び一覧表

1　地理的環境

大塚新地遺跡は，水戸市大塚町字高根532番地ほかに所在する。本遺跡の所在する水戸市は，県庁所在地でもあり、県の政治・経済・文化の中心である。　関東平野の北東部に位置し，地形的に丘陵地区，台地地区，沖積低地部と三つの地域に分けることができる。それらは，水戸市の北から東に流れる那珂川とその支流の桜川の支谷によって構成された沖積低地と，東茨城台地の北東部をなす水戸台地と呼ばれる洪積台地，それに市の北西部の鶏足山地塊の外縁部をなす第三紀の丘陵地とからなっている(注1)。水戸台地の北部の那珂川と桜川に囲まれた上市台地は，標高40m内外の洪積世末期に旧那珂川によって形成された河岸段丘上に，関東ローム層が堆積した台地である。台地を形成している最も古い地層は，新世代第三紀の地層であり，基盤岩は泥岩で水戸層と呼ばれている。その上に貝化石を含む粘土・砂からなる見和層が重なり，礫層からなる上市層がその上にのり，さらに常総粘土層，そして鹿沼軽石層をはさんで関東ローム層が重なっている。この台地は，上市を中心に西部・南部は市街地となっている。那珂川の氾濫原標高10m以下の下市低地は，新世代第四紀洪積世の最末期に，那珂川や桜川の下方浸蝕によってできた谷底（沖積谷底)に，沖積世の時代になってから氾濫による堆積物が堆積して形成された沖積低地である。この沖積低地は，下市の市街地を除いて耕作地に利用され，北西部の標高60m～200mの丘陵地は山林に利用されている。

本遺跡の調査対象区域は，10,000㎡の面積を有し，上市台地の南西部に位置している。標高約34～37mのなだらかな傾斜地となっており，桜川により浸蝕された小支谷が樹枝状に入り込み，この支谷に谷津田が開かれている。本遺跡は，桜川の南から北へ入り込んだ支谷に東面する台地の縁辺部にあり，台地は畑地や桑畑として利用され，耕作による攪乱が著しく，水田面との比高差は約3mである。

〔注1〕水戸市付近の台地は，一括して東茨城台地と呼ばれる。これを細分化すると上市台地，千波・緑岡台地となっている。

2　歴史的環境

「常陸国風土記」に「それ常陸の国は、堺は広大く、地も緬邈なり、土壌沃墳い、原野肥衍たり……況わんや復塩と魚との味を求わば、左は山にして右は海なり。桑を植え麻を植えんには、後は野にして前は原なり。いわゆる水陸の府蔵、物産の膏腴なり。古の人の常世の国というのは、蓋し疑うらくは比の地ならんか。」とあり、常陸国は物産豊かに栄えた地ということができる。古代の常陸国の中心は、国府のあった府中（石岡市）であるが、水戸市の地域が那珂郡の中心であり、那珂郡衛の所在地が渡里地区に推定できる。その後も地域の中心として鎌倉時代には大掾

氏の一族、さらに室町時代には江戸氏がここを本拠とした。そして、佐竹氏が常陸を統一して太田から水戸城に移るにおよんで常陸における中心的位置が定まった。江戸時代には御三家の徳川氏の城府がおかれ、明治維新以後も水戸の機能は県庁所在地として政治・経済・文化の中心地となった。

水戸市における文化の機能は、那珂川の氾濫原を見下ろす水戸台地に先土器時代の人々が住みつき狩猟や採集の生活を始めたことに始まる。主な遺跡としては、市内赤塚西団地内遺跡、十万原遺跡、二ノ沢遺跡、開江遺跡、笠原遺跡、文化センター構内遺跡、見和桜山遺跡などがある。

縄文時代に属する主な遺跡は、市内八幡宮の境内から早期の撚糸文土器片が、元吉田町・藤井町・田谷町などから沈線文を有する土器群が発見されている。常盤高速道敷地内の松原遺跡の表土から田戸下層式土器が検出されている。市内柳原貝塚、吉田貝塚からは縄文前期の土器が出土し、これらの遺跡から東に6kmほどのところには常陸風土記に記されている大串貝塚が所在している。吉田貝塚からは縄文中期の阿玉台式土器、大木式、加曽利E式土器が出土し、後期から晩期の遺跡としては、谷田遺跡や成沢遺跡、全隈町金洗沢遺跡、渡里町アラヤ遺跡等が確認されている。

弥生時代に属する遺跡も多く、とくにお下屋敷遺跡・柳河町柳川小学校・東照宮境内・愛宕山古墳付近・桜山・見和町・千波町・本郷・元吉田町・飯富町安土星・土野町・藤井町十万原・河和田町前原遺跡などからは後期に編年される土器が多く出土している。

古墳時代に属する遺跡は、顕在化して形状より判断がつきやすいためか、市内に約110の遺跡が確認され、古墳群だけでも約40ヶ所を上げることができる。古墳時代には主な遺跡を上げると木葉下三ヶ野窯跡群、吉田古墳群、前原古墳群、加倉井古墳群、とくに愛宕山古墳（国指定史跡）は那珂国造の墓といわれ、那珂川右岸に立地している。

奈良時代には、那珂郡の中心であり長者山政庁跡・徳輪廃寺（台渡廃寺）跡等が所在する。

以上、各時代について概観してきたが、水戸台地は各時代にわたっての遺跡が多数確認されている事は、古くから最適の生活環境が保証されていた地域であることをうかがい知ることができる。

第2節　調　査　の　経　過

大塚新地遺跡の発掘調査は，昭和54年10月1日から翌年の3月31日までの予定で現場作業を開始した。調査対象面積は10,000㎡で畑地や桑畑として利用されていた。先ず遺跡の概要を把握するため約30のグリットを発掘し，10月末日までにその調査を終了した。第1段階の調査によりほとんどの小調査区において何らかの遺構が，また，その一部が検出された。多数の遺構の存在が

確認されたが，畑地は山芋，ゴボウ等の栽培によるトレンチャーの使用によって遺構の攪乱が相当ひどく行なわれていた。東部の桑畑地区は，遺構・遺物の保存状態が良好であったので調査期間等も考え合わせて昭和54年度は，桑畑を中心に発掘調査をすることに決定し実施した。 調査が進むにしたがって本遺跡の規模は，当初の予想をはるかに越え遺構が濃密で規模も大きく，遺物も大量に出土した。3 月31日までに調査完了した遺構は，竪穴住居址55基，土壙40基，方形周溝遺構１基，掘立柱建築址１基である。住居址は，本遺跡の緩やかな斜面全域に確認され，弥生式土器，土師器須恵器を伴い複合して出土した。

昭和55年度は，継続して調査を実施することになり，前年度の調査区域の東部と南部に調査区域を5,600㎡拡張し，昭和55年４月８日から７月31日までの予定で発掘調査を行った。４月から５月中旬まで調査区の東部Ｃ４，Ｄ３，Ｄ４ 地区のグリット発掘と拡張作業を実施した。 そして遺構の検出を行なった。その結果竪穴住居址を30から40基確認し特にＣ４地区に竪穴住居址の複合がはなはだしいことが判明した。５月中旬より遺構の精査を開始し，８月31日までに補足調査を含め竪穴住居址42基，土壙14基，井戸状遺構１基を調査した。その結果，前年度と同様，弥生式土器，土師器，須恵器を伴う竪穴住居址が複合して複雑に検出された。

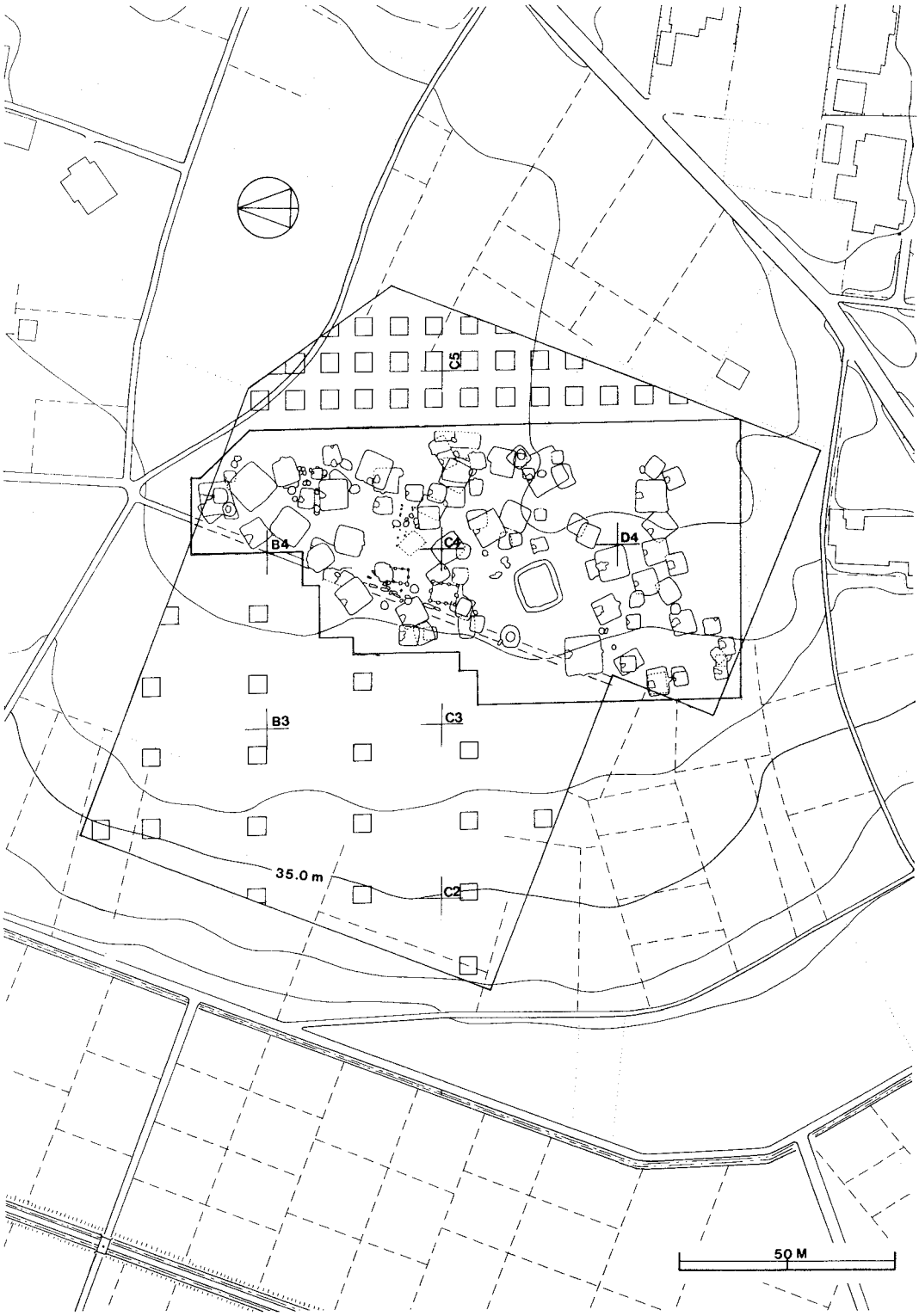
以下，各調査員の日誌によって調査の過程を記していきたい。

54年10月，大塚新地遺跡の現場における調査を17日から始める。桜村下広岡遺跡からの諸機材の搬入と調査備品の点検と整理を行なう。調査区域内の遺構，遺物の分布状態を把握するため約30のグリットの発掘を行なった。その結果，ほとんどの小調査区より遺構が検出された。

54年11月，西部地区は山芋，ゴボウ等の栽培によるトレンチャーの使用によって攪乱がひどく，東部地区の桑畑を中心に調査することにし，Ａ４区からＢ４区の表土除去を開始する。竪穴住居址20基，土壙19基を確認する。Ｂ４区からＢ３区，Ｃ３区の表土除去を行なう。それと平行して第１号住居址から第18号住居址の竪穴住居址，第１号土壙から第８号土壙までの土壙の調査を実施する。第１号住居址から第７号住居址までの遺物の計測と写真撮影を行ない，遺物の取り上げを完了する。

54年12月，第１号住居址から第７号住居址，第１号土壙から第８号土壙の平面図，断面図を作成する。Ａ４区，Ｂ４区の竪穴住居址21基，土壙５基の調査を行なう。当初排土置場としていたＡ４区，Ｂ４区の東側に新しく調査区を設定するため，今までの排土をＡ３区，Ｂ３区，Ｃ３区の西側に人力で移動し，草刈りを行ない，清掃をする。27日，年末年始に入るため発掘機材の整備を行ない，現地作業を中断する。

55年１月９日，発掘機材の点検整備を行ない，翌日から現場作業を実施する。昭和55年度調査の新調査区の杭打ち作業を行ない小調査を設定する。Ａ４区，Ｂ４区の調査からＣ３区の調査に入る。第５号住居址から第41号住居址までの竪穴住居址と第14号土壙，第16号土壙の精査を行な



第2図　大塚新地遺跡全体図

う。

55年２月，Ｃ３区からＣ４区，Ｄ３区の遺構の再確認作業を実施する。その結果Ｃ３区のほぼ中央部に方形周溝遺構１基，竪穴住居址５基，土壙３基，掘立柱建築址１基を確認する。第１号掘立柱，第２号掘立柱，第１号井戸，第２号井戸の調査と，第47号住居址から第51号住居址まで竪穴住居址の精査をする。今月から残っていたカマドの精査を一斉に実施する。遺跡全体図の実測も合せて行なう。

55年３月，54年度発掘調査予定を完了するため，カマドの精査を中心に，第46号住居址から第55号住居址の調査と，第２号掘立柱の精査を急ぎ行なう。第２次調査にそなえて発掘備品の整理を行ない54年度の調査を終了する。

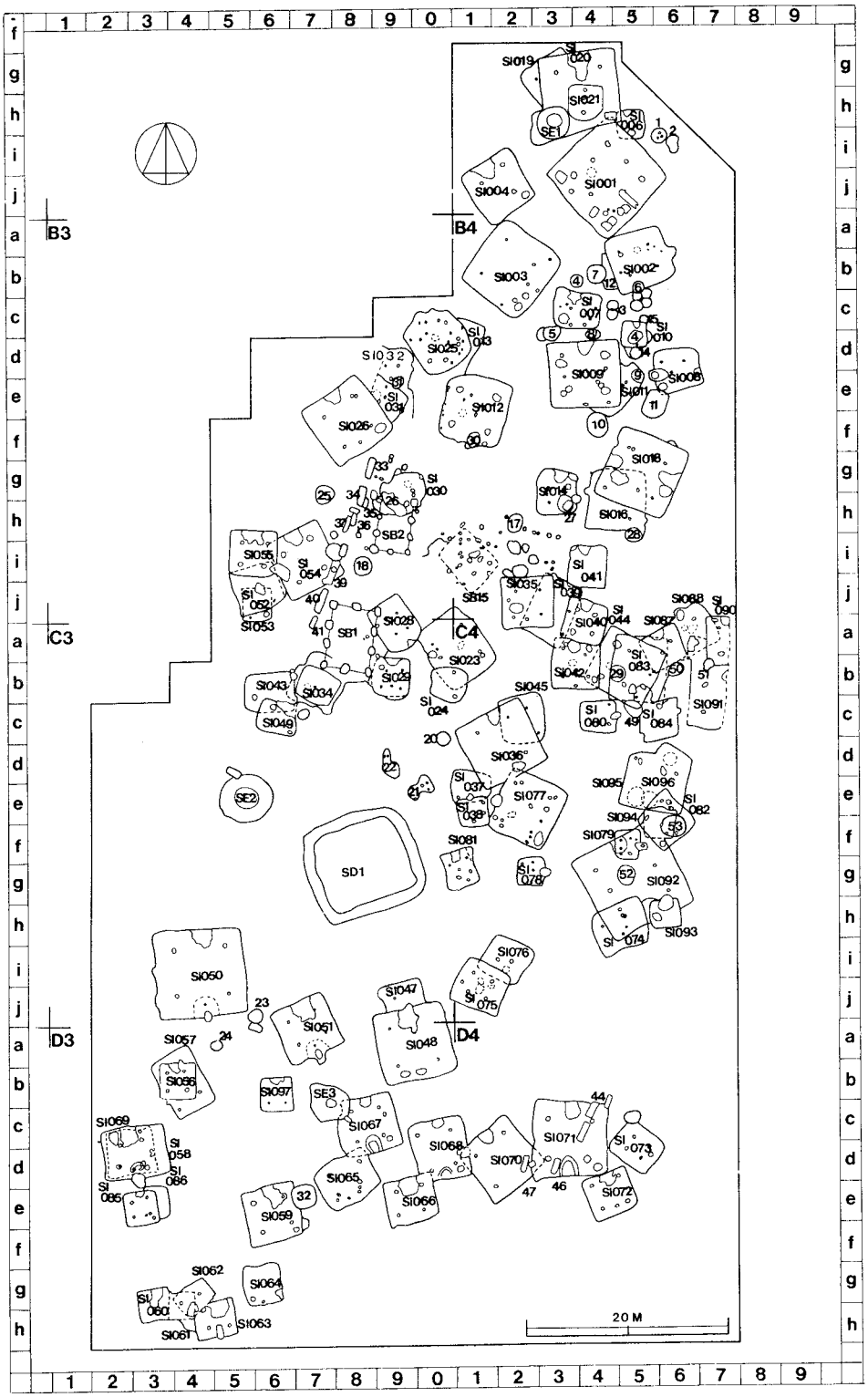
55年４月，前年度に引き続き８日から第２次調査に入る。事務所内の理整整頓と昭和55年度の発掘調査諸準備を行なう。10日からＢ４区，Ｃ４区，Ｄ３区，Ｄ４区のグリット発掘を行ない，遺構確認をする。

55年５月，Ｄ３区からＤ４区の遺構の調査を実施する。第56号住居址から第70号住居址，第32号土拡の精査を行う

55年６月，Ｄ４区からＣ４区へ調査を進める。第66号住居址から第86号住居址，第42号住居址から第47号土壙，第３号井戸状遺構の精査を実施する。

55年７月，第60号住居址，第63号住居址，第77号住居址，第78号住居址，第81号住居址の平面実測図作成，第56号住居址，第59号住居址，第63号住居址，第83号住居址，第84号住居址，第87号住居址から第91号住居址までのセクション実測，第77号住居址，第78号住居址，第81号住居址，第85号住居址，第86号住居址のエレベーション図作成を行なう。21日から８月２日まで渡辺調査員が，千代田村殿内遺跡の調査を行なうことになり、その結果，大塚新地遺跡は８月31日まで調査を延長して行なうことになった。

55年８月，第92号　から第94号までの竪穴住居址の遺物配置図の作成と遺物の取り上げを完了する。第61号住居址，第64号住居址，第66号住居址から第68号住居址，第70号住居址から第72号住居址，第78号住居址，第79号住居址，第81号住居址，第83号住居址，第85号住居址，第87号住居址，第89号住居址，第92号住居址，第93号住居址，第97号住居址内のカマドの精査を行なう。大塚事務所の物品及び発掘機材を砂川遺跡へ移動し，８月31日をもって，大塚新地遺跡の発掘調査を終了する。



第3図　大塚新地遺跡・遺構配置図

第３節　遺構・遺物

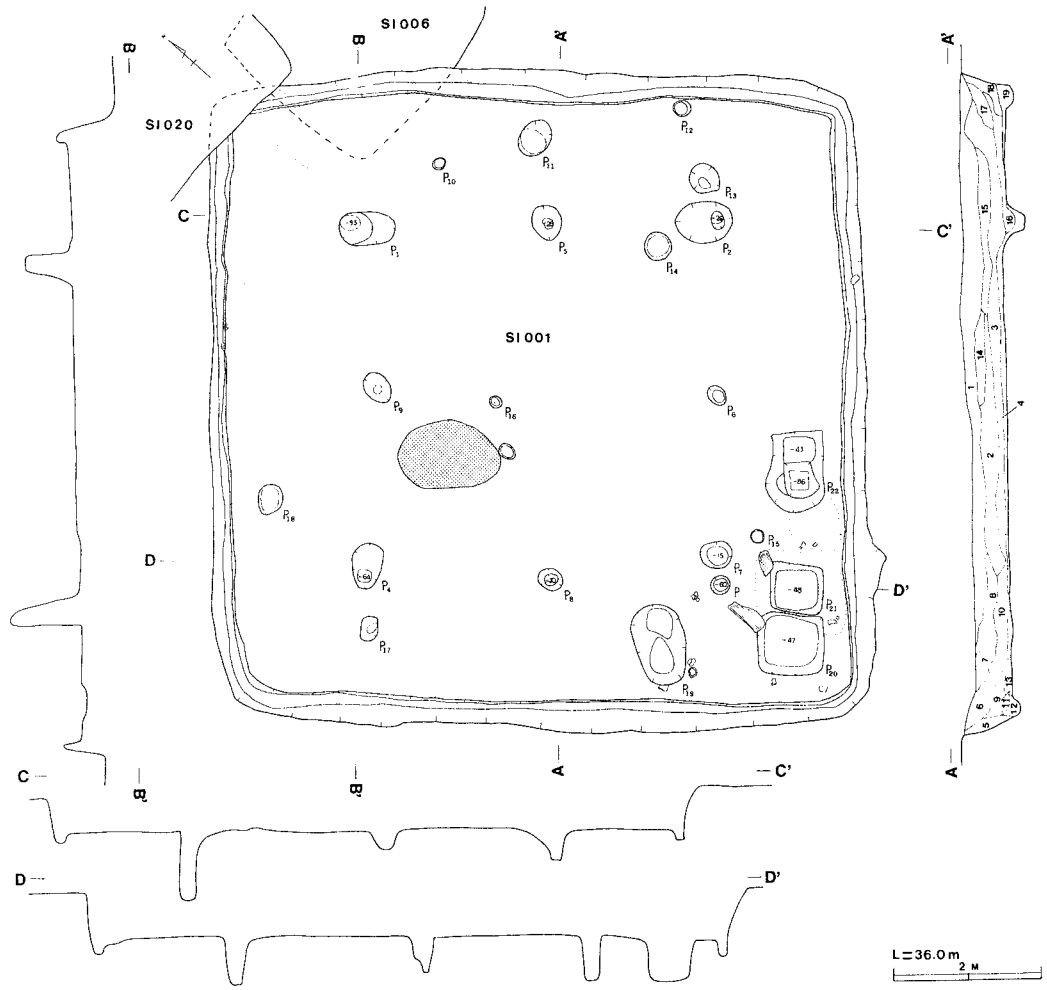
1　住居址

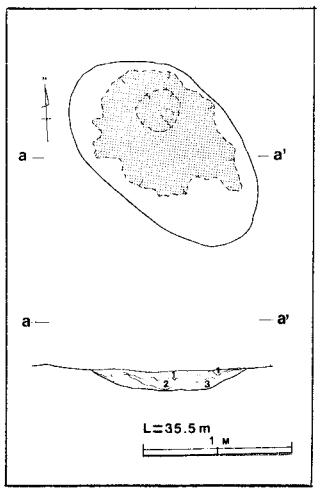
第１号住居址（図４・５）

本住居址は，調査区の北東部Ａ４区ｈ４，ｈ５，ｉ３，ｉ４，ｉ５，ｉ６，Ｂ４区ａ４，ａ５に確認され，北コーナーには第６号住居址，第20号住居址が複合している。本址は第６号住居址，第20号住居址より古い遺構である。南コーナーに接して第２号住居址が検出されている。本址は隅丸正方形を呈し，主軸方向は，Ｎ－47°－Ｅで規模は長軸8.85m，短軸は8.83mで面積は63.8㎡を測る。壁高は53cm～72cmほどで、　壁はほぼ垂直に立ちあがり，壁面の遺存状態は良好である。壁下には幅15cm，深さ20cm内外の壁溝が全周している。床面は，ほぼ平坦で炉址附近は硬く壁にそって約１ｍ内外は軟らかく貼り床となっている。炉址は本址の中央からやや西よりに位置し，規模は長径152cm，短径89cmで焼成部は，皿状に深さ約25cmほど堀り窪めており焼土が充満している。南東部床面から炭化物を出土し，壁にそって多量の焼土を出土しているので本址は火災に遭遇していると思われる。ピットは22個所確認されＰ１～Ｐ８は主柱穴と考えられ，Ｐ９～Ｐ10は補助穴と思われる。南コーナのＰ19，Ｐ20，Ｐ21，Ｐ22は貯蔵穴と思われ，Ｐ20の規模は長辺90cm，短辺82cm，深さ52cm，Ｐ21の規模は長辺72cm，短辺65cmを測り正方形を呈し，Ｐ22の規模は長辺107cm，短辺82cm，深さ43～86cmを測り不整方形を呈している。覆土は19層からなり自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土で極少量のローム粒子を含み，中層は褐色土・暗褐色土で多量のローム粒子と極少量の焼土粒子を含み，下層は，暗褐色土で多量のローム粒子と極少量の焼土粒子，黒色土を含んでいる。出土遺物は，土師器が中心で完存率の良好な物をあげると，南コーナーのＰ19付近床面・床面直上から小型壺片，手捏土器（図５－３），坩底部（図５－１），北コーナー床面から坏，北東壁中央床面から坏片と，北西壁際中央部溝から坏（図５－２）を，南東部床面直上より甕底部，南西部床面直上より壺破片を出土し，他に台付甕片，坩，器台，高坏などの細片を多数出土している。その他の出土遺物は，北東壁際中ほどの，床面直上から未完成の勾玉（図５－５），他に砥石（図５－６），軽石（図５－７），弥生式土器片を多数出土している。本址は出土遺物等から古墳時代の五領期に比定される遺構と思われる。

第２号住居址　（図６～８）

本住居址は，調査区遺跡の北東部Ｂ４区ａ４，ａ５，ａ６，ｂ４，ｂ５，ｂ６に確認され，北側には，北西コーナーに接して第４号住居址が確認され，西側0.5mには，第７号土壙，第12号土壙がが検出されている。南壁中央部に第６号土壙が切り込んでおり，本址は第６号土壙より古い遺構である。本址の主軸方向はＮ－70°－Ｗで規模は長軸5.56m，短軸5.32m，面積23.7㎡を測る隅丸長方形を呈している。東壁中央部に半円形の張り出しを有しており，壁高は50cm～61cmほどで，壁は





土層解説

A－A′

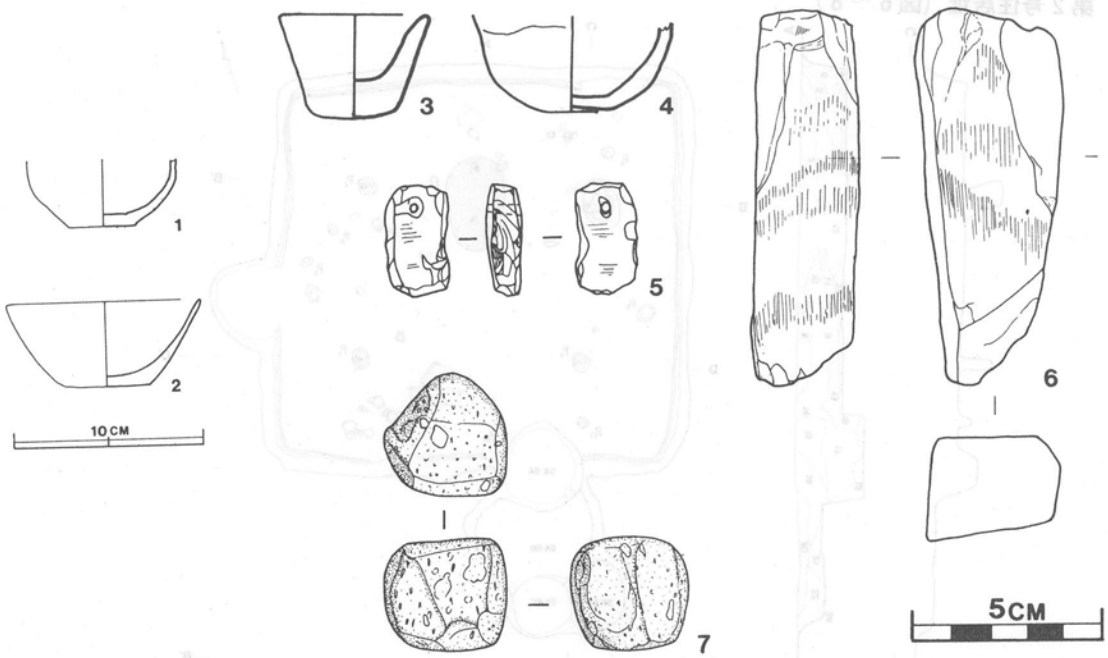
1. 暗褐色
2. にぶい黄褐色　ローム粒子(多)含有
3. 暗褐色　ローム粒子(少)焼土粒子(極少)含有
4. 暗褐色　ローム土，黒色土含有
5. 褐　色　ローム粒子(多)含有
6. 暗褐色　ローム粒子(特多)含有
7. 黒褐色　ローム粒子(少)含有
8. 黒褐色　ローム粒子(少)含有
9. 黒褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(極少)含有
10. 暗褐色　ローム粒子(多)含有
11. 褐　色　焼土粒子(多)含有
12. 褐　色　ローム土(多)含有
13. 褐　色ローム土，焼土粒子，炭化粒子(極少)含有
14. 暗褐色　ローム粒子(少)焼土粒子(極少)含有
15. 暗褐色　ローム粒子(極少)焼土粒子(極少)含有
16. 暗褐色　ローム粒子(多)ローム土，黒色土含有
17. 暗褐色　ローム粒子(多)含有
18. 暗褐色　ローム粒子(多)焼土粒子(極少)含有
19. 暗褐色　ローム土，黒色土(多)含有

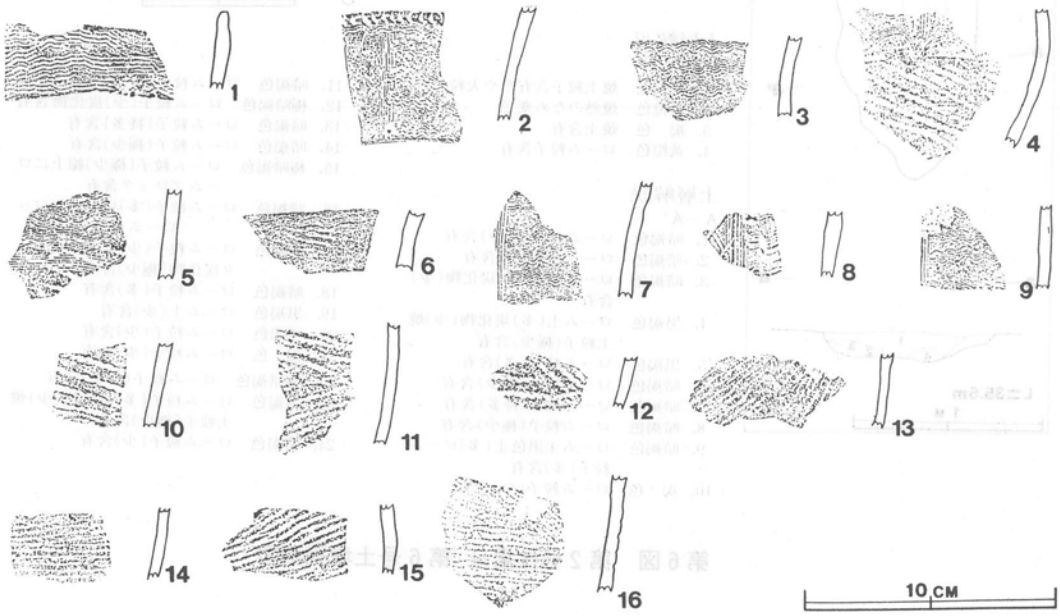
土層解説

a－a′

1. 暗褐色　焼土粒子含有
2. 褐　色　焼土含有
3. 黄橙色　ローム粒子含有

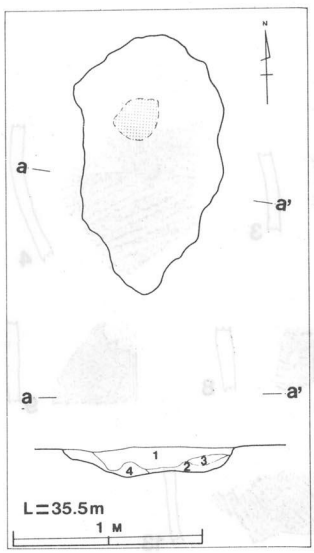
第4図　第1号住居址実測図





第5図　第1号住居址出土遺物実測・拓影図

第２号住居址（図６～８）



土層解説

a －a ′

1. 暗褐色　焼土粒子含有やや大粒
2. 黄橙色　焼熱のため変色
3. 褐　色　焼土含有
4. 黄橙色　ローム粒子含有

土層解説

A－A′

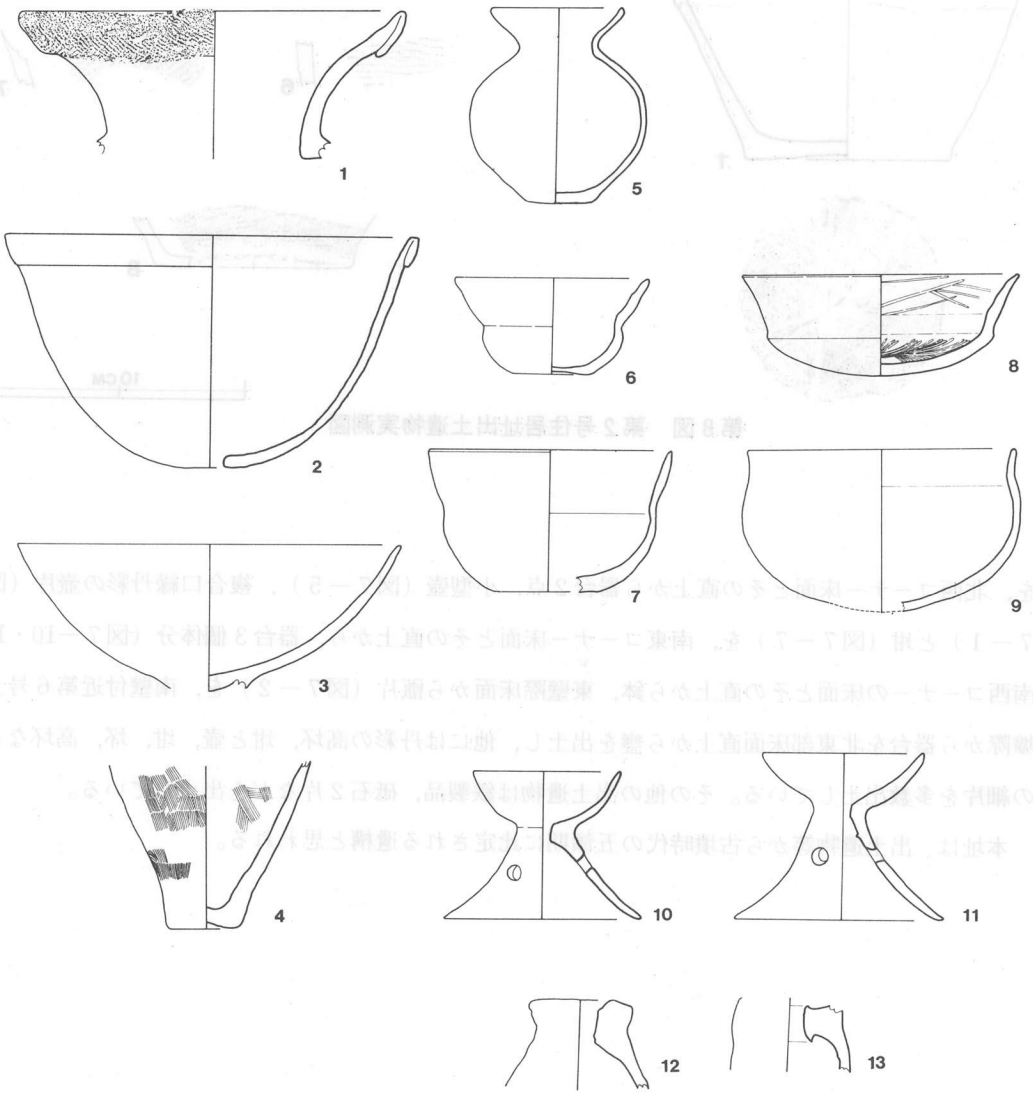
1. 暗褐色　ローム粒子(極少)含有
2. 暗褐色　ローム粒子(少)含有
3. 暗褐色　ローム粒子(少)炭化物(少)含有
4. 黒褐色　ローム土(多)炭化物(少)焼土粒子(極少)含有
5. 黒褐色　ローム粒子(多)含有
6. 暗褐色　ローム粒子(極少)含有
7. 暗褐色　ローム粒子(特多)含有
8. 暗褐色　ローム粒子(極少)含有
9. 暗褐色　ローム土黒色土(多)ローム粒子(多)含有
10. 褐　色　ローム粒子(少)含有
11. 暗褐色　ローム粒子(少)含有
12. 極暗褐色　ローム粒子(少)炭化物含有
13. 暗褐色　ローム粒子(特多)含有
14. 暗褐色　ローム粒子(極少)含有
15. 極暗褐色　ローム粒子(極少)線上にロームブロック含有
16. 暗褐色　ローム粒子(多)ロームブロックローム粒子(少)含有
17. 黒褐色　ローム粒子(少)ロームブロック炭化物(極少)含有
18. 暗褐色　ローム粒子(多)含有
19. 黒褐色　ローム土(少)含有
20. 暗褐色　ローム粒子(少)含有
21. 褐　色　ローム粒子(少)含有
22. 極暗褐色　ローム粒子(極少)含有
23. 黒褐色　ローム粒子(多)炭化物(少)焼土粒子(極少)含有
24. 暗褐色　ローム粒子(少)含有

第６図　第２号住居址・第６号土壙実測図

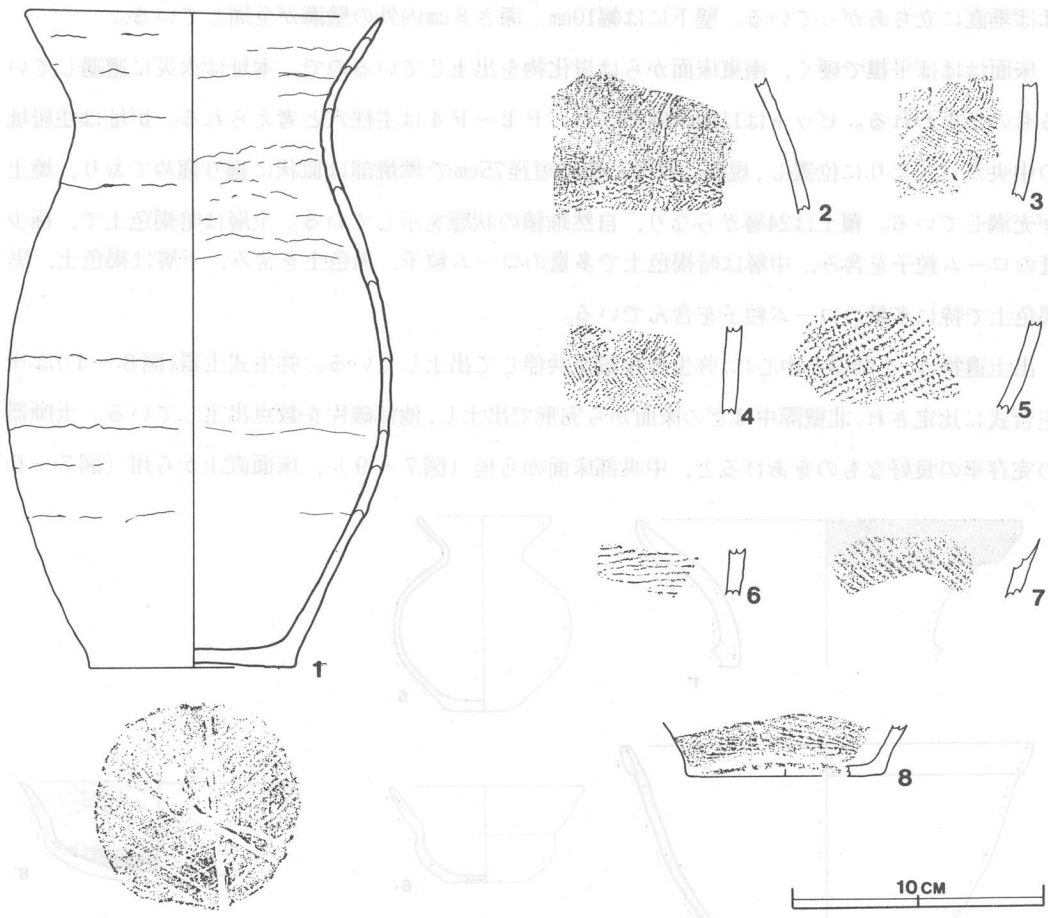
ほぼ垂直に立ちあがっている。壁下には幅10cm，深さ８cm内外の壁溝が全周している。

床面はほぼ平担で硬く，南東床面からは炭化物を出土しているので，本址は火災に遭遇しているものと思われる。ピットは11個所確認され，Ｐ１～Ｐ４は主柱穴と考えられる。炉址は住居址の中央から北よりに位置し，規模は長径135cm，短径75cmで燃焼部は皿状に掘り窪めており，焼土が充満している。覆土は24層からなり，自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土で，極少量のローム粒子を含み，中層は暗褐色土で多量のローム粒子，黒色土を含み，下層は褐色土，黒褐色土で特に多量のローム粒子を含んでいる。

出土遺物は，土師器を中心に，弥生式土器を共伴して出土している。弥生式土器（図８－(1)）は十王台式に比定され，北壁際中ほどの床面から完形で出土し，他は破片を数点出土している。土師器の完存率の良好なものをあげると，中央部床面から椀（図７－９），床面直上から坩（図７－６）



第７図　第２号住居址出土遺物実測図



第8図　第2号住居址出土遺物実測図

を，北西コーナー床面とその直上から器台2点，小型壺（図7－5），複合口縁丹彩の壺片（図7－1）と坩（図7－7）を，南東コーナー床面とその直上から，器台3個体分（図7－10・11）南西コーナーの床面とその直上から鉢，東壁際床面から甑片（図7－2）を，南壁付近第6号土壙際から器台を北東部床面直上から甕を出土し，他には丹彩の高坏，坩と壺，坩，坏，高坏などの細片を多数出土している。その他の出土遺物は鉄製品，砥石2片などを出土している。

本址は，出土遺物等から古墳時代の五領期に比定される遺構と思われる。

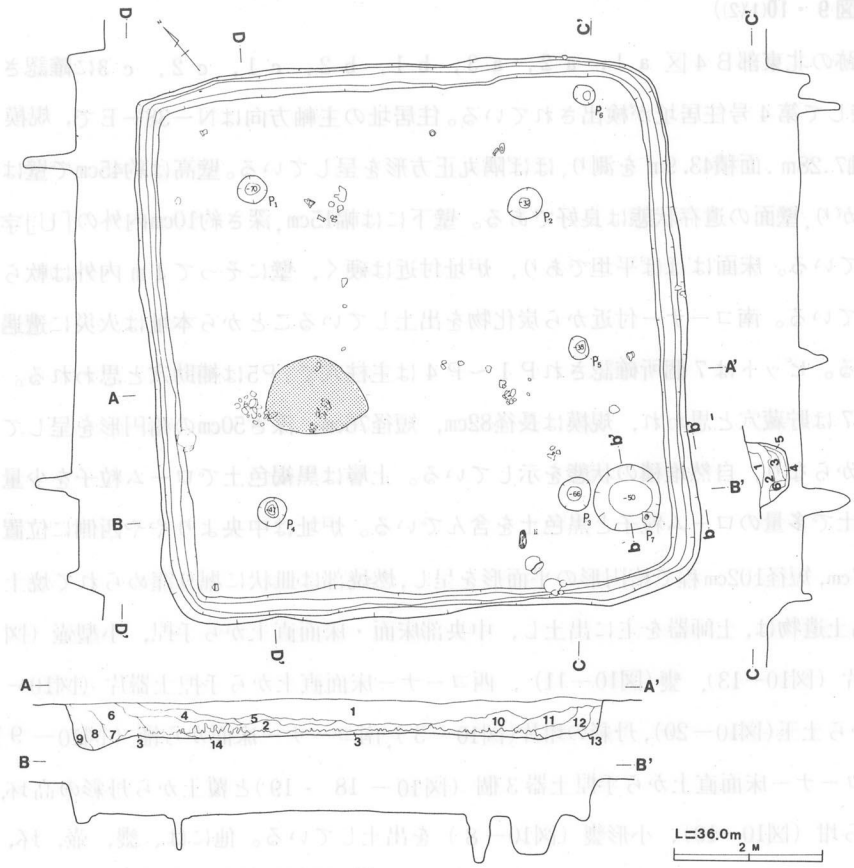
第３号住居址（図９・10(1)(2)）

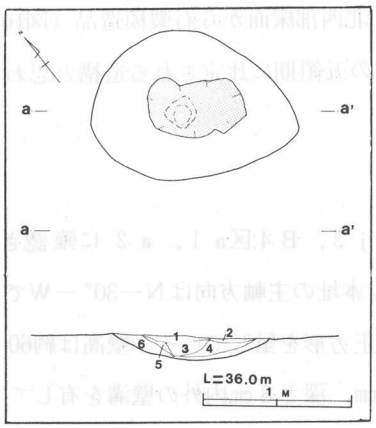
本住居址は，遺跡の北東部Ｂ４区ａ１，ａ２，ａ３，ｂ１，ｂ２，ｃ１，ｃ２，ｃ３に確認され，北コーナーに接して第４号住居址が検出されている。住居址の主軸方向はＮ－38°－Ｅで，規模は長軸7.35m，短軸7.28m．面積43.9㎡を測り，ほぼ隅丸正方形を呈している。壁高は約45cmで壁はほぼ垂直に立ちあがり，壁面の遺存状態は良好である。壁下には幅15cm，深さ約10cm内外の「Ｕ」字形の壁溝が全周している。床面はほぼ平坦であり，炉址付近は硬く，壁にそって１ｍ内外は軟らかく貼り床となっている。南コーナー付近から炭化物を出土していることから本址は火災に遭遇していると思われる。ピットは７個所確認されＰ１～Ｐ４は主柱穴で，P5は補助穴と思われる。南東コーナーのＰ７は貯蔵穴と思われ，規模は長径82cm，短径76cm，深さ50cmの楕円形を呈している。覆土は13層からなり，自然堆積の状態を示している。上層は黒褐色土でローム粒子を少量含み，下層は褐色土で多量のローム粒子と黒色土を含んでいる。炉址は中央よりやや西側に位置し，規模は長径137cm，短径102cm程で楕円形の平面形を呈し，燃焼部は皿状に掘り窪められて焼土が充満している。出土遺物は，土師器を主に出土し，中央部床面・床面直上から手捏，小型壺（図10－５），飾器台片（図10－13），甕（図10－11），西コーナー床面直上から手捏土器片（図10－17）東部床面直上から土玉（図10－20），丹彩の坩片（図10－３），南コーナー床面から甑（図10－９）甕（図10－７），北コーナー床面直上から手捏土器３個（図10－18・19）と覆土から丹彩の高坏，南西部床面直上から坩（図10－10），小形甕（図10－８）を出土している。他には、甕，壺，坏，坩などの土師器片を多数出土している。その他の出土遺物は、北西部床面から石製模造品（図10－21），砥石（図10－22）を出土している。本址は，古墳時代の五領期に比定される遺構と思われる。

第４号住居址（図11～13(1)(2)）

本住居址は，調査区の北西部Ａ４区ｉ１，ｉ２，ｊ１，ｊ２，ｊ３，Ｂ４区ａ１，ａ２に確認され，本址の南コーナーに接して第３号住居址が検出されている。本址の主軸方向はＮ－30°－Ｗで規模は，長軸5.60m，短軸5.68m，面積26.7㎡を測り，隅丸正方形を呈している。壁高は約60cmで，壁はほぼ垂直に立ちあがり，壁下には東・南壁を除き幅15cm，深さ８cm内外の壁溝を有している。

床面は暗褐色を呈し踏み固められて硬く，床面全域から焼土と，北東部の床面から多量の炭化



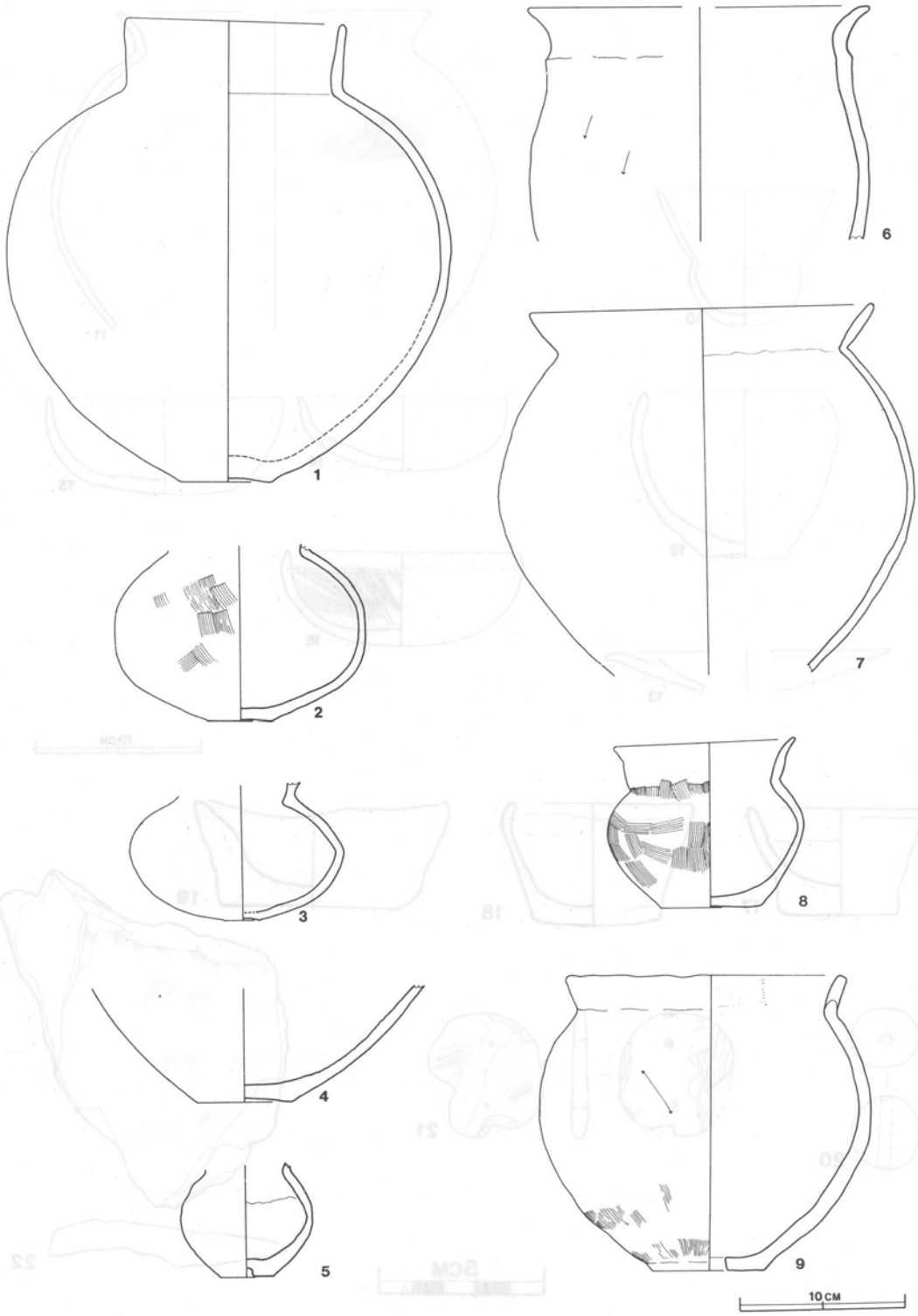


土層解説
A－A′
1. 暗褐色　非粘性
2. 黒褐色　ローム粒(少)含有
3. 褐　色　粘性，ローム粒混(多)黒色土混
4. 暗褐色　ローム粒　(微)含有
5. 暗褐色　ローム粒　(少)焼土粒　(微)含有
6. 暗褐色　ローム粒　(少)
7. 暗褐色　ローム粒　(少)焼土粒混(多)炭化粒(小)　含有
8. 暗褐色　ローム粒　(多)含有
9. 褐　色　ローム粒　(多)含有
10. 黒褐色　ローム粒　(微)焼土粒　(少)含有
11. 暗褐色　ローム粒　(少)含有
12. 暗褐色　ローム粒　(微)焼土粒混(少)炭化粒　(少)含有
13. 褐　色　ローム粒　(多)含有
14. 黒褐色　焼けたロームブロック　(少)焼土塊(多)含有

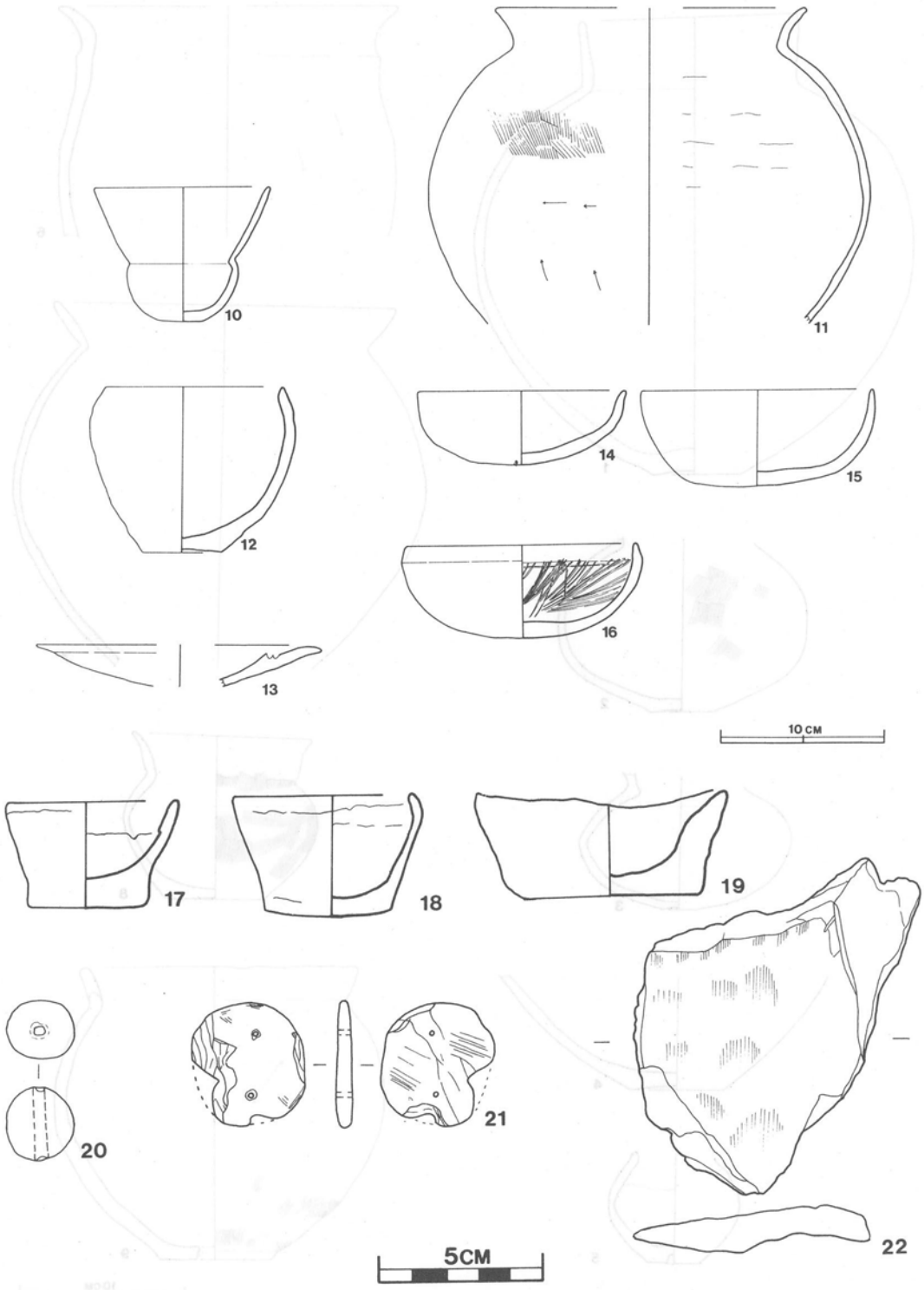
土層解説
a －a′
1. 黒褐色　ローム粒子(少)焼土粒子(多)含有
2. 黒褐色　ローム粒子(極少)焼土ブロック(少)含有
3. 極暗褐色　ローム粒子(多)焼土粒子(多)含有
4. 赤褐色　焼土ブロック
5. 明赤褐色　焼土ブロック
6. 赤褐色　焼けしまったローム土

土層解説
b －b′
1. 褐　色　ローム粒子(少)炭化物(極少)含有
2. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化物(多)焼土粒子(少)含有
3. 褐　色　ローム粒子(特多)含有
4. 暗褐色　ローム粒子(特多)含有
5. 褐　色　ローム粒子含有
6. 暗褐色　ローム粒子(多)含有

第9図　第 3号住居址実測図

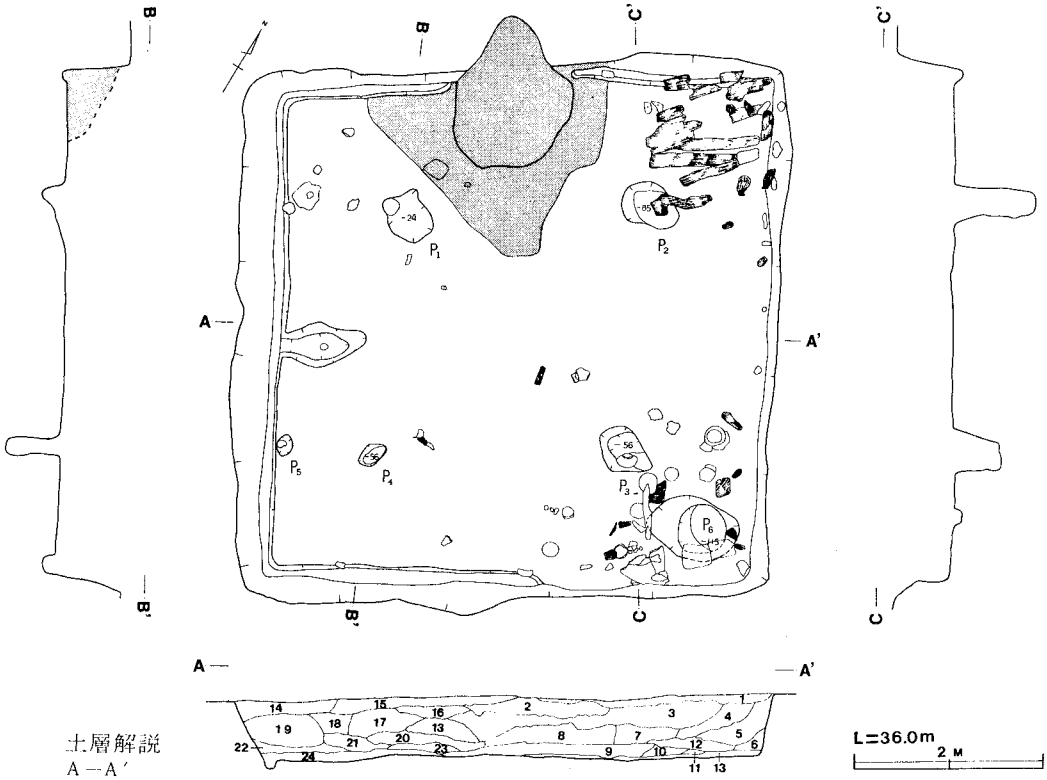


第10図（1） 第3号住居址出土遺物実測図



第10図（2） 第3号住居址出土遺物実測図

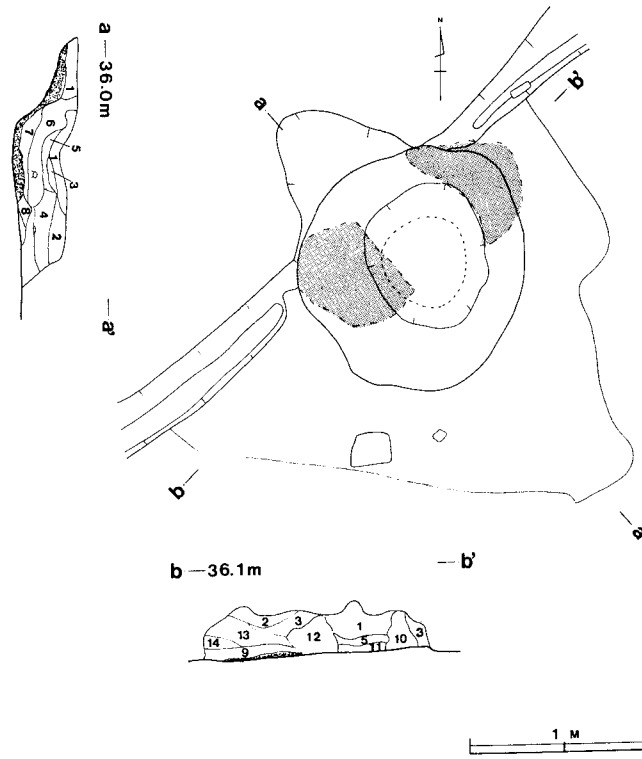
第４号住居址（図11～13(1)(2)）



土層解説
A－A′

1. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(中)含有
2. 暗褐色　ローム粒子(多)粘土ブロック(多)炭化粒子(多)含有
3. 暗褐色　ロームブロック(中) 粘土(少)炭化粒子(少)焼土粒子(極少)含有
4. 暗褐色　ローム粒子(特多)炭化物(中)焼土粒子(極少)含有
5. 暗褐色　ロームブロック(少)ローム粒子(多)炭化粒子(多)含有
6. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(多)焼土(多)含有
7. 暗褐色　ロームブロック，粘土粒子(中)炭化粒子(少)含有
8. 暗褐色　ローム粒子(多)ロームブロック(少)粘土ブロック(極少)炭化粒子(中)焼土粒子(極少)含有
9. 暗褐色　ロームブロック(少)ローム粒子(多)焼土粒子(少)粘土(少)炭化粒子(中)含有
10. 暗褐色　ロームブロック(少)ローム粒子(多)焼土粒子(特多)炭化粒子(多)焼土ブロック(多)含有
11. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(多)焼土粒子(中)含有
12. 暗褐色　ロームブロック(少)ローム粒子(極多)炭化粒子(多)焼土粒子(中)含有
13. 暗褐色　ローム粒子(中)炭化粒子(多)焼土粒子(中)含有
14. 暗褐色　ローム粒子(中)炭化粒子(中)焼土粒子(中)含有
15. 暗褐色　ローム粒子(多)焼土粒子(少)炭化粒子(中)焼土粒子(中)含有
16. 暗褐色　ロームブロック(少)ローム粒子(多)粘土粒子(中)炭化粒子(中)焼土粒子(中)含有
17. 暗褐色　ロームブロック(多)ローム粒子(特多)粘土粒子(中)炭化粒子(中)含有
18. 暗褐色　ローム粒子(特多)炭化粒子(中)粘土粒子(中)焼土粒子(少)含有
19. 暗褐色　ローム粒子(特多)粘土ブロック(特多)焼土粒子(少)炭化粒子(中)含有
20. 暗褐色　ロームブロック(中)ローム粒子(多)焼土粒子(中)炭化粒子(中)粘土粒子(中)含有
21. 暗褐色　ローム粒子(多)焼土ブロック(多)炭化物(多)焼土，木炭(多)含有
22. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(多)焼土粒子(少)含有
23. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化物(中)焼土ブロック(中)粘土粒子(中)含有
24. 暗褐色　ロームブロック(多)焼土粒子(少)含有

第11図　第４号住居址実測図

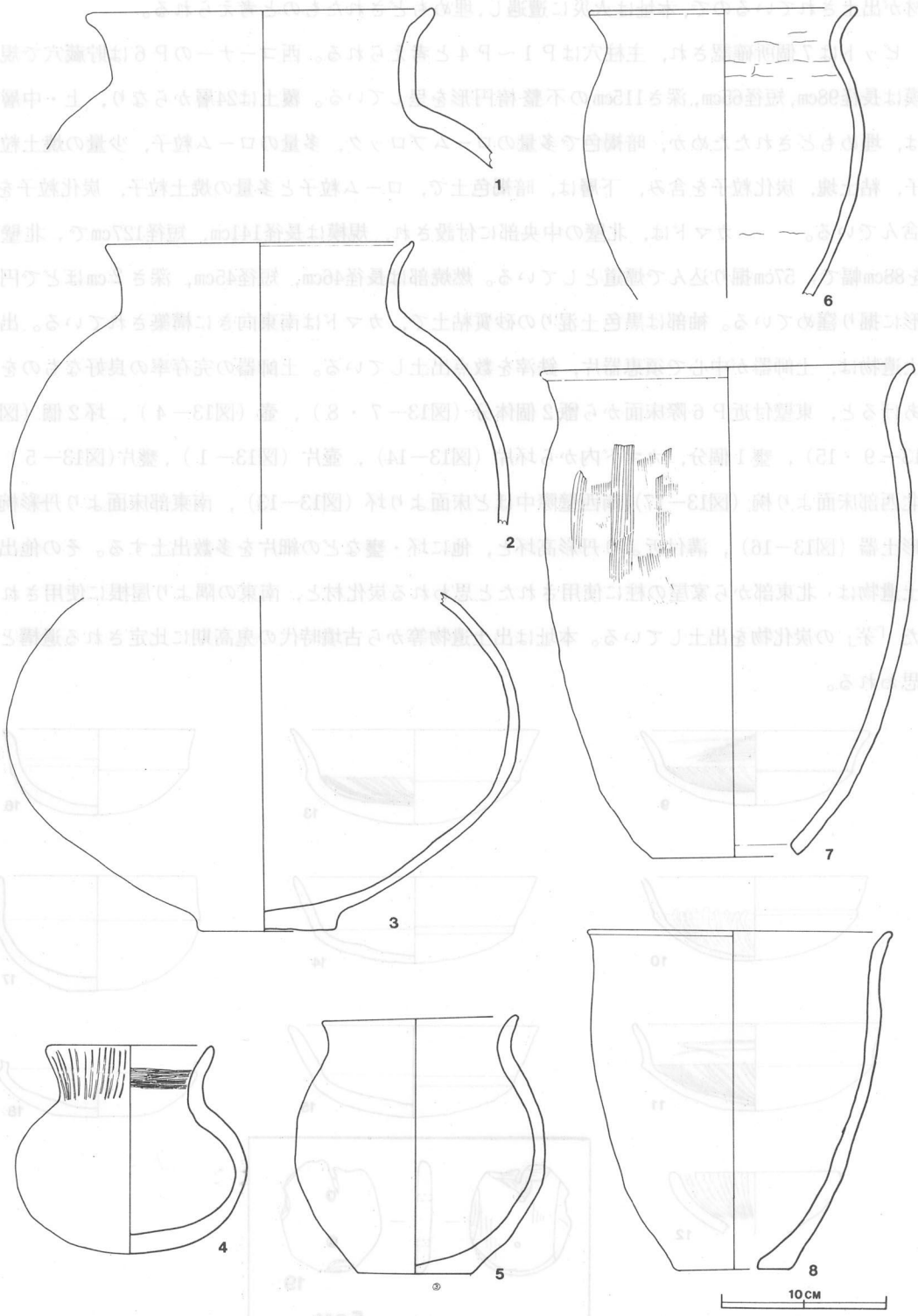


土層解説

a —a′ b —b′

1. 暗褐色 ローム粒子(極少)焼土粒子(少) 砂粒子(多)粘土(少)含有
2. 暗褐色 ローム粒子(多)炭化粒子(少)焼土粒子(少)砂粒子(多)粘土(多)含有
3. 暗褐色 ローム粒子(多)焼土粒子(少)粘土(多)含有
4. 暗褐色 ローム粒子(少)炭化粒子(極少)焼土粒子(多)含有
5. 暗褐色 ローム粒子(少)炭化粒子(極少)焼土粒子(多)砂粒子(少)含有
6. 褐 色 焼土粒子(特多)含有
7. 暗褐色 ローム粒子(少)焼土粒子(特多)含有
8. 褐 色 ローム粒子(少)炭化粒子(少)焼土粒子(多)含有
9. 褐 色 ローム粒子(多)炭化粒子(少)焼土粒子(多)砂粒子(多)含有
10. 灰黄褐色 ローム粒子(多)炭化粒子(少) 砂粒子(多)含有
11. 黒褐色 ローム粒子(多)炭化粒子(多) 焼土粒子(多)含有
12. 暗褐色 ローム粒子(多)炭化粒子(多) 焼土粒子(多)含有
13. 暗褐色 ローム粒子(特多)炭化粒子(多) 焼土粒子(多)含有
14. 暗褐色 ローム粒子(多)炭化粒子(多) 焼土粒子(多)含有

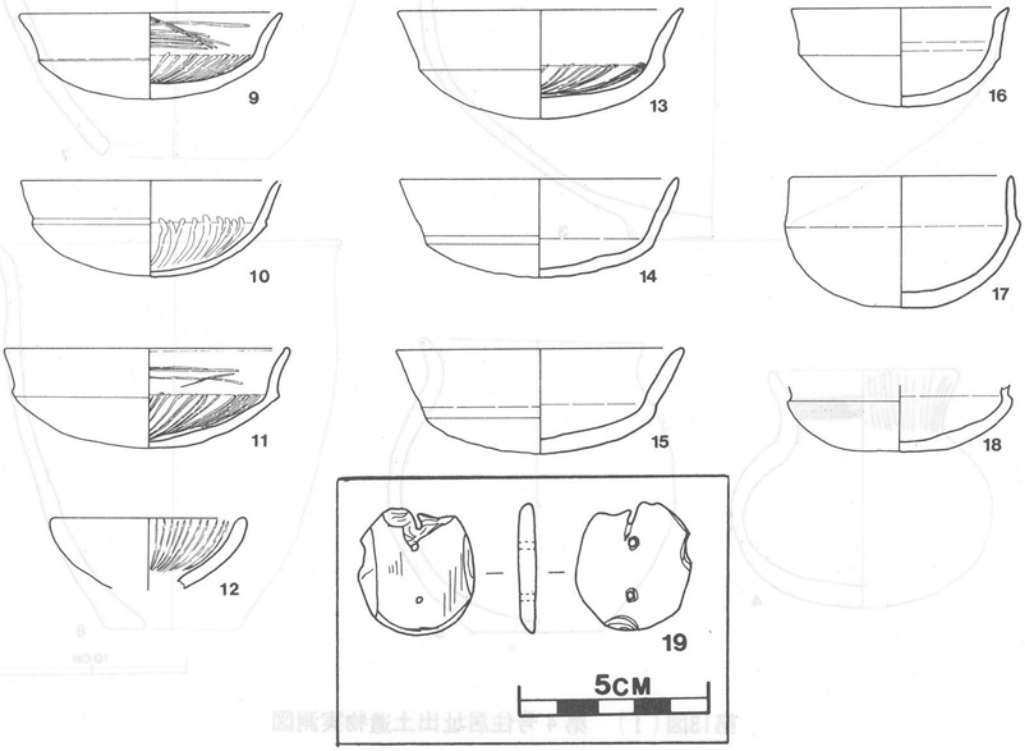
第12図　第４号住居址カマド実測図



第13図（1）　第4号住居址出土遺物実測図

材が出土されているので，本址は火災に遭遇し，埋めもどされたものと考えられる。

ピットは７個所確認され，主柱穴はＰ１～Ｐ４と考えられる。西コーナーのＰ６は貯蔵穴で規模は長径98cm，短径65cm，深さ115cmの不整楕円形を呈している。覆土は24層からなり，上・中層は，埋めもどされたためか，暗褐色で多量のロームブロック，多量のローム粒子，少量の焼土粒子，粘土塊，炭化粒子を含み，下層は，暗褐色土で，ローム粒子と多量の焼土粒子，炭化粒子を含んでいる。　　カマドは，北壁の中央部に付設され，規模は長径141cm，短径127cmで，北壁を88cm幅で，57cm掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径46cm，短径45cm，深さ２cmほどで円形に掘り窪めている。袖部は黒色土混りの砂質粘土で，カマドは南東向きに構築されている。出土遺物は，土師器が中心で須恵器片，鉄滓を数点出土している。土師器の完存率の良好なものをあげると，東壁付近Ｐ６際床面から甑２個体分（図13－７・８），壺（図13－４），坏２個（図13－９・15），甕１個分，カマド内から坏片（図13－14），壺片（図13－１），甕片（図13－５）北西部床面より椀（図13－17）南西壁際中ほど床面より坏（図13－13），南東部床面より丹彩椀形土器（図13－16），溝付近より丹彩高坏と，他に坏・甕などの細片を多数出土する。その他出土遺物は，北東部から家屋の柱に使用されたと思われる炭化材と，南東の隅より屋根に使用された「茅」の炭化物を出土している。本址は出土遺物等から古墳時代の鬼高期に比定される遺構と思われる。



第13図（２）　第４号住居址出土遺物実測図

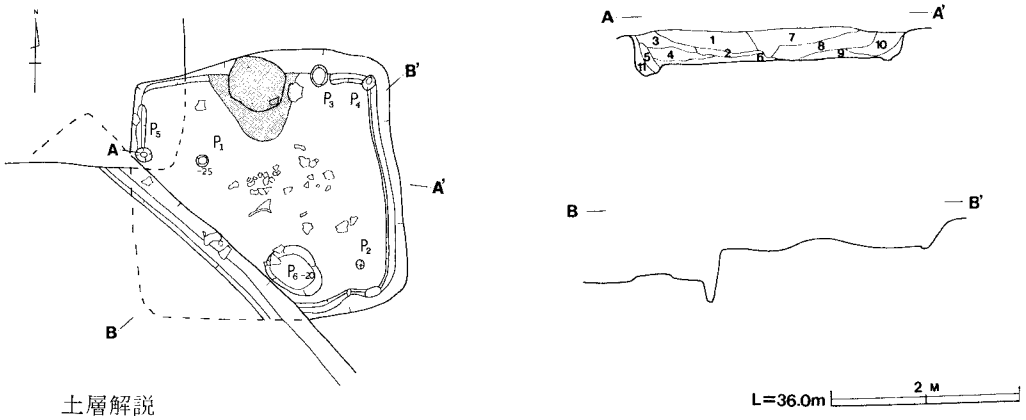
10CM

第６号住居址（図14～16）

本住居址は，調査区の北部Ａ４区ｈ５，ｉ５に確認され，本址の西・南部は第１号・第20号住居址の上部に貼り床をして構築している。第１号・第20号住居址の床面との差は35cmほどである。

本址の主軸方向はＮ－９°－Ｅで，規模は長軸2.83m，短軸2.74m，面積5.9m²を測り隅丸正方形を呈している。壁高は約25cmほどで壁は緩やかに外傾して立ちあがっている。西コーナーと南壁は確認することができなかったが，壁下には，カマドの部分を除いて幅10cm，深さ5cm内外の壁溝を有している。床面は暗褐色で硬く踏み固められた状態を示している。ピットは６個所確認され，Ｐ１～Ｐ４は主柱穴と考えられる。南側中ほどのＰ６は貯蔵穴で，規模は長径61cm，短径47cm，深さ20cmの楕円形を呈している。覆土は11層からなり自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土で少量のローム粒子，炭化粒子と極少量の焼土粒子を含み，下層は極暗褐色土で少量のローム粒子を含んでいる。

カマドは北壁の中央部に付設され，規模は長径55cm，短径47cmであり，北壁を40cm幅で，12cmほど掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径23cm，短径17cmで不整楕円形に掘り窪めている。袖部は黒色土混りの砂質粘土で，カマドは南向きに構築されている。カマド東側に土止めとして大きな須恵器片を利用している。出土遺物は須恵器を中心に土師器が共伴して出土している。須

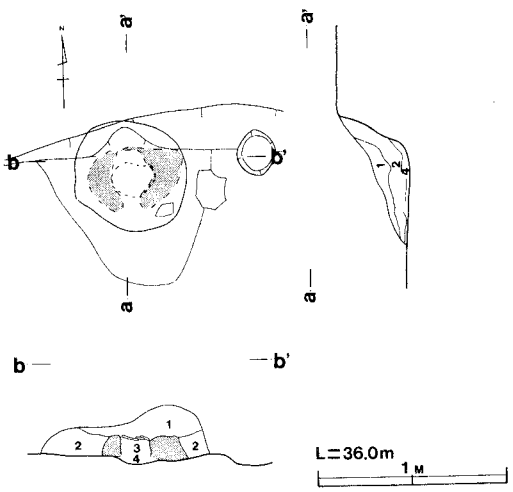


土層解説

Ａ－Ａ′

1. 褐　色　ローム粒子(少)含有
2. 暗褐色　ローム粒子(多)含有
3. 暗褐色　ローム粒子(少)含有
4. 黒褐色　ローム粒子(極少)含有
5. 暗褐色　ローム粒子(多)含有
6. 極暗褐色　ローム土(少)含有
7. 暗褐色　ローム粒子(少)砂粒子(極少)含有
8. 暗褐色　ローム粒子(少)炭化物(少)焼土粒子(極少)含有
9. 極暗褐色　ローム粒子(少)含有
10. 暗褐色　ローム粒子(多)含有
11. 褐色　ローム土(特多)含有

第14図　第６号住居址実測図



恵器は床面からほぼ完形の坏（図16－４）が出土し，他は坏などの細片を数点出土している。土師器はカマド付近床面から甕片（図16－２），南東部床面から甕片（図16－１）が，南西部から須恵器の甑片(図16－３)を出土している。他に覆土から小型甕，壺口縁部，など細片を多数出土している。

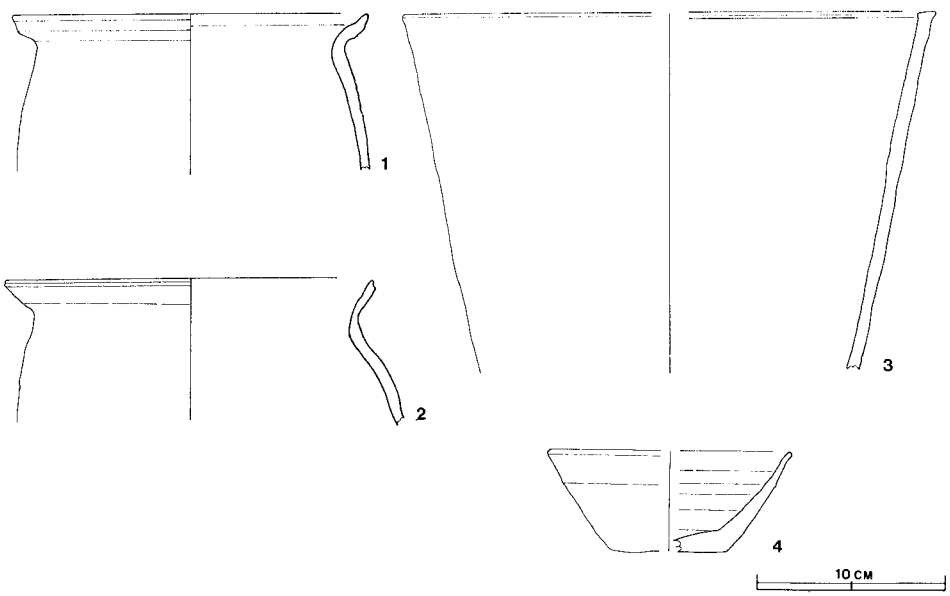
本址は出土遺物等から国分期に比定される遺構と思われる。

土層解説

a －a ′　b －b ′

1. 暗褐色　ローム粒子(多)焼土(少)炭化物(極少)砂粒子(多)含有
2. 〃　砂質粘土主体
3. 褐　色　ローム粒子(少)砂粒子(特多)含有火を受け床面のロームは焼土化
4. 暗褐色　ローム粒子(少)砂粒子(特多)含有焼土化

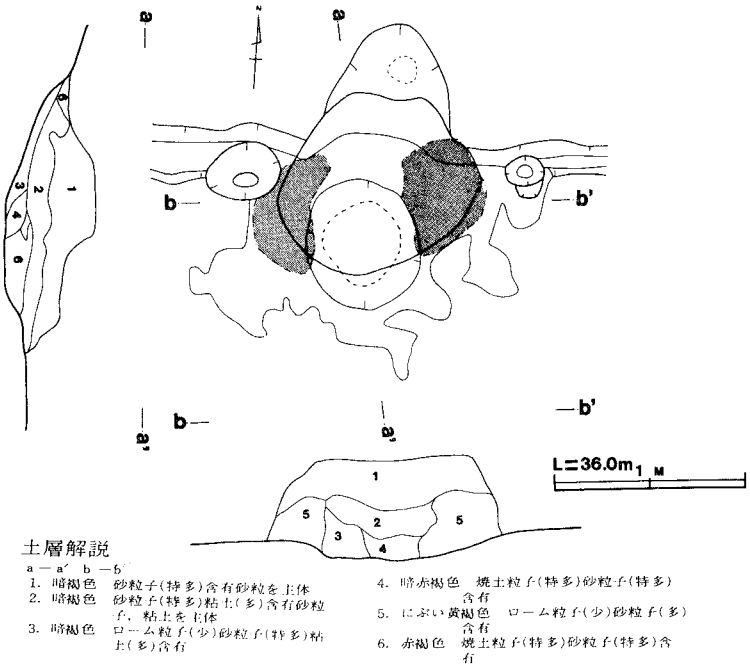
第15図　第６号住居址カマド実測図



第16図　第６号住居址出土遺物実測図

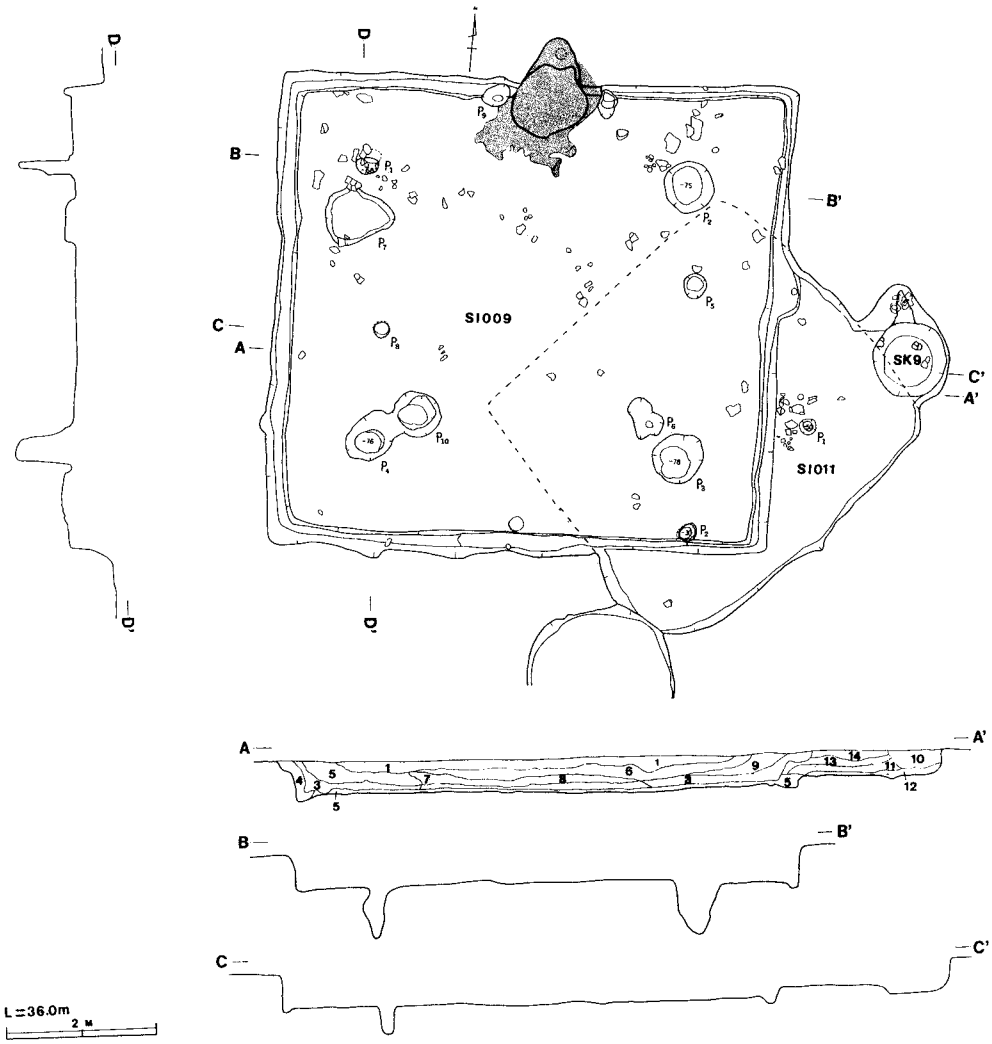
第９号住居址（図17～19）

本住居址は，調査区の北部中ほどＢ４区 ｄ３，ａ４，ａ５，ｅ３，ｅ４に確認され，南東コーナーは第11号住居址の約70％を削除し構築されている。本址は第11号住居址より新しい遺構である。北側には第５号土壙，第８号土壙が接しており，北側約２ｍには第７号住居址，北東0.5mには10号住居址が，南西4.0mには第12号住居址が検出されている。本址は，隅丸長方形の平面形を呈しており，主軸方向はＮ－１°－Ｅで，規模は長軸6.90m，短軸6.35m，面積39.0㎡を測り，壁高は40cm～50cmほどで，壁は垂直に立ち上がり，壁下には幅15cm，深さ8cm内外の「U」字形をした壁溝がカマド部を除いて廻っている。床面は暗褐色を呈し硬く踏み固められた状態をましている。北東床面から炭化物を出土していることから，本址は火災に遭遇していると思われる。ピットは11個所確認され，P1～P4は主柱穴と考えられる。貯蔵穴は検出できなかった。覆土は14層からなり自然堆積を示している。上層は暗褐色土で極小量のローム粒子を含有し，中層は暗褐色土で多量のローム粒子，少量のローム粒子を含み，下層は暗褐色土，極暗褐色土で多量のローム粒子，ロームブロックを含んでいる。カマドは北壁の中央から東よりに付設され，規模は長径150cm，短径122cmで，北壁を78cm幅で，65cmほど掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径45cm，短径40cmほどで円形に掘り窪められている。袖部は黒色土混りの砂質粘土で，カマドは南向きに構築されている。出土遺物は土師器が中心で，須恵器は坏などの破片が数点出土している。土師器の完存率の良好な物をあげると，カマド内とその付近から坏２個（図19－５・６），支脚２個体分，土玉，床面から坏（図19－７），覆土から坏２個（図19－４・８）と他に甕（図19２・３）坏，器台などの破片を多数出土している。その他の出土遺物は砥石（図19－９）　軽石，粘土と弥生式土器の十王台式に比定される破片を数点出土している。



第18図　第９号住居址カマド実測図

本址は出土遺物等から鬼高期に比定される遺構と思われる。

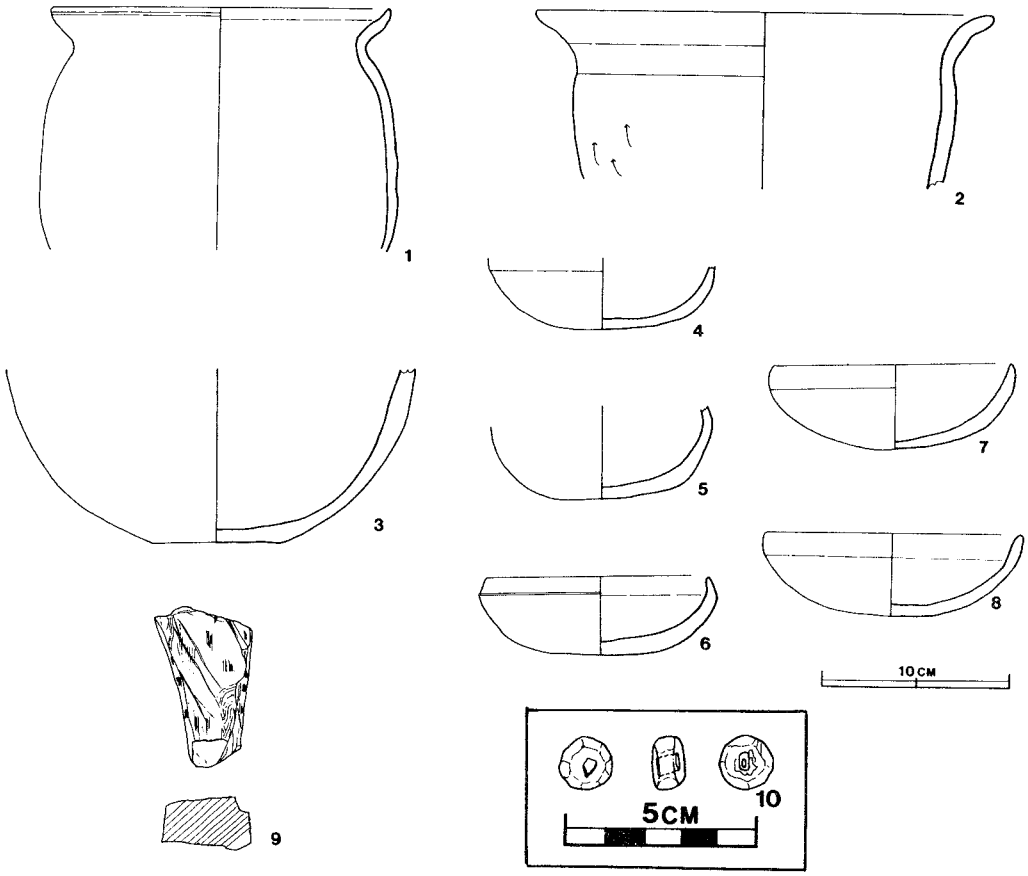


土層解説

A－A′

1. 暗褐色　ローム粒子(極少)含有
2. 暗褐色　ローム粒子(少)炭化物(極少)含有
3. 極暗褐色　ローム粒子(極少)炭化物(極少)焼土粒子(極少)含有
4. 褐色　ローム粒子(多)ローム土(少)含有
5. 極暗褐色　ローム土(多)含有
6. 暗褐色　ローム粒子(多)ロームブロック(少)含有
7. 暗褐色　ローム粒子(少)含有
8. 暗褐色　ローム粒子(多)含有
9. 極暗褐色　ローム粒子(少)焼土粒子(極少)含有
10. 極暗褐色　ローム粒子(少)含有
11. 暗褐色　ローム粒子(少)含有
12. 褐　色　ローム粒子(多)ローム土(多)含有
13. 暗褐色　ローム粒子(少)含有
14. 暗褐色　焼土(多)粘土塊，粘土粒子含有

第17図　第9・11号住居址実測図

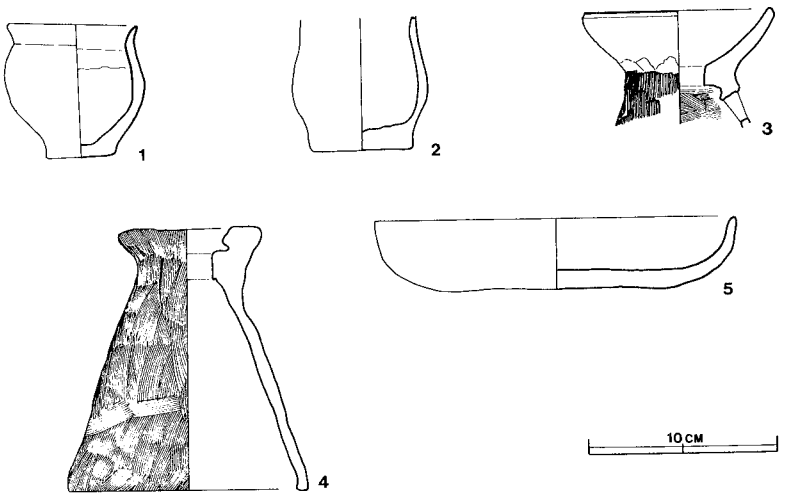


第19図　第９号住居址出土遺物実測図

第11号住居址（図17・20）

本住居址は，調査区の北部中ほどＢ４区ｄ４，ｄ５，ｅ３，ｅ４，ｅ５，ｆ４に確認され，第９号住居址が本址の65％を削除している。西コーナーには第９号土壙が複合して，本址は第９号住居址，第９号土壙より古い遺構である。東側0.5m には第８号住居址が，南東1.0m には第11号土壙が検出されており，南コーナーには第10号土壙が接している。南東壁と南西，北東の一部を残して他は確認することができなかった。本址は堆定で隅丸長方形を呈し，主軸方向はＮ－45°－Ｅで 規模は長軸4.80m，短軸は4.40mで，壁高は約30cm内外である。壁は垂直に立ちあがっており，壁溝は有しておらず，床面は平坦で硬い褐色土である。炉址は確認できなかった。Ｐ１・Ｐ２は主柱穴と思われるが，他の柱穴は検出することができなかった。覆土は４層からなり，第９号住居址と第９号土壙に削除されている以外は自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土で少量の

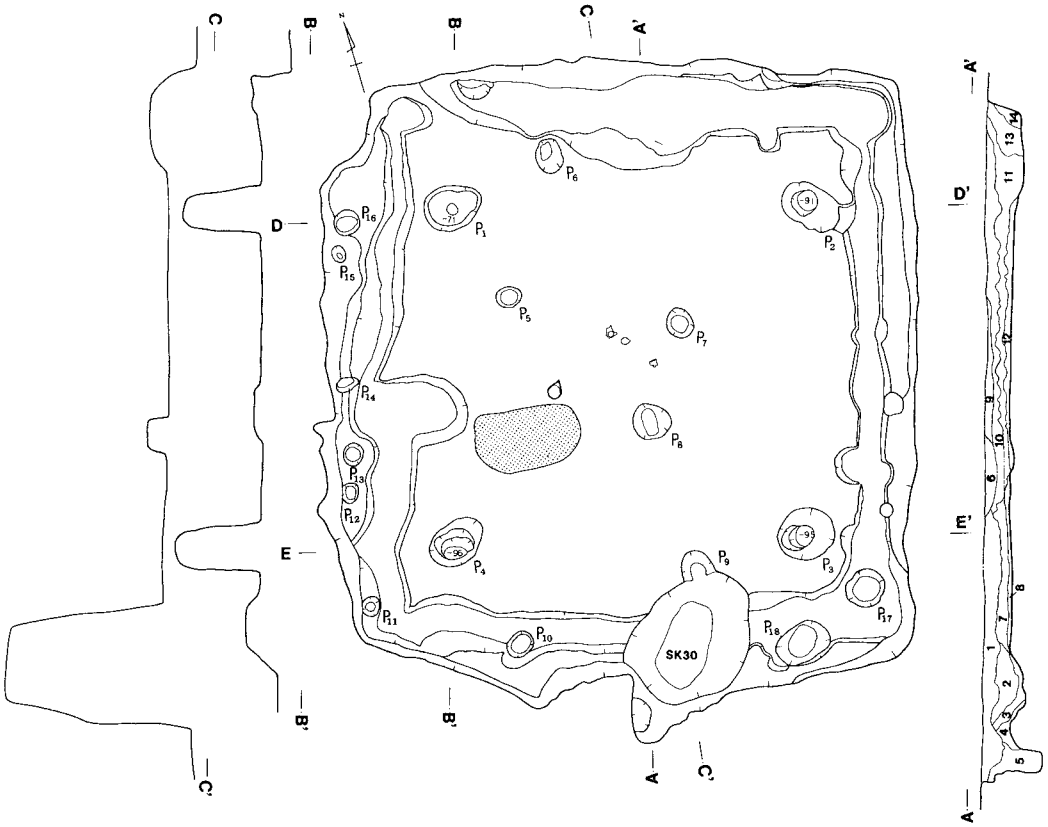
ローム粒子と焼土粒子，焼土塊を含み，下層は褐色土で多量のローム粒子，ローム土を含んでいる。出土遺物は土師器が中心であり　　完存率の良好なものを上げると，南東部床面直上から小型甕（図20—１），北東部Ｐ１付近床面とその直上から支脚（図20—４），小型甕（図20—２），器台（図20—３）を出土し，他は器台，坩，高坏，壺などの破片を多数出土している。その他の出土遺物は，北部床面から砥石を出土している。本址は出土遺物等から古墳時代の五領期に比定される遺構と思われる。

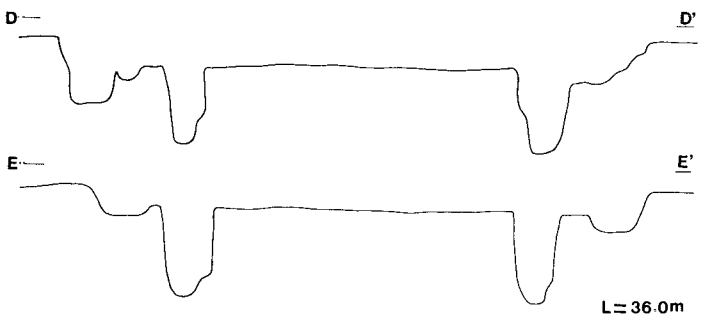


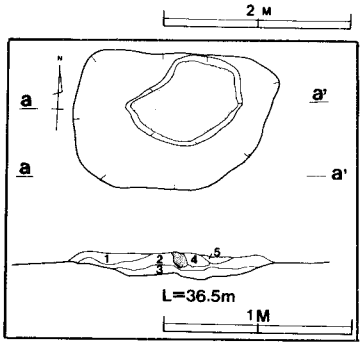
第20図　第11号住居址出土遺物実測図

第12号住居址（図21・22）

本住居址は，調査区の北部中ほどＢ３区ｅ０，ｆ０，Ｂ４区ｅ１，ｅ２，ｆ１，ｆ２に確認され，北西 1.2m には 第25号住居址が，西側4.0m には第９号住居址が，西側4.5m には第26号住居址と第31号住居址が検出されている。本址は隅丸長方形の平面形を呈し，主軸方向Ｎ—16°—Ｅで，規模は長軸6.52m，短軸6.32m，面積22.4㎡を測り，壁高は18cm～36cmほどである。壁は垂直に立ち上っており，壁下には幅30cm，深さ約15cmの壁溝が廻っている。床面の中央部は硬く踏み固められた状態を示しているが，壁にそって50cm～100cmほどは軟らかい。炉址は中央から西よりに位置し，規模は長径108cm，短径72cmを測り，不整楕円形の焼土の広がりを確認し，深さ25cmほど皿状に掘り窪められた内部には焼土が充満していた。ピットは18個所確認されＰ1～Ｐ は主柱穴と思われる。南壁際東よりに複合している第30号土壙の規模は，長径 150cm，短径115cm，深さ163cm を測り不整楕円形を呈している。第27号土壙，第28号土壙，第31号土壙と同じ性格の土壙







土層解説

a－a′

1. 暗褐色　黒色土，ローム粒子(中)焼土粒子(中)炭化粒子(中)含有
2. 暗褐色　ローム粒子(中)焼土粒子(中)炭化物(少)含有
3. 暗褐色　ローム粒子(中)焼土(多)炭化粒子(中)含有
4. 暗褐色　ロームブロック(少)焼土粒子(特多)炭化粒子(多)含有
5. 暗褐色　焼土ブロック，焼土粒子(多)ローム粒子(多)炭化粒子(多)含有

土層解説

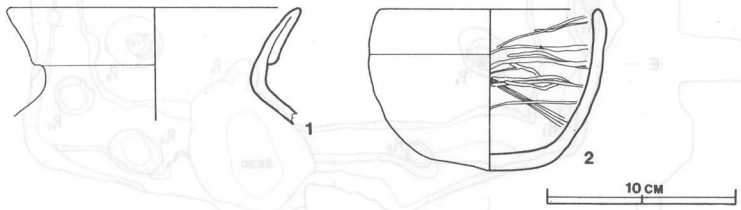
A－A′

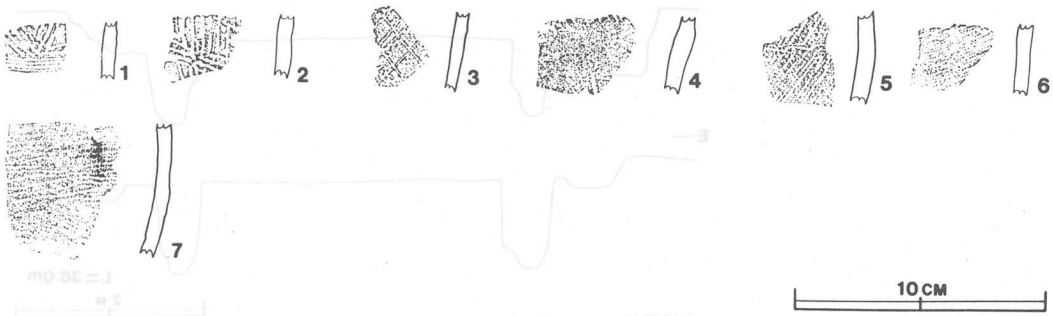
1. 黒褐色　ローム粒子(極少)含有
2. 暗褐色　ローム粒子(少)含有
3. 暗褐色　ローム粒子(多)含有
4. 褐　色　ローム土(特多)含有
5. 黒褐色　ローム粒子(多)黒色土(多)含有
6. 黒褐色　ローム粒子含有
7. 褐　色　ローム粒子(多)ローム土(少)含有
8. 褐　色　ローム土(特多)含有
9. 黒褐色
10. 黒褐色
11. 褐　色
12. 褐　色
13. 暗褐色　ローム粒子(多)含有
14. 暗褐色　ローム粒子(多)含有

第21図　第12号住居址・第30号土壙実測図

と考えられ，等間隔に検出されている。底部に水が湧いており，本址より古い遺構と思われる。覆土は10層からなり自然堆積の状態を示している。上層は極暗褐色土で極少量のローム粒子を含み，下層は暗褐色土・褐色土で，特に多量のローム土を含んでいる。出土遺物は，土師器が主で中央部床面から鉢（図22－２）南東部床面直上から壺口縁部（図22－１）を出土し，他は高坏などの破片を数点出土している。その他の出土遺物は軽石，鉄滓と弥生式土器の十王台式より古式の破片（図22－１～５）・他は十王台式に比定されるものと思われる破片を出土している。

本址は出土遺物等から古墳時代五領期に比定される遺構と思われる。

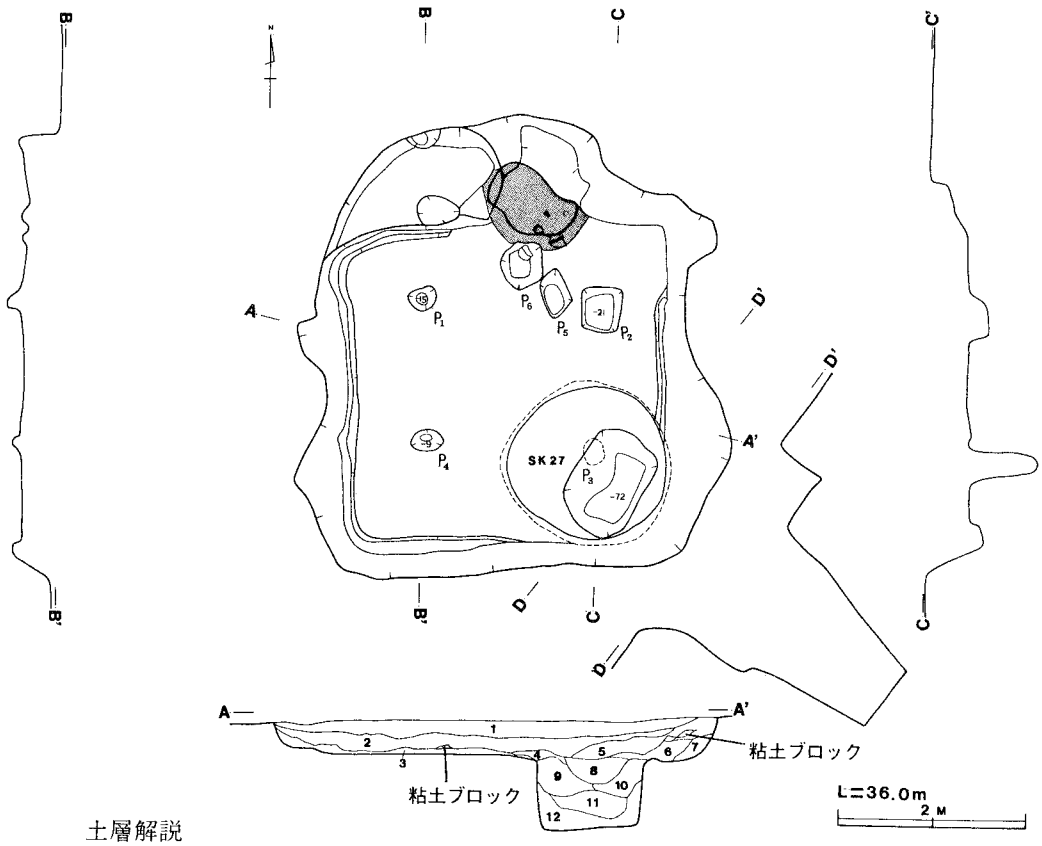




第22図　第12号住居址出土遺物実測・拓影図

第14号住居址（**図**23～25）

本住居址は，調査区の北東部Ｂ４区ｇ３，ｇ４，ｈ３，ｈ４に確認され，東側1.5m には第16号住居址が検出されている。本址は隅丸正方形の平面形を呈し，主軸方向はＮ－1.5°－Ｗで規模は長軸3.90m，短軸3.70m，面積17.0㎡を測り，北壁の西側の張りだしは　壁面が軟らかいための堀りすぎである。壁はゆるやかに外傾して立ち上がっている。壁下には，東・北壁の東側をのぞき幅18cm，深さ10cm前後の壁溝を有している。床面は暗褐色を呈し硬く踏み固められた状態を示している。ピットは６個所確認されＰ１～Ｐ４は主柱穴と考えられる。南東コーナーの第27号土壙Ｂ

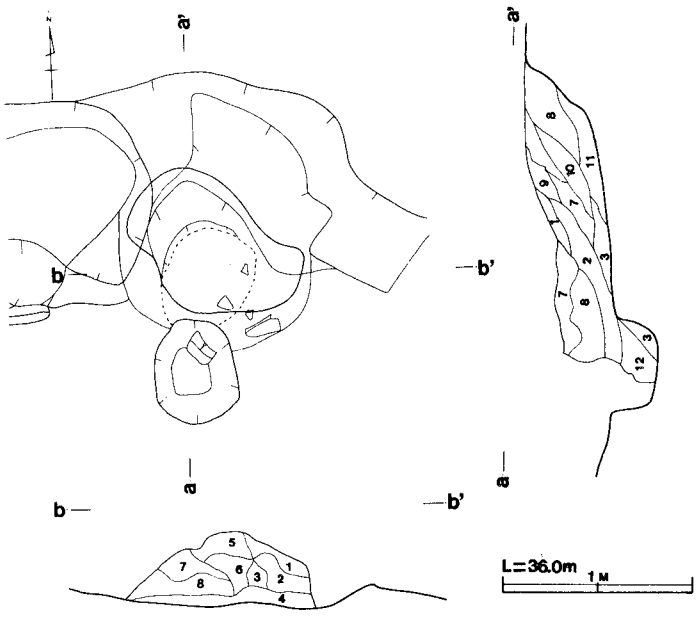


土層解説

Ａ－Ａ′

1. 暗褐色　ローム粒子(多)焼土粒子(極少)炭化物(微)含有
2. 暗褐色　ローム粒子(多)焼土粒子(微)炭化物(微)含有
3. 褐　色　ローム粒(多)焼土粒子(少)炭化物(少)含有。粘性なし
4. 暗褐色　ロームブロック，ローム粒，焼土粒(少)炭化粒含有
5. 暗褐色　ローム粒(多)焼土粒(少)炭化粒(多)含有。粘性なし
6. 暗褐色　ローム粒・小ブロック(多)焼土粒(微)含有
7. 暗褐色　ローム粒・小ブロック(多)炭化粒含有。粘性なし
8. 極暗褐色　ロームブロック，ローム粒子(少)含有
9. 暗褐色　ローム粒子(多)含有
10. 暗褐色　ロームブロック，ローム粒子(多)含有
11. 黒褐色　ローム粒子・小ブロック含有
12. 暗褐色　ローム粒子(多)ロームブロック(少)含有

第23図　第14号住居址　第27号土壙実測図



土層解説

1. 黒褐色　ローム粒子(極少)焼土粒子(少)砂粒子(多)灰(少)含有
2. にぶい黄褐色　ローム粒子(極少)炭化粒子(少)砂粒子(特多)灰(多)粘土(特多)含有粘土と砂粒子が主体
3. 暗褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(少)焼土粒子(特多)焼土(特多)含有
4. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子多)焼土粒子(極少)含有
5. 褐　色　ローム粒子(多)炭化粒子(少)焼土粒子(少)砂粒子(少)含有
6. 赤褐色　焼土粒子(特多)含有焼土化している
7. 暗赤褐色　炭化粒子(少)焼土粒子(特多)砂粒子(特多)含有焼土が多量に含まれブロック状になっているものもある。
8. 暗赤褐色　炭化粒子(少)焼土粒子(特多)砂粒子(多)含有粘土が焼け，ブロックになっている物もある
9. 暗褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(少)焼土粒子(多)砂粒子(多)粘土(多)含有
10. 暗褐色　炭化粒子(少)焼土粒子(特多)砂粒子(少)焼土(多)含有
11. 暗褐色　ローム粒子(特多)焼土粒子(極小)砂粒子(少)含有
12. 暗褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(極少)焼土粒子(多)焼土(多)含有

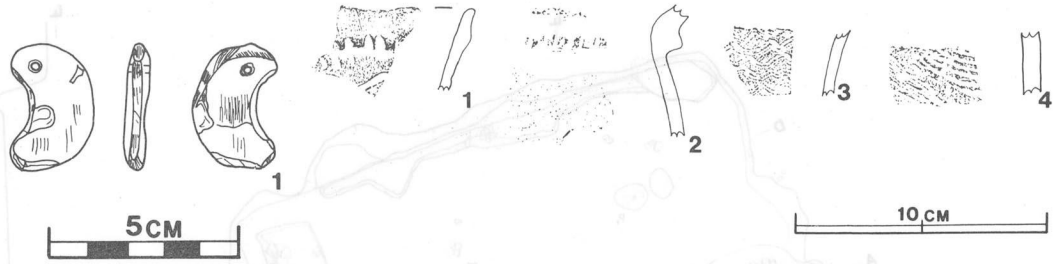
第24図　第14号住居址カマド実測図

は第31号土壙，第30号土壙，第28号土壙と同じ性格のものと思われ，規模は長径17.5cm，短径16.5cm，深さ25cmで楕円形の平面形を呈し，底部からは水が湧いている。

本土壙の上部に長径167cm，短径160cm，深さ58cmの円形状を呈する土壙第27号土壙Aが複合している。第27号土壙Aの内部から本址の南東部の柱穴を確認しているので，本址は土壙より新しい遺構と思われる。方形の第27号土壙Bは，円形の第27号土壙Aより古い遺構と思われる。本址の覆土は9層からなり自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土で多量のローム粒子と極少量の焼土粒子，炭化粒子を含み，下層は褐色土で多量のローム粒子，少量の焼土粒子，少量の炭化粒子を含んでいる。

カマドは，北壁の中央部に付設され，規模は長径99cm，短径94cmで，北壁を72cm幅で，55cmほど掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径57cm，短径49cmで楕円形に掘り窪めている。袖部は黒色土混りの砂質粘土で，カマドは南向きに構築され，袖部から坏片を出土しているが支脚として使用されたものと思われる。他に焚口部と燃焼部から土師器片を数点出土している。

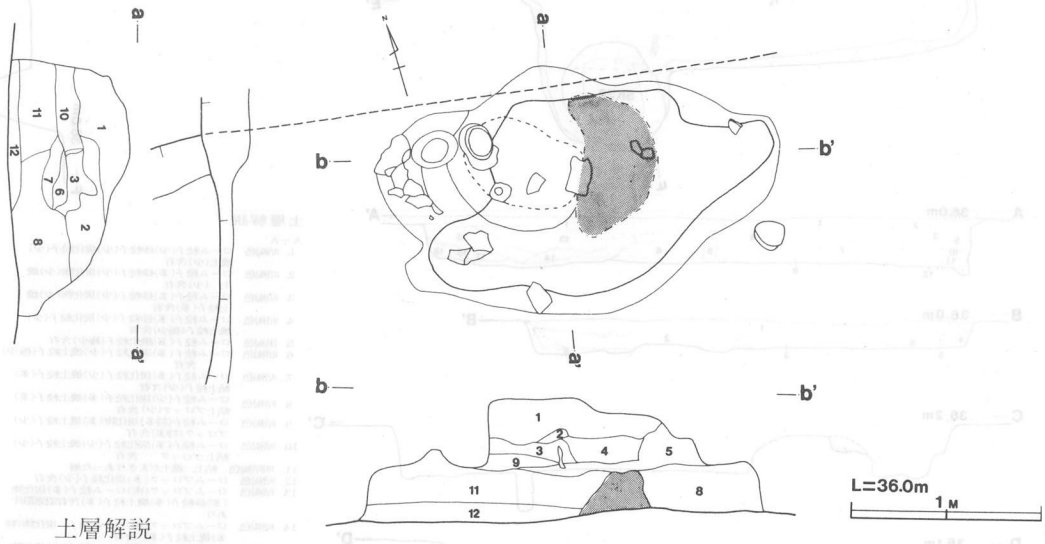
出土遺物は少量で，南壁際の焼土混りの床面より，内黒の坏を出土し，他に土師器の破片数点と須恵器の細片を多数出土している。その他の出土遺物は，弥生式土器片で十王台式より古い型式の破片数点と，壁際から鉄鏃と思われるものを出土し，石製の勾玉（図25－1）を覆土から出土している。本址は，出土遺物等から古墳時代の真間期に比定される遺構と思われる。



第25図　第14号住居址出土遺物実測・拓影図

第16号住居址（図26～28(1)(2)）

本住居址は調査区の北東部東側Ｂ４区　ｇ４，ｇ５，ｈ４，ｈ５に確認され，北東コーナーを中心に約50％ほど第18号住居址に切り込んでいる。その部分は第18号住居址の床面より約25cm，上部に貼り床をして構築している。本址は第18号住居址より新しい遺構で，カマドが第18号住居址の南西部に検出されている。南東コーナーには，第28号土壙が複合しており，規模は長径150cm，短径120cm，深さ215cmを測り，底部から水が湧いている。本址より古い遺構で第27号土壙，第30号土壙，第31号土壙と同じ性格の土壙である。西側1.5m には第14号住居址が，南側1.8m には第

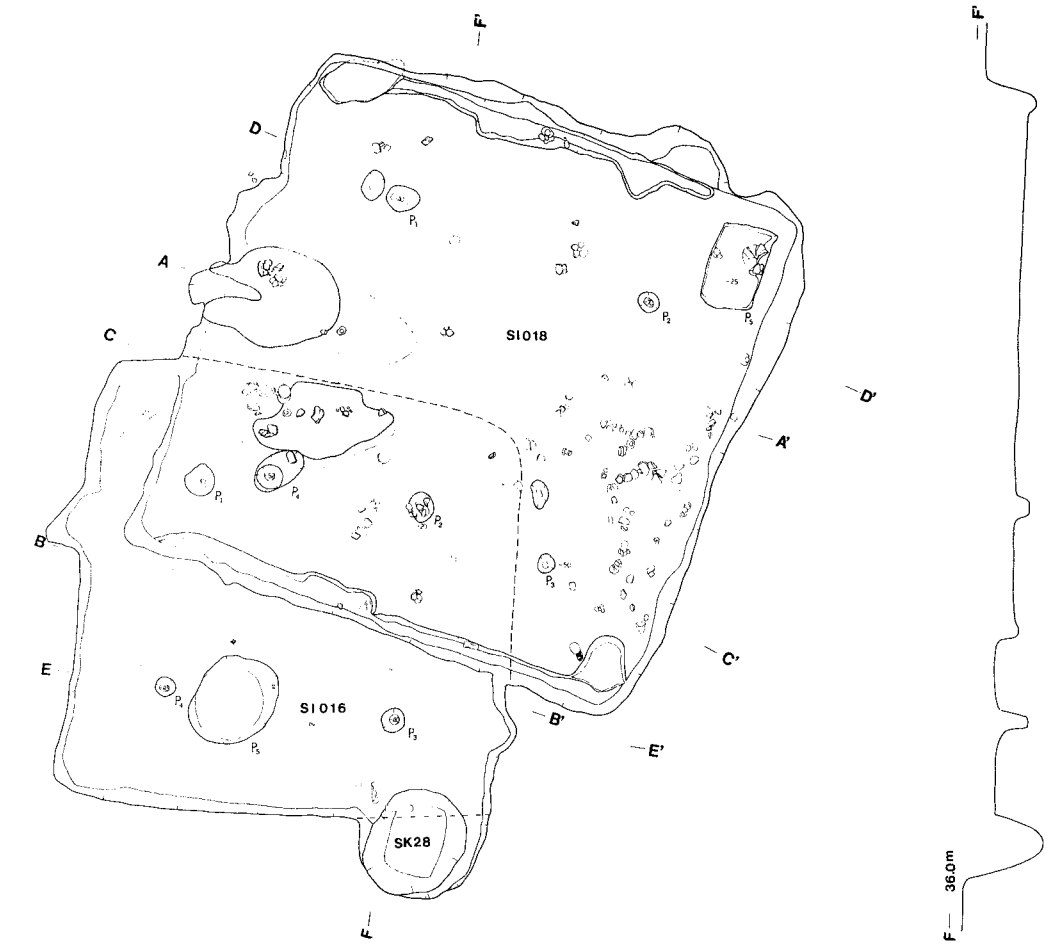


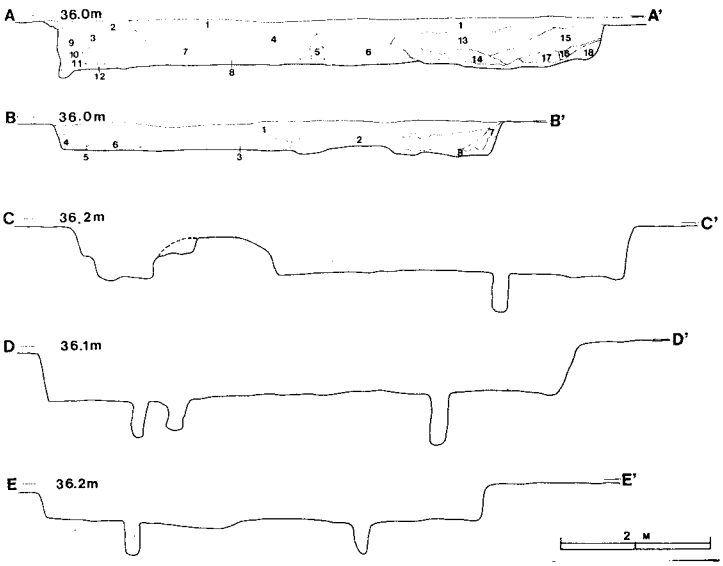
土層解説

a －á　b －b́

1. 褐　色　ハードローム粒子(少)含有
2. 暗褐色　ハードローム粒子(少)焼土粒子(極少)含有
3. 暗褐色　ハードローム粒子(極少)含有砂質土層
4. 暗褐色　焼土粒子(少)含有砂質土層
5. 暗赤褐色　焼土主体の砂質土層
6. 暗褐色　粘土(少)焼土ブロック含有
7. 褐　色　ハードローム粒子(少)含有
8. 暗褐色　ハードローム粒子(少)炭化粒子(極少)含有
9. 褐　色　炭化粒子(極少)含有
10. 褐　色　粘土ブロック(少)含有
11. 暗赤褐色　焼土化している
12. 褐　色　焼土ブロック(少)含有加熱をうけている

第27図　第16号住居址カマド実測図





土層解説

A－A'

1. 暗褐色　ローム粒子(少)砂粒子(少)炭化粒子(少)焼土(少)含有
2. 暗褐色　ローム粒子(多)砂粒子(少)炭化物(少)焼土　(少)含有
3. 暗褐色　ローム粒子(多)砂粒子(少)炭化物(少)焼土粒子(多)含有
4. 暗褐色　ローム粒子(多)砂粒子(少)炭化粒子(少)焼土粒子(極少)含有
5. 黒褐色　ローム粒子(多)焼土粒子(極少)含有
6. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(少)焼土粒子(極少)含有
7. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(少)焼土粒子(多)粘土粒子(少)含有
8. 暗褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(多)焼土粒子(多)粘土ブロック(少)含有
9. 暗褐色　ローム粒子(特多)炭化物(多)焼土粒子(少)ブロック(特多)含有
10. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(少)焼土粒子(少)粘土ブロック　含有
11. 明暗褐色　粘土、焼土がまざりあった層
12. 暗褐色　ロームブロック(多)炭化粒子(少)含有
13. 暗褐色　ロームブロック(密)ローム粒子(多)炭化物(多)砂粒子(多)焼土粒子(多)含有印象器官あり
14. 暗褐色　ロームブロック(密)ローム粒子、炭化物(特多)焼土粒子(多)含有
15. 暗褐色　ロームブロック(密)ローム粒子(多)炭化物(多)焼土粒子(多)含有
16. 黒褐色　ロームブロック(密)ローム粒子(多)炭化物(多)焼土粒子(特多)含有
17. 暗褐色　ロームブロック(密)粘性(強)ローム粒子(多)炭化物(多)炭化物(多)焼土粒子(多)含有粘土下部にあり
18. 暗褐色　ロームブロック(密)粘性(強)ローム粒子(多)炭化物(多)焼土粒子(多)灰(多)粘土粒子(少)含有

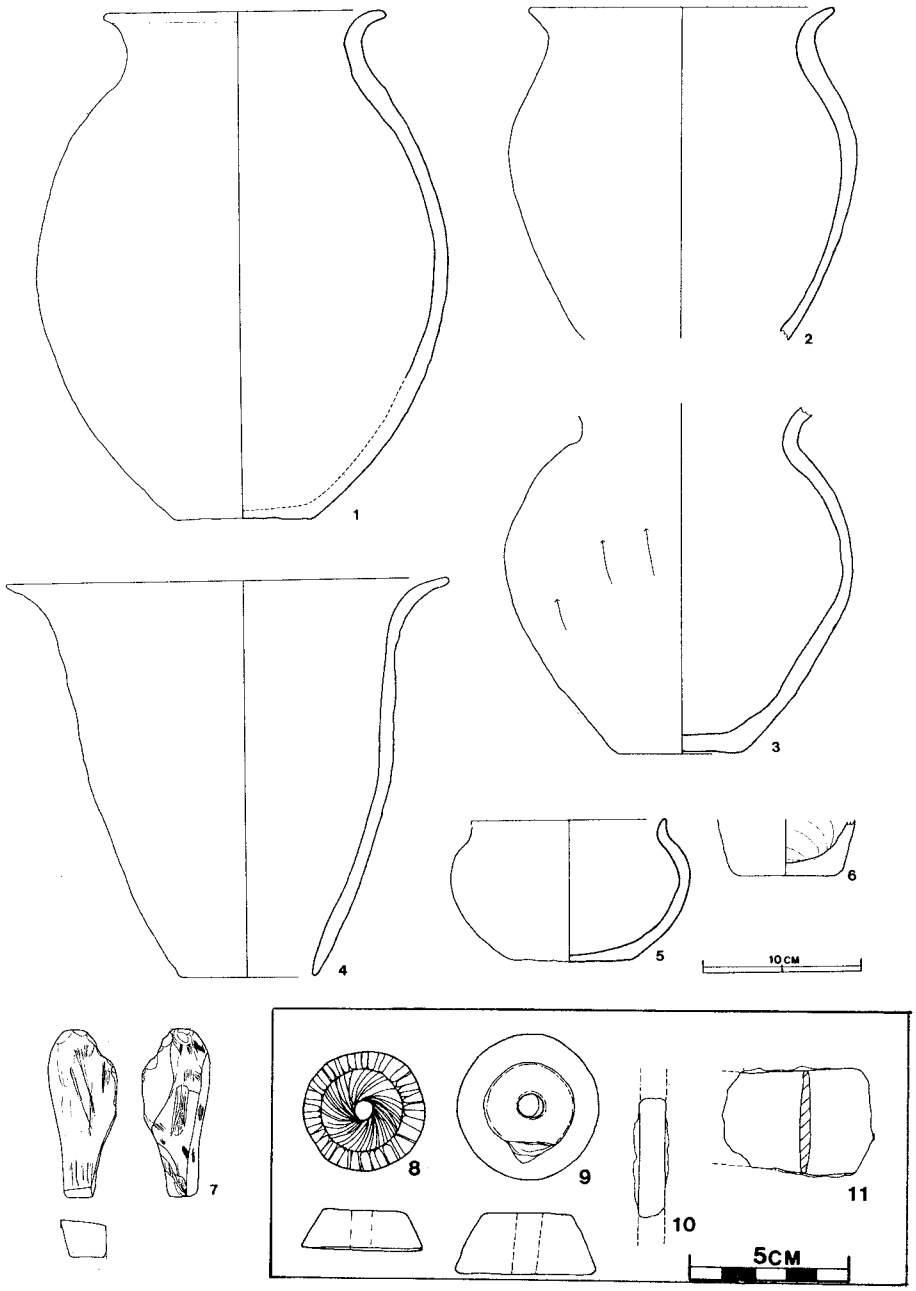
土層解説

B－B'

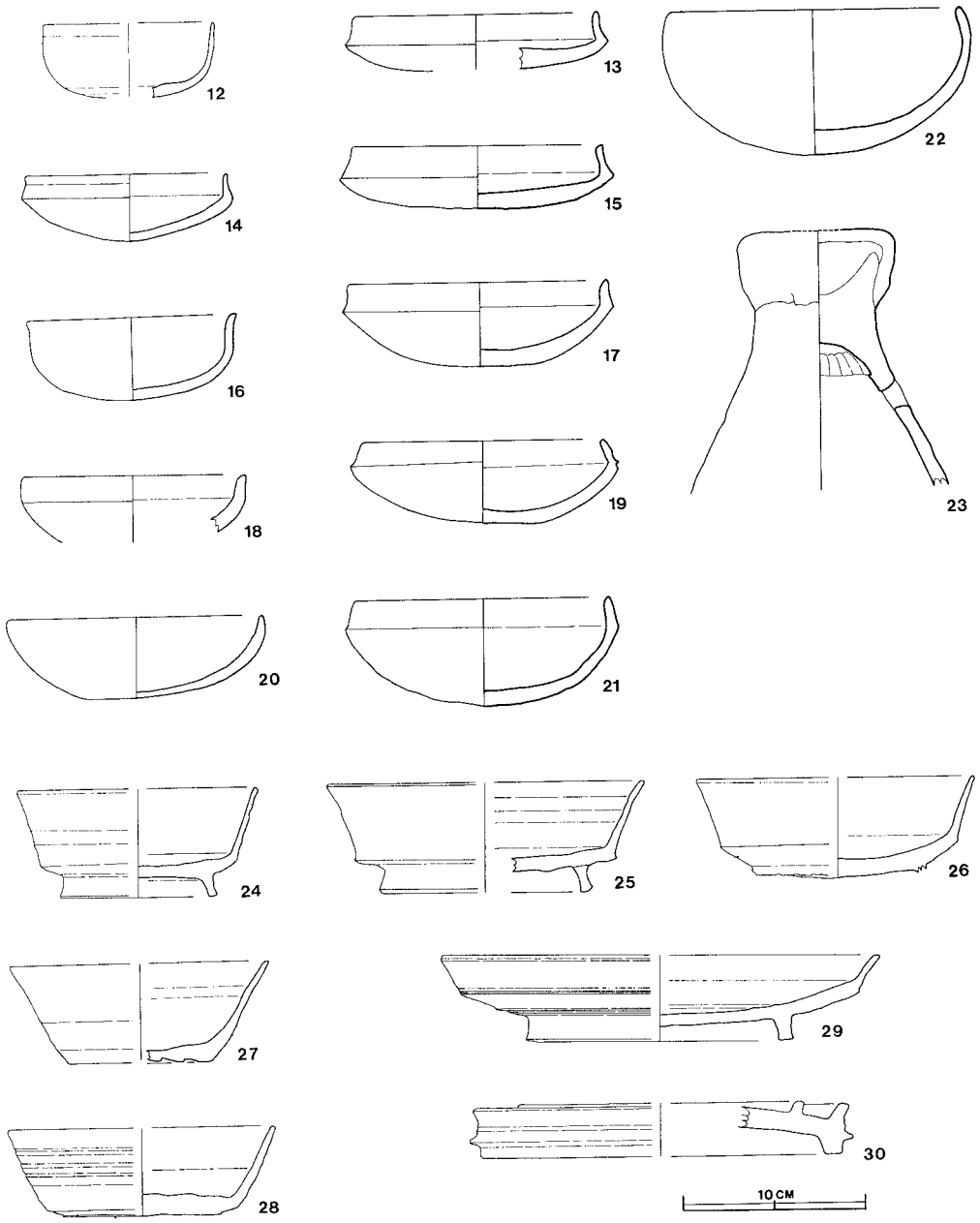
1. 黒褐色　ローム粒子(少)炭化物(少)含有
2. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化物(多)焼土粒子(多)含有
3. 暗褐色　ローム粒子(少)炭化物(多)焼土粒子(極少)含有
4. 暗褐色　ローム粒子(少)炭化物(少)含有
5. 暗褐色　ローム粒子(少)炭化物(多)焼土粒子(多)含有
6. 暗褐色　ローム粒子(少)炭化物(多)焼土粒子(多)含有
7. 暗褐色　ローム粒子(少)炭化物(多)焼土粒子(少)含有
8. 暗褐色　ローム粒子(少)炭化物(多)焼土粒子(極小)ロームブロック(多)含有

第26図　第16・18号住居址・第28号土壙実測図

41号住居址が検出されている。本址の主軸方向はN－6°－Fで,規模は長軸5.88m,短軸5.84m，面積31.0㎡を測り,正方形の平面形を呈している。北壁と東壁の一部は確認する事ができないが,西・南壁と東壁の一部の壁高は約32cmを測り，壁はほぼ垂直に立ち上がっている。壁溝はなく床面は平担で硬く，南東部より炭化材を出土しており，本址は火災に遭遇していると思われる。ピットは5個所確認されP1～P4は主柱穴と考えられる。覆土は8層からなり自然堆積の状態を示しており，上層は暗褐色土で少量のローム粒子，極少量の炭化粒子を含み，下層は暗褐色土で少量の



第28図(1)　第16号住居址出土遺物実測図



第28図(2)　第16号住居址出土遺物実測図

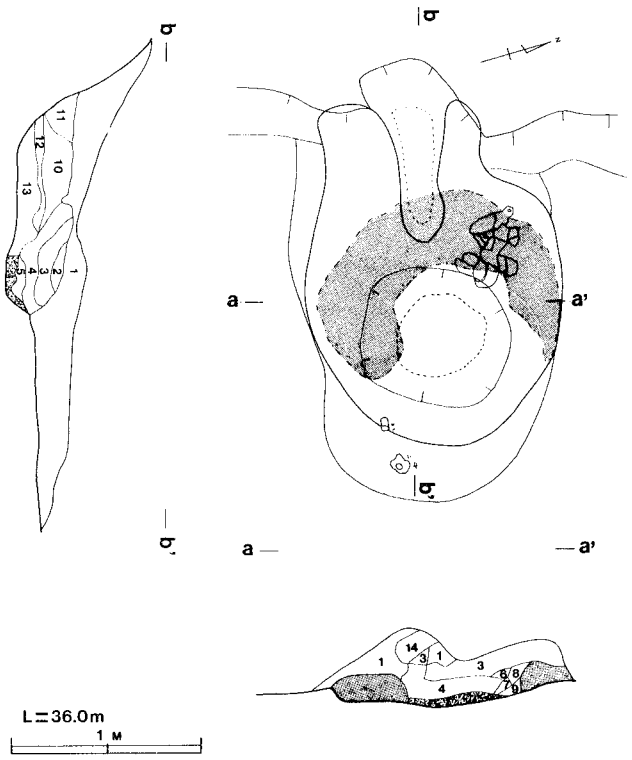
ローム粒子，極少量の焼土粒子を含んでいる。カマドは北壁の中央に付設され，規模は長径145cm，短径113cmで燃焼部は長径62cm,短径46cmを測り，楕円形に掘り窪めている。袖部は黒色土混りの砂質粘土で，カマドは南南西向きに構築されている。燃焼部から土師器の甕（図28－１），甑片（図28－４),坏１個（図28－19）を出土している。

出土遺物は土師器が中心で須恵器を数点共伴している。土師器はカマド付近から坏片，甕２個体分（図28－２・３），中央部覆土から坏３個体分（図28－13・14)を出土し，他に坏２個体分（図28－16・18），椀（図28－５），手捏土器（図28－６）と支脚（図28－23）を出土し，甕，坏，支脚，器台，高坏などの細片を多数出土している。須恵器は東壁付近床面より坏（図28－12）南東コーナー床面直上より坏片（図28－26），他に盤（図28－29），円硯片（図28－30），坏３個体分（図28－25・27・28）と細片等を多量に出土している。その他の出土遺物等は，覆土から十王台式に比定される弥生式土器片を数点と砥石（図28－７），刀子などの鉄製品２点（図28－10・11),紡錘車（図28－８・９）を出土している。本址は出土遺物等から古墳時代鬼高期に比定される遺構と思われる。

第18号住居址（図26・29・30(1)(2)）

本住居址は，調査区の北西部東側Ｂ４区ｆ４，ｆ５，ｆ６，ｇ４，ｇ５，ｇ６，ｈ４，ｈ５，ｈ６に確認され，西コーナーに　第16号住居址が複合しており，本址は第16号住居址より古い遺構である。　西側1.9mには第14号土壙が,北コーナーから1.8mには第10号土壙が，2.0mには第11号土壙が検出されている。本址の主軸方向はＮ－63°－Ｗで，規模は長軸7.30m，短軸7.05m，面積46.6㎡を測り，隅丸長方形の平面形を呈している。壁は垂直に立ちあがり，壁高は30cm～65cmほどで，南壁と北壁には幅13cm，深さ６cm内外の壁溝を有している。床面は暗褐色で硬く平坦である。北・南コーナーに炭化材が出土しているので，本址は火災に遭遇していると思われる。ピットは，８個所確認され，Ｐ１～Ｐ４は主柱穴と考えられる。東コーナーのＰ５は貯蔵穴で規模は長径115cm，短径73cm，深さ25cmを測り長方形を呈している。

覆土は，18層からなり自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土で少量のローム粒子，砂粒，炭化



土層解説

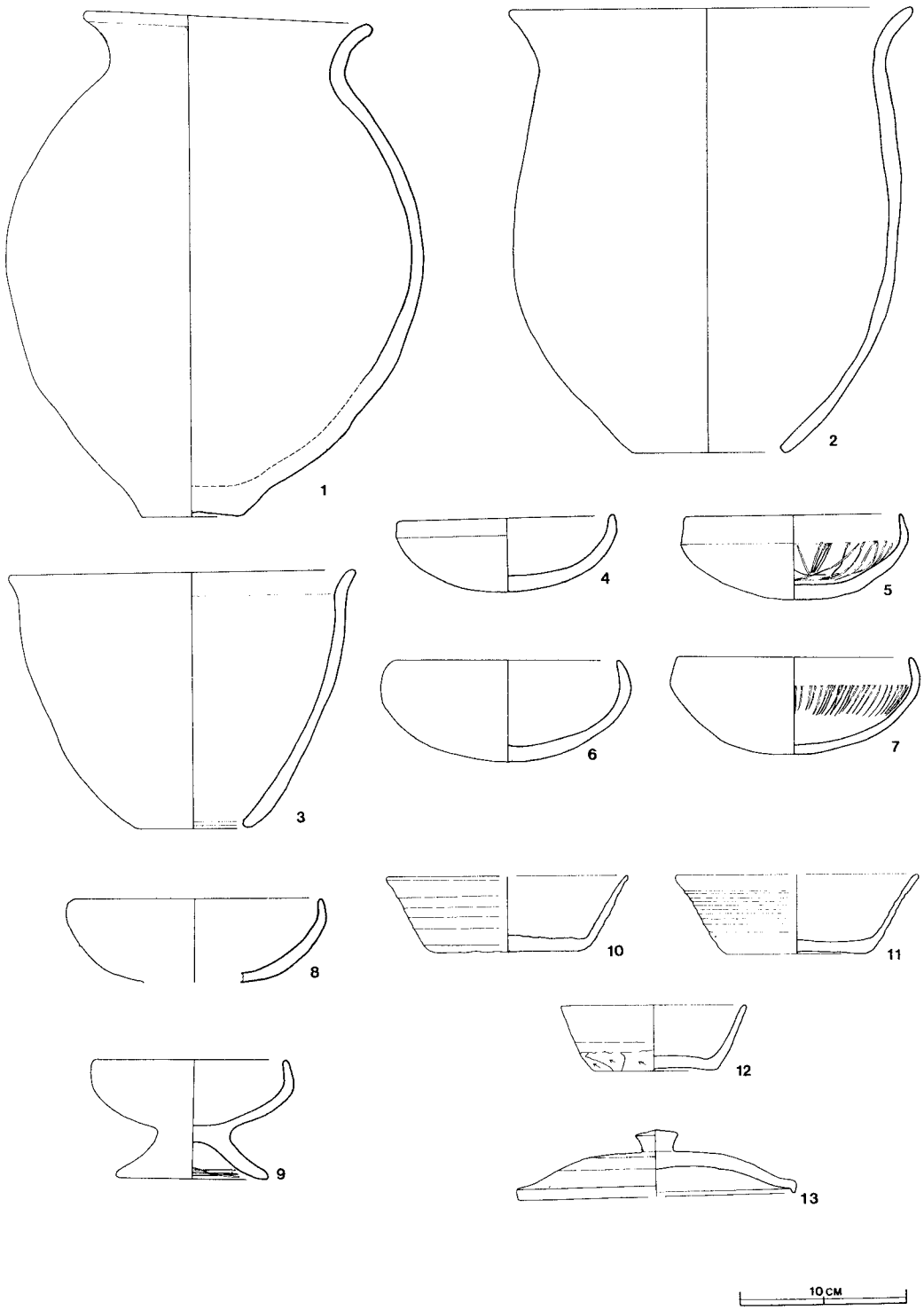
a —a ′ b —b ′

1. 黒褐色 ローム粒子(特多)炭化粒子(少) 焼土粒子(多)砂粒子(多)含有
2. 暗褐色 焼土ブロック(特多)含有 焼土ブロックを主体
3. 暗褐色 炭化粒子(多)焼土ブロック(特多)含有かなり火を受け焼土化している
4. 暗褐色 焼土ブロック(特多)含有かなり火を受け焼土化している
5. 黒褐色 ローム粒子(少)含有
6. 黒褐色 焼土ブロック(多)含有かなり火を受け焼土化している
7. 黒褐色 ローム粒子(少)含有
8. 褐褐色 焼土化している
9. 暗褐色 焼土粒子(多)粘土ブロック(多)含有
10. 粘土ブロック
11. 褐 色 焼土ブロック(多)粘土ブロック(多)含有
12. ローム粒子(少)含有
13. 暗褐色 ロームブロック(多) 含有
14. 褐 色 焼土粒子(特多)砂粒子(多)含有

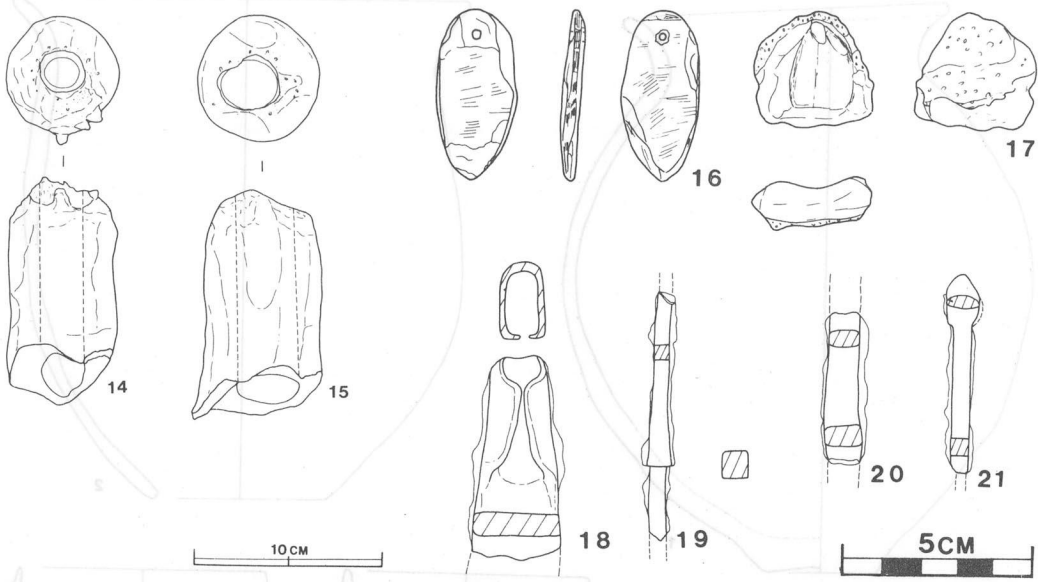
第29図　第18号住居址カマド実測図

粒子，焼土粒子を含有し，中層は暗褐色土で多量のローム粒子，焼土粒子と少量の炭化粒子を含み，下層は暗褐色土で少量のローム粒子，粘土ブロック，多量の炭化粒子，焼土粒子を含んでいる。カマドは西壁のほぼ中央に付設され，規模は長径180cm，短径130cm程で,西壁を47cm幅で，25cmほど掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径52cm，短径38cmで深さ10cmほど不整楕円形に掘り窪めている。袖部は黒色土混りの砂質粘土でカマドは南東向きに構築されている。燃焼部から土師片を数点出土している。東壁中央に焼土と白色粘土の広がりを確認し，その付近から鉄滓を多量に出土したので,カマドもしくは小鍛治に関する遺構と考え精査をしたが破壊が進んでおり,そのプランを把握することは出来なかった。出土遺物は，土師器を中心に須恵器を共伴している。土師器の完存率の良好な物をあげると，北東壁付近床面から甑2個体分(図30—2)，北西壁付近床面から　甕片（図30—1），坏（図30—8)を，他に覆土から高坏（図30—10），手捏　土器2個と甕，坏（図30—5），器台などの破片を多数出土している。須恵器は覆土中から坏，4個体分（図30—12）蓋（図30—13）などと,他に,蓋，坏などの細片を多数出土している。その他の出土遺物は，石製模造品，鉄製斧，覆土から鉄鏃と刀子片，羽口3個と鉄滓を多数出土している。

本址は出土遺物等から，古墳時代鬼高期に比定される遺構と思われる。



第30図（1） 第18号住居址出土遺物実測図



第30図　(2) 第18号住居址出土遺物実測図

第19号住居址（図31・33 (1)～(4)）

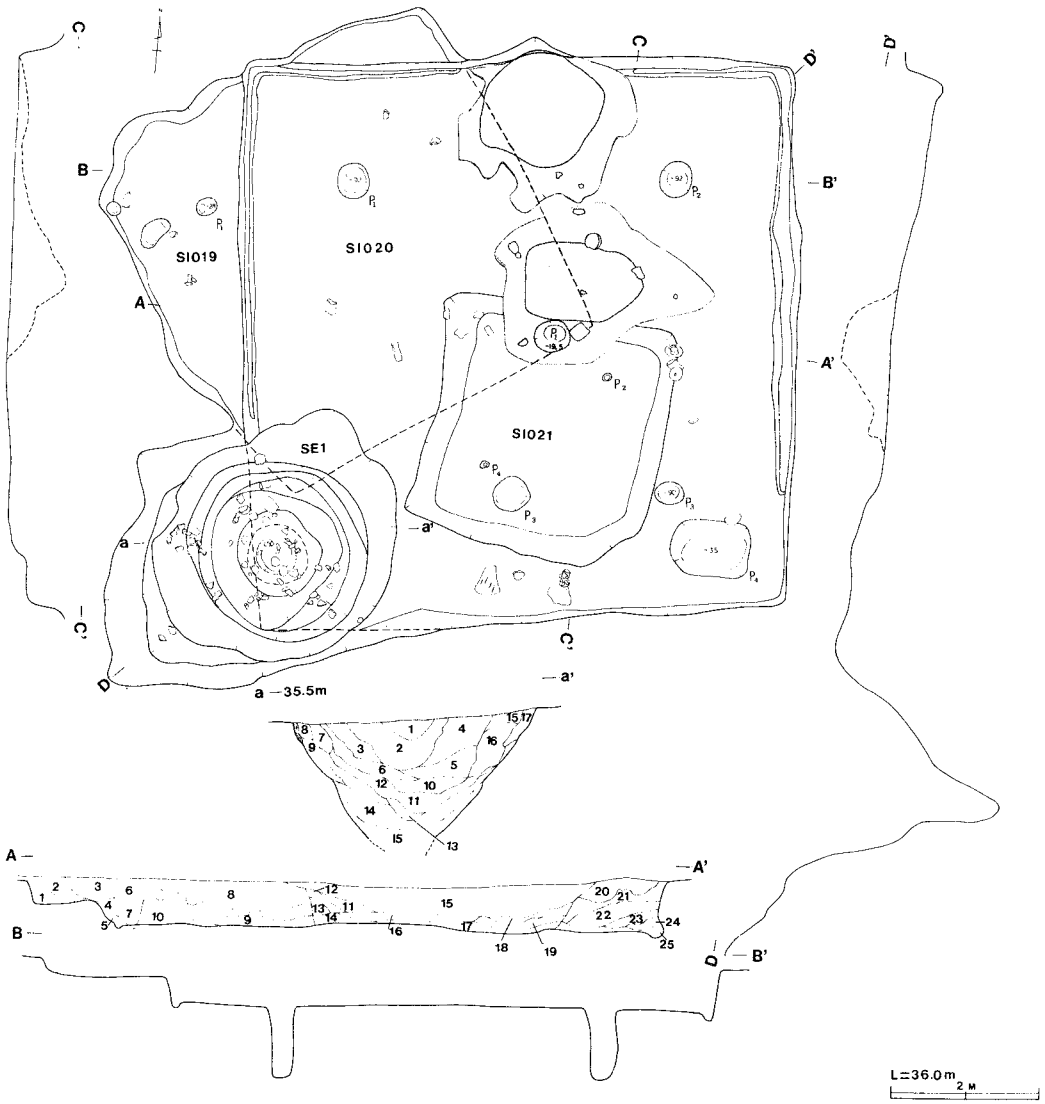
本住居址は，調査区の北端Ａ４区ｇ２，ｇ３，ｇ４，ｈ２，ｈ３，ｈ４に確認され，本址は第20号住居址の北西コーナーに大きく切り込んでおり，北西壁と南西壁・北東壁の一部しか残存していない。

南コーナーには第１号井戸状遺構が，東コーナーには第21号住居址が複合している。本址は第20号住居址，第21号住居址，第１号井戸状遺構より古い遺構である。本址は，推定で方形の平面形を呈しており，主軸方向はＮ－34°－Ｗで規模は長径5.13m，短軸4.80m，面積22.7㎡を測り，壁高は約30cmほどである。壁は緩やかに外傾して立ちあがっている。壁溝は有していない。床面は暗褐色土で軟らかく炉址は不明である。ピットは３個確認され，Ｐ１は主柱穴と思われる。覆土は４層からなり自然堆積の状態を示している。全体的に褐色土・暗褐色土で，ローム粒子，炭化粒子を含有している。

出土遺物は床面から土師器の坩（図33－36）などの破片２点のみで，本址の時期を決定しうるにたりる遺物は出土していないけれど，ほぼ古墳時代の五領期に比定される遺構と思われる。

第20号住居址（31～33 (1)～(4)）

本住居址は，調査区の北端Ａ４区ｇ３，ｇ４，ｇ５，ｈ３，ｈ４，ｈ５，ｉ３に確認され，北西コーナーには第19号住居址が，南西コーナーには第２号井戸状遺構が，南東コーナーには第１号住



土層解説

A－A′

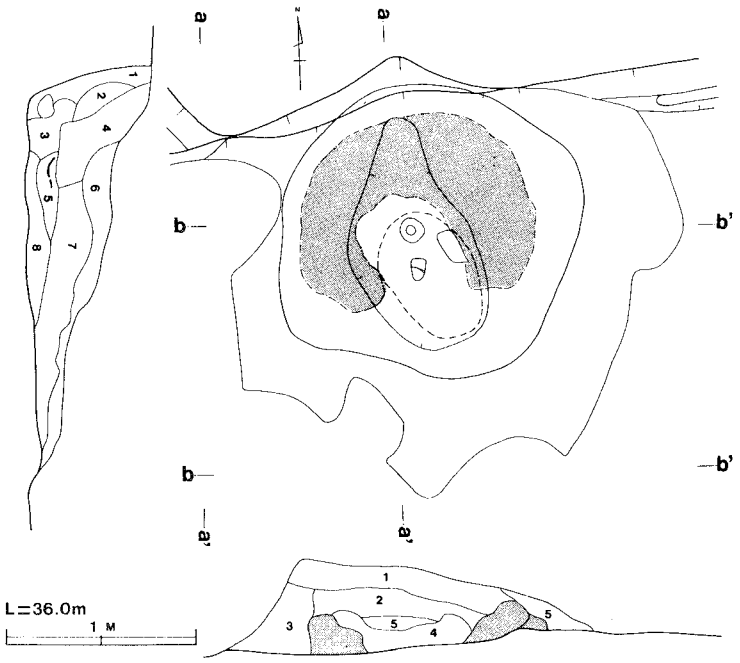
1. 褐　色　ローム土(多)含有
2. 褐　色　ローム粒子(少)含有
3. 暗褐色　ローム粒子(少)炭化物(極少)含有
4. 褐　色　ローム粒子(少)ロームブロック(少)含有
5. 褐　色　ローム粒子(多)含有
6. 褐　色　ローム粒子(多)含有
7. 暗褐色　ローム粒子(少)含有
8. 黒褐色　ローム粒子(少)含有
9. 褐　色　ローム粒子(多)ロームブロック(少)炭化物(少)含有
10. 暗褐色　ローム粒子(多)焼土粒子(極少)含有
11. 極暗褐色　ローム粒子(少)炭化物(少)含有
12. 暗褐色　ローム粒子(多)含有
13. 極暗褐色　ローム粒子(少)含有
14. 褐　色　ローム土(多)炭化物(少)含有
15. 極暗褐色　ローム粒子含有
16. 暗褐色　ローム粒子(多)白色粘土(多)焼土粒子(極少)炭化物(少)含有
17. 極暗褐色　ローム粒子(少)焼土粒子(少)含有
18. 暗褐色　ローム粒子(少)白色粘土(少)炭化物(極少)含有
19. 暗褐色　ローム粒子(少)焼土粒子(少)炭化物(少)含有
20. 暗褐色　ローム粒子(少)含有
21. 褐　色　ローム粒子(特多)ロームブロック(多)含有
22. 褐　色　ローム粒子(特　焼土粒子(極少)炭化物(極少)含有
23. 暗褐色　ローム粒子(特多)ロームブロック(少)炭化物(極少)含有
2 . 暗褐色　ローム粒子(多)含有
25. 褐　色　ローム粒子、ローム土(特多)含有

土層解説

a －a′

1. 暗褐色　ローム粒子，鹿沼粒子，炭化粒子，焼土粒子(少)含有
2. 暗褐色　ローム粒子(中)ローム小ブロック，砂粒子，焼土粒子，炭化粒子(少)含有
3. 暗褐色　ローム粒子(多)鹿沼粒子(中)炭化粒子(少)含有
4. 暗褐色　ローム粒子，鹿沼粒子(多)焼土粒子(少)粘土ブロック(少)含有
5. 暗褐色　ローム粒子(特多)鹿沼粒子，炭化物，焼土粒子(少)含有
6. 暗褐色　ローム小ブロック，ローム粒子(多)鹿沼粒子，炭化物(少)含有
7. 暗褐色　ローム小ブロック(中)ローム粒子(少)炭化物(極少)含有
8. 灰黄褐色　ロームブロック(少)ローム粒子(中)鹿沼粒子(少)炭化物(極少)含有
9. 暗褐色　ローム小ブロック(少)ローム粒子(中)鹿沼粒子(中)炭化粒子(極少)含有
10. 黒褐色　ローム小ブロック(多)ローム粒子(中)粘土ブロック，炭化粒子(少)鹿沼粒子(少)含有
11. 黒褐色　ローム小ブロック(中)ローム粒子(小)鹿沼粒子(少)炭化粒子(少)含有
12. 黒褐色　ロームブロック(中)ローム粒子(中)鹿沼粒子(極少)炭化粒子(少)含有
13. 黒褐色　ロームブロック(少)ローム粒子(中)炭化物(少)含有
14. 黒褐色　ロームブロック(少)ローム粒子(中)鹿沼ブロック(中)炭化粒子(少)含有
15. 暗褐色　ローム小ブロック(小)ローム粒子(中)炭化粒子(少)含有
16. 暗褐色　ロームブロック(中)ローム粒子(小)鹿沼ブロック(少)粘土ブロック(極少)炭化粒子(極少)含有
17. 黒褐色　ロームブロック(少)鹿沼粒子(多)炭化物(少)含有

第31図　第19·20·21号住居址·第1号井戸状遺構実測図



土層解説

a－á　b－b'

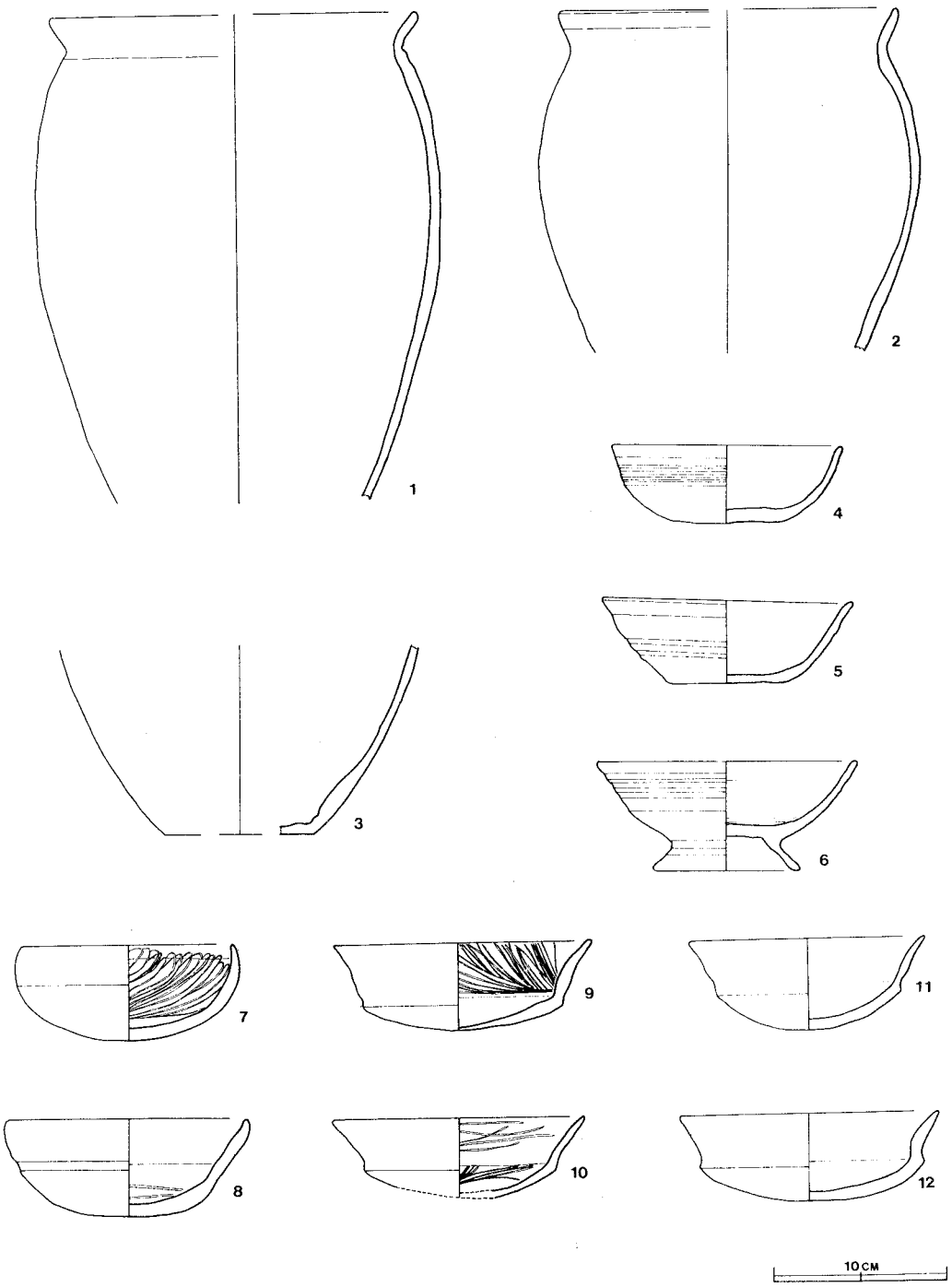
1. 黒褐色　ローム粒子(少)焼土粒子(少)炭化粒子(多)粘土(多)含有
2. 暗褐色　ローム粒子(少)焼土粒子(多)砂質粘土(多)ロームブロック(少)含有砂質粘土主体
3. 褐　色　砂質粘土主体
4. 褐　色　砂質粘土主体
5. 暗褐色　砂質粘土主体
6. 暗褐色　ローム粒子(多)焼土粒子(極少)炭化粒子(少)粘土(少)含有
7. 暗褐色　ローム粒子(特多)焼土粒子(少)炭化粒子(少)砂粒子(特多)含有
8. 暗褐色　ローム粒子(少)焼土粒子(多)炭化粒子(少)粘土(特多)含有火を受けていくぶん焼土化

7. 暗褐色　ローム粒子(特多)焼土粒子(少)炭化粒子(少)砂粒子(特多)含有
8. 暗褐色　ローム粒子(少)焼土粒子(多)炭化粒子(少)粘土(特多)含有火を受けて，いくぶん焼土化

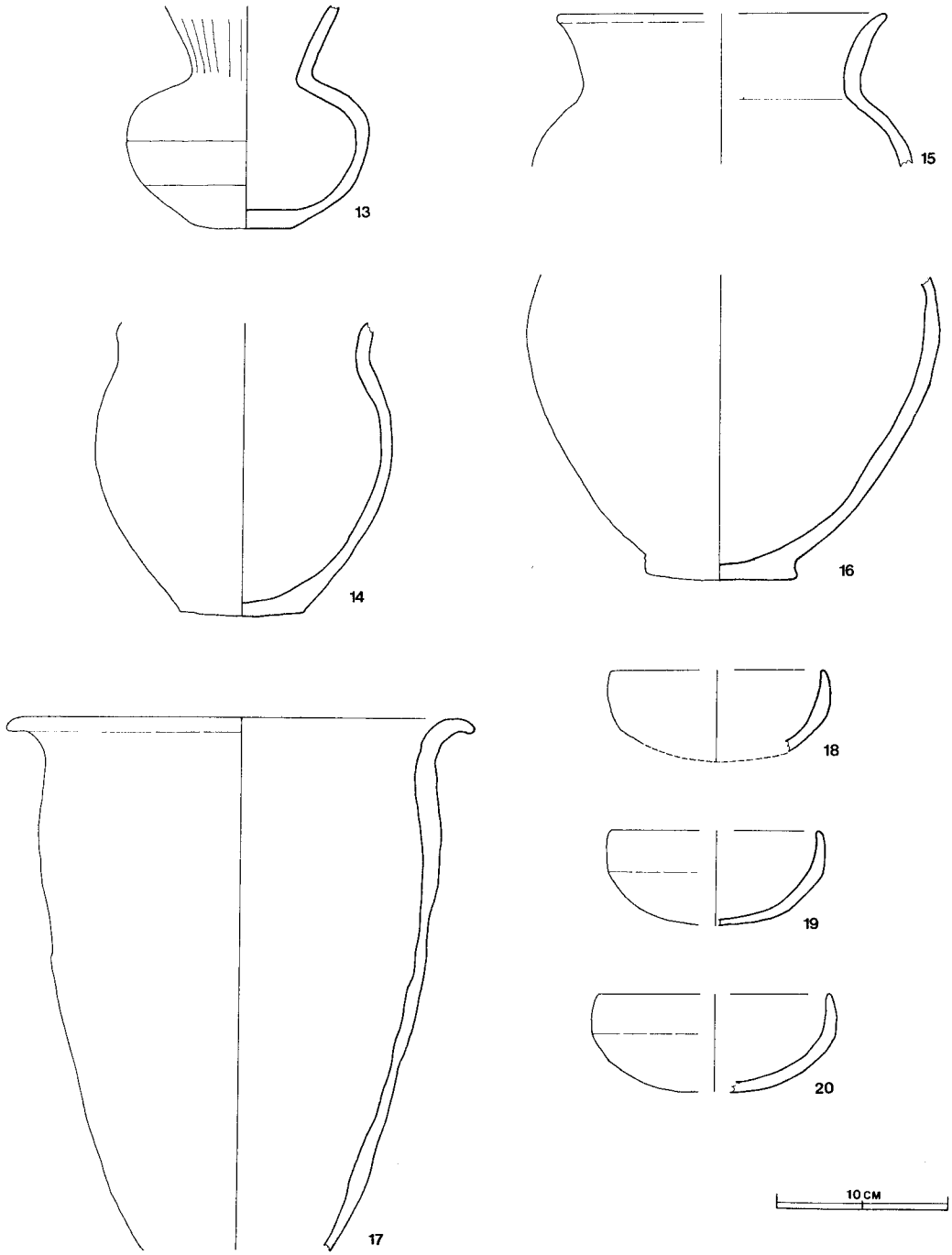
第32図　第20号住居址カマド実測図

居址，第６号住居址が複合し，南部中ほどには第21号住居址が複合している。本址は第１号住居址より古く，第６号住居址，第19号住居址，第21号住居址より新しい遺構である。本址の主軸方向はＮ－7.5－Ｗで，規模は長軸7.96m，短軸7.90m，面積48.3㎡ほどで隅丸正方形の平面形を呈している。壁高は48cm～70cm内外で垂直に立ちあがっている。床面は褐色で硬く，南壁中央付近・中央部床面から炭化物を出土しているので，本址は火災に遭遇していると思われる。ピットは４個所確認され，P1～P3は主柱穴と考えられるが，南西部のピットは第１号井戸状遺構に切られ不明である。南東コーナーのＰ４は貯蔵穴と思われ，長径105cm，短径75cm，深さ35cmの不整楕円形を呈している。

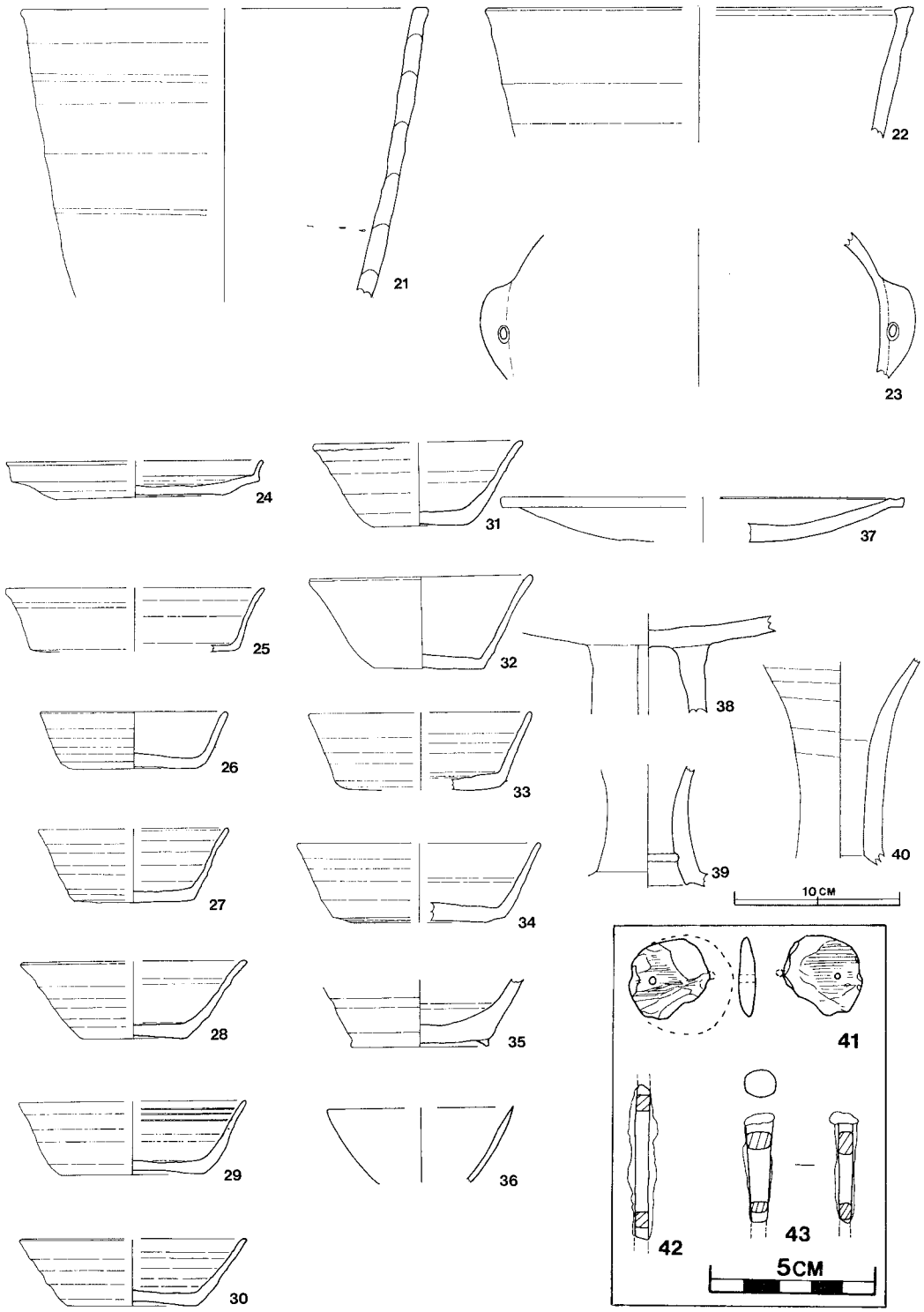
覆土は，14層からなり中央部に第21号住居址が南西部に第１号井戸状遺構が切り込んでいるが，他は自然堆積の状態を呈している。上層は黒褐色土で，少量のローム粒子を含み，中層は褐色土で多量のローム粒子，少量のロームブロック，炭化粒子を含み，下層は褐色土で，多量のローム粒子を含んでいる。カマドは北壁の中央に付設され，規模は長径154cm，短径122cmほどで，北壁を120cm幅で，27cmほど掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径70cm，短径40cm，深さ約５cmほど楕円形に掘り窪めている。袖部は黒色土混りの砂質粘土層で，カマドは南向きに構築されている。



第33図(1)　第19·20·21号住居址・第1号井戸状遺構出土遺物実測図



第33図（2） 第19·20·21号住居址・第1号井戸状遺構出土遺物実測図



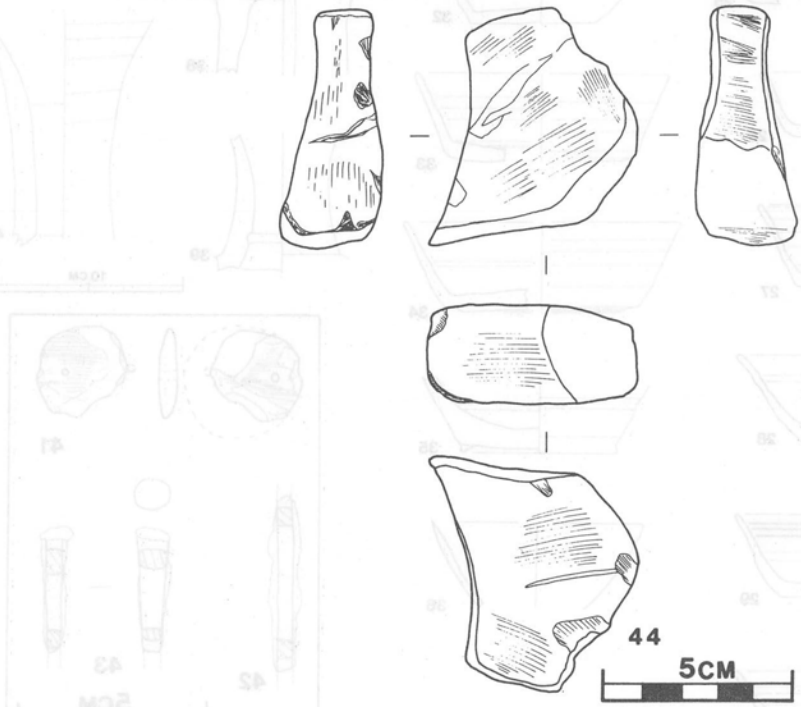
第33図(3)　第19·20·21号住居址・第1号井戸状遺構出土遺物実測図

燃焼部北側,煙道に近いところから土師器の坩,甕口縁部を出土している。出土遺物は,土師器を中心に須恵器片を出土している。南西部から甕２個体分（図33—15・16）と坏片（図33—18)を,南壁付近床面から坏４個　（図33— 7 ・10・11）他に床面から坏,甑などの細片を数点出土している。須恵器は,覆土から蓋片を出土し,他に細片を数点出土している。

本址は出土遺物等から古墳時代の鬼高期に比定される遺構と思われる。

第21号住居址（図31・33 (1)(2)(3)(4)）

本住居址は,調査区の北端Ａ４区ｇ３,ｇ４,ｈ３,ｈ４に確認され,第20号住居址の中央部よりに構築され,南西0.3m には第１号井戸状遺構が,南1.0m には第１号住居址が,南東1.2m には第６号住居址が検出されている。本址は第19号住居址,第20号住居址より新しい遺構である。本址の主軸方向はＮ—10°—Ｅで,規模は長軸3.28m ,短軸3.03m ,面積6.2㎡を測り,ほぼ長方形の平面形を呈している。壁は第20号住居址の床面を約1.5cmほど掘り込んで築かれ緩やかに外傾して立ちあがっている。床面は貼り床で硬く踏み固められていた。ピットは４個所確認され,主柱穴と思われるピットは検出できなかった。南壁中央部付近のＰ３は貯蔵穴と思われ,長径50cm,短径47cm,深さ195cmの不整楕円形を呈している。覆土は９層からなり自然堆積の状態を示している。上層

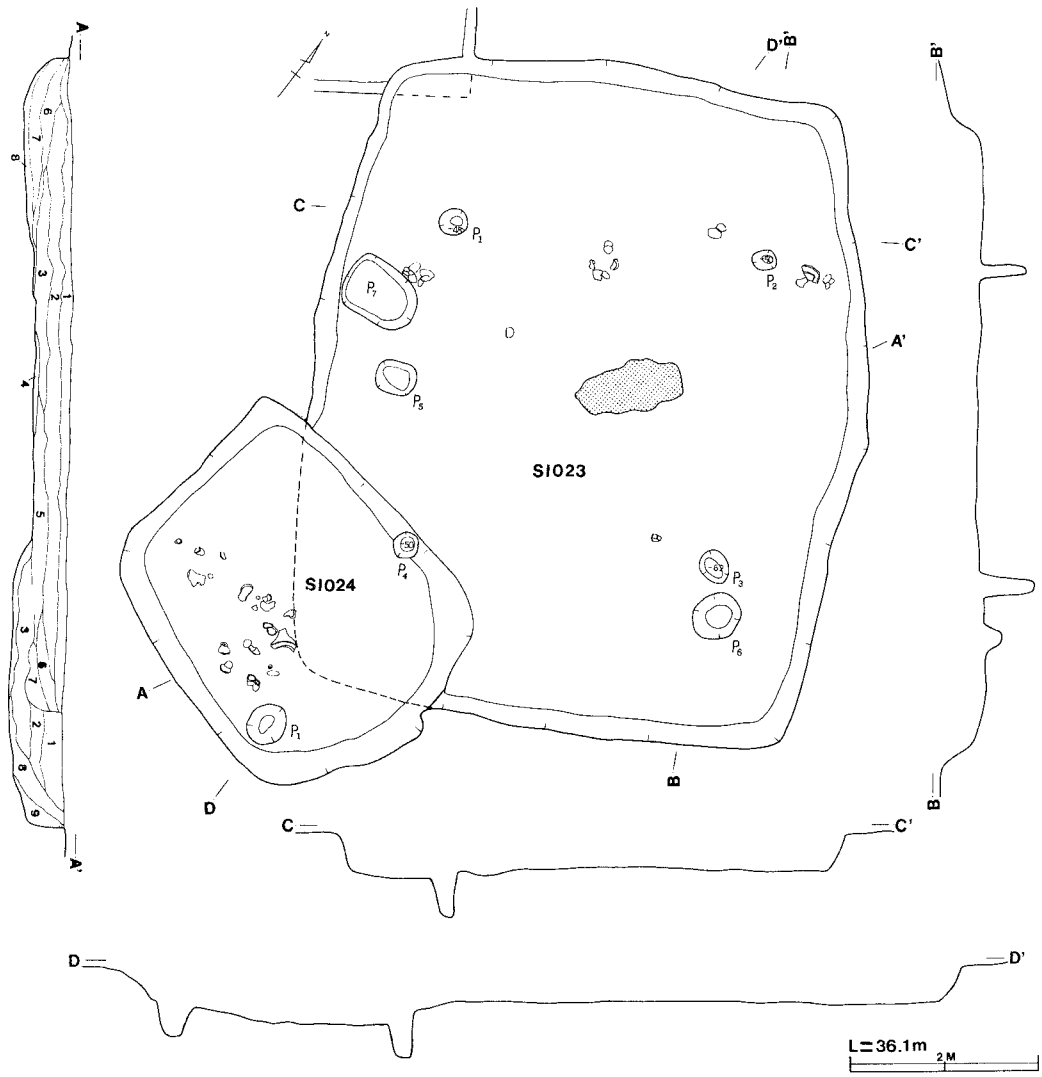


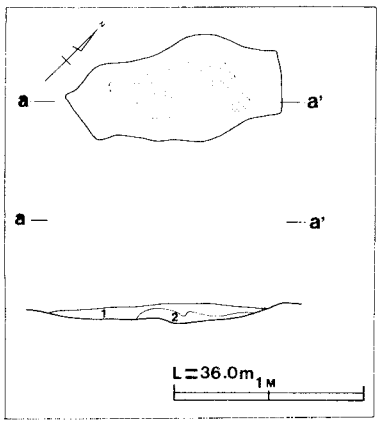
第33図（４）　第19･20･21号住居址・第１号井戸状遺構出土遺物実測図

は，極暗褐色土で少量のローム粒子，炭化粒子を含み，中層は暗褐色土で多量のローム粒子，白色粘土，極少量の焼土粒子と少量の炭化粒子を含み，下層は極暗褐色土で少量のローム粒子，焼土粒子，白色粘土と炭化物を含んでいる。カマドは北壁の中央に付設され，規模は長径170cm，短径120cmで，燃焼部は長径48cm，短径43cm，深さ５cmほどに円形に掘り窪めている。袖部は黒色土混りの砂質粘土で，カマドは南向きに構築されているが破壊が進んでいた。出土遺物は，カマドから須恵器の坏（図33－５），土師器の甑（図33－17），甕（図33－１）と中央部床面から土師器の甕２個体分（図33－２・３），他に破片を数点出土している。その他の出土遺物は，カマド際から鉄製品（図33－43）を出土している。本址は出土遺物が少ないけれどほぼ国分期に比定される遺構と思われる。

第23号住居址（図34・35）

本住居址は，調査区の中央部Ｂ３区ｊ０，Ｂ４区ｊ１，Ｃ３区ａ０，ｂ０，Ｃ４区ａ１，ａ２，ｂ１，ｂ２に確認され，南コーナーは第24号住居址と，西コーナーは第28号住居址と複合している。本址は，第24号住居址，第28号住居址より新しい遺構である。北東2.2m には，第35号住居址が検出されている。本址の主軸方向はＮ－34°－Ｗで，規模は長軸7.08m，短軸5.86m，面積34.7㎡を測り，隅丸長方形の平面形を呈している。壁高は26cm～42cmを測り，壁は緩やかに外反して立ち上っている。壁溝は有しておらず，床面は平坦で硬く踏み固められている。ピットは７個所確認され，Ｐ１～Ｐ４は主柱穴と考えられる。覆土は12層からなり自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土で多量のローム粒子と砂粒を含み，中層は暗褐色土で，特に多量のローム粒子と，多量の砂粒，少量の炭化粒子を含み，下層は暗褐色土で多量のローム粒子と，少量の焼土粒子を含んでいる。炉址は，本址の中央から東よりに位置し，規模は長径57cm，短径27cm程で楕円形を呈している。燃焼部は皿状に６cmほど掘り窪められており，焼土が充満していた。出土遺物は土師器が中心で，弥生式土器のほぼ十王台式に比定される破片を覆土中より出土している。土師器は，北西部床面より，台付甕片（図35－１），北壁付近床面より装飾器台片（図35－４），南西コーナー床面より高坏片（図35－３）と，覆土中より，台付甕台部（図35－２）だけを出土している。本址は古墳時代の五領期に比定される遺構と思われる。

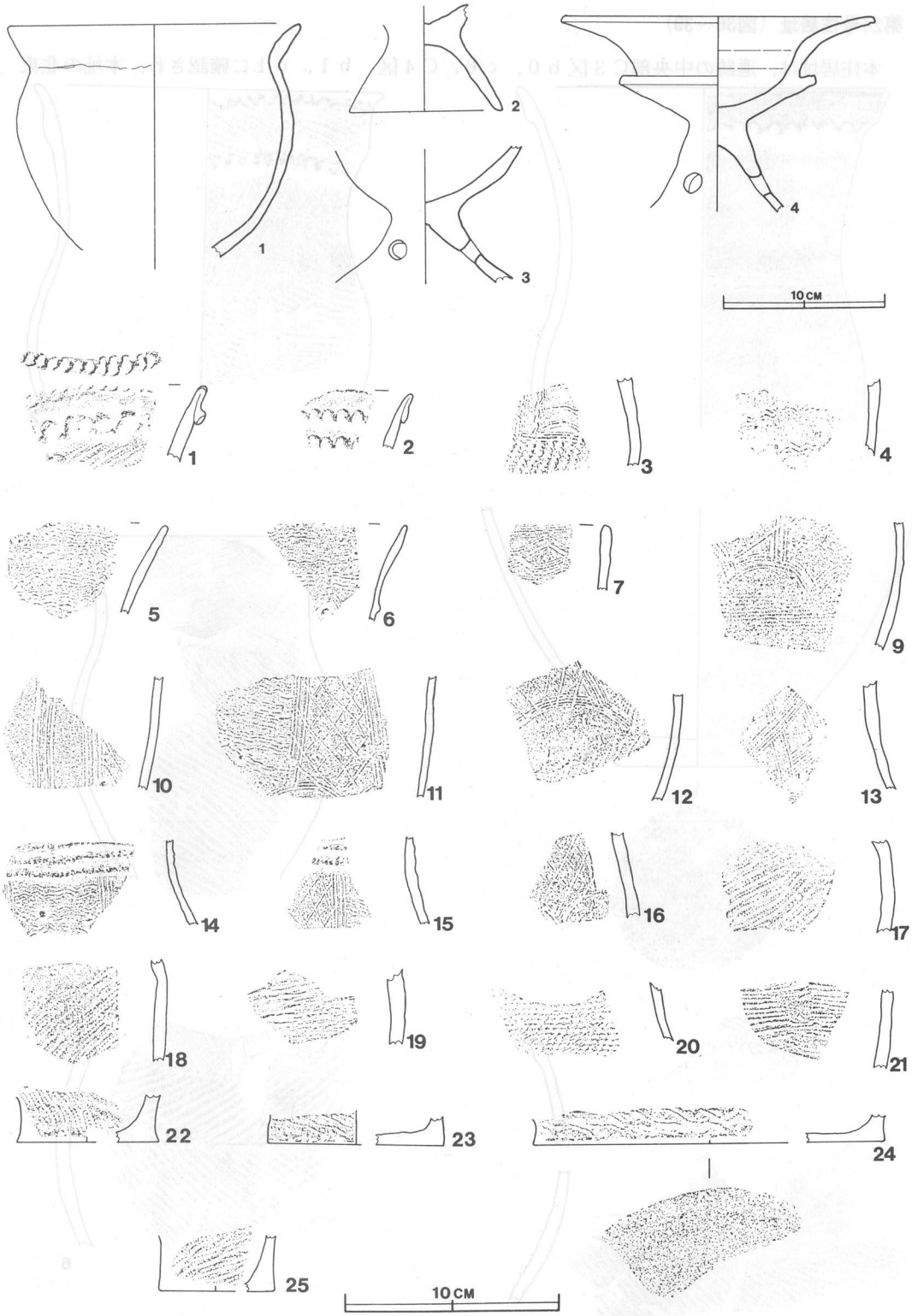




土層解説
A－A′
1. 黒褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(極少)含有
2. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(極少)含有
3. 暗褐色　ローム粒子(少)ローム小ブロック(極少)炭化粒子(少)焼土粒子(極少)含有
4. 黒褐色　ローム粒子(少)砂粒子(少)炭化粒子(少)含有
5. 暗褐色　ローム粒子(極少)砂粒子(極少)焼土粒子(極少)含有
6. 暗褐色　ローム粒子(少)砂粒子(少)含有
7. 暗褐色　ロームブロック(少)ローム粒子(中)焼土粒子(極少)炭化粒子(極少)含有
8. 黒褐色　ローム粒子(極少)砂粒子(極少)含有
9. 暗褐色　ローム粒子(少)砂粒子(極少)焼土粒子(極少含有

土層解説
a－a′
1. 極暗褐色　ローム粒子(極少)炭化粒子(多)焼土粒子(特多)砂粒子(少)含有
2. 赤褐色　ロームが焼土化，かたくざらざらしている

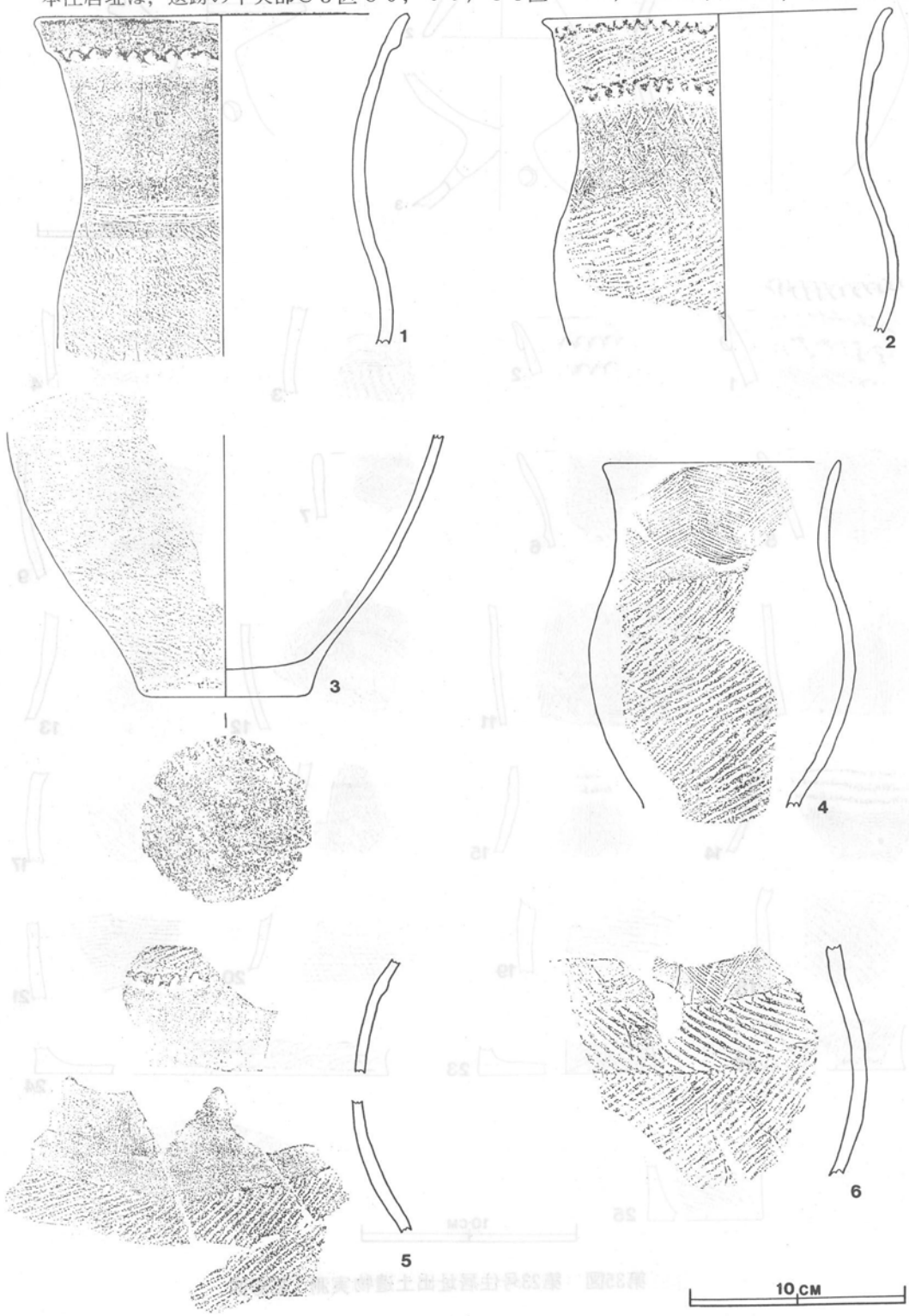
第34図　第23・24号住居址実測図



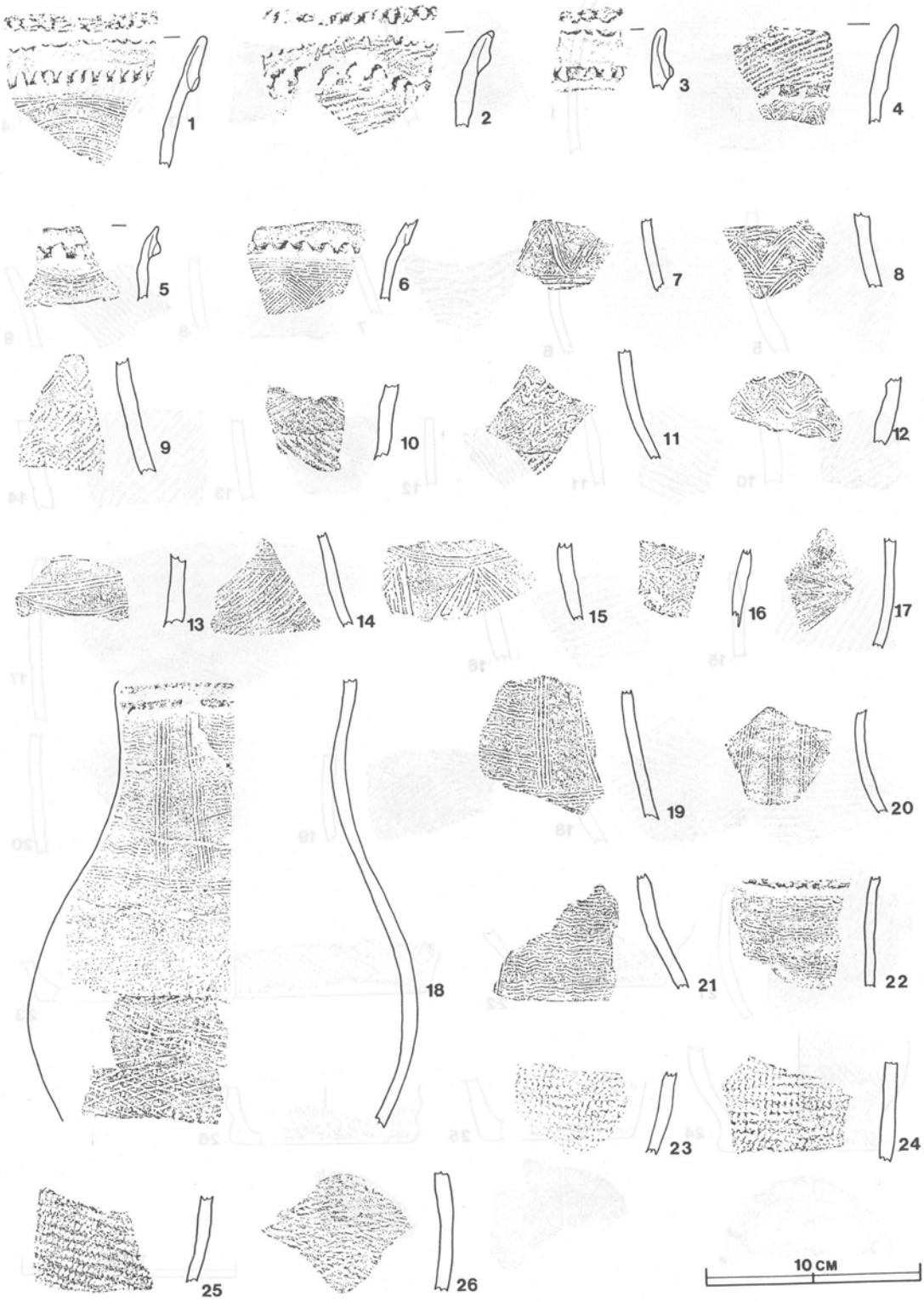
第35図　第23号住居址出土遺物実測・拓影図

第24号住居址（図36～39）

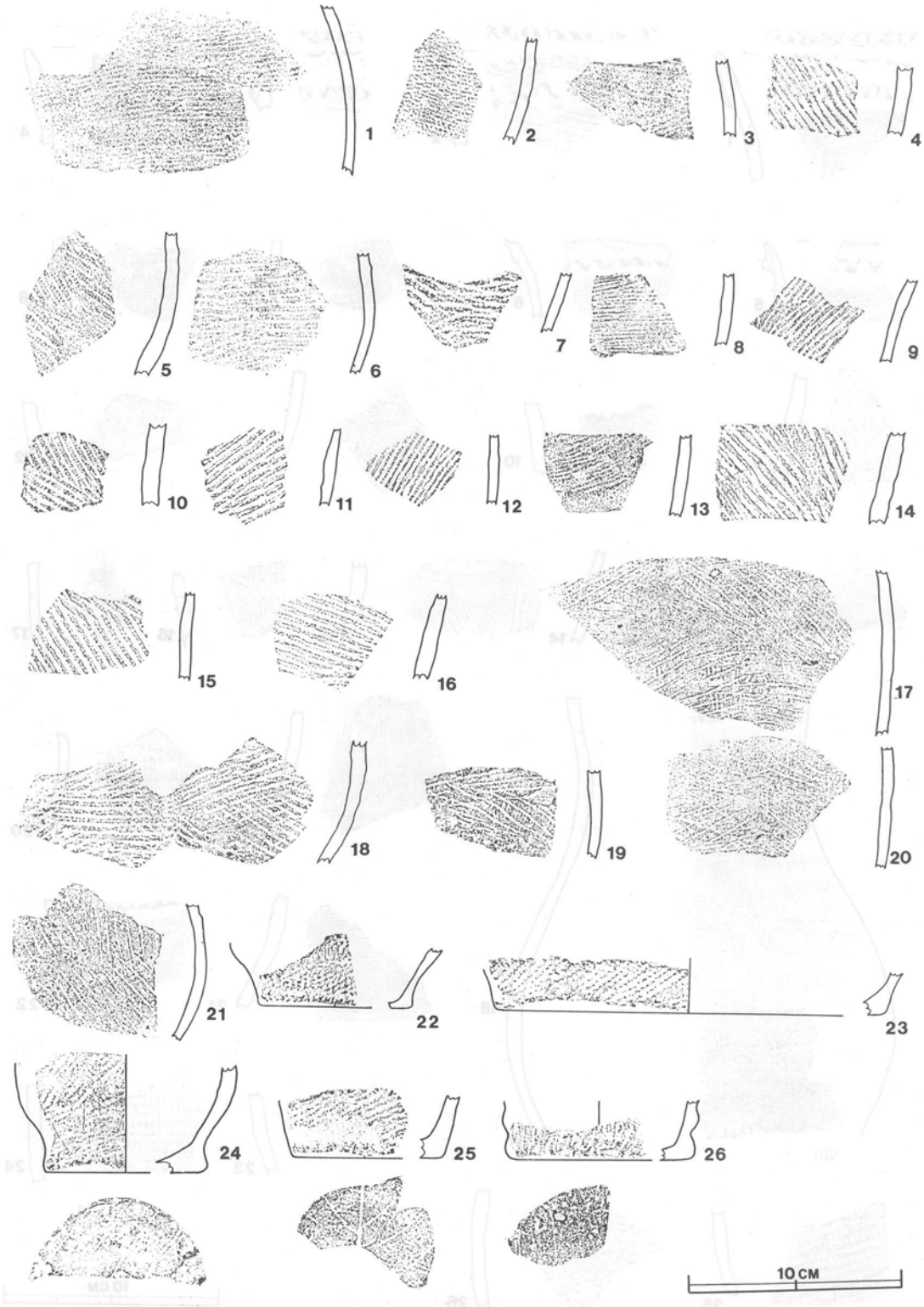
本住居址は，遺跡の中央部Ｃ３区ｂ０，ｃ０，Ｃ４区　ｂ１，ｃ１に確認され，本址の北東



第36図　第24号住居址出土遺物実測・拓影図

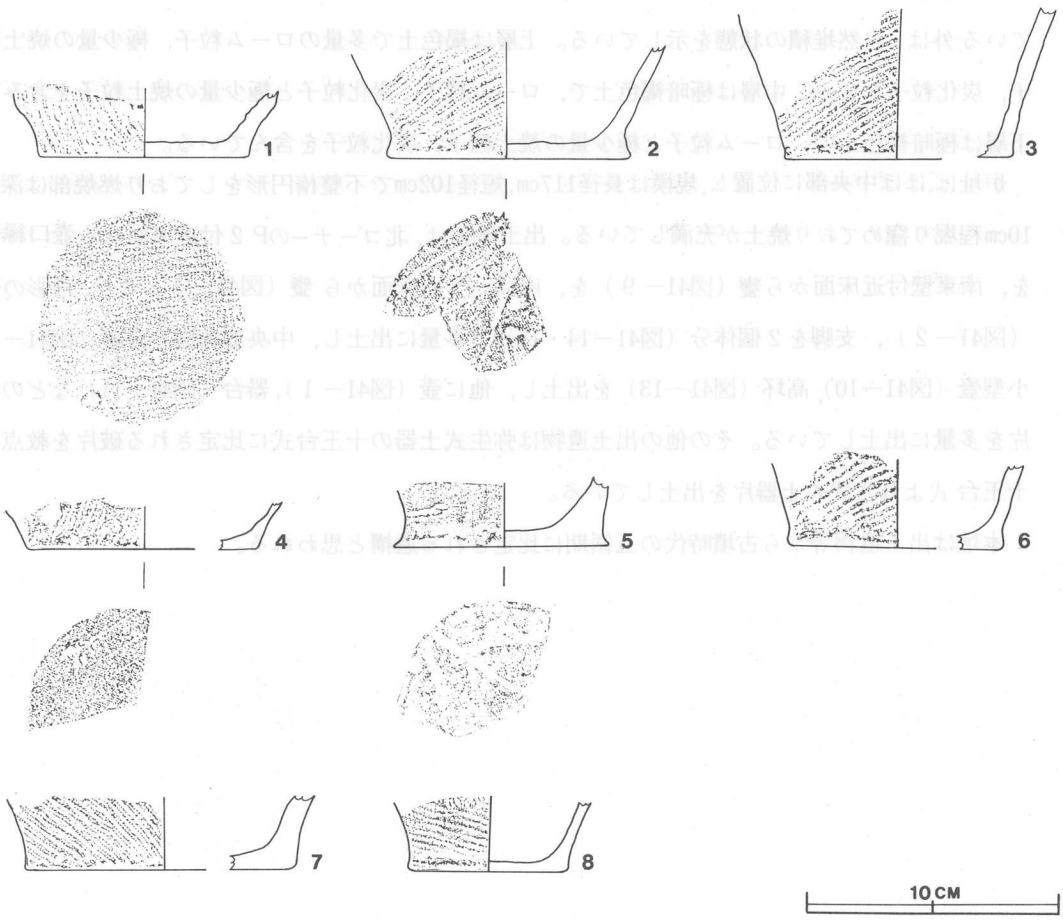


第37図　第24号住居址出土遺物実測·拓影図



第38図　第24号住居址出土遺物拓影図

コーナーに，第23号住居址の南コーナーが切り込んでおり，　　第23号住居址より古い遺構である。本址は隅丸長方形の平面形を呈し，主軸方向はＮ－2°－Ｅで，規模は長軸3.60m，短軸2.93m，面積5.3㎡を測り，壁高は40cm～50cm程である。壁は緩やかに傾斜して立ち上がり，壁溝は有さない。床面は黒褐色土で擂鉢状を呈し硬く踏み固められた状態を示している。炉址は確認出来なかった。ピットは１個所確認され，P1は主柱穴と思われる。覆土は７層からなり自然堆積の状態を示している。上層は黒褐色土・暗褐色土で多量のローム粒子と極少量の炭化粒子を含み，下層は黒褐色土で少量のローム粒子，炭化粒子と極少量のロームブロック，焼土粒子を含んでいる。出土遺物は，弥生式土器を中心に出土し，中央部床面直上より甕２個体分と,他に甕の口縁部と底部等を多数出土している。図36・図37－１～17・図38・図39は弥生式土器の長岡系に比定されるものと思われ，図37－18～24は十王台式に比定され，図37－25・26は十王台式より古式の土器片



第39図　第24号住居址出土遺物実測・拓影図

であると思われる。

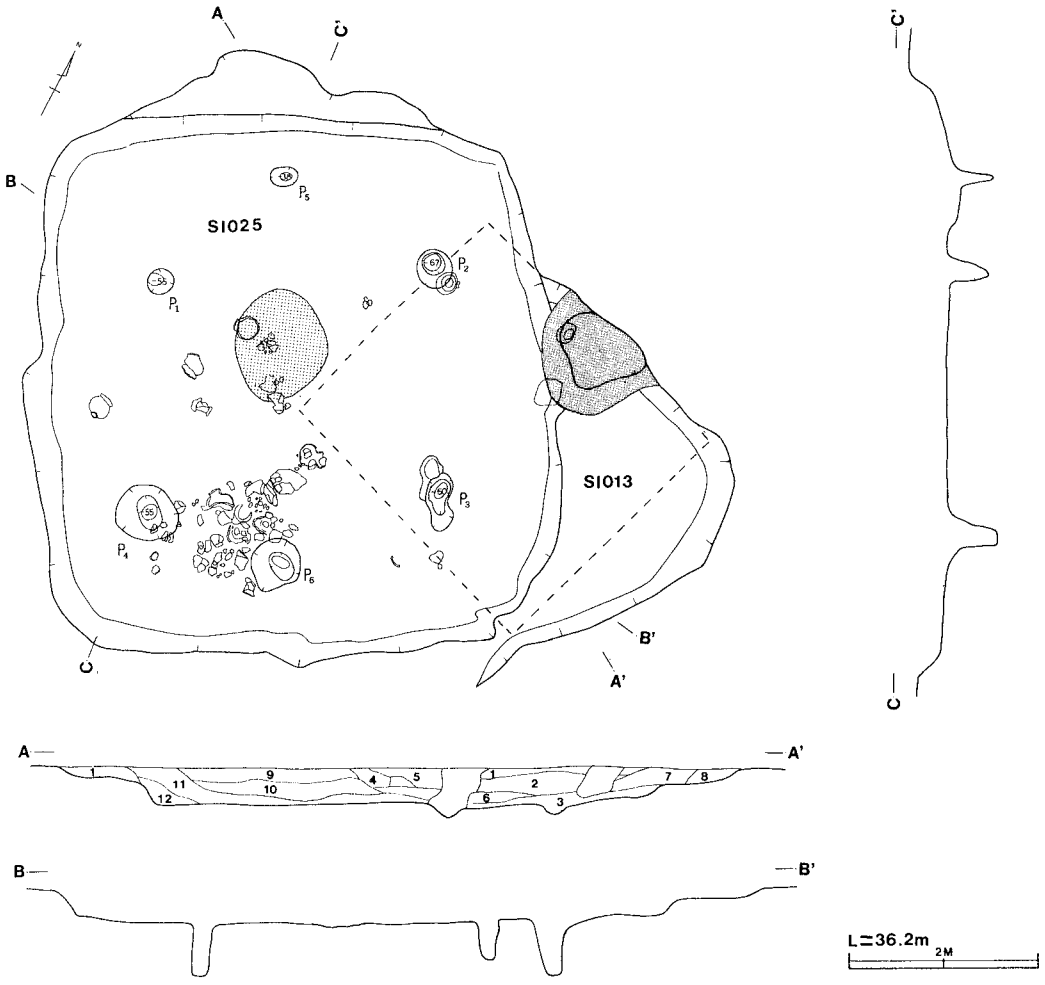
本住居址は，出土遺物等から弥生式時代後期の遺構と思われる。

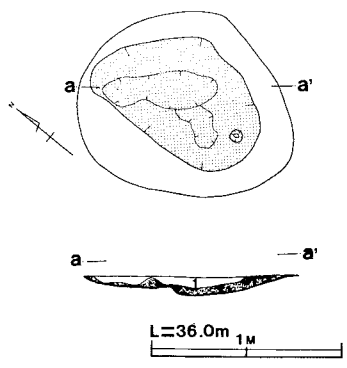
第25号住居址（図40・41(1)(2)・42）

本住居址は，調査区の北部西端Ｂ３区 ｃ９，ｃ０，ｄ９，ｄ０，Ｂ４区 ｃ１，ｄ１と確認され，東コーナーは第13号住居址と複合している。第13号住居址床面との比高は約15cmであるが，本址は第13号住居址より古い遺構である。南東約１ｍに第12号住居址が検出されている。本址は隅丸長方形の平面形を呈し，主軸方向はＮ－36°－Ｗで，規模は長軸5.85m，短軸5.53m，面積29.5㎡を測り，壁高は15cm～30cm程である。壁は緩やかに外反して立ち上っている。床面は炉址付近で硬く踏み固められた状態を示しているが，壁際からは100cm～150cm内外は軟らかい。ピットは６個所確認されＰ１～Ｐ４は主柱穴と考えられる。覆土は５層からなり，第13号住居址に切られている外は，自然堆積の状態を示している。上層は褐色土で多量のローム粒子，極少量の焼土粒子，炭化粒子を含み，中層は極暗褐色土で，ローム粒子，炭化粒子と極少量の焼土粒子を含み，下層は極暗褐色土で，ローム粒子と極少量の焼土粒子，炭化粒子を含んでいる。

炉址は，ほぼ中央部に位置し，規模は長径117cm，短径102cmで不整楕円形をしており燃焼部は深さ10cm程堀り窪めており焼土が充満している。出土遺物は，北コーナーのＰ２付近床面から壺口縁部を，南東壁付近床面から甕（図41－９）を，南コーナー床面から甕（図41－４・８），丹彩の壺（図41－２），支脚を２個体分（図41－14・15）と多量に出土し，中央部床面から甕（図41－５）小型壺（図41－10），高坏（図41－13）を出土し，他に壺（図41－１），器台（図41－11）などの破片を多量に出土している。その他の出土遺物は弥生式土器の十王台式に比定される破片を教点と十王台式より古式の土器片を出土している。

本址は出土遺物等から古墳時代の五領期に比定される遺構と思われる。





土層解説

A－A′

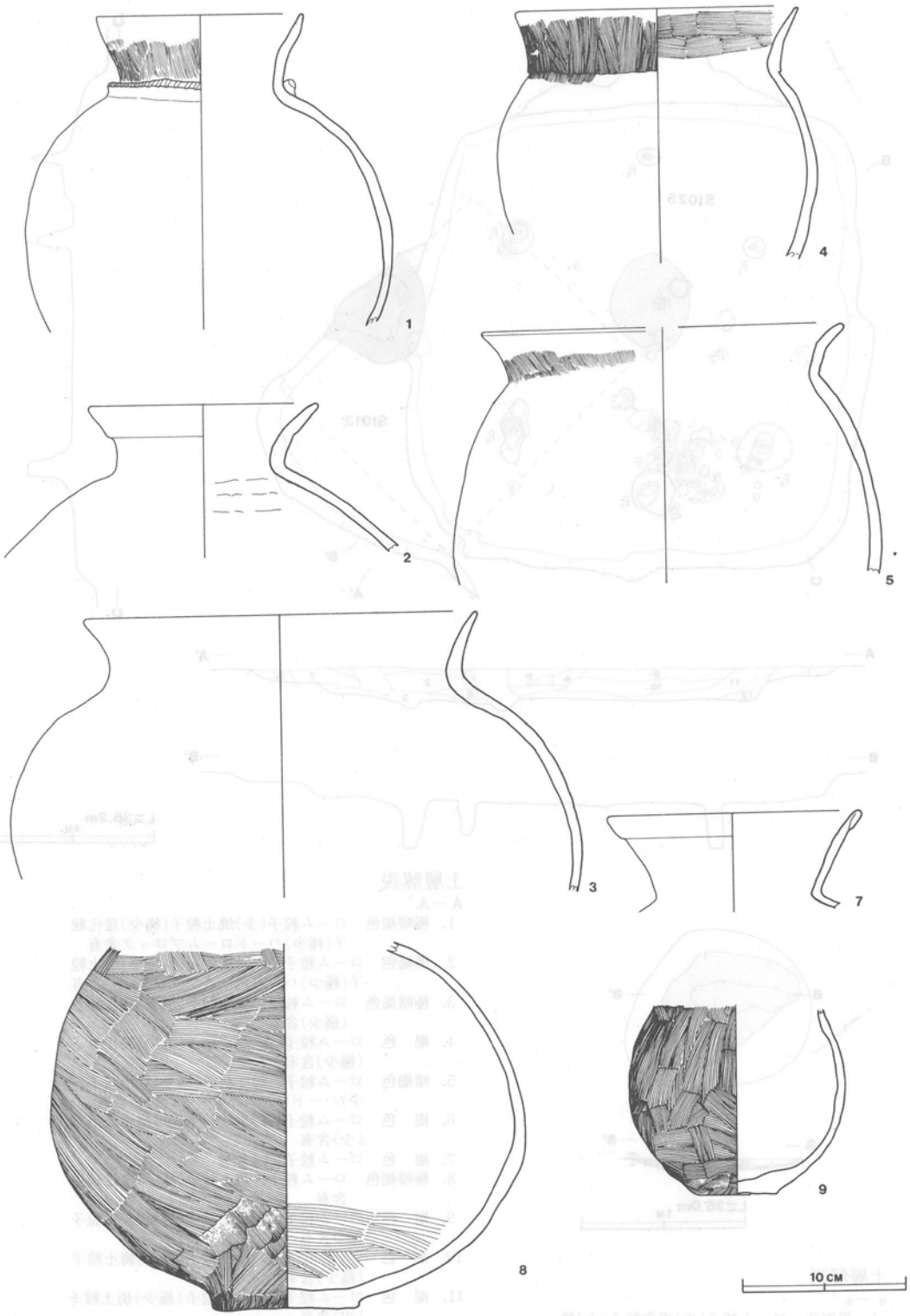
1. 極暗褐色　ローム粒子(少)焼土粒子(極少)炭化粒子(極少)ハードロームブロック含有
2. 黒褐色　ローム粒子(極少)炭化粒子(極少)焼土粒子(極少)ハードロームブロック(少)含有
3. 極暗褐色　ローム粒子，焼土粒子(極少)炭化粒子(極少)含有
4. 褐　色　ローム粒子(多)焼土粒子(極少)炭化粒子(極少)含有
5. 暗褐色　ローム粒子，焼土粒子(極少)炭化粒子(極少)ハードロームブロック(極少)含有
6. 褐　色　ローム粒子(多)炭化粒子(少)焼土粒子(少)含有
7. 褐　色　ローム粒子(多)含有
8. 極暗褐色　ローム粒子，焼土粒子(極少)炭化粒子含有
9. 褐　色　ローム粒子(多)焼土粒子(極少)炭化粒子極少含有
10. 褐　色　ローム粒子(多)炭化粒子(極少)焼土粒子(極少)含有
11. 褐　色　ローム粒子(多)炭化粒子(極少)焼土粒子(少)含有
12. 褐　色　ローム粒子(多)炭化粒子(少)含有

土層解説

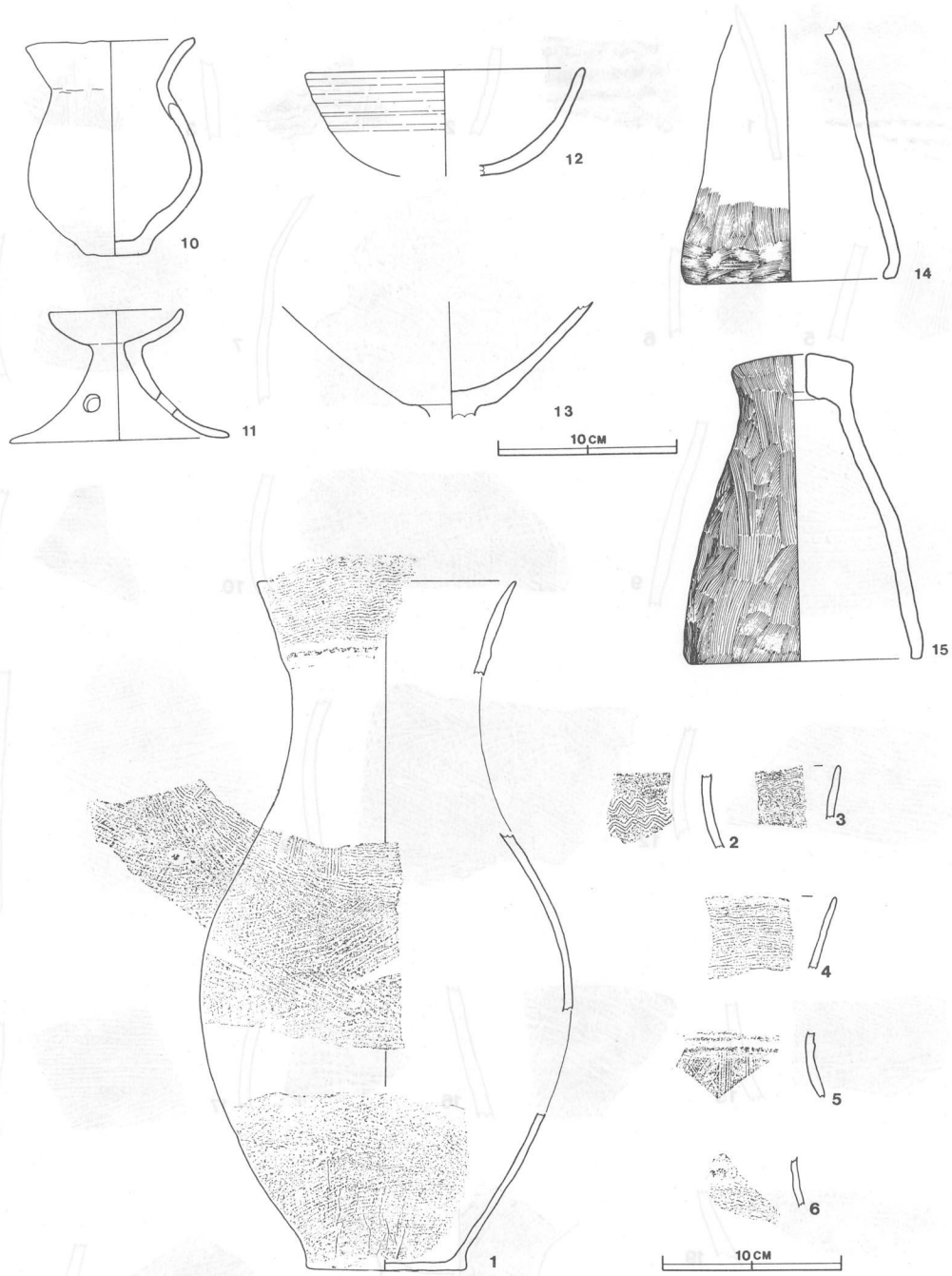
a －a′

1. 黒褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(少)焼土粒子(多)含有

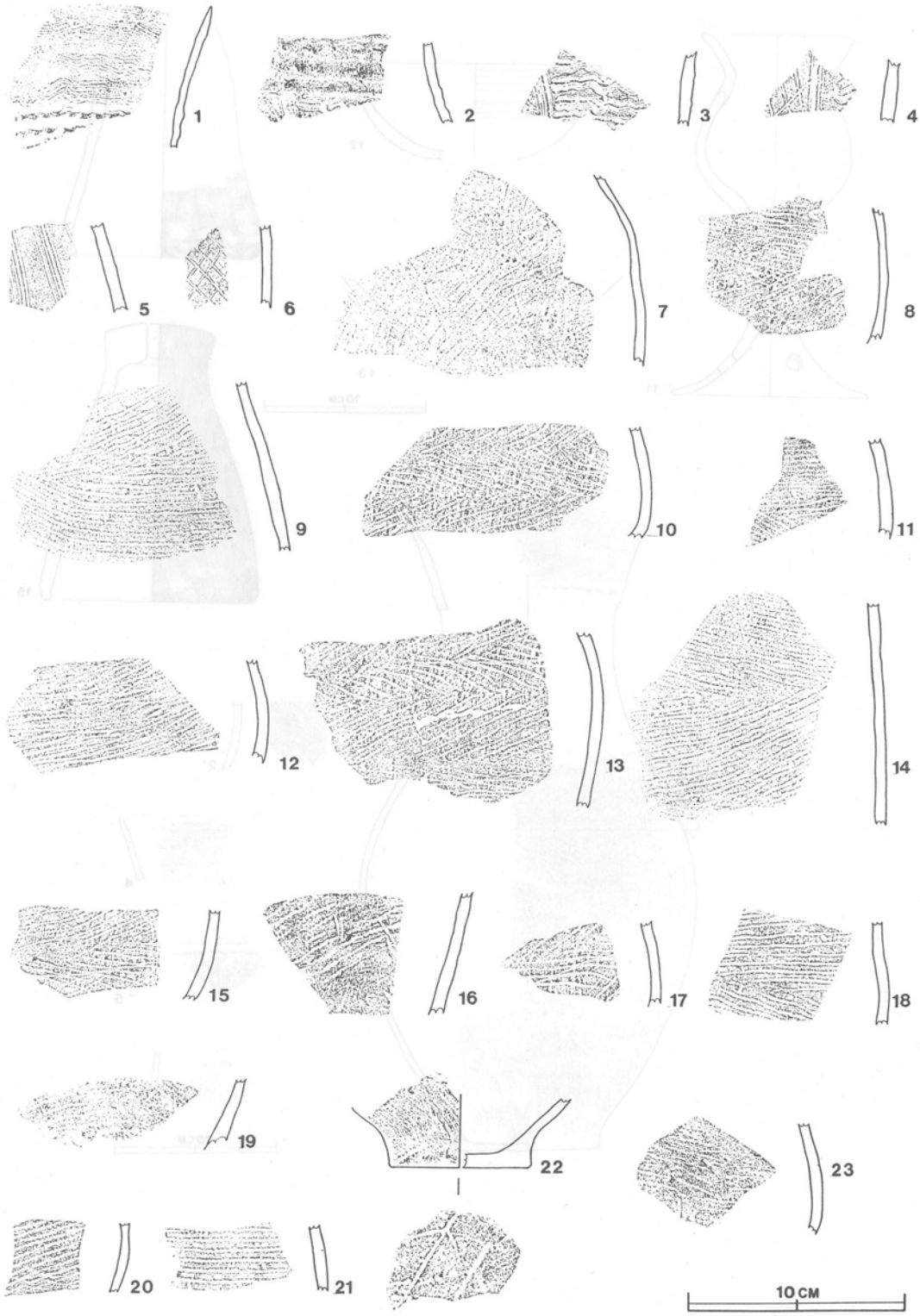
第40図　第13・25号住居址実測図



第41図(1)　第13·25号住居址出土遺物実測図



第41図（2） 第13·25号住居址出土遺物実測図



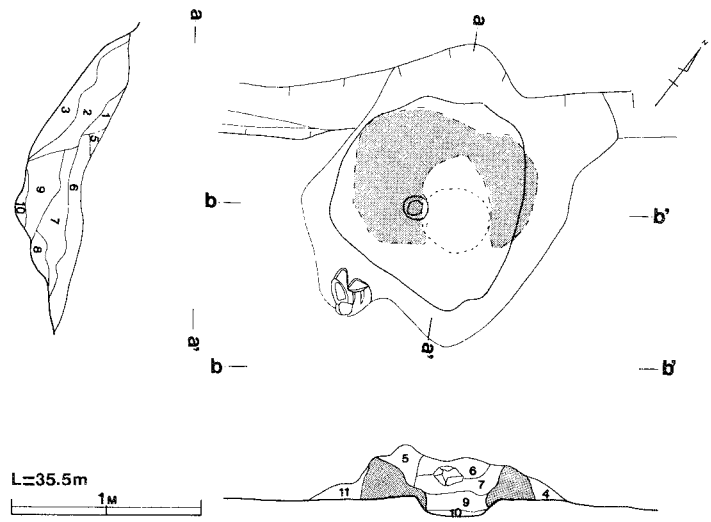
第42図　第13·25号住居址出土遺物拓影図

第26号住居址（図43～45(1)(2)(3)）

本住居址は，調査区の中央部西側Ｂ３区ｄ８，ｅ７，ｅ８，ｅ９，ｆ７，ｆ８に確認され，第31号住居址の南西部床面を約64cm程掘り込んで構築されている。第31号住居址の西部は，トレンチャーによる攪乱がひどく，出土遺物は砥石片と弥生式土器と土師器の細片のみである。

本址は第31号住居址より新しい遺構で，南東4.0m には 第30号住居址が，東側4.6m には第12号住居址が検出されている。本址は隅丸正方形の平面形を 呈し，主軸方向はＮ－38°－Ｗで，規模は長軸6.82m，短軸6.81m，面積38.4㎡を測り,壁高は75～ 100cm程で非常に深く堀り込んで構築されている。 壁はほぼ垂直に立ちあがり，壁下には 壁溝 を有していない。床面は平坦で硬く踏み固められた状態を示している。南コーナー付近，南西壁際に炭化物を出土しているので，本址は火災に遭遇していると思われる。

ピットは９個所確認され,P1 ～ P4は主柱穴と考えられる。東コーナーのＰ９は貯蔵穴と思われ，長径108cm，短径100cm，深さ62cmの不整楕円形を呈している。覆土は確認面から約50cmほど トレンチャーによる攪乱が見られ，西部は床面まで達している。中層は極暗褐色土で，少量のローム粒子，極少量の炭化粒子，焼土粒子を含み，下層は暗褐色土で多量のローム粒子と炭化粒子

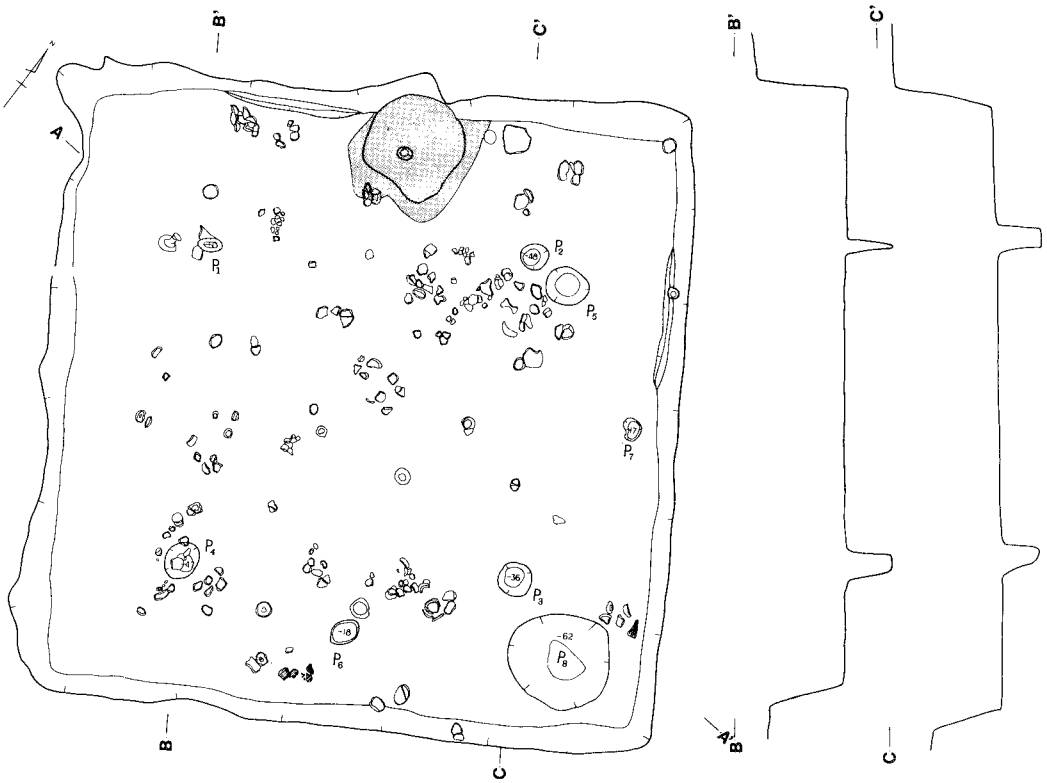


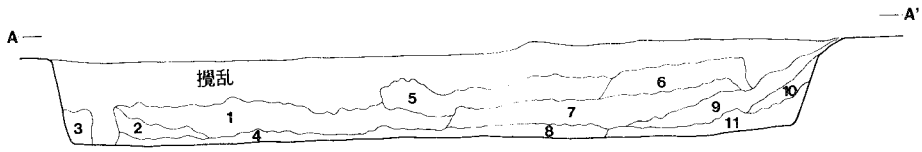
土層解説

ａ－ａ′　ｂ－ｂ′

1. 暗褐色　砂粒子(多)粘土粒子(多)ローム粒子(多)含有
2. 暗褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(多)焼土粒子(多)粘土ブロック(多)含有
3. 暗褐色　粘土主体
4. にぶい赤褐色　ほとんど焼土で，少量の炭化粒子を含有
5. 褐　色　ローム粒子(少)白色粘土　ブロック含有
6. にぶい赤褐色　焼土ブロック(少)ローム粒子(多)白色粘土(微)含有
7. 暗赤褐色　焼土ブロック(特多)含有
8. 暗赤褐色　焼成により固まったロームブロック
9. 赤褐色　焼土粒子を含有した灰質の土層
10. 暗赤褐色　焼土を主体とした土層
11. 褐灰色　しまりあり，焼土粒(多)白色粘土　ブロック　含有

第43図　第26号住居址カマド実測図





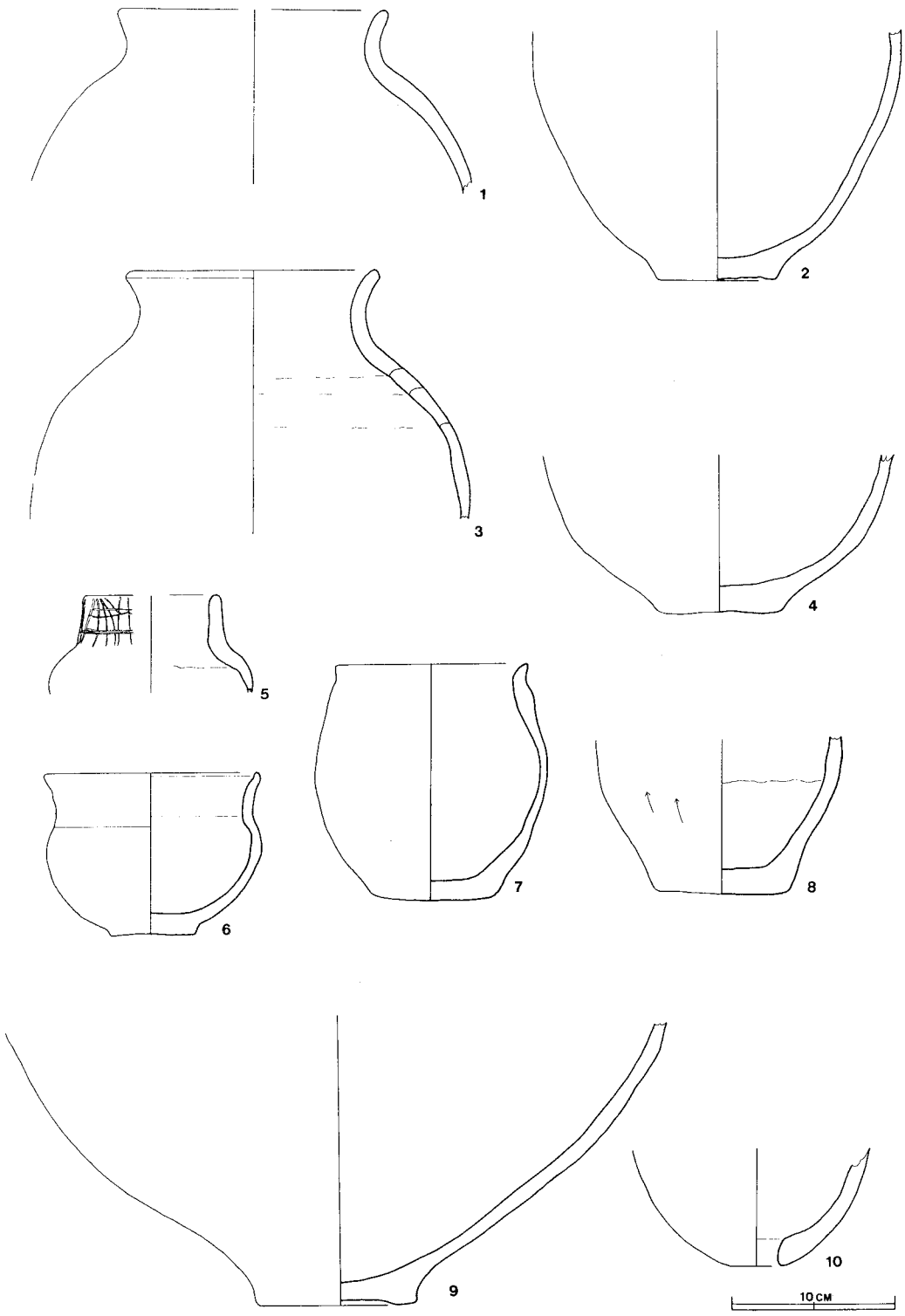
L=36.82m
2M

土層解説

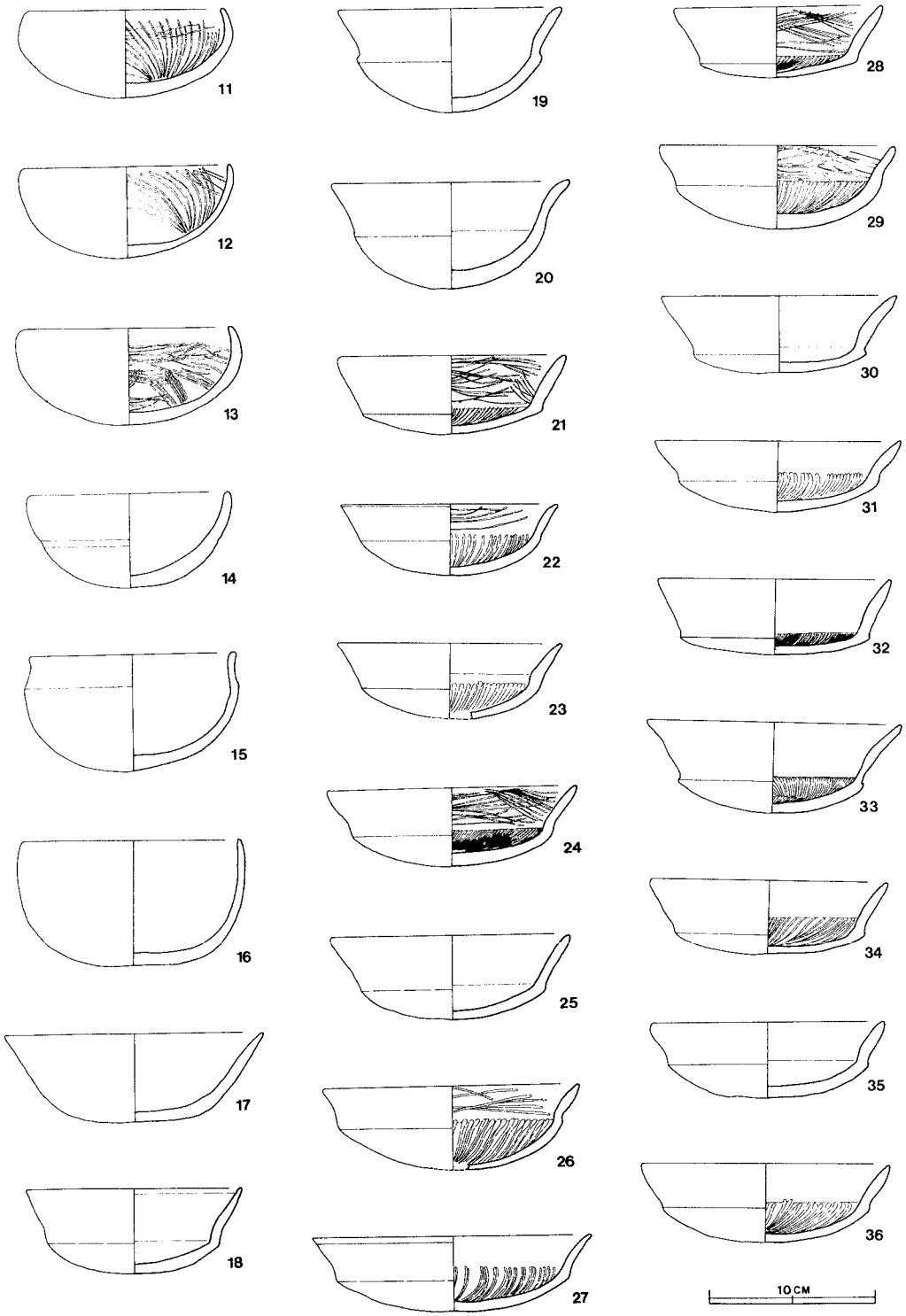
A－A′

1. 黒褐色　ローム粒子(少)炭化物(極少)焼土粒子(極少)含有
2. 暗褐色　ロームブロック(少)ローム粒子(少)炭化粒子(少)含有
3. 黒褐色　ローム粒子(多)焼土粒子(極少)含有
4. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(中)含有
5. 暗褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(極少)砂粒子(少)含有
6. 暗褐色　ローム粒子(中)炭化粒子(極少)砂粒子(小)含有
7. 黒褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(中)焼土粒子(極少)含有
8. 暗褐色　ロームブロック(少)ローム粒子(少)炭化粒子(多)含有
9. 褐　色　ローム粒子(特多)炭化粒子(少)焼土粒子(極少)ローム小ブロック(少)含有
10. 黒褐色　ローム粒子(多)焼土粒子(極少)炭化粒子(極少)含有
11. 褐　色　ローム粒子(多)ロームブロック(中)炭化粒子(中)含有

第44図　第26号住居址実測図



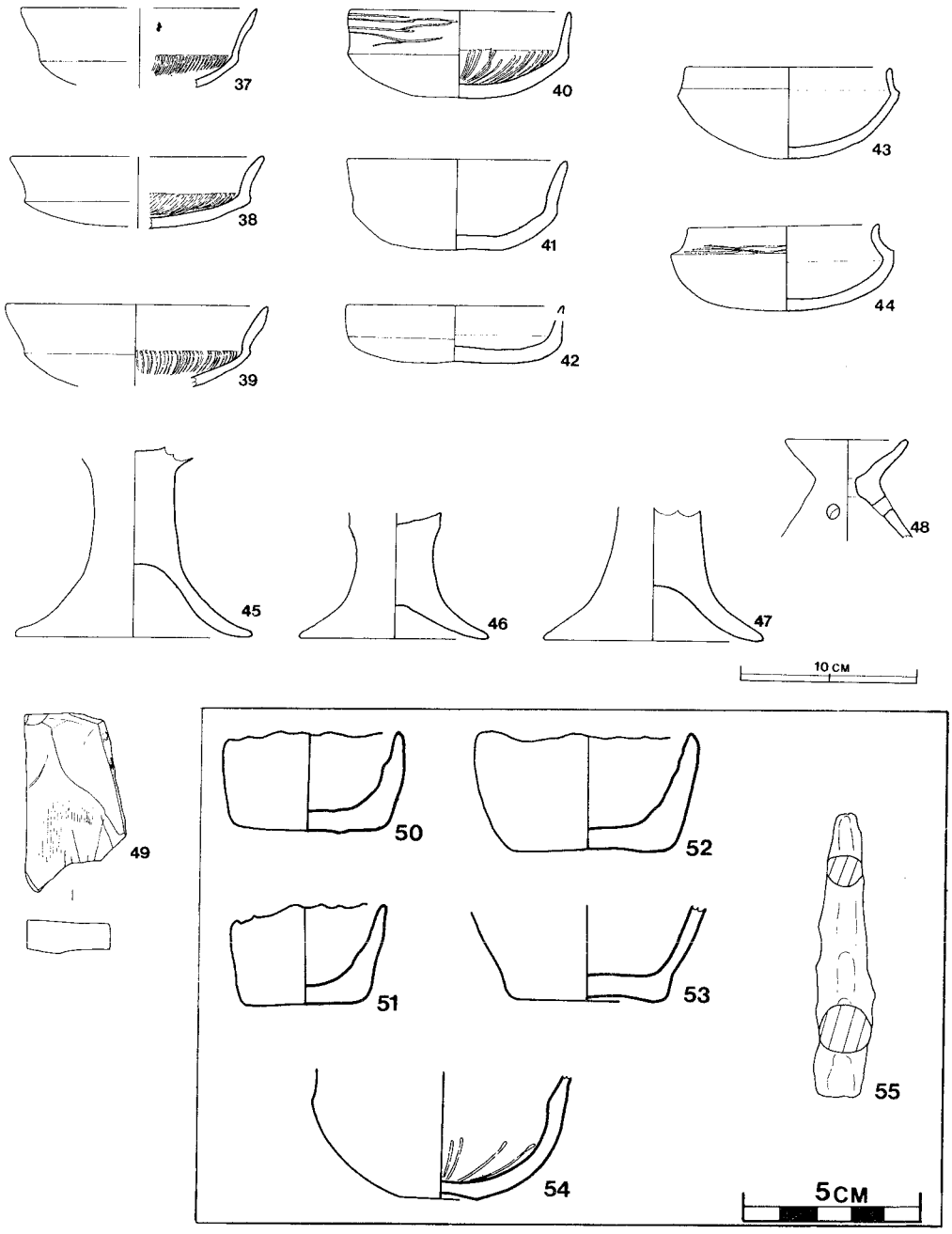
第45図（1） 第26号住居址出土遺物実測図



第45図（２） 第26号住居址出土遺物実測図

を含んでいる。

カマドは北東壁の中央より北に付設され，規模は長径33cm，短径92cmで，北西壁を70cm幅で，40cm程掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径37cm，短径33cmで深さ10cm程円形に堀り窪めている。袖部は黒色土混りの砂質粘土で，カマドは南東向きに構築されている。トレンチャーによる攪乱を受けているが燃焼部より，土師器の椀形土器片と高坏を支脚として利用した物を出土している。出土



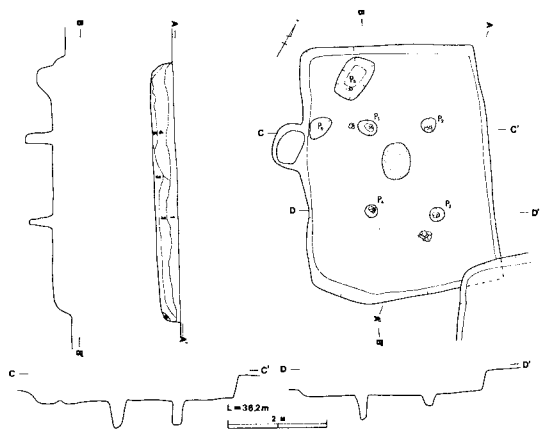
第45図(3)　第26号住居址出土遺物実測図

遺物は，土師器を中心に多数出土しており，完存率良好なものを上げると，カマド内より甕（図45－８），高坏片と北コーナー中央部付近床面から坏（図45－13・14・22・23・26），籠底部（図45－10），甕底部（図45－９），手捏土器（図45－50・51）北東壁付近床面直上から坏３個（図45－28・32），東コーナー床面から坏３個（図45－27・31・35），甕口縁部（図45－１）南東壁付近床面から坏，坩，椀（図45－16），甕口縁部（図45－３）南コーナー床面より坏４個（図45－11・17・18・20），椀（図45－15），小型甕（図45－６），甕底部（図45－２），南西壁付近床面より坏（図45－36），西コーナー床面より坏，北西壁付近床面より坏（図45－19），中央部床面より坏（図45－24・34），他に床面より坏３個（図45－21・29），甕（図45－７），覆土から手捏土器，高坏，壺，甕，器台等と土師器の細片を多数出土している。その他の出土遺物は，弥生式土器のほぼ十王台式に比定される破片を数点と，鉄製品・鉄滓を数点出土している。本址は，出土遺物等から古墳時代の鬼高期に比定される遺構と思われる。

第28号住居址（図46・47）

本住居址は，調査区の中央部Ｂ３区ｊ８，ｊ９，ｊ０，Ｃ３区ａ８，ａ９，ａ０に確認され，東コーナーにおいて第23号住居址と，西コーナーにおいて第１号堀立柱建築址と，南コーナーにおいては第29号住居址が複合している。本址は第23号住居址，第29号住居址，第１号堀立柱建築址よりも古い遺構である。

本址の主軸方向はＮ－34°－Ｗで，規模は長軸5.03m，短軸3.70m，面積15.0㎡を測り，ほぼ隅丸長方形の平面形を呈している。壁高は15cm～40cmほどで，北東壁はほぼ垂直に立ちあがっているが，南西壁・南東壁は緩やかな傾斜をして立ち上っている。床面は平坦で硬く踏み固められていた。

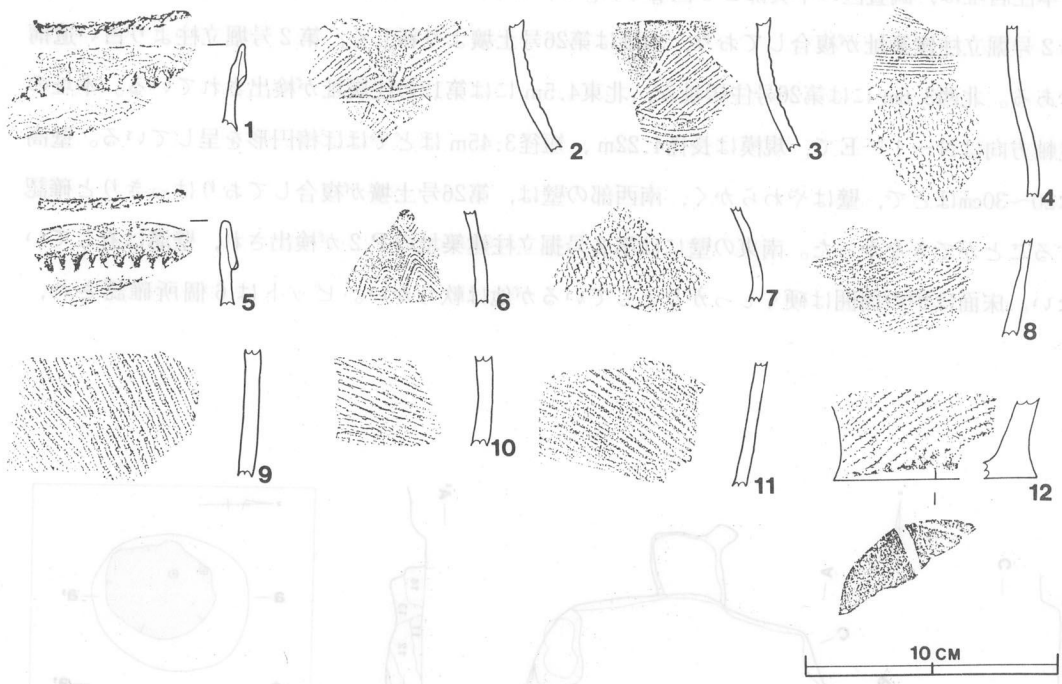


土層解説

A－A′

1. 黒褐色　ローム粒子（極少）砂粒子（極少）含有
2. 暗褐色　ローム粒子（　少）炭化粒子（極少）砂粒子（少）含有
3. 黒褐色　ローム粒子（極少）砂粒子（極少）含有
4. 黒褐色　ローム粒子（多）炭化粒子（少）焼土粒子（極少）含有
5. 暗褐色　ロームブロック（極少）ローム粒子（少）炭化粒子（極少）含有
6. 褐　色　ローム粒子（少）含有

第46図　第28号住居址出土遺物実測図



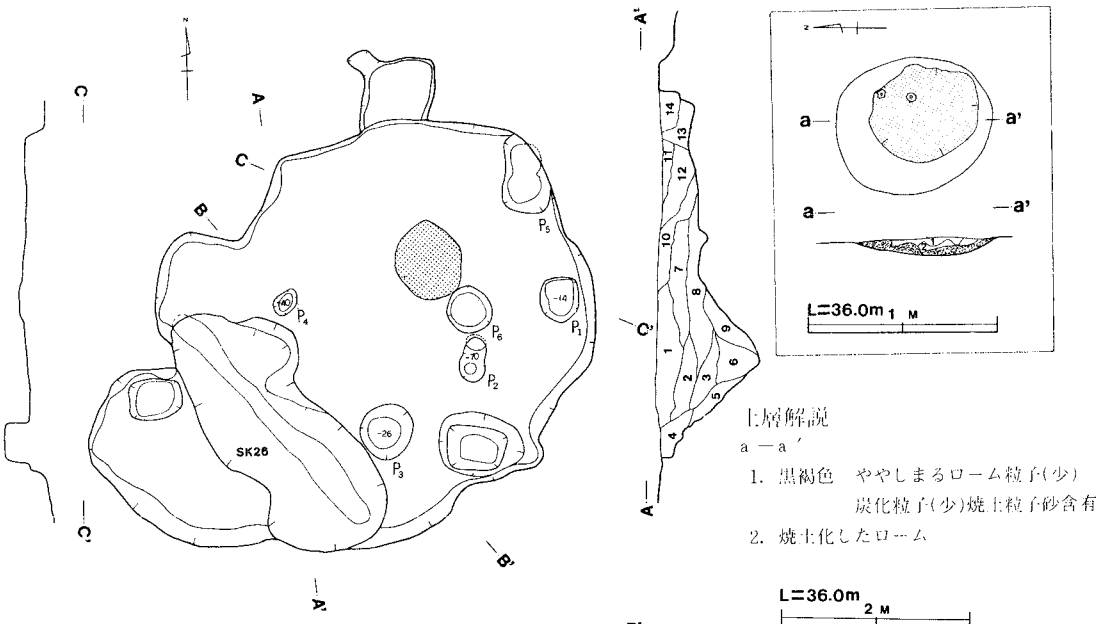
第47図　第28号住居址拓影図

炉址は本址の中央部にあり，規模は長径76cm，短径57cmで楕円形に焼土の広がりを確認した。ピットは６個所確認され，Ｐ１～Ｐ４は主柱穴と考えられる。西コーナーのP5は貯蔵穴と思われ長径90cm，短径60cm，深さ30cmの不整楕円形を呈している。覆土は６層からなり自然堆積の状態を呈している。上層は黒褐色土で極少量のローム粒子，砂粒を含み，中層は暗褐色土で，少量のローム粒子，砂粒と極少量の炭化粒子を含み，下層は暗褐色土で少量のローム粒子，焼土粒子を含んでいる。出土遺物は弥生式土器で，十王台式より古い型式の口縁部と底部の破片を数点出土している。底部には木葉痕がある。その他の出土遺物は石器が３個出土している。

本址は弥生式時代後期に比定される遺構と思われる。

第30号住居址（図48・49）

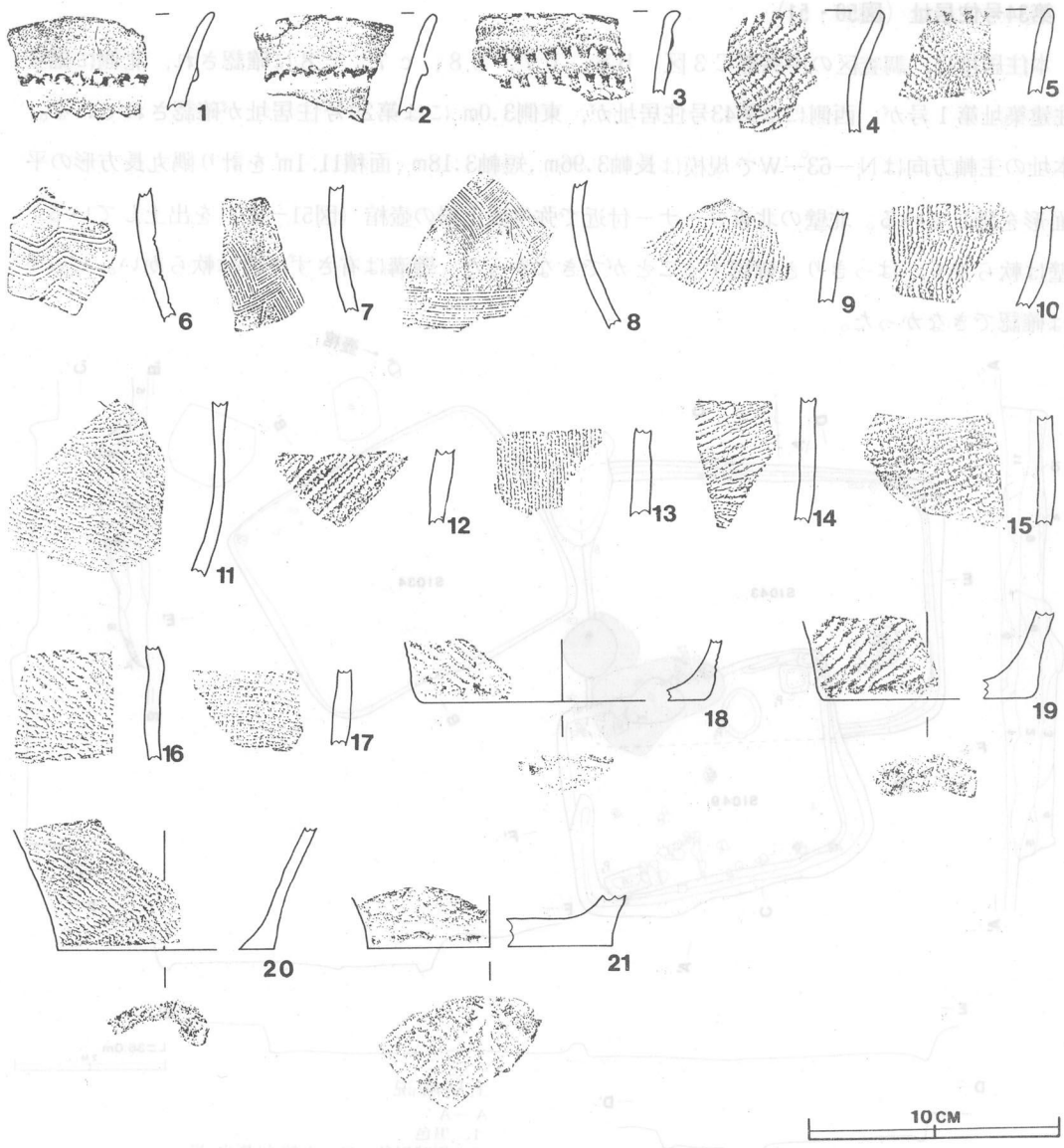
本住居址は，調査区の中央部Ｂ３区ｇ９，ｇ０，ｈ９，ｈ０に確認され，南部には第26号土壙，第２号堀立柱建築址が複合しており，本址は第26号土壙より新しく，第２号堀立柱より古い遺構である。北西3.6mには第26号住居址が，北東4.5mには第12号住居址が検出されている。本址の主軸方向はＮ－１°－Ｅで，規模は長径4.22m，短径3.45mほどでほぼ楕円形を呈している。壁高は20～30cmほどで，壁はやわらかく，南西部の壁は，第26号土壙が複合しておりはっきりと確認することができなかった。南東の壁には第２号掘立柱建築址のＰ２が検出され，壁溝は有していない。床面は炉の周囲は硬くしっかりとしているが他は軟らかい。ピットは６個所確認され，



土層解説
a－a′
1. 黒褐色　ややしまるローム粒子(少)炭化粒子(少)焼土粒子砂含有
2. 焼土化したローム

土層解説
A－A′
1. 暗褐色　ややしまりあり，ローム粒子(微)炭化粒子(少)砂粒(微)含有
2. 黒褐色　しまりあり　ローム粒子(少)炭化粒子(少)砂粒(微)含有
3. 黒褐色　しまりあり，ローム粒子(少)炭化粒子(微)焼土粒(微)含有
4. 暗褐色　しまりあり，ローム粒子(中)炭化粒子(少)含有
5. 褐　色　しまりあり，ローム粒子(中)炭化粒子(少)黒色土含有
6. 暗褐色　しまりあり，ローム粒子(中)炭化粒子(少)含有
7. 黒褐色　しまりあり，ローム粒子(中)炭化粒子(少)焼土粒子(微)含有
8. 黒褐色　しまりあり，ローム粒子(中)炭化粒子(少)焼土粒子(微)含有
9. 黒褐色　ややしまりあり，ローム粒子(少)炭化粒子(少)焼土粒子(微)含有
10. 黒褐色　しまりなし　ロームブロック(少)ローム粒子(中)炭化粒子(少)含有
11. 暗褐色　ややしまる　ローム粒子(少)含有
12. 暗褐色　しまりなし，木の根により撹乱
13. 暗褐色　しまりなし，ローム粒子(中)炭化粒子(少)
14. 黒褐色　しまりなし，ローム粒子(少)含有

第48図　第30号住居址・第26号土壙実測図

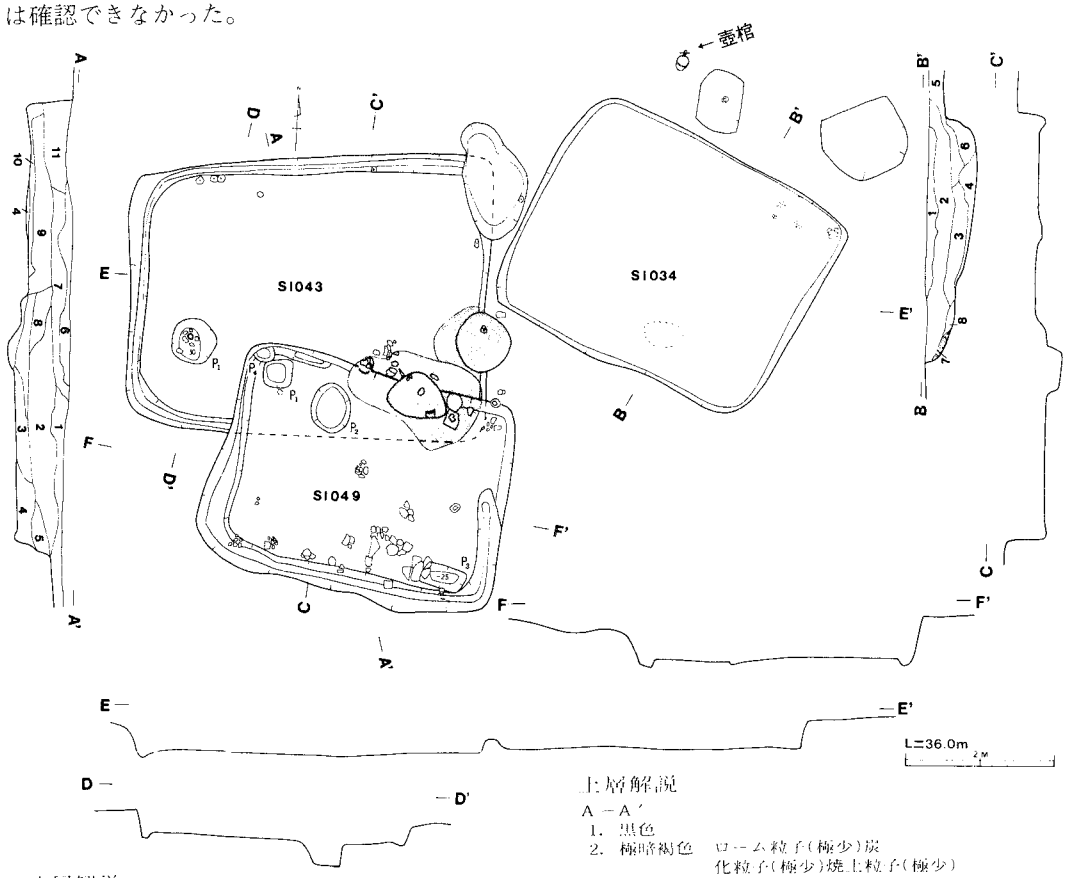


第49図　第30号住居址出土遺物拓影図

Ｐ１～Ｐ４は主柱穴と考えられる。南部に複合している第26号土壙は溝状土構と考えられ，規模は長径3.10m，短径1.05m，深さ1.80m を測り長楕円形状を呈している。覆土は12層からなり自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土で少量のローム粒子を含有し，下層は暗褐色土で多量のローム粒子と少量のロームブロックと焼土粒子を含有している。炉址は中央より北に付設され，規模は長径82cm，短径72cmを測り円形を呈し，燃焼部は20cmほど掘り窪められ焼土が充満していた。出土遺物は，弥生式土器片で口縁部４点，頸部３点，胴部８点，底部４点出土し，底部には木葉痕がある。これらの土器片は，十王台式土器より古式と思われ，図49－６～８は長岡系の弥生式土器片と思われる。本址は，弥生時代後期に比定される遺構と思われる。

第34号住居址（図50・51）

本住居址は，調査区の中央部Ｃ３区　ｂ６，ｂ７，ｂ８，ｃ７，ｃ８に確認され，北側に掘立柱建築址第１号が，西側には第43号住居址が，東側3.0m には第29号住居址が確認されている。本址の主軸方向はＮ－63°－Ｗで規模は長軸3.96m，短軸3.18m，面積11.1㎡を計り隅丸長方形の平面形を呈している。北壁の北東コーナー付近で弥生式土器の壺棺（図51－８）を出土している。壁は軟らかく，はっきりと確認することができなかった。壁溝は有さず床面は軟らかい。ピットは確認できなかった。



土層解説

Ｂ－Ｂ′

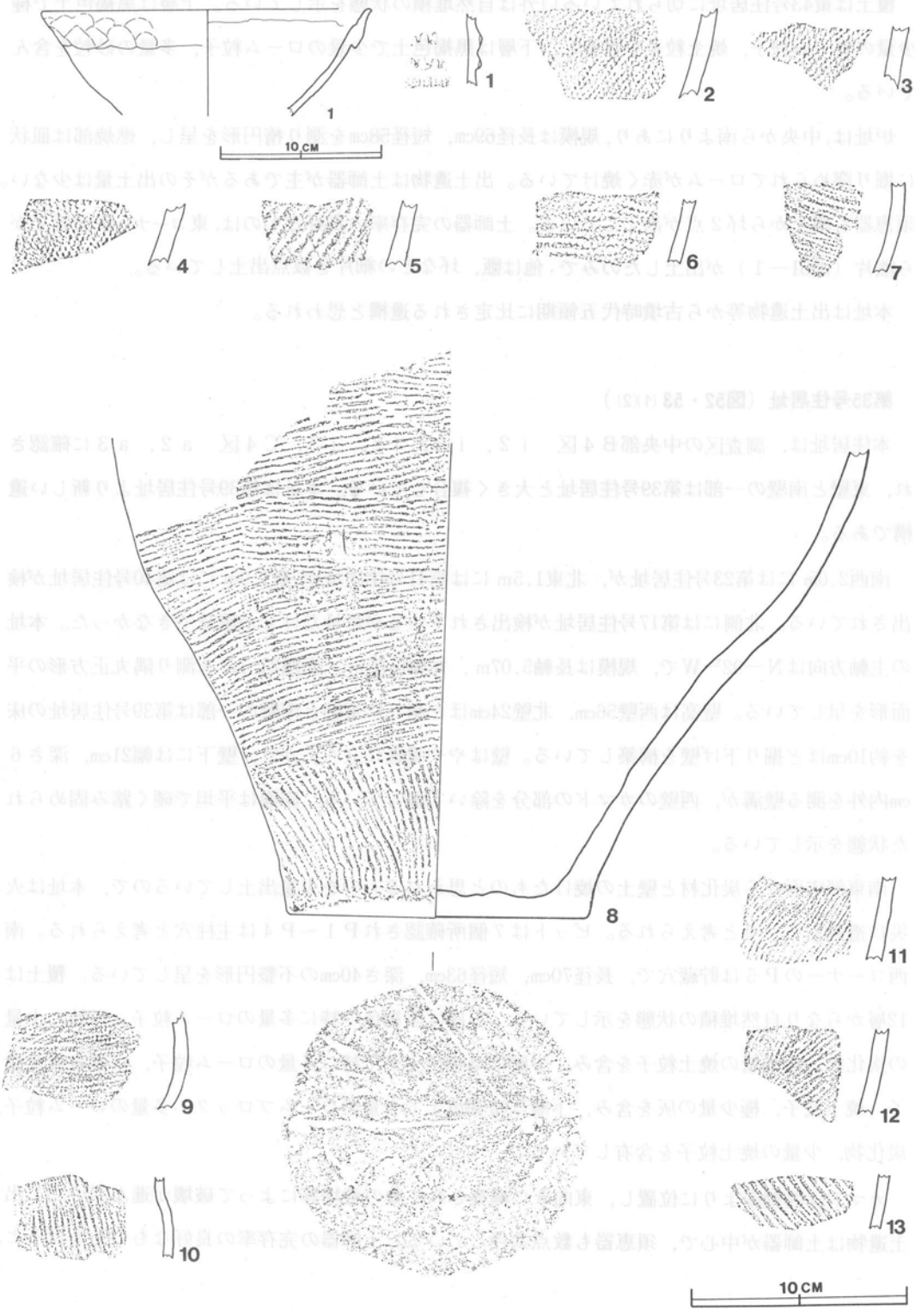
1. 極暗褐色　ローム粒子(極少)含有
2. 暗褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(極少)含有
3. 暗褐色　ローム粒子(少)黒色土(少)含有
4. 褐色　ローム粒子(多)ロームブロック(少)含有
5. 褐色　ローム粒子(少)含有
6. 褐色　ローム粒子(多)含有
7. ローム
8. 暗褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(少)含有

土層解説

Ａ－Ａ′

1. 黒色
2. 極暗褐色　ローム粒子(極少)炭化粒子(極少)焼土粒子(極少)含有
3. 暗褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(極少)焼土粒子(極少)含有粘性弱
4. 暗褐色　粘性(弱)ローム粒子(多)炭化粒子(少)含有
5. 極暗褐色　ローム粒子(極少)炭化粒子(極少)含有
6. 黒褐色　粘性(強)
7. 黒色　ローム粒子(極少)含有
8. 極暗褐色　粘性(強)ローム粒子(多)炭化粒子(多)焼土粒子(少)白色粘土(少)含有
9. 極暗褐色　ローム粒子(極少)炭化粒子(極少)焼土粒子(極少)含有
10. 暗褐色　粘性(強)ローム粒子(多)炭化粒子(極少)焼土粒子(極少)ロームブロック(多)含有　床面
11. 黒褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(少)焼土粒子(少)砂粒子(多)含有

第50図　第34・43・49号住居址実測図



第51図　第34号住居址出土遺物実測・拓影図

覆土は第43号住居址に切られている以外は自然堆積の状態を示している。上層は黒褐色土で極少量のローム粒子，焼土粒子を含有し，下層は黒褐色土で少量のローム粒子，多量の砂粒を含んでいる。

炉址は，中央から南よりにあり，規模は長径69cm，短径58cmを測り楕円形を呈し，燃焼部は皿状に堀り窪められてロームが赤く焼けている。出土遺物は土師器が主であるがその出土量は少ない。須恵器も覆土から坏2点が出土している。土師器の完存率の良好なものは，東コーナー床面直上から甑片（図51－1）が出土したのみで，他は甕，坏などの細片を数点出土している。

本址は出土遺物等から古墳時代五領期に比定される遺構と思われる。

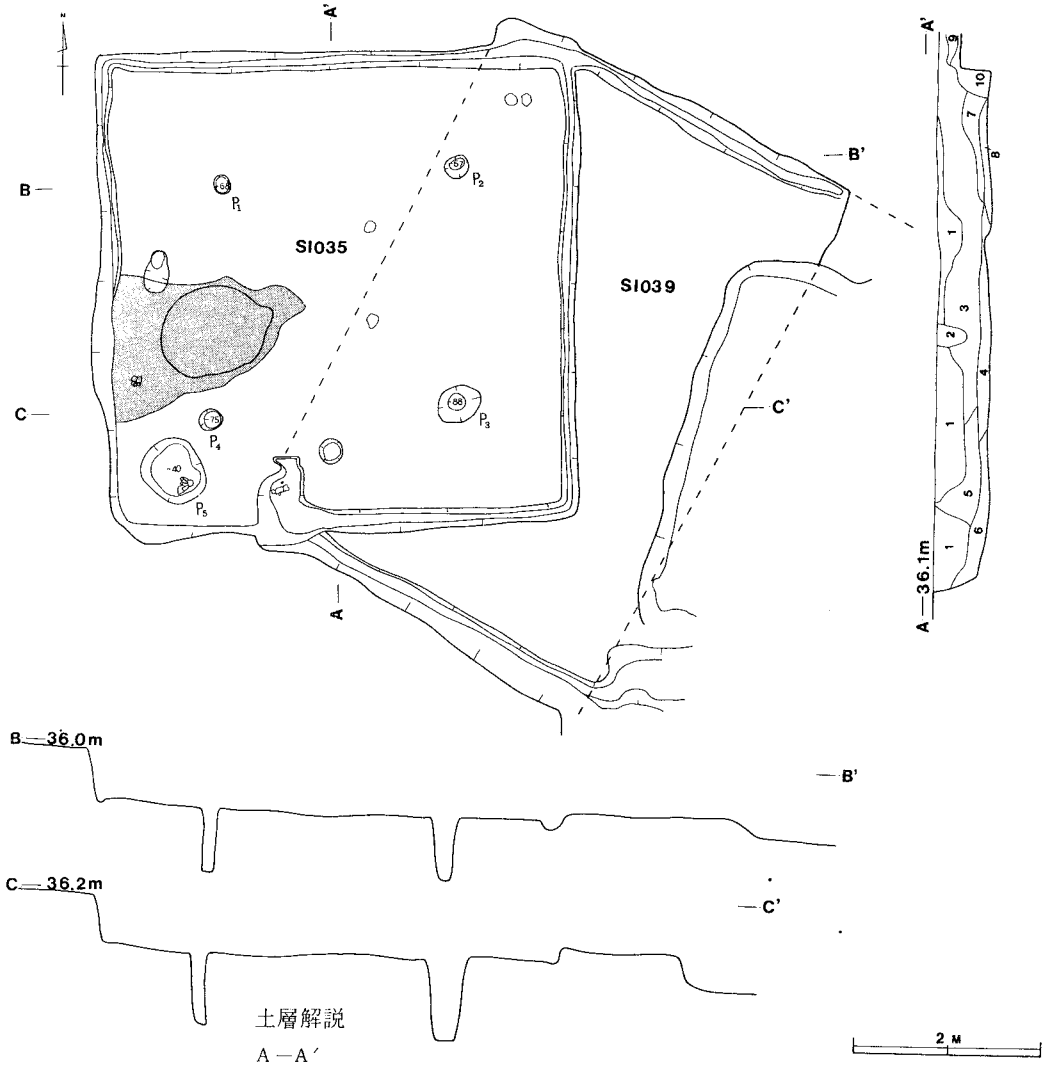
第35号住居址（図52・53(1)(2)）

本住居址は，調査区の中央部Ｂ４区　ｉ２，ｉ３，ｊ２，ｊ３，Ｃ４区　ａ２，ａ３に確認され，東壁と南壁の一部は第39号住居址と大きく複合している。本址は第39号住居址より新しい遺構である。

南西2.0mには第23号住居址が，北東1.5mには第41号住居址が，東1.0mには第40号住居址が検出されている。北側には第17号住居址が検出されているが炉址だけしか確認できなかった。本址の主軸方向はＮ－92°－Ｗで，規模は長軸5.07m，短軸5.05m，面積21.1㎡を測り隅丸正方形の平面形を呈している。壁高は西壁56cm，北壁24cmほど測り，東壁と南壁の一部は第39号住居址の床を約10cmほど掘り下げ壁を構築している。壁はやや垂直に立ちあがり，壁下には幅21cm，深さ6cm内外を測る壁溝が，西壁のカマドの部分を除いて廻っている。床面は平坦で硬く踏み固められた状態を示している。

南東部床面から炭化材と壁土の焼けたものと思われるものを少量出土しているので，本址は火災に遭遇していると考えられる。ピットは７個所確認されＰ１～Ｐ４は主柱穴と考えられる。南西コーナーのＰ５は貯蔵穴で，長径70cm，短径63cm，深さ40cmの不整円形を呈している。覆土は12層からなり自然堆積の状態を示している。上層は黒褐色で特に多量のローム粒子，砂粒，少量の炭化粒，極少量の焼土粒子を含み，中層は暗褐色土で，特に多量のローム粒子，少量の炭化粒子，焼土粒子，極少量の灰を含み，下層は暗褐色土で少量のロームブロック，多量のローム粒子，炭化物，少量の焼土粒子を含有している。

カマドは西壁南よりに位置し，東向きに構築され，桑の栽培等によって破壊が進んでいた。出土遺物は土師器が中心で，須恵器も数点共伴している。土師器の完存率の良好なものをあげると，

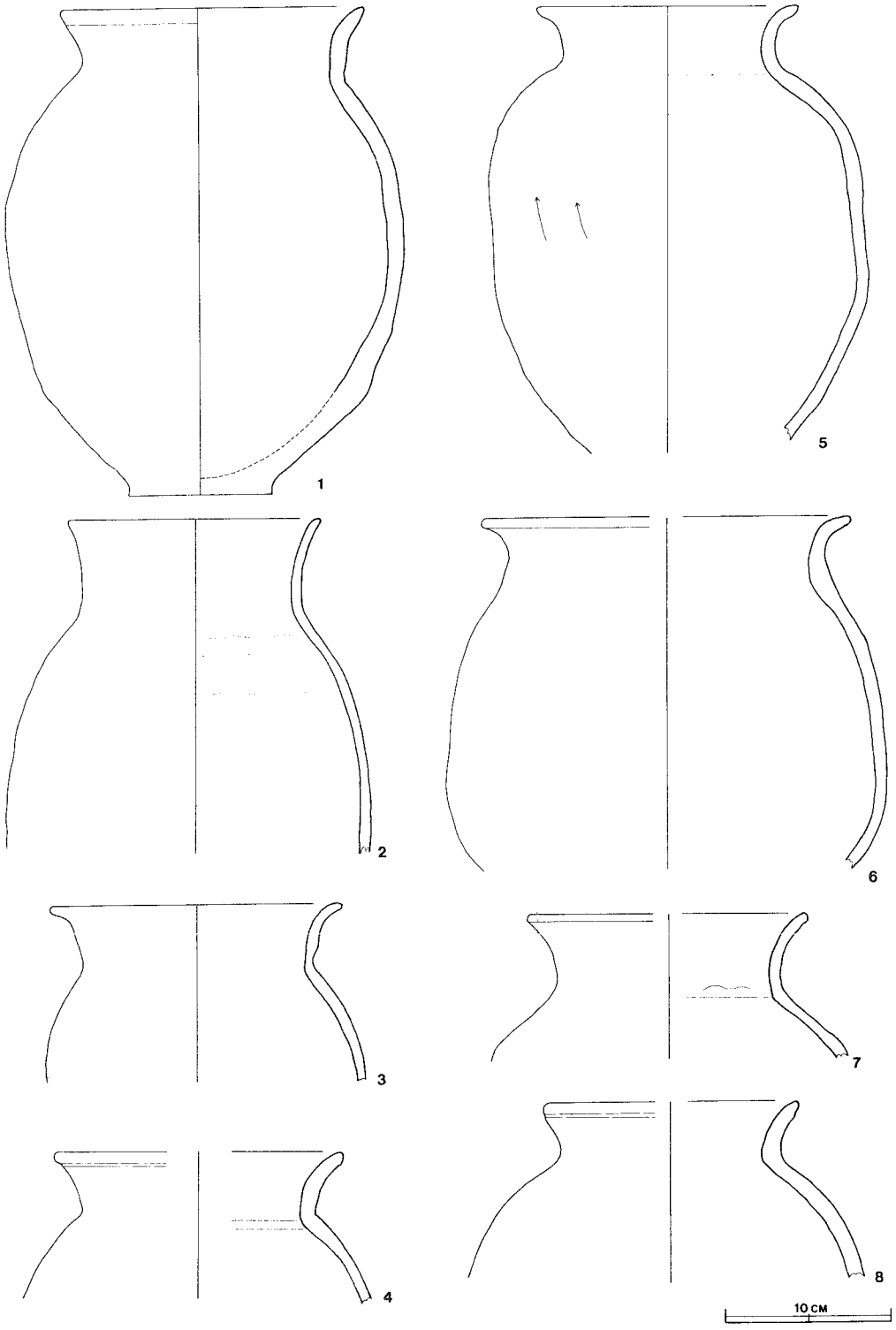


土層解説

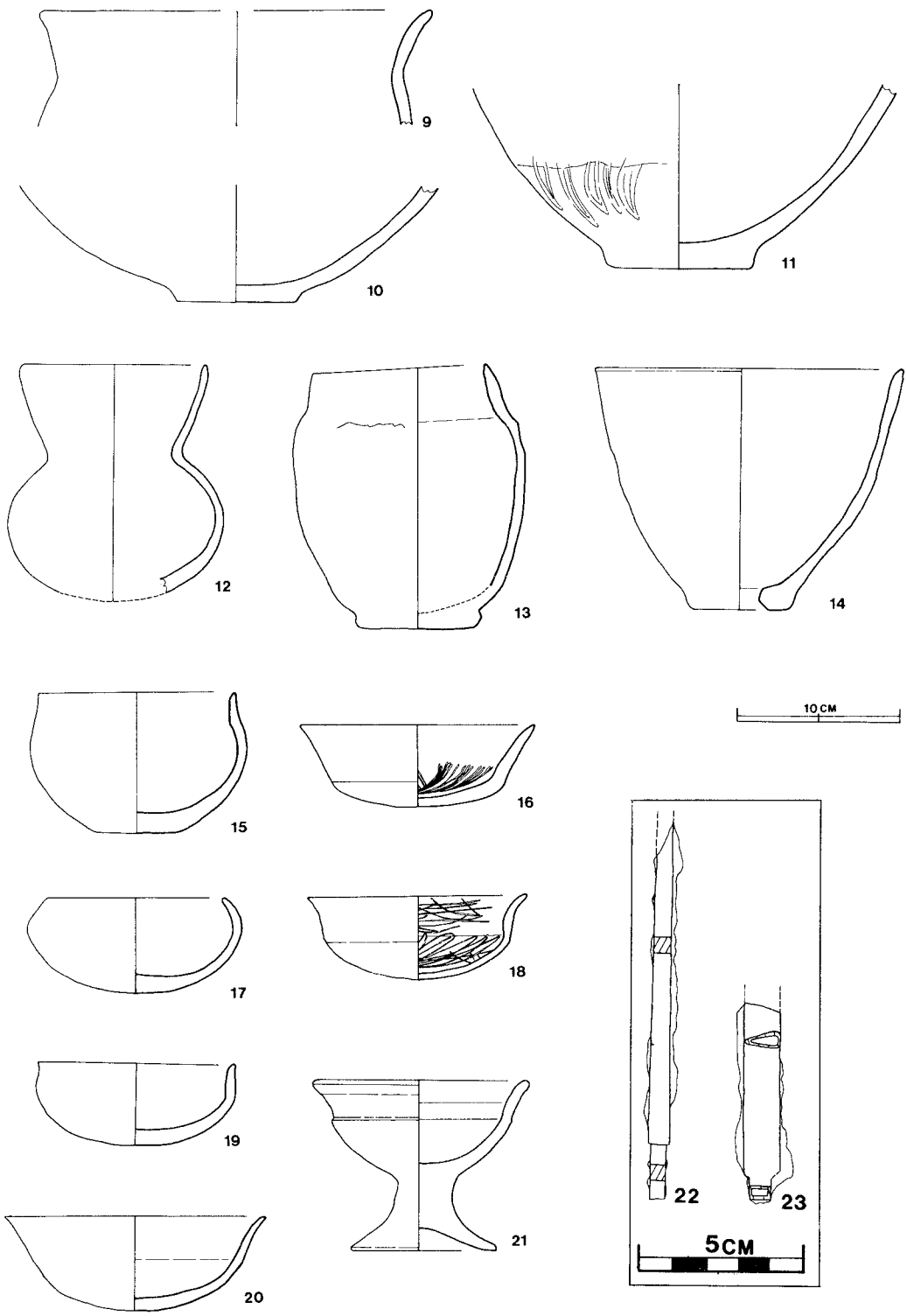
A－A′

1. 黒褐色　ローム粒子(特多)砂粒子(多)炭化粒子(少)焼土粒子(極少)含有
2. 暗褐色　ローム粒子(多)焼土粒子(極少)含有
3. 暗褐色　ローム粒子(特多)炭化粒子(少)焼土粒子(少)灰粒子(極少)含有
4. 暗褐色　ローブロック(少)ローム粒子(多)炭化物(多)焼土粒子(少)含有
5. 暗褐色　ロームブロック(少)ローム粒子(特多)炭化物(少)焼土粒子 含有
6. 暗褐色　ロームブロック(極少)ローム粒子(多)炭化物(少)含有
7. 暗褐色　ローブロック(極少)ローム粒子(特多)炭化物(少)砂粒子(極少)焼土粒子(極少)含有
8. 暗褐色　ロームブロック(極少)ローム粒子(多)炭化物(少)焼土粒子(極少)含有
9. 暗褐色　ローム粒子(少)砂粒子(少)含有
10. 暗褐色　ローム粒子(少)焼土粒子(極少)含有

第52図　第35・39号住居址実測図



第53図（1） 第35号住居址出土遺物実測図



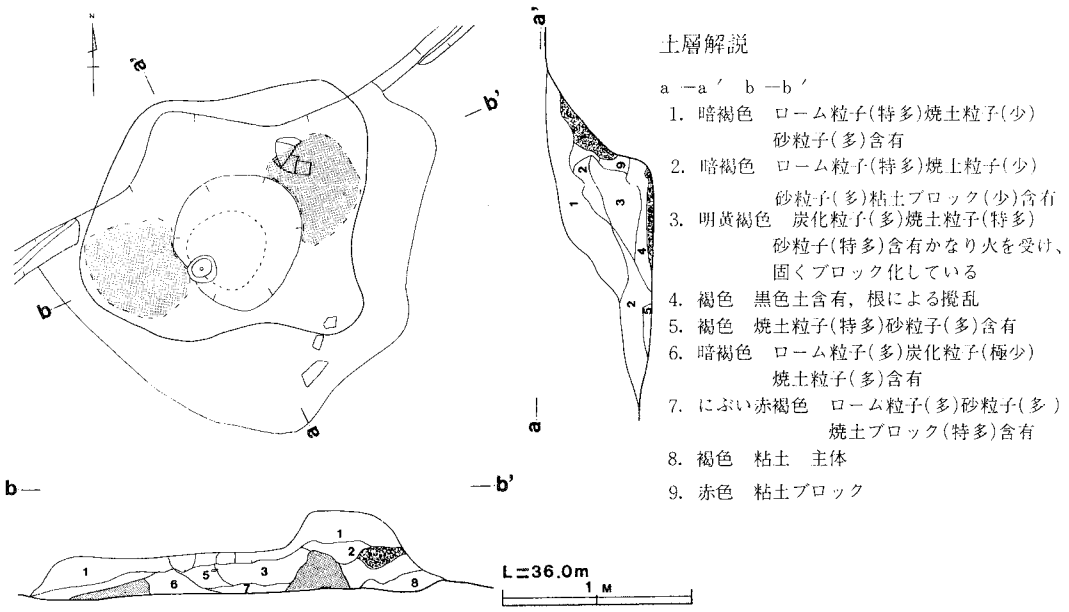
第53図（2） 第35号住居址出土遺物実測図

北壁中ほど床面直上から甕口縁部（図53－８），北東コーナー床面から坏（図53－20），甕（図53－５），中央部床面から高坏（図53－21），椀，他に甕片９個体分　（図53－１～４・６・７・９・10・11），小型甕（図53－13），甑（図53－14），椀（図53－15），坏（図53－16），碗２個，坩を出土し，覆土から甕底部，壺底部，器台，高坏等の破片を多数出土している。須恵器は床面直上から坏２個体分を出土し，他に細片を数点出土している。その他の出土遺物は，北東部から鉄鏃（図53－22）と刀子片（図53－23）を出土している。

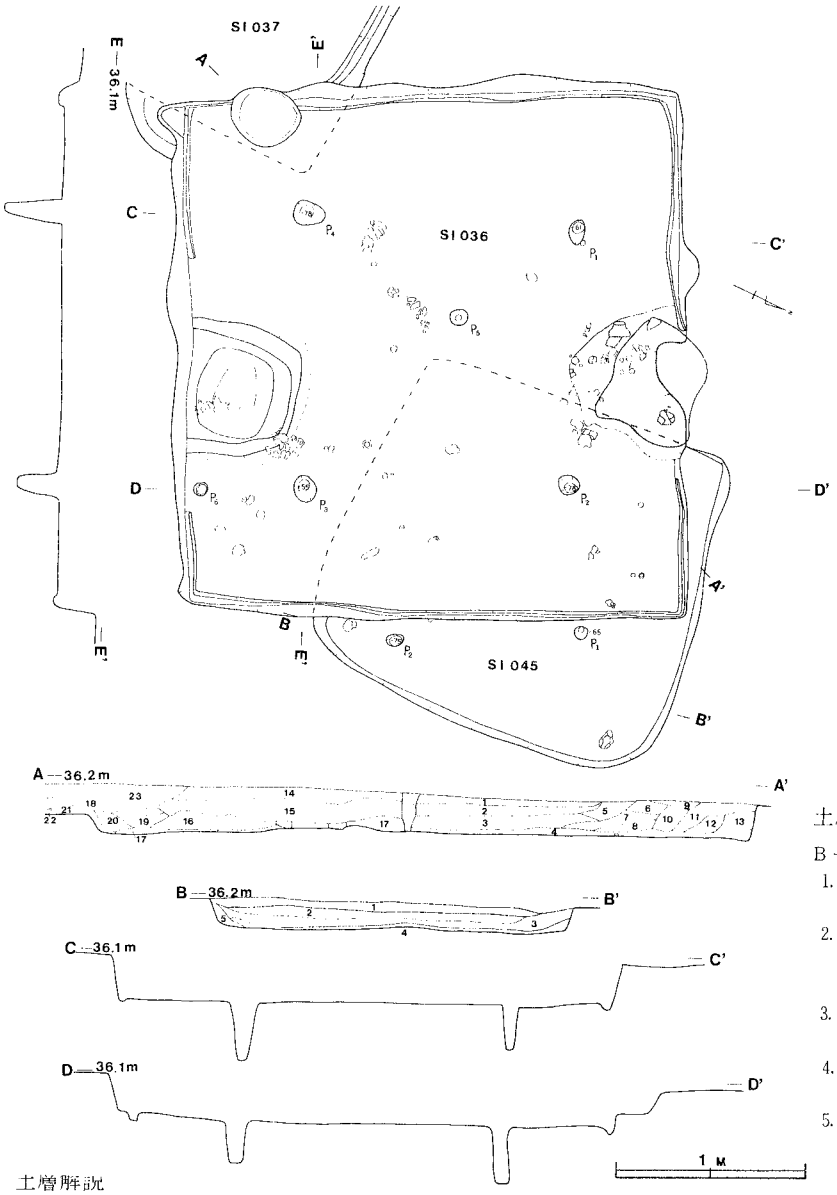
本址は古墳時代鬼高期に比定される遺構と思われる。

第36号住居址（図54～56(1)(2)）

本住居址は調査区の中央部Ｃ４区ｂ２，Ｃ４区ｃ１，ｃ２，ｃ３，ｄ１，ｄ２，ｄ３，ｅ１，ｅ２に確認され北東コーナーは第45号住居址床面を53cmほど掘り込み本址を構築している。南西コーナーには第37号住居址，南壁の中ほどには第77号住居址が複合している。本址は第45号住居址と第77号住居址より新しく，第37号住居址より古い遺構である。本住居址の主軸方向はＮ－25－Ｗで，規模は長軸7.08m，短軸6.92m，面積43.5m²を測り，ほぼ正方形の平面形を呈している。壁高は53cm～60cmを測り，壁は垂直に立ちあがり，壁下には幅15cm，深さ８cm内外の「Ｕ」字形の壁溝がカマドを除いて廻っている。



第54図　第36号住居址カマド実測図



土層解説

B－B′

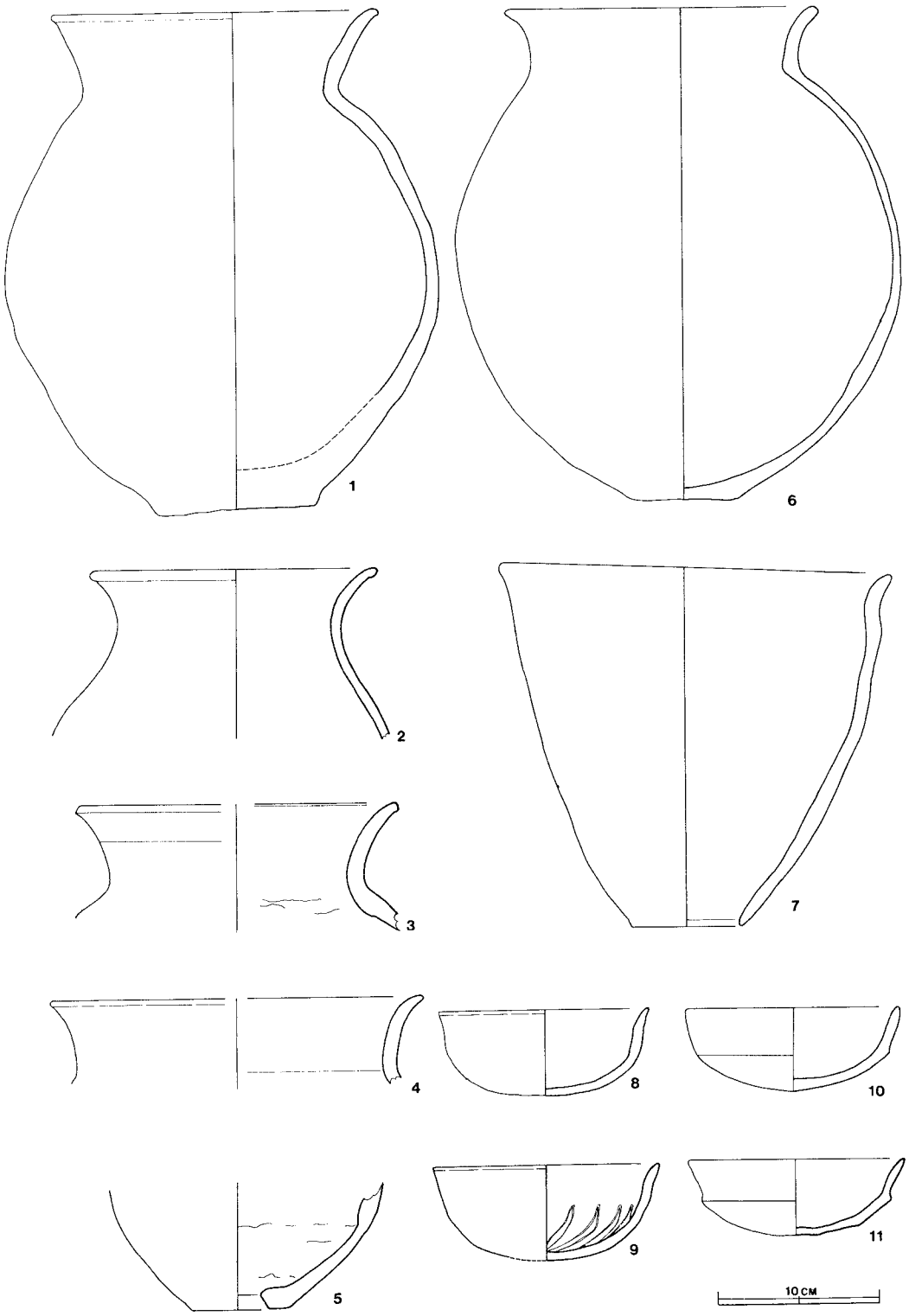
1. 暗褐色　ローム粒子(特多)含有
2. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(極少)砂粒子(少)含有
3. 黒褐色　ローム粒子(多)砂粒(少)含有
4. 暗褐色　ローム粒子(少)砂粒子(少)含有
5. 褐　色

土層解説

A－A′

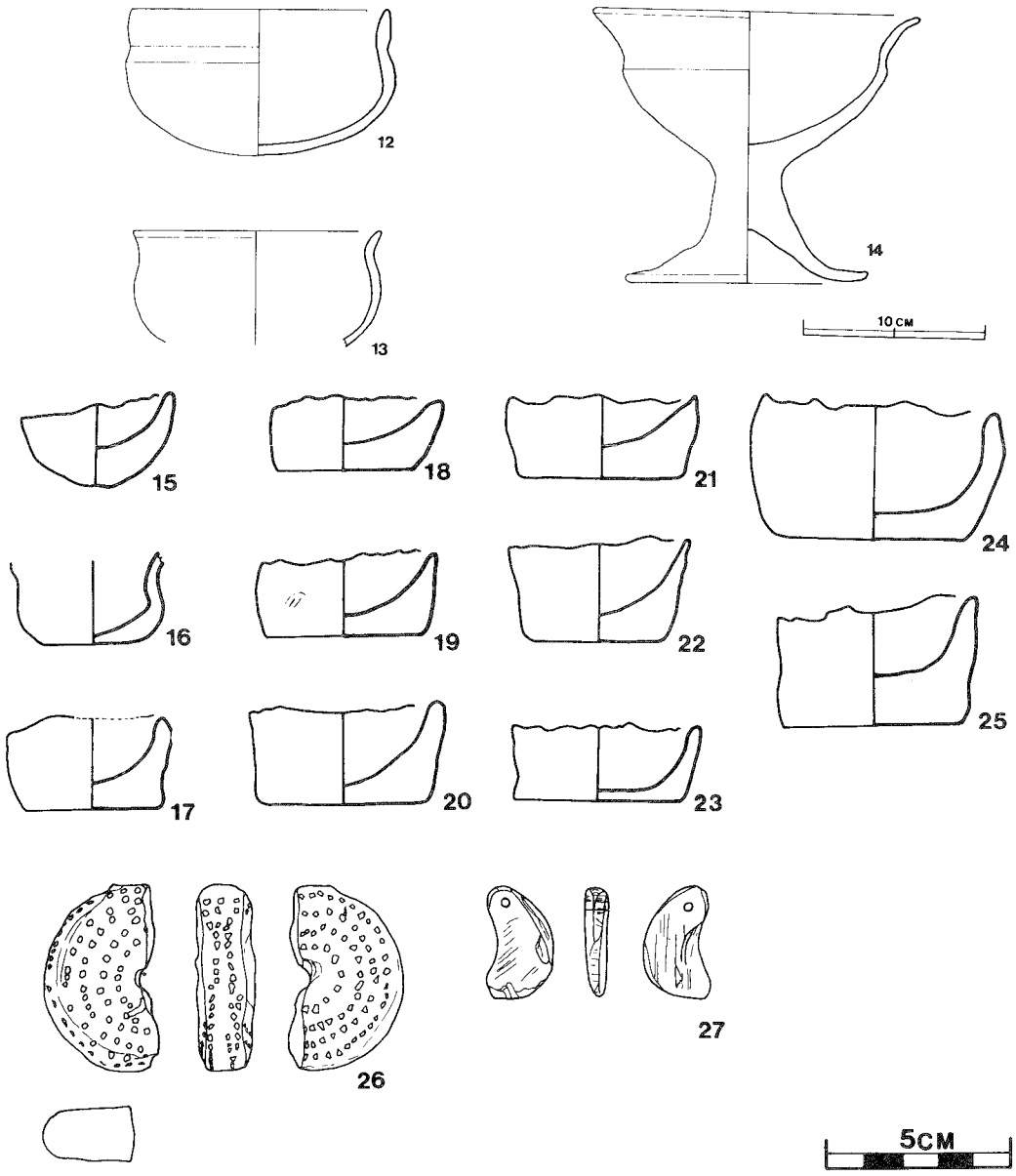
1. 黒褐色　ローム粒子(多)焼土粒子(極少)炭化粒子(少)含有
2. 暗褐色　ローム小ブロック(少)ローム粒子(特多)焼土粒子(極少)炭化粒子(少)含有
3. 暗褐色　ローム小ブロック(少)ローム粒子(特多)焼土粒子(極少)炭化粒子(中)含有
4. 暗褐色　ロームブロック(極少)ローム粒子(少)焼土粒子(極少)含有
5. 暗褐色　ロームブロック(少)ローム粒子(特多)焼土粒子(少)炭化粒子(少)含有
6. 暗褐色　ロームブロック，ローム粒子(特多)焼土粒子(極少)炭化粒子(少)含有
7. 暗褐色　ローム粒(中)焼土粒子(極少)炭化粒子(極少)含有
8. 暗褐色　ローム粒子(特多)焼土粒子(少)炭化粒子(少)含有
9. 黒褐色　ローム小ブロック(極少)ローム粒子(多)焼土粒子(少)炭化粒子(少)含有
10. 暗褐色　ロームブロック(中)ローム粒子(特多)焼土粒子(極少)炭化粒子(少)含有
11. 暗褐色　ロームブロック(極少)ローム粒子(特多)焼土粒子(少)炭化粒子(多)含有
12. 暗褐色　ローム粒子(特多)炭化粒子(少)含有
13. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(多)焼土粒子(極少)含有
14. 暗褐色　ローム粒子(中)炭化粒子(少)焼土粒子(極少)含有
15. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(少)焼土粒子(極少)含有
16. 暗褐色　ロームブロック(中)ローム粒子(特多)焼土粒子(極少)炭化粒子(少)含有
17. 暗褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(少)含有
18. 暗褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(少)含有
19. 暗褐色　ローム粒子(中)焼土粒子(極少)炭化粒子(少)含有
20. 暗褐色　ローム小ブロック(少)ローム粒子(中)炭化粒子(中)含有
21. 暗褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(少)含有
22. 暗褐色　ロームブロック(少)ローム粒子(少)炭化粒子(少)含有
23. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(多)含有

第55図　第36・45号住居址実測図



第56図（1） 第36号住居址出土遺物実測図

床面は平坦で踏み固められた状態で硬くぱりぱりとしている。東壁付近に炭化物を出土しているので,本址は火災に遭遇しているとおもわれる。ピットは６個所確認され，Ｐ１～Ｐ４は主柱穴と考えられる。貯蔵穴は有していない。南壁中央部に一段高いベルトが半周しており,その中心に土壙が付設され，規模は長辺115cm,短辺100cm，深さ65cmを測り,ほぼ長方形を呈している。覆土は35



第56図(2)　第36号住居址出土遺物実測図

層からなり自然堆積の状態を示している。上層は黒褐色土で多量のローム粒子，少量の炭化粒子極少量の焼土粒子を含み，中層は暗褐色土で，特に多量のローム粒子，少量のロームブロックと炭化粒子，極少量の焼土粒子を含み，下層は暗褐色土で，少量のローム粒子，極少量のロームブロック，焼土粒子を含んでいる。

カマドは北壁の中央より東に付設され，規模は長径148cm，短径128cmを測り，北壁を80cm幅で，28cmほど掘り込んで煙道としている。燃焼部は，長径42cm，短径40cm，深さ２cmほど，円形状に掘り窪めている。袖部は黒色土混りの砂質粘土で，カマドは南東向きに構築されている。

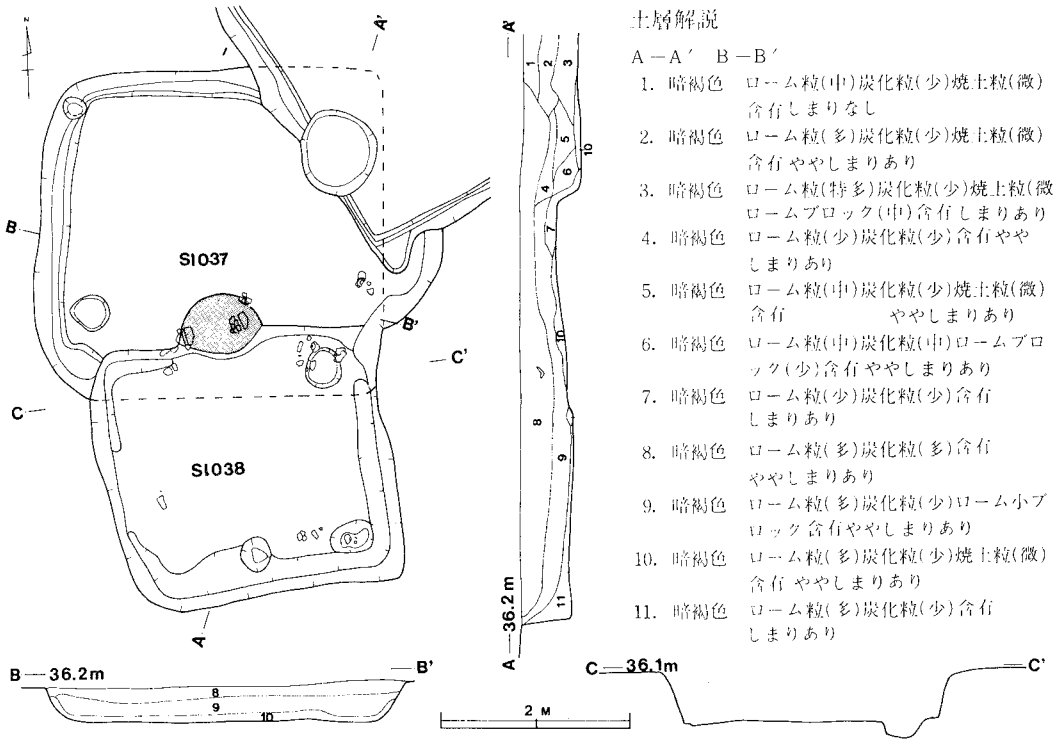
出土遺物は，土師器が主で，須恵器は覆土中から坏などの破片を数点出土したのみである。カマド内から，甕口縁部（図56－４），高坏（図56－14)を，カマド付近の床面直上から甑（図56－７），甕口縁部（図56－３），手捏土器（図56－19），坏（図56－９・10）を，北東部床面から手捏土器（図56－22・25），椀（図56－13），北西部床面から甑片（図56－５)，南コーナー床面から甕2個体分（図56－１・６）を，中央部Ｐ５付近床面から甕（図56－２）を出土し，他には手捏土器４個（図56－15・18・21・24），椀（図56－12)，杯２個（図56－８・11）と，甕，壺，杯などの破片を多数出土している。その他の出土遺物は紡錘車（図56－26）とカマド付近床面直上から石製模造品の勾玉（図56－27）を出土している。

本址は出土遺物等から古墳時代の鬼高期に比定される遺構と思われる。

第37号住居址（図57・58）

本住居址は，調査区の中央部Ｃ３区ｄ０，ｅ０，Ｃ４区ｄ１，ｅ１に確認され，北東コーナーには，第36号住居址が複合し，南壁は第38号住居址の北部を削平して構築している。東側約1.0mには第77号住居址が検出されている。本址の主軸方向はＮ－88°－Ｗで，規模は長軸4．30m　短軸3.37m，面積8.55㎡を測り隅丸長方形を呈している。壁高は約39cmを測り，壁は緩やかに外傾して立ちあがっており，西壁際に幅28cm，深さ６cmの壁溝を有する。貯蔵穴は有していない。
床面は暗褐色を呈し硬くしっかりとしているが，柱穴と思われるものは確認することができなかった。カマドは検出されなかった。覆土は３層からなり自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土でローム粒子と少量の炭化粒子，極少量の焼土粒子を含み，中層は暗褐色土で，少量のローム粒子，炭化粒子を含み，下層は暗褐色土で，少量のロームブロック，ローム粒子，炭化粒子を含んでいる。

出土遺物は土師器と須恵器を共伴しているが数は少ない。完存率の良好なものをあげると，土師器は南壁付近床面直上より　　坏（図58－４），高台付坏（図58－７）と，須恵器の坏（図58－5)を出土している。北東コーナ床面から甕口縁部（図58－３），西壁付近北より床面から，甑底部（図58－２)，南東部覆土内から須恵器の坏を，南西部覆土から墨書土器を出土し，その他，



第57図　第37・38号住居址実測図

土師器の壺,甕(図58－１)，坏，甑，などの細片を数点と，須恵器片を数点出土している。

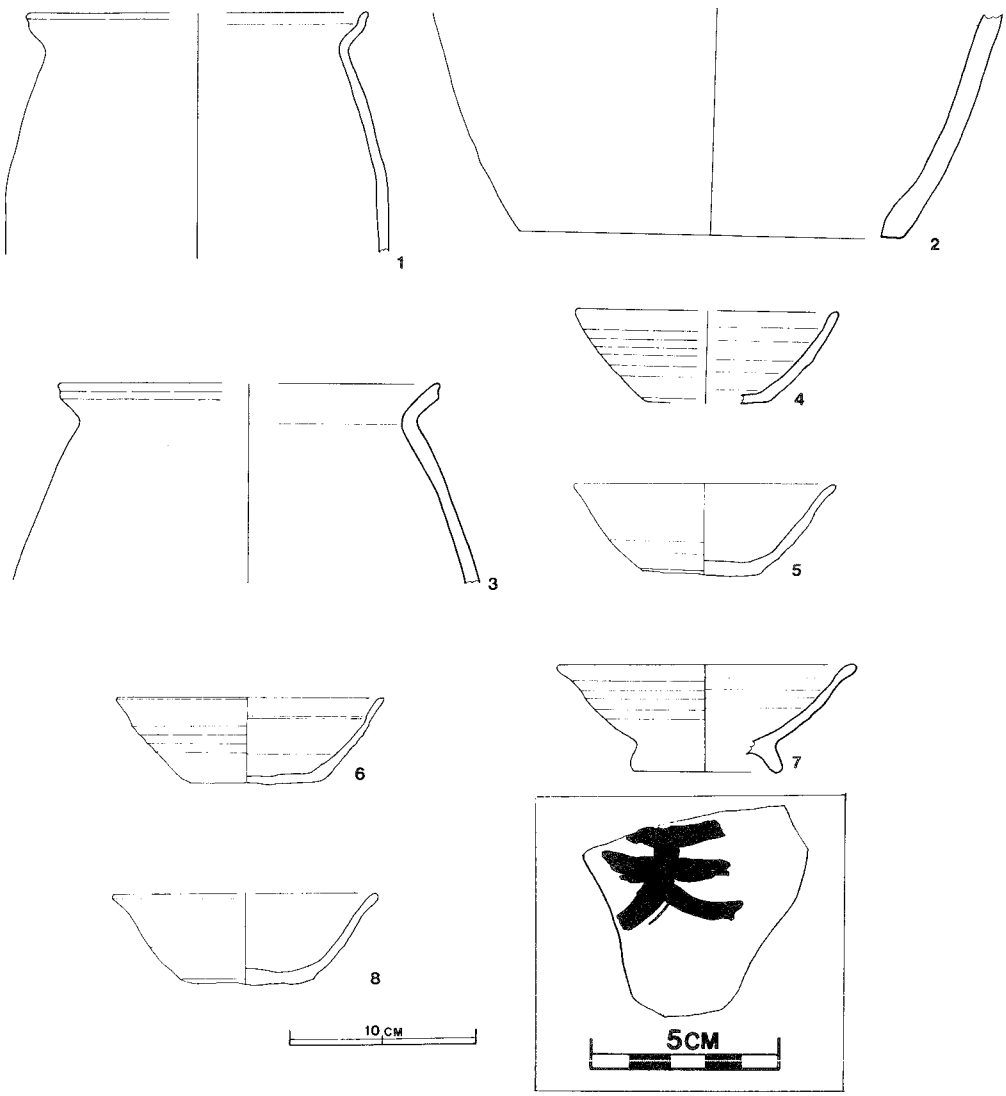
本址は出土遺物等から国分期に比定される遺構と思われる。

第38号住居址（図57・58）

本住居址は,調査区の中央部Ｃ４区e1，ｆ１に確認され，第37号住居址の床面から約７cm掘り込んで構築されており，本址は第37号住居址より古い遺構である。

南東コーナーは第77号住居址と接している。　本址の主軸方向はＮ－5°－Ｗで，規模は長軸3.04m，短軸2.81m，面積6.0㎡を測りほぼ隅丸長方形を呈している。北壁は第37号住居址に削平され不明である。東・西・南壁の壁高は約60cmでやや垂直に立ち上がっている。壁下には幅20cm，深さ４cm内外の浅い壁溝がほぼ全周している。床面は硬く踏み固められた状態を示しており，柱穴と思われるものは確認されなかった。カマドは北壁の中ほどに付設されているが，第37号住居址に削平され燃焼部のみしか残存していなかった。推定で規模は長径70cm，短径70cmで,北壁を37cmの幅で,10cmほど掘り込み煙道部としている。燃焼部は長径35cm，短径30cm，深さ４cmほど円形に掘り窪めている。

出土遺物は須恵器が主で，土師器の甕，坏などの破片を数点出土している。



第58図　第37・38号住居址出土遺物実測図

須恵器の完存率の良好なものをあげると，カマド附近の床面から坏（図58－8）と甑の破片を出土している。

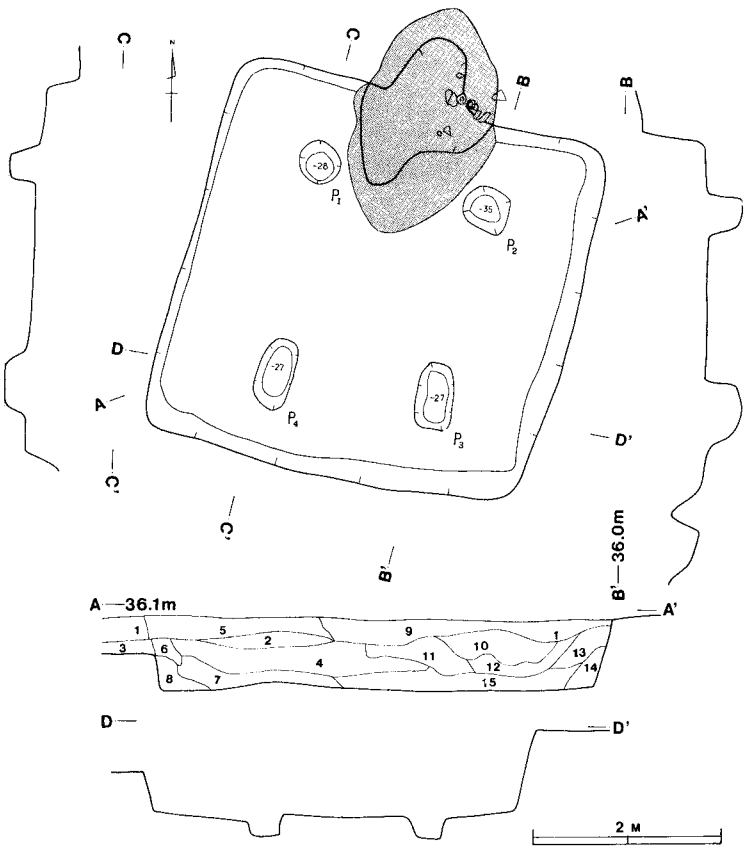
本址は，出土遺物等から国分期に比定される遺構と思われる。

第40号住居址（図59～61）

本住居址は，調査区の中央Ｂ４区ｊ３，ｊ４，Ｃ４区ａ３，ａ４に確認され，南壁は第42号住居址の北部を切り，西壁は第39号住居址の東部を切って構築されている。南東コーナーには第44号住居址の西壁が接している。北側1.0mには第41号住居址が検出している。本址は第39号住居址，第42号住居址より新しい遺構で，本址の主軸方向はＮ－18.5°－Ｅで，規模は長軸4.15m，短軸4.00

m 面積13.5㎡を測り隅丸正方形を呈している。壁高は34cm～85cmで南壁が高く，壁は外傾しながら立ちあがっている。壁下には壁溝を有していない。床面は平坦で硬く踏み固められた状態である。ピットは５個所確認されＰ１～Ｐ４は主柱穴と考えられる。貯蔵穴は有していない。覆土は暗褐色土で14層からなり自然堆積の状態を示している。上層は多量のローム粒子，砂粒，少量の炭化粒子，焼土粒子を含み，下層はロームブロック特に多量のローム粒子，極少量の炭化粒子，焼土粒子を含んでいる。

カマドは北壁の中央に位置し,規模は長径156cm,短径110cmで,北壁を104cmの幅で,98cm掘り込み煙道としている。燃焼部は長径48cm,短径45cm,深さ10cmほどで円形に掘り窪めている。袖部は黒色

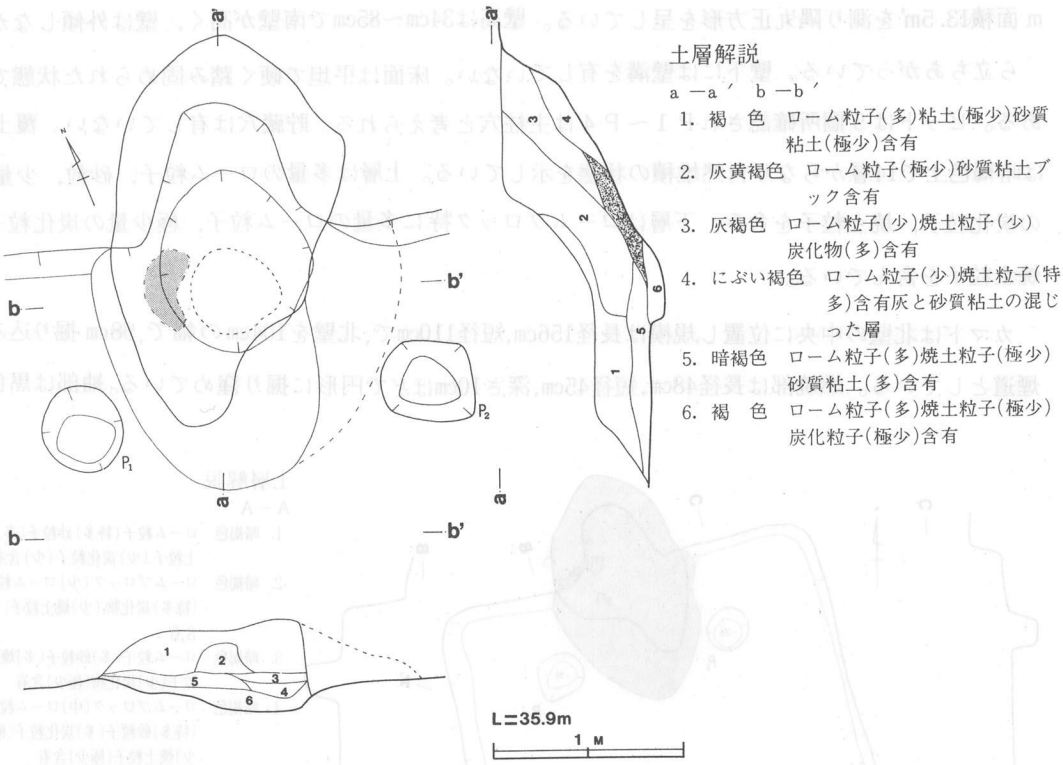


土層解説

A—A′

1. 暗褐色　ローム粒子(特多)砂粒子(多)焼土粒子(少)炭化粒子(少)含有
2. 暗褐色　ロームブロック(少)ローム粒子(特多)炭化物(少)焼土粒子(少)含有
3. 暗褐色　ローム粒子(多)砂粒子(多)焼土粒子(少)炭化物(極少)含有
4. 暗褐色　ロームブロック(中)ローム粒子(特多)砂粒子(多)炭化粒子(極少)焼土粒子(極少)含有
5. 暗褐色　ローム粒子(多)砂粒子(多)炭化粒子(少)焼土粒子(極少)含有
6. 暗褐色　ローム粒子(多)砂粒子(多)焼土粒子(少)含有
7. 暗褐色　ロームブロック(少)ローム粒子(特多)砂粒子(多)炭化物(少)焼土粒子(極少)含有
8. 暗褐色　ロームブロック(少)ローム粒子(多)砂粒子(少)焼土粒子(極少)含有
9. 暗褐色　ローム粒子(多)砂粒子(多)炭化粒子(少)焼土粒子(少)含有
10. 暗褐色　ロームブロック(極少)ローム粒子(多)砂粒子(多)焼土粒子(極少)炭化物(極少)含有
11. 暗褐色　ロームブロック(中)ローム粒子(多)砂粒子(多)炭化物(極少)焼土粒子(極少)含有
12. 暗褐色　ローム粒子(特多)砂粒子(多)炭化物(極少)焼土粒子(極少)含有
13. 暗褐色　ローム粒子(多)砂粒子(多)炭化粒子(少)含有
14. 暗褐色　ローム粒子(多)砂粒子(多)焼土粒子(極少)含有
15. 暗褐色　ロームブロック(少)ローム粒子(特多)砂粒子(多)炭化粒子(少)焼土粒子(極少)含有

第59図　第40号住居址実測図

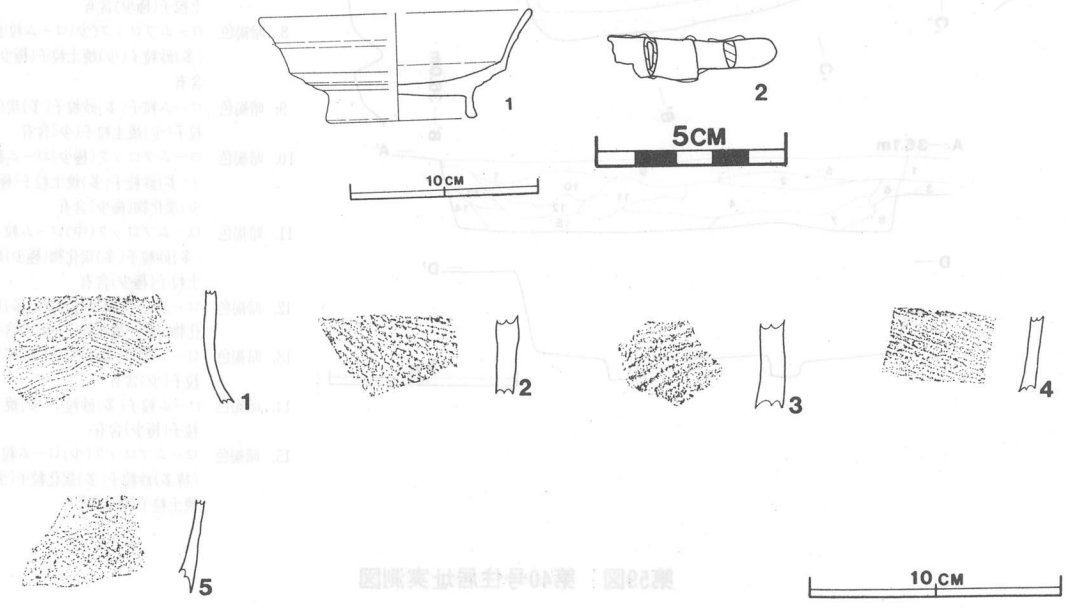


土層解説

a —a ′　b —b ′

1. 褐　色　ローム粒子(多)粘土(極少)砂質粘土(極少)含有
2. 灰黄褐色　ローム粒子(極少)砂質粘土ブック含有
3. 灰褐色　ローム粒子(少)焼土粒子(少)炭化物(多)含有
4. にぶい褐色　ローム粒子(少)焼土粒子(特多)含有灰と砂質粘土の混じった層
5. 暗褐色　ローム粒子(多)焼土粒子(極少)砂質粘土(多)含有
6. 褐　色　ローム粒子(多)焼土粒子(極少)炭化粒子(極少)含有

第60図　第40号住居址カマド実測図



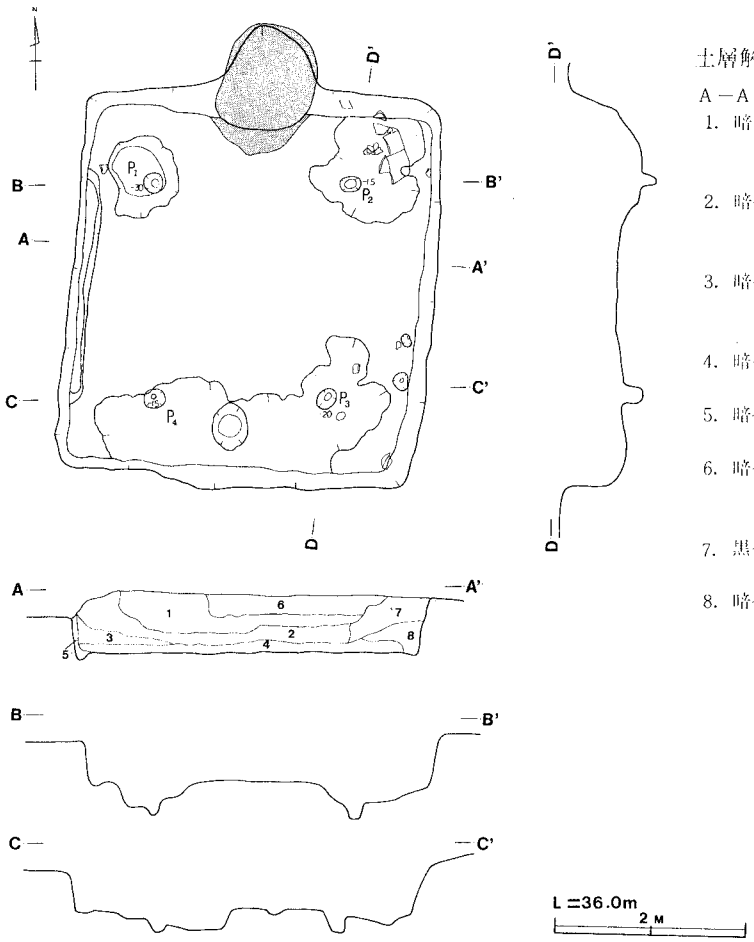
第61図　第40号住居址出土遺物実測・拓影図

土混りの砂質粒土で,カマドは南向きに構築されている。出土遺物は土師器と須恵器が共伴しており，カマド内から須恵器の高台付坏（図61－１）を出土し，他には覆土から坏等の細片を出土している。

土師器はカマドより甕と，口縁部欠損の壺を床面から出土し，他には甕，坏などの破片を数点出土している。その他の出土遺物は覆土から弥生式土器の長岡系（図61－１～３），十王台式（図61－４・５）の破片と鉄製品(図61－２),粘土を出土している。本址は出土遺物等から国分期に比定される遺構と思われる。

第41号住居址（図62～64)

本住居址は,調査区の中央Ｂ４区ｉ３，ｉ４，ｊ３,ｊ４に確認され,南西コーナーは第39号住居址の北壁に切り込み，本址は第39号住居址より新しい遺構である。南1.0m には第40号住居址が

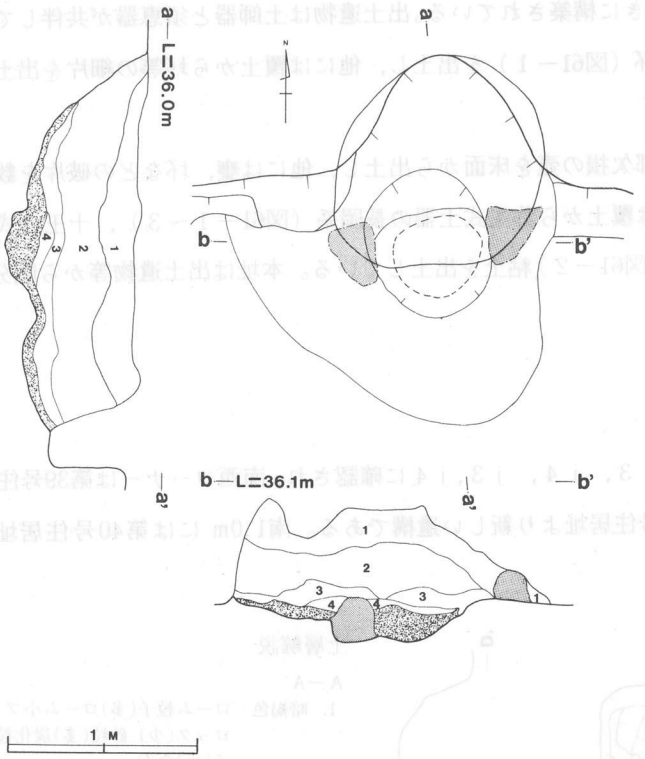


土層解説

A－A′

1. 暗褐色　ローム粒子(多)ローム小ブロック(少) 砂粒(多)炭化粒子(少)含有
2. 暗褐色　ローム粒子(多)砂粒子(多)炭化粒子(少)ローム小ブロック(少)含有
3. 暗褐色　ローム粒子(多) 砂　粒子(多) ローム小ブロック(少)含有
4. 暗褐色　ローム粒子(多)砂粒子(多)含有
5. 暗褐色　ローム粒子(多)砂粒子(多)含有
6. 暗褐色　ロームブロック(中)ローム粒子(多)砂粒子(多)炭化粒子(中)含有
7. 黒褐色　ローム粒子(特多)砂粒子(中)含有
8. 暗褐色　ローム粒子(特多)砂粒子(中)炭化物(少)含有

第62図　第41号住居址実測図



土層解説

a －a′　b －b′

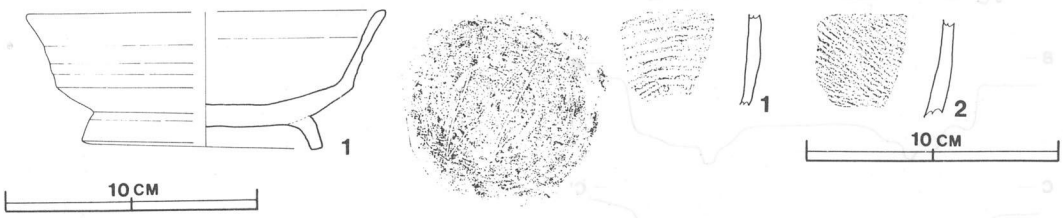
1. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(少)焼土粒子(極少)砂粒子(特多)粘土(少)含有
2. 暗褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(少)焼土粒子(極少)砂粒子(特多)粘土(少)含有
3. 暗褐色　ローム粒子(極少)焼土粒子(極少)砂粒子(特多)含有砂粒子を主体
4. 褐　色　ロームと粘土が焼土化

第63図　第41号住居址カマド実測図

北側1.4m には第16号住居址が確認されている。

本址の主軸方向はＮ－6°－Ｅで，規模は長軸4.20m，短軸3.85m，面積11.0㎡を測り隅丸長方形を呈している。壁高は27cm～65cmで壁はほぼ垂直に立ち上がっている。西壁の壁下には幅27cm，深さ６cm内外の壁溝を有している。床面は凸凹で中央部は硬く踏み固められた状態であるが，北東コーナーと南壁際幅約70cmは貼り床となっている。

ピットは７個所確認されＰ１～Ｐ４は主柱穴と考えられ，貯蔵穴は有していない。覆土は暗褐色土で８層からなり自然堆積の状態を示している。上層はロームブロック，多量のローム粒子，少



第64図　第41号住居址出土遺物実測・拓影図

量の炭化粒子を含み,下層は多量のローム粒子を含んでいる。カマドは北壁の中央に位置し，長径127cm,短径105cm,北壁を115cm幅で，60cmほど掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径45cm,短径41cm，深さ９cmほどで楕円形に掘り窪めている。袖部は黒色土混りの砂質粘土で，カマドは南向きに構築されている。

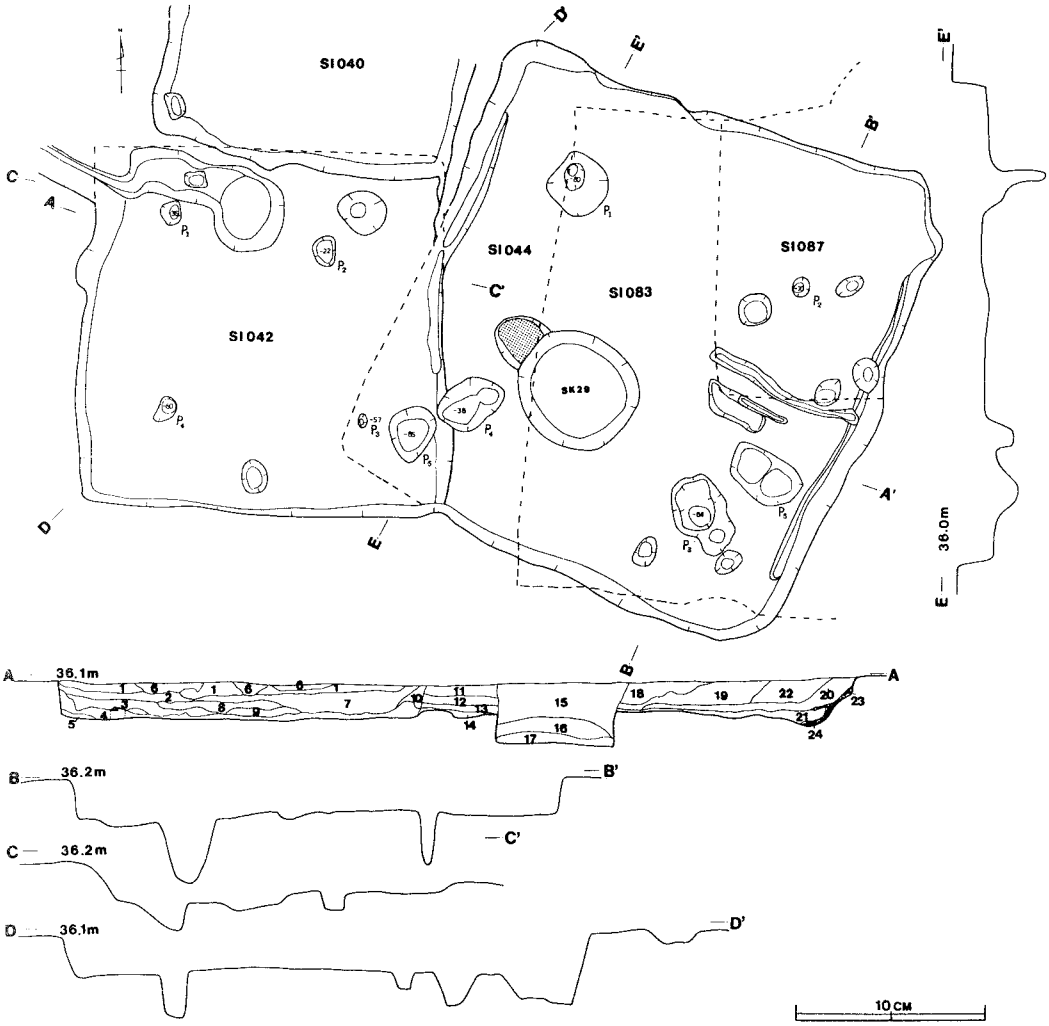
出土遺物は須恵器と土師器が共伴しているが数は少ない。須恵器の完存率の良好なものは,カマドから高台付坏(図64－１),南東コーナー床直上から坏，覆土から坏２個と細片を数点出土している。土師器は高台付坏を覆土から出土し，他は甕，内黒の坏，台付甕などの細片を数点出土している。本址は出土遺物等から国分期の遺構と思われる。

第42号住居址（図65・66）

本住居址は，調査区の中央部Ｃ４区ａ３，ａ４，ｂ３，ｂ４に確認され北壁は，第40号住居址に切られ,東壁は第44号住居址に切り込み，北西コーナーは第39号住居址に切り込んでいる。本址は第40号住居址よりは古く,第39号住居址・第44号住居址より新しい遺構である。南側約1.1m には第80号住居址が，南西1.5m には第45号住居址が検出されている。　本址の主軸方向はＮ－4°－Ｅで,規模は、長軸4.79m，短軸4.82m,面積20.0㎡を測り、正方形の平面形を呈している。壁は西壁と南壁は確認することができ壁高は45cm～55cm程で,ほぼ垂直に立ち上がっている。壁溝は有していない。

床面は平坦で硬く，ピットは７個所確認されＰ１～Ｐ４は主柱穴と考えられる。南東コーナーのＰ５は貯蔵穴と思われ，長径76cm，短径61cm，深さ85cmで不整円形を呈している。覆土は10層からなり自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土で極少量のローム粒子を含み，中層は黒褐色土で少量のロームを含み，下層は褐色土・極暗褐色土で少量のローム粒子，極少量の炭化粒子，焼土粒子を含んでいる。カマドは削消され確認することができないが,燃焼部と思われる長径150cm，短径97cmを測る。円形の落ち込みを確認した。

出土遺物は須恵器を中心に土師器を共伴している。須恵器の完存率の良好なものをあげると，南壁中央付近床面直上から蓋（図66－６），西壁中央付近床面直上から坏（図66－３），北西コーナー床面直上から坏（図66－２），北東部床面直上から坏（図66－４)を出土し,他に，覆土から坏，蓋（図66－５）と破片を多数出土している。　土師器は南西コーナー床面直上から甕底部（図66－１）と，甕，器台，高坏，坏などの細片を多数出土している。　その他の出土遺物は弥生式土器片数点と鉄滓を少量出土している。本址は出土遺物等から国分期に比定される遺構と思われる。

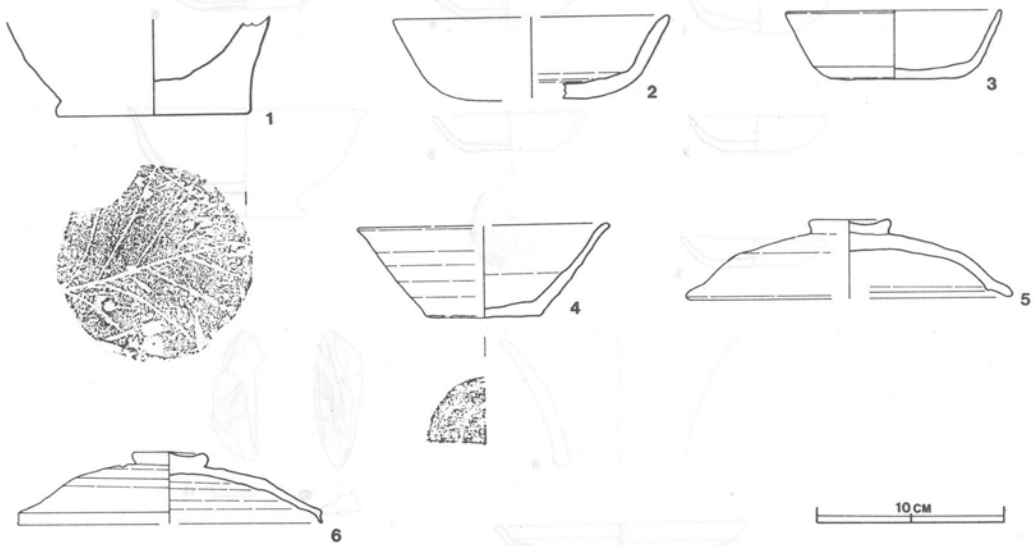


土層解説

A－A′

1. 暗褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(極少)含有
2. 暗褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(極少)黒色土ローム含有
3. 暗褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(含有)
4. 褐　色　ローム粒子(多)炭化粒子(極少)含有
5. 明褐色　ローム粒子(特多)炭化粒子(極少)含有
6. 褐　色　ローム粒子(極少)含有
7. 極暗褐色　炭化粒子(弱)ロームブロック(少)含有
8. 暗褐色　ローム粒子(多)焼土粒子(極少)含有
9. 極暗褐色　ローム粒子(多)ロームブロック(多)含有
10. 黒褐色　ローム粒子(少)含有
11. 暗褐色　ローム粒子(極少)炭化粒子(極少)含有
12. 暗褐色　ローム粒子(極少)炭化粒子(極少)含有
13. 褐　色　ローム粒子(少)炭化粒子(極少)焼土粒子(極少)ロームブロック(少)含有
14. 褐　色　ローム粒子(少)炭化粒子(極少)焼土粒子(少)ロームブロック(少)含有
15. 極暗褐色　ローム粒子(極少)焼土粒子(極少)含有
16. 暗褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(極少)焼土粒子(極少)白色粘土(極少)含有
17. 黒褐色　ローム粒子(極少)ロームブロック(極少)含有
18. 暗褐色　ローム粒子(極少)炭化粒子(極少)焼土粒子(極少)含有
19. 暗褐色　ローム粒子(極少)炭化粒子(極少)含有
20. 極暗褐色　ローム粒子(少)含有
21. 褐　色　ローム粒子(特多)ロームブロック(少)含有
22. 暗褐色　ローム粒子(極少)炭化粒子(極少)含有
23. 地山(ローム)
24. 地山(ローム)

第65図　第42・44号住居址・第29号土壙実測図

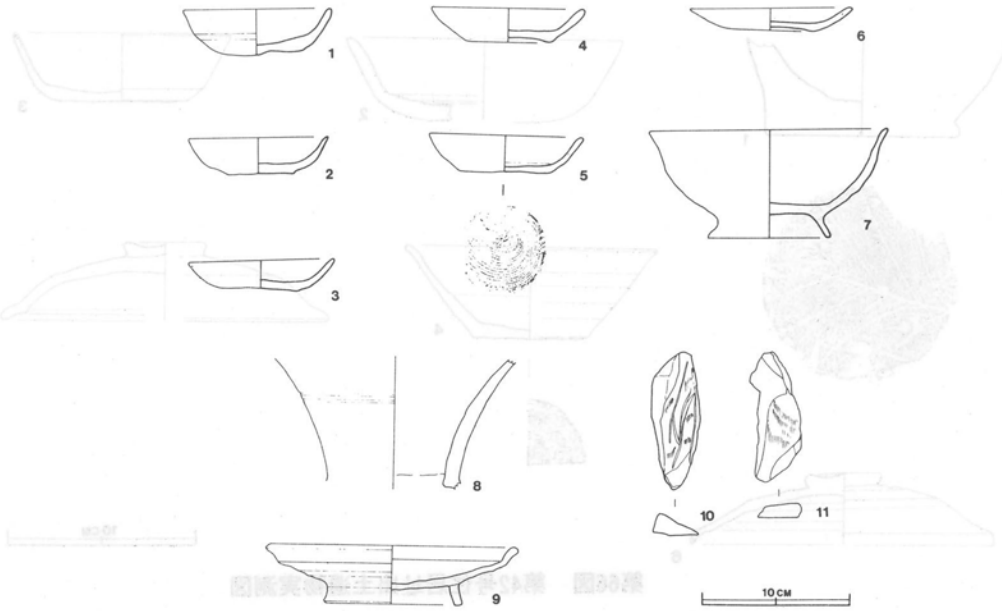


第66図　第42号住居址出土遺物実測図

第43号住居址（図50・67）

本住居址は，調査区の中央部Ｃ３区ｂ５，ｂ６，ｂ７，ｃ５，ｃ６，ｃ７に確認され，東側には第34号住居址が，南測には第49号住居址が25％ほど切り込んでいる。これらの複合関係から本址は第34号住居址より新しく，第49号住居址とはほぼ同時期と思われるが、さらに第49号住居址より新しいものと思われる。本住居址の主軸方向はＮ－85°－Ｅで，規模は長軸4.79m，短軸4.82m，面積12.3㎡を測り，隅丸長方形の平面形を呈している。壁高は40cm～45cmで、北壁と西壁ははっきりとしており，垂直に立ちあがっている。壁下には幅14cm，深さ８cm内外の壁溝を有している。床面は平坦で硬く踏み固められた状態を示しており，南西コーナー付近のＰ１は貯蔵穴と思われ，長径60cm，短径58cm，深さ30cmの不整円形を呈している。

覆土は６層からなり自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土・黒褐色土で多量のローム粒子，少量の炭化粒子・焼土粒子を含み下層は，極暗褐色土で多量のローム粒子，焼土粒子，少量の炭化粒子を含んでいる。カマドは東壁の南よりに位置し，西向きに構築されたが桑の栽培等によって攪乱されていた。出土遺物は土師器と須恵器が共伴している。土師器の完存率の良好なものをあげると東壁際床面から高台付坏（図67－７），皿（図67－１・３・６），北壁際床面から皿２枚（図67－２・５），北西壁際北より床から皿（図67－４）を出土し，他は皿，坩，甕，壺，坏などの細片を出土している。



第67図　第43号住居址出土遺物実測図

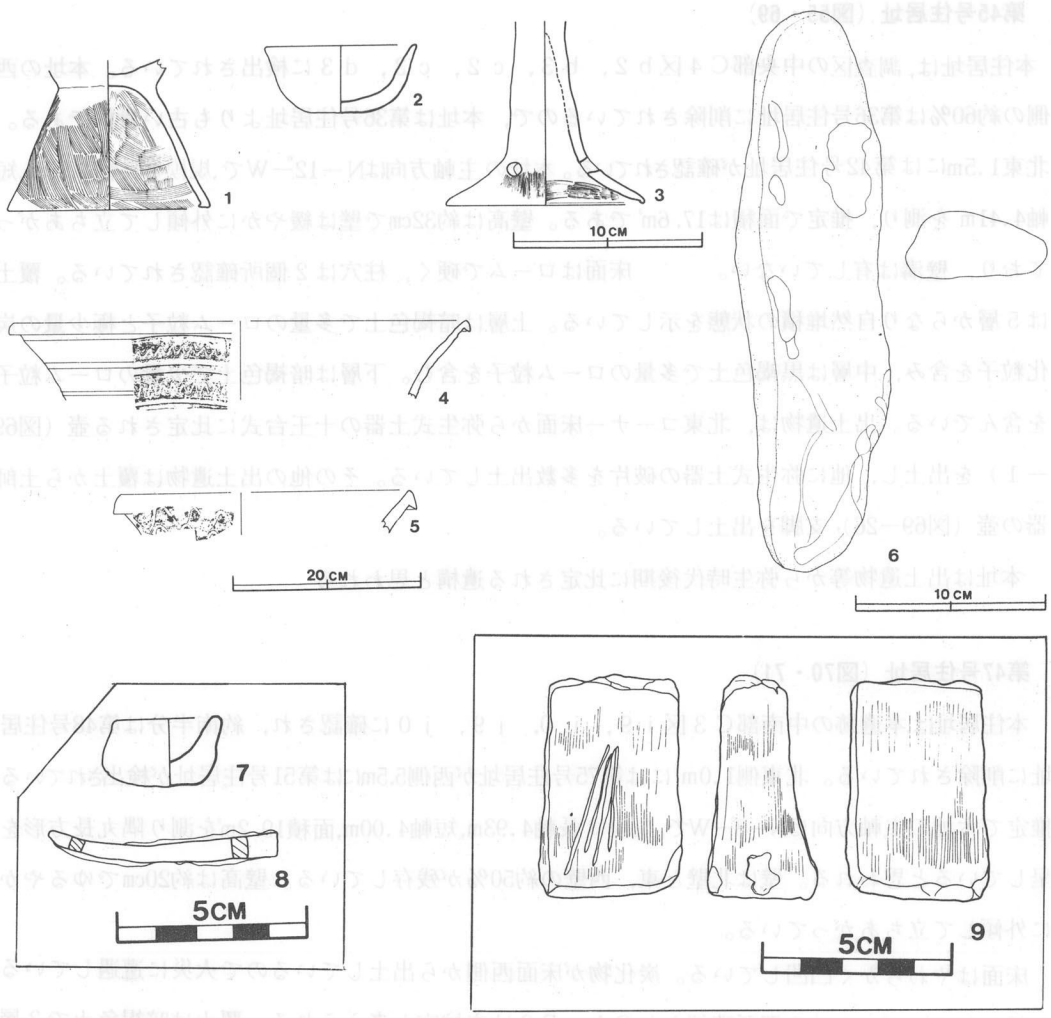
須恵器は西壁北よりの床から盤（図67－９）と壺，坏などの細片を出土している。その他の出土遺物は東壁際床面から砥石２片（図67—10・11）と鉄滓を少量出土している。

本址は出土遺物等から国分期に比定される遺構と思われる。

第44号住居址（図65・68）

本住居址は，調査区のＣ４区ａ４，ａ５，ａ６，ｂ４，ｂ５，ｂ６，ｃ５に確認され，東部の65％ほどは第83号住居址に削除されており,東コーナーには第87号住居址が,南側0.6mには 第80号住居址が検出されている。中央部には 炉址を半分ほど切って第29号土壙が切り込んでいる。西コーナーは第42号住居址に切られ 北西壁の中ほどで第40号住居址が接している。南コーナーには第84号住居址と第49号土壙が切り込んでいる。本址は第42号住居址，第83号住居址，第84号住居址，第87号住居址，第29号土壙，第49号土壙より古い遺構である。本址の主軸方向はＮ—71°—Ｗで，規模は長軸6.55m,短軸6.45m,面積37.3㎡ を測り隅丸正方形の平面形を呈しているが，４基の住居址と２基の土壙が複合している。壁は北コーナーと南壁の一部が残存し，他は削消されている。

壁高45cm～60cmで壁はほぼ垂直に立ちあがっており壁下に壁溝は有しない。床面は褐色を呈し，複合状態がはげしいので一部しか残存していない。ピットは13個所確認されＰ１～Ｐ４は主柱穴と考えられるが，貯蔵穴は確認することができなかった。本址の残存土層は11層からなり，上層は暗褐色土で極少量のローム粒子，炭化粒子を含み，下層は褐色土で少量のローム粒子，焼土粒子，ロームブロック，極少量の炭化粒子を含んでいる。炉址は中央より西に位置し，形状は楕円形



第68図　第44号住居址出土遺物実測図

を呈しているものと思われるが炉址の約50%ほどは第29号土壙に切られている。燃焼部は皿状を呈しロームが赤く焼け，焼土が含まれていた。

出土遺物は土師器を中心に,須恵器の破片を数点出土している。土師器の完存率の良好なものをあげると，西壁中央付近床面直上から台付甕片（図68－１),他に覆土から小形坏（68－２），手捏土器（図68－７），台付甕片，高坏片を数点出土している。　　その他の出土遺物は，北コーナー付近床面直上から砥石，北東部から砥石を，覆土から鉄釘を出土している。

本址は出土遺物等から古墳時代五領期に比定される遺構と思われる。

第45号住居址（図55・69）

本住居址は，調査区の中央部Ｃ４区ｂ２，ｂ３，ｃ２，ｃ３，ｄ３に検出されている。本址の西側の約60％は第36号住居址に削除されているので，本址は第36号住居址よりも古い遺構である。北東1.5mには第42号住居址が確認されている。本址の主軸方向はN－12°－Wで，規模は長軸4.99m，短軸4.41m を測り，推定で面積は17.6㎡である。壁高は約32cmで壁は緩やかに外傾して立ちあがっており，壁溝は有していない。　　床面はロームで硬く，柱穴は２個所確認されている。覆土は５層からなり自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土で多量のローム粒子と極少量の炭化粒子を含み，中層は黒褐色土で多量のローム粒子を含む。下層は暗褐色土で少量のローム粒子を含んでいる。出土遺物は，北東コーナー床面から弥生式土器の十王台式に比定される壺（図69－１）を出土し，他に弥生式土器の破片を多数出土している。その他の出土遺物は覆土から土師器の壺（図69—26），支脚を出土している。

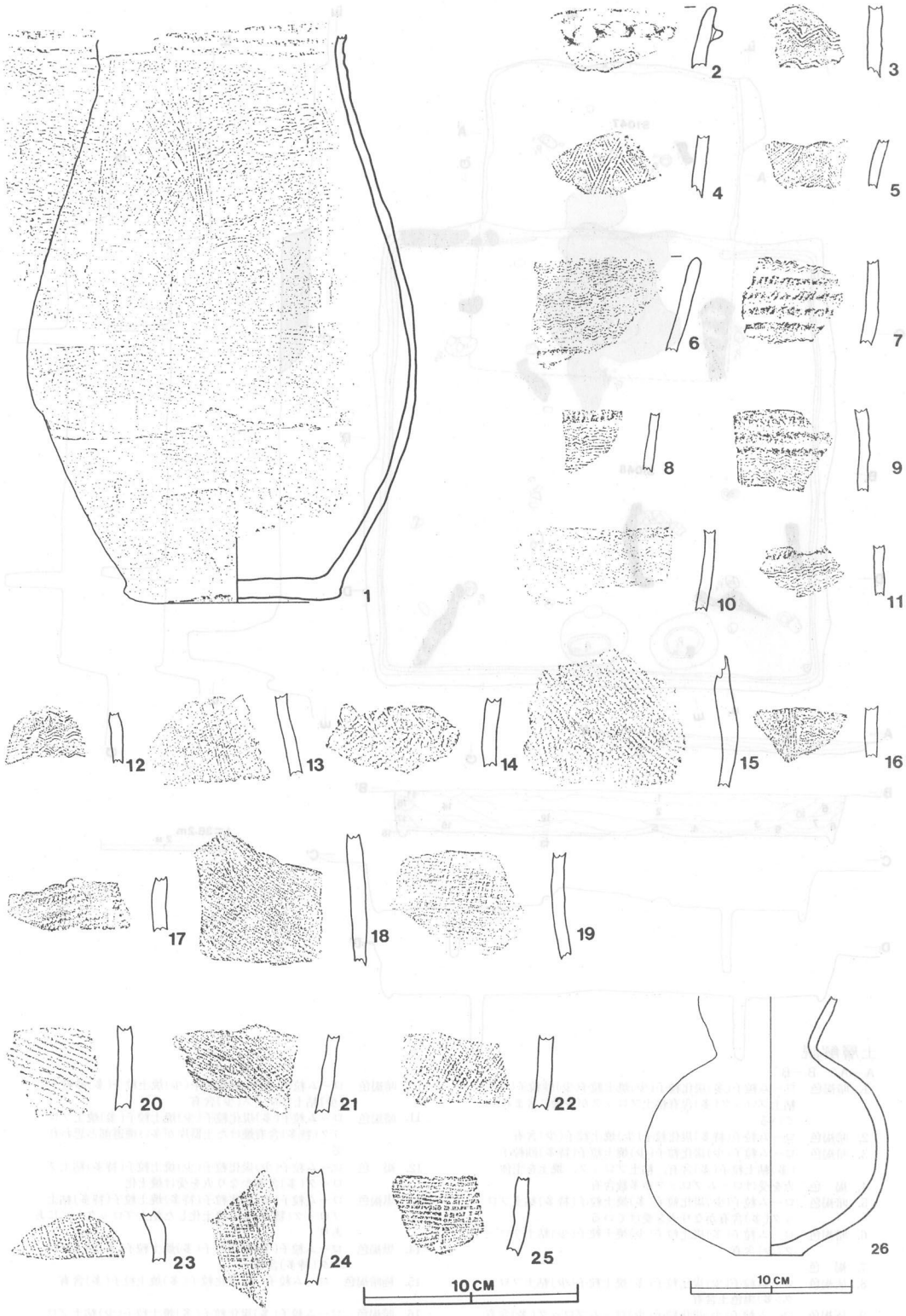
本址は出土遺物等から弥生時代後期に比定される遺構と思われる

第47号住居址（図70・71）

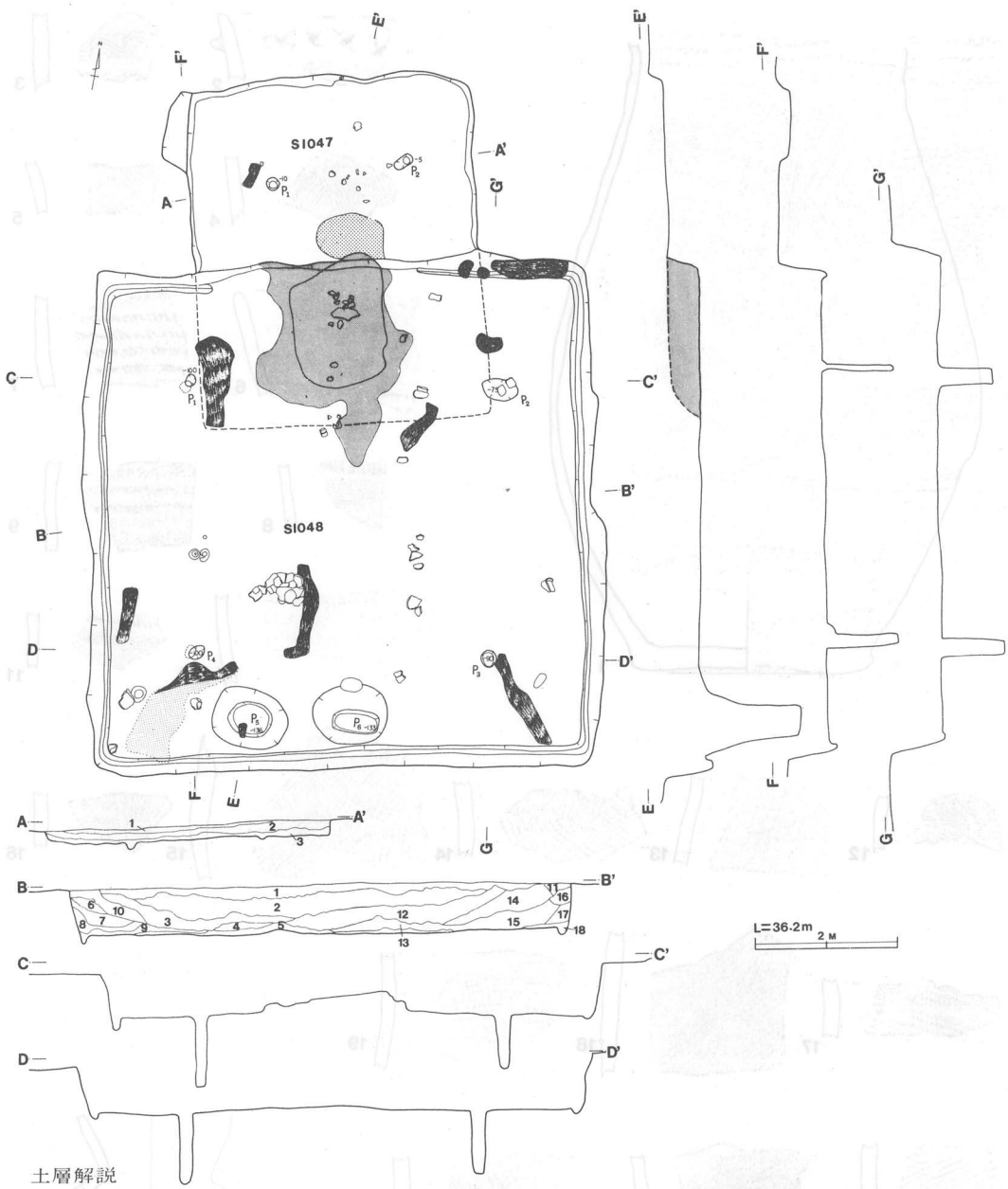
本住居址は，本遺跡の中南部Ｃ３区ｉ９，ｉ０，ｊ９，ｊ０に確認され，約南半分は第48号住居址に削除されている。北東側1.0m には第75号住居址が西側5.5mには第51号住居址が検出されている。推定で本址の主軸方向はN—8°—Wで，規模は長軸4.93m，短軸4.00m，面積19.2㎡を測り隅丸長方形を呈していると思われる。壁は北壁と東，西壁の約50％が残存している。壁高は約20cmでゆるやかに外傾して立ちあがっている。

床面はやわらかく凸凹している。炭化物が床面西側から出土しているので火災に遭遇していると思われる。ピットは２個所確認されＰ１・Ｐ２は主柱穴と考えられる。覆土は暗褐色土で３層からなり自然堆積の状態を示している。上層は多量のローム粒子，少量の炭化粒子，焼土粒子を含有し，下層は少量のローム粒子，炭化粒子，焼土粒子を含有している。炉址は住居址の中心部にあり，第48号住居址の北壁によって炉址の約南半分は切りとられている。規模は径93 cm内外で中心部は赤く焼けている。出土遺物は床面から弥生式土器の破片を数点出土し，底部片には木葉痕・布目圧痕を確認することができる。

本址は出土遺物等から弥生式時代後期に比定される遺構と思われる。



第69図　第45号住居址出土遺物実測・拓影図



土層解説

A－A′　B－B′

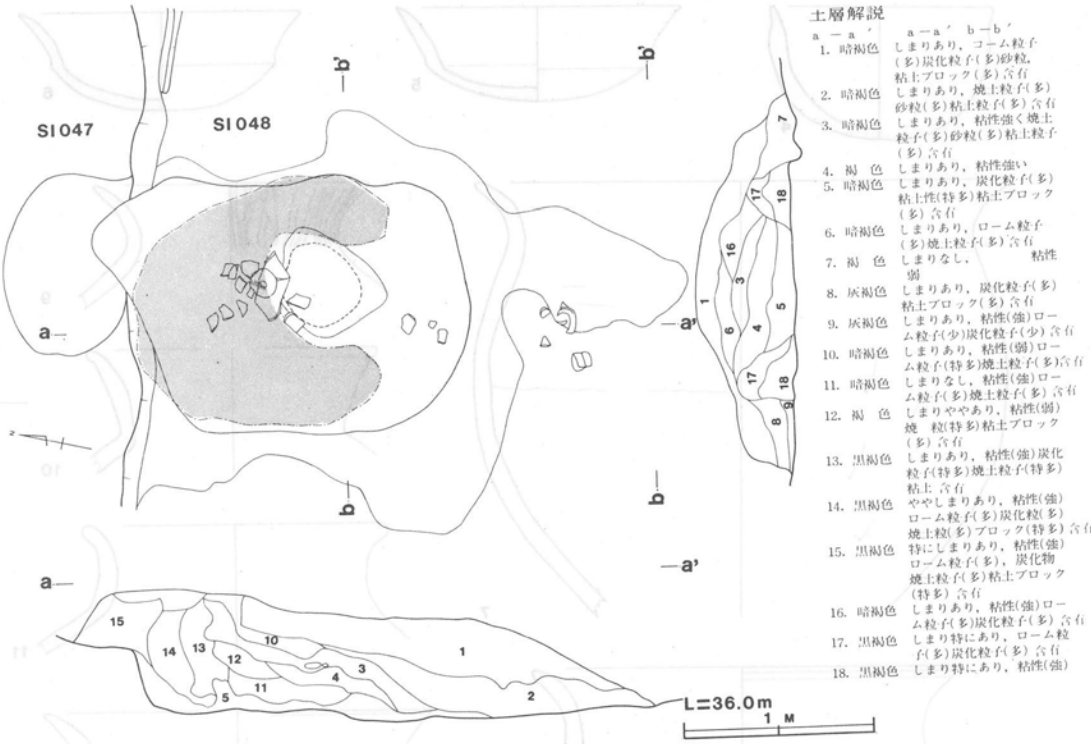
1. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(少)焼土粒子(少)砂粒子(多)粘土ブロック(多)含有粘土ブロックが多量に含まれている
2. 暗褐色　ローム粒子(特多)炭化粒子(少)焼土粒子(少)含有
3. 暗褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(少)焼土粒子(特多)砂粒子(多)粘土粒子(多)含有，粘土ブロック，焼土を主体
4. 褐　色　火を受けロームブロックが多数含有
5. 暗褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(多)焼土粒子(特多)粘土ブロック(多)含有かなり火を受けている
6. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(少)焼土粒子(少)粘土ブロック(少)含有
7. 褐　色
8. 灰褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(多)焼土粒子(少)粘土ブロック(多)黒色土含有
9. 灰褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(少)ロームブロック(多)含有
10. 暗褐色　ローム粒子(特多)炭化粒子(少)焼土粒子(多)砂粒子(少)粘土ブロック(少)含有
11. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(少)焼土粒子(多)焼土ブロック(特多)含有焼けた土器片が多い煙道部と思われる
12. 褐　色　ローム粒子(少)炭化粒子(少)焼土粒子(特多)粘土ブロック(多)含有かなり火を受け焼土化
13. 黒褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(特多)焼土粒子(特多)粘土ブロック(特多)含有焼土化した粘土ブロック上部にあり
14. 黒褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(多)焼土粒子(多)粘土ブロック(特多)含有
15. 極暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(多)焼土粒子(多)含有
16. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(多)焼土粒子(少)粘土ブロック(少)含有
17. 黒褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(多)焼土粒子(少)含有
18. 黒褐色　炭化粒子(少)ロームブロック(少)含有

第70図　第47・48号住居址実測図

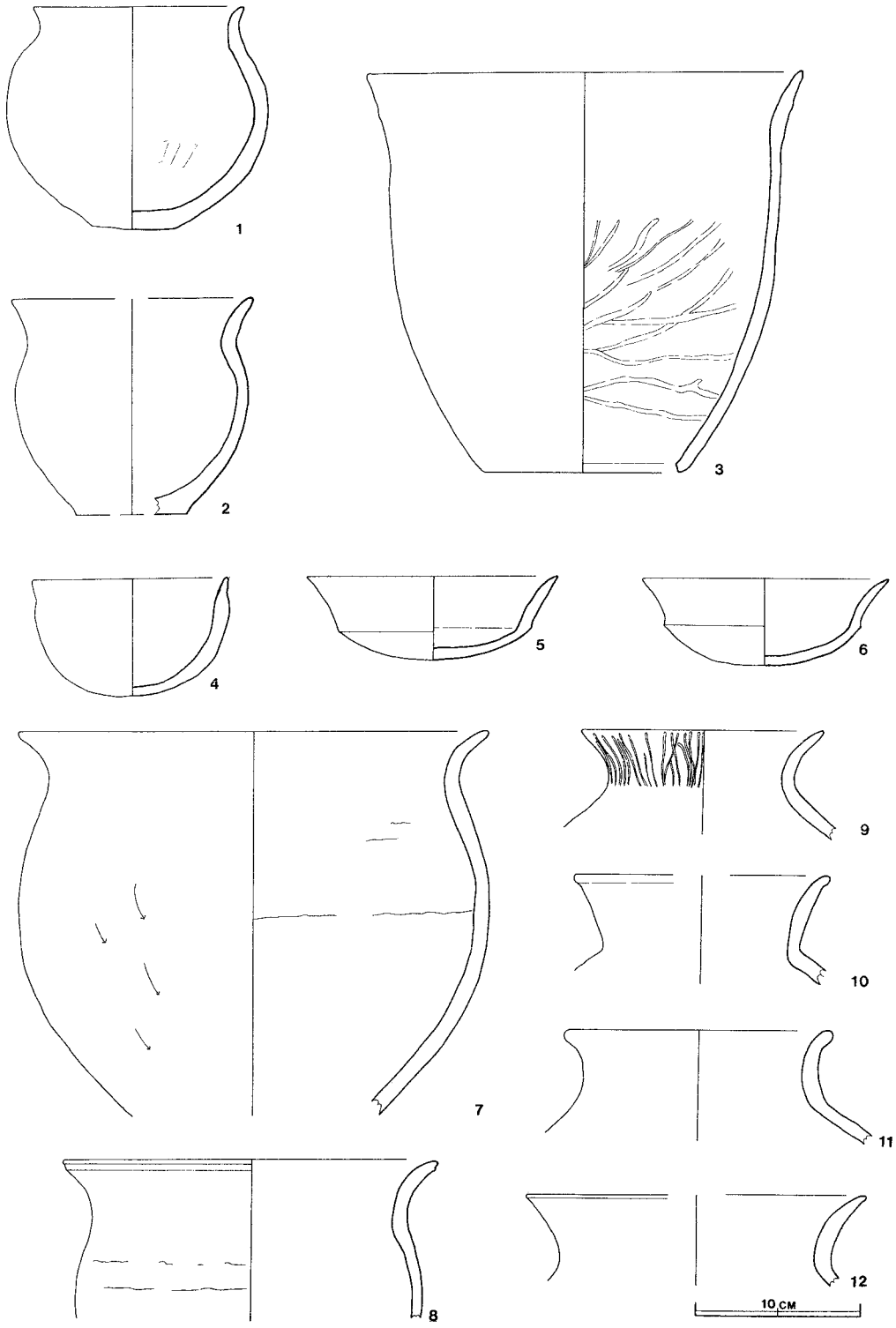
第71図　第47号住居址出土遺物拓影図

第48号住居址（図70・72・73(1)(2)）

本住居址は,調査区の南部中ほどＣ３区ｊ８，ｊ９，ｊ０，Ｄ３区ａ８，ａ９，ａ０，ｂ９，ｂ０に**確認され，北壁は**第47号住居址の約南半分を削除しており,本址は第47号住居址より新しい遺



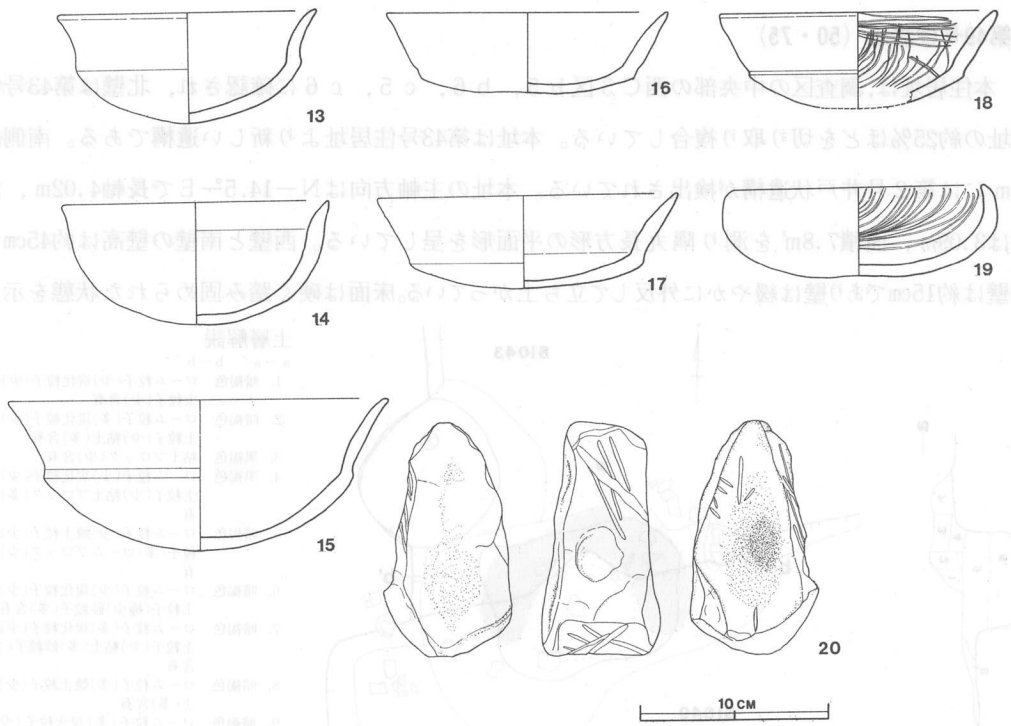
第72図　第48号住居址カマド実測図



第73図（1） 第47·48号住居址出土遺物実測図

構である。北東0.7mには第75号住居址が，西側3.2mには第51号住居址が，南西0.6mには第67号住居址が，南側4.2mには第68号住居址が検出されている。本住居址の主軸方向はN－10°－Wで，規模は長軸7.21m，短軸7.02m，面積43.6㎡を測り隅丸長方形を呈している。壁高は約60cmで壁はほぼ垂直に立ちあがり壁下には，幅15cm，深さ11cm内外の「U」字形をした壁溝が廻っている。床面は平坦で踏み硬められた状態で硬くぱりぱりとしている。炭化材，焼土が床面全体から出土しているので火災に遭遇していると思われる。

ピットは6個所確認されP1～P4は主柱穴と考えられ，南壁際西よりにあるP5は貯蔵穴と考えられる。規模は長径106cm，短径85cm，深さ136cmの不整楕円形を呈している。P6も貯蔵穴でP5に隣接し検出され，規模は長径104cm，短径84cm，深さ133cmを測り，不整楕円形を呈している。覆土は18層からなり自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土で，多量のローム粒子，少量の焼土粒子，炭化粒子と粘土ブロックを含み，中層は暗褐色土・黒褐色土で少量のローム粒子，



第73図(2)　第47・48号住居址出土遺物実測図

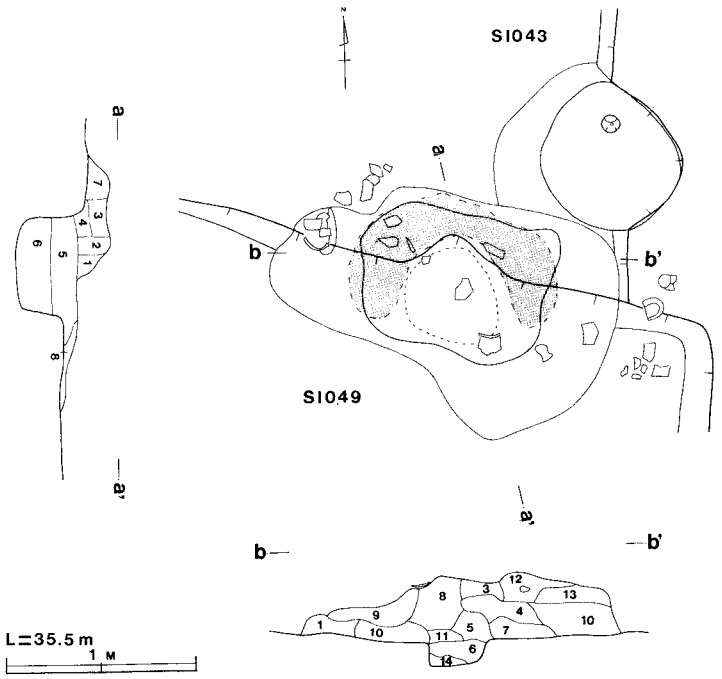
多量の炭化粒子，特に多量の焼土粒子，粘土ブロックを含み，下層は暗褐色・黒褐色土で多量のローム粒子，多量の炭化粒子，焼土粒子，粘土ブロックを含んでいる。カマドは北壁の中央に位置し，規模は長径156cm，短径130cmで北壁を80cm幅で，30cmほど掘り込んで煙道としている。

袖部は黒色土混りの砂質粘土で，カマドは南東向きに構築されている。燃焼部は長径60cm，短径52cmで不整円形を呈し平坦であり，土師器片を数点出土している。　　出土遺物は土師器を主に須恵器は細片のみである。土師器の完存率の良好なものをあげると，カマドから坏２個（図73－５・６），椀（図73－４），甕２個（図73－１・２），甑（図73－３）を，北東コーナー床直上より坏(図73—13)，南西コーナー床直上から坏(図73—14・17)，南壁際Ｐ６付近床面直上から坏を出土し，他には坏（図73—15・18）と甕，器台などの破片を出土している。その他の出土遺物は，南西コーナーＰ４付近床面直上より砥石２片(図73—20）を出土している。

本址は古墳時代の鬼高期に比定される遺構と思われる。

第49号住居址（50・75）

本住居址は，調査区の中央部の西Ｃ３区ｂ５，ｂ６，ｃ５，ｃ６に確認され，北壁は第43号住居址の約25％ほどを切り取り複合している。本址は第43号住居址より新しい遺構である。南側約４ｍには第２号井戸状遺構が検出されている。本址の主軸方向はＮ－14.5°－Ｅで長軸4.02m，短軸は3.09m，面積7.8㎡を測り隅丸長方形の平面形を呈している。西壁と南壁の壁高は約45cmで，北壁は約15cmであり壁は緩やかに外反して立ち上がっている。床面は硬く踏み固められた状態を示し

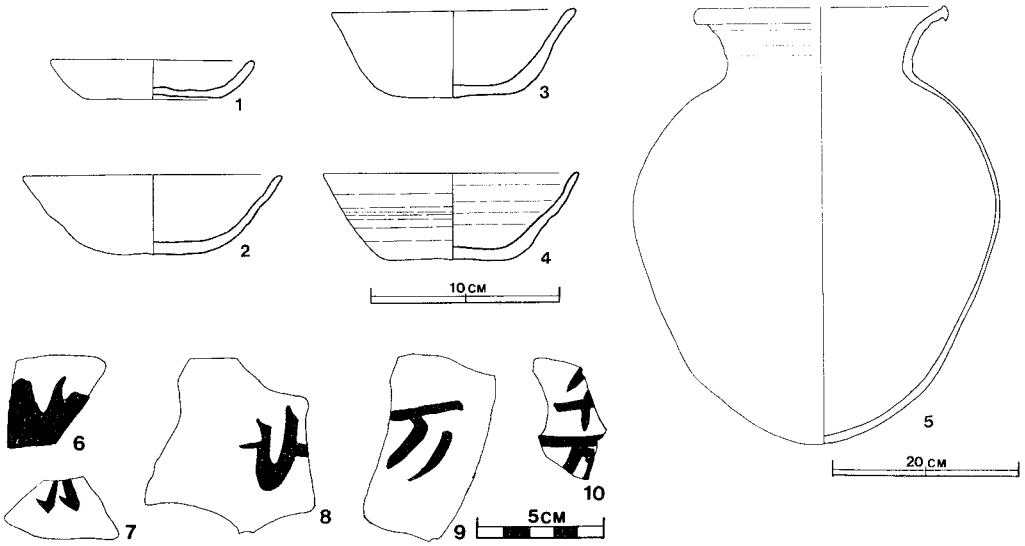


土層解説

a－a′　b－b′

1. 暗褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(少)焼土粒子(少)含有
2. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(少)焼土粒子(少)粘土(多)含有
3. 黒褐色　粘土ブロック(少)含有
4. 黒褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(少)焼土粒子(少)粘土ブロック(多)含有
5. 暗褐色　ローム粒子(少)焼土粒子(少)砂粒子(多)ロームブロック(少)含有
6. 暗褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(少)焼土粒子(極少)砂粒子(多)含有
7. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(少)焼土粒子(少)粘土(多)砂粒子(多)含有
8. 暗褐色　ローム粒子(多)焼土粒子(少)粘土(多)含有
9. 暗褐色　ローム粒子(多)炭大粒子(少)焼土粒子(少)含有
10. 極暗褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(特多)焼土粒子(多)ロームブロック(少)含有
11. 極暗褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(少)焼土粒子(少)砂粒子(少)含有
12. 暗褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(少)焼土粒子(少)粘土(特多)含有
13. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(少)焼土粒子(多)粘土(少)含有
14. 極暗褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(特多)焼土粒子(多)ロームブロック(少)含有

第74図　第49号住居址カマド実測図



第75図　第49号住居址出土遺物実測図

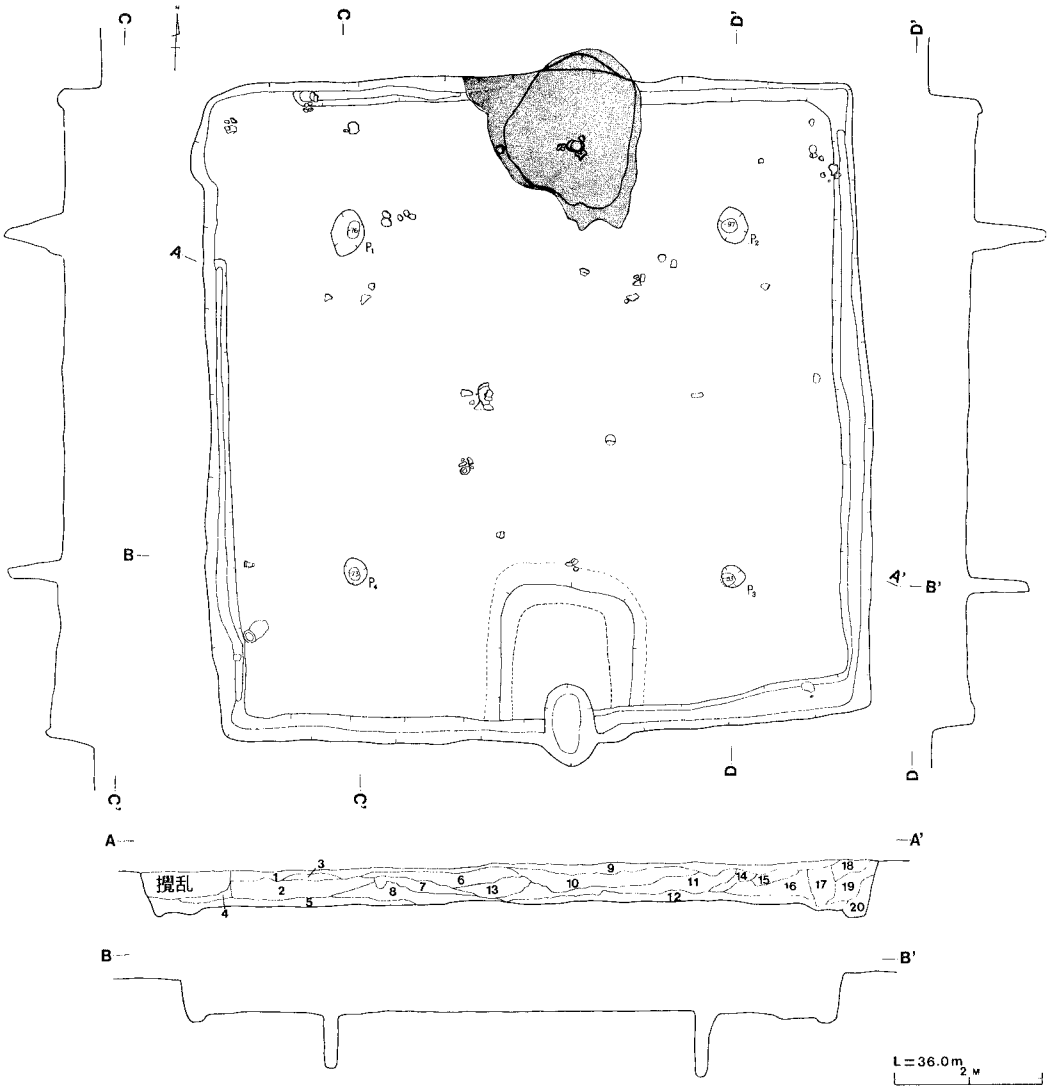
ている。ピットは4個所確認され，主柱穴は検出できなかった。南東コーナーのP3は貯蔵穴と思われ，規模は長径60cm，短径32cm，深さ25cmの長方形を呈している。

本址の覆土は11層からなり自然堆積の状態を示している。　　上層は黒色土・極暗褐色土，下層は暗褐色土で，ローム粒子，炭化粒子，焼土粒子を含有している。カマドは北壁の中央部東よりに位置し南向に構築されている。規模は長径220cm，短径160cmで，北壁を115cm幅で，40cmほど掘り込んで粘土で補強して煙道を構築している。燃焼部は長径102cm，短径97cmで，26cmほど不整円形に掘り窪めている。袖部は黒色土混りの砂質粘土である。

出土遺物は土師器と須恵器を共伴している。土師器の完存率の良好なものをあげると，カマドから内黒の坏（図75－3），皿（図75－1），墨書土器5点（図75－6～10）を出土し，他は甕，坏（図75－2）などの破片を出土している。須恵器は南東壁北よりの床面から坏，（図75－4）南壁付近床面から壺，坏などの細片出土している。本址は出土遺物等から国分期に比定される遺構と思われる。

第50号住居址（図76～78(1)(2)）

本住居址は，本遺跡の南西部C3区h3，h4，h5，i3，i4，i5，j3，j4，j5に確認され，北東約8.0mには方形周溝遺構が，南側2.0mには第57号住居址，第56号住居址，南東0.4mは第23号土壙が，2.4mは第51号住居址が検出されている。本址の主軸方向はN－3°－Wで

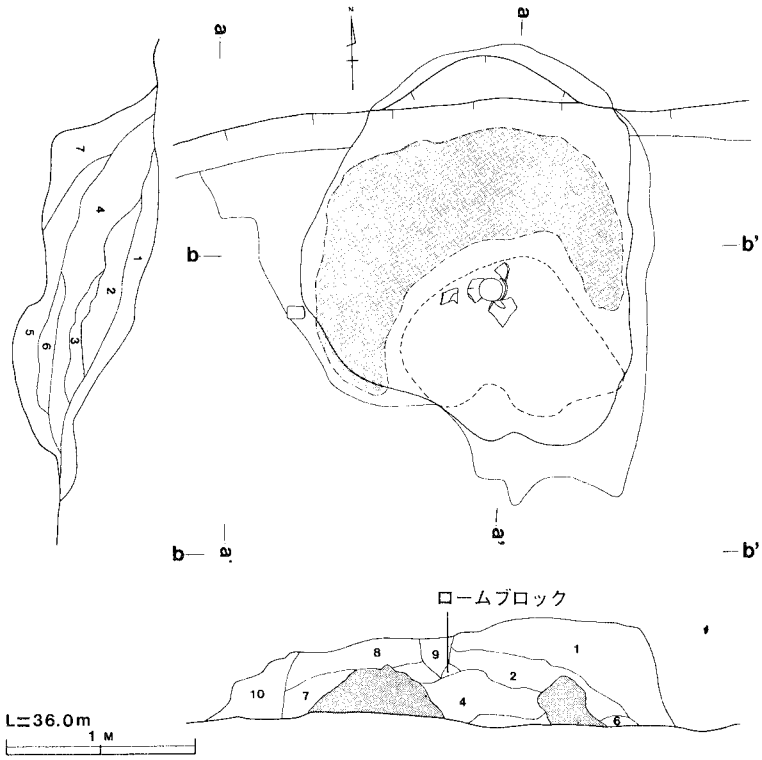


土層解説

A－A′

1. 褐　色　非粘性
2. 褐　色　ローム粒子(多)含有
3. 暗褐色　ローム粒子(少)含有
4. 極暗褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(極少)含有
5. 褐　色　ローム粒子 粘性，焼土粒子，炭化粒子(極少)含有
6. 暗褐色　ローム粒子(多)含有
7. 黒褐色　ローム粒子(少)含有
8. 黒褐色　ローム粒子(少)黒色土含有
9. 極暗褐色　ローム粒子(少)含有
10. 暗褐色　ローム粒子(少)焼土粒子(極少)含有
11. 褐　色　焼土粒子(多)含有
12. 褐　色　ローム粒子(多)含有
13. 暗褐色　ローム粒子(多)含有
14. 黒褐色　ローム粒子(少)含有
15. 極暗褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(極少)含有
16. 暗褐色　ローム粒子(多)ローム土，黒色土含有
17. 暗褐色　ローム粒子(多)含有
18. 暗褐色　ローム粒子(多)焼土粒子(極少)含有
19. 暗褐色　ローム土，黒色土(中)含有
20. 暗褐色　ローム粒子，ローム土，黒色土(中)含有

第76図　第50号住居址実測図



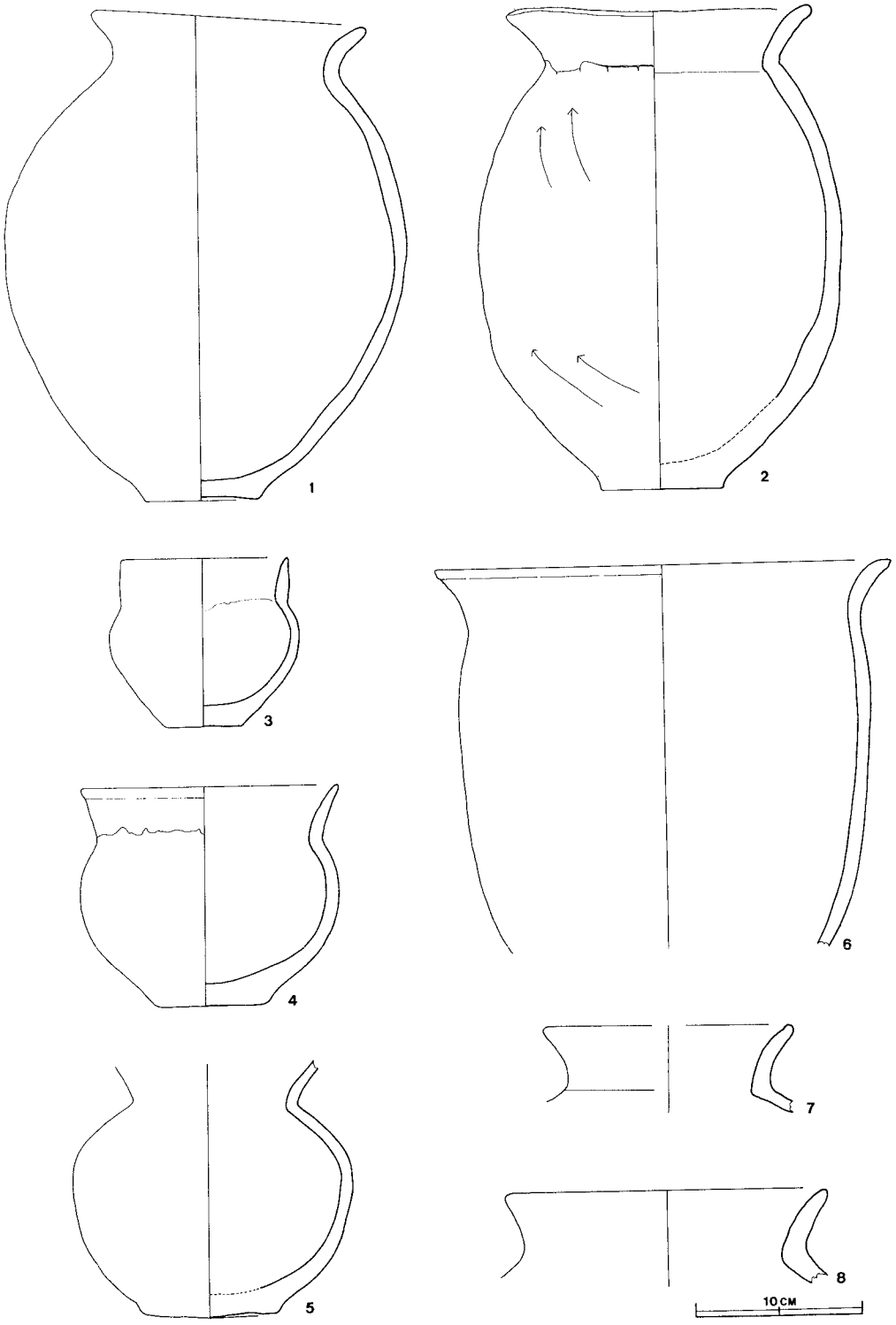
土層解説

a－a′ b－b′

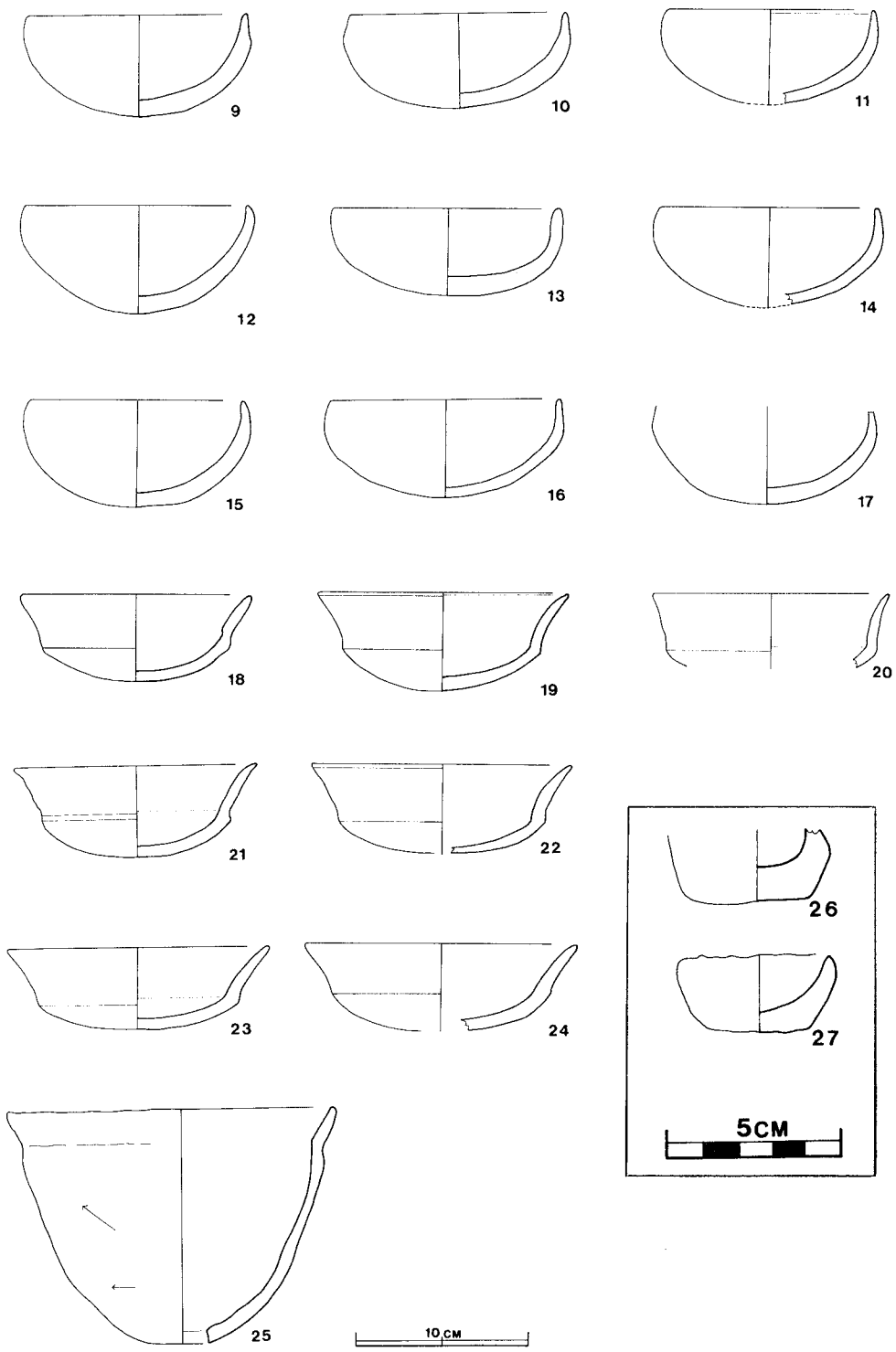
1. にぶい褐色　ローム粒子(多)砂粒子(多)粘土ブロック(少)炭炭化粒子(少)含有
2. にぶい褐色　ローム粒子(多)砂粒子(多)粘土ブロック(少)焼土(多)含有
3. 褐色　ローム粒子(少)含有粘土ブロックと焼土を主体としている
4. 褐色　ローム粒子(多)粘土ブロック(多)焼土(特多)含有。火を受け焼土化
5. 黒褐色　ロームブロック(多)含有
6. 暗褐色　粘性(弱)ロームブロック(少)含有
7. 暗褐色　焼土化した粘土ブロック混入,
8. 暗褐色　ローム粒子(多)焼土ブロック(少)粒状(粗)焼土(少)(少)含有
9. 灰褐色　ローム粒子(多)粘土ブロック(多)焼土(少)含有
10. 暗褐色　ローム粒子(特多)砂粒子(多)粘土ブロック(多)焼土(多)含有

第77図　第50号住居址カマド実測図

規模は長軸9.01m,短軸9.00m,面積65.8㎡を測り,隅丸正方形の平面形を呈している。壁高は約50cmで壁はほぼ垂直に立ちあがっている。壁下には幅20cm，深さ10cm内外の壁溝がカマドを除いて廻っている。床面は踏み固められた状態を示し，硬く平坦である。南壁中央部に出入口の施設と思われる一段高いベルトが半周し,その中心に長径110cm，短径66cm，深さ60cmほどの楕円形の土壙が半分ほど外にはり出して設けられている。ピットは5個所確認されP1～P4は主柱穴と考えられる。覆土は20層からなり自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土・極暗褐色土で多量のローム粒子と極少量の焼土粒子を含み，中層は黒褐色土，暗褐色土で多量のローム粒子を含み，下層は褐色土で多量のローム粒子と焼土粒子，極少量の炭化粒子を含んでいる。カマドは北壁の中央に位置し,規模は長径185cm，短径160cmで北壁を130cmの幅で約30cmほど掘り込んで煙道としている。袖部は黒色土混りの砂質粘土で、ほぼカマドは南向きに構築されている。燃焼部は長径118cm，短径70cm,深さ30cmを測り、不整楕円形に掘り窪められており、土師器片を数点出土している。



第78図（1） 第50号住居址出土遺物実測図

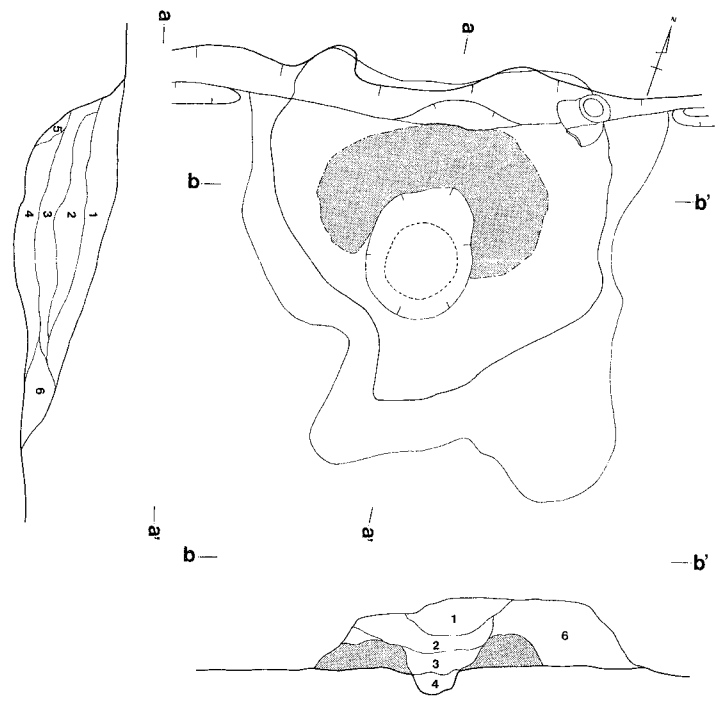


第78図(2)　第50号住居址出土遺物実測図

出土遺物は,土師器の坏を多数出土し,須恵器は覆土から坏等の細片を数点出土している。土師器の完存率の良好なものをあげるとカマド内やその付近から甕（図78－１），坏９個（図78－10～13・16・17・19・21・23），北東コーナーの床面から坏２個(図78－９・15)，南東部覆土から坏（図78－22),南西コーナーの床面から甕（図78－２),床面直上から坏(図78－18），北西コーナーの床面から小型甕(図78－３),床面直上から坏(図78－21)，中央部床面直上から甑，甕（図78－４）を出土し，他には床面直上から手捏土器(図78－26・27)や甕,甑，坏（図78－14・20）器台，高坏などの破片を多数出土している。本址は出土遺物等から古墳時代の鬼高期に比定される遺構と思われる。

第51号住居址（図79～81）

本住居址は，　調査区の南部中ほどＣ３区ｊ６，ｊ７，ｊ８，Ｄ３区ａ６，ａ７，ａ８に確認され、北西2.5mには第50号住居址が、0.8mには第22号土壙が南西1.0mには第97号住居址が,南側2.4mには第３号井戸状遺構が,西側3.2mには第48号住居址が検出されている。本住居址の主軸方向はＮ－27°－Ｗで,規模は長軸5.70m,短軸5.60m,面積25.9㎡を測り,隅丸正方形を呈する。壁高は35cm～45cm内外で壁は緩やかな傾斜をして立ちあがっている。壁下には幅15cm～20cm，深さ５cm内外の壁溝がカ



土層解説

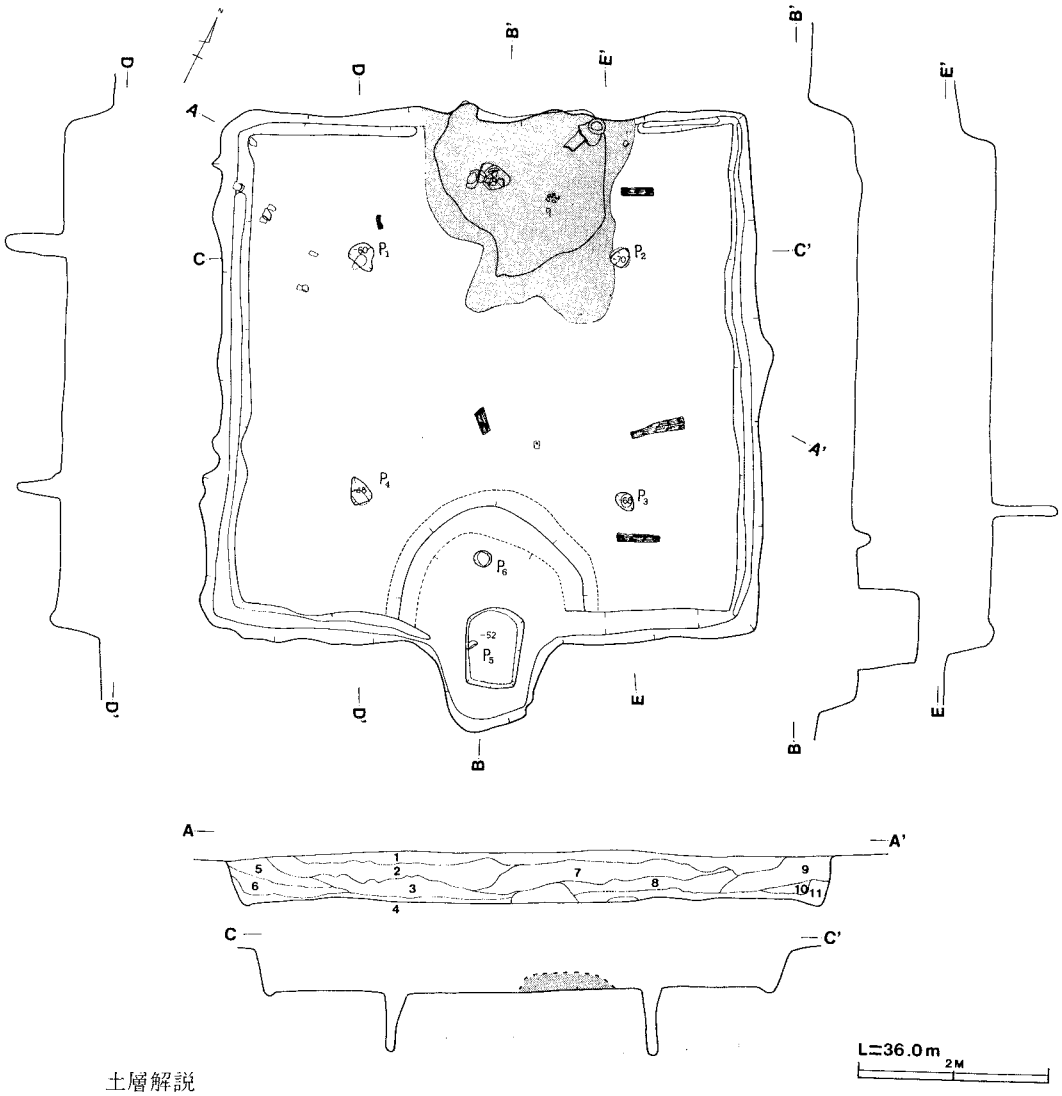
a－a′　b－b′

1. 褐　色　ローム粒子(多)焼土粒子(特多)粘土(少)含有
2. 暗褐色　粘土ローム粒子含有
3. 暗褐色　粘土，火を受けているローム粒子含有
4. にぶい赤褐色　ローム粒子(少)焼土粒子(少)含有
5. 褐灰色　粘土ブロック含有
6. 褐　色　ロームブロック(少)含有

L=36.0m
1 M

第79図　第51号住居址カマド実測図

マドを除いて廻っている。床面は平坦で硬く踏み固められた状態である。カマド付近・中央床面より炭化材が出土しているので，本址は火災に遭遇していると思われる。南壁中央部に出入口の施設と思われる　一段高いベルトが半周し，その中心に長辺85cm，短辺60cmの土壙が半分ほど外にはりだし，土壙とベルトの中ほどに補助穴と思われる，Ｐ６が設けられている。ピットは６個所確

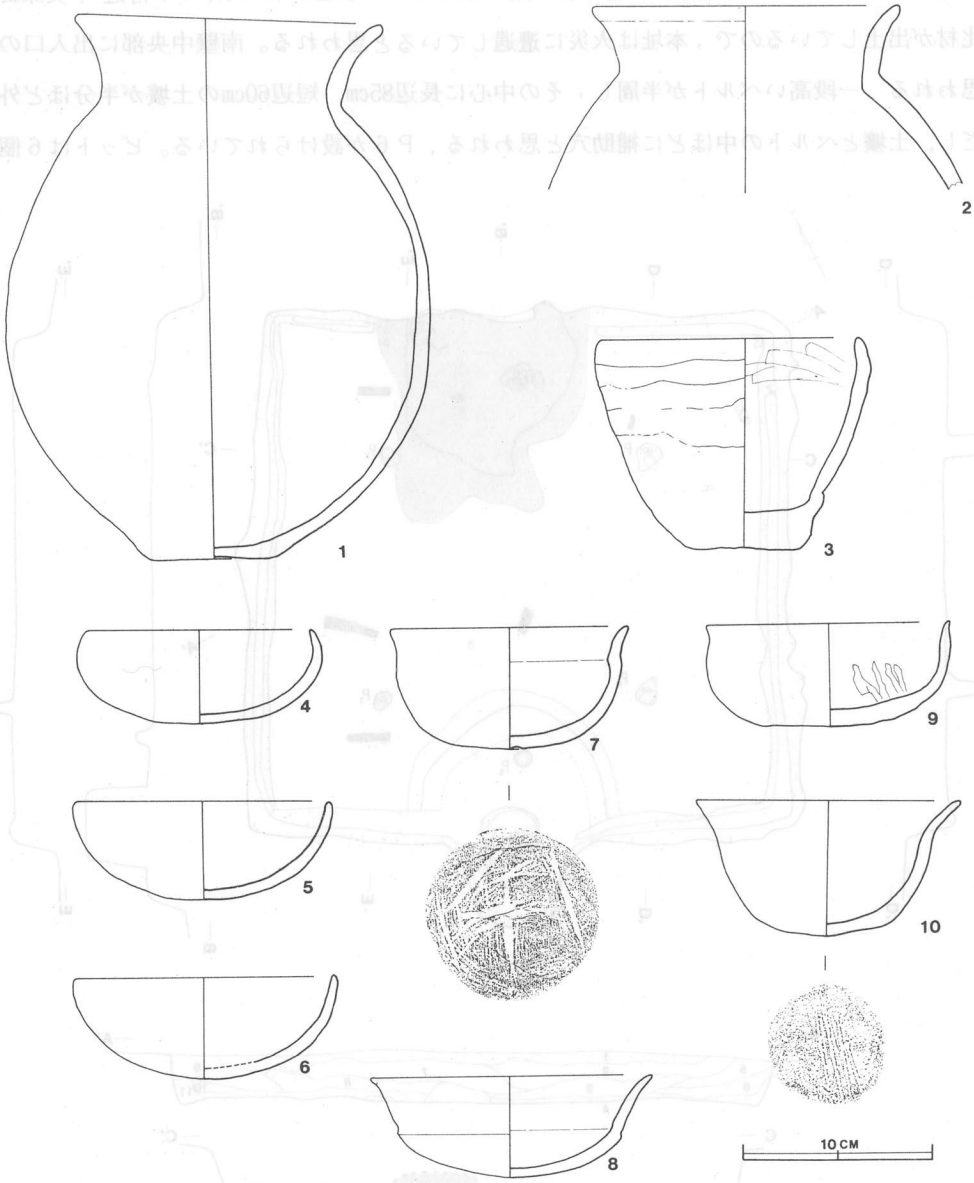


土層解説

A－A′

1. 暗褐色　ローム粒子(少)含有
2. 暗褐色　ローム粒子(中)含有
3. 暗褐色　ローム粒子(少)粘土(少)含有
4. 暗褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(極少)粘土(少)含有
5. 褐　色　ローム粒子(少)含有
6. 暗褐色　ローム粒子(少)ロームブロック(少)含有
7. 暗褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(極少)含有
8. 黒褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(極少)粘土(多)含有
9. 暗褐色　ローム粒子(多)含有
10. 暗褐色　ローム粒子(中)含有
11. 暗褐色　ローム粒子(少)粘土(特多)含有

第80図　第51号住居址実測図



第81図　第51号住居址出土遺物実測図

認されＰ１～Ｐ４は主柱穴と考えられる。覆土は20層からなり自然堆積の状態を示している。上層は黒褐色土・褐色土で多量のローム粒子を含み，中層は暗褐色土・極暗褐色土で少量のローム粒子，極少量の炭化粒子を含み，下層は極暗褐色土・暗褐色土で少量のローム粒子，極少量の焼土粒子を含んでいる。

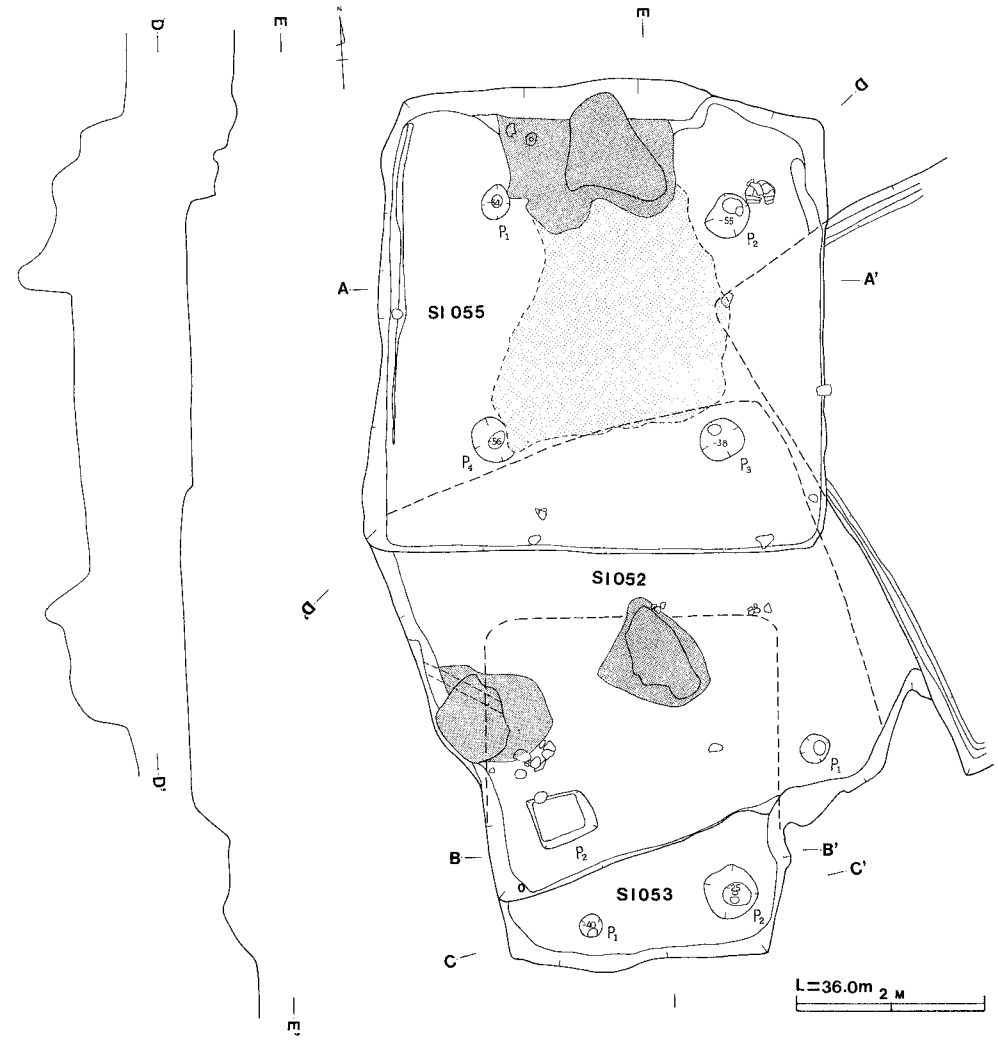
カマドは北壁の中央に位置し長径122cm，短径116cmで北壁を70cmの幅で14cmほど掘り込んで煙道部を構築している。燃焼部は長径30cm，短径28cm，深さ５cmほどの円形に掘り窪めている。袖部は黒色土混りの砂質粘土でカマドは南東向きに構築されている。出土遺物は土師器を中心に須恵器の破片を数点出土する。土師器の完存率の良好なものをあげると，カマドから鉢（図81－３），坏３個（図81－５・６・９），椀（図81－７），北西部床面直上から甕（図81－２）と南壁中央部にある出入口の施設と思われる土壙内より坏（図81－８）を出土し，他に甕（図81－１），支脚，坏（図81－４），壺などの破片を多数出土している。その他の出土遺物は，カマド付近から砥石２片と弥生式土器の破片を数点出土している。本址は出土遺物等から古墳時代鬼高期に比定される遺構と思われる。

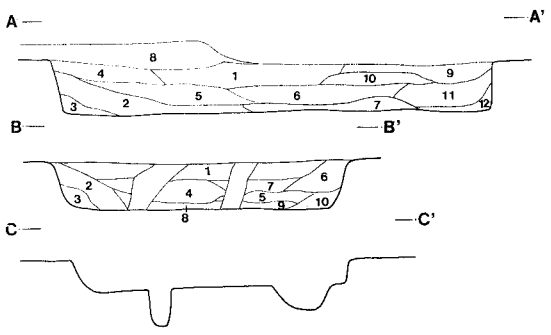
第53号住居址（図82・85(1)(2)）

本住居址は，調査区の中央部西端Ｂ３区ｊ５，ｊ６に確認され，第52号住居址の上に貼り床をし構築している。本址は第52号より新しい遺構であり，北東1.0mには第55住居址が北東1.0mには第54住居址が検出されている。本址の主軸方向はＮ－2°－Ｗで南壁と東壁の一部を残し，規模は長軸3.70m，短軸3.10mで面積10.1㎡を測り隅丸長方形を呈している。床面は南壁際に残存しているだけで，ピットは２個所検出されＰ１は主柱穴と思われ，他は検出できなかった。南東コーナーのＰ２は貯蔵穴と思われ，規模は長径25cm，短径25cm，深さ40cmの円形を呈している。

覆土は９層からなりトレンチャーによる攪乱を受けている。上層は暗褐色土で少量のローム粒子，極少量の焼土粒子，少量の炭化粒子を含み，下層は暗褐色土で多量のローム粒子，少量のロームブロックを含んでいる。カマドは，第52号住居址の床面中央部に検出され，第53号住居址の北壁中央部に付設されていた。トレンチャーによる破壊を受けているので断面の土層を調査したにすぎない。断面を見るとほぼ中間に厚さ約５cmほどの焼土のベルトがあり，その下部に白色粘土帯を有していた。

本址の出土遺物は少なく，須恵器を中心に出土している。須恵器の台付長頸壺片（図85(2)－13）を床面直上から，南壁付近床面直上より内黒の高台付坏を，北東部床面直上より坏，他には坏，蓋などの細片を数点出土している。その他の出土遺物はカマドより鉄製品を２点（図85(2)－19），砥石（図85(2)－17）を出土している。本址の時期を決定しうるにたる出土遺物は少ないがほぼ国分期に比定される遺構ではないかと思われる。





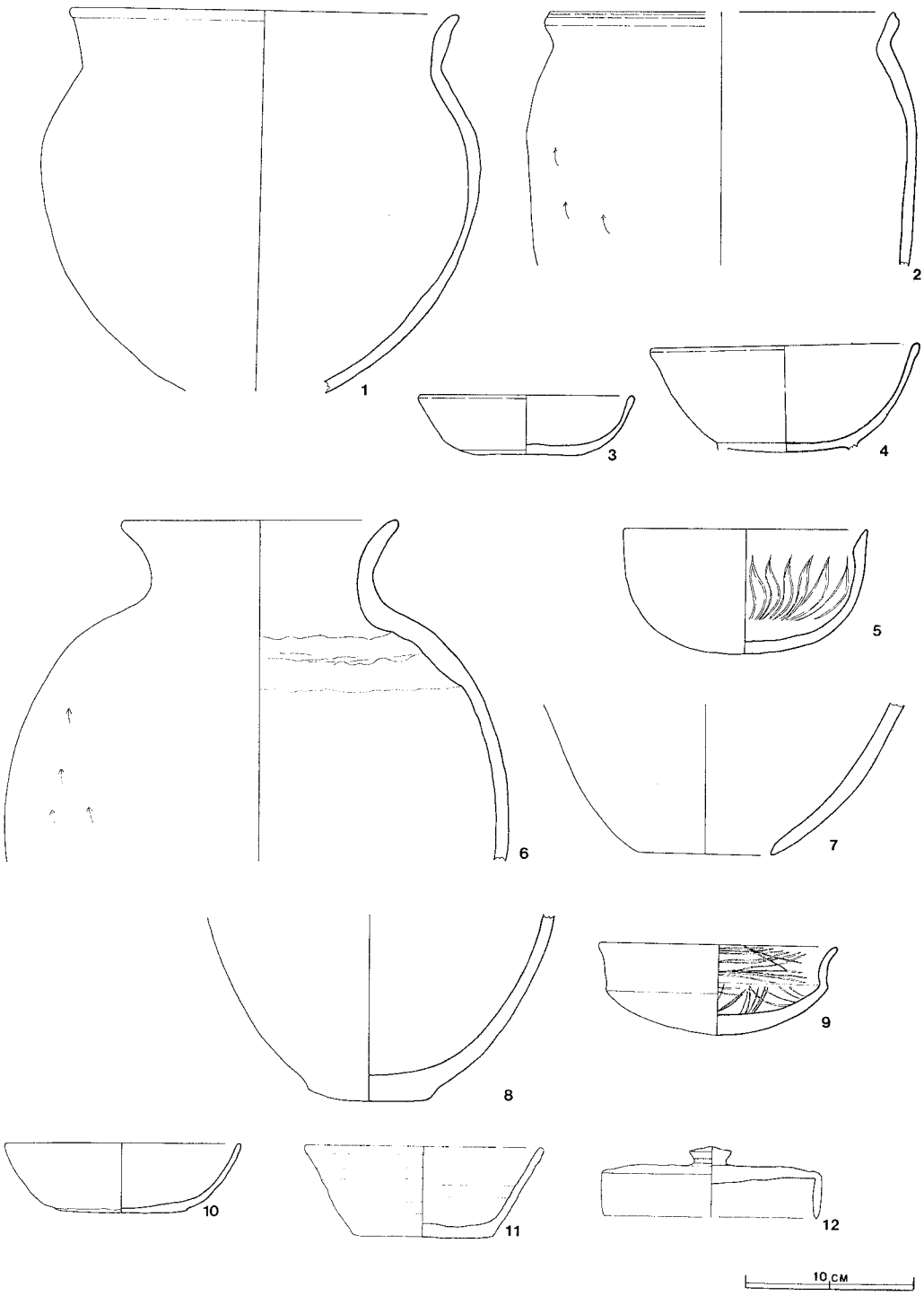
土層解説
A－A′

1. 暗褐色　ローム粒子(極少)焼土粒子(極少)砂粒子(多)含有
2. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(少)焼土粒子(極少)含有
3. 暗褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(少)砂粒子(少)ロームブロック(少)含有
4. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(少)焼土粒子(極少)砂粒子(多)含有
5. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(少)砂粒子(多)粘土ブロック(少)含有
6. 黒褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(極少)焼土粒子(極少)砂粒子(多)含有
7. 暗褐色　ローム粒子(少)砂粒子(少)含有
8. 黒褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(少)砂粒子(多)含有
9. 暗褐色　ローム粒子(少)砂粒子(少)含有
10. 暗褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(少)含有
11. 黒褐色　焼土ブロック，焼土粒子(多)含有
12. 暗褐色　ローム粒子含有

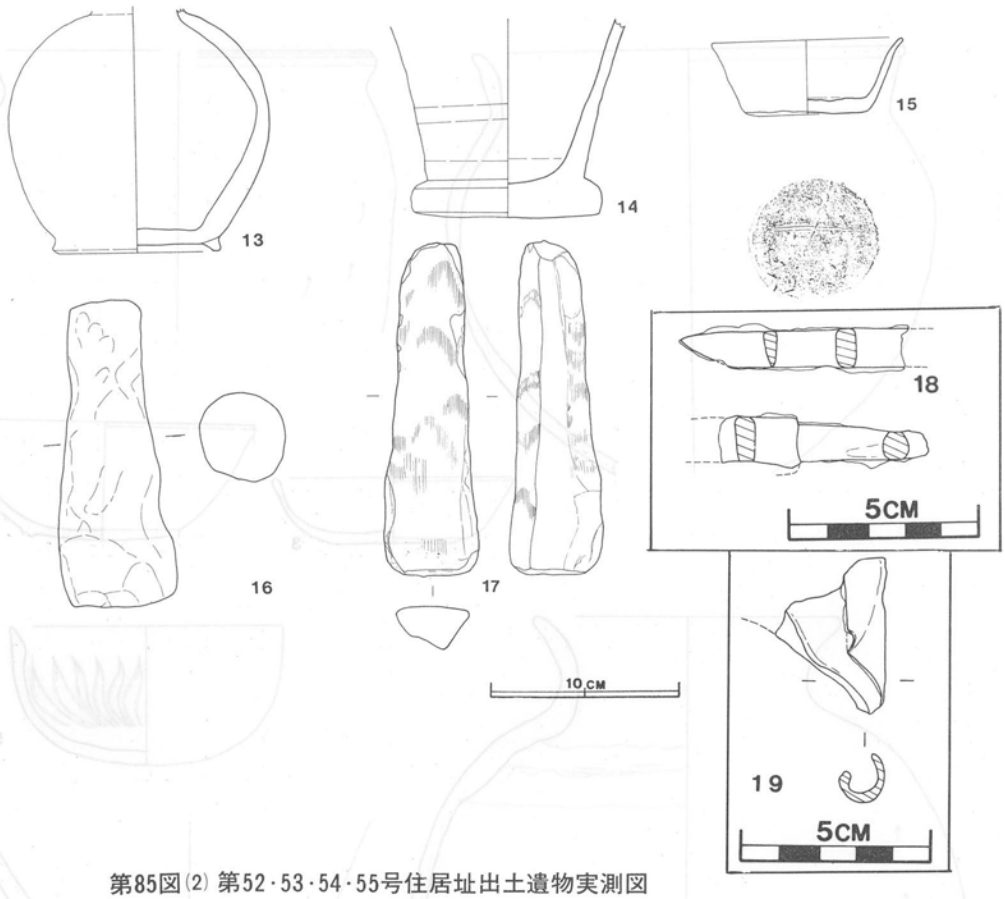
土層解説
B－B′

1. 暗褐色　ローム粒子(極少)焼土粒子(極少)砂粒子(多)含有
2. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(少)焼土粒子(極少)含有
3. 暗褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(少)砂粒子(少)ロームブロック(少)含有
4. 暗褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(少)焼土粒子(極少)砂粒子(多)含有
5. 暗褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(多)焼土粒子(多)粘土ブロック(少)含有
6. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(少)焼土粒子(極少)砂粒子(多)含有
7. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(少)砂粒子(多)粘土ブロック(少)含有
8. 暗褐色　ローム粒子(少)砂粒子(少)含有
9. 褐灰色　白色粘土
10. 暗褐色　燃土粒子含有

第82図　第52・53・55号住居址実測図



第85図(1)　第52・53・54・55号住居址出土遺物実測図

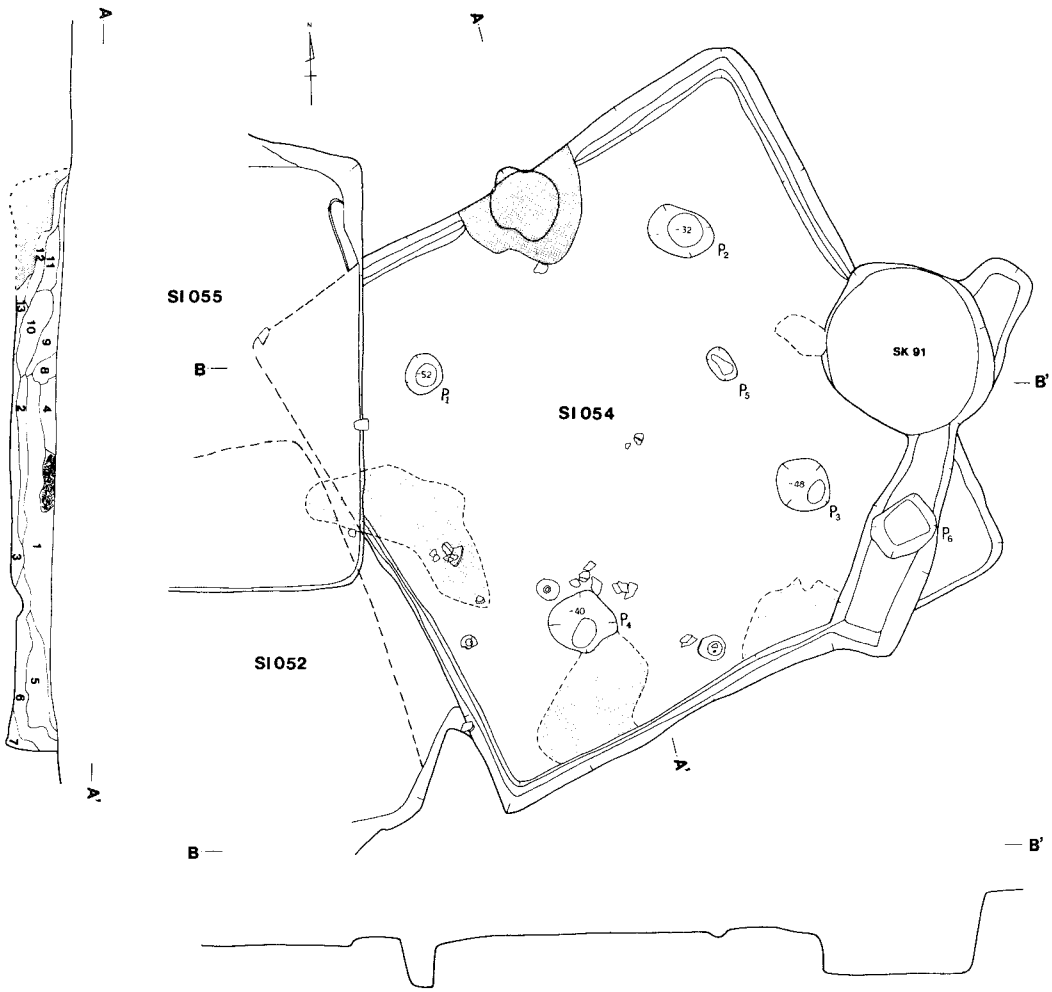


第85図(2) 第52・53・54・55号住居址出土遺物実測図

第54号住居址（図84・85（1）（2）

本住居址は，調査区の中央部西端，B３区ｈ６，ｈ７，ｉ６，ｉ７，ｉ８，ｊ６，ｊ７に確認され，西コーナーは第55号住居址に切られ，南西壁は第52号住居址と接している。東コーナーは第19号土壙，第39号土壙が切り込んでいる。北側約1.8mには第25号土壙が,南東約1.6mには第１号掘立柱建築址が検出されている。

本址の主軸方向はＮ－31°－Ｗで規模は長軸5.96m，短軸5.94m，面積33.0㎡で隅丸正方形の平面形を呈している。壁高は50cm内外で壁はほぼ垂直に立ちあがっている。壁下には幅15cm，深さ５cm内外の壁溝が東・西コーナーを除いて廻っている。床面は硬く踏み固められた状態を示しているが凸凹している。焼土が北東壁・南西壁付近と南コーナーに出土しているので，本址は火災に遭遇していると思われる。ピットは６個所確認されP1～P4は主柱穴と考えられるがＰ５は補助穴と思われる。東コーナーのＰ６は貯蔵穴と思われ規模は長辺70cm，短辺55cm，深さ40cmほどのほぼ長方形を呈している。覆土は17層からなり上層は本址が火災に遭い廃棄された後ロームで埋めもどされたものと思われ，ローム粒子，ハードロームブロックを多量に含んでいる。下層は暗褐色土で少量のローム粒子，炭化粒子，焼土粒子，ロームブロックを含んでいる。



土層解説　A－A'

1. 暗褐色　ロームブロックと混り合った土層
2. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(少)砂粒子(多)含有黒色土がまばらに混っている
3. 暗褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(少)焼土(多)粒子(多)含有
4. 暗褐色　ローム粒子(多)含有
5. 暗褐色　ローム粒子(特多)焼土粒子(極少)砂粒子(多)含有
6. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(極少)砂粒子(多)含有
7. 暗褐色　ローム粒子(少)砂粒子(多)ロームブロック(少)含有
8. 暗褐色　ローム粒子(多)砂粒子(少)ロームブロック(少)含有
9. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(極少)焼土粒子(極少)砂粒子(少)ロームブロック(少)含有
10. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(極少)焼土粒子(極少)砂粒子(多)含有
11. 暗褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(少)焼土粒子(少)ロームブロック(少)粘土ブロック(少)含有
12. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(少)焼土粒子(極少)砂粒子(多)粘土ブロック(少)含有
13. 暗褐色　ローム粒子(少)砂粒子(少)粘土ブロック(多)含有

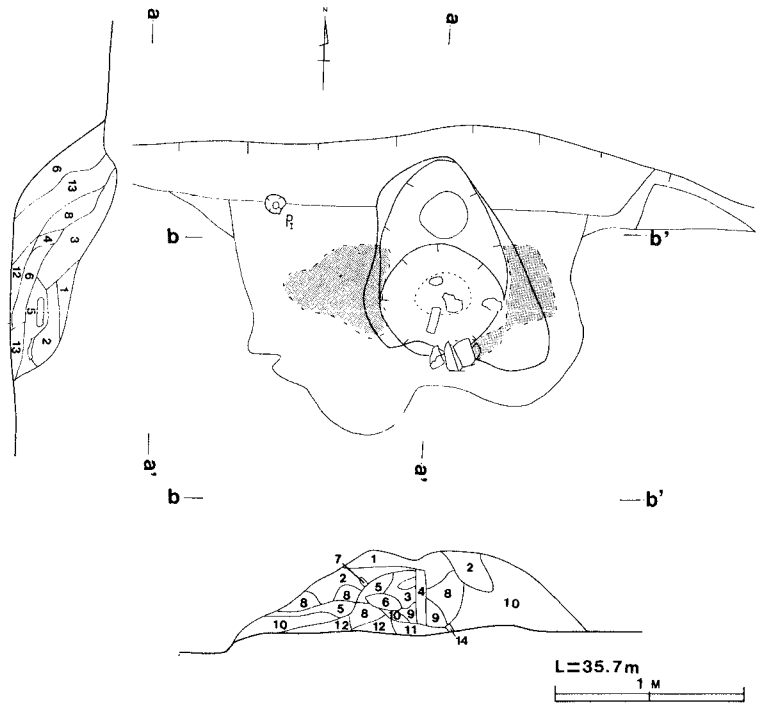
第84図　第54号住居址・第19号土壙実測図

カマドは北西壁の中央から東よりに付設され規模は長径88cm，短径85cm，北西壁を33cm幅で，15cmほど掘り込んで煙道部としている。燃焼部は長径28cm，短径21cm　　ほどで円形に堀り窪めている。袖部は黒色土混りの粘土でカマドは南東向きに構築されている。出土遺物は土師器が中心で，須恵器は北東部床面から坏（図85－９）と覆土からの 坏片　（図85－11）を出土し，他に細片を数点出土しているのみである。土師器の完存率な良好なものをあげると中央部床面より椀（図85 －５），南コーナー床面より甕（図85－１），南東壁付近床面直上より甑底部（図85－７），壺片を出土し他は甕，甑などの破片を多数出土している。その他の出土遺物は，カマドより鉄製品２片（図85－18）を出土している。

本址は出土遺物等から古墳時代の鬼高期に比定される遺構と思われる。

第55号住居址（図82・83・85(1)(2)）

本住居址は，遺跡の中央部西端　　Ｂ３区ｈ５，ｈ６，ｉ５，ｉ６に確認され，東壁は第54号住居址の西コーナーに切り込み，南壁は第52号住居址の北壁に切り込んでいる。本址は第52号



土層解説

a－a′ b－b′

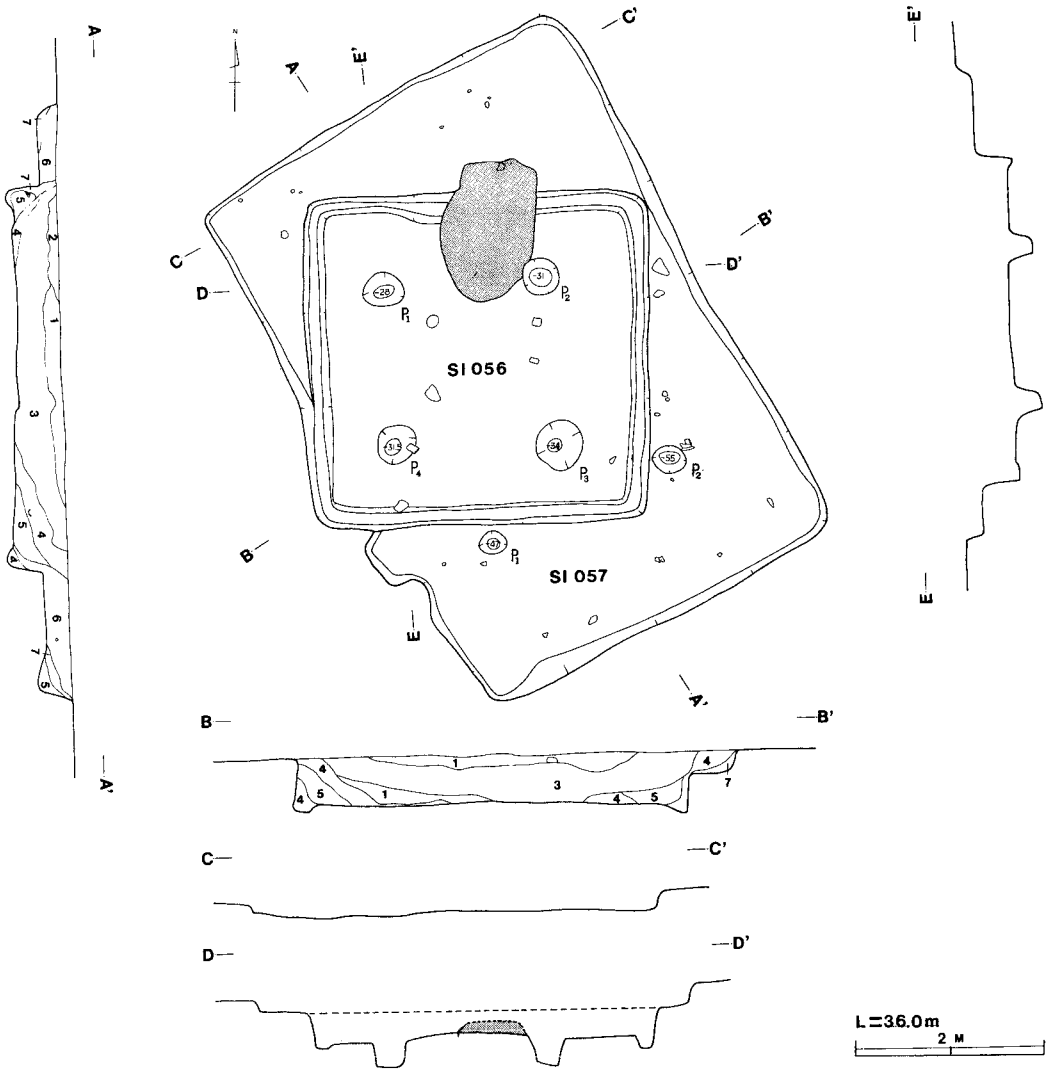
1. 極暗褐色
   ローム粒子，砂(少)含有
2. 黒　色
   ローム粒子，石英砂含有
3. 黒褐色
   ローム粒子，焼土粒子含有
4. 黒色
   焼土粒子，砂(少)含有
5. 黒褐色
   焼土粒子，砂(多)含有
6. 極暗褐色
   焼土ブロック，砂含有
7. 黒褐色
   砂(多)含有
8. 黒褐色
   砂(多)含有
9. 黒褐色
   焼土粒子，砂　含有
10. 暗褐色
    焼土粒子　含有
11. 褐　色
12. 褐　色
13. 黒褐色
    焼土ブロック，焼土粒子(多)含有
14. 褐灰色
    白色粘土

第83図　第55号住居址カマド実測図

住居址，第54号住居址より新しい遺構である。本址の主軸方向はＮ－℃で，規模は長軸4.83m，短軸は4.70m，面積18.5㎡ほどで 隅丸正方形を呈している。壁高は約72cmで壁は垂直に立ちあがり，南壁と東壁は確認できない。床面は褐色を呈し硬く平坦である。ピットは４個所確認されＰ１～Ｐ４は主柱穴と考えられるが貯蔵穴は有していない。覆土は12層からなり暗褐色土で東部の第54号住居址，南部の第53号住居址の上層を切り，自然堆積の状態を示している。上層は多量のローム粒子，炭化粒子，焼土粒子を含有し，中層は多量のローム粒子と炭化粒子を含み，下層はローム粒子を含んでいる。カマドは北壁の中央から東よりに位置し，規模は長径88cm，短径85cmで北壁を33cmの幅で，15cmほど掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径28cm，短径21cm，深さ16cmで円形に掘り窪めている。袖部は黒色土混りの砂質粘土でカマドは南向きに構築されている。出土遺物は土師器と須恵器が共伴している。土師器の完存率の良好なものをあげると，カマド内より甕口縁部（図85－２）支脚（図85－16），内黒の高台付坏（図85－４）と坏，南壁付近床面より甕底部を出土し，他には甕坏，高坏などの破片を多数出土している。須恵器はカマドより蓋（図85－12）をカマド付近より坏（図85－３），北東コーナー床面より坏（図85－10）と，西壁付近床面より坏を，他は細片を少数出土している。その他の出土遺物はカマド内より砥石を出土している。本址は出土遺物等から国分期に比定される遺構と思われる。

第56号住居址（図86）

本住居址は，調査区の南西部Ｄ３区ａ３，ａ４，ｂ３，ｂ４に確認され，南西コーナーだけを残して第57号住居址にすっぽりと切り込んでおり，本址は第57号住居址より新しい遺構である。北側4.3m には第50号住居址が，南西1.6m には第58号住居址が，東側4.8m には第97号住居址が検出されている。　本址の主軸方向はＮ－3°－Ｗで規模は長軸3.55m，短軸3.50m，面積9.9㎡を測り隅丸正方形を呈している。　壁面は褐色のロームで，壁はやや垂直ぎみに約35cmほど立ちあがっている。　壁下には幅約18cm，深さ約６cmの壁溝がカマドの部分を除いて廻っている。床面は暗褐色土で中央部がやや硬い状態を示しているが壁面に近づくにつれて軟らかくなっている。ピットは４個所確認されＰ１～Ｐ４は主注穴と考られるが、貯蔵穴は有していない。



土層解説

A－A′　B－B′

1. 黒褐色　ローム粒子(少)含有
2. 黒　色　ローム粒子(少)含有
3. 黒褐色　ローム粒子(少)ロームブロック(少)含有
4. 黒褐色　ローム粒子(少)含有
5. 黒　色　ローム粒子(微)含有
6. 黒褐色　ローム粒子(微)含有
7. 黒褐色　ロームブロック(多)含有

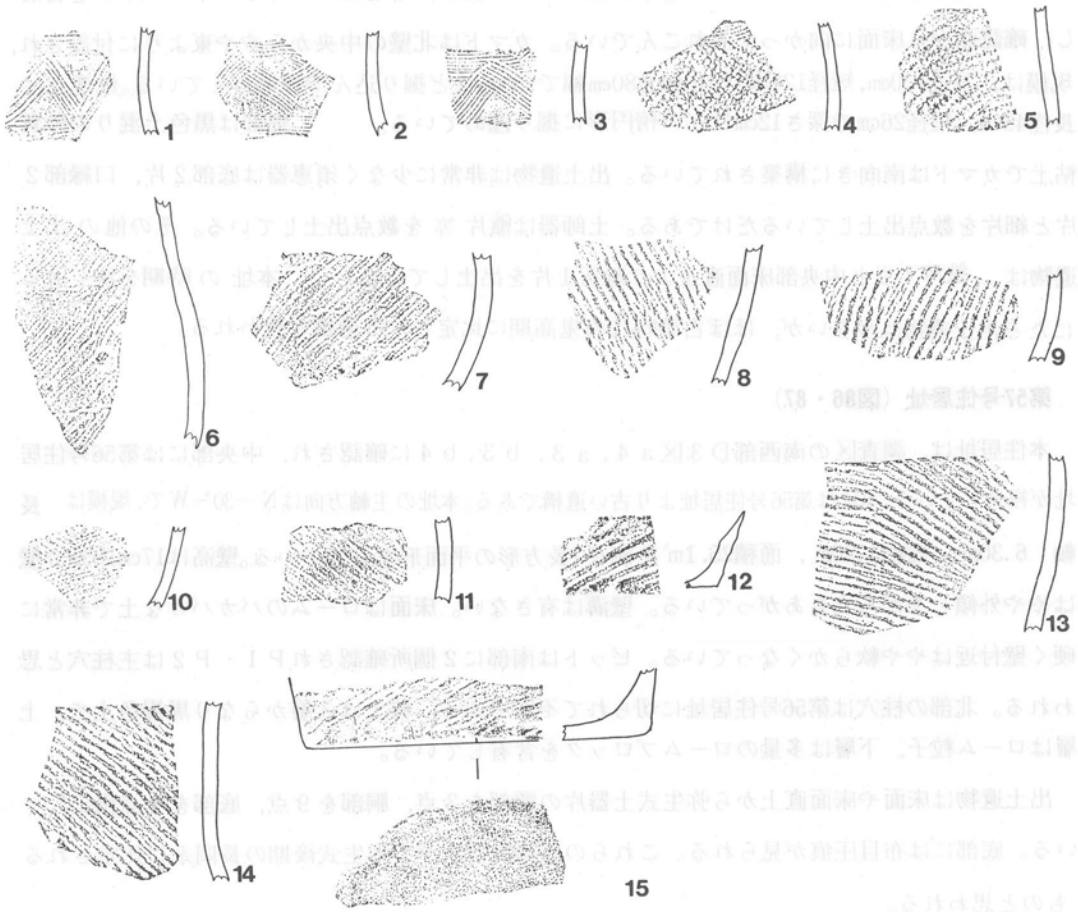
第86図　第56・57号住居址実測図

覆土は黒褐色土で９層からなり，上層は少量のローム粒子，下層はローム小・中ブロックを含有し，確認面から床面に向かって流れこんでいる。カマドは北壁の中央からやや東よりに付設され，規模は，長径130cm，短径125cmで，北壁を80cm幅で，30cmほど掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径49cm，短径26cmで深さ12cmほどの楕円形に掘り窪めている。　袖部は黒色土混りの砂質粘土でカマドは南向きに構築されている。出土遺物は非常に少なく須恵器は底部２片，口縁部２片と細片を数点出土しているだけである。土師器は甑片等を数点出土している。その他の出土遺物は，鉄滓１点と中央部床面直上より砥石１片を出土している。　本址の時期を決しうるにたる出土遺物は少ないが，ほぼ古墳時代の鬼高期に比定される遺構と思われる。

第57号住居址（図86・87）

本住居址は，調査区の南西部Ｄ３区ａ４，ａ３，ｂ３，ｂ４に確認され，中央部には第56号住居址が複合している。本址は第56号住居址より古い遺構である。本址の主軸方向はＮ－30°－Ｗで，規模は　長軸　6.30m，短軸4.20m，面積25.1㎡を測り，長方形の平面形を呈している。壁高は17cm内外で壁はやや外傾しながら立ちあがっている。壁溝は有さない。床面はロームのパカパカな土で非常に硬く壁付近はやや軟らかくなっている。ピットは南部に２個所確認されＰ１・Ｐ２は主柱穴と思われる。北部の柱穴は第56号住居址に切られて不明である。覆土は３層からなり黒褐色土で，上層はローム粒子，下層は多量のロームブロックを含有している。

出土遺物は床面や床面直上から弥生式土器片の頸部を３点，胴部を９点，底部を２点出土している。底部には布目圧痕が見られる。これらの土器片はすべて弥生式後期の長岡系に比定されるものと思われる。



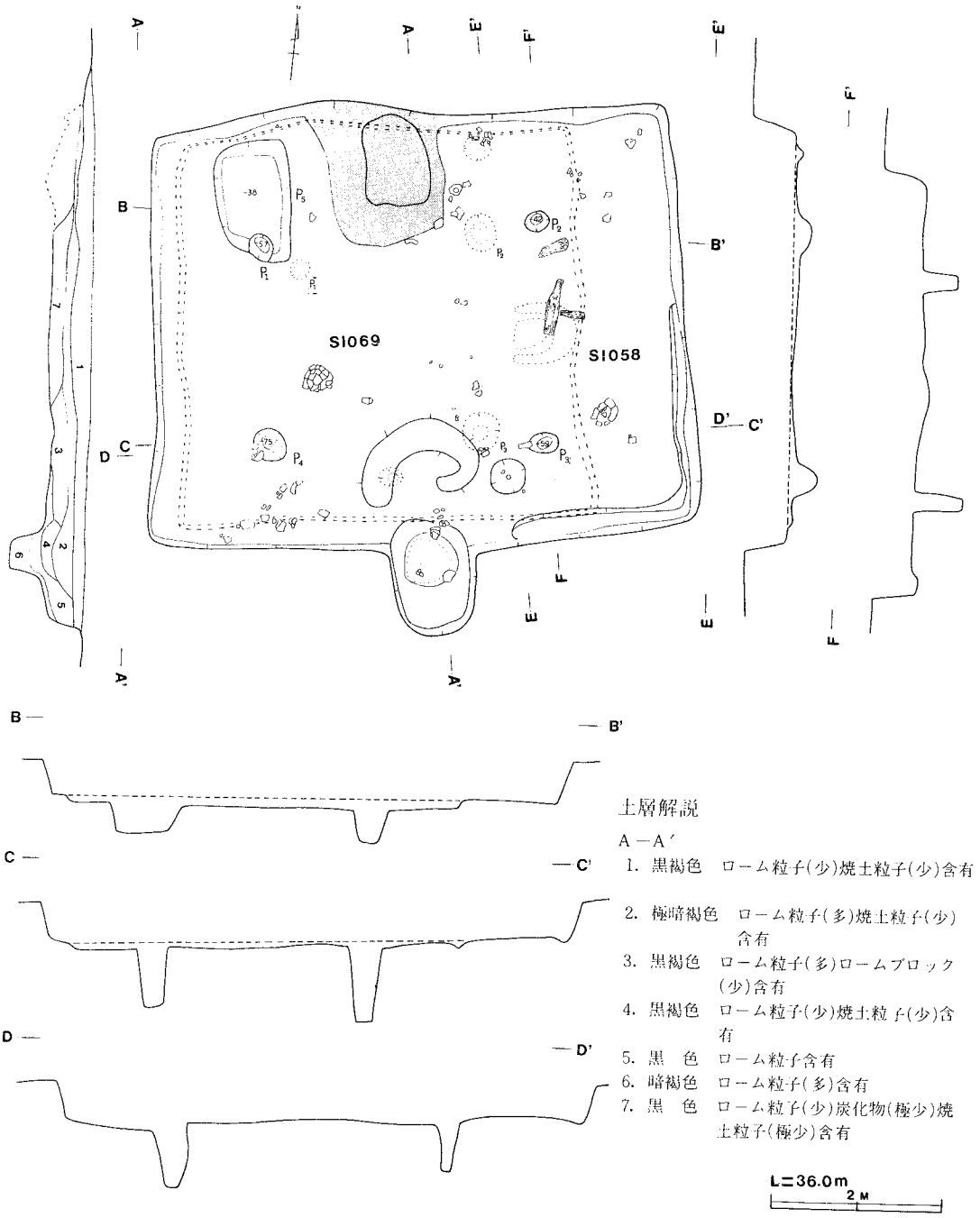
第87図　第57号住居址出土遺物拓影図

第58号住居址（図88～90）

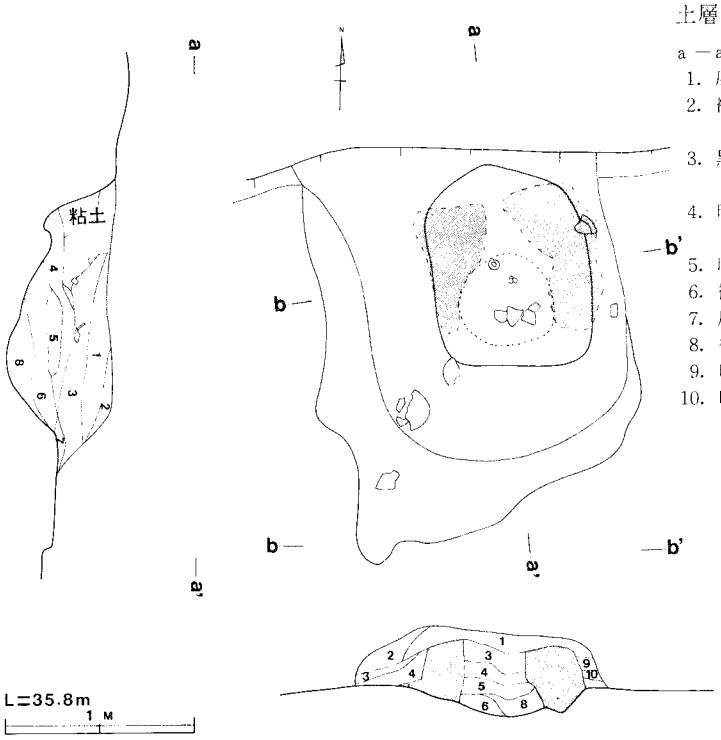
本住居址は，調査区の南西部Ｂ３区ｃ２，ｃ３，ｄ２，ｄ３に確認され，第69号住居址を削平して構築された住居址であり，カマドより南側の床面は貼床で褐色の硬いパカパカの土で固められている。東壁付近の床面から炭化材を出土しているので，本址は火災に遭遇していると思われる。南壁中央には出入口の施設と思われる一段高いベルトが半周し，竪穴住居址外に長辺135cm，短辺102cmのほぼ長方形を呈する張り出しを有し、その上部構造のやや北よりに、長径65cm，短径60cm，深さ35cmの円形を呈する土壙を有している。本住居址の主軸方向はＮ－82°－Ｅで，規模は長軸6.25m，短軸5.10m，面積26.0㎡を測り隅丸長方形を呈し，カマドの南側に不整長方形の貯蔵穴を有している。

壁高は40cm～50cmで壁はほぼ垂直に立ちあがっている。壁下には幅約14cm，深さ８cm内外の壁溝

がカマドと西壁をのぞいて有している。ピットは６個所確認されＰ１～Ｐ４は主柱穴と考えられる。北西コーナーのＰ５は貯蔵穴で規模は長径142cm，短径90cm，深さ38cmの不整長方形を呈している。カマドは北壁の中央部に付設され,規模は長径130cm，短径90cmで北壁を66cm幅で15cm掘り込



第88図　第58・69号住居址実測図



土層解説

a－a′　b－b′

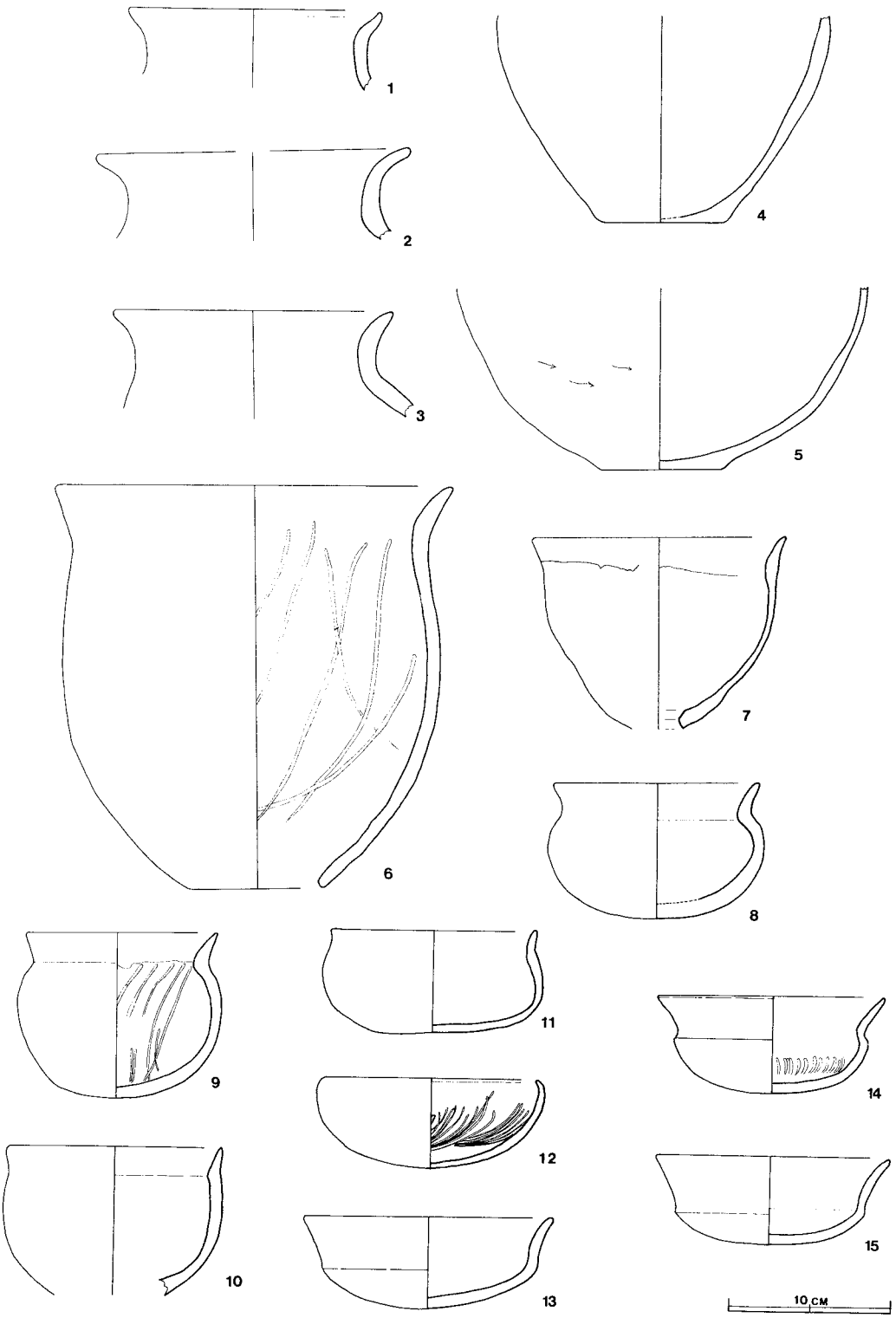
1. 灰褐色　焼土ブロック，ローム粒子含有
2. 褐　色　白色粘土，ローム粒子(多)含有
3. 黒褐色　焼土ブロック，ローム粒子(多)含有
4. 暗赤褐色　焼土ブロック(多)白色粘土，ローム粒子含有
5. 暗赤褐色　焼土含有
6. 褐　色　焼土粒子(多)含有
7. 灰褐色　粘土含有
8. 褐　色　焼けた大ロームブロック含有
9. 暗褐色　粘土含有
10. 暗赤褐色　小石，粘土(少)含有

第89図　第58号住居址カマド実測図

み煙道としている。燃焼部は長径50cm，短径48cm，深さ16cmを測り円形に掘り窪めている。袖部は黒色土混りの砂質粘土で,カマドはやや南東向きに構築されている。燃焼部より完形の椀形土器（図90－８）を出土し,その他破片を数点出土している。

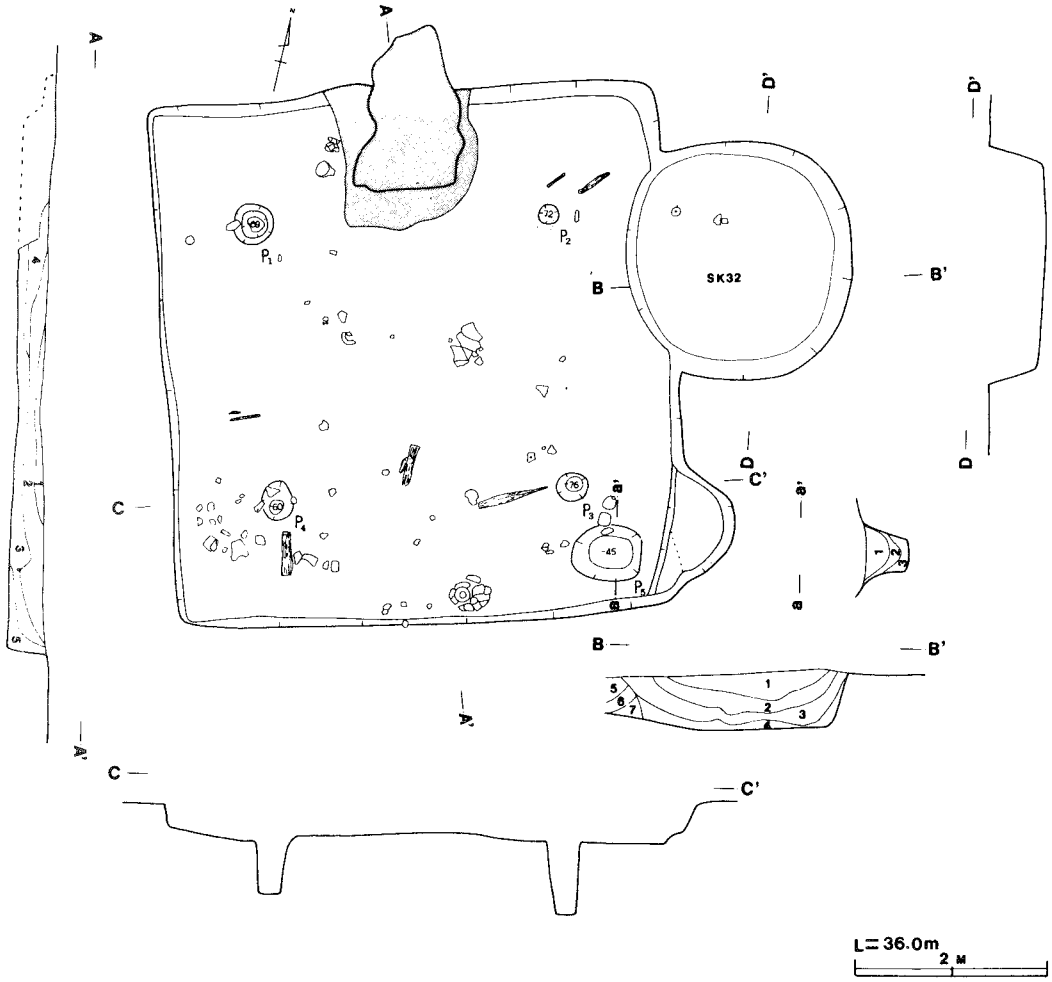
出土遺物は土師器を中心に出土し，須恵器は細片のみである。土師器の完存率の良好なものをあげると，カマドより甕２個体分（図90－１・９），椀（図90－８），坏（図90－15）と北壁付近床面より椀（図90－14）と床面直上により甕口縁部（図90－３）と坏（図90－12）南西コーナーＰ４付近から甕（図90－10）と甕口縁部　（図90－２）中央部床面直上より甑片２個体分（図90－６・７）を出土している。他には丹彩の椀（図90－11），坏（図90－13），甕（図90－４）などの破片を数点と、東部より粘土少量を出土している。

本址は出土遺物等から古墳時代の鬼高期に比定される遺構と思われる。



第90図　第58号住居址出土遺物実測図

第59号住居址（図91～93(1)(2)）



SK32　土層解説
B－B′

1. 黒色　焼土粒子炭化材，ローム粒子含有
2. 黒褐色　ローム粒子，炭化粒子(少)含有
3. 黒褐色　ローム粒子，焼土粒子(微)含有
4. 極暗褐色　ロームブロック，ローム粒子含有
5. 暗褐色　ローム粒子(多)含有
6. 黒褐色　ローム粒子，小ロームブロック
7. 暗褐色　ロームブロック(多)含有

土層解説

a－a′

1. 黒褐色　炭化材，焼土粒子(極少)ローム粒子(多)含有
2. 黒褐色　炭化材，　ローム粒子含有
3. 暗褐色　ローム粒子(極少)含有

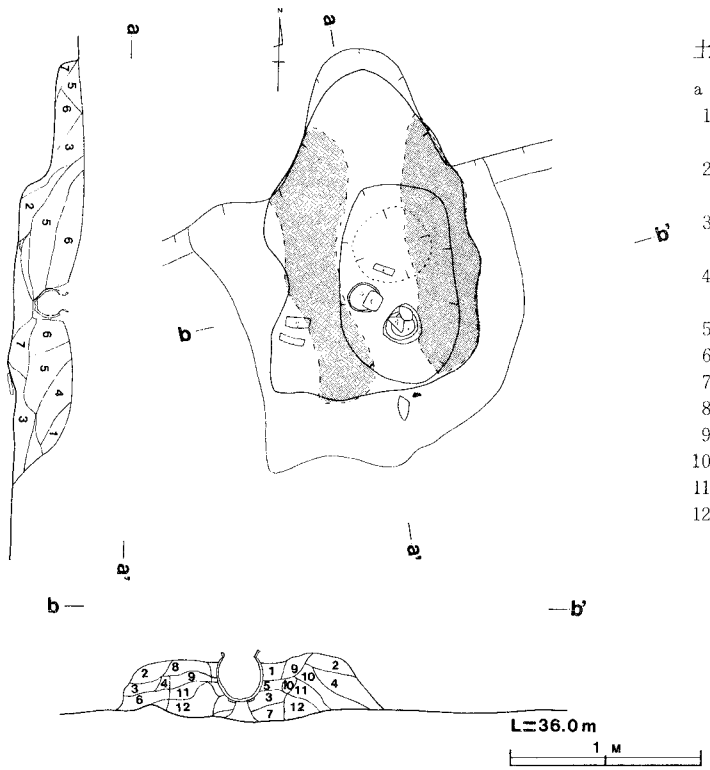
土層解説

A－A′　B－B′

1. 黒褐色　ローム粒子(多)含有
2. 黒褐色　ローム粒子，焼土粒子含有
3. 極暗褐色　ローム粒子(少)炭化材含有
4. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化材含有
5. 黒褐色　ロームブロック(多)炭化材含有

第91図　第59号住居址・第32号土壙実測図

本住居址は調査区の南西部中ほどＤ３区ｅ６，ｅ７，ｆ６，ｆ７，ｇ６に確認され，北東部に第32号土壙が切り込んでいる。本址は第32号土壙より新しい遺構である。南側1.7m には第64号住居址が検出されている。本址の主軸方向はＮ－18°－Ｗで規模は長軸5.42m，短軸5.25m，面積26.5㎡を測り，長方形を呈している。壁高は22cm～56cmほどで壁はやや外傾しながら立ちあがり，壁溝は有していない。床面は暗褐色の貼り床で炭化材をカマド付近や北東部，南部床面一体に出土しているので，本址は火災に遭遇していると思われる。ピットは５個所確認され，Ｐ１～Ｐ４は主柱穴と考えられる。南東コーナーのＰ５は貯蔵穴で,長径72cm，短径58cm，深さ45cmの不整楕円形を呈している。覆土は５層からなり自然堆積の状態を示している。上層は黒褐色土で多量のローム粒子と炭化粒子，焼土粒子を含み，下層は暗褐色土でローム粒子を含んでいる。カマドは北壁の中央に付設され，規模は長径180cm，短径110cmで北壁を98cmの幅で，70cmほど掘り込み煙道部としている。燃焼部は長径42cm，短径40cm，深さ６cmほど円形に掘り窪めている。袖部はほぼ完全な

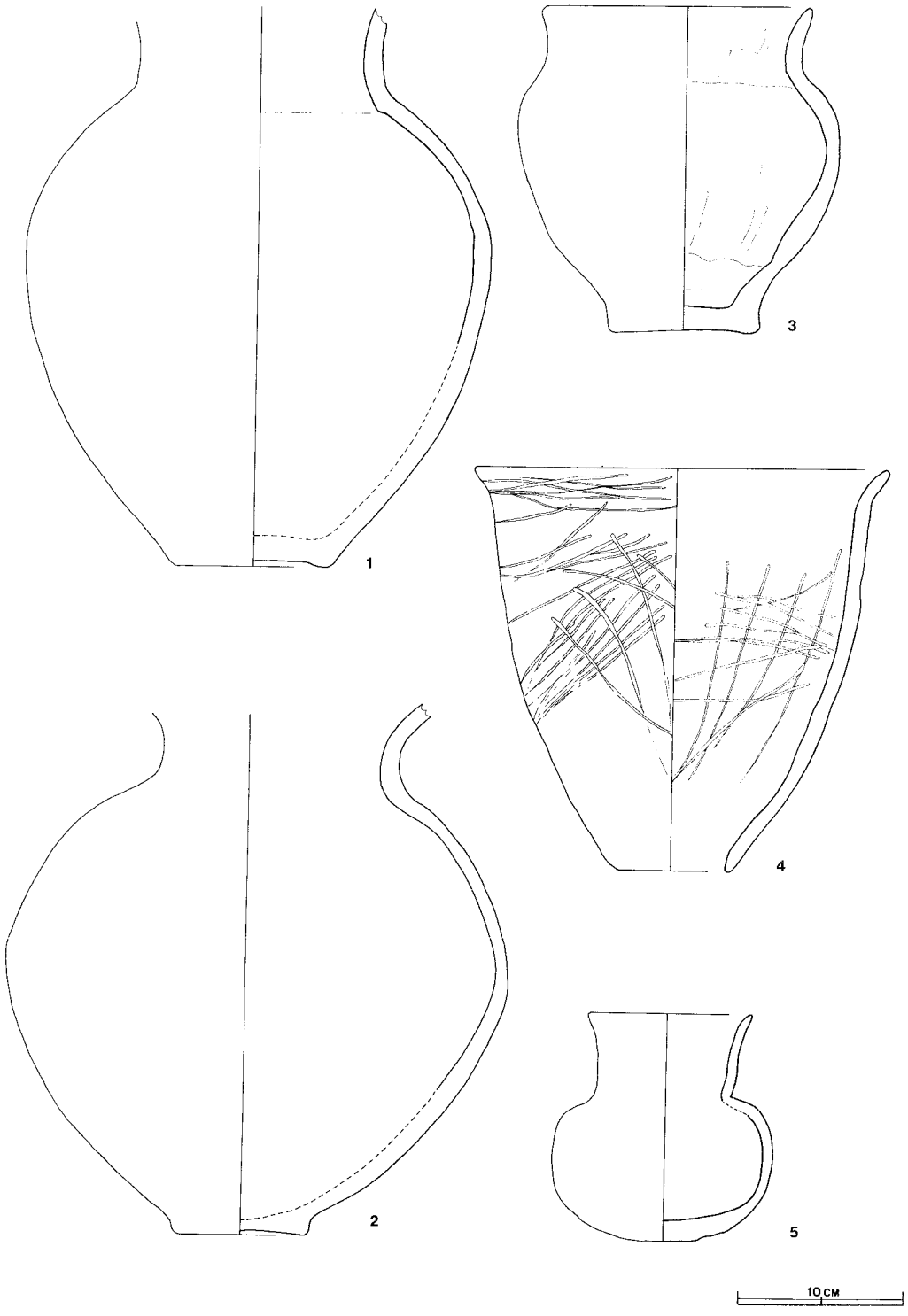


土層解説

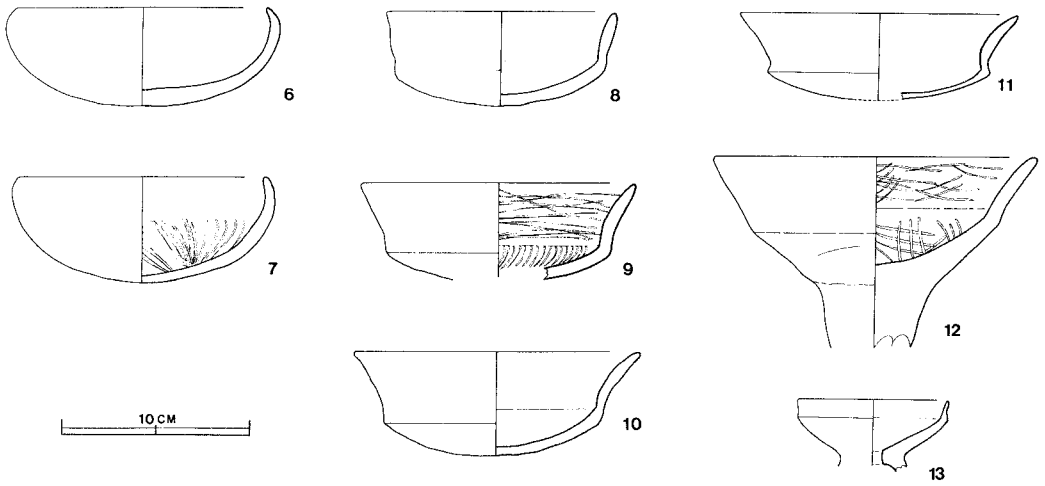
a－a′　b－b′

1. 黒褐色　ローム粒子(多)焼土粒子(少)粘土粒子(極少)炭化材(極少)含有
2. 黒褐色　ローム粒子(多)白色粘土粒子含有
3. 暗褐色　ローム粒子(多)焼土粒子(極少)含有
4. 黒褐色　ローム粒子(多)ローム粒子(極少)含有
5. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化材含有
6. 褐　色　ローム粒子，砂粒子含有
7. 褐　色　ローム粒子(多)灰(多)含有
8. にぶい黄褐色　砂質の粘土
9. 暗褐色　砂質粘土，ローム粒子含有
10. 暗褐色　砂質粘土(多)含有
11. 暗褐色　ローム粒子 焼土粒子含有
12. 暗褐色　ローム粒子，焼土粒子含有

第92図　第59号住居址カマド実測図



第93図(1)　第59号住居址出土遺物実測図



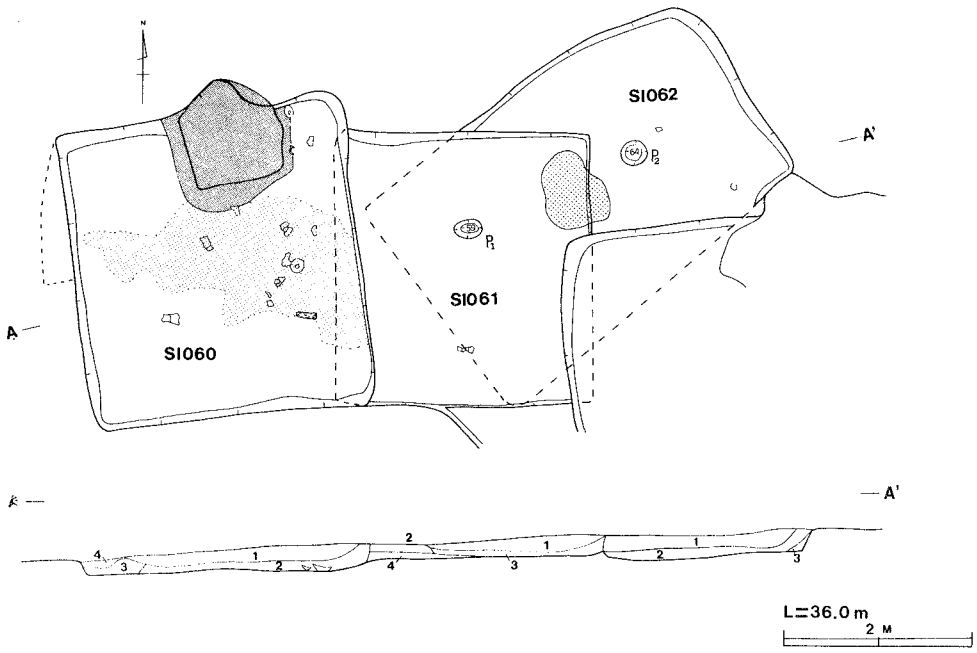
第93図 (2)　第59号住居址出土遺物実測図

形で検出され，黒色土混りの砂質粘土でカマドは南東向きに構築されている。燃焼部から多量の灰と大型の壺形土器（図93－１）と甕破片を出土している。器台（図93－13）のこわれたものを支脚として利用し，甕の中へスッポリと甕が入っているものをのせて出土している。外測の甕は接合不可能と思われるほど壊れていた。

出土遺物は土師器が中心で須恵器はカマド内より坏が出土したものの他は，坏，壺などの破片を数点出土しただけである。土師器の完存率の良好なものをあげると，カマド際から甕２個体分（図93－２・３），壺（図93－５），高坏（図93－12），坏を北壁付近床面直上から坏（図93－７）と，南壁中央部床面より坏（図93－９），南東コーナーＰ５付近床面や床面直上から坏３個（図93－６・８・11），西壁北より床面から坏，中央部床から甑片（図93－４），床面直上から坏（図93－10）を出土し，他に甑，高坏，甕，坏などの破片を多数出土している。その他の出土遺物は砥石，鉄滓等を出土している。本址は古墳時代鬼高期に比定される遺構と思われる。

第60号住居址（図94～96）

本住居址は，調査区の南西端Ｂ３区ｇ３，ｈ３に確認され東部は第61号住居址と複合している。本址は第61号住居址より新しい遺構である。本址の主軸方向はＮ－8°－Ｗで規模は長軸3.15m，短軸2.72m で面積8.5m² を測り，長方形を呈している。　　第61号住居址の床面を約５cmほど掘り込んで構築している。壁高は10～15cmほどで壁はやや直立ぎみに立ちあがって壁溝は有さない。床面は褐色を呈し中央部からカマド付近は硬く，その他は全体的に軟らかい。床面からは柱穴と思われるものは検出されなかった。焼土が床面中央部から東壁にかけて分布しており，東壁際からは炭化材を出土しているので，本址は火災に遭遇していると思われる。

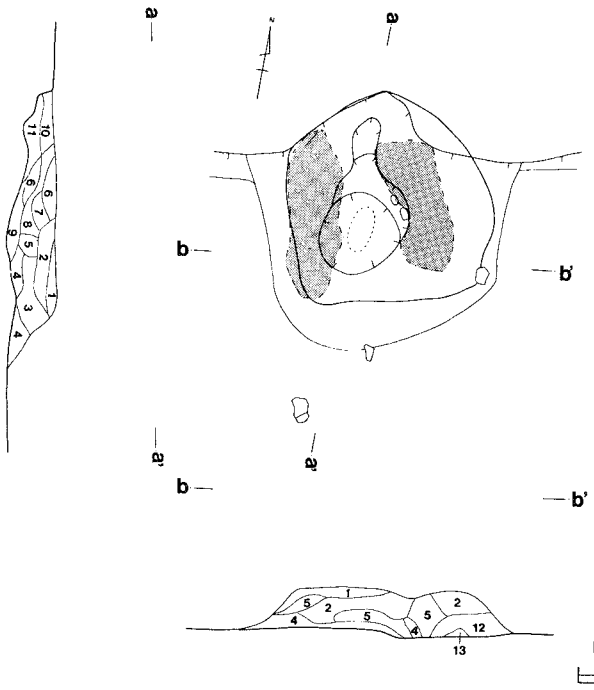


土層解説

A－A′

1. 黒褐色　焼土粒子，ローム粒子含有
2. 黒褐色　焼土粒子，炭化材，白色砂質含有
3. 黒褐色　ローム粒子(少)含有
4. 暗褐色　ローム粒子(多)含有

第94図　第60·61·62号住居址実測図



土層解説

a－a′ b－b′

1. 黒褐色　ローム粒子，焼土粒子(極少)含有
2. 極暗褐色　ローム粒子，白色粘土粒子(極少)含有
3. 黒褐色　ローム粒子，焼土粒子(少)含有
4. 暗褐色　ローム粒子，ロームブロック焼土粒子(極少)含有
5. 黄灰色　ロームブロック(極少)含有
6. 極暗赤褐色　砂質まじりの粘土が焼けている
7. 暗赤褐色　焼土粒子(多)砂質粘土含有
8. 黒褐色　焼土ブロック，ロームブロック(極少)含有
9. 暗褐色　焼土ブロック，ロームブロック含有
10. 褐　色　焼土粒子(極少)含有
11. 褐　色
12. 暗褐色　ローム粒子，焼土粒子，白色の砂含有
13. にぶい黄褐色　砂質

第95図　第60号住居址カマド実測図

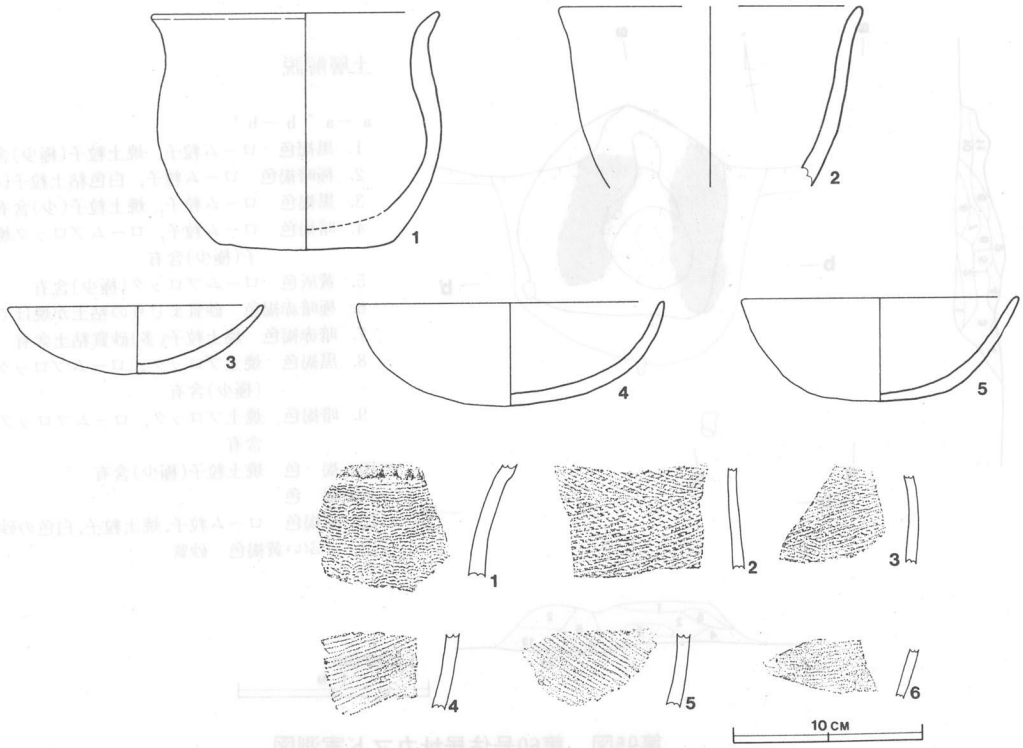
覆土は，4層からなり自然堆積の状態を示している。上層は黒褐色土で焼土粒子を含み，下層は黒褐色土で焼土粒子，炭化粒子，白色粘土を含んでいる。カマドは，北壁の中央から東よりに付設され，規模は長径95cm，短径85cmで北壁を79cm幅で32cmほど掘り込み煙道としている。燃焼部は長径42cm，短径40cm，深さ6cmで円形に掘り窪めている。袖部は黒色土混りの砂質粘土でカマドはほぼ南向きに構築されている。燃焼部と思われるところから5cm～7cmの厚さの焼土を検出し，その上部から鉢や甕などの破片を数点出土している。

出土遺物は土師器が主で，須恵器は破片を数点出土しているのみである。土師器の完存率の良好なものをあげると，カマド際より坏2個（図95－3・4），東壁付近床面より内黒坏（図95－5），中央部床面直上より鉢（図95－1），南西部より鉢（図95－2）を出土し，他は椀，坏などの破片を数点出土している。

本址は出土遺物等から古墳時代の鬼高期に比定される遺構と思われる。

第62号住居址（図94・96）

本住居址は，調査区の南西部D3区g4，h4に確認され，南西部の約45％は第61号住居址に削除され，南東部は第63号住居址の北西コーナーに削除されている。本址は第61号住居址，第63号住居址より古い遺構である。本址の主軸方向はN－49°－Eで，規模は長軸3.97m，短軸2.70mを測り長方形の平面形を呈している。北西壁と北東壁は残存し，壁高は20～25cm内外で壁はやや外傾して立

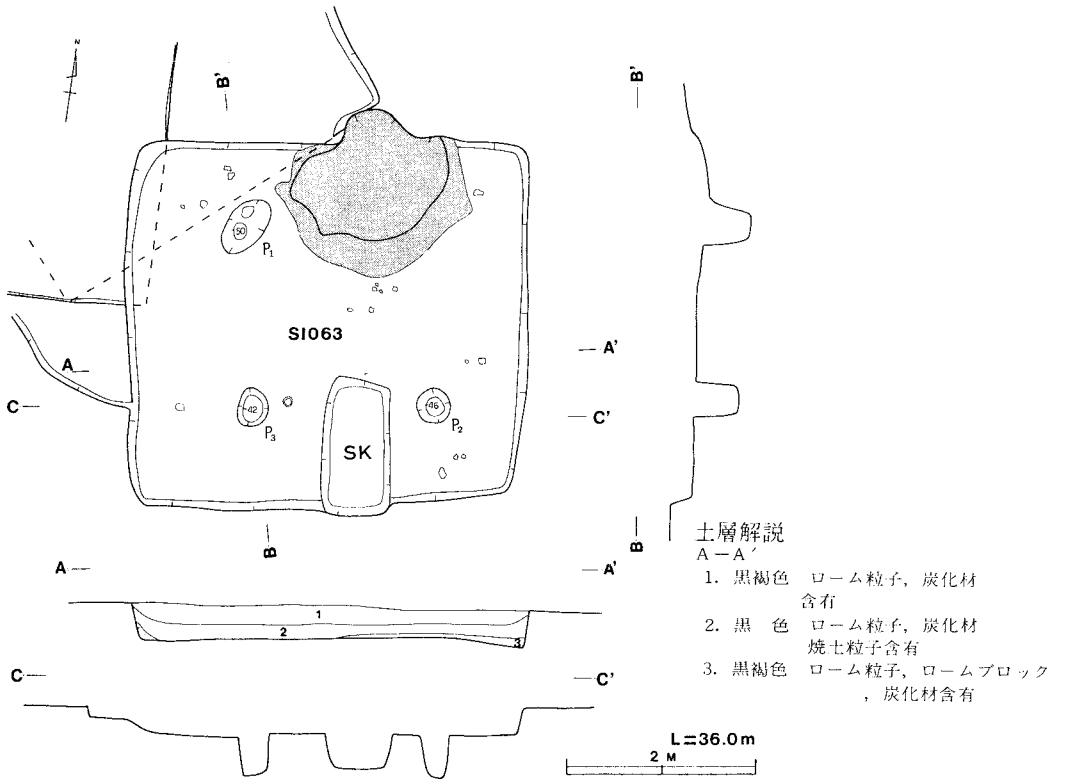


第96図　第60・62号住居址出土遺物実測・拓影図

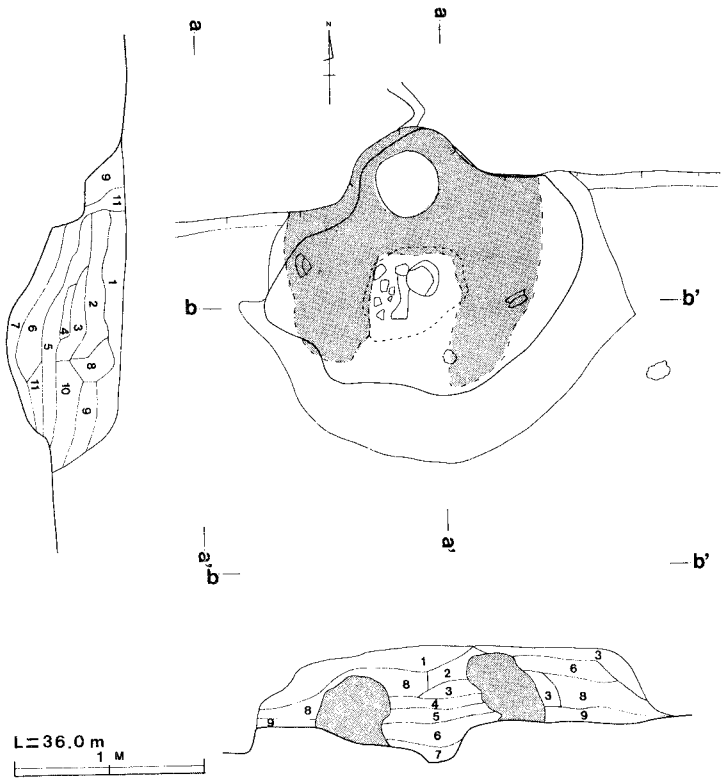
ち上がっている。床面は平坦で炉址付近は硬い。主柱穴は炉址の東西に２個所検出されている。覆土は２層からなり黒褐色土で自然推積の状態を示している。炉址は中央よりやや北に付設され，第61号住居址の床面下に半分ほどかかって削平され，規模は長径82cm，短径68cmほどの焼土と黒色土の広がりを確認した。出土遺物は弥生式土器片を数点出土したのみであるが，本址は弥生時代後期に比定される遺構と思われる。

第63号住居址（図97～99）

本住居址は調査区の南西の端Ｄ３区ｇ４，ｇ５，ｈ４，ｈ５に確認され，北西コーナーは第62号住居址が南部中ほどに長辺145cm，短辺72cm，深さ35cmの土壙が切り込んでおり，本址は第62号住居址より新しい遺構である。北西1.4m　は第64号住居址が検出されている。本址の主軸方向はＮ－10°－Ｗで,規模は長軸4.18m,短軸3.70m,面積14.4㎡の隅丸長方形を呈している。壁高は23～31cmほどであり，壁は直立ぎみに立ちあがっている。壁溝は有さない。床面は全体的に貼床であり，南側はやや高くなり,暗褐色で非常に硬いピットは４個所検出され，Ｐ１～Ｐ３は主柱穴と考えられる。



第97図　第63号住居址実測図



土層解説

a－a′　b－b′

1. 黒褐色　焼土粒子，ローム粒子白色の砂含有
2. にぶい赤褐色　白色の砂を含む粘土
3. 暗褐色　白色の砂を多く含む粘土
4. 暗赤褐色　焼土
5. 極暗赤褐色　焼土粒子(多)含有
6. 暗褐色　ローム粒子，焼土粒子砂(多)含有
7. 褐　色　ロームブロック含有
8. 極暗褐色　ローム粒子，焼土粒子，砂(多)含有
9. 黒褐色　ロームブロック，焼土粒子含有
10. 黒褐色　ローム粒子，焼土粒子，白色の砂含有
11. にぶい黄褐色　砂質の土で一部に粘土

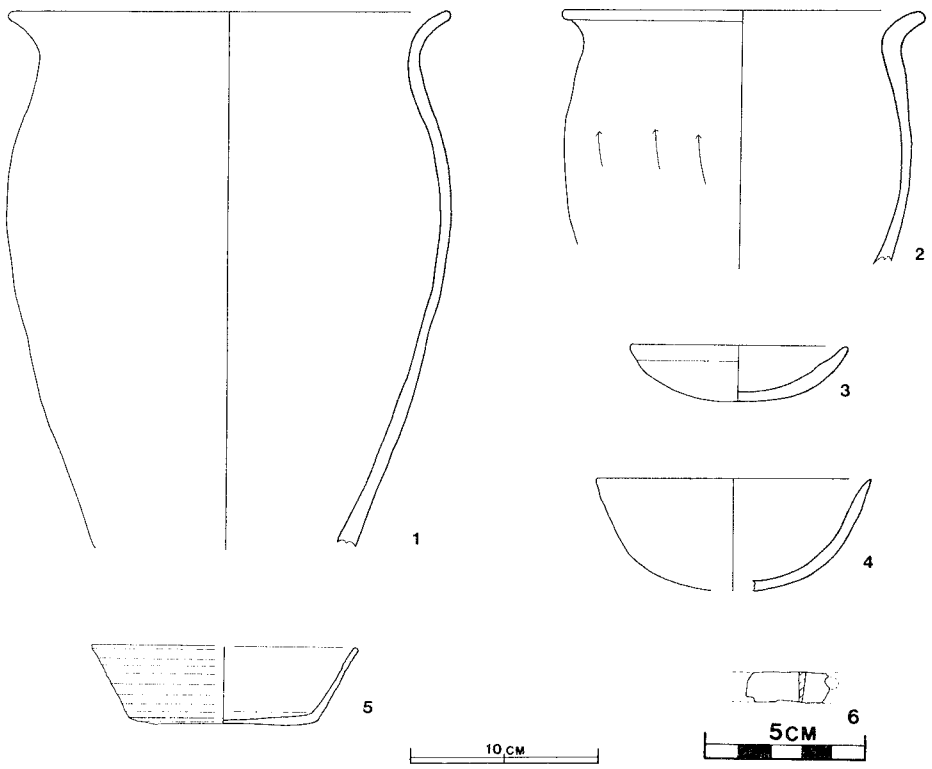
第98図　第63号住居址カマド実測図

覆土は自然堆積の状態を示し，上層は黒褐色土でローム粒子，炭化粒子を含み，下層は黒色土・黒褐色土でローム粒子，炭化粒子，焼土粒子，ロームブロックを含んでいる。カマドは北壁中央よりやや東側に付設され，規模は長径115cm，短径90cmほどで,北壁を105cm幅で,43cmほど掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径55cm，短径45cm，深さ18cmで不整円形に掘り窪めている。燃焼部から土師器片を数点出土している。袖部は黒色土混り砂質粘土で，カマドはやや南東向きに構築されている。

出土遺物は土師器を中心に須恵器を共伴して出土している。土師器の完存率の良好なものをあげるとカマドから坏（図99－３・５),甕片（図99－２)を,南コーナーのＰ３付近床面直上から坏（図99－４），中央部床面直上から甕片（図99－１）を出土し，他に甕，坏などの破片を数点出土している。須恵器はカマドから墳などの破片を数点出土している。その他,鉄製品１片を出土した。本址は出土遺物等から真間期に比定される遺構と思われる。

第64号住居址（図100～102)

本住居址は調査区の南西部Ｄ３区ｆ６，ｇ５，ｇ６に確認され，北側1.9m には第59号住居址が南西部1.4m には第63号住居址が検出されている。本住居址の主軸方向はＮ－101°－Ｗで,規模は

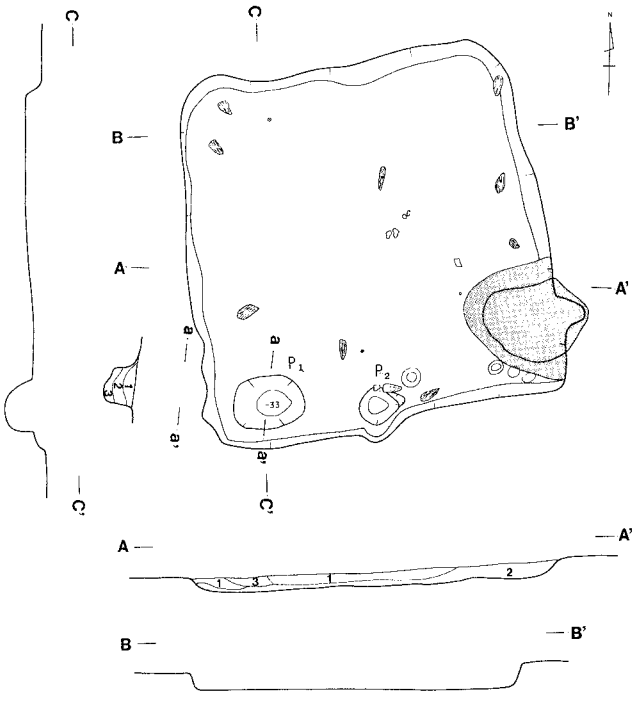


第99図　第63号住居址出土遺物実測図

長軸3.88m，短軸3.80m，面積12.8㎡ほどで隅丸正方形を呈している。壁高は南西側で12㎝～22cm，北東側で20㎝～23cmほどでやや外傾しながら立ちがっている。床面全体から炭化材を出土しているので，本址は火災に遭遇しているものと思われる。床面は焼けて硬くボロボロしている。南西コーナーのＰ１は貯蔵穴と思われ規模は長径75cm，短径57cm，深さ33cmほどで楕円形を呈している。覆土は浅いが３層からなり自然堆積の状態を示している。上層は黒色土でローム粒子と多土粒子と多量の炭化粒子を含み，下層は黒褐色土で多量のローム粒子と焼土粒子，炭化粒子を含んでいる。カマドは南東コーナー付近に付設され，規模は長径115cm,短径90cm,東壁を37cm幅で26cmほど掘り込み煙道としている。燃焼部は長径32cm，短径25cm，深さ４cmで円形に掘り窪められ焼土が約10cmほど堆積していた。袖部は黒色土混りの砂質粘土でカマドは西向きに構築されている。

燃焼部より壺形土器の口縁部を出土し，袖部付近より坏形土器完形品（図102－１）を出土している。

出土遺物は土師器を中心に出土し，完存率の良好なものをあげると，南東壁際よりの床面から椀（図102－３），中央部床面直上から坏（図102－２），南壁床面直上から坏（図102－４）を



土層解説

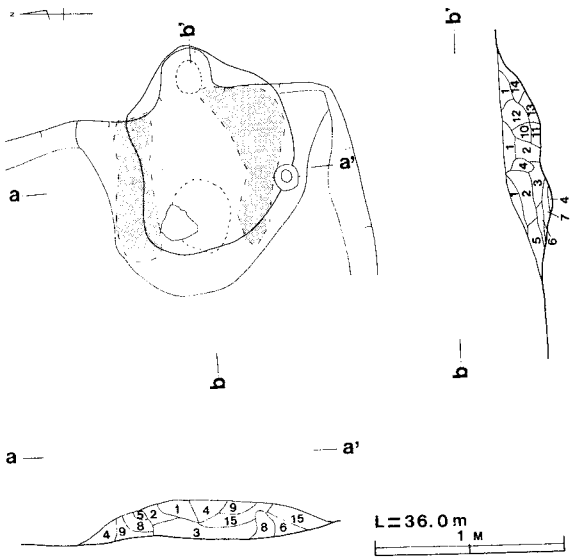
a —a ′

1. 黒褐色　ローム粒子(少)炭化材含有
2. 暗褐色　ローム粒子，炭化材含有
3. 褐　色　ローム粒子含有

A —A ′

1. 黒　色　ローム粒子，焼土粒子，炭化粒子(多)含有
2. 黒褐色　ローム粒子(多)焼土粒子，炭化材含有
3. 極暗褐色　ローム粒子(多)焼土粒子炭化粒子含有

第100図　第64号住居址実測図



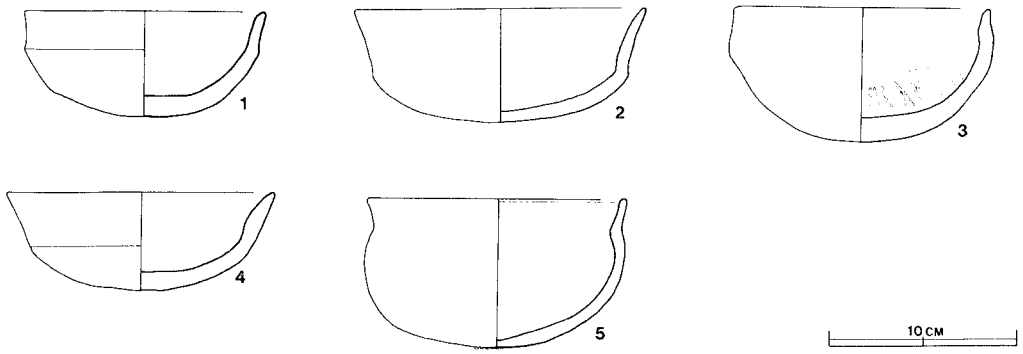
土層解説

a —a ′　b —b ′

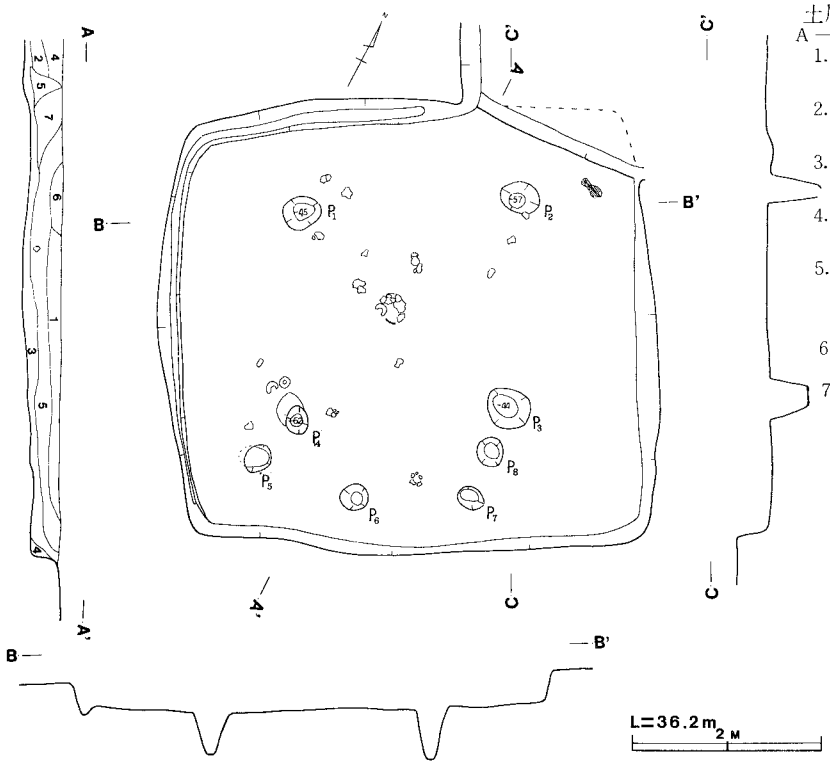
1. 黒褐色　ローム粒子，焼土粒子(少)含有
2. 黒褐色　ローム粒子(少)焼土粒子(多)炭化材含有
3. 暗赤褐色　焼土粒子(多)炭化材(少)含有
4. 暗褐色　ローム粒子(多)焼土粒子(少)含有
5. 極暗褐色　ローム粒子，焼土ブロック(少)含有
6. 暗褐色　ローム粒子，焼土粒子含有
7. 暗赤褐色　焼土含有
8. 灰黄褐色　粘土，焼土粒子含有
   黒褐色　ローム粒子，粘土(多)含有
10. 黒褐色　焼土粒子，ロームブロック含有
11. 極暗褐色　ローム粒子(多)焼土粒子(少)含有
12. 極暗褐色　粘土ブロック(多)焼土ブロック(少)含有
13. 暗褐色　焼土ブロック，ローム粒子(多)含有
14. 褐　色
15. 暗褐色　焼土ブロック(多)ローム粒子含有

第101図　第64号住居址カマド実測図

出土し，他は坏片，甕などの破片が出土している。その他の出土遺物は，紡錘車１点を床直上から出土している。本址は出土遺物等から古墳時代鬼高期に比定される遺構と思われる。

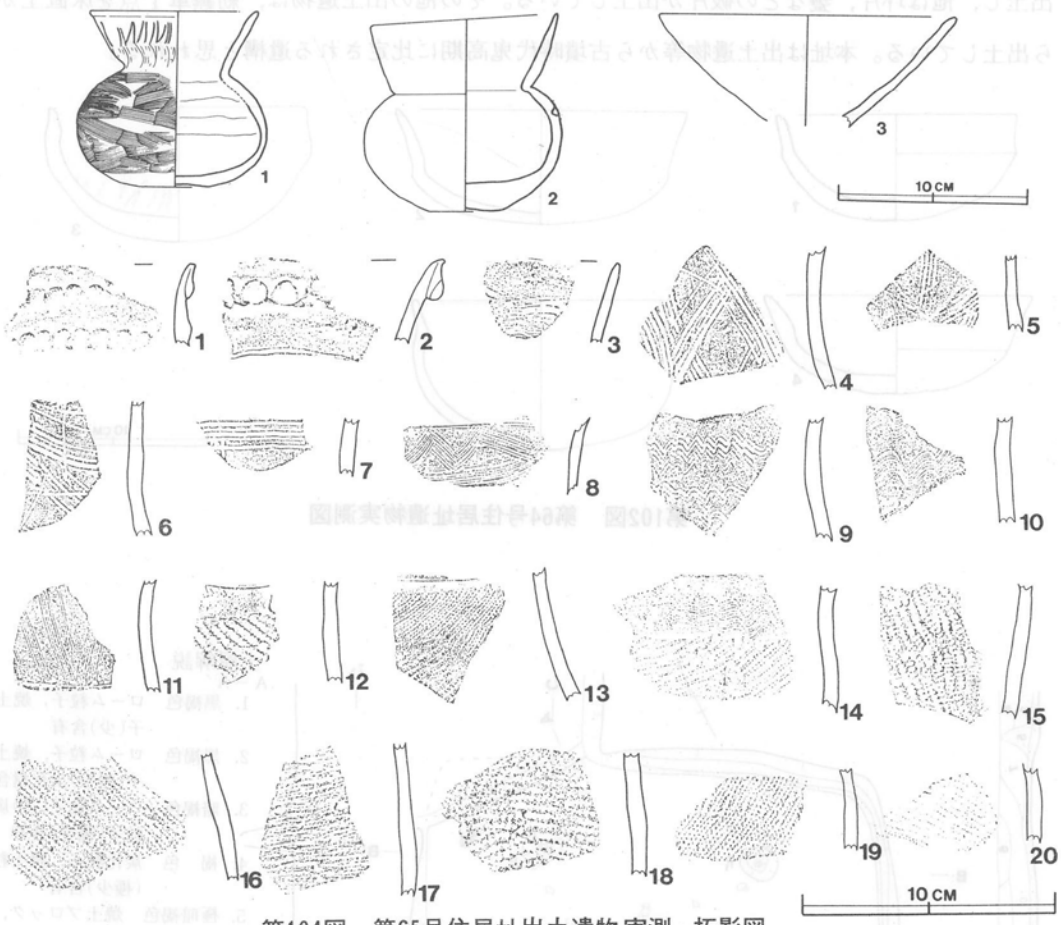


第102図　第64号住居址遺物実測図



土層解説
A－A′
1. 黒褐色　ローム粒子，焼土粒子(少)含有
2. 黒褐色　ローム粒子，焼土粒子(極少)炭化材含有
3. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(極少)含有
4. 褐　色　炭化粒子，焼土粒子(極少)含有
5. 極暗褐色　焼土ブロック，炭化材，ローム粒子含有
6. 黒　色　ローム粒子含有
7. 黒褐色　ローム粒子(多)焼土粒子，炭化粒子 含有

第103図　第65号住居址実測図



第104図　第65号住居址出土遺物実測・拓影図

第65号住居址（図103・104）

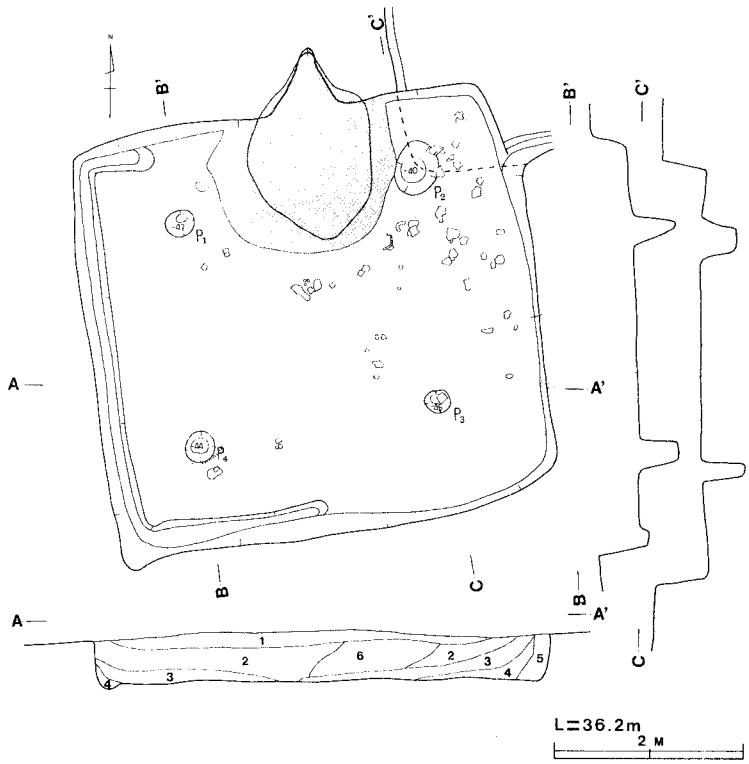
本住居址は，調査区の南中央部Ｄ３区ｄ８，ｄ９，ｅ８，ｅ９に確認され，北東コーナーは第67号住居址の南西コーナーによって切られているので本址は第67号住居址より古い遺構である。南東0.3m には第66号住居址が,南西0.4m には第32号住居址が検出されている。本址は隅丸長方形の平面形を呈し，主軸方向はＮ－31.5°－Ｗで,規模は長軸5.22m，短軸4.84m，面積21.2㎡を測る。壁高は16cm～35cmを測り,壁は外傾して立ちあがっている。壁下には西壁と北壁に幅12cm，深さ７cm内外の壁溝を有している。床面は褐色で平坦であり硬い。北東コーナー付近床面より炭化物を検出しているので,本址は火災に遭遇していると思われる。ピットは８個所確認されＰ１～Ｐ４は主柱穴と考えられる。貯蔵穴と炉址は検出されなかった。覆土は５層からなり，自然堆積の状態を示し確認面から中央床面に向って流れこんでいる。上層は黒褐色土で多量のローム粒子を含み，中層は極暗褐色土で多量のローム粒子と炭化粒子と壁際にはロームブロックを含み，下層は、暗褐色土で多量のローム粒子を含んでいる。出土遺物は土師器を中心に北壁中ほど床面直上より坩（図104－１)北西コーナーの床面直上から高坏片（図104－３),南西コーナーP4　付近床面直上から

坩（図104－２）を出土している。他は甕，壺，丹彩の坩などの細片を少数出土している。その他の出土遺物は覆土から弥生式土器の長岡系に比定される口縁部などの破片を数点出土している。

本址は出土遺物等から和泉期に比定される遺構と思われる。

第66号住居址（図105～107）

本住居址は，調査区の南部中ほどＤ３区ｄ９，ｄ０，ｅ９，ｅ０に確認され，本址の北東コーナが第68号住居址の南西コーナー部に切り込んでいるので，本址は第68号住居址より新しい遺構

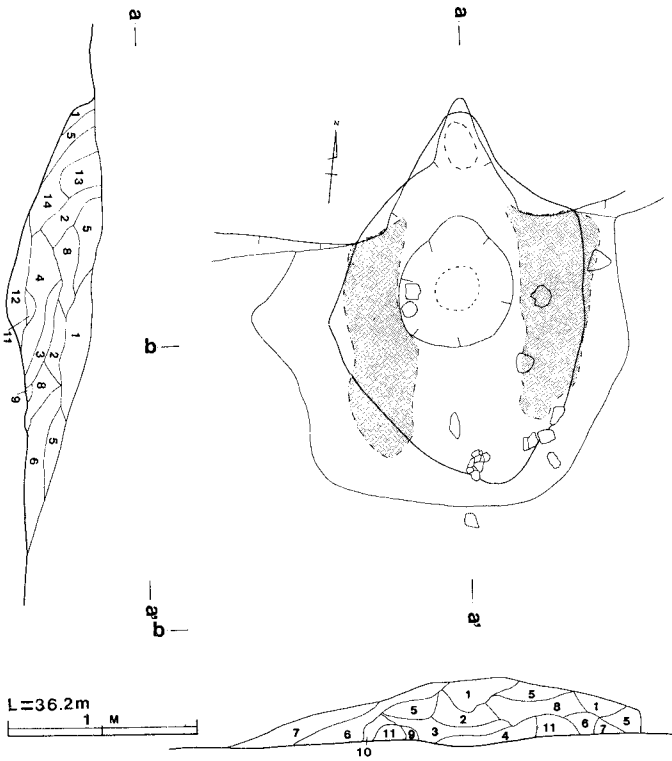


土層解説

A－A′

1. 極暗褐色　ローム粒子，焼土粒子(極少)含有
2. 黒褐色　ローム粒子(多)焼土粒子，炭化粒子(少)含有
3. 暗褐色　ローム粒子(多)焼土粒子(少)含有
4. 暗褐色　ローム粒子(多)焼土粒子(少)含有
5. 黒褐色　炭化材(多)含有
6. 黒褐色　ローム粒子(少)含有

第105図　第66号住居址実測図

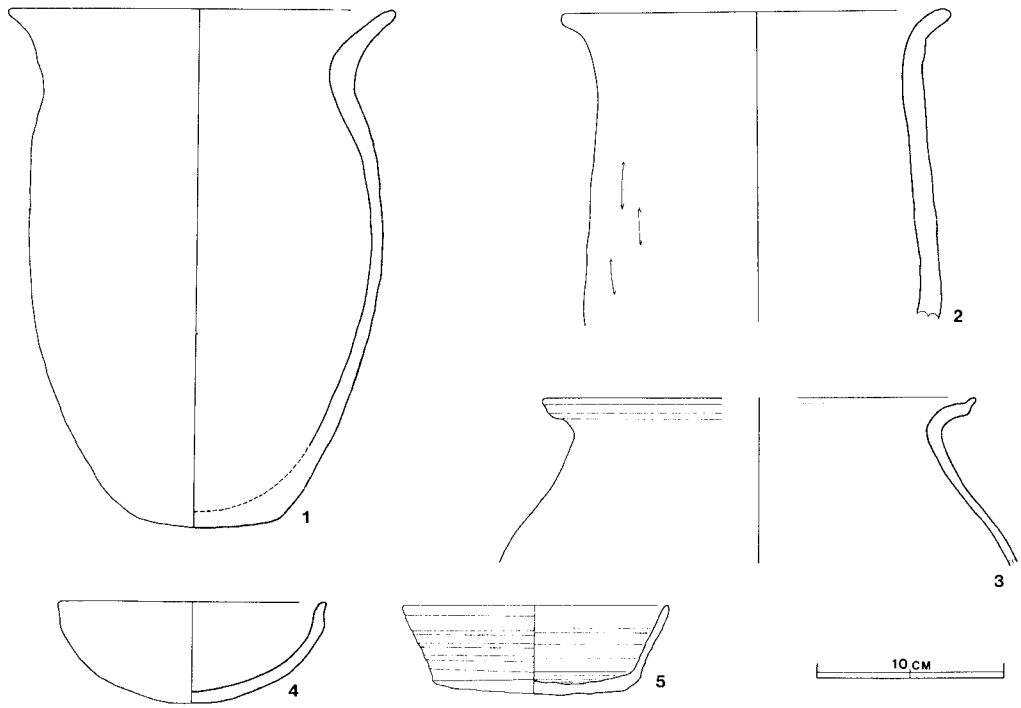


土層解説

a －a′　b －b′

1. 暗褐色　ローム粒子，白色粘土，焼土粒子(少)含有
2. 極暗褐色　粘土ブロック(多)含有
3. 黒褐色　粘土
4. 暗赤褐色
5. 暗褐色　ローム粒子，焼土粒子，粘土粒子含有
6. 黒褐色　粘土粒子(多)含有
7. 黒褐色　ローム粒子，粘土粒子(少)含有
8. 灰黄褐色　粘土ブロック(多)含有
9. 赤褐色
10. 褐　色　砂(多)，粘土含有
11. 灰黄褐色　粘土
12. 暗赤褐色　焼土
13. 褐　色　砂質で焼土粒子含有
14. 褐　色　砂質で焼土粒子含有

第106図　第66号住居址カマド実測図



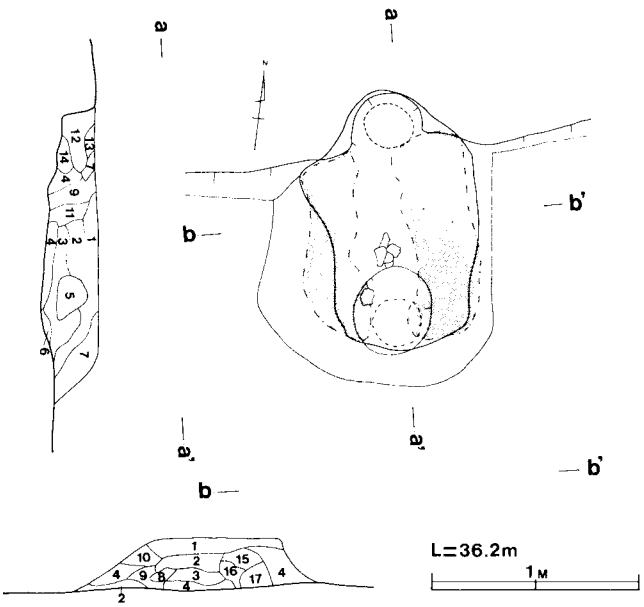
第107図　第66号住居址出土遺物実測図

である。本址は隅丸長方形の平面形を呈し，主軸方向はＮ－８°－Ｗで，規模は長軸4.74m，短軸4.45m，面積18.5㎡を測る。壁高は約45cmであり，壁はやや外傾しながら立ちあがっている。壁下には幅８cm，深さ10cm内外の壁溝がほぼ全体に廻っている。床面は暗褐色土でやや硬く，特にカマド前面が硬い。床面から炭化材を出土しているので火災に遭遇していると思われる。ピットは４個所確認されＰ１～Ｐ４は主柱穴と考えられる。覆土は８層からなり，全体的に黒褐色土で，上層は多量のローム粒子と焼土粒子，ロームブロックを含み，下層は多量のローム粒子，極少量の焼土粒子を含んでいる。カマドは北壁の中央から東よりに位置し，規模は長径180cm，短径132cmで，北壁を73cm幅で，60cm程掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径62cm，短径58cm，深さ５cmで円形に掘り窪めている。燃焼部より土師器片を数点出土している。袖部は黒色土混りの砂質粘土でカマドはやや南東向きに構築されている。出土遺物は土師器の甕片を多数出土し，その完存率の良好なものをあげると，東壁付近床面から甕（図107－１），カマド付近床面直上より坏（図107－４）を出土し，他には，甕（図107－２・３）と壺などの破片を多数出土している。須恵器も共伴しており数は少ない。床面より坏（図107－５）を出土し，他は坏，蓋などの細片を数点出土している。

本址は出土遺物等から真間期に比定される遺構と思われる。

第67号住居址（図108～110）

本住居址は，調査区の南中央部Ｄ３区ｂ９，ｂ０，Ｃ８，ｃ９，ｄ８，ｄ９に確認され，北西コーナーには第３号井戸状遺構が，南西コーナーには第65号住居址が切り込んでいる。本址は第65

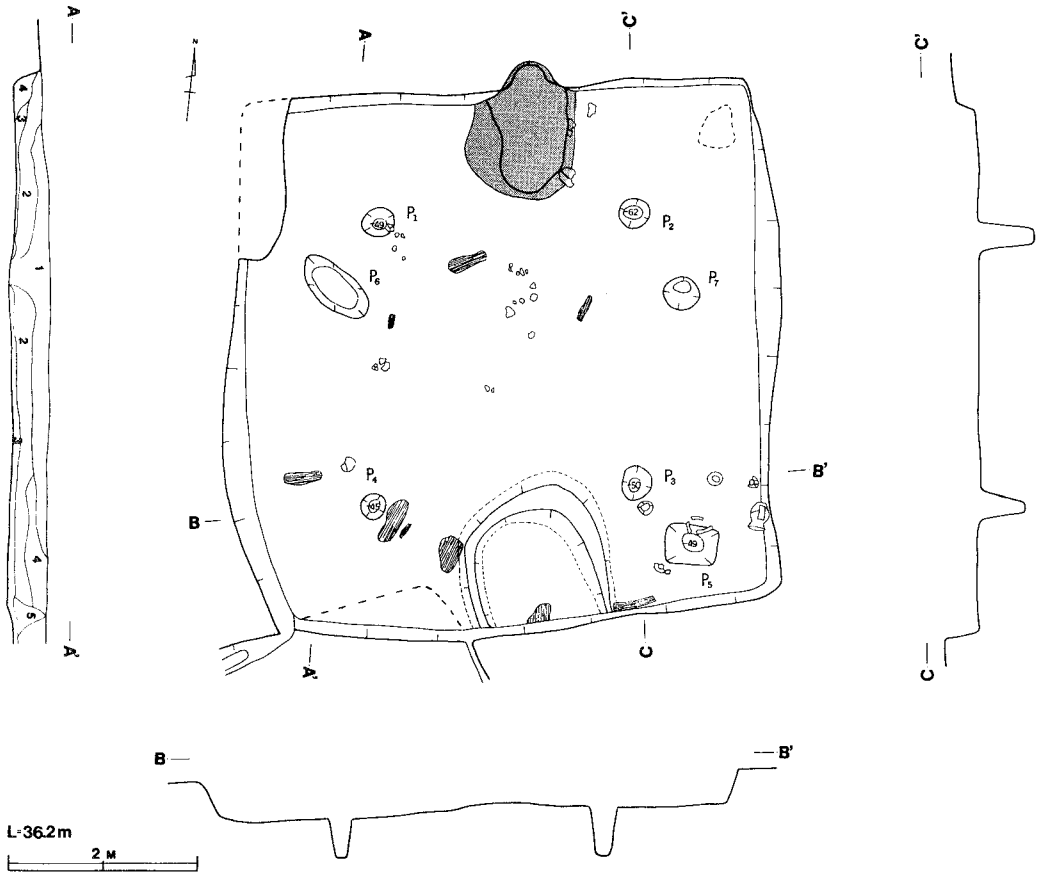


土層解説
ａ－ａ′　ｂ－ｂ′
1. 暗褐色　ローム粒子，粘土粒，焼土粒子（少）含有
2. 暗褐色　ローム粒子，焼土ブロック，粘土（少）含有
3. 極暗褐色　ローム粒子，焼土ブロック，粘土ブロック，含有
4. 褐色　ローム粒子（多），焼土ブロック（少）含有
5. 極暗赤褐色　灰土
6. 暗赤褐色　焼土
7. 暗褐色　ローム粒子（多）含有
8. 暗赤褐色　焼土ブロック（少）含有
9. 灰褐色　粘土
10. 赤褐色　粘土の焼土
11. 暗褐色　焼土ブロック，粘土ブロック（多）含有
12. 黒色
13. 黒褐色　ローム粒子，焼土粒子含有
14. 褐色
15. 褐色　粘土粒（多），焼土粒子（少）含有
16. 極暗赤褐色　粘土に焼土が混合
17. にぶい褐色　粘土

第108図　第67号住居址カマド実測図

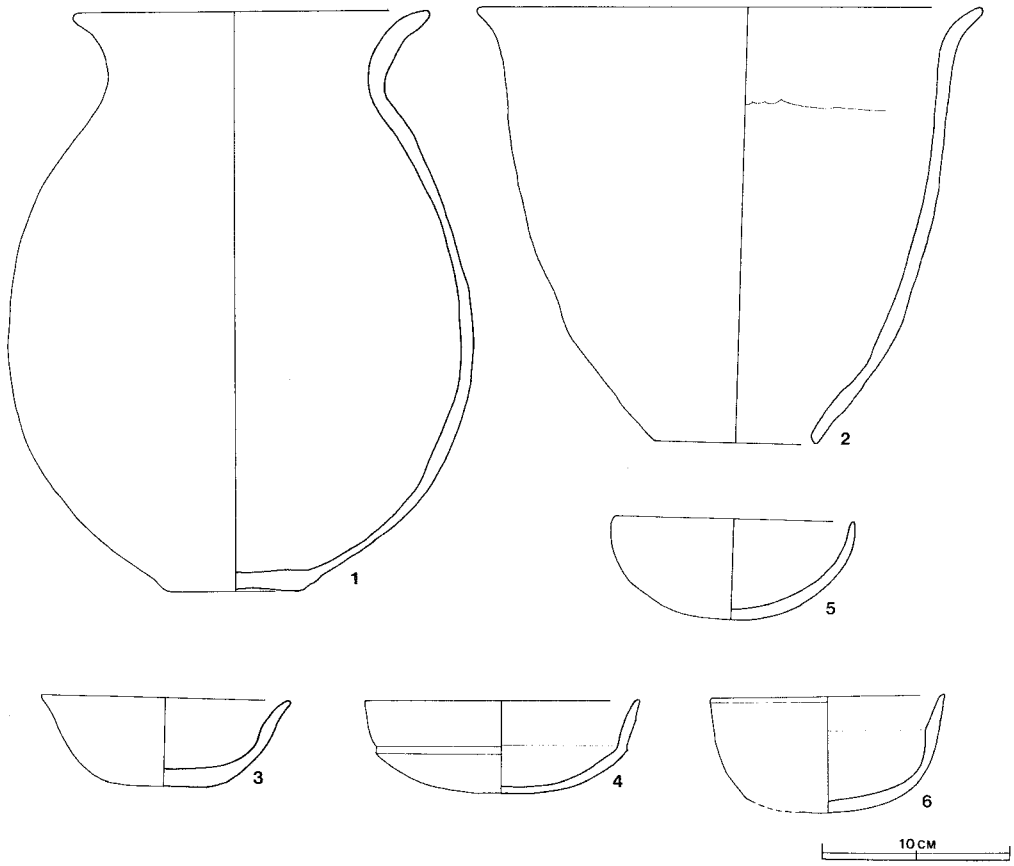
号住居址と第３号井戸状遺構より古い遺構である。

北東0.7m には第48号住居址が，南東0.8m には第68号住居址が検出されている。本住居址は隅丸長方形の平面形を呈しており，主軸方向はＮ－16°－Ｗで，規模は長軸5.82m，短軸5.63m 面積29.3㎡を測り，壁高は23～39cm程であり，壁は外傾して立ちあがっている。床面は，中央部付



土層解説
A－A′
1. 黒褐色　ローム粒子，焼土粒子(微)含有
2. 黒褐色　ローム粒子，焼土粒子(微)，炭化材含有
3. 暗褐色　ローム粒子(多)，炭化粒子(微)含有
4. 褐　色　炭化粒子，焼土粒子(微)含有
5. 極暗褐色　焼土ブロック，炭化粒子，ローム粒子含有

第109図　第67号住居址実測図



第110図　第67号住居址出土遺物実測図

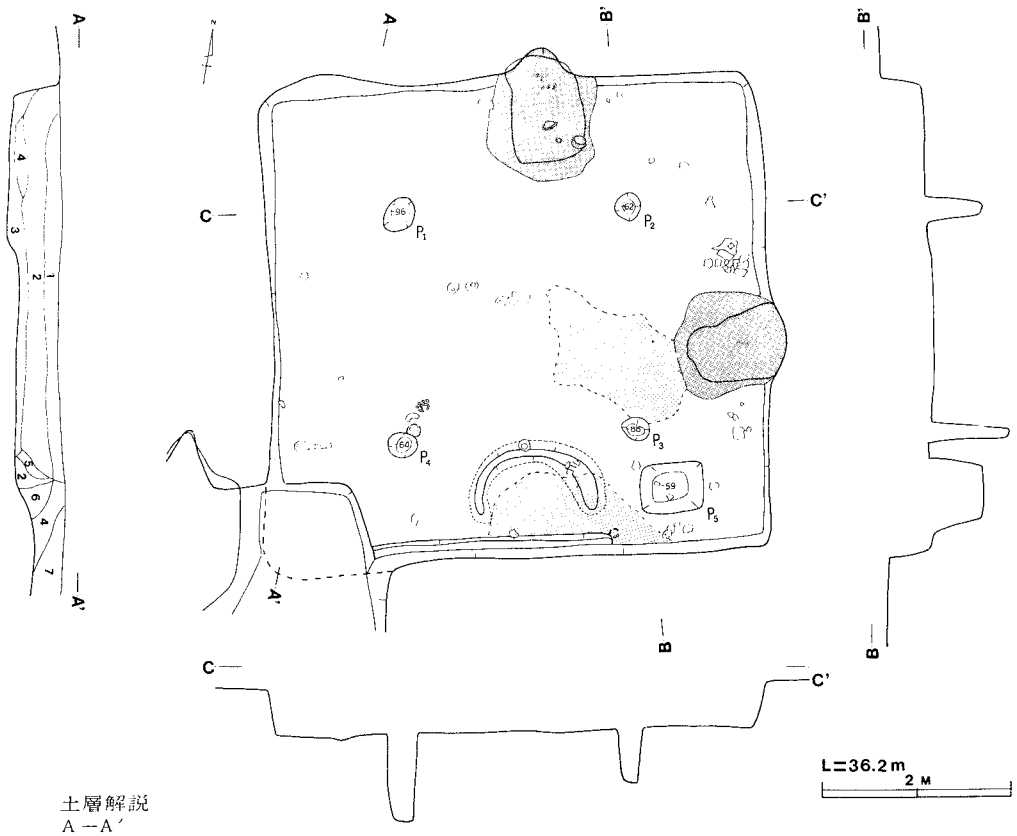
近は硬い床面であるが壁にそって軟くなっている。床面中央部と南西コーナー付近・南壁中央部にかけて炭化材が出土しているので本址は火災に遭遇していると思われる。南壁中央部には入口の施設と思われる1段高い半円形のベルトを有している。ピットは7個所確認されP1～P4は主柱穴と考えられる南東コーナーのP5は貯蔵穴で規模は長径55cm，短径44cm，深さ49cmの平面形を呈している。覆土は黒褐色土で8層からなっており第65号住居址の上層を南西コーナーで切り，自然堆積の状態を示している。上層は極少量の焼土粒子を含み，下層は多量のローム粒子と極少量の炭化粒子を含んでいる。カマドは北壁の中央より東に位置し，規模は長径130cm，短径78cm，北壁を40cm幅で，30cmほど掘り込んで煙道としている。燃焼部は壁面より70～80cmほど離れており，長径24cm，短径22cm，深さ3cm程円形に掘り窪めている。袖部は黒色土混りの砂質粘土でやや南東向きに細長く構築されている。燃焼部より甕形土器片，鉢形土器片を数点出土し，その下部より支脚が立ったまま出土している。

出土遺物は土師器を中心に弥生式土器の壺底部を覆土から出土し，他には須恵器の破片を数点出土している。土師器の

完存率の良好なものをあげると，カマド内燃焼部から坏片（図110－３）を，東壁付近南より床面から甕（図110－１），坏（図110－５）を，南東コーナーのＰ３付近床面より坏（図110－4）を，南壁際床面より椀（図110－6）を，北東コーナーＰ１付近床面より甑片（図110－2）を出土している。本址は出土遺物等から古墳時代の鬼高期比定されるの遺構と思われる。

第68号住居址（図111～113）

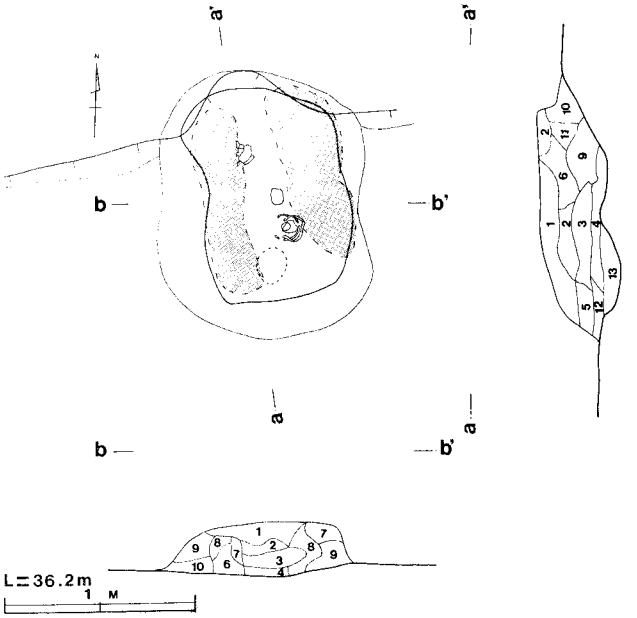
本住居址は，調査区の南中央部Ｄ３区ｃ０，ｄ０，Ｄ４区ｃ１，ｄ１に確認され，南西コーナーには第66号住居址が切り込んでおり，南東コーナーは第70号住居址の西コーナーに切り込んでいる。本址は第66号住居址より古い遺構で，第70号住居址より新しい遺構である。北西0.8m には第67号住居址が，北側4.2mには第48号住居址が検出されている。本址はほぼ正方形の平面形を呈しており，主軸方向はＮ－11°－Ｗで，規模は長軸5.26m，短軸5.11m，面積23.8㎡を測る。壁高は44㎝～50㎝であり，壁はやや直立ぎみに立ちあがっている。壁溝は幅10㎝，深さ５㎝内外で南壁際西よりに



土層解説
Ａ－Ａ′

1. 極暗褐色　ローム粒子，焼土粒子(微)含有
2. 黒褐色　ローム粒子(多)，焼土粒子，炭化粒子(少)含有
3. 暗褐色　ローム粒子(多)，焼土粒子(少)含有
4. 暗褐色　ローム粒子(多)，焼土粒子(少)含有
5. 黒褐色　炭化材多量含む
6. 黒褐色　ローム粒子(微)，焼土ブロック含有
7. 黒　色　ローム粒子(少)含有

第111図　第68号住居址実測図



土層解説

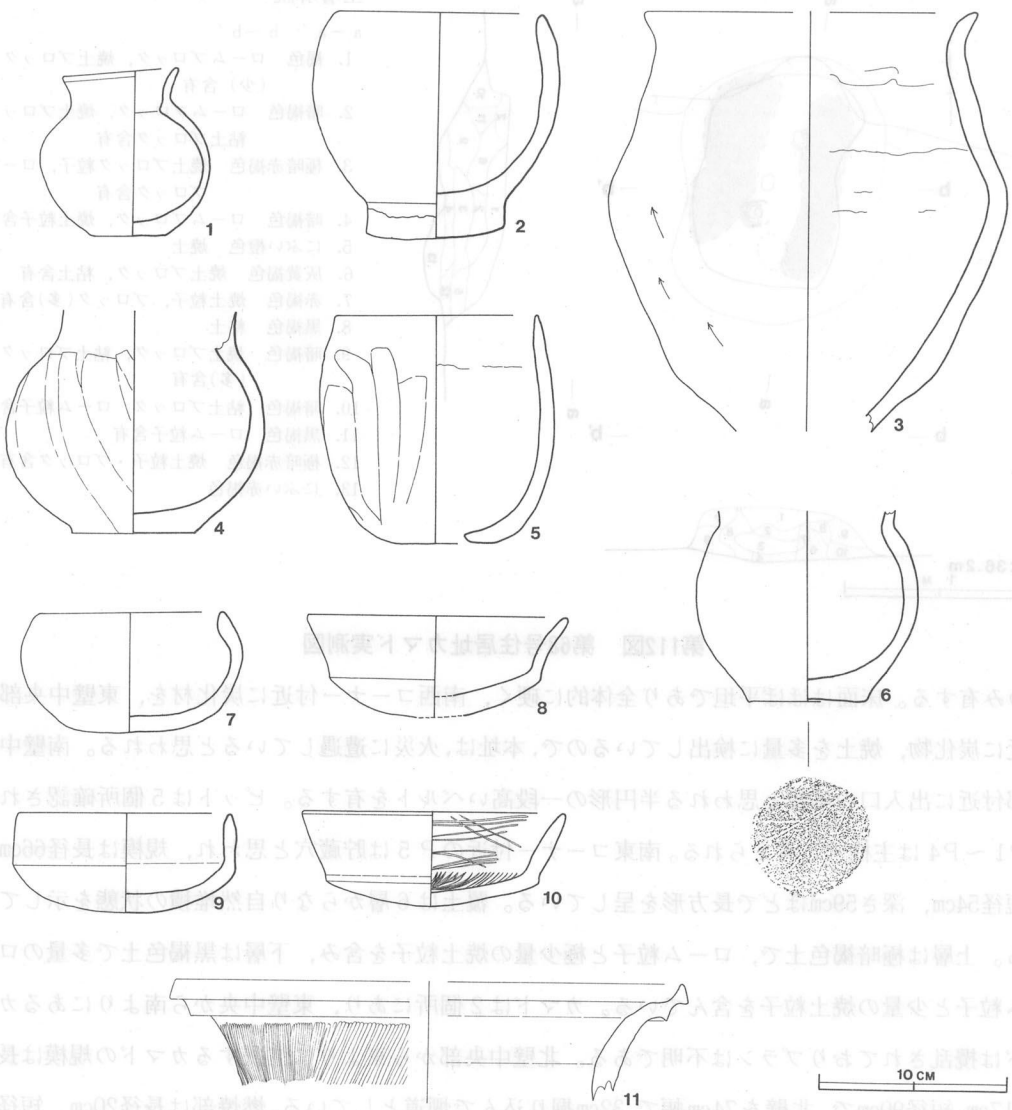
a－a′　b－b′

1. 褐色　ロームブロック，焼土ブロック（少）含有
2. 暗褐色　ロームブロック，焼土ブロック粘土ブロック含有
3. 極暗赤褐色　焼土ブロック粒子，ロームブロック含有
4. 暗褐色　ロームブロック，焼土粒子含有
5. にぶい橙色　焼土
6. 灰黄褐色　焼土ブロック，粘土含有
7. 赤褐色　焼土粒子，ブロック(多)含有
8. 黒褐色　粘土
9. 暗褐色　焼土ブロック，粘土ブロック(多)含有
10. 暗褐色　粘土ブロック，ローム粒子含有
11. 黒褐色　ローム粒子含有
12. 極暗赤褐色　焼土粒子・ブロック含有
13. にぶい赤褐色

第112図　第68号住居址カマド実測図

のみ有する。床面はほぼ平坦であり全体的に硬く，南西コーナー付近に炭化材を，東壁中央部付近に炭化物，焼土を多量に検出しているので，本址は，火災に遭遇していると思われる。南壁中央部付近に出入口の施設と思われる半円形の一段高いベルトを有する。ピットは５個所確認され，Ｐ1～Ｐ4は主柱穴と考えられる。南東コーナー付近のＰ５は貯蔵穴と思われ，規模は長径66cm，短径54cm，深さ59cmほどで長方形を呈している。覆土は６層からなり自然堆積の状態を示している。上層は極暗褐色土で，ローム粒子と極少量の焼土粒子を含み，下層は黒褐色土で多量のローム粒子と少量の焼土粒子を含んでいる。カマドは２個所にあり，東壁中央から南よりにあるカマドは攪乱されておりプランは不明である。北壁中央部から東よりに位置するカマドの規模は長径117cm，短径90cmで，北壁を74cm幅で，32cm掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径20cm，短径15cm，深さ10cmで円形に掘り窪めている。袖部は黒色土混りの砂質粘土で，カマドはやや南東向きに構築されている。燃焼部付近より，椀形土器完形品（図113－7），甑１個体分（図113－５）を出土し，他に土師器の破片数点を出土している。カマド付近床面から坏（図113－10）を東壁のカマド付近床面直上から甕片（図113－3），南西コーナーＰ５際床面より壺片（図113－1）と坏片（図113－9），南壁付近床面直上より鉢片（図113－2），壺（図113－11）と，中央部床面直上から甕（図113－6）を出土している。他に甕（図113－4）坏（図113－8）甑などの細片を数点出土している。

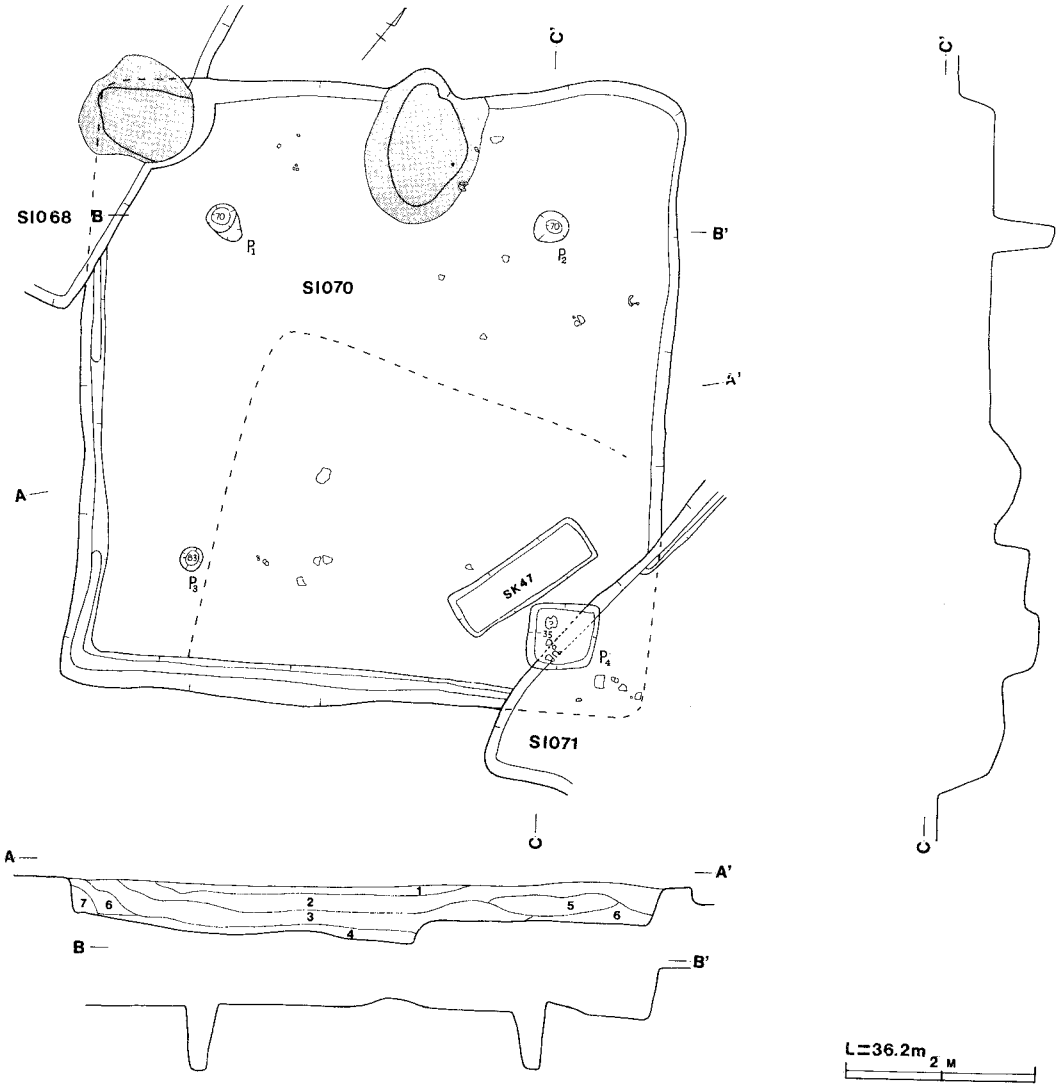
本址は出土遺物等から古墳時代の鬼高期に比定される遺構と思われる。



第113図　第68号住居址出土遺物実測図

第70号住居址（図114～116）

本住居址は，調査区の南東部Ｄ４区ｃ１，ｃ２，ｄ１，ｄ２，ｄ３，ｅ１，ｅ２に確認され，西コーナーには第68号住居址が，東コーナーは第71号住居址が切り込んでいる。本址は第68号住居址，第71号住居址よりも古い遺構である。本址の主軸方向はＮ－38°－Ｗで，規模は長軸6.50m，短軸6.21m，面積36.0㎡を測り，ほぼ正方形の平面形を呈している。壁高は26cm～55cm程で壁はやや直立して立ちあがっている。壁下には，北西・北東壁を除いて壁溝を有している。床面は東コーナーを中心に貼り床でパカパカしている。東コーナーは第47号土壙が複合している。壁際から炭化材が

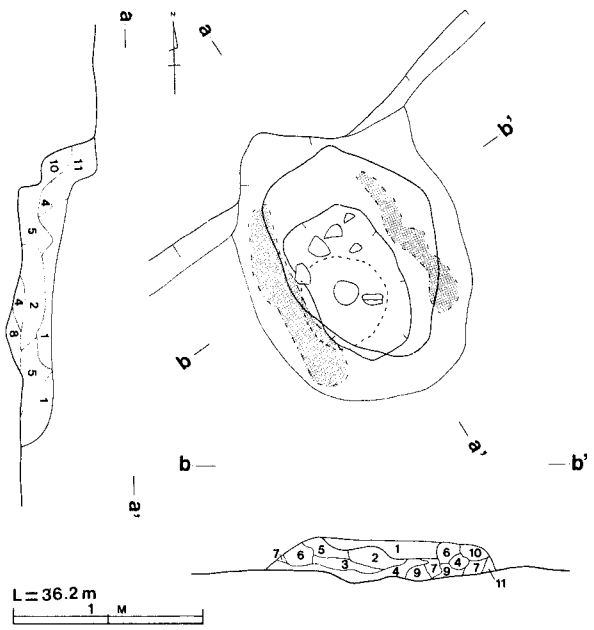


土層解説

A－A′

1. 黒　色　ローム粒子，焼土粒子(少)含有
2. 黒褐色　ローム粒子，焼土粒子含有
3. 黒　色　ローム粒子(多)，焼土ブロック含有
4. 暗褐色　ロームブロック，炭化材含有
5. 褐　色　ロームブロック，ローム粒子，焼土粒子(少)含有
6. 暗褐色　ローム粒子(多)含有。ざらざらしている
7. 暗褐色　ローム粒子，焼土粒子，炭化材含有

第114図　第70号住居址・第47号土壙実測図

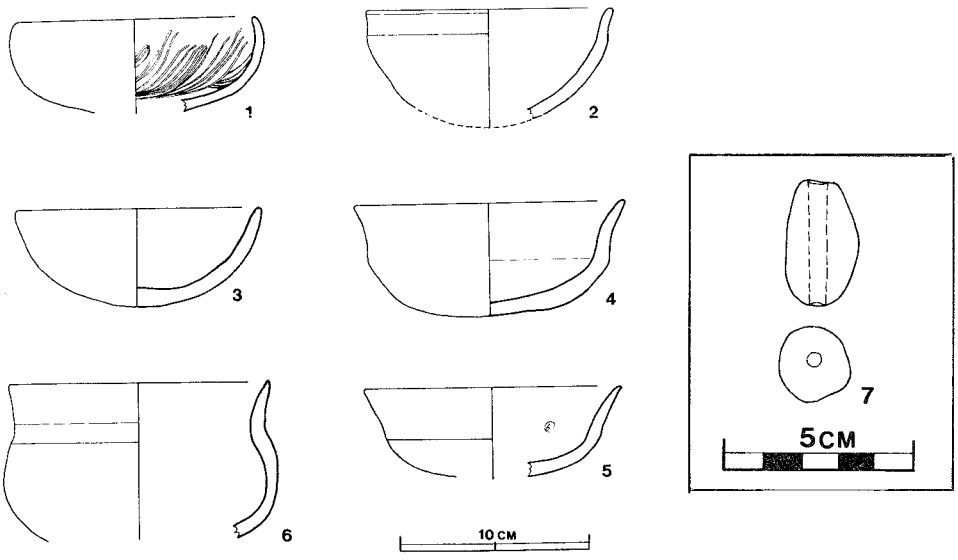


土層解説

a－a′　b－b′

1. 暗褐色　ローム粒子，焼土粒子・ブロック含有
2. 暗赤褐色　焼土粒子(多)，砂質粘土ブロック含有
3. 暗赤褐色　焼土粒子(多)，焼土ブロック，粘土ブロック含有
4. 暗褐色　ロームブロック，焼土粒子含有
5. 暗赤褐色　焼土ブロック，砂質粘土ブロック含有
6. 褐　色　砂質粘土
7. 褐　色　焼土ブロック(多)含有
8. 赤褐色　焼土
9. 暗褐色　ローム粒子，ロームブロック含有
10. 褐　色　ローム粒子(多)，焼土粒子(少)含有
11. 暗褐色　ローム粒子(多)含有

第115図　第70号住居址カマド実測図

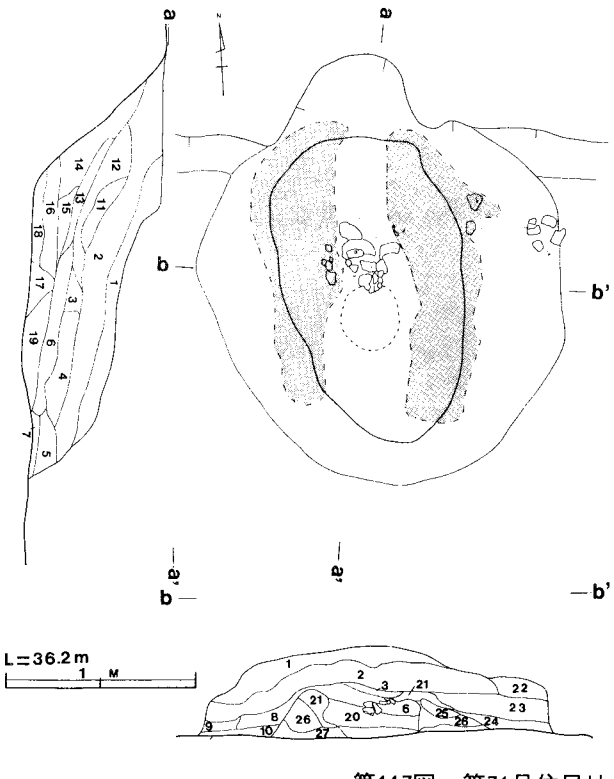


第116図　第70号住居址出土遺物実測図

検出されているので，本址は火災に遭遇していると思われる。ピットは３個所確認され，いずれも柱穴である。東コーナーの柱穴は第47号土壙に切られ確認することができないが，同コーナーのＰ４は貯蔵穴と思われ，規模は長径73cm，短径71cm，深さ35cmの正方形を呈している。覆土は８層からなり自然堆積の状態を示している。上層は黒色土でローム粒子と少量の焼土粒子を含み，中層は褐色・極暗褐色土で，多量のローム粒子と焼土粒子・焼土ブロックを含み，下層は暗褐色土でロームブロックと炭化物を含んでいる。カマドは，北壁の中央から東よりに位置し，規模は長径140cm，短径85cmで，北壁を75cm幅で，35cm掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径46cm，短径44cm，深さ８cmで円形状に掘り窪めている。袖部は黒色土混りの砂質粘土で，カマドは南東向きに構築されている。燃焼部から土師器の坏片を３個体分（図116－３・５）出土している。出土遺物は，土師器が中心で，須恵器の坏，蓋などの細片を数点出土している。北東壁付近床面直上から土師器の坏片（図116－2），南コーナー付近床面直上から内黒の坏片（図116－1），西コーナー壁面から土玉（図116－7）を出土し，他に覆土から土師器の椀（図116－6），南コーナー床面直上から砥石を出土している。本址は出土遺物等から古墳時代後期鬼高期に比定される遺構と思われる。

第71号住居址（図117～119）

本住居址は，調査区の南部Ｄ４区ｂ２，ｂ３，ｃ２，ｃ３，ｃ４，ｄ２，ｄ３，ｄ４に確認され，

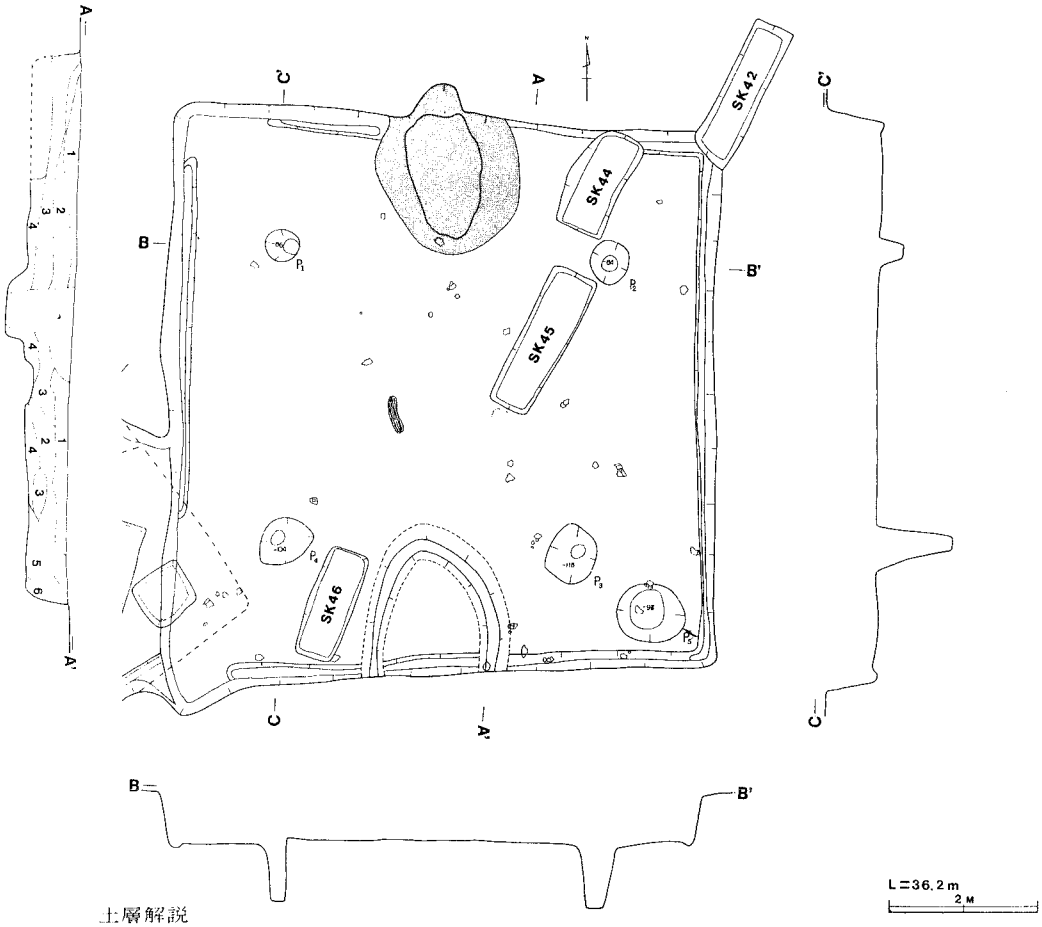


土層解説

a－a′　b－b′

1. 褐　色　ハードロームブロック(多)含有
2. 褐灰色　粘土
3. 灰褐色　粘土，焼土(少)含有
4. 灰褐色　ハードロームブロック(少)，焼土粒子含有
5. 褐　色　ハードロームブロック(少)含有
6. 暗赤褐色　粘土(少)，焼土含有
7. 褐　色　ハードローム粒子(極少)含有
8. 灰褐色　粘土，ハードローム粒子(少)含有
9. 褐　色　ハードローム粒子(極少)含有
10. 黒褐色　ハードローム粒子(少)含有
11. 灰褐色　粘土(少)含有。灰層
12. 褐灰色　焼土粒子(少)，粘土(特多)含有
13. 褐灰色　焼土粒子(少)含有。灰層
14. 黒褐色　焼土粒子(少)含有。灰層
15. 赤褐色　焼土，灰の混合土層
16. 黒褐色　焼土粒子(少)含有，灰層
17. 暗赤褐色　焼けたハードロームブロック，主体の土層
18. 黒褐色　ハードロームブロック(少)含有
19. 灰白色　灰層
20. 暗赤褐色　焼土ブロック(多)含有。灰層
21. 褐　色　焼土粒子(少)含有。粘土質の土層
22. 褐　色　粘土ブロック，ハードロームブロック(多)含有
23. 褐　色　ハードロームブロック(極少)含有
24. 灰褐色　粘土層
25. 褐灰色　粘土
26. 灰褐色　砂(少)含有。粘土層
27. 暗褐色　ハードロームブロック(少)含有

第117図　第71号住居址カマド実測図

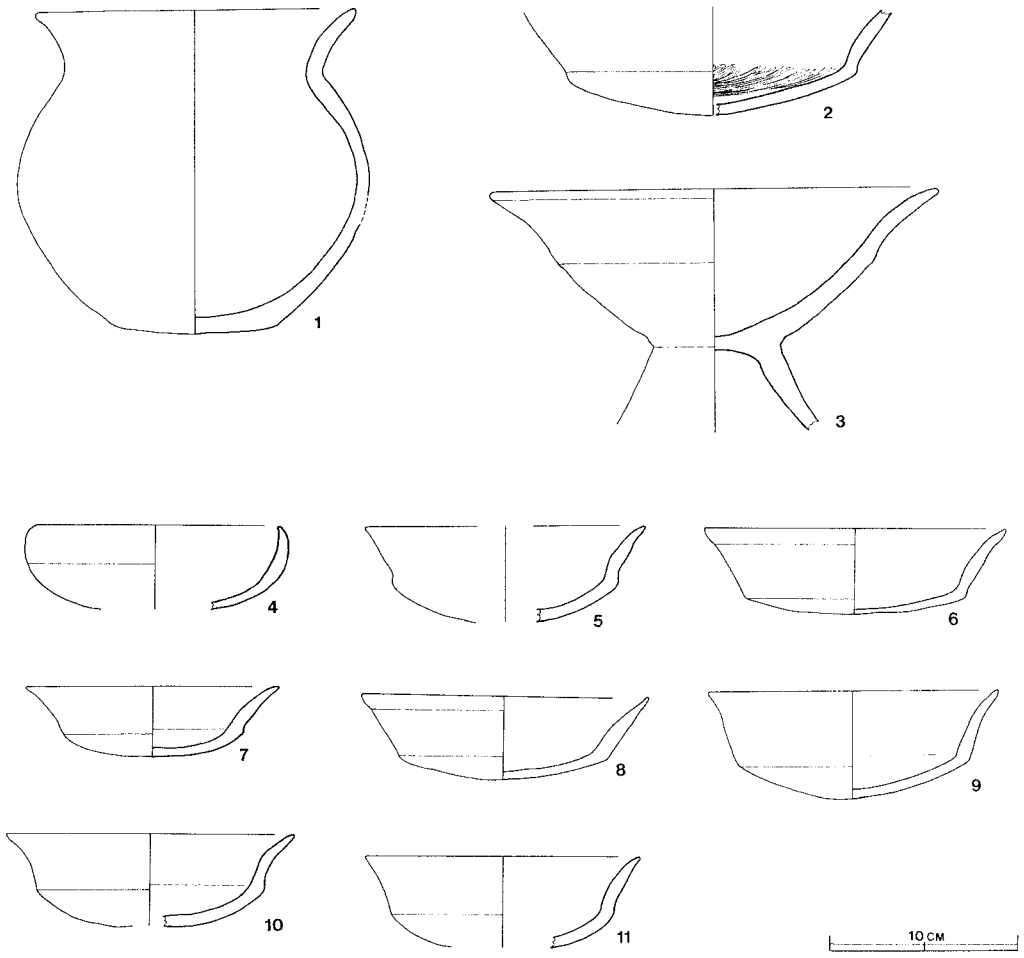


土層解説
A－A′

1. 黒　色　ローム粒子，焼土粒子含有
2. 黒褐色　ローム粒子(多)，焼土粒子(極少)含有
3. 暗褐色　ローム粒子，ロームブロック，焼土粒子(少)含有
4. 暗褐色　ロームブロック(少)，焼土粒子，炭化粒子(極少)含有
5. 黒褐色　ローム粒子(少)含有
6. 褐　色　ローム粒子，焼土粒子(少)含有

第118図　第71号住居址・第42号・44号・45・46号土壙実測図

北東コーナーに第42号土壙，第44号土壙，第45号土壙が，西壁南下半に第70号住居址，南壁中央付近には第46号土壙が切り込んでいる。東側0.2mには第73号住居址が，南東0.1mに第72号住居址が検出されている。本址は第70号住居址とほぼ同時期の遺構と思われるが，第70号住居址の東コーナーを切っているので，本址は第70号住居址より新しい遺構と思われる。本址は隅丸長方形の平面形を呈しており，主軸方向N－2°－Eで，規模は長軸7.67m，短軸7.40m，面積47.6㎡を測り，壁高は55cm～72cm程で，壁は床面から垂直ぎみに立ちあがっている。壁下には幅18cm，深さ6cm内外の壁溝がカマドの部分を除いて廻っている。床面は褐色の全体的に硬い貼り床と思われる。南



第119図　第71号住居址出土遺物実測図

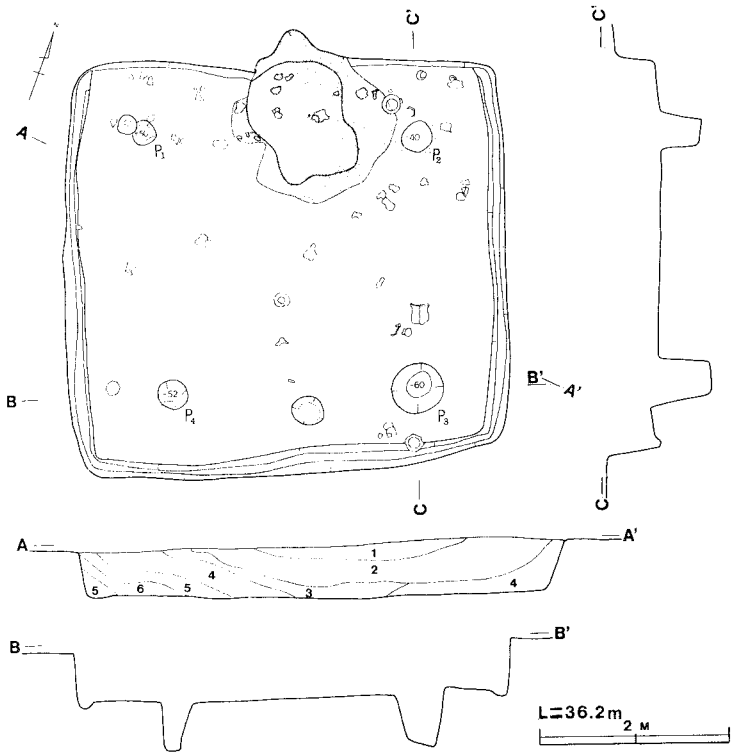
壁中央には鹿沼パミスを含んだ入口の施設と思われるベルトが一段高く半周している。本址には入口の施設に伴うと思われる土壙とピットが確認できない。床面中央部から壁土の焼けたものと思われる焼土塊と炭化物を中央部から出土しているので，火災に遭遇していると思われる。ピットは５個所確認されＰ１～Ｐ４は主柱穴と考えられる。南東コーナーのＰ５は貯蔵穴と思われ，長径91cm，短径80cm，深さ93cmの不整楕円形を呈している。覆土は中央部が攪乱されているが，他は自然堆積の状態を示している。上層は黒色土で，ローム粒子，焼土粒子を含み，中層は暗褐色土で多量のローム粒子とロームブロック，焼土粒子を含み，下層は暗褐色土で少量のロームブロックと極少量の炭化粒子と焼土粒子を含んでいる。カマドは北壁の中央部に位置し，規模は長径190cm，短径115cmで，北壁を82cm幅で，44cmほど掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径35cm，短径30cm，深さ３cmほど円形に掘り窪めている。袖部は幅が広く黒色土混りの砂質粘土で，カマドは南向きに構築されている。　　燃焼部には灰色の粘土が全体にひろがり，土師器の坏

(図119—7),高坏（図119—3）などが出土している。出土遺物は土師器を中心に，須恵器の甕，坏などの細片を覆土から数点数点出土している。土師器の完存率の良好なものをあげると，北東コーナー床面直上より坏片（図119—11),南東コーナーのＰ５際床面から坏片（図119—４),南壁付近床面から坏２個と，出入口の施設と思われる中から坏片を，中央部床面直上から甕片を出土している。

本址は出土遺物等から古墳時代の鬼高期に比定される遺構と思われる。

第72号住居址（図120～122)

本住居址は,調査区の南東部の端Ｄ４区ｄ４，ｄ５，ｅ４，ｅ５に確認され，北西0.1m には第71号住居址が,北東0.3mには第73号住居址が検出されている。本址は隅丸長方形の平面形を呈し，主軸方向はＮ—20°—Ｗで,規模は長軸4.65m，短軸4.39m，面積16.6㎡を測る。壁高は約50cmであり，壁はやや直立ぎみに立ちあがり,壁下には幅17cm,深さ５cm内外の壁溝が全周している。床は平坦で硬い貼り床である。南東コーナーには粘土が薄くはられていた。ピットは５個所確認され，Ｐ１～Ｐ４は主柱穴と考えられ，貯蔵穴は有していない。覆土は11層からなり自然堆積の状態を示している。　　上層は褐色土で，多量のローム粒子と少量

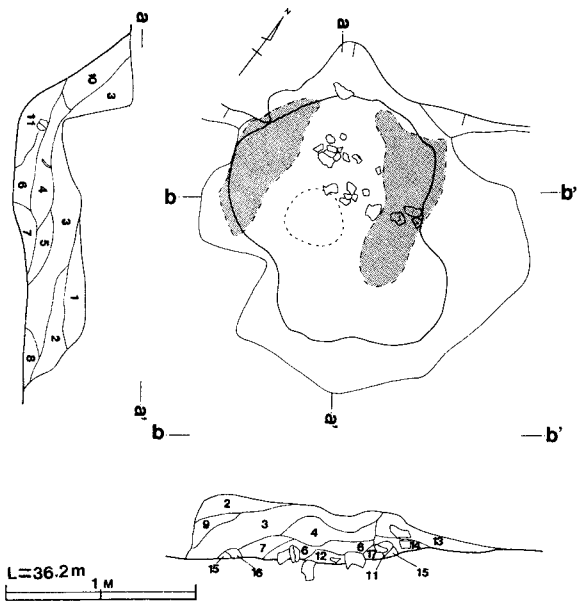


上層解説

A—A′

1. 褐　色　ローム粒子(多)ブロック(少)含有
2. 暗褐色　ローム粒子(多)ロームブロック(少)含有
3. 明褐色　ロームブロック(多)含有
4. 黒褐色　ローム粒子(少)炭化粒子焼土粒子(極少)含有
5. 極暗褐色　ローム粒子炭化粒子含有
6. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(極少)含有

第120図　第72号住居址実測図



土層解説

a－a′　b－b′

1. 暗褐色　ハードロームブロック(多)含有
2. 暗褐色　ハードローム粒子(少)含有砂質
3. 暗褐色　ハードローム粒子(少)焼土粒子(極少)含有
4. 暗褐色　ハードローム粒子(少)含有
5. 黒褐色　ハードローム粒子(極少)含有
6. 極暗褐色　焼土，砂(少)含有
7. 褐　色　ハードロームブロック，砂(少)含有
8. 暗褐色　ハードローム粒子(少)含有
9. 暗褐色　砂ブロック(少)含有
10. 暗褐色　ハードローム粒子，焼土粒子(少)含有砂質
11. 灰褐色　焼土粒子(少)，灰，砂の混合土層
12. 赤褐色　少量の灰を含有した焼土
13. 褐　色　焼土粒子(少)含有砂質土層
14. 灰褐色　砂，含有、粘土質の土層
15. 褐灰色　砂，粘土含有
17. 褐　色　ハードロームブロック，焼土粒粒子(少)含有砂質

第121図　第72号住居址カマド実測図

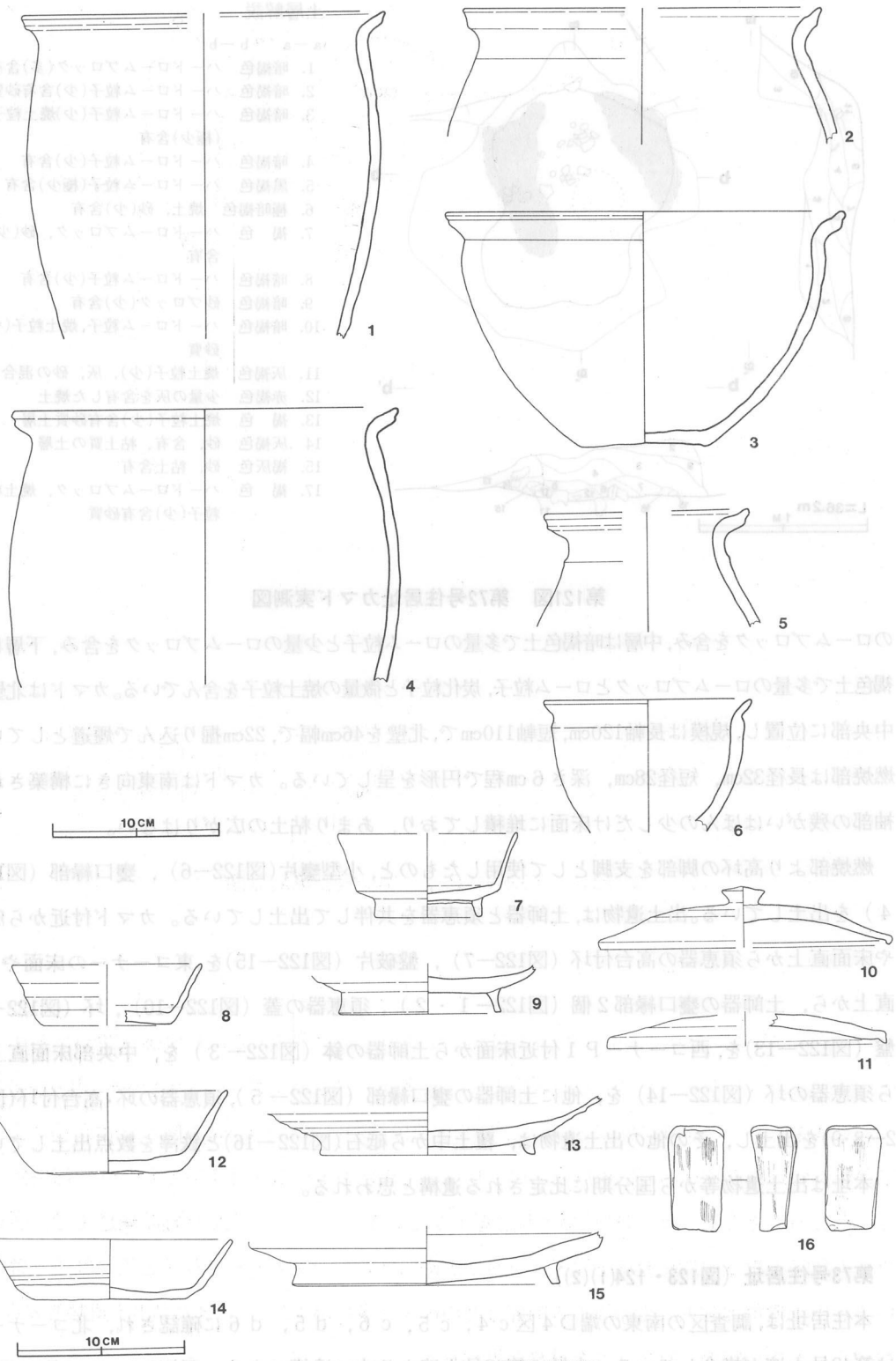
のロームブロックを含み，中層は暗褐色土で多量のローム粒子と少量のロームブロックを含み，下層は明褐色土で多量のロームブロックとローム粒子，炭化粒子と微量の焼土粒子を含んでいる。カマドは北壁の中央部に位置し，規模は長軸120cm，短軸110cmで，北壁を46cm幅で，22cm掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径32cm，短径28cm，深さ６cm程で円形を呈している。カマドは南東向きに構築され，袖部の残がいはほんの少しだけ床面に堆積しており，あまり粘土の広がりはない。

燃焼部より高坏の脚部を支脚として使用したものと，小型甕片(図122—6)，甕口縁部（図122—４）を出土している。出土遺物は，土師器と須恵器を共伴して出土している。カマド付近から床面や床面直上から須恵器の高台付坏（図122—7），盤破片（図122—15)を，東コーナーの床面やその直上から，土師器の甕口縁部２個（図122—１・２），須恵器の蓋（図122—10），坏（図122—12)，盤（図122—13)を，西コーナーＰ１付近床面から土師器の鉢（図122—３）を，中央部床面直上から須恵器の坏（図122—14）を，他に土師器の甕口縁部（図122—５)，須恵器の坏・高台付坏(図122—8・9)を出土し，その他の出土遺物は，覆土中から砥石(図122—16)と鉄滓を数点出土している。

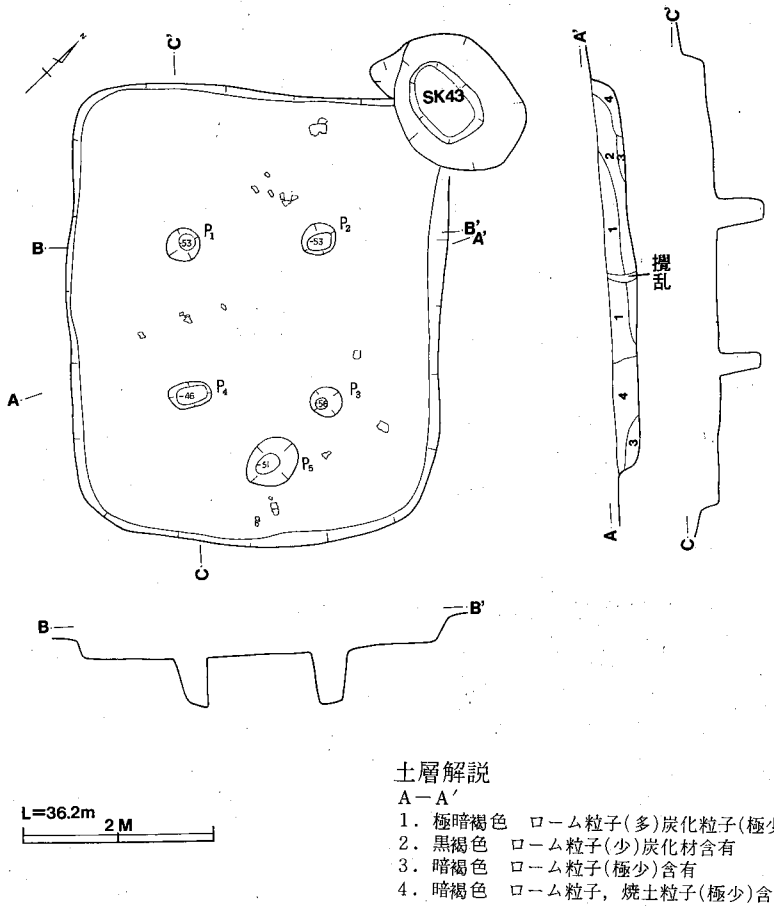
本址は出土遺物等から国分期に比定される遺構と思われる。

第73号住居址（図123・124(1)(2)）

本住居址は，調査区の南東の端Ｄ４区ｃ４，ｃ５，ｃ６，ｄ５，ｄ６に確認され，北コーナーには第43号土壙が複合している。本址は第43号土壙より古い遺構である。西側0.2m には第71号住居址が，南西0.3mには第72号住居址が検出されている。本址は，隅丸長方形の平面形を呈しており，主軸



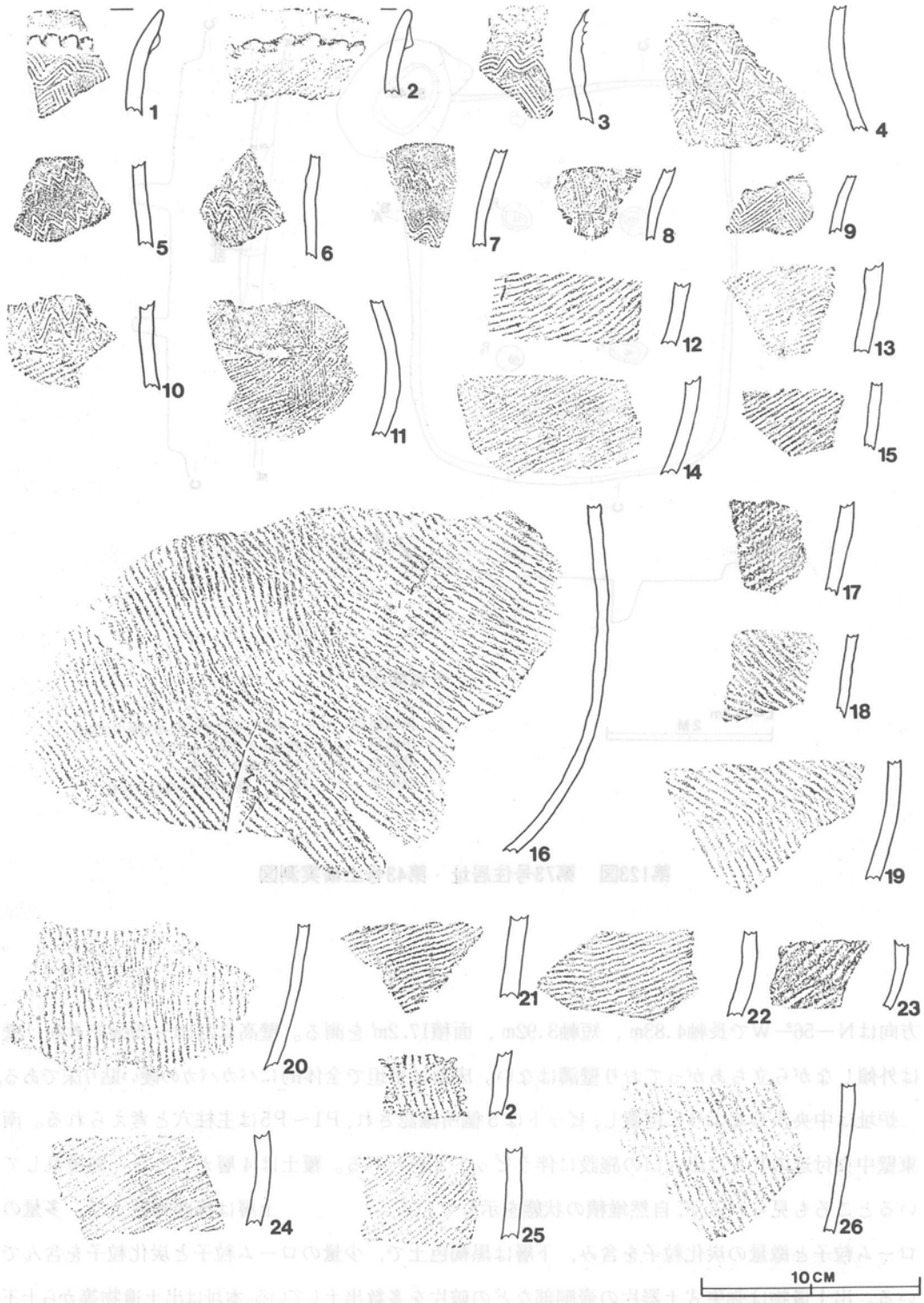
第122図　第72号住居址出土遺物実測図



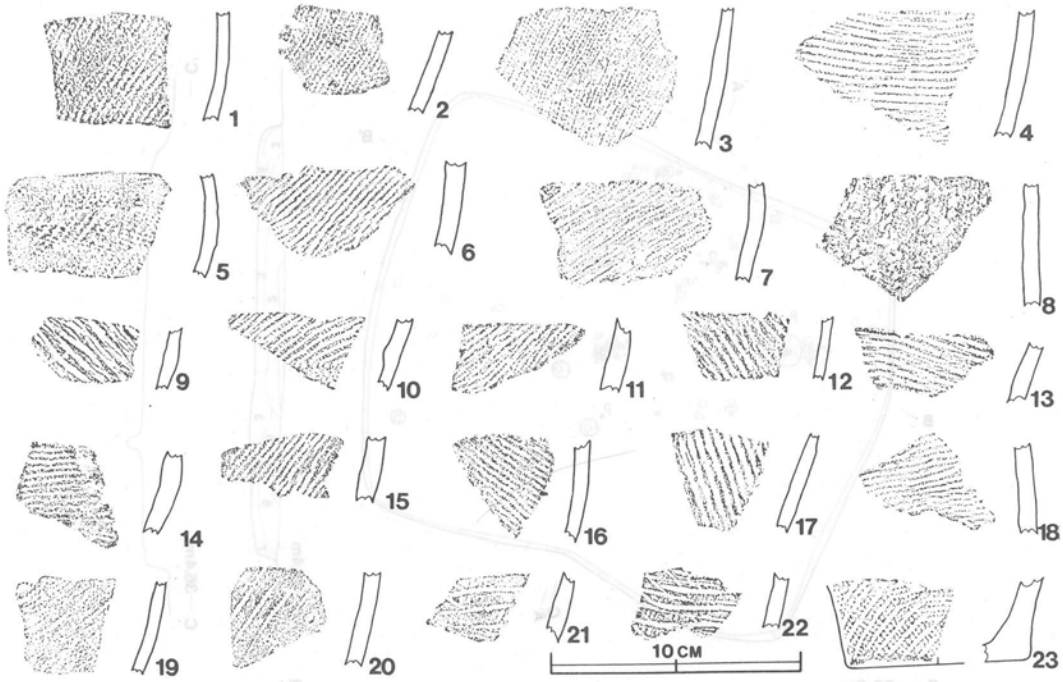
第123図　第73号住居址・第43号土壙実測図

方向はN－56°－Wで長軸4.83m，短軸3.92m，面積17.2㎡を測る。壁高は21cm～29cmであり，壁は外傾しながら立ちあがっており壁溝はない。床面は平坦で全体的にパカパカの硬い貼り床である。

炉址は中央から北よりに位置し，ピットは5個所確認され，P1～P5は主柱穴と考えられる。南東壁中央付近のP5は出入口の施設に伴うピットと思われる。覆土は4層からなり一部攪乱しているところも見られるが，自然堆積の状態を示している。　　上層は極暗褐色土で，多量のローム粒子と微量の炭化粒子を含み，下層は黒褐色土で，少量のローム粒子と炭化粒子を含んでいる。出土遺物は弥生式土器片の壺胴部などの破片を多数出土している。本址は出土遺物等から十王台式よりも古い時期に廃棄された遺構と思われる。



第124図(1)　第73号住居址出土遺物拓影図



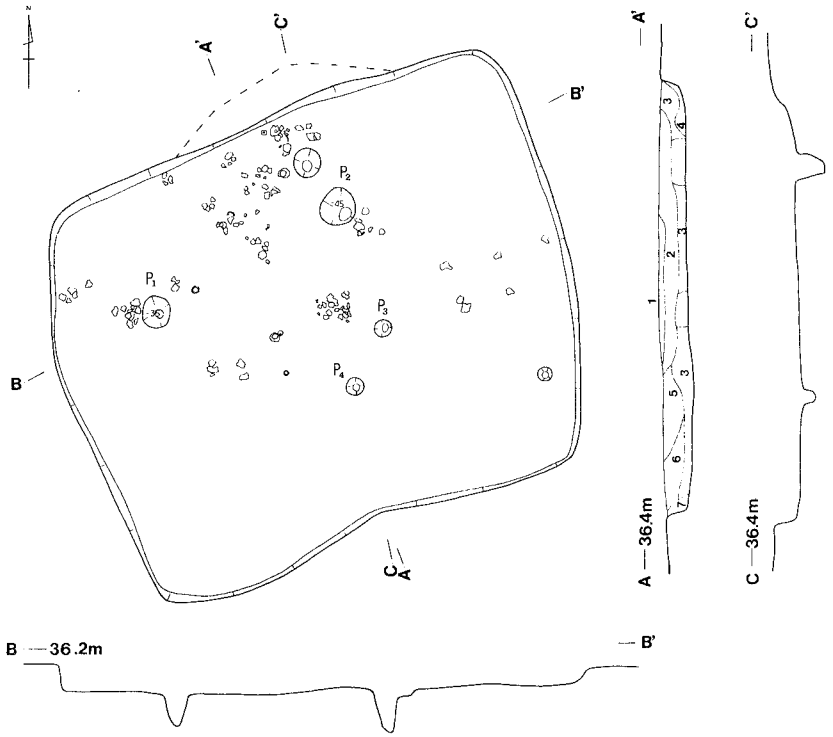
第124図(2)　第73号住居址出土遺物拓影図

第74号住居址（図125・126）

本住居址は，調査区の中央部東側Ｃ４区ｇ５，ｈ４，ｈ５，ｉ４，ｉ５に確認され，第92号住居址を70%ほど切り込んでいる。東側0.2m には第93号住居址が，北側3.8mには第79号住居址が，第92号住居址に複合して検出されている。本址は第92号住居址より古い遺構である。本址の，主軸方向はＮ－68°－Ｅで，規模は長軸5.55m，短軸4.50m，面積23.5㎡を測り隅丸方形の平面形を呈しており，壁高は15cm～30cmほどであり，壁はやや直立ぎみに立ちあがっている。床面は褐色で，全体的に軟らかく平坦であり，炉址は確認できなかった。ピットは６個所確認され，Ｐ１・Ｐ２は主柱穴と思われるが，南部の柱穴は確認できなかった。覆土は９層からなり，自然堆積の状態を示している。

上層は黒褐色土で多量のローム粒子を含み，中層は黒褐色土で少量のローム粒子を含み，下層は暗褐色土で多量のローム粒子と少量の焼土粒子を含んでいる。出土遺物は，土師器を中心に中央部から北西部にかけて多量に出土している。北西部床面直上から小型甕片，甕口縁部（図126—2）を，北東部床面直上から甑片を，中央部床面直上より手捏土器，器台片（図126—5）を出土し，他には甕（図126—1），壺，鉢（図126—4）などの破片を数点出土している。その他の出土遺物は，覆土から弥生式土器の十王台式より古い型式の底部片などを数点出土している。

本址は出土遺物等から五領期に比定される遺構と思われる。

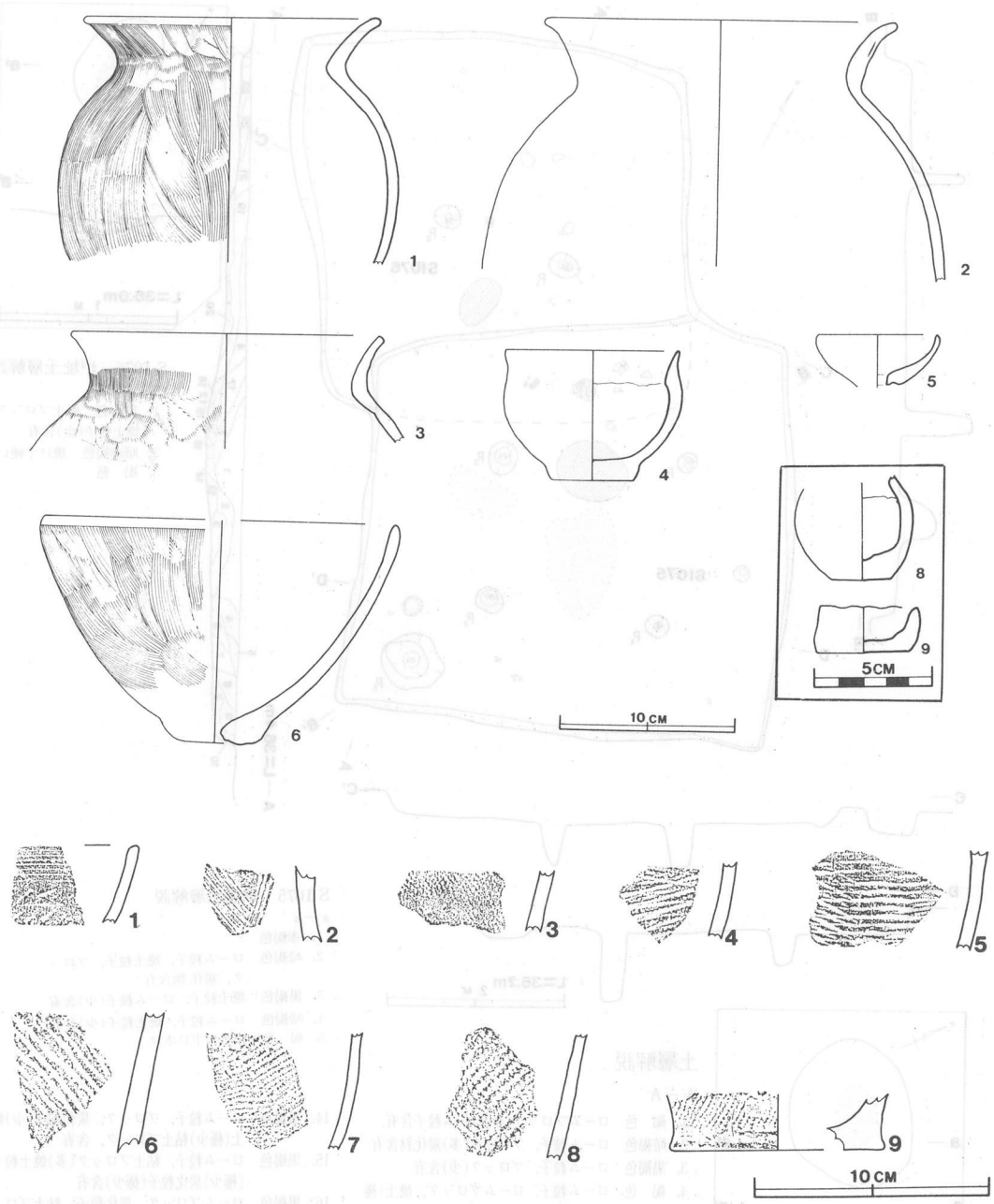


土層解説

A－A′

1．黒　色　ローム粒子(多)含有
2．黒褐色　ローム粒子(少)含有
3．暗褐色　ローム粒子(多)焼土粒子(少)含有
4．褐　色　ロームブロック(多)
5．黒褐色
6．暗褐色　ローム粒子(多)焼土粒子(微)含有
7．褐　色

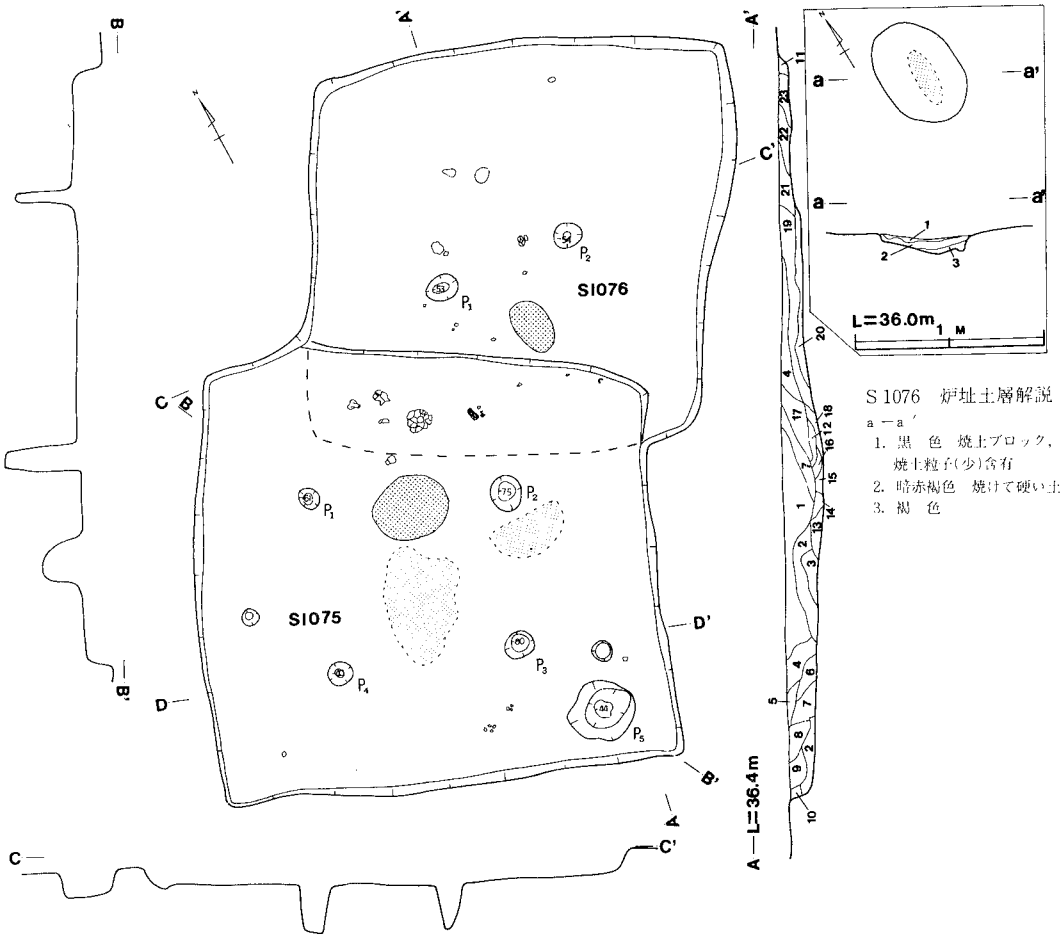
第125図　第74号住居址実測図



第126図　第74号住居址出土遺物実測・拓影図

第75号住居址（図127・128）

本住居址は,調査区の南部中ほどＣ３区ｊ０,Ｃ４区ｉ１，ｉ２，ｊ１，ｊ２に確認され，北壁は第76号住居址に複合している。本址は第76号住居址より新しい遺構である。南西1.0m には第48号住居址が検出されている。本址はほぼ正方形の平面形を呈し，主軸方向はＮ－68°－Ｗで長軸



S 1076　炉址土層解説

a－a′

1. 黒　色　焼土ブロック，焼土粒子(少)含有
2. 暗赤褐色　焼けて硬い土
3. 褐　色

S 1075　炉址土層解説

a－a′

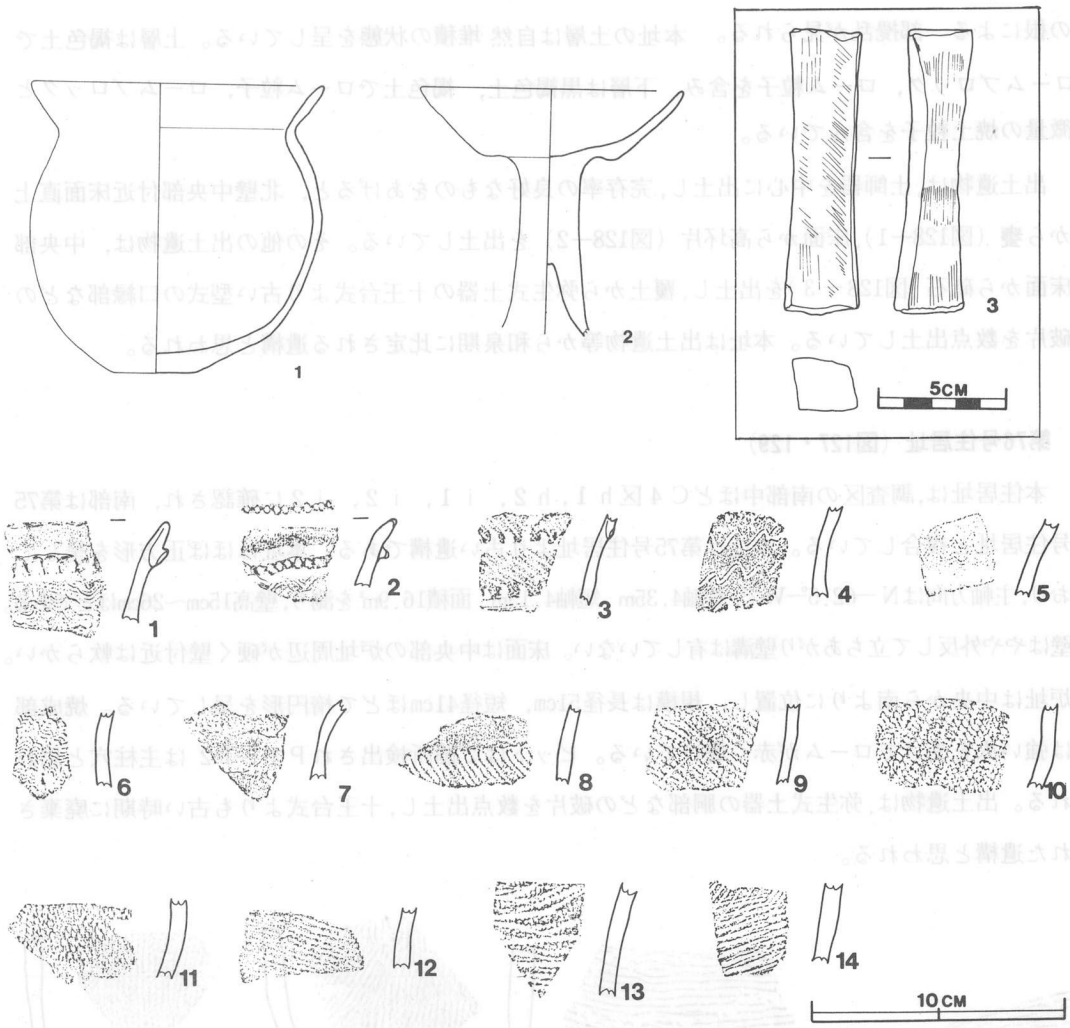
1. 赤褐色
2. 暗褐色　ローム粒子，焼土粒子，ブロック，炭化物含有
3. 黒褐色　焼土粒子，ローム粒子(少)含有
4. 暗褐色　ローム粒子，焼土粒子(少)含有
5. 褐　色　焼けてボロボロ

土層解説

A－A′

1. 褐　色　ロームブロック(少)ローム粒子含有
2. 暗褐色　ローム粒子，ブロック(多)炭化材含有
3. 黒褐色　ローム粒子，ブロック(少)含有
4. 褐　色　ローム粒子，ロームブロック，焼土(極少)含有
5. 褐　色　ローム粒子，ブロック，粘土含有
6. 褐　色　ロームブロック，炭化粒子(極少)含有
7. 褐　色　ローム粒子，ブロック(極少)含有
8. 暗褐色　ローム粒子，ブロック(少)含有
9. 暗褐色　ローム粒子，ブロック(多)含有
10. 褐　色　ローム粒子，ブロック(極少)含有
11. 明褐色　粘土粒子，ブロック　(少)含有
12. 暗褐色　ローム粒子含有
13. 褐　色　ローム粒子，炭化粒子(少)粒土粒子含有
14. 黒褐色　ローム粒子，ブロック，炭化粒子(少)焼土(極少)粘土ブロック，含有
15. 黒褐色　ローム粒子，粘土ブロック(多)焼土粒子(極少)炭化粒子(極少)含有
16. 黒褐色　ロームブロック，炭化粒子，粘土ブロック(極少)含有
17. 暗褐色　ローム粒子，ブロック(少)炭化粒子(極少)粘土ブロック(少)含有
18. 黒褐色　ローム粒子，粘土ブロック，炭化材含有
19. 黒褐色　ローム粒子，ブロック(少)炭化粒子，焼土粒子(極少)含有
20. 黒褐色　ローム粒子，炭化粒子(少)焼土粒子(極少)含有粘土質
21. 暗褐色　ローム粒子，ブロック(少)含有
22. 褐　色　ロームブロック含有，さらさらしている
23. 褐　色　ローム粒子，ブロック(少)含有

第127図　第75·76号住居址実測図



第128図　第75号住居址出土遺物実測拓影図

4.92m，短軸4.60m，面積21.6㎡を測り，壁高は16cm～31cm程である。壁はほぼ直立ぎみに立ちあがっている。床面は南側がやや高く，他は平坦で非常に硬い貼り床である。炉址は中央部からやや北よりに位置し，長径86cm，短径70cmと焼成部は強い火を受けて赤くやけている。住居址中央部付近に焼土の広がりが見られ，北壁中央部付近に炭化材を検出しているので本址は火災にに遭遇していると思われる。

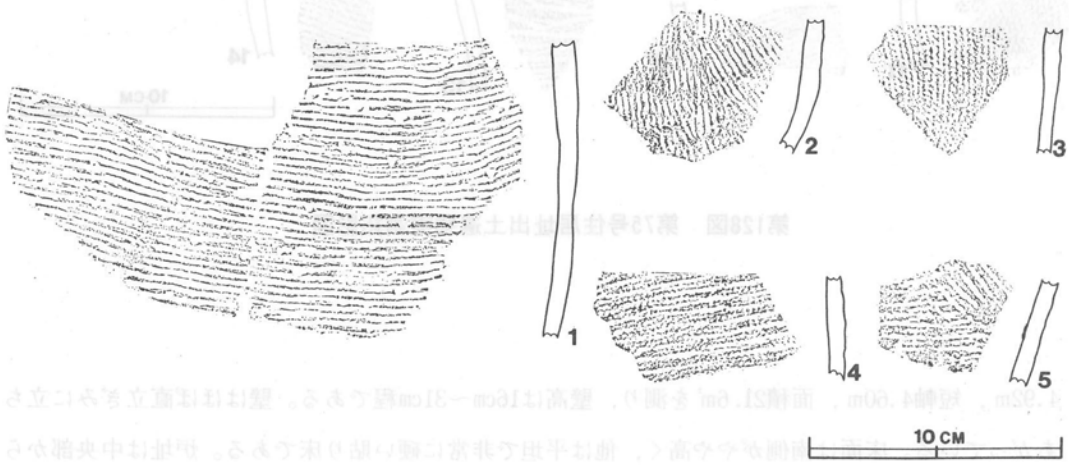
ピットは７個所確認されＰ１～Ｐ４は主柱穴と考えられる。南東コーナーのＰ５は貯蔵穴と考えられ，規模は長径73cm，短径66cm，深さ44cmの不整楕円形を呈している。覆土は18層からなり木

の根による一部攪乱が見られる。 本址の土層は自然堆積の状態を呈している。上層は褐色土でロームブロック，ローム粒子を含み，下層は黒褐色土，褐色土でローム粒子，ロームブロックと微量の焼土粒子を含んでいる。

出土遺物は，土師器を中心に出土し，完存率の良好なものをあげると，北壁中央部付近床面直上から甕（図128—1），床面から高坏片（図128—2）を出土している。その他の出土遺物は，中央部床面から砥石（図128－3）を出土し，覆土から弥生式土器の十王台式より古い型式の口縁部などの破片を数点出土している。本址は出土遺物等から和泉期に比定される遺構と思われる。

第76号住居址（図127・129）

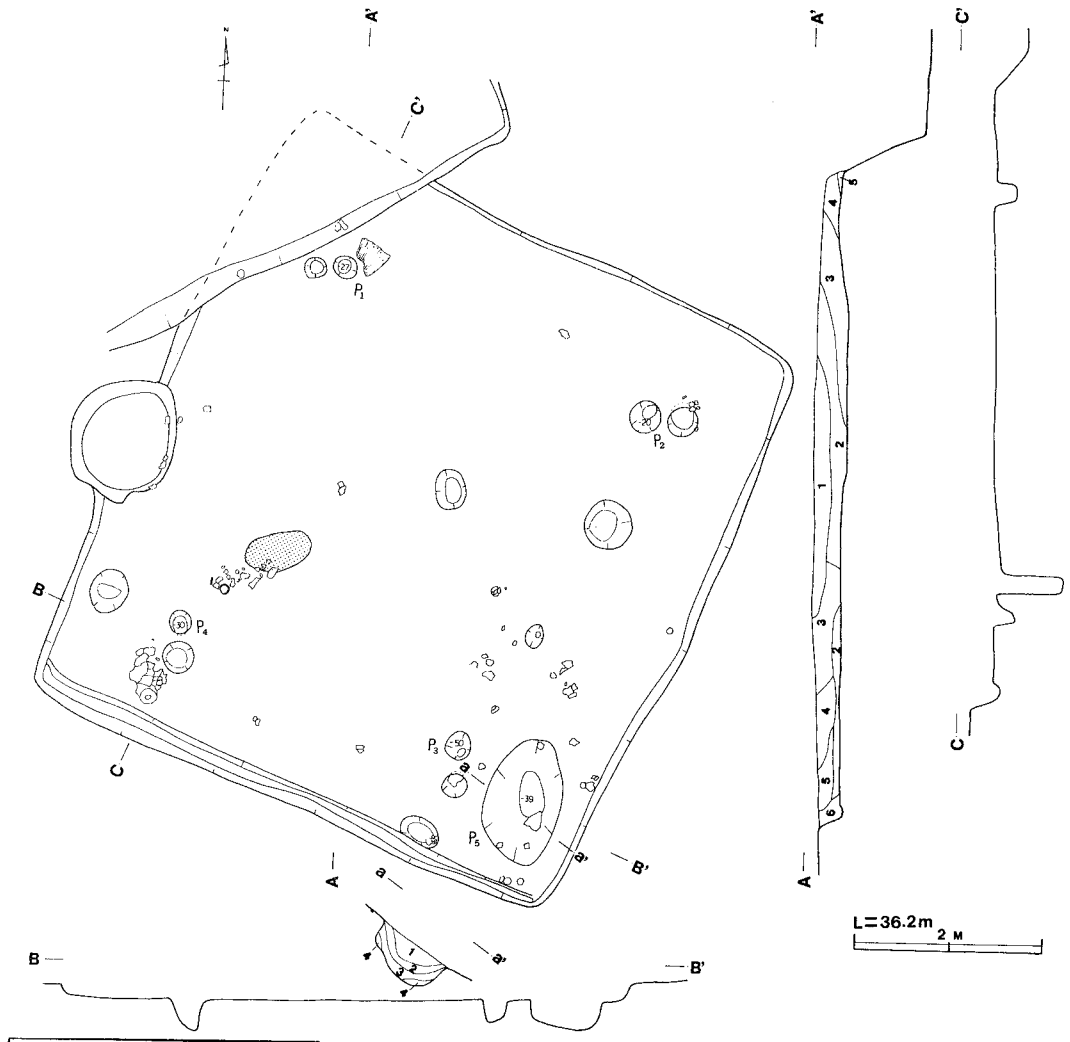
本住居址は，調査区の南部中ほどＣ４区ｈ１，ｈ２，ｉ１，ｉ２，ｊ２に確認され，南部は第75号住居址と複合している。本址は第75号住居址より古い遺構である。本址はほぼ正方形を呈しており，主軸方向はＮ—62.5°—Ｗで，長軸4.35m，短軸4.15m，面積16.9㎡を測り，壁高15cm～26cmほどである。壁はやや外反して立ちあがり壁溝は有していない。床面は中央部の炉址周辺が硬く壁付近は軟らかい。炉址は中央から南よりに位置し，規模は長径51cm，短径41cmほどで楕円形を呈している。焼成部は強い火を受けてロームが赤く焼けている。ピットは２個所検出されＰ１～Ｐ2 は主柱穴と思われる。出土遺物は，弥生式土器の胴部などの破片を数点出土し，十王台式よりも古い時期に廃棄された遺構と思われる。

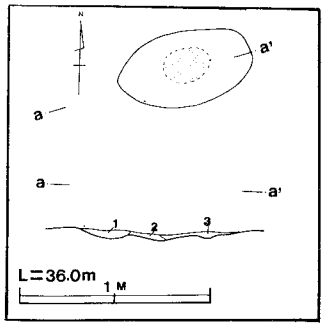


第129図　第76号住居址出土遺物拓影図

第77号住居址（図130・131）

本住居址は，調査区の中央部東側Ｃ４区ｄ２，ｄ３，ｅ１，ｅ２，ｅ３，ｆ１，ｆ２，ｆ３に確





土層解説

A－A′

1. 黒褐色　ローム粒子，ロームブロック(極少)含有
2. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(極少)含有
3. 極暗褐色　ローム粒子(多)焼土粒子(極少)含有
4. 黒褐色　ローム粒子(多)含有
5. 極暗褐色　ローム粒子含有
6. 暗褐色　ローム粒子，ロームブロック(多)含有
7. 褐　色　ローム粒子，ブロック(多)焼土ブロック含有

炉址土層解設

a－a′

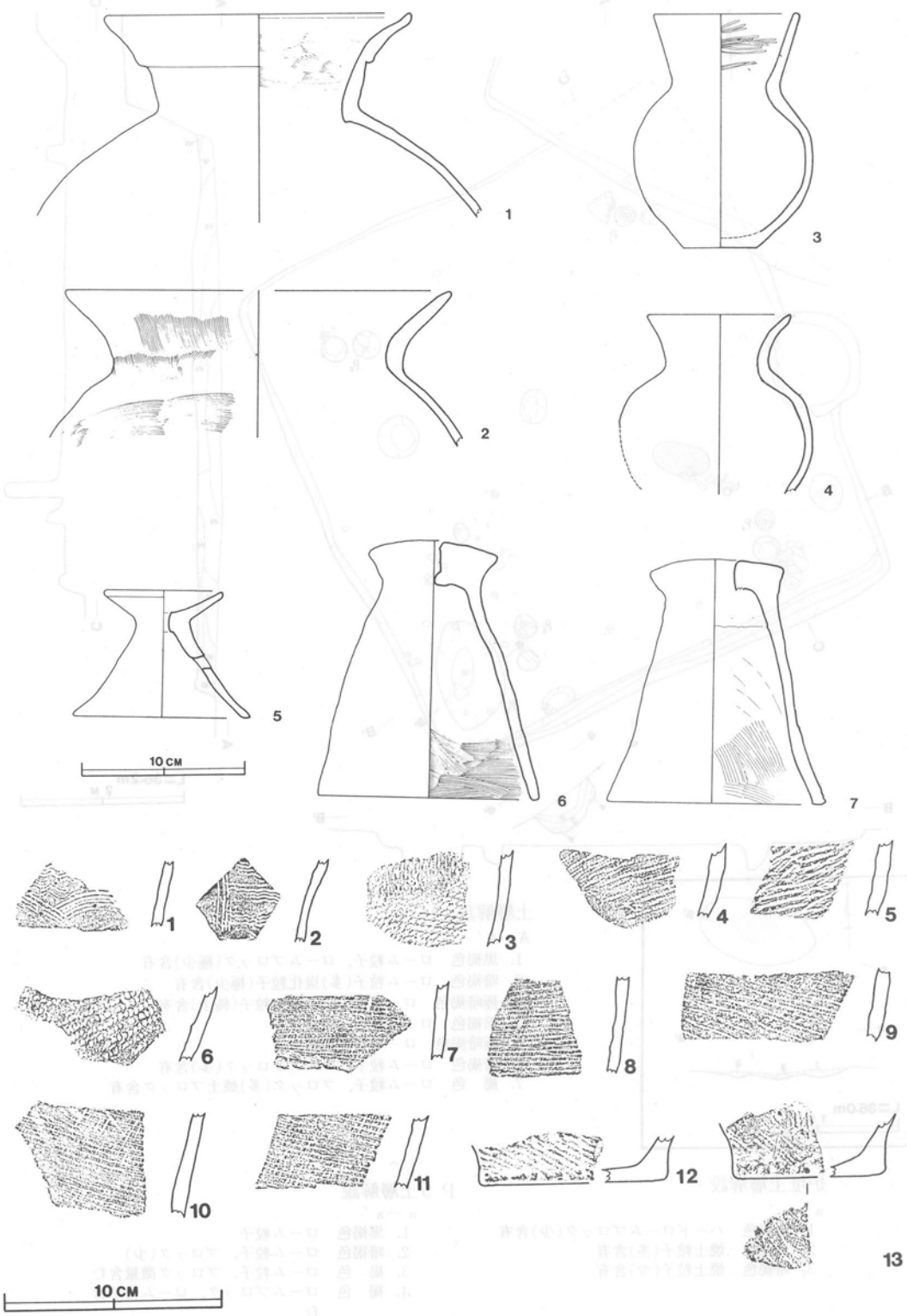
1. 暗褐色　ハードロームブロック(少)含有
2. 赤褐色　焼土粒子(多)含有
3. 暗褐色　焼土粒子(少)含有

P 5土層解説

a－a′

1. 黒褐色　ローム粒子
2. 暗褐色　ローム粒子，ブロック(少)
3. 褐　色　ローム粒子，ブロック微量含む
4. 褐　色　ロームブロック，ローム粒子含む

第130図　第77号住居址実測図



第131図　第77号住居址出土遺物実測・拓影図

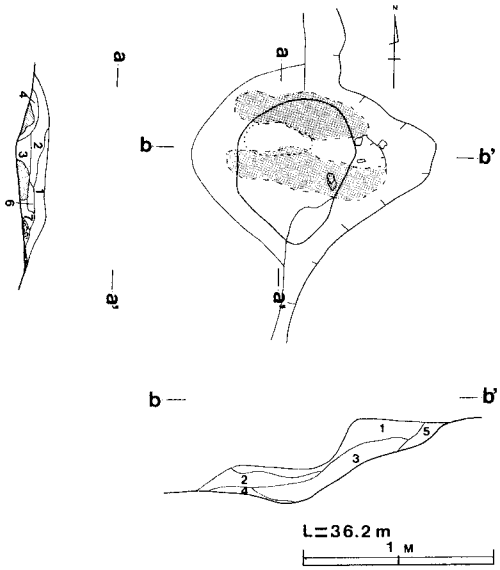
認され,北西コーナーには第36号住居址,西壁中央部には土壙が複合している。西側1.0mには,第37号住居址，第38号住居址，西側0.6mには第78号住居址が検出され，第38号住居址の南東コーナーと本址の南西コーナーは接している。本址は切り合い関係から第36号住居址，第38号住居址より古い遺構である。

本址は，隅丸方形の平面形を呈し，主軸方向はN－27°－Eで規模は，長軸6.53m，短軸6.25m，面積37.2㎡を測り壁高は15cm～26cmほどである。壁はゆるやかに外傾して立ちあがっている。壁溝はなく床面は硬く平坦である。北西部から炭化物を出土しているところから本址は火災に遭遇していると思われる。炉址は床面中央より西に位置し規模は長径70cm，短径40cm，深さ８cmほど楕円形に掘り窪められており焼土が含まれている。ピットは14個所確認されＰ１～Ｐ４は主柱穴と考えられる。南東コーナーのＰ５は貯蔵穴と思われ,長径129cm,短径80cm,深さ39cmの不整楕円形を呈している。覆土は６層からなり,東部地区は攪乱を受けているが他は自然堆積の状態を示している。

上層は黒褐色土で，ローム粒子と極少量のロームブロックを含有し，下層は黒褐色土で多量のローム粒子，ロームブロック，焼土ブロックと極少量の炭化粒子を含有している。出土遺物は，土師器を中心に弥生式土器の十王台式よりも古い型式の頸部，底部などの破片を覆土から数点出土している。土師器の完存率の良好なものをあげると，炉址付近床直上から甕口縁部（図131－2）と,南東コーナー床面直上から坩（図131－3），床面から器台（図131－5），壺（図131－4），西コーナー床面より壺（図131－1）を出土し，他に支脚２個（図131－６・７）と壺，甕などの破片を数点出土している。本址は，出土遺物等から古墳時代五領期に比定される遺構と思われる。

第78号住居址（図132・133）

本住居址は,調査区の中央部東側Ｃ４区ｆ２，ｆ３，ｇ２，ｇ３に確認され，北側0.7mには第77号住居址が，東側2.5mには第92号住居址が，西側3.7mには第81号住居址が検出されている。本址は隅丸正方形の平面形を呈し，主軸方向はN－91°－Eで長軸2.70m，短軸2.65m，面積5.3㎡を測る。壁高は35cm程で，　壁は垂直に立ちあがり，壁下には東・北壁を除いて幅11cm，深さ６cm内外の壁溝を有している。床面は中央部が硬くその周辺は軟らかい。ピットは３個所確認されＰ１は主柱穴と考えられるが，他は確認することができなかった。覆土は７層からなり自然堆積の状態を示し，確認面より床面中央に向って流れ込んでいる。上層は黒褐色土で少量のローム粒

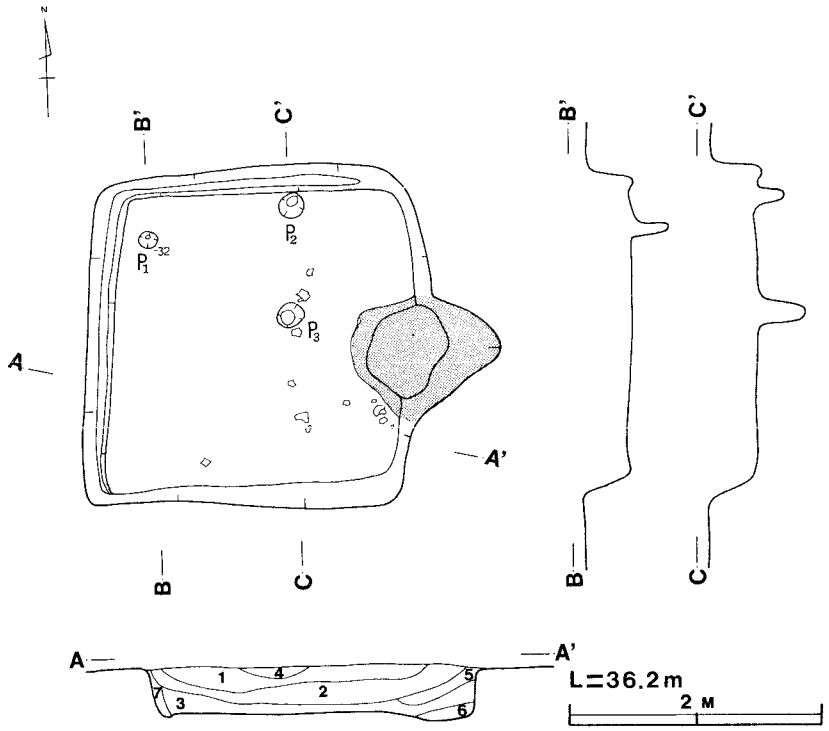


土層解説

a－a′　b－b′

1. 暗褐色　極少量の焼土粒子を含有し，しまりを帯びている
2. 黒褐色　少量の焼土粒子を含有し，しまりを帯びている
3. 灰褐色　少量の灰塊，焼土粒子を含有し若干しまりを帯びている
4. 暗褐色　少量の灰塊，焼土粒子を含有し非常にしまりを帯びている
5. 褐　色　極少量の焼土粒子を含有し、若干しまりを帯びている
6. 灰褐色　少量の焼土粒子を含有して灰層である
7. 暗赤褐色　少量の焼土粒子を含有し，さらさらしている

第132図　第78号住居址カマド実測図



土層解説

A－A′

1. 黒褐色　ローム粒子(少)焼土粒子(極少)含有
2. 極暗褐色　ローム粒子，焼土粒子(少)含有
3. 黒　色　ローム粒子，焼土粒子，炭化材含有
4. 暗褐色　ロームブロック含有
5. 黒褐色　ローム粒子(多)炭化材、焼土粒子(極少)含有
6. 暗褐色　ローム粒子(多)含有
7. 褐　色　ローム粒子(多)含有

133図　第78号住居址カマド実測図

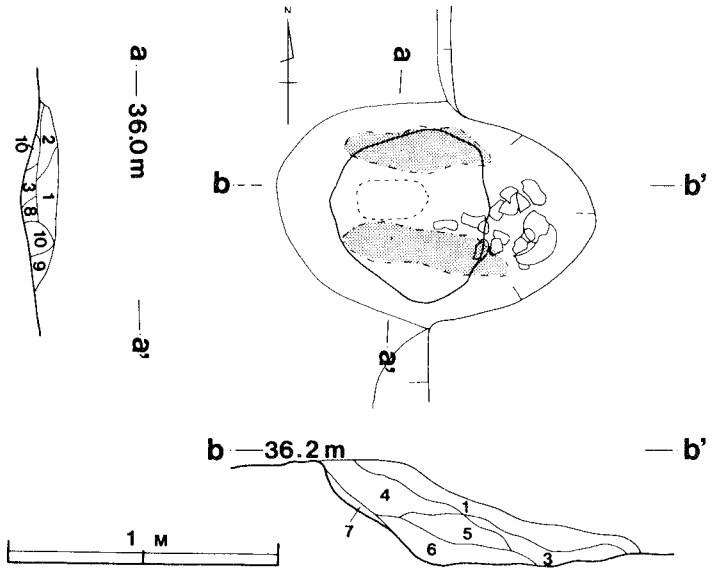
子と極少量の焼土粒子を含み，中層は極暗褐色土でローム粒子と少量の焼土粒子を含み，下層は黒色土でローム粒子，焼土粒子，炭化粒子を含んでいる。カマドは東壁の中央部西向きに構築し規模は長径110cm，短径50cm，東壁を76cm幅で，49cm程掘り込んで煙道としている。煙道部から土師器片を出土している。燃焼部は長径36cm，短径18cm，深さ４cm程の楕円形に掘り窪めている。

出土遺物は土師器の破片を中心に須恵器の坏片を南東部床面直上から共伴している。土師器の高坏片，坏片，甕口縁部などの細片を床面直上から出土している。その他の出土遺物は弥生式土器片数点と布目瓦を覆土から出土している。

本址は，出土遺物等から国分期に比定される遺構と思われる。

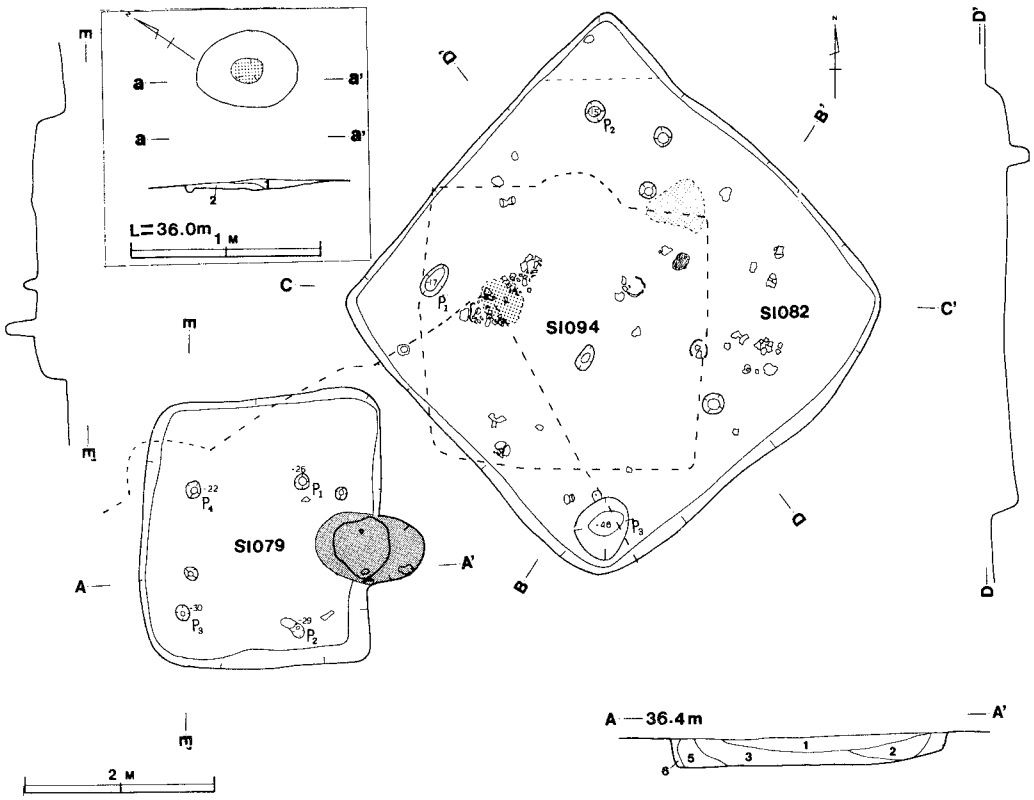
第79号住居址（図134～136）

本住居址は，調査区の中央部東側Ｃ４区ｆ４，ｆ５，ｇ５に確認され，本址のほとんどは第92号住居址の北部に複合し，本址は第92号住居址より新しい遺構である。北東0.5m に第94号住居址



土層解説
a—a′ b—b′
1. 褐　色　焼土粒子(極少)含有
2. にぶい赤褐色　焼土，灰(少)含有
3. 暗褐色　ハードローム粒子，焼土粒子(少)含有
4. にぶい褐色　焼土粒子(多)含有砂質の土層
5. 明赤褐色　焼土ブロック(多)含有灰質の層
6. 暗褐色　焼土粒子(多)含有灰層
7. 褐　色　焼土粒子(極少)含有
8. 暗褐色　焼土粒子(多)含有若干の砂質
9. 褐　色　焼土粒子，炭化粒子(少)含有砂質の土層
10. 灰褐色　粘土(少)含有砂質の土層

第135図　第79号住居址カマド実測図



第134図　第79・82号住居址実測図

土層解説

A－A′

1. 黒褐色　ローム粒子，焼土粒子，炭化材(極少)含有
2. 黒褐色　ローム粒子，焼土粒子，炭化材砂，含有
3. 極暗褐色　ローム粒子，焼土粒子，炭化材，砂，含有
4. にぶい赤褐色　砂質を含む
5. 暗褐色　ローム粒子(多)含有
6. 暗褐色　ローム粒子(多)含有

炉址土層解説

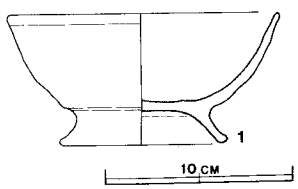
a－a

1. 暗褐色　焼土粒子(多)炭化粒子，砂質(少)含有
2. 明暗褐色　焼土ブロック含有

土層解説

B－B′

1. 暗褐色　ローム粒子(多)ロームブロック(少)含有
2. 極暗褐色　ローム粒子，炭化粒子(少)含(少)含有
3. 暗褐色　ローム粒子，炭化材，焼土粒子(少)含有
4. 褐　色　ローム粒子，炭化粒子(少)含有
5. 明褐色
6. 黒　色　ローム粒子(少)含有さらさらしている
7. 黒褐色　ローム粒子，焼土粒子 砂)含有



第136図　第79号住居址出土遺物実測図

・第82号住居址が，第92号住居址の北コーナーに複合し検出されている。南側3.6m には第74号住居址・第93号住居址が第92号住居址の南コーナーに複合して検出されている。本址は隅丸長方形の平面形を呈し，主軸方向はＮ－89°－Ｅで長軸2.81m，短軸2.50m，面積6.1㎡を測る。壁高は28cm～37cm程であり，壁はほぼ垂直に立ちあがっている。床面は中央部がやや硬いものの壁付近は軟らかい。ピットは６個所確認されＰ１～Ｐ４は主柱穴と考えられる。貯蔵穴は有していない。

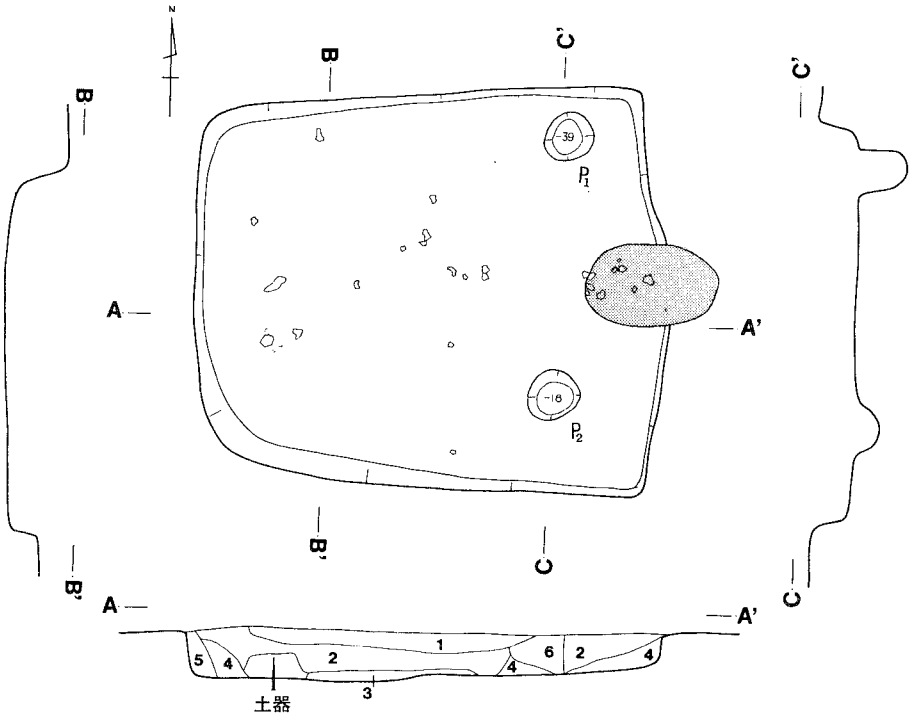
覆土は６層からなり，第92号住居址の覆土を切って本址は自然堆積の状態を示している。上層は黒褐色土でローム粒子と焼土粒子，炭化粒子を含み，下層は極暗褐色土でローム粒子，焼土粒子，炭化粒子を含んでいる。

カマドは東壁の中央から南よりに位置し，規模は長径93cm，短径53cmで，北壁を79cm幅で，50cmほど掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径28cm，短径15cm，深さ４cmほど楕円形に掘り窪めている。袖部は黒色土混りの砂質粘土で，カマドは西向きに構築されている。燃焼部から甕破片と内黒の高台付坏（図136－1）を出土している。出土遺物は非常に少なく床面直上などから土師器の細片を数点出土している。その他の出土遺物はカマドから布目瓦を出土し，他に弥生式土器片を数点出土している。本址は出土遺物等から国分期に比定される遺構と思われる。

第80号住居址（図137）

本住居址は，調査区の中央部東側Ｃ４区ｃ４，ｃ５に確認され，北側1.2mには第42号住居址，第44号住居址が，北東0.1mには第83号住居址が，東側1.0mには第49号住居址が，西側3.5mには第45号住居址が検出されている。本址は隅丸長方形の平面形を呈し，主軸方向はＮ－86°－Ｅで，規模は長軸3.80m，短軸3.15m，面積11.1㎡を測る。壁高は40cm内外であり，壁はほぼ垂直に立ちあがっている。床面は褐色で軟らかく平坦である。

ピットは２個所検出され，Ｐ１～Ｐ２は主柱穴と思われるが，他の柱穴は確認されなかった。覆土は６層からなり自然堆積の状態を示している。上層は極暗褐色土でローム粒子と少量の焼土粒子を含み，中層は暗褐色土で多量のローム粒子と極少量の焼土粒子を含み，下層は暗褐色土で多量のローム粒子とロームブロック，炭化粒子を含んでいる。カマドは東壁の中央部に位置し西向きに構築されているが，攪乱されてそのプランを確認することはできない。遺物は土師器を中心に須恵器の坏などの細片と弥生式土器の破片を覆土から数点出土している。土師器は，南東部P_2付近床面直上から坏等の破片を数点出土している。本址は，出土遺物等から国分期に比定される遺構と思われる。



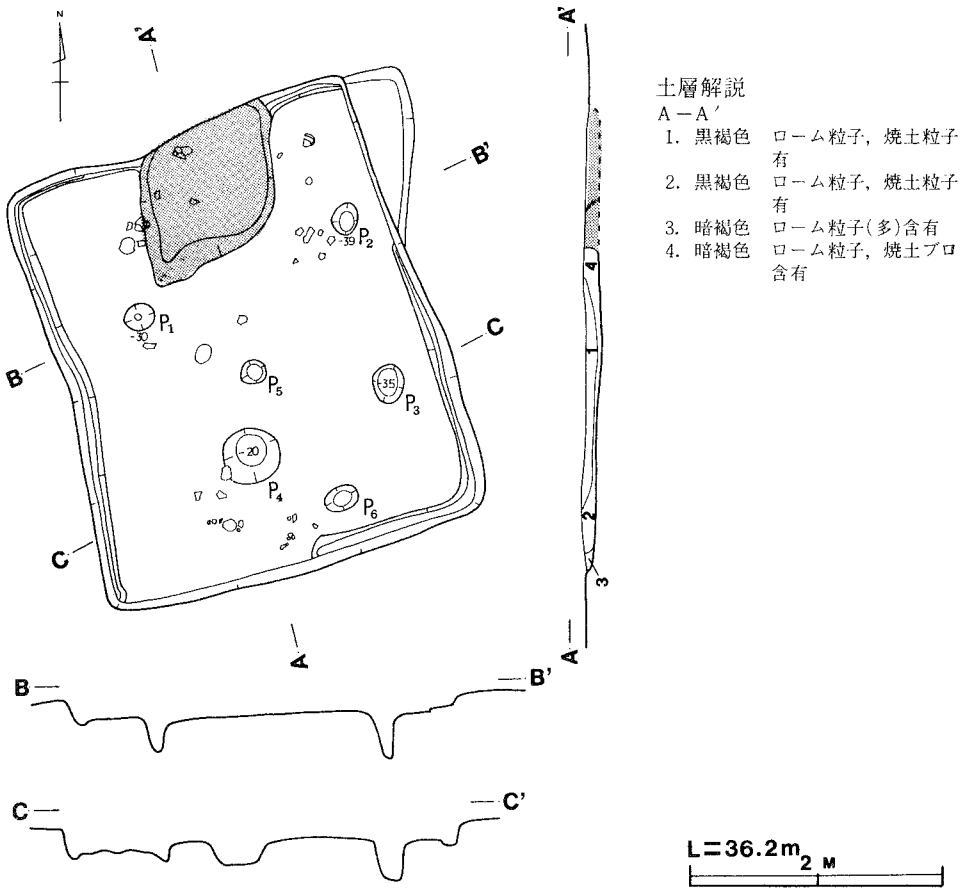
土層解説
A－A′
1. 極暗褐色　ローム粒子，焼土粒子(少)含有
2. 暗褐色　ローム粒子(多)焼土粒子(極少)含有
3. 暗褐色　ローム粒子(多)含有
4. 褐　色　ローム粒子，ブロック，炭化粒子　含有
5. 褐　色　ロームブロック(多)含有
6. 明褐色

第137図　第80号住居址実測図

第81号住居址（図138・139）

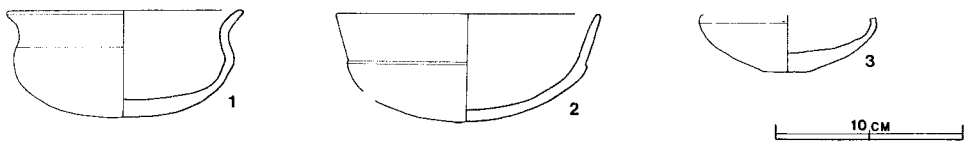
本住居址は，調査区の中央部Ｃ３区ｆ０，ｇ０，Ｃ４区ｆ１，ｇ１に確認され，北東2.8mには第38号住居址が，3.8mには第77号住居址が，東側3.7mには第78号住居址が，西側2.0mには方形周溝遺構が検出されている。本址は，隅丸長方形の平面形のを呈し，主軸方向はＮ－13°－Ｗで規模は長軸3.66m，短軸3.11m，面積9.8m²を測る。壁高は14cm～18cmであり，壁はゆるやかに外反して立ちあがり，壁下には幅10cm，深さ５cmの壁溝を有している。床面は中央部が非常に硬く，壁付近は軟らかい。

ピットは５個所確認されＰ１～Ｐ２は主柱穴と思われるが，貯蔵穴は有していない。覆土は４層からなり自然堆積の状態を示している。上層は黒褐色土でローム粒子と極少量の焼土粒子を含



土層解説
A－A′
1. 黒褐色　ローム粒子，焼土粒子(極少)含有
2. 黒褐色　ローム粒子，焼土粒子(極少)含有
3. 暗褐色　ローム粒子(多)含有
4. 暗褐色　ローム粒子，焼土ブロック，砂含有

第138図　第81号住居址実測図



第139図　第81号住居址出土遺物実測図

み，下層は黒褐色土で，ローム粒子，焼土粒子，焼土ブロックを含んでいる。カマドは北壁の中央部に付設されているが，削平されている。出土遺物は，土師器を中心に、須恵器の細片を覆土から数点出土している。土師器の完存率の良好なものをあげると床面直上から椀（図139—1），坏片（図139

－２），南壁付近床面直上から小型壺（図139—3）を出土している。その他の出土遺物は弥生式土器片で覆土から十王台式より古い型式の頸部片などの破片を数点出土している。

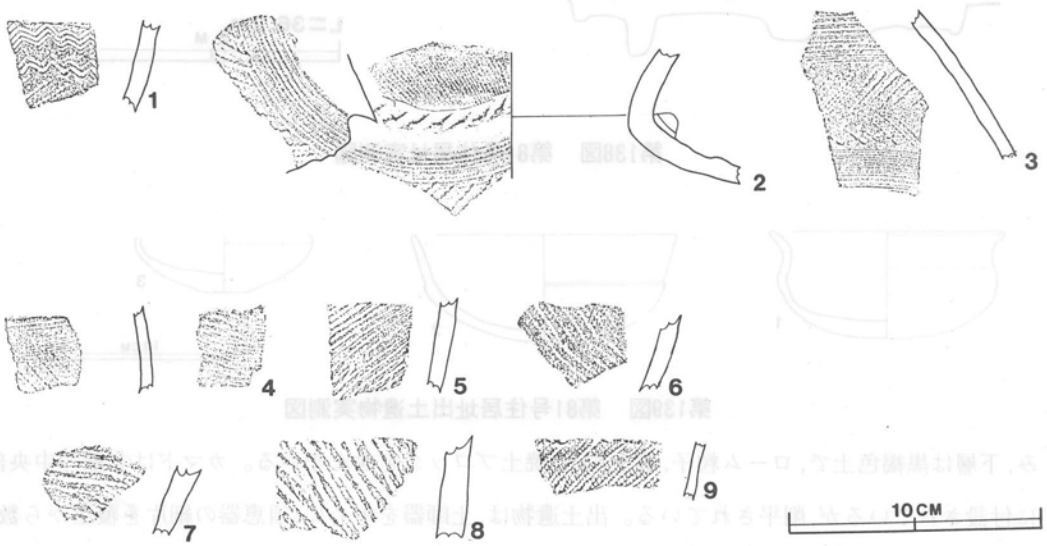
本址は，出土遺物等から古墳時代の鬼高期に比定される遺構と思われる。

第82号住居址（図134・140(1)(2)）

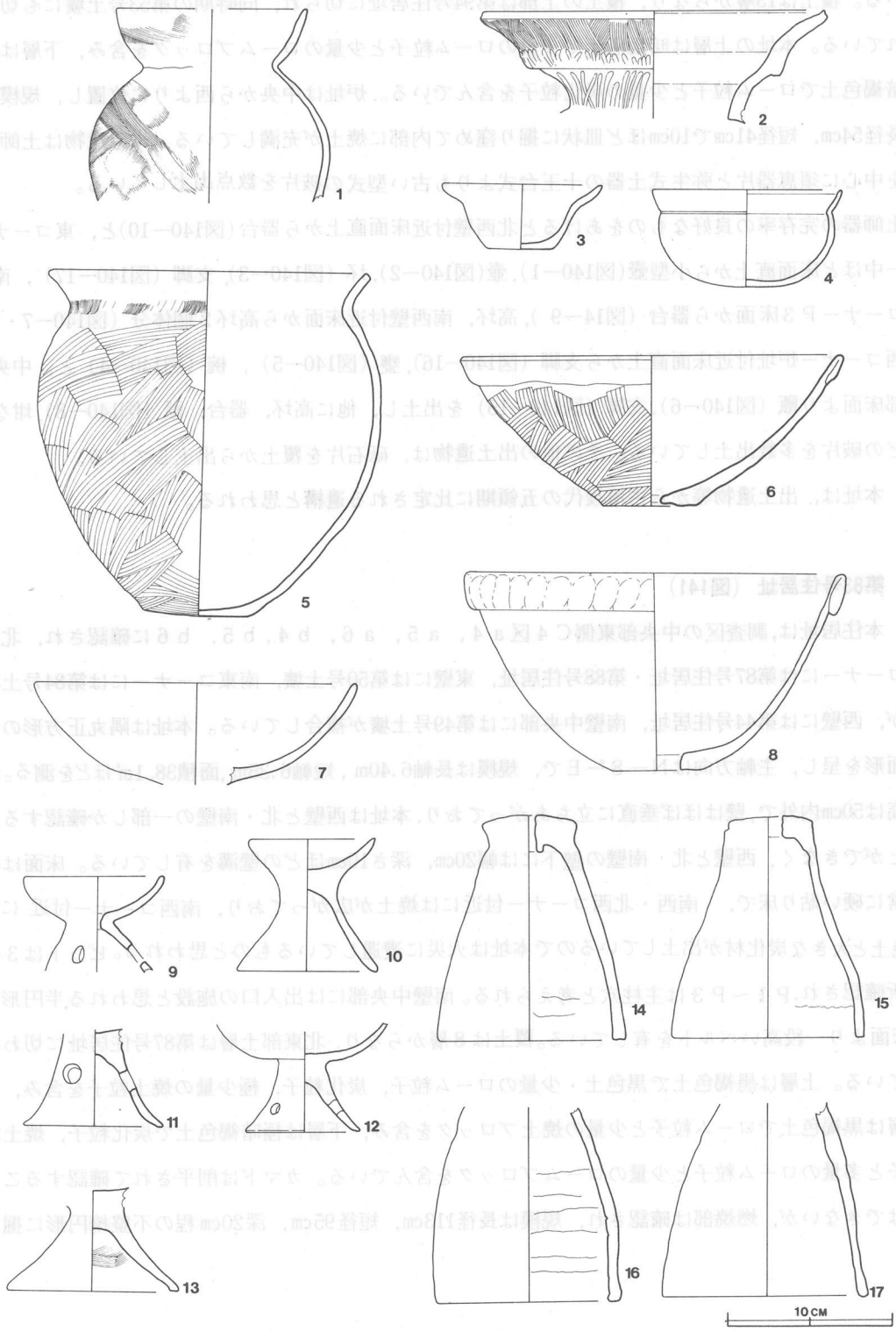
本住居址は，調査区の中央東端Ｃ４区ｅ５，ｅ６，ｆ５，ｆ６に確認され，中央部に第94号住居址が，東側に第53号土壙がすっぽりと複合している。北コーナーには第95号住居址が，南西部には第92号住居址が複合している。

本址は第92号住居址・第94号住居址より古く，第95号住居址・第53号土壙と同時期であるが，切り合い関係から第95号住居址・第53号土壙より新しい遺構である。本址は隅丸正方形の平面形を呈し，主軸方向はＮ—44°—Ｗで規模は長軸4.62m，短軸4.50m，面積18.7㎡を測る。壁高は20cm～30cm程であり，壁はややゆるやかに外傾して立ちあがっている。床面は暗褐色土で平坦であり，炉址付近が特に硬い。ピットは６個所確認されＰ１～Ｐ２は主柱穴と考えられるが，他の主柱穴は検出できなかった。

西コーナーのＰ３は貯蔵穴で，規模は長径70cm，短径58cm，深さ48cmほどで不整楕円形を呈して



第140(1)　第82号住居址出土遺物拓影図



第140図(2) 第82号住居址出土遺物実測図

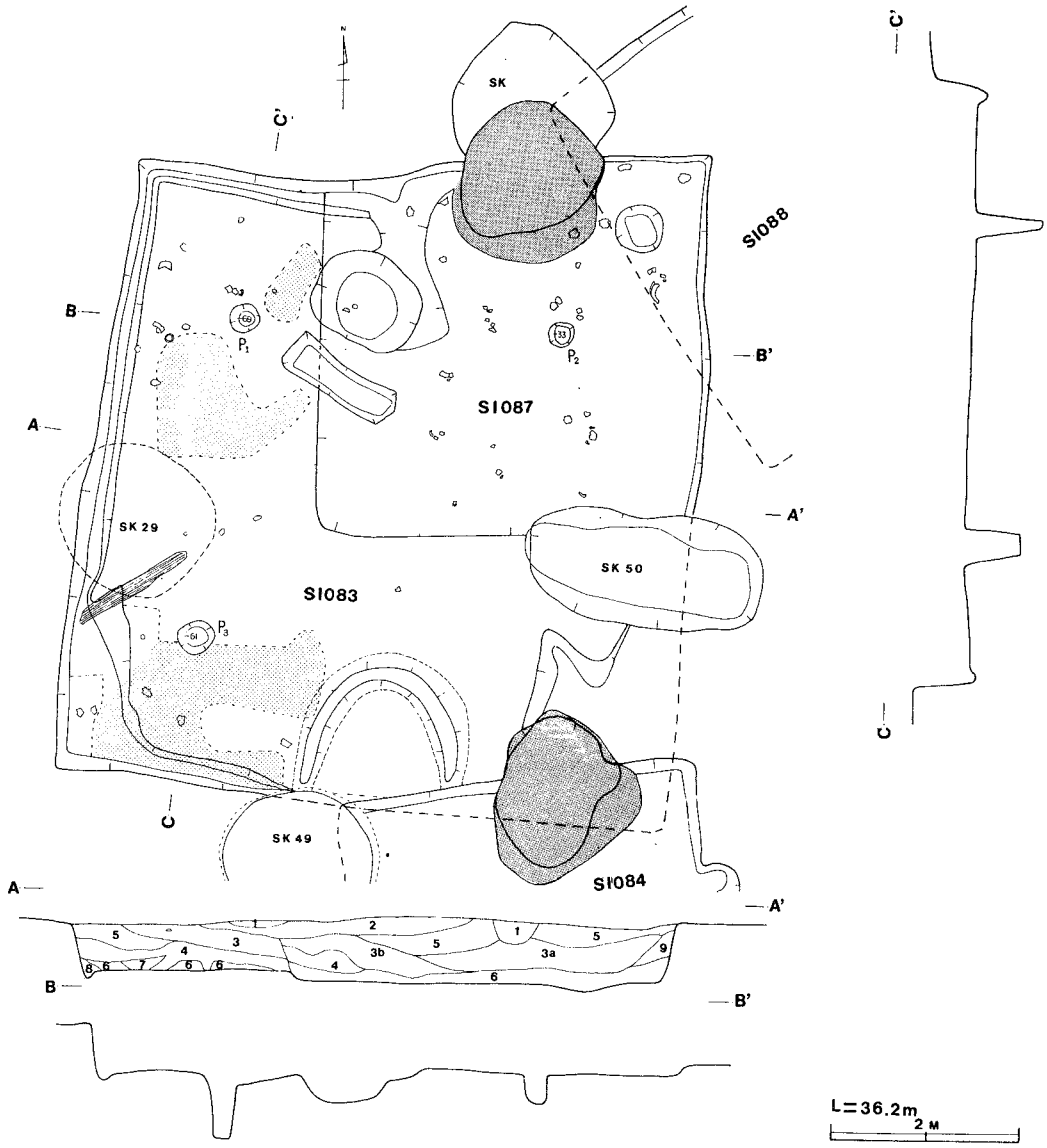
いる。覆土は13層からなり，覆土の上部は第94号住居址に切られ，同時期の第53号土壙にも切られている。本址の上層は暗褐色土で多量のローム粒子と少量のロームブロックを含み，下層は極暗褐色土でローム粒子と少量の炭化粒子を含んでいる。炉址は中央から西よりに位置し，規模は長径54cm，短径41cmで10cmほど皿状に掘り窪めて内部に焼土が充満している。出土遺物は土師器を中心に須恵器片と弥生式土器の十王台式よりも古い型式の破片を数点出土している。

土師器の完存率の良好なものをあげると北西壁付近床面直上から器台(図140—10)と，東コーナー中ほど床面直上から小型壺(図140—1)，壺(図140—2)，坏（図140—3)，支脚（図140—17），南コーナーＰ３床面から器台（図14—9)，高坏，南西壁付近床面から高坏２個体分（図140—7・13)西コーナー炉址付近床面直上から支脚（図140—16)，甕（図140—5），椀（図140—4）と，中央部床面より甑（図140—6)，支脚（図140—15）を出土し，他に高坏，器台，甑（図140—8)，坩などの破片を多数出土している。その他の出土遺物は，砥石片を覆土から出土している。

本址は，出土遺物等から古墳後代の五領期に比定される遺構と思われる。

第83号住居址（図141）

本住居址は，調査区の中央部東側Ｃ４区ａ４，ａ５，ａ６，ｂ４，ｂ５，ｂ６に確認され，北東コーナーには第87号住居址・第88号住居址，東壁には第50号土壙，南東コーナーには第84号土壙が，西壁には第44号住居址，南壁中央部には第49号土壙が複合している。本址は隅丸正方形の平面形を呈し，主軸方向はＮ－８°－Ｅで，規模は長軸6.40m，短軸6.35m，面積38.1㎡ほどを測る。壁高は50cm内外で，壁はほぼ垂直に立ちあがっており，本址は西壁と北・南壁の一部しか確認することができなく，西壁と北・南壁の壁下には幅20cm，深さ10cmほどの壁溝を有している。床面は非常に硬い貼り床で，南西・北西コーナー付近には焼土が広がっており，南西コーナー付近には焼土と大きな炭化材が出土しているので本址は火災に遭遇しているものと思われる。ピットは３個所確認され，Ｐ１～Ｐ３は主柱穴と考えられる。南壁中央部には出入口の施設と思われる，半円形の床面より一段高いベルトを有している。覆土は８層からなり，北東部土層は第87号住居址に切われている。上層は黒褐色土で黒色土・少量のローム粒子，炭化粒子，極少量の焼土粒子を含み，中層は黒褐色土でローム粒子と少量の焼土ブロックを含み，下層は極暗褐色土で炭化粒子，焼土粒子と多量のローム粒子と少量のロームブロックを含んでいる。カマドは削平されて確認することはできないが，燃焼部は確認され，規模は長径113cm，短径95cm，深20cm程の不整楕円形に掘り



土層解説

A－A′

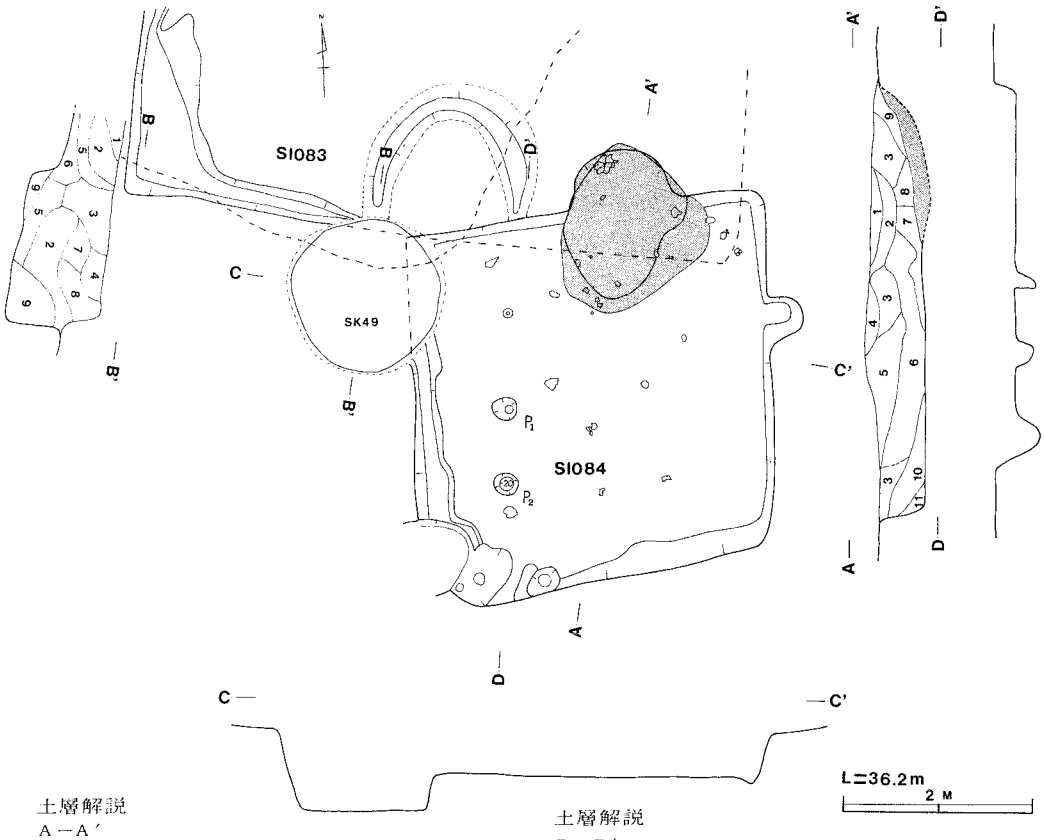
1. 黒　色　ローム粒子含有
2. 極暗褐色　ローム粒子，焼土粒子(極少)炭化粒子(少)含有
3. 黒褐色　ローム粒子，焼土ブロック(少)含有
3a．黒褐色　ローム粒子，焼土ブロック(極少)含有
3b．黒褐色　ローム粒子，焼土ブロック，ハードロームブロック含有
4. 極暗褐色　炭化材，ローム粒子(多)ブロック(少)含有
5. 暗褐色　ローム粒子，ローム小ブロック(多)炭化粒子(極少)含有
6. 暗褐色　ローム粒子，ブロック(多)炭化材，焼土粒子(極少含有
7. 極暗褐色　ロームブロック(少)炭化材(多)含有
8. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化材，焼土粒子，含有
9. 褐　色　さらさらしている

第141図　第83・87号住居址50号土壙実測図

窪められている。出土遺物は須恵器の高坏,坏,盤などの破片を出土し，土師器は，中央部から甕の破片などを数点出土している。その他の出土遺物は鉄製品や鉄滓，砥石を出土している。本址は出土遺物等から鬼高期に比定される遺構と思われる。

第84号住居址（図142～144）

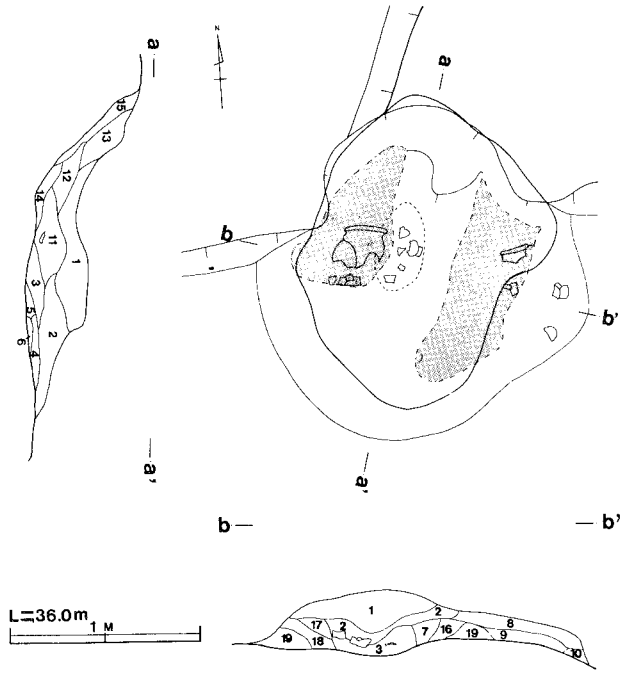
本住居址は，調査区の中央部東側Ｃ４区ｃ５，ｃ６，ｄ５，ｄ６に確認され，北壁は第83号住居址と北西コーナーは第49号土壙と複合している。南西コーナーは攪乱されている。本址は第83号住居址と同時期の遺構であるが，第83号住居址の南東コーナーを切って本址が構築されているの



土層解説
A－A′
1. 暗褐色　ローム粒子(多)小ブロック(極少)含有
2. 黒褐色　ローム粒子，小ブロック(多)焼土粒子(極少)含有
3. 極暗褐色　ローム粒子，ブロック(少)含有
4. 褐　色　ローム粒子(多)含有
5. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化材，焼土粒子(極少)含有
6. 極暗褐色　ローム粒子，焼土粒子，炭化材，ロームブロック含有
7. 黒褐色　砂質粘土，炭化材，ロームブロック含有
8. 暗褐色　ローム粒子，砂質粘土，炭化材，含有
9. 灰褐色　ローム粒子，粘土粒子，砂，含有
10. 黒　色　ローム粒子含有
11. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化材含有

土層解説
B－B′
1. 黒褐色　ローム粒子(多)炭化材（微）
2. 暗褐色　ローム粒子(多)ブロック(少)炭化材(少)含む
3. 暗褐色　ローム粒子(少)ブロック(微)焼土粒子，炭化材(微)含む
4. 暗褐色　ローム粒子(多)焼土ブロック(少)炭化粒子(微)
5. 暗褐色　ローム粒子(多)焼土粒子(微)ロームブロック(少)含む
6. 褐　色　ローム粒子，ブロック(多)白色粘土(微)含む
7. 暗褐色　ローム粒子(少)白色粘土(微)焼土粒子(微)含む
8. 黒褐色　ローム粒子(多)ブロック(微)含む

第142図　第84号住居址・第49号土壙実測図



土層解説

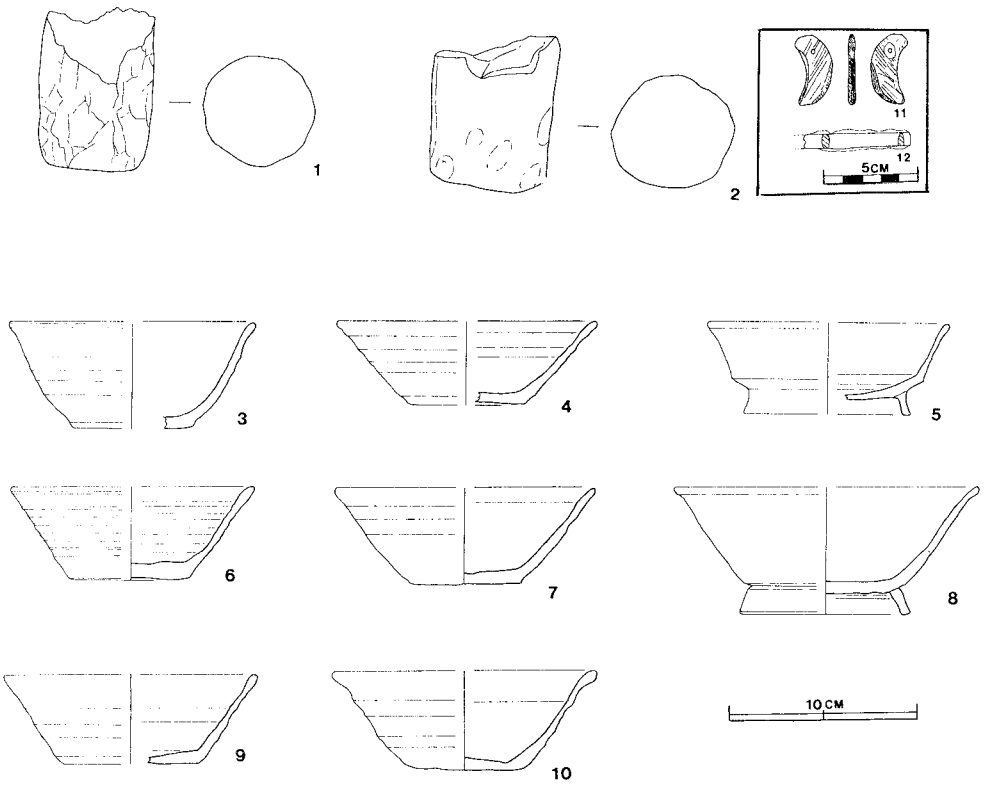
a－a′　b－b′

1. 褐　色　砂粒(多)粘土ブロック(少)含有
2. 褐　色　砂粒子，ハードローム粒子(少)含有
3. 暗褐色　焼土粒子(少)含有砂質の土層
4. 暗褐色　ハードローム粒子(少)含有，砂質の土層
5. 暗赤褐色　焼土粒子，ハードローム粒子(多)含有
6. 暗褐色　ハードローム粒子(少)含有
7. 暗褐色　ハードローム粒子(少)含有，砂質土層
8. 灰褐色　焼土粒子(少)含有砂層
9. 褐　色　焼土，砂，(少)含有
10. 褐　色　ハードローム粒子(少)含有
11. にぶい褐色　粘土(少)含有，砂層
12. 褐　色　ハードローム粒子(極少)含有，砂層
13. にぶい赤褐色　熱を受けた砂層
14. 暗赤褐色　焼土粒子(少)含有，砂質土層
15. 褐　色　ハードロームブロック(多)含有砂質土層
16. 黒褐色　ハードロームブロック(少)含有砂質土層
17. 極暗赤褐色　焼土(少)含有，砂質土層
18. 黒褐色　粘土ブロック(少)含有，砂質土層
19. 灰黄褐色　粘土(多)含有

第143図　第84号住居址カマド実測図

で，第83号住居址より新しい遺構である。また第49号土壙は本址よりも新しい遺構である。東側0.8mには第91号住居址が，西側2.4mには第80号住居址が，南側0.5mに 第96号住居址が検出されている。本址は長方形の平面形を呈し，主軸方向はN－5°－Wで，規模は長軸3.90m，短軸3.75m，面積12.1㎡を測る。壁高は55cm～60cm程であり，壁はゆるやかに外傾して立ちあがっている。床面は褐色で硬く踏み固められた状態を呈している。ピットは2個検出されP2は主柱穴と思われる。床面から炭化物を出土しているので火災に遭遇していると思われる。覆土は11層からなり自然堆積の状態を示している。上層は褐色土・暗褐色土で多量のローム粒子と炭化粒子，極少量の焼土粒子を含み，下層は極暗褐色土でローム粒子，ロームブロック，焼土粒子を含んでいる。カマドは北壁の中央から東よりに位置し，規模は長径150cm，短径120cmで，北壁を100cm幅で，53cm掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径46cm，短径25cm，深さ4cmほど楕円形に掘りくぼめている。袖部は黒色土混りの砂質粘土で，カマドは南向きに構築されている。燃焼部内から土師器の甕口縁部などの破片を数点出土している。

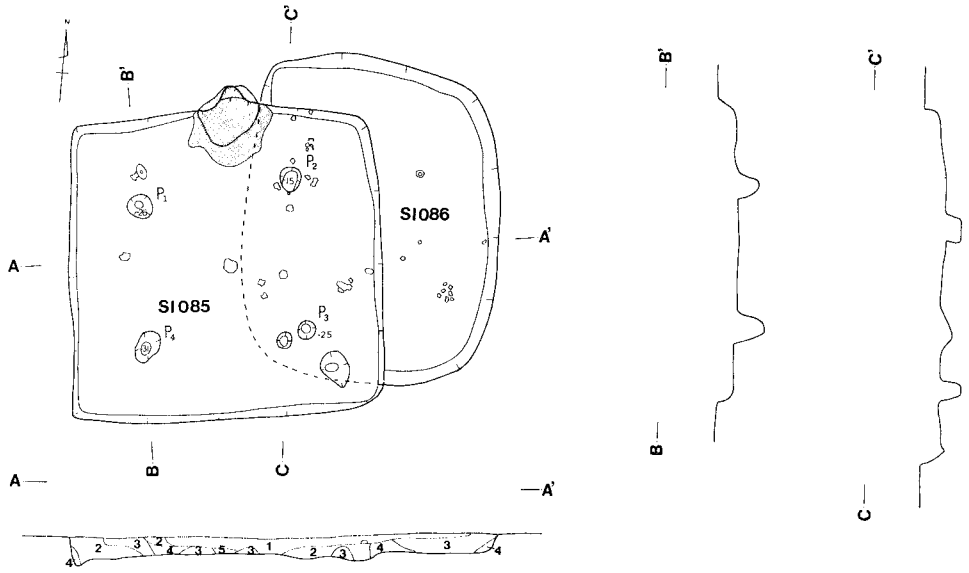
出土遺物は須恵器を中心に，土師器は甕，支脚（図144—1・2），壺などの破片を数点出土しただけである。須恵器の完存率の良好なものをあげると，北東コーナー付近床面直上から高台付坏・坏片2点（図144—5・7），中央部床面直上から坏片（図144—3）と，南西コーナーから坏（図144—4）を出土し，他に坏（図144—9）などの細片を多数出土している。その他の出土遺物は鉄製品，石製模造品の勾玉(図144—11)，砥石などを出土している。本址は出土遺物等から国分期の遺構と思われる。



第144図　第84号住居址出土遺物実測図

第85号住居址（図145・146）

本住居址は，遺跡の南西部Ｄ３区ｅ２，ｅ３に確認され，本址の東側は，第86号住居址の床面を17cmほど掘り込み，約30%を削除しているので，第86号住居址よりも新しい遺構である。北側1.3mには第58号住居址が検出されている。本址の主軸方向はＮ－９°－Ｗで規模は長軸3.30m，短軸3.23m，面積9.5㎡ほどでほぼ正方形の平面形を呈している。壁高は17cm～32cmほどで壁は緩やかに外傾して立ちあがっている。床面は平坦で硬く踏み固められた状態である。ピットは６個所確認されＰ１～Ｐ４は主柱穴と考えられる。覆土は11層からなり，桑の根による攪乱を受けている。上層は，黒褐色土で少量のローム粒子を含み，下層は，暗褐色土で，多量のローム粒子，少量の



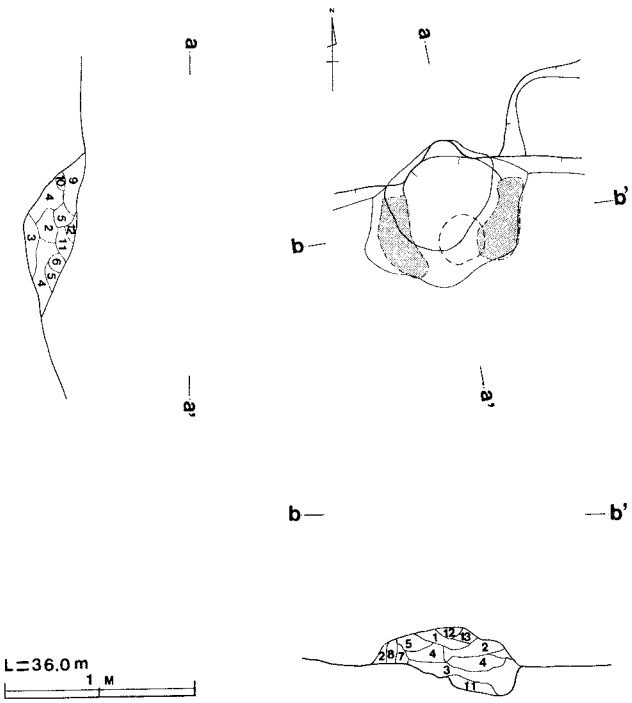
土層解説

A－A′

1. 黒褐色　ローム粒子(少)含有
2. 暗褐色　ローム粒子(多)ブロック(少)焼土ブロック(極少)含有
3. 暗褐色　ローム粒子(多)ブロック(少)含有
4. 黒褐色　ローム粒子(少)ブロック(極少)含有
5. 黒　色　ローム粒子(極少)含有

L=36.0m
2 M

第145図　第85・86号住居址実測図



土層解説

a－a′　b－b′

1. 黒褐色
2. 暗褐色　ローム粒子，焼土粒子含有
3. 暗褐色　焼土粒子(多)ローム粒子(少)含有
4. 極暗赤褐色　焼土ブロック，焼土粒子含有
5. 暗赤褐色　焼土粒子(多)ローム粒子(少)含有
6. 極暗褐色　粘土ブロック，焼土粒子含有
7. 灰褐色　砂質粘土
8. 暗褐色　ローム粒子，粘土粒子含有
9. 極暗褐色　ローム粒子，焼土粒子含有
10. 黒褐色　焼土粒子(多)含有
11. 褐　色　ローム粒子(多)含有
12. 暗褐色　ローム粒子(極少)含有
13. 極暗褐色　ローム粒子(少)含有

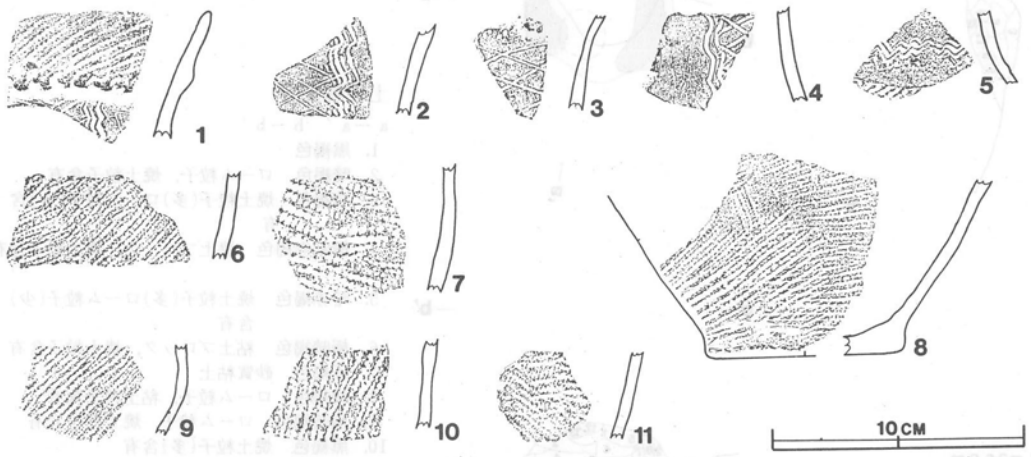
L=36.0m
1 M

第146図　第85号住居址カマド実測図

ロームブロック,極少量の焼土ブロックを含んでいる。カマドは北壁の中央から東よりに付設され,規模は長径75cm，短径70cmで,北壁を25cm幅,で10cmほど掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径25cm,短径22cmで,深さ6cmほど円形に掘り窪められている。出土遺物は非常に少なく，土師器の高坏片を北西コーナー床面直上から出土し，他は甕，甑，高坏などの細片を数点出土したのみである。その他，須恵器の細片を数点と弥生式土器片を数点出土している。本址の時期を決定するにたる遺物は少ないがほぼ古墳時代の鬼高期に比定される遺構と思われる。

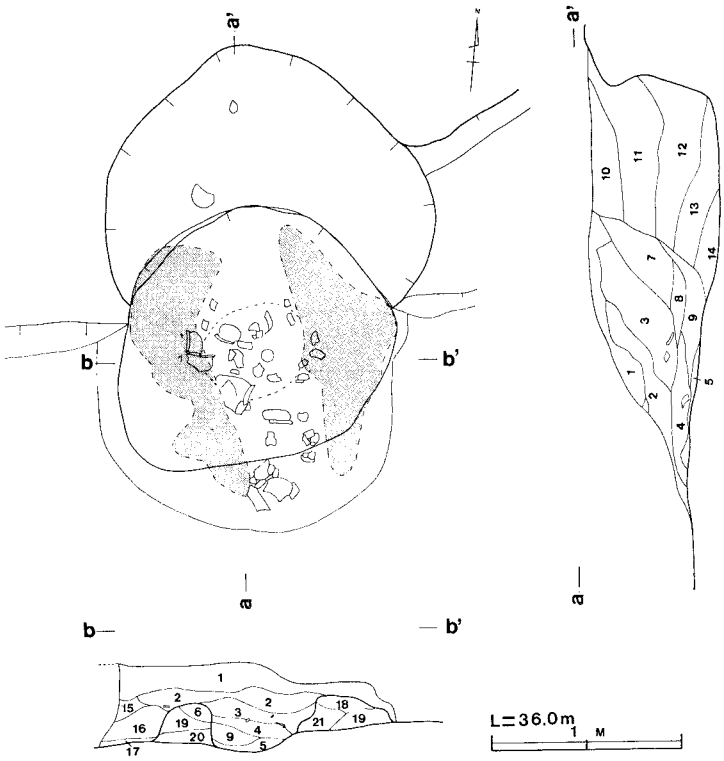
第86号住居址（図145・147）

本住居址は,調査区の南西部D３区ｄ３，ｅ３に確認され，本址の西側は第85号住居址に30%ほど削除されているので,本址は第85号住居址より古い遺構である。本址の主軸方向はＮ－３°－Ｗで,規模は長軸3.32m，短軸2.41m,面積6.7㎡ほどでほぼ隅丸長方形の平面形を呈している。壁高は25cmほどで外傾して立ちあがっている。床面は褐色で踏み固められた状態を呈している。ピットは検出されない。覆土は４層からなり,第85号住居址に削除されなかった残存部は自然堆積の状態を示している。上層は黒褐色土で少量のローム粒子を含み，下層は暗褐色土で多量のローム粒子と少量のロームブロックを含んでいる。炉址は検出されなかった。出土遺物は，弥生式土器の口縁部，口辺部，胴部，底部などの破片を多数出土しており，これらは十王台式より古い型式の土器片と思われる。本址は弥生時代後期の遺構と思われる。



第147図　第86号住居址出土遺物拓影図

第87号住居址（図148・149）



土層解説
a－a′　b－b′
1. 黒褐色　ハードローム粒子(少)含有
2. 黒褐色　焼土粒子(極少)含有砂質の土層
3. 褐　色　焼土ブロック(少)含有砂質の土層
4. 褐　色　焼土ブロック(少)含有山砂層
5. 灰褐色　ハードロームブロック(少)含有砂質の土層
6. 暗褐色　焼土粒子(少)含有砂質土層
7. 褐　色　焼土(少)含有砂質の土層
8. 暗褐色　灰(少)含有砂質の土層
9. 暗褐色　焼土(少)含有灰層
10. 暗褐色　焼土粒子(極少)含有
11. 極暗褐色　ハードローム粒子(少)灰(極少)含有
12. 暗褐色　ハードローム粒子，灰(極少)含有
13. 暗褐色　ハードロームブロック(少)含有
14. 暗褐色　ハードロームブロック(少)含有
15. 暗褐色　砂質を帯びた土層
16. 黒褐色　ハードローム粒子(極少)含有砂炭化物(多)含有
17. 黒褐色　ハードローム粒子(極少)炭化物(多)含有
18. にぶい褐色　粘土(少)含有砂層
19. 黒褐色　粘土
20. 黒褐色　ハードローム粒子(少)含有
21. 灰褐色　粘土(少)含有砂層

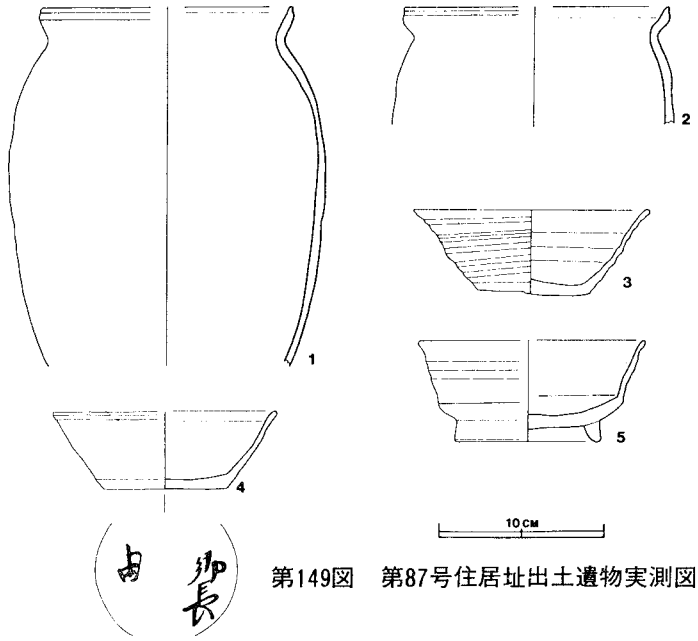
第148図　第87号住居址カマド実測図

本住居址は，遺跡の中央部東側Ｃ４区ａ５，ａ６，ｂ５，ｂ６に確認され，北東コーナーは第88号住居址と西側は第83号住居址と南東コーナーには第50号土壙が複合している。

本址は，第83号住居址，第88号住居址，第50号土拡よりも新しい遺構で，それらの住居址の床面にロームを貼り構築されていた。本址は推定で正方形の平面形を呈し，主軸方向は，Ｎ－3.5°－Ｅで規模は長軸4.10m，短軸3.90m，面積14.4㎡ほどを測る。壁は北壁のみ残存しており，壁高は45cmほどである。床面は硬く凸凹している。柱穴と思われるピットは確認されなかった。覆土は８層からなり自然堆積の状態を示している。上層は，暗褐色土で多量のローム粒子，ロームブロックと極小量の炭化粒子を含み，中層は黒褐色土で，少量のローム粒子と焼土粒子を含み，下層は暗褐色土で多量にローム粒子，ロームブロックと極少量の炭化粒子，焼土粒子を含んでいる。

カマドは，北壁の中央に付設され，規模は長径142cm，短径123cmで，北壁を140cm幅で，53cm掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径58cm，短径46cm，深さ３cm程楕円形に掘りくぼめている。

出土遺物は，土師器と須恵器を共伴して出土している。カマドの燃焼部から焚口部にかけて土師器の甕２個体分（図149－１・２）と細片を多数出土している。須恵器はカマド 内燃焼部等から高台付坏・坏３個体分（図149－３・４・５）を出土し，坏底部(図149－4）には「由・郷長」



第149図　第87号住居址出土遺物実測図

の墨書を確認することができる。北東コーナー床面直上より坏と他に細片を多数出土している。

その他の出土遺物は，鉄滓を数点出土している。本址は出土遺物等から国分期に比定される遺構と思われる。

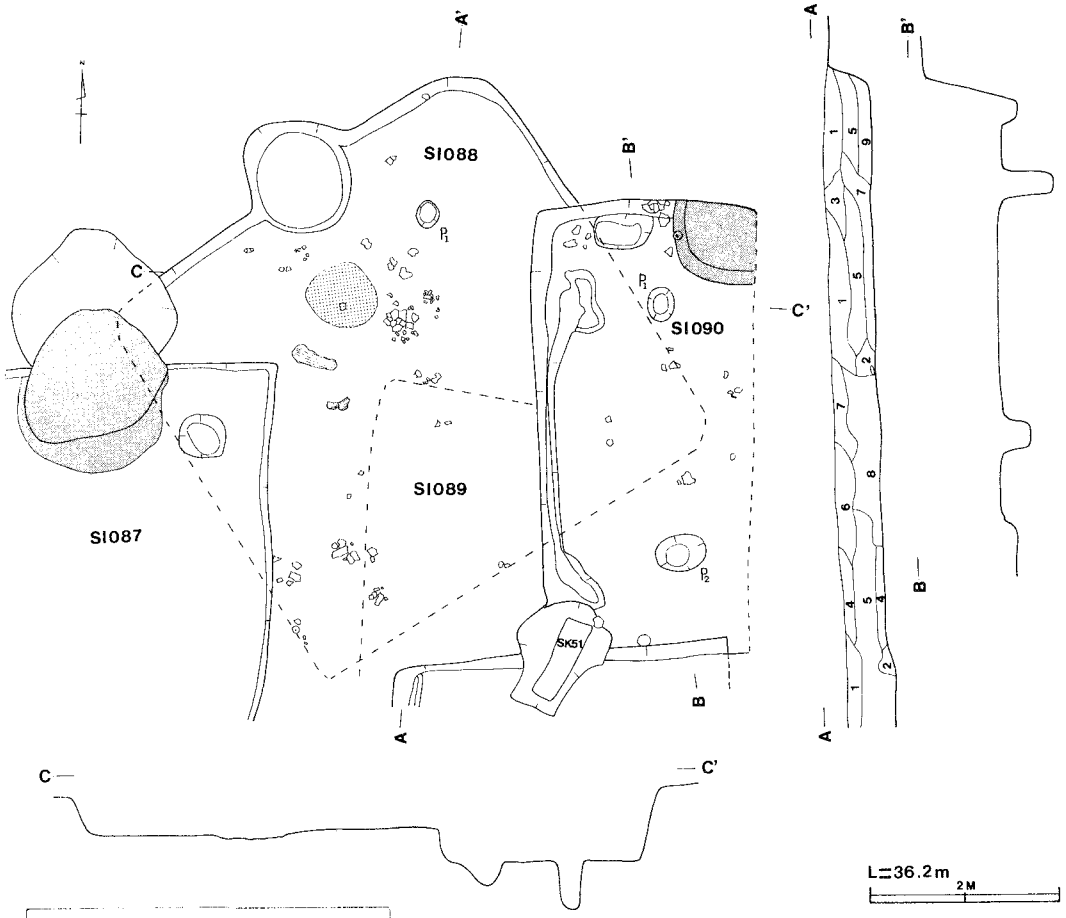
第88号住居址（図150・151）

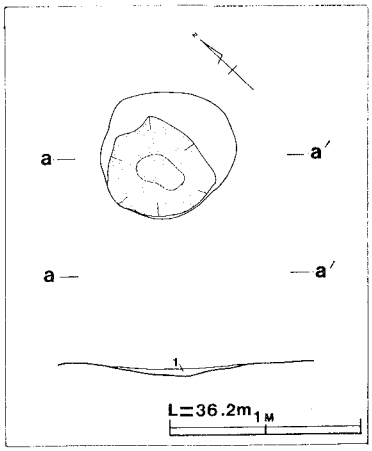
本住居址は，調査区の中央部東側Ｂ４区ｊ６，ｊ７，Ｃ４区ａ６，ａ７に確認され，本址は北西付近と北コーナーを残すのみで，東コーナーには　第90号住居址が，西コーナーには　第87号住居址が，南コーナーには第89号住居址が複合している。本址は第87号住居址・第90号住居址より古い遺構である。(第89号住居址のプランは複雑に遺構が複合しているため，　　はっきり把握することはできなかった。)推定で本址は，ほぼ正方形の平面形を呈し，主軸方向はＮ－55°－Ｅで，規模は長軸4.90m，短軸4.75m，面積21.3㎡ほどを測る。壁高は40cm内外であり，壁はゆるやかに外反して立ちあがっている。床面は硬く踏み固められた状態を示しており割合に凸凹している。

炉址は中央から北よりに位置し規模は長径70cm，短径65cmの楕円形を呈し，燃焼部は皿状に掘り窪められ焼土が充満していた。

主柱穴と思われるピットは１個所確認されている。覆土は９層からなり，複雑な遺構の複合状態を示している。上層は黒褐色土・暗褐色土で，多量のローム粒子と極少量のロームブロックを含み，下層は極暗褐色土でローム粒子と少量の白色粘土を含んでいる。

出土遺物は，土師器を中心に覆土から須恵器片，弥生式土器片を多数出土している。土師器の完存率の良好なものをあげると，炉址付近床面より甕片（図151－1），高坏片（図151－4），南コーナー床面直上から器台片（図151－3），北コーナー床面直上から支脚を出土し，他に覆土から甕(図151－2)などの破片を数点出土している。その他の出土遺物は，覆土から弥生式土器の破片を出土し図151－１・２は長岡式に比定され，他は十王台式に比定される破片である。他には砥石，土製紡錘車（図151－5），墨書土器を出土している。本址は古墳時代五領期に比定される遺構と思われる。





土層解説

A－A′

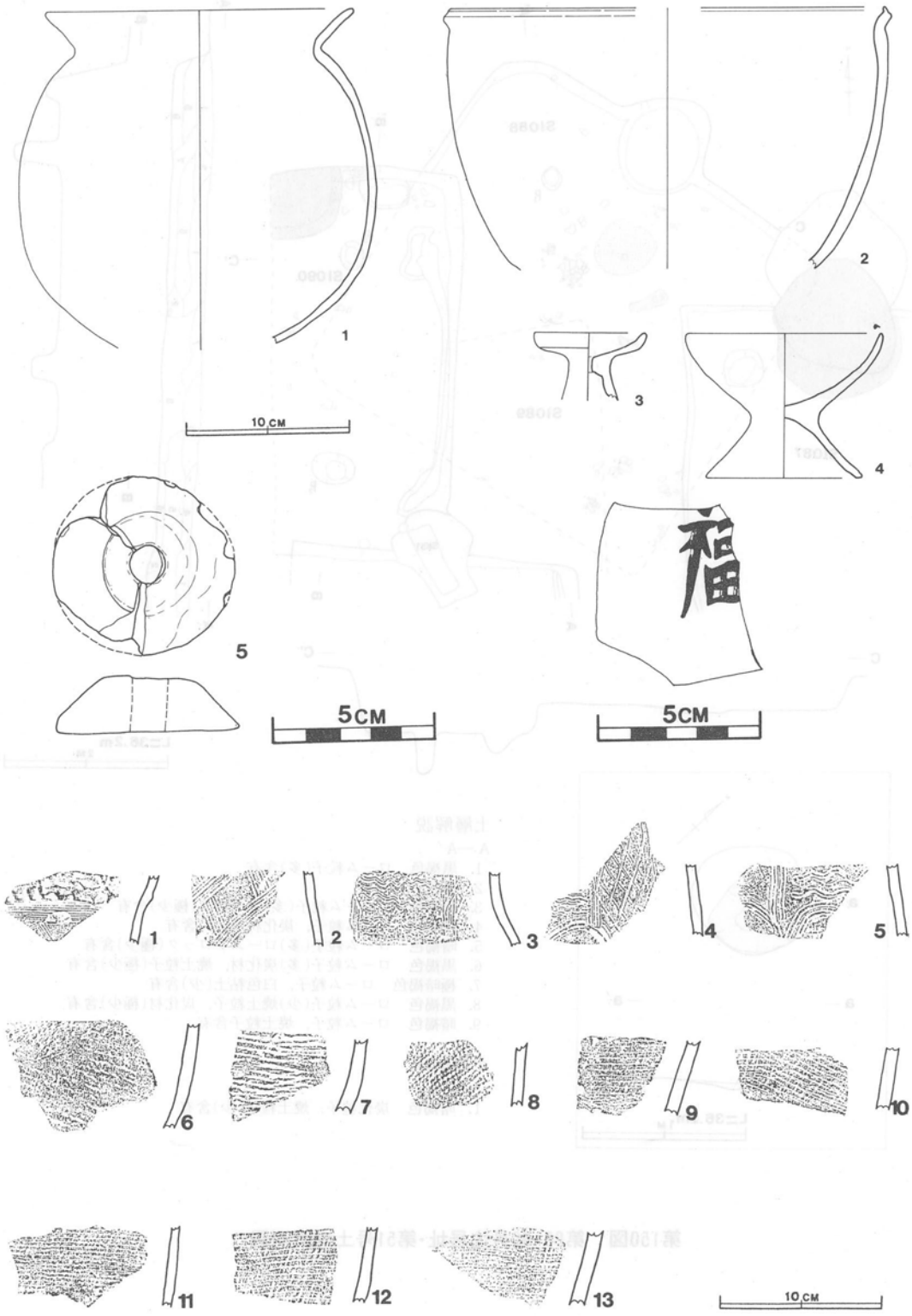
1. 黒褐色　ローム粒子(多)含有
2. 褐色
3. 極暗褐色　ローム粒子(多)ブロック(極少)含有
4. 暗褐色　ローム粒子，炭化材(極少)含有
5. 暗褐色　ローム粒子(多)ロームブロック(極少)含有
6. 黒褐色　ローム粒子(多)炭化材，焼土粒子(極少)含有
7. 極暗褐色　ローム粒子，白色粘土(少)含有
8. 黒褐色　ローム粒子(少)焼土粒子，炭化材(極少)含有
9. 暗褐色　ローム粒子，焼土粒子含有

土層解説

a－a′

1. 暗褐色　炭化粒子，焼土粒子(少)含有

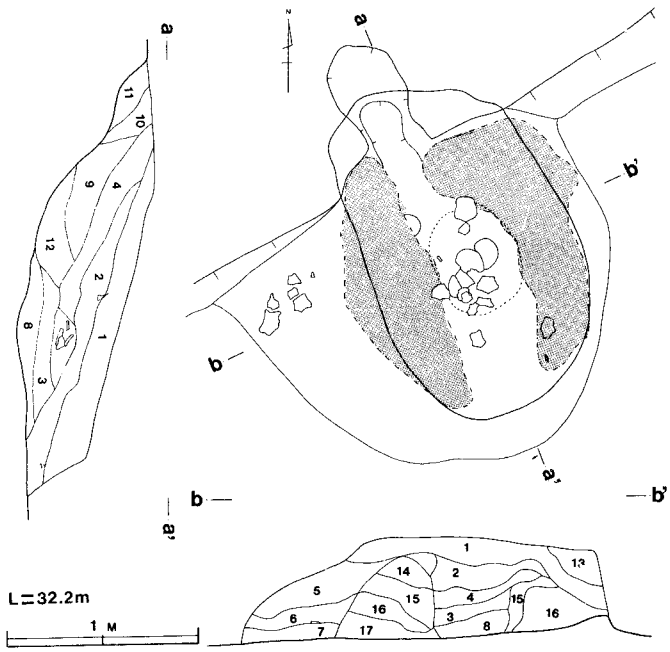
第150図　第88・90号住居址・第51号土壙実測図



第151図　第88号住居址出土遺物実測・拓影図

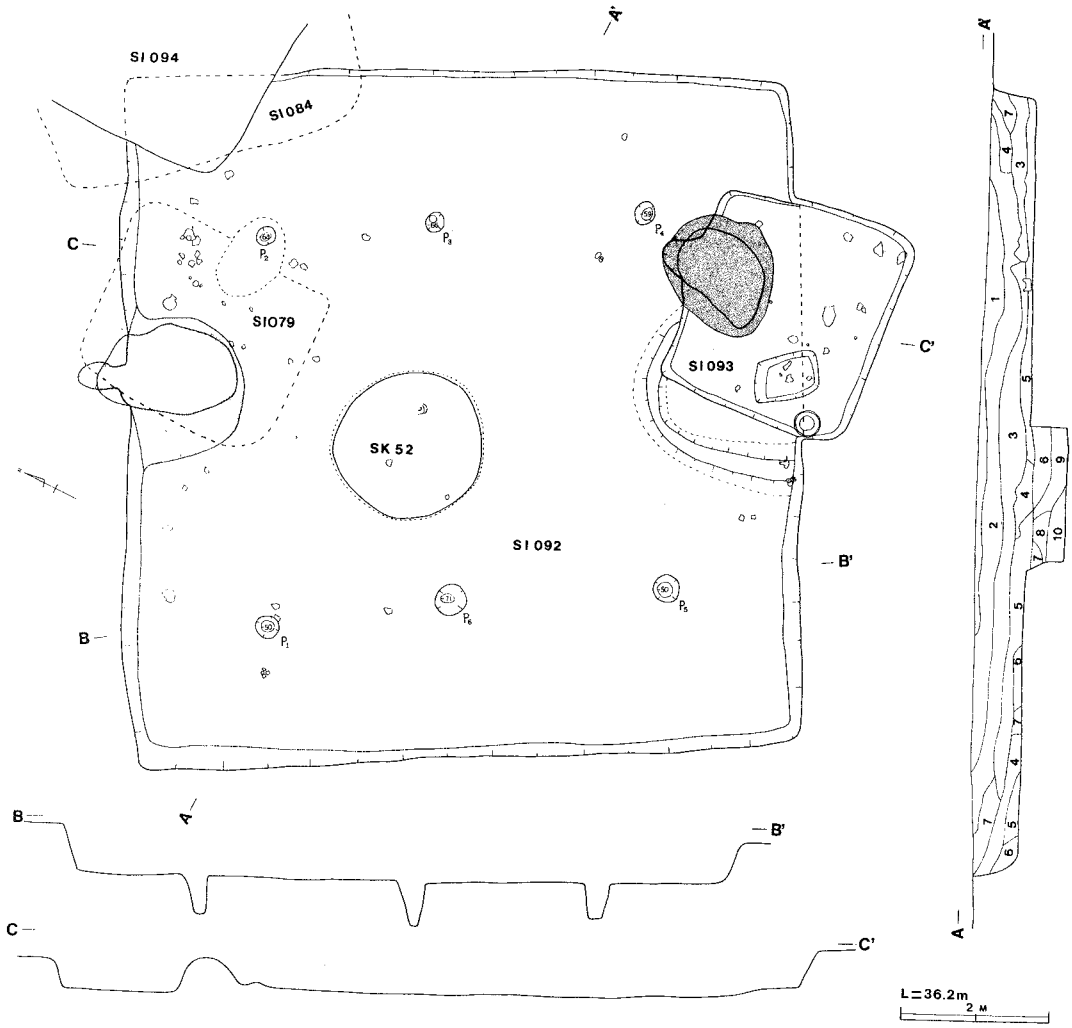
第92号住居址（図152～154）

本住居址は，遺跡の中央部東端Ｃ４区　ｆ４，ｆ５，ｆ６，ｇ３，ｇ４，ｇ５，ｇ６，ｈ４，ｈ５，ｈ６に確認され，北コーナーには本址より新しい時期の第79号住居址・第94号住居址が，古い時期の第82号住居址が検出されている。南東壁には本址より新しい時期の第93号住居址が，南コーナーには，本址より古い時期の第74号住居址が複合している。本址は，正方形の平面形を呈し，主軸方向はＮ－16°－Ｗで規模は長軸9.15m，短軸9.10m，面積77.4㎡ほど測る。壁高は　42cm～68cm程で，壁はゆるやかに外反して立ちあがっている。床面は暗褐色であり，中央部は硬いが壁際は軟らかい。　　南東壁中央部に出入口の施設と思われるベルトが，床面より一段高く半円形に廻っている。その中心部に土壙が付設され，規模は長辺87cm，短辺61cm，深さ80cmの長方形の平面形を呈している。ピットは６個所確認されＰ１～Ｐ６は主柱穴と思われる，貯蔵穴は確認できなかった。覆土は10層からなり自然堆積の状態を示している。セクションベルト内から土師器の坏片を出土している。上層は黒褐色土でローム粒子と，少量の焼土粒子を含み，下



土層解説
a－a′ b－b′
1. 灰褐色　ハードローム粒子(少)焼土粒子(極少)含有
2. 褐　色　焼土粒子(少)含有
3. にぶい褐色　灰を主体，焼土粒子(少)含有
4. 褐灰色　粘土，灰のミキシング土層
5. 暗褐色　焼土粒子，ハードローム粒子(少)含有
6. 暗褐色　焼土粒子(少)含有
7. 暗褐色　ハードローム粒子(少)含有
8. にぶい赤褐色　灰を主体、焼土粒子(少)含有
9. 灰褐色　粘土，焼土のミキシング土層
10. 暗褐色　焼土粒子(少)灰質の土層
11. 暗褐色　ハードローム粒子(少)さらさらしている
12. にぶい赤褐色　灰，焼土，粘土のミキシング土層
13. 暗褐色　焼土粒子(極少)含有灰質の土層
14. 灰褐色　焼土(少)含有，灰層
15. 暗赤褐色　焼土(多)含有灰質土層
16. 褐灰色　粘土含有
17. 褐　色　ハードロームブロック(多)含有

第152図　第92号住居址カマド実測図



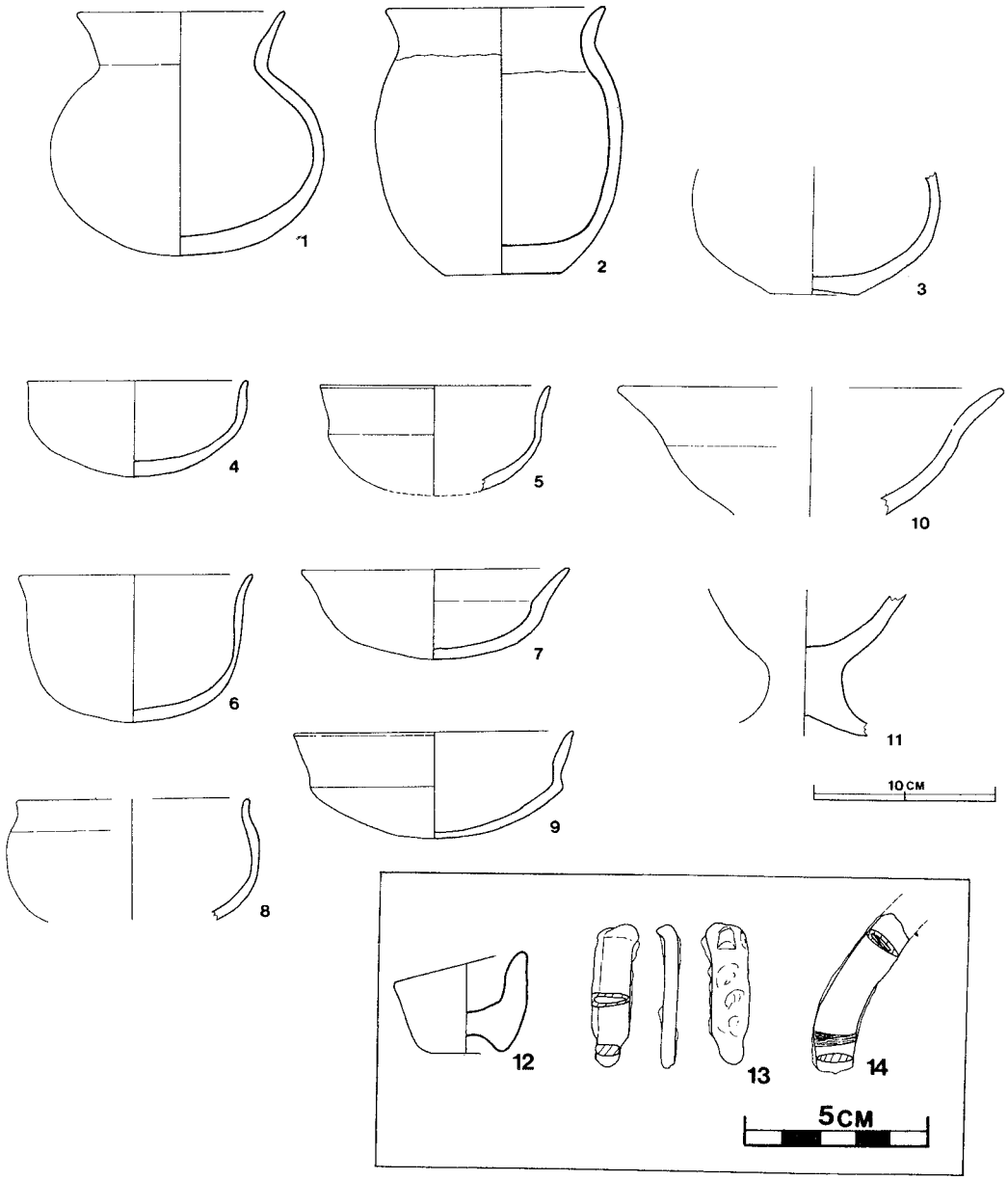
土層解説

A－A′

1. 黒褐色　ローム粒子，焼土粒子(少)含有
2. 黒　色　ローム粒子(多)焼土粒子(少)含有
3. 暗褐色　ローム粒子(多)ロームブロック(少)含有
4. 暗褐色　ローム粒子，ロームブロック，粘土含有
5. 褐　色　ローム粒子(多)ロームブロック(少)含有
6. 極暗褐色　ロームブロック，ローム粒子(少)含有
7. 暗褐色　ローム粒子(多)含有
8. 暗褐色　ローム粒子、ブロック(特多)含有
9. 黒褐色　ローム粒子(少)ブロック含有
10. 暗褐色　ローム粒子(多)大ブロック(少)含有

第153図　第92・93号住居址実測図

層は褐色土で多量のローム粒子と少量のロームブロックを含んでいる。カマドは第79号住居址に一部削平されているが,北壁中央から東よりに付設され，規模は長径210cm,短径140cmで,北壁を35cm幅で,64cmほど掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径55cm,短径45cmで 深さ５cmほど楕円形に掘り窪められている。袖部は黒色土と混りの砂質粘土で南東向きに構築されている。燃焼部から土師器片を多数出土している。出土遺物は，土師器を中心に覆土から須恵器の坏などの細片を数点出土している。土師器の完存率の良好なものをあげると，カマドから椀を出土し，北部の床面直

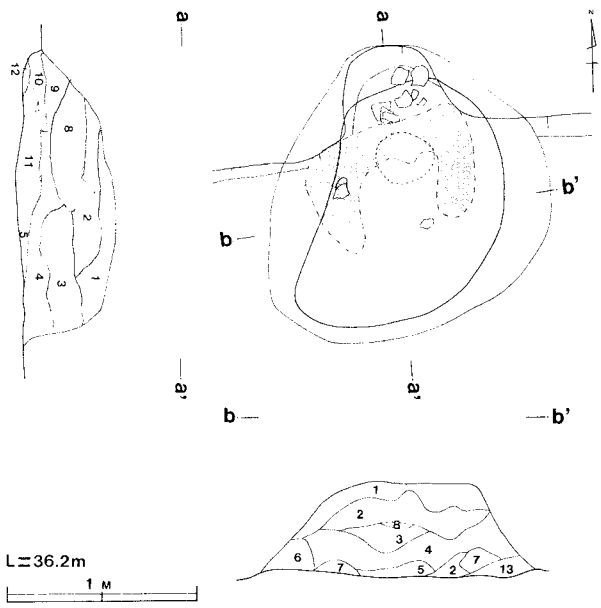


第154図　第92号住居址出土遺物実測図

上から壺（図154—3）を，南部床面直上から椀（図154—6）と高坏（図154—11）を，中央部床面から口縁部に叐痕のある壺（図154—1）を出土し，他は，床面直上などから丹彩の坏（図154——4）と坏(図154－5・7・9),高坏(図154－10),手捏土器(図154--12),小型甕(図154－2)などの破片を多数出土している。その他の出土遺物は，鉄製品（図154—13·14）と覆土中から弥生式土器の破片を数点出土している。本址は出土遺物等から古墳時代の鬼高期に比定される遺構である。

第93号住居址（図153・155・156）

本住居址は，調査区の中央部東端Ｃ４区　ｇ６，ｈ５，ｈ６に確認され，北部は第92号住居址と半分ほど複合している。　　西側0.2m には第74号住居址が検出されている。本址は第92号住居址より新しい遺構である。本址は隅丸長方形の平面形を呈し，主軸方向はＮ－４°－Ｅで，規模は長軸3.00m，短軸2.60m，面積7.0㎡を測り，第92号住居址の床面を約10cmほど掘り込んで，本址を構築している。壁高は東・西・南壁は10cm程で,南壁は38cm程であり,壁はややゆるやかに外反して立ちあがっている。床面は非常に硬く，ピットは確認することができなかった。カマドは北壁の中央から東よりに位置し，規模は長径106cm，短径90cmで,北壁を55cm幅で,40cmほど掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径31cm，短径26cm，深さ２cmほど楕円形に掘り窪められている。

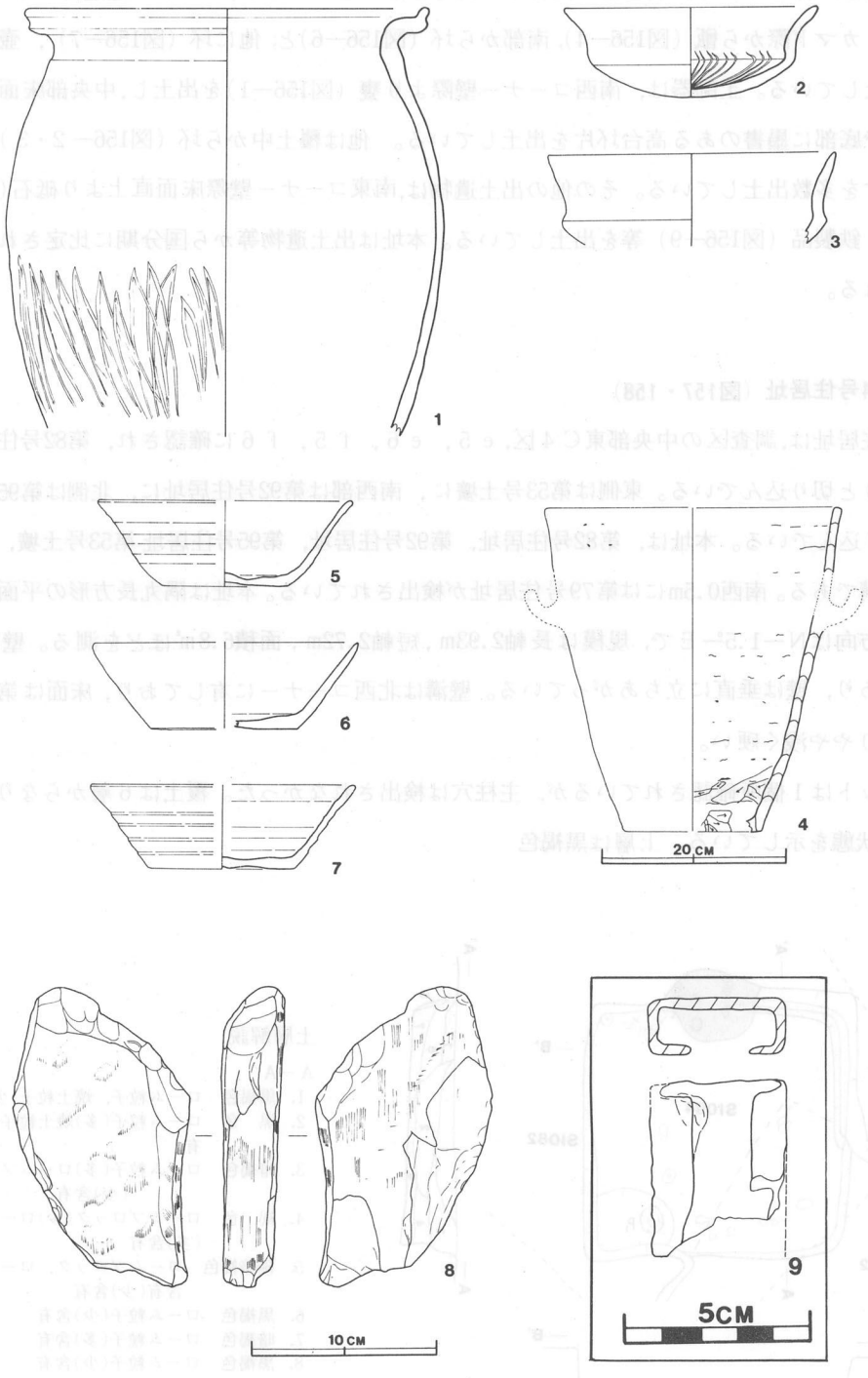


土層解説

a－a′　b－b′

1. 黒褐色　ローム粒子，ローム小ブロック砂粒子含有
2. 黒褐色　ローム粒子，灰黄褐色の砂質を含む粘土(多)含有
3. 極暗褐色　ローム粒子，炭化材，焼土粒子(極少)含有
4. 暗褐色　ローム粒子(多)砂質を含む粘土粒子含有
5. 黒　色　ローム粒子(多)焼土粒子，炭化粒子(少)含有
6. 黒褐色　ローム粒子(多)ロームブロック炭化材，粘土ブロック(極少)含有
7. 灰褐色　砂質の粘土
8. 褐灰色　粘土(多)含有
9. 暗褐色　焼土粒子(多)砂質粘土 ロームブロック含有
10. 黒褐色　ローム粒子，焼土粒子含有
11. 黒赤褐色　砂質粘土が焼けている
12. 褐　色
13. 黒褐色　ローム粒子(多)焼土ブロック(少)含有

第155図　第93号住居址カマド実測図



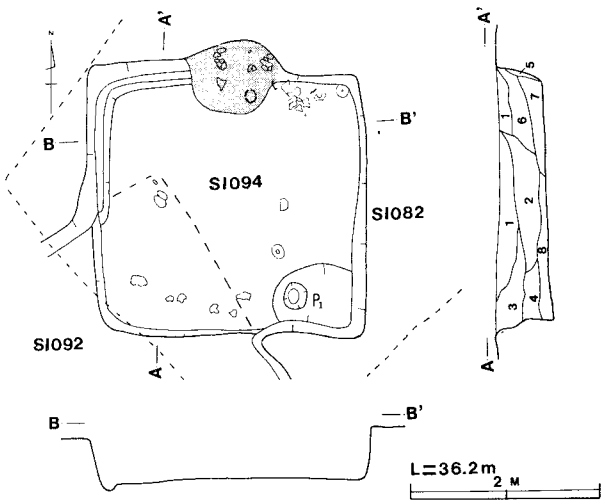
第156図　第93号住居址出土遺物実測図

袖部は黒色土混りの砂質粘土で,カマドは南向きに構築されている。出土遺物は,須恵器を中心に土師器を共伴している。須恵器の完存率の良好なものをあげると,カマドの煙道部から坏(図156—5),カマド際から甑(図156—4),南部から坏(図156—6)と,他に坏(図156—7),壺等の破片を出土している。土師器は,南西コーナー壁際より甕(図156—1)を出土し,中央部床面直上より内黒で底部に墨書のある高台坏片を出土している。他は覆土中から坏(図156—2・3),甕などの破片を多数出土している。その他の出土遺物は,南東コーナー壁際床面直上より砥石(図156—8),鉄製品(図156—9)等を出土している。本址は出土遺物等から国分期に比定される遺構と思われる。

第94号住居址(図157・158)

本住居址は,調査区の中央部東C4区,e5,e6,f5,f6に確認され,第82号住居址にすっぽりと切り込んでいる。東側は第53号土壙に,南西部は第92号住居址に,北側は第95号住居址に切り込んでいる。本址は,第82号住居址,第92号住居址,第95号住居址第53号土壙,より新しい遺構である。南西0.5mには第79号住居址が検出されている。本址は隅丸長方形の平面形を呈し,主軸方向はN—1.5°—Eで,規模は長軸2.93m,短軸2.72m,面積6.8㎡ほどを測る。壁高は58cm程であり,壁は垂直に立ちあがっている。壁溝は北西コーナーに有しており,床面は第92号住居址よりやや浅く硬い。

ピットは1個所確認されているが,主柱穴は検出されなかった。覆土は6層からなり,自然堆積の状態を示している。上層は黒褐色

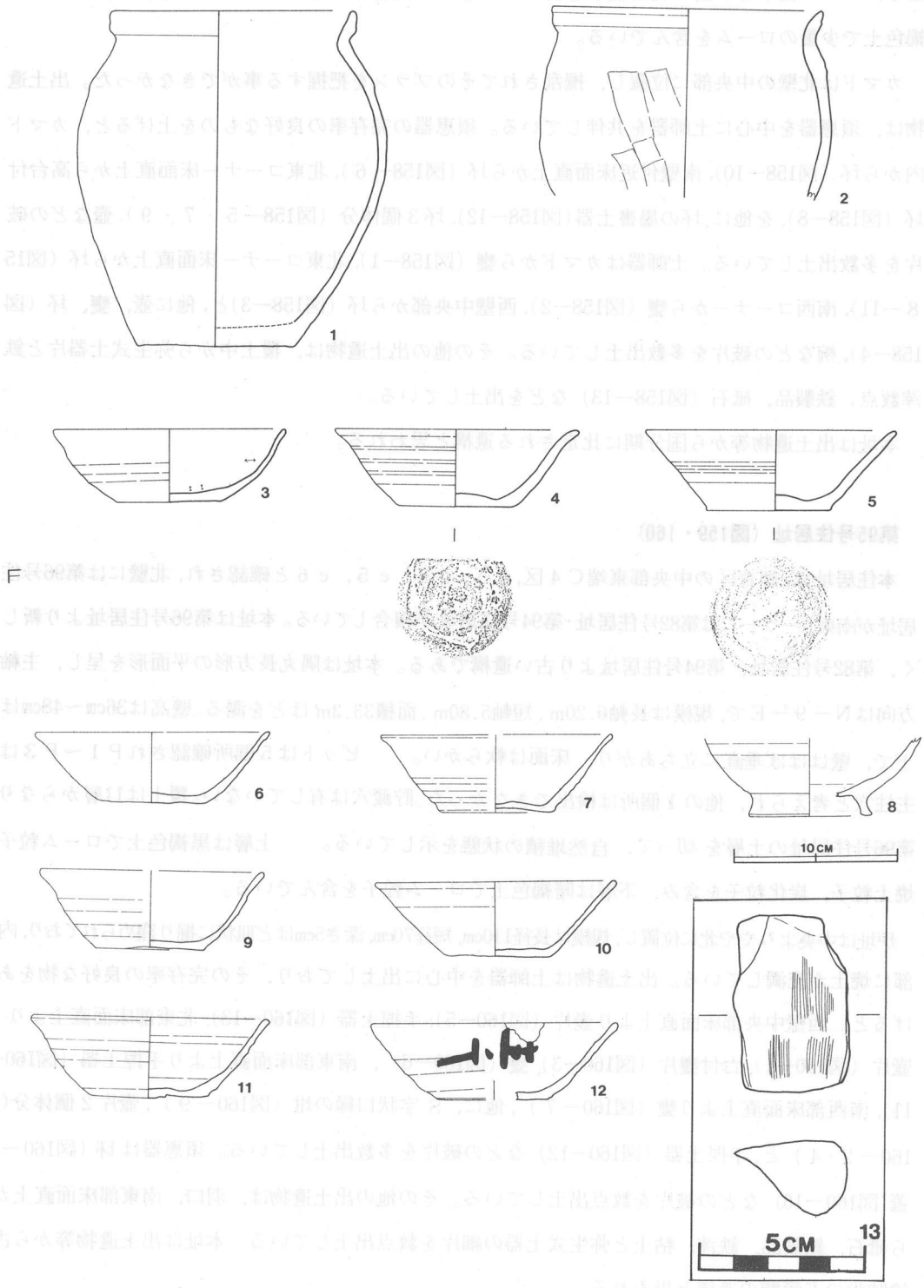


土層解説

A—A′

1. 黒褐色　ローム粒子,焼土粒子(少)含有
2. 黒　色　ローム粒子(多)焼土粒子(少)含有
3. 暗褐色　ローム粒子(多)ロームブロック(少)含有
4. 褐　色　ロームブロック(少)ローム粒子(多)含有
5. 極暗褐色　ロームブロック,ローム粒子含有(少)含有
6. 黒褐色　ローム粒子(少)含有
7. 暗褐色　ローム粒子(多)含有
8. 黒褐色　ローム粒子(少)含有

第157図　第94号住居址実測図



第158図　第94号住居址出土遺物実測図

土で，ローム粒子と少量の焼土粒子を含み，中層は黒褐色で少量のローム粒子を含み，下層は黒褐色土で少量のロームを含んでいる。

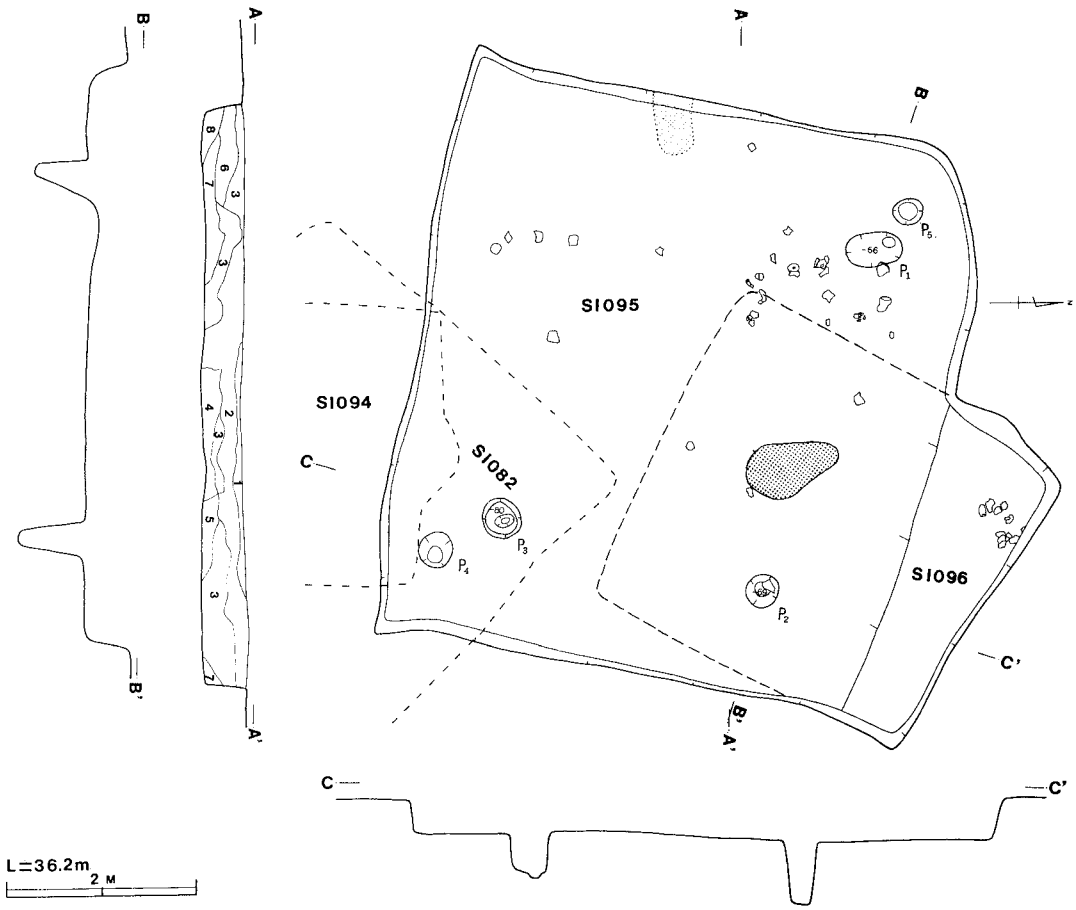
カマドは北壁の中央部に位置し，攪乱されてそのプランを把握する事ができなかった。出土遺物は，須恵器を中心に土師器を共伴している。須恵器の完存率の良好なものを上げると，カマド内から坏（図158—10），南壁付近床面直上から坏（図158—６），北東コーナー床面直上から高台付坏（図158—8），を他に，坏の墨書土器（図158—12），坏３個体分（図158—５・７・９），壺などの破片を多数出土している。土師器はカマドから甕（図158—1），北東コーナー床面直上から坏（図158—11），南西コーナーから甕（図158—2），西壁中央部から坏（図158—3）と，他に壺，甕，坏（図158—4），椀などの破片を多数出土している。その他の出土遺物は，覆土中から弥生式土器片と鉄滓数点，鉄製品，砥石（図158—13）などを出土している。

本址は出土遺物等から国分期に比定される遺構と思われる。

第95号住居址（図159・160）

本住居址は，調査区の中央部東端Ｃ４区，ｄ５，ｄ６，ｅ５，ｅ６と確認され，北壁には第96号住居址が南東コーナーには第82号住居址・第94号住居址が複合している。本址は第96号住居址より新しく，第82号住居址，第94号住居址より古い遺構である。本址は隅丸長方形の平面形を呈し，主軸方向はＮ－９°－Ｅで，規模は長軸6.20m，短軸5.80m，面積33.3㎡ほどを測る。壁高は36cm～48cmほどで，壁はほぼ垂直に立ちあがり，床面は軟らかい。　ピットは５個所確認されＰ１～Ｐ３は主柱穴と考えられ，他の１個所は検出できなかった。貯蔵穴は有していない。覆土は11層からなり，第96号住局址の土層を切って，自然堆積の状態を示している。　上層は黒褐色土でローム粒子，焼土粒子，炭化粒子を含み，下層は暗褐色土でローム粒子を含んでいる。

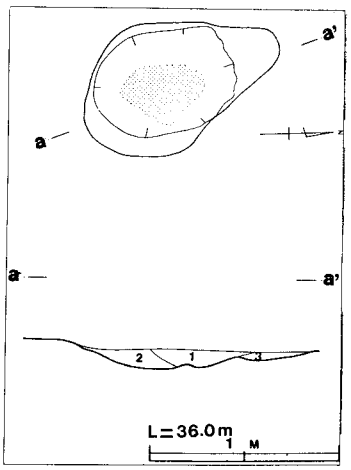
炉址は中央よりやや北に位置し，規模は長径110cm，短径70cm，深さ5cmほど皿状に掘り窪められており，内部に焼土が充満している。出土遺物は土師器を中心に出土しており，その完存率の良好な物をあげると，西壁中央部床面直上より壺片（図160—5），手捏土器（図160—13），北東部床面直上より壺片（図160—1），台付甕片（図160—3），甕（図160—6），南東部床面直上より手捏土器（図160—11），南西部床面直上より甕（図160－７），他に，Ｓ字状口縁の坩（図160－９），壺片２個体分（図160－２・４）と，手捏土器（図160—12）などの破片を多数出土している。須恵器は坏（図160—15），蓋（図160—16）などの破片を数点出土している。その他の出土遺物は，羽口，南東部床面直上から砥石，鉄製品，鉄滓，粘土と弥生式土器の細片を数点出土している。本址は出土遺物等から古墳時代の五領期の遺構と思われる。



土層解説

A－A′

1. 黒褐色　ローム粒子，焼土粒子(少) 含有
2. 極暗褐色　ローム粒子，焼土粒子含有
3. 黒褐色　ローム粒子，焼土粒子，炭化粒子含有
4. 黒褐色　ローム粒子，焼土粒子，炭化粒子(少)含有
5. 黒褐色　ローム粒子(少)含有
6. 暗褐色　ローム粒子(多)焼土粒子(少)含有
7. 暗褐色　ローム粒子（多）含有
8. 褐　色　ローム粒子（多）含有

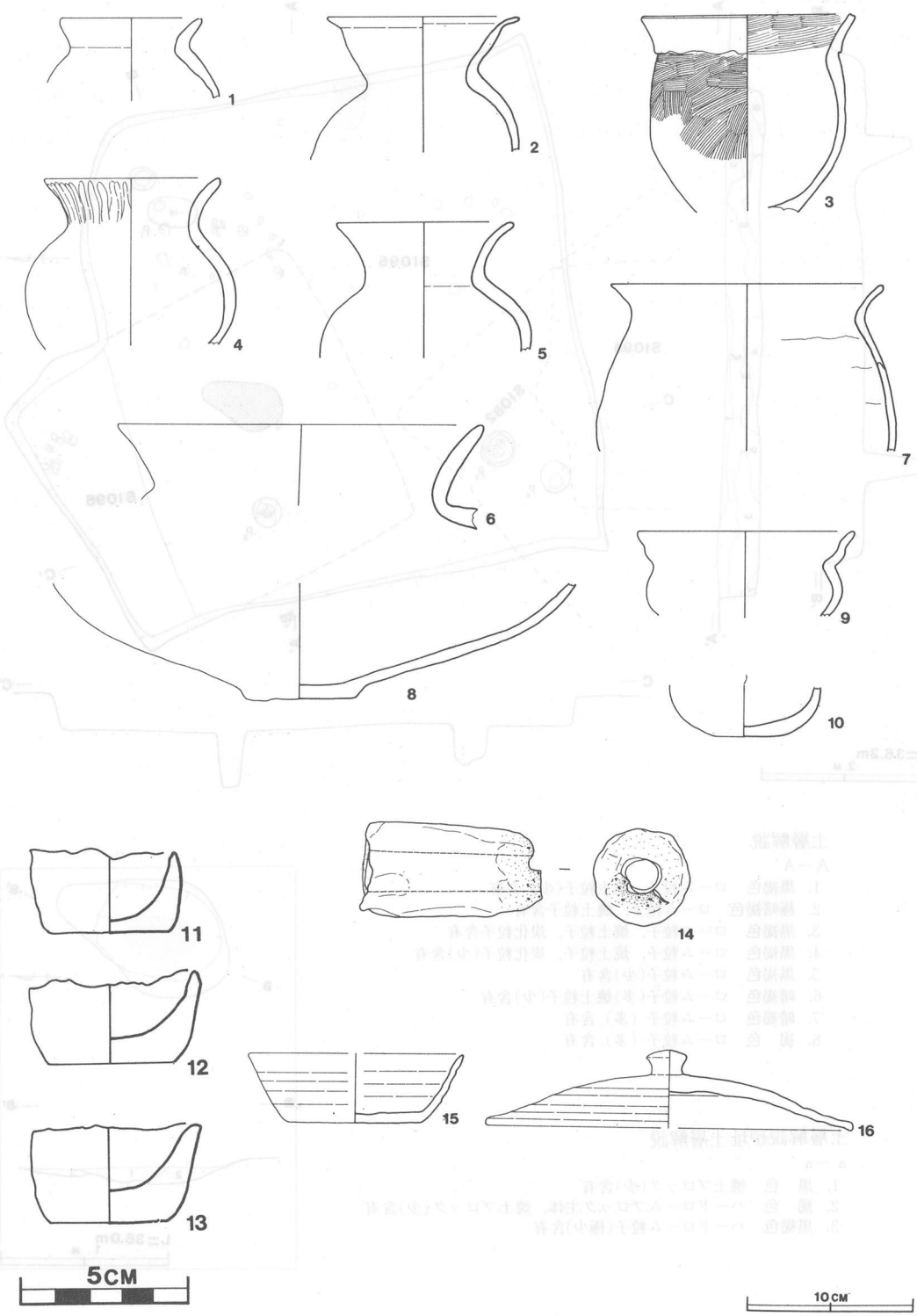


土層解説炉址土層解説

a－a′

1. 黒　色　焼土ブロック(少)含有
2. 褐　色　ハードロームブロック主体，焼土ブロック(少)含有
3. 黒褐色　ハードローム粒子(極少)含有

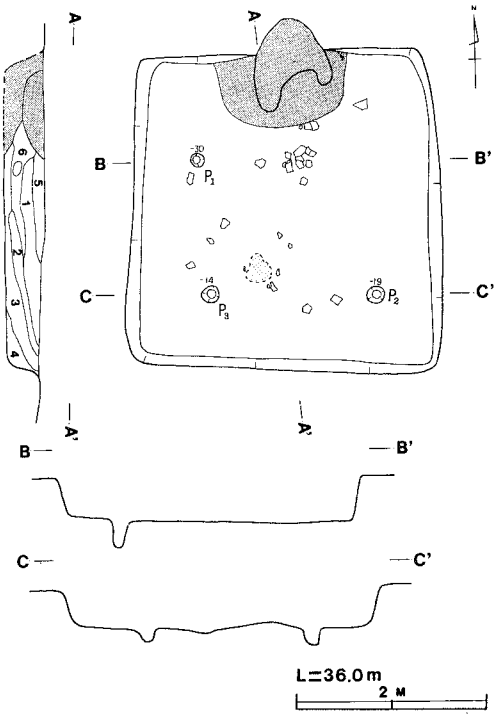
第159図　第95・96号住居址実測図



第160図　第95号住居址出土遺物実測図

第97号住居址（図161～163）

本住居址は，調査区の南西部中ほどＤ３区 ｂ６，ｃ６には確認され，北東1.3mに第51号住居址が，東側1.9mには井戸状遺構第３号が，西側4.5m には 第57号住居址が検出されている。本址はほぼ正方形の平面形を呈し，主軸方向はＮ－２°－Ｅで，規模は長軸3.42ｍ，短軸3.26m，面積9.8㎡程を測る。壁高は36cm～48cmであり，壁はほぼ垂直に立ちあがっている。床面は褐色土で硬い。ピットは３個所確認され，いずれも主柱穴と考えられる。北東部にあると思われる柱穴は検出できなかった。覆土は７層からなり，一部攪乱しているが他は自然堆積の状態を示している。上層は黒褐色土で少量のハードロームブロックと極少量の焼土粒子を含み，中層は黒色土で多量の炭化粒子と少量のハードロームブロック粒子を含み，下層は黒褐色土で少量のハードロームブロックを含んでいる。カマドは北壁の中央に有し規模は長径120cm，短径102cmで，北壁を75cm幅で，38cm程掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径33cm，短径31cm，深さ16cm程円形に掘りくぼめている。袖部は黒色土混りの砂質粘土で，カマドはほぼ南向きに構築されている。出土遺物は土師器と須恵

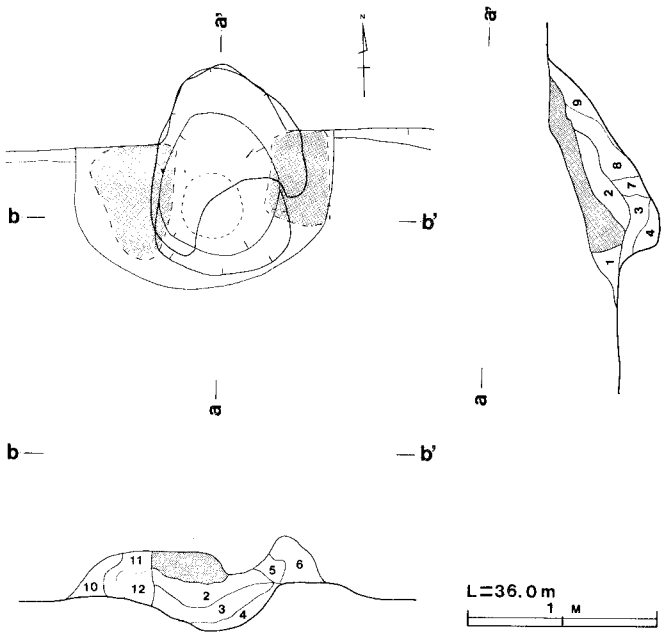


住居址土層解説図

A－A′

1. 黒褐色　ハードロームブロック含有(少)
   焼土粒子(極少)含有
2. 黒　色　炭化粒子(多)ハードローム粒子
   (少)含有
3. 黒褐色　ハードロームブロック(多)含有
4. 黒褐色　ハードロームブロック(少)含有
5. 暗褐色　ハードローム粒子(多)含有
6. 暗褐色　ハードローム粒子(少)焼土粒子
   炭化粒子(極少)含有

第161図　第97号住居址実測図

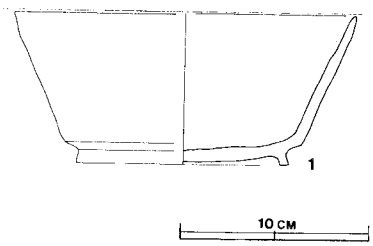


土層解説

a－a′　b－b′

1. 暗褐色　ハードローム粒子，焼土粒子(少)含有
2. 暗赤褐色　焼土を主体とし砂質土層
3. 暗褐色　ハードロームブロック(多)含有ゴツゴツしている
4. 褐色　ハードロームブロック(多)
5. にぶい赤褐色　焼土含有，砂層
6. 褐　色　砂層
7. 褐　色　ハードロームブロック(多)含有
8. にぶい赤褐色　焼土を主体，ゴツゴツしている
9. 褐　色　ローム粒子(多)含有
10. 灰褐色　ハードロームブロック(少)含有砂質の土層
11. 暗褐色　ハードロームブロック，焼土(少)含有
12. にぶい褐色　ハードロームブロック(少)含有砂層

第162図　第97号住居址カマド実測図



第163図　第97号住居址出土遺物実測図

器を共伴して出土しており，土師器の甕片を床面上から，須恵器の高台付椀(図163－1)を床面直上から出土している。他に，土師器の細片と須恵器の坏などの細片を数点出土している。本址は，出土遺物が少なく時期を決定し難いが，ほぼ国分期に比定される遺構と思われる。

2　土壙（図164～167）

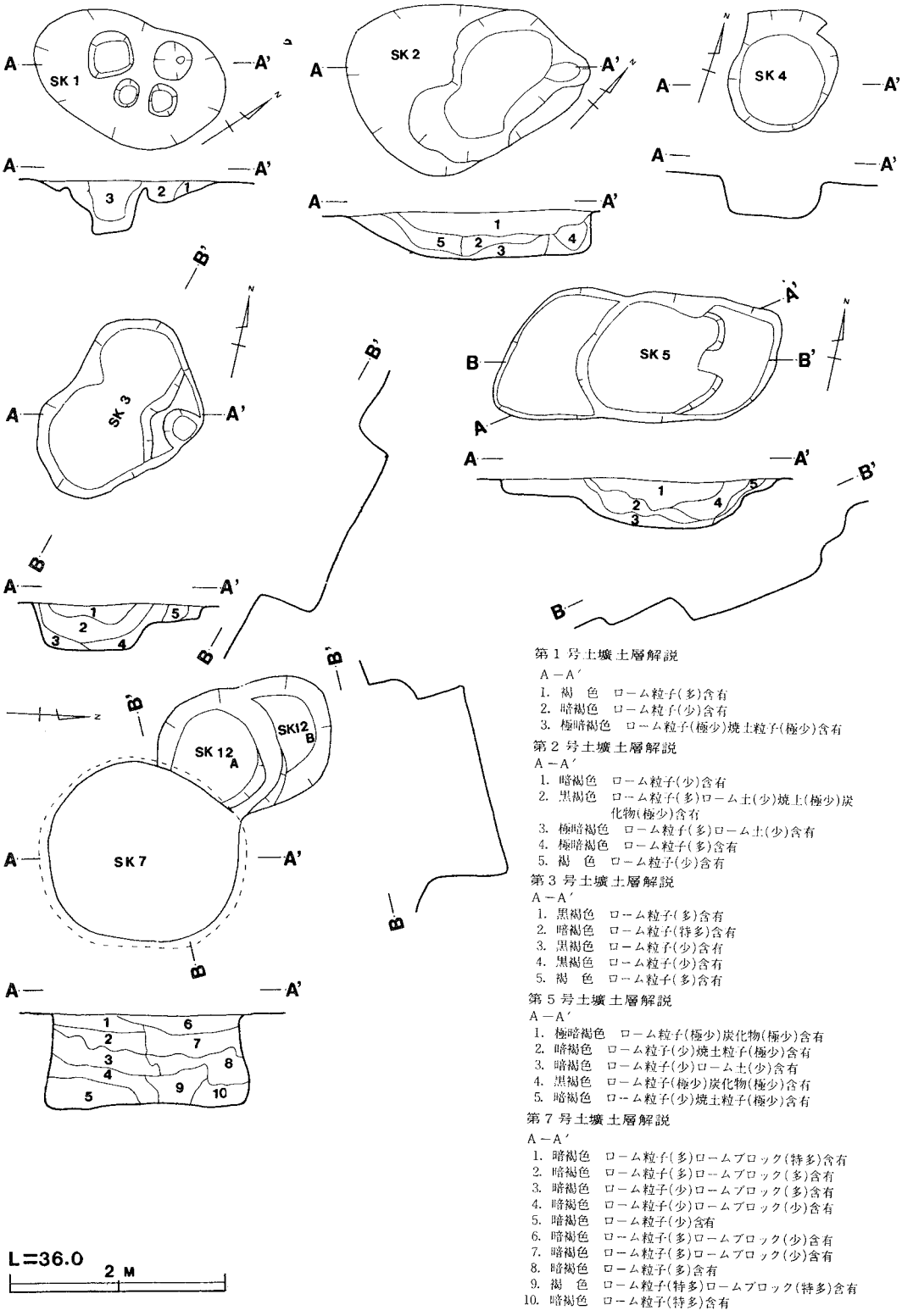
本遺跡で検出された土壙は，円形の土壙14基，不整円形の土壙３基，楕円形の土壙は５基，不整楕円形の土壙７基，長方形の土壙15基，不整方形１基である。第９号土壙は第11号住居址の東コーナーに検出され，底面直上から土師器の坩（図167－2），甕，壺（図167－1）などの破片を多数出土し，本址は出土遺物から五領期に比定される遺構と思われ，第11号住居址に付属した遺構と考えられる。第10号土壙は壙底から土師器の壺（図167－5），壙底直上から坏（図167－7），甕（図167－３・４）と支脚，高坏，甕などの細片を多数出土している。須恵器も坏などの破片を

数点出土し本址は，鬼高期に比定される遺構である。第11号土壙は覆土から鬼高期に比定される土師器の坏破片（図167—8）と須恵器の細片を数点出土している。第42号土壙の覆土からは，小型甕片（図167—9）を出土している。第27号，第28号，第30号，第31号土壙は長径140～170cm，短径98～165cm，深さ195～250cmで住居址と複合して，北西から南東へ約10mほどの等間隔に検出されている。本遺跡では最も古い時期の遺構と思われる。

表1　大塚新地遺跡・土壙一覧表

No	位　置	形　状	規　模（長径×短径）cm	長径方向	深さ cm	底	出土遺物	時期	備　考
1	A4 h-5 h-6 i-5	楕円形	183×115	N—51°—E	50	皿　状		不明	図166
2	A4 i-6	楕円形	221×153	N—40°—E	45	凸　凹	弥生 須恵	不明	図166
3	B4 c-4 c-5	不　整 円　形	180×125	N—20°—E	44	平　坦	土師　石器 須恵　弥生	五領	図166
4	B4 b-3 b-4	円　形	118×96	N—0°	56	平　坦	須恵　鉄滓・ 石器	不明	図166
5	B4 c-3 d-3	不　整 円　形	255×122	N—77°—E	42	皿　状	土師(坏)　弥生 須恵(坏)	不明	図166
6	B4 b-5 c-5	不　整 楕円形	297×162	N—7°—E	A 90 B 32 C 35	平　坦	土師(高坏) 須恵(坏)	不明	図6
7	B4 b-4	円　形	193×180	N—4°—W	80	フラスコ状	土師 須恵	不明	図166
8	B4 c-4 d-4	不　正 楕円形	152×100	N—18°—W	40	平　坦	土師　弥生 須恵	鬼高	図167
9	B4 d-5 e-5	円　形	100×98	N—2°—W	10	平　坦	土師(坩・壺)	五領	
10	B4 e-4 f-4	円　形	229×197	N—2°—W	100	スリバチ状	土師(坏・壺・甕・ 支脚・高坏)	鬼高	図167
11	B4 e-5 f-5 f-6	長方形	295×218	N—32°—E	92	平　坦	土師(坏・椀・甕・ 器台)	鬼高	図167
12	B4 a-4 a-5	円　形	152×119		20				図166
14	B4 d-5	円　形	A 105×95 B 92×178推	N—27°—W	2 16	平　坦 平　坦		不明	
15	B4 c-5	円　形	95×不明	N—34°—E	3	平　坦		不明	
16	B4 h-1	不　整 楕円形	195×80	N—70°—W	38	凸　凹	須恵(坏)	不明	
17	B4 h-2	不　整 楕円形	220×130	N—53°—E	40	平　坦	須恵(坏)	不明	
18	B3 i-8	円　形	190×190	N—1°—W	72	フラスコ状	土師(甕)	五領	図167
19	B3 i-7 i-8	円　形	190×171	N—0°	80	平　坦	土師(坏・甕) 須恵	鬼高	
20	C3 c-0 d-0	円　形	138×141	N—0°	88	平　坦	土師	五領	
21	C3 d-0 e-9 e-0	不　整 楕円形	240×128	N—52°—E	50	凸　凹		不明	
22	C3 d-9	不　整 楕円形	296×120	N—21°—W	50	凸　凹	須恵(墨書土器)	不明	
23	C3 j-5・6 D3 a-5・6	円　形	145×140	N—19°—E	62	平　坦	土師　弥生 須恵	五領	
24	D3 a-4 a-5	円　形			21	平　坦		不明	

No	位　置	形　状	規　模 (長径×短径)cm	長径方向	深さcm	底	出土遺物	時期	備　考
25	B3 g-7・8 h-7	円　形	175×165	N−2.5°−W	102	フラスコ状		不明	図168
26	B3 h-2 h-2	不　整 円　形	310×105	N−43°−W	106	平　坦		不明	図48
27	B4 g-3 h-3	A円形 B方形	175×165 167×160	N−39°−W	250	平　坦		不明	図22
28	B4 h-5 i-5	楕円形	150×120	N−34°−E	215	平　坦		不明	図25
29	C4 b-4・5	円　形	168×157	N−71°−E				不明	図65
30	B4 b-1	楕円形	150×116	N−65°−E	195	平　坦		不明	図20
31	B3 d-9 e-9	楕円形	140×98	N−25°−E	235	皿　状		不明	
32	B4 f-1	円　形	246×233	N−25°−W	60	平　坦	耳せん(土製) 須恵　弥生	不明	図90
33	B3 f-8・9 g-8・9	長方形	202×70	N−21°−E	35	平　坦		不明	
34	B3 g-8 h-8	長方形	200×70	N−17°−E	46	平　坦		不明	
35	B3 g-8 h-8	長方形	125×55	N−20°−E	35	平　坦		不明	
36	B3 h-8	長方形	166×70	N−11.5°−E	70	平　坦		不明	
37	B3 h-8	長方形	157×64	N−24.5−E	53	平　坦		不明	
38	B3 i-8	長方形	126×53	N−24°−E	55	平　坦		不明	
39	B3 i-7・8 j-7・8	長方形	225×72	N−24°−E	76	平　坦		不明	
40	B3 j-7	長方形	235×65	N−24°−E	50	平　坦		不明	図117
41	B3 j-7 C3 a-7	長方形	115×52	N−24°−E	26	平　坦		不明	
42	D4 b-4 c-4	長方形	195×55	N−27°−E	90	平　坦	土師(甕)	五領	図117
43	D4 c-5	楕円形	122×160	N−90°−E	181	平　坦		不明	図122
44	D4 c-4	長方形	142×73	N−29°−E	100	平　坦		不明	図117
45	D4 c-4	長方形	204×65	N−30°−E	32	平　坦		不明	図117
46	D4 d-3	長方形	150×52	N−26°−E	35	平　坦		不明	図117
47	D4 d-2	長方形	152×55	N−15°−E	43	平　坦		不明	図113
49	C4 c-5	不　整 楕円形	330×325	N−0°	95	平　坦		不明	図141
50	C4 b-6	不　整 楕円形	254×120	N−73°−W	175	フラスコ状		不明	図140 168
51	C4 b-7	不　整 方形	120×85	N−30°−E	155	平　坦		不明	図152
52	C4 g-5	円　形	204×203	N−26°−W	121	平　坦	土師(坏) 土玉	真間	
53	C4 e-6 f-6	円　形	243×231	N−8°−E	57	平　坦	土師(坏)	真間	図168



第１号土壙土層解説

A－A′

1. 褐　色　ローム粒子(多)含有
2. 暗褐色　ローム粒子(少)含有
3. 極暗褐色　ローム粒子(極少)焼土粒子(極少)含有

第２号土壙土層解説

A－A′

1. 暗褐色　ローム粒子(少)含有
2. 黒褐色　ローム粒子(多)ローム土(少)焼土(極少)炭化物(極少)含有
3. 極暗褐色　ローム粒子(多)ローム土(少)含有
4. 極暗褐色　ローム粒子(多)含有
5. 褐　色　ローム粒子(少)含有

第３号土壙土層解説

A－A′

1. 黒褐色　ローム粒子(多)含有
2. 暗褐色　ローム粒子(特多)含有
3. 黒褐色　ローム粒子(少)含有
4. 黒褐色　ローム粒子(少)含有
5. 褐　色　ローム粒子(多)含有

第５号土壙土層解説

A－A′

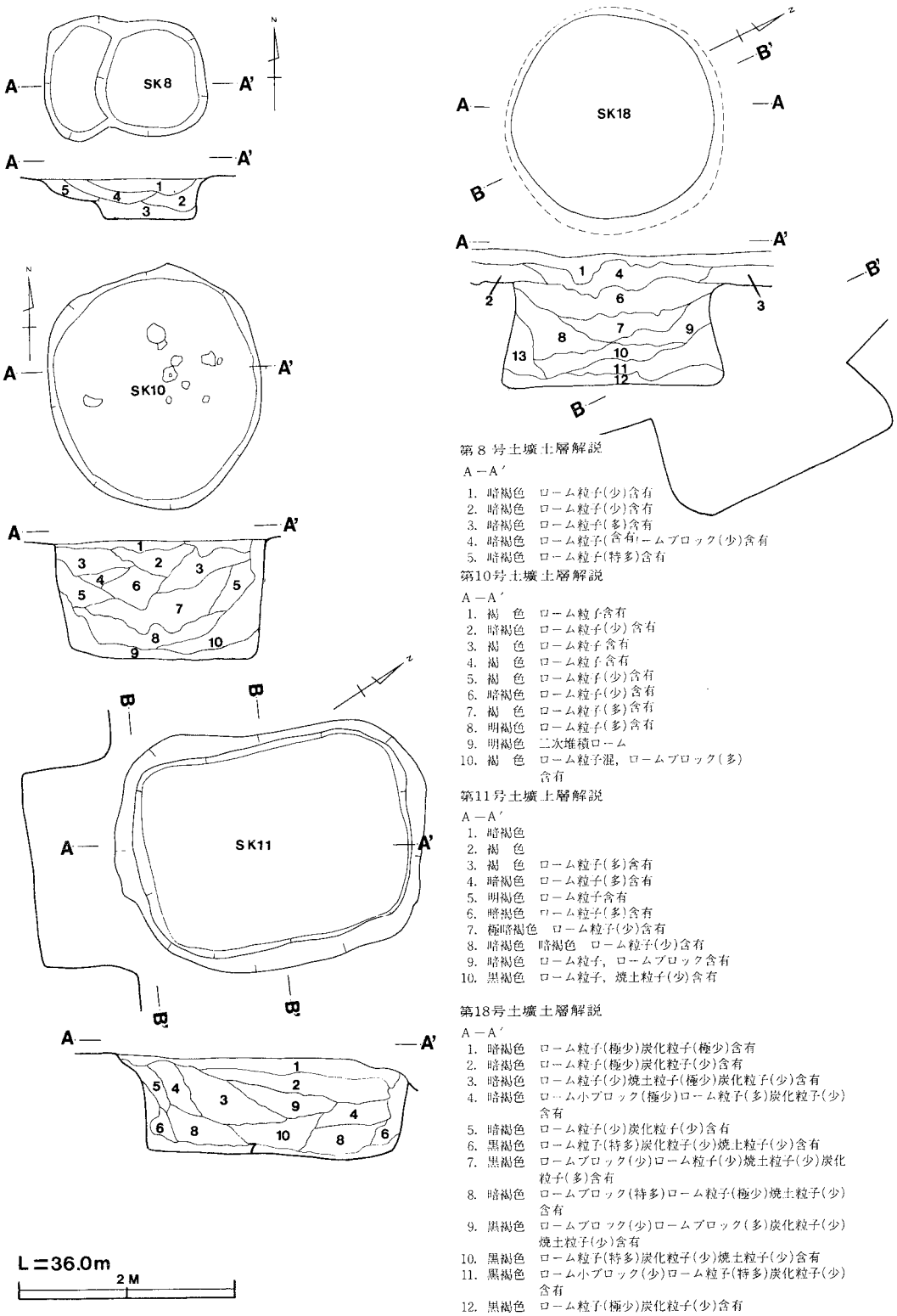
1. 極暗褐色　ローム粒子(極少)炭化物(極少)含有
2. 暗褐色　ローム粒子(少)焼土粒子(極少)含有
3. 暗褐色　ローム粒子(少)ローム土(少)含有
4. 黒褐色　ローム粒子(極少)炭化物(極少)含有
5. 暗褐色　ローム粒子(少)焼土粒子(極少)含有

第７号土壙土層解説

A－A′

1. 暗褐色　ローム粒子(多)ロームブロック(特多)含有
2. 暗褐色　ローム粒子(多)ロームブロック(多)含有
3. 暗褐色　ローム粒子(少)ロームブロック(多)含有
4. 暗褐色　ローム粒子(少)ロームブロック(少)含有
5. 暗褐色　ローム粒子(少)含有
6. 暗褐色　ローム粒子(多)ロームブロック(少)含有
7. 暗褐色　ローム粒子(多)ロームブロック(少)含有
8. 暗褐色　ローム粒子(多)含有
9. 褐　色　ローム粒子(特多)ロームブロック(特多)含有
10. 暗褐色　ローム粒子(特多)含有

第164図　第１・２・３・４・５・７・12号土壙実測図



第8号土壙土層解説

A－A′

1. 暗褐色　ローム粒子(少)含有
2. 暗褐色　ローム粒子(少)含有
3. 暗褐色　ローム粒子(多)含有
4. 暗褐色　ローム粒子(含有)ームブロック(少)含有
5. 暗褐色　ローム粒子(特多)含有

第10号土壙土層解説

A－A′

1. 褐　色　ローム粒子含有
2. 暗褐色　ローム粒子(少)含有
3. 褐　色　ローム粒子含有
4. 褐　色　ローム粒子含有
5. 褐　色　ローム粒子(少)含有
6. 暗褐色　ローム粒子(少)含有
7. 褐　色　ローム粒子(多)含有
8. 明褐色　ローム粒子(多)含有
9. 明褐色　二次堆積ローム
10. 褐　色　ローム粒子混，ロームブロック(多)含有

第11号土壙土層解説

A－A′

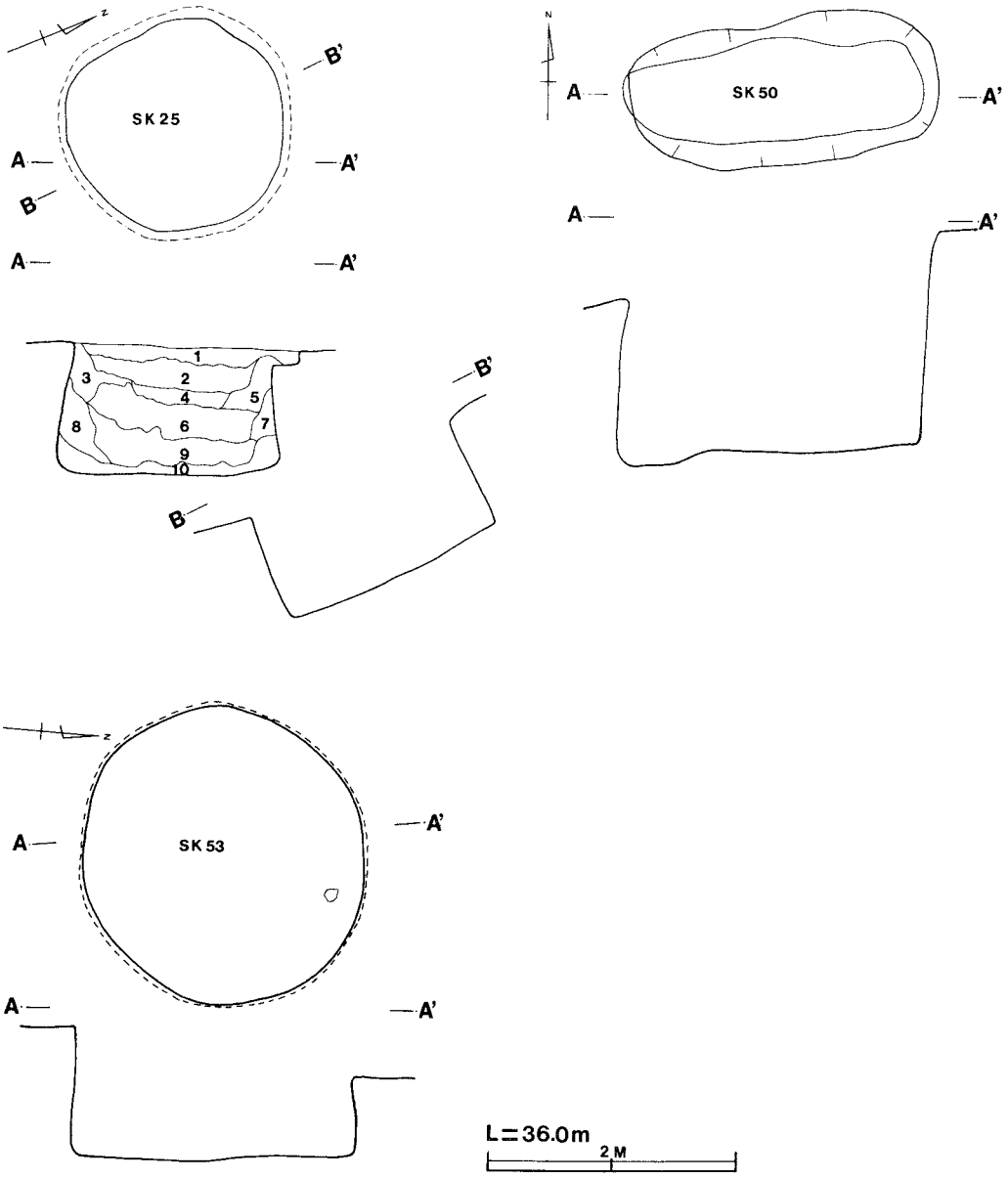
1. 暗褐色
2. 褐　色
3. 褐　色　ローム粒子(多)含有
4. 暗褐色　ローム粒子(多)含有
5. 明褐色　ローム粒子含有
6. 暗褐色　ローム粒子(多)含有
7. 極暗褐色　ローム粒子(少)含有
8. 暗褐色　暗褐色　ローム粒子(少)含有
9. 暗褐色　ローム粒子，ロームブロック含有
10. 黒褐色　ローム粒子，焼土粒子(少)含有

第18号土壙土層解説

A－A′

1. 暗褐色　ローム粒子(極少)炭化粒子(極少)含有
2. 暗褐色　ローム粒子(極少)炭化粒子(少)含有
3. 暗褐色　ローム粒子(少)焼土粒子(極少)炭化粒子(少)含有
4. 暗褐色　ローム小ブロック(極少)ローム粒子(多)炭化粒子(少)含有
5. 暗褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(少)含有
6. 黒褐色　ローム粒子(特多)炭化粒子(少)焼土粒子(少)含有
7. 黒褐色　ロームブロック(少)ローム粒子(少)焼土粒子(少)炭化粒子(多)含有
8. 暗褐色　ロームブロック(特多)ローム粒子(極少)焼土粒子(少)含有
9. 黒褐色　ロームブロック(少)ロームブロック(多)炭化粒子(少)焼土粒子(少)含有
10. 黒褐色　ローム粒子(特多)炭化粒子(少)焼土粒子(少)含有
11. 黒褐色　ローム小ブロック(少)ローム粒子(特多)炭化粒子(少)含有
12. 黒褐色　ローム粒子(極少)炭化粒子(少)含有
13. 暗褐色　ローム粒子(極少)含有

第165図　第8・10・11・18号土拡実測図

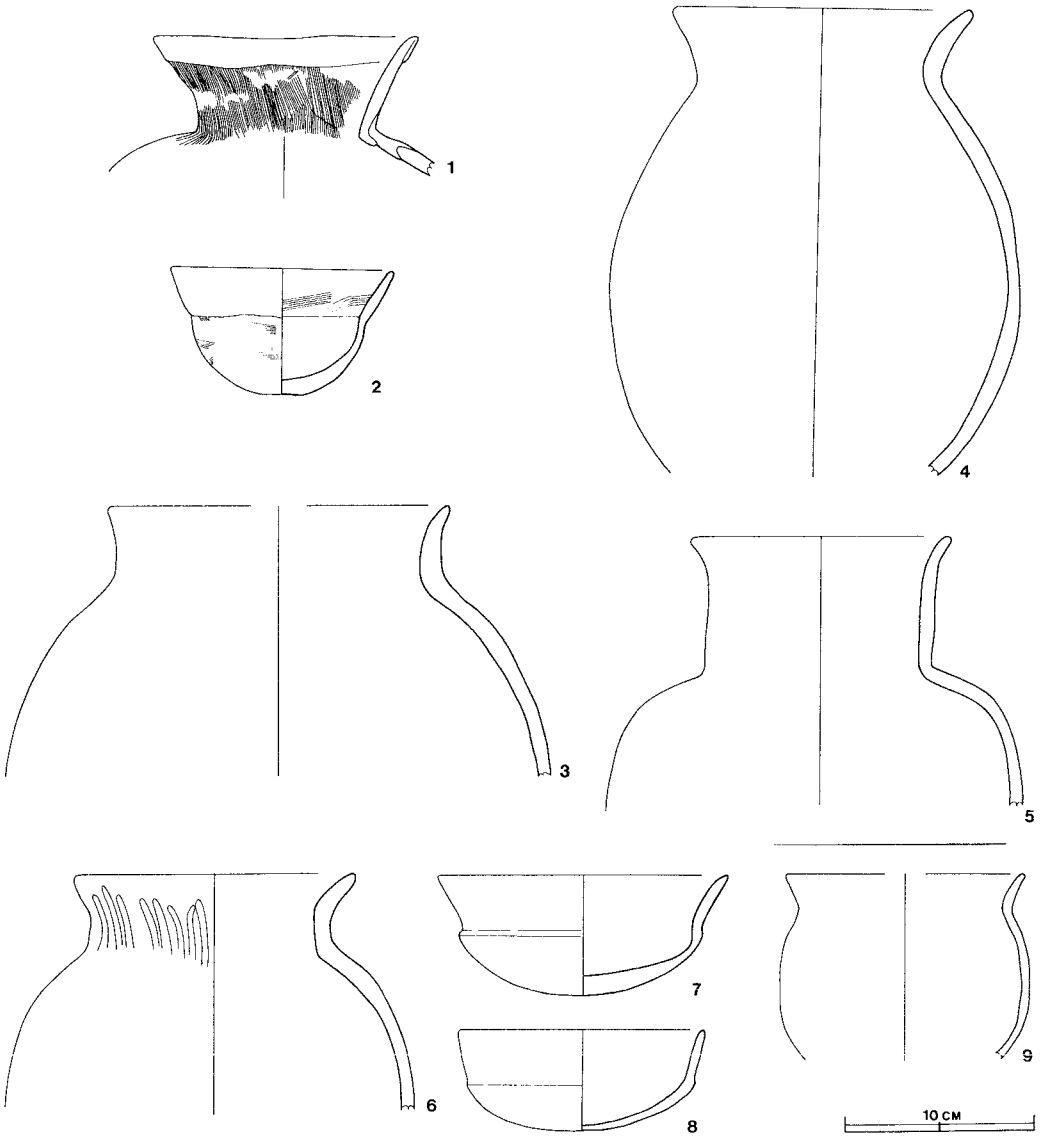


第25号土壙 土層解説

A－A′

1．黒褐色　ローム粒子(少)砂粒子(多)含有
2．黒褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(少)砂粒　(多)含有
3．暗褐色　ローム粒子(多)砂粒　(多)含有
4．褐黒色　ローム粒子(多)砂粒　(多)ロームブロック(多)含有
5．黒褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(少)砂粒　(多)ロームブロック(少)含有
6．黒褐色　ローム粒子(多)砂粒　(多)粘土粘(極少)含有　土師器混
7．黒褐色　ローム粒子(多)砂粒　(多)含有
8．黒褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(少)砂粒　(少)含有
9．暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(少)砂粒　(多)鹿沼粒子(少)含有
10．暗褐色　ローム粒子(少)砂粒　(多)ロームブロック(極少)含有

第166図　第25・50・53号土壙実測図



第167図　土壙出土遺物実測図

3　井戸状遺構

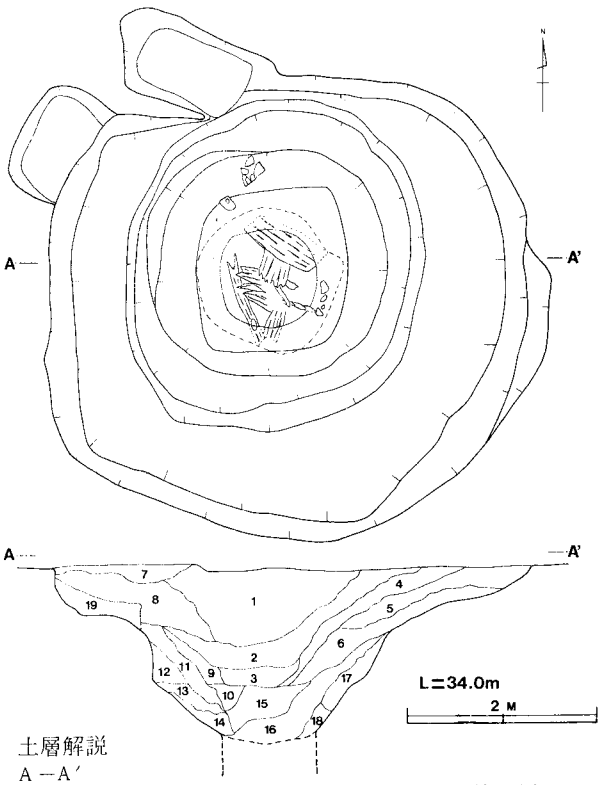
第1号井戸状遺構（図31・33(1)～(4)）

本井戸状遺構は，調査区の北部中ほどＡ４区ｈ３，ｉ３に確認され，第20号住居址の南西コーナーに切り込んでいる。北東0.1mには　第21号住居址が検出されている。本址はほぼ円形を呈し，掘り方は上部構造で，長径3.35m，短径3.25m，深さ2.7mほどで，直径0.55mの円形を呈する掘り込みまで達する。水を汲むための足場と思われるがくずれている。足場と思われるところから深さ1.6mほど垂直に握り込まれ底部は椀形を呈している。底部からは水が湧いている。覆土は7層からなり自然堆積の状態を示している。上層は，暗褐色土でローム粒子と少量のロームブロック，焼土粒子，炭化粒子を含み，中層は，黒褐色土・極暗褐色土で，多量のロームブロックとローム粒子，少量の炭化粒子，鹿沼粒子を含み，下層は黒褐色土・極暗褐色土で，少量のロームブロック，炭化粒子とローム粒子，鹿沼ブロックを含んでいる。出土遺物は，第20号住居址，第21号住居址の床面と同じレベルとその上部の覆土から須恵器片と土師器を共伴している。土師器片は壺，甕，坏，高坏，器台などの破片を出土し，須恵器は坏9個（図33—25～34），長頸壺片（図33—39・40），盤（図33—24）を出土して，他に須恵器の細片を多数出土している。その他の出土遺物は，砥石2片，布目瓦，鉄製品（図33—42），石製模造品（図33—41）の有孔円板を出土している。これらの遺物は本址が廃棄された後，投棄されたものと思われる。底部からは，須恵器と土師器の細片を数点出土しているだけで，本址の時期を決定するに十分な出土遺物ではなく時期不明である。

第2号井戸状遺構（図168・169(1)(2)）

本井戸状遺構は，調査区の中央部西端Ｃ３区　ｄ５，ｄ６，ｅ５，ｅ６に確認され，北東4.20mには**第49号住居址が南東4.50mには方形周溝遺構が検出されている。**本址は不整円形の平面形を呈し，掘り方は上縁で長径3.35m，短径3.25mで，主軸方向はＮ—80°—Ｗである。深さ1.8mほど掘り込み，水を汲むための平坦部は規模は長径1.7m，短径1.6mを測り，主軸方向はＮ—2°—Ｅである。その南東よりに長径1.02cm 短径1.0mで　深さ2.3mほどの円形の掘り込みが垂直に掘り下げられている。足場から0.95m下に水が湧いており，その周囲の土がくずれている。

その下部から井戸の枠に使用されたと思われる堅牢な板材が17板ほど検出され，円形の曲物2点とくるみ，ひょうたんなどを出土し，底部は砂礫層となっている。覆土は19層からなり，上層は暗褐色土で特に多量のローム粒子，少量の炭化粒子，極少量の焼土粒子を含有し，中層は暗褐色土で特に多量のローム粒子，少量の炭化粒子と焼土粒子を含有している。下層は暗褐色土で多量の

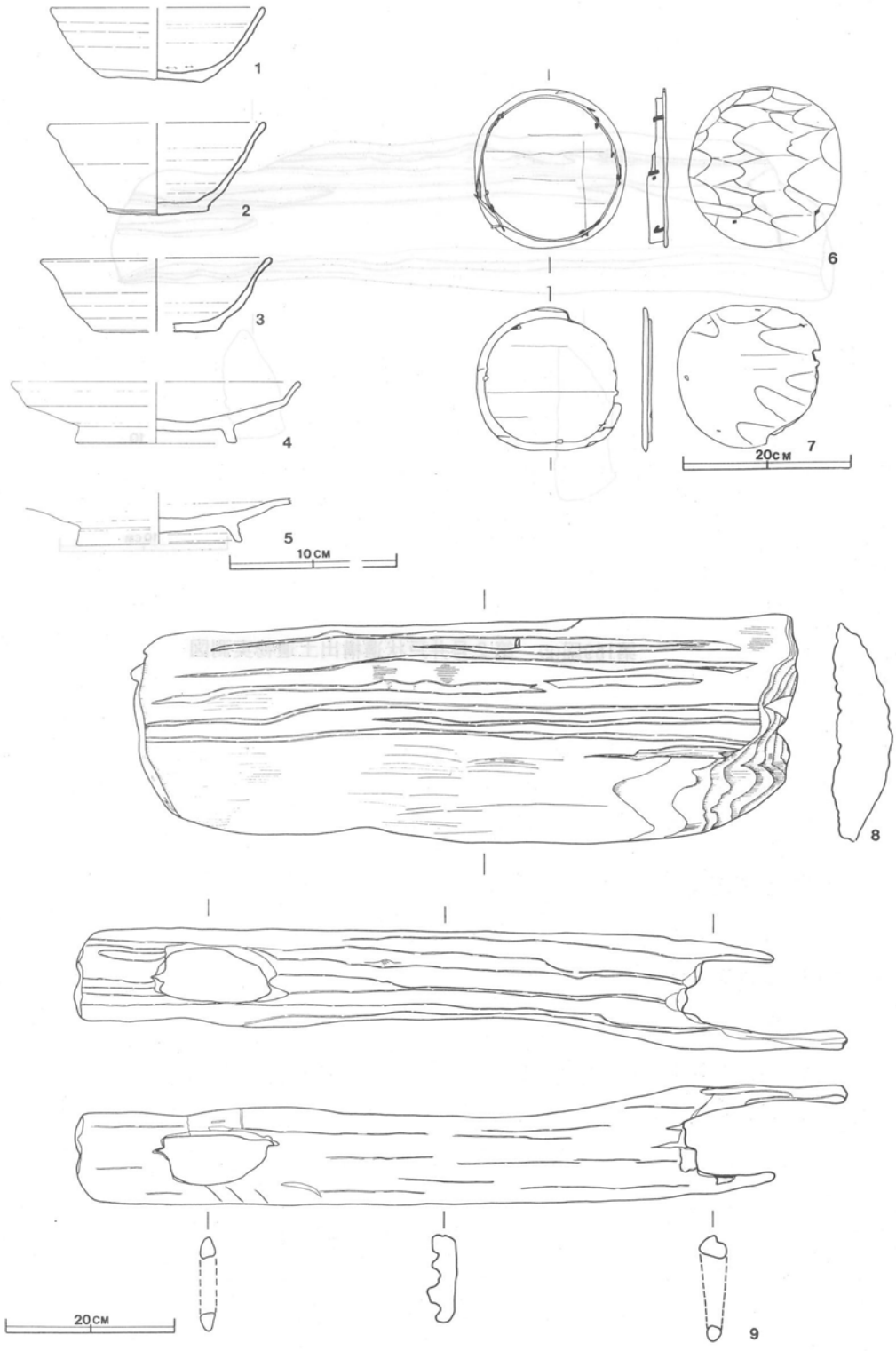


土層解説

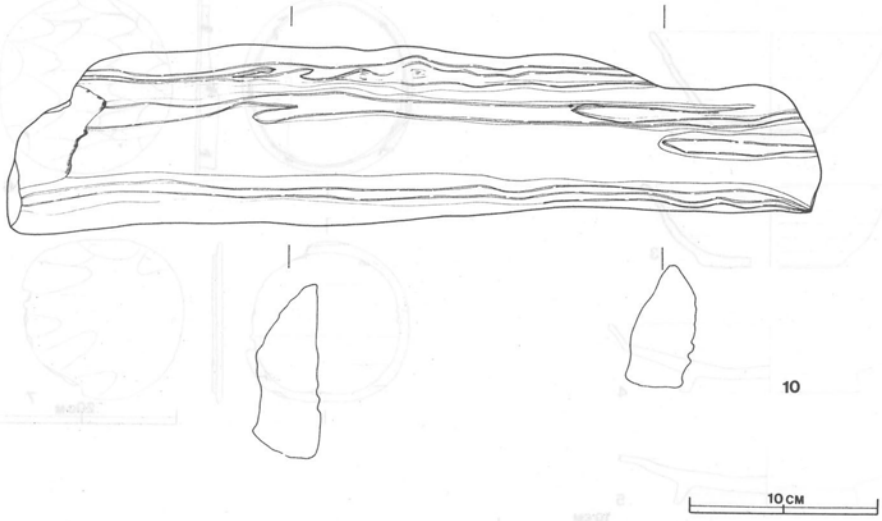
A－A′

1. 暗褐色　ローム粒子(特多)炭化粒子(少)焼土粒子(極少)鹿沼粒子(少)含有
2. 暗褐色　ローム粒子(特多)炭化粒子(少)焼土粒子(極少)鹿沼粒子(少)含有
3. 暗褐色　ローム粒子(特多)含有
4. 暗褐色　ローム粒子(特多)炭化粒子(少)焼土粒子(極少)ロームブロック(少)含有
5. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(極少)焼土粒子(極少)ロームブロック(少)含有
6. 暗褐色　ローム粒子(特多)炭化粒子(極少)焼土粒子(極少)鹿沼粒子(少)ロームブロック(少)含有
7. 黒褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(少)焼土粒子(少)含有
8. 暗褐色　ローム粒子(特多)炭化粒子(少)焼土子(少)鹿沼粒子(少)含有
9. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(少)焼土粒子(少)鹿沼粒子(少)含有
10. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(少)焼土粒子(少)鹿沼粒子(少)含有
11. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(少)焼土粒子(極少)鹿沼粒子(少)ロームブロック(少)含有
12. 黒褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(少)焼土粒子(極少)鹿沼粒子(少)含有
13. 褐　色　炭化粒子(少)焼土粒子(極少)含有
14. 黒褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(少)焼土粒子(極少)砂粒(少)含有
15. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(極少)鹿沼粒子(少)含有
16. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(少)ロームブロック(少)含有
17. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(少)鹿沼粒子(少)砂粒子(少)含有
18. 黒褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(少)砂粒子(少)含有
19. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(少)鹿沼粒子(少)砂粒子(少)含有

第168図　第２号井戸状遺構実測図



第169図(1)　第２号井戸状遺構出土遺物実測図



第169図(2)　第２号井戸状遺構出土遺物実測図

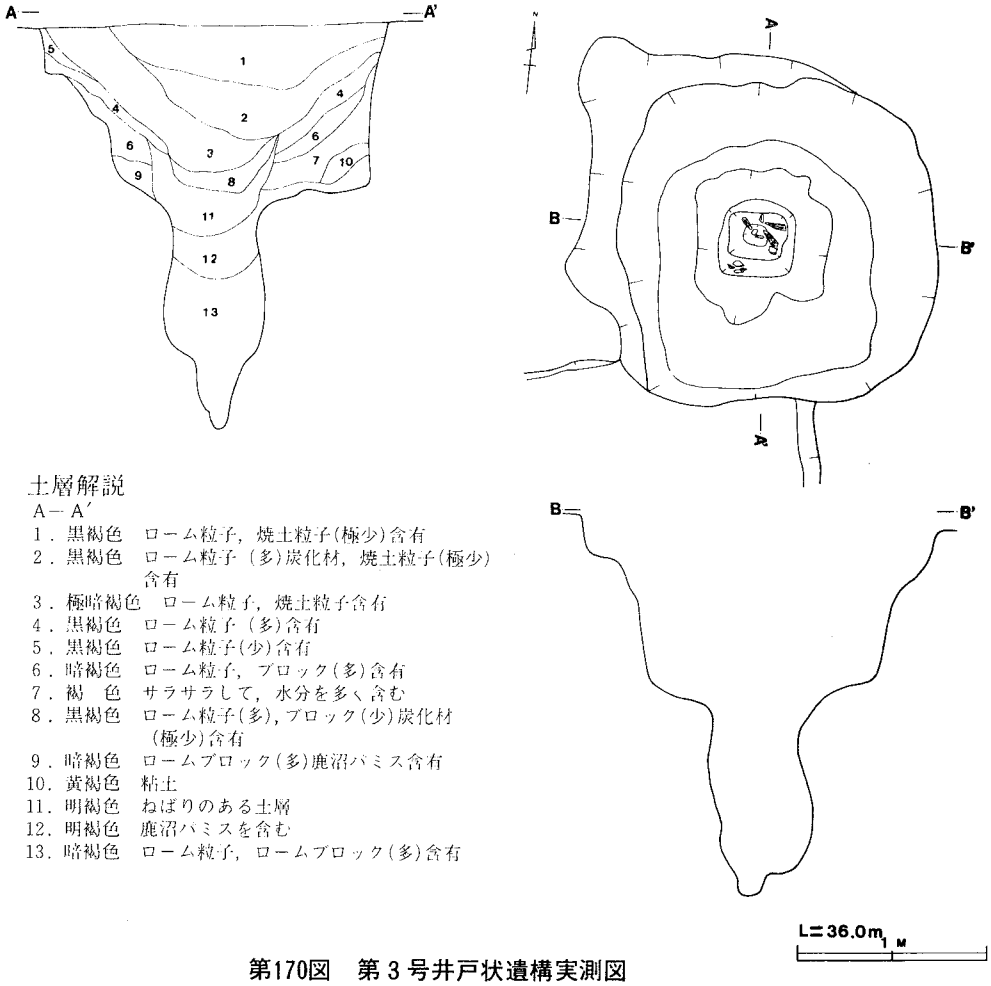
ローム粒子，少量のロームブロック，炭化粒子　　極少量の焼土粒子を含有している。

出土遺物は前記の板，曲物,(図169—6･7).栗実,ひょうたんと土師器は坏3個体分（図169—1・2・3）と須恵器の盤（図169—4）を出土している。

本址の時期を決定するに十分な出土遺物が少なく時期不明である。

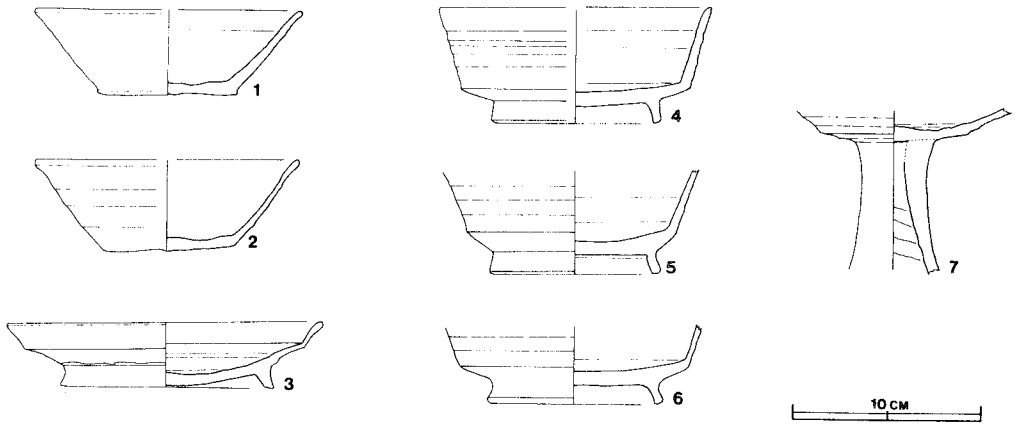
第3号井戸状遺構（図170・171）

本井戸状遺構は,調査区の南部中ほどD3区，b7，b8，c7，c8に確認され，南東部は第67号住居址を掘り込んでいるので第67号住居址より新しい遺構と思われる。本址は隅丸正方形状の平面形を呈し,掘り方は上部構造長径3.80m,短径3.65mで,主軸方向はN—17°—Wである。下部構造は確認面から1.60mほど下に,水をくむための足場と思われる平坦部を有している。規模は長径2.57m，短径2.22mを測る。その平坦部の西よりに長径0.82m，短径0.8mほぼ正方形に2.25mほど掘り下げている。覆土は13層からなり自然



土層解説
A—A′
1．黒褐色　ローム粒子，焼土粒子(極少)含有
2．黒褐色　ローム粒子（多)炭化材，焼土粒子(極少)含有
3．極暗褐色　ローム粒子，焼土粒子含有
4．黒褐色　ローム粒子（多)含有
5．黒褐色　ローム粒子(少)含有
6．暗褐色　ローム粒子，ブロック(多)含有
7．褐　色　サラサラして，水分を多く含む
8．黒褐色　ローム粒子(多),ブロック(少)炭化材(極少)含有
9．暗褐色　ロームブロック(多)鹿沼パミス含有
10．黄褐色　粘土
11．明褐色　ねばりのある土層
12．明褐色　鹿沼パミスを含む
13．暗褐色　ローム粒子，ロームブロック(多)含有

第170図　第3号井戸状遺構実測図



第171図　第３号井戸状遺構出土遺物実測図

堆積の状態を示している。上層は，黒褐色土で多量なローム粒子，炭化粒子・焼土粒子を含有し，中層は黒褐色土・暗褐色土で多量にローム粒子，ロームブロックを含有し，下層は明褐色土・暗褐色土で多量のローム粒子，ロームブロック，鹿沼パミスを含有している。

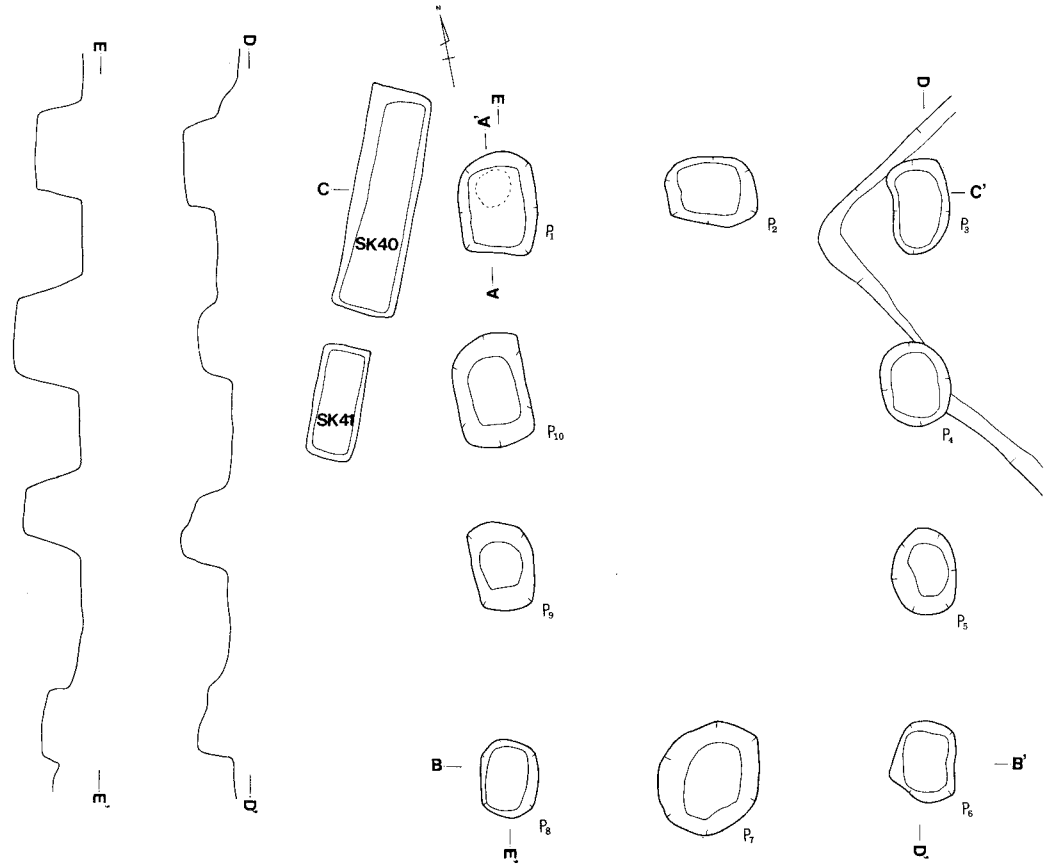
出土遺物は覆土から須恵器の，坏(図171－１・２），高台付坏(図171－４・５・６)，盤片(図171－３)，高坏　(図171—7）と破片を多数出土している。土師器は甕，　台付甕片等を出土し，他に破片を数点出土している。その他の出土遺物は砥石，ひょうたん，井戸底部より，木片数点を出土している。本址の時期を決定するにたる出土遺物は少なく時期不明である。

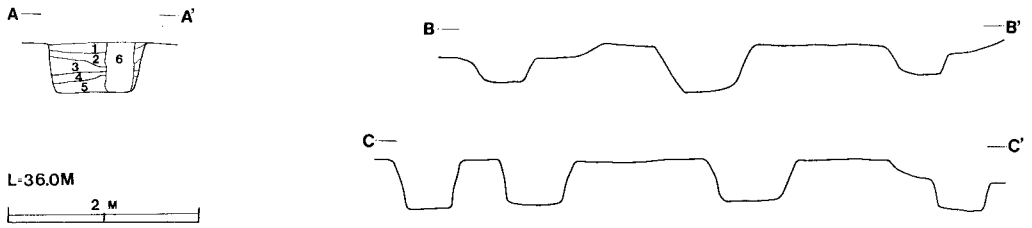
4　掘立柱建築址

第１号掘立柱建築址（図—172)

本建築址は，調査区の中央部Ｂ３区　ｊ７，ｊ８，ｊ９，Ｃ３区，ａ７，ａ８，ａ９，ｂ７，ｂ８に確認され，北東部のＰ３は第28号住居址の床面を掘り込んでいる。南東部には第29号住居址が接し，南西部0.2m　には第34号住居址が検出されている。規模は梁行２間(4.46m)，桁行3間(6.

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考
Ｐ１	106	83	51	主柱穴	Ｐ６	86	69	40	主柱穴
Ｐ２	95	71	45	主柱穴	Ｐ７	120	106	48	主柱穴
Ｐ３	98	59	33	主柱穴	Ｐ８	81	61	23	主柱穴
Ｐ４	89	79	35	主柱穴	Ｐ９	94	65	59	主柱穴
Ｐ５	91	69	49	主柱穴	10	120	76	70	主柱穴





P 1 土層解説

A－A′

1．褐　色　ロームのふみかためた層

2．暗褐色　ローム粒子(多)焼土粒子(極少)砂粒(多)含有

3．暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(少)焼土粒子
(少)砂粒　(多)ロームブロック(少)含有

4．褐　色　焼土粒子(極少)含有　ロームのふみかためた層

5．黒褐色　ローム粒子(多)砂粒(多)ロームブロック(多)含有

6．暗褐色　ローム粒子(多)焼土粒子(極少)砂粒(多)ロームブロック(少)含有

第172図　第1号堀立柱建築址実測図

03m），面積27.0㎡ほどで，主軸方向はN－9°－Eである。　柱穴のピット番号は北西コーナーをP1とし，北西から北東回りで，「⌐」状に番号をP1～P10まで仮称する。梁行2間の柱間寸法は,北側のP1·P2·P3間では2.25m＋2.21m測り,桁行3間の西側寸法は,P8·P9·P10·P1間では2.11m＋1.87m＋2.05mほどの間隔である。柱穴の掘り方は，長辺が120cm～87cm,短辺が106cm～61cmほどの正方形ないし,長方形状を呈し,深さは68～20cmを測り，柱痕は掘り方の中央より北壁側に位置し，柱穴内にはロームブロックとローム粒子を含む褐色土，暗褐色土を充填し突き固めていると思われる。柱痕は明確に検出できた。柱穴内からの出土遺物はなく時期不明である。

第2号掘立柱建築址（図173）

本建築址は，調査区の中央部B3区g9，g0，h9，h0，i8，i9に確認され，P2は第3号住居址の床面を掘り込み，P1とP2の間の柱穴は第30号住居址に掘り込んでいると思われるが検出できなかった。本址は第30号住居址，第26号土壙より新しい遺構である。規模は梁行2間(3.23m)，桁行3間(4.88m)，面積15.76㎡ほどで，主軸方向はN－7°－Eである。柱穴のピット番号は北西コーナーをP1とし，北西から北東まわりで「⌐」状に番号をP1～P9まで仮称する。梁行2間の柱間寸法は，南側のP5·P6·P7間で1.55m＋1.68mを測り，桁行3間の東側柱間寸

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考
P1	55	45	30	主柱穴	P6	62	43	17	主柱穴
P2	90	76	20	主柱穴	P7	88	86	23	主柱穴
P3	70	55	26	主柱穴	P8	63	62	40	主柱穴
P4	90	72	30	主柱穴	P9	45	42	32	主柱穴
P5	75	50	25	主柱穴					

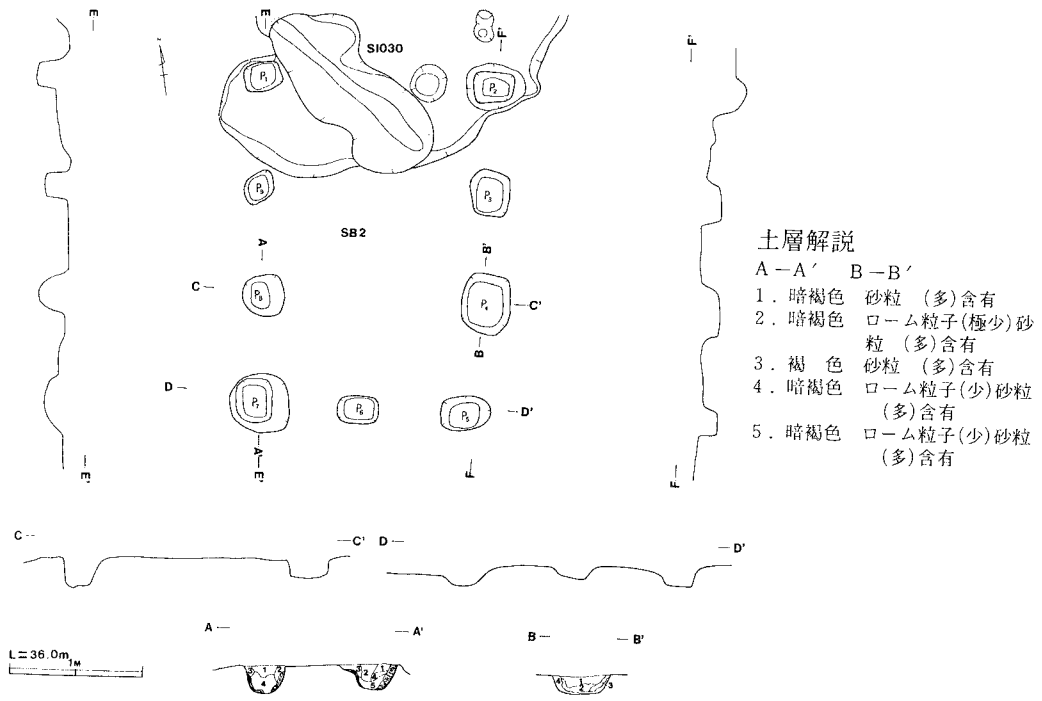
法はP2·P3·P4·P5間で1.78＋1.60＋1.50ほどの間隔である。柱穴の掘り方は一辺が42cm～88cmほどの正方形ないし，長方形を呈し，深さは22cm～55cmを測る。柱痕は掘り方の中央より北壁側に位置し，柱穴内はロームブロック，ローム粒子を含む褐色土・暗褐色土を充填している。

本址に伴う遺物の出土がないため時期不明である。

5　方形周溝遺構

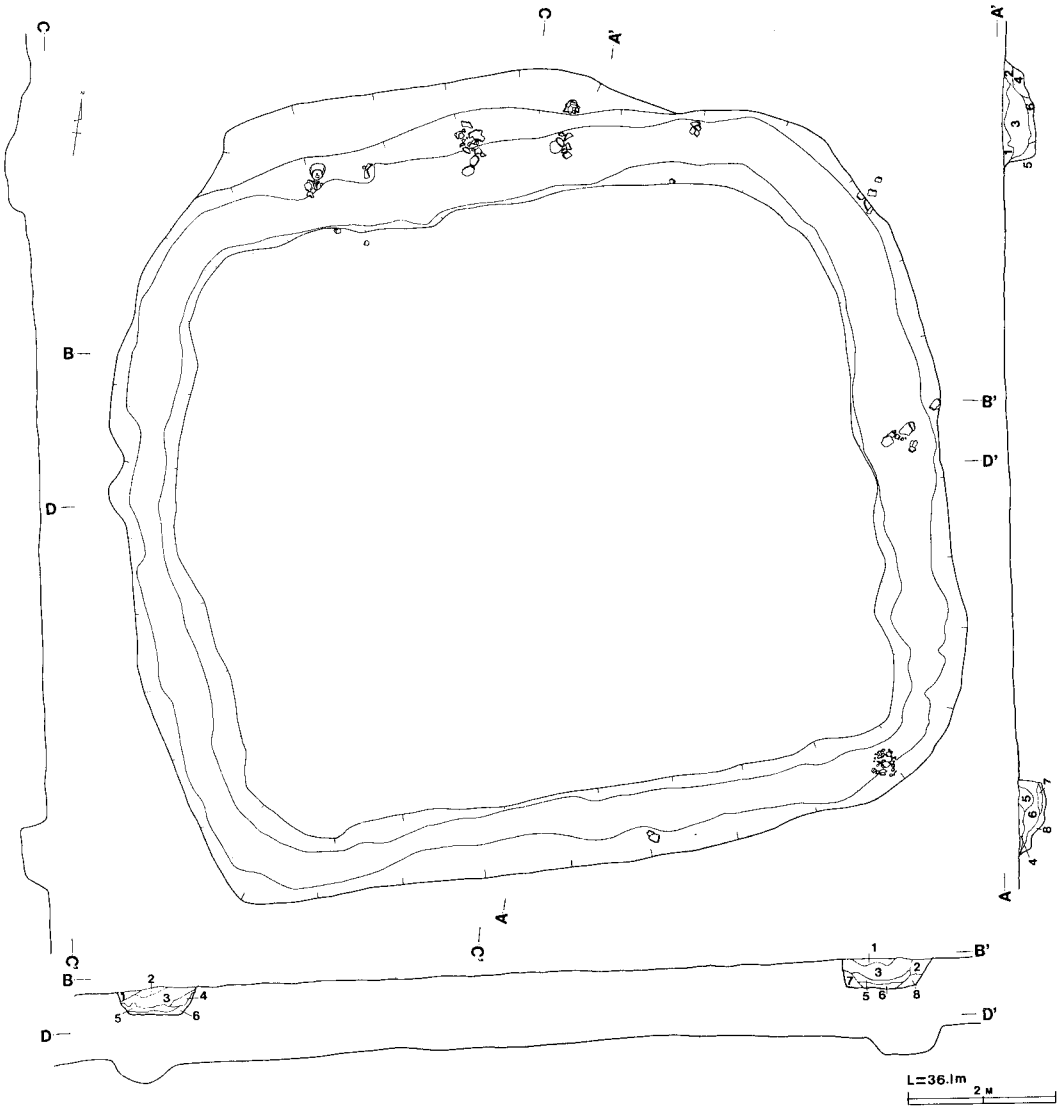
第1号方形周溝遺構（図174・175）

本遺構は,調査区の中央部C3区e8，e9，f7，f8，f9，f0，g7，g8，g9，g



第173図　第２号掘立柱建築実測図

０，ｈ７，ｈ８，ｈ９に確認された。　周構の外辺は東西11.12m，南北10.65m程で，内辺は東西で9.25m，南北8.20m測る。南北の周溝でＮ－17°－Ｗ，周溝の上幅は1.42cm～1.02cmを測り，深さは約38cm～45cmで，底面は110cm～96cmで平坦である。断面形状は「Ｕ」状を呈し，内辺掘り込みが直角となる。南東，南西コーナーは，直角に近く，北東，北西コーナーは鈍角となる。内線はおおむね直線となる。埋葬施設（主体部）は墳丘と思われるところが削平されており確認できなかったが，中央から北側に浅い土壙状の掘り込みが確認された。その規模は長辺約70cm，短辺約120cm，深さ約25cmで，桑の根等による攪乱を受け，大半が失なわれていた。遺物は皆無で本址の主体部と考えられない。周溝の覆土は８層からなり自然堆積の状態を示している。上層は黒褐色土・暗褐色土で少量のローム粒子と極少量の炭化粒子と少量の砂粒を含み，中層は暗褐色土で多量のローム粒子と極少量のロームブロック，炭化粒子，焼土粒子を含む。下層は暗褐色土・褐色土で多量のローム粒子と少量のロームブロック，多量の炭化粒子，極少量の焼土粒子を含んでいる。出土遺物は，北側の周構内中央部から甕（図175—5），壺（図175—2），甑片（図175—3），北側周構内の覆土から坩（図175—6），甕口縁部（図175—1），器台片（図175—4），石製模造品の勾玉（図175—9），他に周構内覆土から手捏土器（図175—7），支脚片，坩片，器台片，紡錘車（図175—8）などを出土している。その他，覆土から弥生式土器の破片が出土している。本址は出土遺物から古墳時代五領期に比定される遺構と思われる。



土層解説

A－A′　B－B′

1．黒褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(極少)砂粒　(少)含有

2．暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(極少)砂粒子(少)含有

3．暗褐色　ローム粒子(多)ロームブロック(極少)炭化粒子(極少)砂粒(少)焼土粒子(極少)含有

4．暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(極少)焼土粒子(極少)含有

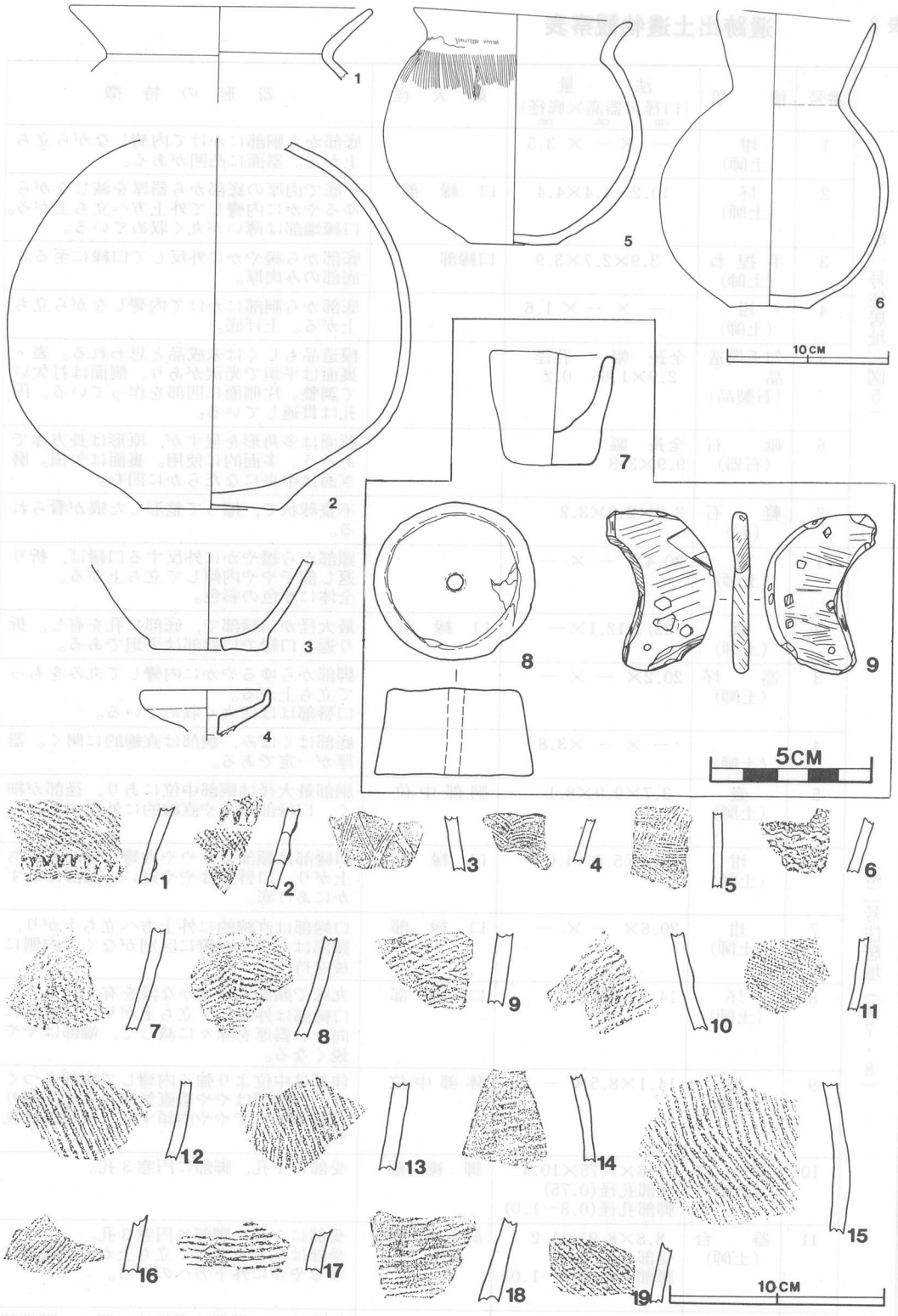
5．暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(少)焼土粒子(極少)含有

6．暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(多)焼土粒子(極少)砂粒　(少)含有

7．褐　色　ローム粒子(多)ロームブロック(極少)炭化粒子(多)焼土粒子(極少)含有

8．褐　色　ローム粒子(多)ロームブロック(少)炭化粒子(多)焼土粒子(極少)含有

第174図　第1号方形周溝遺構実測図



第175図　第1号方形周溝遺構出土遺物実測図

表 2　　遺跡出土遺物観察表

	番号	種　類	法　量 (口径×器高×底径) cm cm cm	最大径	器形の特徴
第一号住居址（図5）	1	坩（土師）	— × — × 3.5		底部から胴部にかけて内彎しながら立ち上がる。器面に凸凹がある。
	2	坏（土師）	10.2×4.4×4.4	口縁部	平底で肉厚の底部から器厚を減じながらゆるやかに内彎して外上方へ立ち上がる。口縁端部は薄いが丸く収めている。
	3	手捏ね（土師）	3.9×2.7×3.9	口縁部	底部から緩やかに外反して口縁に至る。底部のみ肉厚。
	4	坩（土師）	— × — × 1.6		底部から胴部にかけて内彎しながら立ち上がる。上げ底。
	5	勾玉模造品（石製品）	全長　幅　孔径 2.9×1.65　0.2		模造品もしくは未成品と思われる。表・裏面は平坦で光沢があり，側面は打欠いて調整。片側面に凹部を作っている。円孔は貫通している。
	6	砥石（石器）	全長　幅 9.9×3.8		断面は多角形を呈すが，原形は長方体であろう。多面的に使用。裏面は欠損。磨ぎ面は中央になだらかに凹む。
	7	軽石（石）	3.2×2.9×3.2		不整球状で，擦って整形した痕が看られる。
第二号住居址（図7・8）	1	壺（土師）	20.4× — × —		頸部から緩やかに外反する口縁は，折り返し部でやや内傾して立ち上がる。全体に赤色の彩色。
	2	甑（土師）	(22)×12.1×—	口縁部	最大径が口縁部で，底部に孔を有し，折り返し口縁で口唇部は平坦である。
	3	高坏（土師）	20.2× — × —		脚部からゆるやかに内彎して丸みをもって立ち上がる。口唇部はほぼ丸く収めている。
	4	（土師）	— × — ×3.8		底部はくぼみ，胴部は直線的に開く。器厚が一定である。
	5	壺（土師）	3.7×9.9×8.1	胴部中位	胴部最大径は胴部中位にあり，径部が細く，口縁部はやや直線的に外反する。
	6	坩（土師）	10.4×5.0×4.0	口縁部	口縁部は頸部よりやや内彎しながら立ち上がり，口唇部はやや鋭い。底部はわずかにあげ底。
	7	坩（土師）	20.6× — × —	口縁部	口縁部は直線的に外上方へ立ち上がり，頸部はあまり明瞭に区別がなく，内側に稜を持つ。
	8	坏（土師）	14.7×5.5× —	口縁部	丸底で頸部にわずかな段を有す。口縁部は外反して立ち上がり，口唇部に向かい器厚を除々に減じて，端部はやや鋭くなる。
	9	椀（土師）	14.1×8.5× —	体部中位	体部は中位より強く内彎して底部をつくる。口縁部はやや垂直気味に立ち上がり口唇部近くでやや内傾する。口唇部は丸い。
	10	器台（土師）	7.8×7.75×10.4 受部孔径(0.75) 脚部孔径(0.8～1.0)	脚裾部	受部に1孔，脚部に円窓3孔。
	11	器台（土師）	8.8×8.9×11.2 受部孔径 0.9 脚部孔径 0.8～1.0	脚裾部	受部に1孔，脚部に円窓3孔。受部は丸みをおびて立ち上がり，脚部はゆるやかに外下方へのびる。
	12	支脚（土師）	5.5× — × —		筒抜けで，脚部は直線的に開く。脚端部は平坦である。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
ヘラミガキ	ナデ	明赤褐	普通	砂粒・雲母 石英含	
ヘラナデ	ナデ	橙	良好	砂粒 雲母含	
ナデ	ナデ	にぶい橙	普通	砂粒含	
横ナデ	横ナデ	橙	普通	砂粒・雲母 長石含	胴部下半に煤付着
表裏面に横方行の擦痕有り。					瑪瑙製
口—折り返し部縄文　下—ヘラキガキ	ヘラミガキ	灰赤	良好	砂粒 長石 石英含	成形—丁寧。 頸部に磨滅
ヘラミガキ	ナデ	明赤褐	普通	砂粒・長石 石英含	底部煤付着
ヘラミガキ	ヘラナデ	赤褐	普通	砂粒含	
ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	にぶい橙	良好	砂粒・スコリア含	
口—横ナデ 胴—ヘラ磨キ	口—ヘラミガキ 胴—ナデ	にぶい橙	普通	砂粒・雲母 長石含	小型
ナデ	口—ナデ 胴—ヘラ磨キ	にぶい橙	普通	砂粒・雲母 長石・石英含	
	胴—ヘラナデ	にぶい黄橙	良好	砂粒含	
口—ナデ 底—ヘラ削り	ヘラ磨キ	橙	良好	砂粒含	
口—横ナデ 中位—ナデ 底—ヘラ削り	ヘラナデ	にぶい橙	普通	砂粒含	
ヘラ磨キ	ヘラ磨キ	赤褐	良好	砂粒 雲母含	丹彩
ヘラナデ	受—ナデ 脚—横ナデ	にぶい黄橙	普通	砂粒・雲母 長石含	
ハケ目の後ナデ	ヘラナデ	褐	やや不良	砂粒・雲母 長石含	

	番号	種類	法量 (口径cm×器高cm×底径cm)	最大径	器形の特徴
第二号住居址	13	支脚 (土師)	孔径 1.8		孔を有する。
	(1)	壺 (弥生)	13.9×26.2/26.0×8.4	胴部中位	胴長で，頸部のくびれが少なく，口縁部はほぼ直線的に外反する。
第三号住居址（図10(1)・(2)）	1	壺 (土師)	13.0×27.5×5.4	胴部中位	口縁は頸部からほぼ垂直に立ち上がり，口唇部は丸味を持つ。頸部内面には稜を有す。
	2	壺 (土師)	— ×10.5×4.0	胴部中位	胴部はやや強く張り出し，ほぼ中位に最大径をもち，底部へ向かう。器厚は一定している。底部はわずかに上げ底。
	3	坩 (土師)	— × — ×2.0	胴部中位	胴部はやや強く張り出し，中位に最大径を持ち，底部へ至る。器厚は一定である。上げ底。
	4	甕 (土師)	— × — × 5.6		底部から緩やかに内彎して立ち上がる。
	5	壺 (土師)	— × 6.8×3.0		胴部はやや強く張り出し，平底の底部に至る。
	6	甕 (土師)	(20.6)× — × —	口縁部，胴部中位下	頸部から口縁下位にかけてはやや垂直ぎみに立ち上がり，それから強く外反する。口唇部は丸い。
	7	甕 (土師)	20.7 × — × —	胴部中位	頸部で「く」の字状に外反する。胴部は球形。
	8	小形甕 (土師)	10.8×10.0×6.0	胴部上位下	口縁部は頸部で僅かに肥厚し，外反する。胴部は頸部から張り出し，底部に至る。底部はわずかに上げ底。
	9	甑 (土師)	17.0×17.7×6.5 孔径 2.2	胴部中位	頸部で括れ，外上方へのびる。口縁部はほぼ直線的にのび，口唇部は平坦である。胴部は緩やかに張り出し，底部に孔有り。
	10	坩 (土師)	10.7×8.0×2.5	口縁部	口縁部は頸部よりほぼ直線的に外反する。頸部内外に稜を有する。口縁に比べて体部が小さい。平底。
	11	甕 (土師)	(18.8) × — × —		口縁部は頸部より直線的に外傾し，中位でさらに外反する。胴部は強く張り出しやや偏平な球状を呈する。
	12	鉢 (土師)	10.8×10.0×4.8	体部上位	上げ底から内湾して立ち上がる胴部。胴部内彎からわずかに外反して口縁となる。端部は丸い。
	13	飾器台 (土師)	(17.2) × — × —		脚部附近から大きく外方へ開く。受部口縁は欠損している。飾部先端は鋭くなっている。
	14	坏 (土師)	12.7×4.3 × —	口縁部	底部から体部にかけて緩やかに内彎し，口縁は，僅かに外反して立ち上がる。
	15	坏 (土師)	14.1×5.7 × —	口縁部	体部は僅かに内彎し，口縁はほぼ直立する。
	16	坏 (土師)	14.0×5.5 × —	口辺部	口縁は内彎して外面にわずかな稜をつくり，端部は丸い。
	17	手捏ね (土師)	5.2×3.2×3.5	口縁部	肥厚な底部から体部にかけてやや内彎しながら，器厚を減じ口縁に至る。平底。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
ハケ目整形	ヘラナデ	にぶい橙	良好	砂粒含	
ナデ	ナデ	にぶい褐	普通	砂粒含	煤付着
口—指ナデ 胴—ヘラナデ	口—指ナデ 胴—ヘラナデ	明赤褐	良好	砂粒含	
ハケ目整形の後ナデ	ナデ	にぶい黄橙	不良	砂粒 長石 石英等含	
ヘラミガキ	ナデ	赤	良好	砂粒 長石 石英等含	丹彩
ヘラケズリ後ナデ	ヘラナデ	にぶい赤褐	普通	砂粒含	
ナデ 輪積痕あり	ナデ	橙	普通	砂粒 長石 石英等含	成形不良
口—ナデ 胴—ヘラケズリ	口—ナデ 胴—ヘラナデ	にぶい黄橙	良好	砂粒等含	
口—指ナデ，上胴部—ヘラナデ，下胴部ヘラ削り	口—指ナデ 胴—ヘラナデ		普通	砂粒 長石含	
口—横ナデ 胴—ハケ目	口—横ナデ 胴—ナデ	にぶい黄橙	普通	砂粒等含	完形
口—横ナデ 胴—ハケ目	口—ヘラ削り，ハケ目 胴—ヘラ削リ	にぶい黄橙	普通	砂粒等含	完形
ヘラミガキ	ナデ	にぶい橙	良好	砂粒等含	ほぼ完形
口—指ナデ 胴—ハケ目の後ナデ	口—指ナデ 胴—ヘラナデ	灰褐	普通	砂粒等含	
ナデ	横ナデ，ナデ	にぶい橙	良好	砂粒等含	
ナデ	ナデ	にぶい赤褐	普通	砂粒 雲母含	
口—横ナデ 底—ヘラケズリ	ナデ	にぶい橙	普通	砂粒 雲母 スコリア含	
口—ナデ 底—ヘラケズリ	ナデ	浅黄橙	普通	砂粒 スコリア含	ほぼ完形
ナデ	ヘラミガキ	赤橙	良好	砂粒含	
ナデ	ナデ	にぶい橙	普通	砂粒含	ほぼ完形

	番号	種　類	法　量 (口径×器高×底径) cm　cm　cm	最大径	器形の特徴
第三号住居址（図10(1)・(2)）	18	手捏ね（土師）	5.7×3.6×3.8	口縁部	底部から体部にかけてほぼ直線的に立ち上がり，口縁で内彎している。
	19	手捏ね（土師）	7.6×3.2×5.6	口縁部	不整形な手捏ねで，口唇部は尖がっている。平底。
	20	土　玉	径 2.7　円孔径0.35		球形。貫通孔有り。
	21	有孔円板（石製）	(縦)3.4×3.9×(厚)0.5 円孔径0.15		円板状で貫通孔２つ有り。
	22	砥　石	長　幅 10.2×7.2		磨ぎ面のみ残存した破片。磨ぎ面は良く磨がれており，溝状のキズ有り。
第四号住居址（図13(1)・(2)）	1	壺（土師）	20.0 × — × —		口縁部は頸部から垂直に立ち上がり，口唇部近くで外傾する。口唇部は丸い。肩部はやや強く張り出す。
	2	壺（土師）	18.4 × — × —		口縁部は頸部から垂直に立ち上がってからやや外反する。
	3	壺（土師）	— × — × 8.4		胴部は強く張り出し，中位で最大径となり，平底に至る。
	4	壺（土師）	10.0×12.4 × —	胴部中位	丸底で，口縁部はほぼ直線的に外反する。
	5	甕（土師）	11.8×15.6×6.9	胴部中位	球形で平底である。
	6	甕（土師）	(16.2) × — × —	胴部中位上	口縁部は緩やかに外反し，胴部は中位上で最大径をもつ。
	7	甑（土師）	22.5×29.5×28.0	口縁部	口縁部は僅かに外反し，口唇部は丸い。胴部はあまり膨らまない。
	8	甑（土師）	19.2×20.0 × —	口縁部	口縁部は垂直気味に立ち上がり，口唇部近くで外反する。胴部は直線的に内彎する。
	9	坏（土師）	14.9×4.5 × —	口縁部	口縁部は外反し，体部は弧状を呈する。境の内外面に稜有り。
	10	坏（土師）	13.8×5.0 × —	口縁部	口縁部はやや直線的に外反し，口唇部は尖がる。体部との境に僅かな段をもち，体部はやや偏平な弧状を呈する。
	11	坏（土師）	15.1×5.2 × —	口縁部	口縁部は外反し，口唇部は内側につまみ上げられる。体部は直線的で，丸底である。
	12	器　台（土師）	(10.4) × — × —		器肉がやや厚く，口縁は緩やかに内彎し口唇部は丸い。
	13	坏（土師）	15.0×5.7 × —	口縁部	口縁部は外反し，体部と口縁との境内外に稜有り。体部は偏平な弧状を呈する。
	14	坏（土師）	14.8×5.2 × —	口縁部	口縁部は直線的に外傾し，体部との境に稜をもつ。体部は偏平である。
	15	坏（土師）	15.2×5.5 × —	口縁部	口縁部は直線的に外傾し，体部は直線的で偏平である。体部と口縁との境に段有り。
	16	坏（土師）	11.6×5.2 × —	口縁部	口縁部は直線的に立ち上がり，口唇部近くで外傾する。口唇部はやや尖がる。体部は弧状を呈する。丸底である。
	17	椀（土師）	11.8×6.9 × —	口辺部	口縁部は内傾して立ち上がり，体部は深みのある半球形。
	18	坏（土師）			口縁部と体部の境に稜をもち，体部は偏平である。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
ナデ	ナデ	明赤褐	普通	砂粒 雲母等含	胴下半から底部に煤付着。ほぼ完形
指ナデ （指文あり）	口—指ナデ 底—ヘラ磨き	にぶい橙	良好	砂粒 スコリア含	
					石製模造品
					粘板岩
口—指ナデ 胴—ヘラ削り	口—指ナデ 胴—ヘラナデ	黒褐	普通	砂粒 砂れき含	
口—指ナデ	口—指ナデ	橙	不良	砂粒含	
ヘラナデ	ヘラナデ	橙	普通	砂粒含	
口—横ナデの後 ヘラ磨き 胴—ヘラナデ	口—ヘラ磨き 胴—ヘラナデ ハケ目	明赤褐	良好	砂粒含	ほぼ完形
ナデ	ナデ	にぶい赤褐	普通	砂粒含	
口—指ナデ 胴—ヘラ削り後 ナデ 下胴部—ヘラ削り	口—指ナデ 胴—ヘラナデ 頸—輪積み痕	赤褐	普通	砂粒含	
口—横ナデ 胴—ナデ	口—横ナデ 胴—ナデ	黄橙 極暗褐	普通	砂粒含	ほぼ完形
口—横ナデ 胴—ヘラナデ	ナデ	にぶい橙	普通	砂粒 長石含	ほぼ完形
口—横ナデ 底—ヘラ削り	ヘラ磨き	赤褐	良好	砂粒 雲母等含	
口—ヘラ磨き 底—ヘラ削り	ヘラ磨き	明赤褐	普通	砂粒 雲母等含	完形
口—横ナデの後 ヘラ磨き 底—ヘラ削り	ヘラ磨き	橙	良好	砂粒 長石等含	
口—横ナデ 以下—ヘラ削り	ヘラ磨き	にぶい橙	良好	砂粒 雲母等含	
口—横ナデ 底—ヘラナデ	ヘラ磨き，底部 放射状ヘラ磨き	橙	良好	砂粒等含	ほぼ完形
口—横ナデ 底—ヘラナデ	ヘラ磨き	明赤褐	不良	砂粒 石英等含	
口—横ナデ 底—ヘラナデ	ヘラ磨き 摩滅している	明赤褐	不良	砂粒 雲母等含	ほぼ完形
口—横ナデ 底—ヘラナデ	ヘラ磨き （摩滅している）	橙	普通	砂粒・雲母 長石 石英等含	完形 丹彩
口—横ナデ 底—ヘラ削り	横ナデ	赤	普通	砂粒・長石 石英等含	丹彩。ほぼ完形
ヘラナデ	ヘラ磨き （摩滅している）	明赤褐	不良	砂粒 雲母等含	

	番号	種　類	法　量 (口径×器高×底径) cm　cm　cm	最大径	器形の特徴
第四住居址	19	有孔円板 (石製)			一度孔を穿ち，欠損した痕がみられる。さらに中央よりに2孔を穿ってある。
第十九号・二十号・二十一号住居址、第一号井戸状遺構（図33(1)・(2)・(3)・(4)）	1	甕 (土師)	(21.0)×－×－	胴部中位	口縁部はやや直線的に外反し，口唇部はほぼ平坦である。胴部は僅かにふくらみ中位で最大径をもつ。
	2	甕 (土師)	19.4 ×－×－		口縁部は頸部から，外反気味に直立して僅かに内彎する。口唇部は丸い。胴部は緩やかに張る。
	3	甕 (土師)	×－×－ (8.8)		平底で胴部は僅かに内彎して立ち上がる。
	4	坏 (土師)	13.5×4.5 ×－	口縁部	体部は僅かに内湾して立ち上がり，口唇部近くでやや外傾する。口唇部は尖がる。体部と底部との境は丸みをおび，不明瞭であるが平底。
	5	坏 (須恵質土師)	19.4×4.6×6.6	口縁部	平底で，体部は直線的に開き，口唇部近くでやや外傾する。口唇部は丸い。
	6	高台付坏 (土師)	15.0×6.3×8.4	口縁部	体部は，僅かに内彎して立ち上がり，口縁部は若干外反し，端部は丸い。体部と底部との境は丸みを帯び，外方へのびる高台を付す。
	7	坏 (土師)	12.1×5.5 ×－	口辺部	口縁部はやや内彎し，体部は半球状を呈する。
	8	坏 (土師)	13.8×5.6 ×－	口縁部	偏平な丸底から内彎して立ち上がり，頸部でわずかに括れ，さらに内彎しながら外上方へのびる。
	9	坏 (土師)	14.8×5.0 ×－	口縁部	口縁部は外反し，口唇部近くで僅かに内傾角度となる。口唇部は丸味を有す。頸部に明瞭な稜を有し，偏平な丸底へ続く体部となる。
	10	坏 (土師)	14.4×4.6 ×－	口縁部	ゆるやかに内彎して立ち上がる。体部が頸部で稜を有し，口縁部で外反する。口唇部は若干器厚を減じて丸みを有す。
	11	坏 (土師)	13.6×5.2 ×－	口縁部	口縁部は外反し，口唇部は尖がる。体部は整った弧状を呈する。頸部は括れて明瞭な稜を有す。
	12	坏 (土師)	14.8×5.0 ×－	口縁部	口縁部はほぼ垂直に立ち上がってから直線的に外反し，口唇部はやや尖がる。体部はやや偏平な弧状を呈する。
	13	壺 (土師)	－×－×5.1		口縁部は直線的に広がり，頸部は「く」の字状にくびれ，胴部は強く張り出し，中位上で最大径をもち，平底に至る。
	14	甕 (土師)	－×－×7.1		やや凹凸のある底部で，胴部は緩やかに内彎して，中位上に最大径をもち，口縁部は頸部から若干外反しながら立ち上がる。
	15	甕 (土師)	(19.0)×－×－		口縁部はやや外反し，頸部内面に明瞭な稜をもつ。肩部は丸みをもって張り出す。
	16	甕 (土師)	－×－×8.6		底部は平底で，側面に突出し，胴部は緩やかに内彎して立ち上がる。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
					石製模造品
口—指ナデ 胴—ヘラケズリ	口—指ナデ 胴—ナデ	橙	不良	砂粒含	
口—指ナデ 胴—ヘラ削リ	指ナデ	浅黄橙	やや不良	砂粒 長石含	
ヘラ削リ	ヘラナデ	外—明黄褐 内—にぶい黄橙	普通	砂粒（多） スコリア （少）含	
ナデ	ナデ	外面 にぶい橙 内面 黒	普通	砂粒含	内黒
口—ナデ 弱い水挽き痕	口—ナデ 弱い水挽き痕	にぶい黄橙	やや不良	砂粒含	ほぼ完形
ろくろナデ ミズビキ痕 （弱い）	坏—ヘラ磨キ 脚—回転ヘラケズリ	橙	良好	砂粒 長石等含	ほぼ完形 内黒
口—横ナデ 底—ヘラケズリ	ヘラミガキ	橙	良好	砂粒含	完形
口—横ナデ 底—ヘラケズリ	ヘラミガキ	明赤褐	普通	砂粒 雲母等含	ほぼ完形
口—横ナデ 底—ヘラケズリ	ヘラミガキ	明赤褐	普通	砂粒 長石 石英等含	
口—横ナデ 底—ヘラ削リ	ヘラ磨キ	橙	良好	砂粒含	
口—横ナデ 底—ヘラケズリ	ヘラミガキ	橙	良好	砂粒 スコリア等含	
口—横ナデ 胴—ヘラケズリ	ヘラミガキ （摩滅している）	橙	普通	砂粒 長石等含	
口—ヘラケズリ （縦） 胴—ヘラケズリ の後ヘラミ ガキ（横） 底—ヘラケズリ	横ナデ	褐	良好	砂粒 雲母含	
ナデ	ナデ	橙	不良	砂粒含	
口—指ナデ 胴—ヘラナデ	口—指ナデ 胴—ヘラナデ	赤	普通	砂粒含	
ヘラ削り	ヘラナデ	橙	不良	砂粒 雲母含	

	番号	種類	法量 (口径cm×器高cm×底径cm)	最大径	器形の特徴
第十九号・二十号・二十一号住居址、第一号井戸状遺構（図33(1)・(2)・(3)・(4)）	17	甕（土師）	(27.0)×—×—		口縁部は強く外反し，口唇部はさらに強くひきだされ，口唇部は丸い。体部はやや内彎して立ち上がる。
	18	坏（土師）	(12.2)×—×—		口縁部は緩やかに内彎する。器肉はやや厚い。底部欠損。
	19	坏（土師）	12.0×—×—	体部	口縁部はやや内彎して立ち上がり，口唇部は内傾する。体部は，偏平な弧状を呈する。
	20	坏（土師）	(13.2)×—×—	体部	口縁部はやや内彎して立ち上がり，口唇部近くでわずかに器厚を減じる。体部はやや偏平な弧状を呈する。
	21	甕（須恵）	24.1×—×—	口縁部	ほぼ直線的に立ち上がり，口縁部に至る。口縁部は断面方形状に収めている。
	22	甕（須恵）	25.5×—×—	口縁部	体部は直線的に外上方へのび，口縁部は端部がやや内傾し，内・外両端はそれぞれやや突出し，断面三角形状を呈する。
	23	（須恵）			体部上半に把手状のものをつけている。丁寧な作りである。
	24	盤（須恵）	15.2×2.2×10	口縁部	体部は短かく，外反し上方へのびるが，1.4cmほどで口縁部に至る。口縁端部は外方へ向いている。体部と底部との境は明瞭に屈曲する。
	25	坏（須恵）	15.3×—×11.6	口縁部	体部は外反しつつ外上方へ立ち上がる。口縁端部は外方を向く。体部と底部の境はにぶい稜をなす。
	26	坏（須恵）	11.0×3.4×7.6	口縁部	体部はほぼ直線的に立ち上る。口縁部は丸く収めている。内面は底部と体部との境が大きく屈曲する。
	27	坏（須恵）	11.1×4.4×7.2	口縁部	体部は，ほぼ直線的に外的方へ立ち上がる。口縁部は，わずかに外反気味で端部はほぼ丸く収めている。
	28	坏（須恵）	13.2×4.6×6.2	口縁部	体部は水挽痕を良く残し下半部は内湾気味に上半部は外反気味に上方へ立ち上がる。端部は若干外反し，僅かに鋭さを有す。
	29	坏（須恵）	13.5×4.4×8.5	口縁部	丁寧で水挽き痕はあまり残さない。体部は直線的に外上方へ立ちあがり，端部はやや鋭い。
	30	坏（須恵）	13.3×4.0×7.7	口縁部	丁寧で水挽き痕を良く残す。体部はやや内彎気味に外方へ立ちあがり，器厚をしだいに減じる。
	31	坏（須恵）	12.3×5.0×5.7	口縁部	体部は器厚を減じながら直線的に外方へ立ち上がる。端部はやや鋭さを残す。
	32	坏（須恵）	13.1×5.5×5.5		体部は直線的に上方に立ち上がる。口縁部は器厚をやや増し，端部は丸く収めている。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
指ナデ 整形不良	指ナデ	浅黄橙	良好	砂粒含	
口—横ナデ 底—ヘラケズリ	ヘラ磨キ マメツしている	赤	不良	砂粒	
口—横ナデ 底—ヘラ削リ	ヘラミガキ	明赤褐	普通	砂粒 雲母等含	
口—ナデ 底—ヘラケズリ	ヘラミガキ (摩滅している)	橙	不良	砂粒 長石含	
幅3cm内外の粘土紐，巻き上げ回転による指成形	指による成形		不良	長石 細砂粒含	
	丁寧に整形している		不良	長石粒 細砂粒	
器外面は緑色の自然釉が付着し調整痕等不明			良好 黒色斑点あり	精選	
底部—回転ヘラ削リ			普通	長石・砂粒 雲母未含	水挽き痕，弱い
底部—回転ヘラ削リ		青灰	良好	長石粒 細砂粒含	水挽き痕，弱い
自然釉が付着している為，観察が困難である。底部は回転ヘラ削リが施されている。		灰 底部及び体部に黄緑の自然釉付着	良好	長石粒 (多)	水挽き痕，弱い 釉の状態から底部を上にして焼成したことが判明
底—丁寧に回転ヘラ削リ		灰	良好	細砂粒を含む，小さな黒色斑点あり	水挽き痕，強い 体部から底部に自然釉付着
底—回転ヘラ切り痕，手持ちヘラナデが多方向から。	底—ラセン状水挽き痕 体—丁寧 口—横ナデ	灰オリーブ	良好	長石粒 細砂粒(多)	ヘラ記号有り
底—回転ヘラ削リ 境—回転ヘラ削リで面取り	体—横ナデ	灰オリーブ	やや不良	石英粒を若干含むが精製されている。	
底—静止ヘラナデ	底部内面にはラセン状の水挽痕を良く残す	灰オリーブ	良好	石英粒， 細砂粒含 精製	
底—回転ヘラ切り後ナデ 水挽き痕強	口—指ナデ 水挽き痕弱		良好	長石粒含 精製	
底—回転ヘラ削り後手持ヘラ削り	底・体部の境—強いアテ		普通	長石粒を含むが，精製されている	水挽き痕弱 ヘラ記号有り 焼成時にヒビ割れ有り

	番号	種類	法量 (口径cm×器高cm×底径cm)	最大径	器形の特徴
第十九号・二十号・二十一号住居址、第一号井戸状遺構	33	坏 (須恵)	13.2×—× 9.0	口縁部	体部は直線的に外上方へ。端部は丸く収めている。 内側底・体部との境は屈曲し明瞭。 外側底・体部との境は丸味有り。
	34	坏 (須恵)	14.4 ×—× 7.9	口縁部	体部は直線的に器厚を減じて立ち上がる。口縁端部は丸くおさめている。底部は外周部にアテの入った若干丸みを有する。底・体部境は明瞭な屈曲
	35	台付長頸壺 (須恵)	—×—× 8.0		体部は外上方へ立ち上がる。平底，短い断面三角形の高台。
	36	坩 (土師)	11.2 × —× —		頸部以下欠失。 口縁部器厚は極めて薄く，内彎して立ち上がり，口唇部は尖る。
	37	高坏 (須恵)			坏部は器厚を減じながら大きく外方へ開き，口縁端部は方形状で垂直に上がる。内面に浅い凹線状のものが廻る。
	38	高坏 (須恵)			体部と脚部を接合した後に，四方に透し窓を穿っている。
	39	長頸壺 (須恵)			体部と口頸部の境は明瞭に屈曲し，口頸部は器厚を減じながら外反しつつ上方へのびる。
	40	長頸壺 (須恵)			頸部から口縁部付近まででであるが，頸部上半はほぼ直線的に上方へ，上半は器厚を減じながら外反し，上方へのびる。
	41	有孔円板 (石製)	径 2.4 厚 0.5 孔径 0.15		欠損は著しいが外縁部から円板と判断。欠損部に孔痕があるため双孔。
	42	鉄鎌 (鉄器)	長4.6+3.2 幅0.7・0.5・0.4		42・43は接合可能。頭部は隅丸方形で，断面は矩形の角柱状を呈し，下に向かって細くなる。
	44	砥石	5.8 ×4.5×2.55		不定形で多面に使用。磨ぎ面はほとんどゆるやかな凹面。
第六号住居址（図16）	1	甕 (土師)	19.0 ×— × —		頸部で強く外反し，口縁部でわずかに内傾角度となり，外面二条，内面に一条の稜をつくる。端部は丸い。胴部は，緩やかに内彎する。
	2	甕 (土師)	19.4 × —× —		頸部器厚は薄くなり，外反し，口縁端外面に一条の凹線が廻る。
	3	甑 (須恵)	28.1 × —× —	口縁部	体部は直線的に外上方へ立ち上がり，口縁端部は水平で内外ににぶい稜をなす。
	4	坏 (須恵)	12.7×5.3×6.2	口縁部	体部は器厚を減じながら，わずかに内彎気味に外上方へ立ち上がる。口縁部はほぼ直線的で端部は丸く収めている。水挽き痕は弱い。
第九号住居址（図19）	1	甕 (土師)	(17.8)×— ×—		頸部は「く」の字に外反し，口唇部近くから，内傾する。口唇部は，やや尖がる。胴部は緩やかに膨らみ，底部は欠損している。
	2	甕 (土師)	(24.2)×— ×—	口縁部	頸部は直立して，口縁部はやや強く外反し，さらに外傾する。口唇部は丸い。胴部は序々に内彎する。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
底—丁寧な回転ヘラ削リ 底・体部境—回転ヘラ削リ	底・体—水挽き痕若干残す	灰	良好	長石 砂粒含 精製	ヘラ記号有リ
水挽き痕—明瞭 底—回転ヘラ削リ	水挽き痕—弱	灰	やや不良	長石粒 若干含む 精製	
底—回転ヘラ削リ		灰白	良好	長石粒 細砂粒含	
ヘラ磨キ	ヘラ磨キ	にぶい橙	普通	砂粒含	
			良好	長石粒 細砂粒含 精選	坏—緑色自然釉
坏下半—回転ヘラ削リ		灰	良好	長石粒 細砂粒含	
			良好	長石粒 細砂粒を 含む	
		青灰	良好	長石粒 細砂粒含 (多)	水挽き痕—弱
					サビが著しい
口—指ナデ 胴—ヘラケズリ	口—指ナデ 胴—ヘラナデ	橙	良好	砂粒含	
口—指ナデ 胴—ヘラケズリ	口—指ナデ 胴—ヘラナデ	にぶい橙	普通	砂粒 長石含	
			良好	長石粒 細砂粒含	
底—切り離し後手持ヘラ削り		にぶい黄橙	やや不良	長石 細砂粒含	
口—指ナデ 胴—ヘラケズリ	口—指ナデ 胴—ヘラナデ	にぶい赤褐	普通	砂粒 雲母等含	
口—指ナデ 胴—ヘラケズリ	口—指ナデ 胴—ナデ	にぶい黄橙	良好	砂粒等含	

	番号	種類	法量（口径×器高×底径）cm cm cm	最大径	器形の特徴
第九号住居址（図19）	3	甕（土師）	— × — × 6.2		平底で，胴部は丸みを帯びて内彎しながら立ち上がる。
	4	坏（土師）			体部はやや偏平な弧状を呈し，口縁部上位は欠損。
	5	坏（土師）			体部は凸凹で，歪みがある。
	6	坏（土師）	11.7×4.1 × —	口辺部	口縁部は短かく，直線的に内傾する。体部は偏平である。
	7	坏（土師）	(13.0)×4.4 × —	口辺部	体部は偏平な弧状を呈し，口縁部は僅かに内彎し，口脣部はやや尖がる。
	8	坏（土師）	13.6×4.4/4.3 × —	口縁部	口縁部はやや内彎気味で，口脣部は尖る。体部は弧状を呈する。
	9	砥石	(長)8.4×(幅)4.8		不定形であるが，原形は長方体であろう。表・裏・側面とも良く使用されている。
第十一号住居址（図20）	1	甕（土師）	6.8×7.3/6.8×3.6	口縁部	口縁部は外反し，胴部は中位に強く張り出して最大径となる。歪みがある。
	2	小型甕（土師）	— × — × 5.3		平底で，立ち上がり部はややくぼみ，胴部は中位下半で最大径をもつ。
	3	器台（土師）	9.8 × — × — 孔径 1.4		受部はわずかに内彎し，口脣部に凹線が廻る。受部孔をもち，脚部に円窓が有る。
	4	支脚（土師）	13.2×13.9×7.6 孔径 1.6	脚底部	孔を有し，脚部は直線的に開く。
	5	皿（土師）	19.2×3.8 × —	口縁部	底部は凸凹で，体部は極めて浅く，口縁部は直線的に立ち上がる。口脣部は器厚を減じ丸みを帯びる。
第十二号住居址（図22）	1	壺（土師）	(15.5)× — × —		頸部から直線的に外反し，口脣部で器厚を減じた折り返し口縁となる。
	2	鉢（土師）	11.7×8.5 × —	口辺部	口縁部はやや内彎し，体部は歪みがあり丸底となる。外面の頸部に稜をもつ。
第十四号住居址（図25）	1	勾玉模造品（石製品）	全長 厚さ 孔径 3.35×0 .6 × 0.2		板状の素材を擦って成形している。側面に両面からの擦面を残す。
第十三号・二十五号住居址（図41(1)・(2)）	1	壺（土師）	(12.6)× — × —	胴部	口縁部はやや外反し，中位で僅かに内彎する。胴部は強く張り出し，球形を呈する。頸部に凸帯をもち，凸帯上面にキザミ有り。
	2	壺（土師）	14.1 × — × —		頸部から口縁部にかけては緩やかに外反し，肩部は強く張り出す。複合口縁
	3	甕（土師）	24.0 × — × —	胴部	口縁部はやや外反し，胴部は強く張り出している。
	4	甕（土師）	17.2 × — × —	胴部中位	口縁部は直線的に開き，中位でさらに外傾する。口脣部は平坦である。胴部はほぼ球形を呈すると思われる。底部欠損。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
ヘラ削リ	ヘラナデ	浅黄橙	普通	砂粒 雲母含	
ナデ	丁寧なナデ	にぶい黄橙	普通	砂粒含	
口—横ナデ 底—上ヘラナデ 下ヘラ削リ	ナデ	褐灰	やや不良	砂粒含	
口—横ナデ 底—ヘラナデ	丁寧なナデ	浅黄橙	普通	砂粒 長石 石英等含	ほぼ完形
口—横ナデ 底—ヘラケズリ	口—横ナデ 底—ナデ	浅黄橙	普通	砂粒 雲母等含	ほぼ完形
口—横ナデ 底—ヘラナデ	丁寧なナデ	浅黄橙	普通	砂粒 スコリア 石英等含	全体に煤付着
ヘラ磨キ（粗）	口—ヘラ磨キ 胴—ナデ	にぶい橙	普通	砂粒 スコリア含	ほぼ完形
ナデ	ナデ	外—にぶい褐 内—褐灰	普通	砂粒 スコリア含	
受部—横ナデ 脚部—ハケ目整形	受部—ヘラナデ 脚部—ハケ目整形	明赤褐	普通	砂粒含	
ハケ目整形	ナデ	外—橙 内—明赤褐	普通	砂粒・雲母 長石・石英 等含	
口—横ナデ 底—ナデ	口—横ナデ 底—ナデ	にぶい黄橙	普通	砂粒含	
ハケ目後ナデ	ヘラナデ	にぶい橙	不良	砂粒 長石含	
口—横ナデ 胴—ヘラ磨キ	ヘラ磨キ	橙	良好	砂粒 雲母含	ほぼ完形
口—ハケ目整形 胴—ハケ目の後ナデ	ナデ	にぶい橙	普通	砂粒含	
口—ハケ 頸—ヘラナデ 胴—ヘラナデ	口—ヘラナデ 胴—輪積み痕	赤	不良	砂粒 石英含	丹彩
ハケ目整形	口—ハケ目整形 ヘラナデ	明赤褐	やや不良	砂粒 長石含	
口—ハケ目整形 胴—ハケ目の後ナデ	口—ハケ目整形 胴—ヘラナデ	にぶい赤褐	やや不良	砂粒含	

	番号	種類	法量 (口径×器高×底径) cm cm cm	最大径	器形の特徴
第十三号・二十五号住居址（図41(1)・(2)）	5	甕（土師）	22.2 × —× —	胴部中位	口縁部は直線的にやや外傾し，中位でさらに外傾する。口唇部は平坦である。胴部は緩やかにふくらむ。底部欠損
	7	壺（土師）	15.3 × —× —		頸部は直線的に開き，折り返し口縁である。口唇部はやや丸味をもつ。
	8	壺（土師）	— × — × 8.4		胴部は横に張る球形を呈し，底部との境はわずかに括れ，平底となる。
	9	甕（土師）	— × — 4.8		底部はわずかなあげ底。胴部はほぼ球形である。
	10	壺（土師）	9.4×11.9×3.8	胴部中位下	口縁部はやや直線的に広がり，頸部はほぼ「く」の字状に括れる。胴部は頸部から，最大径をもつ中位下までほぼ直線的に張り，中位下で強く張り出し，底部へ向かう。
	11	器台（土師）	7.4×7.2×12.3 円窓径 1.2	脚部裾	受け部は，下位に僅かな稜を有し，緩やかに内彎して，口唇近くでやや内傾する。脚部は頸部から緩やかに外反し，裾部で大きく開がる。受け部孔を有し，円窓は3ヶ所に穿たれている。
	12	坏（土師）	15.6 × — × —	口縁部	体部は直線的で，底部近くでやや丸味をもち，底部は欠損している。口唇部はやや尖がる。
	13	高坏（土師）			坏部は直線的に外上方へ伸びる。
	14	支脚（土師）	— × — × (12.2)		脚部はほぼ直線的に外下方へ開き，下端部で内傾する。
	15	支脚（土師）	12.9×17.0×7.0 孔径 2.1	口縁部	孔を有し，脚部は内彎しながら外下方へ開き，下端部近くで内傾し，端部は平坦。
第十六号住居址	1	甕（土師）	17.7×31.8×8.6	胴部中位	頸部は，肩から内彎して，口縁部は強く外反する。胴部は緩やかにふくらみ，中位で最大径をもつ。平底である。
	2	甕（土師）	(19.0) × — × —	胴部中位上	頸部で外反し，口縁近くでさらに外反する。胴部中位で最大径。
	3	甕（土師）	— × — ×8.0	胴部中位上	胴部は強く張り出して，中位上で最大径をもち，底部に向かってやや直線的である。
	4	甑（土師）	27.8×24.9 × —	口縁部	口縁部はやや強く外反し，体部は直線的に内傾する。
	5	椀（土師）	(12.3)×8.8×7.5	胴部中位上	口縁部はほぼ直立し，口唇部でやや外傾する。体部は強く張り出し，中位上に最大径をもつ。平底である。
	6	手捏ね（土師）	— × — × 5.7		平底から体部は直線的に外上方へ伸びる。
	7	砥石	長 幅 厚 10.5×4.2×2.3		不整形を呈し，表・裏・両側面等多面的に使用。側面はゆるい内彎カーブ。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
口—指ナデ ハケ目整形 胴—ハケ目の後 ヘラナデ	口—ハケ目の後 指ナデ 胴—ヘラナデ	灰赤	不良	砂粒 長石含	
ハケ目	ハケ目	橙		砂粒 長石 雲母含	
ハケ目整形	ヘラナデ ハケ目整形	にぶい橙	普通	砂粒 雲母含	
ハケ目整形	ヘラナデ	にぶい黄橙	普通	砂粒含	胴部下半に煤付着
口—横ナデ 胴—ヘラ削リ後 ナデ	口—横ナデ 胴—ナデ	明赤褐	良好	砂礫 スコリア 雲母含	ほぼ完形
ヘラナデ	ヘラナデ	明赤褐	普通	砂粒 雲母含	
ろくろナデ	ていねいな ヘラミガキ	外—にぶい橙 内—黒	良好	砂粒 石英 長石含	内黒
ナデ	ヘラ磨キ	橙	やや不良	砂粒含	
ハケ目整形	ヘラナデ	橙	普通	砂粒 砂礫 長石含	
ハケ目整形	ナデ	にぶい橙	普通	砂粒含	
口—横ナデ ヘラナデ	口—横ナデ ヘラナデ	にぶい橙	良好	砂礫 長石 石英 スコリア含	
口—横ナデ 胴—ヘラナデ	ナデ	明赤褐	不良	砂礫 スコリア 雲母含	ほぼ完形
口—横ナデ 胴—ナデ（下から上へ）	口—横ナデ 胴—ヘラナデ	橙	やや不良	砂粒 長石 石英含	
ナデ（摩滅している）	口—横ナデ	にぶい黄褐	不良	砂礫 スコリア含	
口—横ナデ 胴—ヘラ削リ	口—横ナデ 胴—ヘラ削リ	にぶい橙	良好	砂粒 スコリア含	
指ナデ	指ナデ	明赤褐	普通	砂粒含	
					泥岩

	番号	種　類	法　量 (口径×器高×底径) cm　cm　cm	最大径	器形の特徴
第十六号住居址	8	紡錘車 (石製品)	2.6 3.8×1.25 円孔 0.65		円錐台形を呈し，上・下面，側面ともノミ痕様の痕跡が認められる。
	9	紡錘車 (石製品)	2.8×1.9 円孔 0.8		円錐台形を呈し，上・下・側面とも良く磨いで整形されている。
	10	鉄製品	長　幅 3.75×0.85		偏平な板状であり，上・下とも欠損。
	11	平鎌 (鉄製品)	長　幅 4.7×3.25		平鎌の一部と思われる。下端は薄く，刃部と思われる。
	12	坏 (須恵)	9.2 × — × —	口縁部	口縁部附近に浅い凹線状のものが一周している。口縁端部はにぶい稜を呈している。底部と体部との境は明瞭でなく，底部から内彎して口縁に至る。
	13	坏 (土師)	13.4×(3.0)× —	口辺部	口縁部は内彎して立ち上がり，体部との境に稜をもつ。体部は極めて浅く，肥厚で偏平である。
	14	坏 (土師)	11.2×3.5 × —	口辺部	口縁部は直立し，体部との境に稜をもつ。体部は直線的な内傾である。
	15	坏 (土師)	13.7×3.4 × —		口縁部は内傾して立ち上がり，口唇部外側に稜を有し，内側は丸みを帯びる。
	16	坏 (土師)	11.4×4.5 × —	口縁部	口縁部はほぼ直立し，口唇部近くでやや外傾する。体部は弧状を呈する。
	17	坏 (土師)	14.3×4.5 × —	口辺部	口縁部は，直線的に内傾し，口唇部は丸くなる。口縁部と体部との境に明瞭な稜をもつ。体部はやや偏平な弧状を呈する。
	18	坏 (土師)	12.0×3.5 × —	口縁部	口縁部はほぼ直立し，口唇部は僅かに外傾し，体部は弧状を呈す。頸部内外面に稜有り。
	19	坏 (土師)	13.2×4.7 4.2 × —	口辺部	口縁部は頸部から内傾し，頸部外面に段をつくる。体部は偏平な弧状。
	20	坏 (土師)	14.2×4.5 × —	口辺部	口縁部は僅かに内彎し，体部はやや偏平な弧状を呈する。
	21	坏 (土師)	14.0×5.8 × —	口辺部	口縁部は直線的に内傾し，体部との境に稜をもち，体部は弧状を呈する。
	22	椀 (土師)	15.7×7.9 × —	口辺部	体部は，まろやかな半球状を呈し，口縁部は内彎し，口唇部は丸みを帯びる。
	23	支　脚 (土師)	孔径 1.2		脚部は直線的に外下方へ伸びる。 円窓有り。
	24	坏 (須恵)	12.9×5.9×8.3	口縁部	体部はやや直線的に立ち上がり，口縁部はわずかに外反気味で，端部は丸く収めている。外方へふんばる高台，体部と底部の境は外面丸味を有し，内面は明瞭に屈曲を呈す。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
					滑石製
					滑石製
底部径7cmに渡り回転ヘラ削リ		灰	良好	長石粒 細砂粒含	水挽き痕弱い
口—横ナデ 胴—ヘラケズリ	口—横ナデ 胴—ヘラ磨キ	明赤褐	良好	砂粒 雲母 スコリア含	
口—横ナデ 底—ヘラ削リ	ていねいな ヘラ磨キ	赤褐	良好	砂粒含	
口—ヘラ磨キ ヘラ削リ	口—ヘラ磨キ	赤	良好	砂粒含	
口—横ナデ 底—ヘラケズリ	口—横ナデ 底—ナデ	にぶい褐	普通	砂粒含	
口—横ナデ 底—ヘラナデ	口—横ナデ 底—ナデ	にぶい赤褐	良好	砂粒 雲母 長石 石英含	ほぼ完形
口—横ナデ 胴—ヘラ削リ	口—横ナデ 胴—ナデ	にぶい褐	普通	砂粒含	
口—横ナデ 底—ヘラ削リ	口—横ナデ 底—ナデ	にぶい橙	良好	砂粒 雲母含	
口—横ナデ 胴—ヘラ削リ	ヘラミガキ	橙	良好	砂粒 スコリア含	
		にぶい橙	良好	砂粒含	
口—横ナデ 底—ヘラ削リの 後ヘラナデ	口—横ナデ 底—ヘラ磨キ	明赤褐	普通	砂粒 雲母含	
ハケ目の後ヘラナデ	ヘラナデ	にぶい橙	普通	砂粒 石英含	
底部は回転ヘラ切りの後回転ヘラ削リ		暗青灰	良好	長石及び細砂粒(多)含	水挽き痕弱い

	番号	種　類	法　量 (口径×器高×底径) cm　cm　cm	最大径	器形の特徴
第十六号住居址	25	坏 (須恵)	17.1×6.0×11.1	口縁部	底部と体部は鋭い稜をなす明瞭な屈曲によって区別される。体部は，わずかに器厚を減じながらほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部は若干外反している。底部外縁より2cm内側に外方へふんばった高台。
	26	坏 (須恵)	15.1×5.5　×—	口縁部	体部は，わずかに器厚を減じながら，やや外反気味に立ち上がる。口縁端部は，わずかに外方を向く。底部全体は丸味を有す。体部との境は内外面とも明瞭に屈曲する。
	27	坏 (須恵)	14.0×5.35×7.8	口縁部	体部は器厚を減じながら，やや内彎気味に立ち上がり，体部上位でやや外反する。口縁部は直線的にのび，端部は丸く収めている。
	28	坏 (須恵)	14.4×4.8×8.6	口縁部	肉厚の底部から体部へ明瞭に屈曲し，わずかに器厚を減じながらほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。口縁端部はほぼ丸く収めている。
	29	盤 (須恵)	23.8×4.7×13.7	口縁部	底部と口縁部とは鋭い稜をなす屈曲によって明瞭である。口縁部はわずかに外反し，端部は外方を向く。底部は丸味をもつ。外方へふんばる高台。
	30	円　硯 (須恵)	20.0 ×— ×—		円面硯。側面に一条の隆帯を有す。
第十八号住居址（図29(1)・(2)）	1	甕 (土師)	17.2×30.0/29.0×5.7	胴部中位	口縁部は大きく外反し，口唇部は丸い。胴部は，中位に最大径をもち，やや強く張ってから丸味をもって平底に至る。
	2	甑 (土師)	24.1×26.4 ×—	胴部中位	口縁部は緩やかに外反し，口唇部はやや薄くなる。胴部は，中位に最大径をもってふくらむ。
	3	甑 (土師)	20.5×15.2 ×—	口縁部	口縁部はやや直線的に外傾し，体部はほぼ直線的に内傾し，下半からやや丸味を帯びる。
	4	坏 (土師)	(12.8)×4.4 ×—	口辺部	口縁部は直線的にやや内傾し，体部との境に稜をもつ。体部は弧状を呈する。
	5	坏 (土師)	13.0×5.0 ×—	口辺部	口縁部はやや内傾し，口唇部はわずかに丸くなる。体部は凸凹があり，やや偏平な弧状を呈する。
	6	坏 (土師)	13.3×6.0 ×—	口辺部	口縁部は内彎し，体部は弧状を呈する。
	7	坏 (土師)	14.0×5.7 ×—	体　部	口縁部はやや内彎し，口唇部は丸い。体部は弧状を呈する。
	8	坏 (土師)	14.8×4.9 ×—	口辺部	口縁部はやや内傾し，口唇部はわずかに鋭くなる。体部は偏平な弧状を呈する。
	9	高　坏 (土師)	11.4×7.1×9.0	坏体部上半	坏口縁部はほぼ直線的に立ち上がり，体部は偏平な弧状。脚部は短かく，ゆるやかに外下方へのびる。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
底部は回転ヘラ削リ		灰白	良好	長石粒 細砂粒 （多）含	水挽き痕弱い
底部は回転ヘラ削り		灰白	不良	長石粒 細砂粒 （多）含	水挽き痕弱い
底部は粗い回転ヘラ切りのままである		灰黄褐	普通	長石粒を多く含み粗い	水挽き痕弱い
水挽き痕はやや強い。底部外縁まで挽き出し，底部のやや内側で回転ヘラ切リによって切り離した後外周部をナデ	水挽き痕は弱い	浅黄	やや不良	長石，細砂粒は比較的少ない	
底—回転ヘラ削リ			普通	長石粒 細砂粒を含む	水挽き痕弱い
		黄灰	良好	長石粒 細砂粒を少し含む	
口—ヘラミガキ 胴—ヘラケズリ	口—ヘラミガキ 胴—ヘラナデ	橙	良好	砂粒 雲母含	ほぼ完形
ヘラケズリ	ナデ	橙	不良	砂粒 スコリア含	
口—指ナデ 胴—ヘラケズリ	口—指ナデ 胴—ヘラナデ	明赤褐	不良	砂粒含	
口—横ナデ 底—ヘラナデ	口—横ナデ 底—ヘラケズリ	淡赤橙	良好	砂粒含	
口—横ナデ 底—ヘラ磨キ	口—横ナデ 底—ヘラミガキ	明赤褐	良好	砂粒 スコリア含	ほぼ完形
口—横ナデ ヘラ削リ	口—横ナデ ヘラミガキ	にぶい赤褐	普通	砂粒 スコリア 雲母等含	ほぼ完形
口—横ナデ 底—ヘラケズリ ヘラミガキ	口—横ナデ 底—ヘラミガキ	にぶい橙	普通	砂粒 雲母 長石 石英 スコリア含	完形
口—横ナデ 底—ヘラケズリ	ナデ	にぶい橙	やや不良	砂粒 雲母 スコリア含	
坏口—横ナデ 底—ナデ 脚部—ヘラナデ	坏—ヘラ磨キ 脚部—ヘラ磨キ	橙	良好	砂粒含	ほぼ完形

	番号	種類	法量 (口径×器高×底径) cm cm cm	最大径	器形の特徴
第十八号住居址（図29(1)・(2)）	10	坏（須恵）	14.2×4.5 ×—	口縁部	体部はほぼ直線的に外上方へ伸び，口縁部は器厚を減じ，僅かに外反する。端部は丸く収めている。
	11	坏（須恵）	14.3×4.7×8.3	口縁部	体部はわずかに外反気味に上外方へ立ち上がる。口縁端部はほぼ丸く収めている。底部と体部との境は丸味を有する。
	12	坏（須恵）	10.8×3.9×6.9	口縁部	体部はほぼ直線的に外上方へ伸びる。口縁端部は丸く収めている。
	13	蓋（須恵）	16.4×3.95 ×—		天井部は器厚を減じながら，外下方へ開いてゆく。口縁部は下方へ短かく屈曲し先端にはにぶい稜をなす。天井部には中央に擬宝球状のつまみを付す。
	14	羽口（土師）	長径 12.0×5.5 円孔径 2.3		円柱状を呈し，中央に円孔が貫けている。
	15	羽口（土師）	長径 12.1×6.9 円孔径 3.25		円柱状を呈すが，下端が広がりをみせる。円孔が貫けている。
	16	模造品（石製）	長 幅 厚 4.5×2.15×0.5 孔径 0.2		板状で船形を呈す。円孔を有す。
	17	羽口（土師）	長 3.1		羽口小片と看られる。
	18	鉄器	長 幅 5.35×0.9 2.3		両側面から折り曲げて柄の固定としている。刃部は欠失している。
	19・21	鉄器	長 5.25×6.55 柄幅 0.45,0.7,0.5 尖刃幅 0.9		19・20は接合可能と看られる。柄は断面四角形で，途中，一度段を有して太くなり，さらに尖頭部にむかって細くなる。尖頭部は木葉形，断面は中位でレンズ状。
	20	鉄器	長 幅 4.05×0.75 0.85		小片で，器種等明瞭には断定し難い。断面は角が丸くなる長方形。
第二十三号住居址（図35）	1	台付甕（土師）	18.0×— × —	口縁部	口縁部は頸部から「く」の字に直線的に開く。胴部はゆるやかに内彎。
	2	台付甕（土師）	—× —×脚径9.4		台部はやや内彎気味に広がり，端部は平坦。
	3	高坏（土師）	円窓径 1.2		坏部は緩やかに内彎して立ち上がる。脚部は大きく広がる。脚部に円窓が穿たれる。
	4	飾器台（土師）	19.1×— × — 円窓径 1.2		受け部は外面に装飾用の突帯をもち，受け部底部より直線的に開き，明瞭な稜をもって大きく外反する。口唇部は平坦である。脚部は緩やかに外反し，円窓が3ヶ所に穿たれる。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
底部は回転ヘラ切りの後外周部に回転ヘラ削リ		灰白	不良	長石粒 細砂粒含	水挽き痕弱い
底—回転ヘラ切り後手持ちヘラ削リ 水挽き痕強い	水挽き痕は弱い		普通	長石粒 細砂粒含	土師質須恵器
体—下半手持ちヘラ削リ（粗） 底部は切り離し後雑にナデ		褐灰	良好	長石粒（少） 比較的キメ細かい	
天井部には，径11cmに渡って回転ヘラ削リ		灰	良好	長石粒 細砂粒含	内面に灰緑色の吹き出し釉，重ね焼き痕
		灰黄		砂粒含	鉱滓付着
					鉱滓付着
表裏側面とも擦痕が顕著					
					外面に鉱滓付着
					サビが著しい
					サビが著しい
口—横ナデ 胴—ヘラナデ	口—横ナデ 胴—ヘラナデ	橙	不良	砂粒含	
ナデ	ナデ	にぶい橙	普通	砂粒 長石等含	
ヘラ磨キ	坏—ヘラ磨キ 脚—上ナデ 下ハケ目	橙	普通	砂粒含	
ヘラ磨キ	坏部—ヘラナデ 脚部—ハケ目の後ヘラミガキ	にぶい橙	普通	砂粒 長石等含	

	番号	種　類	法　量 (口径×器高×底径) cm　cm　cm	最大径	器形の特徴
第二十四号住居址（図36）	1	壺 (弥生)	16.8×—×—		頸部は殆んど括れず，ゆるやかに外反して口縁に至る。5条の櫛描沈線で胴部と区画。 口—複合口縁，口唇部に原体の側面圧痕。複合口縁の隆起帯下端に棒状工具による刺突文。 胴—ほとんど膨らまない。
	2	壺 (弥生)	15.8×—×—		頸部はほとんど括れをもたず，ゆるやかに外反して口縁に至る。 口縁部は複合口縁であり，隆起帯には撚糸文施文。口唇及び隆起帯下端には原体の側面圧痕。
第二十六号住居址（図45(1)・(2)・(3)）	1	甕 (土師)	16.2×—×—		頸部から口縁部にかけてやや外反し，口唇部は丸い。胴部は強く張り出す。
	2	甕 (土師)	—×—×(7.2)		底部は若干くぼみ，胴部はわずかに外反した後，緩やかに内彎して立ち上がる。
	3	甕 (土師)	14.6×—×—	胴　部	口縁部は，僅かに外反し，口唇部は平坦である。胴部はやや強く張り出す。 底部欠損。
	4	甕 (土師)	—×—×(7.2)		平底で，胴部は内彎しながら立ち上がる。肉厚。
	5	小型甕 (土師)	(8.0)×—×—		頸部から口縁にかけて直立し，肩部は強く張り出す。全体に肉厚。
	6	小型甕 (土師)	12.9×9.8×5.2	口縁部	頸部はほぼ直立し，口唇部近くで内彎しながら外方へ開く。体部は上位に最大径をもち，半球状を呈する。平底である。
	7	小型甕 (土師)	11.6×14.3×7.0	体部中位上	口縁部は極めて短かく，外傾する。体部は中位上に最大径をもつ。ほぼ球状を呈する。底部の器肉は厚く平底。
	8	小型甕 (土師)	—×—×8.0		平底で，底部のみ器肉が厚く，胴部は緩やかに内彎する。
	9	甕 (土師)	—×—×9.6		底部は上げ底。胴部は内彎しながら大きく膨らむ。
	10	甑 (土師)	孔径 2.8		底部端は肉厚であり，胴部は内彎して立ち上がる。
	11	坏 (土師)	11.6×5.2×—	体部上位	口縁部は内彎して立ち上がり，体部は偏平な弧状を呈す。
	12	坏 (土師)	12.4×5.4×—	口縁部	口縁部と体部の区切れがなく，底部から丸味をもって立ち上がり，口唇部も丸味をもつ。
	13	坏 (土師)	12.8×5.8×—	体部上位	口縁部は内彎して立ち上がり，体部は半球形を呈する。
	14	坏 (土師)	(12.2)×(5.6)×—	口辺部	体部と口縁部の境が不明瞭で，体部は半球状を呈し，口縁部はやや内傾する。体部には僅かな浅い凹線が見られる。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
頸—無文 櫛描文 胴—撚糸文	丁寧なナデ	橙	良好	緻密	外—煤付着
頸—4条の櫛描沈線の波状文が3段 胴—撚糸文	丁寧なナデ	外—黒褐 内—暗褐	良好	石英粒を含 精緻	外—口唇部まで全体に煤付着
口—指ナデ 胴—ヘラ削リ	口—指ナデ 胴—ヘラナデ	橙	普通	砂粒 スコリア含	
ヘラ削リ	ヘラナデ	にぶい黄橙	良好	スコリア 長石・石英含	一部煤付着
口—指ナデ 胴—ヘラ削リ ヘラナデ	口—指ナデ 胴—横ヘラナデ	内面—橙 外面—明赤褐	良好	砂粒 砂礫(少)含	
ヘラ削リ	ヘラナデ	橙	不良	砂粒 長石 石英 雲母含	
ヘラ磨キ	ヘラナデ	にぶい橙	普通	砂粒含	
口—横ナデ ヘラナデ	口—横ナデ ヘラナデ	内面—褐 外面—にぶい赤橙	良好	砂粒 長石 石英含	
ナデ	ナデ	にぶい黄橙	不良	砂粒 スコリア 雲母含	成形不良
ヘラケズリ	ヘラナデ	明赤褐	不良	砂粒 スコリア含	
ヘラナデ	ヘラナデ	橙		長石・砂粒 スコリア (少)含	黒斑有り
ヘラ削リ	ヘラナデ	橙	不良	砂粒 雲母含	
口—横ナデ 胴—ヘラ削リ	ヘラ磨キ	橙	良好	砂粒 石英 雲母含	
口—横ナデ 体—ヘラ削リ	ヘラ磨キ	橙		砂粒 スコリア含	
口—ヘラ磨キ 胴—ヘラ削リ	ヘラ磨キ	橙	良好	砂粒含	ほぼ完形
口—ハケ目整形 後ナデ 胴—ヘラ削リ	ナデ	橙	普通	砂粒含	

	番号	種　類	法　量 (口径×器高×底径) cm　cm　cm	最大径	器形の特徴
第二十六住居址(図45(1)・(2)・(3))	15	椀 (土師)	12.3×7.0　×—	口辺部	口縁部は外反気味に内傾し，口唇部がやや外傾する。口唇部は丸い。体部はやや歪んだ半球状を呈する。
	16	椀 (土師)	13.3×7.5　×—	口縁部	口縁部は僅かに内彎するが，ほぼ直立。口唇部はやや尖る。体部は大きく内彎し偏平な丸底である。
	17	坏 (土師)	15.5×5.3　×—	口縁部	底部から体部下位にかけては内彎ぎみに立ち上がり，口縁にかけてほぼ直線的に外反する。
	18	坏 (土師)	13.0×5.0　×—	口縁部	口縁部は外反し，中位から内彎ぎみに外傾し，口唇部内面に僅かな稜をもって直立する。体部とは，僅かな稜で区分される。
	19	坏 (土師)	13.4×6.1　×—	口縁部	口縁部は直線的に開き，体部は弧状を呈する。口唇部と体部の境は段を有する。
	20	坏 (土師)	14.3×6.3　×—	口縁部	口縁部は大きく外反し，体部との境に稜をもつ。体部は弧状を呈す。
	21	坏 (土師)	13.6×4.7　×—	口縁部	口縁部はやや外反し，体部との境に稜をもつ。体部は浅く，直線的である。
	22	坏 (土師)	13.0×4.2　×—	口縁部	口縁部は外反し，口唇部附近でさらに外傾する。体部と口縁部の境に稜をもち，体部は浅い弧状を呈す。
	23	坏 (土師)	13.4×4.5　×—	口縁部	口縁部は直線的に外反し，口唇部は尖がる。体部との境には稜を有し，体部は浅い弧状を呈す。
	24	坏 (土師)	14.8×4.7　×—	口縁部	口縁部は直線的に外傾し，口唇部はやや尖がる。口縁部と体部との境に稜をもつ。体部は弧状を呈する。
	25	坏 (土師)	14.4×5.0　×—	口縁部	体部と口縁部の境に僅かな稜をもち，口縁部は直線的に開き，体部は緩やかに内彎して丸底の底部に至る。
	26	坏 (土師)	15.3×5.0　×—	口縁部	口縁部は体部との境に稜を有し，ほぼ直線的に外反して立ち上がる。体部は緩やかに内彎する。
	27	坏 (土師)	16.6×4.5　×—	口縁部	体部と口縁部の境に僅かな稜を有し，口縁は緩やかに外反しながら立ち上がり，端部附近で稜を有する。体部は偏平な弧状を呈する。
	28	坏 (土師)	12.3×4.2　×—	口縁部	口縁部は直線的に開いた後，口唇部近くでやや内彎する。体部は浅く，偏平である。
	29	坏 (土師)	14.2×5.0　—	口縁部	口縁部はやや外反した後，中位下からわずかに内傾し，尖がった口唇部に至る。口縁部と体部の境に稜をもち，体部は弧状を呈す。
	30	坏 (土師)	14.2×4.6　×—	口縁部	口縁部はやや強く外反し，体部との境で稜をもち，体部は極めて偏平な弧状を呈する。
	31	坏 (土師)	14.7×4.2　×—	口縁部	体部は偏平，体部に比して口縁部が発達し，大きく外反する。体部と口縁部の境に稜を有する。
	32	坏 (土師)	14.0×4.5　×—	口縁部	口縁部は外反して立ち上がり，口唇部は尖る。体部は極めて浅く偏平である。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
口—横ナデ 胴—ヘラ削リ	ヘラ磨キ	橙	やや不良	砂粒 石英 雲母含	
ケズリ後ナデ	粗ナデ	にぶい褐	普通	砂粒 長石含	
ヘラ磨キ	ヘラ磨キ	明赤褐	良好	砂粒 雲母 スコリア含	ほぼ完形
口—横ナデ 胴—ヘラ削リ	ヘラ磨キ	明赤褐	良好	砂粒 長石含	
口—ヘラナデ 底—ヘラ削リの 後ヘラナデ	ヘラ磨キ	赤褐	良好	砂粒・石英 雲母(黒)含	
口—ヘラ磨キ 底—ヘラ削リ	ヘラ磨キ	明赤褐	不良	砂粒 雲母含	
口—横ナデ 底—ヘラ削リ	ヘラ磨キ	橙	普通	砂粒含	
口—ヘラ磨キ 胴—ヘラ削リ	ヘラ磨キ	明赤褐	普通	砂粒含	
口—横ナデ 胴—ヘラ削リ	ヘラ磨キ	明赤褐	普通	砂粒含	
口—ヘラ磨キ 底—ヘラ削リ	ヘラ磨キ	橙	良好	砂粒含	完形
口—横ナデ 底—ヘラ削リ	ヘラ磨キ	にぶい黄橙 底部—黒	良好	砂粒含	
口—横ナデ 胴—ヘラ削リ	ヘラ磨キ	明赤褐	普通	砂粒含	
口—横ナデ 胴—ヘラ削リ	口—横ナデ 胴—ヘラ磨キ	橙	良好	砂粒含	
口—横ナデ 底—ヘラ削リ	ヘラ磨キ	明赤褐	やや不良	砂粒含	
口—横ナデ 底—ヘラ削リ	ヘラ磨キ	明赤褐	良好	砂粒含	完形
口—横ナデ 胴—ヘラ削リ	ヘラ磨キ	赤褐	やや不良	砂粒 長石等含	
口—指ナデ 底—ヘラ削リ	ヘラ磨キ	赤	良好	砂粒含	
口—横ナデ 底—ヘラ削リ	ヘラ磨キ	明赤褐	普通	砂粒 長石等含	

	番号	種類	法量 (口径×器高×底径) cm cm cm	最大径	器形の特徴
第二十六号住居址(図45(1)・(2)・(3))	33	坏(土師)	15.4×5.4 ×—	口縁部	体部と口縁部の境は突出し，段を有し，やや偏平な体部の割には口縁が長く，大きく外反する。
	34	坏(土師)	14.3×4.4 ×—	口縁部	口縁部は一度垂直気味に立ち上がってから，直線的に外反し，口唇部は尖る。口縁部と体部の境に稜をもつ。体部は浅く偏平である。
	35	坏(土師)	14.0×4.5 ×—	口縁部	口縁部は直線的に大きく開き，体部は浅い弧状を呈する。
	36	坏(土師)	14.9×4.6 ×—	口縁部	口縁はほぼ直線的に開き，体部との境に稜をもち，体部は緩やかに内彎して浅い弧状となる。
	37	坏(土師)	13.3 × —×—	口縁部	口縁部は，体部との境に僅かな稜をもち直線的に外反する。口唇部は劣がる。
	38	坏(土師)	14.2×4.0 ×—	口縁部	口縁部は外反し，体部との境は稜を有し，体部は偏平な弧状を呈する。
	39	坏(土師)	14.8×4.6 ×—	口縁部	口縁部は頸部から一度直立してから直線的に外傾する。体部との境に稜を有し，体部は浅い弧状。
	40	坏(土師)	12.4×4.9 ×—	口縁部	体部は，外面に僅かな稜を作り出し，ほぼ直線的に立ち上がり，端部でやや内彎気味となる。底部は偏平な弧状である。
	41	坏(土師)	10.4×5.1 ×—	口縁部	口縁部は一度直立してから直線的に外傾し，体部は直線的に内傾して，平坦な底部となる。
	42	坏(土師)	12.2×3.2 ×—	口縁部	口縁部は，垂直に立ち上がり，口唇部は薄く尖っている。体部は極めて浅く，平底気味である。
	43	坏(土師)	11.8×5.3 ×—	口辺部	口縁部は，直線的に内傾し，口唇部は尖る。体部はやや深みのある弧状。
	44	椀(土師)	10.4×4.7 ×—	口辺部	口縁部は外反しながら強く内傾して，中位からさらに外反。体部との境に明瞭な稜をもつ。体部は偏平な弧状。
	45	高坏(土師)	—× —×13.4		脚柱部は円柱状で，裾部はゆるやかに丸味を帯びて広がる。
	46	高坏(土師)	—×— ×10.7		脚部は低く，裾部は大きく開き，端部は薄く尖る。
	47	高坏(土師)	—×— ×12.0 (裾部径)		脚部はわずかな柱状部から直線的に大きく外反してのびる。
	48	器台(土師)	7.0 ×— × — 受部孔径 1.1 円窓径 0.9		受部は直線的に外上方へ開き，脚部も「く」の字に括れた接合部から直線的に外下方へ開き，円窓3ヶ所穿っている。
	49	砥石	長 幅 9.95×5.6		表面及び両側面とも使用されている。上端はほぼ原形。原形は長方体と考えられる。
	50	手捏ね(土師)	5.0×2.3(左)/2.7(右)×—	口縁部	平底部から口縁部にかけてやや内彎しながら立ち上がる。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
ヘラ削リ	ヘラ磨キ	赤褐	普通	砂粒含	
口—横ナデ 胴—ヘラ削リ	ヘラ磨キ	橙	良好	砂粒含	完形
口—横ナデ 胴—ヘラ削リ	ヘラ磨キ	橙	不良	砂粒 スコリア 雲母含	完形
口—横ナデ 胴—ヘラ削リ	ヘラ磨キ	明赤褐	普通	砂粒 スコリア含	
口—横ナデ 底—ヘラナデ	ヘラ磨キ	明赤褐	普通	砂粒含	
口—ヘラ磨キ 胴—ヘラ削リ	ヘラ磨キ	明赤褐	良好	砂粒含	
胴—ヘラ削リ 胴—ヘラ磨キ	口—ヘラ磨キ	明赤褐	普通	砂粒含	
口—ヘラ磨キ 底—ヘラ削リ	口—所によりヘラ磨キ 横ナデ 底—ヘラ磨キ	明赤褐	普通	砂粒 雲母 スコリア 長石含	ほぼ完形
ヘラ磨キ 底の一部ヘラ削リ	ヘラ磨キ	明赤褐	普通	砂粒 長石 石英含	
口—横ナデ 底—ヘラ削リ	口—横ナデ 底—ナデ	赤褐	普通	砂粒 雲母 石英含	
口—横ナデ ヘラナデ	ヘラ磨キ	灰赤 赤黒	普通	砂粒 長石含	
口—ヘラ磨キ 胴—ヘラ削リ	ヘラ磨キ	明赤褐	普通	砂粒 雲母含	ほぼ完形
ヘラ磨キ	ナデ	明赤褐	良好	砂粒含	
ヘラ削リ 底—指ナデ	ヘラ磨キ	明赤褐	やや不良	砂粒含	
ヘラ削リ	指ナデ	明褐	普通	砂粒 雲母含	
受部—ナデ 脚部—ヘラ磨キ	受部—横ナデ 脚部—ナデ	にぶい黄橙	普通	砂粒 スコリア 雲母含	
指ナデ	指ナデ	にぶい黄橙	不良	砂粒 長石含	完形

	番号	種類	法量（口径×器高×底径） cm cm cm	最大径	器形の特徴
第二十六号住居址	51	手捏ね（土師）	4.5×2.8 × — 2.4	口縁部	平底部から口縁部にかけて，ほぼ直線的に外上方へ立ち上がり，口唇部は薄く尖る。
	52	手捏ね（土師）	6.1×3.3 × —	口縁部	体部は緩やかに外傾する。
	53	手捏ね（土師）	— × 2.9×4.2		底部は上げ底となり，やや厚みのある底部から薄手の胴部がわずかに内彎して立ち上がる。
	54	坩（土師）	— × — × 2.0		底部から緩やかに内彎しながら頸部に至り，頸部はほぼ直線的に外反する。底部は上げ底。器厚は一定して薄い。
	55	鉄器	長径 7.95×1.5, 1.0		柱状を呈し，下端に向かって細くなる。先端は細くなるが，端部はやや丸味を帯びる。頭部は平坦に近い。
第二十四号住居址（図51）	1	甑（土師）	20.1 × — × —	口縁部	体部はわずかな内彎で，外上方へ大きく開き，口縁部は折り返し口縁。口縁内側は凸凹有り。
第三十五号住居址（図53(1)・(2)）	1	甕（土師）	17.9×29.0×8.5	胴部	底部から胴部にかけて内彎し，胴部中位はやや直線的で，頸部から口縁部にかけて外反しながら立ち上がり，口縁部の上位でやや外反し，口唇部は丸い。
	2	甕（土師）	14.8 × — × —		口縁部は僅かに外反し，胴部はあまり張らない。器厚は一定である。
	3	甕（土師）	17.6 × — × —		口縁部は，頸部から一度やや外反気味に立ち上がり，さらに大きく外反する。胴部は頸部から直線的に膨らむ。
	4	甕（土師）	17.0 × — × —		頸部は直角に近く括れ，内面に稜をもち，ほぼ垂直気味に立ち上がる。口縁部はやや外反し，口唇部近くで一条の凹線を廻らす。口唇部は丸い。
	5	甕（土師）	15.8×26.5 × —		底部は欠損しており，胴部中位は垂直ぎみに，上位は内彎し，頸部から口縁部にかけて垂直ぎみに立ち上がり，口縁部上位から口唇部にかけて外反する。
	6	甕（土師）	22.0×21.0 × —	胴部中位下	頸部はほぼ垂直に立ち上がり，口縁部はわずかに外反するが，中位でさらに外傾する。口唇部は丸い。胴部は中位下で最大径をもち，下ぶくれとなる。
	7	甕（土師）	16.6 × — × —		頸部はほぼ垂直に立ち上がり，口縁部は外反する。口唇部は平坦である。
	8	甕（土師）	14.8 × — × —		頸部は「く」の字に括れ，口縁部は緩やかに外反する。口縁上位外面に僅かな凹線を廻らす。胴部は強く張り出し，器肉は厚い。
	9	甕（土師）	23.5 × — × —		頸部はほとんど括れず，口縁部は外反して立ち上がり，上位でさらに外反する。口唇部は丸い。
	10	甕（土師）	— × — × 7.2		平底で，胴部は緩やかに大きく内彎して立ち上がる。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
指ナデ	指ナデ	にぶい黄橙	不良	砂粒等 石英含	
指ナデ	指ナデ	にぶい黄橙	不良	砂粒 長石含	
指ナデ	指ナデ	にぶい橙	良好	砂粒 雲母含	
ヘラ磨キ	ヘラ磨キ	赤褐	やや不良	砂粒 石英 長石含	ほぼ完形
口—指頭圧痕 胴—ヘラナデ	口—指頭圧痕 胴—ヘラナデ	橙	不良	砂粒含	
口—横ナデ 胴—ナデ	口—横ナデ 胴—ナデ	にぶい黄橙	良好	砂粒 長石 雲母含	完形
口—指ナデ 胴—ヘラ削リ	口—指ナデ 胴—ヘラナデ 輪積痕残る	にぶい橙	普通	砂粒 石英 スコリア含	
口—指ナデ 胴—ヘラ削リ	ヘラナデ	にぶい黄橙	普通	砂粒含	
口—指ナデ 胴—ヘラ削リ	口—指ナデ 胴—ヘラ削リ	にぶい褐	やや不良	砂粒 雲母 長石 石英等含	
口縁部—横ナデ 胴—ナデ	口縁部—横ナデ 胴—ナデ	橙	良好	砂粒 砂粒含	
口—縦ヘラ削り 胴—ヘラ削り	口—ヘラナデ	にぶい橙	普通	砂粒 雲母(少)含	
口—指ナデ 胴—ヘラ削リ	口—指ナデ 胴—ヘラナデ	にぶい橙	良好	雲母 スコリア 石英 長石含	
口—指ナデ 胴—ヘラナデ	口—指ナデ 胴—ヘラナデ	黄褐	やや不良	砂粒 長石含	
口—指ナデ 胴—ヘラナデ	ヘラ磨キ	橙	普通	砂粒 長石含	
胴—ヘラ削リ後 磨キ 底—ヘラ削リ		赤	やや不良	砂粒 長石 雲母含	

	番号	種　類	法　量 (口径×器高×底径) cm　cm　cm	最大径	器形の特徴
第三十五号住居址（図53(1)・(2)）	11	甕 (土師)	— × — × 9.1		平底で，胴部は緩やかに内彎して立ち上がる。
	12	坩 (土師)	11.1 × — × —	胴部中位	口縁部は僅かに内彎して立ち上がり，口唇部近くで直立し，口唇部は尖る。胴部はやや偏平な球状を呈する。
	13	小型甕 (土師)	10.6×15.7×7.5	肩　部	底部はやや突出し，胴部はあまり張らない。口縁部は内傾し，口唇部はやや尖がる。
	14	甑 (土師)	18.8×14.5×5.8 孔径 3.4	口縁部	底部中央に孔を有し，体部は緩やかに内彎して立ち上がり，口縁部は直線的に広がって，口唇部でやや外傾し，外面にわずかな稜をもつ。
	15	椀 (土師)	12.0×8.5×4.8	体部上位	口縁部は短かく，ほぼ直立し，口唇部は丸い。体部は上位で張り，緩やかに内彎して底部に至る。平底である。
	16	坏 (土師)	14.3×5.0 × —	口縁部	口縁部はほぼ直線的に外反し，口唇部はやや尖る。体部は浅く，弧状を呈する。体部と口縁部との境に稜をもつ。
	17	坏 (土師)	10.8×5.8 × —	口縁部	体部は弧状を呈し，口縁部は内彎する。口縁部のみ歪みがある。
	18	坏 (土師)	13.4×5.0 × —	口縁部	口縁部は垂直気味に立ち上がってから中位で外反し，体部との境に稜をもつ。体部は弧状を呈する。
	19	坏 (土師)	14.0×4.9 × —	口縁部	口縁部は垂直に立ち上がり，口唇部はやや外傾する。体部は弧状を呈する。
	20	坏 (土師)	15.9×5.7 × —	口縁部	口縁部と体部との境が不明瞭で，口縁部はやや強く外反する。体部は弧状を呈する。
	21	高坏 (土師)	13.2×10.4×8.8	口縁部	坏体部は弧状を呈し，口縁部はやや外反して口唇部は丸い。脚柱部は歪みのある円柱状を呈し，裾部は緩やかに開く。
	22	鉄鏃 (鉄製品)	長　幅 11.3×0.45, 0.6		断面は正方形で，途中から段をつけて細くなる。上・下とも欠損しており，形態は不明。
	23	刀子 (鉄製品)	長　刃幅 柄幅 6.05×1.1×0.65		刃部，背部ともサビが著しく，形状は明瞭ではないが，刃子状と看られる。
第三十六号住居址（図56(1)・(2)）	1	甕 (土師)	19.8×25.3×9.4	胴部中位下	頸部は「く」の字に括れ，口縁部は外反し口唇部でさらに外傾する。胴部はゆるやかに膨らみ，やや下ぶくれ気味で平底に至る。
	2	甕 (土師)	17.0×10.3 × —		頸部はゆるやかに括れ，区切りなく外反して口縁部となり，口唇部近くでさらに外傾する。胴部は器厚をやや減じて，なだらかに膨らむ。
	3	甕 (土師)	19.6 × — × —		頸部はほぼ直立し，口縁部は緩やかに外反するが，口唇部近くでやや外傾している。口唇部は平坦である。
	4	甕 (土師)	23.0 × — × —		口縁部は僅かに外反し，口唇部近くでさらに外反する。口唇部はやや尖る。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
ヘラ磨キ 輪積痕	ヘラ磨キ	外面—黒褐 内面—橙	普通	砂礫 長石 スコリア含	
ヘラ磨キ	口—ヘラ磨キ 胴—ナデ	赤	良好	砂粒含	
口—横ナデ ヘラナデ	口—横ナデ ヘラナデ	にぶい黄橙	普通	砂粒 石英 長石 スコリア含	成形不良 ほぼ完形
口—横ナデ 胴—ヘラ削リ	口—横ナデ 胴—ナデ	にぶい橙	良好	砂粒含	完形
口—指ナデ 胴—ヘラナデ	ヘラ磨キ	赤褐	普通	砂粒含	
口—横ナデ 胴—ヘラ削リ	ヘラ磨キ	橙	良好	砂粒含	
口—指ナデ 胴—指ナデ	口—指ナデ	明赤褐	不良	砂粒 スコリア 雲母 長石含	ほぼ完形
口—横ナデ ヘラ削リ	口—横ナデ ヘラ磨キ	明赤褐	良好	砂粒含	ほぼ完形
口—指ナデ ヘラ削リ	ヘラナデ	橙	不良	砂粒 雲母含	ほぼ完形
ヘラナデ	ヘラ磨キ	暗赤褐	良好	石英 砂粒 雲母含	
坏—指ナデ ヘラ削リ 脚—縦ヘラ削リ 裾—指ナデ	坏—指ナデ 裾—指ナデ	浅黄橙	良好	砂粒含	
					サビが著しい
					サビが著しい
口—横ナデ 胴—ハケ目後ナデ	口—摩滅 胴—ナデ	橙	普通	砂粒 長石 雲母(黒)含	
口—指ナデ 胴—ヘラ削リ	口—指ナデ 胴—摩滅が激しい	明赤褐	不良	砂れき 雲母(少)含	
ヘラ削リ ヘラナデ	口縁—指ナデ ヘラナデ 輪積痕			砂礫 スコリア 雲母・長石 石英含	
指ナデ	指ナデ	にぶい橙	やや不良	砂粒 雲母 スコリア	

第二十六号住居址（図56(1)・(2)）

番号	種類	法量（口径×器高×底径）cm cm cm	最大径	器形の特徴
5	甕（土師）	— × —×6.0		底部は中央に孔を有し，胴部はやや直線的に内傾する。
6	甕（土師）	19.2×30.0×6.2	胴部中位	頸部はほぼ直立し，口縁部はやや外反する。口唇部は平坦である。胴部は最大径をもつ中位に向かって張り，胴長である。平底。
7	甕（土師）	24.0×21.8×6.6	口縁部	口縁部はやや外反し，口唇部は丸い。体部は直線的に内傾する。
8	坏（土師）	12.8×5.2 ×—	口縁部	口縁部は体部と区切れなく，口縁はわずかに外反し，体部は偏平な弧状の底部から直線的に立ち上がる。
9	坏（土師）	14.0×5.9 ×—	口縁部	口縁は直線的に開き，体部は半球状を呈する。
10	坏（土師）	13.0×5.0 ×—	口縁部	口縁部は直線的に外傾し，口唇部は丸い。体部との境に稜を有し，体部は浅い弧状を呈する。
11	坏（土師）	13.3×4.6 ×—	口縁部	口縁部は外反し，口唇部は尖る。体部との境に段を有し，体部は浅い弧状を呈する。
12	椀（土師）	14.0×7.9 ×—	体部中位	口縁部は器厚を増して直立し，端部に向かって器厚を減じ，先端は丸い。頸部は器厚を減じて内傾しており，体部は張り出してから浅い弧状となる。頸部外面には稜をもつ。
13	椀（土師）	13.4 × — × —		口縁部は短かく，僅かに外反する。体部は丸味をもった半球状を呈するものと思われる。器厚は薄く，一定している。
14	高坏（土師）	17.8×14.6×13.3	口縁部	口縁部は大きく外反し，なだらかに内傾して底部に至る。体部と口縁部との境に稜を有する。脚部は坏底部からゆるやかに外反して下方へのび，裾部は平坦で大きく広がる。
15	手捏ね（土師）	4.3×2.5×—	口縁部	口縁部は平底から内彎して立ち上がる。器厚は底部から口唇部に向かって序々に器厚を減じて，口唇部はやや尖る。
16	手捏ね（土師）	—× —× 2.8	口縁部	平底からわずかに内彎して立ち上がって口縁部に至り，一度括れてから外反する。器厚は底部から序々に減じる。胴部器厚は薄手である。
17	手捏ね（土師）	4.4×2.5×3.7	口縁部	平底で，体部はほぼ直立する。口唇部は尖る。
18	手捏ね（土師）	4.6×1.7×3.8	口縁部	口縁部は外反し，口唇部は尖る。胴部と底部の境は，外面は明瞭で内面はゆるい内彎で不明瞭。平底。
19	手捏ね（土師）	4.8×2.1×4.3	口縁部	平底からほぼ直立して口縁部となり，口唇部はやや尖る。胴部と底部との境は外側は明瞭で，内側はゆるい内彎を呈し，不明瞭。器厚は底部で厚く，口唇部に向かって序々に減じる。
20	手捏ね（土師）	5.3×2.6×4.5	口縁部	平底からやや外傾して立ち上がり，口縁部となる。口唇部は丸味を帯びる。底部と胴部の境は，外面で明瞭であり，内面は内彎して立ち上がり，不明瞭。器厚は底部中央でやや薄くなる。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
ヘラ磨キ	ヘラ削リ	赤	不良	砂粒 雲母含	
口—指ナデ ヘラナデ	口—指ナデ ヘラナデ	にぶい黄橙	不良	砂粒 スコリア 長石 石英含	
ヘラナデ（粗）	ヘラ磨キ（粗）	橙	普通	砂粒含	ほぼ完形
口—ヘラ磨キ 胴—ヘラ削リ	摩滅で不明		普通	砂粒 長石含	
口—ヘラ磨キ 底—ヘラ削リの 後ナデ	ヘラ磨キ	にぶい橙	良好	砂粒含	
口—指ナデ 底—ヘラ削リ	ヘラ磨キ	明赤褐	不良	砂粒 雲母 長石含	
口—ヘラ磨キ 胴—ヘラ削リ	ヘラ磨キ	明赤褐	不良	砂粒 長石含	
ヘラナデ	口—ヘラ磨キ ヘラ削リ	橙	良好	砂粒 雲母含	完形
ヘラ削リ	ナデ	橙	普通	砂粒 雲母 長石含	
口—指ナデ 以下ヘラナデ 脚部—ヘラ削リ 裾部—ヘラ削リ	坏部—ヘラ磨キ 裾部—ヘラナデ	橙	普通	砂粒含	
指頭圧痕	指頭圧痕	赤褐	良好	砂粒 雲母含	ほぼ完形
指ナデ	指頭圧痕	にぶい橙	不良	砂粒含	
指頭圧痕	指頭圧痕	橙	不良	砂粒含	ほぼ完形
指ナデ	指頭圧痕	にぶい赤褐	良好		ほぼ完形
指ナデ	指ナデ	にぶい橙	普通	砂粒含	完形
指ナデ	指ナデ	明赤褐	普通	砂粒含	完形

	番号	種類	法量（口径×器高×底径） cm cm cm	最大径	器形の特徴
第三十六号住居址（図56(1)・(2)）	21	手捏ね（土師）	5.2×2.2 ×4.5	口縁部	平底からやや外傾して立ち上がる口縁。器厚は底部が最も厚く，口唇部に向かって序々に薄くなり，口唇部でやや尖る。
	22	手捏ね（土師）	4.8×2.5×3.8	口縁部	平底からやや外傾して立ち上がり，口縁部となる。底部と胴部の境は外側で明瞭であり，内面は内彎して不明瞭。器厚は口唇部に向かって序々に薄くなり，口唇部でやや尖る。
	23	手捏ね（土師）	5.1×2.0×4.5	口縁部	平底から内彎して立ち上がり，口縁部となる。器厚は底部で薄く，胴部との境で厚くなり，胴部から口唇部に向かって薄くなる。底部と胴部の境は外面で明瞭であり，内面は内彎しており，不明瞭。口縁部は不整形で波状を呈す。
	24	手捏ね（土師）	6.4×3.0×5.0	口縁部	平底から内彎して立ち上がり，口縁部に至る。器厚はほぼ一定で，口唇部は丸い。胴部と底部の境は，外側は明瞭であるが，内側はやや不明瞭。口縁部は不整形のため波状を呈す。
	25	手捏ね（土師）	5.5×3.5×5.0	口縁部	平底からほぼ直立して口縁部に至る。器厚は底部で厚く，口唇部に向かって除々に薄くなり，口唇部は丸い。底部と胴部の境は，外面で明瞭，内面では内彎して不明瞭。
	26	紡錘車（弥生）	径 厚 5.05×1.65		厚みのある円板状で中央に孔を有す。側面は丸味をもつ。表・裏・側面とも刺突文を施しているが，表・裏面は円形に4条刺突，側面は円周に沿って2条前後施文している。
	27	勾玉（石製模造品）	長 幅 厚 3.05×1.65×0.65		板状で，表・裏・側縁とも成形のための擦痕が明瞭。
第三十七号・三十八号住居址（図58）	1	甕（土師）	17.9×— ×—		口縁部は「S」字状を呈し，胴部はやや直線的に広がり，胴部中位あたりからやや内傾。
	2	甑（土師）	—×— ×20.4		筒抜けの底部で，胴部は直線的である。
	3	甕（土師）	20.2×— ×—		口縁部は「S」字状を呈し，胴部は頸部から直線的に下方へ広がる。
	4	坏（土師）	13.9×— ×—	口縁部	体部は僅かに内彎し，口唇部は丸い。平底である。
	5	坏（須恵）	13.7×4.8×6.4		体部は僅かに内彎気味に直線的に外方へ大きく開く。 口縁部は僅かに外反し，端部はほぼ丸く収めている。 底・体部の境は内外面とも丸味を有す。
	6	坏（須恵）	14.0×4.5×7.0	口縁部	底部から丸味をもって体部へ移行し，内彎気味に大きく外方へ開く。口縁部は開きが若干小さくなるが，やや外反し端部に至る。
	7	高台付坏（土師）	16.0×5.7 ×—	口縁部	体部は僅かに内彎して立ち上がり，口唇部近くで器肉が厚くなり，やや外傾する。口唇部は丸い。体部と高台の境は丸味を有し外反している。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
指ナデ	指頭圧痕	褐灰	良好	砂粒 長石含	完形
指ナデ	指ナデ	明赤褐	普通	砂粒含	ほぼ完形
指ナデ	指ナデ	橙	普通	砂粒含	完形
指ナデ	指ナデ	にぶい橙	普通	砂粒含	完形
指ナデ	指ナデ	にぶい褐	普通	砂粒含	ほぼ完形
		褐	普通	砂粒含	土製
口—指ナデ 胴—ヘラ削リ	口—指ナデ 胴—ヘラナデ	にぶい橙	普通	雲母 長石 スコリア含	
上部—ヘラナデ 下部—ヘラ削リ	ヘラナデ	橙	普通	砂粒 長石 雲母含	
口—指ナデ 胴—ヘラ削リ	口—指ナデ 胴—ヘラナデ	にぶい橙	良好	雲母 スコリア 砂粒 石英 長石含	
ロクロナデ	ロクロナデ	にぶい赤褐	普通	砂粒含	
底—回転ヘラ削リ後，外周部をナデ			不良	長石粒 細砂粒含	水挽き痕弱い 土師質須恵器 ヘラ記号有り
底—回転ヘラ切り後雑なナデ 体—下半水挽き痕強	底・体部境—アテが認められるが丸みを持つ	灰白	普通	長石粒 細砂粒含	ヘラ記号有り
ミズビキ痕	ミズビキ痕	にぶい赤褐	普通	砂粒 雲母含	

	番号	種類	法量 (口径×器高×底径) cm cm cm	最大径	器形の特徴
	8	坏 (須恵)	13.8×4.8×7.1	口縁部	体部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。口縁部はやや外反し，端部は丸く収めている。 内面—底・体部との境が不明瞭。
第四十号住居址（図61）	1	高台付坏 (須恵)	14.1×5.6×7.5	口縁部	体部はわずかに外反しつつ外上方へのび口端部は厚く，丸く収めている。体部と底部との境は屈曲し稜を有す。高台は底部から垂直に下がり，端部が厚く丸味をもつ。
	2	刀子 (鉄製品)	長 刃部 ナカゴ 4.3×1.05×0.75		刃部及びナカゴと看られる。刃部は先端を欠いている。
第四十一号住居址（図64）	1	高台付坏 (須恵)	14.0×5.3×9.0	口縁部	体部は大きく外方へ開いた後稜を有し，大きく「く」の字に折れ，外上方へ外彎気味に立ち上がる。端部は若干外反気味で口唇は丸く収めている。高台有り。
第四十二号住居址（図66）	1	甕 (土師)	— × — × 10.2		平底で，底部は突出している。肉厚で胴部との境は多面で内彎カーブ，内面はゆるやかな内彎を示す。
	2	坏 (須恵)	14.4×4.4×6.5	口縁部	丸味をもって底部から体部へ移るが，体部中央部で器厚が厚く，ほぼ直線的に外方へ立ち上がる。口縁端部はやや鋭い。
	3	坏 (須恵)	11.3×3.6×6.7	口縁部	平底で，体部は直線的に外上方へのびている。口縁端部外面に稜を有し，端部はやや尖る。
	4	坏 (須恵)	13.1×4.9×5.8	口縁部	体部は器厚を減じながら，ほぼ直線的に外方へ大きく開く。口縁部はやや外反し端部に至る。
	5	蓋 (須恵)	16.9×4.15 × —	口縁部	口縁部は，わずかに内彎気味に外下方へのび，端部は丸く収めている。天井部中央に偏平なツマミを有す。内側に返りの退化した短かい突出。
	6	蓋 (須恵)	15.9×3.85 × —	口縁部	やや内彎気味に外下方へ伸びる。口縁端部は下方へ屈曲し，稜を有する。先端はやや丸くおさめている。偏平な擬宝珠状つまみ。 ロクロ
第四十三号住居址（図67）	1	皿 (土師)	10.0×3.0×5.7	口縁部	体部は僅かに内彎し，口唇部近くで直立する。口唇部は平坦である。
	2	皿 (土師)	9.4×2.4×4.3	口縁部	平底であり，体部は緩やかに内彎しながら立ち上がる。体部器厚は薄く，口唇部はやや鋭くなる。
	3	皿 (土師)	9.8×1.9×5.0	口縁部	平底であり，体部下位でややふくらんだ後，直線的に広がり，口唇部近くでやや外傾する。
	4	皿 (土師)	10.4×2.0×5.5	口縁部	体部は僅かに内彎し，口唇部は器厚を増し，丸味をもつ。底部は上げ底である。
	5	皿 (土師)	10.3×2.5×5.0	口縁部	平底部はやや凸凹で，体部は若干内彎し口唇部近くから直線的になり，口唇部は平坦である。器厚は薄手。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
底—雑な回転ヘラ切りのまま		オリーブ灰	不良	長石粒少含	水挽き痕弱 土師質須恵
体部と底部との境と高台外端部は焼成後研磨 底—回転ヘラ削リ	内面から口唇部にかけては，ナデている		良好	長石粒 細砂粒(多) 含	
					サビが著しい
底—回転ヘラ削リ		オリーブ灰	良好	石英 長石 砂粒含	ヘラ記号有リ
底—木葉痕 ヘラ削リ	ヘラ削リ	灰黄褐	不良	砂粒 雲母含	
底—回転ヘラ削リ	底—水挽き痕 体—丁寧である 体部と底部との境はアテが強く残る	灰	良好	長石粒 細砂粒含 きめ細い	
底—回転ヘラ削リ 口—横ナデ 体部との境—回転ヘラ削リで面取り	口—横ナデ		良好	長石・砂粒及び細砂粒を含むが精製されている。	
底—回転ヘラ切り後ナデ	底部と体部との境にアテが強く認められる ロクロ目は弱い		良好	長石粒等を含む，小さな黒色斑点多数認む	
天井部は径11cmに渡り回転ヘラ削り	調整痕不明瞭	灰白	不良	長石粒 細砂粒含	
天井部は径10cmに渡り，回転ヘラ削り	水挽き痕	灰白	やや不良 甘い	長石粒・雲母末多含 きめ粗い	
ロクロナデ	内黒	にぶい褐	普通	砂粒含	内黒
ロクロナデ	ロクロナデ	にぶい橙			
ロクロナデ	ロクロナデ	にぶい橙	普通	砂粒含	
ロクロナデ	ロクロナデ	にぶい橙	普通	砂粒 スコリア 雲母含	完形
ロクロナデ	ロクロナデ	にぶい橙	普通	砂粒 スコリア含	完形

	番号	種類	法量 (口径×器高×底径) cm cm cm	最大径	器形の特徴
第四十三号住居址(図67)	6	皿 (土師)	11.0×1.4×6.0	口縁部	体部は直線的に広がり，口唇部は平坦である。底部は上げ底。浅く広がる体部。
	7	高台付坏 (土師)	16.1×7.2×8.3	口縁部	体部は内彎して立ち上がり，口縁近くで外反して口縁端部はさらに外傾し，端部はやや鋭くなる。高台は外下方へ伸び，比較的薄手である。
	8	壺 (須恵)			頸部のみ。器厚を減じながら外反し，外上方へ立ち上がる。頸部中位に2条の浅い凹線がめぐる。
	9	盤 (須恵)	16.3×3.9×8.8	口縁部	体部は丸味をもつ底部から外反気味に立ち上がり，口縁下で「く」の字に外反し，口縁端部は平坦である。器高は一定で比較的薄手である。
	10	砥石	長　幅 9.2×3.2		磨ぎ面は中央にゆるく凹み，幅3㎜前後の浅い溝状のくぼみがある。
	11	砥石	長　幅 8.7×3.0		10と同一個体であろう。11の磨ぎ面にはなだらかな段があるが，ほぼ平坦に磨がれている。
第四十四号住居址(図68)	1	台付甕 (土師)	― × ― × 10.7		直線的に開き，器厚は一定で薄い。下端部は平坦で内側にかえし有り。
	2	小型坏 (土師)	8.6×3.6×3.4	口縁部	丸底に近い平坦な底部から内彎して立ち上がり，体部は外反気味に口縁部に至る。器厚は口唇部に向かって減じ，端部は尖る。
	3	高坏 (土師)	裾部 ― × ― × 10.5		坏部欠損。脚柱部が比較的細く，裾部は直線的に開く，裾部に円窓を有する。裾部端にかえし有り。
	4	広口壺 (須恵)	23.85 × ― × ―		口頸部のみ。頸部からわずかに外反しながら大きく外上方へ立ち上がり，口縁部に至る。頸部は，3㎝程の幅で微隆起線によって区切られた中に9条の櫛描による波状文が廻る。口縁部は鋭角に屈曲し，端部は内傾し，下端は鋭く突出する。上部端にもにぶい稜をなす。
	5	広口壺 (須恵)	15.2 × ― × ―		中型甕の口縁部のみ。直線的に外上方へ立ち上がり，口縁部は断面三角形状を呈し，端部は内傾し，下端は鋭く突出する。上端にもにぶい稜をなす。頸部にヘラ状工具による粗い波状文をもつ。
	6	炉石	長　幅 29.45×7.65		長楕円形の棒状を呈す。　自然礫で加工痕なし。
	7	手捏ね (土師)	2.6×1.7×1.5	口縁部	平底で，器厚は厚く，口縁部は丸い。内面は内彎して体部となり，外面は内彎した後，口縁部が直立する。
	8	釘 (鉄製品)	長　幅 6.0×0.65		断面がやや角の丸味を帯びる正方形を呈する角柱状。下端に向かって細くなり，下端部は平坦である。
	9	砥石	長　幅　厚 5.8×3.8×2.9		下面はほぼ原形をとどめていると思われる。表・裏面及び側面とも使用。上半部は欠損。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
ロクロナデ	ロクロナデ	にぶい黄橙	普通	砂粒含	ほぼ完形
ロクロナデ	ヘラ磨キ 内黒	外―にぶい黄橙 内―黒	良好	砂粒含	内黒 ほぼ完形
		灰黄褐	良好	長石粒 細砂粒含	
回転ヘラ削リ 底―回転ヘラ削リ 高台―横ナデ	体―水引き成形 後横ナデ	灰	良好	石英 砂粒 多含 精製	内面に重ね焼き痕跡有り 内面外周に自然釉的付着有り（風化して白色）
					泥岩
					泥岩
ハケ目	ハケ目	にぶい赤褐	良好	砂粒 長石 石英含	
ナデ	ナデ	にぶい橙	普通	砂粒含	
脚―ヘラ削リ 裾―ハケ目整形 の後ナデ	ハケ目整形	明赤褐	普通	砂粒含	
黄黒色の自然釉状のものが全面に付着			良好	長石粒 細砂粒含	波状文は現在２段であるが３・４段である可能性有り。
		オリーブ黒	良好	長石粒 細砂粒含	
					全面が焼けている。 部分的に煤付着。
ナデ	ナデ	暗赤灰	不良	砂粒含	ほぼ完形
					曲がっている サビが著しい

	番号	種類	法量（口径cm×器高cm×底径cm）	最大径	器形の特徴
第四十五号住居址（図69）	1	壺（弥生）	－×－×9.8	胴部中位上	頸部はほとんど括れず，肩部から胴部はなだらかに膨らみ，胴部中位上で最大径となる。ゆるいカーブで平底に至る。頸部上位に無文の粘土帯を貼り付けている。粘土帯にきざみ有り。
	26	壺	－×－×4.2	胴部中位	口縁部は頸部から「く」の字状に直線的に外反し，胴部は偏平な球状であり，やや下ぶくれ気味。平底。
第四十七号・四十八号住居址（図73(1)・(2)）	1	甕（土師）	12.7×13.3×5.0	胴部中位	やや丸味をもつ平底。胴部は横長な球形で，頸部は内彎してから外反気味に直立し，口縁部はさらに外反して口唇部はやや鋭くなる。
	2	甕（土師）	14.5×12.9×6.6	口縁部	平底。胴部は丸味をもって膨らみ，頸部は「く」の字にゆるく括れ外反し，口縁近くでさらに外傾する。口唇部は丸い。器厚は底部のみ厚く，他はほぼ一定。
	3	甑（土師）	26.2×25.0×12.0	口縁部	頸部で器厚が薄くなり，口縁部は僅かに外反する。体部は直線的で，中位下から底部にかけて丸味をもつ。筒抜けである。
	4	椀（土師）	11.7×7.1 ×－	口縁部	体部は半球形を呈す。器厚は底部から除々に厚みを増し，頸部で薄くなり，口縁部は比較的薄く，端部は尖る。
	5	坏（土師）	15.0×5.0 ×－	口縁部	体部は浅い弧状を呈し，頸部は内外面とも稜を有し，口縁部は大きく外反する。器厚は体部で薄く，口縁中位で厚みを増し，端部で再び薄くなり，やや尖る。
	6	坏（土師）	14.9×5.4 ×－	口縁部	体部は浅い弧状を呈し，口縁部は大きく外反する。頸部外側に稜を有し，内側はなだらかな内彎。器厚はほぼ一定し，口縁部に向かって薄くなり，端部は鋭くなる。
	7	甕（土師）	28.2 ×－ ×－	胴部中位上	頸部に比べ口縁部はやや強く外反し，口唇部は丸い。胴部は中位で最大径をもってふくらむ。
	8	甕（土師）	22.7 ×－ ×－		頸部はほぼ直立し，口縁部は大きく外反する。口縁部外面に凹線が廻る。胴部はほとんど膨らまない。
	9	甕（土師）	14.5 ×－ ×－		頸部は外反気味に直立し，中位でさらに外反する。口縁端部は丸い。肩部は直線的に膨らむ。
	10	甕（土師）	15.4 ×－ ×－		頸部は「く」の字に括れ，口縁部は直線的に外傾し，口唇部近くでさらに外反し，端部は丸い。口唇部外面に稜を有す。
	11	甕（土師）	15.8 ×－ ×－		肩部で内傾し，頸部はほぼ直立し，口縁部は僅かに外反して，口唇部近くの器厚が厚く膨らみ，口唇部は丸い。
	12	甕（土師）	20.0 ×－ ×－		頸部のみ。頸部は大きく外反し，器厚は中位で膨らみ，口唇部に向かって器厚を減じるが，端部は丸くしている。
	13	坏（土師）	13.7×5.8 ×－	口縁部	体部は浅い弧状を呈す。口縁部との境外面に稜を有し，口縁部は外反する。器厚は口縁端部に向かい除々に薄くなり，端部は鋭くなる。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
頸—4条櫛描文（縦直線，波状文） 格子文，5条櫛描文（連孤文） 胴—撚糸文	丁寧なナデ	浅黄橙	普通	砂粒 石英粒含 精緻	胴部に煤が付着
口—ハケ目後ナデ 胴—ハケ目後磨キ	口—横ナデ 胴—ナデ	橙	普通	砂粒含	ほぼ完形
口—横ナデ 胴—ヘラナデ ナデ	口—横ナデ 胴—ヘラナデ ナデ	にぶい褐	普通	砂粒含	ほぼ完形
口—横ナデ	口—横ナデ 胴—ヘラナデ	にぶい橙	普通	砂粒含	
口—横ナデ 胴—ヘラナデ	口—ヘラナデ 胴—ヘラ磨キ	橙	良好	砂粒 スコリア含	
口—指ナデ 底—ヘラ削リ	ヘラミガキ	橙	良好	砂粒含	
口—指ナデ 底—ヘラ削リ	ヘラ磨キ	橙	不良	砂粒含	ほぼ完形
口—指ナデ 胴—ヘラ削リ	ヘラ磨キ	橙	普通	砂粒含	
口—横ナデ 胴—ヘラ削リ後ナデ	ナデ	明赤褐	やや不良	砂粒 長石 石英 雲母含	
口—指ナデ 胴—ヘラ削リ	口—指ナデ 胴—ヘラナデ	橙	良好	砂粒 雲母 長石含	
ヘラ磨キ	ヘラ磨キ	橙	良好	砂粒含	
口—指ナデ 胴—ヘラナデ	口—指ナデ 胴—ヘラナデ	にぶい橙	やや不良	砂粒 雲母 長石含	
口—指ナデ 胴—ヘラナデ	口—指ナデ 胴—ヘラナデ	明赤褐	普通	砂粒 長石 雲母含	
口縁—縦ヘラ削リの後指ナデ	口縁—指ナデ 胴—ヘラナデ 輪積痕	橙	良好	砂粒 長石含	
口—横ナデ 底—ヘラ磨キ後ナデ	ヘラ磨キ	明赤褐	普通	砂粒含	

	番号	種類	法量（口径×器高×底径） cm cm cm	最大径 cm	器形の特徴
第四十七号・四十八号住居址（図73(1)・(2)）	14	椀（土師）	14.2×6.4× —	口縁部	体部は半球形を呈し，口縁部は外傾する。体部との境内面に稜をもつ。器厚は底部から除々に厚くなり，境で最厚。口縁端部はやや尖る。
	15	坏（土師）	20.2×8.0× —	口縁部	口縁部は外反し，口唇部は僅かに外傾する。体部は弧状を呈し，口縁部との境に明瞭な稜をもつ。
	16	坏（土師）	14.8×4.2× —	口縁部	口縁部はやや直線的に開き，口唇部は尖る。体部は極めて浅く偏平で，口縁部との境に稜をもつ。
	17	坏（土師）	15.8×4.9× —	口縁部	口縁部は直線的に外傾し，器高は中位で厚く，端部はやや尖る。体部は偏平でわずかに弧状を呈す。
	18	坏（土師）	14.7×—× —	口縁部	口縁部は直線的に開き，口唇部は丸い。口唇部と体部との境に明瞭な稜をもち，体部はやや偏平な弧状を呈する。
	19	坏（土師）	13.2×4.7× —	口辺部	口縁部は内彎し，体部は内彎気味で偏平，底部はわずかな上げ底状となる。
	20	砥石	長 幅 厚 12.3×6.65×6.2		幅3mm，深さ1～2mm前後の溝状のくぼみがあり，板もしくは棒状のものを擦った痕跡と思われる。表・裏面とも中央にゆるやかなくぼみをもつ。全体として船形に近い形状。
第四十九号住居址（図75）	1	皿（土師）	10.8×2.0×6.8	口縁部	底部はわずかな上げ底。体部は直線的に外反し，体部と底部の境は丸味をもつ。器厚はほぼ一定し，口縁端部は丸い。
	2	坏（土師）	13.7×4.1×4.8	口縁部	底部は丸底に近く，体部との境は不明瞭。体部はほぼ直線的に外傾し，口縁端部は平坦に近い。器厚は体部中位で若干薄くなる他はほぼ一定。
	3	坏（土師）	13.0×4.5×7.0	口縁部	底部は平底。体部はほぼ直線的に外反し，口縁部でさらに外反する。体部と底部の境は丸味をもつ。器厚は境が最も厚く他はほぼ一定。口縁端部はやや鋭くなる。
	4	坏（須恵）	13.4×4.5×6.8	口縁部	平底。体部はわずかに内彎しながら外上方へ立ち上がる。体部と底部の境は丸味をもつ。底部から口縁部に向かって器厚を減じ，端部はやや鋭くなる。
	5	壺（須恵）	26.2×45.5× —	胴部中位上	底部から胴部にかけては丸く，胴部最大径は底部から⅔前後にあり，肩部はなだらか，底部にはゴブ状の膨張がみられる。胴部から口頸部にかけても丸味をもって移行し，頸部は外反しつつ外上方へ伸びる。口縁部は断面三角形状で，端部は丸味をもち，わずかに内傾する。下端は鋭く，上端はにぶい稜をなす。
第五十号住居址（図78(1)・(2)）	1	甕（土師）	16.5×28.0×6.5	胴部中位上	底部は若干上げ底となる。胴部はゆるやかに内彎して膨らみ，頸部で「く」の字に括れ，口縁部は外反して，口縁端部は丸い。
	2	甕（土師）	18.2×28.6×7.3		底部から胴部にかけて外反しながら立ち上がり，胴部中位はやや直線的で胴部上位は内彎する。頸部は「く」の字に括れ，口縁部は外反し，端部は丸い。
	3	小型甕（土師）	10.0×10.0×4.5	胴部中位上	底部は平底で胴部は内彎して立ち上がり中位上部で最大径となる。更に内傾して頸部となり口縁部は直立する。器厚は口縁中位で厚く口唇部で薄くなりやや尖る。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
口—横ナデ 底—ヘラ削リ後ナデ	ヘラ磨キ	明赤褐	普通	砂粒含	ほぼ完形
口—指ナデ 体—ヘラ削リ	ヘラ磨キ	赤褐	普通	砂粒 長石含	
口—横ナデ 底—ヘラ削リ	ヘラ磨キ	赤褐	普通	砂粒 長石含	
口—横ナデ 底—ヘラ削リ	ヘラ磨キ	明赤褐	不良	砂粒含	ほぼ完形
口—横ナデ 底—ヘラナデ	ヘラ磨キ	橙	良好	砂粒含	ほぼ完形
口—横ナデ 胴—ヘラ削リ	ヘラ磨キ	明赤褐	良好	砂粒 長石含	
					砂岩
ロクロナデ	ロクロナデ	にぶい橙	普通	砂粒含	
ロクロナデ	内黒	橙	普通	砂粒含	内黒 ほぼ完形
摩滅で不明	内部—内黒	にぶい橙	不良	砂粒 雲母含	ほぼ完形 一部焼けている。
ロクロナデ	ロクロナデ	にぶい黄橙	普通	砂粒含	完形
胴・底—叩き目を丁寧に消している	叩き目を丁寧に消している	灰褐	良好	長石粒 細砂粒 (多)含	
口—指ナデ 胴—ヘラ削リ	口—指ナデ 胴—ヘラナデ		普通	砂粒 長石 石英含	
胴—ヘラナデ 口—横ナデ	胴—ヘラナデの後ナデ 口—横ナデ	にぶい赤褐	良好	砂粒 長石含	完形
口—横ナデ ヘラナデ	口—横ナデ ヘラナデ	にぶい橙	普通	砂粒 長石含	胴—煤付着

	番号	種　類	法　量 (口径×器高×底径) cm　cm　cm	最大径	器形の特徴
第五十号住居址(図78(1)・(2))	4	甕 (土師)	14.4×13.0×6.4	胴部中位上	平底。胴部は，上部に膨らみのある球形で，頸部の括れは少なく，口縁部はやや外反する。口縁部端部に向かって器厚を薄くするが，端部は丸味を帯びる。口縁外面に稜をもつ。
	5	壺 (土師)	— × — × 8.3	胴部上位	平底であるがやや丸味をもつ。胴部は横に張る球形。頸部は「く」の字に括れ，口縁部は外反する。
	6	甕 (土師)	27.6×23.2 × —	口縁部	胴部はほとんど膨らまず，頸部も括れない。口縁部は大きく外反し，口縁端部外面には若干の段を有した隆起部が廻る。
	7	甕 (土師)	15.0 × — × —		頸部は「く」の字に括れ，口縁部はゆるやかに外反し，口縁端部は丸く収めてある。
	8	甕 (土師)	19.4 × — × —		頸部は「く」の字に括れ，口縁部は直線的に外傾し，中位からさらに外反し，端部は丸く収めている。
	9	坏 (土師)	12.7×5.8 × —	体部上位	体部は深みのある弧状を呈し，口縁部内面は直立，外面は器厚を減じ，端部はやや鋭くなる。体部との境に若干の膨らみはあるが稜はみられない。
	10	坏 (土師)	12.6×5.5 × —	体部上位	体部は深みのある弧状を呈す。口縁部直立するが，器厚を外面から内面に向かって減じているため口縁と体部の境はやや突出した感がする。しかし，なだらかで稜はみられない。
	11	坏 (土師)	11.8 × — × —	体部上位	体部は弧状。口縁部は直立し，器厚を外面から口唇部に向かって減じているため体部との境外面に若干膨らみがあり，稜はみられない。
	12	坏 (土師)	12.7×6.2 × —	体部上位	底部は半球形。口縁部は短かく内傾し，器厚は外側から口唇部に向かって減じ，端部はやや鋭くなっている。体部との境，外面はやや膨らみのある感じであるが稜はみられない。
	13	坏 (土師)	13.0×5.0 × —	体部上位	口縁部，体部の区別は不明瞭。偏平な丸底からやや強く内彎して立ち上がり，直立して口縁部となる。全体に肉厚で，口唇部は平坦に近い。
	14	坏 (土師)	12.6×5.7 × —	体部	底部中央が若干尖る弧状。体部は強く内彎してからやや内彎して直立し，口縁端部はごくわずかに内傾し，丸味を帯びている。
	15	坏 (土師)	12.2×6.2 × —	体部上位	体部は半球形を呈するが，若干凸凹がある。口縁部は体部からの丸味のまま内傾し，器厚を薄くして端部はやや尖る。
	16	坏 (土師)	13.4×5.6 × —	体部上位	体部は弧状。口縁部はほぼ直立し，口唇部は丸い。
	17	坏 (土師)	12.8×5.6 × —	口辺部	体部は弧状。口縁部との境は不明瞭であるがやや内傾して，口縁に至ると思われる。
	18	坏 (土師)	13.3×5.0 × —	口縁部	体部は浅い弧状を呈する。口縁部との境は稜を有し，口縁部は外反する。器厚は体部より口縁部が厚く，口唇部に向かってやや薄くなり，端部はやや尖る。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
口—指ナデ 胴—ヘラ削リ	口—指ナデ 胴—ナデ	灰褐	普通	砂粒含	
口—横ナデ 胴—ヘラナデ	口—横ナデ 胴—ナデ	明赤褐	やや不良	砂粒含	
口—指ナデ 胴—ヘラ削リ	口—指ナデ 胴—ヘラナデ	にぶい橙	良好	砂粒 砂粒含	
口—指ナデ 頸・胴—ハケ目 の後ナデ	口—ヘラナデ 胴—ヘラナデ	黒褐	普通	雲母 石英 スコリア 長石含	
口—指ナデ ナデ	口—指ナデ ヘラ削リ	にぶい橙	良好	砂粒 長石含	
口—指ナデ 底—ヘラ削リ	口—指ナデ 底—ヘラナデ	にぶい褐	普通	砂粒含	ほぼ完形
口—横ナデ 底—ヘラ削リ	口—横ナデ 底—ナデ	にぶい橙	普通	砂粒 長石 石英含	ほぼ完形
口—横ナデ 底—ヘラ削リ	口—横ナデ 底—ヘラナデ	にぶい橙	普通	砂粒 雲母 長石含	
口—指ナデ 底—ヘラ削リ	口—指ナデ 底—ヘラナデ	にぶい橙	普通	砂粒含	ほぼ完形
不明	ヘラ磨キ	橙	不良	砂粒 長石含	ほぼ完形
口—指ナデ 底—ヘラ削リ	口—指ナデ 底—ナデ	にぶい橙	良好	砂粒 長石 石英含	
口—横ナデ 底—ヘラ削リ	口—横ナデ 底—ナデ	にぶい橙	普通	砂粒等	
口—横ナデ 胴—ヘラ削リ	口—横ナデ 胴—ナデ	にぶい橙	普通	砂粒含	完形
口—指ナデ 胴—ヘラ削リ		橙	普通	砂粒含	ほぼ完形
口—横ナデ 胴—ヘラ削リ	ヘラミガキ	橙	普通	砂粒 長石 雲母含	

	番号	種類	法量 (口径cm×器高cm×底径cm)	最大径	器形の特徴
第五十号住居址（図78(1)・(2)）	19	坏（土師）	14.4×5.5×—		体部は浅い弧状。口縁部は外反し，体部の境に稜をもつ。口縁端に向かって器厚を減じ，口唇部は鋭くなる。
	20	坏（土師）	13.8×—×—		口縁部は浅い体部から直立し，中位から外反する。器厚は端部に向かって減じ，口唇部は尖る。
	21	坏（土師）	14.0×5.5×—	口縁部	体部は浅い弧状。口縁部との境，頸部に浅い凹線が廻る。口縁部は外反し，口唇部は尖る。
	22	坏（土師）	15.0×—×—		体部は偏平な弧状。口縁部との境に稜をもつ。口縁部は外反し，口唇部はやや尖る。
	23	坏（土師）	15.1×4.7×—		体部は浅い弧状。口縁部との境に稜をもつ。口縁部は外反し，口唇部に向かって器厚を減じるが端部はやや丸味をもつ。
	24	坏（土師）	15.7×—×—		体部は浅い弧状を呈し，口縁部との境に稜をもつ。口縁部は外反し，口唇部に向かって除々に器厚を減じるが端部はやや丸味をもつ。
	25	甕（土師）	19.1×13.5×— 底部孔 3.0	口縁部	胴部は若干内彎しながら外上方へ開き，頸部でわずかに括れ，口縁部は内彎ぎみに外方へ開く。底部中央に孔をもつ。
	26	手捏ね（土師）	—×—×3.4		平底で，内彎して立ち上がる。肉厚。
	27	手捏ね（土師）	4.7×2.2×3.0	体部上位	平底。内彎して短かく立ち上がる体部。口唇部は尖る。
第五十一号住居址（図81）	1	甕（土師）	16.1×29.6×6.6	口縁部	胴部最大径は中位であるが，やや長めで球形を呈さない。口縁部は「く」の字を呈し，わずかに外反ぎみである。口縁部は丸くなる。
	2	甕（土師）	16.0×—×—		頸部は直立し，中位から口縁部が外反する。口唇部は肉厚で丸い。
	3	鉢（土師）	13.6×10.0×5.5	口辺部	わずかに内彎ぎみに立ち上がる。
	4	坏（土師）	11.6×5.0×—	口縁部	底部からはゆるやかに内彎し，口縁下4cm前後から急角度で内彎しながら立ち上がる。器厚は，立ち上がり部からわずかづつ厚くなり，口縁部において薄くなる。
	5	坏（土師）	13.4×5.2×—	口辺部	丸底で，ゆるやかに内彎しながら口縁に続く。口縁下に幅5mm前後のヨコナデによってわずかに稜をつくる。
	6	坏（土師）	13.7×5.3×—		
	7	椀（土師）	12.6×6.4×—		口縁下のヨコナデにより頸部にわずかに稜がみられる。
	8	坏（土師）	15.0×5.3×—	口縁部	底部からゆるやかに内彎し，頸部に強いヨコナデによって稜がつくられ，口縁部で大きく外反する。口縁直下は特に外反が大きい。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
口—指ナデ 底—ヘラ削リ	ヘラミガキ （摩滅している）	赤	普通	砂粒含	
口—横ナデ 胴—ヘラ削リ後 ナデ	ヘラミガキ	橙	普通	砂粒 長石含	
口—横ナデ ヘラ磨キ	口—横ナデ ヘラ磨キ	赤	普通	砂粒含	
口—横ナデ 底—ヘラ削リ	粗，ヘラ磨キ	橙	良好	砂粒含	
口—横ナデ 胴—ヘラ削リ	ヘラ磨キ	橙	良好	砂粒含	
口—ヘラ磨キ 底—ヘラ削リ	ヘラ磨キ （摩滅している）	明赤褐	不良	砂粒含	
口—ナデ ヘラ削リ	口—ナデ				完形
ナデ	ナデ	にぶい橙	不良	砂粒含	
ヘラ磨キ	ヘラ磨キ	赤褐	普通	砂粒含	
口—指ナデ後縦 ヘラ削リ 胴—縦ヘラ削リ	口—横ヘラナデ 胴—ヘラナデ	橙		砂粒 長石含	成形普通
口—下から上に ヘラナデ 胴—ヘラ削リ	口—指ナデ 胴—ヘラナデ	にぶい赤	良好	砂粒 スコリア含	
ヘラ削リ	ヘラナデ	赤	普通	砂粒含	成形不良 ほぼ完形
口—横ナデ 胴—ヘラ削リ	口—横ナデ 胴—ヘラ磨キ	明赤褐	良好	砂粒 長石含	
口—横ナデ ヘラ削リ	ヘラ磨キ	赤	普通	砂粒含	成形普通
口—横ナデ ヘラ削リ	ヘラ磨き	赤	普通	砂粒含	
口—横ナデ 底—ヘラ削り 沈線アリ	口—横ナデ 底—ナデ 沈線アリ	赤褐	普通	砂粒 スコリア 長石 石英含	完形
口—横ナデ 胴—ヘラ削り	ヘラ磨き	明赤褐	不良	砂粒含	ほぼ完形

	番号	種類	法量 (口径cm×器高cm×底径cm)	最大径	器形の特徴
	9	坏 (土師)	12.9×5.4×—	口—横ナデ	立ち上がりは内彎しながら口縁下で外反する。
	10	鉢 (土師)	14.0×7.2×—		底部は丸底で深めの胴部，括れはみられず口縁部は外反し，器厚は薄くなり，口唇部は丸い。
第五十三号・五十四号・五十五号住居址（図85(1)・(2)）	1	甕 (土師)	22.7×—×—	胴部中位上	底部からゆるやかに内彎して立ち上がり肩附近から大きく内彎して頸部に続く。口縁はほぼ直線的に立ち上がり，わずかに外反する。口唇部は丸くなる。
	2	甕 (土師)	20.3×—×—		口縁部は短く直線的に外傾し，口縁部外側に凹線が廻る。頸部は「く」の字に括れ胴部は直線的でほとんど膨らまない。
	3	坏 (土師)	12.5×3.5×6.2		平底から体部が内彎して立ち上がり，器厚を途中で一たん薄くして，口唇部で厚みを増し，端部は丸くおさめている。
	4	高台付坏 (土師)	15.5×6.2×—		底部からゆるやかに内彎して立ち上がり，一たん器厚を薄くして，口唇部で厚みを増し，端部は丸くなる。高台をつけた痕跡あり。底部は丸底に近い。
	5	椀 (土師)	14.4×7.2×—	口縁部	口縁部はほぼ直立し，口唇部はやや尖がる。体部は半球形を呈する。
	6	甕 (土師)	16.0×—×—		口縁部は中位から外反し，肉厚であるが口唇に向かって器厚を減じ端部は丸い。頸部は緩かに括れて直線的であり，肩から胴部にかけて丸く膨らむ。
	7	甑 (土師)	—×—×7.8		胴部は直線的に開き，底部は筒抜け。
	8	甕 (土師)	—×—×7.4		底部は肉厚で貼りつけが明瞭。胴部は底部から除々に器厚を減じ，胴部はほとんど膨らまない。
	9	坏 (土師)	13.6×5.3×—	口縁部	底部からゆるやかに内彎し，頸部において外反しながら立ち上がり，頸部に強い稜をもつ。
	10	坏 (土師)	13.9×3.9×7.7	口縁部	体部は底部から内彎して外上方へ立ち上がり，底部との境は内側は不明瞭，外側には若干の稜有り。口唇部は丸い。
	11	坏 (須恵)	13.8×5.3×7.8		研磨あるいは磨滅と思われる痕跡が認められる。体部はほぼ直線的に外上方へ伸びる。口縁端部はほぼ丸く収めている。
	12	蓋 (須恵)	12.5×4.1×—		天井部はほぼ平坦で，径約10cmに渡り回転ヘラ削りを施し，中央部に擬宝珠形のつまみを有する。天井部と口縁部とはにぶい稜ではあるが明瞭に屈曲し，口縁部はほぼ垂直に下がる。
	13	台付長頸壺 (須恵)	—×—×8.2		器面の磨滅が著しいので調整痕不明。短く外下方にふんばる高台を有する。体部は球形に近く，最大径は中位にある。
	14	(須恵)			外上方へ器厚を減じながら直線的にのびる体部。厚い円板状の底部とからなる。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
口—指ナデ 胴—ヘラ磨き	口—指ナデ 胴—ヘラナデ	明赤褐	普通	砂粒 長石含	ほぼ完形
口—指ナデ 胴—ヘラ削り 底—きざみ痕	口—横ナデ	明赤褐	普通	砂粒含	ほぼ完形
口—指ナデ 胴—ヘラ削り後 ヘラナデ	ヘラ磨き	明赤褐	やや不良	砂粒含	成形—良好 焼成を受けているか。
口—指ナデ 胴—ヘラ削り	口—指ナデ 胴—ヘラナデ	にぶい橙	不良	砂粒 雲母 長石含	
底—回転ヘラ削り					内黒 火だすき痕あり
底—回転ヘラ削り					内黒 火だすき痕あり
口—指ナデ 胴—ヘラ削り	口—指ナデ 胴—ヘラ磨き	赤	普通	砂粒含	ほぼ完形
口—指ナデ 胴—ヘラ削り	口—指ナデ 胴—ヘラナデ	明赤褐	普通	砂粒 雲母 長石含	煤付着
ヘラ磨き	ヘラ磨き	橙	普通	砂粒 雲母含	
ヘラ削り	ヘラナデ	灰褐	不良	砂粒 雲母含	
口—横ナデ 底—ヘラナデ	ヘラ磨き	橙	良好	砂粒含	成形良好
底—回転ヘラ削り	ヘラ磨き	浅黄			
底部は切り離し（回転ヘラ切りと思われる）後丁寧なヘラナデを施している。		灰	良好	長石粒 細砂粒を含む	水挽き痕弱
		灰白	良好	長石粒，細砂粒を含む 黒色斑点が少々認められる	水挽き痕弱
		灰白	不良	長石粒 黒雲母末 細砂粒含	
底部は手持ちヘラナデを施している	底面にはすり減った使用痕あり	暗青灰	良好	長石粒含	水挽き痕弱

	番号	種類	法量 (口径×器高×底径) cm cm cm	最大径	器形の特徴
第五十三号・五十四号・五十五号住居址	15	坏 (須恵)	9.8×3.9×5.8		体部はほぼ直線的に器厚を減じて伸び，口縁部附近で若干外反する。
	16	支脚 (土師)	全長16.1		円柱状を呈し，下面は平坦，上面はほぼ平坦をなし，下端から上方に向かってわずかに細くなる。
	17	砥石 (石器)	幅 長 3.8×17.4		表面・側面とも良く使用されている。磨ぎ面はほぼ平坦である。
	18	刀子 (鉄器)	全長6.1+5.5 刃部幅 1.0 ナカゴ幅 0.7		2点は接合可，刀子とみられる。刃部はほぼ原形と思われる。ナカゴ断面は楕円形を呈す。
	19	平鎌 (鉄器)			平鎌の柄着装部とみられる。
第五十八号住居址（図90）	1	甕 (土師)	15.4×－×－		頸部は直立ぎみ。口縁部は外反した後，口唇近くでわずかに立ち上がる。
	2	甕 (土師)	19.0×－×－		頸部は直線的に立ち上がり，口縁部は大きく外反する。口唇部は肉厚のままで端部は平坦。
	3	甕 (土師)	17.0×－×－		頸部は直立ぎみ。口縁部は頸部から緩かに外反する。口唇部はやや鋭くなる。
	4	甕 (土師)	－×－×7.2		平底で胴部はやや直線的に内彎する。
	5	甕 (土師)	－×－×7.4		平底から内彎して立ち上がり，胴部は球形となる。最大径は中位になると思われる。
	6	甑 (土師)	24.0×24.6×8.0		口縁部はほぼ直線的に外傾し，胴部は中位にかけてやや膨らみ，底部にかけてやや強く内彎する。筒抜けの底部である。
	7	甑 (土師)	15.5×11.5×－	口縁部	底部から内彎しながら立ち上がり，頸部でほとんど括れず，口縁部は若干外反する。口唇部は鋭くなる。底部は先細くなり，下端に孔をもつ。
	8	椀 (土師)	12.5×8.2×－	体部中位	底部は丸底。体部は横に膨らみ，頸部は「く」の字に括れ，口縁部は直線的に外反する。口唇部は丸い。
	9	甕 (土師)	11.7×10.0×2.7	体部中位上	口縁部は直線的に外傾し，口唇部は尖がる。体部はやや歪みのある球状を呈する。丸底である。
	10	甕 (土師)	13.0×－×－	体部中位	底部は丸底で，体部は直立ぎみに立ち上がり頸部で若干括れ，口縁部はわずかに外反し，端部はやや尖がる。
	11	椀 (土師)	12.5×6.2×－	体部中位	平底に近いが体部との境が不明瞭である。下ぶくれの体部で頸部は若干括れ，口縁部は直線的にわずかな外反で立ち上がり口唇部は平坦ぎみ。
	12	坏 (土師)	13.0×5.4×－	口縁部	口縁部は僅かに内彎しながら立ち上がるが，口唇部近くでさらに内傾する。体部は弧状を呈する。器肉は薄い。
	13	坏 (土師)	15.4×5.6×－	口縁部	丸底で体部はやや偏平な弧状。口縁部との境はあまり明瞭でないがわずかな稜有り。口縁部は外反し，やや肉厚で端部は丸い。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
底部は回転ヘラ切り痕を若干残し，手持ちヘラ削りを行なっている	内面の水挽き痕は弱いが底部と体部との境はアテが強くみられる。水挽き痕はほとんど無い	褐灰	良好	長石粒 砂粒多 黒色小斑点多含	
雑なナデ		にぶい橙	良好	砂粒含	完形
					粘板岩
					サビが著しい
指ナデ	口—指ナデ 胴—ヘラナデ	橙	普通	砂粒 雲母含	
口—指ナデ 胴—ヘラ削り	ヘラ磨き	明赤褐	不良	砂粒 雲母 長石含	
口—指ナデ 胴—ヘラ削り	口—ヘラ磨き （摩滅） 胴—ヘラナデ	橙	不良	砂粒 雲母 長石含	
ヘラ削り	ヘラナデ	明赤褐	不良	砂粒・雲母 長石 石英含	
ヘラ削り	ヘラナデ	明赤褐	不良	砂粒 長石 雲母含	煤付着
口—横ナデ 胴—ヘラナデ	口—横ナデ 胴—ヘラ磨き	橙	不良	砂粒含	ほぼ完形
口—横ナデ ヘラナデ	口—横ナデ ヘラナデ	明赤褐	普通	砂粒 雲母含	
口—横ナデ 胴・底—ナデ	口—横ナデ 胴・底—ヘラ磨き	橙	不良	砂粒 雲母含	
口—横ナデ 胴—横ヘラ削り	口—輪積痕 胴—ナデ暗紋				黒斑有り ほぼ完形
口—指ナデ 胴—ヘラ削り	口—指ナデ 胴—ナデ	にぶい橙	普通	砂粒含	
口—横ナデ 胴—ヘラナデ	口—横ナデ 胴—ヘラ磨き	赤	普通	砂粒 長石 石英含	
口—横ナデ 底—ヘラ削り	ヘラ磨き	橙	良好	砂粒含	
口—横ナデ 底—ヘラ削り	ヘラ磨き	明赤褐	不良	砂粒 雲母含	

	番号	種類	法量（口径×器高×底径）cm cm cm	最大径	器形の特徴
	14	椀（土師）	13.9×5.9× —	口縁部	口縁部はほぼ直線的に外反し，口唇部近くで僅かに内傾する。口縁部と体部の境に明瞭な稜をもち，体部は丸味をもった弧状を呈する。
	15	坏（土師）	14.4×5.3× —	口縁部	丸底で，体部は浅い弧状を呈す。頸部に段を有し，稜がみられる。口縁部は外反し，口唇部は丸い。
第五十九号住居址（図93(1)・(2)）	1	甕（土師）	— × — × 9.0		上げ底。胴部はなだらかに外反して立ち上がり，中位で膨らみ，肩部はなだらかな内傾。頸部は内傾して立ち上がる。
	2	甕（土師）	— × — × 8.0	胴部中位	上げ底。中位で尖がるように膨らむ胴部。底部に向かって急にすぼむ。頸部は内傾し，括れている。
	3	甕（土師）	16.0×19.0×8.5	胴部中位	胴部は平底から直線的に立ち上がった後内彎して膨らみ，頸部で括れてから直立し，口縁部は若干外反する。肉厚で口唇部はやや鋭くなる。
	4	甑（土師）	24.8×23.9×6.6	口縁部	口縁部は僅かに外反し，口唇部は丸い。底部は筒抜けで，体部は底部からやや直線的に広がる。
	5	壺(坩)（土師）	7.9×13.5× —	胴部中位	胴部は横に張る球形。頸部は若干内彎ぎみに外傾して立ち上がり，中位から外反して口唇部はやや鋭くなる。
	6	坏（土師）	13.2×5.2× —	体部上位	偏平な体部から内彎する口縁部。口縁端部は器厚を減じて尖がる。口縁と体部の境は不明瞭。
	7	坏（土師）	13.0×5.6× —	口辺部	口縁部は内彎し，体部は弧状を呈する。
	8	坏（土師）	12.1×5.0 × —		体部は浅い弧状を呈し，頸部に丸味のある段を有す。口縁部はわずかな外傾で立ち上がる。器厚は口縁部中位でふくらみ端部は若干鋭い。
	9	坏（土師）	14.6 × — × —	口縁部	口縁部はわずかに外反し，体部との境に稜をもつ。体部は浅く，偏平な弧状を呈するものと思われる。
	10	坏（土師）	15.4×5.5× —	口縁部	浅い弧状。口縁部との境に稜をもち，口縁部は大きく外反する。器厚は体部より口縁部中位が厚く，口唇部は薄く尖る。
	11	坏（土師）	14.8×4.0× —	口縁部	極浅い弧状の体部。頸部に段を有し，口縁部は大きく外反する。器厚は体部で薄く，口縁部中位で最も厚く，口唇部は薄く尖がる。
	12	高坏（土師）	17.1 × — × —		坏部体部は直線的に開き，口縁部も直線的に外傾する。口唇部は丸い。
	13	器台（土師）	8.0 × — × — 孔径 1.1		受部は直線的な外傾で開き，口縁部は垂直ぎみに立ち上がり，外面に稜を有し，曲部から急に器厚を減じ口唇部は尖がる。
第六十号住居址（図96）	1	鉢（土師）	15.2×12.4×9.2	胴部中位	丸底で，やや丸みをもつ。胴部はあまり膨らまず，口縁部は短く外反する。端部は丸みをもつ。
	2	鉢（土師）	16.0 × — × —		
	3	坏（土師）	13.4×3.6 × —	口縁部	体部は弧状を呈し，口縁部との境は不明瞭。口縁部はほぼ直立し，端部は尖る。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
ヘラ磨き 底—ヘラ削り	ヘラ磨き	明赤褐	普通	砂粒含	ほぼ完形
口—横ナデ 底—ヘラ削り	ヘラ磨き	橙	普通	砂粒含	ほぼ完形
口—指ナデ 胴—ヘラ削り後ナデ	口—指ナデ 胴—ヘラナデ	橙	普通	砂粒 長石含	
口—指ナデ 胴—ヘラナデ	口—指ナデ 胴—ナデ	にぶい橙	良好	砂粒 長石 石英含	
ヘラナデ	ヘラナデ	口—橙 胴—暗赤灰	普通	砂粒 スコリア含	煤付着 完形
ヘラ磨き	ヘラ磨き	橙	普通	砂粒含	
ヘラナデ	ヘラナデ	赤褐	普通	砂粒 雲母 石英含	
ヘラ削り後磨き	ヘラ磨き	にぶい赤褐	普通	砂粒 スコリア含	
口—横ナデ 底—ヘラ削り	ヘラ磨き	橙	普通	砂粒 スコリア含	
口—ヘラ磨き 底—ヘラ削り	ヘラ磨き	赤褐	普通	砂粒 雲母含	ほぼ完形
口—横ナデ 胴—ヘラ削り	ヘラ磨き	橙	良好	砂粒 雲母含	
口—横ナデ ヘラナデ	口—横ナデ ナデ	橙	普通	砂粒 長石含	ほぼ完形
口—横ナデ 底—ヘラナデ	ヘラ磨き	明赤褐	普通	砂粒含	
坏部 口—ヘラ磨き 位下—ヘラ削り	坏部—ヘラ磨き	橙	普通	砂粒含	
横ナデ	ナデ	にぶい橙	良好	砂粒含	
口—横ナデ 胴—ナデ	ナデ	にぶい黄橙	不良	砂粒含	
口—横ナデ 胴—ヘラ削り	口—横ナデ 胴—ヘラナデ	にぶい橙	普通	砂粒含	
ヘラ削り後ナデ	ナデ	にぶい橙	良好	砂粒含	

	番号	種類	法量 (口径×器高×底径) cm cm cm	最大径	器形の特徴
	4	坏 (土師)	16.4×5.4×—	口縁部	体部はわずかに内彎しながら開き，口縁部となる。口縁部は外反し，口唇部は肉厚のままで丸い。
	5	坏 (土師)	14.7×5.4×—	口縁部	深めの弧状を呈し，口縁部との境は不明瞭。口唇部は丸味を帯びる。
第六十三号住居址（図99）	1	甕 (土師)	23.3×—×—	胴部上位	頸部で直立した後，口縁部はやや強く外反する。胴部は上位で最大径をもつ。
	2	甕 (土師)	19.3×—×—		口縁部は大きく外反し，口唇部は丸い。胴部はあまりふくらまない。
	3	坏 (土師)	11.5×2.9×—	口縁部	浅い坏である。口縁部はやや内彎し，体部との境に稜をもつ。体部はやや偏平な弧状を呈する。
	4	坏 (土師)	14.5×6.0×—	口縁部	口縁部は直線的に開き，口唇部は尖る。体部は弧状を呈する。
	5	坏 (須恵)	13.8×4.0×9.0		体部はやや直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部はほぼ丸く収めている。全体に丁寧な作りである。 ロクロ
	6	刀子 (鉄器)	幅 長 0.9×2.6		小型利器の刃部のみ残存。上下端とも欠損。
第六十四号住居址（図102）	1	坏 (土師)	12.7×5.5×—	口縁部	口縁部は僅かに外反し，口唇部は丸い。体部は偏平な弧状を呈する。
	2	坏 (土師)	15.3×6.0×—	口縁部	口縁部は直立した後，直線的に外傾し，口唇部は尖る。体部は弧状を呈する。
	3	椀 (土師)	13.6×7.0×—	口辺部	口縁部はやや内彎しながら立ち上がるが口唇部附近で器肉が薄くなり，垂直に立ち上がる。口唇部は鋭く尖る。体部は半球状を呈する。
	4	坏 (土師)	14.3×5.2×—	口縁部	口縁部は直線的に開き，体部との境に稜をもつ。体部はやや偏平な弧状を呈す。
	5	坏 (土師)	13.8×7.9×—	口縁部	口縁部はやや内彎し，口唇部は丸い。体部は偏平な半球状を呈する。
第六十五号住居址（図104）	1	坩 (土師)	8.8×9.3×3.4	胴部中位	口縁部は直線的に外傾し，体部は偏平な球状を呈し，底部はわずかにくぼむ。器肉が薄い。
	2	坩 (土師)	9.9×10.3×3.5	胴部中位	口縁部は僅かに内彎し，体部は偏平な球状を呈する。平底でややくぼむ。
	3	高坏 (土師)	15.7×—×—		坏部は直線的に開き，口唇部は丸い。器肉が薄い。
第六十六号住居址（図107）	1	甕 (土師)	20.3×27.4×—	口縁部	口縁部は外反し，胴部はあまりふくらまず，胴長である。底部は不安定。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
口—横ナデ 胴—ナデ	ナデ	にぶい橙	普通	砂粒 雲母含	
削り後磨き	ヘラミガキ	にぶい黄橙	良好		ほぼ完形 内黒
口—横ナデ 胴—ナデ	ナデ	にぶい黄橙	普通	砂粒 スコリア含	
口—横ナデ 胴—下から上へナデ	口—横ナデ 胴—ナデ	にぶい赤褐	普通	砂粒 長石 石英含	
口—横ナデ 底—ヘラ削り	ナデ	にぶい赤褐	普通	砂粒 雲母含	不明の模様あり
口—ヘラ磨き 胴—ヘラ削り後磨き	ナデ	橙	良好	砂粒 雲母含	
水挽き痕はやや強い。底部は回転ヘラ切り後丁寧に回転ヘラ削りを施し，更に体部との境を面取りしている	水挽き痕弱	灰	良好	長石粒・細砂粒を含むが比較的精製されている	
					サビが著しい
口—ハケ目整形 後横ナデ ヘラ磨き	ヘラ磨き	橙	普通	砂粒 雲母 長石等含	ほぼ完形 外面底部—刻み目がある
口—横ナデ 底—ヘラ削り	ヘラ磨き	にぶい赤褐	普通	砂粒含	
口—ナデ 胴—ヘラ削り	口—ナデ 胴—ヘラ磨き	にぶい橙	良好	砂粒 長石 スコリア含	ほぼ完形
口—横ナデ		明赤褐	不良	砂粒含	
口—横ナデ 底—ヘラ磨き	ヘラ磨き	橙	普通	砂粒含	
口—ヘラ磨き後ハケ目整形 胴—ハケ目整形	口—ヘラ磨き 胴—ナデ	にぶい橙	普通	砂粒 スコリア含	ほぼ完形
ヘラナデ 横ナデ	ヘラナデ 横ナデ	明赤褐	普通	砂粒 雲母含	ほぼ完形
ナデ	ヘラ磨き	明赤褐	普通	砂粒含	
口—指ナデ 胴—ヘラ削り	口—指ナデ 胴—ヘラナデ	にぶい橙	不良	砂粒 長石含	

	番号	種類	法量（口径×器高×底径） cm cm cm	最大径	器形の特徴
第六十六号住居址（図107）	2	甕（土師）	20.4 × — × —		頸部で直線的に僅かに外傾した後，口縁部でさらに外傾する。口唇部は丸い。胴部は直線的にやや開く。
	3	甕（土師）	23.0 × — × —		口縁部は「S」字状を呈し，胴部はやや大きく張る。
	4	坏（土師）	14.2×5.3 × —	口縁部	口縁部はやや外反し，口唇部は丸い。体部は弧状を呈する。
	5	坏（須恵）	13.8×4.6×9.8		体部はほぼ直線的に立ち上がり，口縁端部は丸く収めている。
第六十七号住居址（図110）	1	甕（土師）	18.8×30.5×7.0	胴部中位下	頸部はほぼ直立し，口縁部は直線的に外傾した後，中位からさらに外傾する。肩部はなで肩で，胴部は中位で最大径をもつ。底部はややくぼむ。
	2	甑（土師）	26.8×23.2×8.6	口縁部	頸部は直線的にやや外傾し，口縁部はさらに外反する。口唇部は丸い。体部は最大径を上位にもち，緩やかに底部に移行する。底部は筒抜けである。
	3	坏（土師）	13.2×4.6×5.0	口縁部	口縁部は直線的に開く。平底の底部からやや内彎して立ち上がる。
	4	坏（土師）	14.4×4.9 × —	口縁部	口縁部は直線的に外傾し，体部との境に明瞭な稜をもつ。体部は弧状を呈する。
	5	坏（土師）	12.7×5.2 × —	口辺部	口縁部はほぼ直立し，体部はやや偏平な弧状を呈する。
	6	椀（土師）	12.4×6.1 × —	口縁部	口縁部は直線的に外傾し，体部は偏平な半球状を呈する。
第六十八号住居址（図113）	1	壺（土師）	5.2×8.8×3.7	胴部中位	頸部は厚手で，口縁部は外反する。胴部はやや偏平な球状を呈する。平底である。
	2	鉢（土師）	10.7×11.9×7.4	体部中位	底部のみ厚手で不安定である。体部は半球状を呈し，口縁部は内彎する。口唇部は尖る。
	3	甕（土師）	17.0 × — × —	胴部中位上	頸部は直線的にやや内傾し，口縁部は外反する。胴部はやや縦長の算盤玉形を呈する。
	4	甕（土師）	— × — × 6.4		体部は歪みのある球状を呈する。平底である。
	5	甑（土師）	10.7×12.0 × —	体部中位	口縁部は僅かに内彎し，体部は中位で僅かにふくらみ，底部近くで丸味をもつ。底部の中央に孔を有する。
	6	甕（土師）	— × — × 6.2		底部は厚手で，胴部は球状を呈する。
	7	椀（土師）	9.8×6.5×7.0	体部上位	口縁部はやや強く内彎し，体部は緩やかに内彎して，平底気味である。
	8	坏（土師）	13.8×5.4 × —	口縁部	口縁部は外反し，体部との境に稜をもち体部は浅く，弧状を呈する。体部のみ肥厚である。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
口—指ナデ 胴—ヘラ削り	口—指ナデ 胴—ヘラナデ	褐灰	普通	砂粒含	胴長甕
口—指ナデ 胴—ヘラナデ	口—指ナデ 胴—ヘラナデ	にぶい褐	普通	砂粒 雲母 長石含	
口—横ナデ 底—ヘラ削り	口—横ナデ 底—ナデ	橙	良好	砂粒含	
底部は回転ヘラ削りで調製され，体部との境は回転ヘラ削りで面取りしている	内面の底部と，体部は明瞭に屈曲している 水挽き痕弱い	灰白	不良	細砂粒を含むのみで比較的精製されている	
ハケ目整形後ナデ （下から上へ）	ナデ	橙	普通	砂粒 長石 石英含	
口—横ナデ 胴—ハケ目後ヘラナデ	口—横ナデ 胴—ナデ	赤橙	普通	砂粒含	
口—横ナデ 胴—ヘラナデ		明赤褐	不良	砂粒含	
口—横ナデ ヘラ削り	口—横ナデ ヘラ磨き	明赤褐	普通	砂粒含	ほぼ完形
口—横ナデ 底—ナデ ヘラ削り		橙	不良	砂粒含	ほぼ完形
口—ヘラ磨き 胴—ナデ	ヘラ磨き	赤褐		砂粒 長石含	
口—横ナデ 胴—ハケ目整形後ナデ	口—横ナデ 胴—ナデ	にぶい橙	良好	砂粒含	ほぼ完形
口—横ナデ 胴—ヘラ削り	口—横ナデ 胴—ヘラナデ	赤褐	普通	砂粒含	
口—指ナデ 胴—ヘラ削り	口—指ナデ 胴—ヘラナデ	橙	不良	砂粒 長石 雲母含	
口—横ナデ 胴—ヘラ削り	ナデ	明赤褐	良好	砂粒含	
ヘラ削り	口—横ナデ 胴—ヘラナデ 輪積痕あり	明赤褐		砂粒 雲母含	完形
ナデ 底部—木葉痕あり	ナデ	橙	普通	砂粒 長石 石英含	
ナデ	ハケ目整形	明赤褐	普通	砂粒含	
口—ヘラ磨き 胴—ヘラナデ	ヘラ磨き	橙	普通	雲母 砂粒含	

	番号	種類	法量（口径cm×器高cm×底径cm）	最大径	器形の特徴
	9	坏（土師）	11.6×5.3 ×—	口辺部	口縁部は直立し，口唇部はやや尖る。体部はまろやかな弧状を呈する。
	10	坏（土師）	14.0×5.0 ×—	口縁部	口縁部は直線的に外傾し，口唇部は尖り，体部との境に稜をもつ。体部は極めて浅く偏平である。器肉は厚い。
	11	壺（須恵）	26.8 ×— ×—		頸部は朝顔形に外反し，口縁端部は内傾し，上下に稜を有する。口縁すぐ下に断面三角形の凸帯をめぐらす。その下位に櫛状工具によるものとみられる斜方の細い線がみられる。
第七十号住居址（図116）	1	坏（土師）	12.6 ×— ×—	口辺部	口縁部は内彎し，口唇部は尖る。体部は弧状を呈する。
	2	坏（土師）	13.0 ×— ×—	口縁部	口縁部は僅かに外反し，口唇部は丸い。体部は半球状を呈する。底部欠損。
	3	坏（土師）	13.0×5.2 ×—	口縁部	口縁部は直線的に開き，口唇部は尖る。体部は弧状を呈する。
	4	坏（土師）	14.4×6.0 ×—	口縁部	口縁部は僅かに外反し，体部は偏平である。
	5	坏（土師）	13.6 ×— ×—	口縁部	口縁部は直線的に開き，体部は偏平な弧状を呈するものと思われる。
	6	椀（土師）	13.0 ×— ×—	体部中位	口縁部は直線的に外反し，口唇部近くで直立し，口唇部は尖る。体部は半楕円球状を呈する。底部欠損。
	7	土玉（土製品）	長さ 3.2 孔径 0.5		中位で膨らむ，円柱状を呈し，中央に孔が貫通している。全体的に成形は丁寧ではない。
第七十一号住居址（図119）	1	甕（土師）	16.9×17.0×8.4	胴部中位	口縁部は頸部から直線的に外傾した後，中位でさらに外傾する。胴部は中位に最大径をもつ。やや偏平な球状を呈する。平底である。
	2	坏（土師）			口縁部はほぼ直線的に外反し，体部との境に稜をもつ。体部は浅く，直線的な弧状を呈する。
	3	高坏（土師）	23.8 ×— ×—		坏部は直線的に開き，口縁部で大きく外反する。脚部は直線的に開く。
	4	坏（土師）	13.0 ×— ×—	口辺部	口縁部は内彎し，体部は弧状を呈する。底部欠損。
	5	坏（土師）	14.8 ×— ×—	口縁部	口縁部は垂直に立ち上がった後，やや外反する。体部は弧状を呈するものと思われる。底部欠損。
	6	坏（土師）	16.0×4.6 ×—	口縁部	口縁部は直線的にやや外反した後，内彎気味に外傾する。口唇部は尖る。体部は極めて浅く偏平である。
	7	坏（土師）	13.3 ×— ×—	口縁部	口縁部は一度直立してから直線的に大きく外反する。口唇部は尖る。体部は浅く偏平である。
	8	坏（土師）	15.2×4.4 ×—	口縁部	口縁部は直線的に大きく開き，口唇部は尖る。口縁部と体部の境に稜をもつ。体部は極めて浅く，偏平である。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
口—ヘラ磨き 胴—ヘラ削り	ヘラ磨き	明赤褐	不良	砂粒含	ほぼ完形
口—横ナデ 胴—ヘラ削り	ヘラ磨き	明赤褐	良好	砂粒 雲母含	完形
外面—灰緑色の釉が付着し，調整痕は不明瞭	内面—灰緑色の釉が付着し調整痕は不明瞭		良好	長石粒 細砂粒含	
口—横ナデ 胴—ヘラ削り	ヘラ磨き	明赤褐	良好	砂粒含	内黒
口—横ナデ 中位—ナデ 底—ヘラ削り	口—横ナデ 位下—ヘラ磨き	明赤褐	普通	砂粒含	
口—横ナデ 胴—ヘラ削り	ヘラ磨き	明赤褐	普通	砂粒 雲母含	
口—横ナデ 胴—ヘラ削り後ナデ	口—横ナデ 胴—ヘラ磨き	外—赤褐 内—橙	不良	砂粒 雲母含	ほぼ完形
口—横ナデ 胴—ナデ	ヘラ磨き	明赤褐	不良	砂粒 雲母含	
口—横ナデ 胴—ナデ	口—横ナデ 胴—ナデ	明赤褐	不良	砂粒 雲母含	
口—横ナデ 胴—ナデ （上～下）	口—横ナデ 胴—ナデ	赤	普通	砂粒 長石 石英含	ほぼ完形
口—横ナデ 底—ヘラナデ	ヘラ磨き	明赤褐	良好	砂粒含	
口—横ナデ ヘラナデ 脚—ナデ（縦）	坏—ヘラ磨き 脚—ヘラナデ	外—にぶい黄橙 内—明赤褐	良好	砂粒含	
口—横ナデ 底—ヘラ削り後ナデ		明赤褐	不良	砂粒 雲母含	
口—整形痕あり 底—ヘラ削り後カキ目調整	ヘラ磨き	橙	良好	砂粒含	
口—横ナデ 底—ヘラナデ	ヘラ磨き	明赤褐	不良	砂粒 スコリア含	
底—ヘラ削り		明赤褐	不良	砂粒含	
口—横ナデ 胴—ナデ	ヘラ磨き	橙	普通	砂粒含	ほぼ完形

	番号	種類	法量 (口径×器高×底径) cm cm cm	最大径 cm	器形の特徴
	9	坏 (土師)	15.3×5.7×—	口縁部	口縁部は直線的に外反した後，内彎気味に外傾する。口唇部は尖る。
	10	坏 (土師)	15.3×—×—	口縁部	口縁部はやや強く外反し，体部との境に稜をもつ。体部は弧状を呈する。
	11	坏 (土師)	14.6×—×—	口縁部	口縁部は緩やかに外反し，体部との境に稜をもつ。体部は弧状を呈するものと思われる。
第七十一号住居址（図122）	1	甕 (土師)	21.9×—×—		胴部はあまりふくらまず，口縁部は受口状を呈する。
	2	甕 (土師)	21.6×—×—		口縁部はほぼ受け口状を呈し，肩部に明瞭な稜をもつ。
	3	鉢 (土師)	24.0×13.9×7.6	口縁部	口縁部は受け口状を呈し，平底で体部は緩やかに内彎して立ち上がる。
	4	甕 (土師)	23.0×—×—		口縁部は受け口状を呈し，強く外反する。胴部は僅かにふくらむ。底部欠損。
	5	甕 (土師)	12.1×—×—		頸部は内傾し，口縁部は受け口状を呈し強く外反する。肩部に明瞭な稜をもち，胴部は直線的に開く。
	6	小型甕 (土師)	12.6×—×—		頸部で器肉を薄くし，口縁部は外反する。体部は緩やかに内彎しながら立ち上がる。底部欠損。
	7	高台付坏 (須恵)	10.6×5.0×6.2		体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がり口縁端部は丸く収めている。
	8	坏 (須恵)	11.2×3.5×7.5		体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部は鋭い稜をなす。
	9	高台付坏 (須恵)	—×—×9.4		
	10	蓋 (須恵)	17.2×3.6×—		天井部は径11cmに渡って回転ヘラ削りを施し，やや偏平な擬宝珠状のツマミを付けている。口縁部は若干内下方へ向け，端部は丸くおさめている。丁寧な作りである。
	11	蓋 (須恵)	16.5×—×—		天井部は径12cmに渡って回転ヘラ削りが施されている。口縁部は断面三角形状で端部はやや内傾し，下端にはにぶい稜をなしやや突出する。
	12	坏 (須恵)	14.3×4.8×8.2		体部はわずかに器厚を減じながら直線的に外上方へ立ち上がる。口縁端部はにぶい稜をなす。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
口—横ナデ 胴—ヘラ削り後ナデ	ヘラ磨き	赤褐	不良	砂粒含	
口—横ナデ 胴—ヘラ削り	口—横ナデ 胴—ナデ	橙	普通	砂粒含	
口—横ナデ	ヘラ磨き	口—黒 底—明赤褐	不良	砂粒含	
口—指ナデ 胴—ヘラナデ	口—指ナデ 胴—ヘラナデ	にぶい赤褐	不良	砂粒 長石 石英含	
口—指ナデ 胴—ヘラ削り	口—指ナデ 胴—ヘラナデ	にぶい褐	普通	スコリア 長石 砂粒多含	
口—横ナデ 胴—ヘラ磨き	口—横ナデ 胴—ヘラナデ	にぶい褐	普通	砂粒 雲母含	
口—指ナデ 胴—ヘラナデ	口—指ナデ 胴—ヘラナデ	にぶい赤褐	普通	砂粒 長石 雲母含	
口—指ナデ 胴—ヘラナデ	口—指ナデ 胴—ヘラナデ	にぶい橙	普通	長石 石英 雲母 スコリア含	
口—横ナデ 胴—ヘラナデ	口—横ナデ 胴—ナデ	橙	不良	砂粒含	
底部は回転ヘラ削りの後，ほぼ垂直に下がる高台を付けている。体部との境は明瞭に屈曲し，鋭い稜をなしている		灰白		長石粒 細砂粒含	黒色斑点有り
底部は切り離し後，一方からのヘラ削りを行なっている		暗灰黄	良好	長石粒 細砂粒含	水挽き痕はやや強い
底部は回転ヘラ削りの後外下方へややふんばる高台を付けている		灰白	良好	長石粒 細砂粒含	水挽き痕弱
		灰	良好	長石粒 細砂粒含	水挽き痕は弱い
		灰	普通	長石粒 細砂粒含	水挽き痕は弱い
底部は回転ヘラ切りのままである		灰	不良	長石粒 細砂粒 多含	水挽き痕は弱い

	番号	種類	法量 (口径cm×器高cm×底径cm)	最大径	器形の特徴
	13	盤 (須恵)	— く — × 12.8		高台部より上方は，器厚を減じながら大きく外上方へ開く。
	14	坏 (須恵)	14.5×3.6×9.2		体部はほぼ直線的に外方へ開く。体部下端は手持ちヘラ削りで面取りしている。口縁端部はほぼ丸く収めている。
	15	盤 (須恵)	— × — × 15.8		高台部より上方は器厚同じにして，大きく外上方へ開く。体部との境は屈曲し，にぶい稜をなす。
	16	砥石	長さ 6.3 最大幅 3.1		上面は原形面であり，下半部欠損。平坦に切られている。原形は長方体と思われる。表裏・側面とも良く使用されている。磨き面はゆるい内彎を示す。
第七十四号住居址（図126）	1	甕 (土師)	17.0 × — × —	胴部中位	口縁部は直線的に外傾した後，口頸部近くでやや外反する。底部は欠損しているが，胴部はほぼ球状を呈するものと思われる。
	2	甕 (土師)	19.8 × — × —		口縁部は直線的に開き，口頸部近くでさらに外傾する。口頸部は丸い。肩部は張らず，緩やかに内彎する。胴部中位下欠損。
	3	甕 (土師)	17.4×6.9 × —		口縁部はやや外反し，口頸部は平坦である。
	4	鉢 (土師)	9.8×7.3×4.5	体部上位	平底で，底部のみが厚手であり，体部は半球状を呈する。口縁部は中位でやや外傾する。口頸部は尖る。
	5	器台 (土師)	— × — × 6.9		受け部は僅かに内彎し，口縁部でさらに内彎する。受け部孔を有する。
	6	甑 (土師)	19.8 × — × 5.2	口縁部	底部は平底で，中央に孔を有し，体部は緩やかに内彎しながら開く。口頸部はやや尖る。
	8	小型甕 (土師)	— × — × 2.3		平底で，胴部は中位でふくらむ。
	9	手捏ね (土師)	4.1×2.0×3.9	口縁部	平底で，口縁部は直立する。口頸部は尖る。
第七十五号住居址（図128）	1	甕 (土師)	15.4×15.3×4.2	胴部中位	口縁部は器面が凹凸であるが，直線的に外反し，胴部は歪む。平底である。
	2	高坏 (土師)	14.3 × — × —		坏部は僅かに内彎しながら立ち上がり，脚，柱部はほぼ円柱状を呈する。
	3	砥石	厚 幅 長 2.0×2.3×11.2		四面とも良く磨かれ，側面と上下面との接する角はほぼ90°前後である。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
水挽き痕は強く底部は回転ヘラ削り後短かく，外下方へわずかにふんばる高台を付けている	水挽き痕弱	にぶい黄橙	普通	長石粒 細砂粒 雲母含	
底部は手持ちヘラ削り（一方方向からの）を施している			不良	長石粒 雲母末含	水挽き痕はやや弱い
底部は回転ヘラ削り後外下方へふんばる高台を付けている。		灰	良好	長石粒 細砂粒多含	黒色斑点有り
					泥岩
ハケ目整形	ヘラナデ	にぶい橙	普通	砂粒含	
口—指ナデ ヘラナデ	口—指ナデ ヘラナデ	灰白	不良	砂粒 長石 雲母含	
口—指ナデ 頸～胴—ハケ目整形	口—ハケ目整形 胴—指ナデ	橙	普通	砂粒 長石 スコリア含	
ハケ目後ナデ	口—ハケ目後ナデ 胴—ナデ	橙	不良	砂粒含	小形甕
磨き	磨き	灰黄褐	普通	砂粒含	
ハケ目	ヘラナデ	橙	不良	砂粒 長石含	丹彩
ナデ	ナデ	橙	良好	砂粒 雲母含	ほぼ完形
指ナデ	指ナデ	にぶい褐	普通	砂粒 雲母含	完形
口—横ナデ 胴—ヘラ削り	口—横ナデ 胴—ナデ	橙	不良	砂粒含	
坏—ヘラ磨き 脚—縦ヘラ削り	裾—ヘラ削り	にぶい褐	不良	砂粒 長石 石英含	
					金属用砥石である

	番号	種類	法量（口径cm×器高cm×底径cm）	最大径	器形の特徴
第七十七号住居址（図131）	1	壺（土師）	18.8×—×—		頸部はほぼ「く」の字状にくびれ，口縁部に向かってやや直線的に外傾する。口縁部は折り返し口縁で口唇近くで直立する。胴部はやや強く張りだす。
	2	甕（土師）	23.6×—×—		頸部は直立し，口縁部は直線的に開き，口唇部は尖る。胴部は張り出し，器肉は胴部のみ薄い。
	3	坩（土師）	8.8×14.3×4.3	体部中位	口縁部は直線的に外傾し，口唇部はやや平坦である。体部は最大径をもつ中位に向かって張り出し平底の底部に至る。
	4	壺（土師）	8.8×—×—		口縁部はやや外反し，口唇部近くで僅かに内彎する。胴部はやや偏平な球状を呈するものと思われる。底部欠損。
	4	器台（土師）	7.2×7.8×10.0 孔径 0.8		受け部は直線的に開き，口唇部は平坦である。脚部は直線的に開いた後，裾部近くでやや外反する。
	6	支脚（土師）	8.0×16.8×13.7	脚部	体部は直線的に開く。
	7	支脚（土師）	8.2×14.9×13.5	脚部	器厚が一定である。
第七十九号住居址（図136）	1	高台付坏（土師）	14.5×6.9×8.4	口縁部	体部は僅かに内彎しながら立ち上がり，口唇部は丸い。体部と高台の境は丸味をもつ。
第八十一号住居址（図139）	1	椀（土師）	12.6×5.6×—	口縁部	口縁部は外反気味に内傾した後，強く外反する。口唇部は丸い。体部は偏平な半球状を呈する。
	2	坏（土師）	14.0×5.6×—	口縁部	口縁部は直線的にやや外傾し，体部との境に明瞭な稜をもつ。体部は弧状を呈する。
	3	小型壺（土師）	—×—×2.7		体部は緩やかに内彎して立ち上がった後強く内彎する。小さな平底である。
第八十二号住居址（図140(1)・(2)）	1	小型壺（土師）	11.4×—×—		口縁部は僅かに内彎して立ち上がり，口唇部は平坦である。頸部は「く」の字状にくびれる。胴部はほぼ球状を呈するものと思われる。
	2	壺（土師）	20.8×—×—		口縁部は折り返し口縁で，口唇はややくぼむが平坦である。
	3	坏（土師）	9.6×3.9×3.9	口縁部	平底で，体部は直線的に開き，口縁部は内彎しながら大きく開く。
	4	椀（土師）	11.4×5.8×—	口縁部	口縁部は内彎し，口唇部は尖る。口唇部近く内面と，頸部の内外面に稜をもつ。体部は偏平な半球状を呈している。
	5	甕（土師）	19.3×20.6×6.4	胴部上位	口縁部はやや外反気味に立ち上がってから直線的に外傾する。口唇部は平坦である。胴部は上位に最大径をもって張り，平底である。
	6	甑（土師）	23.0×9.0×5.6 孔径 1.5		鉢形の甑。口縁部は折り返し口縁で，体部は僅かに内彎しながら立ち上がる。平底の中央に孔をもつ。
	7	高坏（土師）	19.2×—×—		坏部は僅かに内彎しながら開く。口唇部は平坦である。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
口—横ナデ 胴—ハケ目の後ナデ	口—ハケ目整形 胴—ナデ	にぶい黄橙	良好	砂粒 長石 石英含	
ハケ目整形	ヘラナデ	橙	普通	砂粒含	
口—ヘラ磨き(縦) 胴—ヘラ磨き(横)	口—ヘラ磨き(横) 胴—磨き	橙		砂粒含	
ハケ目後ナデ	口—ヘラナデ 胴—ナデ	にぶい黄橙	普通	砂粒含	
縦位のヘラ磨き	受—ナデ 脚—ハケ目整形の後ナデ		不良	砂粒含	
ハケ目後ナデ	ハケ目	にぶい赤褐	不良	砂粒 雲母含	
ハケ目整形	ハケ目整形	にぶい橙	良好	砂粒	
ロクロナデ	ヘラ磨き（密）	にぶい橙	良好	砂粒含	
		橙	不良	砂粒 スコリア 雲母含	ほぼ完形
口—横ナデ 胴—ヘラ削り	横ナデ		普通	砂粒含	
ヘラナデ	ナデ	にぶい橙	不良	砂粒 雲母含	
ハケ目整形	口—ハケ目後ナデ 胴—ヘラナデ	橙	良好	砂粒含	
口—ハケ目整形 頸—ハケ目の後ヘラ磨き	ハケ目整形の後ナデ	にぶい赤褐	不良	砂粒含	
ヘラナデ	ヘラナデ	にぶい橙	普通	砂粒含	
口—ハケ目後横ナデ 胴—ヘラナデ	ヘラナデ	にぶい橙	普通	砂粒含	ほぼ完形
口—ハケ目の後横ナデ 胴—ハケ目整形	口—ハケ目の後横ナデ 胴—ナデ	にぶい褐	普通	砂粒含	
ハケ目整形（太い）	ナデ	にぶい橙	普通	砂粒 スコリア含	
丁寧なナデ	ヘラ磨き	赤	普通	砂粒 石英含	

	番号	種類	法量 (口径cm×器高cm×底径cm)	最大径	器形の特徴
第八十・二号住居址（図140(1)・(2)）	8	甑（土師）	22.8×11.8×5.4	口縁部	口縁部は折り返し口縁で，口唇部は平坦である。底部は平底で，中央に孔を有する。体部は底部近くで丸味をもつが，後は直線的に開く。
	9	器台（土師）	8.4 ×— ×— 孔径 1.1		受部は内彎しながら立ち上がり，口唇部は丸い。受部孔を有し，脚部は内彎気味に広がる。脚部に円窓が3ヶ所穿たれる。
	10	器台（土師）	7.5×7.8×8.6	裾部	受け部は僅かに内彎し，口唇部は尖る。脚部は直線的に開き，裾部近くで小さく外反する。
	11	高坏（土師）	—× —×8.4(脚) 孔径 1.1		脚部に3つの円窓を有する。脚部は直線的に開いた後，裾部近くでやや外反する。
	12	高坏（土師）	— ×— ×6.8 孔径 0.8		坏部は内彎し，脚部はゆるやかに外反する。脚部に円窓が3ヶ所穿たれている。
	13	高坏（土師）	—×— × 10.3		脚部は緩やかに開く。
	14	支脚（土師）	5.7×13.5×11.3	脚部	体部はほぼ直線的に開く。筒抜けである。
	15	支脚（土師）	5.0×13.3×11.6	脚部	孔をもち，脚部は直線的に開いた後，ほぼ垂直に降りる。
	16	支脚（土師）	— × —×11.0		中位でややふくらむが，底部にかけては直線的におりる。
	17	支脚（土師）	— × —× 12.4		歪みがあるがほぼ直線的である。
第八十四号住居址（図144）	1	支脚（土師）	幅 長さ 6.4×8.2		円柱状を呈す。支脚下半と思われる。下端面は平坦。
	2	支脚（土師）	幅 長さ 5.8×8.6		円柱状を呈す。支脚下半と思われる。上半部欠損。
	3	坏（須恵）	12.8 ×— × —		体部は内彎しつつ外方へ開く。口縁部は外反し，端部は丸く収めている。
	4	坏（須恵）	13.5×4.4×6.1	口縁部	体部はほぼ直線的に外方へ開く。口縁部は外反し，端部はおおむね丸く収めている。
	5	高台付坏（須恵）	12.5×4.8×8.5	口縁部	体部下半に明瞭な屈曲点を有し，やや外彎気味に立ち上がる。口縁部はやや厚みを増し，端部はわずかに鋭さを有する。
	6	坏（須恵）	12.6×4.8×5.8	口縁部	体部はほぼ直線的に外方へ開く。口縁部はやや厚みを増し，端部はやや鋭い。
	7	坏（須恵）	13.6×5.0×5.8	口縁部	体部はわずかに内彎気味に外方へ開く。口縁部は端部を丸く収めている。水挽き痕は弱い。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
ナデ	ナデ	明赤褐	普通	砂粒含	
受—横ナデ 脚—横ナデ	受—横ナデ 脚—ヘラナデ	赤	不良	砂粒含	
ヘラナデ	受—ヘラナデ 脚—ナデ粗	にぶい橙	普通	砂粒 長石含	完形
縦位のナデ	ハケ目整形	明赤褐	不良	砂粒・雲母 長石・石英 スコリア含	
脚—ヘラ磨き	脚—ハケ目整形	橙	不良	砂粒 雲母含	
ヘラナデ	ハケ目整形	赤褐	普通	砂粒 スコリア含	
ハケ目	ヘラナデ	明赤褐	不良	砂粒 雲母含	
ヘラナデ 底—横ナデ	ヘラナデ	明赤褐	普通	砂粒 石英 長石含	完形
ハケ目痕あり	ヘラナデ 輪積痕有り	明赤褐	普通	砂粒 長石 石英 スコリア含	
ハケ目	ヘラナデ	にぶい赤褐	不良	砂粒 長石 石英含	
ナデ		にぶい橙	普通	砂粒 石英含	
ナデ		にぶい赤褐	不良	長石 スコリア含	
水挽き痕，外面はやや強い。底部は回転ヘラ切りのままと思思われる	水挽き痕。内面は弱い	オリーブ灰	普通	長石 砂粒を含む	
底部—回転ヘラ切りの後ナデている		灰	良好	長石 細砂粒含	水挽き痕—やや弱い 二次焼成を受けている
底部は回転ヘラ削り後，外方へやや開く高台を貼りつけている	内面は底部にラセン状の水挽き痕を残し体部との間に屈曲点を明瞭に有する	灰褐	普通	長石・砂粒を含むが精製されている	
底部は切り離し後手持ちヘラ削りを施している	内面は底部と体部との境に強いアテを有する	橙	良好	長石・砂粒を多く含みきめあらい	
底部は回転ヘラ切り後外周をナデている		暗オリーブ灰	普通	長石・砂粒 細砂粒を含む	二次焼成を受けている

	番号	種類	法量（口径×器高×底径）cm cm cm	最大径 cm	器形の特徴
第八十四号住居址（図144）	8	高台付坏（須恵）	15.8×8.9×8.5	口縁部	高台と体部とは鋭い屈曲を有し，体部は器厚を減じながらほぼ直線的に外方へ開く。口縁部はやや外反し，端部は丸く収めている。
	9	坏（須恵）	13.2×－×－		体部はやや直線的に外方へ開く。口縁部は僅かに厚みを増し，丸く収めている。
	10	坏（須恵）	13.6×5.2×5.6		体部は器厚を減じながら，わずかに内彎気味に外方へ開く。口縁部は器厚を増し，大きく外反する。端部は丸く収めている。
	11	勾玉（石製模造品）	長　幅　厚 3.7×1.4×0.3 孔径 0.2		板状であり，表裏・側面とも成形のための擦痕明瞭。
	12	鉄鏃（鉄器）	現全長 5.5 刃部　4.2 ナカゴ 1.3		鉄鏃状の利器と考えられるが，刃部上半が欠損しているため形態不明。ナカゴ部も下半が欠損している。
第八十七号住居址（図149）	1	甕（土師）	15.0×－×－		口縁部はやや内彎気味に立ち上がり口唇部付近に僅かな凹線が廻る。胴部は僅かにふくらむ。
	2	甕（土師）	15.9×－×－		口縁部は受け口状を呈し，胴部はあまり張らない。
	3	坏（須恵）	13.8×5.0×6.7	口縁部	体部は水挽き痕を強く残し，僅かに器厚を減じながら外方へ大きく開く。口縁部は僅かに外反し，端部はおおむね丸く収めている。
	4	坏（須恵）	17.2×4.6×7.2	口縁部	体部は僅かに内彎気味に外上方へ立ち上がる。口縁部は僅かに外反し，端部はほぼ丸く収めている。
	5	高台付坏（須恵）	13.5×6.0×8.6	口縁部	体部は，底部との間に明瞭な屈曲を有し，僅かに外反気味に立ち上がる。口縁部はやや外反し，端部は丸く収めている。
第八十八号住居址（図151）	1	甕（土師）	18.8×－×－	胴部中位	頸部は「く」の字状にくびれ，口縁部は中位で僅かにふくらみ，やや尖った口唇部に至る。胴部は中位に最大径をもち，やや偏平な球形を呈する。
	2	甕（土師）	26.8×－×－		口縁部はほぼ受け口状を呈し，胴部は内彎しながら立ち上がる。底部欠損。
	3	器台（土師）	6.8×－×－		受け部は頸部から僅かに内彎し，口縁部はほぼ直立する。受け部孔を有する。
	4	高坏（土師）	12.1×8.9×9.8	口縁部	受け口は直線的に広がった後，中位から内彎する。口唇部は平坦である。受け部と脚部の境は垂直に立ち上がり，脚部は直線的に開く。
	5	紡垂車（土製品）			

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
底部は回転ヘラ削り後，外下方へ開く高台を貼りつけている		オリーブ灰	やや不良	長石・砂粒細砂粒を含む	水挽き痕は弱い
底部は切り離し後他方向からの手持ちナデ			普通	細砂粒を少量含むが精製されている	水挽き痕はやや弱い
水挽き痕はやや強い。底部は回転ヘラ切り後，外周部をナデている	水挽き痕は弱い内面は底部と体部との境に強いアテを有する	灰黄	不良	長石・砂粒雲母末他不純物多い	須恵質土師器
口—指ナデ 胴—ヘラナデ	口—指ナデ 胴—ヘラナデ	橙	不良	砂粒 長石 石英 スコリア含	
口—指ナデ 胴—ヘラナデ	指ナデ	明赤褐	不良	砂粒 長石 雲母含	
底—回転ヘラ切り		淡黄	不良	長石類 細砂粒含	
底部は切り離し後，手持ちヘラ削りを施している		黄灰	良好	長石類 細砂粒多含	水挽き痕弱
底部は回転ヘラ削りの後，高台を貼り付けている		灰黄	良好	長石類 砂粒含	水挽き痕弱
口—指ナデ 胴—ハケ目後ナデ	口—指ナデ 胴—ヘラナデ	にぶい褐	普通	砂粒	煤付着
口—指ナデ整形（ろくろ使用による） 胴—ヘラ削り	指ナデ（ろくろ使用による）	にぶい黄橙	良好	砂粒含	
受—ヘラ磨き	受—ヘラ磨き 脚—ナデ	赤	良好	砂粒 スコリア含	
受—ナデ 脚—ヘラ磨き	受—ナデ 脚—ハケ目後ナデ	明赤褐	不良	砂粒 長石 石英含	
					40g 破損・摩滅が著しい

	番号	種類	法量（口径×器高×底径）cm	最大径	器形の特徴
第九十二号住居址（図154）	1	壺（土師）	11.3×13.8×—	胴部中位	丸底で，口縁部はほぼ直線的に外反する。胴部は楕円球状を呈する。
	2	小型甕（土師）	12.0×14.5×6.4	胴部中位	口縁部は僅かに外反し，口唇部は丸い。胴部はあまりふくらまず，平底の底部に至る。
	3	壺（土師）	—×—×4.7		底部はくぼみ，胴部はほぼ球状を呈するものと思われる。
	4	坏（土師）	12.0×5.2×—	口縁部	口縁部はほぼ直立し，口唇部近くでやや外反する。体部は弧状を呈する。
	5	坏（土師）	12.4×—×—	口縁部	口縁部は一度やや内傾した後，直線的にやや外傾し，口唇部で明瞭な稜をもつ。体部は弧状を呈する。
	6	椀（土師）	12.8×8.0×—	口縁部	口縁部はやや外反し，体部は深い。丸底で，器肉は薄い。
	7	坏（土師）	14.7×5.0×—	口縁部	口縁部は直線的に開き，口唇部は尖る。体部は直線的である。
	8	椀（土師）	12.6×—×—		口縁部は外反気味に内傾した後，やや外反する。体部は半楕円球状を呈するものと思われる。
	9	坏（土師）	15.3×5.8×—	口縁部	口縁部は一度直立した後，やや外反する。口縁部と体部との境に稜をもち，体部は弧状を呈する。
	10	高坏（土師）	21.2×—×—		坏部は僅かに内彎し，稜をもった後，口縁部は外反する。
	11	高坏（土師）	—×—×—		坏部は僅かに内彎しながら立ち上がり，脚柱部は短かい。
	12	手捏ね（土師）	3.6×2.4×2.0	口縁部	底部はくぼむ。体部は僅かに内彎しながら立ち上がる。
	13	刀子（鉄器）	幅 長 1.1×3.8		刃部をもつ利器とみられるが，先端部を欠損しているため明瞭ではない。柄部断面は偏楕円形を呈する。先端部の丸味はサビによるもの。
	14	不明（鉄器）	長さ 4.3 刃部幅 1.1 ナカゴ 1.0		内彎刃をもつ刃器とみられる。先端部欠失。
第九十三号住居址（図156）	1	甕（土師）	21.8×—×—		口縁部は大きく外反し，口唇部が突出している。胴部は中位でふくらむ。
	2	坏（土師）	13.6×—×—	口縁部	口縁部は垂直気味に立ち上がってから，やや強く外反し，体部との境に稜をもつ。体部は弧状を呈する。
	3	坏（土師）	15.5×—×—		口縁部は外反気味に内傾した後，やや外反する。口唇部は尖る。口縁部と体部の境に稜をもつ。
	4	甑（須恵）			口縁端部は方形に作られ，わずかに内彎気味に内下方につぼまる。体部上半部には2方向に把手が付く。 底部は㊉形になると思われ，端部は丸く収めている。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
胴—ヘラナデ	口—ヘラ磨き 胴—ナデ	橙	不良	砂粒含	ほぼ完形
口—横ナデ 胴—ヘラナデ	ナデ	明赤褐	普通	砂粒含	
ヘラ磨き	ヘラ磨き	にぶい褐	良好	砂粒含	
口—横ナデ 胴—ヘラ削り	口—横ナデ 胴—ヘラ磨き	明赤褐 外胴—にぶい黄橙	良好	砂粒	ほぼ完形 丹彩
口—横ナデ 底—ヘラ削り後ナデ	ヘラ磨き	明赤褐	不良	砂粒含	
口—横ナデ 底—ヘラ削り	口—横ナデ 底—ヘラ磨き	橙	良好	砂粒 長石 石英含	
磨き	磨き	橙	良好	砂粒含	完形
口—指ナデ 底—ヘラ削り	ヘラ磨き	明赤褐	良好	砂粒含	
口—横ナデ 底—ヘラ削り	ヘラ磨き	明赤褐	普通	砂粒含	ほぼ完形
口—横ナデ 以下—ハケ目後ナデ	ヘラ磨き	にぶい橙	普通	砂粒 石英・雲母 長石含	
坏・脚—磨き	坏・脚—磨き	明赤褐	良好	砂粒 雲母 長石含	
指ナデ	指ナデ	褐	普通	砂粒	
口—指ナデ 胴—（上）ナデ （下）ヘラ磨き	口—指ナデ 胴—ナデ	灰黄褐	良好	砂粒 長石 石英含	胴部中～下は煤付着
口—指ナデ 底—ヘラ削り	ヘラ磨き	橙	普通	砂粒 石英含	
口—指ナデ	磨き	明赤褐	不良	砂粒含	
体部下半から端部にかけてはやや斜め方向にヘラ削りを行なっている。体部下端は横方向のヘラ削りを行なっている。	内面には粘土紐まき上げ痕が残り粗な整形である。粘土紐の幅は，2cm前後である		不良	長石粒 細砂粒多	

	番号	種類	法量（口径cm×器高cm×底径cm）	最大径	器形の特徴
第九十三号住居址（図156）	5	坏（須恵）	13.5×4.6×6.7	口縁部	体部は僅かに内彎気味に外方へ開く。口縁部は若干外反し，端部は丸く収めている。
	6	坏（須恵）	14.0×4.7 ×—		体部はほぼ直線的に外方へ開く。口縁部はわずかに鋭さを残す。全体的につくりが丁寧で，水挽き痕は残さない。
	7	坏（須恵）	14.0×4.5×8.0	口縁部	体部は水挽き痕を強く残しながら，ほぼ直線的に外方へ開く。口縁端部はわずかに鋭さを残す。
	8	砥石	長 幅 厚 16.0×9.0×2.9	最大幅	上下面はほぼ平坦に磨かれ，側面はゆるい内彎気味にカーブしている。
	9	鉄斧（鉄器）	長 幅 厚 4.7×3.7×1.5		鉄板を折り曲げた柄を着装する部分と考えられる。刃部は欠損しており，機能不明。
第九十四号住居址（図158）	1	甕（土師）	14.6×19.3×9.4	胴部中位上	平底で，胴部は中位上で最大径をもつ。
	2	甕（土師）	16.4×4.0 ×—		口縁部は短かく，僅かに外反する。胴部は僅かにふくらむ。
	3	坏（土師）	14.0×4.4×6.2	口縁部	平底で，体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり，口唇部は肥厚でやや丸い。
	4	坏（須恵）	14.8×4.7×6.8	口縁部	体部は直線的に開いた後，口唇部近くで外反する。口唇部は丸い。平底である。
	5	坏（土師）	15.3×4.8×7.3	口縁部	体部は直線的に開き，口唇部は丸い。平底である。
	6	坏（須恵）	14.0×4.3×6.2	口縁部	体部は若干内彎気味に大きく外方へ開く。口縁部はやや外反し，端部はやや鋭い。水挽き痕は弱い。
	7	坏（須恵）	13.8×4.7×6.8	口縁部	体部は底部との間に段を有し，器厚を減じながら直線的に外方へ大きく開く。口端部はわずかに外反し，端部は丸い。体部下半の外周には細かい水挽き痕を強く残す。
	8	高台付坏（須恵）	—×4.7×7.0		体部下半に回転ヘラ削りを施している。体部は内彎しつつ外方へ開く。
	9	坏（須恵）	13.2×4.8×6.5	口縁部	体部は底部との間に明瞭な屈曲を有し，わずかに内彎気味に外方へ大きく開く。口縁部は若干外反し，端部は丸く収められている。
	10	坏（須恵）	14.2×4.5×6.2	口縁部	体部は直線的に大きく外方へ開き，立ち上がる。口縁部はやや器厚が厚くなり，端部は丸く収められている。
	11	坏（須恵）	14.0×4.9×7.0	口縁部	体部はやや内彎気味に大きく外方へ開く。口縁部は丸く収めている。水挽き痕はやや強く残っている。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
底部は雑な回転ヘラ切りのままである		灰オリーブ	良好	長石 砂粒 細砂粒含	
底部は回転ヘラ切りの後，丁寧にナデている		灰黄褐	良好	長石・砂粒細砂を多く含が全体のきめは細かい	
底部は回転ヘラ切りの後わずかにナデている	内面は底部と体部の境にやや強いアテを有する	にぶい黄褐	良好	長石等 細砂粒含	器面が内外ともにザラザラで手ずれ痕が認められず
					安山岩
口—ヘラナデ 胴—ヘラ削り	ヘラナデ	にぶい赤褐	普通	砂粒含	
口—指ナデ 胴—ヘラ削り	口—指ナデ 胴—ナデ	にぶい橙	不良	砂粒 雲母含	
					内黒 水挽き痕弱
ミズビキ痕	ミズビキ痕	にぶい橙	不良	砂粒 スコリア含	
ミズビキ痕	ミズビキ痕	にぶい橙	普通	砂粒 スコリア含	ほぼ完形
底部は回転ヘラ切りのままで底径は小さい		灰オリーブ	不良 焼成時のヒビ割れが底部に有り	長石粒 細砂粒含	水挽き痕弱
底部は回転ヘラ切りの後，手持ちヘラナデ 水挽き痕弱	水挽き痕は弱い	灰オリーブ	良好	長石等の 細砂粒含	
底部は回転ヘラ削りの後，外下方へ開く高台を貼り付けている		灰	普通	長石等の 細砂粒含	水挽き痕弱
底部は回転ヘラ切りのままである。水挽き痕はやや強い	内面は底部と体部の境に強いアテが認められる	灰	良好	長石等 砂粒多含	水挽き痕弱
底部はほとんど切り離しのままで小さい			不良	長石粒等，不純物が多くきめ粗い	水挽き痕弱
底部は回転ヘラ切りのままである	内面は底部と体部との境が不明瞭である		不良 土師質須恵器状を呈する	長石 細砂粒多含	

	番号	種　類	法　量 (口径×器高×底径) cm　cm　cm	最大径	器形の特徴
	12	坏 (須恵)	14.6×4.6×6.2	口縁部	体部は底部との境に段を有し，少し内彎気味に大きく外方へ開く。口縁端部は丸く収めている。
	13	砥石	長　幅 5.3×3.4		正面はよく磨かれている。上下面も磨かれている。
第九十五号住居址（図160）	1	壺 (土師)	8.4 ×— × —		口縁部はやや外反し，口唇部は内傾する。
	2	壺 (土師)	11.5 ×— × —		頸部で直立した後，口縁部は直線的に開き，口唇部近くで水平に近くなる。
	3	台付甕 (土師)	12.8 ×— × —	口縁部	口縁部は折り返し口縁で，口唇部は中央でくぼむがやや平坦である。胴部は中位に最大径をもつ。底部欠損。
	4	壺 (土師)	10.5 ×— × —		口縁部は僅かに外反し，胴部は球状を呈するものと思われる。
	5	壺 (土師)	10.4 ×— × —		口縁部は外反し，口唇部は丸い。胴部は強く張り出す。
	6	甕 (土師)	21.8 ×— × —		口縁部は外反し，肩部は強く張る。
	7	甕 (土師)	16.2 ×— × —		口縁部はやや外反し，口唇部は平坦である。胴部はややふくらむ。底部欠損。
	8	壺 (土師)	— × —× 6.6		平底で，胴部は僅かに内彎しながら大きく開く。
	9	坩 (土師)	12.9 ×— × —		頸部は「く」の字状にくびれ，胴部は張る。
	10	坩 (土師)	— × —× 3.2		平底で，まろやかに内彎しながら立ち上がる。
	11	手捏ね (土師)	4.4×2.3×3.7	口縁部	平底である。
	12	手捏ね (土師)	5.0×2.5×3.8	口縁部	体部はほぼ直立し，口唇部は尖る。平底である。
	13	手捏ね (土師)	5.1×2.7×3.6	口縁部	体部は直線的に開き，口唇部は尖る。平底である。
	14	羽口 (土製品)	長さ 10.8 径　5.4 内径 1.8		円柱状を呈し，中央に孔を有す。端部は焼けて鉱滓付着。
	15	坏 (須恵)	12.8×4.2×7.8	口縁部	体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。口縁端部はややにぶい稜を呈する。
	16	蓋 (須恵)	21.8×4.7 × —	口縁部	天井部はやや丸味をもち，径14cmに渡って回転ヘラ削りを施し，擬宝珠状のツマミを付けている。口縁部端部はほぼ垂直で両端は丸く収めている。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
底部は回転ヘラ削りを施されている			普通	長石類等，細砂粒多含	体部に墨書有り 水挽き痕弱
口—指ナデ 胴—削り後ナデ	ナデ	にぶい橙	普通	砂粒含	
口—ヘラ削り 胴—ヘラ削り後ナデ	口—ヘラナデ 胴—ナデ	にぶい橙	普通	砂粒含	
口—指ナデ 胴—ハケ目整形	口—ハケ目整形 胴—ナデ	にぶい橙	普通	砂粒 スコリア含	
口—たてにナデ 胴—削り	ナデ	橙	良好	砂粒 雲母含	
口—ハケ目ナデ（タテ） 胴—ヘラ削り	口—ハケ目後ナデ 胴—ナデ	橙	普通	砂粒含	
口—指ナデ 胴—ハケ目後ナデ	口—指ナデ ヘラ削り	明赤褐	不良	砂粒 長石 雲母含	
		明黄褐	普通	砂粒 スコリア含	
ヘラナデ	ヘラナデ	浅黄褐	不良	砂粒 長石 石英含	
	口—指ナデ	褐	不良	砂粒含	
胴—ヘラナデ 底—ヘラ削り	ヘラナデ	橙	普通	砂粒 長石含	
指ナデ	指ナデ	褐灰	普通	砂粒含	完形
指ナデ	指ナデ	赤灰	普通	砂粒含	ほぼ完形
指ナデ	指ナデ	にぶい橙	普通	砂粒含	完形
		暗灰 中・下—浅黄橙	普通	砂粒 長石 石英含	
底部は回転ヘラ切りのままで，体部との境はあまり明瞭でない		灰白	良好	長石粒 細砂粒含	水挽き痕弱
		灰白	不良	長石粒 細砂粒含	水挽き痕弱

	番号	種　類	法　量 (口径×器高×底径) cm cm cm	最大径	器形の特徴
第九十七号住居址（図163）	1	高台付椀 (須恵)	17.8×7.8×11.2	口縁部	体部はわずかに外方へ伸びた後，大きく屈曲し，ほぼ直線的に上方へ立ち上がる。口縁端部は丸く収めている。
第二号井戸状遺構（図169(1)・(2)）	1	坏 (土師)	12.5×4.2×5.8	口縁部	平底体部は緩やかに内彎し，口唇部は丸い。
	2	坏 (土師)	12.6×5.4×6.0	口縁部	平底体部は直線的に開き，口唇部は丸く肥厚である。
	3	坏 (土師)	13.5 × — × —		平底。体部は内彎しながら立ち上がり，口唇部近くで器肉がぐっと薄くなり口唇部は丸く肥厚である。
	4	盤 (須恵)	17.0×3.2×9.0	口縁部	口縁部との境はにぶい稜ではあるが明瞭に屈曲している。口縁部はわずかに外反し，端部は丸く収めている。
	5	盤 (須恵)	— × — × 9.5		水挽き痕は弱く丁寧な作りである。
	6	曲物 (木器)	長　幅　厚 9.4×9.0×0.8		ほぼ完形に近い円形の蓋で，柾目の板材を用いている。両面を鉋(やりがんな)で整え，縁端から幅1cm，厚さ0.5cmほど周縁を薄くし，側板と曲物本体を木皮で固定している。綴孔は4孔である。側板の厚さは0.3cm，幅2cmほどで，両端を重ねて両端2個所を木皮で綴じ合せている。
	7	曲物 (木器)	長　幅　厚 8.5×8.4×1.1		柾目の板材を用い，両面を鉋（やりがんな）で整え円形に作っている。縁端から幅1cm，厚さ0.5cmほど周縁を薄くし，木皮で側板を固定していたと思われる。綴孔は5孔確認することができる。（復原では7孔と思われる）
	8	(木製品)	長　幅　厚 39.5×13.0×3.2		木材を鋭利な刃物で裁断したままのものである。何に使用したものか不明であるが，裁断面に磨滅痕がある。
	9	(木製品)	長　幅　厚 49.8×5.8×1.6		木材は著しく腐蝕し凸凹している。木口から約5cmの位置に長径6.5cm，短径3.0cmほど表裏に貫通して不整形に枘穴風の加工が施されている。また一方の木口には長辺9.7cm，短辺4.0cmほどの方形を呈する切り欠き部か枘穴の破損したものか不明の加工痕がある。
	10	(木製品)	長　幅　厚 42.7×9.4×3.0		木材を鋭利な刃物で裁断したままのものである。裁断面に用途不明であるが摩滅痕がある。
第三号井戸状遺構（図171）	1	坏 (須恵)	14.0×4.5×7.2	口縁部	体部は器厚を減じながらわずかに内彎気味に大きく外上方へ開く。口縁部はわずかに外反をみせ，端部は丸くおさめている。
	2	坏 (須恵)	13.8×4.8×6.8	口縁部	ロクロ回転（時計廻り）

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
底部は低い引き出し高台を有する		にぶい褐	不良 土師質須恵器状である	長石・砂粒を少量含み比較的精製されている	水挽き痕弱
					水挽き痕は弱い
底部は回転ヘラ削りの後外方へふんばる高台を付けている			良好	長石粒 細砂粒多含	水挽き痕は弱く丁寧な作りである
底部は回転ヘラ削りの後外方へふんばる高台を付けている			良好 （赤焼きで土師質須恵器）	長石粒，細砂粒を少量含むが比較的精製されている	
底部は回転ヘラ切りの後外周部をナデている		灰オリーブ	普通	長石粒多含	水挽き痕弱
外面—回転によるナデ。	内面—回転によるナデ	褐灰	上部—不良 下部—普通	石英・長石類の小石・砂粒含	底部下面に11印のヘラ記号有り

	番号	種類	法量 (口径×器高×底径) cm cm cm	最大径	器形の特徴
第二号井戸状遺構（図171）	3	盤（須恵）	16.5×3.4×11.0	口縁部	口縁部はやや外反し，端部は丸く収めている。底部は丸味を持つ。底部外周部はやや外反し，にぶい稜を呈する。口縁部との境に至る。
	4	高台付坏（須恵）	14.4×6.0×8.2	口縁部	底部と体部とは屈曲によって明瞭であるが，屈曲部附近を焼成後研磨して面取りしている。体部はほぼ直線的に外上方へのびる。口縁端部はやや鋭さを残している。
	5	高台付坏（須恵）	—×—×5.0		体部は器厚を減じながら直線的に外へ立ち上がる。体部との境は屈曲し，明瞭な稜をしている。
	6	高台付坏（須恵）	—×—×8.6		
	7	高坏（須恵）	—×—×—		坏部は丸味をもって口縁部に至る。脚部の円筒部は細くしぼり，裾部は大きく外方へ開くと思われる。
第一号方形周溝遺構（図174）	1	甕（土師）	18.8×—×—		頸部から「く」の字に直線的に外反する。
	2	壺（土師）	—×—×8.5		底部は上げ底。 胴部は球形。 全体に薄手で成形が丁寧。
	3	甑（土師）	—×—×7.3 孔径 1.3		
	4	器台（土師）	8.1×—×—		受け部は直線的に外傾した後，口縁部で直立し，口唇部は尖る。受け部孔を有している。
	5	甕（土師）	13.4×14.2×5.2	胴部中位	底部は平底で中央が若干上げ底状。胴部は横に張る球形。頸部は「く」の字状に括れる。口縁部は外反する。器厚はほぼ一定しているが口縁部のみ厚みがあり，端部は丸い。
	6	坩（土師）	9.7×17.0×5.0	胴部中位	底部はやや上げ底。胴部はほぼ球形。頸部は「く」の字状に括れる。口縁部は直線的に外反し，口唇部はやや鋭くなる。器厚は全体的に薄手である。
	7	手捏ね（土師）	—×—×2.5		厚みのある平底から直立して立ち上がり，外面は直角に内彎して底部との境は不明瞭。口縁端部は平坦。
	8	紡錘車	上面径 器高 下面径 4.0×2.7×5.0 孔径 0.5		土製，円錘台形で，成形は比較的丁寧。中央に貫通孔を有し，円孔周縁に若干の擦痕が認められる。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
回転ヘラ削りの後，短かく外方へふんばる高台が貼り付けられている。	重ね焼きの痕跡がみられる。	緑灰	良好	長石粒 細砂粒多含	水挽き痕弱 高台内側に焼成時の焼き割れがみられる。
底部は回転ヘラ削りの後，わずかに外方へ開く高台を貼り付けている。		にぶい橙	普通	長石含	水挽き痕弱
底部は回転ヘラ削りの後，外方へふんばる高台を貼り付けている。		暗青灰	良好	長石粒 細砂粒含	水挽き痕弱
底部が回転ヘラ削りの外は回転を利用したナデ（横ナデ） ロクロ回転（時計廻り）	内面は入念	にぶい橙	不良 （生焼け）	石英・長石類等の砂粒を含むが，かなり精製されている	底部下面に1印のヘラ記号有り。焼きが甘いこともあるがかなり手ずれ痕あり。
坏部下部は回転ヘラ削りを行なっていると思われるが灰緑色の吹き出し釉が斑点状に付着しているため明瞭でない。		灰	良好	長石粒 細砂粒含	水挽き痕弱
口—指ナデ	口—指ナデ	にぶい黄橙	不良	砂粒含	
ヘラ磨き	ヘラナデ	にぶい橙	不良	砂粒 雲母含	
ヘラ削り	ヘラナデ	にぶい黄褐	良好	砂粒 石英含	
口—指ナデ ヘラ削り	口—指ナデ ヘラナデ	橙	良好	砂粒（多） スコリア含	
口—指ナデ ハケ目	ナデ	にぶい橙	不良	砂粒 雲母 長石含	ほぼ完形
ヘラ磨き	胴—ヘラナデ後磨き	明赤褐	普通	砂流 雲母 長石含	作りは全体に丁寧であるが，器形に歪みあり
ヘラ削り	指圧痕	赤褐	普通	砂粒含	
					80g

	番号	種類	法量（口径×器高×底径） cm cm cm	最大径	器形の特徴
	9	勾玉（石製模造品）	長さ 5.0 最大幅 3.4 厚さ 0.5		板状。両面，側縁とも成形時の擦痕あり。片面に3mm方眼前後の凹みをもつ。
第九号土壙（図167）	1	壺（土師）	14.1×—×—		肩は丸味をもち，頸部は「く」の字に括れ，直線的に外傾する口縁部は上位で折り返しとなり，折り返し部はやや鋭くなっている。
	2	坩（土師）	11.8×6.8×2.2	口縁部	平底は若干上げ底気味。胴部は半球形に近い。頸部は若干括れ，口縁部は直線的に外傾し，口唇部は丸い。
第十号土壙（図167）	3	甕（土師）	17.7×—×—		肩部はなだらかな内傾で頸部に至り，頸部は直立し，中位から若干外反し，口唇部は丸味をもつ。
	4	甕（土師）	15.9×—×—	胴部下位	輪積の痕か？表面に凸凹がある。
	5	壺（土師）	13.8×—×—		肩部はやや張り，丸味がある。頸部は直立し，上位で外反する。口唇部の器厚は変化せず平坦。
	6	甕（土師）	14.5×—×—		胴部からなだらかに内彎して頸部に至り，頸部は直立し中位から外反する。口唇部は肉厚のままで端部はやや丸味をもつ。
	7	坏（土師）	15.4×6.3×—	口縁部	体部は弧状で，若干括れ，口縁部は外反して開く。口縁端部はやや器厚を減じるが丸味をもつ。
第十一号土壙（図167）	8	坏（土師）	12.6×5.4×—	口縁部	やや偏平な弧状。頸部は若干の段を有し口縁部は直線的に外傾して立ち上がり，口唇部はわずかに尖がる。
第四十二号土壙（図167）	9	甕（土師）	12.6×—×—	胴部中位	胴部はほとんど膨らまず，頸部の括れは「く」の字を呈し，口縁部は外反して，口唇部は平坦である。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
					完形
口—ナデ 頸部—ハケ目	口—ナデ	にぶい黄橙	普通	砂粒 石英 スコリア含	
口—ハケ目整形 の後ナデ 胴—ハケ目整形 の後ヘラナデ 底—ヘラ削り	口—ハケ目整形 の後ナデ 胴—ヘラナデ	にぶい橙	普通	砂粒 少含	
口—ナデ 胴—ナデ	口—ナデ 胴—ヘラナデ	橙	普通	砂粒 スコリア含	
口—ナデ 胴—削り後ナデ	口—ナデ 胴—ヘラナデ	にぶい橙	不良	砂粒 石英 雲母（白） スコリア含	
口—ナデの後ヘ ラ磨き 胴—ヘラ削りの 後ナデ	口—ナデの後ヘ ラ磨き 胴—ナデ	にぶい橙	普通	砂粒 スコリア含	
口—ナデ後ヘラ 磨き 胴—ヘラ磨き	ナデ	にぶい橙	良好	砂粒含	
口—横ナデ 胴—削り	口—磨き 胴—磨き	外—にぶい橙 内—橙	良好	砂粒含	完形
口—ナデ ヘラ削り	ヘラ磨き	橙	普通	砂粒 スコリア含	
胴—ハケ目調整	ヘラナデ	橙	普通	砂粒 スコリア含	

表3　大塚新地遺跡住居址一覧表

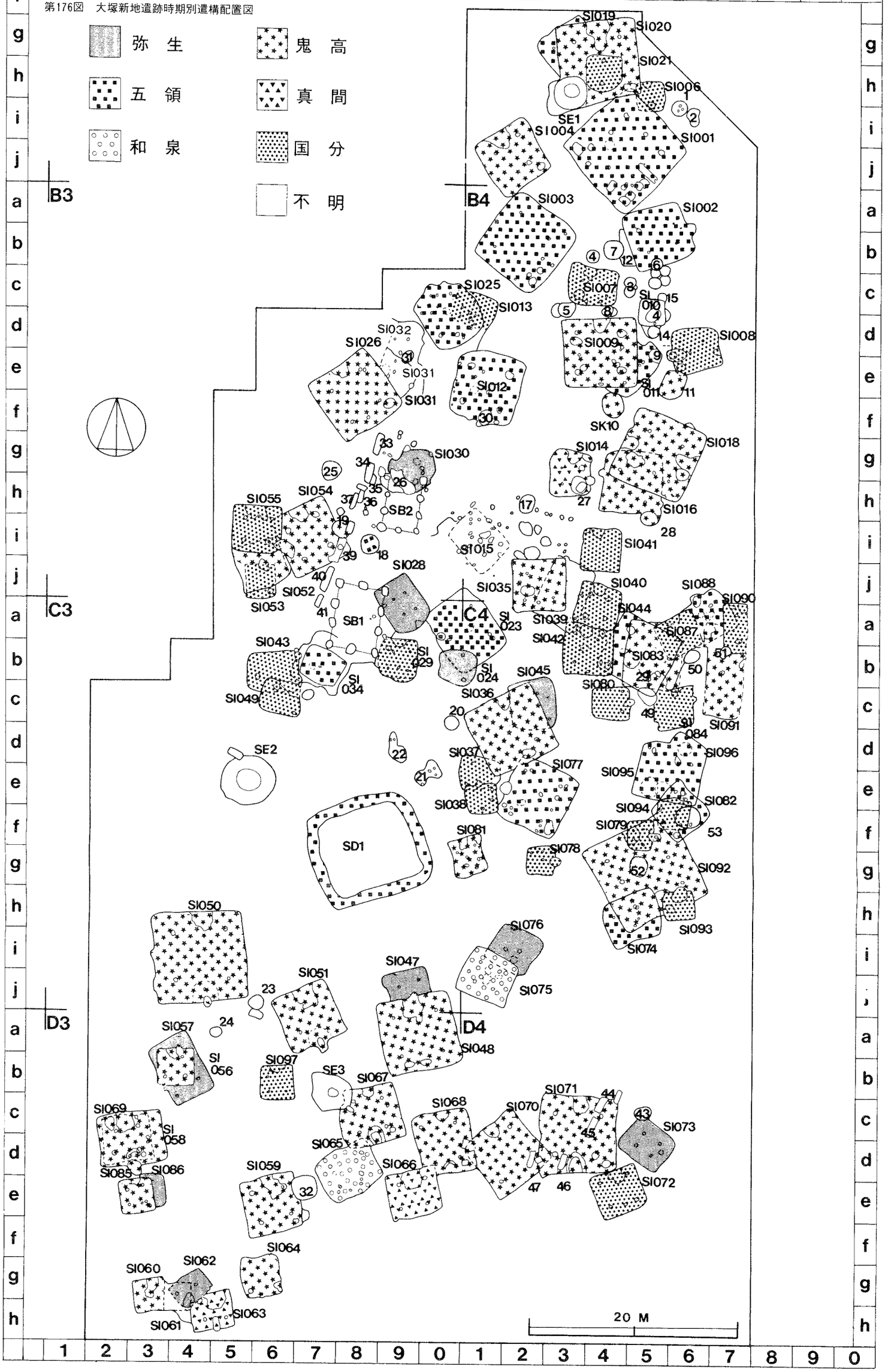
遺構	位置	形態	長軸×短軸 m m	面積 ㎡	壁高 cm	主軸方向	炉 カマド	柱穴	貯蔵穴	出土遺物	時期	備考
001	A3i4	隅丸正方形	8.85×8.83	63.8	53～72	N－47°－E	炉	8	3	土師(壺,坏) 砥石,勾玉	五領	壁溝・火災
002	B4b5	隅丸方形	5.56×5.32	23.7	50～61	N－70°－W	炉	4		弥生　鉄製品 土師(坩,坏,器台,壺,甑)	五領	壁溝・火災
003	B4b2	隅丸正方形	7.35×7.28	43.9	45	N－38°－E	炉	5	1	土師(壺,甑,坏,坩 土玉) 砥石	五領	壁溝・火災
004	A4j2	隅丸正方形	5.68×5.60	26.7	60	N－30°－W	カマド	4	1	土師(甑,坏,壺) 炭化材	鬼高	壁溝・火災
006	A4h5	隅丸正方形	2.83×2.74	5.9	25	N－9°－W	カマド	1	1	須恵(坏)	国分	壁溝
007	B4c3	隅丸長方形	4.46×3.30	14.5	25～31	N－30°－E	カマド	3	1	土師(坏,手捏) 須恵(坏) 弥生(紡錘車)	国分	
008	B4d6	隅丸方形	4.57×4.24	17.3	18～34	S－75°－E	カマド	2	1	土師(甑) 鉄製品	国分	壁溝
009	B4d4	隅丸長方形	6.90×6.35	39.0	40～50	N－1°－W		4		土師(坏,土玉,支脚)砥石	鬼高	壁溝・火災
010	B4c5	隅丸方形	2.45×2.55	7.8	36～23	N－1.5°－W	カマド	4		砥石		
011	B4e5	隅丸長方形	4.80×4.40		30	N－45°－E	カマド	2		土師(甕小,支脚,器台)砥石	五領	
012	B4e1	隅丸長方形	6.52×6.32	22.4	18～36	N－16°－E	炉	4		土師(椀)	五領	壁溝
013	B4d1	方形	3.32×2.98	8.67	15	N－18°－E	カマド			土師(坏)	国分	
014	B4g3	隅丸正方形	3.90×3.70	17.0	32～45	N－1.5°－W	カマド	4			真間	
015	B4a1	隅丸方形	6.30×4.98	20.0	26～11	N－44°－W	炉			青銅鈴		
016	B4h4	正方形	5.88×5.84	31.0	32	N－6°－E	カマド	4		土師(坏,甕,甑手捏,盤)須恵(坏,盤,円硯)	鬼高	南部中央部に土壙あり火災
017	B4i2	不明	不明			不明	炉			土師(台付甕片) 土製勾玉の弥生式土器片	不明	
018	B4g5	隅丸長方形	7.30×7.05	46.6	30～65	N－63°－W	カマド	4	東コーナー1	土師(甑,甕,高坏,坏)須恵(蓋,坏)	鬼高	壁溝・火災
019	A4g3	隅丸長方形	5.13×4.80	22.7	30	N－34°－W		1		土師(坏)	五領	
020	A4g4	正方形	7.96×7.90	48.3	36～70	N－7.5°－W	カマド	3	1	墨書土器 鉄製品	鬼高	壁溝・火災
021	A4h4	長方形	3.28×3.03	6.2	15	N－10°－E	カマド		1	須恵(甕,坏,蓋) 鉄製品	国分	
023	C3a0	隅丸長方形	7.08×5.86	34.7	26～42	N－34°－W	炉	4		土師(台付甕,飾器台)	五領	
024	C3b0	隅丸長方形	3.60×2.93	5.3	40～50	N－2°－E	不明	1		弥生(壺) 石製模造品	弥生(長岡系)	
025	B3d0	隅丸長方形	5.85×5.53	29.5	15～30	N－36°－W	炉	4		土師(壺,甕,支脚,坏,高坏,器台)	五領	
026	B3f8	隅丸正方形	6.82×6.81	38.4	75～100	N－38°－W	カマド	4	1	土師(坏,坩,甕小,器台,鉢,甕)砥石	鬼高	火災
028	C3a9	隅丸長方形	5.03×3.70	15.0	15～40	N－34°－W	炉	4	1	弥生99片 石	弥生	
029	C3b9	方形	3.98×3.35	11.4	?	N－3°－E	カマド			須恵器片 砥石	国分？	
030	B3g9	円形	4.22×3.45		20～37	N－1°－E	炉	4		弥生51片,石6 須恵63片,鉄1	弥生(長岡系)	

遺構	位置	形態	長軸×短軸 m m	面積 ㎡	壁高 cm	主軸方向	炉 カマド	柱穴	貯蔵穴	出土遺物	時期	備考
031	B3e9	隅丸方形	不明	不明	不明	N－31°－E	炉				不明	
032		隅丸方形	不明	不明	不明	N－25°－E	炉			弥生式土器片，須恵器片，石・土師器片，土玉	不明	
034	C3b7	隅丸長方形	3.96×3.18	11.1	36	N－63°－W	炉			土師(甕) 弥生(壺)	五領	
035	B4j2	隅丸正方形	5.07×5.05	21.1	24～56	N－92°－W	カマド	4	南西コーナー1	土師(甕，甑，高坏，坏，椀，壺) 砥石，鉄鏃	鬼高	壁溝・火災
036	C4d2	正方形	7.08×6.92	43.5	53～60	N－25°－W	カマド	4		土師(甕，椀，坏，甑，提，高坏) 石製品(勾玉)	鬼高	壁溝・火災
037	C4e1	隅丸長方形	4.30×3.37	8.55	39	N－88°－W	カマド			須恵(坏，墨書土器) 土師(高台付坏)	国分	壁溝
038	C4e1	隅丸長方形	3.04×2.81	6.0	60	N－5°－W	カマド			須恵(坏)	国分	壁溝
039	B4j3	長方形	6.50×4.10	24.5	38	N－26°－E					不明	壁溝
040	C4a4	隅丸正方形	4.15×4.00	13.5	34～85	N－18.5°－E	カマド	4		土師(壺) 刀子(鉄器) 須恵(高台付坏)	国分	
041	B4i4	長方形	4.20×3.85	11.0	27～65	N－6°－E	カマド	4		須恵(坏) 土師(台付坏) 滑石製(紡錘車)	国分	
042	C4a4	正方形	4.79×4.82	20.0	45～55	N－4°－E	不明	4	1	須恵(坏，蓋) 土師(甕)	国分	
043	C3b6	隅丸長方形	4.79×4.82	12.3	40～45	N－85°－E			1	土師(高台付坏，皿) 須恵(盤) 砥石	国分	壁溝
044	C4a5	隅丸正方形	6.55×6.45	37.3	45～60	N－71°－W	炉址	4		土師(小型坏，高坏，台付甕) 鉄鏃片，砥石	五領	壁溝
045	C4c2	隅丸方形	4.99×4.41	17.6	30～34	N－12°－W		2		弥生(壺)	弥生(十王台式)	
047	C3j9	隅丸長方形	4.93×4.00	19.2	20	N－8°－W	炉	2		土師(坏，高坏，甕) 砥石	弥生後期	壁溝・火災
048	D3a9	隅丸長方形	7.21×7.02	43.6	60	N－10°－W	カマド	4	2	土師(坏，椀，甕，甑) 砥石	鬼高	火災
049	C3c6	隅丸長方形	4.02×3.09	7.8	45	N－14.5°－E	カマド		1	土師(坏，皿) 墨書土器 須恵(坏，甕)	国分	壁溝
050	C3i4	隅丸正方形	9.01×9.00	65.8	50	N－3°－W	カマド	4		土師(甕，甕，壺，坏，埦)	鬼高	壁溝
051	D3a7	隅丸方形	5.70×5.60	25.9	35～45	N－27°－W	カマド	4		土師(鉢，坏，椀，甕支脚) 砥石	鬼高	壁溝・火災
052	B3j6	隅丸正方形	4.46×4.35	17.6	40	N－112°－E	カマド	1	1	土師(坏，甕)	鬼高	
053	B3j6	隅丸長方形	3.70×3.10	10.1	10～52	N－2°－W	カマド	1	1	須恵(長頸壺) 鉄製品，砥石	国分	
054	B3i7	隅丸正方形	5.96×5.94	33.0	50	N－31°－W	カマド	4		土師(椀，坏，甕) 刀子(鉄製品) 須恵，長頸壺	鬼高	壁溝・火災
055	B3i5	隅丸正方形	4.83×4.70	18.5	72	N－0°－	カマド	4		須恵(蓋，坏) 土師(鉢，支脚)	国分	壁溝
056	D3b4	隅丸正方形	3.55×3.50	9.9	35	N－3°－W	カマド	4		土師器片 須恵器片，砥石	鬼高	壁溝
057	D3b4	隅丸長方形	6.30×4.20	25.1	17	N－30°－W		2		弥生式土器片 石	弥生後期(長岡系)	
058	D3c3	長方形	6.25×5.10	26.0	40～50	N－82°－E	カマド	4	1	土師(甑，甕，椀，坏)	鬼高	壁溝・火災
059	D3e6	長方形	5.42×5.25	26.5	22～56	N－18°－W	カマド	4	1	土師(甑，甕，壺，高坏，坏，鉢) 紡錘車	鬼高	火災

遺構	位置	形態	長軸×短軸 m m	面積 ㎡	壁高 cm	主軸方向	炉 カマド	柱穴	貯蔵穴	出土遺物	時期	備考
060	D3g3	長方形	3.15×2.72	8.5	10～15	N－8°－W	カマド			土師(坏, 甕, 鉢)	鬼高	
061	D3h4	長方形	2.90×2.60	7.8	20～25	N－9°－W	カマド			土製品(紡錘車) 弥生式土器片 須恵器片	不明	
062	D3g4	長方形	3.97×2.70	6.4	20～25	N－49°－E	炉址	2		弥生式土器片, 石	弥生	
063	D3h5	隅丸 長方形	4.18×3.70	14.4	23～31	N－10°－W	カマド	3		土師(甕, 坏) 須恵器片 鉄製品(刀子)	真間	
064	D3g6	隅丸 正方形	3.88×3.80	12.8	12～22	N－101°－W	カマド		1	土師(坏, 椀) 紡錘車(石製)	鬼高	火災
065	D3d8	隅丸 長方形	5.22×4.84	21.2	16～35	N－31.5°－W	炉	4		土師(坩, 高坏)	和泉	壁溝・火災 炭化材
066	D3e9	隅丸 長方形	4.74×4.45	18.5	45	N－8°－W	カマド	4		土師(甕, 坏) 須恵(坏)	真間	壁溝・火災 炭化材
067	D3c8	隅丸 長方形	5.82×5.63	29.3	23～39	N－16°－W	カマド	4	1		鬼高	火災
068	D3d0	正方形	5.26×5.11	23.8	44～50	N－11°－W	カマド	4	1	土師(甑, 鉢, 甕, 壺 坏, 椀)	鬼高	壁溝・火災
069	D3d2	正方形	4.73×4.67	20.24	?	N－71°－E	カマド	4			不明	
070	D4d2	正方形	6.50×6.21	36.0	26～55	N－38°－W	カマド	3	1	土師(坏, 椀) 土玉, 砥石	鬼高	壁溝・火災
071	D4c3	隅丸 長方形	7.67×7.40	47.6	55～72	N－2°－E	カマド	4	1	土師(坏, 甕, 高坏)	鬼高	壁溝・火災
072	D4e4	隅丸 長方形	4.65×4.39	16.6	50	N－2°－W	カマド	4		須恵(坏) 砥石 土師(鉢, 小型甕, 支脚)	国分	壁溝
073	D4d5	隅丸 長方形	4.83×3.92	17.2	21～29	N－56°－W	炉址	5		弥生式土器片	弥生 (長岡系)	
074	C4h5	隅丸 方形	5.55×4.50	23.5	15～30	N－68°－E	炉址	2		土師(壺, 坏, 器台, 鉢)	五領	
075	C4j1	正方形	4.92×4.60	21.6	16～31	N－68°－W	炉	4	1	土師(壺, 高坏) 砥石	和泉	火災
076	C4i2	正方形	4.35×4.15	16.9	15～26	N－62.5°－W	炉址	2		弥生14片 石4 砥石	弥生後期 (十王台よ り古式)	
077	C4e2	隅丸 方形	6.53×6.25	37.2	15～26	N－27°－E	炉址	4	1	土師(坩, 支脚, 器台, 壺)	五領	壁溝・火災 炭化材
078	C4g2	隅丸 正方形	2.70×2.65	5.3	35	N－91°－E	カマド	1		須恵器片	国分	壁溝
079	C4f5	隅丸 長方形	2.81×2.50	6.1	28～37	N－89°－E	カマド	4		土師(高台付坏) 布目瓦, 須恵器片	国分	
080	C4c4	隅丸 長方形	3.80×3.15	11.1	40	N－86°－E	カマド	2		土師(坏) 砥石, 須恵器片	国分	
081	C4g1	隅丸 長方形	3.66×3.11	9.8	14～18	N－13°－W	カマド	4		土師(椀, 坏)	鬼高	壁溝
082	C4f6	隅丸 正方形	4.62×4.50	18.7	20～30	N－44°－W	炉	2	1	土師(器台, 支脚, 甕, 壺, 甑, 椀, 坏, 高坏) 砥石	五領	
083	C4b5	隅丸 方形	6.40×6.35	38.1	50	N－8°－E	カマド	3		須恵(坏, 盤, 高坏) 土師(甕) 鉄製品(鎌)	鬼高	壁溝・火災
084	C4c6	長方形	3.90×3.75	12.1	55～60	N－5°－W	カマド	1		須恵(坏) 土師(支脚) 刀子, 勾玉, 砥石	国分	火災
085	D3e3	正方形	3.30×3.23	9.5	17～32	N－9°－W	カマド	4		土師器片 須恵器片	鬼高	
086	D3e3	隅丸 長方形	3.32×2.41	6.7	25	N－3°－W				弥生式土器片	弥生 (十王台よ り古式)	

遺構	位置	形態	長軸×短軸 m m	面積 ㎡	壁高 cm	主軸方向	炉 カマド	炉穴	貯蔵穴	出土遺物	時期	備考
087	C4a6	正方形	4.10×3.90	14.4	45	N−3.5°−E	カマド			須恵(坏) 土師(甕)	国分	
088	C4a6	正方形	4.90×4.75	21.3	40	N−55°−E	炉址			土師(甕, 高坏, 器台) 砥石 土製品(紡錘車)	五領	
089	C4a7	不明					カマド			墨書土器	不明	
090	C4a7	㊟隅丸正方形	㊟ 4.73×4.70	20.3	35	N−5°−W	カマド	2		須恵(坏, 甑) 土師器片 鉄製品(刀子)	国分	壁溝
091	C4c7	長方形	6.40×3.57	19.0		N−3°−E	カマド	2		土師(坏) 砥石, 須恵器片 鉄製品(刀子)	鬼高	周溝
092	C4g5	正方形	9.15×9.10	77.4	42〜68	N−16°−W	カマド	6		土師(壺, 坩, 坏, 椀高坏, 小甕) 鉄製品(刀子)	鬼高	入口施設あり
093	C4h6	隅丸長方形	3.00×2.60	7.0	10〜38	N−4°−W	カマド			須恵(坏, 甑) 墨書土器 土師(坏, 甕) 砥石	国分	
094	C4f6	隅丸長方形	2.93×2.72	6.8	58	N−1.5°−E	カマド			土師(坏, 甕) 砥石, 須恵(坏) 鉄製品(斧)	国分	北西の位置に壁溝
095	C4e6	隅丸長方形	6.20×5.80	33.3	32〜48	N−9°−E	炉址	3		土師(坏, 壺, 台付甕) 石器, 砥石 鉄製品(刀子)	五領	
096	C4d6	長方形	3.80×3.50	11.8	35〜50	N−26°−E	不明				不明	
097	D3b6	正方形	3.42×3.26	9.8	36〜48	N−2°−E	カマド	3		須恵(鉢) 土師(甕)	国分	

第176図　大塚新地遺跡時期別遺構配置図



第4節　ま　と　め

本遺跡は，西側の谷津田に面した標高34.0m ～36.4m ほどの緩やかに傾斜する台地の縁辺部に遺構が集中している。確認された遺構は,竪穴式住居址94軒,土壙50基,井戸状遺構３基,掘立柱建築址２基，方形周溝遺構１基である。

弥生式時代に比定される住居址は10軒ほどであり,その内遺構・遺物の良好な状態で出土したのは第24号住居址と第73号住居址のみである。他の住居址は新しい遺構と複合して検出されている。住居址の中で，円形の形態を呈する住居址は第30号住居址で他は方形の住居址である。
方形の住居址の中で隅丸方形の住居址は４軒である。住居址からの出土遺物は第24号住居址を除いて破片のみで量は少ない。第２号住居址の五領期と思われる遺構の床面から弥生式土器（十王台式土器）を出土している。　第34号住居址の北側から弥生時代の壺棺が出土し，その中から人骨と思われるものを検出しており，弥生時代中期に比定されるものと思われる。長岡系に比定されると思われる土器を出土している住居址は４軒で，十王台式土器を出土している住居址は１軒であり，破片のみではっきりと時期決定はできないが，十王台式土器よりも古い形式と思われる土器片を出土している住居址は３軒である。その他弥生式土器の細片のみ出土しており，時期不明の住居址が２軒である。

古墳時代五領期に比定される住居址は16軒で，他に土壙２基，方形周構遺構１基である。その内,遺構,遺物とも良好な状態で検出された住居址は第１号住居址,第２号住居址,第３号住居址,第12号住居址，第23号住居址，第77号住居址である。他は新旧の住居址と複合している。五領期に比定される住居址は第１号住居址（8.85m ×8.83m ）のように大型で，長辺が約５m 以上の住居址が11軒を数える。これらの竪穴式住居址では炉址を有し，調査区の北部から中部にかけて多く検出されている。

和泉期に比定される住居址は南部に2軒ほど検出されている。住居址の規模はどちらも長辺が５m内外の方形の住居で床のほぼ中央に炉址を有し，柱穴は４個所確認されている。出土遺物は，土師器，壺，高杯，坩と砥石などで量は多くない。

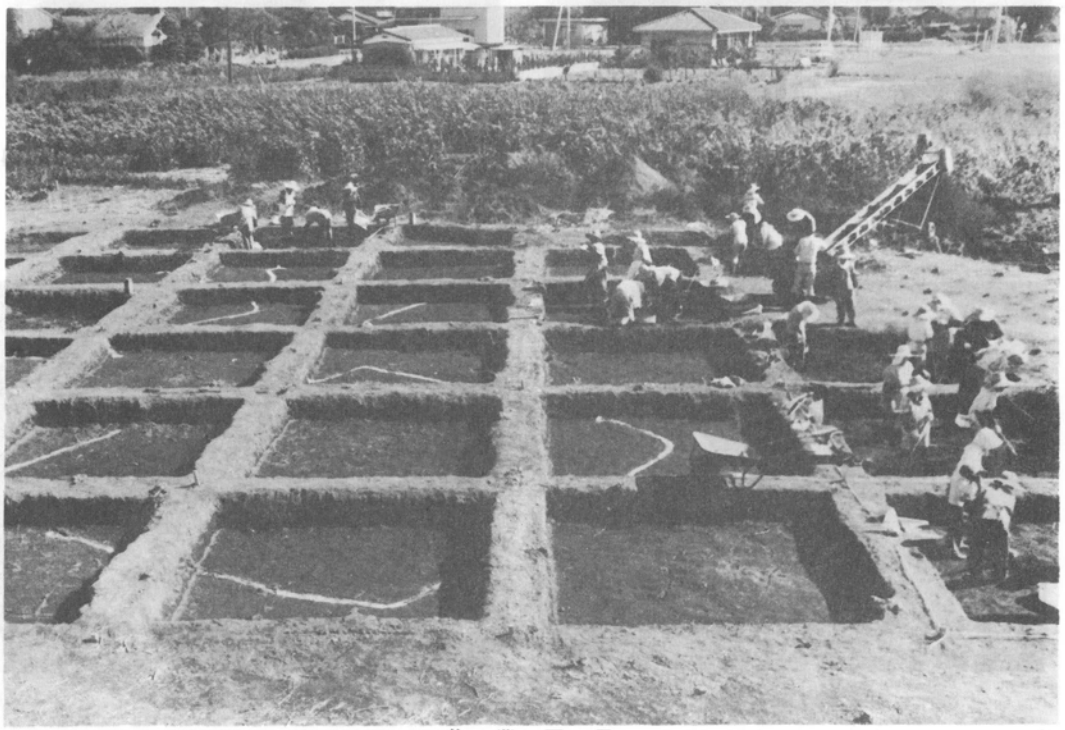
鬼高期に比定される住居が28軒を数え，全住居址中の約30%を占めている。鬼高期の住居址は主に北壁の中央部にカマドを有し，長辺が約５m を超える住居址が21軒と，大型の住居址が多い。他は長辺が５cm以下の住居址が７軒検出されている。　時期が新しくなるにしたがって大型の住居址が構築され，鬼高期の終末になると長辺が５m 前後の住居址が構築されている。鬼高期に比

定される。住居址は調査区全体に分布しているが，中部から南部にかけて時期の新しい住居址が多く分布している。この時期の住居址には，南壁中央付近に出入口の施設と思われる一段高いベルトが半周し，その中心部に土壙を有している。そのような住居址が，8軒検出されて，これらの住居址は大型で，土壙に壁溝が連結されて，雨水等が流れ込むような工夫がなされていたと思われる。鬼高期の第8号・第16号・第26号・第35号・第54号・第91号・第92号住居址などからは鍛冶と関係のある羽口，鉄滓や刀子など鉄製品を出土している。石製の勾玉などの模造品を出土している住居址は，第4号・第14号住居址で，土製・石製の紡錘車を出土している住居址は第16号・第36号・第64号・第70号住居址である。　鬼高期の住居址で，新と旧の2期に分離するとすれば，古い時期の住居址は第12号・第18号・第52号・第58号・第59号・第64号第67号・第68号・第70号・第71号・第81号・第91号・第92号住居址と13軒を数え，その内でも第12号・第18号住居址が最も古い時期の住居址と思われる。新しい時期の住居址は第4号・第9号・第16号・第20号・第26号・第35号・第36号・第47号・第48号・第50号・第51号・第54号・第60号住居址の13軒であり，ほぼ同数をかぞえる。第56号・第85号住居址は時期決定の出土遺物は少なく　破片のみであるが，鬼高期の範疇に入るものと思われる。これらの住居址からの出土遺物は鬼高期になり急激に多くなってくるように思われ，土師器は壺，甕，甑，坏，高坏，坩，鉢，椀，器台，手捏，支脚などを出土し，特に甕，甑，坏などの出土量が多い。加えて須恵器の出土量も多くなり，甑，坏などを多量に出土している。第16号住居址からは須恵器の硯の残欠を出土している。

真間期に比定される住居址は調査区の中央部に1軒，南部に2軒ほど検出され，規模は，長辺が4m内外の小型の住居址で，北壁にカマド有し，柱穴は4個所検出され，土師器の甕や坏と，須恵器の坏等を共伴している。国分期のどの住居址も北壁中央部にカマドを有し，長辺が3.0～2.0mの住居址が4軒，長辺が4.0～3.0mの住居址が9軒，長辺が5.0～4.0mが12軒検出されている。中規模以下の住居址が多く，鉄製品を出土している住居址は6軒，石製紡錘車を出土している住居址が1軒，石製模造品を出土している住居址が1軒である。

大塚新地遺跡全体を通じて，遺構の検出量・遺物の出土量も多く，弥生時代から，古墳時代，奈良平安時代と長期にわたって，当時の人々の生活の場であったことを物語っている。そして，人々の生活の基盤は台地西側の沖積低地にあったと思われる。

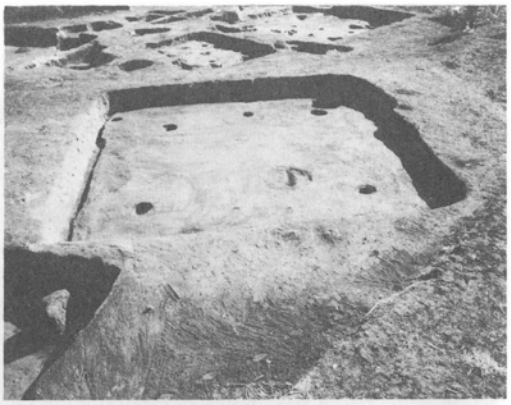
遺　跡　全　景　1



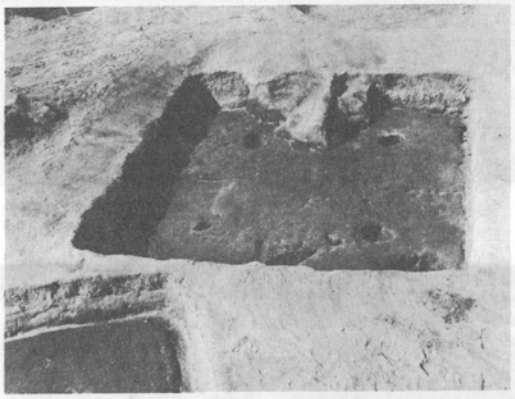
作　業　風　景　2

写1　大塚新地遺跡作業風景

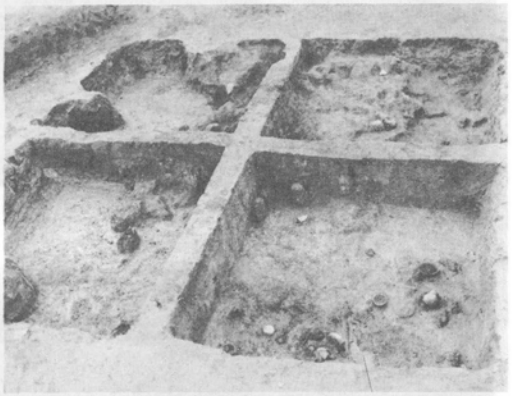
第 1 号住居址　1



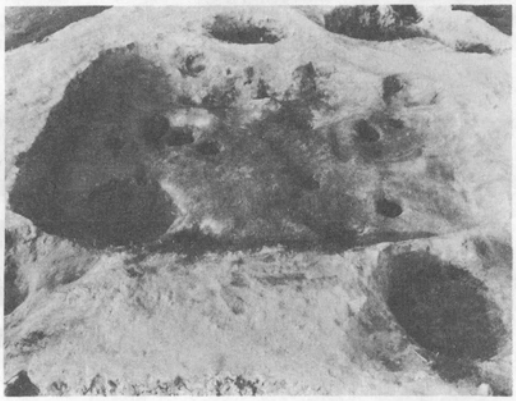
第 3 号住居址　2



第 4 号住居址　3



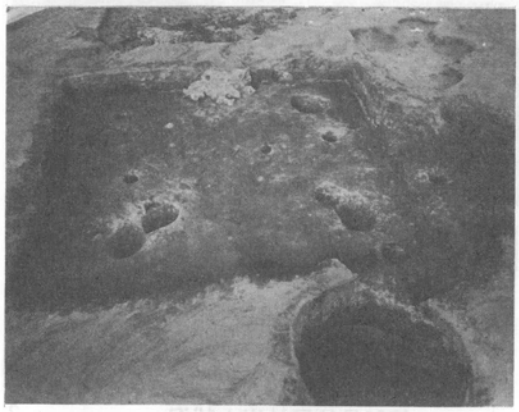
第 4 号住居址出土状況　4



第 7 号住居址　5

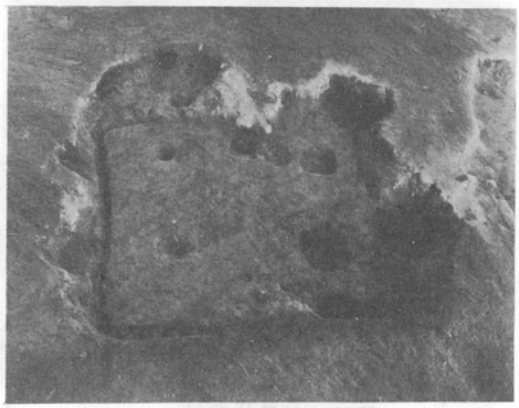
第 8 号住居址　6

写 2　大塚新地遺跡竪穴住居址

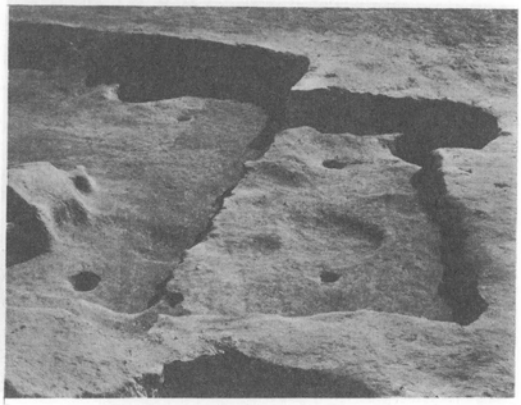


第９号住居址　1

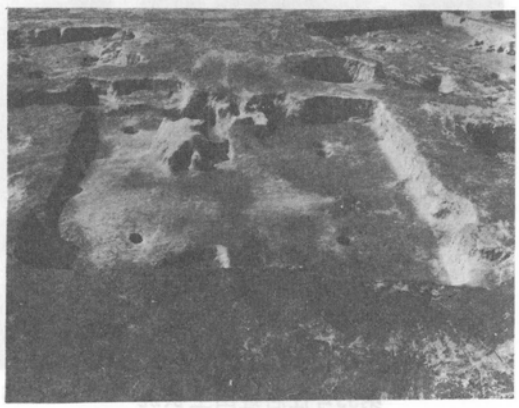
第12号住居址　2



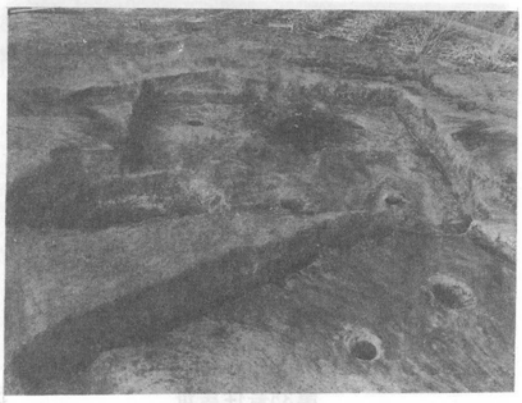
第14号住居址　3



第16号住居址　4

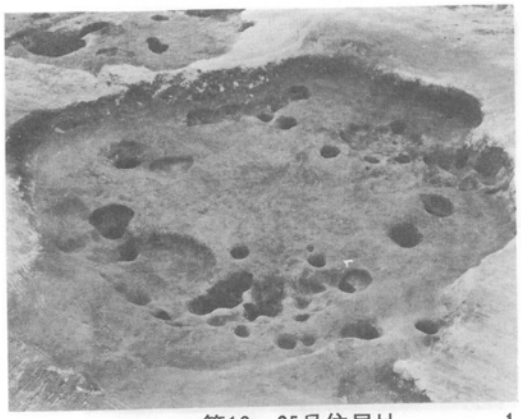


第18号住居址　5

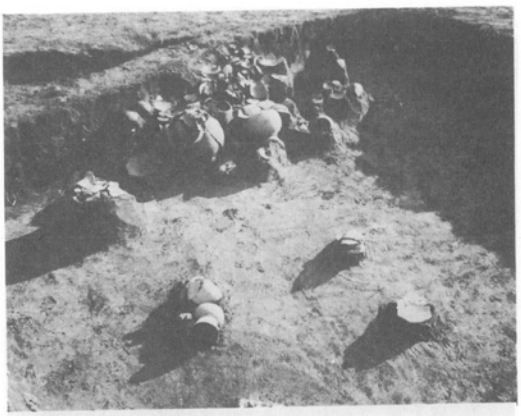


第20号住居址　6

写３　大塚新地遺跡竪穴住居址

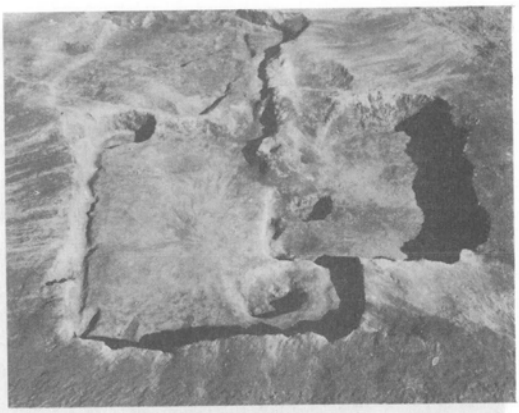


第13・25号住居址　1

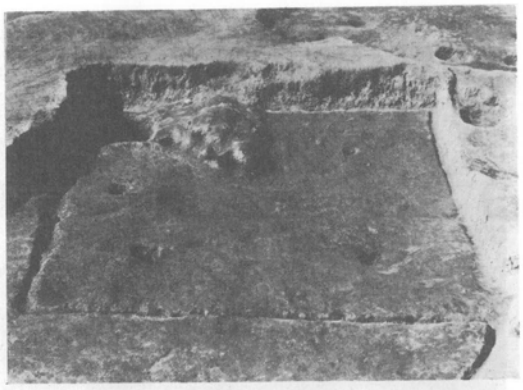


第25号住居址出土状況　2

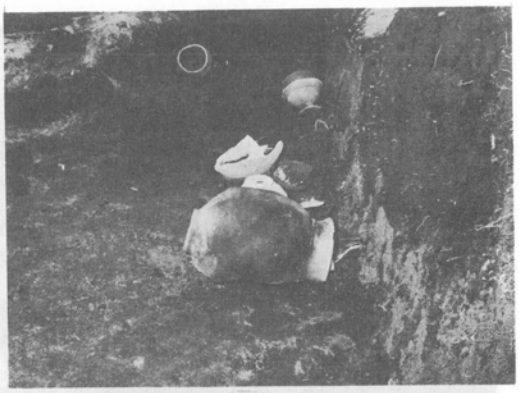
第26号住居址出土状況　3



第43・49号住居址　4



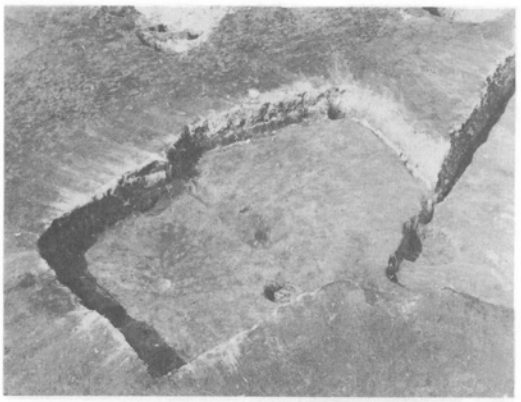
第35号住居址　5



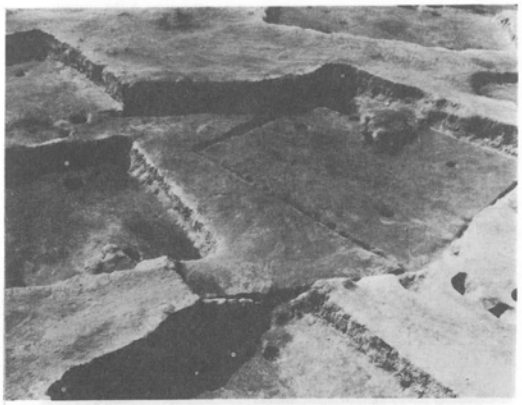
第35号住居址出土状況　6

写4　大塚新地遺跡竪穴住居址

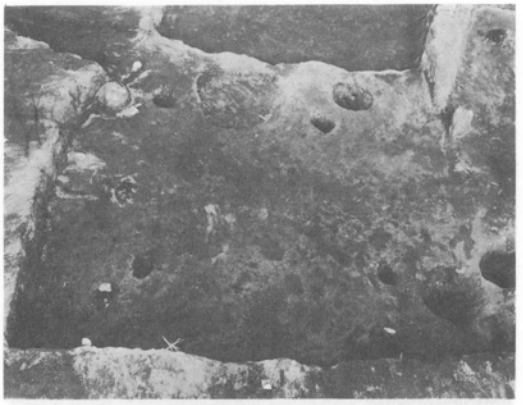
第36・45号住居址　1



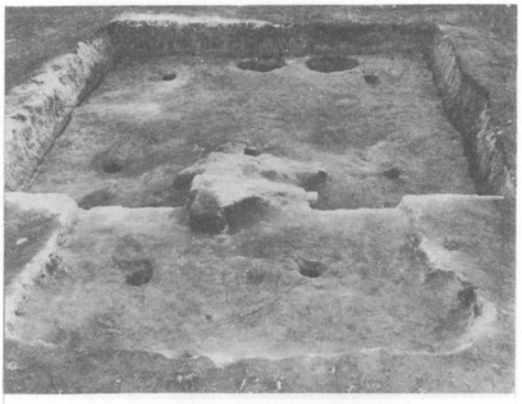
第38(左)・37号住居址　2



第39号住居址　3



第42号住居址　4

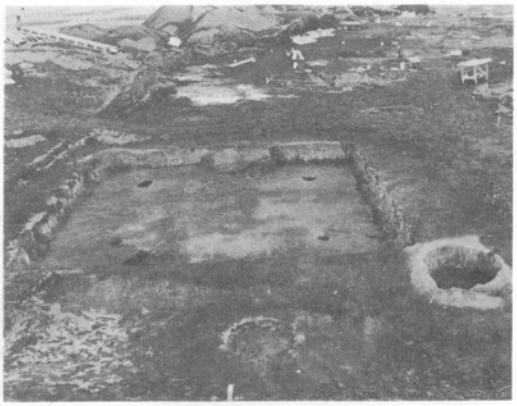


第47(手前)・48号住居址　5

第45号住居址出土状況　6

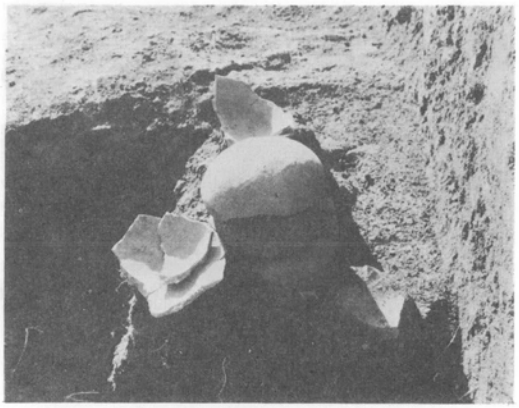
写5　大塚新地遺跡竪穴住居址

第49号住居址出土状況　1

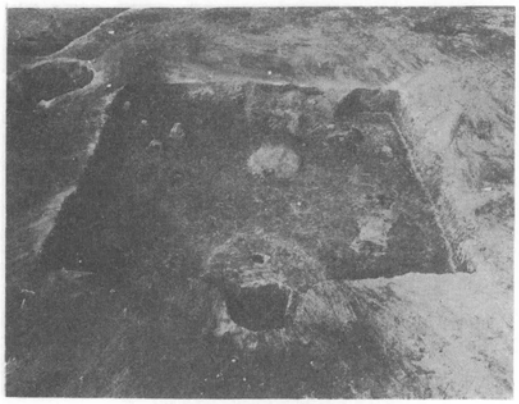


第50号住居址　2

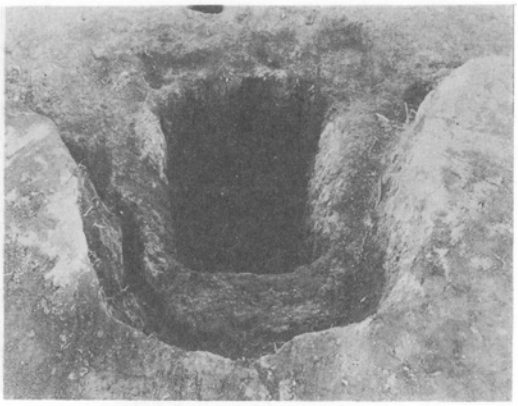
50号 住居址出土状況　3



第50号住居址カマド内出土状況　4

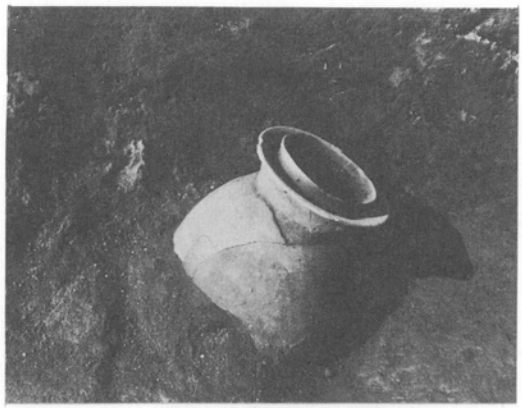


第51号住居址　5

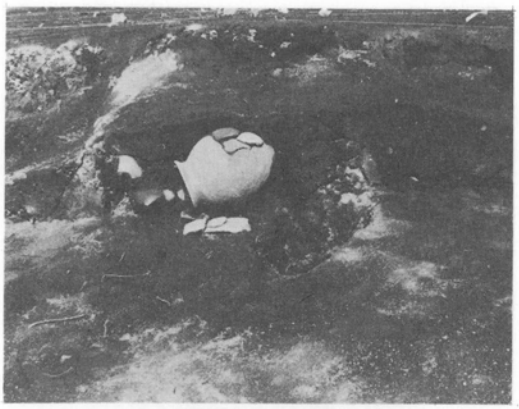


第51号住居址ピット　6

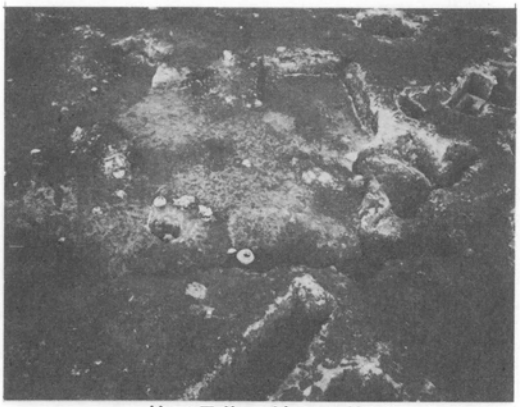
写 6　大塚新地遺跡竪穴住居址



第51号住居址出土状況　1



第51号住居址カマド内出土状況　2



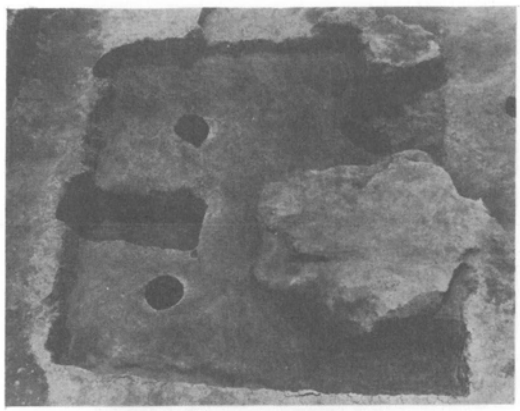
第52号住居址出土状況　3

第56(内側)・57号住居址　4

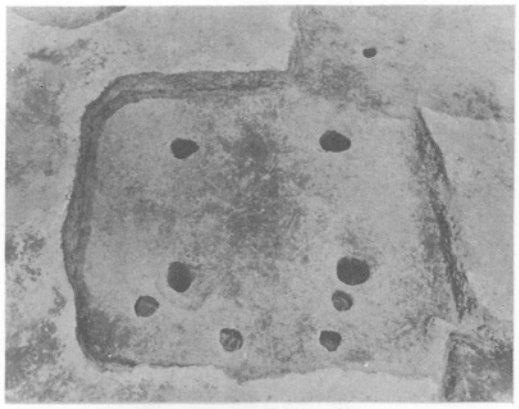
第58号住居址　5

第60号住居址　6

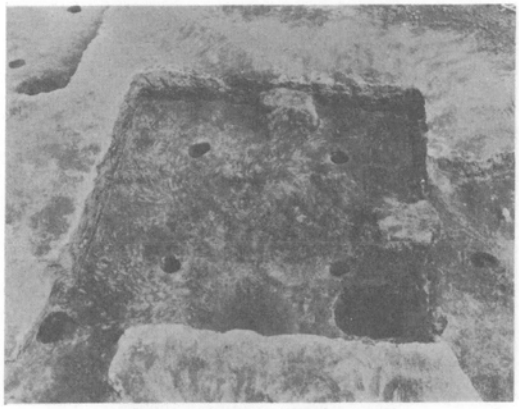
写7　大塚新地遺跡竪穴住居址



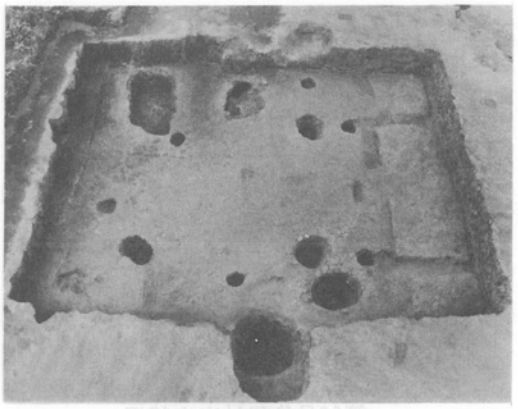
第63号住居址　1



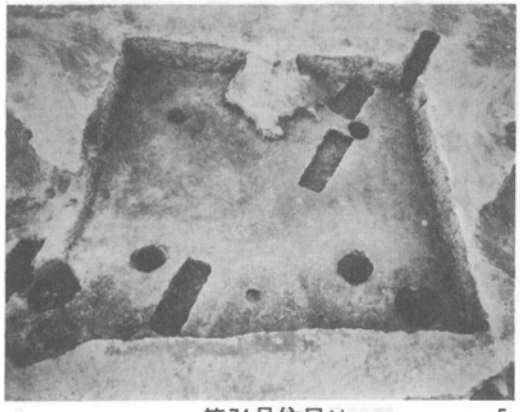
第65号住居址　2



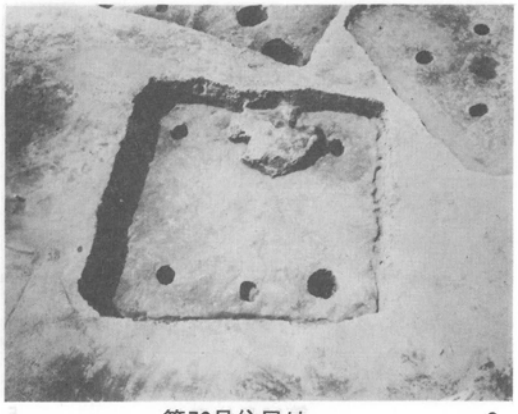
第68号住居址　3



第69号住居址　4



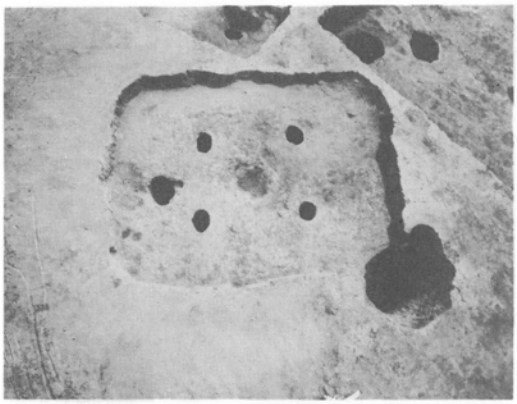
第71号住居址　5



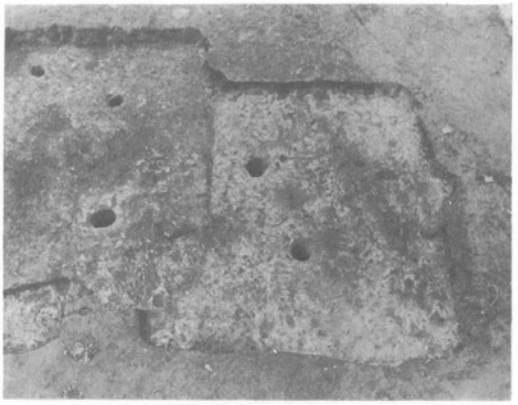
第72号住居址　6

写 8

大塚新地遺跡竪穴住居址

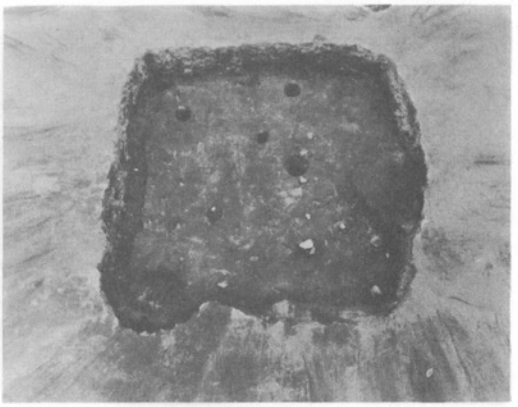


第73号住居址　1

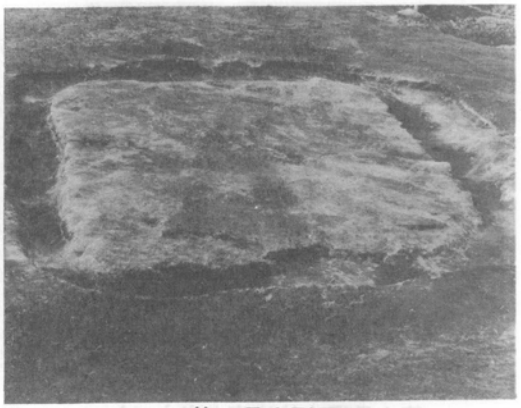


第76号住居址　2

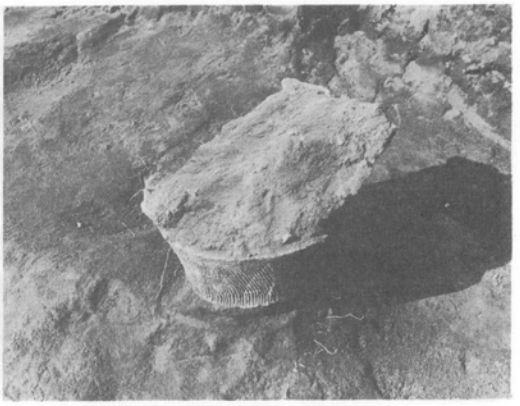
第77号住居址　3



第78号住居址　4

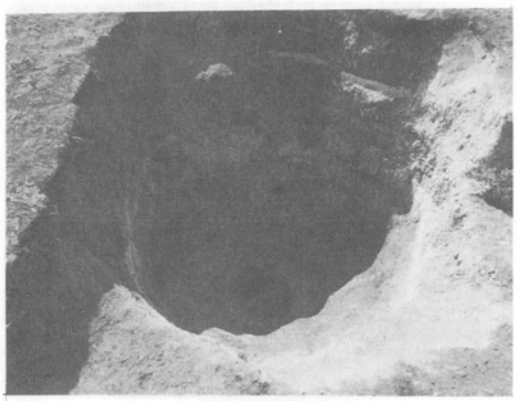


第１号方形周溝　5

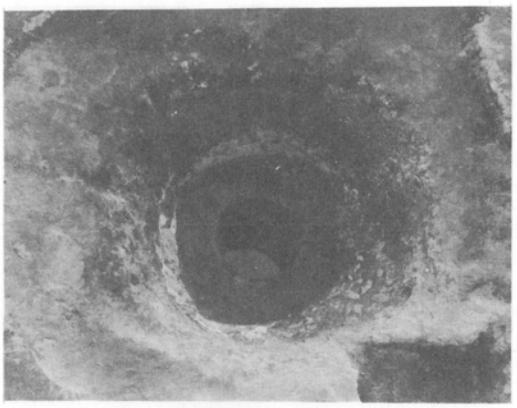


第34号住居址付近埋設土器　6

写９　大塚新地遺跡竪穴住居址その他

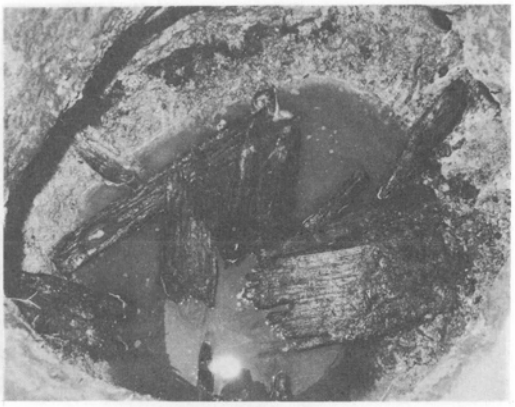


第 1 号 井 戸　1

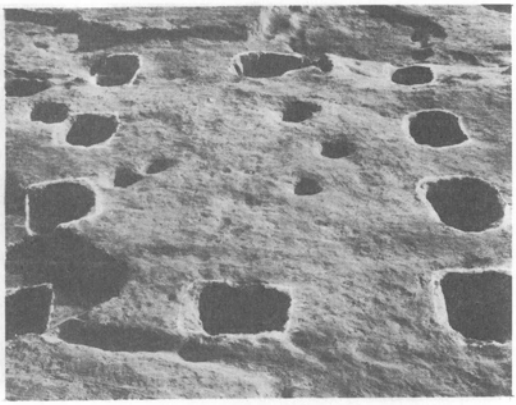


第 2 号 井 戸　2

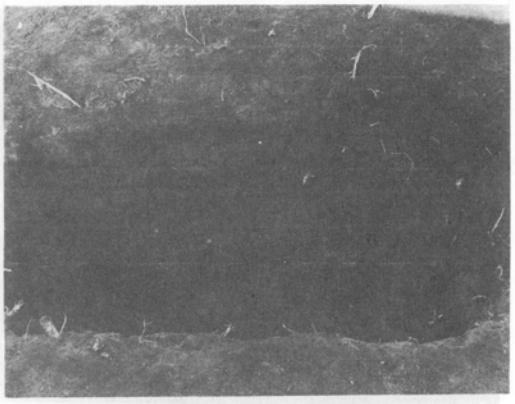
第 2 号井戸出土状況　3



第 2 号井戸出土状況　4



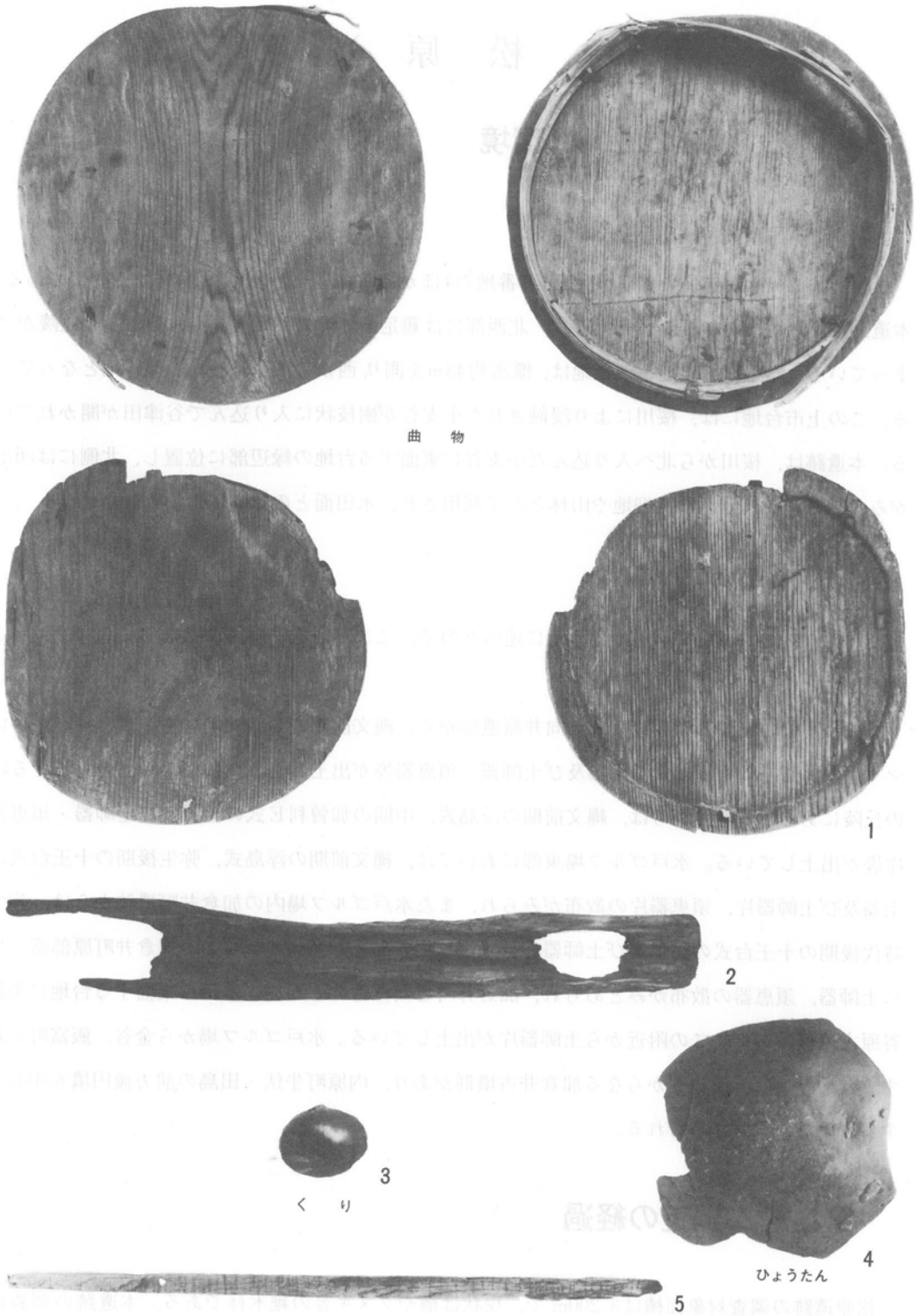
第 1 号掘立柱　5



第 1 号掘立柱柱穴セクション　6

写10

大塚新地遺跡井戸その他



写11　大塚新地遺跡井戸出土遺物・2号井戸（1～4）・3号井戸(5)

第6章　松　原　遺　跡

第1節　遺跡の立地と環境

1　地理的環境

松原遺跡は，水戸市加倉井町字元町447番地の4ほかに所在し，調査対象面積は3,200㎡である。本遺跡は，水戸市の中西部端に位置し，北西部には鶏足山地塊の外縁部をなす第三紀の丘陵がせまっている。本遺跡の立地する台地は，標高約43mを測り，西から東へ緩やかな傾斜地となっている。この上市台地には，桜川により浸蝕された小支谷が樹枝状に入り込んで谷津田が開かれている。本遺跡は，桜川から北へ入り込んだ小支谷に東面する台地の縁辺部に位置し，北側には湧水がみられる。この台地は，畑地や山林として利用され，水田面との比高差は約5mを測る。

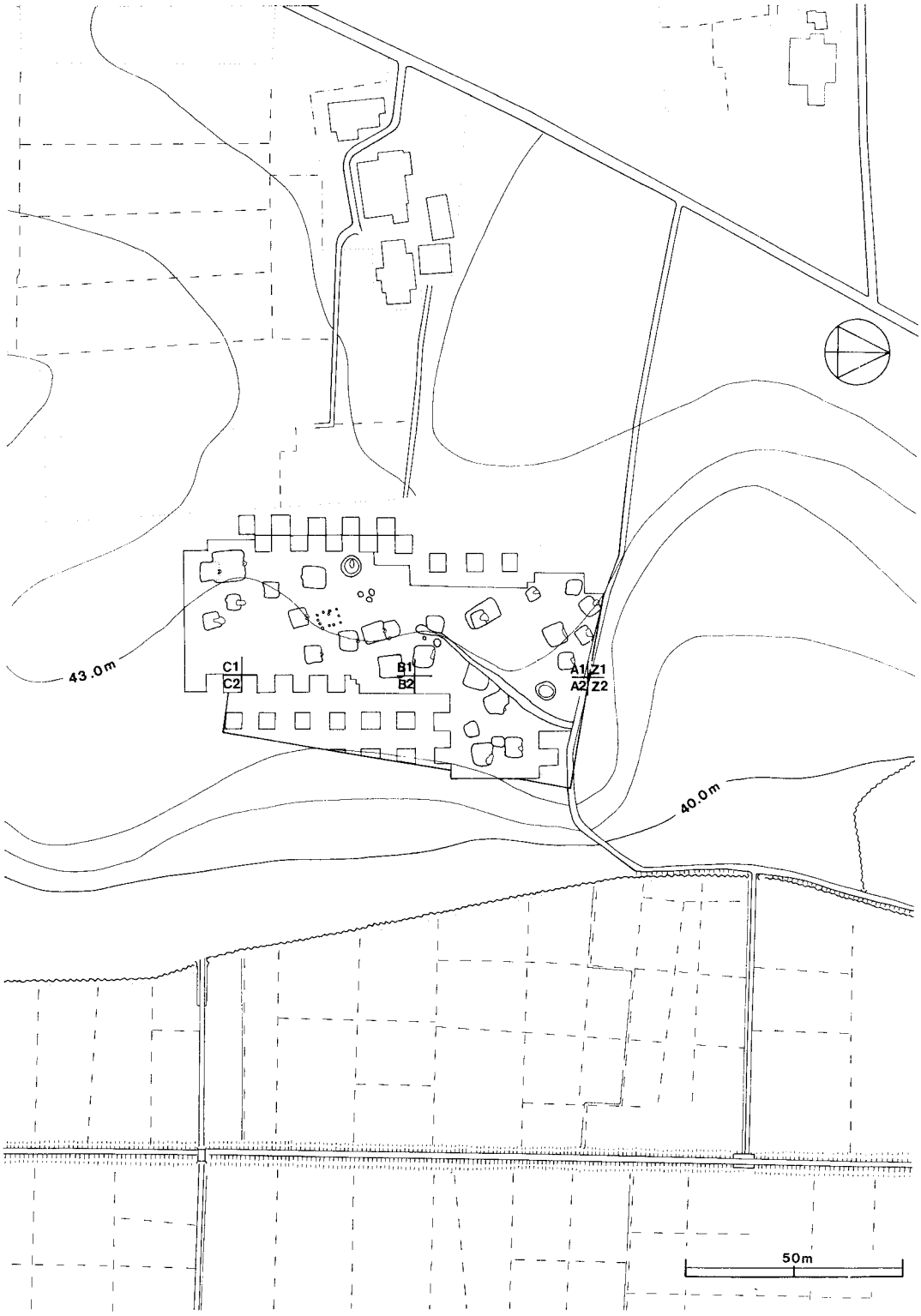
2　歴史的環境

水戸市の歴史的環境についてはすでに述べたので，ここでは松原遺跡に隣接する遺跡についてのみ記してゆきたい。

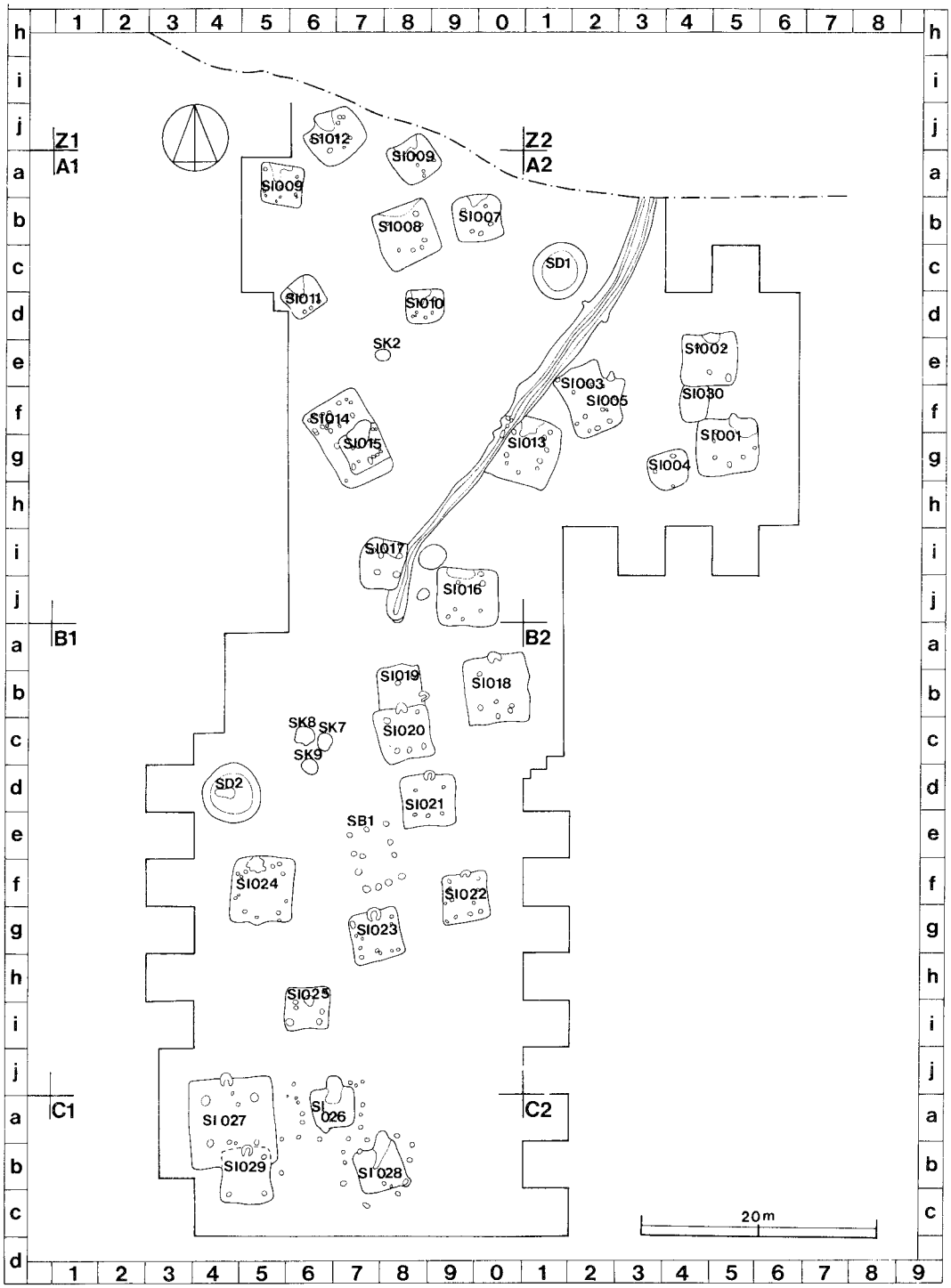
双葉台団地の建設の際調査された向井原遺跡から，縄文前期の浮島式，弥生中期の女方，クロマタギ式，後期の十王台式の土器及び土師器・須恵器等が出土した。全隈町から立野をこえる峠の丘陵にある村境遺跡からは，縄文前期の浮島式，中期の加曽利E式の土器及び土師器・須恵器片等が出土している。水戸ゴルフ場東部においては，縄文前期の浮島式，弥生後期の十王台式の土器及び土師器片，須恵器片の散布がみられ，また水戸ゴルフ場内の加倉井町遺跡からは，弥生時代後期の十王台式の土器及び土師器片，須恵器片が出土している。なお，加倉井町原部落一帯に土師器，須恵器の散布がみとめられ，加倉井町と開江町のさかいの水田に東面する台地に毛勝谷原古墳群があり，この附近から土師器片が出土している。水戸ゴルフ場から金谷，飯富町に対する台地上には円墳21基からなる加倉井古墳群があり，内原町牛伏・田島の前方後円墳を中心とする古墳群の支群とみられる。

第2節　調査の経過

松原遺跡の調査対象面積は3,200㎡で，現状は楢やクヌギ等の雑木林である。本遺跡の調査は，昭和55年2月14日から3月21日までの予定で現場作業を行なった。先ず，遺跡の概要を把握するため，中心杭「STA278−60」を起点として，磁北方向に約70の小調査区を設けて遺構の確認作



第1図　松原遺跡全体図



第２図　松原遺跡遺構配置図

業を行なった。調査の結果検出された遺構は竪穴住居址30軒，土壙６基，円形周溝遺構２基，井戸状遺構１基，溝状遺構１条である。以下，調査経過の概要を記す。

55年２月　発掘調査に必要な機材の搬入と諸準備。雑木や草の焼却後調査区を設定するため，調査区分割杭を打ち込む作業を行なう。調査の第１段階として小調査区発掘を行ない，遺構の確認作業を実施する。その結果，竪穴住居址23軒，土壙２基，溝１条が検出された。また，北東部Ａ２区内の第１号住居址～第５号住居址，第１号土壙などの調査を実施する。続いてＢ１区の遺構確認作業を行ない，竪穴住居址10軒，土壙３基，円形周溝遺構１基が検出された。Ａ１区の表土除去作業を進め，竪穴住居址３軒，溝１条を確認する。Ａ１区の拡張作業は２月下旬まで実施し，その結果，竪穴住居址10軒，円形周溝１基，土壙３基が確認され，第７号住居址～第10号住居址および第２号円形周溝遺構の調査を終了し，第３号溝の調査を開始する。

55年３月　第３号溝の精査および第６号住居址，第11号住居址から第25住居址の調査を実施し，遺物出土状況実測，遺構の平面・断面実測を行なう。第２号土壙～第６号土壙，第１号井戸の精査を終了する。さらに，第26号住居址～第30号住居址の調査をし，カマドを所有する竪穴住居址20軒の精査を行ない，平行して遺構配置図を作成する。現場の発掘機材，テントを大塚新地遺跡に撤収し，松原遺跡の調査を終了する。

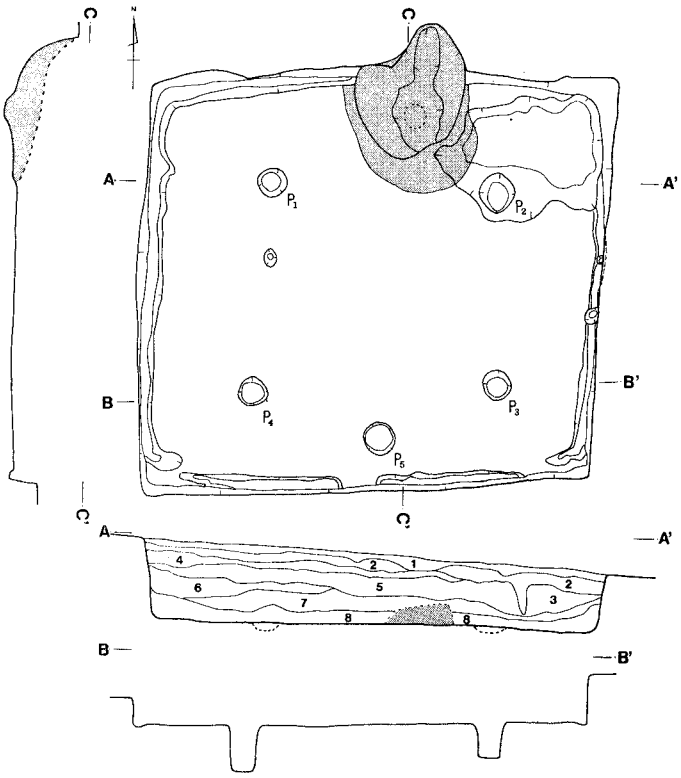
第３節　遺構・遺物

１　住居址

第１号住居址（図３・４・５）

本住居址は，調査区の北東部Ａ２区ｆ４，ｆ５，ｆ６，ｇ４，ｇ５，ｇ６に確認され，本址の北西コーナーにおいて第30号住居址の南壁と接し，南西1.0mに第４号住居址が検出されている。本址の主軸方向はＮ－90°－Ｗで，規模は長軸4.93m，短軸4.52m，面積19.5㎡を測り，ほぼ正方形を呈している。壁は確認面で壁高31cm～65cmを測り，西側が高くほぼ垂直に立ち上がっている。壁面にはカマドの部分と北東コーナーを除いて幅13cm，深さ６cm内外の「U」字形をした壁溝が廻っている。床面はほぼ平坦で踏み固められた状態を示しているが，北東コーナー附近は貼り床となっている。ピットは５個所確認され，Ｐ１～Ｐ４は主柱穴と考えられるが，南壁中央部付

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考
Ｐ１	34	32	33	主柱穴	Ｐ４	32	30	38	主柱穴
Ｐ２	42	41	34	主柱穴	Ｐ５	35	35	26	主柱穴
Ｐ３	32	30	53	主柱穴					



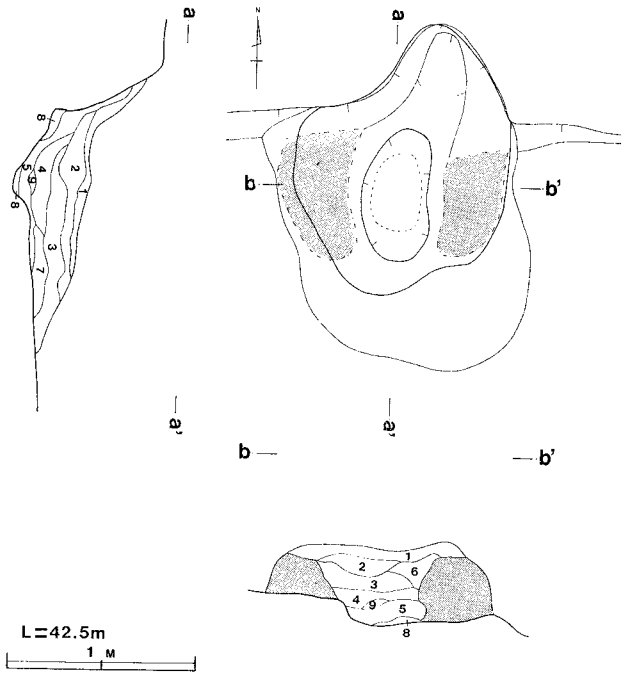
土層解説

A－A′

1．表　土
2．表　土
3．ローム
4．暗褐色　ほとんどロームを含まず
5．暗褐色　多量のローム粒を含む，少量の焼土粒，わずかの炭化物を含む，ややしまりあり
6．褐　色　ソフトロームを含む，やや粘性あり，わずかの炭化粒含む
7．暗褐色　少量のローム粒を含，わずかの炭化粒含む
8．褐　色　少量のローム粒，4～5cmのロームブロック多混，少量の焼土粒を含む

L=42.5m　2 M

第3図　第1号住居址実測図

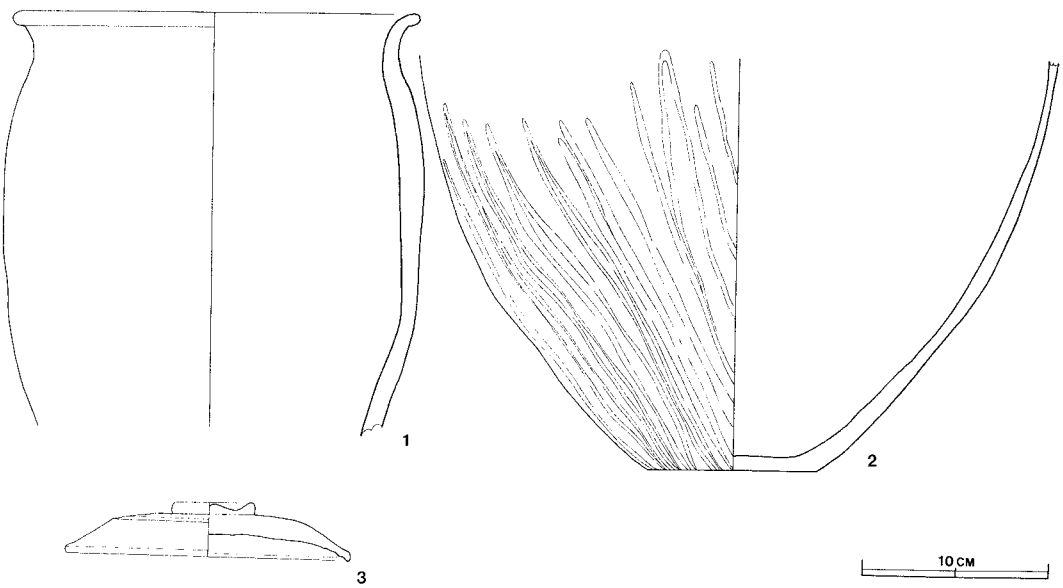


土層解説

a－a′・b－b′

1．にぶい橙色　焼土粒子（少）砂質土(少)含有
2．にぶい橙色　焼土粒子（少）含有
3．にぶい赤褐色　焼土粒子（少）ローム粒子(少）炭化粒子(少）含有
4．赤褐色　焼土粒子（多）含有
5．褐　色　ハードロームブロック，焼土含有
6．にぶい赤褐色　粘土粘土（少）焼土含有
7．赤褐色　粘土質，焼土，炭含有
8．　ハードロームブロック,焼土(少)含有
9．　焼土（多）含有

第4図　第1号住居址カマド実測図



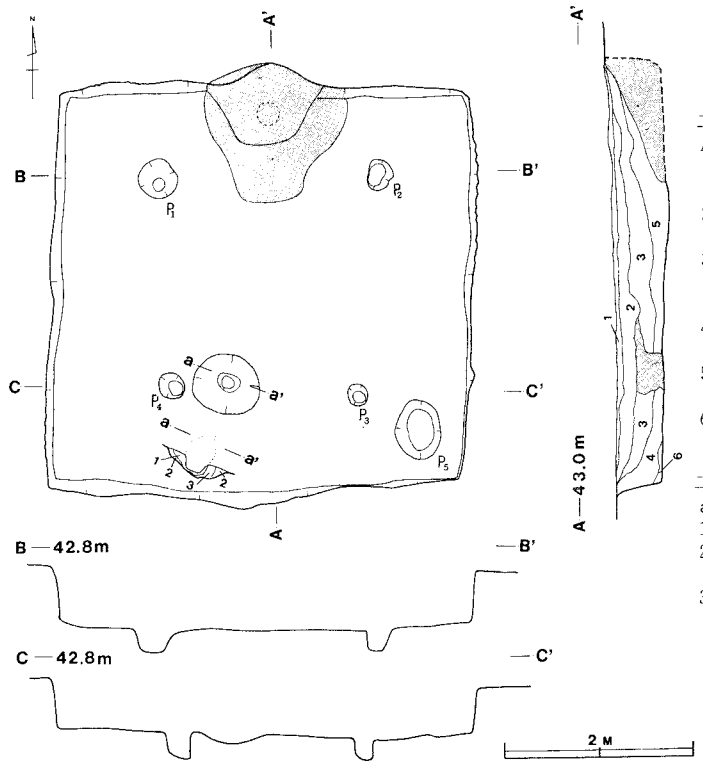
第5図　第1号住居址出土遺物実測図

近のＰ５は出入口の施設に伴う柱穴と思われる。覆土は８層からなり，自然堆積を示している。上層は暗褐色土でローム粒子を含む。中層は暗褐色土で，ローム粒子と炭化粒子を含む。下層は褐色土で，ローム粒子，ロームブロック，焼土粒子を含んでいる。カマドは北壁の中央から東よ

りに付設され，南向きに構築されている。カマドの規模は長径125cm，短径120cm，北壁を75cm，幅で，50cm程度掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径75cm，短径35cm，深さ10cmで楕円形に掘りくぼめている。袖部は少量のローム粒子，ハードロームブロックを含む砂質粘土で築かれているが，非常に破壊された状態で，砂質粘土が北東コーナーにまで散れている，カマドの東側に炭化材がかたまって出土していた。出土遺物は土師器と須恵器が共伴している。中央部床面より須恵器の蓋（図５－３）と土師器の甕片（図５－１）を床直上より出土している。他に覆土から須恵器の蓋，坏などの細片と土師器の甕などの破片が数点出土している。その他の出土遺物は弥生式土器の細片を数点である。本址は出土遺物等から真間期に比定される遺構と思われる。

第２号住居址（図６・７・８）

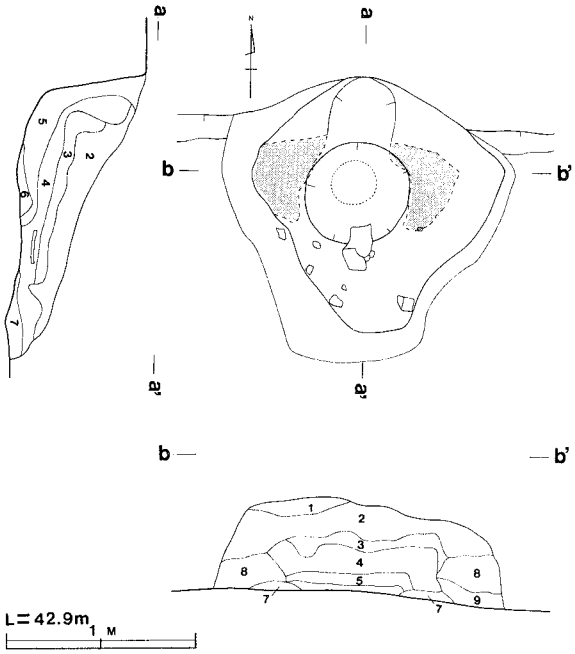
本住居址は，調査区の北東部Ａ２区ｄ４，ｄ５，ｅ４，ｅ５，ｆ４，ｆ５に確認され，南壁西寄りに第30号住居址と複合しているが，第30号住居址より新しい遺構である。本址の主軸方向はＮ－0°で，規模は長軸4.41m，短軸4.48m，面積18.1㎡を測り，ほぼ正方形を呈している。壁は確認面で壁高約55cmあり，ほぼ垂直に立ち上がっている。床面は平坦で，かなり踏みかためられた状態を示している。ピットは４箇所確認され，Ｐ１～Ｐ４は主柱穴と考えられる。南東コ



土層解説
A－A′
1．褐　色　ローム粒子(多)炭化物(少)含有
2．にぶい赤色　ローム粒子（多）炭化粒子（少）焼土粒子含有
3．にぶい赤色　ローム粒子（多）焼土粒子（多）３～５cmロームブロック含有
4．極暗赤褐色　炭化粒子（多）焼土粒子（多）含有
5．暗赤褐色　ローム粒子（多）焼土粒(少）炭化粒含有
6．褐　色　ローム粒子（少）ハードローム ブロック，含有

土層解説
a－a′
1．暗褐色　炭化粒子（多）含有
2．褐　色　炭化粒子（極少）ハードローム，含有
3．暗褐色　ローム粒子（多）含有

第６図　第２号住居址実測図



土層解説

a－a′・b－b′

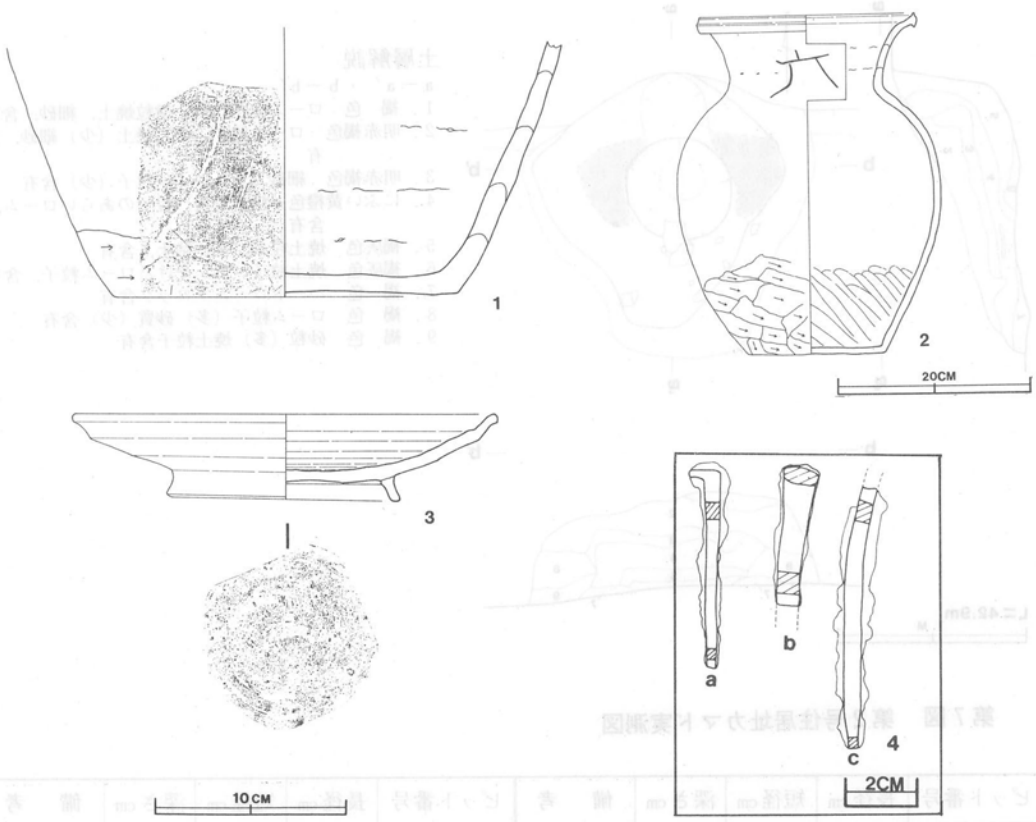
1．褐　色　ローム粒子（多）微粒焼土，細砂，含有
2．明赤褐色　ローム粒子（多）焼土（少）細砂，含有
3．明赤褐色　細砂（多）ローム粒子（少）含有
4．にぶい黄橙色　粘土（多）粒子のあらいローム，含有
5．褐灰色　焼土粒子（多）粘土，含有
6．褐灰色　焼土粒子（多）やけたローム粒子，含有
7．褐　色　ハードロームブロック含有
8．褐　色　ローム粒子（多）砂質（少）含有
9．褐　色　砂粒（多）焼土粒子含有

第7図　第2号住居址カマド実測図

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考
P 1	47	40	32	主柱穴	P 4	30	25	30	主柱穴
P 2	34	26	25	主柱穴	P 5	65	45	32	貯蔵穴（不整楕円形）
P 3	25	20	21	主柱穴					

ーナーのＰ５は貯蔵穴と思われ，不整楕円形を呈している。カマドは北壁の中央にあり，南向きに構築されている。規模は長径110cm，短径90cmで，北壁を25cm幅で，30cmほど掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径24cm，短径23cmで深さ２cmを測り，円形に掘りくぼめている。袖部はローム粒子を含む砂質粘土である。覆土は８層からなり，自然堆積の状態を示している。上層は褐色土でローム粒子，比較的多量のロームブロックと少量の焼土粒子，炭化粒子を含み，下層は暗褐色土・褐色土で，多量のローム粒子，炭化粒子，ロームブロック，ハードロームブロック，を含んでいる。

出土遺物は，南部中ほどＰ４附近床面より甕（図８－２）を出土し，甕の中には焼骨と炭が多量に入っており，須恵器の盤（図８－３）を蓋として利用していた。他には，覆土中から須恵器の坏・蓋などの破片を多数出土している。覆土中から弥生式土器の十王台式より古い型式の土器片を数点出土している。本址は，出土遺物等から国分期に比定される遺構と思われる。

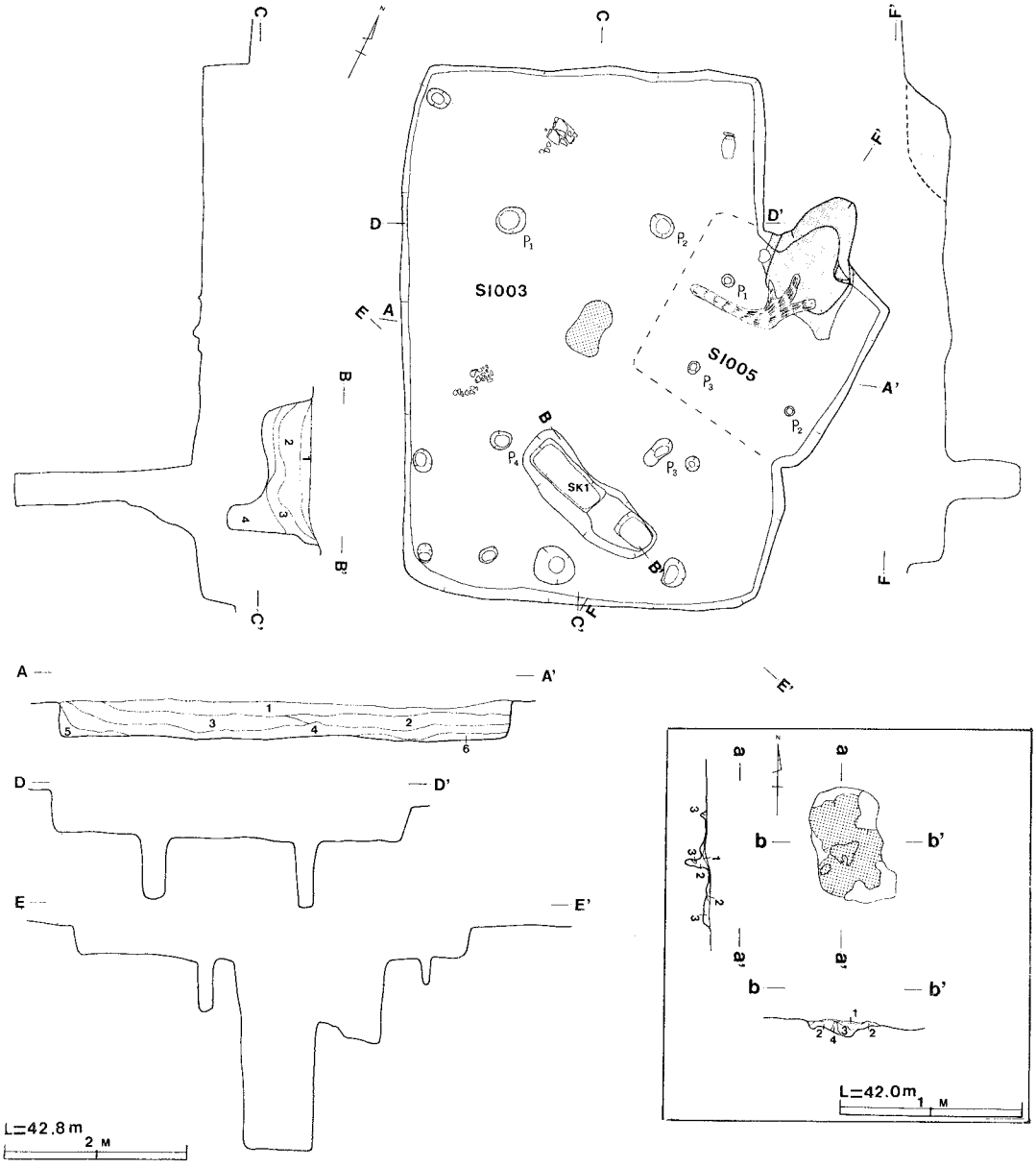


第8図　第2号住居址出土遺物実測図

第3号住居址（図9・10・11(1)(2)(3)）

本住居址は，調査区の北東部A2区e1，f1，f2，f3，g2に確認され，東壁の中ほどに第5号住居址が，南側の中ほどに第1号土壙が複合している。本址は第5号住居址より古く，第1号土壙より新しい遺構である，北西コーナーは第3号溝状遺構に接し，南西1.0mには第13号住居址が検出されている。本址の主軸方向はN－20°－Eで，規模は長軸5.48m，短軸3.98m，面積22.0㎡を測り，長方形を呈している。壁は確認面で壁高35cm～56cmを測り，緩やかに外傾して立ち上がっている。床面は平坦であり，かなり踏みかためられた状態を示している。床面下から第1号土壙が検出された。炉址は床面の南側中央部に位置し，規模は長径61cm，短径40cmで不整楕円形を呈している。燃焼部はロームが赤く焼け焼土が多量に含まれていた。ピットは11箇

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考
P1	34	30	68	主柱穴	P3	38	17	62	主柱穴
P2	30	25	70	主柱穴	P4	23	20	64	主柱穴

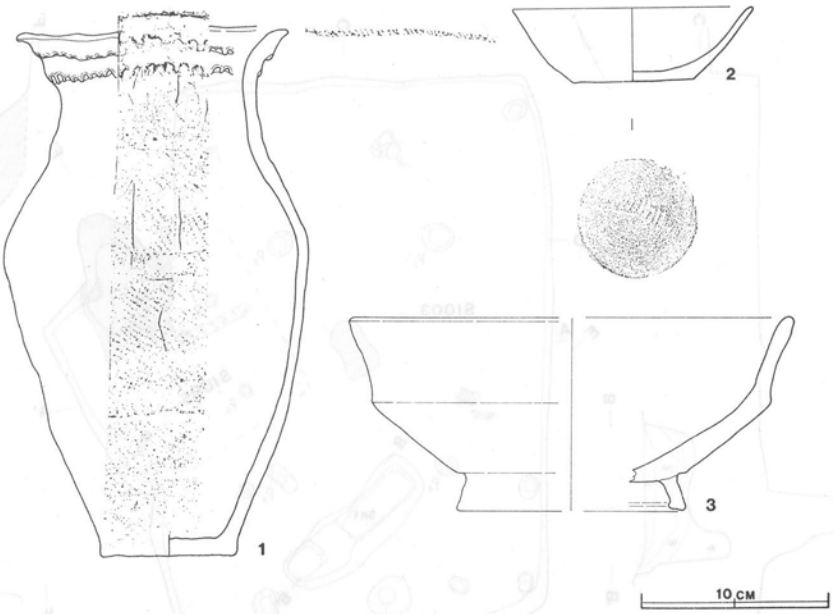


土層解説
A－A′
1．暗褐色　ローム粒子（多）炭化粒子(少)焼土粒子含有
2．褐　色　ローム粒子(最多)炭化粒子(少)焼土粒子含有
3．暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒(極少)焼土粒子含有
4．暗褐色　ローム粒子(少)焼土粒子(極少)含有
5．褐　色　ローム粒子（極少）ハードロームブロック含有
6．暗褐色　ローム粒(多)炭化物（多）炭化粒子，焼土（少）含有

土層解説
a－a′・b－b′
1．暗褐色　焼土粒子（多）ハードロームブロック（やけたもの）炭化粒子(少）含有
2．暗褐色　焼土粒子（少）ハードローム粒子含有
3．褐　色　ロームブロック（地山）
4．褐　色　ハードロームがかなりやけた部分

土層解説
B－B′
1．暗褐色　ローム粒子（少)焼土粒子(少)含有
2．褐　色　ローム粒子（多）焼土（少）炭化粒子含有
3．褐　色　ローム粒子（少）炭化粒(極少)含有
4．にぶい橙色　ソフトローム（多）ローム粒子，炭化粒（極少）含有

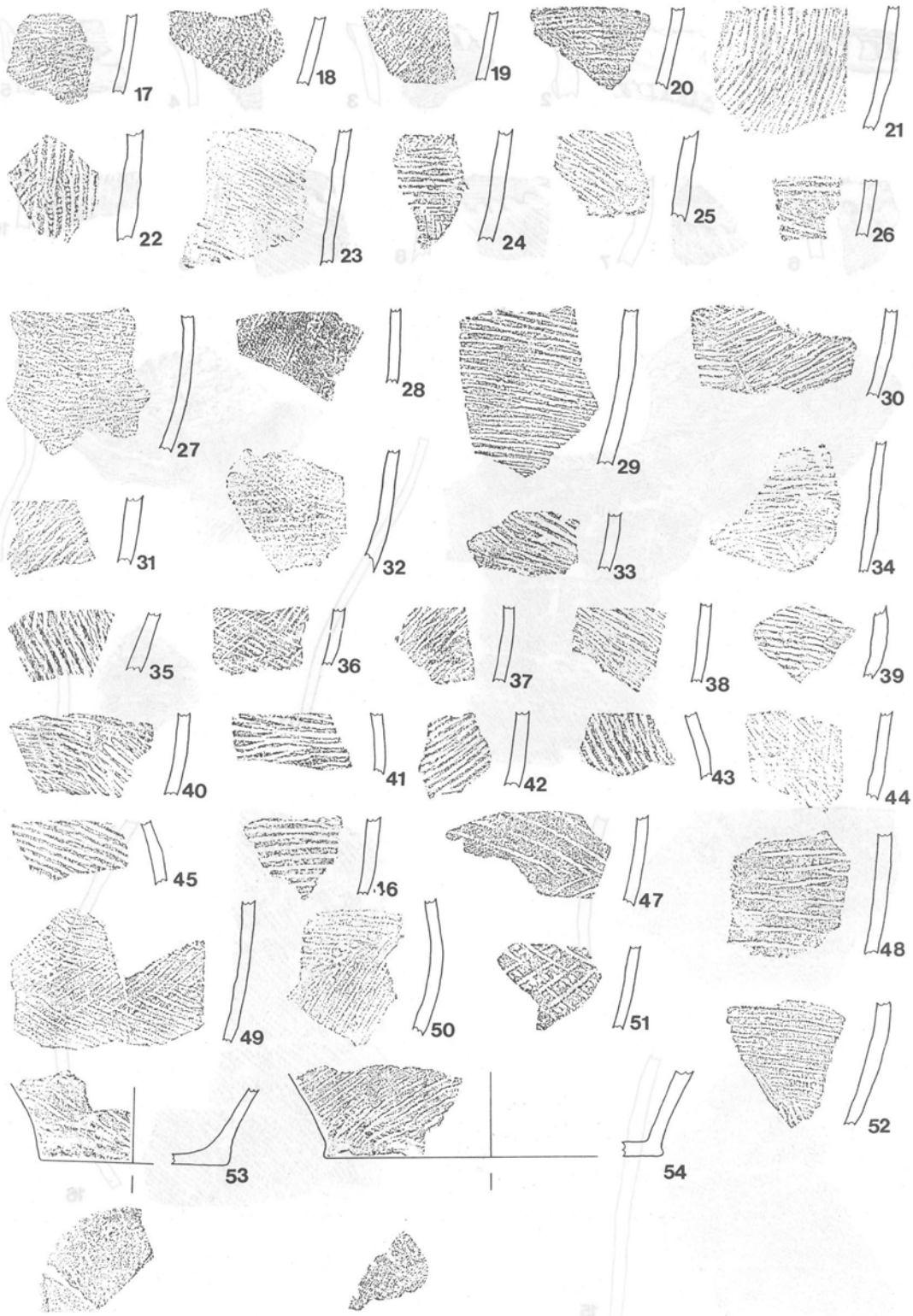
第9図　第3号・5号住居址，第1号土壙実測図



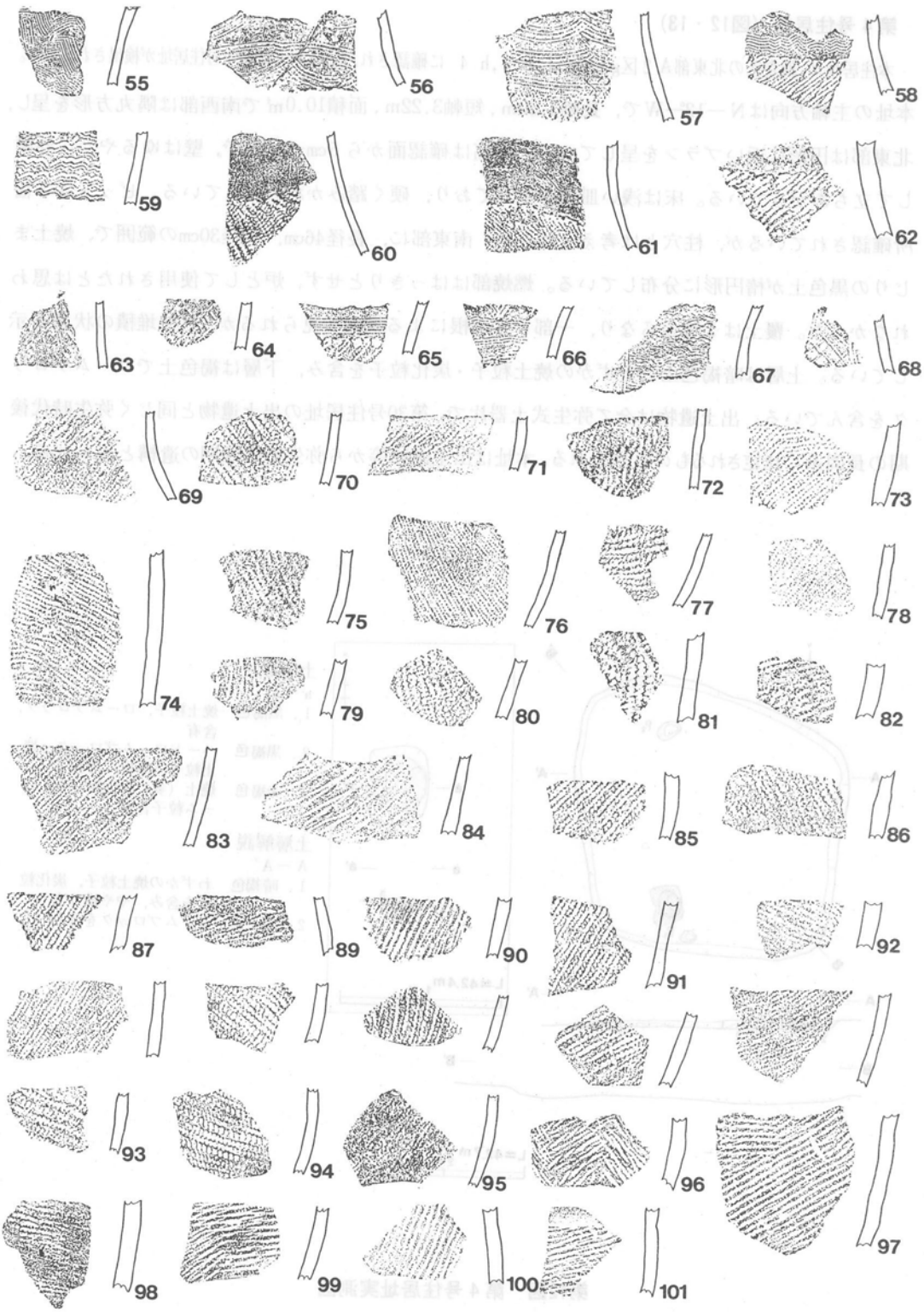
第10図　第３号・第５号住居址出土遺物実測国

所確認され，Ｐ１～Ｐ４は主柱穴と考えらる，貯蔵穴は検出されなかった。覆土は６層からなり自然堆積の状態を示している。全体的に黒色を呈し，覆土内の下部には弥生式土器片が，上部には須恵器の細片が混在している。上層は褐色土でローム粒子と極少量の炭化粒子を含み，中層は暗褐色土で多量のローム粒子と少量の炭化粒子，焼土粒子を含み，下層は褐色土で少量のローム粒子と焼土粒子を含む。出土遺物は弥生式土器の東中根式に比定される甕形の完形土器（第10図－１)を，北東コーナー東壁際床面から出土している。他には，弥生式土器の十王台式より古い型式と思われる土器片を床面や床面直上から多数出土している。本址は出土遺物等から弥生時代後期の遺構と思われる。

第11図(1)　第3号住居址出土遺物拓影図



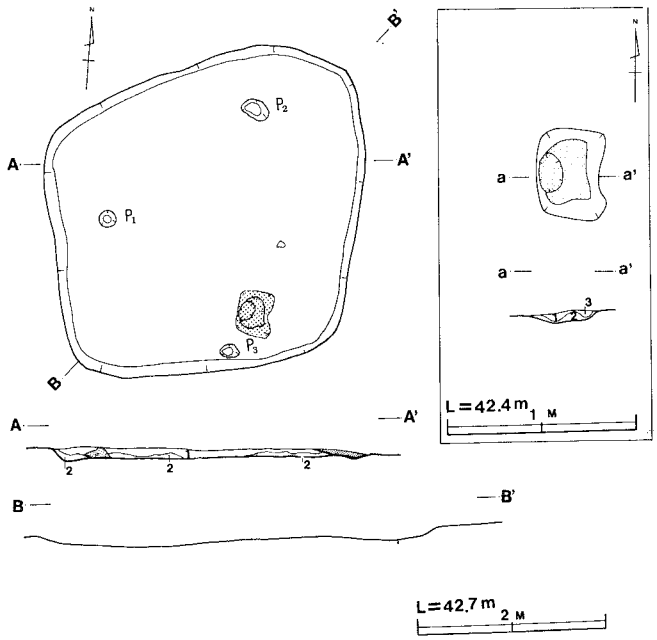
第11図(2)　第３号住居址出土遺物拓影図



第11図(3)　第3号住居址出土遺物拓影図

第４号住居址（図12・13）

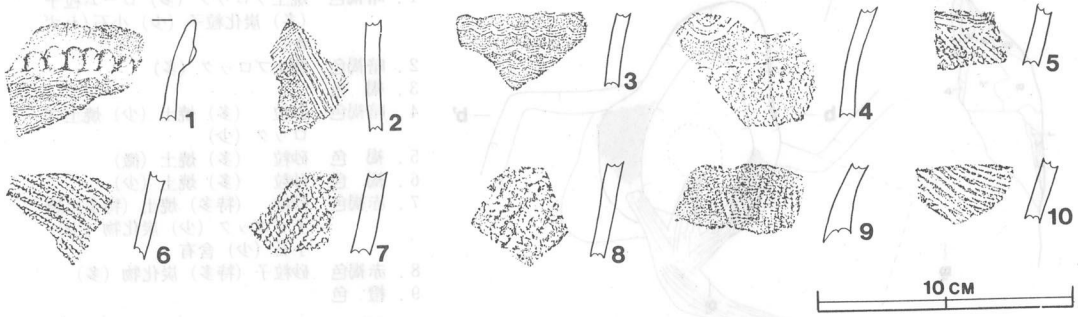
本住居址は，調査区の北東部Ａ２区g ３，g ４，h ３，h ４ に確認され，東側1.0mには第１号住居址が検出されている。本址の主軸方向はＮ－12°－Ｗで，長軸3.30m，短軸3.22m，面積10.0㎡で南西部は隅丸方形を呈し，北東部は円形に近いプランを呈している。壁高は確認面から５cm～10cmで，壁はゆるやかに外傾して立ちあがっている。床は浅い皿状を示しており，硬く踏みかためられている。ピットは３箇所確認されているが，柱穴とは考えられない。南東部に，長径46cm，短径30cmの範囲で，焼土まじりの黒色土が楕円形に分布している。燃焼部ははっきりとせず，炉として使用されたとは思われなかった。覆土は５層からなり，一部に木の根による攪乱も見られるが，自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土でわずかの焼土粒子・炭化粒子を含み，下層は褐色土でロームブロックを含んでいる。出土遺物は全て弥生式土器片で，第30号住居址の出土遺物と同じく弥生時代後期の長岡系に比定されるものと思われる。本址は出土遺物等から弥生時代後期の遺構と思われる。



土層解説
a－a′
1．黒褐色　焼土粒子，ロームブロック，含有
2．黒褐色　ハードロームブロック，焼土粒子（極少）含有
3．赤褐色　焼土（多）炭化物（少）ローム粒子含有

土層解説
A－A′
1．暗褐色　わずかの焼土粒子，炭化粒子を含み，やや締りあり
2．褐　色　ロームブロックを含む

第12図　第４号住居址実測図

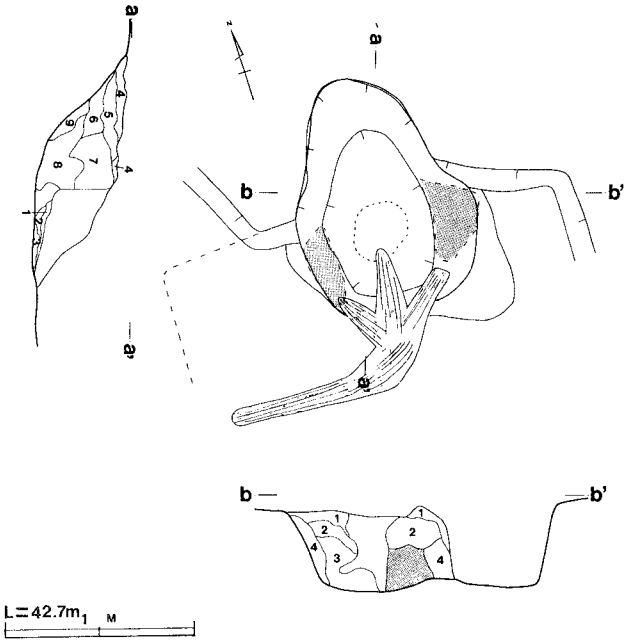


第13図　第４号住居址出土遺物拓影図

第５号住居址（図９・10・14）

本住居址は，調査区の北東部Ａ２区　ｅ２，ｅ３，ｆ２，ｆ３に確認され，カマドと北東コーナー部と東壁は残存し，約50％ほど第３号住居址の東壁中央部に切り込んでいる。本址の主軸方向はＮ－６°－Ｗで，規模は推定で長軸2.25ｍ，短軸2.27ｍ，面積は4.16㎡で，隅丸方形を呈している。壁高は確認面から36㎝内外で，壁はゆるやかに外傾して立ち上がっている。床面は平坦で踏みかためられた状態を示しており，第３号住居址の床面とほぼ同じレベルであり，その床面を一部利用して本址が構築されている。カマド際から炭化材が検出されていることから，火災に遭遇していると思われる。主柱穴と思われるピットは３箇所確認されているが，貯蔵穴は検出され

ピット番号	長径㎝	短径㎝	深さ㎝	備　考	ピット番号	長径㎝	短径㎝	深さ㎝	備　考
Ｐ１	14	11	17	主柱穴	Ｐ３	15	12	10	主柱穴
Ｐ２	10	10	20	主柱穴					



土層解説
a — a′

1．暗褐色　焼土ブロック（多）ローム粒子（多）炭化粒子（少）小石(わずか)
2．暗褐色　焼土ブロック（多）
3．褐　色
4．暗褐色　砂粒　（多）焼土（少）焼土ブロック（少）
5．褐　色　砂粒　（多）焼土（微）
6．褐　色　砂粒　（多）焼土（少）
7．赤褐色　砂粒　（特多）焼土（特多）焼土ブロック（少）炭化物（少）小石（少）含有
8．赤褐色　砂粒子（特多）炭化物（多）
9．橙　色

土層解説
b — b′

1．褐　色　砂粒　（多）ローム粒，炭化粒子（少）含有
2．褐　色　ローム粒（微）砂粒　（多）焼土（多）小石（少）含有
3．褐　色　ローム粒子，焼土（多）粘土ブロック，焼土(少)炭化粒子(多)含有
4．明褐色　ロームブロック含有

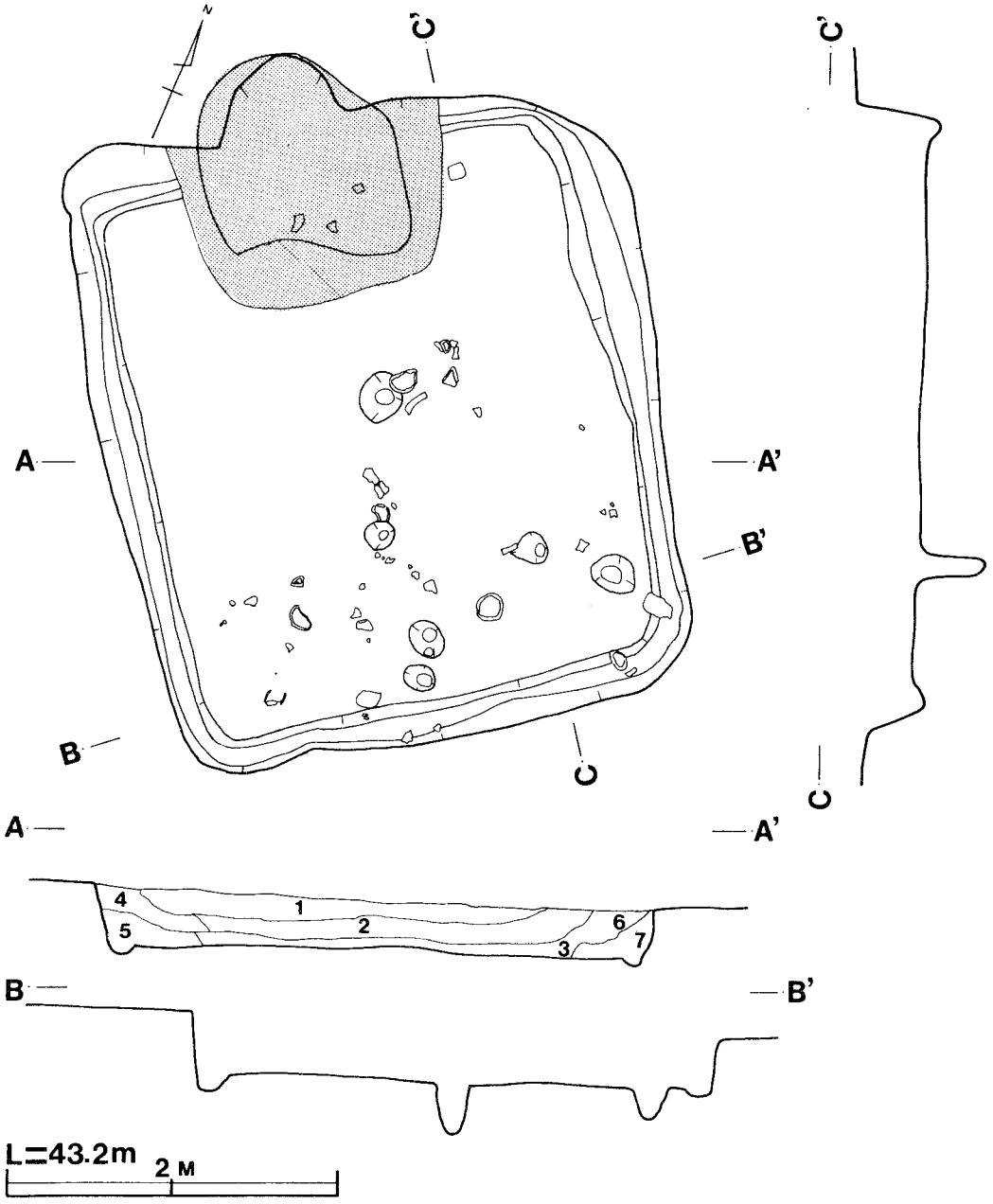
第14図　第５号住居址カマド実測図

ない。覆土は４層からなり，自然堆積の状態を示している。上層は褐色土で多量のローム粒子，極少量の炭化粒子，焼土粒子を含有し，中層は，暗褐色土で多量のローム粒子・炭化粒子，少量の炭化物，焼土粒子を含み，下層は褐色土であり，わずかのローム粒子とハードロームブロックを含んでいる。カマドは北壁の中央部に付設され，南南西向きに構築されている。規模は，長径120cm，短径95cm，北壁を80cm幅で，86cmほど掘り込んで煙道としている。燃焼部は，長径32cm，短径26cm，深さ２cmほど円形に掘りくぼめている。袖部は少量のローム粒子，ハードロームブロック混りの砂質粘土である。

出土遺物は，土師器と須恵器を出土しており，土師器は内黒の坏（図９－２）と坏・甕等の破片,須恵器は高台付鉢（図9−3）と坏などの破片を数点出土している。本址は,出土遺物等から国分期に比定される遺構と思われる。

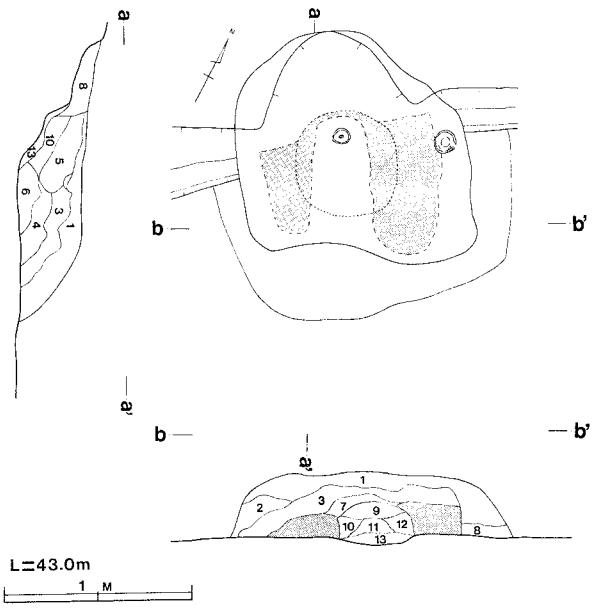
第６住居址（図15・16・17）

本住居址は，調査区の北部中ほどのＺ１区ｊ８，ｊ９，　Ａ１区ａ８，ａ９　に確認され，北西2.0mに第12号住居址が，南1.0mには第８号住居址が検出されている。主軸方向はＮ－35°－Wで,規模は長軸3.90m,短軸3.38m,面積9.4㎡で,隅丸長方形を呈している。壁高は,確認面で約43cmを測り，壁はほぼ垂直に立ち上がり，壁下には幅17cm，深さ11cm内外の壁溝が全周している。床面は，ほぼ平坦でかなり踏みかためられた状態を示している。ピットは４箇所確認されたが，柱穴と思われるものは検出されなかった。第26号住居址・第28号住居址と同じように竪穴住居址



土層解説
A－A′
1．暗褐色　ローム粒子（極少）含有
2．暗褐色　ローム粒子（少）焼土粒子（少）含有
3．暗褐色　ローム粒子（少）含有
4．褐　色　ローム粒子（多）ハードロームブロック（少）含有
5．褐　色　ローム粒子（多）含有
6．暗褐色　ローム粒子（少）焼土粒子（少）含有
7．褐　色　ローム粒子（多）ソフトロームブロック（多）含有

第15図　第6号住居址実測図



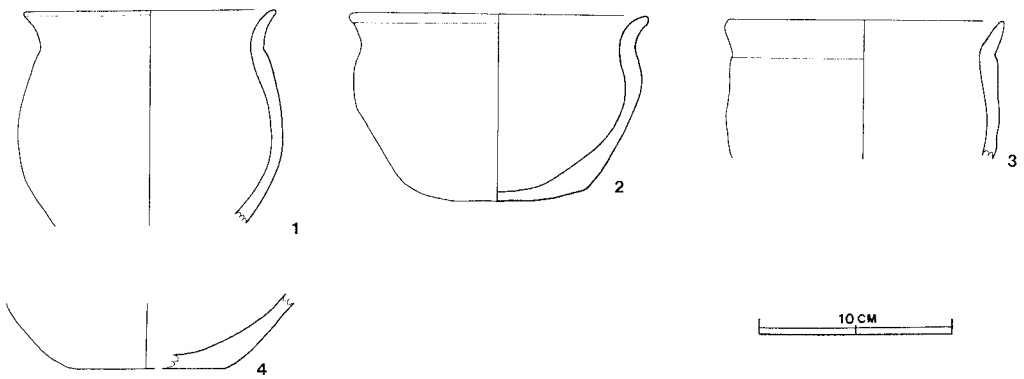
土層解説

a－a′・b－b′

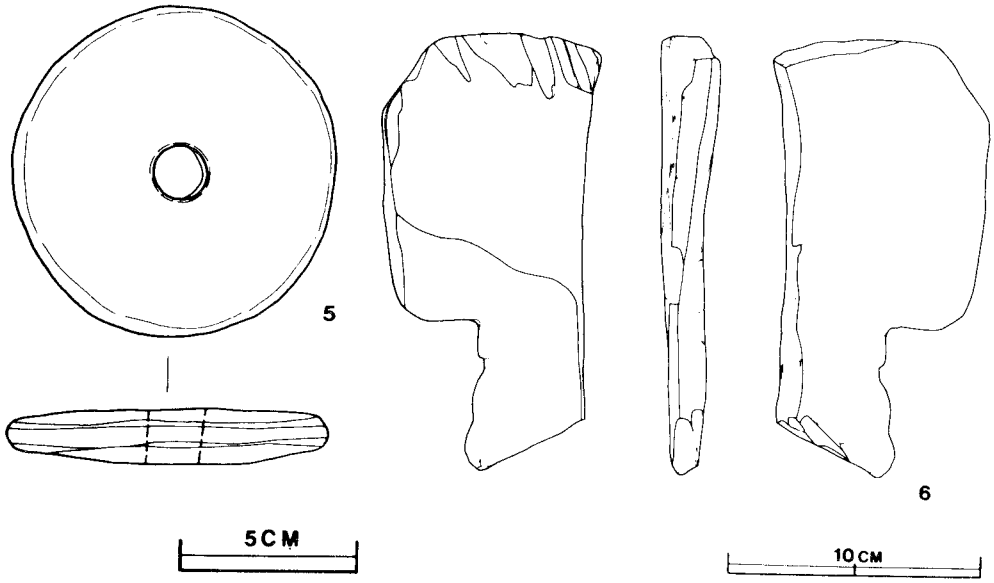
1．暗褐色　ハードローム粒子（少）含有
2．褐　色　ハードローム粒子，焼土粒子(極少)
3．褐　色　ハードローム粒子（極少）含有
4．にぶい褐色　粘土を主体とした土層
5．灰褐色　焼土粒子（極少）含有，粘土を主体とした土層
6．明褐色　粘土ブロック（少）焼土粒子含有
7．にぶい褐色　粘土を主体とした土層
8．褐　色　焼土粒子（極少）含有
9．暗赤褐色　焼土（少）含有，砂質
10．にぶい褐色　焼土（少）含有，山砂層
11．暗赤褐色　焼土（多）含有
12．暗赤褐色　焼土（多）含有，砂質土層
13．暗赤褐色　焼土を主体とする

第16図　第６号住居址カマド実測図

の施設外に柱穴を有しているものと思われる。覆土は７層からなり，自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土で，極少量のローム粒子を含み，中層は暗褐色土で，少量のローム粒子，焼土粒子を含み，下層は暗褐色土で少量のローム粒子を含んでいる。カマドは北壁の中央から西よりに付設され，南東向きに構築されている。規模は長径126cm，短径90cmで，北壁を80cm幅で，43cmほど掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径56cm,短径53cmで,深さ２cmほど円形に掘り窪めている。袖部は黒色土混りの砂質粘土である。



第17図(1)　第６号住居址出土遺物実測図



第17図(2)　第６号住居址出土遺物実測図

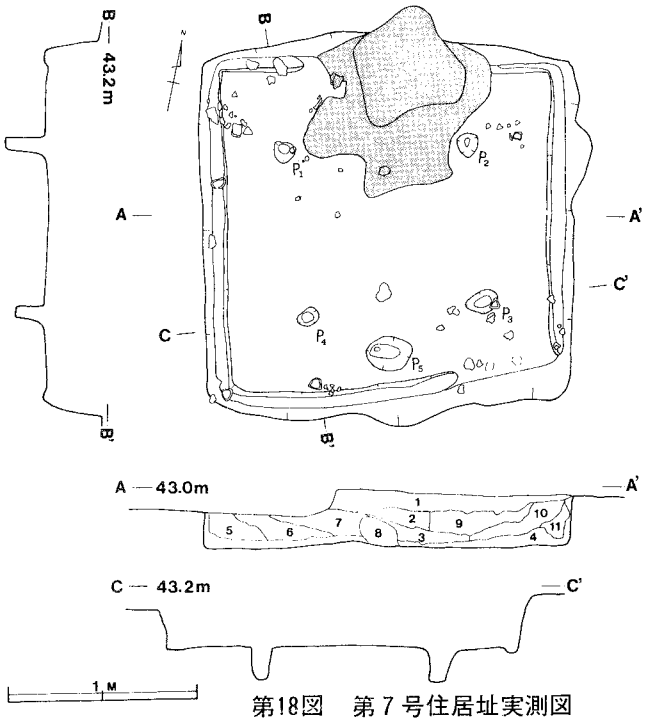
出土遺物は，土師器の甕２個体分（図17－１），カマド内から鉢（図17－２），カマド附近から有孔円板(図17－５)，他に甕の底部，坏口縁部と底部，椀口縁部など数点を出土している。須恵器は坏・蓋などの破片が数点出土している。その他，砥石片（図17－６）と弥生式土器の十王台式直前と思われる胴部，底部片を数点出土している。本址は古墳時代の鬼高期に比定される遺構と思われる。

第７号住居址（図18・19・20）

本住居址は，調査区の北部Ａ１区ａ９，ａ０，ｂ９，ｂ０に確認され，西側1.7mには第８号住居址が検出されている。主軸方向はＮ－８°－Ｗで規模は長軸4.0m，短軸3.95m面積11.8m²の正方形を呈している。壁高は40～62cmで，壁はほぼ垂直に立ち上がり，壁下には幅15cm，深さ５cm内外の壁溝が廻っている。床面はほぼ平坦で，かなり踏みかためられた状態を示している。ピットは４個確認され，Ｐ１～Ｐ４は主柱穴と考えられる。貯蔵穴は有していない。

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考
Ｐ１	25	22	45	主柱穴	Ｐ４	23	20	37	主柱穴
Ｐ２	23	20	35	主柱穴	Ｐ５	45	40	28	
Ｐ３	35	25	40	主柱穴					

覆土は11層からなり，自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土で多量のローム粒子と少量の焼土粒子，炭化粒子を含み，中層は褐色土で多量のローム粒子，ハードロームブロックと少量の焼土粒子を含み，下層は褐色土で少量のローム粒子を含んでいる。カマドは北壁の中央から

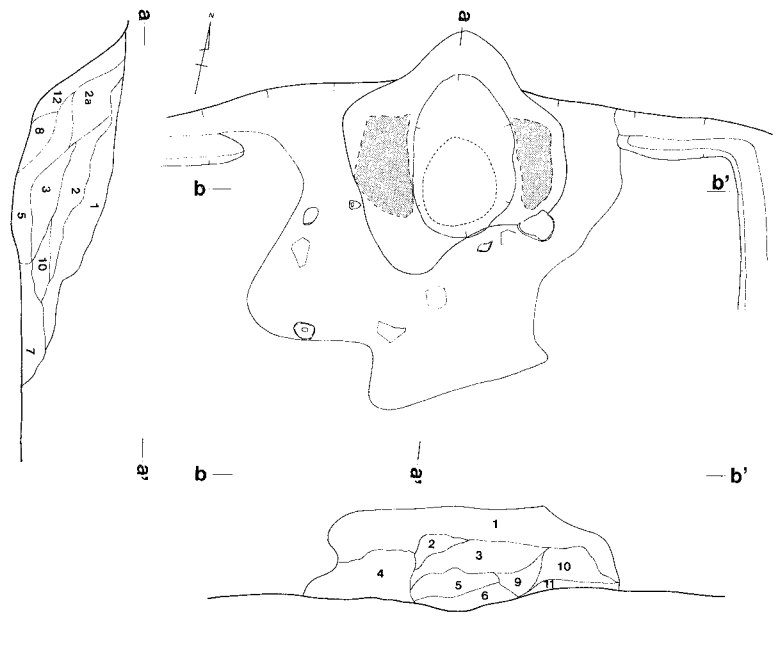


土層解説

A－A′

1．暗褐色　ローム粒子（多）含有
2．褐　色　ローム粒子（多）焼土粒子（少）炭化物（極少）含有
3．褐　色　ローム粒子（多）ハードロームブロック（多）焼土粒子（少）含有
4．褐　色　ローム粒子（少）含有
5．褐　色　ローム粒子（多）ハードロームブロック（少）焼土粒子（少）含有
6．褐　色　ローム粒子（多）含有
7．褐　色　ローム粒子（多）ハードロームブロック（少）焼土粒子（少）炭化物（少）含有
8．にぶい褐色　ローム粒子，焼土粒子，砂，炭化物含有
9．褐　色　ローム粒子（多）ロームブロック（少）含有
10．暗褐色　ローム粒子（少）焼土粒子（少）含有
11．褐　色　ローム粒子（多）含有

第18図　第７号住居址実測図



土層解説

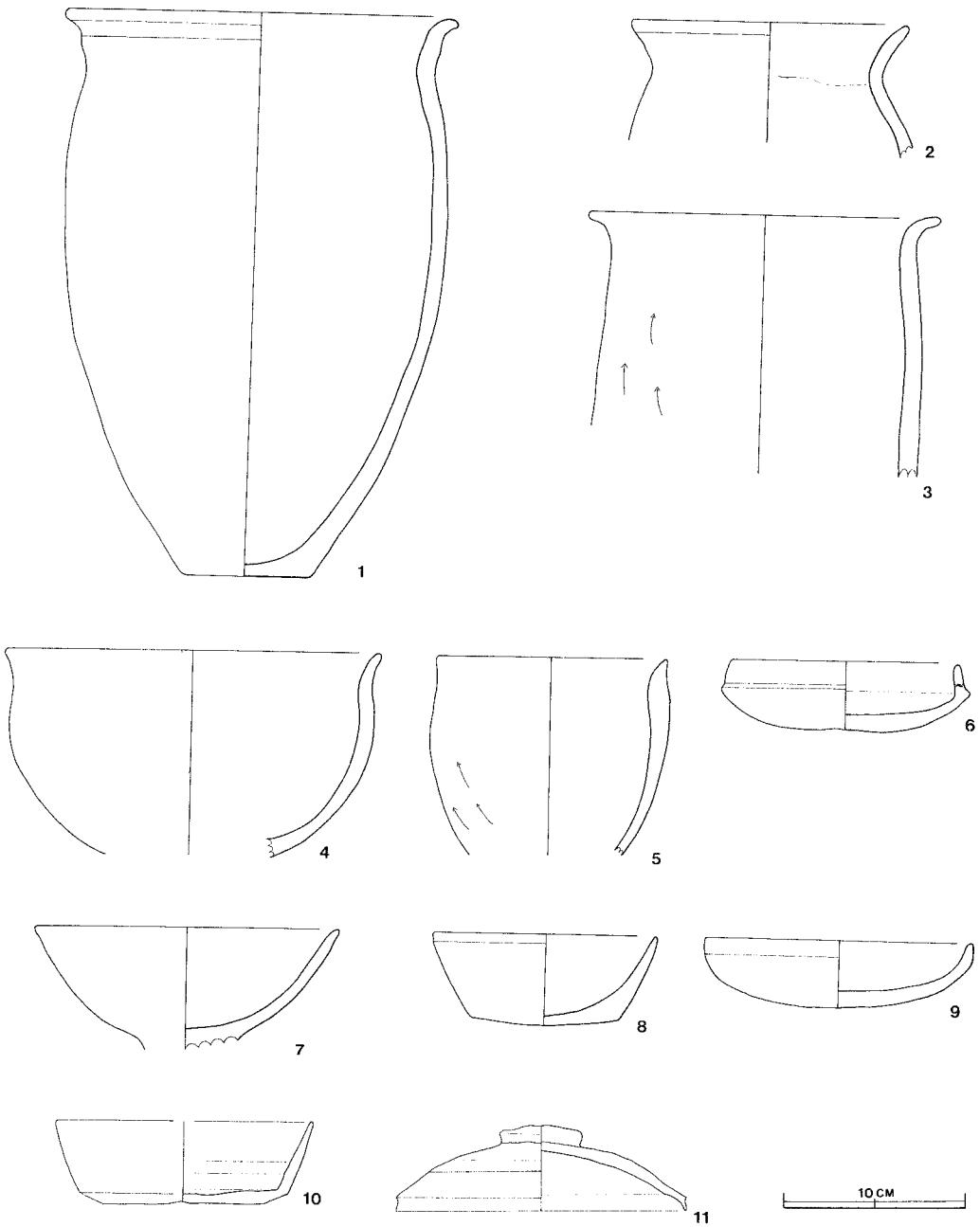
a－a′・b－b′

1．褐　色　ハードローム粒子（少）含有，山砂
2．にぶい黄褐色　小石（多）含有，山砂と粘土のミキシング土層
2a．にぶい黄褐色　小石（少）含有
3．褐　色　焼土粒子（少）含有，砂質の土層
4．褐　色　焼土粒子（少）ハードローム粒子（少）含有，砂質の土層
5．褐　色　焼土粒子（少）含有，砂質をおびている
6．褐　色　焼土粒子（少）含有
7．褐　色　ハードローム粒子（少）含有，粘性をおびている
8．明褐色　粘土と砂質のミキシング土層
9．褐　色　山砂主体，焼土（少）炭化粒子含有
10．褐　色　焼土粒子（少）ハードローム粒子（少）含有，砂質の土層
11．にぶい褐色　粘土・山砂のミキシング土層，焼土粒子（少）
12．暗褐色　焼土（少）炭化粒子含有，灰層

第19図　第７号住居址カマド実測図

東よりに位置し，南向きに構築されている。規模は長径104cm，短径102cm，北壁を56cm幅で，23cmほど掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径47cm，短径40cm，深さ４cmほどで円形に掘り窪めている。袖部はローム粒子と小石混りの砂質粘土である。

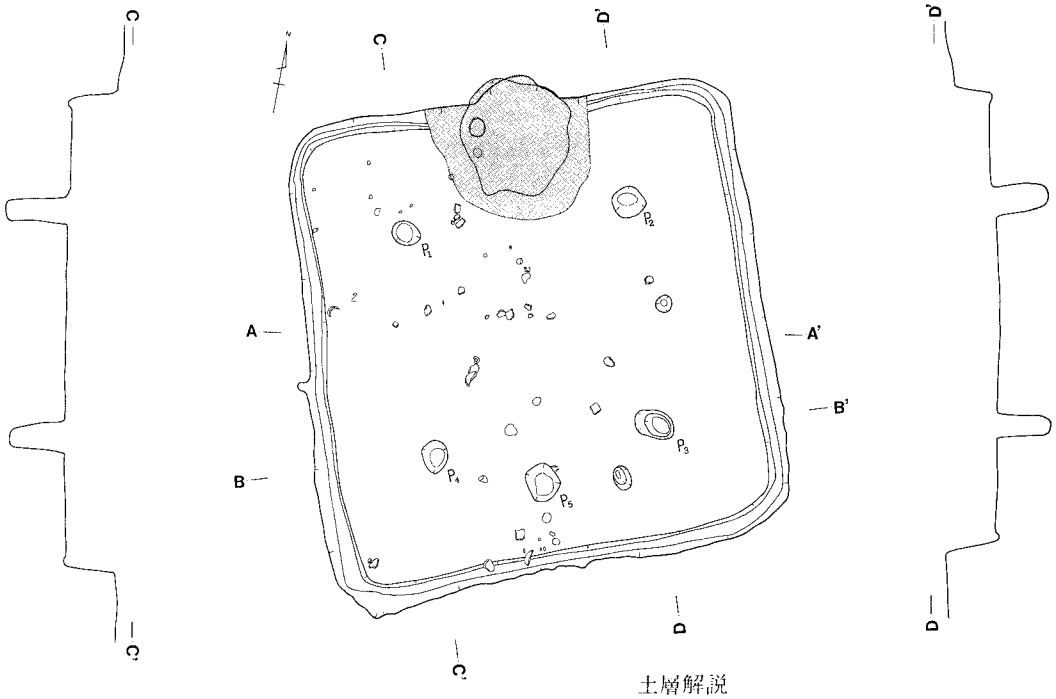
出土遺物は，土師器を中心に須恵器を出土している。北壁カマド際から土師器の甕（図20－1），北東コーナー床面直上から土師器の鉢（図20－5），南東コーナーＰ３付近床面直上から土師器

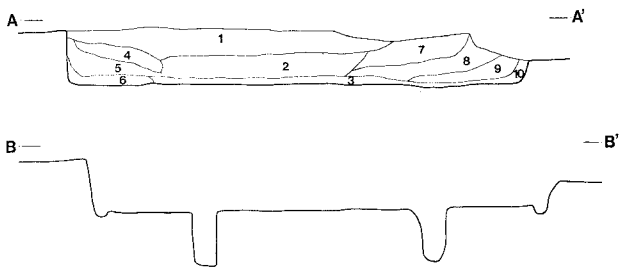


第20図　第７号住居址出土遺物実測図

の坏（図20－8），南西コーナー壁際床面より鉢（図20－4），西壁際床面直上から土師器坏（図20－6），須恵器坏片（図20－10），覆土から土師器の甕口縁部（図20－2），北西壁際床面直上から土師器の甕片（図20－3）と須恵器の蓋（図20－11），他に土師器の内黒の高坏（図20－7）を床面から出土し，甕，坏などの破片多数と須恵器の蓋と坏などの破片多数を出土した。　その他の出土遺物は，北西コーナー床面及び南東コーナー床面より砥石を出土し，他に鉄滓を数点と弥生式土器片の十王台式より古い型式の頸部・胴部・底部片を数点出土しており，底部片には布目の圧痕がみられる。本址は出土遺物等から真間期に比定される遺構と思われる。

第8号住居址（図21・22・23）





土層解説
A－A′
1．暗褐色　ローム粒子（少）含有
2．暗褐色　ローム粒子，焼土粒子（少）含有
3．暗褐色　ローム粒子，ハードロームブロック（少）炭化粒子（少）含有
4．褐　色　ローム粒子（多）焼土粒子（少）含有
5．暗褐色　ローム粒子，含有
6．褐　色　ローム粒子（多）ハードロームブロック（少2×2）含有
7．暗褐色　ローム粒子（少）ハードロームブロック（少2×2）含有
8．暗褐色　ローム粒子（少）焼土粒子（少）含有
9．暗褐色　ローム粒子（多）ハードロームブロック（少）含有
10．褐　色　ローム粒子（多）ハードロームブロック（少2×2）含有

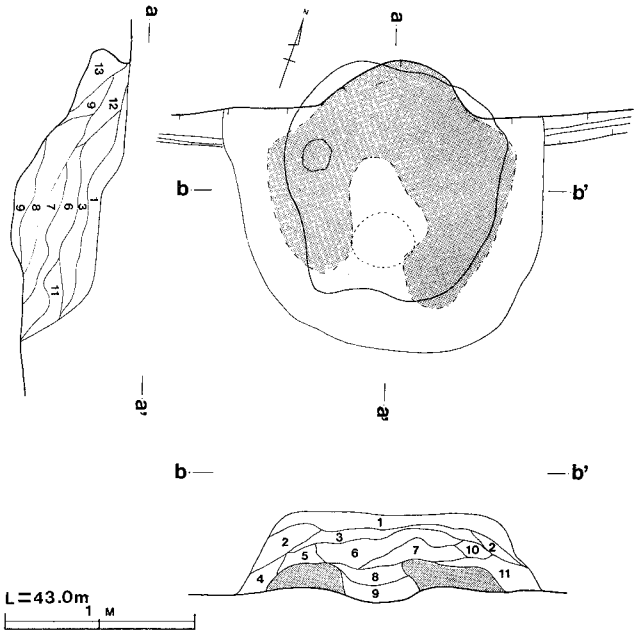
L=43.2m　1 M

第21図　第8号住居址実測図

本住居址は，調査区北部中ほどＡ１区ｂ７，ｂ８，ｂ９，ｃ７，ｃ８，ｃ９に確認され，西側1.5mには第7号住居址が,北側1.0mには第6号住居址が南側2.0mには第10号住居址が検出されている。主軸方向は,Ｎ―21°―Ｗで,規模は長軸5.10m,短軸4.83m,面積17.3㎡を測りほぼ隅丸長方形を呈している。壁高は33cm～57cmで，壁はほぼ垂直に立ち上がり,遺存状態は良好である。壁下には幅14cm，深さ５cm内外の壁溝がカマドの部分を除いて廻っている。床面は平坦で，踏みかためられた状態を示している。ピットは７箇所確認され，Ｐ１～Ｐ４は主柱穴と考えられる。南壁付近中央部のＰ５は出入口の施設に伴う柱穴と思われる。

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考
Ｐ１	33	27	65	主柱穴	Ｐ３	43	30	55	主柱穴
Ｐ２	36	34	50	主柱穴	Ｐ４	35	27	55	主柱穴

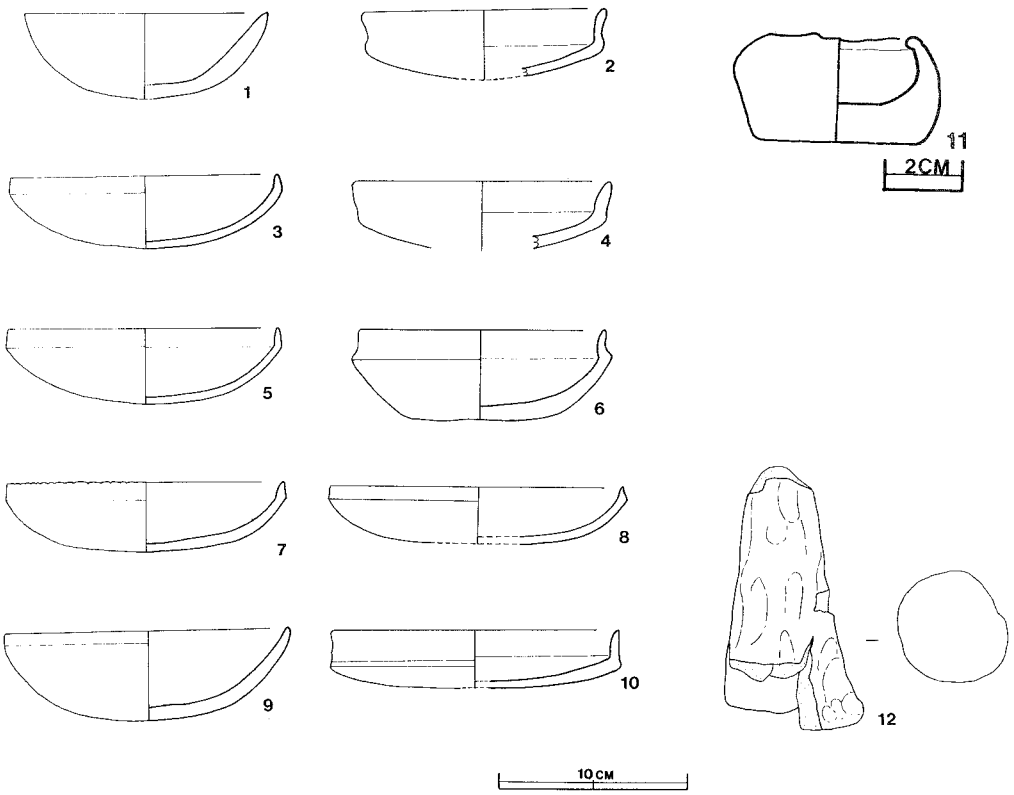
覆土は暗褐色土で10層からなり，自然堆積の状態を示している。上層は少量のローム粒子，中層はローム粒子，焼土粒子を含み，下層はローム粒子と少量のハードロームブロック，炭化粒子を含んでいる。カマドは北壁のほぼ中央部に付設され，南東向きに構築されている。規模は長径125cm，短径122cmで，北壁を80cm幅で，28cm掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径32cm，短径30cm，深さ６cmほど円形に掘りくぼめている。袖部は少量のローム粒子，ハードロームブロック混りの粘土である。



土層解説
a－a′・b－b′
1．褐　色　ハードローム粒子（多）含有
2．暗褐色　黒色土を主体，ハードローム粒子(多)含有
3．褐　色　ハードローム粒子（極少）含有，砂質の上層
4．褐　色　ハードローム粒子（多）含有
5．褐　色　ハードローム粒子（少）含有
6．にぶい褐色　山砂と粘土のミキシング土層
7．にぶい褐色　焼土粒子（少）含有，砂質の土層
8．褐　色　焼土粒子（多）含有，砂質の土層
9．赤褐色　焼土主体の土層
10．灰褐色　粘土（少）含有
11．褐　色　ハードローム粒子（少）含有
12．にぶい褐色　焼土（少）含有，山砂
13．暗赤褐色　炭化物（少）焼土，含有

第22図　第８号住居址カマド実測図

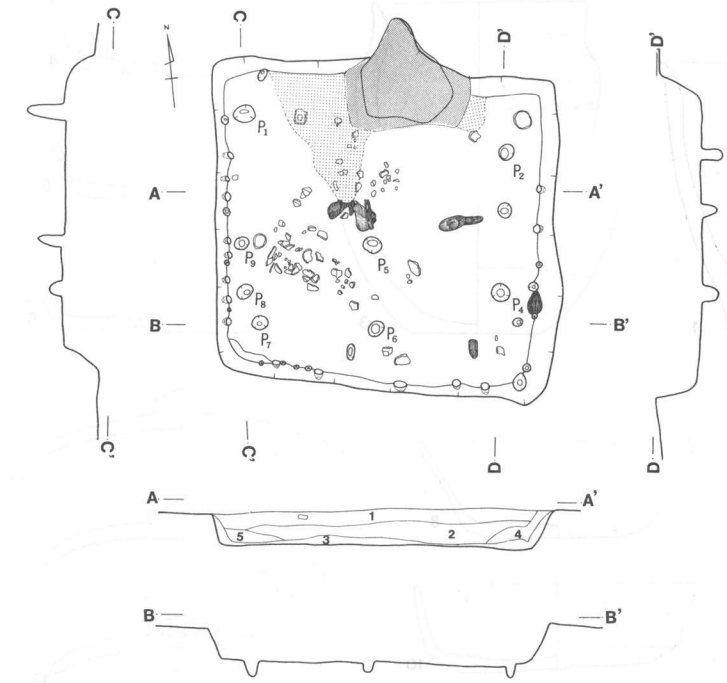
出土遺物は，土師器が主であるが，須恵器の蓋と坏の破片も出土している。カマド内から手捏土器（図23—11），と坏2個体分（図23—2・10），北コーナーカマド際から坏（図23—4），西コーナー床面直上から坏（図23—6），南コーナー床面直上から坏（図23—3）を，南西部床面から坏（図23—8）を，中央部床面直上から坏（図23—1）を出土し，他に坏（図23—5・7・9），甕・壺などの破片を多数出土している。その他，砥石，支脚（図23—12）等を出土し，弥生式土器の長岡系に比定される甕形土器の破片（口縁部，胴部）を数点出土している。本址は，出土遺物等から真間期に比定される遺構と思われる。



第23図　第8号住居址出土遺物実測図

第9号住居址（図24・25・26）

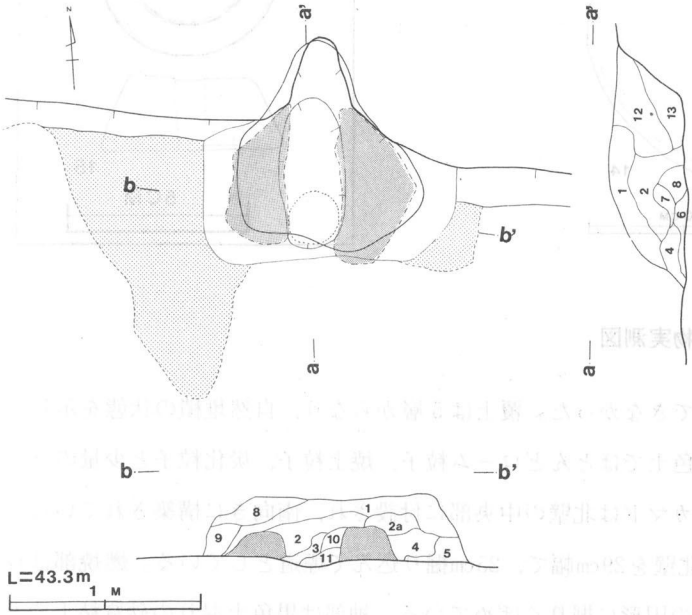
本住居址は，調査区の北部西端A1区a5，a6，b5，b6に確認され，南東1.5mに第15号住居址が検出されている。主軸方向はN—2°—Eで，規模は，長軸3.56m，短軸3.30m，面積10.4㎡を測り，ほぼ正方形を呈している。壁高は確認面から33cm～43cmで，壁はほぼ垂直に立ち上がり遺存状態は良好である。床面は軟らかく，カマド付近から多量の焼土を出土し，中央部や東壁際から炭化材が多量に出土しているので火災に遭遇していると思われる。ピットは34箇所確認されている



土層解説
A－A′
1．黒褐色　焼土粒（少）含有，しまりあり
2．暗褐色　ローム粒(極少)炭化粒(少)焼土粒（極少）含有
3．暗褐色　ローム粒(極少)炭化粒(多)焼土粒（少）含有
4．褐　色　ローム粒（多）焼土粒，炭化粒（少）ハードロームブロック含有
5．暗褐色　ローム粒（少）炭化粒(少)焼土粒（少）ハードロームブロック含有

L=43.0m　2 M

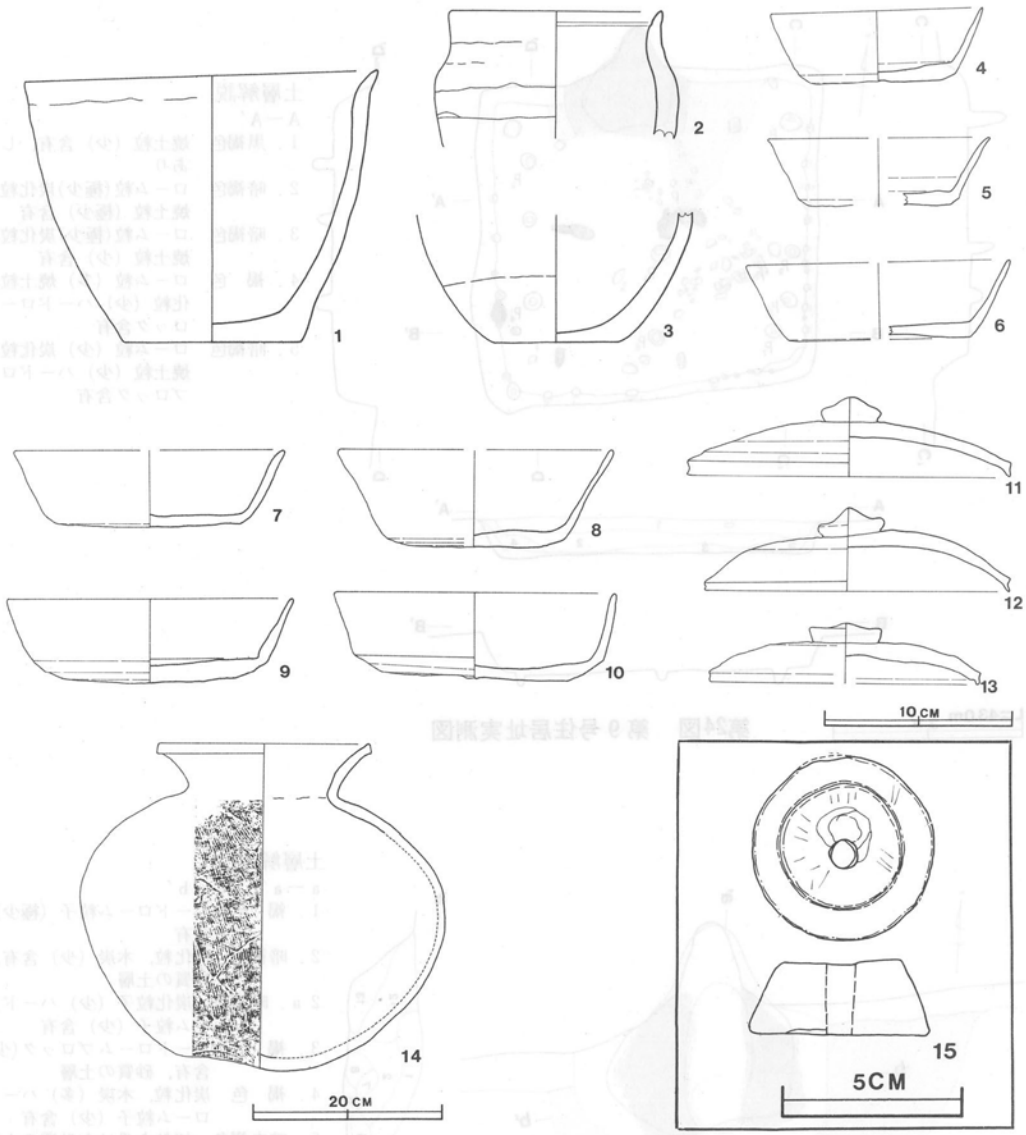
第24図　第９号住居址実測図



土層解説
a－a′・b－b′
1．褐　色　ハードローム粒子（極少）含有
2．暗褐色　炭化粒，木炭（少）含有，砂質の土層
2a．暗褐色　炭化粒子（少）ハードローム粒子（少）含有
3．褐　色　ハードロームブロック(少)含有，砂質の土層
4．褐　色　炭化粒，木炭（多）ハードローム粒子（少）含有
5．暗赤褐色　加熱を受けた砂質の土層
6．暗褐色　焼土ブロック（少）含有
7．褐　色　焼土粒子（極少）含有
8．暗褐色　粘土（少）炭化粒子，含有
9．黒褐色　炭化粒子（多）ハードローム粒子（少）含有
10．暗褐色　焼土粒子，炭化粒子，砂粒子（多）含有
11．暗赤褐色　焼土を主体
12．暗褐色　ローム粒子，砂粒　（多）含有
13．暗褐色　焼土粒子，炭化粒子，砂粒（多）含有

L=43.3m　1 M

第25図　第９号住居址カマド実測図



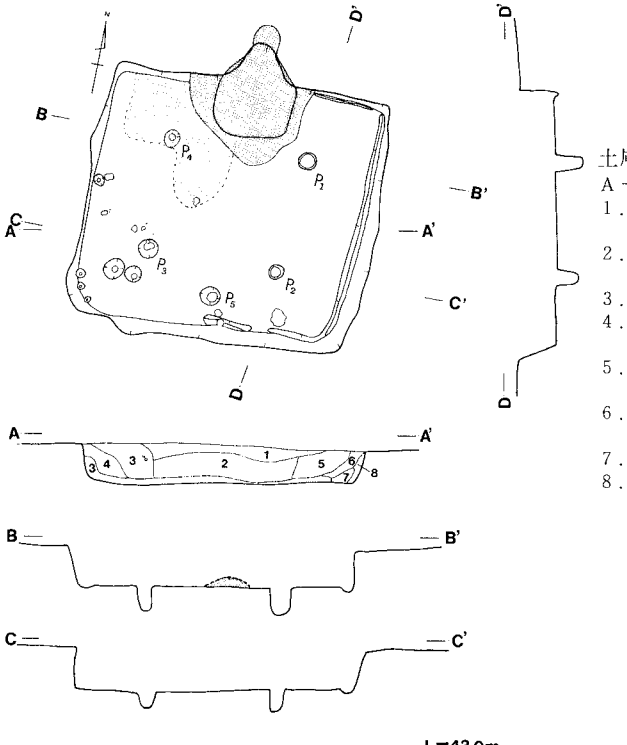
第26図　第９号住居址出土遺物実測図

が，主柱穴と思われるものは検出できなかった。覆土は５層からなり，自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土，下層は褐色土でほとんどローム粒子，焼土粒子，炭化粒子と少量のハードロームブロックを含んでいる。カマドは北壁の中央部に付設され，南向きに構築されている。規模は長径 121cm，短径 97cm，北壁を29cm幅で，25cm掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径30cm，短径25cm，深さ８cmほどの円形に掘りくぼめている。袖部は黒色土混りの砂質粘土である。出土遺物は，須恵器を中心に土師器が共伴している。須恵器は北西コーナー付近床面直上から坏７個体分（図26―４・５・６・７・８・９・10），カマド内から坏を，南東コーナー付近床面

直上から蓋３点　（図26—11・12・13）を，南西部床面直上から甕（図26—14）を出土し，他に細片を多数出土している。土師器は西壁際床面直上から小形甕（図26—２）と床面直上から鉢（図26—１）を出土し，他に甕，坏などの破片を多数出土している。その他，石製の紡錘車（図26—15）が西壁附近の床面直上から出土している。本址は，出土遺物等から真間期に比定される遺構と思われる。

第10号住居址（図27・28）

本住居址は，調査区の北部中ほどＡ１区ｃ８，ｃ９，ｄ８，ｄ９に確認され，北側2.0mに第８号住居址が検出されている。主軸方向はN—2°—Eで，規模は長軸3.05m，短軸2.78m，面積6.9㎡を測り，長方形を呈している。　壁高は確認面から37cm～45cmほどで，壁は垂直に立ち上がっている。壁下には東壁と南壁の一部に幅13cm，深さ５cm内外の壁溝を有し，床面はかたく，南にゆるやかに傾斜している。ピットは11箇所確認され，Ｐ１～Ｐ４は主柱穴と考えられる。南壁中央部付近のＰ５は出入口に伴う施設の柱穴かと思われる。壁側穴と思われるものを４箇所検出している。覆土は９層からなり，上層にはローム粒子，ハードロームブロックを多量に含み，遺構の確認が難しいほどであった。本址は廃棄された後埋めもどされた可能性が充分に考えられる。下層は多量のローム粒子とごく少量の焼土粒子を含んだ褐色土である。カマドは北壁の中央から東よりに，

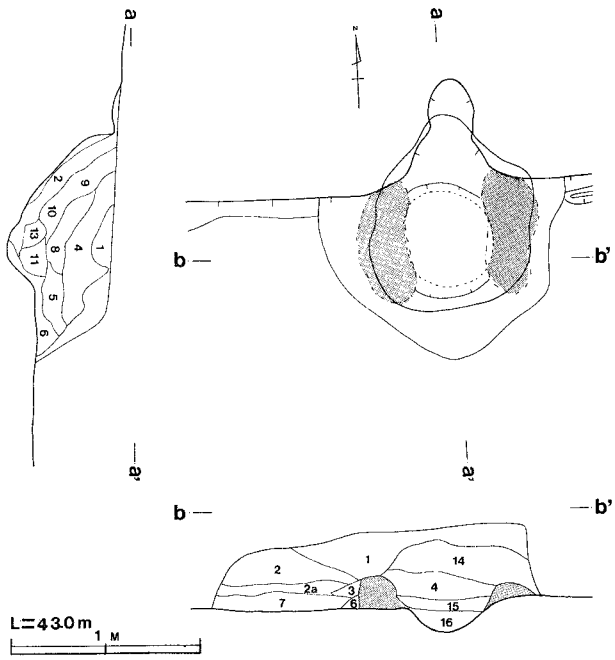


土層解説
Ａ—Ａ′
1．暗褐色　ローム粒子（少）ハードロームブロック（少）含有
2．褐　色　ローム粒子（多）ハードロームブロック（多）焼土粒子（少）含有
3．褐　色　ローム粒子（多）焼土粒子（極少）含有
4．褐　色　ローム粒子（多）ハードロームブロック（多）炭化粒子，焼土粒子（極少）含有
5．褐　色　ローム粒子（多）ハードロームブロック（少）炭化粒子，焼土粒子（少）含有
6．褐　色　ローム粒子（多）ハードロームブロック（少）焼土粒子，炭化粒子（少）含有
7．暗褐色　ローム粒子（少）焼土粒子（極少）含有
8．褐　色　ローム粒子（多）ハードロームブロック焼土粒子（極少）含有

第27図　第10号住居址実測図

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考
P 1	19	18	28	主柱穴	P 3	21	20	16	主柱穴
P 2	16	15	23	主柱穴	P 4	20	17	38	主柱穴

南向きに構築され，遺存状態は良好である。規模は長径122cm，短径95cmで，北壁を52cm幅で，50cmほど掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径50cm，短径48cm，深さ15cmで円形に掘りくぼめている。袖部は少量のローム粒子，ハードロームブロックを含む砂質粘土で，カマドの西側から多量の焼土が検出されている。出土遺物は，須恵器が主で，南壁際床面直上などから細片を数点出土している。その他，砥石片が北西床面直上から２点出土している。本址は出土遺物等からほぼ国分期に比定される遺構と思われる。



土層解説
a－a′・b－b′
1．暗褐色　ハードロームブロック（少）含有
2a．褐　色　ハードロームブロック（多）含有
2b．暗褐色　ハードロームブロック（少）含有
3．褐　色　ハードロームブロック（極少）含有
4．黄褐色　粘土層
5．褐　色　ハードローム粒子(少)焼土粒子含有
6．褐　色　ハードロームブロック（少）含有
7．黒褐色　黒色腐植土を主体，ハードローム粒子（少）含有
8．黄褐色　粘土主体の土層
9．にぶい赤褐色　焼土ブロック（多）含有
10．褐　色　焼土（少）含有，砂質
11．黒赤褐色　焼土粒子（少）ハードロームブロック含有，砂質
12．黄褐色　粘土を主体
13．灰白色　灰層
14．にぶい褐色　粘土ブロック（少）焼土ブロック含有，山砂層
15．褐　色　焼土ブロック（少）混，砂質の土層
16．褐　色　ハードロームブロック（少）焼土粒子（極少）含有，砂質

第28図　第10号住居址カマド実測図

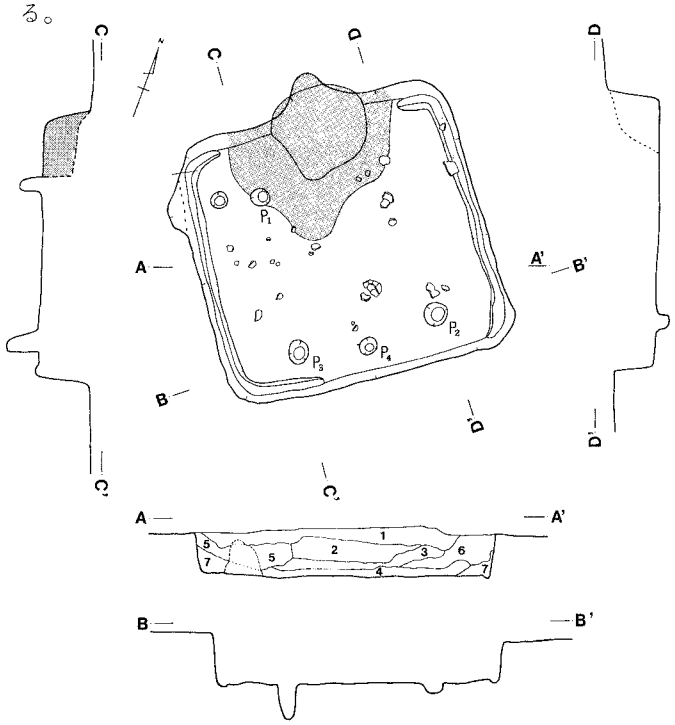
第11号住居址（図29・30・31）

本住居址は，調査区の北西部中ほどＡ１区ｃ５，ｃ６，ｄ５，ｄ６に確認され，東側6.5mには第10号住居址が検出されている。本址の主軸方向はN－35°－Wで規模は長軸3.70m，短軸2.90m，面積は6.9㎡ほどで正方形を呈している。　壁高は確認面から40cm～55cmほどで，壁はほぼ垂直に立ち上がり，遺存状態は良好である。壁下にはカマドと南壁の一部を除いて幅10cm，深さ５cm内外の壁溝を有している。床は南に傾斜し，硬く踏みかためられた状態を示している。ピットは５箇

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考
P 1	20	18	29	主柱穴	P 3	27	20	40	主柱穴
P 2	25	23	17	主柱穴					

所確認されP１～P３は主柱穴と考えられるが，南壁中央付近のP４は出入口の施設に伴う柱穴と思われる。覆土は９層からなり，自然堆積の状態を示し，上層は黒褐色土で極 少量のローム粒子，焼土粒子を含み，中層は褐色土で多量のローム粒子，少量の焼土粒子，ハードロームブロックを含んでいる。カマドは北壁中央から東よりに付設され，南向きに構築されている。規模は長径103cm，短径81cm，北壁を65cm 幅で，27cm程度掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径52cm，短径34cm，深さ６cmで楕円形に掘り 窪 めている。袖部は少量のローム粒子，ハードロームブロック混りの砂質粘土である。

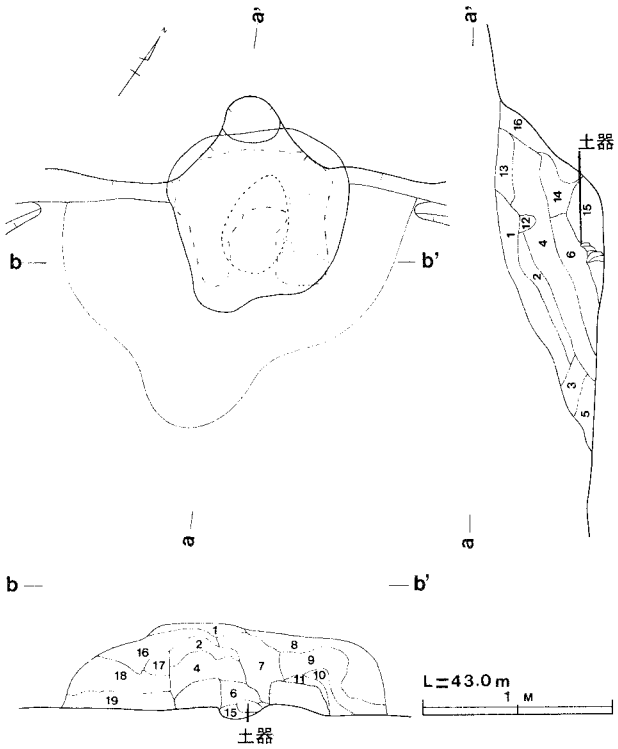
出土遺物は，土師器を主とし須恵器は破片のみ若干出土している。北壁付近床面直上から土師器の坏，北東部床面直上から坏（図31－1），南壁附近床面から坏（図31－2）を出土し，他には甕・坏などの破片を数点出土している。本址は出土遺物等から真間期に比定される遺構と思われる。



土層解説
A－A′
1．黒褐色　ローム粒子(極少)焼土粒子（極少）含有
2．褐　色　ローム粒子（多）炭化物（少）ハードロームブロック(少)焼土粒子（少）含有
3．暗褐色　ローム粒子（多）焼土粒子（少）ハードロームブロック(少)含有
4．褐　色　ローム粒子（多）焼土粒子（少）ハードロームブロック(少)含有
5．暗褐色　ローム粒子（多）ハードロームブロック（少）焼土粒子（少）含有
6．褐　色　ローム粒子（多）ハードロームブロック（少）含有
7．明褐色　ローム粒子（多）含有

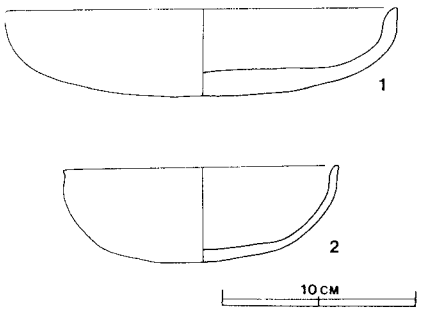
L＝43.2m
2 M

第29図　第11号住居址実測図



土層解説
a－a′・b－b′
1．褐　色　ハードロームブロック（少）粘土粒子含有
2．褐　色　粘土粒子（少）含有，砂質土層
3．褐　色　粘土ブロック（少）含有
4．にぶい褐色　粘土主体の土層，ハードローム粒子（極少）含有
5．褐　色　ハードロームブロック（少）含有，粘土層
6．暗褐色　ハードロームブロック（少）含有
7．にぶい褐色　粘土主体の土層
8．褐　色　ハードローム粒子（多）含有
9．暗褐色　ハードローム粒子（少）含有
10．褐　色　ハードローム粒子（少）含有
11．褐　色　粘土粒子（少）含有，砂質土層
12．褐　色　粘土粒子（少）含有，砂質土層
13．褐　色　粘土粒子（少）含有，砂質土層
14．褐　色　焼土粒子（少）含有，粘土，砂のミキシング土
15．暗褐色　ハードローム粒子（少）含有，砂質
16．暗褐色　ハードローム粒子（少）白色粘土，炭化粒子含有，砂質
17．暗褐色　粘土粒子，ハードローム粒子（少）含有
18．褐　色　ハードローム粒子（少）を主体，炭化粒子（極少）含有
19．暗褐色　ハードローム粒子（少）含有

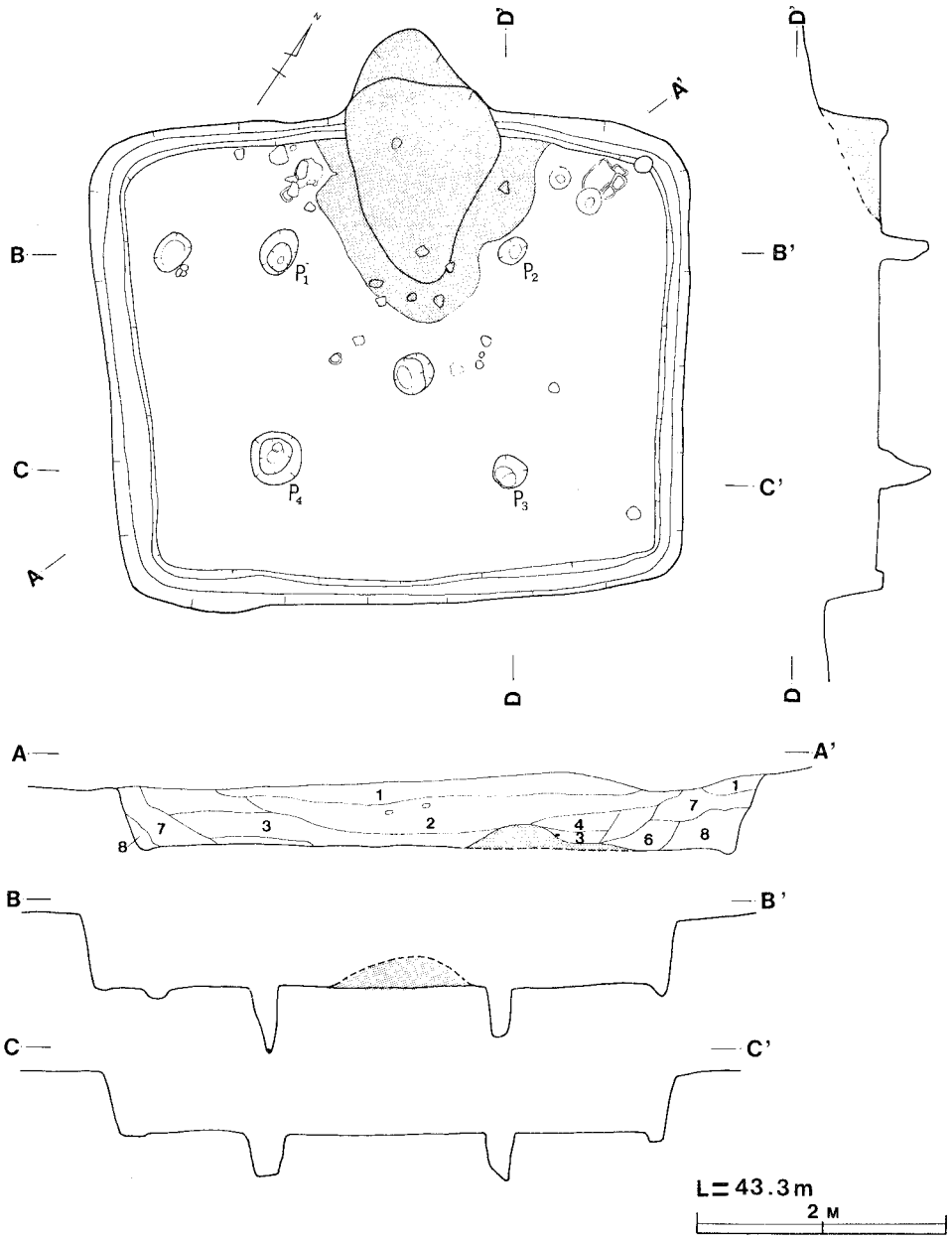
第30図　第11号住居址カマド実測図



第31図　第11号住居址出土遺物実測図

第12号住居址（図32・33・34）

本住居址は，調査区の北端Z１区ｊ６，ｊ７，Ａ１区ａ６，ａ７に確認され，北西2.0mには第6号住居址が，北東1.5mには第９号住居址が検出されている。主軸方向はＮ－36°－Ｗで規模は，長軸は4.65m短軸3.90m，面積14.4㎡ほどで隅丸長方形を呈している。壁は北西が高く，壁高は確認面から43cm～62cmで，壁はほぼ垂直に立ち上がっている。壁下には，カマドを除いて幅10cm，深さ５cm内外の壁溝を有している。床面はほぼ平坦で，硬く踏みかためられた状態を示している。



土層解説

A－A′

1．黒褐色　ローム粒子．焼土粒子，炭化粒子(極少)含有
2．黒褐色　ローム粒子（少）炭化粒子（極少）含有
3．極暗褐色　ローム（多）粘土含有
4．黒褐色　ローム粒子，焼土粒子，含有
5．黒褐色　ローム粒子（多）焼土ブロック，ロームブロック（少）含有
6．暗褐色　ローム粒子（多）焼土粒子（少）粘土含有
7．黒褐色　ローム粒子，焼土粒子，含有
8．褐　色

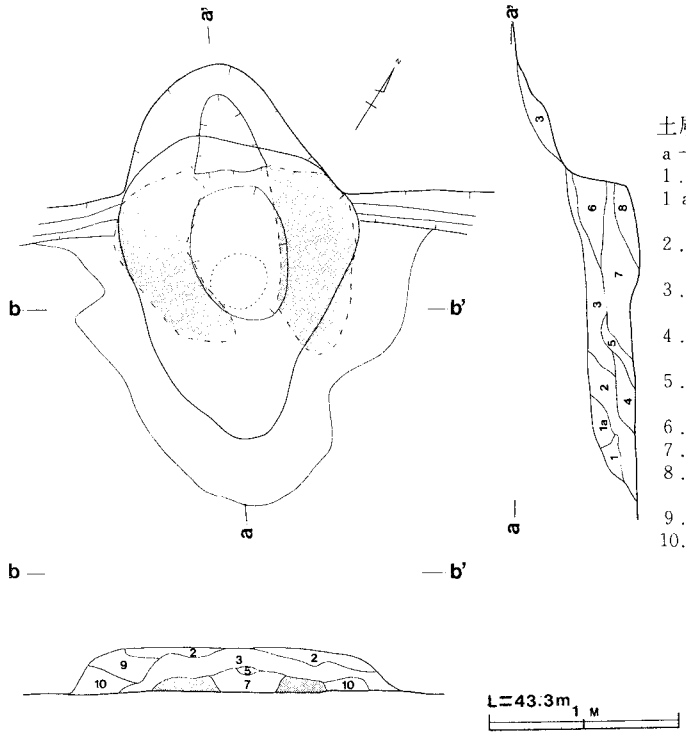
第32図　第12号住居址実測図

ピットは８箇所確認され，Ｐ１～Ｐ４までは主柱穴と考えられ，貯蔵穴は有していない。

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考
Ｐ１	40	27	52	主柱穴	Ｐ３	27	25	38	主柱穴
Ｐ２	24	19	43	主柱穴	Ｐ４	46	45	35	主柱穴

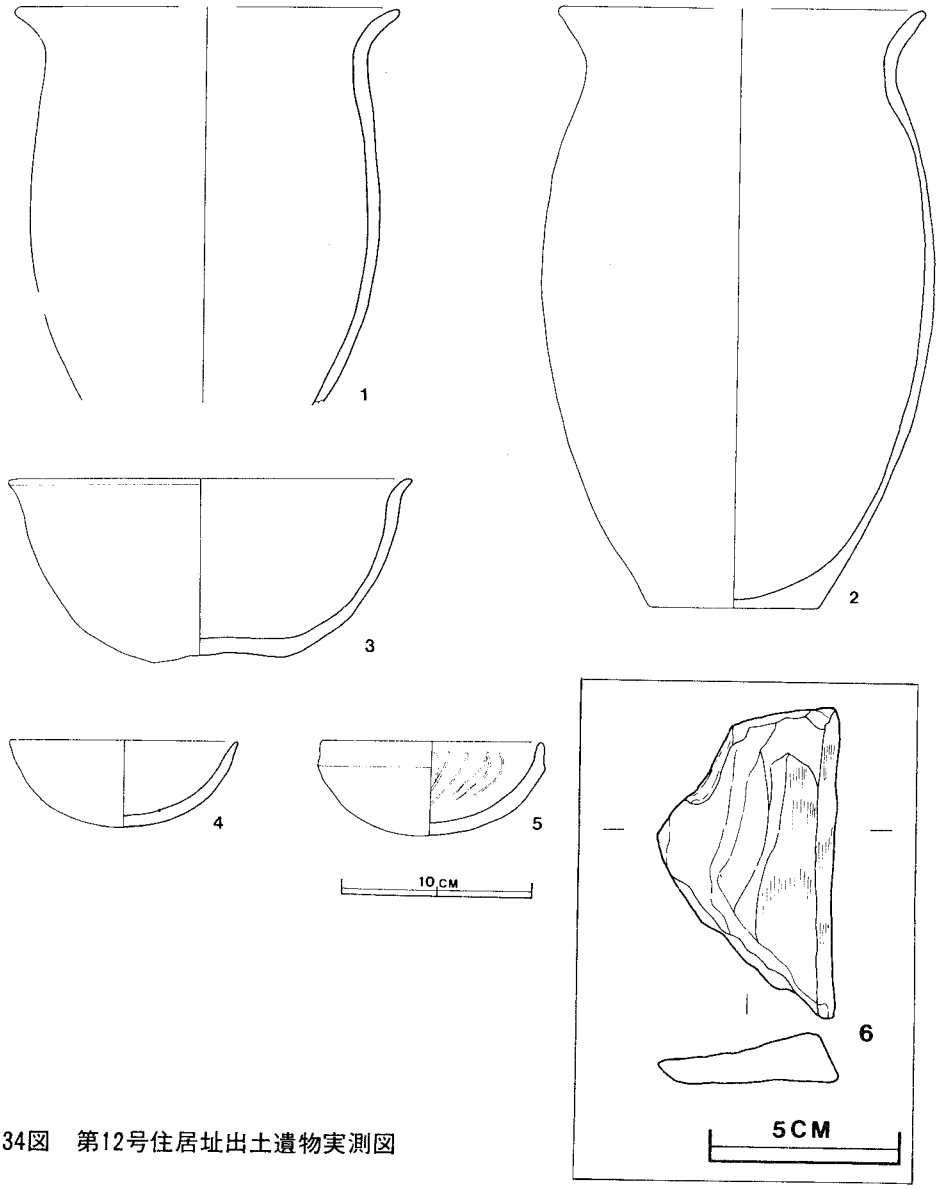
覆土は14層からなり，自然堆積の状態を示している。上層は黒褐色土でローム粒子，焼土粒子と 極 少量の炭化粒子を含み，中層は黒褐色土で少量のローム粒子，　極少量の炭化粒子を，下層は極暗褐色土で多量のローム粒子を含んでいる。北側には白色粘土が混っている。カマドは北壁中央から東よりに付設され，南東向きに構築されている。規模は長径155cm，短径126cmで，北壁を112cm幅で，58cmほど掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径32cm，短径33cm，深さ８cmほど円形に掘り 窪 めている。　　袖部は，ローム粒子とハードロームブロック混りの小石を含む砂質粘土である。焚口部からは粘土の焼けたものを多量に出土している。

出土遺物は，土師器を主とし須恵器を共伴して出土している。須恵器は坏や蓋などの破片のみであるが，土師器の遺存率の高いものをあげると，北西コーナー床面から甕（図34－２），北壁中



第33図　第12号住居址カマド実測図

央付近床面直上から甕片(図34－1),鉢片（図34－3），　西壁中央附近床直上から坏（図34－4），他に床直上から坏（図34－5），甕，坏などの破片と，その他北東部床面直上から砥石片(図34－6）を出土している。本址は，出土遺物等から真間期に比定される遺構と思われる。



第34図　第12号住居址出土遺物実測図

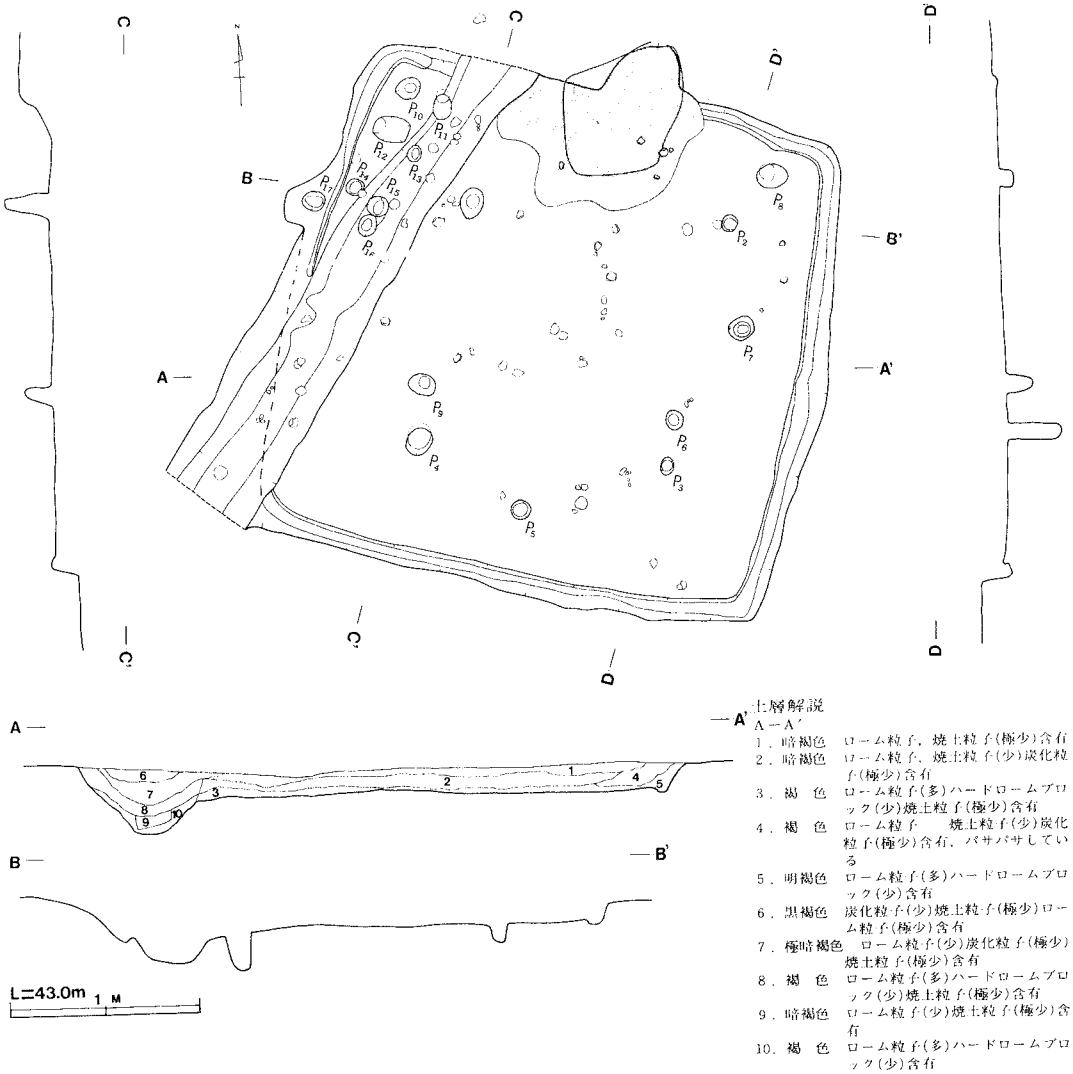
第13号住居址（図35・36・37）

本住居址は，調査区北部中ほどＡ１区　ｂ０，ｇ０，Ａ２区　ｇ１，ｈ１に確認され南西1.2mには第３号住居址が検出されている。主軸方向はＮ－18°－Ｅで,規模は長軸5.78m，短軸5.35m，面積21.0㎡を測り，隅丸長方形を呈している。本址の西側は南西から北東へ幅約82cm，深さ約30cmの第３号溝が切ってあり，北西コーナーの一部が残存している。本址は第３号溝より古い遺構

である。壁高は西側が高く15cm～35cm前後確認され，壁はほぼ垂直に立ち上がっている。壁下にはカマドの西壁を除き幅16cm，深さ10cm内外の壁溝が廻っている。床面は木の根などによる攪乱を受けて凸凹しているが硬くしまり，全体的に南に傾斜している。ピットは17箇所確認され，P1～P4は主柱穴と考えられる。南壁中央付近のP5は出入口の施設に伴う柱穴と思われる。

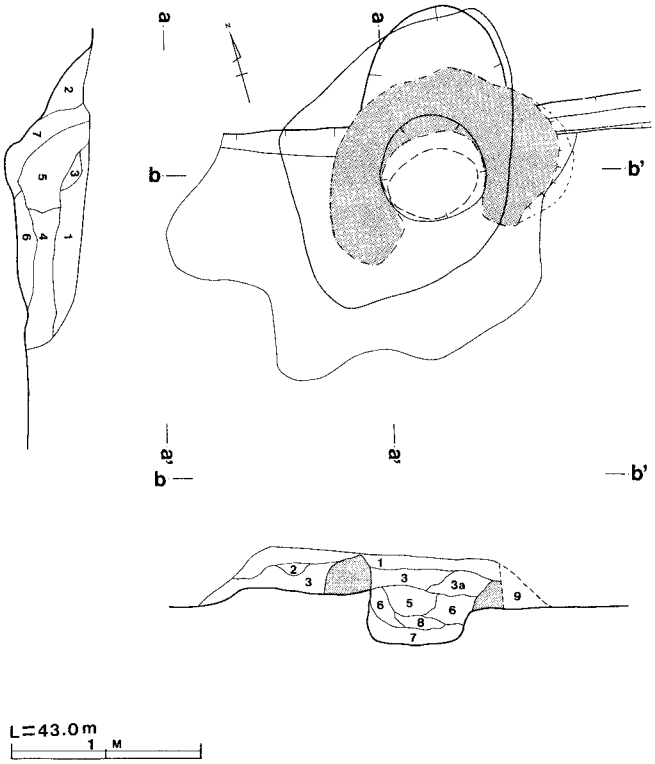
ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考
P1	31	25	40	主柱穴	P3	20	15	60	主柱穴
P2	18	16	15	主柱穴	P4	30	25	57	主柱穴

覆土は5層からなり，自然堆積状態を示している。上層は暗褐色土・褐色土でローム粒子，ハードロームブロック，焼土粒子，炭化粒子を含み，下層は明褐色土でローム粒子，ハードローム



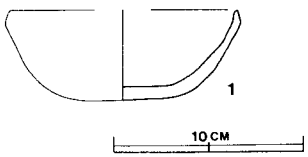
土層解説
A－A'
1．暗褐色　ローム粒子，焼土粒子(極少)含有
2．暗褐色　ローム粒子，焼土粒子(少)炭化粒子(極少)含有
3．褐　色　ローム粒子(多)ハードロームブロック(少)焼土粒子(極少)含有
4．褐　色　ローム粒子　焼土粒子(少)炭化粒子(極少)含有，パサパサしている
5．明褐色　ローム粒子(多)ハードロームブロック(少)含有
6．黒褐色　炭化粒子(少)焼土粒子(極少)ローム粒子(極少)含有
7．極暗褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(極少)焼土粒子(極少)含有
8．褐　色　ローム粒子(多)ハードロームブロック(少)焼土粒子(極少)含有
9．暗褐色　ローム粒子(少)焼土粒子(極少)含有
10．褐　色　ローム粒子(多)ハードロームブロック(少)含有

第35図　第13号住居址実測図



土層解説
a－a′・b－b′
1．黒褐色　ハードローム粒子(極少)含有
2．黒褐色　ハードローム粒子(極少)含有，砂質
3a．灰褐色　粘土ブロック(少)含有，砂質
3b．灰褐色　粘土ブロック(多)含有，砂質
4．灰褐色　ハードローム粒子(少)含有砂質
5．にぶい褐色　粘土，山砂のミキシング土層
6．褐　色　焼土粒子(少)含有，砂質
7．灰褐色　ハードローム粒子(少)含有灰層
8．暗褐色　焼土粒子，炭化粒子，砂粒(多)含有
9．灰褐色　ハードロームブロック(少)含有，粘土層

第36図　第13号住居址カマド実測図



第37図　第13号住居址出土遺物実測図

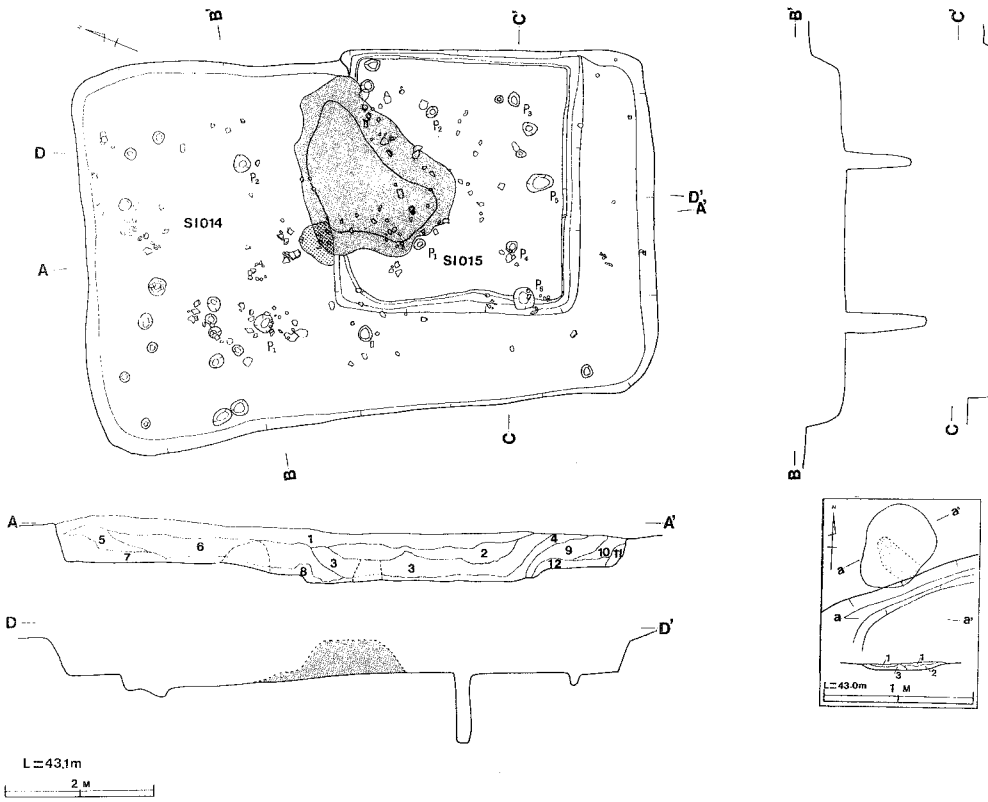
ブロックを少量含んでいる。カマドは北壁の中央から東よりに付設され，南西向きに構築されている。規模は長径128cm，短径117cmで，北壁を77cm幅で，35cmほど掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径45cm，短径52cm，深さ19cmで円形に掘り窪めている。袖部は黒色土混りの小石を含む砂質粘土で築かれている。焚口部からはローム粒子の焼けたものを多量に出土している。

出土遺物は非常に少なく，南東部床面から土師器の坏(図37－1),床面直上から坏,壺,甕などの破片を出土している。須恵器はすべて破片である。その他，弥生式土器の長岡系に比定されると思われる甕形土器の口縁部，胴部など数点を出土している。壁土の焼けたものと思われる焼土塊を少量出土していることから，本址は火災に遭遇していると思われる。本址は，出土遺物等から

真間期に比定される遺構と思われる。

第14号住居址（図38・40(1)･(2)）

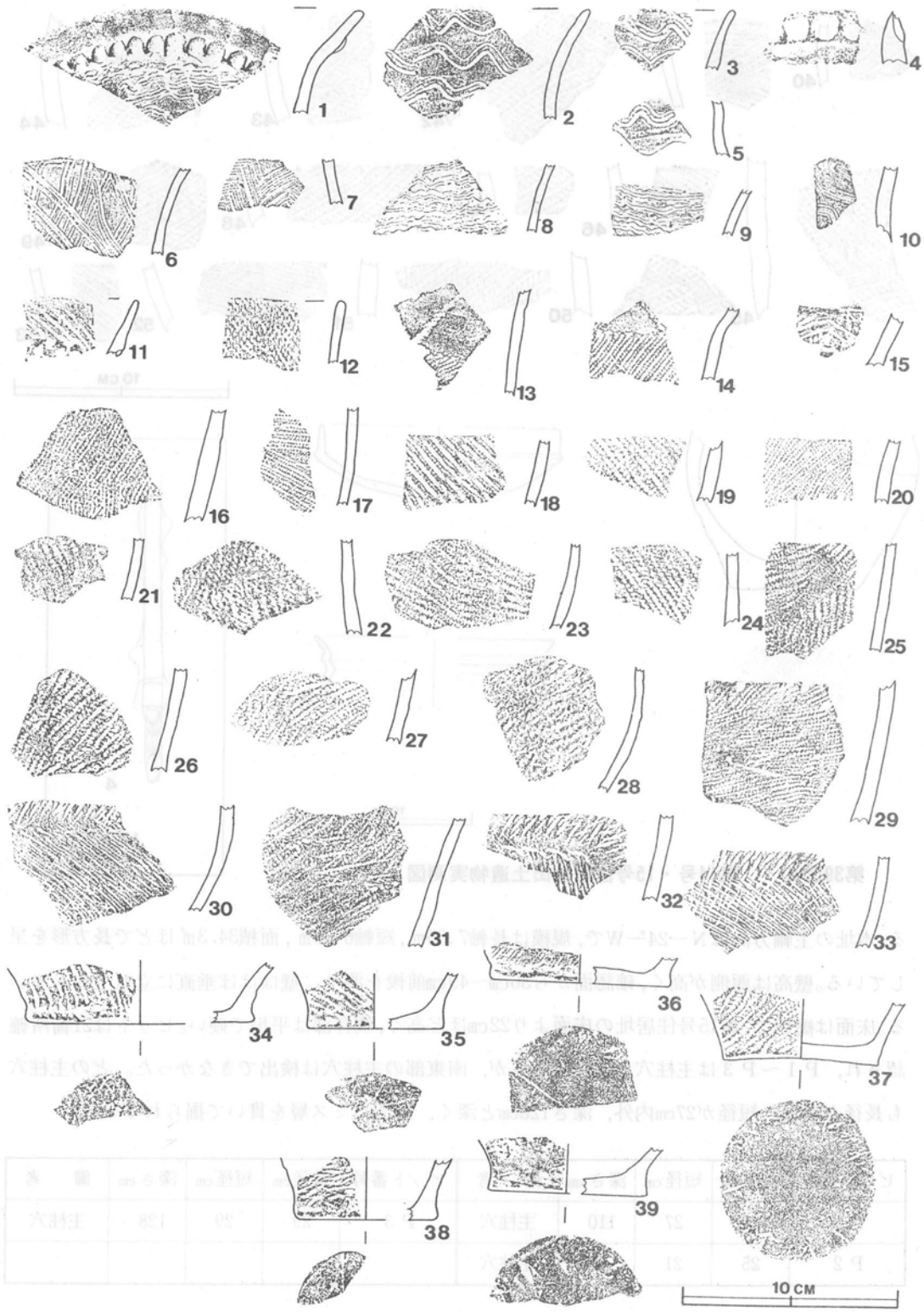
本住居址は，調査区の北西部Ａ１区ｅ７，ｆ６，ｆ７，ｇ６，ｇ７，ｇ８，ｈ７に確認され本址の南よりには東壁の一部を利用し，第15号住居址が床面を22cmほど掘り込んですっぽりと複合している。本址は第15号住居址より古い遺構である。南側5.0mには第17号住居址が検出されてい



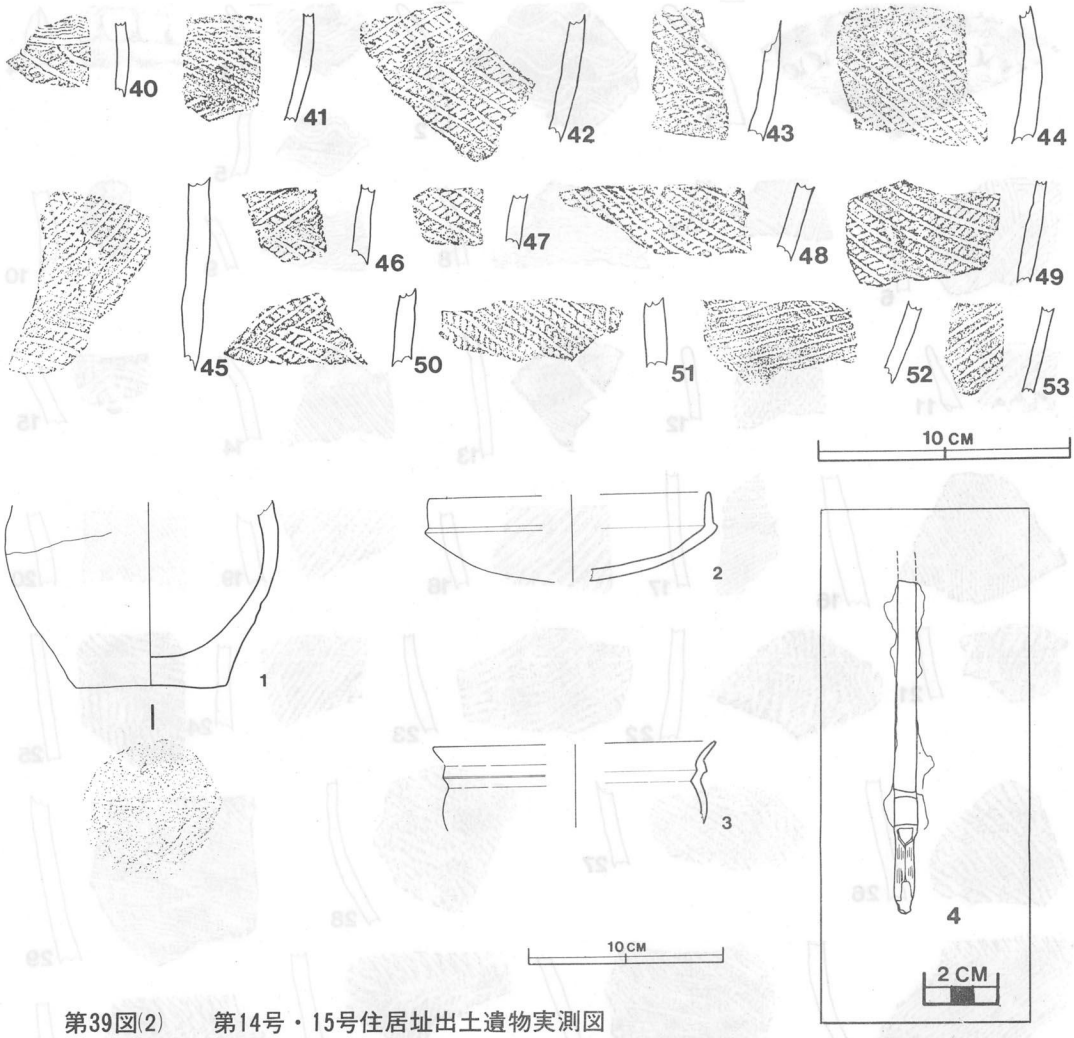
土層解説
a－a′
1．黒褐色　ハードロームブロック少量，焼土粒子，炭火粒子を多量に含有し，しまりあり
2．褐　色．多量のローム粒子を含有し，粘性あり
3．　　焼土

土層解説
Ａ－Ａ′
1．極暗褐色　ローム粒子(少)焼土粒子(極少)炭化粒子(極少)ハードロームブロック含有
2．黒褐色　ローム粒子(極少)焼土粒子(極少)炭化粒子(極少)ハードロームブロック，含有
3．暗褐色　ローム粒子，焼土粒子(極少)炭化粒子(極少)ハードロームブロック(極少)含有
4．極暗褐色　ローム粒子，焼土粒子(極少)炭化粒子(極少)含有，しまりあり
5．褐　色　ローム粒子(多)焼土粒子(極少)炭化粒子(極少)
6．褐　色　ローム粒子(少)焼土粒子(極少)炭化粒子(極少)ソフトロームブロック含有
7．明褐色　ハードロームブロック　焼土粒子(極少)炭化粒子(極少)含有
8．褐　色　ローム粒子(多)焼土粒子(極少)炭化粒子(極少)含有
9．褐　色　ローム粒子(多)焼土粒子(極少)炭化粒子(極少)含有
10．褐　色　ローム粒子(多)焼土粒子(極少)炭化粒子(極少)含有
11．明褐色　ローム粒子(多)焼土粒子(極少)ハードローム含有
12．褐　色　ローム粒子(多)焼土粒子(極少)炭化粒子(極少)含有

第38図　第14号・15号住居址実測図



第39図(1)　第14号住居址出土遺物拓影図



第39図(2)　第14号・15号住居址出土遺物実測図

る。本址の主軸方向はN—24°—Wで，規模は長軸7.60m，短軸6.00m，面積34.3㎡ほどで長方形を呈している。壁高は西側が高く，確認面から36cm～49cm前後を測り，壁はほぼ垂直に立ち上がっている。床面は褐色で，第15号住居址の床面より22cmほど高く，残存部は平坦で硬い。ピットは21箇所確認され，P1～P3は主柱穴と考えられるが，南東部の主柱穴は検出できなかった。どの主柱穴も長径が28cm，短径が27cm内外，深さ128cmと深く，鹿沼パミス層を貫いて掘られている。

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考
P1	28	27	110	主柱穴	P3	29	29	128	主柱穴
P2	25	21	88	主柱穴					

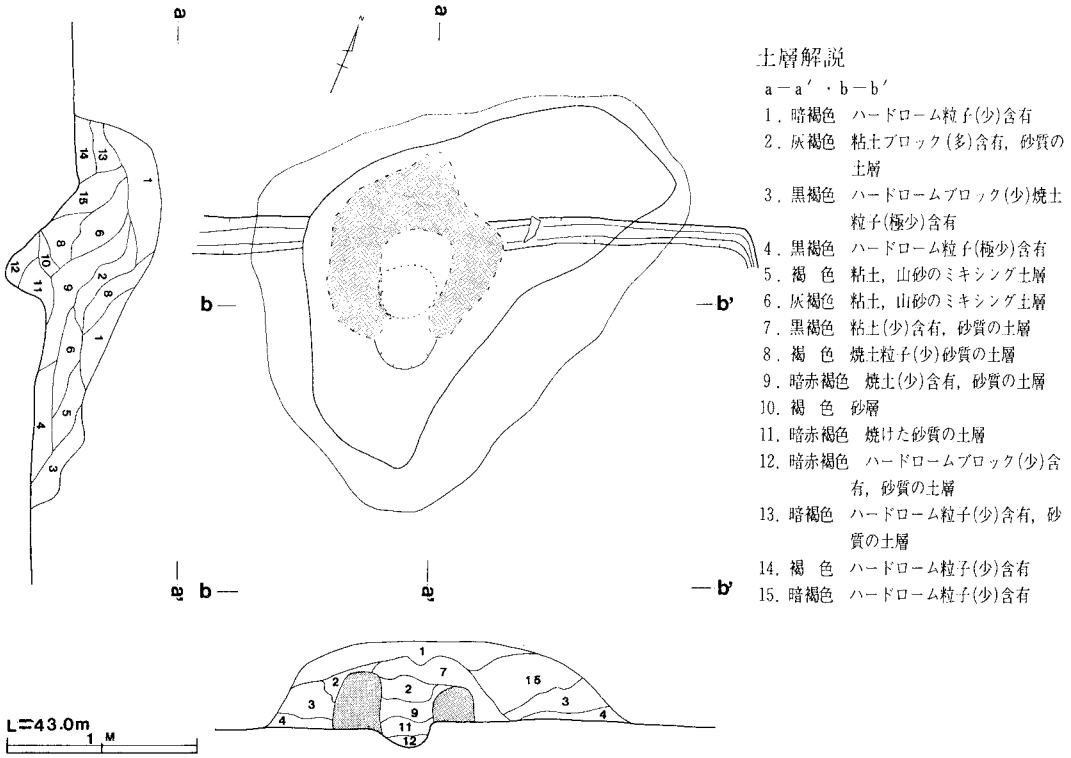
覆土の状態は第15号住居址に切られているが，他は自然堆積の状態を示している。覆土の上層は極暗褐色土でローム粒子，ハードロームブロック，焼土粒子を極少量含み，下層は暗褐色土で

ローム粒子を多量に，焼土粒子，炭化粒子をごく少量含んでいる。炉址は床面の中央部にあり，第15号住居址に約半分ほど削除されているが，長径58cm前後でほぼ楕円形を呈していたものと思われる。燃焼部はローム土が赤く焼け，焼土が多量に含まれていた。

出土遺物は弥生式土器の壺形土器口縁部，頸部，胴部，底部などの破片数点で，底部には布目圧痕がみられる。本址は弥生時代の長岡系に比定される遺構と思われる。

第15号住居址（図38・39(1),(2)）

本住居址は，調査区の北西部Ａ１区ｆ７，ｇ７，ｇ８に確認され，本址は第14号住居址の東壁の一部を利用し，床面を22cmほど掘り下げて構築されており，第14号住居址より新しい遺構である。南側5.0mには第17号住居址が検出されている。主軸方向はＮ－25°－Ｗで規模は長軸3.50m，短軸3.30m，面積8.8㎡のほぼ正方形を呈している。北・西・南の残存壁高は22cmほどで，東壁は約50cmであり，壁は垂直に立ち上がり，壁下にはカマドの部分をのぞき幅15cm，深さ８cm内外の壁溝が廻っている。床面は黒褐色の貼り床で，硬く踏みかためられた状態を示しているが凸凹が著しい。ピットは９箇所確認され，主柱穴はＰ１～Ｐ４，Ｐ５は出入口の施設に伴う柱穴と思われる。貯蔵穴は有していない。



第40図　第15号住居址カマド実測図

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考
P 1	16	14	?	主柱穴	P 3	18	16	25	主柱穴
P 2	17	14	?	主柱穴	P 4	16	15	16	主柱穴

覆土は8層からなり自然堆積の状態を示している。上層は極暗褐色土・黒褐色土で少量のローム粒子，極少量の炭化粒子，焼土粒子とハードロームブロックを含み，中層は暗褐色土でローム粒子と極少量の焼土粒子，炭化粒子，ハードロームブロックを含み，下層は極暗褐色土でローム粒子と極少量の焼土粒子と炭化粒子を含んでいる。カマドは北壁の中央部に付設され，南東向きに構築されている。規模は長径232cm，短径182cmで黒色土と小石混りの砂質粘土で築かれている。燃焼部は長径60cm，短径55cmで，40cmほど円形に掘りくぼめている。焚口部にはローム粒子の焼けたものが多量に出土している。出土遺物は少なく，土師器を主とし須恵器が少量出土している。須恵器は全て蓋や坏などの破片である。土師器の遺存状態の良好なものをあげると，東壁付近床面直上から小型甕（図39(2)－1），西壁際床面直上から坏（図39(2)－2）出土している。他には甕，椀（図39(2)－3），器台などの破片を数点出土している。また，鉄製品（図39(2)－4）を南西コーナー床面直上から出土している。

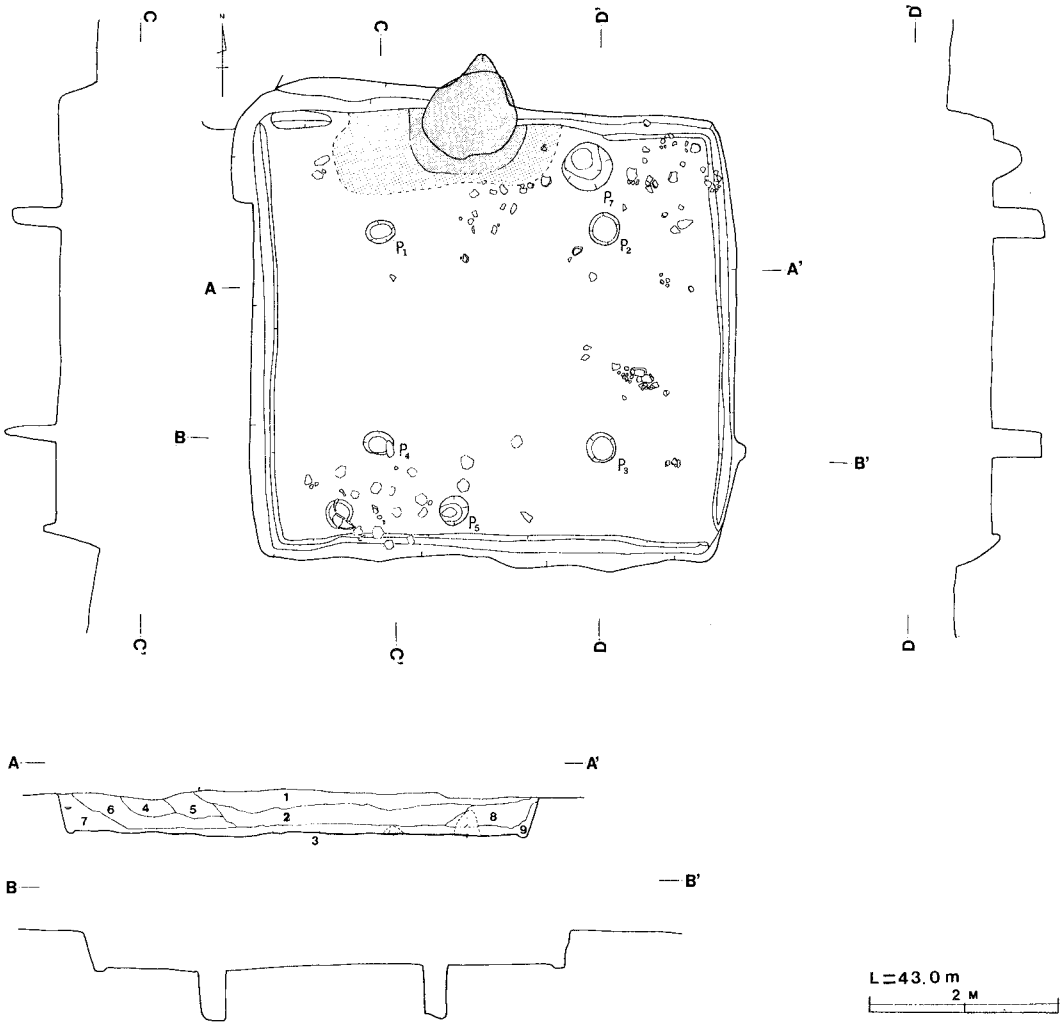
本址は，古墳時代の鬼高期に比定される遺構と思われる。

第16号住居址（図41・42・43）

本住居址は，調査区の中央部A1区 i 9，i 0，B1区 a 9，a 0に確認され，北西コーナーは第1号井戸に接し，南側3.0mには第18号住居址が検出されている。本址の主軸方向はN－1°－Wで規模は長軸5.10m，短軸4.60m，面積20㎡ほどの長方形を呈している。壁高は確認面から38cm～45cmであり，壁はほぼ垂直に立ち上がり，壁下には北壁を除き幅15cm，深さ13cm内外の壁溝が廻っている。

床面は平坦で踏みかためられた状態を示している。ピットは6箇所確認され，主柱穴はP1～P4，南壁付近のP5は出入口の施設に伴う柱穴と思われる。カマド東側のP6は貯蔵穴とみられ，規模は長径54cm，短径53cm，深さ30cmほどで円形を呈している。本址はカマド付近から焼土を多量に出土しているので火災に遭い廃棄された後，ローム土で埋めもどされた可能性も考えられる。覆土は9

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考
P 1	30	25	55	主柱穴	P 4	30	24	55	主柱穴
P 2	36	31	50	主柱穴	P 6	54	53	30	貯蔵穴（不整楕円形）
P 3	32	31	55	主柱穴					



土層解説

A－A′

1．暗褐色　ローム粒子，焼土粒子(極少)炭化粒子(極少)含有

2．暗褐色　ローム粒子，焼土粒子(少)炭化粒子(少)含有

3．褐　色　ローム粒子，焼土粒子(多)炭化粒子(多)炭化物，含有

4．褐　色　ローム粒子，焼土粒子(少)炭化粒子(少)サラサラしている，ハードロームブロック(少)含有

5．明褐色　ローム粒子(多)焼土粒子，炭化粒子，ハードロームブロック(多)含有，ロームでうめた感じ

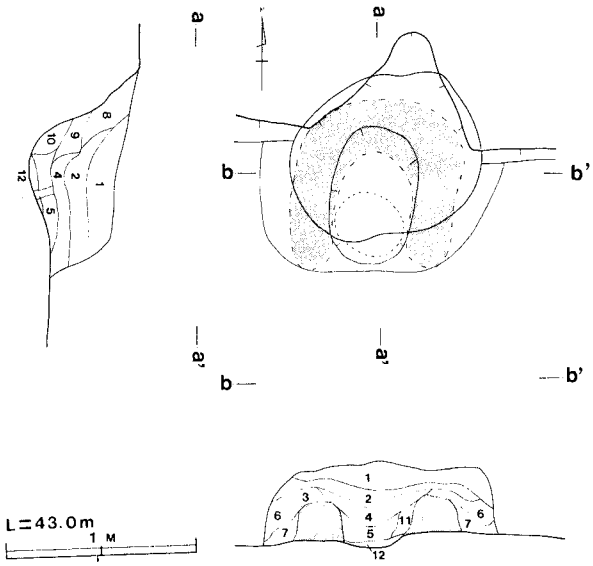
6．褐　色　ローム粒子(多)焼土粒子(少)炭化粒子(多)含有

7．褐　色　ローム粒子(多)焼土粒子(極少)炭化粒子(多)含有

8．褐　色　ローム粒子(多)焼土粒子，炭化粒子，ハードロームブロック(少)含有

9．明褐色　ローム粒子(多)焼土粒子，ハードロームブロック(多)含有

第41図　第16号住居址実測図

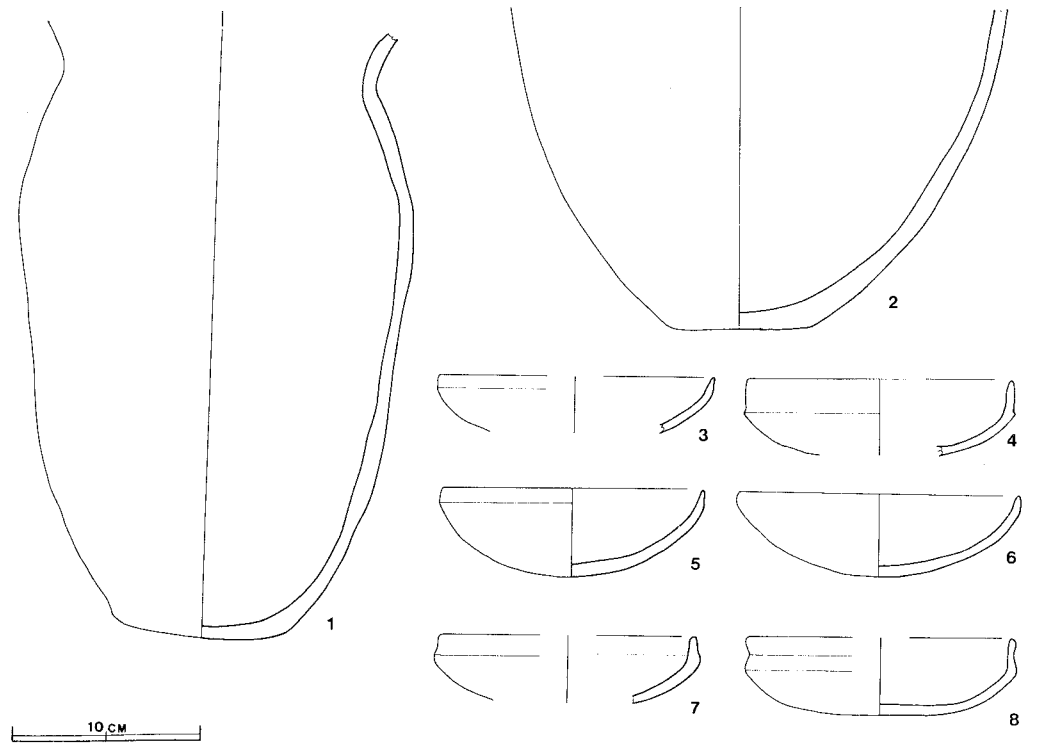


土層解説

a－a′・b－b′

1．暗褐色　ローム粒子(少)焼土粒子(多)砂粒（多）粘土(多)含有
2．暗褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(多)焼土粒子(特多)砂粒（特多）粘土(多)含有
3．暗褐色　ローム粒子(極少)炭化粒子(少)焼土粒子(特多)砂粒（多）含有，焼土を主体
4．暗褐色　ローム粒子(極少)炭化粒子(多)焼土粒子(多)砂粒（特多）粘土(少)含有
5．暗褐色　ローム粒子(極少)炭化粒子(少)焼土粒子(少)砂粒（特多）含有
6．暗褐色　ローム粒子(極少)炭化粒子(多)焼土粒子(多)砂粒（特多）含有
7．暗褐色　炭化粒子(少)焼土粒子(特多)砂粒(特多)含有
8．黒褐色　ローム粒子(特多)炭化粒子(多)焼土粒子(少)砂粒（特多）含有
9．暗褐色　ローム粒子(極少)炭化粒子(少)焼土粒子(少)砂粒（特多）含有
10．黒褐色　ローム粒子(少)炭化粒子(特多)焼土粒子(多)砂粒（特多）含有
11．黒褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(極少)焼土粒子(少)砂粒（少）含有
12．暗褐色

第42図　第16号住居址カマド実測図



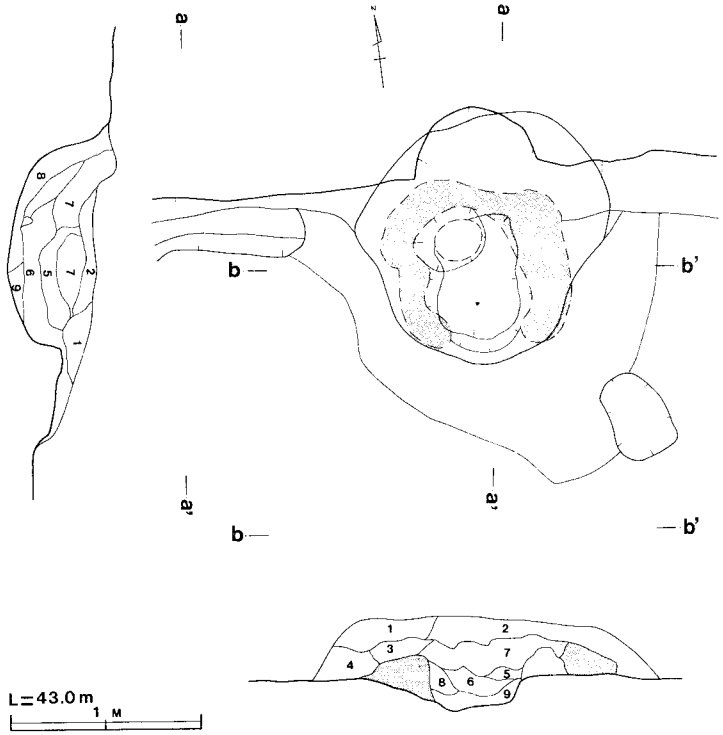
第43図　第16号住居址出土遺物実測図

層からなり，自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土でローム粒子，焼土粒子，炭化粒子を含み，下層は褐色土でローム粒子，焼土粒子，炭化粒子，炭化物を含んでいる。

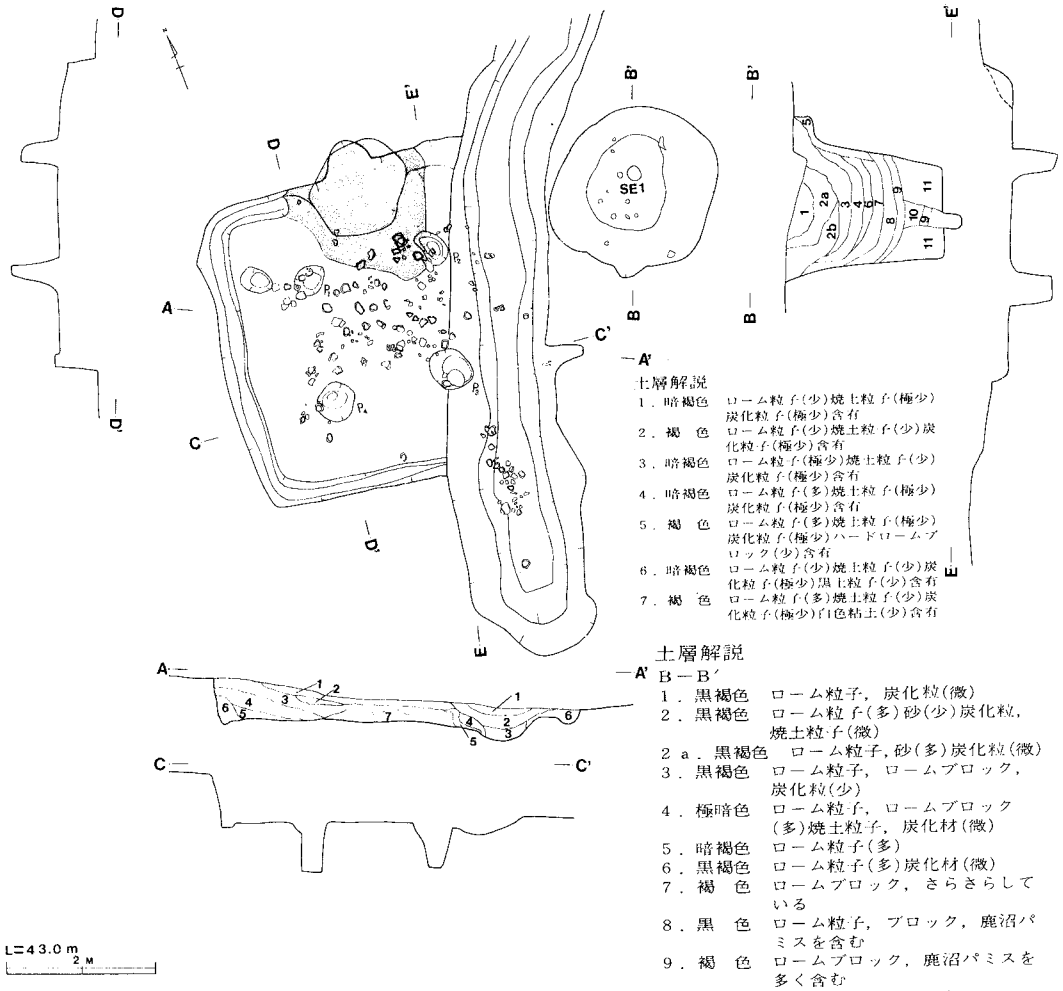
カマドは北壁の中央部に付設され，南向きに構築されている。規模は長径125cm，短径88cmで北壁を83cm幅で，54cmほど掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径71cm，短径50cm，深さ８cmほど掘りくぼめている。袖部は黒色土と小石混りの粘土で築かれている。出土遺物は，土師器が主で須恵器は全て坏などの破片や細片のみである。遺存状態の良好な土師器をあげると，カマド内より甕片（図43－２），南西壁附近床面直上より甕（図43－１），北東コーナー床面や床面直上から坏４個（図43－４・７），内黒の坏２個（図43－５・６）と，南東コーナー床面直上から坏（図43－８）のほかに甕と坏（図43－３）などの破片を多数を出土している。その他，クルミと思われる炭化物と鉄滓，軽石などと弥生式土器の十王台式より古い型式の土器片数点が出土し，底部には布目圧痕がみられる。本址は，出土遺物等から真間期に比定される遺構と思われる。

第17号住居址（図44・45・46）

本住居址は，調査区の中央部Ａ１区ｉ７，ｉ８，ｊ７，ｊ８に確認され，東側は溝状遺構に切られており，本址は溝状遺構より古い遺構である。南側5.0mには第14号住居址が，北側7.0mには第19号住居址が検出されている。本址の主軸方向はＮ－6°－Ｅで，規模は長軸4.15m，推定短



第44図　第17号住居址カマド実測図

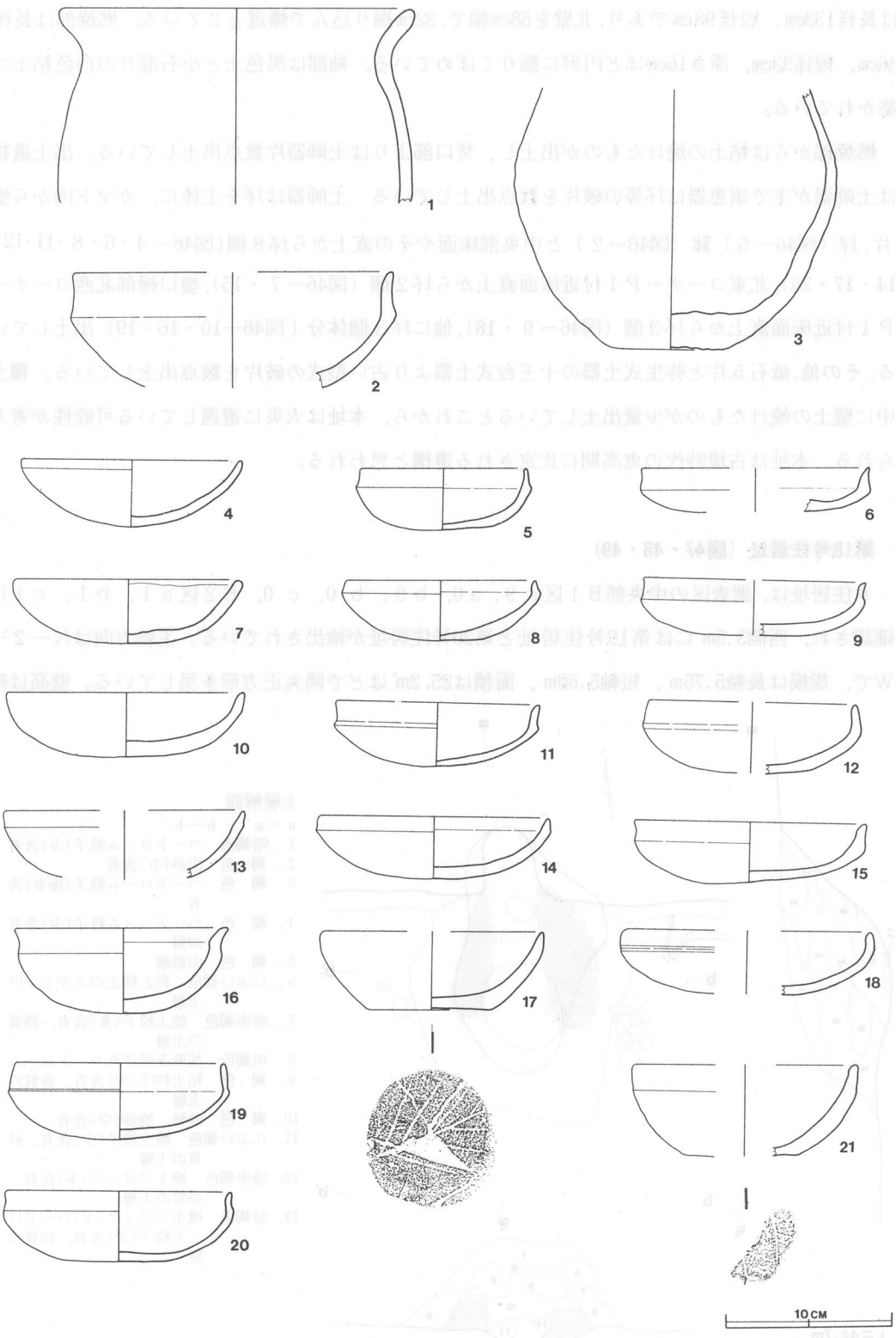


第45図　第17号住居址・第1号井戸状遺構実測図

軸4.0m，推定面積15.01㎡を測り，ほぼ隅丸正方形を呈している。　東側の床と壁は溝状遺構に切られ確認することができない。壁高は確認面から37cm～64cmを測り，壁は西側が高く，ほぼ垂直に立ち上がっている。壁下には東部を除き幅18cm，深さ5cm内外の壁溝を有している。

ピットは5箇所確認され，主柱穴はP1～P4と考えられる。貯蔵穴は有していない。覆土は7層からなり，自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土でローム粒子，焼土粒子，炭化粒子を含み，下層は褐色土で，多量のローム粒子，ハードロームブロック，焼土粒子，炭化粒子を含んでいる。カマドは北壁の中央付近に付設され，南向きに構築されている。　規模

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考
P1	46	37	49	主柱穴	P3	62	50	61	主柱穴
P2	50	35	51	主柱穴	P4	55	52	60	主柱穴



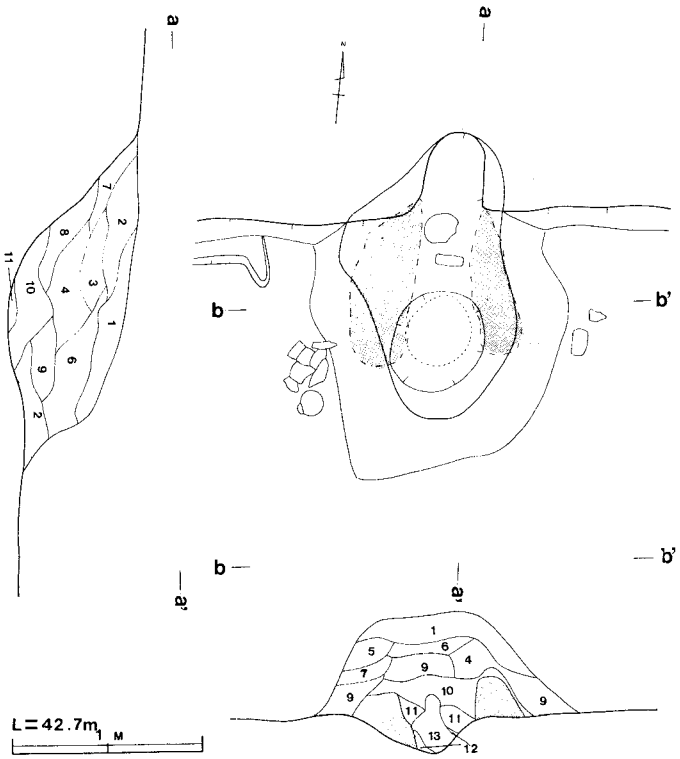
第46図　第17号住居址出土遺物実測図

は長径133cm，短径98cmであり，北壁を68cm幅で，32cm掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径36cm，短径33cm，深さ16cmほど円形に掘りくぼめている。袖部は黒色土と小石混りの白色粘土で築かれている。

燃焼部からは粘土の焼けたものが出土し，焚口部よりは土師器片数点出土している。出土遺物は土師器が主で須恵器は坏等の破片を数点出土している　土師器は坏を主体に，カマド内から甕片，坏（図46－５）鉢（図46－２）と中央部床面やその直上から坏８個(図46－４・６・８・11・12・14・17・20)，北東コーナーＰ１付近床面直上から坏２個（図46－７・15)，甕口縁部北西コーナーＰ１付近床面直上から坏３個（図46－９・18)，他に坏３個体分（図46－10・16・19）出土している。その他，砥石５片と弥生式土器の十王台式土器より古い型式の破片を数点出土している。覆土中に壁土の焼けたものが少量出土しているとこれから，本址は火災に遭遇している可能性が考えられる。本址は古墳時代の鬼高期に比定される遺構と思われる。

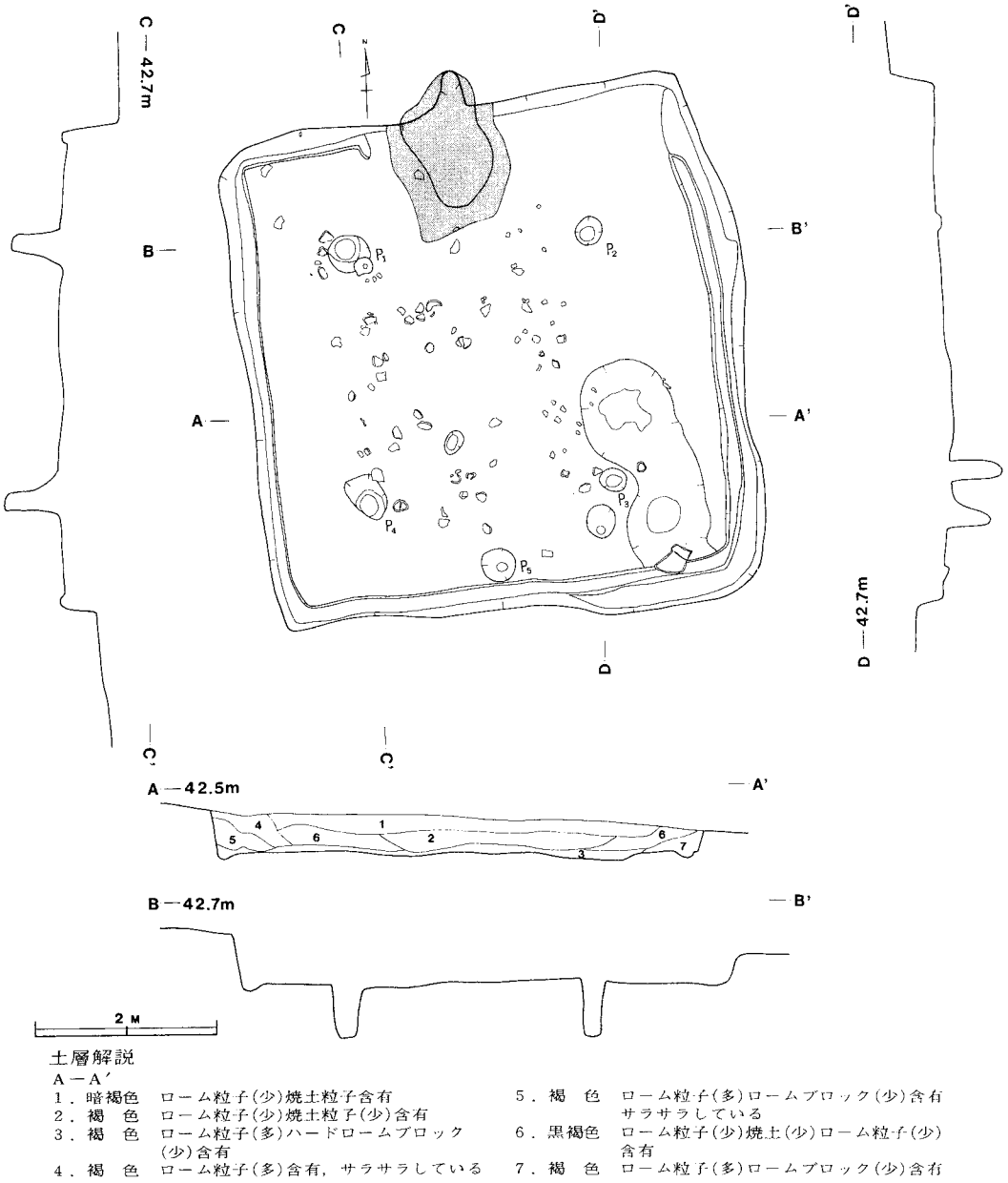
第18号住居址（図47・48・49）

本住居址は，調査区の中央部Ｂ１区ａ９，ａ0，ｂ９，ｂ 0，ｃ 0，Ｂ２区ａ１，ｂ１，ｃ１に確認され，西側3.5m には第19号住居址と第20号住居址が検出されている。主軸方向はＮ－２°－Ｗで，規模は長軸5.75m，短軸5.60m，面積は25.2㎡ほどで隅丸正方形を呈している。壁高は確



土層解説
a－a′・b－b′
1．暗褐色　ハードローム粒子(少)含有
2．褐　色　山砂(少)含有
3．褐　色　ハードローム粒子(極少)含有
4．褐　色　ハードローム粒子(少)含有　砂質
5．褐　色　山砂層
6．にぶい褐色　砂と粘土のミキシング土層
7．暗赤褐色　焼土粒子(多)含有，砂質の土層
8．明褐色　加熱を受けたハードローム
9．褐　色　粘土粒子(少)含有，砂質の土層
10．褐　色　砂層，焼砂(少)含有
11．にぶい褐色　焼土粒子(少)含有，砂質の土層
12．暗赤褐色　焼土ブロック(多)含有，砂質の土層
13．暗褐色　焼土ブロック(少)ハードローム粒子(少)含有，砂質土層

第47図　第18号住居址カマド実測図



土層解説

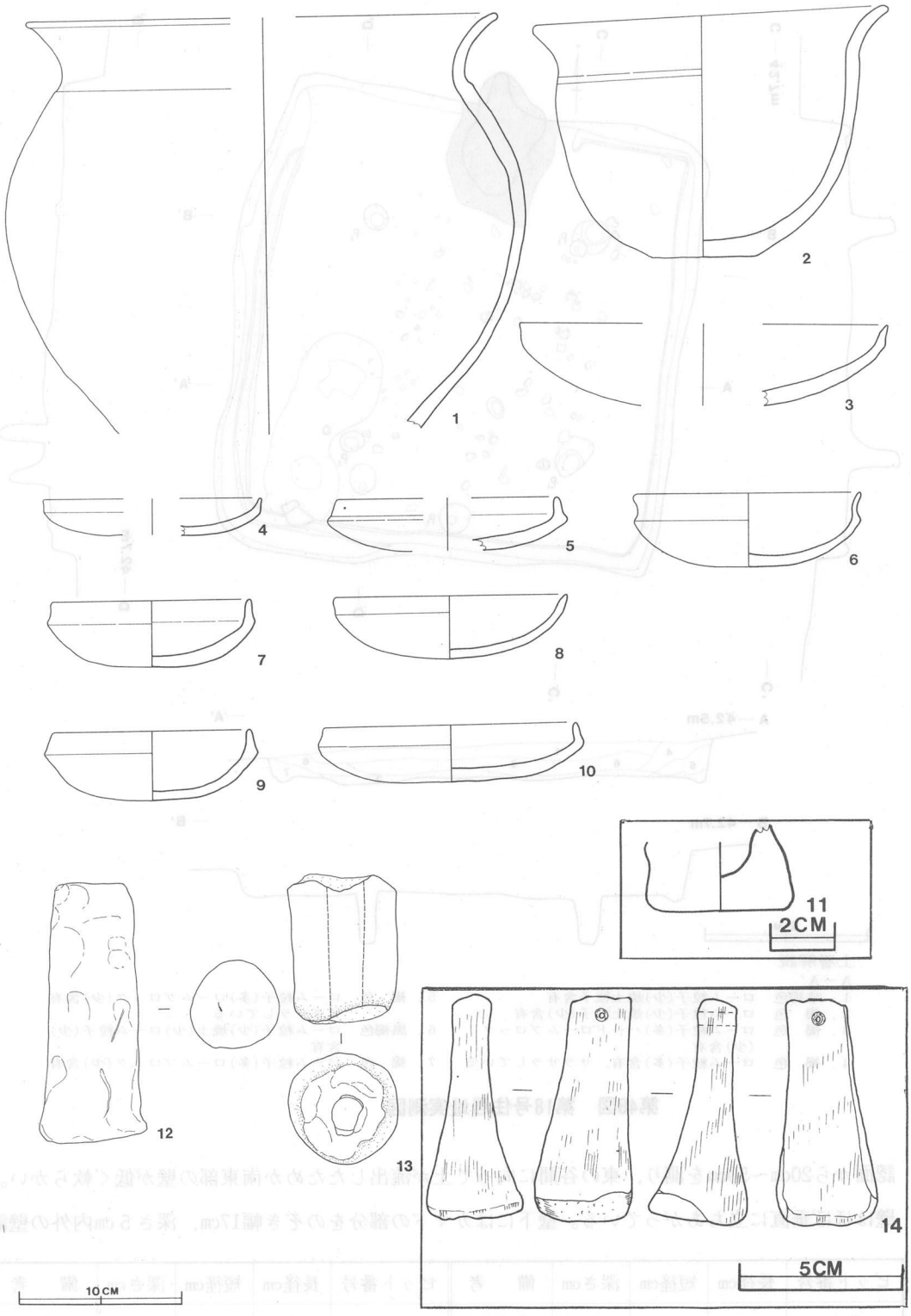
A－A′

1．暗褐色　ローム粒子(少)焼土粒子含有
2．褐　色　ローム粒子(少)焼土粒子(少)含有
3．褐　色　ローム粒子(多)ハードロームブロック(少)含有
4．褐　色　ローム粒子(多)含有，サラサラしている
5．褐　色　ローム粒子(多)ローム ブロック(少)含有 サラサラしている
6．黒褐色　ローム粒子(少)焼土(少)ローム粒子(少)含有
7．褐　色　ローム粒子(多)ローム ブロック(少)含有

第48図　第18号住居址実測図

認面から20cm～50cmを測り，東の谷間に向って土が流出したためか南東部の壁が低く軟らかい。壁はほぼ垂直に立ちあがっている。壁下にはカマドの部分をのぞき幅17cm，深さ５cm内外の壁溝

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考
P 1	45	42	60	主柱穴	P 3	55	35	60	主柱穴
P 2	35	25	60	主柱穴					



第49図　第18号住居址出土遺物実測図

が廻っている。

床面は暗褐色を呈し，西半分は硬く，東半分は軟らかく貼り床となっている。ピットは７個所確認されＰ１～Ｐ４は主柱穴と考えられ，Ｐ５は出入口の施設に伴う柱穴と思われる。覆土は８層からなり自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土・褐色土でローム粒子少量，焼土粒子を含み，下層は褐色土でローム粒子，ハードロームブロックを少量含んでいる。

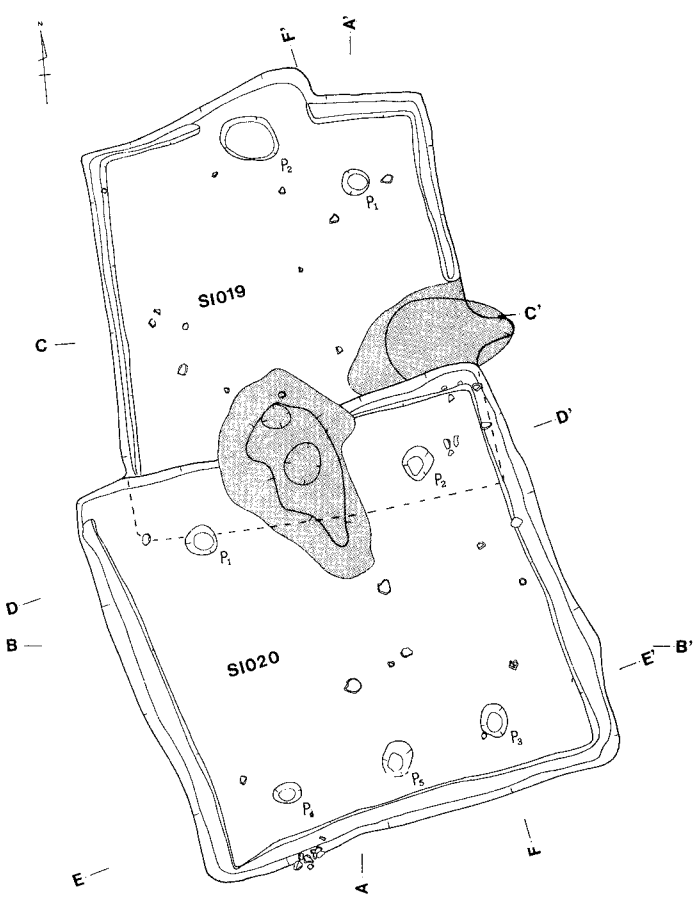
カマドは北壁の中央部に付設され南南東向きに構築されている。規模は長径150cm，短径90cmほどで北壁を74cm幅で，40cmほど掘り込み煙道としている。燃焼部は長径51cm，短径47cmで床を円形に深さ1.6cmほど掘り窪めている。袖部は白色粘土に小石を混ぜて築かれている。出土遺物は土師器が中心で須恵器は坏などの破片を極少量出土している。完存率の良好な土師器をあげると，南東コーナーＰ２付近床面から坏（図49—７），北西コーナーＰ１付近床面直上から坏２個（図49—５・６），中央部から甕片（図49—１），カマド内から甕（49—２），羽口（図49—13），支脚（図49—12），坏６個（図49—３・４・８・９・10），南西部床面直上から手捏土器が出土している。他に甕，坏，支脚などの破片を多数出土している。さらに床面から有孔の砥石（図49—14），弥生式土器片で，十王台式土器より古い型式の頸部，胴部，底部などを数点出土している。底部には木葉痕がみられる。本址は古墳時代鬼高期に比定される遺構と思われる。

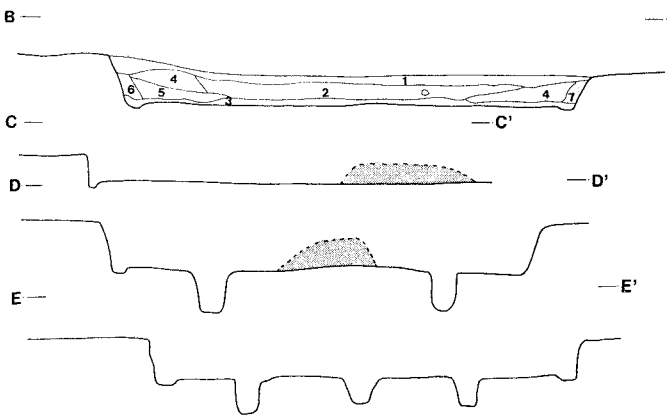
第19号住居址（図50・51）

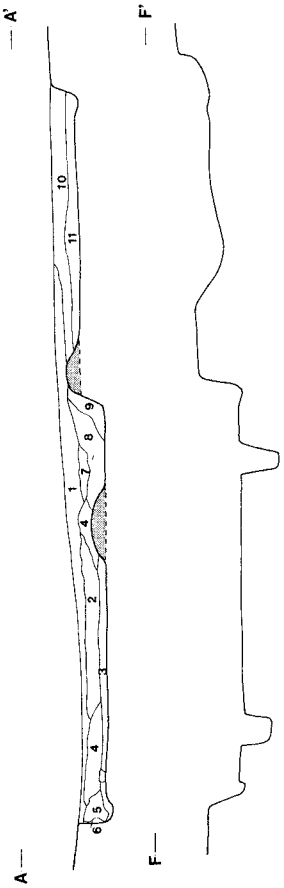
本住居址は，調査区の中ほどＢ１区ａ７，ａ８，ｂ７，ｂ８に確認され，南部は第20号住居址と複合している。東側3.5mには第18号住居址が検出されている。本址の主軸方向はＮ—87°—Ｅ，規模は推定で長軸4.15m，短軸3.65m，面積13.6m²ほどで長方形を呈している。壁高は確認面から12cm～22cmを測り，西壁が高く北壁はあまりはっきりとした壁でなく軟らかい，北壁にそって２ｍほどローム土で埋めもどされていた。また北壁の中央部は半円形にはりだしている。壁下には東壁と北壁に幅15cm，深さ8cmの壁溝を有している。

ピットは２個所だけ確認され，北壁付近中ほどのＰ２は貯蔵穴と思われ，規模は長径62cm，短径45cm，深さ15cmを測る。床面は暗褐色土を呈し平坦で，カマド付近は軟らかく凸凹がある。覆土は３層からなり，第20号住居址の構築時にローム土で埋めもどされたと思われる。上層は暗褐色土でローム粒子，ロームブロックを多量に含み，焼土粒子を含んでいるためポロポロしている。下層は褐色土でローム粒子を多量に含んでいる。カマドは東壁に付設され，西南西向きに構築されている。第20号住居址によって約半分ほど切られ，焚口部と思われるところから焼土を多量に

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考
Ｐ１	30	28	20	主柱穴	Ｐ２	62	45	15	貯蔵穴（楕円形）







土層解説
A－A′
1．暗褐色　ローム粒子，焼土粒子(極少)含有
2．暗褐色　ローム粒子(多)ハードロームブロック含有
3．褐　色　ローム粒子(多)ハードロームブロック(極少)粘土粒子含有
4．黒褐色　ローム粒子含有
5．黒褐色　ローム粒(多)含有
6．褐　色　ローム粒子(多)ロームブロック含有
7．暗褐色　ローム粒子，焼土粒子含有
8．褐　色　ローム粒子，焼土粒子，砂，白色粘土含有
9．褐　色　ローム粒子，ロームブロック含有
10．暗褐色　ローム粒子，ロームブロック，焼土粒子含有
11．褐　色　ローム粒子(多)含有

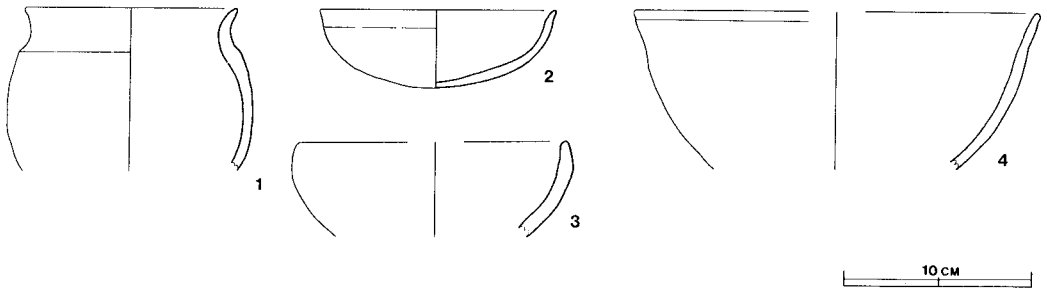
土層解説
B－B′
1．暗褐色　ローム粒子，焼土粒子(極少)含有
2．暗褐色　ローム粒子(多)ハードロームブロック含有
3．明褐色　ローム粒子含有
4．褐　色　ローム粒子(多)含有
5．黒褐色　ハードロームブロック(少)含有
6．褐　色　ローム粒子，ロームブロック，炭化物含有
7．暗褐色　ローム粒子含有

L=43.0m
2 M

第50図　第19号・第20号住居址実測図

出土している。袖部は黒色土混りの砂質粘土で築かれている。出土遺物は少なく土師器が中心で，須恵器は，甑と少量の破片が出土している。土師器の完存率の良好なものをあげると，カマド内から小型甕片（図51－１）と坏（図51－２・３），南西コーナー床面から鉢（図51－４），他に，甕・坏などの破片を少量出土している。さらに鉄滓を覆土から出土している。

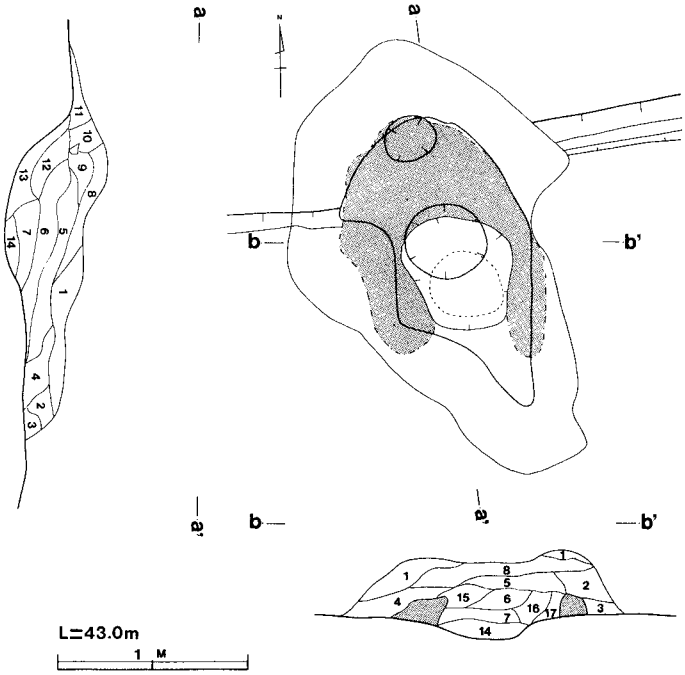
本址は出土遺物等から真間期に比定される遺構と思われる。



第51図　第19号住居址出土遺物実測図

第20号住居址（図50・51・52・53）

本住居址は，調査区の中央部Ｂ１区ｂ７，ｂ８，ｂ９，ｃ７，ｃ８，ｃ９，に確認され，東側約3.0mには第18号住居址が，南側1.5mには第21号住居址が検出されている。本址は，等19号住居址の南部の床面を約30cmほど掘り下げて構築されている。主軸方向はＮ－15°－Ｗで，規模は長軸4.65m，



土層解説

ａ－ａ′・ｂ－ｂ′

1．褐　色　焼土粒子(極少)含有，砂質の土層
2．黒褐色　ハードローム粒子(少)含有
3．褐　色　ハードローム粒子(少)含有
4．褐　色　焼土粒子(極少)含有，砂質の土層
5．褐　色　ハードローム粒子(少)焼土粒子(極少)含有，砂質
6．暗褐色　炭化粒子(少)含有
7．暗褐色　焼土粒子(多)含有，砂質土層
8．褐　色　灰塊(少)含有，砂質土層
9．にぶい褐色　焼土粒子(極少)含有，砂質土層
10．暗褐色　ハードローム粒子(少)含有
11．暗褐色　ハードローム粒子(少)含有
12．暗赤褐色　ハードローム(少)含有，焼土
13．暗赤褐色　焼土含有，砂質土層
14．暗赤褐色　焼土主体，灰(少)含有
15．暗褐色　焼土(少)含有，砂質土層
16．暗赤褐色　炭化物(少)焼土含有，砂質土層
17．暗赤褐色　焼土(少)含有，砂層

第52図　第20号住居址カマド実測図

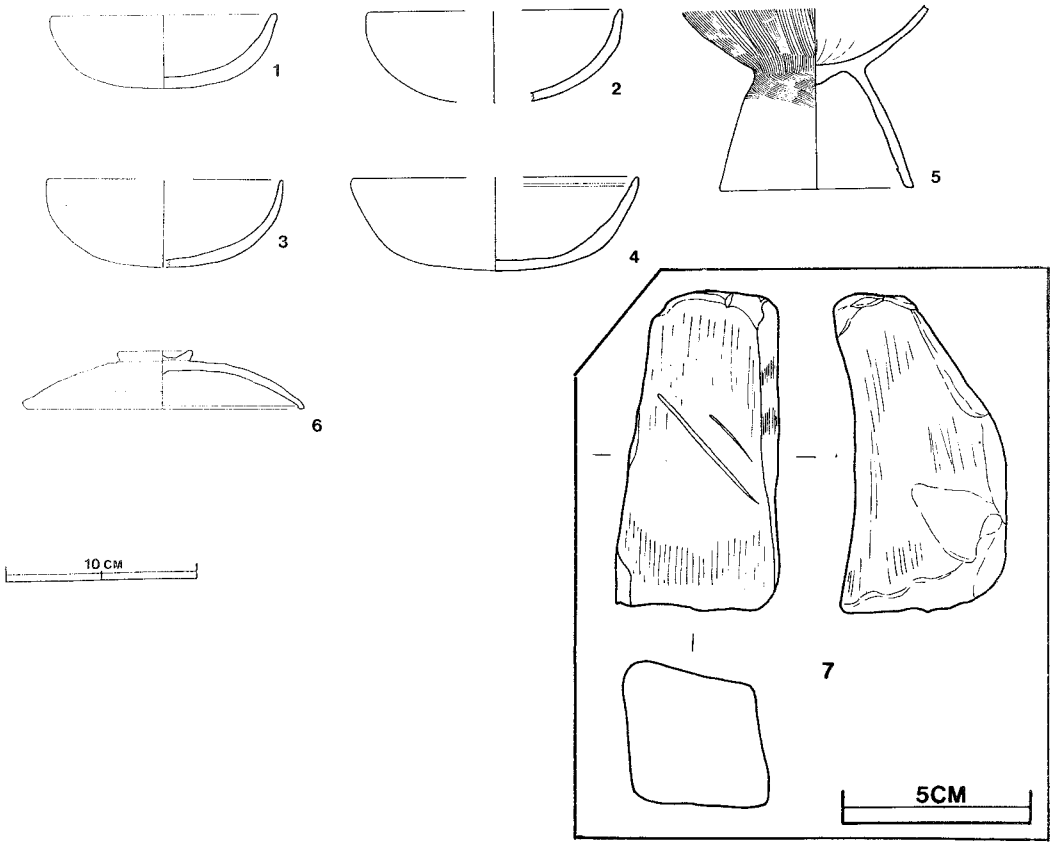
短軸4.50m，面積17.0㎡内外で，ほぼ正方形を呈している。確認壁高は西側が高く40cm～48cmで壁は垂直に立ちあがっている。壁下にはカマドの部分を除き幅15cm，深さ5cm内外の壁構が廻っている。

床面は暗褐色土を呈し硬く東に傾斜している。ピットは5個所確認されP1～P4は主柱穴と

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考
P 1	34	33	43	主柱穴	P 3	38	27	30	主柱穴
P 2	39	29	40	主柱穴	P 4	30	25	38	主柱穴

考えられるが，P5は出入口の施設に伴う柱穴と思われる。貯蔵穴は有していない。覆土は9層からなり自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土で極少量のローム粒子，焼土粒子を含み，中層は暗褐色土で多量のローム粒子，ハードロームブロックを含み下層は褐色土で多量のローム粒子，極少量のハードロームブロックと焼土粒子を含んでいる。

カマドは北壁の中央部に付設され南東向きに構築されている。規模は長径122cm，短径95cmほどで，北壁を77cm幅で，37cmほど掘り込み煙道としている。燃焼部は長径42cm，短径95cmほどの円形状を呈し約8cmほど床を掘り窪めている。袖部は黒色土と小石混りの白色粘土で築かれている。燃焼部よ



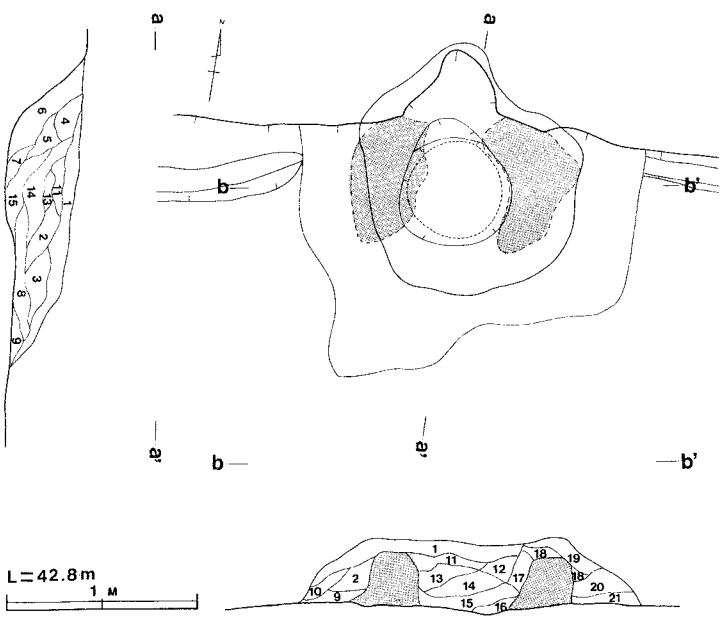
第53図　第20号住居址出土遺物実測図

り坏が出土している。出土遺物は土師器と須恵器が共伴して出土している。土師器の完成率の良好なものをあげると，北東コーナーＰ２付近床面直上から坏（図53―１・２・４），他に甕，内黒の坏などの破片を少量出土している。須恵器は中央部床面直上から蓋（図53―６）と坏などの破片を少量出土している。その他，覆土から鉄滓，砥石（図53―７），台付甕片（図53―５）を出土している。本址は出土遺物等から考えて真間期に比定される遺構と思われる。

第21号住居址（図54～56）

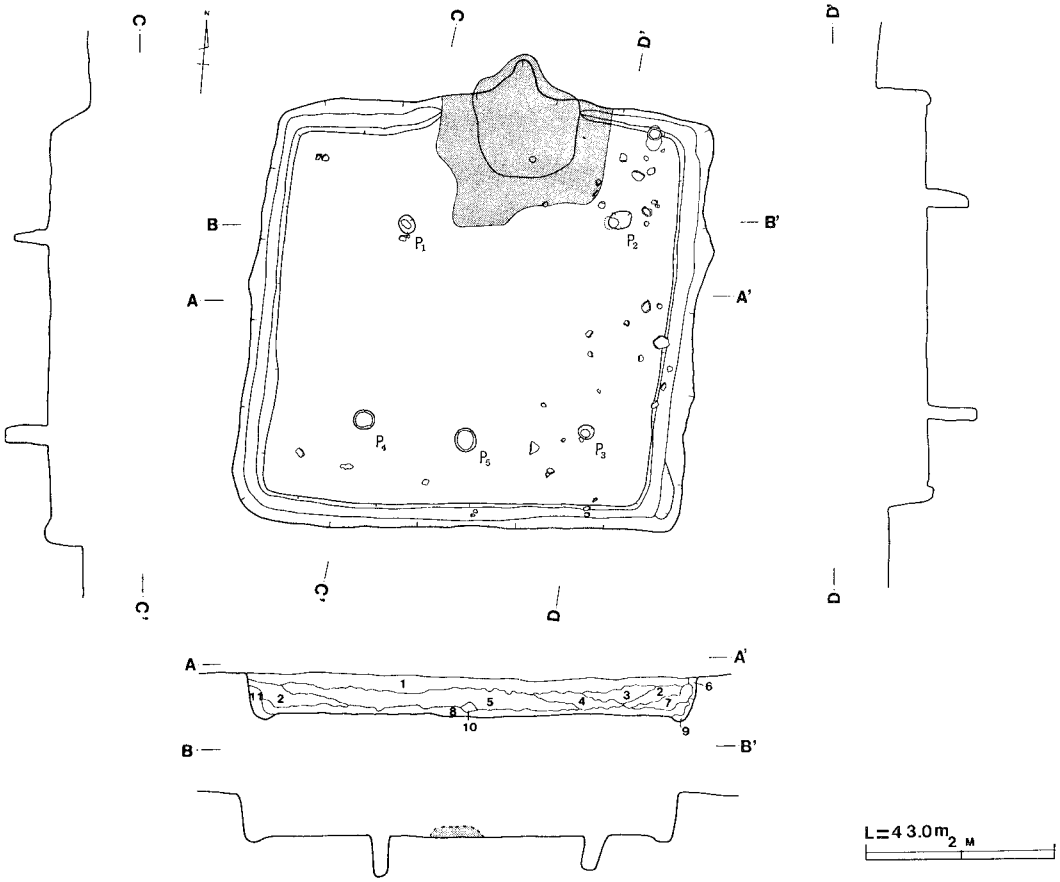
本住居址は，調査区の中央部Ｂ１区ｄ８，ｄ９，ｅ８，ｅ９に確認され，北側1.5mには第20号住居址が，南西1.5mには第１号井戸状遺構が検出されている。本址の主軸方向はＮ－２°－Ｅで，規模は長軸4.70m，短軸4.50m，面積16.0㎡程でほぼ正方形を呈している。壁高は北側が高く43cm～54cmで，壁はほぼ垂直に立ち上がっている。壁下には幅17cm，深さ７cm内外のＵ字形をした壁溝がカマドを除き廻っている。床面は平坦で暗褐色土を呈し硬く踏み固められた状態を示している。

ピットは５個所確認されＰ１～Ｐ４は主柱穴と考えられ，Ｐ５は出入口の施設に伴う柱穴と思われる。貯蔵穴は有していない。覆土は12層からなり自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土で多量のローム粒子と焼土粒子を含み，下層は褐色土で多量のローム粒子，ハードロームブロックを含んでいる。カマドは北壁中央部に付設され，　ほぼ南向きに構築されている。規模は長径



土層解説
a－a′・b－b′
1．褐　色　ハードローム粒子(少)含有，砂質土層
2．にぶい褐色　粘土主体，焼土粒子(少)含有
3．褐　色　粘土(少)含有，砂質土層
4．暗褐色　焼土粒子(少)粘土粒子含有，砂質土層
5．暗赤褐色　焼土粒子(多)含有，灰層
6．暗褐色　焼土(少)炭化粒子含有，灰層
7．にぶい赤褐色　粘土ブロック(少)含有，灰層
8．褐　色　焼土粒子(少)ハードローム粒子(極少)
9．褐　色　焼土粒子(少)
10．暗褐色　ハードローム粒子(少)含有
11．褐　色　焼土(少)含有，灰層
12．灰褐色　灰層
13．にぶい褐色　焼土粒子(多)含有，灰層
14．暗赤褐色　焼土(少)焼けたハードロームブロック含有，灰層
15．暗赤褐色　焼土粒子(少)含有，灰層
16．にぶい赤褐色　焼土粒子(少)含有
17．にぶい赤褐色　焼土粒子(多)含有，灰層
18．明褐灰色　粘土層
19．暗褐色　粘土粒子(少)含有，砂質土層
20．灰褐色　粘土ブロック(多)土層
21．褐　色　粘土ブロック(少)含有

第54図　第21号住居址カマド実測図



土層解説

A－A′

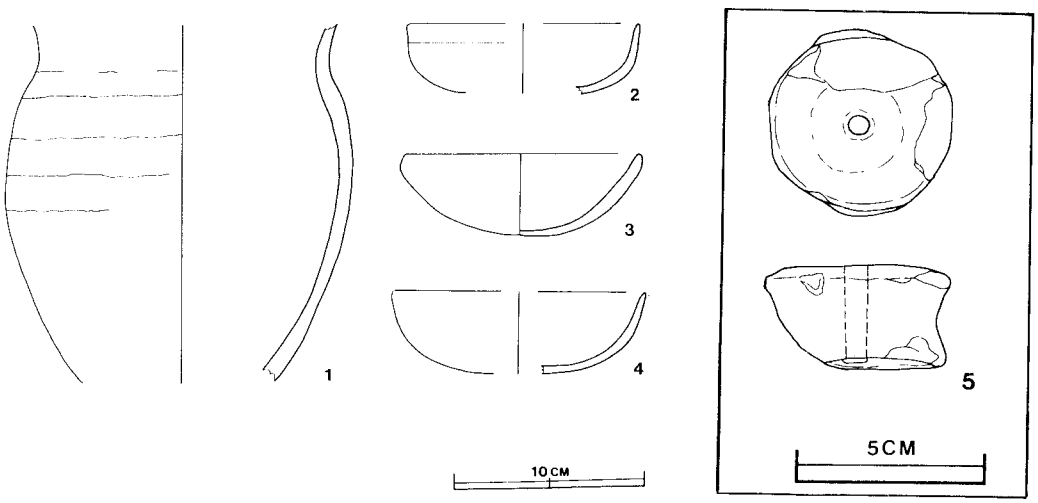
1．暗褐色　ローム粒子を含有し，締りをおびている
2．暗褐色　多量のローム粒子，焼土粒子を含み締りをおびている
3．極暗褐色　多量のローム粒子，少量の焼土粒子を含み，締りない
4．褐　色　多量の炭化粒子，ローム粒子，焼土粒子を含む，ザラザラしている
5．暗褐色　多量のローム粒子，焼土粒子を含み，締りをおびている
6．明褐色　多量のローム粒子，少量の焼土粒子を含み，ザラザラしている
7．褐　色　多量のローム粒子，少量の焼土粒子を含み，締りをおびている
8．暗褐色　少量のローム粒子，焼土粒子を含み，締りをおびている
9．明褐色　多量のローム粒子，ハードロームブロックを含み粘性をおびている
10．灰褐色　白色粘土を含み，締りあり
11．明褐色　多量のローム粒子を含み，締りをおびている

第55図　第21号住居址実測図

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考
P 1	19	16	37	主柱穴	P 3	16	15	52	主柱穴
P 2	25	19	45	主柱穴	P 4	22	21	47	主柱穴

121cm，短径 120cmほどで，北壁を 114cmの幅で，56cmほど掘り込み煙道としている。燃焼部は長径56cm，短径59cmほどの円形状を呈し約６cmほど掘り窪めている。袖部は白色粘土に小石をまぜて築かれている。

出土遺物は土師器が主で，須恵器は床面直上から椀目刺突文のある甕の残欠と，他に破片少量を出土している。土師器の完存率の良好なものをあげると，北東コーナー床面直上から甕（図56－１），東壁付近から坏２個（図56－３・４），南西コーナー床面直上から坏（図56－２）と，他に甕，坏，壺など破片を数点出土している。 その他，土製紡錘車（図57－５）を覆土中から出土している。本址は出土遺物等から考えて真間期に比定される遺構と思われる。



第56図　第21号住居址出土遺物実測図

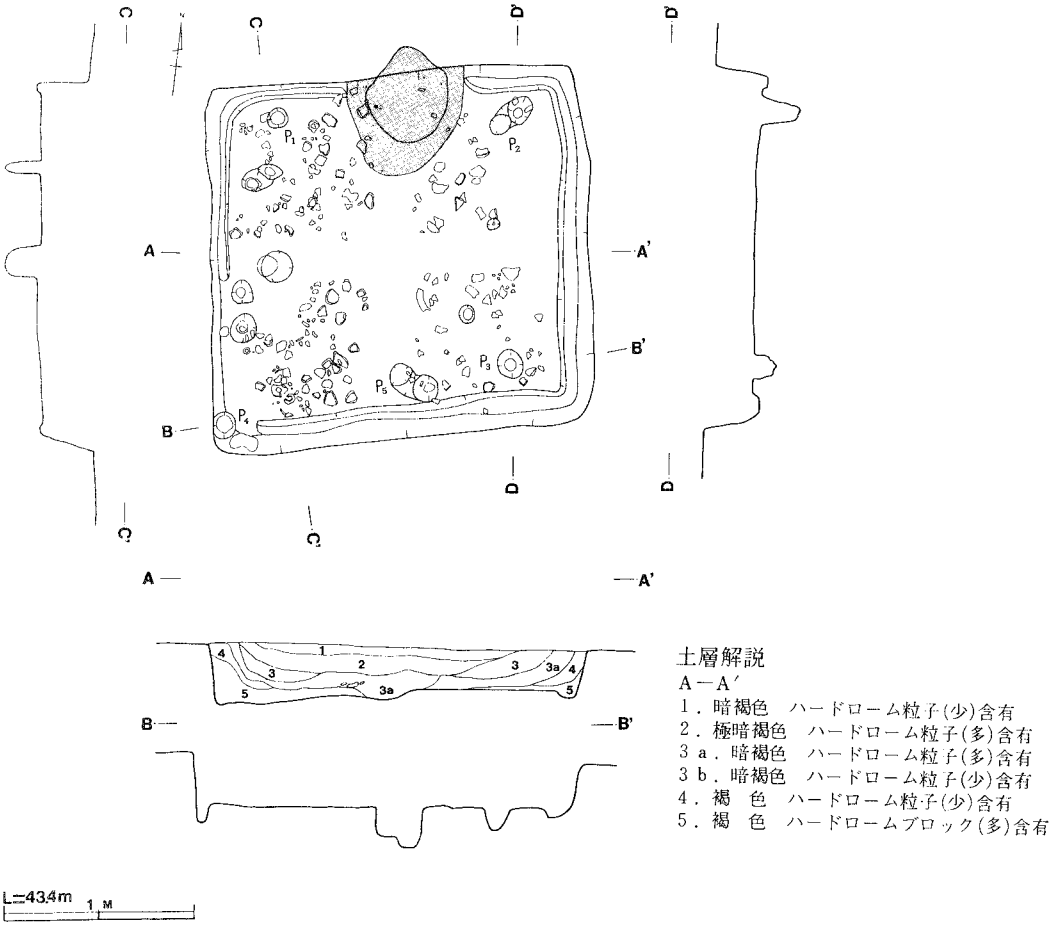
第22号住居址（図57・58・59(1)(2)）

本住居址は，調査区の中ほどＢ１区ｆ９，ｆ０，ｇ９，ｇ０に確認され南西4.0m には第23号住居址が，3.0m には第１号掘立柱建築址が確認されている。 本址の主軸方向はＮ－４°－Ｗで，規模は長軸4.00m，短軸3.85m，面積11.7㎡で，ほぼ正方形を呈している。壁高は41cm～55cm前後で壁は西側が高くほぼ垂直に立ち上がっている。壁下には幅15cm，深さ10cm内外の壁溝がカマドと西壁一部を除いて廻っている。床面は平坦で暗褐色土を呈し，硬く踏み固められた状態を示している。

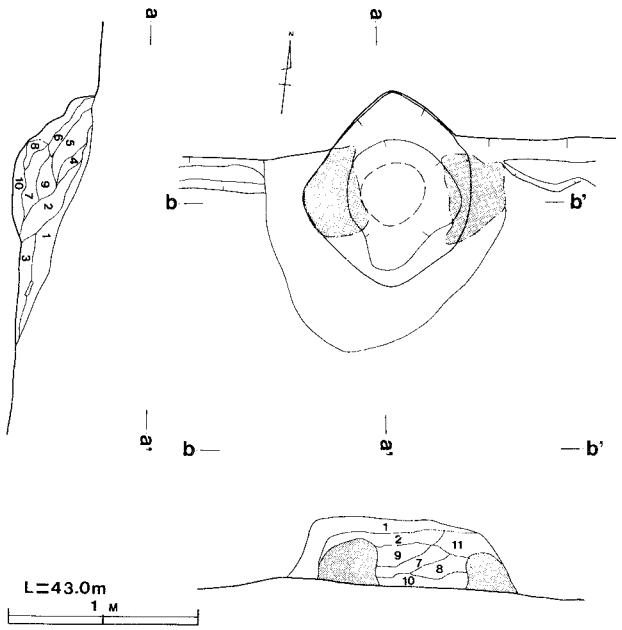
ピットは12個所確認されP1～P4は主柱穴と考えられる。P5は出入口の施設に伴う柱穴と思わ

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考
P 1	23	22	40	主柱穴	P 3	35	27	24	主柱穴
P 2	33	26	43	主柱穴	P 4	24	20	74	主柱穴

れる。貯蔵穴は有していない。覆土は10層からなり自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土で比較的多量のハードロームブロックを含み，下層は褐色土で，ハードロームブロックを含んでいる。カマドは北壁の中央に付設され南南東向きに構築されている。規模は長径105cm，短径100cmほどで，北壁を66cmの幅で25cmほど掘り込み煙道部としている。燃焼部は長径35cm，短径34cmほどの円形に掘り窪めている。



第57図　第22号住居址実測図



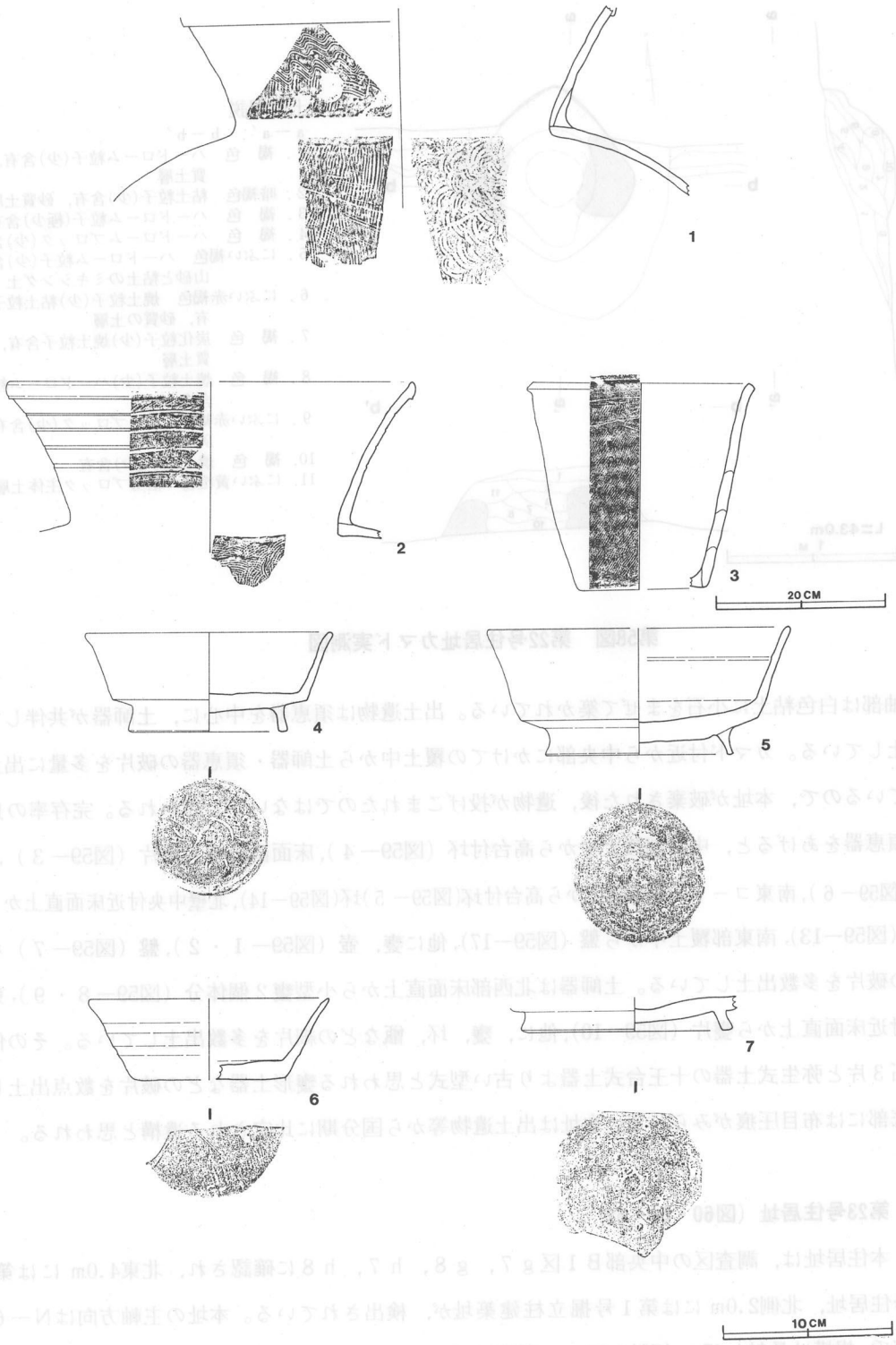
土層解説
a－a′・b－b′
1．褐　色　ハードローム粒子(少)含有，砂質土層
2．暗褐色　粘土粒子(少)含有，砂質土層
3．褐　色　ハードローム粒子(極少)含有
4．褐　色　ハードロームブロック(少)含有
5．にぶい褐色　ハードローム粒子(少)含有　山砂と粘土のミキシング土
6．にぶい赤褐色　焼土粒子(少)粘土粒子含有，砂質の土層
7．褐　色　炭化粒子(少)焼土粒子含有，砂質土層
8．褐　色　焼土粒子(少)ハードローム粒子含有
9．にぶい赤褐色　焼土ブロック(少)含有，灰層
10．褐　色　焼土粒子(少)含有
11．にぶい黄橙色　粘土ブロック主体土層

第58図　第22号住居址カマド実測図

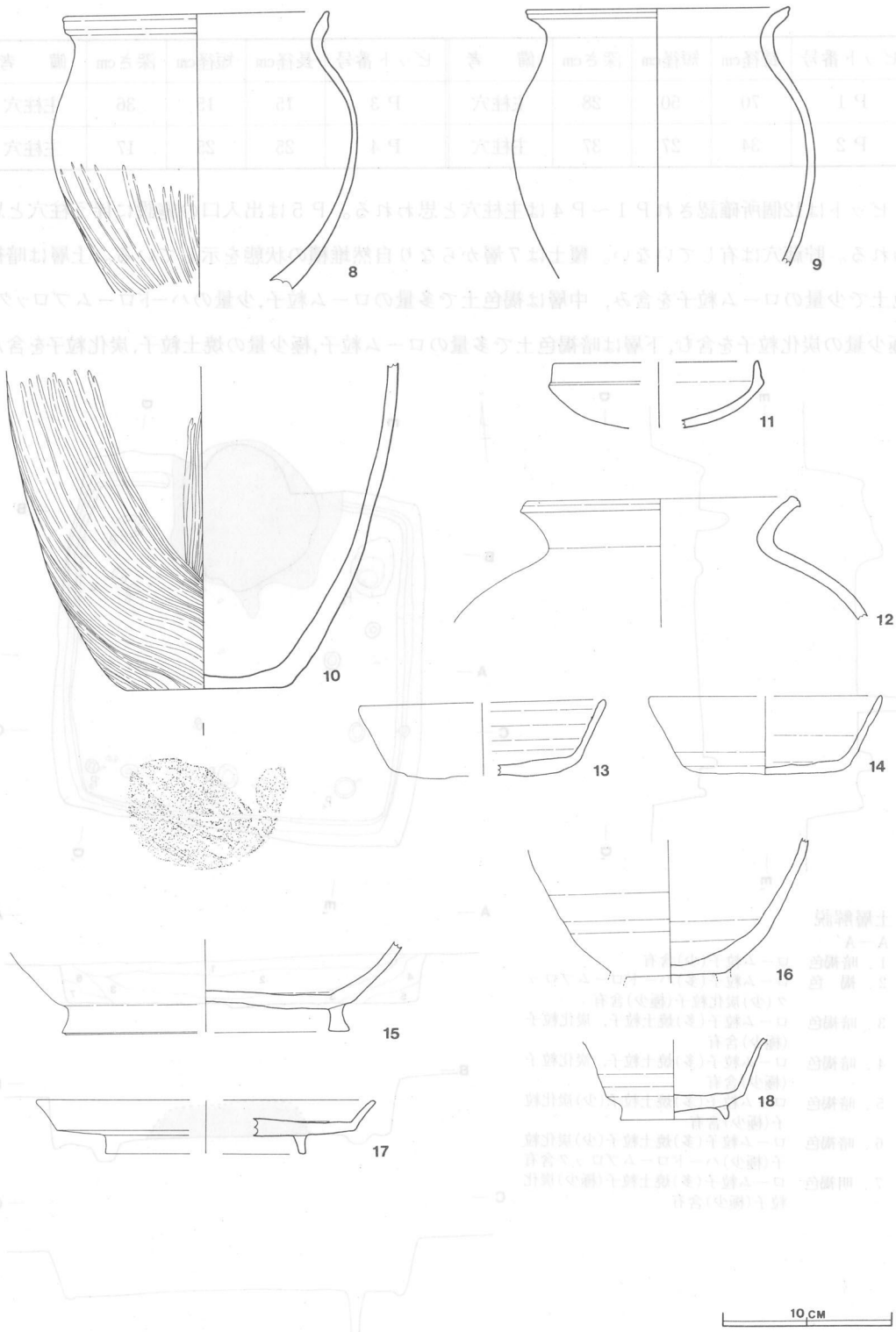
袖部は白色粘土に小石をまぜて築かれている。出土遺物は須恵器を中心に，土師器が共伴して出土している。カマド付近から中央部にかけての覆土中から土師器・須恵器の破片を多量に出土しているので，本址が破棄された後，遺物が投げこまれたのではないかと思われる。完存率の良好須恵器をあげると，中央部覆土中から高台付坏（図59－４），床面直上から甑片（図59－３），坏（図59－６），南東コーナー床面直上から高台付坏(図59－５)坏(図59－14)，北壁中央付近床面直上から坏（図59—13)，南東部覆土中から盤（図59—17)，他に甕，壺（図59－１・２)，盤（図59－７）などの破片を多数出土している。土師器は北西部床面直上から小型甕２個体分（図59－８・９)，東壁付近床面直上から甕片（図59—10)，他に，甕，坏，甑などの細片を多数出土している。その他砥石３片と弥生式土器の十王台式土器より古い型式と思われる甕形土器などの破片を数点出土し，底部には布目圧痕がみられる。本址は出土遺物等から国分期に比定される遺構と思われる。

第23号住居址（図60・61・62）

本住居址は，調査区の中央部Ｂ１区ｇ７，ｇ８，ｈ７，ｈ８に確認され，北東4.0m には第22号住居址，北側2.0m には第１号掘立柱建築址が，検出されている。本址の主軸方向はＮ－６°－Ｗで，規模は長軸4.45m，短軸4.30m，面積13.2㎡ほどでほぼ正方形を呈している。壁高は49cm～62cmほどで，壁は西側が高くほぼ垂直に立ちあがり，壁下には幅15cm，深さ10cm内外の壁溝がカマドの部分を除き廻っている。床面は平坦で褐色を呈し，北西コーナー部が貼り床となっている。



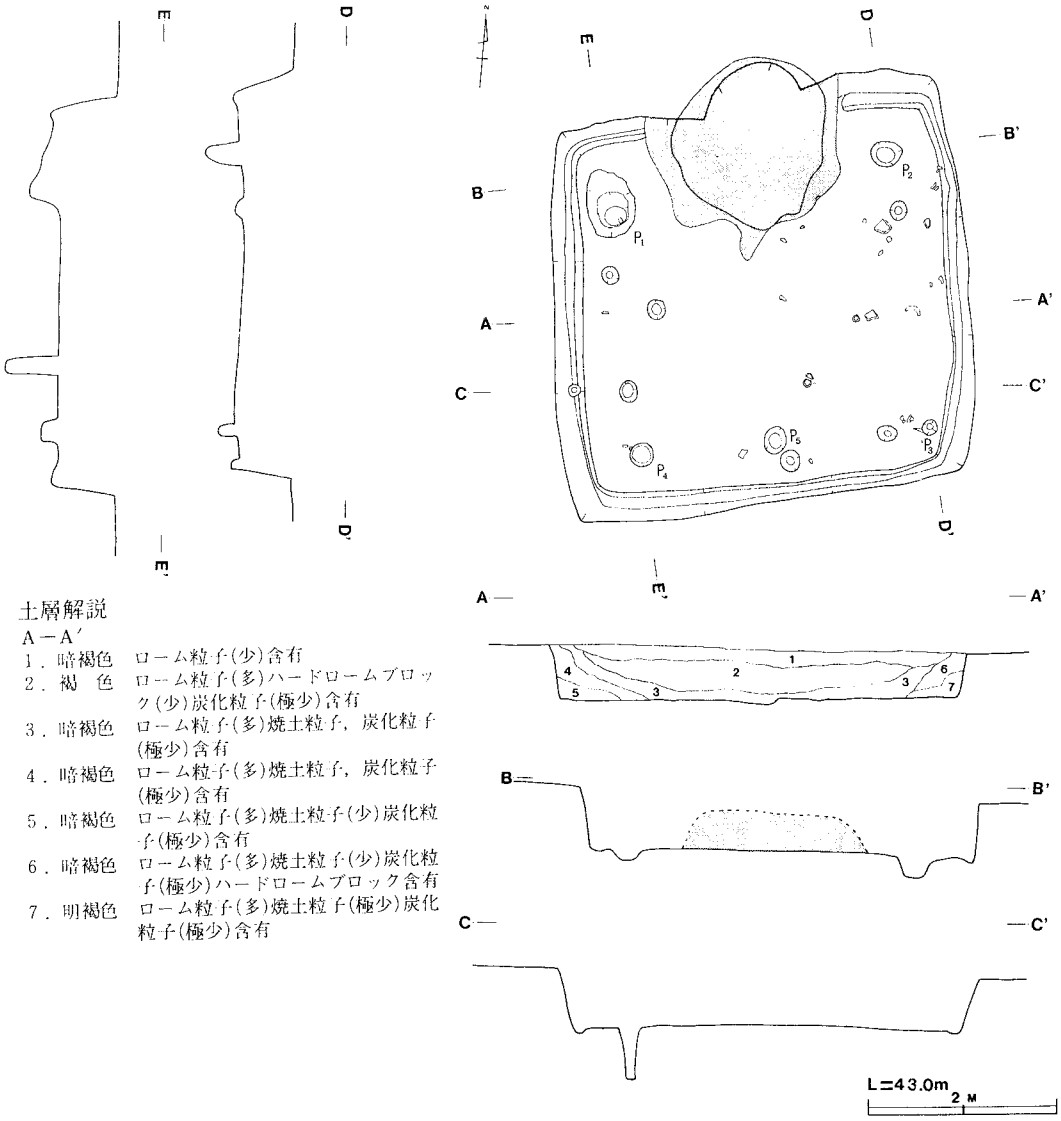
第59図(1)　第22号住居址出土遺物実測図



第59図(2)　第22号住居址出土遺物実測図

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考
P 1	70	50	28	主柱穴	P 3	15	15	36	主柱穴
P 2	34	27	37	主柱穴	P 4	25	25	17	主柱穴

ピットは12個所確認されＰ１～Ｐ４は主柱穴と思われる。Ｐ５は出入口の施設に伴う柱穴と思われる。貯蔵穴は有していない。覆土は７層からなり自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土で少量のローム粒子を含み，中層は褐色土で多量のローム粒子,少量のハードロームブロック，極少量の炭化粒子を含む,下層は暗褐色土で多量のローム粒子,極少量の焼土粒子,炭化粒子を含ん

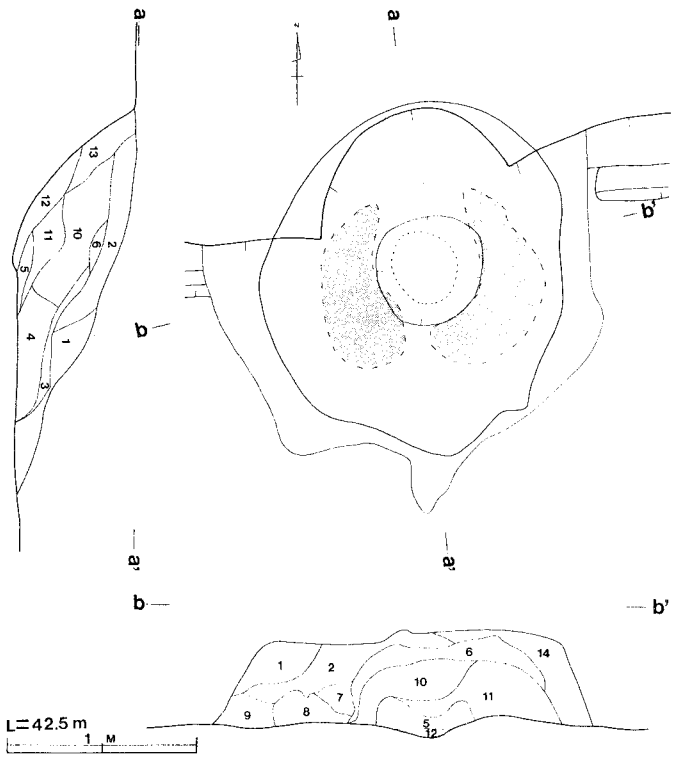


土層解説

A－A′

1．暗褐色　ローム粒子(少)含有
2．褐　色　ローム粒子(多)ハードロームブロック(少)炭化粒子(極少)含有
3．暗褐色　ローム粒子(多)焼土粒子，炭化粒子(極少)含有
4．暗褐色　ローム粒子(多)焼土粒子，炭化粒子(極少)含有
5．暗褐色　ローム粒子(多)焼土粒子(少)炭化粒子(極少)含有
6．暗褐色　ローム粒子(多)焼土粒子(少)炭化粒子(極少)ハードロームブロック含有
7．明褐色　ローム粒子(多)焼土粒子(極少)炭化粒子(極少)含有

第60図　第23号住居址実測図

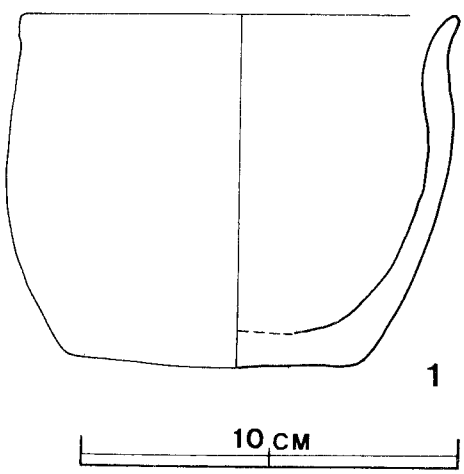


土層解説

a－a′・b－b′

1．暗褐色　ハードローム粒子(多)含有
2．暗褐色　ハードロームブロック(多)含有
3．褐　色　粘土(少)ハードロームブロック含有
4．灰褐色　粘土主体，ハードロームブロック(少)含有
5．暗褐色　焼土粒子(少)含有
6．暗褐色　粘土粒子(少)含有，砂質
7．暗褐色　ハードローム粒子(少)含有，砂質
8．褐　色　粘土粒子(少)炭化粒子含有
9．褐　色　ハードローム粒子(少)含有
10．灰褐色　粘土層
11．灰褐色　焼土粒子(少)含有，灰層
12．黒褐色　炭化粒子(少)焼土粒子含有，灰層
13．にぶい褐色　ハードローム粒子(少)含有灰層
14．暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(少)含有

第61図　第23号住居址カマド実測図



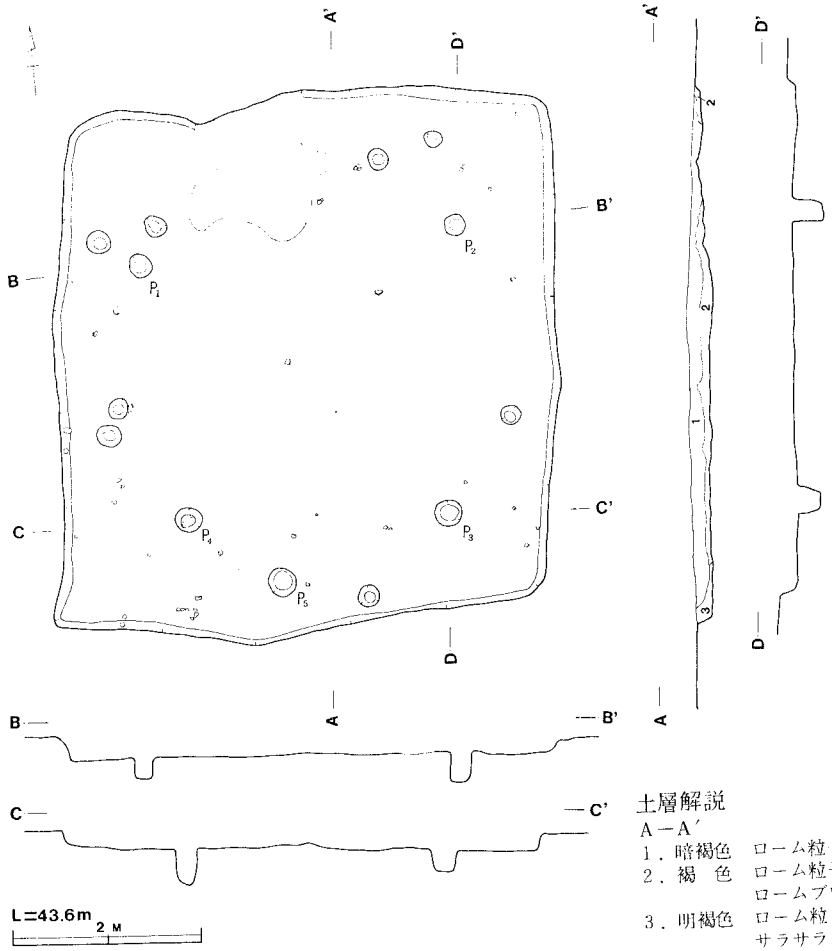
第62図　第23号住居址出土遺物実測図

でいる。カマドは北壁の中央に付設され，規模は長径140cm，短径100cm ほどで北壁を105cm 幅で，47cm ほど掘り込み煙道部としている。燃焼部は長径57cm，短径56cm ほどの円形状に掘り窪めている。袖部は黒色土混りの砂質粘土でカマドはほぼ南東向きに構築されている。出土遺物は土師器と須恵器を共伴しているがどちらも出土量は少ない。土師器は内黒の鉢（図62－１）を床面直上から，他には，坏などの破片を数点出土している。須恵器は蓋などの破片を数点出土している。

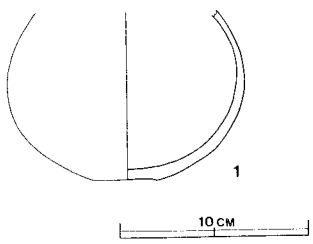
本址の時期を決定しうるにたる遺物の出土は少ないが，ほぼ真間期に比定される遺構と思われる。

第24号住居址（図63・64）

本住居址は，調査区の西側中ほどのＢ１区ｅ４，ｅ５，ｆ４，ｆ５，ｆ６，ｇ４，ｇ５，



第63図　第24号住居址実測図



g 6に確認され，北側約3.0mには第2号円形周溝遺構が東側5.0 m には第1号掘立柱遺構が，南東5.0 m には第23号住居址が検出されている。　主軸方向はN－5°－Eで規模は長径5.65m，短径5.25m，面積26.7㎡を側り長方形を呈している。壁は軟かくはっきりとしない。壁高は15cm～20cm内外

第64図　第24号住居址出土遺物実測図

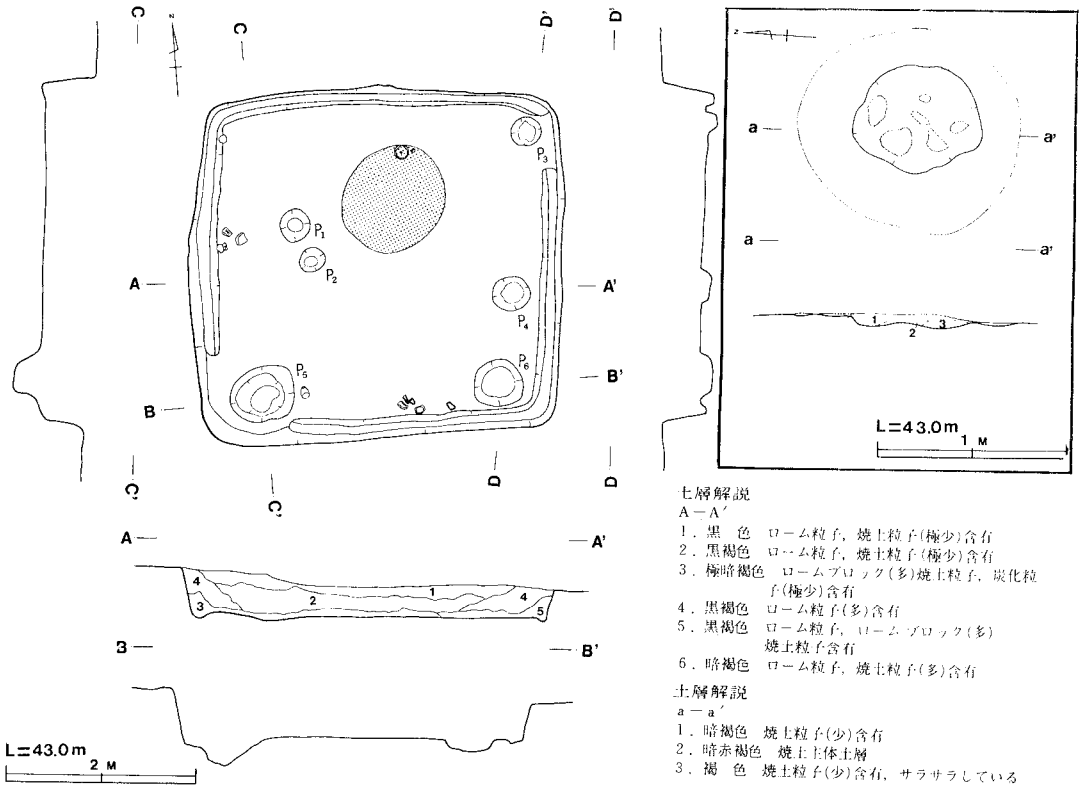
ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考
P 1	25	23	23	主柱穴	P 3	30	30	22	主柱穴
P 2	25	23	35	主柱穴	P 4	28	26	39	主柱穴

で，壁溝は有していない。床面は平坦で褐色のローム土であるが軟らかくはっきりとしない。

ピットは13個所確認されＰ１～Ｐ４は主柱穴と考えられる。Ｐ５は出入口の施設に伴う柱穴と思われる。貯蔵穴は有していない。覆土は３層からなり自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土で極少量のローム粒子，少量の焼土粒子を含み，下層は褐色土で多量のローム粒子，極少量のハードロームブロックを含んでいる。北壁際中ほどに，カマドの廃棄されたものと思われるローム土と白色粘土の焼けたものと砂混じりの，ものを検出した。出土遺物は，南東コーナー床面直上から土師器の坩（図64－１）を出土し，他に甑，坏等の破片を少量出土している。須恵器は破片を数点出土しているのみで，その他の出土遺物は弥生式土器片数点と鉄滓を少量出土している。本址の時期を決定するには出土遺物が少なく，廃棄された遺構と思われるが，ほぼ五領期の範疇に入るものと思われる。

第25号住居址（図65・66）

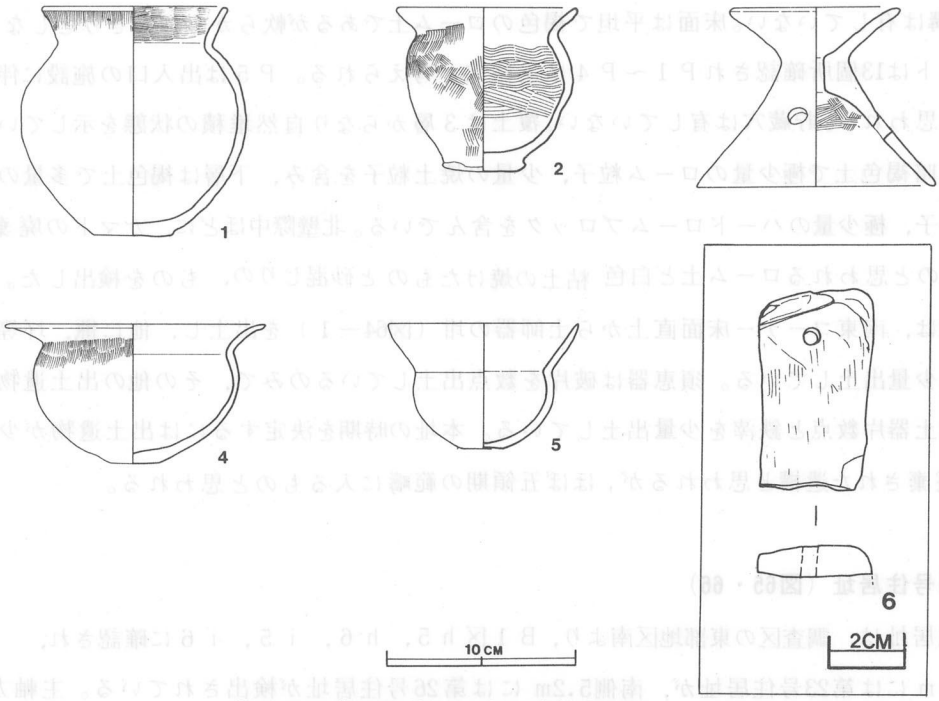
本住居址は，調査区の東部地区南より，Ｂ１区ｈ５，ｈ６，ｉ５，ｉ６に確認され，北東約３ｍには第23号住居址が，南側5.2mには第26号住居址が検出されている。主軸方向はＮ－３°－Eで，規模は長軸3.95m，短径3.75m，面積10.6㎡を測り，ほぼ隅丸正方形を呈している。壁は北側が高く南が低くなっており，壁高は37cm～51cm内外で，壁下には幅11cm，



七層解説
A－A′
1．黒　色　ローム粒子，焼土粒子(極少)含有
2．黒褐色　ローム粒子，焼土粒子(極少)含有
3．極暗褐色　ローム粒子(多)焼土粒子，炭化粒子(極少)含有
4．黒褐色　ローム粒子(多)含有
5．黒褐色　ローム粒子，ローム・ブロック(多)焼土粒子含有
6．暗褐色　ローム粒子，焼土粒子(多)含有

土層解説
a－a′
1．暗褐色　焼土粒子(少)含有
2．暗赤褐色　焼土主体土層
3．褐　色　焼土粒子(少)含有，サラサラしている

第65図　第25号住居址実測図



第66図　第25号住居址出土遺物実測図

深さ５cm内外の壁溝が北東・南西コーナーを除き廻っている。床面は軟らかく，褐色を呈し東に傾斜している。ピットは５個所確認されたが主柱穴と考えられるものは床面上には検出できなかった。第26号住居址・第28号住居址と同じように外部施設として主柱穴を有しているものと思われる。南西コーナーＰ５は貯蔵穴と思われ，規模は長径74cm，短径 55cm ，深さ30cmを測る不整

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考
Ｐ５	74	55	30	貯蔵穴 (不整楕円形)					

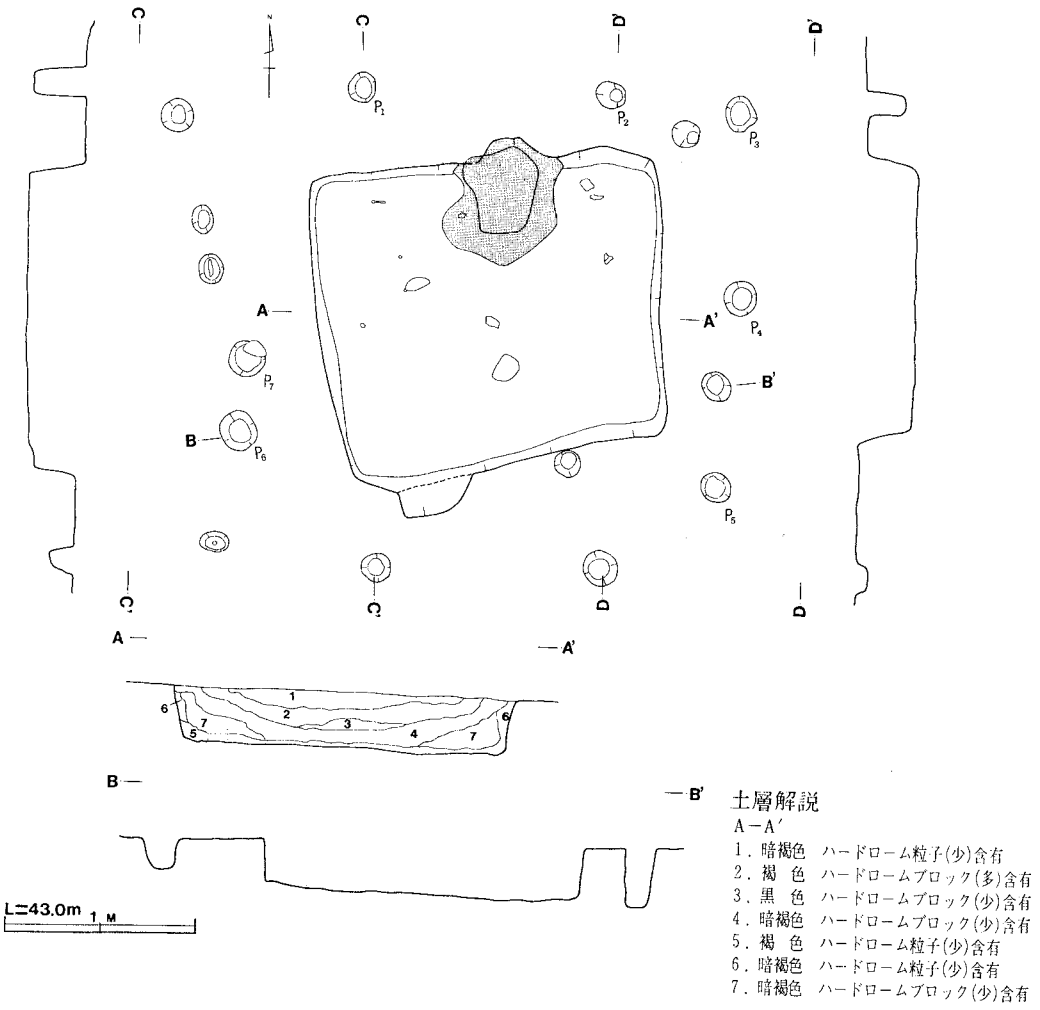
楕円形状を呈している。覆土は６層からなり自然堆積の状態を示している。上層は黒褐色土でローム粒子，極少量の焼土粒子を含有し，下層は極暗褐色土で多量のロームブロック，焼土粒子，炭化粒子を含有している。炉址は中央よりやや北側に有しており，規模は長径 120cm，短径 108cmでほぼ円形を呈し，焼成部は約７cmほど掘り窪めており，焼土が充満していた。出土遺物は土師器が主で，南壁付近床面直上から小型甕（図66－４），南西コーナー床面直上から小型甕（図66－１），坩（66－５），西壁付近床面直上から小型甕（66－２）炉址付近直上より器台（図66－３）を出土している。その他有孔の砥石１片（図66－６）と粘土を多量に出土している。本址は古墳時代の五領期に比定される遺跡と 思われる。

第26号住居址（図67・68・69）

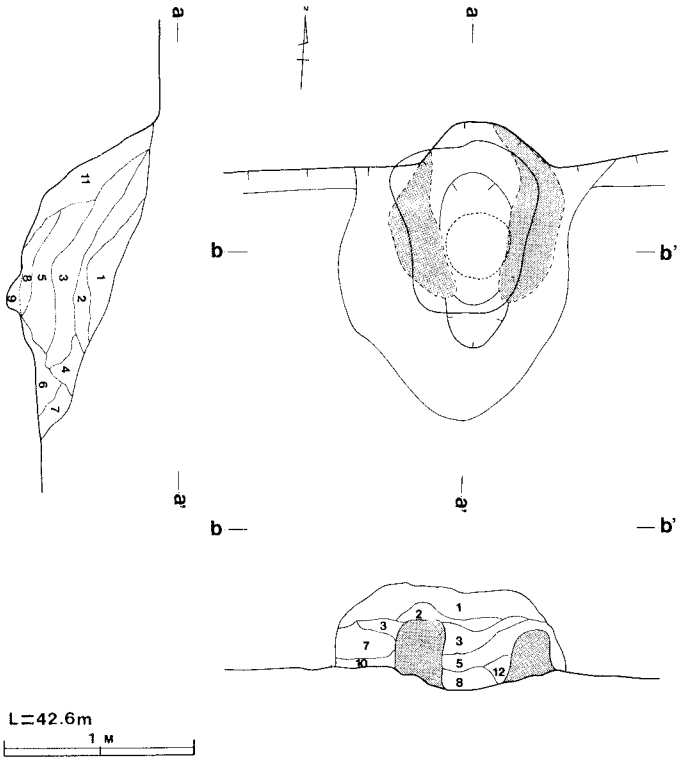
本住居址は， 調査区の南部西寄りのＢ１区ｊ６，ｊ７，Ｃ１区ａ６，ａ７に確認され，西側

約3.0mには第27号住居址が，北側約5.2mには第25号住居址が，南東2.5mには第28号住居址が検出されている。主軸方向はN－0°で，規模は長軸3.70m，短軸3.20m，面積10.6㎡程で隅丸長方形を呈している。壁は北側が高く南側が低くなっている。壁高は約43cm～60cm内外で壁は垂直に立ち上がっている。壁溝は有していない。床面は褐色を呈し，緩やかに南に傾斜している。ピットは床面からは検出されなかったが，住居址の施設外に13個所検出している。煙道部の両脇には，２個所の柱穴を有している。貯蔵穴は有していない。覆土は９層からなり自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土で少量のハードロームブロックを含み，中層は褐色土・暗褐色土で多量のハードロームブロック，黒色土を含み，下層は褐色土でハードローム粒子を含んでいる。

カマドは北壁の中央に付設され，規模は長径117m，短径90cmほどで北壁を85cm幅で，38cmほど



第67図　第26号住居址実測図

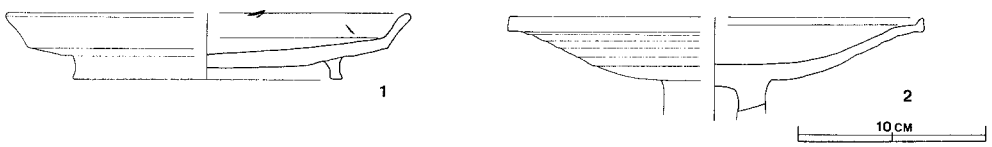


土層解説

a－a′　b－b′

1. 暗褐色　ハードローム粒子(少)含有
2. 褐　色　ハードローム粒子(少)粘土粒子含有砂質
3. 灰褐色　粘土主体土層，砂質
4. 暗褐色　ハードローム粒子(少)含有
5. 褐　色　粘土(少)焼土粒子含有
6. 暗褐色　粘土(少)ハードロームブロック含有
7. 暗褐色　ハードローム粒子(少)含有
8. 暗赤褐色　焼土(少)含有，砂質
9. 明褐色　加熱を受けたハードローム
10. 褐　色　ハードロームブロック(少)含有
11. 褐　色　粘土ブロック(少)含有砂質土層
12. 暗褐色　焼土粒子(多)炭化粒子含有

第68図　第26号住居址カマド実測図



第69図　第26号住居址出土遺物実測図

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考
P 1	35	28	54	主柱穴(施設外)	P 5	33	30	58	主柱穴(施設外)
P 2	32	30	30	主柱穴(施設外)	P 6	42	38	33	主柱穴(施設外)
P 3	38	32	47	主柱穴(施設外)	P 7	40	39	90	主柱穴(施設外)
P 4	37	35	47	主柱穴(施設外)					

掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径35cm，短径34cmほどで円形状に深さ約14cmほど掘りくぼめている。袖部は黒色土混りの砂質粘土で，カマドは南南東向きに構築されている。焚口部より多量の焼土を検出している。出土遺物は須恵器を中心に土師器を共伴しているが，土師器は細片のみである。須恵器は,北東コーナー床面直上から盤（図69－１），南西部床面直上から高坏片（図69－２）を出土し，他には坏，甕などの破片を数点出土している。

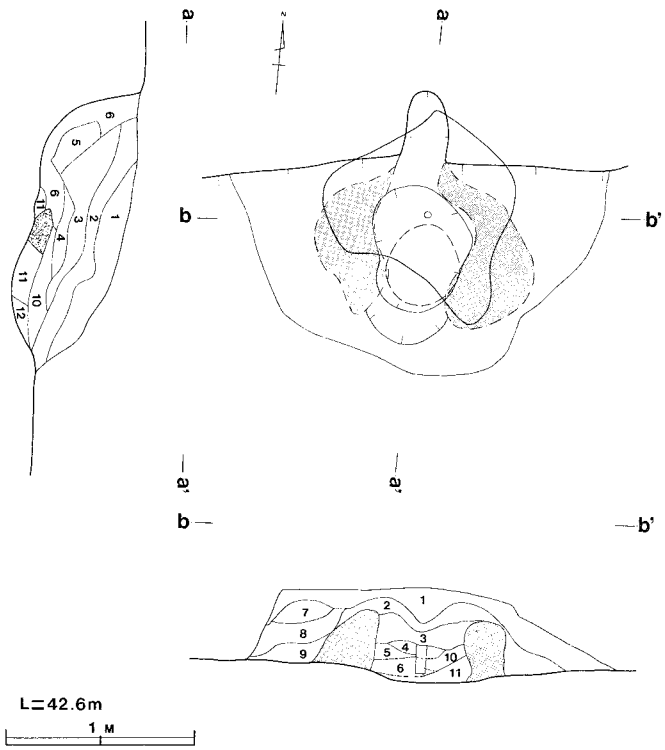
本址は出土遺物等から国分期に比定される遺構と思われる。

第27号住居址（図70・71・72(1)(2)）

本住居址は，調査区の南部西よりのＢ１区ｊ３，ｊ４，ｊ５，Ｃ１区ａ３,ａ４,ａ５,ｂ３,ｂ４，ｂ５に確認され，南壁の東よりに本址より古い第29号住居址が複合している。東側3.2ｍには第26号住居址を検出している。主軸方向はＮ－３°－Ｗで規模は長軸7.45m，短軸7.40m，面積47.3㎡を測り正方形を呈している。壁高は55cm～65cm内外で，壁は南側が高くほぼ垂直に立ちあがっている。壁下には幅12cm，深さ９cm内外の壁溝が，南壁の一部と北壁を除いて廻っている。

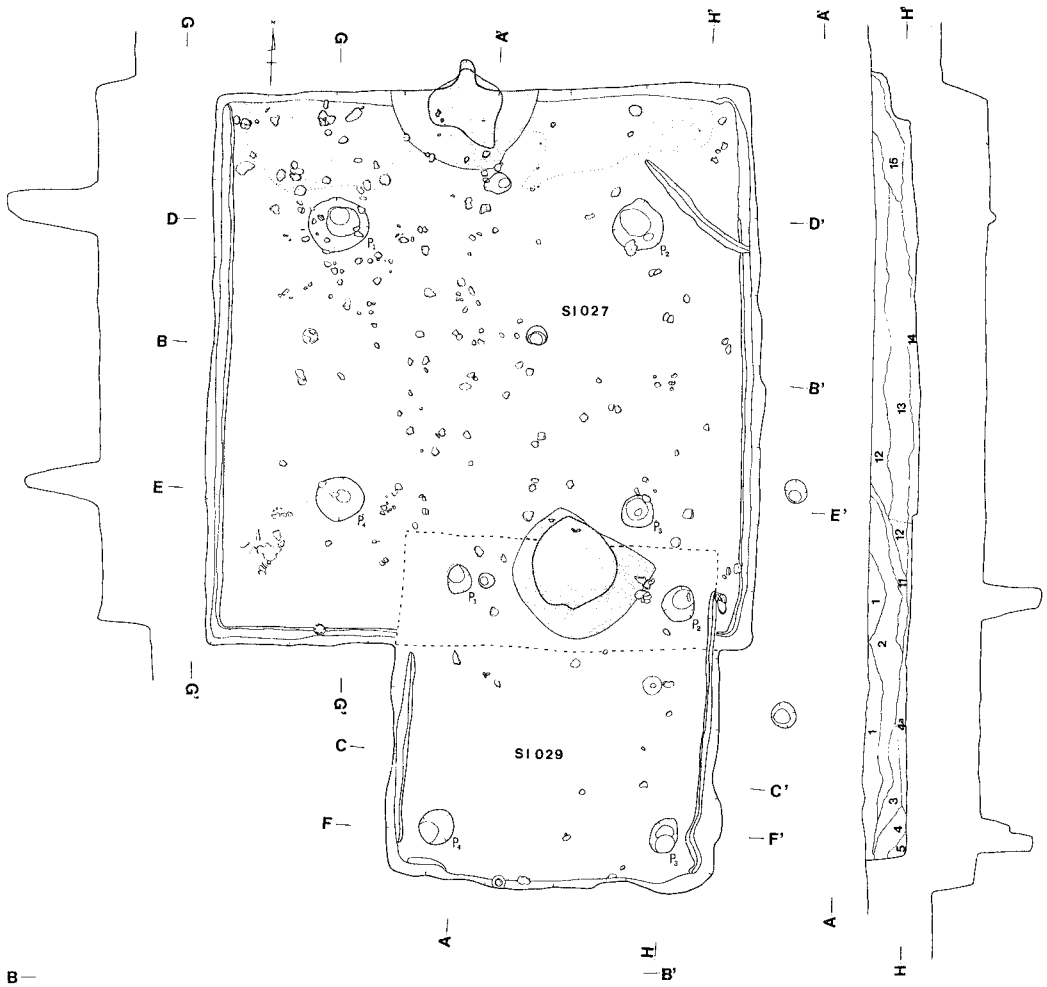
ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考
Ｐ１	80	75	125	主柱穴	Ｐ３	45	44	80	主柱穴
Ｐ２	67	65	92	主柱穴	Ｐ４	63	58	97	主柱穴

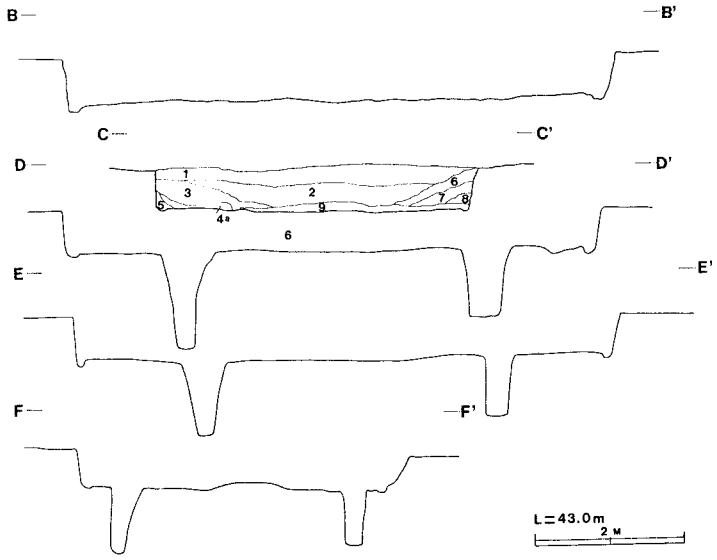
北壁際に幅約１ｍの焼土が分布し，南東コーナーに炭化材を出土しているので，本址は火災に遭遇していると思われる。床面は暗褐色を呈し平坦である。ピットは６個所確認されＰ１～Ｐ４はほぼ円形を呈する主柱穴で，深さは約120cmである。貯蔵穴は有していない。覆土は14層で自然堆積



土層解説
a－a′　b－b′
1. 褐　色　ローム粒子(多)砂粒子(少)炭化粒子，焼土粒子含有
2. 褐　色　砂粒　(多)粘土，ローム粒子(少)炭化粒子含有
3. 褐　色　砂粒　含有粘土，主体土層，一部火を受け焼土化
4. 褐　色　砂粒　含有，粘土層
5. 褐　色　砂粒　含有，粘土主体，焼土(極多)含有
6. 極暗赤褐色　砂粒　含有，粘土が焼土化
7. 褐　色　ローム粒子(多)粘土，炭化粒子(少)焼土粒子，小石含有
8. 暗褐色　ロームブロック(少)ローム粒子(多)砂粒　，炭化粒子(少)焼土粒子(少)含有
9. 黒褐色　ローム粒子(多)砂粒　，炭化粒子(少)焼土粒子含有
10. 暗褐色　焼土粒子(多)砂粒　，小石(少)炭化粒子含有
11. にぶい褐色　砂粒　(極多)粘土含有
12. 黒褐色　ロームブロック(多)砂粒　，焼土粒子含有

第70図　第27号住居址カマド実測図





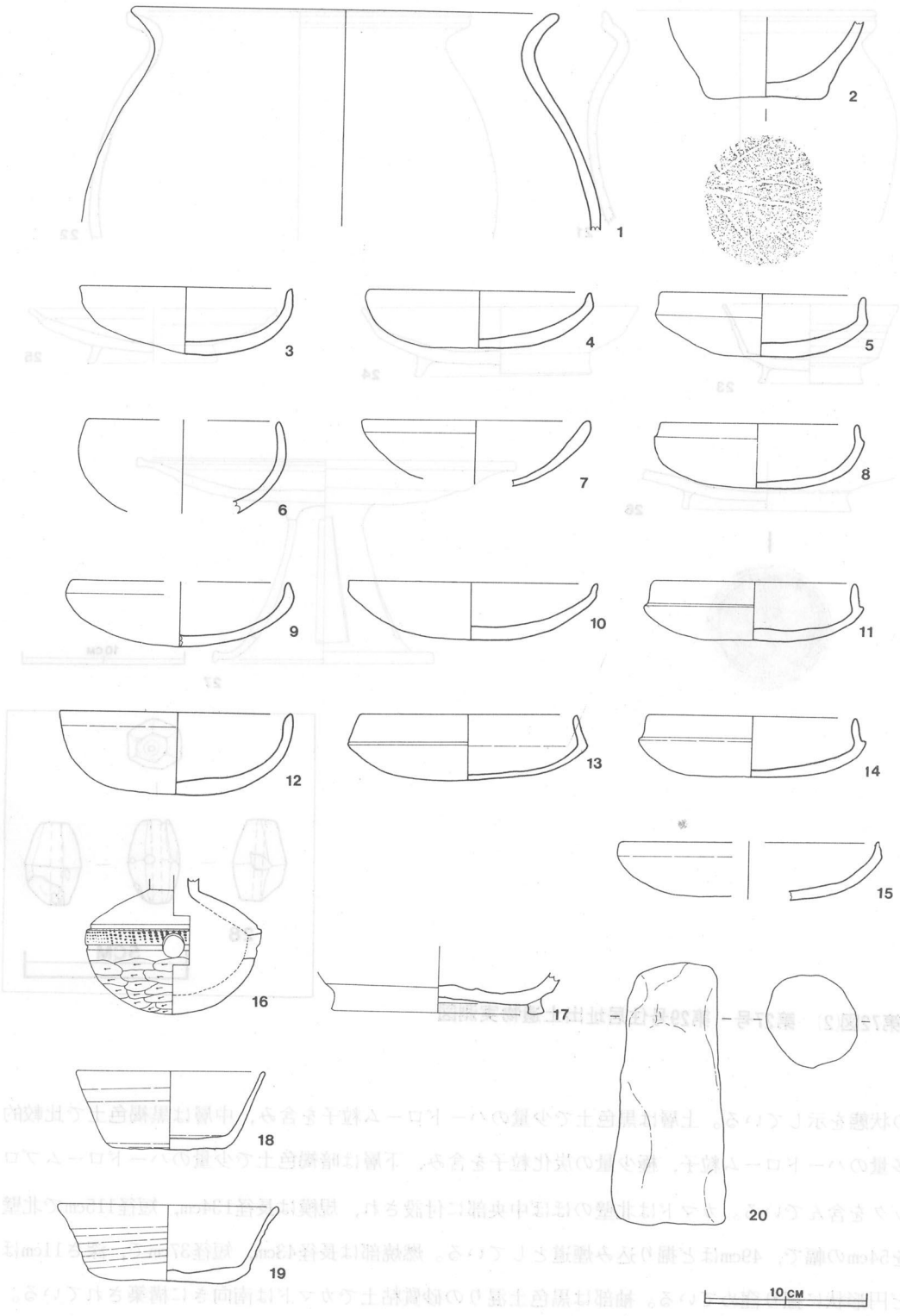
69

土層解説

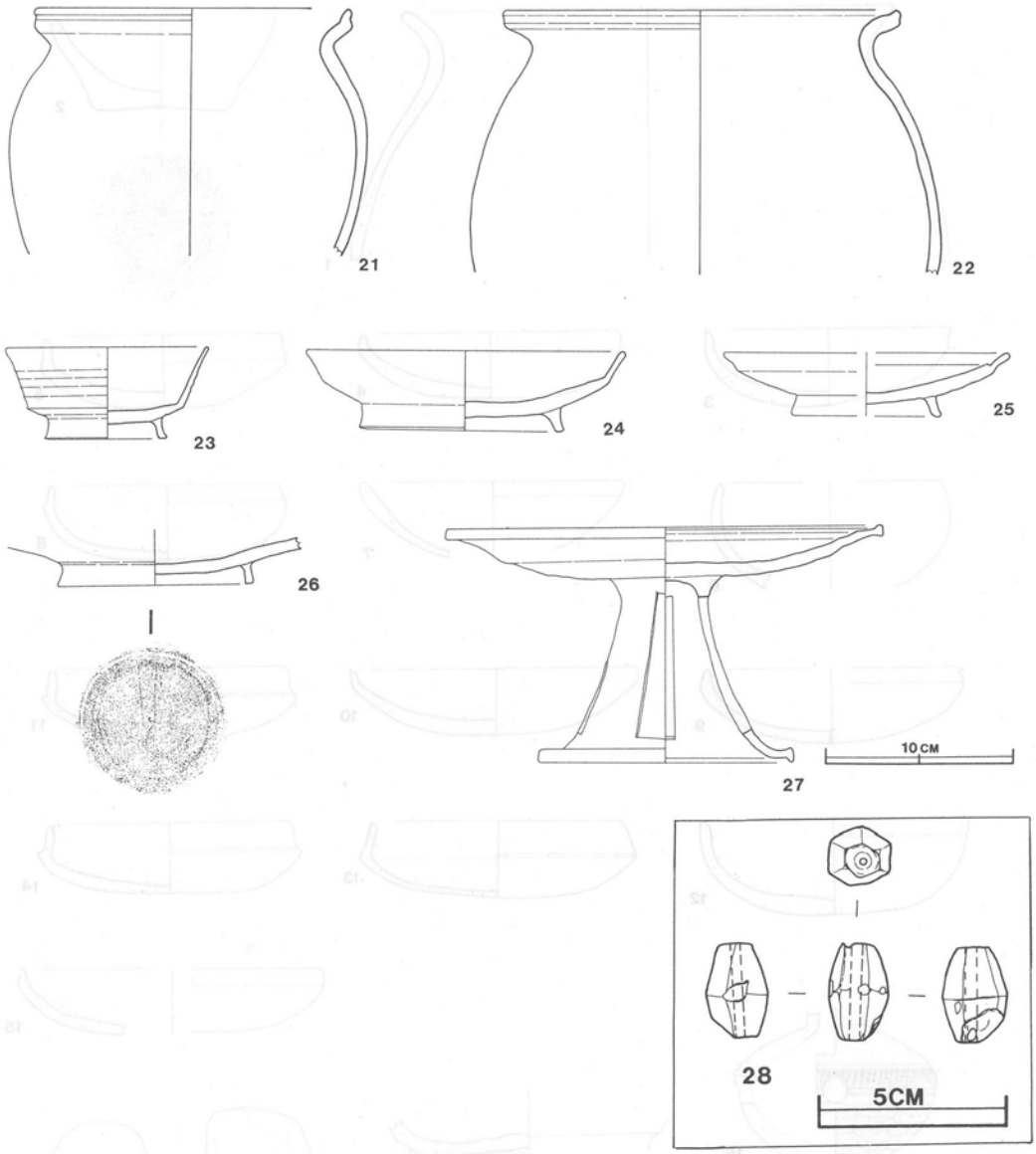
A－A′ C－C′

1. 暗褐色 ローム粒子(少)含有
2. 暗褐色 ハードローム粒子(多)含有
3. 暗褐色 ハードローム粒子含有
4. 暗褐色 ハードローム粒子, ハードロームブロック(少)含有
4a. 褐 色 ハードローム粒子(少)炭化粒子(極少)含有
5. 暗褐色 ハードロームブロック(少)含有
6. 褐 色 ハードロームブロック含有
7. 暗褐色 ハードローム粒子(少)含有
8. 黒褐色 ハードローム粒子(少)含有
9. 暗褐色 ハードロームブロック(少)焼土粒子(少)炭化粒子含有
10. 暗褐色 ハードローム粒子(多)含有
11. 極暗褐色 ハードローム粒子(少)炭化粒子含有
12. 黒 色 ハードローム粒子(少)含有
13. 黒褐色 ハードローム粒子(多)炭化粒子(極少)含有
14. 暗褐色 ハードロームブロック(少)含有
15. 黒褐色 ハードローム粒子含有

第71図 第27号・29号住居址実測図



第72(1)　第27号・29号住居址出土遺物実測図



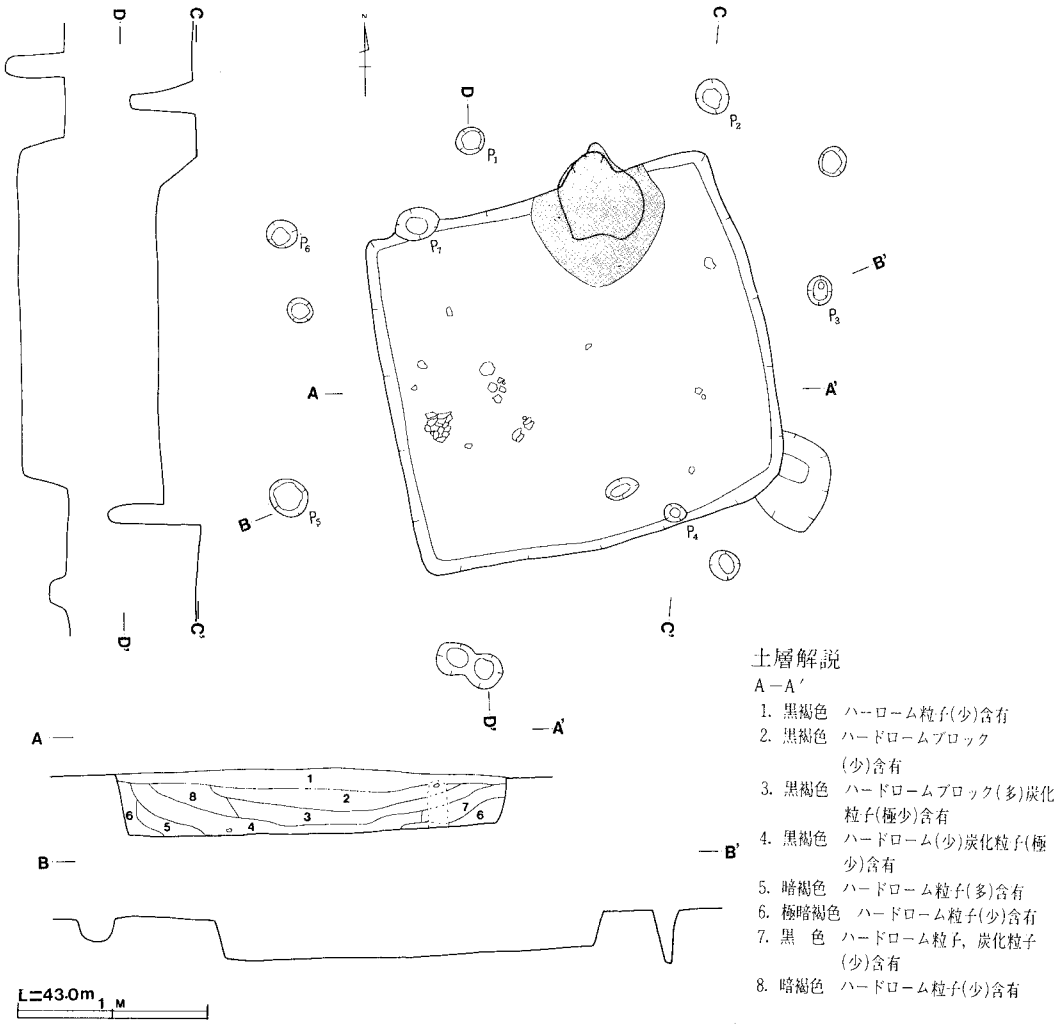
第72図(2)　第27号・第29号住居址出土遺物実測図

の状態を示している。上層は黒色土で少量のハードローム粒子を含み，中層は黒褐色土で比較的多量のハードローム粒子，極少量の炭化粒子を含み，下層は暗褐色土で少量のハードロームブロックを含んでいる。カマドは北壁のほぼ中央部に付設され，規模は長径134cm，短径115cmで北壁を54cmの幅で，49cmほど掘り込み煙道としている。燃焼部は長径43cm，短径37cmで，深さ11cmほど円形状に掘り窪めている。袖部は黒色土混りの砂質粘土でカマドは南向きに構築されている。

出土遺物は土師器と須恵器が共伴して多量に出土している。北西コーナー床面・床面直上から土師器の坏を３個(図72―５・10・12)，甕２個体分(図72―１・２)と，須恵器の坏(図72―18)を出

土し，北壁付近の床面から土師器の坏，北東コーナー床面直上より土師器の坏4個（図72－3・6・8・9），南東コーナー床面直上より土師器の坏2個（図72－11・13），須恵器の腺（図72－16），P3付近から坏（図72－19），南西コーナー床面直上から土師器の甕，須恵器の甑を出土している。他には，土師器の甕（図72－21），坏（図72－4・14・15），支脚（図72－20）などの破片多数と，須恵器の甕，台付壺（図72－17），蓋，高坏（図72－27）などの破片を多数出土している。その他の出土遺物は中央部床面直上から切子玉1個（図72(2)－28）を出土している。本址は古墳時代　鬼高期の新しい時期に比定される遺構と思われる。

第28号住居址（図73・74・75）

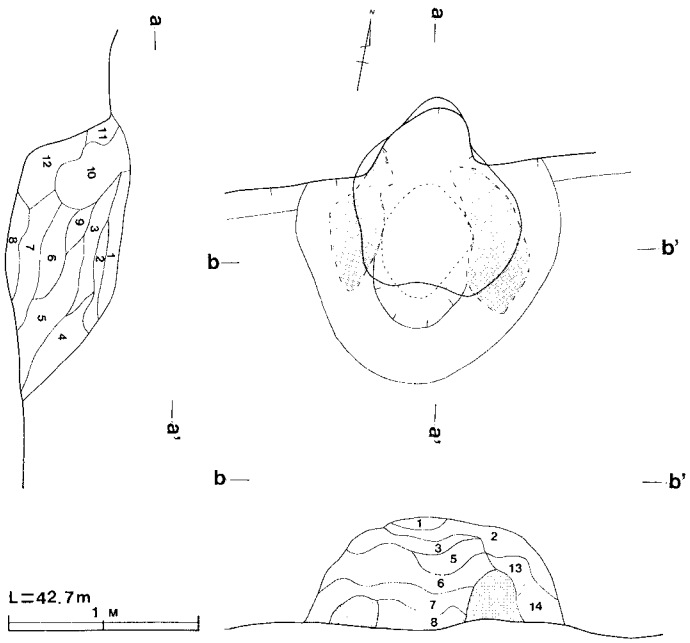


第73図　第28号住居址実測図

本住居址は，調査区の南部中ほどＣ１区ａ７，ａ８，ｂ７，ｂ８，Ｃ７，Ｃ８に確認され，北側2.5m には第26号住居址が，西側7.5m には第29号住居址が検出されている。本址の主軸方向はＮ－16°－Ｗで，規模は長軸4.10m，短軸3.70m，面積12.7㎡を測り長方形を呈している。壁高は38cm～47cm内外で壁は緩るやかに外反して立ち上がっている。壁溝は有していない。床面は暗褐色を呈し平坦で硬く，竪穴住居内からは柱穴と考えられるものは検出されなかったが，施設外から本址に関係あるピットを13個所検出した。煙道部の東西のピットＰ１とＰ２，北西コーナーのＰ７と，南壁東よりのＰ４は，本址に伴う主柱穴と思われる。貯蔵穴は有していない。

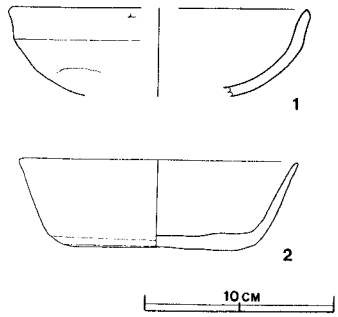
ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考
Ｐ１	30	27	59	主柱穴（施設外）	Ｐ５	43	38	25	主柱穴（施設外）
Ｐ２	40	35	69	主柱穴（施設外）	Ｐ６	33	32	43	主柱穴（施設外）
Ｐ３	32	26	56	主柱穴（施設外）	Ｐ７	46	37	57	主柱穴
Ｐ４	25	22	52	主柱穴					

覆土は９層からなり自然堆積の状態を示している。上層は黒褐色土で極少量のハードローム粒子を含み，中層は黒褐色土で比較的多量のハードロームブロックを含み，下層は黒褐色土で少量のハードロームブロックと極少量の炭化粒子を含んでいる。カマドは北壁の中央部に付設され規模は長径115cm，短径104cmほどで北壁を40cm幅で，25cm掘り込み煙道としている。燃焼部は長径60cm，短径46cmの円形状に，深さ７cmほど掘り窪めている。袖部はローム粒子混りの砂質粘土で，カマドは南東向きに構築されている。



土層解説
a－a′ b－b′
1. 暗褐色　ハードロームブロック(少)含有
2. 褐　色　ハードロームブロック(少)含有
3. 灰褐色　粘土(少)含有
4. 黒褐色　ハードローム粒子(少)含有
5. 暗褐色　ハードローム粒子(少)粘土粒子(極少)含有
6. 灰褐色　粘土を主体とした土層
7. 褐　色　粘土(少)焼土粒子含有，砂質
8. 暗褐色　焼土粒子(少)含有，砂質土層
9. 褐　色　ハードローム粒子(少)含有
10. 灰褐色　粘土主体土層
11. にぶい褐色　ハードローム粒子(少)粘土含有
12. 灰褐色　焼土粒子(少)含有灰層
13. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子含有
14. 暗褐色　ロームブロック(少)ローム粒子(多)炭化粒子(少)含有

第74図　第28号住居址カマド実測図



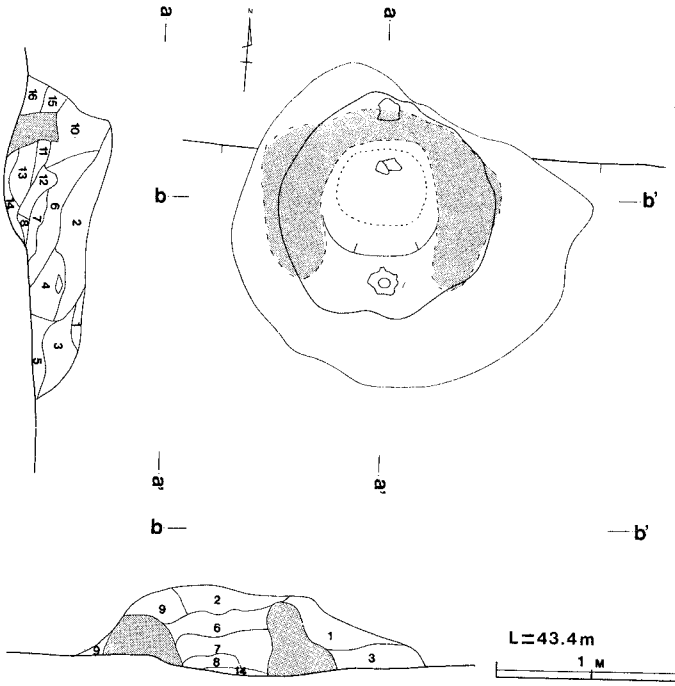
第75図　第28号住居址出土遺物実測図

出土遺物は須恵器と土師器が共伴して出土している。須恵器の完存率の良好なものをあげると中央部床面から坏（図75－２）を出土し，他に蓋，坏などの破片を少量出土している。土師器は西壁付近床面から甕を，北西部床面直上から坏（図75－１）を出土し，他に甕，坏などの破片を多数出土している。その他，粘土を南部から少量出土している。

本址は，出土遺物等から真間期に比定される遺構と思われる。

第29号住居址（図70・72(1)(2)・76）

本住居址は，調査区の南部西よりのＣ１区ｂ４，ｂ５，ｃ４，ｃ５に確認され，本址の北側約30％は第27号住居址と複合している。東側7.5mには第28号住居址が検出されている。本址は第27号住居址より新しい遺構と思われる。主軸方向はＮ－２°－Ｗで，規模は長軸4.55m，短軸4.35m，面積19.6㎡を測り長方形を呈している。壁高は45cm～55cmほどで壁はほぼ垂直に立ちあがり，壁下には幅11cm，深さ６cm内外の壁溝が北壁と南壁を除いて廻っている。床面は暗褐色を呈し硬く，



土層解説
a－a′　b－b′
1. 暗褐色　ハードローム粒子(少)含有
2. 暗褐色　粘土粒子(少)ハードローム粒子含有
3. 暗褐色　粘土(少)ハードローム粒子含有砂質
4. 暗褐色　ハードローム粒子(少)含有
5. 暗褐色　ハードローム粒子(少)含有
6. 暗褐色　ハードローム(極少)粒子炭化粒子含有
7. 褐　色　粘土(少)焼土粒子含有砂質
8. 赤褐色　焼土主体
9. 褐　色　粘土(少)ハードローム粒子含有砂質
10. 暗褐色　ローム粒子(多)砂粒　含有
11. 暗褐色　焼土粒子(多)炭化粒子，砂粒含有
12. 褐　色　焼土化したロームブロック，焼土粒子(多)炭化粒子含有
13. 暗赤褐色　焼土主体
14. 黒褐色　ローム粒子(少)炭化粒子含有一部松の根含有
15. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子，焼土粒子含有
16. 暗褐色　ローム粒子(多)炭化粒子(少)焼土粒子含有

第76図　第29号住居址カマド実測図

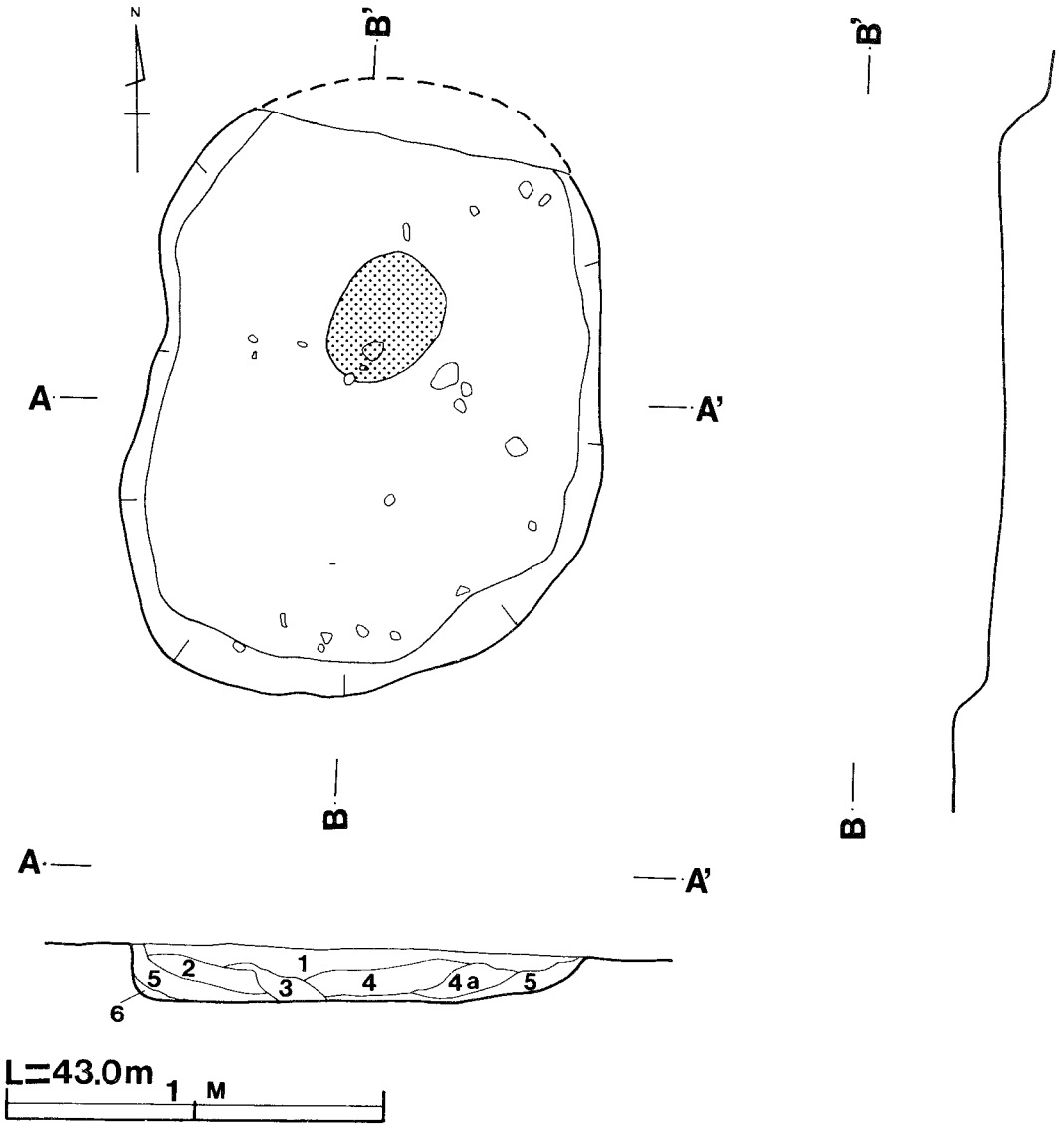
ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考
P 1	40	33	83	主柱穴	P 3	45	35	74	主柱穴
P 2	47	41	80	主柱穴	P 4	47	45	87	主柱穴

第27号住居址の床面に7cmほどローム土で貼り床をして構築されている。ピットは7個所確認され，P1～P4は主柱穴と考えられる。貯蔵穴は有していない。覆土は9層からなり自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土で少量のローム粒子を含み，中層は暗褐色土で多量のハードロームブロックを含み，下層は暗褐色土で少量のハードロームブロックと少量の炭化粒子を含んでいる。カマドは北壁の中央部に付設され，規模は長径130cm，短径126cmで北壁を83cm幅で，37cmほど掘り込んで煙道としている。燃焼部は長径146cm，短径40cmで円形状に約13cmほど掘り窪めている。袖部は黒色土混りの砂質粘土で，カマドは南向きに構築されている。出土遺物は，須恵器を中心に，土師器を共伴している。須恵器は北壁際から盤（図72—24），北東コーナー床面直上から盤（図72—26），南壁際から盤（図72—25）を出土し，他には甕，坏などの破片を少量出土している。土師器は，カマド内より甕片（図72—22）を，他に甕，坏，支脚などの破片を数点出土している。その他，南壁中央付近から粘土を多量に出土している。本址は出土遺物等から国分期に比定される遺構と思われる。

第30号住居址（図77・78）

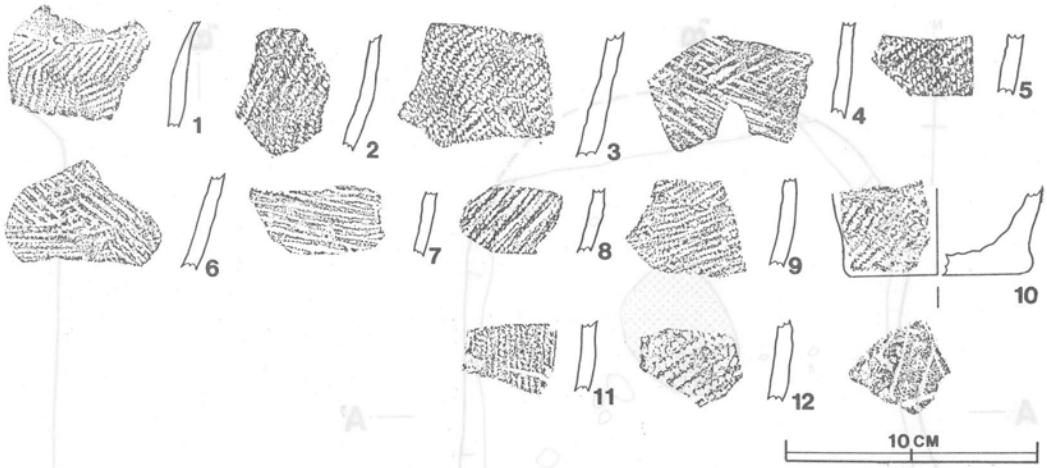
本住居址は，調査区の北東部中ほどA2区f4に確認され，北部は第2号住居址と複合し，南東部は第1号住居址と接している。本址は第1号住居址，第2号住居址より古い遺構である。西側0.5mには第5号住居址が検出されている。主軸方向はN—15°—Eで，規模は長径3.10m，短径2.55m，面積6.3㎡ほどで小判形を呈している。壁高は約20cmで壁は緩やかに外傾して立ちあがっている。床面は皿状を呈し，暗褐色で硬く踏み固められた状態を示している。ピットは検出されなかった。覆土は7層からなり自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土でハードローム粒子，炭化粒子を含み，下層は褐色土でハードローム粒子を含んでいる。炉址は中央よりやや北に確認され，規模は長径70cm，短径53cmの楕円形を呈し，焼土と黒色土混りの暗褐色土が極薄く分布している。

出土遺物は弥生式土器片が主で，床面から木葉痕のある弥生の甕形土器の底部を出土し，他には頸部，胴部などの破片を数点出土している。これらの弥生式土器片は十王台式土器よりも古い型式に属するものと思われる。



土層解説
A－A′
1. 暗褐色　ハードローム粒子(極少)含有
2. 暗褐色　ハードローム粒子(少)炭化粒子(極少)含有
3. 黒褐色　ハードローム粒子(少)含有
4. 黒褐色　ハードローム粒子(少)炭化粒子含有
4a. 暗褐色　ハードローム粒子(極少)含有
5. 褐　色　ハードローム粒子(少)含有
6. 褐　色　ハードロームブロック(多)含有

第77図　第30号住居址実測図



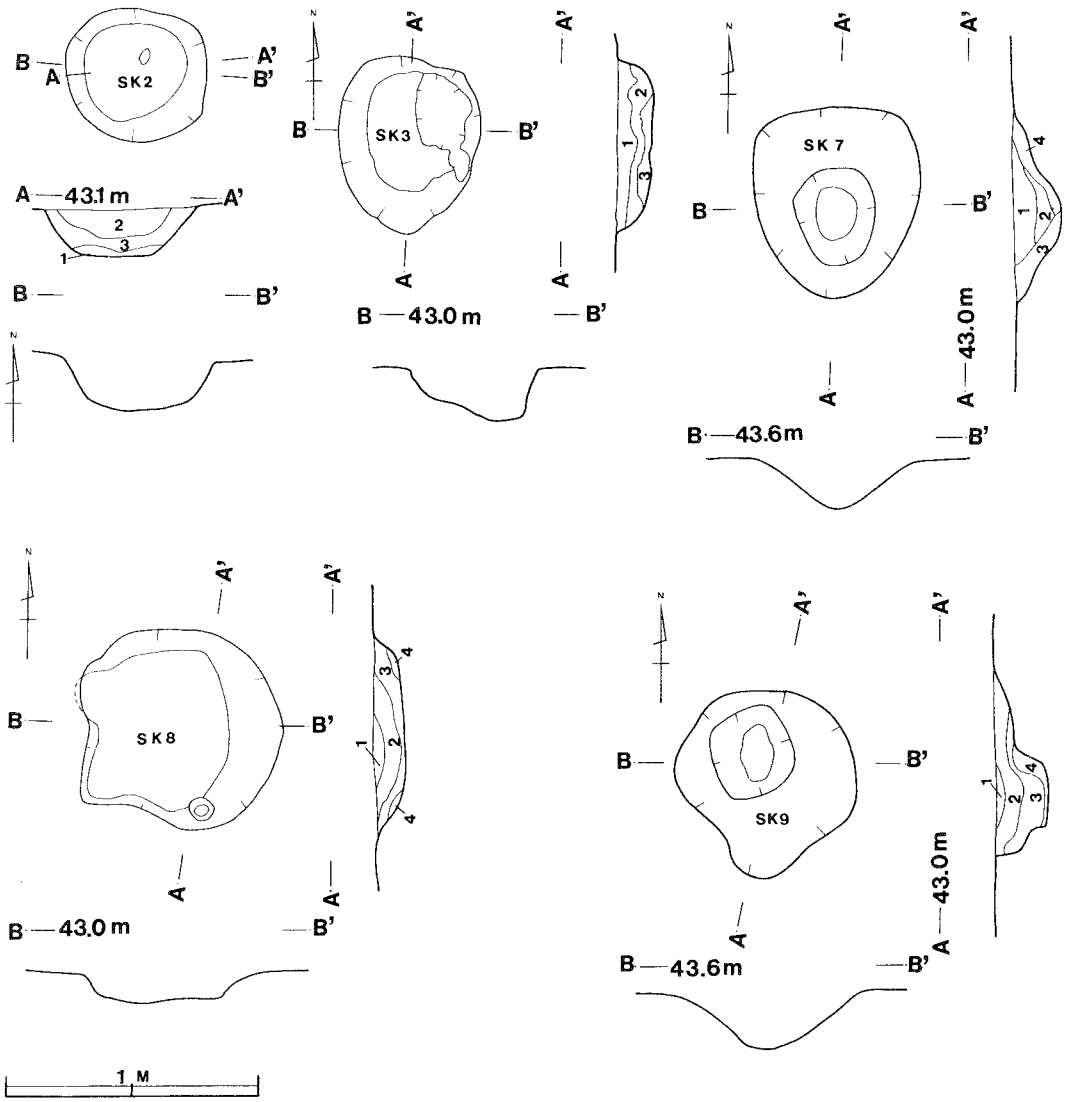
第78図　第30号住居址出土遺物拓影図

2　土　壙（図79・80）

松原遺跡からは6基の土壙が検出された。第1号土壙は，弥生時代の遺構である第3号住居址の床面下より検出され，出土遺物は皆無であり，縄文時代の遺構と思われる。第2号・第3号土壙からの出土遺物は皆無で，第8号土壙からは坏を3個（図80－1～3）出土し，その底部には木葉痕があり，第2号円形周溝遺構と何らかの関係ある土器と思われる。

表1　松原遺跡土壙一覧表

No	位　置	形　状	長径×短径 cm　cm	長径方向	深　さ cm	底	出土遺物	時期	備　考
1	A2f 2	不整楕円	176×53	N－73°－W	上 95 下205	平　坦		不明	図9
2	A1 e 7 / e 8	円　形	115×102	N－55°－W	36	皿　状	須恵 弥生	不明	図80
3	A1j 8	円　形	140×113	N－4°－E	38	平　坦	石器 剝片	不明	図80
7	B1c 6	楕円形	150×130	N－35°－E	42	すりばち状		不明	図80
8	B1c 8	不整円形	168×145	N－54°－W	23	皿　状	土師(坏)	真間	図80
9	B1 c 6 / d 6	不整円形	150×145	N－11°－E	46	すりばち状	土師(坏)	真間	図80



第2号土壙土層解説
A－A′
1. 明褐色　もろい土層
2. 暗褐色　細微な褐色土粒子(多)含有やらかい
3. 暗褐色　小粒な褐色土粒子(少)細微な褐色土粒子(多)含有，やわらかい

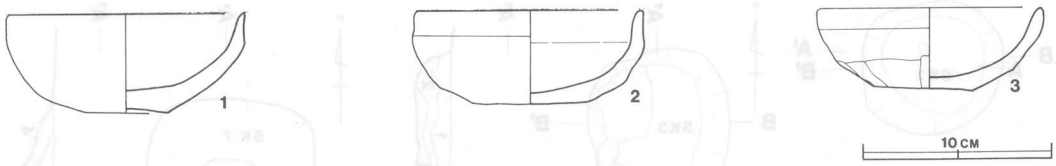
第3号土壙土層解説
A－A′
1. 極暗褐色　ローム粒子(極少)含有さらさらしている
2. 暗褐色　ローム粒子(多)含有さらさらしている
3. 明褐色　ローム含有

第7号土壙土層解説
A－A′
1. 暗褐色　ハードローム粒子(極少)含有
2. 暗褐色　ハードローム粒子(少)含有
3. 褐　色　ハードロームブロック(多)含有
4. 褐　色　ハードローム粒子(少)含有

第8号土壙土層解説
A－A′
1. 暗褐色　ハードローム粒子(極少)含有
2. 褐　色　ハードロームブロック(少)含有
3. 褐　色　ハードローム粒子(少)含有
4. 褐　色　ハードロームブロック(少)含有、ゴツゴツしている

第9号土壙土層解説
1. 黒褐色　ハードローム粒子(極少)含有
2. 暗褐色　ハードロームブロック(少)含有
3. 褐　色　ハードローム粒子(少)含有
4. 褐　色　ハードロームブロック(少)含有

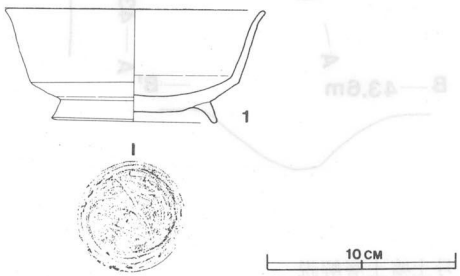
第79図　第2・3・7・8・9号土壙実測図



第80図　第８号土壙出土遺物実測図

３　井戸状遺構（図45・81）

本井戸状遺構は，調査区の中央部Ａ１区ｉ８，ｉ９に確認され，東側は第16号住居址の北西コーナー，西側は第３号溝状遺構と接している。南側約1.7mには第３号土壙が検出されている。本址は，ほぼ円形状を呈し，掘り方は，上縁で長径2.38m，短径2.13m，深さ2.32mほど垂直に掘り下げられて，底部は長径1.27m，短径1.62mを測り，楕円形を呈している。底面の中央から南よりに約直径20cm，深さ25cmのピットがあり，常時水が湧いている。覆土は13層からなり，自然堆積の状態を示している。上層は黒褐色土でローム粒子と極少量の炭化粒子，焼土粒子を含み，中層は極暗褐色土，黒褐色土，褐色土でロームブロック，ローム粒子と微量の炭化粒子，焼土粒子を含み，下層は褐色土，黒色土で，ローム粒子，ロームブロック，鹿沼パミスを含んでいる。

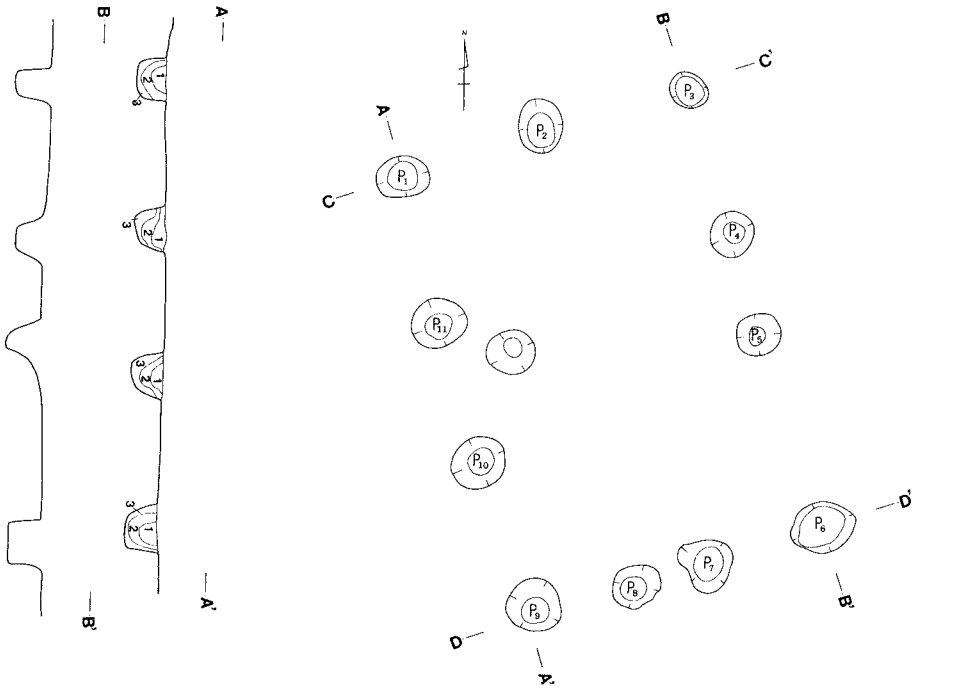


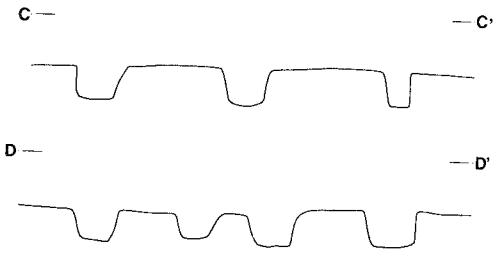
第81図　第１号井戸状遺構出土遺物実測図

出土遺物は，覆土中から縄文式土器片が４点，弥生式土器片が４点，土師器の破片が１点，須恵器の高台付坏片（図81－１），石器が28点出土している。いずれも本址の時期を決定しうる出土遺物ではなく，底部からの出土遺物も皆無で時期は不明である。

４　掘立柱建築址（図82）

本建築址は，調査区の中央部南側Ｂ１区ｅ７，ｅ８，ｆ７，ｆ８に確認され，北東1.5mには第21号住居址が，南側1.8mには第23号住居址が検出されている。規模は桁行３間（4.84m），梁行２間（3.07m），面積15.0㎡ほどで，主軸方向はＮ－17°－Ｗである。柱痕のピット番号は北西コーナーをＰ１とし，北西から北東まわりで「⌐」状に番号をＰ１～Ｐ10まで仮称する。梁行２間の柱間寸法は，北側のＰ１・Ｐ２・Ｐ３は1.53m＋1.54mを測り，南側梁行３間のＰ６・Ｐ７・Ｐ８・





土層解説

A－A′

1. 黒褐色　ハードローム粒子(少)含有
2. 黒褐色　ハードロームブロック(少)含有
3. 褐　色　ハードロームブロック(少)含有

L=43.0m　2 M

第82図　掘立柱建築址実測図

P 9 は1.24m ＋0.83m ＋1.14m，桁行３間の西側寸法，P 9 ・P10・P11・P 1 は1.72m ＋1.51 m ＋1.61m ほどの間隔である。柱穴の掘り方は一辺が72cm～38cmほどの方形状を呈し，深さは約

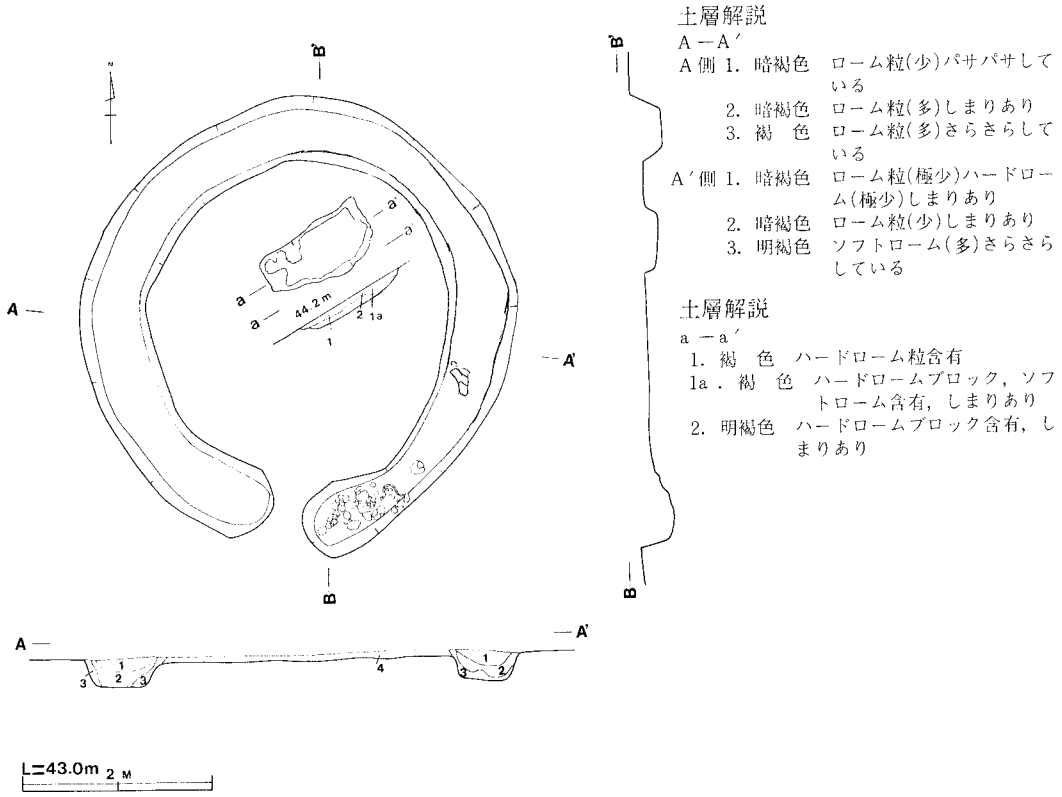
ピット番号	長辺cm	短辺cm	深さcm	形　状	ピット番号	長辺cm	短辺cm	深さcm	形　状
P 1	56	45	35	楕円形	P 7	59	50	32	不整楕円
P 2	58	47	39	楕円形	P 8	52	43	26	楕円形
P 3	51	38	38	楕円形	P 9	56	56	34	楕円形
P 4	49	48	29	円　形	P10	60	53	33	円　形
P 5	48	44	36	円　形	P11	59	52	32	円　形
P 6	70	54	35	楕円形					

38cm～25cmを測り，柱痕はほぼ明確に確認することができた。柱穴内にはロームブロック，ローム粒子を含む褐色，暗褐色土を充填していた。柱穴内から土師器と須恵器の細片を数点出土しているが，時期決定の遺物となりえなかった。

5　円形周溝遺構

第1号円形周溝遺構（図83・84）

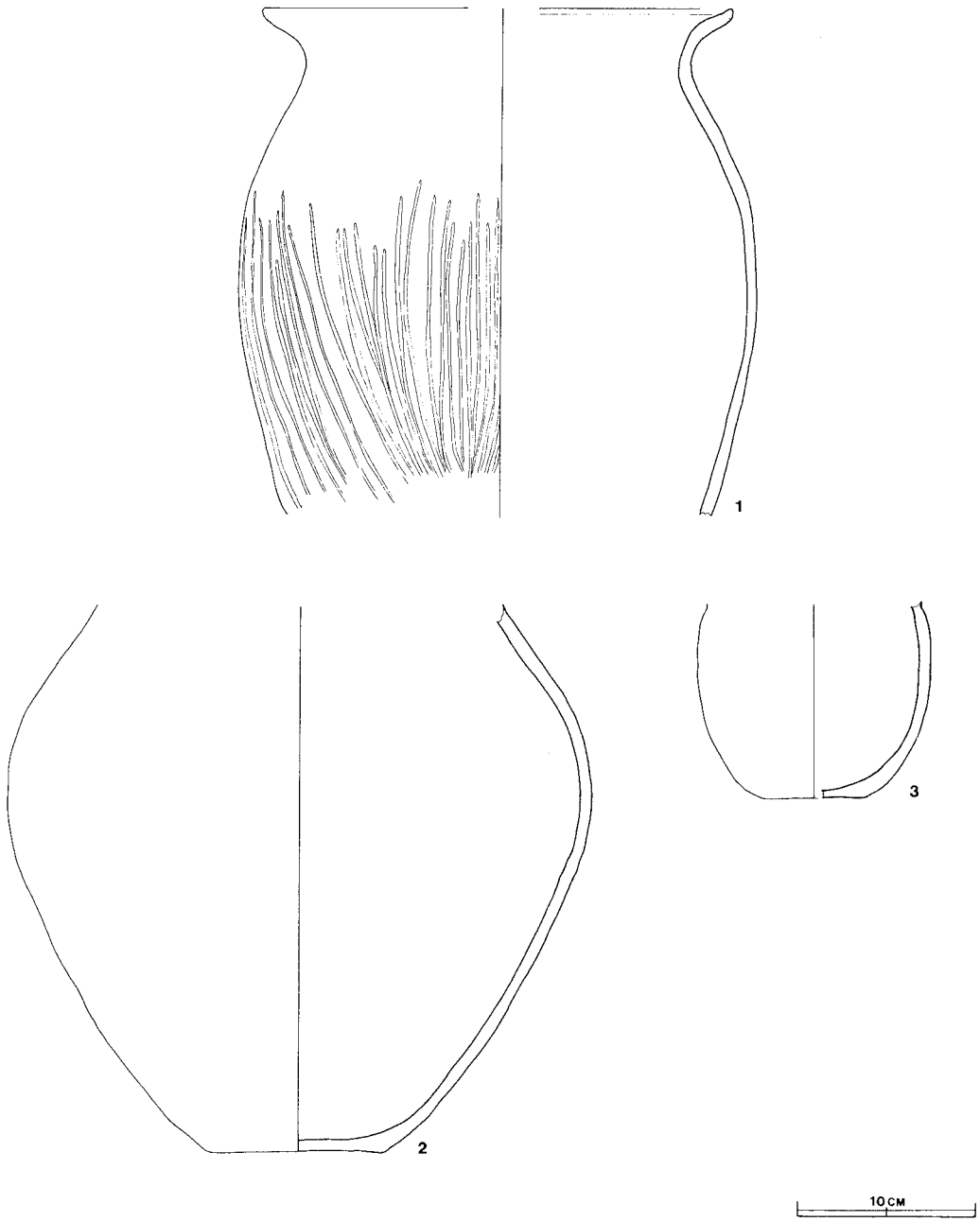
本円形周溝遺構は，調査区の北部A2区b1，c1，c2，d1に確認され，南側から北東に第3号溝状遺構が走り，北東部3.5mには第7号住居址が検出されている。本址の規模は外周直径4.85m～4.52m，内周の直径3.38m～3.26mを測る。周溝の上幅は約70cm，底面の幅約50cm，深さは30cmで周溝の底面は「U」状を呈している。周溝の南側中央部のみが切れており，その部分



第83図　第1号円形周溝遺構実測図

はブリッジと見られ，幅は約35cmである。中央から北よりに長辺1.23m，短辺0.5m，深さ12cmの浅い土壙状の掘り込みを確認したが，遺物は皆無で本址の主体部とは思われない。

覆土は4層からなり自然堆積の状態を示している。上層は暗褐色土で少量のローム粒子と極

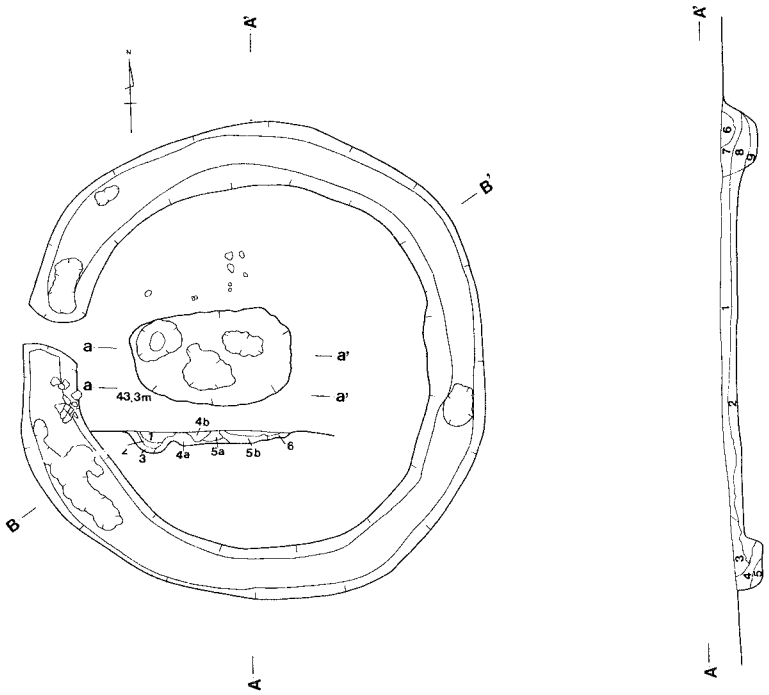


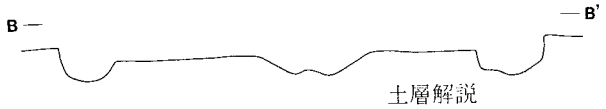
第84図　第1号円形周溝遺構出土遺物実測図

少量の焼土粒子を含有し，下層は褐色土で多量にソフトロームを含んでいる。　出土遺物はブリッジの東側からの出土遺物が多く，土師器の小型甕（図84－3），甕片２点（図84－１・２）と細片を数点出土している。これらは供献土器とは思われず，本址の性格は不明である。

第２号円形周溝遺構（図85・86）

本円形周溝は，Ｂ１区ｃ４，ｃ５，ｄ４，ｄ５，ｅ４，ｅ５に確認され，北東4.0mに第９号土





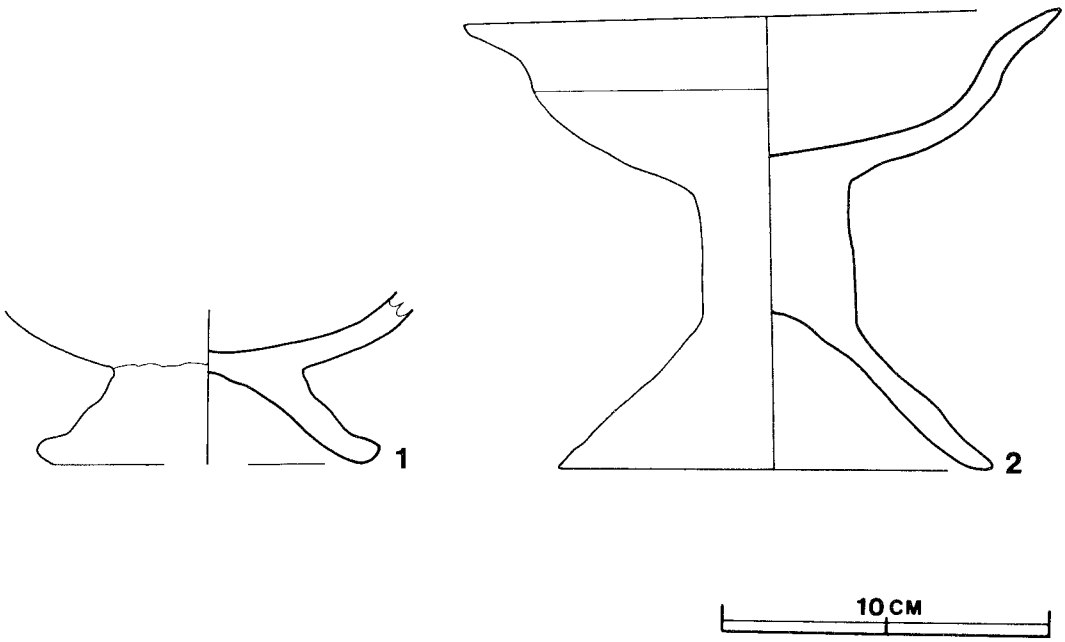
L=43.0m 2 M

土層解説
a－a′
1. 極暗褐色　ハードローム粒子(極少)含有
2. 黒褐色　ハードローム粒子(少)含有
3. 褐　色　ハードローム粒子(少)含有
4a．暗褐色　ハードローム粒子(少)含有
4b．褐　色　ハードローム粒子(極少)含有
5a．暗褐色　ハードローム粒子(少)含有
5b．暗褐色　ハードロームブロック(極少)含有
6. 褐　色　ハードロームブロック(少)含有ゴツゴツしている

土層解説
A－A′
1. 褐　色　ローム粒子(極少)焼土粒子(極少)含有さらさらしている
2. 明褐色　ローム粒子(多)ハードロームブロック焼土粒子(極少)含有
3. 極暗褐色　ローム粒子(極少)焼土粒子(極少)含有
4. 明褐色　ローム粒子(多)焼土粒子(少)サラサラしている
5. 明褐色　ローム粒子(少)焼土粒子(極少)含有サラサラしている
6. 極暗褐色　ローム粒子(極少)焼土粒子(極少)含有
7. 明褐色　ローム粒子(多)焼土粒子(少)ハードロームブロック(多)含有
8. 極暗褐色　ローム粒子(極少)サラサラしている
9. 明褐色　ローム粒子(多)焼土粒子(少)サラサラしている

第85図　第２号周形周溝遺構実測図

壙が，南東3.0mには第24号住居址が検出されている。本址の規模は外周の直径約4.85m～5.0mで，内周の直径が3.9m～4.0mを測り，主軸方向はN－15°－Eである。周溝の上幅は62cm，深さは30cm，底面は幅30cmで，「U」状を呈している。ブリッジの幅は約25cmである。中央から西よりに長辺165cm，短辺100cm，深さは13cm～20cmほどの浅い土壙状の掘り込みを確認したが，遺物は皆無で本址の主体部とは考えられない。周溝内の覆土は4層からなり，自然堆積の状態を示している。土層は極暗褐色土で，極少量のローム粒子と焼土粒子を含み，下層は褐色土で多量のローム粒子，少量のハードロームブロック，焼土粒子を含んでいる。出土遺物はブリッジの南部からの出土が多く，土師器の内黒の高坏片（図86－1），高坏片（86－2），他には甕，坏などの細片を数点出土している。これらは供献土器とは思われず，本址の性格は不明である。

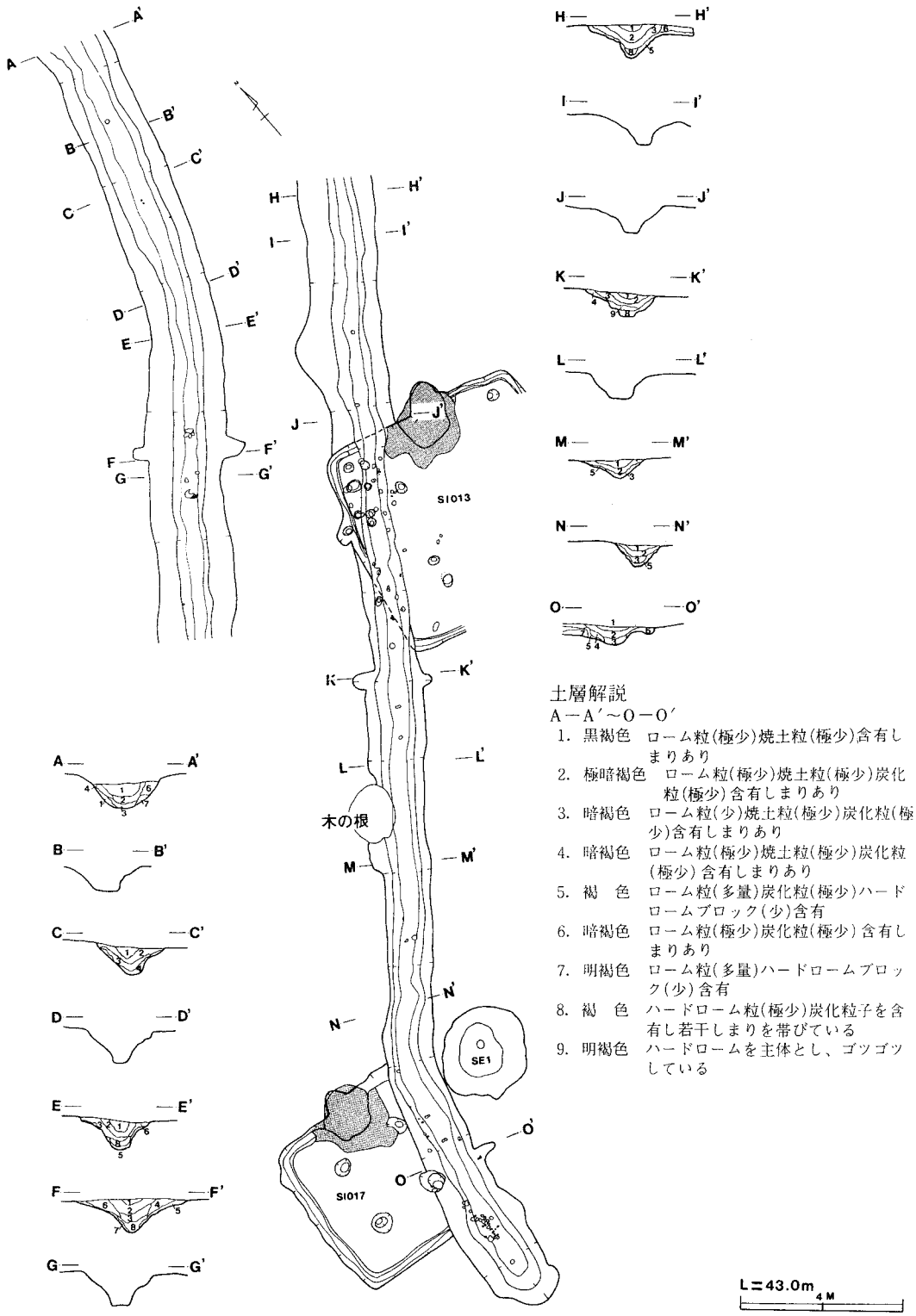


第86図　第2号周形周溝遺構出土遺物実測図

6　溝状遺構

第1号溝状遺構（図87・88）

本溝状遺構は，A1区，A2区に確認され，遺跡の中央部西よりから北東方面に走り，北部の谷に向って構築されたものと推定される。第17号住居址の南東部A1区j8から始まり，規模は上幅が1.65m，下幅0.45m，深さ0.60mほどで，主軸方向はN－18.6°－Eを向き，北北東に緩やかな傾斜をし，約6.70mほど進み（A1区i8），N－35.5°－Eの方向にかえ，第13号住居址の西側を削除



土層解説

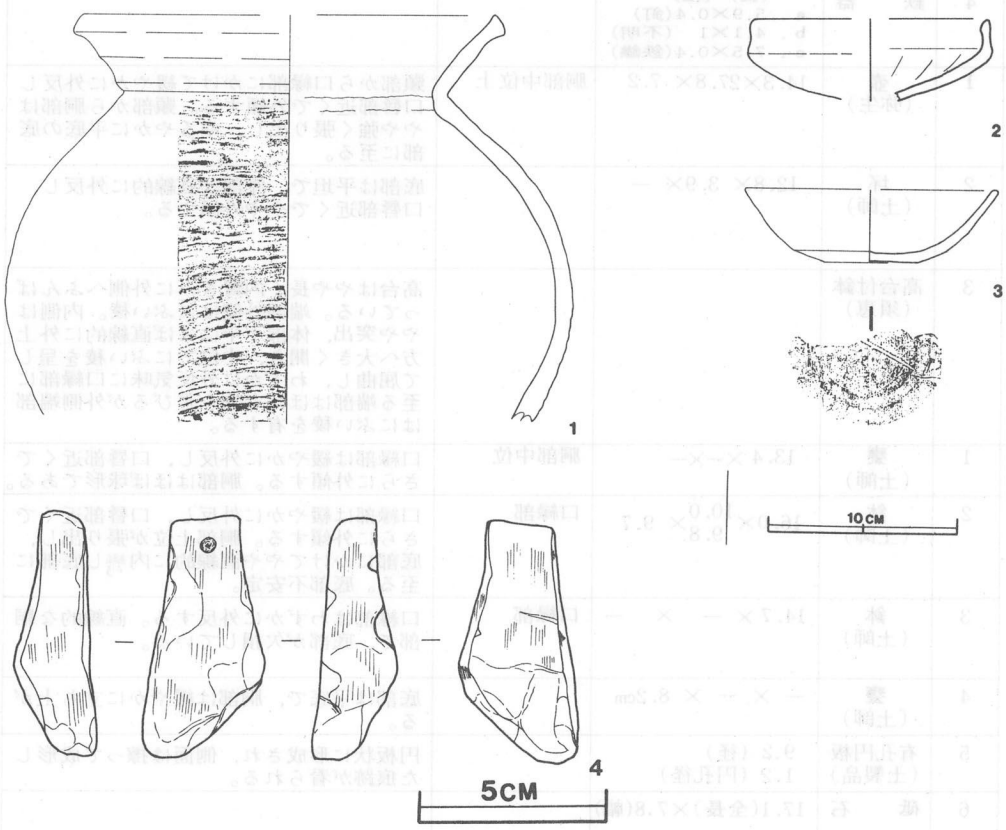
A－A′～O－O′

1. 黒褐色　ローム粒(極少)焼土粒(極少)含有しまりあり
2. 極暗褐色　ローム粒(極少)焼土粒(極少)炭化粒(極少)含有しまりあり
3. 暗褐色　ローム粒(少)焼土粒(極少)炭化粒(極少)含有しまりあり
4. 暗褐色　ローム粒(極少)焼土粒(極少)炭化粒(極少)含有しまりあり
5. 褐　色　ローム粒(多量)炭化粒(極少)ハードロームブロック(少)含有
6. 暗褐色　ローム粒(極少)炭化粒(極少)含有しまりあり
7. 明褐色　ローム粒(多量)ハードロームブロック(少)含有
8. 褐　色　ハードローム粒(極少)炭化粒子を含有し若干しまりを帯びている
9. 明褐色　ハードロームを主体とし、ゴツゴツしている

第87図　第1号溝状遺構実測図

し，規模は上幅128cm，下幅35cm，深さ80cmで，北東へ30.8mほど伸び，第1号溝の北東部でN－14°－Eに角度をかえ（A2区c3），規模は上幅16.5cm，下幅51cm，深さ約50cmで北北東へ6.75mほど伸び緩やかな傾斜をなして谷へ向っているものと思われる。確認した本址の全長は44.25mで，底面のレベルはA－Aで42.46m，L－Lで42.51m，O－Oで42.54mを測り，本址の中央部と北部との比高は8cmで，南西から北東に向うにしたがって緩かな傾斜をなしている。本址は第13号住居址，第17号住居址より新しい遺構で，覆土は8層からなり，自然堆積の状態を呈している。上層は黒褐色土，極暗褐色土で，極少量のローム粒子，焼子粒子，炭化粒子を含有し，中層は暗褐色土で多量のローム粒子，極少量の焼土粒子，炭化粒子を含有し，下層は褐色土で，極少量のハードローム粒子，炭化粒子を含有している。

出土遺物は，覆土中から須恵器を中心に石器，縄文式土器片，弥生式土器片，土師器片を出土している。須恵器は坏6個体分（図88－2・3）と，細頸壺，大型甕（図88－1）などの破片と，砥石（図88－4）を出土している。これらは溝が廃棄された後，投棄されたものと思われる。本溝状遺構の性格は不明であるが，時期は国分期に廃棄された遺構と思われる。



第88図　第1号溝状遺構出土遺物実測図

表2　松原遺跡出土遺物観察表

住居址	番号	種　類	法　量 (口径cm×器高cm×底径cm)	最大径	器形の特徴
第一号住居址（図8）	1	甕 （土師）	21.5×　—　×　—	胴部中位上	口縁部は頸部から直立し，口縁部上位で外傾する。口唇部は外を向き丸い。
	2	甕 （土師）	8.9×　—　×　—		小型の平底から内彎してゆるやかに立ち上る。
	3	蓋 （須恵）	15.1×　2.9		天井部は径10cmに渡って回転ヘラ削りの後，扁平で，中央部を残して内側が凹むつまみを有している。
第二号住居址（図8）	1	甕 （須恵）	—　×　—　×　19		底部はわずかに上げ底状，平底で体部との境は屈曲して稜有，体部は多少内彎ぎみに外上方へ立ち上る。
	2	甕 （須恵）	22×35.2×　9.8 長　幅	胴部中位上	底部は平底で，体部は最大径を器高の½附近に有し，肩部はなだらかで，下部はゆるやかに内傾してくる。口頸部との境は明瞭でない。口頸部は外反しつつ外上部へのび，口縁部は断面三角形状につくり上・下端はするどい。
	3	盤 （須恵）	21.7×　4.4×11.8	口縁部	外側へふんばる高台。底部と体部との境はにぶい稜をなし，口縁部はわずかに外反し，端部はほぼ丸く収めている。内面は底部と体部との境ににぶい屈曲を呈する。
	4	鉄　器	（長）（幅） a．5.9×0.4（釘） b．4.1×1　（不明） c．7.5×0.4（鉄鏃）		
第三号・五号住居址（図10）	1	壺 （弥生）	14.3×27.8×　7.2	胴部中位上	頸部から口縁部にかけて緩やかに外反し口唇部近くで外傾する。頸部から胴部はやや強く張り出し，ゆるやかに平底の底部に至る。
	2	坏 （土師）	12.8×　3.9×　—		底部は平坦で，体部は直線的に外反し，口唇部近くでやや外傾する。
	3	高台付鉢 （須恵）			高台はやや長く内彎ぎみに外側へふんばっている。端部外側はにぶい稜。内側はやや突出，体部下半はほぼ直線的に外上方へ大きく開き，中位でにぶい稜を呈して屈曲し，わずかに外反気味に口縁部に至る端部はほぼ丸味を帯びるが外側端部はにぶい稜を有する。
第六号住居址（図17）	1	甕 （土師）	13.4×—×—	胴部中位	口縁部は緩やかに外反し，口唇部近くでさらに外傾する。胴部はほぼ球形である。
	2	鉢 （土師）	16.0×$\frac{10.0}{9.8}$×　9.7	口縁部	口縁部は緩やかに外反し，口唇部近くでさらに外傾する。胴部上位が張り出し，底部にかけてやや直線的に内湾し底部に至る。底部不安定。
	3	鉢 （土師）	14.7×　—　×　—	口縁部	口縁部はわずかに外反する。直線的な胴部で，底部が欠損している。
	4	甕 （土師）	—　×　—　×　8.2cm		底部は平底で，胴部は緩やかに立ち上がる。
	5	有孔円板 （土製品）	9.2（径） 1.2（円孔径）		円板状に形成され，側面は擦って成形した痕跡が看られる。
	6	砥　石	17.1（全長）×7.8（幅）		

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
口—指ナデ 胴—ヘラケズリ	口—指ナデ 胴—ヘラナデ	にぶい橙	不良	砂粒含	胴長甕
ヘラミガキ	ナデ		普通		
回転ヘラケズリ	水挽き痕		良好	長石粒・細砂粒を含みキメ粗い	水挽き根は弱い
体部下端は幅3cm前後で回転ヘラケズリ	粘土紐の巻き上痕を残すナデ		不良	長石粒細砂粒含	ヘラ記号有
底—多方向からのヘラ削り 体部下半—左上からのヘラ削り	ヘラナデ	にぶい橙			頸部に六のヘラ記号 蔵骨器に利用
底—径16cmに渡って回転ヘラ削り		暗オリーブ灰			水挽き痕弱い 底部に井印のヘラ記号有り
口唇部＞縄文 胴部	ナデ	にぶい橙	普通	砂粒含	
底部—ヘラ切り 外面—指ナデ，ヘラ削り	内黒，ミガキ	にぶい黄橙	普通	砂粒含	
底部—回転ヘラ削り 体部下半—回転ヘラ削り		灰	普通		水挽き痕は弱い。 体部に焼成時のヒビ割れ有り
口—指ナデ 胴—ヘラケズリ	口—指ナデ 胴—ヘラケズリ	にぶい橙	不良	砂粒等含	
口—指ナデ 胴—ヘラケズリ	指ナデ 胴—ヘラケズリ	にぶい黄橙	良好	砂粒等含	
口—指ナデ 胴—摩滅により不明	口—指ナデ 胴—ヘラナデ	橙	不良	砂粒 雲母含	
ヘラ削り	ナデ	橙	やや不良	砂粒・スコリアを少量含む	底部破片のみ
					上面他，側面を多面的に使用している。

住居址	番号	種　類	法　量 (口径cm×器高cm×底径cm)	最大径	器形の特徴
第七号住居址(図20)	1	甕 (土師)	21.5×30.6× 6.8	口縁部	口縁部は僅かに外反し，口唇部近くで強く外傾する。頸部で僅かに「く」の字状にくびれた後中位であまり膨らまず内傾して底部に続く
	2	甕 (土師)	15.0× — × —		頸部は「く」の字状にくびれ口縁部でほぼ直線的に外反する。
	3	甕 (土師)	19.0× — × —	口縁部	胴部は直線的　で膨らまず，口縁部は緩やかに外反し，口唇部近くで強く外傾する。底部欠損
	4	鉢 (土師)	20.4× — × —	口縁部	口縁部はわずかに外反し，胴部は球形になる。底部は欠損している。
	5	鉢 (土師)	12.6× — × —	口縁部	器厚は頸部近くで厚くなり,口唇部端で急に薄くなる。口縁は器厚の変化により外傾する。底部欠損
	6	坏 (土師)	12.4× 3.7 ×—	口辺部	口縁部はやや内傾して直線的に立ち上がり，体部との境に段を持ち，やや偏平な体部となる。
	7	高　坏 (土師)	16.0×— × —	口縁部	坏部は稜を持たず緩やかに内湾する。
	8	坏 (土師)	12.2 ×—×—	口縁部	底部はわずかに丸味を持つ平底で，体部は直線的に広がり口唇部近くにナデによる稜を持つ。
	9	坏 (土師)	14.7× 3.6× —	頸部下	扁平な底部からゆるやかに立ち上がり頸部が直立する。口唇部は丸味を帯びる。
	10	坏 (須恵)	13.8× 4.6× 8.9	口　縁　部	底部は外周部まで挽き出し切り離し部は小さい。体部との境はにぶい屈曲で体部はわずかに器厚を減じながらほぼ直線的に口縁部に至る。口縁端部はやや鋭い。内面底部外縁には弱いアテが見られる。
	11	蓋 (須恵)	15.9×4.65 ×—	口　縁　部	天井部は全体的に丸味を持ち円盤状の扁平なつまみを貼りつけている。天井部と口縁部の境は鋭く屈曲し稜をなす。口縁部はやや内傾し，下方へ下がり端部は鋭さをもつ。
第八号住居址(図23)	1	坏 (土師)	12.9× 4.5× —	口縁部	丸底の底部からほぼ直線的に外傾し口唇部に至って器厚が薄くなるが全体的に肉厚で特に体部は厚みがある。
	2	坏 (土師)	13.0×— × —	口縁部	体部は偏平であり，口縁部は直角に立ち上がる。器厚は体部との境で厚くなり内側に稜をつくる。頸部で薄く口唇部で丸みをおびる。
	3	坏 (土師)	14.2× 3.9× —	口辺部	口縁部は直線的で，体部との境に稜を持つ。体部は偏平な弧状を呈する。
	4	坏 (土師)	13.8× — × —	口縁部	口縁部はわずかに外傾して立ち上がり体部との境外面にゆるやかな凹みを持つ。内面に僅かな稜をもつ。
	5	坏 (土師)	14.3×4.0 × —	口辺部	口縁部はやや内傾して直線的に立ち上がる。口縁部と体部の境に稜を持ち，体部は緩やかに内彎する。
	6	坏 (土師)	13.0× 4.7× 6.5	口辺部	底部はやや平底気味で，体部は直線的に内彎する。口縁部は体部との境から外反して立ち上がる。境の内外面に稜を有する。
	7	坏 (土師)	14.7× 3.7× —	胴　部	口縁部にスリット状のものあり。
	8	坏 (土師)	15.4× — × —	口辺部	体部は偏平でゆるやかに内彎して立ちあがり体部との境(外面)には稜を持つ。口縁部はナデによって作られ，口唇部は非常に薄い。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
口—指ナデ 胴—ヘラケズリ	口—指ナデ 胴—ヘラナデ	橙	普通	砂粒含	胴長
口—指ナデ 胴—ヘラケズリ	口—指ナデ 胴—ヘラナデ	灰黄	不良	砂粒含	
口—指ナデ 胴—ヘラケズリ	口—指ナデ 胴—ナデ	橙	普通	砂粒 雲母含	胴長
口—指ナデ 胴—ヘラケズリ	口—指ナデ 胴—ナデ	灰黄	良好	砂粒等	
口—指ナデ 胴—ヘラケズリ	口—指ナデ 胴—ナデ	にぶい橙	不良	砂粒含	
口—指ナデ 胴—ヘラケズリ	指ナデ	にぶい橙	普通	砂粒等含	ほぼ完形
口—指ナデ 胴—ヘラケズリ （上から下へ）	ヘラミガキ （内黒）	にぶい黄橙	普通	砂粒・長石 石英等含	
ヘラケズリ	指ナデ	明赤褐	良好	砂粒等含	
口—指ナデ 底—ヘラケズリ の後粗なナデ	ヘラミガキ （摩滅）	褐灰	普通	砂粒含	
底部回転ヘラ削り外面底部と体部との境—回転ヘラ削りによる面取り	水挽き痕跡弱い	灰	良好	長石粒 細砂粒含	水挽き痕は弱い
中央部回転ヘラ削り			普通	長石粒 細砂粒含	水挽き痕は弱い
口—指ナデ 底—ヘラケズリ	ヘラミガキ （摩滅）	褐	普通	砂粒 雲母含	
口—指ナデ 底—ヘラケズリ	指ナデ	灰褐	不良	砂粒等含	
口—指ナデ 全体に摩滅が著しい	口—指ナデ 全体に摩滅が著しい	にぶい黄橙	不良	砂粒等含	ほぼ完形 煤付着
口—指ナデ 底—ヘラケズリ	ヘラミガキ （摩滅）	にぶい黄橙	不良	砂粒等含	
口—指ナデ 底—ヘラケズリ	ヘラミガキ （摩滅している）	灰白	やゝ不良	砂粒含	
口—指ナデ 底—ヘラケズリ	ヘラミガキ （摩滅している）	褐	不良		
口—指ナデ 底—ヘラケズリ	口—指ナデ 底—ナデ	にぶい黄橙	普通	砂粒含	

住居址	番号	種　類	法　量 (口径cm×器高cm×底径cm)	最大径	器形の特徴
第八号住居址（図23）	9	坏 （土師）	15.1× 4.8× —	口縁部	丸底からゆるやかに内彎して立ち上がりナデにより体部との境に稜を有する。口唇部は丸みをおびている。
	10	坏 （土師）	15.3× — × —	口辺部	口縁部は垂直気味に立ち上がり，体部は偏平である。
	11	手　捏 （土師）	3.5× 2.7× 4.4	体部中位	体部は強く内彎し，口唇部内面に稜を持つ。
	12	支　脚 （土師）			底部からゆるやかに細くなる棒状で，手づくねとナデによって成形されている。
第九号住居址（図26）	1	鉢 （土師）	18.6×14.0× 9.4	口縁部	口縁部は極めて短かく直線的に外反する。体部は底部から僅かに内彎して広がる。平底である。
	2	甕 （土師）	11.2× — × —		口縁部は肩からわずかに外彎して立ち上がり，口縁部内側には一条の沈線が廻る。器厚は全体として厚く，口縁部から口唇部に向かって徐々に薄くなる。
	3	鉢 （土師）	— × — × 5.4		器肉が厚く，胴部は底部からゆるやかに内彎しながら立ち上がる。上部欠損。
	4	坏 （須恵）	11.2× 3.8× 7	口　縁　部	底部と体部の境は回転ヘラ削りにより面取りしている。体部は器厚を減じながらほぼ直線的に立ち上がる。口縁端部はやや鋭さを有する。
	5	坏 （須恵）	11.8× 3.6× 7.5	口　縁　部	体部は器厚を減じながらわずかに外反しつつ外上方へ立ち上がる。口縁部はさらに外反し，端部は鋭い。内面底部外周には鋭いアテがみられる。
	6	坏 （須恵）	14×4.05×10	口　縁　部	体部との境はにぶい稜をなす。体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部はほぼ丸く収めている。底部中央は若干上げ底ぎみである。
	7	坏 （須恵）	14.3×4×10	口　縁　部	体部との境はやや不明瞭な屈曲である。体部はほぼ直線的に外上方へのび，口縁部はわずかに外反する。端部はやや鋭さを有する。丁寧な作りである。
	8	坏 （須恵）	14.6× 5.2× 6.6	口　縁　部	底部は外周部まで挽き出している。体部との境は不明瞭で体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸く収めている。
	9	坏 （須恵）	15.1× 4.4×6	口　縁　部	底部は外周まで挽き出している。体部との境は丸味を有している。体部は器厚を減じながらほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸く収めている。内面底部と体部との境は強いアテがみられる。
	10	坏 （須恵）	15.0× 4.6× —		底部と体部との境が不明瞭で，口縁部はややするどさをもつ。
	11	蓋 （須恵）	17.2× 4.2× —		天井部は比較的扁平である。宝珠状つまみを付けている。 口縁部はほぼ垂直に下がり端部はやや鋭い。
	12	蓋 （須恵）	16.2× 4.4× —		若干焼きヒズミが看られるが，天井部はやや丸味を有する。宝珠状つまみを付けている。口縁部は短く，外下方へふんばる。端部は鋭く突出する。作りは丁寧である。
	13	蓋 （須恵）	14.9× 3.1× —	口縁・体部の境	天井部は扁平で器厚は厚い。扁平な擬宝状ツマミを付けている。口縁部は短く下方へ下がり，端部は丸く収めている。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
口—指ナデ 底—ヘラケズリ	摩滅が激しく不明	にぶい黄橙	不良	砂粒含	ほぼ完形
口—指ナデ 底—ヘラケズリ	口—指ナデ 底—ヘラナデ	灰黄褐	普通	砂粒含	
指整形	指整形	にぶい橙	普通	砂粒含	完形
指ナデ		にぶい黄橙	普通	砂粒等含	
口—指ナデ 胴—ヘラケズリ	口—指ナデ 胴—ナデ	にぶい橙	普通	砂粒含	
口—指ナデ 胴—指ナデ 輪積み痕残る	指ナデ	灰褐	普通	砂粒 雲母含	
ヘラケズリ （摩滅）	ヘラケズリ （摩滅）	にぶい橙	不良	砂粒含	
底—回転ヘラ削り 底部と体部の境—回転ヘラ削りによる面取り		灰	良好	長石粒 細砂粒含	水挽き痕は弱い
底—回転ヘラ削り 底部・体部の境—回転ヘラ削りによる面取り		灰白	良好	長石粒 細砂粒含	水挽き痕は弱い
底—径10cmに渡って回転ヘラ削り 口縁部—横ナデ		オリーブ灰	普通	長石粒 細砂粒を含む	水挽き痕は弱い
底—径10cmに渡り，回転ヘラ削り		灰	良好	細砂粒を含むが精製されている	水挽き痕は弱い
底—回転ヘラ削り		灰白	不良	長石粒 細砂粒含	水挽き痕は弱い
底—中央部6cmに渡って回転ヘラ削り		灰白	良好	長石粒 細砂粒含	水挽き痕は弱い 焼成時の焼き割れあり
体部下半に回転ヘラ削りをほどこしている					完形
天井部径11cmに渡って回転ヘラ削り		灰白	不良	細砂粒を含むが精製されている	水挽き痕は弱い
天井部中央は径11cmに渡って回転ヘラ削り		灰白	½良好 ½不良	精製されている	水挽き痕は弱い
天井部径8cmに渡り回転ヘラ削り		淡黄	普通	長石粒 細砂粒 雲母末含む	色調から土師質に看られる

住居址	番号	種類	法量（口径cm×器高cm×底径cm）	最大径	器形の特徴
第九号住居址（図26）	14	甕（須恵）	22.3×33.9×－	胴部	底部はゆがんでいるがゆるやかに内彎しながら立ち上がる。胴部で頸部は「く」の字状に大きく外反する。口縁部は断面三角形状につくり，上下端は鋭い。
	15	紡垂車（石製品）	上面形×高さ×下面形 3.4×2.1×5	底面	裁頭円錐形で良く研磨されており，中央に径８㎜の円孔。
第十号住居址					
第十一号住居址（図31）	1	坏（土師）	20.2×－×－	口縁部	口縁部は垂直に立ち上がり体部は，極めて浅く僅かに膨らみ扁平な底部に至る。
	2	坏（土師）	14.3×4.9×－	口縁部	ゆるやかに内彎しながら立ち上がり，口縁部がわずかに外反する。体部は偏平な弧状を呈する。
第十二号住居址（図34）	1	甕（土師）	20.0×－×－		口頸部は急角度で外反し，口唇部は丸く収めている。胴部はあまり膨らまない。底部欠損。
	2	甕（土師）	19.1×31.0×8.6	胴部中位	頸部は垂直に立ち上がり，口縁部は直線的に外傾する。胴部中位で僅かにふくらみ，平底の底部に至る。
	3	鉢（土師）	21.0×9.2×－	口縁部	口縁部は外反し，体部は僅かにふくらみ平底にいたる。口唇部外面に稜をもつ。
	4	坏（土師）	11.8×4.5×－	口縁部	口縁部は僅かに外傾し，体部は整った半球形を呈する。
	5	坏（土師）	11.6×4.8×－	口辺部	口縁部は，やや内傾して立ち上がり，体部は半球状を呈する。
	6	砥石	（全長）（幅） 8.1×4.7		上面および側面も使用。使用面はなだらかに凹む。
第十三号住居址（図37）	1	坏（土師）	12.0×4.7×－	口辺部	口縁部は短かくやや内傾し，口唇部は尖がる。体部は直線的で，平らな底部に至る。
第十四号住居址（図39①）					
第十五号住居址（図39②）	1	小型甕（土師）	－×－×7.6		底部が極めて肥厚，胴部はゆるやかに内彎する。
	2	坏（土師）	14.3×4.4×－	口辺部	口縁部は垂直に立ち上がり，体部との境に段を有し，体部は偏平である。
	3	椀（土師）	14.4×－×－	口縁部	口縁部は「S」状である。
	4	鉄鏃（鉄器）	（長）（幅） 8.7×5～6		柄と思われる。
第十六号住居址（図43）	1	甕（土師）	－×－×9.6		頸部は「く」の字状で，明瞭な肩部を持たず，底部は不安定な平底である。
	2	甕（土師）	－×－×9.6		胴部は平底から緩やかに内彎しながら立ち上る。
	3	坏（土師）	14.8×3.0×－	口縁部	口縁は外面に僅かな稜を作り，小さく外反している。口唇部は丸い。
	4	坏（土師）	14.0×－×－	口縁部	口縁部はやや内彎気味に立ち上がり，体部との境に稜を持つ。体部は緩やかに内彎する。底部欠損。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
胴—タタキ 頸—ヨコナデ 底—ナデ	ナデ				
					滑石製紡錘車　60g
					拓影
口—指ナデ 底—ヘラケズリ	口—指ナデ 底—ヘラナデ	にぶい褐	良好	砂粒 雲母含	
体—ヘラ削り 口—指ナデ	指ナデ	灰白	普通	砂粒含	ほぼ完形
口—指ナデ 胴—ヘラケズリ （下から上へ）	口—指ナデ 胴—ヘラナデ	明赤褐	普通	砂粒 長石 石英含	
口—指ナデ 胴—ヘラケズリ	ヘラナデ	明赤褐	不良	砂粒・雲母 長石・石英含	胴長甕
口—指ナデ 胴—ヘラナデ	口—指ナデ 胴—ヘラナデ	にぶい橙	普通	砂粒・長石含	
口—指ナデ 底—ヘラケズリ	ヘラミガキ （摩滅）	にぶい黄橙	普通	砂粒含	
口—指ナデ 底—ヘラケズリ	ヘラミガキ	赤	普通	砂粒・長石 石英含	暗文有り
					板状に剝離が著しく，磨ぎ面はわずかに残存している。
口—指ナデ 底—ヘラケズリ	指ナデ	黒褐	普通	スコリア・ 砂粒を多量 に含む	
					拓影
ヘラ削り，輪積痕あり	ヘラナデ （摩滅）	橙	普通	砂粒含	
口—指ナデ 底—ヘラケズリ	指ナデ	にぶい黄橙	良好	砂粒含	
口—指ナデ 胴—ヘラナデ	口—指ナデ 胴—ヘラナデ	赤褐	やゝ不良	砂粒含	
ヘラケズリ	ヘラナデ	赤褐	不良	砂粒含	
ヘラナデ	ヘラナデ	にぶい橙	普通	砂粒・長石 石英含	
口—指ナデ 底—ヘラケズリ	指ナデ	褐灰	良	砂粒含	
口—指ナデ 底—ヘラケズリ	口—指ナデ 底—ヘラナデ	にぶい黄橙	不良	砂粒，全体に炭化材付着	全体に煤付着

住居址	番号	種類	法量 (口径cm×器高cm×底径cm)	最大径	器形の特徴
第十六号住居址（図43）	5	坏 （土師）	14×47×—	口辺部	口縁部は極めて短かく，やゝ内彎気味に立ち上がり，体部との境に稜を持つ。体部は弧状。
	6	坏 （土師）	14.9×44 ×—	口辺部	口縁部は明瞭な稜を持たず内彎。口唇部が僅かに尖がる。
	7	坏 （土師）	13.5× — × —	口辺部	口縁部はやや内彎気味に立ち上がり，体部との境に稜を持つ。
	8	坏 （土師）	14.2×4.1×—	口辺部	口縁部は，体部との境の稜と，口唇部の中位にくぼみを持ち，体部は直線的に内彎する。底部は平底気味である。
第十七号住居址（図46）	1	甕 （土師）	21.0×11.5× —		口縁部「く」の字状に外反し，体部はあまり膨らみをもたない。 口縁部は胴部より肉厚で口唇部は丸く収めている。
	2	鉢 （土師）	19.1×—×—	口辺部	口縁部は，ほぼ直立し，口唇部近くでわずかに外反する。体部との境に稜を持つ。体部は弧状を呈するが平底状である。
	3	甕 （土師）	—×—×6.4		極めて肥厚な底部である。
	4	坏 （土師）	13.2×4.0—	口縁部	口縁部は極めて短かく，体部との境に稜を持ち，体部は弧状を呈する。
	5	坏 （土師）	11× 3.7× —	口辺部	口縁部はわずかに内傾し直立する。口縁部と体部との境に稜を持つ。体部は中位でやゝふくらむが偏平である。
	6	坏 （土師）	13.9×—×—	口辺部	平底から内彎しながら立ち上がり，器厚も底部から序々に薄くなる。体部との境内外面に稜有り。口縁部は外彎して立ち上がる。口唇部は尖っている。
	7	坏 （土師）	13.8× 3.8×—	口縁部	外面に稜が見られず，口唇部は平坦である。体部は偏平で，器厚は一定である。
	8	坏 （土師）	11.4× 3.7× 3.4	口辺部	体部は平底からゆるやかに内彎して立ち上がり，口縁は外彎しているがわずかに内傾する。口唇部は鋭い。
	9	坏 （土師）	13.6× 5.5× 6.6	口縁部	口縁部は垂直気味に立ち上がり，体部との境に稜を持つ。体部は偏平な弧状で平底の底部に至る。
	10	坏 （土師）	14.5× 3.8×—	口縁部	口縁部はわずかに外反し，口唇部は丸く収めている。丸底である。器厚は全体に厚い。
	11	坏 （土師）	12.2× 3.7× —	口縁部	口縁部は，直線的にやゝ外反し，体部は偏平な弧状。
	12	坏 （土師）	12.6× 4.2× —	口縁部	口縁部は直線的に内傾し，口唇部は尖がる。体部は偏平である。
	13	坏 （土師）	14.4× 4.0×—	口縁部	口縁部は，垂直に立ち上がり，体部との境に稜を持つ。体部は偏平である。
	14	坏 （土師）	13.8× 3.7× —	口辺部	口縁部は短かく，直線的に内傾し，口唇部はやゝ尖がる。体部は弧状。
	15	坏 （土師）	13.8× 3.6× —	口縁部	口縁部は，直立し，体部は極めて浅く偏平である。
	16	坏 （土師）	12.7× 5.1× —	口縁部	口縁部は外反し，体部はやゝ偏平な弧状を呈する。体部との境の器内外面共に明瞭な稜を持つ。
	17	坏 （土師）	13.2× 4.7× 7.2	口縁部	底部は平底で，体部は直線的に広がり，口縁部は垂直気味に立ち上がる。口唇部は鋭くなっている。

盤形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
口—指ナデ 底—ヘラケズリ の後ナデ	指ナデ	明赤褐	普通	砂粒含	
口—指ナデ 底—ヘラケズリ	摩滅している	明褐灰	不良	砂粒含	
口—指ナデ 底—ヘラナデ	摩滅のため不明	淡黄	不良	砂粒含	
口—指ナデ 底—ヘラナデ	口—指ナデ 底—ヘラナデ	にぶい赤褐	普通	砂粒含	
		明赤褐	不良	砂粒含む含	
口—指ナデ 底—ヘラケズリ	口—指ナデ 底—摩滅している	外—橙 内—浅黄橙 口—黒褐	軟弱	砂粒(長石)含	
摩滅大	ヘラナデ	赤橙	不良	砂粒・雲母 石英含	
口—指ナデ 底—ヘラナデ	ヘラナデ	外面—橙 内面—明赤褐	やゝ不良	砂粒 雲母含	
口—指ナデ 底—ヘラケズリ	ミガキ	灰白	普通	砂粒 雲母含	全体に煤付着
口—指ナデ 底—ヘラケズリ	口—指ナデ 底—ヘラケズリ	にぶい褐	普通	砂粒含	
口—指ナデ 底—ヘラケズリ	口—指ナデ 底—ヘラナデ	内—黒 外—橙	普通	スコリア少量と砂粒を多量に含む	
口—指ナデ 底—ヘラケズリ	口—指ナデ 底—ナデ	にぶい橙	普通	砂粒含	
口—指ナデ 胴—ヘラケズリ	口—指ナデ 胴—ヘラナデ	にぶい橙	良好	砂粒 (石英) を含む	底—木葉痕あり
口—指ナデ 底—ヘラケズリ	口—指ナデ 底—ヘラナデ	赤灰	普通	砂粒含	
口—指ナデ 胴—ヘラケズリ	口—指ナデ 胴—ヘラミガキ	にぶい赤褐	やゝ不良	砂粒・雲母 石英含	
口—指ナデ 底—ヘラケズリ	口—指ナデ 底—ミガキ	にぶい橙	普通	砂粒を含む含	
口—指ナデ 底—ヘラケズリ	口—指ナデ 底—ヘラナデ	橙	普通	砂粒含	
口—指ナデ 底—ヘラケズリ の後ナデ	口—指ナデ 底—摩滅	にぶい橙	普通	砂粒を含む	ほぼ完形
口—ナデ 底—ヘラケズリ	口—ナデ 摩滅している	にぶい橙	普通	砂粒・スコリアを含む	ゆがみ有り
口—指ナデ 胴—ヘラケズリ	口—指ナデ 胴—ヘラケズリ	黒褐	普通	砂粒を含む	ほぼ完形
口—指ナデ 胴—ヘラケズリ	ヘラナデ	浅黄橙	不良	砂粒 (少)・雲 雲母含	底部—木葉痕あり

住居址	番号	種類	法量 (口径cm×器高cm×底径cm)	最大径	器形の特徴
第十七号住居址（図46）	18	坏（土師）	14.8× 3.8 ×—	口辺部	口縁部は，僅かに内傾し，体部との境に二条の凹線が廻る。体部は浅く偏平である。
	19	坏（土師）	12.2× 4.8×—	口辺部	口縁部はほぼ直線的にわずかに内傾し，体部との境に僅かな段を持つ。体部はやや偏平である。
	20	坏（土師）	13.6×4.2×—	口辺部	口縁部は「S」状にくびれ，体部との境に稜を持つ。体部は半球形を呈し，底部はほぼ平底となる。
	21	椀（土師）	13.4× 3.3		体部はゆるやかに内彎しながら平底の底部から立ち上がり，口縁部との境に稜を有す。全体に肉厚で口縁部に向かって器厚を減じている。口唇部は丸味を帯びている。
第十八号住居址（図49）	1	甕（土師）	29.0×—×—	胴部中位上	口縁部は頸部から大きく外反する。肩部に僅かな段を持ち，胴部は強く張り，球形となる。
	2	甕（土師）	22.0×14.9× 6.3	口縁部	平底から内彎しながら立ち上がり，頸部でゆるやかに外反し，口唇部は丸くなっている。胴部はほとんど膨らみをもたない。
	3	坏（土師）	22.8× 5.0 ×—	口縁部	口縁部はやや外傾し，体部は浅く偏平である。
	4	坏（土師）	13.4×—×—	口縁部	口縁部は直立し，口唇部は厚みを増し丸くなる。体部は極めて浅く偏平である。
	5	坏（土師）	13.8× 3.2 ×—	口辺部	口縁部は直線的に内傾し，体部は僅かな段を持ち，　浅く偏平である。
	6	坏（土師）	14×14.5× —	口縁部	口縁部は外彎して立ち上がり，口唇部近くでさらに外傾する。口縁部と体部との境に明瞭な稜を持つ。体部はやや丸味のある弧状を呈する。
	7	坏（土師）	12.3×—×—	口辺部	口縁部はやや内傾気味に立ち上がる。体部は弧状を呈する。
	8	坏（土師）	14.6× 3.8× —	口縁部	口縁部は直線的に外傾し，体部は浅く，丸底である。
	9	坏（土師）	12.2×4.25× —	口辺部	口縁部は直線的に内傾し，体部との境に稜を持つ。体部はやや偏平な弧状を呈す。
	10	坏（土師）	15.6× 3.4× —	口辺部	口縁部は内傾し，体部との境に稜を持ち，体部は極めて浅く偏平である。
	11	手捏（土師）	—×—×4.6		器肉は厚い。口縁部欠損。平底。
	12	支脚（土師）	— ×15.8× —		
	13	羽口	孔径　2.6 1.6		
	14	砥石	（長） 6.9		径4㎜の円孔を持つ。 四面とも良く使用されている。
第十九号住居址（図51）	1	小型甕（土師）	11.2×—×—	胴部中位	口縁部は外反し，肩部に稜をもつ。体部はあまり膨らみをもたない。
	2	坏（土師）	12.4× 4.1× —	口縁部	口縁部は短かく，やや外傾し，体部はやや丸味のある弧状を呈する。
	3	坏（土師）	14.3×—×—	口縁部下位	口縁部は，内傾気味に直立し，体部下位を欠損する。明瞭な稜を持たない。
	4	鉢（土師）	21.8× 8.3× —	口縁部	口唇部近くで僅かな段を持ち，体部はゆるやかに内彎する。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
内面	外面				
口—指ナデ 底—ヘラケズリ	指ナデ	浅黄橙	普通	砂粒含	
口—指ナデ 底—ヘラケズリ	指ナデ	浅黄橙	良好		ほぼ完形
口—指ナデ 底—ヘラナデ	口—指ナデ 底—ヘラナデ	浅黄橙	普通	砂粒含	
口—指ナデ 底—ヘラケズリ	口—指ナデ 底—摩滅	明赤褐		砂粒 雲母（少）含	
口—指ナデ 胴—ヘラケズリ	口—指ナデ 胴—ヘラナデ	明褐	不良	砂粒含	
口—指ナデ 胴—ナデ 摩滅	口—指ナデ 胴—ヘラナデ	橙	不良	砂粒含	底部—木葉痕あり
口—指ナデ 底—ヘラナデ	ヘラミガキ （摩滅）	灰褐	やゝ不良	砂粒・スコリア(少)含	
口—指ナデ 底—ヘラケズリ	口—指ナデ 底—ヘラナデ	橙	不良	雲母・石英長石を含む	
口—指ナデ 底—ヘラナデ	指ナデ	橙	普通	雲母・砂粒砂礫を含む	
口—指ナデ 底—ヘラケズリ	指ナデ	にぶい橙	良好	砂粒含	
口—指ナデ 底—ヘラケズリ	口—指ナデ 底—摩滅	褐灰	不良	砂粒含	全面にて煤付着
口—指ナデ 底—ヘラケズリの後ナデ	摩滅	褐灰	良好	砂粒 雲母含	
口—指ナデ 底—ヘラケズリ	口—指ナデ 底—ヘラナデ	橙	やゝ不良	砂粒 白雲母含	
口—指ナデ 底—ヘラケズリ後ナデ	口—指ナデ 底—摩滅	橙	不良	砂粒 雲母含	
指整形	指整形	灰褐	不良	砂粒含	ほぼ完形
指なで		にぶい橙	普通	砂粒 雲母含	完形 土製支脚
外面—ヘラケズリ		にぶい褐	普通	砂粒・雲母 長石・石英含	
口—指ナデ 胴—ヘラケズリ	指ナデ	にぶい橙	普通	砂粒含	
口—指ナデ 底—ヘラケズリ	摩滅している	橙	不良	砂粒含	
口—指ナデ 底—ヘラケズリ	ヘラナデ	赤	普通	砂粒 長石少量含	
口—指ナデ 胴—ヘラケズリ	ヘラナデ	にぶい橙	不良	スコリア・砂粒を含む	

住居址	番号	種類	法量 (口径cm×器高cm×底径cm)	最大径	器形の特徴
第二十号住居址(図53)	1	坏 (土師)	11.8×3.85× —	口縁部	扁平な底部から外傾して立ち上がり，口唇部は丸い。器厚は肉厚である。
	2	坏 (土師)	13.4 × —	口縁部	口縁部はほぼ垂直に立ち上がり，体部は半球形を呈する。
	3	坏 (土師)	12.4× 4.6× —	口縁部	口縁部は垂直気味に立ち上がり，体部はやや偏平な半球状を呈する。
	4	坏 (土師)	14.8×4.85× —	口縁部	口唇部はやや尖がり，口縁部内面に一条の凹線が廻る。体部は直線的で扁平な底部となる。
	5	台付甕 (土師)	— × — ×10.0		甕底部からわずかに内彎して広がり，安定した脚部となる。
	6	蓋 (須恵)	14.9× 3.1× —	口縁	天井部は全体に丸味を有し，つまみは扁平で内側がくぼみ中央部がやや突出する。口縁部外側端は稜を有し，端部は外傾する。内側にも稜を有す。
	7	砥石	(長) (幅) 8.5× 4.2		多面（5面）使用
第二十一号住居址(図56)	1	甕 (土師)		胴部中位	頸部はやや垂直気味に立ち上がり外反する。胴部は緩やかに張り，中位に最大径を持って底部に向かう。
	2	坏 (土師)	12.2× 3.6× —	口縁部	口縁部は僅かに内傾し，口唇部は尖がる。体部はややふくらむが偏平である。
	3	坏 (土師)	12× 4.4× —	口辺部	口縁部は極めて短かく，直立し，体部はほぼ直線的に外上方へ開く。器厚は底部で薄く，体部は厚みがある。
	4	坏 (土師)	13.4× 4.3× —	口縁部	口縁部は極めて短かく直線的に外傾して口唇部は，やや尖がる。体部は扁平な底部から内彎して立ち上がる。
	5	紡垂車 (土製品)	(径) (円孔径) 4.9 0.5		円柱形に近い形態であるが側面は上下面から中央に向かってくぼみ，上下面は中央の円孔に向かってゆるやかにくぼむ。
第二十二号住居址(図59(1)(2))	1	壺 (須恵)			体部上半は大きく内傾し，口頸部との境は「く」の字状に屈曲する。口縁部はわずかに外反し，外上方へ立ち上がる。
	2	広口壺 (須恵)			頸部は「く」の字状に屈曲し，口頸部は外反しつつ外上方へのびる。口縁端部は断面三角形状で，上下端はにぶい稜となる。頸部は4条の凹線を廻らし，その内に櫛状工具で刺突し，綾杉文状に施文。
	3	甑 (須恵)	25.5×24.1×14.5	口縁部	体部，一直線的に外上方へ開く。口縁部は断面三角形で外反する。口縁上下端部は鋭い。 底開口部は一本のブリッジが中央に渡る。
	4	高台付坏 (須恵)	14.6×5.85× 9.8 (高台)	口縁部	やや長めで外下方へふんばる高台を有す。底部と体部の境は鋭く屈曲。体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部はわずかに外反し，端部は丸く収めている。
	5	高台付坏 (須恵)	17.8×7.45×10.85 (高台)	口縁部	外下方へふんばるやや長めの高台。底部と体部との境は屈曲し，にぶい稜をなす。体部はわずかに外反気味に外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸く収めている。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
摩滅	ヘラミガキ		普通	細砂粒含雲母含む	内黒土器
口—指ナデ 底—ヘラケズリ	指ナデ	明赤褐	普通	砂粒（石英）含	
口—指ナデ 底—ヘラケズリ	口—指ナデ 底—ヘラナデ	赤褐	良好	砂粒含	
口—指ナデ 以下ヘラケズリ	ヘラナデ	灰褐	普通	砂粒含	
胴部—ハケ目整形 脚部—ハケ目の後ナデ（未消失のハケ目残る）	胴—ヘラナデ 脚部—ヘラナデ	にぶい橙	普通	砂粒 雲母含	成形良好
中央から9cmに渡って回転ヘラケズリ		灰	普通	長石粒 細砂粒を含む	ロクロ右回転 水挽き痕は弱い
口—指ナデ 胴—ヘラケズリ	口—指ナデ 胴—ヘラナデ	にぶい橙	不良	砂粒 雲母 長石含	
口—指ナデ 底—ヘラケズリ	口—指ナデ 底—ヘラナデ	灰褐	普通	砂粒（多） スコリア（少）	
口—指ナデ 底—ヘラケズリ	口—指ナデ 底—ヘラナデ	にぶい黄橙	普通	砂粒 雲母含	ほぼ完形
口—指ナデ 底—ヘラケズリ	指ナデ	灰黄褐	良好	砂粒含	
指ナデ		明赤褐	良好	砂粒含	57.5g
縦方向の叩き目が残されている。頸部外面は叩き目が部分的に残されており，一度叩いた後一応消し，8条の櫛状工具による連続波状文が2段に施文されている。	内面にはあて具の同心円文が残されている。	浅黄橙	不良	長石粒，細砂粒を少量含み比較的精選	
縦方向の叩き目	あて具の同心円文が残されている	灰	良好		
体部下—ヘラナデ	体部下—ヘラナデ 口縁—ヘラナデ	褐灰	良好	石英 砂粒含	
底—回転ヘラケズリ		灰白	良好	長石粒 細砂粒含	底部にヘラ記号有り
		灰白			水挽き痕は弱い。 底部—ヘラ記号有り

住居址	番号	種類	法量（口径cm×器高cm×底径cm）	最大径	器形の特徴
第二十二号住居址（図59(1)(2)）	6	坏（須恵）	14.05×7.45×10.85	口縁部	体部との境は丸味をもつ。体部はわずかに器厚を減じながら，ほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部はわずかに外反し，端部は丸く収めている。
	7	盤（須恵）	— × — ×11.8		外下方へふんばる高台。
	8	小型甕（土師）	15.35× — × —	胴部中位上	口縁部は，あまい「S」字状を呈し，器厚の薄い胴部は中位上で最大径をもつ。
	9	小型甕（土師）	15.35×—×—	胴部中位	口縁部は，緩やかに外反し，口唇部に一条の凹線が廻る。胴部は緩やかに張り，胴部中位に最大径をもつ。
	10	甕（土師）	— × — × 9.4		平らな底部から緩やかに内彎して胴部へと移行する。
	11	坏（土師）	12.8	口縁部	口縁部は，僅かに内傾して立ち上がり，体部との境に稜を持って，体部は偏平な弧状を呈する。
	12	広口壺（須恵）	15.6× — × —		体部から口頸部にかけては丸味をもって「く」の字状に移行し，口頸部はほぼ直線的に外方へのびる。端部は内傾し，両端はにぶい稜をなす。
	13	坏（須恵）	14.3×4.25× 9	口縁部	底部外縁まで挽き出し，体部との境は不明瞭。体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸く収めている。
	14	坏（須恵）	13.5× 4.6× 7.8		体部との境は明瞭でなく丸味をもつ。体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸く収めている。内面底部外線には強いアテがみられる。
	15	盤（須恵）	— × —×16.6（高台）		体部は内彎気味に外上方へ立ち上がる。底部は回転ヘラ削り後はほぼ垂直で端部が厚くなる高台を付けている。
	16	台付長頸壺（須恵）	4.75× — × —		底部は回転ヘラ削りの後，高台を付けているか欠損。
	17	盤（須恵）	19.7×3.15×11.65（高台）	口縁部	短く外下方へわずかにふんばる高台。体部との境は明瞭に屈曲する。体部はわずかに外反し，短く外上方へのび端部は方形につくっている。
	18	高台付坏（須恵）	— × — ×6.2	口縁部	外下方へ若干ふんばる高台。体部との境ににぶい稜。体部はわずかに器厚を減じながらほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部端は欠失する。
第二十三号住居址（図62）	1	鉢（土師）	11.5× 9.4×7.8	体部上位	口縁部は外彎して立ち上がる。体部は内彎し，底部平底。
第二十四号住居址（図64）	1	坩（土師）	— × — × 3.5		底部—不整，楕円形 胴部は，緩やかに張り出し，中位に最大径をもって，平らな底部へ至る。
第二十五号住居址（図66）	1	小型甕（土師）	10.6×12× 4	胴部中位	口縁部は直線的に開き，口唇部は平坦である。胴部は緩やかに張り出し，胴部中位に最大径をもつ。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
底ー切り離し後カキ目状工具でナデ，さらにナデている。	内面底部外縁には強いアテがみられる	緑灰			水挽き痕は外面にやゝ強い 底部にヘラ記号有り
回転ヘラケズリ		灰白	良好		底部にヘラ記号有り
口ー指ナデ 胴ーヘラナデ後ヘラミガキ	口ー指ナデ 胴ーヘラナデ	灰黄褐	普通	砂粒・雲母 アスコリア含 石英	
口ー指ナデ 底ーヘラみがき	口ー指ナデ 底ーヘラナデ	にぶい赤褐		砂粒・雲母含	
ヘラミガキ	ヘラナデ	にぶい橙	普通	砂粒・長石・石英・雲母含	底部ー木葉痕
口ー指ナデ 底ーヘラケズリ	口ー指ナデ 底ー摩滅のため不明	にぶい黄橙	普通	砂粒・スコリア砂礫を含む。	
		褐灰	良好	長石粒・細砂粒を含む	器外面には灰・色，自然釉
底部中央径9cmに渡って回転ヘラケズリ		オリーブ灰	良好	長石粒 細砂粒含	水挽き痕は弱い
底ー切り離し後回転ヘラケズリ		緑灰	良好	長石粒 細砂粒 を含む	水挽き痕は弱い
底ー回転ヘラ削り		灰	良好	長石粒 細砂粒 を含む	器外面には灰緑色の自然釉付着
体部下端幅3.5cmに渡って回転ヘラケズリ	内面底部に自然釉が付着している	灰白	良好	長石粒 細砂粒 を含む	底部に自然釉付着 水挽き痕は弱い
底ー回転ヘラケズリ			良好	長石粒 細砂粒を含む	小片のみ。水挽き痕弱い。丁寧な作りである。ヘラ記号有り。
底ー回転ヘラケズリ		暗赤灰	普通	長石粒 細砂粒 木目が細い	水挽き痕
ヘラケズリ	ヘラミガキ	にぶい黄橙	普通	砂粒含	ゆがみ有り
ヘラナデ	ヘラナデ	にぶい褐	やゝ不良	砂粒 砂礫を含む	
口ーハケ目の後指ナデ（未消化のハケ目残る） 胴ーハケ目の後ヘラナデ	口ーハケ目整形 胴ー底 ハケ目の後ヘラナデ	橙	普通	砂粒・雲母含	ほぼ完形

住居址	番号	種類	法量（口径cm×器高cm×底径cm）	最大径	器形の特徴
第二十五号住居址（図66）	2	小型甕（土師）	9.5× 8.6× 4.4	口縁部	口縁部は，やや直線的に外傾し，口唇部近くでやや内傾する。胴部は頸部から張り出し，胴部上位下に最大径を持ち，僅かに突出した底部に至る。
	3	器台（土師）	9.0×9.3×1.1 孔径 1.1	脚部	受部は，直線的に開き，上位でやや外傾する。口唇部は平坦である。受部孔を有し，脚部は直線的に開く。円窓は脚部中位上に三カ所穿たれる。
	4	小型甕（土師）	13.0× 7.3× 2.5	口縁部	口縁部は大きく外反し，胴部はやや強く張り出し，胴部上位に最大径をもつ。底部は極めて小さく平底である。
	5	坩（土師）	10.2× 6.5× 2.1	口縁部	口縁部は僅かに内彎する。胴部は緩やかに張り出して，胴部上位下に最大径をもつ。
	6	砥石（石器）	5.3 ×3 全長 最大幅		使用痕は上面側面などに残る。径4mmの円孔を有す。
第二十六号住居址（図69）	1	盤（須恵）	21× 3.5×14.1	口縁部	外下方へ若干ふんばる 高付を回転ヘラ削り後付けている。体部との境は屈曲しにぶい稜をなす。口縁部はわずかに外反，端部は丸く収めている。
	2	高坏（須恵）	21.8× — × —		脚部—四方に透し窓を穿つ。盤部は大きく外方へ開き，口縁部は直立し，端部はわずかに内傾する。上端部はにぶい稜をなす。
第二十七・二十九号住居址（図72 (1) (2)）	1	甕（土師）	26.2× — × —		口縁部は緩やかに外反し，胴部は大きく膨らむ。
	2	甕（土師）	— × — × 6.8		平底で胴部はゆるやかに内彎して立ち上がる。
	3	坏（土師）	13.0× 4.0× —（復）	口縁部	口縁部は垂直気味に立ち上がり，体部は偏平である。
	4	坏（土師）	13.7× 3.5× —	口辺部	口縁部は短かく，やや内傾する。体部は浅く偏平である。
	5	坏（土師）	12.6× 3.8× —	口辺部	口縁部はほぼ直立し，体部は偏平である。全体に肉厚で口唇部は丸い。
	6	坏（土師）	12× — × —	体部上位	口縁部はやや内彎し，体部は半球形を呈する。
	7	坏（土師）	13.8× — × —	口辺部	口縁部は僅かに内傾し，体部との境に稜を持つ。体部は直線的である。
	8	坏（土師）	12.0× 3.9× —	口辺部	口縁部は内傾し，体部との境に段をつくる。体部は偏平である。
	9	坏（土師）	13.5× — × —	口辺部	口縁部は器厚を減じて内傾し，口唇部はわずかに外反気味。体部との境に稜を持ち，体部はやや浅く偏平である。
	10	坏（土師）	15.2× 3.6× —	口縁部	口縁部は極めて短かく垂直気味。体部は浅く，偏平である。
	11	坏（土師）	12.4× 3.6× —	口辺部	口縁部は，直線的にやや内傾し，体部との境に僅かな段を持つ。体部は偏平である。
	12	坏（土師）	14.2× 5.0× —	口縁部	口縁部は器厚を増しほぼ直立する。体部はやや偏平な半球形を呈し，丸底である。
	13	坏（土師）	13.3× 4.4× —	口辺部	口縁部は直線的に内傾し，口縁部の割には体部が浅く偏平である。口縁部と体部の境に僅かな段を持つ。
	14	坏（土師）	13× 3.7× —	口辺部	口縁部は内傾し，体部との境に段を持ち，体部は極めて浅く偏平である。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
口—ハケ目の後指ナデ 胴—ハケ目整形	口—ハケ目の後諸ナデ 胴—太いハケ目整形	にぶい橙	普通	砂粒含	
受部—ヘラナデ 脚部—ヘラケズリ	受部—ヘラミガキ 脚部—ハケ目の後ナデ		やゝ不良	砂粒含	
口—ヘラナデ 胴—（頸部にハケ目が見られる）ヘラナデ	口—ヘラナデ 胴—ヘラナデ	にぶい黄橙		砂粒 雲母含	
口—指ナデ 胴—ハケ目の後ヘラナデ	指ナデ	浅黄橙	普通	砂粒 白雲母含	
					さげ砥石 16g
底—径18cmに渡り回転ヘラ削り		灰	良好	長石粒 細砂粒含む	水挽き痕弱い
盤—径13cmに削り回転ヘラ削り		灰	良好	長石粒 細砂粒含む	脚部ほとんど欠失 水挽き痕外面はやや強い。盤部に焼成時のヒビ割れ有り。
口—指ナデ 胴—ヘラナデ	ヘラナデ	灰黄褐	不良	砂粒含	
	ヘラナデ	橙		砂粒・石英含	底—木葉痕 整形不良
口—指ナデ 胴—ヘラ削り	指ナデ	にぶい橙	やゝ不良	砂粒含	成形不良
口—指ナデ 胴—ヘラ削り後ナデ	口—指ナデ	浅黄橙	普通	砂粒・雲母含	ほぼ完形 器面は磨滅している
口—指ナデ 底—ヘラ削りの後ヘラナデ	指ナデ	にぶい橙	良好	砂粒 スコリア等含	ほぼ完形
口—指ナデ 底—ヘラ削リ	口—指ナデ 底—不明	外—にぶい黄橙 内—にぶい橙	不良	砂粒（石英）を含む	
ヘラ削り 口—指ナデ	ヘラミガキ 口—指ナデ	浅黄橙	普通	砂粒含	
ヘラケズリ 口—指ナデ	指ナデ	にぶい橙		砂粒含	
口—指ナデ 体—ヘラケズリ	ナデ	にぶい橙	良好	砂粒 雲母（少）含	
口—指ナデ 体—ヘラケズリ後ナデ	ナデ	にぶい橙	普通	砂粒 スコリア含	
口—指ナデ 底—ヘラケズリ	口—指ナデ 底—ヘラナデ	にぶい黄橙	普通	砂粒含	ほぼ完形
口—指ナデ 底—ヘラケズリ	ナデ	明褐	普通	砂粒含	底—煤付着
口—指ナデ 底—ヘラケズリ	ナデ	にぶい黄橙	良好	砂粒含	
口—指ナデ 底—ヘラケズリ	ナデ	浅黄	普通	砂粒 雲母含	ほぼ完形

住居址	番号	種類	法量 (口径cm×器高cm×底径cm)	最大径	器形の特徴
第二十七・二十九号住居址（図72(1)(2)）	15	坏 （土師）	16.0× — × —	口辺部	口縁部は短かくやや内傾する。体部は浅く偏平である。
	16	鉢 （須恵）			体部中位に2条の凹線を廻らせ，その間に櫛状工具による刺突を行っている。刺突後に孔を穿っている。体部と口頸部境に稜有り。
	17	台付壺 （須恵）	— × — ×12.5 （高台）		底部には短くやや外側へふんばる高台を有する。体部は内湾しながら立ち上がる。
	18	坏 （須恵）	11.3× 4.8× 6.7	口縁部	底部と体部との境はあまり明瞭でなく，体部はわずかに器厚を減じながら直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部は丸く収めている。
	19	坏 （須恵）	13.2× 4.6×8	口縁部	底部は肉厚で底部から体部にかけて不明瞭である。体部はわずかに外反しながら上方へ立ち上がる。口縁端部はほぼ丸く収めている。
	20	支脚 （土師）	全長　径 15.9 × 5.6		柱状で上部に向かってわずかに細くなる。底部平面。
	21	甕 （土師）	16.6× — × —	胴部中位	口縁部は「S」字状を呈する。胴部は緩やかに張り，底部を欠損している。
	22	甕 （土師）	21.2× — × —		口縁部はやや強く外反し，口縁，内外に凹線が廻る。胴部は緩やかに張り，底部が欠損している。
	23	高台付坏 （須恵）	10.6×4.85× 6.1	口縁部	外下方へふんばる高台。体部との境は明瞭に屈曲し，稜をなす。体部はわずかに外反しつつ，外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸く収めている。
	24	盤 （須恵）	16.7× 4.2×10.2	口縁部	外下方へふんばる高台。体部との境は丸味をもち，ゆるやかに屈曲し，口縁部はほぼ直線的に外上方へのびる。端部は丸く収めている。
	25	盤 （須恵）	14.9× 3.4× 7.7	口縁部	底部は丸く，底部からゆるやかに内彎し，大きく外上方へ開き，口縁部との境は，わずかに屈曲し，口縁部はわずかに外反。端部は丸く収めている。内面底部と口縁部の境は凹線状となり，明瞭である。高台は外下方へふんばる。
	26	盤 （須恵）	— × — ×10.9 （高台）		細く，わずかに外下方へふんばる高台を付している。端部は方形を呈する。
	27	高坏 （高坏）	22.9×12.45×13.45	口縁部	盤底ヘラ削り後，外下方へ序々に開いて行く脚を付す。脚部下位は大きく外反，端部はわずかに内傾し，下端はにぶい稜。脚部は四方に一段の透し窓。盤部はわずかに内湾気味に外方へのびる。
	28	切子玉 （石製品）	長　最大幅 2.5× 1.7		水昌製で横断面扁六角形。上面中央から下面まで幅2㎜の円孔が貫通している。
第二十八号住居址（図75）	1	坏 （土師）	15.4× 4.6× —	口縁部	口縁部はやや外反し，口唇部は僅かに内傾する。体部は弧状を呈す。
	2	坏 （須恵）	14.4×4.55× 8.6	口縁部	底部から体部にかけて丸味有り。体部はわずかに器厚を減じながらほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸く収めている。
第三十号住居址（図78）					

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
口—指ナデ 底—ヘラケズリ	指ナデ	にぶい橙	普通	アスコリア 砂粒・砂礫 を含む	
底—手持ちヘラケズリ		灰	良好	長石粒 細砂粒含む	底—手持ヘラ削りで丸く調整
調整痕不明		灰白	良好	長石粒・細 砂粒含む	自然釉の付着
底—回転ヘラ切り後外周部をナデ		灰	良好	長石粒 細砂粒含	
底—手持ち，数回のヘラケズリ		緑灰	普通	長石粒 細砂粒含	水挽き痕—内面は弱い。 外面はやや強い。 焼成時のヒビ割れ
手づくね		にぶい赤褐	普通	砂粒含	
口—指ナデ 胴—ヘラケズリ	口—指ナデ 胴—ヘラケズリ	にぶい赤褐	不良	砂粒・長石含	
口—指ナデ 胴—ヘラナデ	口—指ナデ 胴—ヘラナデ	橙	普通	砂粒・長石 石英・スコ リア含	器厚は一定，成形は良好
底—回転ヘラケズリ		灰オリーブ	良好	長石粒 細砂粒含	水挽き痕弱い。底部に焼成時のヒビ割れ。 器面はザラザラで未使用の可能性が強い。
底—回転ヘラケズリ		オリーブ灰	普通	長石粒 細砂粒含	水挽き痕弱い。
底—回転ヘラケズリ		灰オリーブ	良好	長石粒 細砂粒含	水挽き痕弱い。 丁寧な作り。
底部—回転ヘラケズリ		黄灰	普通	長石粒・細 砂粒を含む	ヘラ記号有り，水挽き痕，成形丁寧
盤部下面—径14cmに渡り回転ヘラケズリ		灰	普通	長石粒 細砂粒含	水挽き痕弱い。 口縁部はわずかに内彎し，上下端は丸く収めている。
					所々欠損有り。全体に摩滅している。
口—指ナデ 底—ヘラケズリ	口—摩滅している 底—ヘラナデ	橙	普通	砂粒（少）含	
底—径11cm回転ヘラケズリ		青灰	良好	長石粒 細砂粒含	水挽き痕弱い。

住居址	番号	種　類	法　量 (口径cm×器高cm×底径cm)	最大径	器形の特徴
第八号土壙(図80)	1	坏 (土師)	12.0× 4.8× 6.0	口縁部	口縁部はほぼ直立し，口唇部は丸い。体部との境に稜を持ち，凸凹があって平底上に至る。
	2	坏 (土師)	11.9× 4.3× —	口縁部	口縁部はほぼ直立し，凸凹の体部から平らな底部に至る。
	3	坏 (土師)	12.5×5× —	口縁部	口縁部はやや外反し，体部はほぼ直線的で平底へ至る。
第一号井戸状遺構(図81)	1	高台付坏 (須恵)	13.5× 5.9× 8.3	口縁部	外側へ大きくふんばる高台。 底部と体部との境は明瞭に屈曲。体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がり，口縁部はわずかに外反，端部はやや外方を向き鋭い。
第一号円形周溝遺構(図84)	1	甕 (土師)	26.2× — × —	胴部中位	口縁部は強く外反し，口唇部近くで内傾する。胴部は緩やかに張り，中位で最大径を持つ。
	2	甕 (土師)	— × — × 9.8		平らな底部でゆるやかに膨らみ，胴部中位上に最大径。
	3	小型甕 (土師)	— × — × 5.8		平らな底部から緩やかに内湾して，胴部中位上に最大径をもつが，あまり膨らまない。
第二号円形周溝遺構(図86)	1	高　坏 (土師)	— × — ×10.4 (脚)		坏部はゆるやかに内湾しながら立ち上がり，脚部は低く，大きく外下方へふんばる。全体に肉厚である。
	2	高　坏 (土師)	18.2×13.8×13.2 (裾部径)	口縁部	坏部口縁は，緩やかに外反し，体部との境に稜をもち，体部は偏平である。脚柱部は円柱状を呈し，裾部はほぼ直線的に開く。
溝状遺構(図88)	1	甕 (須恵)	21.6× — × —	胴部中位下	体部はほぼ球形。口縁部との境は「く」の字状に屈曲し，口縁部は直線的に外上方へ立ち上がる。端部は内傾し，上下端はにぶい稜をなす。
	2	坏 (土師)	13 × — × —	口縁部	口縁部は直線的に内傾しながらわずかにふくらみ，端部に向かってやや鋭くなる。体部は偏平な弧状。
	3	坏 (須恵)	13.1×3.85×5	口縁部	体部と底部との境は不明瞭。体部は内湾しつつ外上方へ大きく開く。口縁端部はほぼ丸く収めている。
	4	砥　石	6.4(全長)×3(幅)		不定形で多面的に使用している。径4㎜前後の円孔が貫通している。

整形法		色調	焼成	胎土	備考
外面	内面				
口一指ナデ 底一ヘラケズリ	指ナデ	にぶい橙	普通	砂粒・雲母含	ほぼ完形 底部に木葉痕あり
ヘラケズリ	ヘラナデ	にぶい赤褐	普通	スコリア・石英・雲母含	ほぼ完形 底部一木葉痕有り
口一指ナデ 胴一ヘラケズリ 底一木葉痕有り	指ナデ	にぶい橙	良好	砂粒・石英含	ほぼ完形 底部一木葉痕有り
底一回転ヘラケズリ			普通	長石粒 細砂粒含	水挽き痕弱い。 丁寧な作りである。 底部一ヘラ記号有り。
口一指ナデ 胴部下位一ヘラミガキ	口一指ナデ 胴一ヘラナデ	にぶい褐	普通	砂粒・雲母 スコリア含	
ヘラケズリ	ナデ	にぶい赤褐	不良	砂粒含	
ヘラケズリ	ヘラナデ	灰褐	普通	雲母・スコリア・砂粒含	
坏部一マメツぎみ 脚部一縦ヘラケズリ	坏部一ヘラミガキ 脚部一ヘラケズリ	にぶい黄橙	普通	雲母・スコリア・砂粒含	内黒
坏 口一指ナデ 底一ヘラミガキ 脚一ヘラケズリ 裾部 上位 ヘラケズリ 下位 指ナデ	ヘラナデ	浅黄橙	普通	砂粒・長石 石英含む	口縁部内外の一部に黒斑
横方行 叩き目		灰オリーブ	良好	長石粒・細砂粒含	
口一指ナデ 底一ヘラケズリ	口一指ナデ 底一ヘラナデ	にぶい黄橙	普通	砂粒（石英）含む	
底一径9cm回転ヘラケズリ				長石粒・細砂粒含	水挽き痕弱い。 底面にヘラ記号有り。
					さげ砥石

第89図　松原遺跡時期別遺構配置図

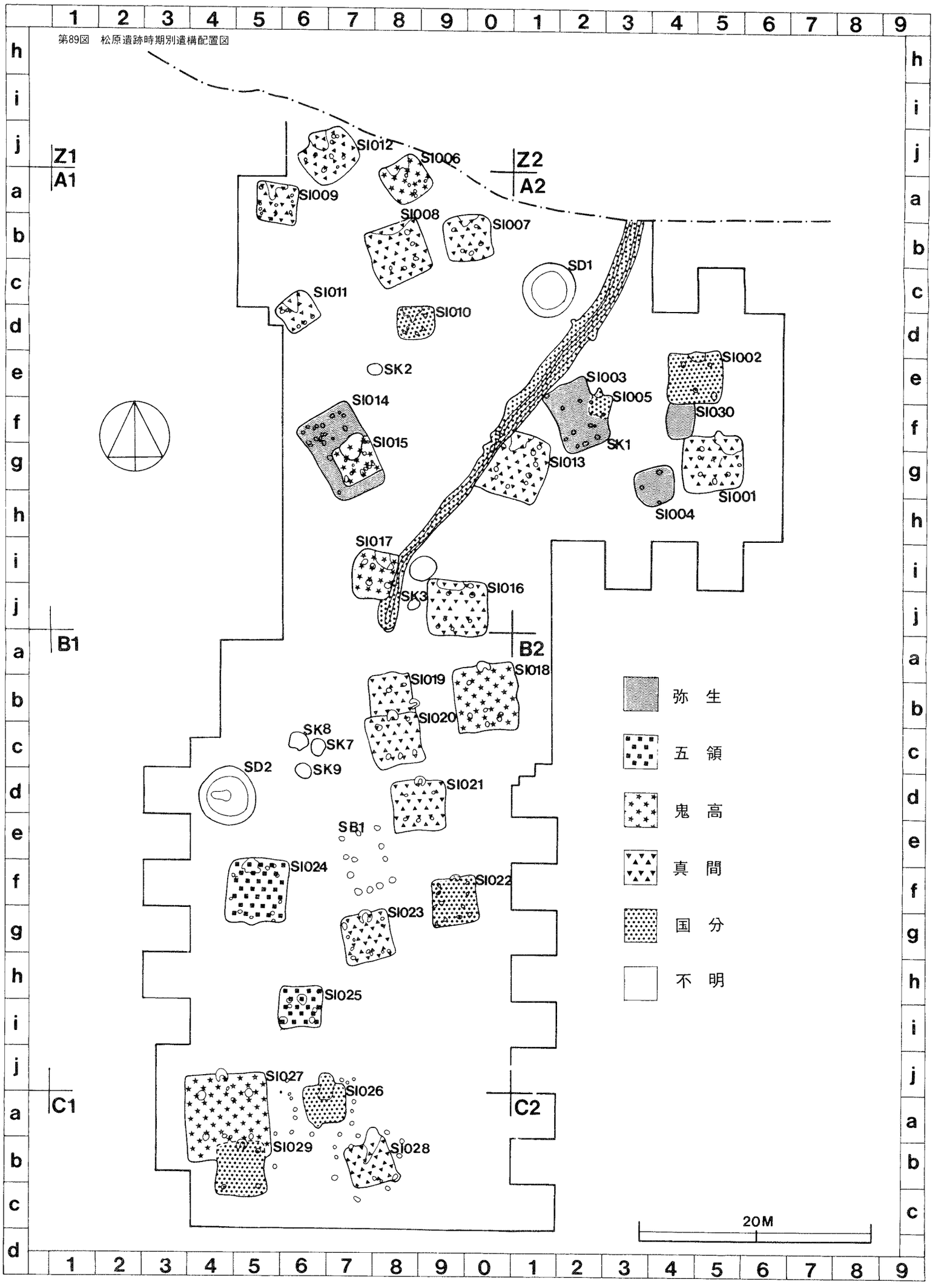


表3　松原遺跡住居址一覧表

遺構	位置	形態	長軸×短軸 m m	面積 m²	壁高 cm	主軸方向	炉 カマド	柱穴	貯蔵穴	出土遺物	時期	備考
001	A2g5	方形	4.93×4.52	19.5	31～75	N—15°—W	カマド	5		土師(甕)、石器 須恵(蓋), 弥生	真間	
002	A2e4	方形	4.41×4.48	18.1	50～56	N－3°—E	カマド	4	1	須恵(盤, 骨壺) 石器, 鉄鏃	国分	
003	A2f1	長方形	5.48×3.98	22.0	35～56	N—24°—E	炉	4	1	弥生	弥生	
004	A2g4	隅丸方形	3.30×3.22	10.0	5～10	N—12°—W	炉			弥生 石器	弥生	
005	A2f2	隅丸方形	2.25×不明	5.4	36～47	N－8°—E	カマド	3		土師(小甕, 坏) 須恵(坏)	国分	火災
006	A1a8	隅丸長方形	3.90×3.38	9.4	43～	N—35°—W	カマド			土師(甕, 鉢, 小甕) 砥石	鬼高	壁溝
007	A1b9	正方形	4.00×3.95	11.8	40～62	N－8°—W	カマド	4		須恵(坏, 蓋,)　土師(坏甕, 椀, 鉢) 砥石	真間	
008	A1b8	隅丸長方形	5.10×4.83	17.3	33～57	N—21°—W	カマド	4		土師(坏, 捏, 支脚, 小甕)　砥石	真間	
009	A1a5	正方形	3.56×3.30	10.4	33～43	N－2°—E	カマド			土師(甑, 鉢) 須恵(坏, 蓋, 甕) 砥石	真間	火災
010	A1d8	長方形	3.05×2.78	6.9	37～45	N－2°—E	カマド	4		須恵(坏) 砥石, 石器	国分	
011	A1d6	隅丸方形	3.07×2.90	6.9	40～55	N—35°—W	カマド	3		土師(坏) 砥石	真間	
012	Z1j6	隅丸長方形	4.65×3.90	14.4	43～62	N—36°—W	カマド	4		土師(坏, 鉢, 甕) 砥石	真間	
013	A1g0	隅丸長方形	5.78×5.35	21.0	15～35	N—18°—E	カマド	4		土師(坏)	真間	壁溝
014	A1f6	方形	3.32×3.30	34.3	36～49	N—24°—W	炉	8		弥生	弥生	
015	A1g7	隅丸方形	7.60×6.00	8.8	18～77	N—25°—W	カマド			土師(小甕, 坏)	鬼高	
016	A1j9	長方形	5.10×4.60	20.0	38～45	N－1°—W	カマド	4	1	土師(坏, 甕) 炭化物	真間	火災
017	A1i7	隅丸正方形	4.15×4.00	15.0	37～64	N－6°—E	カマド	4		土師(坏, 甕)	鬼高	
018	B1b0	隅丸方形	5.75×5.60	25.2	20～59	N—20°—W	カマド	8	1	土師(坏, 捏, 支脚, 羽口, 甕),	鬼高	
019	B1b8	長方形	4.15×3.35	13.6	12～28	N—87°—E	カマド	1	1	須恵 土師(坏, 小甕)	真間	壁溝
020	B1c8	正方形	4.65×4.50	17.0	40～48	N—15°—W	カマド	4		須恵(坏, 蓋) 砥石 土師(坏, 台付甕, 甕)	真間	壁溝
021	B1d8	正方形	4.70×4.50	16.0	43～54	N－2°—E	カマド	4		土師(坏, 甕, 紡錘車) 須恵(瓶)	真間	壁溝
022	B1f9	正方形	4.00×3.85	11.7	41～55	N－4°—W	カマド	4		土師(小甕, 坏, 甕) 須恵(坏, 甑)	国分	
023	B1g7	正方形	4.45×4.30	13.2	49～62	N－6°—W	カマド	4		土師(小甕)	真間	
024	B1f5	長方形	5.65×5.25	26.7	15～20	N－5°—E		8		土師(坩)	五領	
025	B1i6	隅丸正方形	3.95×3.75	10.6	37～51	N－3°—E	炉		1	土師(小甕, 坩, 器台) 砥石	五領	壁溝
026	C1a6	隅丸長方形	3.70×3.20	10.6	43～60	N－0°—	カマド	7		須恵(盤, 高坏)	国分	柱穴施設外
027	C1a4	正方形	7.45×7.40	47.3	55～65	N－3°—W	カマド	8		土師(坏, 甕), 須恵(坏, 甑, 壺, 高坏)	鬼高	火災
028	C1b7	長方形	4.10×3.70	12.7	38～47	N—10°—W	カマド	7		土師(甕, 坏) 須恵(坏)	真間	柱穴施設外
029	C1b5	長方形	4.55×4.35	18.6	45～55	N－2°—W	カマド	4		土師(甕) 須恵(坏, 盤)	国分	
030	A2f4	楕円形	3.10×2.55	6.3	16～45	N—15—E	炉			弥生 石器	弥生	

第4節　まとめ

本遺跡から検出された遺構は，住居址30軒・円形周溝遺構２基・土壙６基・井戸状遺構１基・溝状遺構１条・掘立柱建築址１軒である。遺構の位置する台地は標高約43mを測り，北側は泉に向って緩斜面になっており，泉の水は東側の谷津田に向って流れ込んでいる。水田面との比高は，約５ｍほどで遺構の中央部は緩斜面となっており，緩斜面に沿って，馬蹄形状に住居址が23軒ほど確認されている。北側の泉と何らかの関係があると思われる住居址は７軒である。また，規模的に見ると５ｍ内外の住居址が多いが，時期別に分けると弥生時代の住居址が４軒，古墳時代五領期の住居址が２軒，鬼高期の住居址が９軒と土壙が１基である。奈良・平安時代の真間・国分期に比定される住居址のうち，真間期に比定される住居址が13軒で一番多く検出され，全体の43.3%を占めている。国分期に比定される遺構は，住居址６軒と溝状遺構１条を検出した。第１号土壙は，弥生時代の住居址の床面下より検出された遺構である。土壙４基と第１号井戸状遺構と円形周溝遺構２基は出土遺物が少なく，時期については不明である。掘立柱建築址については，土師器片と須恵器片を数点出土しているが時期については不明である。本遺跡は全体的に新しい時期の遺構が多いように思われる。松原遺跡は，縄文時代から奈良・平安時代にかけての複合遺跡である。

松原遺跡出土の土器（図90(1)(2)(3)）

縄文時代に属すると思われる土器のほとんどは，表面採集あるいは，縄文以後の遺構覆土中より出土したもので，残念ながら当土器を伴出する遺構等は確認できなかった。しかし，土器のほとんどは早期の沈線文系に属するものであり，資料の重要性を考え，あえて紹介するものである。

出土した土器は，次のように分類できた。

１群土器（１～23）

無文土器を一括した。１～５は口縁部である。１はやや外反し，焼成後の穿孔が見られる。２～５はほぼ直立し，口唇が若干丸味を帯びるものである。全体的に器表面はザラつくが裏面整形は良く，特に口唇部は入念に整形がなされている。色調は灰褐色・褐色・赤褐色であり，長石・石英を含み，焼成は割に良い。６～19は篦状工具による縦（６～８），斜（９～19）方向の擦痕が見られる。胎土には，石英・長石を多く含み，厚手のつくりがほとんどであり，焼成は良い。20～23は厳密には，無文とは言えないかもしれないが，器面整形の一種と見られるため本類に含めた。20～22は半截竹管による斜位の整形がなされている。22は部分的に格子目状になっている。23は棒状工具による斜位の整形痕と思われる。色調は褐色・赤褐色で，裏面整形，焼成は全体的に良好である。23は器内外面ともに入念な整形が行なわれている。

2群土器（24～79）

沈線のみで文様構成がなされるものを本類とした。沈線の太さにより，更に2類に分類できる。

A類（24～44）太めの並行沈線文が横位，あるいは斜位に施文されるものを本類とした。ほとんどが棒状施工具による沈線であるが，29は半截竹管によるものである。色調は褐色・赤褐色・灰褐色であり，胎土には石英・長石を含み，焼成・成形ともに良好である。

B類（45～79）細かい沈線で文様構成がなされるものを本類とした。45～47は同一個体と思われる。口縁部は平縁で直行し，口唇直下より斜位の並行沈線が交互に二段施文され，各段とも横位の沈線によって区切られる。50～53も斜位及び横位の並行沈線の組み合わされたものであるが，口唇形態及び施文が若干異なる。49・51・52・54・60・61・65・66・69・71は，一方向の横位あるいは斜位の並行沈線を持つものである。48・57・59・67・68・70・72・73は，格子目状に施文されたものであり，特に59・67・68は格子目を意識したものと思われる。75～78は平行沈線と太めの短沈線を複合したものである。74は横位・縦位・斜位に施文されるもので底部に近い部分と思われる。色調は明褐色・赤褐色・灰褐色を呈し，全体に成形・焼成と共に良好であり，特に口縁部の成形は入念に行なわれている。

3群土器（80～124）

沈線と貝殻文を組合わせて施文したものを本類とした。詳細に観察すると，貝殻腹縁文・背面圧痕文とに分けられようが，3群として一括した。背面圧痕文をもつものは，80・82・86・90・92・94・102・106・110・112・114・118・124であるが，いずれも細めの沈線を施文している。他は貝殻腹縁文である。いずれも1～3本の平行沈線間に施文される。貝殻文を施文する個体は，大半が細めの平行沈線文と組み合わされる場合が多いが，80のように太めの沈線と複合するものもある。色調は褐色・明褐色・灰褐色であり，焼成・成形共に良好である。

4群土器（125～127）

底部及びその他を一括した。125・126は底部である。125は小形土器の底部と思われる。126は，尖底部まで細めの平行沈線文を施文する。色調は赤褐色・灰褐色で焼成・成形共に良好である。127は若干太めの沈線による直線文・懸垂文を持つ波状口縁の深鉢形土器と思われる。胎土に少量繊維を混入する。縄文式土器は，早期沈線文系（田戸下層式土器）前後の時期のものである。

1群土器とした無文土器は，早期にみられる無文土器のグループであり，近隣例としては栃木県天矢場遺跡（注1）・茨城県祝町Ⅲ遺跡（注2）等があげられよう。これらは，神奈川県平坂貝塚出土（注3）の土器に類似性を見いだすことができ，早期沈線文系土器より一段古くなるものと思われる。

2群土器・3群土器・4群土器（125・126）としたものは，田戸下層式土器である。当遺跡出土の田戸下層式土器の特色を言うならば，半截竹管による爪形文・刺突文・円形竹管文等は，1

片も確認されなかった。また，千葉県西の城貝塚(注４)・城ノ台貝塚(注５)例等に見られるような波状口縁を持つ土器も見あたらない。同一型式内に於けるこのような差は，単に地域差としてかたずけてしまうには，複雑な様相を呈している。ここでは，文様要素及び口縁形態等により細分されうる可能性を含むものと理解して置きたい。資料の増加により解明できるものと思われる。

４群土器(127) は，田戸上層式土器に比定できるものである。ただ一点の出土である。

注１　天矢場遺跡　栃木県教育委員会　1977年

注２　那珂川下流の石器時代研究Ⅱ　藤本彌城著　1980年

注３　相模平坂貝塚　駿台史学第３号　1953年

注４　千葉県西之城貝塚　石器時代　第２号　1955年

注５　千葉県城ノ台貝塚　石器時代　第１号　1960年

松原遺跡出土の石器（第91図）

図91－１．両面の中央部に素材時の剥離面を残す。周縁部は両面より調整加工をほどこしており，階段状剥離が著しい。短冊形に仕上げられた打製石斧である。上辺部は斜めに古い欠損がみられ，刃縁部も使用により欠損していると思われる。全長13.0cm・幅4.5cm・厚さ1.7cm・重さ115ｇ（SI023.No.１．1039)

図91－２．素材は不明である。両面ともに周辺より荒く加工を行ない，片面のみ縁辺部を調整しており，階段上剥離が顕著である。左図上辺部および右下辺部に自然面を残す。両刃の打製石斧で完形品。石材は安山岩質である。全長は12.4cm・幅4.9cm・厚さ2.1cm・重さ215ｇ（SI016.804)。

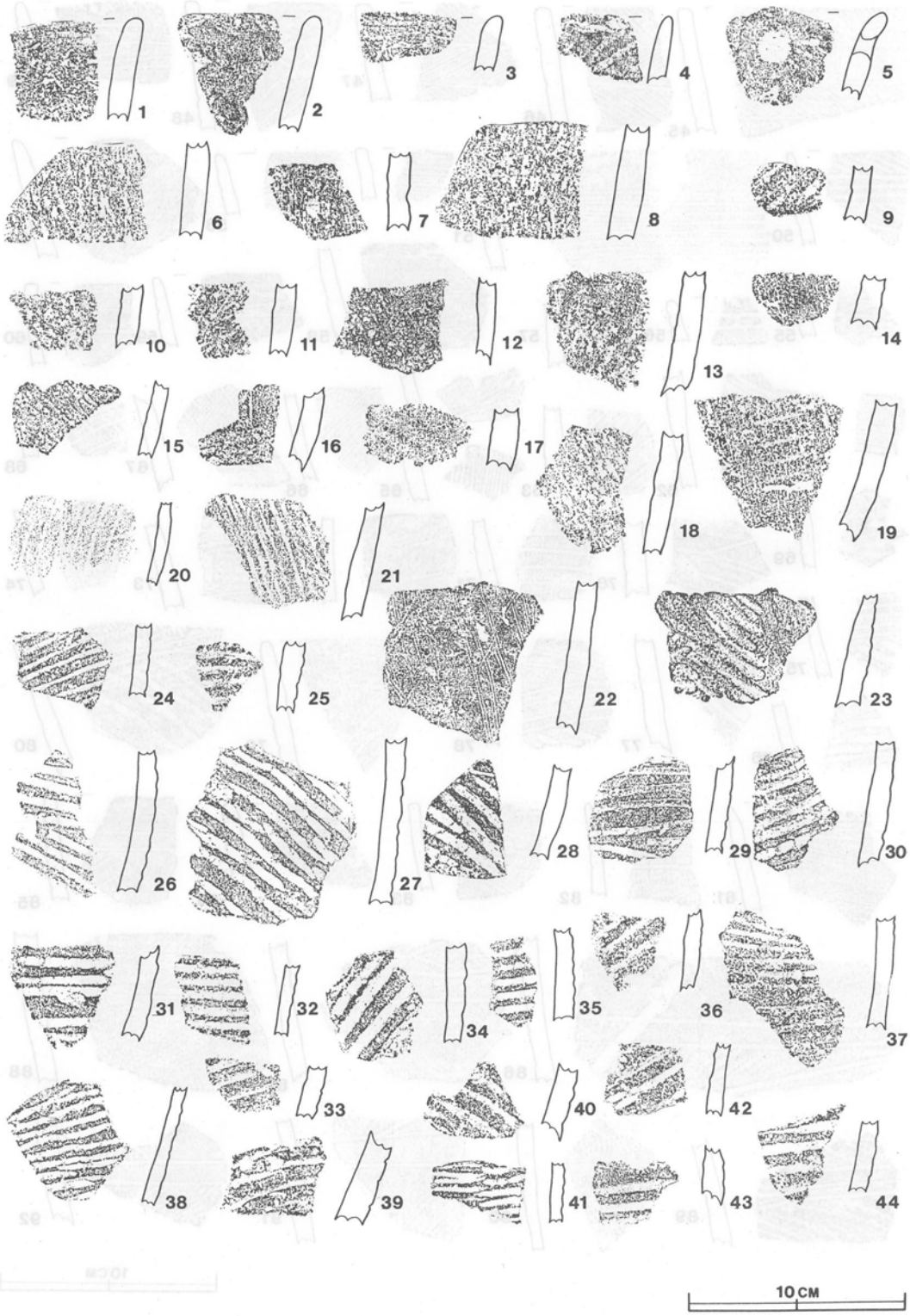
図91－３．素材は不明であるが片面にほぼ原礫面を残している。裏面は周囲から大きく加工を行なった後，縁辺部の調整に至っており，階段状剥離が明瞭である。側面観察および刃縁部の状態から円鑿形打製石斧と推定される。石材は安山岩かと思われる。全長105cm・幅4.5cm・長さ2.8cm・重さ125ｇ。

図91－４．調整打面より剥取られた縦長剥片で下辺部は蝶番剥離を呈する。打瘤裂痕が観察できる。背面の剥離は腹面の剥離方向と同様である。使用石材は瑪瑙。全長6.4cm，幅2.2cm，厚さ1.1cm，重さ17ｇ。

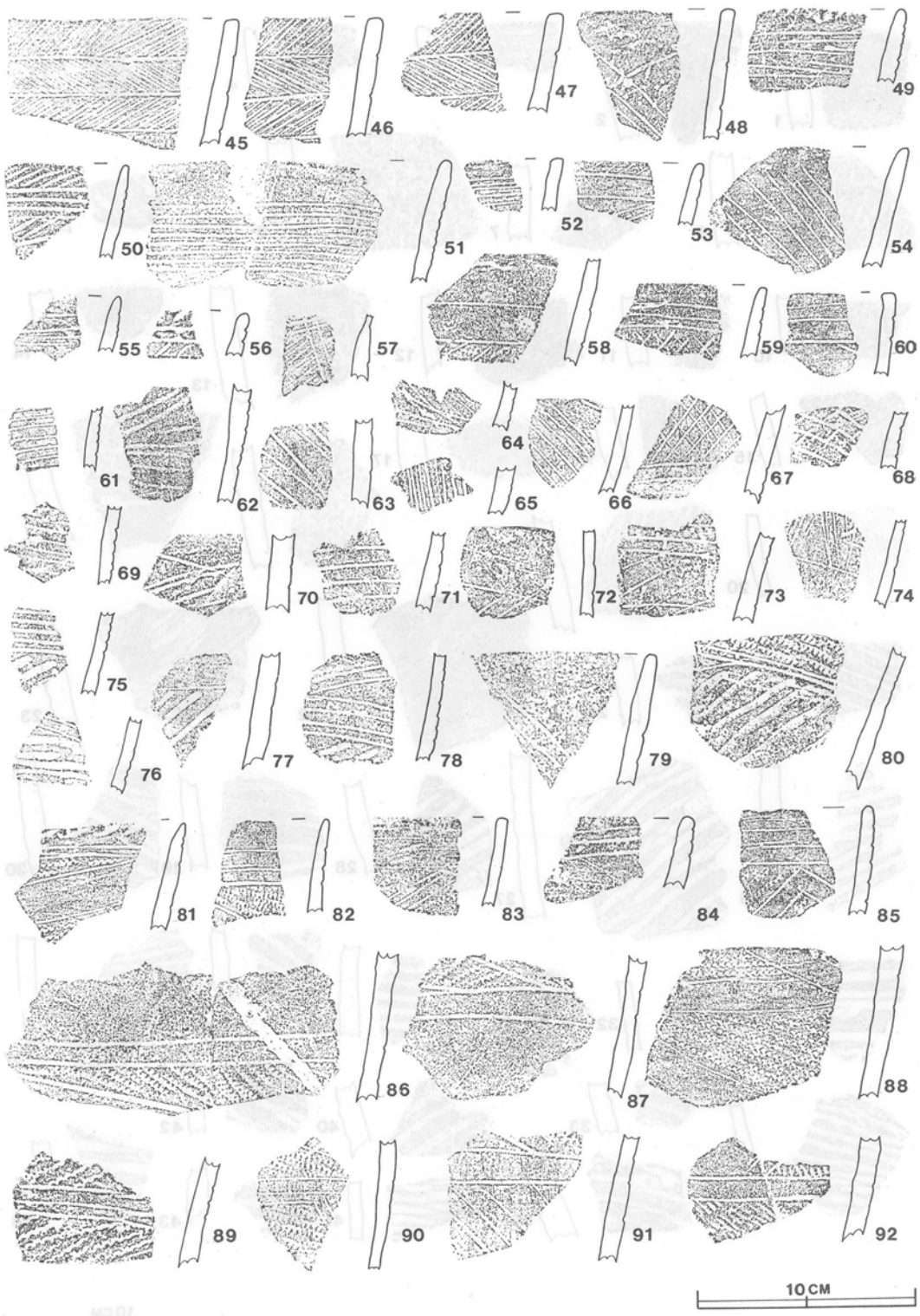
図91－５．横長状の剥片を素材としている。刃縁部の形成はネガティブ面より加撃され，ポジティブ面側に整形加工痕が観察される。外彎刃サイドスクレィパーである。淡緑色頁岩製。全長4.5cm・幅2.9cm・厚さ0.8cm・重さ９ｇ。

弥生時代

弥生時代に比定される遺構は住居址４軒が検出されている。このうち遺構・遺物の良好な状態

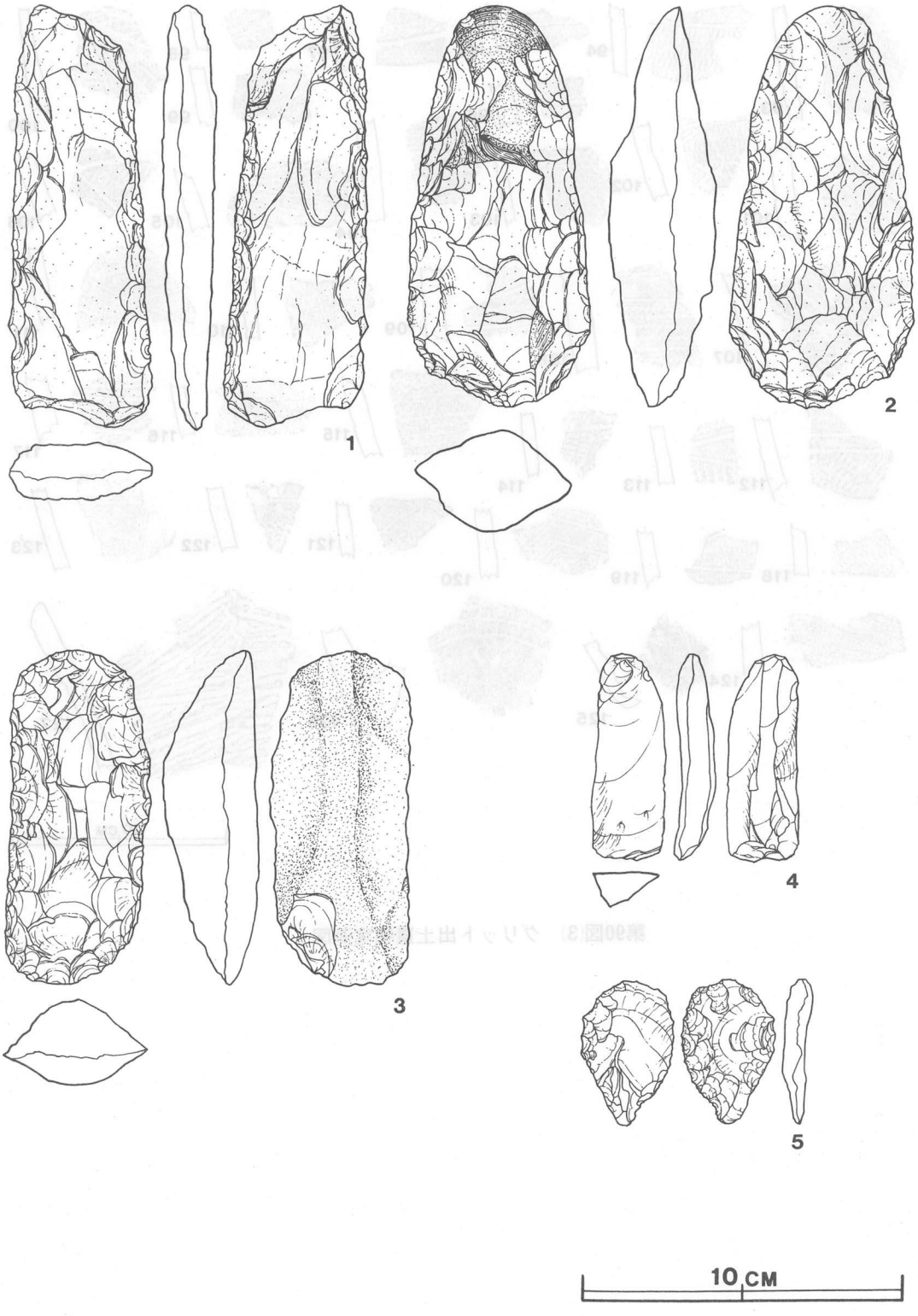


第90図(1)　グリット出土遺物実測図



第90図(2)　グリット出土遺物実測図

第90図(3)　グリット出土遺物実測図



第91図　グリット出土遺物実測図

で検出されている住居址は，第３号・第14号住居址である。第３号住居址と第14号住居址は一辺が7.60m ×6.00m ほどの大きな長方形の住居址であるが，第４号住居址・第30号住居址は平面形が小判型を呈し，規模は3.30m ×3.22m ほどで，本遺跡の住居址の中では小型のものである。また，いずれの遺構も中央部がやや窪んで皿状を呈している。長方形の第３号住居址・第４号住居址は本遺跡の北部に検出され，第３号住居址の北東コーナー床面から完形の「甕形土器」が出土し，その他弥生式土器片を約270片ほど出土している。また，構築された時期については，遺物より東中根期に比定されるものと思われる。第14号住居址は覆土中より破片のみ約120片ほど出土しており，長岡式に比定されると思われる。小判形の第４号住居址と第30号住居址は本遺跡の北東部より検出され，第４号住居址からは長岡式に比定されると思われる口縁部を一点と，　その他の破片数点を出土しており，本址は第14号住居址と同時期の遺構と思われる。第30号住居址からは弥生式土器片約80片ほどを出土し，長岡系に比定される土器片であると思われる。各住居址が構築された時期については出土遺物等から時間差はあまりないと思われるが，住居址の規模に差があり，当時の社会に貧富の差・隷属的関係などが発生していたのではないかと思われる。

古墳時代

五領期に比定される遺構は，本遺跡の南側に検出された第24号住居址・第25号住居址である。第24号住居址は坩が床面直上より出土しており，他は，細片のため不明である。また，確認面より床面までの深さは非常に浅いものである。第25号住居址は床面ほぼ中部に炉址を有し，出土遺物は小形甕３個，その他，坩・器台などを出土している。

鬼高期に比定される住居址は，第６号住居址・第15号住居址・第17号住居址・第18号住居址・第27号住居址など５軒である。住居址は北壁の中央部にカマドを有し，規模は長辺が５m 内外の竪穴式住居が多い。その内で第27号住居址が一番大きく長辺7.45m ・短辺が7.40m である。これらの住居址から土師器の甕・坏・鉢などを多量に出土し，その中で坏の出土量が多い。鬼高期になり，須恵器の壺・坏・高台付坏などの出土が多くなくなっている。その他の出土遺物は砥石を数点出土している。第27号住居址は，規模も大きく，土師器・須恵器の出土量も多く，床面中央部からは水晶の切子玉を出土しており，鬼高期の住居址の中でも「長(おさ)」的な竪穴式住居ではないかと思われる。

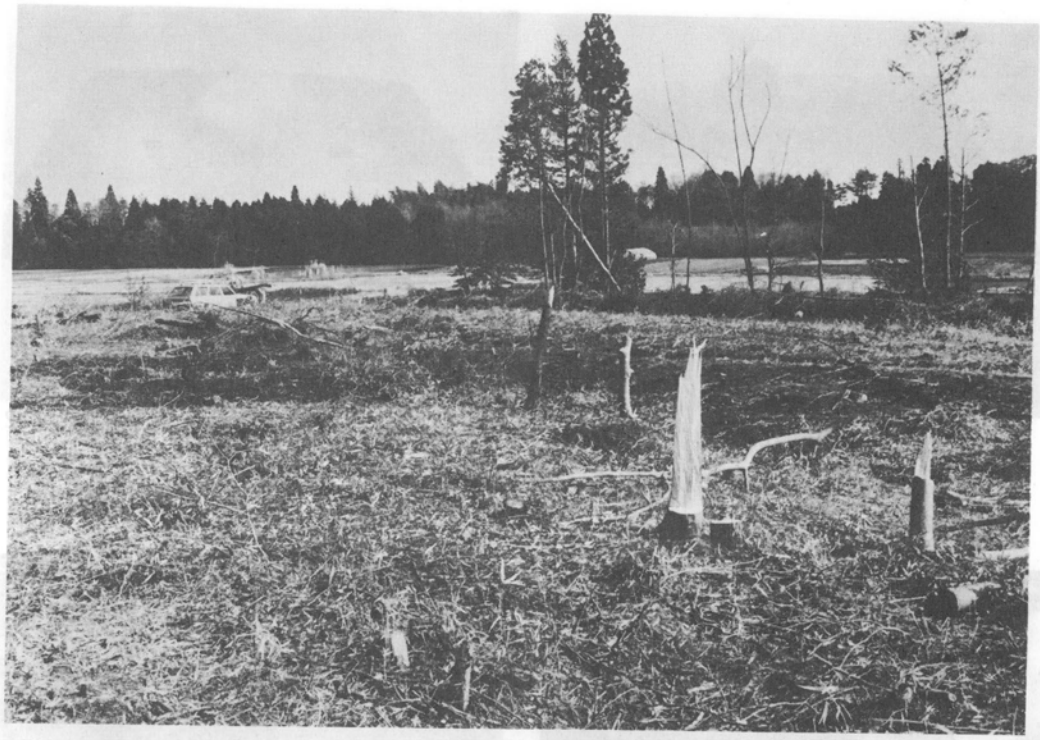
奈良・平安時代

真間期に比定される住居址は，13軒検出され，遺跡中央の緩やかな傾斜に面し弓なりに８軒検出され，北部の泉に関連すると思われる住居址が５軒ほど検出されている。住居址の規模は，長辺が約５m 以上の住居址が３軒，約４m 以内の住居址が７軒，３m 以下の住居址が３軒である。全体的に住居址は小規模の住居址が多く，これらの住居址は南壁中央部付近に出入口の施設と思われる柱穴を確認し全て北側にカマドを有し，カマド内から土師器片・須恵器片を出土している。

土師器の出土遺物は坏や甕の出土量が多く，他に甑・高坏・鉢・椀などが出土している。須恵器の出土量は比較的に少なく，坏・鉢・蓋などを出土している。

国分期に比定される遺構は住居址が6軒・溝が1条である。これらの遺構は溝をはさんで，東部に住居址が2軒，西側に住居址が1軒，南側に住居址が3軒検出されている。これらの住居址はいずれも北側にカマドを有し，第26号住居址は床面にピットは有せず，竪穴住居址の施設外に柱穴を有し，カマドの両脇に2本の柱穴が検出されている。出土遺物は全体的に土師器の出土量が少なく，須恵器の出土量が多い。住居址の規模は全体的に小さい。

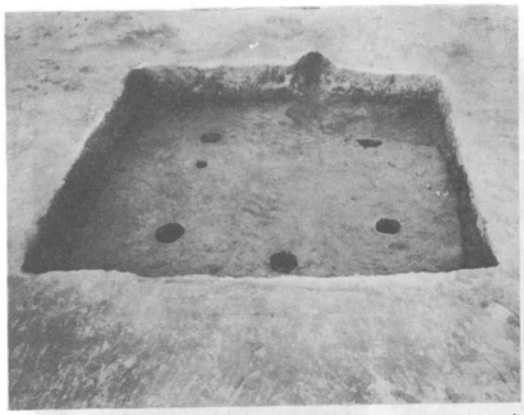
以上，松原遺跡は縄文時代，弥生時代，古墳時代，奈良・平安時代にまたがって集落が営まれていた複合遺跡である。そして，当時の人々の生活基盤は東側の谷津田及び，北東部の山地にあったと思われる。



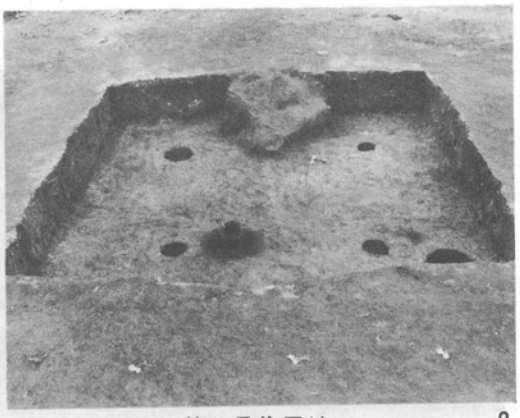
遺　跡　全　景　1

作　業　風　景　2

写1　松原遺跡



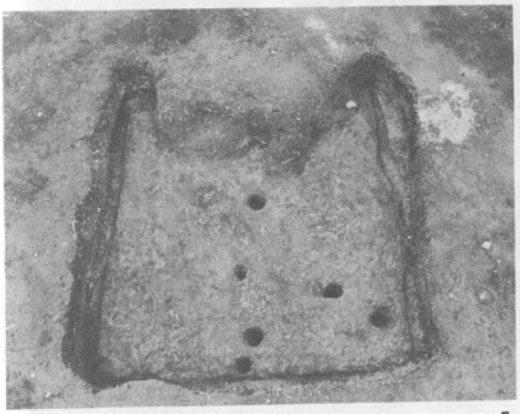
第1号住居址　1



第2号住居址　2

第2号住居址出土状況　3

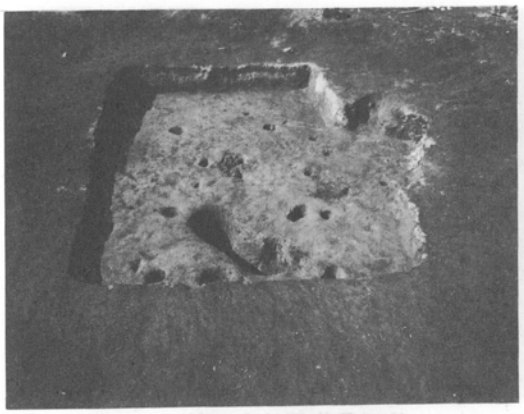
第4号住居址出土状況　4



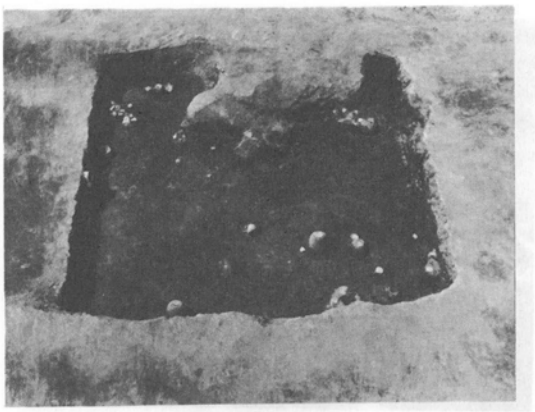
第6号住居址　5

第6号住居址カマド　6

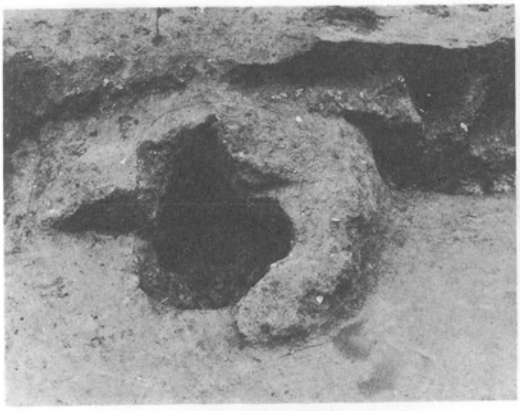
写2　松原遺跡竪穴住居址(1)



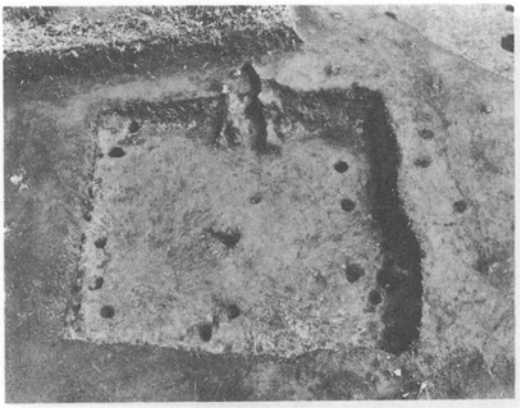
第3・5号住居址　1



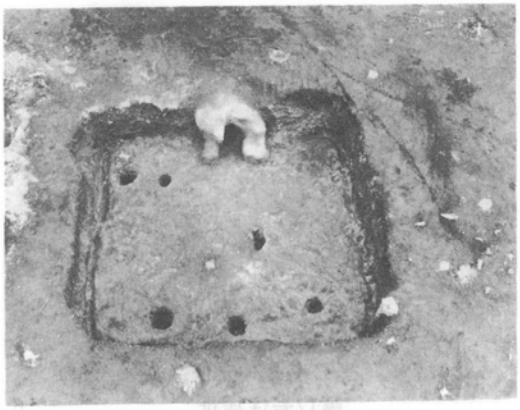
第7号住居址　2



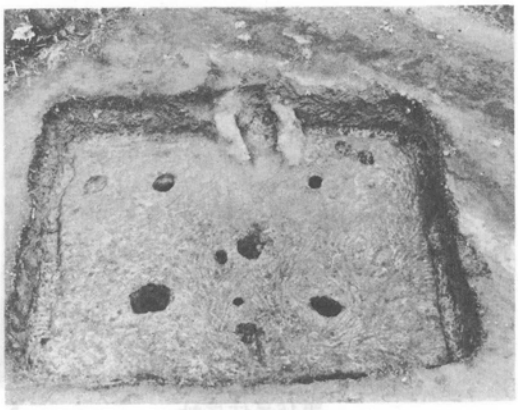
第8号住居址カマド　3



第9号住居址　4

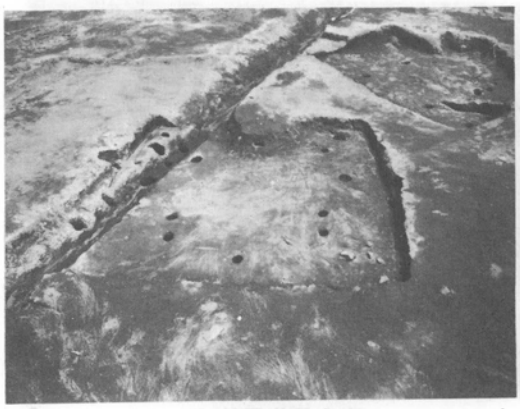


第11号住居址　5



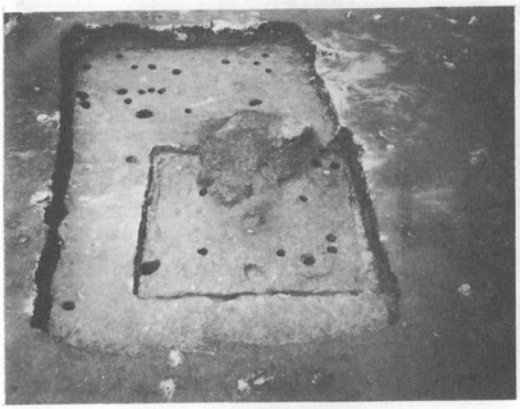
第12号住居址　6

写3　松原遺跡竪穴住居址



第13号住居址　1

第13号住居址カマド　2



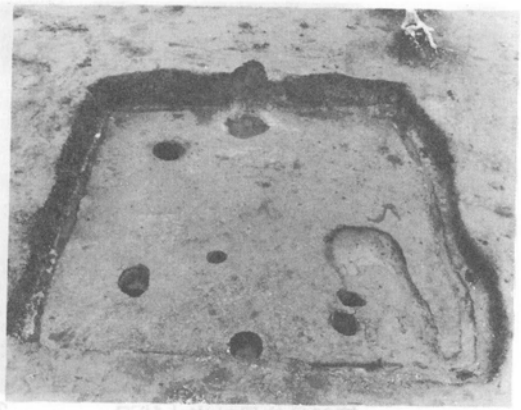
第14・15(内側)号住居址　3

第15号住居址カマド　4

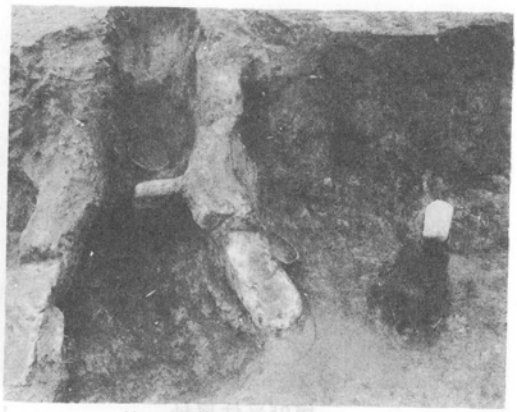
第16号住居址　5

第17号住居址　6

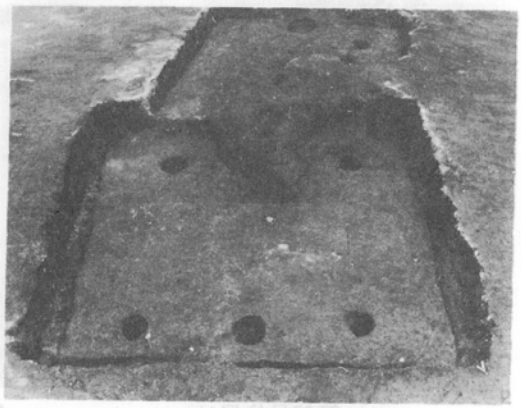
写4　松原遺跡竪穴住居址



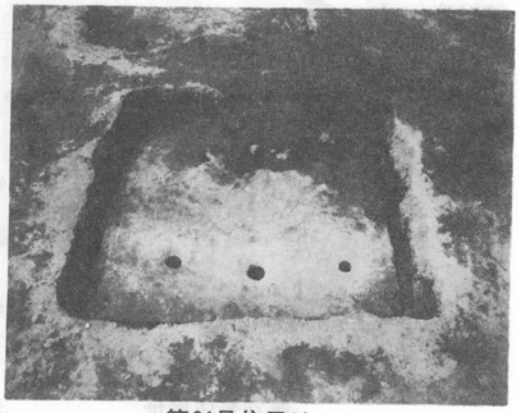
第18号住居址　1



第18号住居址カマド　2

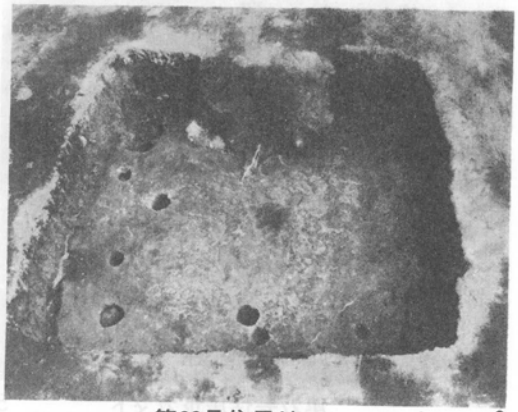


第19(上)・20号住居址　3



第21号住居址　4

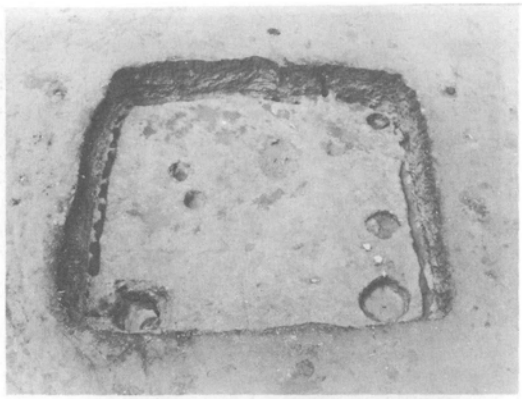
第22号住居址出土状況　5



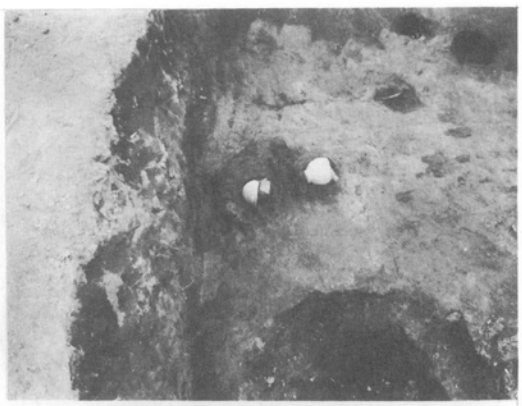
第23号住居址　6

写5

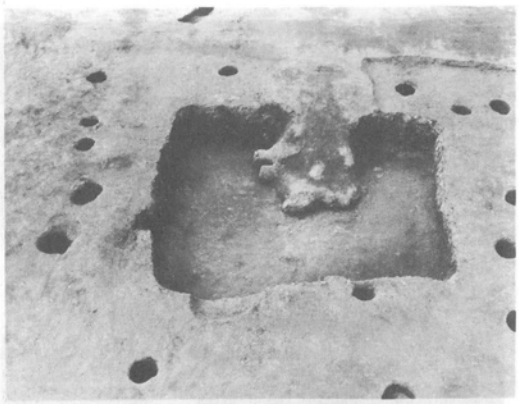
松原遺跡竪穴住居址



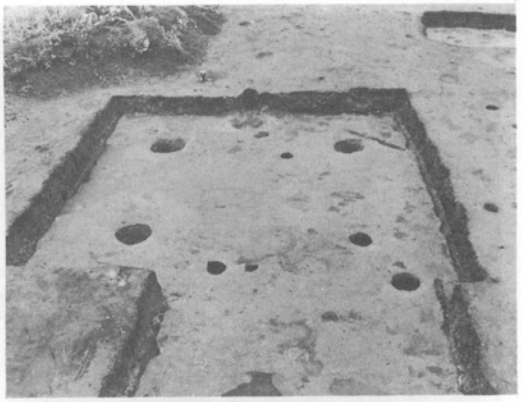
第25号住居址　1



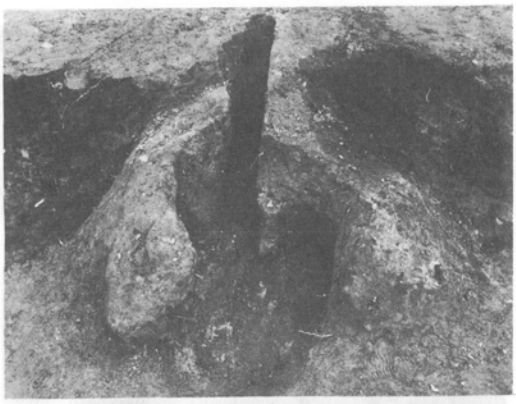
第25号住居址出土状況　2



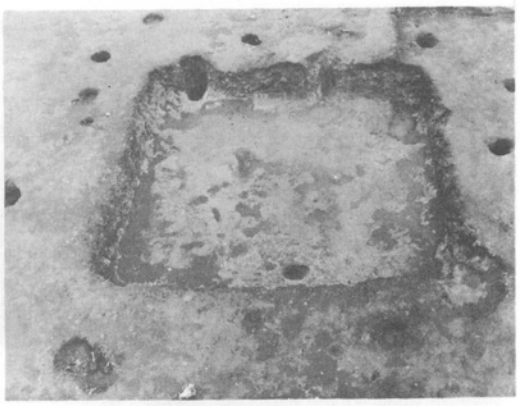
第26号住居址　3



第27号住居址　4

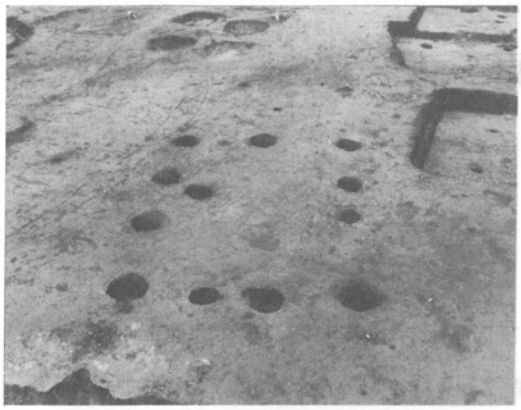


第27号住居址カマド　5

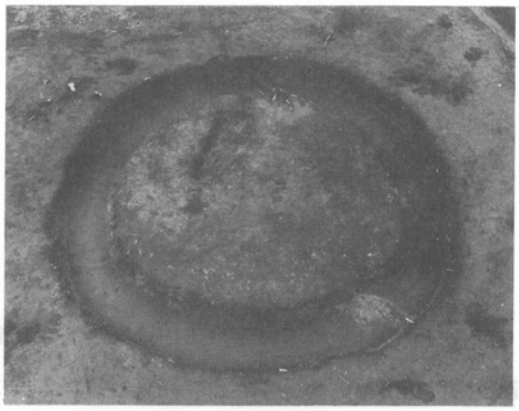


第28号住居址　6

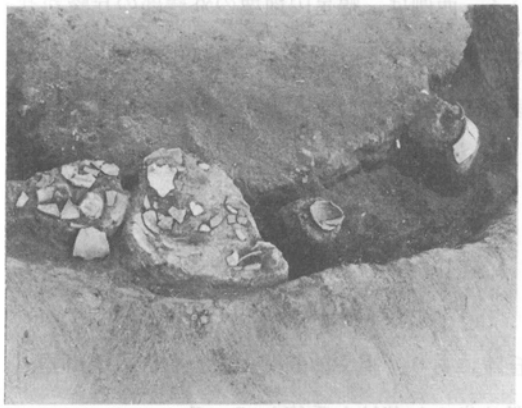
写 6　松原遺跡竪穴住居址



第１号掘立柱建築址　1



第１号円形周溝　2



第１号円形周溝出土状況　3

第２号円形周溝　4

第　３　号　溝状遺構　5

第　９　号　土　壙　6

写７　掘立柱建築址その他

第7章　南　原　古　墳

第1節　遺跡の立地と環境

1　地理的環境

南原古墳群は，茨城県水戸市田野町字南原1044-1ほかに所在している。市の北西部中ほどに位置し，現在山林となっている。調査対象は古墳2基である。本遺跡は，上市台地の北西部，標高46m内外の台地に位置し，北側と東側は，那珂川の支流田野川によって浸蝕された小支谷が樹枝状に入り込み，この支谷には谷津田が開かれている。南側は，千波湖附近で桜川と合流する沢渡川の支流が北上し，浸蝕によって支谷を形成している。西側は，鶏足山地塊の外縁部の丘陵がせまっている。この山地塊は阿武隈山脈の末端が深く関東平野に入ってくる部分に相当し，かつては準平野を形成していたが，現在は開折されて丘陵地が連続している。本遺跡は田野川や沢渡川の浸蝕によって形成された台地に立地している。

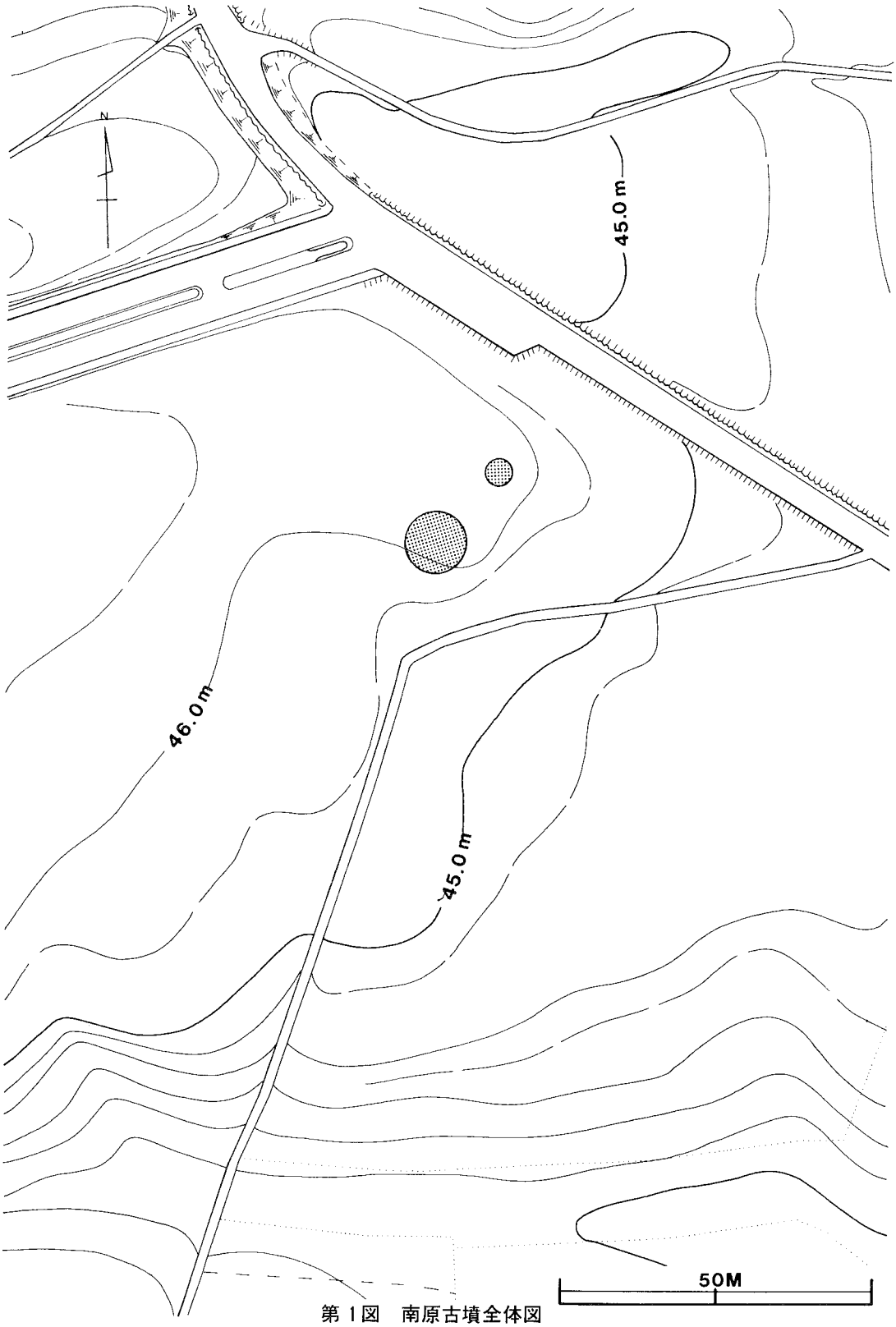
2　歴史的環境

本遺跡に隣接する前山田遺跡は，開江町の北側丘陵にあり，縄文前期関山式土器と，土師器，須恵器片とメノウ製の剝片が出土しており，先土器時代の包蔵地も重複している。

田野遺跡は，田野町の台地にあり，縄文早期のうち撚糸文系の花輪台，稲荷台，沈線文の田戸下層の各式，中期加曽利E式から堀ノ内式にかけての土器が出土している。弥生後期の十王台式器，土師器，須恵器片も出土している。飯富安戸星の台地のつらなる丘陵に馬場尻遺跡があり，縄文早期の子母口式が出土している。古土巻の集落附近からは，縄文前期，中期の土器片が出土している。弥生時代に属する遺跡は田野町台地と古土巻台地の中間に所在する田野遺跡で，弥生後期の十王台式土器片が出土している。古墳時代の鬼高式土器なども出土している。市営浜見台霊園の附近には三児塚古墳群，山田古墳群があり，どちらも群集墳である。後山田池の下流に山田窯址群がある。3基以上の窯址群が認められ，その1基からは横瓶が出土している。

第2節　調査の経過

南原古墳群は，昭和55年2月10日から3月31日までの予定で調査を実施した。調査は，中心杭「SAT－368」を起点として磁北方向に小調査区を設定して行なった。2基の古墳はいずれも円形

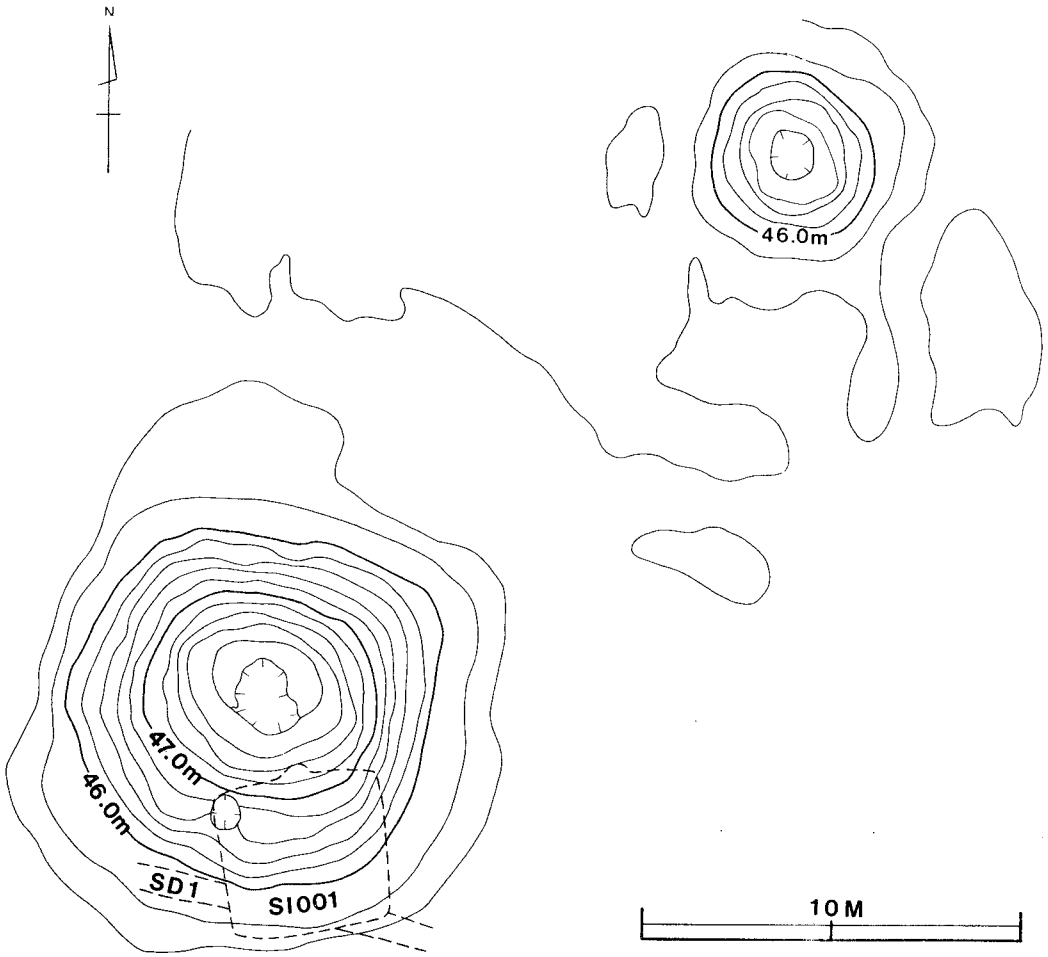


第１図　南原古墳全体図

を呈しており，しかも以前に盗掘を受けた痕が顕著に見られた。２基のマウンドのうち，西側に位置するものを１号墳，東側に位置するものを２号墳とした。

55年２月　テント設営，発掘調査器材の整備と準備をする。調査区の草刈り，雑木の焼却を行ない，鍬入れ式を行なった。**14日**－１号墳のコンター実測作業を行ない四分割法によって調査を開始する。埋葬施設は確認できず，墳頂より1.5m掘り下げたところから布目瓦を検出する。覆土の状態から古墳ではなく塚と認定する。**24日**－２号墳の調査を開始する。盛土中より須恵器片等を検出し覆土の状態から塚と認定する。

55年３月　１号墳の墳丘の下に竪穴住居址を確認する。竪穴住居址の遺物配置図，平面図，断面図を作成し，カマドの精査を行ない，調査を終了する。**６日**－発掘調査に使用した器材を大塚新地遺跡に搬出して本遺跡の調査を完了する。



第２図　南原古墳配置図

第3節　遺構・遺物

1　塚

第1号塚　（図3・5）

調査区域の南西部に位置し，2号塚に比べるとはるかに大きな規模であり，平面形は東西12m，南北13mの円形を呈し，現地表との比高は約2.50mを測る。塚頂部には盗掘と思われる竪穴が掘られている。発掘調査の結果，本塚の下部，ソフトローム層の上部に約20～30cmの黒色土の旧表土が存在し，Cトレンチ及びDトレンチの裾部は攪乱を受けており，Dトレンチのものは近代の墓穴と思われる。またBトレンチ裾部には，旧表土下に溝状及び住居址と思われる落ち込みが見られた。

旧表土上面と塚頂部までの高さは約2.65mを測り，マウンドはこの旧表土の上に，主として黒色土，黒褐色土が盛られている。盛土は約30層に分けられ，最初の盛土の上にマウンド中位まで外縁を中央部よりやや高くしながら盛っているが，それより上の土層はほぼ水平に盛られている。

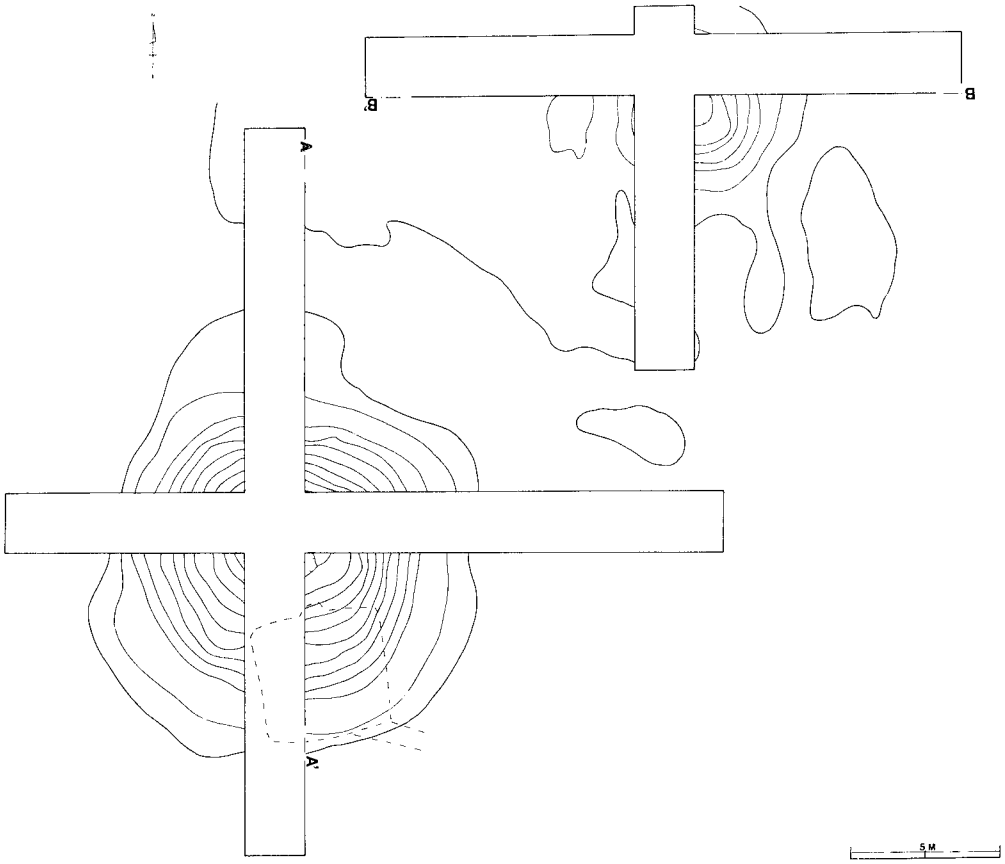
旧表土下には，ソフトローム層が認められるが，盛土中にはソフトロームは検出されず，意識的に黒色の土を盛土したように見受けられる。

遺物は，盛土中より少量の土師器片（図5－1・2），須恵器片，砥石（図5－3），布目瓦が出土しているが，塚の構築時期，性格等決定できる遺物の出土は見られなかった。

第2号塚　（図3・5）

1号塚の北東部に位置し，平面形は径約5mの円形を呈し，1号塚と同じく，塚頂部に盗掘と思われる竪穴が掘られている。現地表面との比高は約1mで1号塚に比してかなり小型である。発掘調査の結果，本塚も1号塚と同様，ソフトローム層上部に旧表土と考えられる黒色土が見られる。旧表土上面からの高さは約1.25mである。マウンドは，この旧表土の上に，主として黒色土を盛って構築され，13層に分けられる。土層断面を見ると，旧表土面とほぼ並行に盛土され，1号塚と同じく意識的に黒色土を用いている。

Bトレンチ裾部に落ち込みが見られたが，これは1号塚Dトレンチで確認されたものと同じく後世の墓壙と考えられる。出土遺物は，少量の土師器（図5－1・2・4），須恵器片及び縄文期に属すると思われる分銅形の大型打製石斧（図5－5）があるが，いずれも構築時期及び性格等が決定できる資料ではない。構築時期については不明と言わざるを得ないが，1・2号ともに同一の旧表土上に構築されているため，ほぼ同時期に構築されたものと思われる。



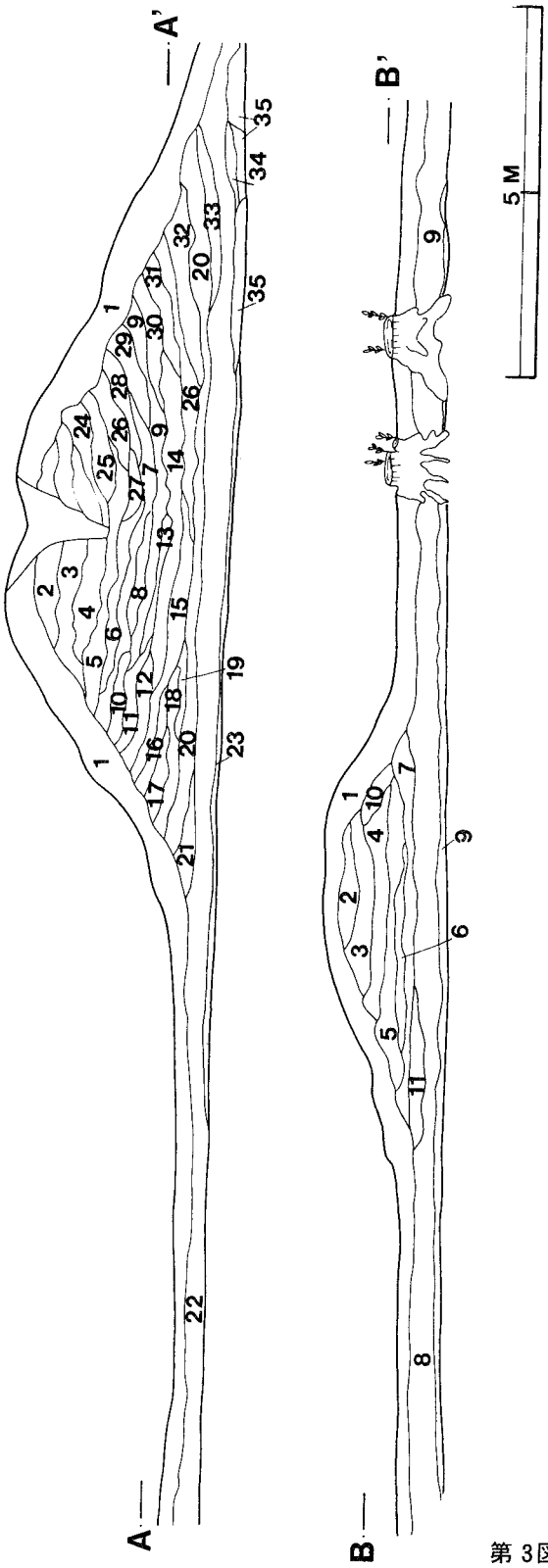
第3図　第1・2号塚遺構実測図（その1）

第2号塚出土石器

扁平な礫を両面から打ち欠いて仕上げた分銅形打製石斧であり，表，裏面とも自然面を残している。石材は安山岩，大型で重量のある石斧である。分銅形に仕上げ，抉り部分の鋭角な剥離箇所にはつぶし加工を施しており，固定時につるを保護するためであろう。上下の刃部には使用によると思われる磨滅痕が認められる。　（全長13.6cm，幅11.5cm，厚3.4cm）

2　溝状遺構

1号塚Bトレンチ裾部において検出された遺構であり，幅約75cm，深さ約20cmを測る。方向はほぼ東西に走り，1号塚旧表土下において検出され，1号住居址の覆土を切っていることから，1号塚よりも古いものであるが，遺物の出土をほとんど見ないため，性格，時期等は不明である。



土層解説
A－A′

1	黒　色	木の根などによる撹乱が著しい
2	黒　色	白色微粒子(極少)含有
3	黒　色	黒色ハードブロック(少)白色微粒子含有
4	黒　色	黒色ハードブロック(多)白色微粒子(極少)含有
5	黒　色	基本的に3層と同じである
6	黒　色	基本的に4層と同じである
7	黒　色	基本的に3層と同じである
8	黒　色	基本的に4層と同じである
9	黒　色	基本的に2層と同じである
10	黒　色	8層と同じである
11	黒　色	基本的に3層と同じである
12	黒　色	基本的に4層と同じである
13	黒　色	基本的に4層と同じである
14	黒　色	基本的に2層と同じである
15	黒　色	基本的に3層と同じである
16	黒　色	基本的に2層と同じである
17	黒　色	基本的に3層と同じである
18	黒　色	基本的に4層と同じである
19	黒　色	基本的に2層と同じである
20	黒　色	黒色ハードロームブロック(多)ローム粒子
21	黒　色	基本的に3層と同じである　　(少)含有
22	黒　色	ローム粒子(少)炭化粒子(極少)焼土粒子含有
23	黒褐色	ローム漸移層(いわゆる褐色土)
24	2層と同質である。	
25	基本的に4層と同じである。	
26	基本的に4層と同じである	
27	基本的に2層と同質であるが23層のブロック(少)含有	
28	基本的に3層と同質である	
29	基本的に4層と同質である	
30	基本的に4層と同質である	
31	基本的に2層と同質である	
32	基本的に2層と同質である	
33	基本的に21層と同質である	
34	基本的に3層と同質である	
35	黒　色	少量のＹＰ,焼土粒子(極少)含有(住居址覆土と思われる)

土層解説
B－B′

1	黒　色	木の根などによる撹乱が著しい
2	黒　色	白色微粒子(少,スコリア)含有,やわらかい
3	黒　色	2層と基本的に同じであるが，ローム粒子(少)含有
4	黒　色	4層と基本的に同じであるが，ローム粒子(多)含有
5	黒　色	3層と同質である
6	黒　色	4 層と同質でかる
7	白黒色	白色微粒子(少)ローム微粒子含有
8	黒　色	白色微粒子(少)ローム微粒子焼土粒子(極少)含有
9	褐　色	ローム漸移層
10	黒　色	2層と同質である
11	黒　色	9層と同じだが，ハードロームブロックを若干多く含有

第3図　第1・2号塚実測図(その2)

3　住居址（図4・5・6）

1号塚旧表土下において検出され，覆土上面を一部1号溝によって切られている。中心軸の方位はN－8°－Wで，平面形は東西4.25m，南北3.9mの方形を呈している。周溝を有しているが，北東部コーナー附近では消滅する。覆土は，主として黒色土及び黒褐色土で構成されている。柱穴は4箇所確認され，P1～P4は主柱穴と考えられる。壁はほぼ垂直に立ち上がり，北壁で60cm，南壁で55cmを測る。

ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考	ピット番号	長径cm	短径cm	深さcm	備　考
P1	31	28	53	主柱穴	P3	29	25	52	主柱穴
P2	38	28	51	主柱穴	P4	30	38	43	主柱穴

カマドは北壁のほぼ中央に位置し，北方へ丸く約30cmほど切り込み，袖部は，床面に褐色土を置き，その上に粘土を盛って作られており，大きさは右袖幅約25cm，左袖幅約20cm，高さ15cmを測る。右袖部東側にハードローム塊が置かれているが，これはカマド構築の際使用したものであろうか。焚口の幅は約45cm，長さ約60cm，深さ5cmで，燃焼部はほぼ平坦である。煙道部は，昇角約55°で，煙出口は径約15cmの円形を呈するものと思われる。

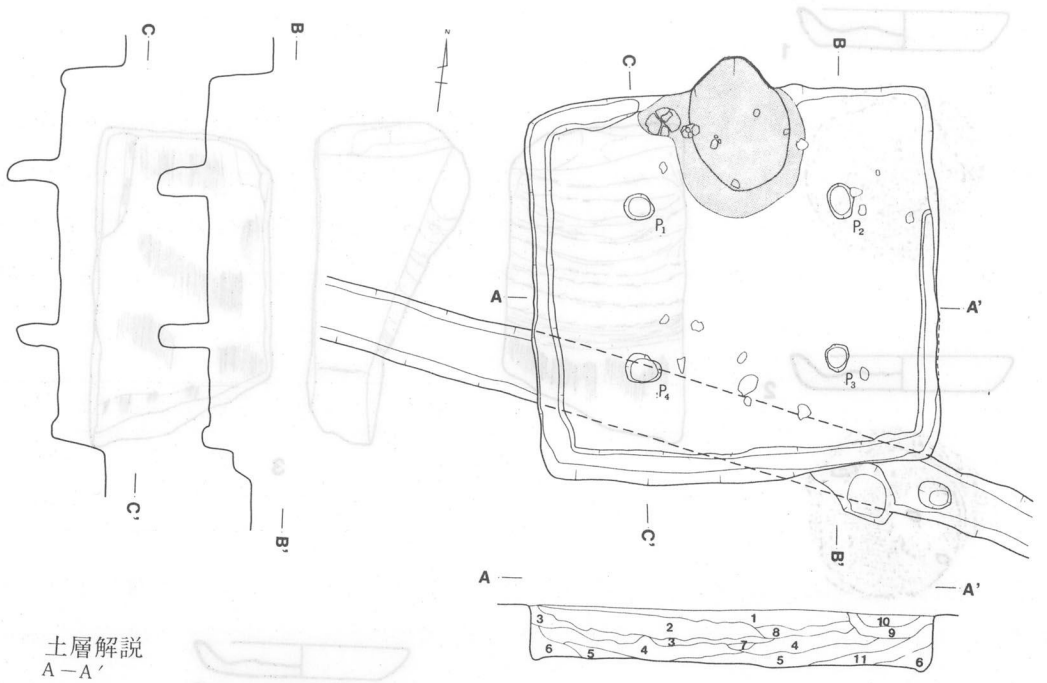
なお，遺物としては燃焼部の中央，火床に接するように，復元可能な甕が口縁を焚口に向けるように出土している。

出土遺物は，須恵器が多量に出土し，カマド内から蓋（図6－2）を，南壁中央部附近床面直上から盤（図6－7）と，覆土から坏（図6－5）を出土している。中央部床面から坏（図6－4）を，北東部覆土から（図6－6），南壁中央部付近覆土から盤（図6－8）を，南東コーナーP4付近覆土から蓋（図6－3）を出土し，他に甕，蓋，坏などの破片を数点出土している。土師器は，カマド内から甕（図6－1）の完成品を出土し，他には甕，坏などの破片を多数出土している。

第1号住居址出土土器

土師器甕形土器（図6－1）は口径30.7cmで，口縁部にはあまい「S」字状を呈し，やや強く外反している。胴部は緩やかに張り，胴部中位上に最大径を持っている。底部は平坦で木葉痕があり，口縁部は内外とも指ナデ整形が施され，胴部は内外ともヘラナデで整形されている。

須恵器の坏形土器（図6－6）は，口径6.7cmを測り，底部は回転ヘラ削りの後，外側へふんばる短かい高台を貼りつけている。下端部は外側を向き丸く収めている。体部は器厚を減じながら内彎気味に外上方へ開き，中位でにぶい稜をなしている。口縁部は僅かに外反し，端部は外側ににぶい稜を持っている。水挽き痕は弱い。



土層解説
A－A′

1　黒　色　ハードローム粒子(少)含有，しまりがある
2　黒　色　ハードローム粒子(多)含有，しまりがある
3　黒　色　ハードローム粒子(極少)含有，しまりがある
4　黒　色　ハードローム粒子(少)含有，しまりがある
5　黒　色　ハードローム粒子(少)含有，しまりがある
6　黒　色　ハードロームブロック(少)焼土粒子(極少)含有，しまりがある
7　褐　色　灰塊を主体とし，焼土ブロック(少)含有
8　黒褐色　ハードローム粒子(多)含有，しまりがある
9　黒　色　ハードローム粒子(少)炭化粒子(極少)含有しまりがある
10　黒褐色　ハードローム粒子(少)含有，しまりがある
11　黒褐色　ハードローム粒子(少)焼土粒子含有，しまりがある

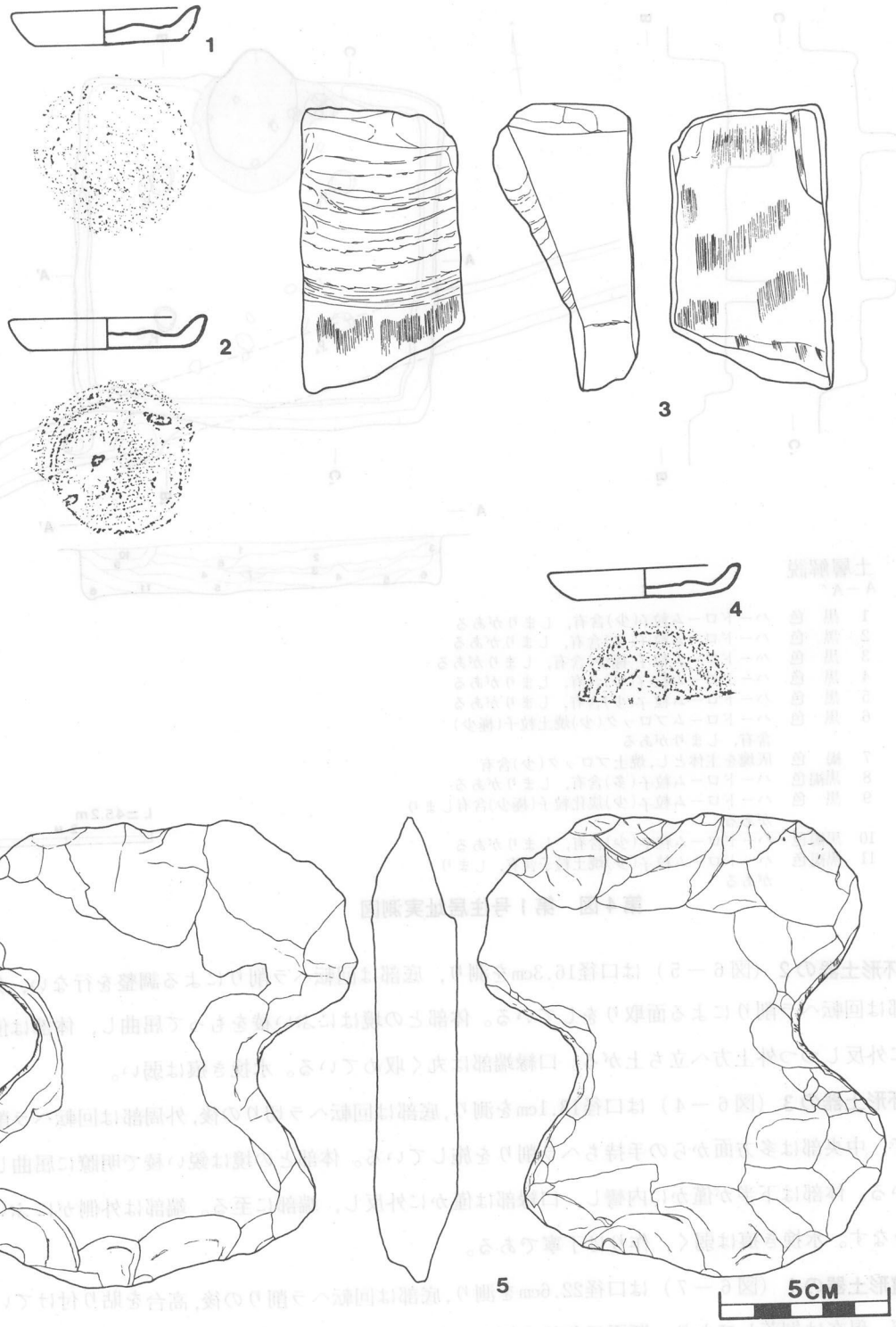
L＝45.2m
2 M

第4図　第1号住居址実測図

坏形土器の2（図6－5）は口径16.3cmを測り，底部は回転ヘラ削りによる調整を行ない，外周部は回転ヘラ削りによる面取りをしている。体部との境はにぶい稜をもって屈曲し，体部は僅かに外反しつつ外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸く収めている。水挽き痕は弱い。

坏形土器の3（図6－4）は口径13.1cmを測り，底部は回転ヘラ切りの後，外周部は回転ヘラ削りで，中央部は多方面からの手持ちヘラ削りを施している。体部との境は鋭い稜で明瞭に屈曲している。体部は下半が僅かに内彎し，口縁部は僅かに外反し，端部に至る。端部は外側がにぶい稜をなす。水挽き痕は弱く，作りは丁寧である。

盤形土器の1（図6－7）は口径22.6cmを測り，底部は回転ヘラ削りの後，高台を貼り付けているが，現在は剝落しており，断面三角状の短かいものと思われる。底部から口縁部にかけては丸味を持って屈曲し端部に至る。端部は外側端が僅かに張り出すがほぼ丸く収めている。水挽き痕は弱い。

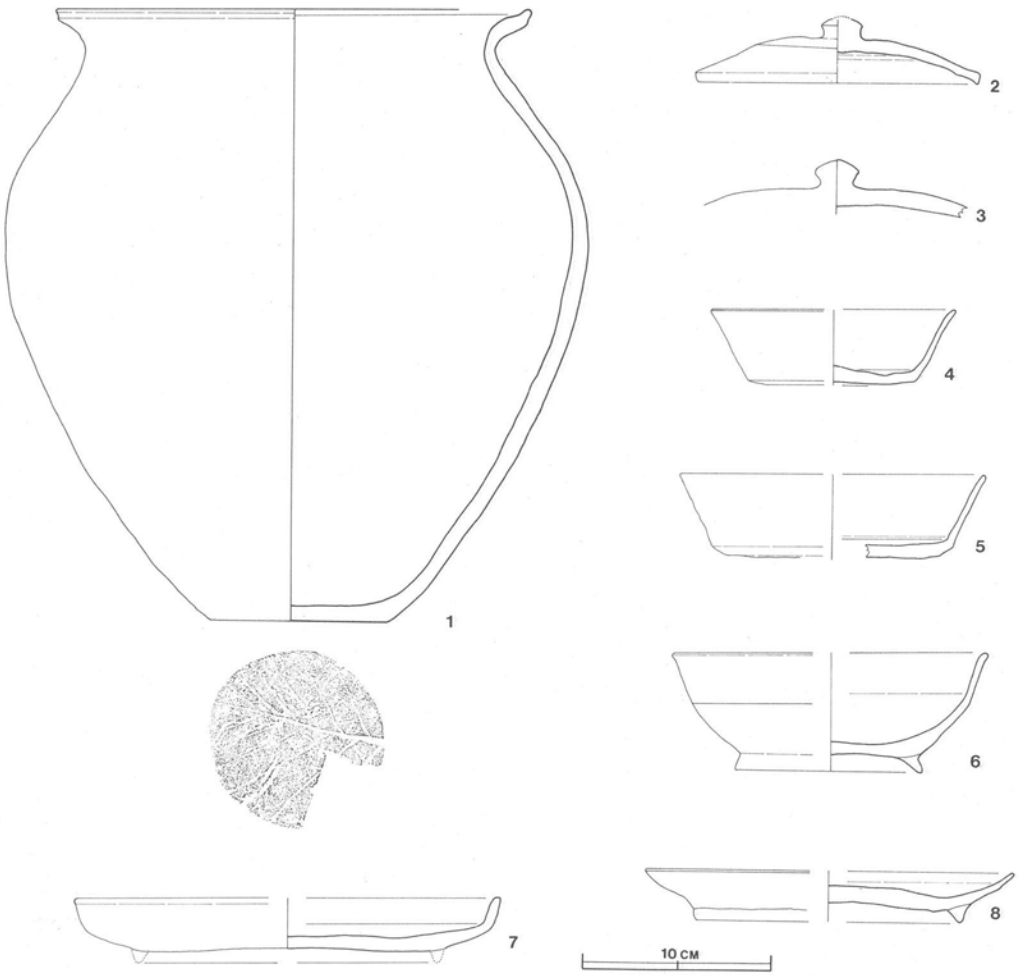


第5図　第1・2号塚覆土の出土遺物実測図

盤形土器の２（図６－８）は口径19.6cmを測り，底部は粘土紐まき上げ痕を残す雑な回転ヘラ削りを施した後，断面三角形の短い台を雑に貼り付けている。底部と口縁部の境は不明瞭で，僅かに器厚を減じながら大きく外方へ開き端部に至る。端部はおおむね丸く収めている。水挽き痕は弱い。

蓋の１（図６－２）は口径14.9cmを測り，天井部は径９cmにわたって回転ヘラ削りを施し，中央部に擬宝珠状のつまみを有する。天井部は内彎気味に下外方へ開いてゆき，口縁部は若干内側へ向って下がる。端部はやや鋭さを持つ。水挽き痕は弱い。

蓋の２（図６－３）は，天井部は回転ヘラ削りの後丸味を持つ。擬宝珠状のつまみを有する。水挽き痕は弱い。天井部にはにぶい黄緑色の自然釉が付着している。



第６図　第１号住居址内出土遺物実測図

その他，須恵器の坏・甕・蓋の破片数点と土師器の甕・蓋・坏などの破片を多数出土している。本址は，出土遺物等から国分期に比定される遺構と思われる。

第4節　まとめ

本遺跡は当初，2基の古墳を調査対象として発掘調査を実施したが，調査が進むに従って周溝も検出されず，1号墳とした盛土の下部からは国分期の住居址が検出され，2号墳とした盛土からは縄文時代の分銅形の大型打製石斧などが出土しているので，1号塚，2号塚とも古墳ではなく何らかの目的で構築した塚であると思われる。1号塚，2号塚共，構築時期と性格等については明らかでない。

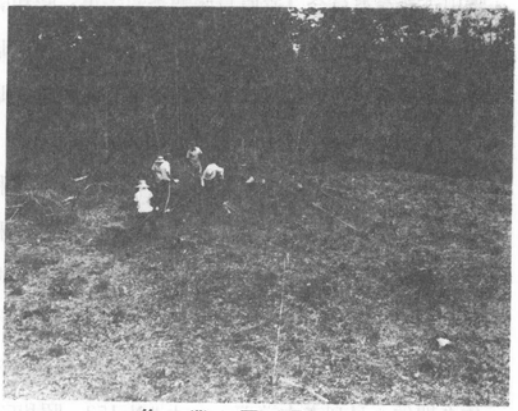
第　1　号　塚　1

第1号塚セクション　2

第　2　号　塚　3

第2号塚セクション　4

第1号住居址　5



作　業　風　景　6

写1　南　原　古　墳　群

参考・引用文献

- 茨城県史編集委員会『茨城県史料　考古学資料編・先土器・縄文時代』茨城県　昭和54年
- 茨城県史編集委員会『茨城県史料　考古学資料編・古墳時代』茨城県　昭和49年
- 井上義安「茨城県富士山遺跡１」昭和54年
- 井上義安『茨城県大洗町長峯遺跡』昭和48年
- 佐藤次男・井上義安・宮田　毅「弥生式土器―関東・東関東１―」『考古学ジャーナル』146号　昭和53年
- 村田健二『千天』大洗地区遺跡調査会　昭和55年
- 小林行雄・杉原荘介編『弥生式土器集成図録』弥生式土器集成刊行会　昭和48年
- 茂木雅博編『小澤野』茨城県東海村教育委員会・東海村小澤野遺跡調査会　昭和53年
- 杉原荘介・大塚初重編『土師式土器集成図録　本編１』東京堂出版　昭和46年
- 杉原荘介・大塚初重編『土師式土器集成図録　本編２』東京堂出版　昭和47年
- 杉原荘介・大塚初重編『土師式土器集成図録　本編３』東京堂出版　昭和48年
- 杉原荘介・大塚初重編『土師式土器集成図録　本編４』東京堂出版　昭和49年
- 水戸市史編纂委員会『水戸市史上巻』昭和38年
- 中村浩也『陶邑１』大阪府文化財調査報告書第28集　大阪府教育委員会　昭和51年
- 鹿島町木滝台遺跡発掘調査会『木滝台遺跡，桜山古墳，埋蔵文化財発掘調査報告書』鹿島の文化財第６集　昭和53年
- 永山倉造他『国造―福島県天栄村における奈良・平安時代集落址の発掘―』国造遺跡発掘調査団　昭和53年
- 埼玉県教育委員会『国道17号熊谷バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告』埼玉県遺跡発掘調査報告書第11集　昭和52年
- 勝田市教育委員会『高野寺畑遺跡調査報告書』昭和54年
- 勝田市教育委員会『遠原貝塚調査報告書』昭和55年
- 勝田市教育委員会『市内遺跡発掘調査報告書』昭和55年
- 勝田市教育委員会『堀口遺跡発掘調査報告書』昭和55年
- 日本地誌研究所『日本地誌５』昭和50年
- 藤本彌城編『那珂川下流の石器時代研究Ⅰ』昭和52年
- 藤本彌城編『那珂川下流の石器時代研究Ⅱ』昭和55年
- 井上義安編『髭釜―鹿島線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報―』昭和55年
- 半田堅三「本邦地下式壙の類型学的研究」『伊知波良２』
- 木下亀城・小川留太郎　標準原色図鑑全集第６巻　昭和49年
- 佐久間信　月刊考古学ジャーナルNo.153　昭和53年９月
- 佐久間信　月刊考古学ジャーナルNo.182　昭和55年10月
- 婆良岐考古同人会　婆良岐考古第１号　昭和55年４月
- 茨城県教育委員会　茨城県遺跡地図　昭和52年３月

315

茨城県教育財団文化財調査報告 XI

昭和56年 3 月27日印刷
昭和56年 3 月31日発行

発行　財団法人　茨城県教育財団
水戸市南町 3 － 4 － 57
印刷　株式会社　高野高速印刷
水戸市東原 2－8－1